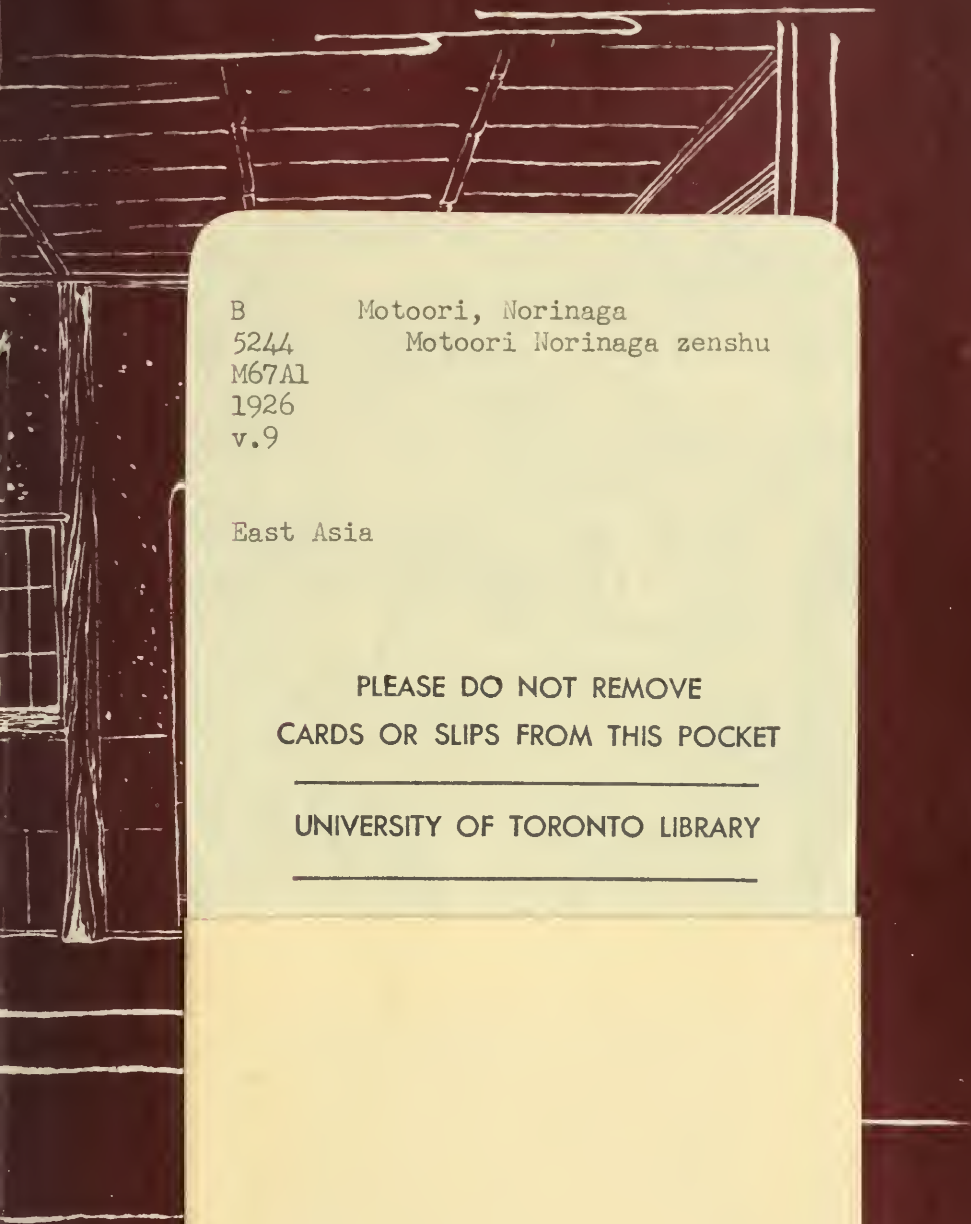
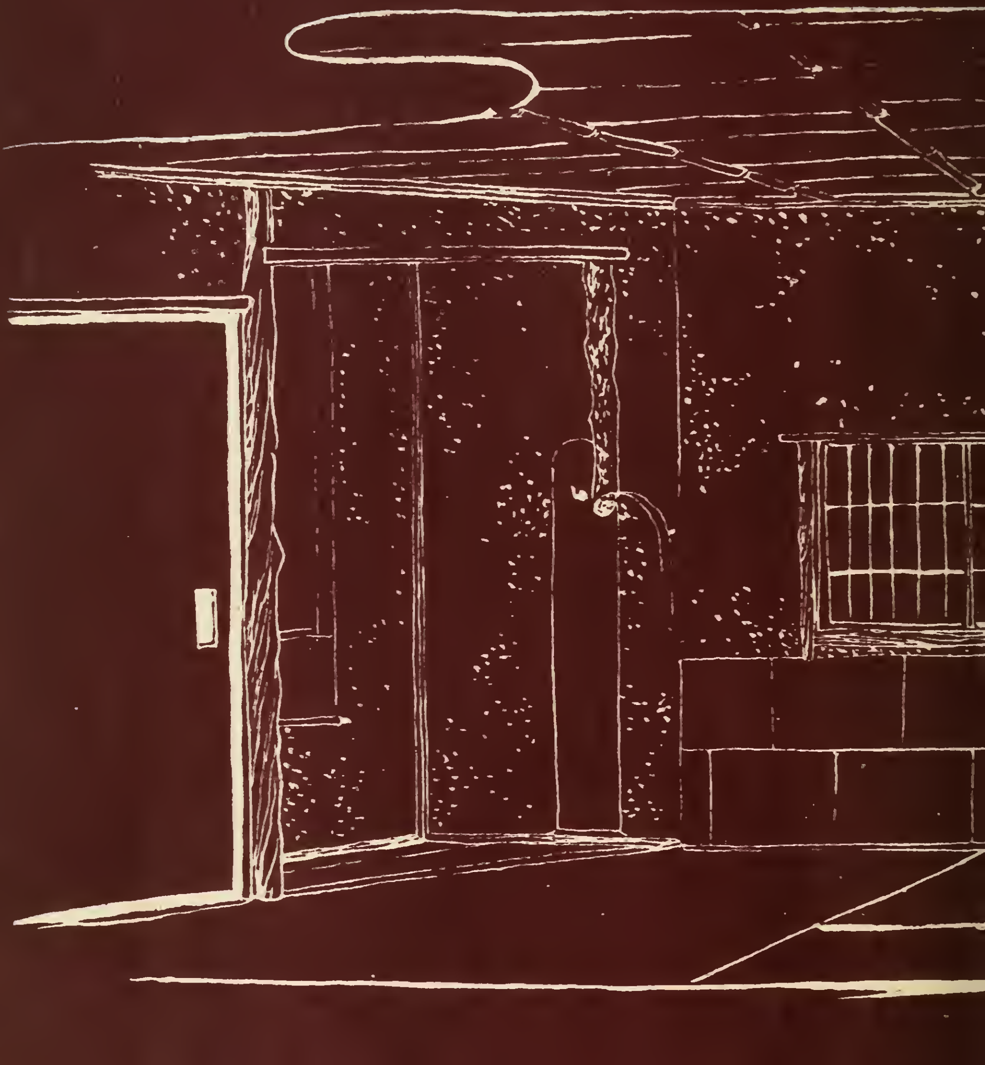

鈴





贈從三位本居宣長著

增補 本居宣長全集 第九

正三位本居豐穎校訂

例　言

一　本輯には、「ひも鏡」一帖と、「言葉の玉緒」「玉あられ」「後撰集詞のつかね緒」「漢字三音考」「字音假字用格」「地名字音轉用例」「うひ山ぶみ」「菅笠日記」「紀見のめぐみ」「むすびすてたる枕の草葉」「鈴屋集」「おもひぐさ」「まくらの山」「詩文稿」「家の昔物語」「遺言書」の十六部三十一卷を收む。

二　句讀點濁點等、すべて原本のまゝなり。

三　括弧【】を附したるは、原本細註なるを一行にせる印なり。

四　引用歌文等の右肩に、原本〽の印を附したるを、「に改め、且つ上部に附せり。又語の右傍に附したる▯を||に改む。

五　「言葉の玉緒」「後撰集詞のつかね緒」原本に、例へば[し][しか]及び[もとよしのみこと]など記せる[　]等に換ふるに「　」を以てす。又「字音假名用格」の中に「　」を附したるは、原本[　]なるを改めたるなり。

六　「字音假字用格」「家の昔物語」頭書あり。適宜の所に之を挿入し、（　）を附して本文と別つ。

七「言葉の玉緒」引用歌の中間切るゝ所に附したる□を二に改め、(江)㋲等の○を（ ）に改む。

八「うひ山ふみ」本文の傍及び頭に記せる㋑㋒等の○を（ ）に改む。

九「言葉の玉緒」「玉あられ」「漢字三音考」「字音假字用格」目錄を、舊全集に畧きたれど、原本によりて加へたり。但し其の丁數を頁數に改む。又「漢字三音考」「字音假字用格」「地名字音轉用例」は、原本片假名交り文なるを、舊全集に平假名に改めたれど、本の如く片假名となす。

十「紀見のめくみ」稿本によりて誤を正し、又五五六頁に「いにしへふりのうれたみ歌」四首、五六二頁に「上にしるせる歌ともの中に………」の左註を補へり。

十一「鈴屋集」宣命書きの細書の部分、原本には二行に記せるを、一行となす。

十二「遺言書」舊全集に、「家の昔物語」の一項として載せたるは誤なり。

目次

天爾遠波ひも鏡

は も 徒

し　し　き　き　ぞ　ぞ

り　り　り　り　り　り

けり　せり　てり　りり　めり　ぬり　つ

る　る　く　そ　つ　ぬ　ふ　む　ゆ　る　う

く　そ　つ　ふ　む　る　ん　らん　けん　まし　てん

ぞ の や 何

る　る　る　る　る　る

ける　せる　てる　りる　める　ぬる　つる

るる　るる　くる　そる　つる　ぬる　ふる　むる　ゆる　るる　うる

こそ

けれ　けれ　けれ　　　　ね

れ　せ　れ　せ　れ　め

けれ　せれ　てれ　れれ　めれ　ぬれ　つれ

れ　れ　くれ　それ　つれ　ぬれ　ふれ　むれ　ゆれ　るれ　うれ

け　せ　て　へ　え　せ　め　らめ　けめ　なめ　てめ

此九段の詞とこの六段の詞とは格混じ…

明和八年卯十月　松坂　本居宣長

詞玉緒の序

冬ごもり今を春べとのどかなる御代のめぐみに。さくや此言葉の花もにほひまさりて。いとやむどなきころほひになむありける。しかはあれども。影さへ見ゆる山のゐの。心あさきうひまなびのほどは。なほなにくれとたど〳〵しきすぢおほかる中に。てにをはのと、のへなむ。くらぶの山路やみにこゆらむやうにて。ここにみな人の思ひなやむわざなりける。まことに此いさ、かもたがへるふしあるは。心ことば、思ひえたるも。猶よきゝぬのきざまあしかること、ちして。いともこちなく見ゆめるを。又かすかなるたゞ一もじの心しらひに。難波堀江のみをつくし。深きいたりも見えしられて。あはれさもおかしさもこよなくまさるわざなゝめり。こゝにわが師の君は。おくふかきこと葉の繁路を。たゆみなくわけいりて。武さし野のかぎりよし野山のはてまでも。いたらぬくまなくあきらめたまへる心に。もとより此ことわりを深く思ひとり玉ひて。年ごろいかで此くらぶ山。うめの花にほはせてしがなと。うねはふまめのまめやかにおもほしわたりけるまゝに。さい

つころまづ紐鏡こいふいさゝかなる一まきをつゞりて。世にひろめたまへりしを。なほつまびらかにこて。きよきなぎさの玉やかひやこひろひあつめ。いづみの杣のしげき宮木かずおほく引いでゝ。秋の花野のいろ〳〵につみわけ。はまちごりのあこさだかになむかきつらね玉ひける。此ふみ世にひろまりて。そのこゝろをわきまへしりなば。てにをはのと、のへはしげ糸のことしけくとも。まよふすぢなく。とけがたきふしも世になからむと。いまよりおもふうれしさは。ふみの名にしおふ玉のをの。ながくひさしくつたはりて。道のしるべとなりな、むこ。かのかげさへ見ゆるおのれらが心にしも。おしこめがたくなほえあらで。ちからなきかへるのなま〳〵の人まねを。ほねなきみ、ずのみゝずがきにかきしるしつ。

稲懸大平

言葉の玉のをの序

此ふみの名よ。玉の緒としもつけゝるよしは。人の身のよそひにも。萬の物のかざりにも。あがれりし世には。高きいやしきほど〳〵に。みな玉をなむものして。いみしきたからのおやとはしければ。何事のうへにも。みじかし長し。たゆみだるなごいはむとてのたづきにも。まづそれがをゝ引かけ。うつせみのよの命をさへなん。たとへていひける。さるはいとかぎりなくめでたき物のかざりならむにも。ぬきつらねたらんさまにしたがひてなむ。いま一きはの光もそはりぬべく。またはえなくきえても見えぬべければ。此緒こそげにいとなのめなるまじき物には有けれ。ましてすぢなくみだれもし。絶もしなむには。いかにめでたく共。そのかざりいたづらならじやは。ことの葉の玉のよそひはた。此ぬきつらぬるてにをはからなん。ともかくもあつめるわざなれば。又よそへてなむ。

安永八年十二月六日　　　本居宣長

詞の玉緒目錄

○一の卷

○四の卷

○五の卷

○六の卷

むすびことば

○七の卷

古風部

詞瓊綸一之卷

○てにをはは。神代よりおのづから萬のことばにそなはりて。その本末をかなへあはするさだまりなん有て。あがれる世はさらにもいはず。中昔のほどまでも。おのづからよくとゝのひて。たがへるふしはをさ〳〵なかりけるを。世くだりては。哥にもさらぬ詞にも。このとゝのへをあやまりて。本末もてひがむるたぐひのみおほかるゆゑに。おのれ今此書をかきあらはせるは。そのさだまりをつぶさにをしへさとさんとてなり。

○近き世に或人。てにをはゝ漢文(からぶみ)の助字の如しといへり。此言あたれるやうなる故に。さることゝのみ心得をる人おほかゝめり。まことにいとよく似てはあれども。しか思ふは猶てにをはをよくしらぬものになん有ける。そのゆゑは。かのからぶみの助字といふなる物は。その本と末とをあひてらして。かなへあはするさだまりはなきものなるを。てにをはゝ。たしかに此さだまりのあと有て。いさゝかもたがひぬれば。言の葉とゝのはず。哥も何もすべていたづらごとになんなるめるを。いまだしきともがらはさる物にて。近き世には。哥よくよむと思ひて。いたくこれに心する人だに。とりはづしては。ほゝゆがめもてそこなふたぐひ。よにおほきぞかし。さるをかの助字といふ物と。もはら同じことゝのみ思ひとりたらんには。此本末をばかなへんものともおもひたどらで。たゞおのが心にのみまかせつゝ物すべかゝめれば。いよ〳〵いみしきひがことのみ引出なんものをや。

○又ある人。てにをはの本末のとゝのへは。定まりあるやうにて。又かならずさしもあらず。たゞそのことばのおもむきと。しらべとにしたがひてともかくもはからひ物すべきわざ也といへり。これはいにしへの哥どものてにをはを。ひろくも考へあつめずて。おほかる中に。これとかれとゝのひのひとしからぬなど。只かたそばを見あはせて。ゆくりなくひがこゝろえつるものにして。しかひとしからぬ。これもかれもともにさだまりなることをえしらぬなるべし。かゝる人の。おのれよくわきまへしれりと思ひほこりて。心もてそらにはからひものしつるてにをはよ。みづからこそよしとおもへど。なほかた

ほなるとうちまじりて。人わらへにもなるわざなりかし。いにしへのよき哥どものは。かならずしからではえあらぬ。おのづからのことわりありて定まりつる物になん有ければ。かりそめにもそれをはなれて。わたくしのさかしらをば。露ばかりもくはふべきにあらず。たゞいづくまでも〳〵。ふるき道をたづねて。そのあとになんしたがひよるべきわざなりける。

○てにをはのとゝのへは。その本末をかなへあはせて。いにしへのさだまりをあやまたぬをなんむねとはすめれば。おのれさきに紐鏡といふものを作り出て。三條の大綱を張わたして。此さだまりのかぎりをあらはしたりき。そはやがて此書の目録のやうにて。てにをはの大むねにしあれば。此ふみを考へんには。つねにかのひも鏡をかたはらにひろげおきて。あひてらし見べきなり。この三條の大づなをだにとり得てば。むすぼゝれたらんちゞのてにをはも。すぢ〳〵おのづからさはらかにとけわかれて。つゆのみだれもなからむかし。

○紐鏡の三條の大綱とは。右〔は〕〔も〕〔徒〕【徒とははもぞのや何こそなどいふ辞のなきを今かりにかくいふ也】の結び一條。中〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕【いかにいくたれの類みな同じ】の結び一條。左〔こそ〕の結び一條。此三條にして。これなんてにをはの大旨なりける。結びとは。言のとぢめをいふ。さるは一首のとぢめのみにもあらず。いづれの句にまれ。語の切るゝ所は。皆そのとぢめにて。上におけるてにをはの結びなり。さてかの三條に分てあげたる段々の辞のさだまりのなかに。上を〔は〕【も徒同じ】といへば〔けり〕とむすび。〔ぞ〕【のや何同じ】といへば〔ける〕とむすび。〔こそ〕といへば〔けれ〕と結ぶたぐひは。たれもよくわきまへしれゝども。〔は〕【も徒同じ】といへば〔し〕と結び。〔ぞ〕【のや何同じ】といへば〔き〕と結ぶと。又〔は〕【も徒同じ】といへば〔き〕とむすび。〔ぞ〕【のや何同じ】といへば〔し〕と結ぶと。詞によりて。かくかへさまにもなるなどは。後の世の人はまゝ誤るとあり。【是は紐鏡のはじめ五段の内。上二段は。右のくだりしにて結び。中のくだりきにて結ぶ格なるを。下三段は。うちかへして。右のくだりき。中のくだりしにて結ぶ。此所かくのごとく。しときとたがひにかはる故に。初學の人はまどひやすし。よくわきまふべし】又〔は〕【も徒同じ】といへば〔ぬ〕〔つ〕〔る〕と結び。〔ぞ〕【のや何同じ】といへば〔ぬる〕〔つる〕〔る

る」と結ぶ言あり。此たくひのけぢめなどをば。後の世の人は。をさ〳〵わきまへしらぬにや。皆ひとつにまがへ誤ると。つねにおほし。【此差別は次々に委くいふがごとし】すべてこれらのけぢめも。かの大綱の三條のすぢ〳〵をたつねて。わきまへしるべし。

○すべての詞づかひに。切るゝとこころとつゞく所とのけぢめあることを。まづわきまへおくべし。是を上の件にいへる〔ぬ〕〔つ〕〔る〕と〔ぬる〕〔つる〕〔るゝ〕との例にていはゞ。「花さきぬ」「鶯なきつ」「もみぢ葉ながる」などゝいふたぐひの〔ぬ〕〔つ〕〔る〕は切るゝ辞也。これを「櫻花散ぬる風の云々。「鶯の鳴つる枝を云々。「もみぢばのながるゝ川に云云などゝいふ時は。「散ぬる風「なきつる枝「ながるゝ川とやうに下へつゞけば。〔ぬる〕〔つる〕〔るゝ〕などはつゞく辞也。【「ちりぬ風「なきつ枝「ながる川などゝはつゞきがたし。又「花ちりぬる「鶯なきつる「もみぢばながるゝなどいひては。語切れずと心得へし。かくのごとくたゞにぬるつるるゝといひても切るゝことゝ思ふは。後世人のひがことなり。そのよしは下にくはしくいふべし。】かくて此切るゝ辞は。ことごとく紐鏡の右行の段々にあり。つゞく辞は中行の段々にある也。件の〔ぬ〕〔つ〕〔る〕と〔ぬる〕〔つる〕〔るゝ〕との例に准へて。いづれをも考へさとるべし。さて又。切るゝ所もつゞく所も同じき詞もあり。聞成待言知などの〔く〕〔す〕〔つ〕〔ふ〕〔る〕のたぐひ。又〔ん〕〔らん〕〔なん〕などの類也。これらは詞のつらねざまにしたがひて。切れもつゞきもする也。ひも鏡の第卅三段〔く〕右【行】〔け〕【左行】より。終りの〔てん〕【右行】〔てめ〕【左行】まで。合せて十一段の辞これ也。此十一段は皆。切るゝもつゞくも同じき故に。右行と中行と一つになれり。考へ見べし。

○ひも鏡の右の行の段々は〔は〕〔も〕〔徒〕の結び辞也。中の行の段々は〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕の結び辞也。左の行の段々は〔こそ〕のむすび辞也。かくて右の行は。上にいへる如くみな。切るゝ辞なれば。もとより結びにまがひなきを。中の行はみな。下へつゞく辞なるに。〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕の結びとなる事。いまだしき輩は疑ひありぬべければ。今その心得を委くいふべし。まづ中の行は皆。つねにはつゞく辞なるを上に〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕のてにをはある時は。その結

びとなりて。切るゝ也。例を一つ二つあげていはゞ。古今集春下に「山高み見つゝわがこし櫻花云々。同上に。「よそにのみあはれとぞ見し梅花云々。此二つの〔し〕は。同じ〔し〕なるに。【二つともにいはゆる過去のしにて中の行の辭也】見つゝわがこしの方は。こし櫻花とつゞきて。常のさまなり。「あはれとぞ見しの方は。上に〔ぞ〕とある故に。其結びとなりて切れたり。又同集春上に、「山たかみ人もすさめぬさくら花云々。同下に「こゝならばさかずやはあらぬ櫻花云々。此二つの〔ぬ〕も同じ〔ぬ〕なるを。【ともに不の意のぬにて中の行の辭也】「すさめぬの方は。櫻花へつゞきて。常のさま。「さかずやはあらぬの方は。上に〔や〕とあるゆゑに。切れてそのむすびとなれり。大かたこれらをもて。中の行の段々〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕の結びのやういづれをもなずらへしるべし。かゝればすべて〔は〕〔も〕〔徒〕のむすびは。ひも鏡の右の行にて。切るゝ辭。〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕の結びは。中の行にて。つねにはつゞく辭と心得ることは。よろづのてにをはたがふことなし。【中の行の辭にて結ぶは、必上にぞのや何のてにをはのあるときに限れり。上に此四ッのてにをはなければ。其詞下へつゞきて。切れざる也。然るを後世になりては此格みだれて。上に此四つのうちのてにをはをおかずして。中の行の辭にて結ぶとおほく見ゆめり。そはおのづからの定まりに違へる事なる故に。言葉とゝのはず。一首のすがたいやしく聞ゆる物也。文章には近代ことに此あやまりおほし。其事は。七の巻の文章の部に委くいへり】おほよそ哥にまれ文にまれ。てにをはのとゝのへること。とゝのはざるとは。此二つのあひだにあるとなり。さてまた。〔は〕〔も〕〔徒〕の結びも。〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕の結びもひとつにて。かはらぬもあり。これはかの。ひも鏡第卅三段〔く〕【右行】〔け〕【左行】より。終り迄の十一段にて。此段々の辭どもは。切るゝ所もつゞく所も又一つにて。かはらざると。上にいへるがごとしそもそも切るゝ所とつゞく所とかはれる詞は。てにをはのとゝのへもかはり。切るゝつゞく同じ詞は。てにをはのとゝのへも又同じきは。いともあやしき言靈のさだまりにして。さらにあらそひがたきわざなりかし。次に左の行の〔こそ〕の結びは。大かたまぎるゝことなし。

○上の件のさまどもを。よくあきらめえたらんには。萬のてにをはのとゝのへ。をさをさたれも心もとなきふしなかンめ

れど。うひまなびのともがらなどはなほえさとりあきらめぬくまぐ〳〵の。かならずあるまじきにもあらず。又げにさるとゝは。かつ〴〵思ひあたりながら。宣長がはじめて考へて。いひいでつる事共にて。むかしの人々の。さらにいひおかざりけるとなれば。いかゞあらんと。猶かたつかたにうたがひをのこして。ひたぶるにはうけひき用ひぬ人はた。かならずありぬべきにより、かの大綱(おほづな)の三條(みすぢ)の段々の。三轉(みつのうつり)の辭毎(ことばごと)に、【三轉とは。上のてにをはにひかれて。一ッ言の、三くさにうつりかはるをいふ也。けりけるけれなりなるなれなどの如し。すべて此書の中に三轉といふは。皆此意也。】古き哥ひとつゞゝを引出て。此下につぎ〳〵つらねあげて。猶しかたど〳〵しからん人共にもしめし。かつはこれみないにしへのつねの定まりにして。さらにおのが今のわたくしにはあらぬとのしるしとす。そもなほうたがひて。うけひかぬ人もあらば。ふるき集どもを。猶はじめより哥どに引出て。あはせこゝろみてよ。さてなん此事のみだりならぬほどは。さりはてぬべき。

〇すべて此書に。あるひは三轉。或は結び辭。或は變格。あるひは歎息のや。などゝいへるたぐひの名目は。おのが今あらたにまうけたる也。すべて物をくはしくをしへさとすには。かならず何くれの名目をたてゝ。事をわかたでは。さだかにしめしがたき事おほかる故に。やむとえずて。かりにまうけつる物ぞ。かならず人の耳をおどろかさんとて。よにことなることをこのみてにはあらず。ききなれずとて。なおもひとがめてぞ。

三轉證歌

〔し〕右行　〔さ〕中行　〔けれ〕左行　紐鏡第一段

(右)

は	も	徒

古十三 有明のつれなく見えしわかれより曉ばかりうきもの〔は〕な〔し〕

同 こりずまに又もうき名〔は〕立ぬべ〔し〕＝人にくからぬよにしすまへば

同二 いつまでか野べにこゝろのあくがれん＝花しちらずばちよ〔も〕へぬべ〔し〕

同六 我宿は雪ふりしきてみち〔も〕な〔し〕＝ふみ分てとふ人しなければ

同十七 おちたきつ瀧のみなかみ年つもり老にけらしな＝黒きすぢな〔し〕

同九 みやこ出てけふみかの原いづみ川かは風さむ〔し〕＝ころもかせ山

(中)

ぞ	の	や	何

同四 かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへ〔ぞ〕う〔き〕

同二 のこりなくちる〔ぞ〕めでた〔き〕＝さくらばな有て世中はてのうければ

同十二 ひとりして物を思へば秋の田のいなばのそよといふ人〔の〕な〔き〕

○の結びにて。なかばにて切れたる哥は。をさ〳〵見あたらず。故にこれより下段々。皆これをはぶけり。其哥のいとまれに見えたるは、別にの部に出せり

後十三 露ばかりぬるらん袖のかわかぬは君がおもひのほど〔や〕すくな〔き〕

千二 思ふとちえに〔や〕しげ〔き〕＝呼子鳥信太の杜のかたになくなり

古十一 瀧つ瀬の中にも淀はありてふを〔など〕我戀のふち瀬ともな〔き〕

拾十九 石見がた〔なに〕かはつら〔き〕＝つらからばうらみがてらにきても見よかし

（左）

こそ

古四 をみなへし吹すぎてくる秋風はめには見えねどか〔こそ〕しる〔けれ〕

同十五 こゝろ〔こそ〕うたてにく〔けれ〕＝染ざらばうつろふ事もおしからましや

〔し〕右　〔しき〕中　〔しけれ〕左　第二段

（右）

徒	も	は

新十七 たれかはと思ひ絶ても松にのみおとづれてゆく風〔は〕うらめ〔し〕

後六 秋霧のはるゝ〔は〕うれ〔し〕＝女郎花立よる人やあらんとおもへば

古十八 いざこゝにわが世はへなん＝菅原や伏見の里のあれまく〔も〕を〔し〕

拾十九 わがせこを戀る〔も〕くる〔し〕＝いとまあらばひろひてゆかむこひ忘れ貝

万八 衣手にみしぶつく迄植し田をひきた我はへ守れるくる〔し〕

古十四 あなこひ〔し〕＝今も見てしが山がつのかきほに咲るやまと撫子

（中）

何	や	の	ぞ

同一 春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となる〔ぞ〕わび〔しき〕

同九 山かくす春のかすみ〔ぞ〕うらめ〔しき〕＝いづれみやこのさかひなるらん

後三 吹風のさそふ物とはしりながら散ぬる花〔の〕しひて戀〔しき〕

古四 秋萩も色づきぬればきりぐ〵すわがねぬごと〔や〕よるはかな〔しき〕

古二 花のちるを〔や〕わび〔しき〕＝春がすみたつたの山のうぐひすの聲

後九 淺茅生の小野のしの原忍ぶれどあまりて〔など〕か人の戀〔しき〕

(左)

こそ

後十 あさ見ればば心なぐさの濱千鳥今はこゑ〔こそ〕きかまほ〔しけれ〕
古四 月見ればちゞに物〔こそ〕かな〔しけれ〕＝我身ひとつの秋にはあらねど

〔き〕右　〔し〕中　〔しか〕左　第三段

(右)

は	も	徒

後三 風にしもなにかまかせん＝さくら花にほひあかぬにちる〔は〕うかり〔き〕
同二 見ぬ人の形見がてら〔は〕をらざり〔き〕＝身になぞらへる花にしあらねば
万十一 かくばかりこひん物ぞと思はねば妹がたもとをまかぬよ〔も〕あり〔き〕
拾十四 手枕のすきまの風〔も〕寒かり〔き〕＝身はならはしの物にぞありける
万二 みわ山の山べまそゆふみじかゆふかくのみ故に長くとおもひ〔き〕
同四 人どをしげみこちたみあはざり〔き〕＝心あるごとおもふなわがせ
後十 なることよりさし出されし船よりも我〔ぞ〕よるべもなきこゝちせ〔し〕
古四 みごりなるひとつ草と〔ぞ〕春は見〔し〕＝秋はいろ〳〵の花にぞ有ける

(中)

ぞ	の	や	何

〔し〕
後七 こふとの秋しもまれに聞ゆるはかりに〔や〕我を人のたのめ〔し〕
後拾十八 いはぬまをつゝみし程に口なしの色に〔や〕見え〔し〕＝やまぶきの花
古十六 花よりも人こそあだになりにけれ＝〔いづれ〕をさきに戀んとか見〔し〕
同四 〔なに〕びこかきてぬぎかけ〔し〕＝藤ばかまくる秋ごとに野べをにほはす

(左)

こそ

(右)

は	も	徒

(中)

ぞ	の	や	何

拾十一 戀すてふわが名はまだき立にけり＝人しれず〔こそ〕思ひそめ〔しか〕

古四 きのふ〔こそ〕さなへとり〔しか〕＝いつのまにいなばそよぎて秋風のふく

〔にき〕右　〔にし〕中

第四段

古十三 よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ＝こゝろ〔は〕君が影となり〔にき〕

後三 君こずてとし〔は〕くれ〔にき〕＝立かへり春さへけふに成にける哉

同十四 すがはらや伏見の里のあれしより通ひし人のあと〔も〕たえ〔にき〕

古十四 かくこひん物とは我〔も〕おもひ〔にき〕＝心のうらぞまさしかりける

源氏竹川 ながれてのたのめむなしき竹川によは。うき物と。おもひしり〔にき〕

古十三 かきくらす心のやみにまどひ〔にき〕＝夢うつゝとは世人さだめよ

後十 音にのみきゝ、こしみわの山よりも杉のかずをば我〔ぞ〕見え〔にし〕

古十五 しでの山ふもとを見て〔ぞ〕歸り〔にし〕＝つらき人よりまづこえじとて〔にし〕

後九 影だにも見えずなりゆく山の井は淺きより又水〔や〕たえ〔にし〕

古十 郭公峯の雲に〔や〕まじり〔にし〕＝有とはきけど見るよしもなき

新十六 八重ながら色もかはらぬ山ぶきの〔など〕九重にさかずなり〔にし〕

和哥所哥合家隆卿 神代より〔いく〕よかへ〔にし〕＝をとめこが袖ふる山のみづ垣の松

〔てき〕右　〔てし〕中

第五段

(右)

は	も	徒

古十二 うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふ物〔は〕頼みそめ〔てき〕

拾十一 わびつゝも昨日ばかり〔は〕過し〔てき〕＝けふやわがみのかぎりなるらん

万十三 かへりにし人を思ふとぬば玉のそのよはわれ〔も〕いもねかね〔てき〕

後十三 白雲のみな一むらに見えしかど立出て君をおもひそめ〔てき〕

詞十 もゝとせの花にやどりて過し〔てき〕＝此世は蝶の夢にぞありける

古十一 よし野川岩波たかくゆく水の早く〔ぞ〕人を思ひそめ〔てし〕

(中)

ぞ	の	や	何

〔てし〕

〔てし〕

拾遺愚草 ねにたつるかけのたれ尾の〔たれ〕ゆゑかみだれて物は思ひそめ〔てし〕

續後撰家隆卿 〔いく〕とせかなきふるし〔てし〕＝郭公かみなみ山のさみだれのそら

第六段

〔ず〕右　〔ぬ〕中　〔ね〕左

(右)

は	も

古十三 夢路にはあしもやすめず通へどもうつゝにひとめ見しと〔は〕あら〔ず〕

後十三 うつゝに〔は〕ふせどねられ〔ず〕＝おきかへりきのふの夢をいつかわすれん

古八 したはれてきにし心の身にしあればかへるさまには道〔も〕しられ〔ず〕

同五 ちはやぶる神代〔も〕きか〔ず〕＝立田川からくれなゐに水くゝるとは

徒

(中) ぞ｜の｜や｜何

(左) こそ

(右) は｜も｜徒

(中) ぞ｜の

新十一六帖 春日野のわかむらさきのすりころもしのぶのみだれかぎりしられ〔ず〕

後拾三 あし引の山ほとゝぎすのみなら〔ず〕‖大かた鳥の聲も聞えず

古二 さくら花とくちりぬ共おもほえず人のこゝろ〔ぞ〕風も吹あへ〔ぬ〕

同十三 長し共思ひ〔ぞ〕すて〔ぬ〕‖むかしよりあふ人からの秋の夜なれば

同六 みよしのゝ山のしら雪ふみ分て入にし人〔の〕音づれもせ〔ぬ〕

後八 流れゆく水こほりぬる冬さへ〔や〕なほうき草の跡はとゞめ〔ぬ〕

古十三 月やあらぬ春〔や〕昔の春なら〔ぬ〕‖我身ひとつは本のみにして

新三 夏草はしげりにけれど郭公〔など〕我宿に一こゑもせ〔ぬ〕

同三 あふよとは〔たれ〕かはしら〔ぬ〕‖たなばたの明る空をもつゝまざらなん

古十三 おもへども人めづゝみの高ければ川と見ながらえ〔こそ〕渡ら〔ね〕

同 春の夜のやみはあやなし梅花いろ〔こそ〕見え〔ね〕‖香やはかくるゝ

〔り〕右　〔る〕中　〔れ〕左　第七段

古十九 人にあはむつきのなきに〔は〕思ひおきてむねはしり火に心やけを〔り〕

後十六 ひとふしに恨みなはてそ笛竹の聲のうちに〔も〕思ふこゝろあ〔り〕

風雅十雑家公 音にのみきけばかひなし時鳥ことかたらはんとおもふこゝろあ〔り〕

古十九 枕よりあとより戀のせめくればせんかたなみ〔ぞ〕とこ中にを〔る〕

同 うめの花見にこそきつれ‖うぐひす〔の〕ひとく／＼といとひしもを〔る〕

（左）

や	何

こそ

袋さうし 元輔がのちこいはるゝ君しも「や」こよひの哥にはづれてはを「る」

古十八 君をのみ思ひこしぢのしら山は「いつ」かは雪のきゆる時あ「る」

後七 なご我身したは紅葉こ成にけむ‖同じなげきの枝に「こそ」あ「れ」

〇此段はなかばにて結べる哥は例すくなければ畧けり

「せり」右　「せる」中　「せれ」左　第八段

（右）

は	も	徒

新六 はつ雪のふるの神杉うづもれてしめゆふ野べ「は」冬こもり「せり」

夫木 ひもろぎは神の心にうけてけり‖ひらの高根「も」ゆふかづら「せり」

治承二右大臣家哥合俊成卿 秋ふかみ青葉の山「も」紅葉「せり」‖名をば時雨もそめじこ思ふに

古今序 此このはうべもこみけり‖さき草のみつばよつばに殿づくり「せり」

（中）

や

源氏松風 いさらるははやくの事も忘れじを本のあるじ「や」面がはり「せる」

〇此段ぞの何こその證哥見あたらず。其外なかばにてむすべるなごもいこすくなし。

「なり」右　「なる」中　「なれ」左　第九段

（右）

は	も

古十八 わがいほはみやこのたつみしかぞすむ‖よをうち山こ人「は」いふ「なり」

同十六 みな人「は」花の衣になりぬ「なり」苔のたもこよかわきだにせよ

拾四 神無月しぐれしぬらし‖葛の葉のうらこかるねに鹿「も」なく「なり」

古十九 難波なるながらの橋「も」つくる「なり」‖今はわがみをなにゝたこへん

徒	ぞ	の	や	何	こそ	は	も	徒
	(中)				(左)	(右)		

同六 みよしのゝ山のしら雪つもるらし故鄕さむくなりまさる〔なり〕

同四 秋の野に人まつ虫のこゑす〔なり〕＝我かと行ていざとぶらはん

同三 おとは山けさ越くればほとゝぎすこずゑはるかに今〔ぞ〕なく〔なる〕

同四 秋風にはつ雁がね〔ぞ〕きこゆ〔なる〕＝たが玉づさをかけてきつらん

千四 宮城野の萩やをしかのつまならん＝花咲しより聲〔の〕いろ〔なる〕

源氏梅枝 つれなさはうきよのつねになりゆくを忘れぬ人〔や〕人にことなる〕

古十九 こゝならば思はずとやはいひはてぬ＝〔なぞ〕よの中の玉だすき〔なる〕

同十八 世中は〔なに〕かつね〔なる〕＝飛鳥川きのふの淵ぞけふはせになる

後十八 あはれてふことにしるしはなけれ共いはではえ〔こそ〕あらぬ物〔なれ〕

古十四 かた見〔こそ〕今はあた〔なれ〕＝これなくばわするゝ時もあらまし物を

〔たり〕右　〔たる〕中　〔たれ〕左

第十段

〔たり〕

金五 なはしろの水〔は〕いなゐにまかせ〔たり〕＝たみやすげなる君が御代かな

万十八 はり袋とりあげまへにおきかへさへばおのともおのやうら〔も〕つぎ〔たり〕

拾十 年もよしこがひ〔も〕え〔たり〕＝大國の里たのもしくおもほゆるかな

詞一 兼好集 ふる里は春めきにけり＝みかし野のみかきが原をかすみこめ〔たり〕

夫木 俊成卿 鳴神のこゑをさめ〔たり〕＝いなづまの光ばかりぞ夕立のそら

（中）ぞ　の　や　何

（左）こそ

（右）は　も　徒　ぞ

源氏若紫 よる波のこゝろもしらでわかの浦に玉藻なびかんほど〔ぞ〕うき〔たる〕
躬恒集 衣手〔ぞ〕けさはぬれ〔たる〕＝思ひねの夢路にさへや雨はふるらん
千十八和泉式部物名 夜の程にかりそめ人やきたりけん＝淀のみこも〔の〕けさ亂れ〔たる〕
源氏をとめ うぐひすの昔をこひてさへづるは木づたふ花の色〔や〕あせ〔たる〕
古二 咲花はちくさながらにあだなれど〔たれ〕かは春をうらみはて〔たる〕

源氏玉かづら 行さきも見えぬ波路に船出して風にまかする身〔こそ〕うき〔たれ〕

〔けり〕右　〔ける〕中　〔けれ〕左　第十一段

古二 ふる郷となりにしならのみやこにも色はかはらず花〔は〕さき〔けり〕
同一 年の内に春〔は〕きに〔けり〕＝ひとゝせをこぞとやいはんことしとやいはん
同 あだなりと名にこそたてれ＝櫻花年にまれなる人〔も〕まち〔けり〕
同十三 秋の夜〔も〕なのみ也〔けり〕＝あふといへばことぞ共なく明ぬるものを
同一 宿ちかく梅花うゑじあぢきなくまつ人のかにあやまたれ〔けり〕
同三 わがやどの池のふぢなみ咲に〔けり〕＝山郭公いつかきなかむ
古六 冬ごもり思ひかけぬをこのまより花と見る迄雪〔ぞ〕ふり〔ける〕
同 山里は冬〔ぞ〕さびしさまさり〔ける〕＝人めも草も枯ぬとおもへば

(中)

の	や	何

後拾三 かをとめてとふ人あるをあやめ草あやしく駒〔の〕すさめざり〔ける〕

後六 今ははやうちとけぬべき白露の心おくまでよを〔や〕へに〔ける〕

後拾十七 まことに〔や〕同じ道には入に〔ける〕‖ひとりは西へゆかじと思ふに

新續古十七 菅家万葉 言の葉をたのむべしや〔は〕‖秋くれば〔いづれ〕か色のかはらざり〔ける〕

(左)

こそ

古六 雪ふりて年の暮ぬる時に〔こそ〕つひにもみぢぬ松も見え〔けれ〕

同五 秋をおきて時〔こそ〕あり〔けれ〕‖菊の花うつろふからに色のまされば

〔めり〕右 〔める〕中 〔めれ〕左 第十二段

(右)

は	も	徒

後十八 いせ渡る川は袖よりながるればとふにとはれぬ身〔は〕うきぬ〔めり〕

同十五 海とのみ圓居のなか〔は〕なりぬ〔めり〕‖そながらあらぬ影の見ゆれば

同十八 飛鳥川ふちせにかはるこゝろとはみなかみ下の人〔も〕いふ〔めり〕

後拾三 五月雨に日〔も〕くれぬ〔めり〕‖道遠み山田のさなへとりもはてぬに

續後一 いせ集 うめの花かにだにゝほへ春たちてふる沫雪にいろまがふ〔めり〕

古五 立田川紅葉みだれてながる〔めり〕‖わたらば錦中やたえなん

ぞ	の

同十八 しりにけんきゝてもいとへ世中は浪のさわぎに風〔ぞ〕しく〔める〕

大和物語 花すゝき君が方に〔ぞ〕なびく〔める〕‖おもはぬ山の風はふけ共

承安三廣田社哥合 おきつすにしほやみつらんあさりする芦間のたづ〔の〕立さわぐ〔める〕

（中）
や	何
〔める〕	〔める〕

（左）
こそ
〔めれ〕

夫木重之
わざと〔こそ〕くりはなつ〔めれ〕ニまがり木にはひまつはるゝ青つゞらをば

〔けり〕右　〔ける〕中　〔けれ〕左　第十三段　第十一段のけり等とは異なり
〔せり〕右　〔せる〕中　〔せれ〕左　第十四段　第八段のせり等とは異なり
〔てり〕右　〔てる〕中　〔てれ〕左　第十五段
〔へり〕右　〔へる〕中　〔へれ〕左　第十六段
〔めり〕右　〔める〕中　〔めれ〕左　第十七段　第十二段のめり等とは異なり

此五段は證哥すくなき故にひろひ集めて一つにまじへ出せり

（右）
は	も
〔　〕	〔　〕

後十五
いせの海のつりのうけなるさまなれご深きこゝろ〔は〕底にしづ〔めり〕

徒	ぞ	の	や	何	こそ	は	も	徒
	(中)				(左)	(右)		

（万十五）わがゆゑに妹なげくらし風早の浦のおきべ•に霧たなひ「けり」

（万八）わがやごの萩の下葉は秋風もいまだふかねばかく「ぞ」もみ「でる」

（千二）口なしの色に「ぞ」す「める」＝山吹の花の下ゆく井手の河水

（後拾一）あふ坂の關をや春もこえつらん＝音羽の山「の」けさはかす「める」

（古一）春霞たつを見すてゝ行鴈は花なき里にすみ「や」なら「へる」

（同三）夜やくらき道「や」まご「へる」＝郭公わが宿をしも過がてになく

（拾十七）たなばたのあかぬ別れもゆゝしきをけふしも「なご」か君がきま「せる」

（古一）あだなりこ名に「こそ」た「てれ」＝櫻花年にまれなる人もまちけり「　」

「れり」右　「れる」中　「れゝ」左

第十八段

（古廿）みさむらひ御かさこ申せ宮城野の木の下露「は」雨にまさ「れり」

（風八鎌倉右大臣）みやまに「は」白雪ふ「れり」＝しがらきの眞木の杣入道たごるらん

（古一）春日野はけふはなやきそ若草の妻もこもれり我「も」こも「れり」

（正治百首小侍従）なつかしき妻「も」こも「れり」＝同じくはこゝのえ（江）にてやすみれつまゝし

（新千一真慶）いさりするよさのあま人出ぬらし（ほこるらん夫木）浦風ゆるく•かすみわた「れり」

（新十六）秋をへて月をながむる身こな「れり」＝いそぢの闇をなになげくらん

(中)

ぞ	の	や	何

(左)

こそ

(右)

は	も	徒	ぞ

古四 きり〴〵すいたくなゝきそ秋の夜の長き思ひは我〔ぞ〕まさ〔れる〕
拾一 ちかくて〔ぞ〕色はまさ〔れる〕＝青柳の糸はよりてぞ見るべかりける
古一 ちると見て有べき物を梅花うたてにほひ〔の〕袖にとま〔れる〕
後十二 うちかへし見まくぞほしき故郷のやまとなでしこ色〔や〕かは〔れる〕
貫之集 わび人の袖を〔や〕か〔れる〕＝山川はなみだのごと落る瀧かな
千六 水鳥の玉藻の床のうきまくら深き思ひは〔たれ〕かまさ〔れる〕

〔れゝ〕

〔ぬ〕右 〔ぬる〕中 〔ぬれ〕左　第十九段

古二 春の野にわかなつまんとこし物をちりかふ花に道〔は〕まどひ〔ぬ〕
同一 年ふればよはひ〔は〕おい〔ぬ〕＝しかはあれど花をしみれば物思ひもなし
新廿 たに川のながれし清くすみぬればくまなき月の影〔も〕うかび〔ぬ〕
古十七 我見て〔も〕久しく成〔ぬ〕＝住のえのきしのひめ松いくよへぬらん
同九 夜を寒みおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝびね〔ぬ〕
同一 梓弓おしてはるさめけふゝり〔ぬ〕＝明日さへふらばわかなつみてん
同四 秋きぬとめにはさやかに見えね共風の音に〔ぞ〕おどろかれ〔ぬる〕
同十 いさゝめにときまつまに〔ぞ〕日はへ〔ぬる〕＝心ばせをば人に見えつゝ

（中）

の	や	何

（左）

こそ

（右）

は	も	徒

ぞ	の

金九 まつ我はあはれ八十になりぬるをあふくま川〔の〕とほざかり〔ぬる〕

新五 山おろしに鹿のね高くきこゆなり尾上の月にさよ〔や〕ふけ〔ぬる〕

後五 こむといひし程〔や〕過〔ぬる〕＝秋の野にたれまつ虫の聲のかなしき

同十三 深く思ひそめつといひし言の葉は〔いつ〕か秋風ふきてちり〔ぬる〕

新勅三家長 うちはへて〔いく〕か〻へ〔ぬる〕＝夏引の手引の糸の五月雨の空

古四 大かたの秋くるからにわが身〔こそ〕かなしき物と思ひしり〔ぬれ〕

後拾三 ねぬよ〔こそ〕数つもり〔ぬれ〕＝郭公きくほどもなき一こゑにより

〔つ〕右　〔つる〕中　〔つれ〕左　第二十段

後六 花見にと出にしものを秋の野の霧にまよひてけふ〔は〕くらし〔つ〕

古十九 身〔は〕すて〔つ〕＝心をだにもはふらさじつひにはいかゞなるとしるべく

新二 六帖 わがこゝろ春の山べにあくがれて長々し日をけふ〔も〕くらし〔つ〕

古十三 けさはしもおきけんかた〔も〕しらざり〔つ〕＝思ひ出るぞきえてかなしき

後拾廿 今よりはあらぶるこゝろましますな＝花のみやこにやしろ定め〔つ〕

古十七 わがこゝろなぐさめかね〔つ〕＝さらしなやおば捨山にてる月をみて

古十一 あし引の山下水のこがくれて瀧つこゝろをせき〔ぞ〕かね〔つる〕

同二 ぬれつゝ〔ぞ〕しひてをり〔つる〕＝年の内に春はいくかもあらじと思へば

いせ物語 夜もあけばきつにはめなでくだかけ〔の〕まだきに鳴てせなをやり〔つる〕

(中)

や	何

(左)

こそ

(右)

徒	ぞ

後七 ふぢばかまきる人なみ〔や〕立ながら時雨のあめにぬらしそめ〔つる〕

拾二 みやま出てよはに〔や〕き〔つる〕‖時鳥あかつきかけて聲のきこゆる

新一 春ごにこゝろをしむる花の枝に〔たが〕なほざりの袖かふれ〔つる〕

古一 〔たれ〕しかもとめてをり〔つる〕‖春霞立かくすらん山のさくらを

同十七 おきつ浪たかしの濱のはま松の名に〔こそ〕君をまち渡り〔つれ〕

同十三 よるべなみ身を〔こそ〕遠くへだて〔つれ〕‖心は君が影となりにき

〔爲(す)、來(く)、得(う)、寢(ね)、經(ふ)〕右〔する、くる、うる、ぬる、ふる〕中〔すれ、くれ、うれ、ぬれ、ふれ〕左

第廿一段

此中にうるうれは證哥見あたらず‖

此段より下第卅一段まで。合せて十一段は。右の行は‖も‖徒の證哥いとすくなき故に。なべては畧けり。其中にまれに見あたりたるがあるをば。所々にひろひて出せり。

万十五 秋山の紅葉をかざしわがをれば浦しほみち〔く〕‖いまだあかなくに

古二 かすみたつ春の山べはとほけれご吹くる風は花のか〔ぞ〕〔する〕

千五百番 かすむより雲路にのみ〔ぞ〕聲は〔する〕‖澤べのたづも野べのひばりも

後十三 ゆふやみは道も見えねご故郷はもとこし駒にまかせて〔ぞ〕〔くる〕

古十八 逢坂のあらしの風は寒けれごゆくへしらねばわびつゝ〔ぞ〕〔ぬる〕

後十四 いにしへも今も心のなければ〔ぞ〕うきをもしらて年をのみ〔ふる〕

拾一 物もいはでながめて〔ぞ〕〔ふる〕‖山吹の花に心ぞうつろひぬらん

(左)		(中)	
こそ	何	や	の

古十八 あかざりし袖の中にや入にけん＝わがたましひ〔の〕なきこゝち〔する〕
新三 ほとゝぎす深き峯より出にけり外山のすそに聲〔の〕おち〔くる〕
〔ぬる〕
後十四 いにしへのこゝろはなくやなりにけん＝頼めしことの〔の〕絶てほど〔ふる〕
古十一 あし引の山ほとゝぎすわがど〔や〕君にこひつゝいねがてに〔する〕
同 思ひやるさかひはるかになり〔や〕〔する〕＝まどふ夢路にあふ人のなき
同十三 みるめなきわがみをうらとしらねば〔や〕かれなであまの足たゆく〔くる〕
新勅一 古万下 白妙の波路わけて〔や〕春は〔くる〕＝風ふく（たつそ）まゝに花もさきけり
〔ぬる〕
後六 秋の野の露におかるゝをみなべしはらふ人なみぬれつゝ〔や〕〔ふる〕
古十四 〔たが〕里によがれをしてかほとゝぎすたゞこゝにしもねたるこゑ〔する〕
古万下 秋のむし〔なに〕わびしらに聲の〔する〕＝頼みし陰に露やもりゆく
拾七 我宿の花の葉にのみぬるてふの〔いか〕なる朝かほかよりは〔くる〕
新三 郭公ひとこゑなきていぬる夜は〔いかで〕か人のいをやすく〔ぬる〕
〔ふる〕
拾十九 ありとても〔いく〕よかは〔ふる〕＝から國のとらふす野べに身をもなげてん
古十一 相坂の關にながるゝいはし水いはで心におもひ〔こそ〕〔すれ〕
拾十一 われ〔こそ〕は見ぬ人こふるやまひ〔すれ〕＝あふひならではやむ藥なし
古十三 忍ぶれど戀しき時はあし引の山より月の出て〔こそ〕〔くれ〕

〔ぬれ〕

（柴屋集）年をへて菊の下水見てしより老こいふとしらで〔こそ〕〔ふれ〕

○第廿二段は第廿五段に合せてあぐ

○第廿三段は第卅一段に合せてあぐ

第廿四段

〔く〕右　〔くる〕中　〔くれ〕左

（金四）みむろ山紅葉ちるらし旅人の菅のをがさに錦おりか〔く〕

（古五）立田川にしきおりか〔く〕‖神無月しぐれの雨をたてぬきにして

（古五）神なみの山をすぎゆく秋なれば立田川に〔ぞ〕ぬさはたむ〔くる〕

（同四）をみなべしうしこ見つゝ〔ぞ〕ゆきす〔ぐる〕‖男山にしたてりこ思へば

（好忠集）玉垣のみつの湊の春なれば行かふ人〔の〕花をたむ〔くる〕

（拾遺愚草）みてぐらのたつやいすゞの川浪に山の紅葉もぬさ〔や〕たむ〔くる〕

（千五百番）山めぐり時雨〔や〕す〔ぐる〕‖松風のふくかこきけば軒の玉水

〔くる〕

(右)	(中)				(左)
徒	ぞ	の	や	何	こそ

〔くれ〕

第廿五段

〔す〕右　〔する〕中　〔すれ〕左

（右）
徒

（中）
ぞ	の	や	何

（左）
こそ

（中）
ぞ	の	や	何

万八 我君にわけはこふらし給ひたるつばなをくへどいや痩にや〔す〕

千一 山ざくらかすみこめたるありかをばつらき物から風〔ぞ〕しら〔する〕

新勅十一忠義公 色に出て今〔ぞ〕しら〔する〕＝人しれず思ひわびつるふかきこゝろを

〔する〕

月清集 ふく風〔や〕そらにしら〔する〕＝よしの山雲にあまぎる花のしら雪

〔する〕

後十六 わがやごを〔いつ〕ならしてかならのはをならしがほには折におこ〔する〕

六百番 秋ごいへばうづら鳴なり小萩原鹿の音を〔こそ〕花にまか〔すれ〕

源氏總角 さくら〔こそ〕思ひしら〔すれ〕＝咲にほふ花も紅葉もつねならぬよを

〔つ〕右 〔つる〕中 〔つれ〕左　第廿六段 第廿段のつ等とは異なり

好忠集 老にけるよはひもしわものぶばかり菊の露に〔ぞ〕けさはそほ〔づる〕

拾十二 音なしの川こ〔ぞ〕つひに流れい〔づる〕＝いはで物おもふ人のなみだは

〔つる〕

後十 難波がたかりつむ芦のあしつゞの一重も君を我〔や〕へだ〔つる〕

源三輔 九重に霧〔や〕へだ〔つる〕＝雲の上の月をはるかにおもひやる哉

六帖 みくま野の浦の濱ゆふ〔いく〕かさね我をば君がおもひへだ〔つる〕

後拾十九 みやこには〔たれ〕をか君は思ひい〔づる〕＝都の人は君をこふめり

(左) こそ

六帖 おりたてば身〔こそ〕そほ〔づれ〕＝春の田のふみかく事も今はやめてん　〔つれ〕

〔ぬ〕右　〔ぬる〕中　〔ぬれ〕左

第廿七段　第十九段のぬ等とは異なり

(右) は

拾七 鳥の子〔は〕まだひなゝがら立てい〔ぬ〕＝かひの見ゆるはすもりなりけり

(中) ぞ　の　や　何

源氏宿木 かほ鳥の聲もきゝしに通ふやさしげみを分てけふ〔ぞ〕たづ〔ぬる〕

新十三 戀しさにけふ〔ぞ〕たづ〔ぬる〕＝おく山の日影の露に袖はぬれつゝ　〔ぬる〕　〔ぬる〕

新十一 〔たれ〕ぞこのみわのひばらもしらなくに心のすぎの我をたづ〔ぬる〕

(左) こそ　〔ぬれ〕

〔ふ〕右　〔ふる〕中　〔ふれ〕左

第廿八段

ぞ

新勅九賀之 山あるもてすれる衣の赤ひもの長く〔ぞ〕我は神につか〔ふる〕

同十七 あかつきのかね〔ぞ〕あはれをうちそ〔ふる〕＝うきよの夢のさむる枕に

(中) の　や　何

(左) こそ

(右) 徒

(中) ぞ　の　や　何

〔ふる〕
能宣集 すみのえの年ふる松のよはひをばかへる〳〵も波〔や〕かぞ〔ふる〕
千四 をみなべし涙に露〔や〕おきそ〔ふる〕‖たをればいとゞ袖のしをるゝ
六帖 さだめなくあまたにかくるむさし鐙〔いかに〕のればかふみはたが〔ふる〕
万八 〔なに〕しかもこゝたくこ〔ふる〕‖郭公鳴こゑきけば戀こそまされ

〔ふれ〕
住吉哥合 身のうさを忘草〔こそ〕岸にお〔ふれ〕‖うべ住よしとあまもいひけり

〔む〕右　〔むる〕中　〔むれ〕左　第廿九段

万十九 ほとゝぎすいまきなきそ〔む〕‖あやめ草かづらく迄にかるゝ日あらめや
古十八 世中はいづれかさしてわがならん‖ゆきとまるを〔ぞ〕宿とさだ〔むる〕
後十九 おさへつゝ我は袖に〔ぞ〕せきと〔むる〕‖船こすしほになさじと思へば
古十五 今しはとわびにし物をさゝがに〔の〕衣にかゝり我をたの〔むる〕
万十五 こひしなばこひもしねと〔や〕郭公物おもふ時にきなきとよ〔むる〕
續千五 いとゝ又むし〔や〕うら〔むる〕‖淺茅原おきそふ霜の夜寒かさねて
万十一 あし引の山さくらどをひらきおきてわがまつ君を〔たれ〕かとゞ〔むる〕

（左）

こそ

重之集 しら浪のまがきの嶋に立よればあま〔こそ〕つねに誰とゝが〔むれ〕
續古十八家隆卿 こゝろをば我心〔こそ〕なぐさ〔むれ〕‖あら、ましどのとはずかたりに

第三十段

〔ゆ〕右　〔ゆる〕中　〔ゆれ〕左

（右）

は	も	徒

拾十六 山里の家居はかすみこめたれど垣根の柳末〔は〕とに見〔ゆ〕
五社百首 夢路に〔は〕なれし宿見〔ゆ〕‖うつゝにはうつの山べのつたふけるいほ
金二 雪としもまがひもはてす卯花はくるればばか月の影かと〔も〕見〔ゆ〕
万十七 しぶたにのさきのありそによする波いやしく〳〵にいにしへおもほ〔ゆ〕
同三 大宮のうちまできこ〔ゆ〕‖あびきすとあごとゝのふるあまのよび聲

（中）

ぞ	の	や	何

後七 秋風にさそはれわたるかりがねは雲ゐはるかにけふ〔ぞ〕きこ〔ゆる〕
古廿 あふみのやかゞみの山をたてたればかねて〔ぞ〕見〔ゆる〕‖君が千年は
拾二 みやこ出てよはにやきつる‖郭公あかつきかけて聲〔の〕きこ〔ゆる〕
中務集 なでしこの花咲そむる夏の野にけふひぐらしの聲〔や〕聞〔ゆる〕
新十六 しらなみのこゆらん末のまつ山は花と〔や〕見〔ゆる〕‖春のよの月
万十五 わぎもこが〔いかに〕思へかぬばたまの一夜もおちず夢にし見〔ゆる〕
後十二 こがくれてたきつ山水〔いづれ〕かはめにしも見〔ゆる〕‖音にこそきけ

（左）

こそ

永萬二哥合重家卿 五月雨にしをれつゝなく郭公ぬれ色に〔こそ〕こゑも聞〔ゆれ〕
古一 色よりも香〔こそ〕あはれとおもほ〔ゆれ〕‖たが袖ふれし宿の梅ぞも

第卅一段

(右)			(中)				(左)
は	も	徒	ぞ	の	や	何	こそ

〔る〕右　〔るゝ〕中　〔るれ〕左

堀川後百首 宿にして錦と見るはうれしくてさすがに木葉ちる〔は〕惜ま〔る〕

古十五 月夜に〔は〕こぬ人また〔る〕＝かきくもり雨もふらなんわびつゝもねん

六百番 花はなほそのすがたと〔も〕見えわか〔る〕＝枯野は虫の聲ぞ戀しき

古五 立田川もみぢばなが〔る〕＝神なびのみむろの山に時雨ふるらし

同十七 天の川雲のみをにて早ければひかりとゞめず月〔ぞ〕なが〔るゝ〕

拾十三 夏衣うすきながら〔ぞ〕頼ま〔るゝ〕＝ひとへなるしも身にちかければ

中務集 はつ鴈の夜深かりつる聲によりけさ佐保山〔の〕思ひやら〔るゝ〕

古十五 夢にだに逢事かたくなりゆくは我やいをねぬ人〔や〕わす〔るゝ〕

新四 六帖 たなばたは今〔や〕わか〔るゝ〕＝天川かは霧立て千鳥なくなり

古十八 いくよしもあらじ我身を〔なぞ〕もかくあまのかるもに思ひみだ〔るゝ〕

大和物語 見も見ずも〔たれ〕としりてかこひら〔るゝ〕＝おぼつかなみのけふのながめや

古十二 虫のごと聲にたてゝはなかねども涙のみ〔こそ〕したになが〔るれ〕

いせ集 もりませごよるは猶〔こそ〕頼ま〔るれ〕＝ぬるまもあらばこえんと思へば

此段證哥見あたらず

第卅二段

〔う〕右　〔うる〕中　〔うれ〕左

○これより下は二轉也　そのよしははじめにいへるがごとし

○玉のを一

第卅三段

〔く〕右　〔け〕左

(右)

は	も	徒	ぞ	の	や	何

古一　野へちかく家居しせればうぐひすの鳴なるこゑ〔は〕あさなく〳〵き〔く〕

後十　思はんと頼めし人〔は〕ありとき〔く〕＝いひし言の葉いづちいにけん

古七　千鳥なくさほの河霧立ぬらし山のこのは〔も〕いろかはりゆ〔く〕

拾十三　久かたのあまてる月〔も〕かくれゆ〔く〕＝なに丶よそへて君をしのばん

古十九　秋風にほころびぬらし藤ばかまつゞりさせてふきり〴〵すな〔く〕

新六　やたの野に淺茅色づ〔く〕＝あらち山峯のあわ雪寒くぞ有らし

古十五　あかつきのしぎのはねがきも丶羽がき君がこぬよは我〔ぞ〕かずか〔く〕

同十二　よど丶もに流れて〔ぞ〕ゆ〔く〕＝涙川冬もこほらぬみなわなりけり

同一　春たてば花とや見らん＝しら雪のか丶れる枝に鶯〔の〕な〔く〕

同二　春霞たなびく山のさくら花うつろはんと〔や〕いろかはりゆ〔く〕

同三　くる丶かと見れば明ぬる夏の夜をあかずと〔や〕な〔く〕＝山郭公

同　はちすばのにごりにしまぬ心もて〔なに〕かは露を玉とあざむ〔く〕

後拾四　秋萩のさくにしも〔なご〕鹿のな〔く〕＝うつろふ花はおのがつまかも

(左)

こそ

拾十一　君はたゞ袖ばかりをやくたすらんあふには身をもかふと〔こそ〕き〔け〕

後九　よそにふる雨と〔こそ〕き〔け〕＝おぼつかななにをか人のこひぢといふらん

第卅四段

〔す〕右　〔せ〕左

（右）

は	も	徒	ぞ	の	や	何

（左）

こそ

は

〔す〕

〔す〕

堀川百首 よも山の冬のけしきになるまゝにをのゝ炭がまけふり立ま〔す〕

千十六 眞菅生る山下水にやどるよは月さへ草のいほりを〔ぞ〕さ〔す〕

古十二 おろかなる涙〔ぞ〕袖に玉はな〔す〕＝我はせきあへず瀧つせなれば

〔す〕

拾遺愚草 すべらぎの昔あまねきめぐみを〔や〕このみな月の民にほどこ〔す〕

續後定家卿 うら風〔や〕とはに浪こ〔す〕＝濱松のねにあらはれて鳴千鳥かな

狹衣 ひとかたになりなばさてもやむべきを〔など〕二道におもひなやま〔す〕

〔つ〕右 〔て〕左

第卅五段

堀川百首 とふ人もなき山里の淺茅生はこゝろのまゝにしげり〔こそ〕ま〔せ〕

後六 露ならぬわがみと思へど秋のよをかく〔こそ〕あか〔せ〕＝おきゐながらに

〔つ〕

（右）

も	徒	ぞ	の	や	何

（左）

こそ

は	も

〔つ〕

長秋詠藻 冬の夜の月と雪とを見る程に花の時さへ面影にた〔つ〕

後五 天川いはこす浪のたちゐつゝ秋の七日のけふをし〔ぞ〕ま〔つ〕

古十六 ちのなみだ落て〔ぞ〕たぎ〔つ〕‖白川は君が世までの名にこそ有けれ

續拾十一俊成卿 人しれぬ心やかねてなれぬらん‖あらましど〔の〕おもかげにた〔つ〕

六帖 こゝにまだわがあかぬ月を山端のをちの里にはおそしと〔や〕ま〔つ〕

〔つ〕

古十四 宮城野の本あらの小萩露を重み風をまつど君を〔こそ〕ま〔て〕

拾四 人しれず春を〔こそ〕ま〔て〕‖はらふべき人なき宿にふれるしら雪

〔ふ〕右　〔へ〕左

第卅六段

金五 くもりなき豐のあかりにあふみなる朝日の里〔は〕ひかりさしそ〔ふ〕

万十五 もみぢばゝ今〔は〕うつろ〔ふ〕‖わぎもこがまたんといひし時のへゆけば

〔ふ〕

續千四 こよひしも雲ゐの月〔も〕ひかりそ〔ふ〕‖秋のみ山を思ひこそやれ

（右）

徒	ぞ	の	や	何	こそ

（左）

は	も	徒

續拾十爲長卿　あきらけき御代の始のあさひ山天てる神のひかりさしそ〔ふ〕

古八　あかずしてわかるゝ涙瀧にそ〔ふ〕＝水まさるとや下は見ゆらん

同一　春來ぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじと〔ぞ〕思〔ふ〕

同十八　あまびこの音づれしと〔ぞ〕今はおも〔ふ〕＝我か人かと身をたどるよに

千五　夕霧や秋のあはれをこめつらん＝分いる袖に露〔の〕おきそ〔ふ〕

後拾十一　たのむるに命ののぶる物ならば千年もかくて有んと〔や〕思〔ふ〕

後八　神な月かぎりと〔や〕おも〔ふ〕＝もみぢばのやむ時もなくよるさへにふる

古四　たが秋にあらぬ物ゆゑ女郎花〔なぞ〕色に出てまだきうつろ〔ふ〕

千六　すむ水を心なしとは〔たれ〕かい〔ふ〕＝氷ぞ冬のはじめをもしる

古八　秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしと〔こそ〕思〔へ〕

同一　をりつれば袖〔こそ〕にほ〔へ〕＝梅花ありとやこゝに鶯のなく

〔む〕右　〔め〕左

第卅七段

〔む〕

いせ物語　いほりおほきしでの田長〔は〕猶たのむ〔む〕＝我住里にこゑし絶ずば

〔む〕

千十六　さゝなみや國つみ神のうらさびてふるきみやこに月ひとりす〔む〕

（右）

何	や	の	ぞ

古十七 いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心をしるひと〔ぞ〕く〔む〕
同十八 わがいほはみやこのたつみしか〔ぞ〕す〔む〕‖よをうぢ山と人はいふなり
〔む〕
続千十七紫式部 よもの海にしほくむあまの心からやくとはかゝるなげきを〔や〕つ〔む〕
続古五 つれもなきつまを〔や〕たの〔む〕‖秋風のみに寒き夜は鹿もなく也
万十九 春まけてものがなしきにさよ更てはぶりなく鴫〔たが〕田にかす〔む〕
続後十四 たなばたを〔なに〕かうらや〔む〕‖逢事のまれなる程はおこりしもせじ

（左）

こそ

後一 春の野に心をだにもやらぬ身は若菜はつまで年を〔こそ〕つ〔め〕
藤原経衡集 けふよりは枝〔こそ〕たわ〔め〕‖菊の葉に夕露しげくおくにや有らん

第卅八段

〔る〕右　〔れ〕左

（右）

は	も	徒	ぞ

後一 いづこ共春のひかりはわかなくにまだみよしのゝ山〔は〕雪ふ〔る〕
後拾十五 此ごろのよはの寐覺〔は〕思ひや〔る〕‖いかなる鴛か霜はらふらん
〔る〕
後九 夕ぐれはまつに〔も〕かゝ〔る〕‖白露のおくる朝やきえははつらん
古十七 なにはがたしほみちくらしあま衣たみのゝ嶋にたづなき渡〔る〕
万十五 おきべよりふな人のぼ〔る〕‖よびよせていざ告やらん旅のいほりを
古十七 こきちらす瀧のしら玉ひろひおきてよのうき時の涙に〔ぞ〕か〔る〕
同十八 つくはねのこの本どにたち〔ぞ〕よ〔る〕‖春のみやまの陰を戀つゝ

(左)

の	や	何	こそ

同五 霜のたて露のぬきこそよわからし‖山のにしき「の」おればかつち「る」
後三 しら雲と見えつる物をさくら花けふはちると「や」色ことにな「る」
同四 ほとゝぎすきては旅と「や」鳴わた「る」‖吾はわかれのをしき都を
古十八 難波がたうらむべきまもおもほえず「いづこ」をみつのあまとかはな「る」
同二 花ちらす風のやどりは「たれ」かし「る」‖我に敎へよゆきて恨みん
同十一 あけたてば蟬のをりはへ鳴くらしよるはほたるのもえ「こそ」わた「れ」
同十五 逢見ねばこひ「こそ」まさ「れ」‖みなせ川なにゝ深めて思ひそめけん

「ん」右　「め」左

第卌九段

これより下五段のはぬる辭に。むもじをかゝずして。皆んとのみ書るは。第卌七段の。たしかにむと唱る言と。まぎれざらしめんためにわかてるのみ也。實はむとも書べし

(右)

は	も	徒	ぞ

古八 君がゆくこしのしら山しらね共雪のまに〳〵あと「は」尋ね「ん」
同四 月草にころも「は」すら「ん」‖朝露にぬれての後はうつろひぬ共
同五 秋霧は今朝はなたちそさほ山の柞の紅葉よそにて「も」見「ん」
同 戀しくば見て「も」しのば「ん」‖もみぢばを吹ちらしつる山おろしの風
同一 山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさ「ん」
同十七 かゞみ山いざ立よりて見てゆか「ん」‖年へぬる身はおいやしぬると
後七 しづくもてよはひのぶてふ花なればちよの秋に「ぞ」陰はしげら「ん」
拾五 うごきなきいはほのはても君「ぞ」見「ん」‖をとめの袖のなでつくす迄

（左）

の	や	何	こそ

（右）

は	も	徒	ぞ	の	や

「ん」

古四 たなばたにかしつる糸のうちはへて年のを長くこひ「や」わたら「ん」

同五 うゑしうゑば秋なき時「や」さかざらん＝花こそちらめ根さへかれめや

同十九 なにはなるながらの橋もつくるなり今はわが身を「なに」にたとへ「ん」

同十七 うれしきを「なに」につゝま「ん」＝唐衣たもとゆたかにたてといはましを

同九 夕月夜おぼつかなきを玉くしげ二見の浦はあけて「こそ」み「め」

同十五 吉野川よしや人「こそ」つらから「め」＝早くいひてしことはわすれじ

第四十段

「らん」右　「らめ」左

古五 霧立て鴈ぞなくなる片岡のあしたの原「は」もみぢしぬ「らん」

拾一 櫻色に我身「は」深くなりぬ「らん」＝心にしみて花をゝしめば

後十四 わが戀し君があたりをはなれねばふるしら雪「も」空にきゆ「らん」

拾七 みよし野「も」わかなつむ「らん」＝まきむくの檜原かすみて日數へぬれば

後七 思ひ出てとふにはあらじ＝秋はつる色のかぎりを見するなる「らん」

後拾四 いとゞしく露けかる「らん」＝たなばたのねぬよにあへる天の羽衣

古七 春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふこゝろは神「ぞ」しる「らん」

後十五 蓮葉のはひに「ぞ」人は思ふ「らん」＝よにはこひぢの中におひつゝ

大和物語 山里に我をとゞめて別れ路「の」雪のまに〳〵深くなる「らん」

古一 袖ひぢてむすびし水の氷れるを春たつけふの風「や」とく「らん」

（左）

	何	こそ

同四 鳴わたる鴈のなみだ〔や〕おちつ〔らん〕＝物思ふ宿の萩の上の露

四 をみなべし秋の野風にうちなびき心ひとつを〔たれ〕によす〔らん〕

同二 春がすみ〔なに〕かくす〔らん〕＝櫻花ちるまをだにも見るべき物を

同十七 大原やをしほの山もけふ〔こそ〕は神代の事も思ひいづ〔らめ〕

同十三 あさみ〔こそ〕袖はひつ〔らめ〕＝涙川身さへながるときかば頼まん

〔けん〕右　〔けめ〕左

第四十一段

（右）

は	も	徒	ぞ	の	や	何

新十七寂慶 あれはてゝ風もさはらぬ苔のいほに我はなく共露〔は〕もり〔けん〕

新拾二宜秋門院丹後 花ゆゑにあかぬわかれ〔は〕ならひ〔けん〕＝思ひしらずもかへる春かな

新十八 あはれとてはぐゝみたてしいにしへは世をそむけと〔も〕思はざり〔けん〕

源氏柏木 なき人〔も〕おもはざり〔けん〕＝うちすてゝ夕の霞君きたれとは

古十五 よそにのみきかまし物を音羽川渡るとなしにみなれそめ〔けん〕

月清集 うの花をおのが月夜とおもひ〔けん〕＝こゑもぐもらぬ郭公かな

千五百番 君がへん千代のためと〔ぞ〕小松原をしほの山もいはひそめ〔けん〕

拾九 あしからじよからんとて〔ぞ〕別れ〔けん〕＝なにか難波の浦はすみうき

万十七 御園生の百木の梅のちる花〔の〕あめにとびあがり雪と降〔けん〕

後十七 たらちめはかゝれとてしもうばたまのわが黒髪はなでず〔や〕有〔けん〕

古三 夏山に戀しき人〔や〕入に〔けん〕＝こゑふりたてゝなく郭公

同十二 東路のさやの中山なかなかに〔なに〕しか人をおもひそめ〔けん〕

(左)

こそ	

(右)

は	も	徒	ぞ	の	や	何

同十一 なみだ川〔なに〕みなかみをたづね〔けん〕＝物思ふ時のわが身なりけり
後十一 から衣たつを〻しみし心〔こそ〕二むら山の關となり〔けめ〕
古十四 あふまでの形見さて〔こそ〕とゞめ〔けめ〕＝涙にうかぶもくづなりけり

第四十二段

〔なん〕右　〔なめ〕左

古十七 かたちこそみ山がくれの朽木なれ＝こゝろ〔は〕花になさばなり〔なん〕
同十八 いざこゝに我世〔は〕へ〔なん〕＝菅原や伏見の里のあれまくもをし
同廿 君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波〔も〕こえ〔なん〕
同十八 いざ櫻われ〔も〕ちり〔なん〕＝ひとさかりありなば人にうきめ見えなん
同十一 人しれず思へばくるしくれなゐの末つむ花のいろにいで〔なん〕
同十八 あし引の山のまに〱かくれ〔なん〕＝うきよの中はあるかひもなし
〔なん〕
新千十四小馬命婦 戀しくば都のまつにうぐひすの鳴て〔ぞ〕き〔なん〕＝花はちる共
新十五 あはれなりうたゝねにのみ見し夢〔の〕長き思ひにむすほゝれ〔なん〕
古五 立田川紅葉みだれてながるめり渡らば錦中〔や〕たえ〔なん〕
後六 秋の野によるも〔や〕ね〔なん〕＝女郎花はなの名をのみ思ひかけつゝ
後拾十三 こぬもうくくるも苦しき青つゞら〔いか〕なる方に思ひたえ〔なん〕
拾十五 〔いづ〕かたにゆきかくれ〔なん〕＝世中に身のあればこそ人もつらけれ

(左)	(右)							(左)
こそ	は	も	徒	ぞ	の	や	何	こそ

古十九 よのなかのうきたびごとに身をなげば深き谷〔こそ〕淺くなり〔なめ〕

同十四 あがて〔こそ〕思はん中ははなれ〔なめ〕＝そをだに後のわすれがたみに

〔てん〕右　〔てめ〕左

第四十三段

後十三 深みどり染けん松のえにしあらばうすき袖にも波〔は〕よせ〔てん〕

古十四 頼めこし言の葉今〔は〕かへし〔てん〕＝わがみふるればおきどころなし

拾十九 ありこてもいくよかはふる＝から國のさらふすのべに身を〔も〕なげ〔てん〕

六帖 わすれずば尋ね〔も〕し〔てん〕＝三輪の山しるしに植し杉はなく共

古十八 よにふればうさこそまされみよしのゝ岩のかけ道ふみならし〔てん〕

後二 さくら花けふよく見〔てん〕＝くれ竹の一よの程にちりもこそすれ

〔てん〕

〔てん〕

古十 ありこ見て頼むぞかたきうつせみのよをばなしこ〔や〕思ひなし〔てん〕

貫之集 見てのみ〔や〕立くらし〔てん〕＝さくら花ちるをゝしむにかひしなければ

古一 春日野のこぶひの野守出て見よいま〔いく〕か有てわかなつみ〔てん〕

拾遺愚草 山ざくら心のいろを〔たれ〕見〔てん〕＝いくよの花のそこにやどらば

古一 ちりぬればこふれこしるしなき物をけふ〔こそ〕櫻をらばをり〔てめ〕

○三轉の外

是ははたらかぬ辞にて。上の四十三段の辞のごとくに。三つにも二つにも轉(うつ)るとなし。故にひも鏡の外なり。

〔まし〕

（　）

は	も	徒	ぞ	の	や	何

古一 よの中にたえて櫻のなかりせば春のこゝろ〔は〕のどけから〔まし〕

拾十六 松ならばひく人けふ〔は〕ありな〔まし〕‖袖のみどりぞかひなかりける

古二 花のど世のつねならば過してしむかしは又〔も〕かへりきな〔まし〕

同十四 逢見ずは戀しきと〔も〕なから〔まし〕‖音にぞ人をきくべかりける

〔まし〕

後拾一 思ひおくことなから〔まし〕‖庭櫻ちりての後の船出なりせば

後七 宇治山の紅葉を見ずば長月の過ゆくひをもしらず〔ぞ〕あら〔まし〕

古二 けふこずば明日は雪と〔ぞ〕ふりな〔まし〕‖消ずは有とも花と見ましや

〔まし〕

古一 春くれば鴈かへるなり白雲のみちゆきぶりにと〔や〕つて〔まし〕

後十一 あな戀しゆきて〔や〕見〔まし〕‖津の國に今も有てふ浦のはつ嶋

古一 うぐひすのたにより出るこゑなくば春くることを〔たれ〕かしら〔まし〕

後五 ほには出ぬ〔いかに〕かせ〔まし〕‖花すゝきみを秋風にすてやはてゝん

こそ‖にはまし‖と結べる例なし。但し中昔の哥に。まし‖かと結べるこれかれあり。こそ‖の部に出せり

（　）

は	も	徒	ぞ	の	や	何	こそ

〔らし〕

六帖　立田川色くれなゐに成にけり山のもみぢも今〔は〕ちる〔らし〕

古四　さよ中と夜〔は〕更ぬ〔らし〕＝鴈がねの聞ゆる空に月わたる見ゆ

新十一　春風のふくにもまさる涙かなわがみなかみ〔も〕こほりとく〔らし〕

源氏をとめ　をとめこ〔も〕神さびぬ〔らし〕＝天津袖ふるきよの友よはひへぬれば

古五　たつた川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山にしぐれふる〔らし〕

同六　みよし野の山のしら雪つもる〔らし〕＝ふるさと寒く成まさる也

同　此河にもみぢばながるおく山の雪げの水〔ぞ〕いまゝさる〔らし〕

同　ふる雪はかつ〔ぞ〕けぬ〔らし〕＝あし引の山の瀧つ瀬おとまさる也

建保四年百首定家卿　色まがふ野べのふぢなみ袖かけてみかりの人〔の〕かざしをる〔らし〕

新勅四藤敦仲　あまのがはうきつの波にひこぼしの妻むかへぶね今〔や〕こぐ〔らし〕

後拾三　きゝつる〔や〕はつねなる〔らし〕＝時鳥おいはねざめぞうれしかりける

家隆卿集　東路やとづなの橋もうちはへて〔いく〕へか雪の下にくつ〔らし〕

新千六百和哥合　はつ時雨ふるの山里〔いか〕な〔らし〕＝すむ人さへや袖のぬるらん

後五　松のねに風のしらべをまかせては立田姫〔こそ〕秋はひく〔らし〕

古十七　ぬきみだる人〔こそ〕ある〔らし〕＝しら玉のまなくもちるか袖のせばきに

はも徒ぞのや何こそ。いづれの結びにもなるは。らしのみにして。他の辞には例なきとなり。

〔つゝ〕

（　）

は	も	徒	の

古一 梅がえに來る鶯春かけてなけ共いまだ雪〔は〕ふり〔つゝ〕

後八 ふるさとの雪は花とぞ降つもる‖ながむる我〔も〕おもひきえ〔つゝ〕

古四 やどりせし人のかたみか‖ふぢばかまわすられがたきかにゝほひ〔つゝ〕

同十三 花ずゝきほに出てこひば名をゝしみ下ゆふひも〔の〕むすぼゝれ〔つゝ〕

拾十六 うめの花春よりさきにさきしかど見る人まれに雪〔の〕降〔つゝ〕

つゝの上は。右の如くはもの徒のなり。ぞや何こそとかゝりては。つゝと結ぶ例なし。又つゝはなかばにては切れざる故に。なかばにて結べる哥なし。

右はいづれも下に意をふくめて結ぶつゝ也。此外にてに似たるつゝは。切れざる辞なれば別也。それは六の卷のつゝの部に出せり。

（　）

は	も	徒	の

〔かな〕

拾廿 うきながら消せぬものは身なりけりうらやましき〔は〕水の沫〔かな〕

後十四 しら雪のけさ〔は〕つもれる思ひ〔かな〕‖あはでふる夜の程もへなくに

古一 をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなく〔も〕よぶこ鳥〔かな〕

同四 をみなべしうしろめたく〔も〕見ゆる〔かな〕‖あれたる宿に獨たてれば

後十一 音羽山おとにきゝつゝあふ坂の關のこなたに年をふる〔かな〕

後六 たなばたに似たる物〔かな〕‖女郎花秋より外にあふときもなし

古四 まつ人にあらぬものから初鴈のけさ鳴こゑ〔の〕めづらしき〔かな〕

後十 こともかくもいふ言の葉〔の〕見えぬ〔かな〕‖いづらは露のかゝりどころは

かなの上は右の如くは‖も‖徒‖の也。ぞ‖や‖何‖こそ‖とかゝりては。かな‖とむすぶとなし。【ぞ‖といひてかな‖と結べる哥あるは。みなひがことなり。その事三の巻ぞ‖の部にいへり。】

○上の件りの段々。又これより次々にも。すべて此書の中に引出る證哥は。いづれもまづ古今集也。さては後撰拾遺より。つぎつぎ新古今まで。勅撰の集をむねとゝれり。さるはわたくしの集共などは。ふるきもなほみだりなる哥のおほきを。撰集はこよなく正しければ也。其外たらざるところは。萬葉六帖をはじめ。物語のたぐひ。家々の集などにも及べり。撰集も新勅撰よりこなたは。八代集に入れる人のふるき哥をとりて。その後の人のはをさく\/とらず。そも\/かく時をかぎれるはいかにといふに。大かた哥のさまは。八代集にてよろづそなはりて。たらはぬところしなければ。しばらくこれをかぎりとはせるなり。又よゝの撰集の中に。萬葉よりえらはれたる哥どもは。大かた耳どほき詞つきなるをば。なだらかになほすとては。中々にてにをはのとゝのへをあやまり。あるは訓の誤れるを。そのまゝにとりなどせられたるほどに。ひがとのみおほければ。すべてとらず。

○上の件段々のうちに。所々證哥の闕たるがおほきは。おのづから語のよりこぬ故に。まとになきもあるべく。又おのが考へもらせるもおほかるべければ。猶家々の集よゝの哥合百首など。ひろくこまかにもとめなば。なほこれかれと尋ねうるもありぬべし。後の人考へ出たらんまゝに。かきくはへてよ。

○古哥を引出たるかしらに。古今集なるは古。後撰は後。拾遺は拾。後拾遺は後拾。金集は金。詞花は詞。千載は千。新古今は新。新勅撰は新勅としるせり。外もこれらになずらへて知べし。又その下に數のもじをしるせるは。その巻のついで也。

詞瓊綸二之巻

留りより上へかへるてにをは

〔は〕

古八　「よそにのみこひやわたらん＝しら山のゆき見るべくもあらぬ我身〔は〕
同十二　あづさ弓[序]ひけば本すゑわがゝたに「よるこそまされ＝戀のこゝろ〔は〕
同二十　あふみより朝たちくればうねの野にたづぞ鳴なる「あけぬ＝此夜〔は〕
後十　ともかくもいふ言の葉の見えぬかな「いづらは＝露のかゝりどころ〔は〕
後拾四　「あけぬるか＝川瀬の霧のたえ〴〵にをち方人の袖の見ゆる〔は〕
拾十六　春の野にほる〳〵見れど「なかりけり＝よに所せき人のために。〔は〕
古五　「ちはやぶる神代もきかず＝立田川からくれなゐに水くゝると。〔は〕
同十八　「思ひきや＝ひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいざりせんと。〔は〕

〔ば〕

古二　「のこりなくちるぞめでたき＝さくら花有てよの中はてしうけれ〔ば〕
同六　山里は「冬ぞさびしさまさりける＝人めも草もかれぬと思へ〔ば〕
同十一　かりこもの思ひみだれてわがこふと「妹しるらめや＝人しつげず〔ば〕
同十二　「おろかなる涙ぞ袖に玉はなす＝我はせきあへず瀧つせなれ〔ば〕

此哥の意は我涙はせきあへず瀧つ瀬なればそれにくらぶれば袖に玉なすなどはおろかなるなみだぞといへる

なり

後五 秋萩を色どる風はふきぬとも「心はかれじ＝草葉ならね〔ば〕

後拾十五 「いかにせん＝山のはにだにとゞまらでこゝろの空に出ん月を〔ば〕

ましかばといふ留りには上へかへらざる格あり。三の巻のばの部に出せり。

〔も〕

拾十八 「くればとくゆきてかたらん＝あふとのとほちの里のすみうかりし〔も〕

同八 大井川河邊の松にことゝはむ、「かゝるみゆきやありし＝むかし〔も〕

後拾六 木葉ちる宿は「きゝわくことぞなき＝時雨する夜もしぐれせぬよ〔も〕

全八 「ことわりや＝おもひくらぶの山ざくらにほひまされる花をめづる〔も〕

新六 冬をあさみまだき時雨と思ひしを「たへざりけりな＝老の涙〔も〕

後十五 序あしびきの山におひたるしらかしの「しらじな＝人を朽木なりと。〔も〕

新十七 おくやまのこけの衣に「くらべ見よ＝いづれか露のおきまさると。〔も〕

同四 秋はてゝ「ものをこそ思へ＝露かゝる荻の上ふく風につけて。〔も〕

後拾十 わかれけんこゝろをくみて涙川「おもひやるかな＝こぞのけふを。〔も〕

同九 「おぼつかな、「みやこのそらやいかならん＝こよひ明石の月を見るに〔も〕

〔を〕

古一 「たれしかもとめてをりつる＝春がすみ立かくすらん山のさくら〔を〕

後十一 「これを見よ＝人もすさめぬこひすとてねを鳴虫のなれるすがた〔を〕

拾十二 「しるやきみ、「しらずばいかにつらからん‖わがかくばかりおもふこゝろ〔を〕

金七 よとゝもに玉ちるとこのすがまくら「見下せばや‖「人中に‖よ上はのけしき〔を〕

ものをといふ留りは。おほくは上へかへらず。又物をの意のをも同じ。これらは別に五の巻のをの部に出せり

〔に〕

古二 「花のいろはうつりにけりな‖いたづらに我身よにふるながめせしま〔に〕

同四 春霞かすみていにし雁がねは「今ぞなくなる‖秋霧のうへ〔に〕

同十五 それをだにおもふとゝてわがやどを「見きとないひそ‖人のきかく〔に〕

拾十二 「なき名のみたつ‖たの山の青つゞら、又くる人も見えぬところ〔に〕

此哥は。又くる人も見えぬところに。なき名のみたつといふ意なるを。くるの縁に青つゞらをいはんとて。たつたの山のといひかけたるなり

後拾十八 ねぬ、なはのねぬ名のいたく立ぬれば猶大さはの「いけらじや‖よ〔に〕

同 「こきかけつ‖ころ、もの玉は住吉の神さびにける松のこずゑ〔に〕

なくに なしに かに これらはおほくはかへらず

〔て〕

古二 「此里にたびねしぬべし‖さくら花ちりのまがひに家路忘れ〔て〕

同十七 「わがこゝろなぐさめかねつ‖さらしなやをば捨山にてる月を見〔て〕

同十一 夕暮は「雲のはたてに物ぞ思ふ‖あまつ空なる人をこふと。〔て〕

新 十八 おほかたの秋のねざめの長きよも「君をぞいのる＝身を思ふこ。〔て〕

拾 八 「をしからぬ命やさらにのびぬらん＝をはりのけぶりしむるのべに。〔て〕

金 三 「萬代に君ぞ見るべき＝たなばたの行合の空を雲のうへに。〔て〕

新 十七 「よの中をこゝろだかくもいとふかな＝ふじの烟を身のおもひに。〔て〕

古 六 たつた川「錦おりかく＝神無月しぐれの雨をたてぬきにし。〔て〕

後 十五 「なにせんにへたのみるめをおもひけむ＝おきつ玉もをかづくみにし。〔て〕

同 十八 ありときく音羽の山のほとゝぎす「何かくるらん＝なく聲はし。〔て〕

拾 二 けふ見れば「玉のうてなもなかりけり＝あやめの草のいほりのみし。〔て〕

詞 三 夕霧に「こずゑも見えず＝はつせ山入相のかねの音ばかりし。〔て〕

しての留りには。上へかへらず下に意をふくめて。いひすてたるものあり。次にあぐ

古 十五 月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつは本の身にし。〔て〕

同 うらみてもなきてもいはんかたぞなき鏡に見ゆる影ならずし。〔て〕

同 十九 われをのみ思ふといはゞあるべきをいでやこゝろは大ぬさにし。にして万〔て〕

新勅 一四 万 十一 いせのあまの朝な夕なにかづくてふあはびの貝のかたおもひし。〔て〕

玉 四 野宮左大臣 なにとなく秋にしなれば彦星のあふよをたれもまつこゝちし。〔て〕

風 十六 式子内親王 わが宿はつま木こりゆく山がつのしば〳〵通ふ跡ばかりし。〔て〕

〔で〕

古 十四 「いにしへになほ立かへるこゝろかな＝こひしきどに物わすれせ〔で〕

新一　「ひとりのみながめてちりぬ＝梅花しるばかりなる人はとひこ〔て〕

　又上へはかへらず意をふくめて＝でと結びたるは

千十四　わかれては形見なりけり玉づさをなぐさむばかりかきもおかせ〔で〕

〔こ〕

古一　うぐひすの笠にぬふてふうめの花「をりてかざゝん＝老かくるや。〔こ〕

同九　名にしおはゞ「いざことゝはん＝みやこ鳥わが思ふ人はありやなしや。〔こ〕

同十七　かゞみ山いざ立よりて「見てゆかむ＝年へぬる身はおいやしぬる〔こ〕

拾六　たよりあらば「いかでみやこへつげやらん＝けふ白川の關はこえぬ〔こ〕

同十八　つらからは「人にかたらん＝しきたへの枕かはして一夜ねにき〔こ〕

後拾一　ふるさとへ行人あらば「ことつてん＝けふうぐひすの初音きゝつ〔こ〕

〔ご〕

古四　「月見ればちゞにものこそかなしけれ＝わがみひとつの秋にはあらね〔ご〕

後拾二　としをへて「花に心をくだく哉＝をしむにとまる春はなけれ〔ご〕

〔ごも〕

後十五　濱千鳥「かひなかりけり＝つれもなき人のあたりはなきわたれ〔ごも〕

新十八　「世をすつるこゝろは猶ぞなかりける＝うきをうしとは思ひしれ〔ごも〕

〔こも〕

古四 「萩が花ちるらん小野の露霜にぬれてをゆかん＝さよはふく〔とも〕

同廿 「君が代はかぎりもあらじ＝長濱の眞砂のかずはよみつくす〔とも〕

〔べく〕

古八 「山風にさくら吹まきみだれなん＝花のまぎれに君とまる〔べく〕

同六 花のいろは雪にまじりて見えず共「かをだに、ほへ＝人のしる〔べく〕

〔まで〕

拾八 「わするなよ＝ほどは雲ゐになりぬともそら行月のめぐりあふ〔まで〕

同十一 忍ぶれど「色に出にけり＝わがこひは物や思ふと人のとふ〔まで〕

又上へはかへらず下に意をふくめてまでと結びたるは

古七 わが君は千代に八千代にさゞれ石のいはほと成て苔のむす〔まで〕

千六 冬來ては一よ二よを玉ざゝの葉分の霜のところせき〔まで〕

〔ながら〕

古五 「ふみ分てさらにやとはん＝もみぢばのふりかくしてし道と見〔ながら〕

千十九 「おどろかぬわがこゝろこそうかりけれ＝はかなき世をば夢と見〔ながら〕

〔ものから〕

古三 ほとゝぎすながなく里のあまたあれば「猶うとまれぬ＝おもふ〔ものから〕

同十五 あまぐもの「よそにも人のなりゆくか＝さすがにめにはみゆる〔ものから〕

〔ものゆゑ〕

同四「秋ならであふことかたき女郎花＝天の川原におひぬ。〔ものゆゑ〕

同十一 戀すれば「我身は影と成にけり＝さりとて人にそはぬ。〔ものゆゑ〕

〔まに〳〵〕

同八 わかれをば「山のさくらにまかせてん＝とめむとめじは花の〔まに〳〵〕

同九 此たびはぬさも「とりあへず手向＝山、紅葉のにしき神の〔まに〳〵〕

猶上へかへる留りの格は右の條々の外にもおほし准へしるべし

○すべててにをはの辭にて留りて。上へかへる意の哥は。いづれもみなその留りのてにをはの。かならず上の詞の切る所迄へかゝるやうによむこと也。右にあげたる哥共を考ふべし。皆「の点より＝のしるし迄へかへれり。＝は語の切るゝところのしるし也。然るに後世には此格をしらで。留りのてにをはの。或は初句の詞などへのみかゝりて。其詞の切る所迄へはかゝらぬ哥のおほきは。みなひがこと也。はじめの詞へはかゝらぬも難にあらず。たゞ切るゝ所まではかゝらざれば。一首の趣とゝのはずとしるべし。

重(かさ)なるてにをはの格

〔は〕〔も〕と〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕〔こそ〕と重なる事つねにおほし。そのとき〔は〕〔も〕は輕(かろ)く。〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕〔こそ〕は重(おも)き故に。重きかたの格によりて結ぶ也。

古四 おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の聲きくとき〔ぞ〕秋は°かな〔しき〕

同二 さくら花とくちりぬともおもほえず人のこゝろ〔ぞ〕風も°吹あへ〔ぬ〕

後拾一 逢坂の關をや春もこえつらんおとはの山〔の〕けさは。かす〔める〕
古六 みよし野の山のしら雪ふみ分て入にし人〔の〕おとづれも。せ〔ぬ〕
同二 こまなべていざ見にゆかん故郷は雪とのみ〔こそ〕花は。ちる〔らめ〕
同十五 人をおもふこゝろ木葉にあらば〔こそ〕風のまに〳〵ちりも。亂れ〔め〕
〔や〕〔何〕なども件の哥どもになずらへて心得べし
〔ぞ〕〔や〕〔何〕〔こそ〕はたがひに重なる例なし【此中にやと何とは重ねいふ一つの格有りそれは四の巻やの部に見ゆ】
〔の〕はやゝ輕き故に〔ぞ〕〔や〕〔何〕〔こそ〕と重なる事つね也〔こそ〕に重なるときは〔こそ〕の格に結ぶ
後十一 津の國のなにはたゝまくをしみ〔こそ〕すくもたく火の下にこが〔るれ〕
などの如し。なほ三の巻のの。部にくはしくいへり

○二重にとゝのふるてにをは

〔ぞ〕と〔や〕と

後十一 しのゝめにあかでわかれし袂を〔ぞ〕露〔や〕わけ〔し〕と。人のとが〔むる〕

〔ぞ〕と〔何〕と

拾六 いのちを〔ぞ〕〔いか〕なら〔ん〕と。は思ひこ〔し〕いきて分るゝよにこそ有けれ

〔ぞ〕と〔こそ〕と

新葉六 後村上院 影こほる霜夜の月〔ぞ〕秋をおきて時〔こそ〕あ〔れ〕と。さやけかゝり〔ける〕

〔や〕と〔何〕と

新 十八 うけがたき人のすがたにうかび出てこりず〔や〕（たれ）も。又しづむ〔べき〕

〔こそ〕と〔や〕と

中務集 花を〔こそ〕人（や）を（る）とて。とがめ〔しか〕數ならぬ身をいかにかはせん

右の哥共二重にと、のへたるてにをはなると〔　〕のしるしを見てさとるべし

榮花物語 御裳着 ふるさとを出にし後は月影〔ぞ〕むかし（も）見（き）と。思ひやら〔るゝ〕

これも同じく二重なり

變格

これは上にぞ‖の‖や‖何‖等の辭をおかずして。ぬる‖つる‖なる‖ける‖せる‖るゝ‖ぬ不‖し過去などゝ結ひて。定れる格にはづれながら。てにをは不調とは聞えぬ哥共を。今かりに變格となづけて。こゝに出せり。

〔ぬる〕

後 一 ふる雪のみのしろごろもうちきつゝ春きにけりとおどろかれ〔ぬる〕

同 十六 數ならぬ身を重荷にてよし野山高きなげきを思ひこり〔ぬる〕

拾 十一 みなといづるあまのをぶねのいかりなはくるしき物と戀をしり〔ぬる〕

同 十六 たにの戸をとぢやはてつる‖うぐひすのまつに音せで春も。暮〔ぬる〕

千 三 とこ夏の花もわすれて秋風をまつの陰にてけふは。くれ〔ぬる〕

同 八 宮木ひくあづさの杣をかき分て難波のうらをとほざかり〔ぬる〕
新 八 有しよにしばしも見ではなかりしをあはれとばかりいひてやみ〔ぬる〕
同 十一 あまのかるみるめを波にまがへつゝ名草の濱を尋ねわび〔ぬる〕
同 十二 みるめこそ入ぬるいその草ならめ袖さへ波の下にくち〔ぬる〕
同 十八 うきしづみこむよはさてもいかにぞと心にとひてこたへかね〔ぬる〕
同 くらゐやまあとをたづねてのぼれ共子を思ふ道に猶まよひ〔ぬる〕
同 うき身には山田のおしねおしこめてよをひたすらに恨みわび〔ぬる〕

〔つる〕

拾 十五 かしまなるつくまの神のつくづくと我身ひとつに戀をつみ〔つる〕
後拾 四 わが宿に花をのこさずうつし植て鹿のねきかぬ野べとなし〔つる〕
同 廿 八重菊に蓮の露をおきそへて九品までうつろはし〔つる〕
金 九 家の風ふかぬものゆゑはづかしの杜の言の葉ちらしはて〔つる〕
千 五 さゝなみやひらの高根の山おろしに紅葉を海の物となし〔つる〕
同 六 やかたをのましろのたかを引すゑてうたのとだちをかり暮し〔つる〕
新 九 はるばると君がわくべきしら波をあやしやとまる袖にかけ〔つる〕

〔なる〕

古 十五 あひにあひて物おもふころのわが袖にやどる月さへぬるゝがほ〔なる〕
玉 十 定家卿 こひわびて我とながむる夕暮もなるれば人のかたみがほ〔なる〕

〔ける〕

後拾 八　春は花秋は月にと契りつゝけふをわかれとおもはざり〔ける〕

新 十七　須磨の關夢をとほさぬ浪の音をおもひもよらで宿をかり〔ける〕

續拾十三 定家卿　はじめよりあふはわかれと聞ながらあかつきしらで人をこひ〔ける〕

〔せる〕

後 十九　ひぐらしの山路をくらみさよ更てこの末どに紅葉てら〔せる〕

〔るゝ〕

同 八　あふとやなみだの玉のをなるらん＝しばし絕れば落てみだ〔るゝ〕

新 五　秋のよははや長月になりにけりことわりなりや＝寐覺せら〔るゝ〕

〔ぬ〕

源氏 をとめ　いにしへを吹つたへたる笛竹にさへづる鳥の音さへかはら〔ぬ〕

新 十五　うめの花香をのみ袖にとゞめ置てわが思ふ人はおとづれもせ〔ぬ〕

同 十七　春の日のながらの濱に船とめていつれか橋ととへどこたへ〔ぬ〕

上件の哥どもいづれも皆。終りの句に歎息の意ありて。留りの下に。かな‖又よ‖などいふ辞を加へて聞く意也。この故に定まりのごとく。ぬ‖つ‖なり‖けり‖せり‖る‖ず‖などゝ結びては。かへりてよろしからず。よく味ひ見るべし。

源氏 藤はかま　いもせ山ふかき道をば尋ねずてをだえの橋にふみまどひ〔ける〕

此哥につゞきたる詞に。「よこうらむるも云々とあり。「ふみまどひけるよ‖といふ意なれば也。是にていづれ

も准へしるべし。

後拾 三 いかならんこよひの雨にとこ夏のけさだに露のおもげなり〔つる〕

此哥は上にのとあれば變格にはあらざれ共つるの下へものをといふ辭をくはへて見る意也

新後拾八 津守國基 「たなばたは思ひしらなん＝あまの川いそぐ渡りに船をかし〔つる〕

後拾 一 「よゝふとも我わすれめや＝さくら花こけの袂に散てかゝり〔し〕

此二首は留りの下へをといふ辭を加へて上へかへる意也

○すべて變格は。右のごとくなる味のある事にて。その味を心によくさとりえたる堪能のうへにてだに。いと稀なることにて。八代集の中にもわづかにて。三十首にみたず。〔八代集の程の作者には。右の變格のたぐひによめる哥おほけれ共。撰集には入こといと〳〵まれなり〕これをもてみだりにはよむまじきことを知べし。然るに後世には。てにをはの定まれる格あることをだにしらねば。まして右の味などをば。つゆもわきまへずして。此變格のたぐひなるをみだりによむことなれり。心あらん人は思ふべきことぞ。

○又一くさ

後 十一 戀しきもおもひこめつゝ有物を人にしらるゝなみだ〔なに〕〔なり〕

同 十二 おもひ出て音づれしける山彦のこたへにこりぬこゝろ〔なに〕〔なり〕

かげろふの日記 さだめなくきえかへりつる露よりも空だのめする君は〔なに〕〔なり〕

同 おく山の思ひやりだにかなしきにまたあま雲のかゝる〔なに〕〔なり〕

うつほ 國讓 一よだに久してふなるあしたづのまに〳〵見ゆる千年〔なに〕〔なり〕

同 からころもたちならしてし百敷の袖こほりつるこよひ〔なに〕〔なり〕

同 たづのむら鳥 つくはねの峯までかゝる白雲を君しもよそに見るは〔なに〕〔なり〕

後十一　なみだ川ながすねざめもある物をはらふばかりの露や○〔なに〕〔なり〕（るイ）

拾十七 貫之　梅もみな春ちかしとてさくものをまつ時もなき我や○〔なに〕〔なり〕（るイ）

同十八　からころもたつより落る水ならで我袖ぬらすものや○〔なに〕〔なり〕（るイ）

後拾十一　うれしきをわするゝ人も有物をつらきをこふる我や○〔なに〕〔なり〕（るイ）

同　須磨のあまの浦こぐ船のあともなく見ぬ人戀る我や○〔なに〕〔なり〕（るイ）

詞十　雲のうへは月こそさやにさえ渡れまたとゞこほる物や○〔なに〕〔なり〕（るイ）

六帖　くもゝなくなぎたる朝のてる日にも思はれまさる我や○〔なに〕〔なり〕

同　つねよりも秋のゆふべのわびしきはいとゞ嵐の風や○〔なに〕〔なり〕

蜻蛉日記　いふよりもきくぞかなしき敷島のよにふるさとの人や○〔なに〕〔なり〕

うつほ 祭の使　夕さればまろねする身のわびしきに鳴ひぐらしの聲や○〔なに〕〔なり〕

同 國ゆづり　ありとのみ見ゆるねざめのわびしきに獨あるころの夢や○〔なに〕〔なり〕

風雅廿 長家卿　いろかへぬ松も〔なに〕〔なり〕＝萬代にときはにゝほふ花もさければ

六帖 扇　よの人のいみけるものをわがためになしといはぬは〔たれ〕がうき〔なり〕

源氏 わかな下　おきてゆく空もしられぬ明ぐれに〔いづく〕の露のかゝるそで〔なり〕

後七　君こふるなみだにぬるゝわが袖と秋の紅葉と〔いづれ〕まさ〔れり〕

同九　くや〳〵とまつ夕暮と今はとてかへるあしたと〔いづれ〕まさ〔れり〕（るイ）

後拾十五 かげろふ　くもりよの月とわが身の行末と（の）おぼつかなさは（と）〔いづれ〕まさ〔れり〕（るイ）

詞三　たなばたのまちつる程のくるしさとあかぬわかれと〔いづれ〕まさ〔れり〕（るイ）

躬恒集　くらべ見んわがころもでと秋萩の花のいろとは〔いづれ〕まさ〔れり〕

好忠集　夏はぎの麻のをがらとあだ人の心がろさと（いづれ）まさ（れり）

赤染集　秋はて丶いまはさかりのもみぢばとうつろふ菊と（いづれ）まさ（れり）

菅家万葉下　をとめらがひかげのうへにふる雪は花のまがふに（いづれ）たが（へり）

土左日記　我髪の雪といそべの白波と（いづれ）まさ（れり）＝おきつしら波

拾十四　八百日ゆく濱の眞砂とわが戀と（いづれ）まさ（れり）＝おきつ嶋守

右の件の哥共。なにいづれなど丶いへれば。必なるれるなど、結ぶべき定まりなるを。るとはでりと結べるは。いと〳〵めづらしき結びなり。さればいづれの本にも皆ると書る哥もま丶あり。又一本にはり。一本にはるなるもあり。これを思へば。るとあるが正しきか共いふべけれど。ると書る哥は猶すくなくてりなるがおほく。又菅家万葉なるは。たしかに眞字にて里の字をしも書たれば。るとあるは中々にひがとにして。【右の哥どもを考へわたすに。るとも書るはみな撰集にて。撰集ならぬは。みなりとのみ書り。これをもて思ふに。撰集はよ丶の人さかしらを加へて。後にるに改めつるものにして。外の集は。人の手を入れざる故に。なか〳〵にもとのま丶にて傳はれるなり。】りなるとうたがひなし。一つの變格也。【此格は。右の中の後撰集と源氏物語との哥をのみ見て。世の人のうたがふ事なる故に。殊に證哥をおほく引出せり。】又

新千十四賀方　うの花のかきねがくれのほと丶ぎすわが忍びねと（いづれ）ほどへ（ぬ）

五社百首俊成卿　おちたきつ瀧のうちわの岩の苔わが袖のうへに（いづれ）つゆけ（し）

これらもいづれといへれば。「程へぬる「露けきとこそいふべきを。ぬと結び。しと結べるは。上の件と同じ格也。

○又一くさ

○玉のを二

金二　夏のよの月まつほどの手ずさびに岩もる清水〔いく〕むすびし〔つ〕

新五　衣うつ音はまくらにすがはらや伏見の夢を〔いく〕よのこし〔つ〕

同九　みやこをば秋と共にぞ立そめしよどの川霧〔いく〕よへだて〔つ〕

新勅一 式子内親王　高砂の尾上のさくら尋ぬればみやこのにしき〔いく〕へかすみ〔ぬ〕

金四　淡路しまかよふ千鳥の鳴聲に〔いく〕よ寐覺〔ぬ〕＝須磨の關守

新四　たなばたのと渡る船の梶の葉に〔いく〕秋かき〔つ〕＝露の玉づさ

同七　年へたる宇治のはし守こと〵はん〔いく〕よになり〔ぬ〕＝水のみなかみ

狭衣　思ふことなることもなしに〔いく〕かへり恨みわたり〔ぬ〕＝かもの川波

玄々集　船出して〔いく〕かになり〔ぬ〕＝故郷は山見ゆばかりけふぞきにける

新二　〔いく〕とせの春にこゝろをつくしき〔ぬ〕＝あはれと思へみよしの〵花

同十四　〔いく〕めぐり空ゆく月もへだてき〔ぬ〕＝契りし中はよそのうき雲

右の哥どもいくといへれば。つるぬると結ぶべき格なるを。つとむすび。ぬと結べると。上のなりれりと同じさまの變格なり。此格は後世にもおほくよみあへり。又

元眞集　さきだちて萩の下葉も色づきぬおくれて秋は〔いづく〕まで來(き)〔ぬ〕

これも同じ格なり

本哥にゆづる格

これはや何等のてにをはをおきて。其結び辞をば。本哥にゆづりてはぶける格也。

新一　うめの花たが袖ふれしにほひぞ春〔や〕むかしの。月にとはゞや

同 十二 面影のかすめる月ぞやどりける春〔や〕むかしの。そでのなみだに

此二首は「月やあらぬ春やむかしのはるならぬわが身ひとつはもとの身にしてといふ本哥の一首の意を「春やむかしといふ詞にこめてのと受たりのもじにてその意あらはれたりさてやの結びをも本哥にゆづりてはぶけるものなり

同 十八 君が代にあはずば〔なに〕を玉の緒の。長くさまではをしまれじみを

これは古今戀一「かた糸をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉のをにせんといふを本哥にて。君が代にあはずば何を玉の緒にせんその玉の緒の長くとまでは惜まるまじき身なる物をといふ意也。是もなにの結びをば本哥にゆづりて本哥の詞の意をふくめてのと受たるも上に同じ

續古十四 家隆卿 おのづから〔いかに〕ねしよの。夢絶てつらき人こそ月は見せけれ

これも古今戀一「よひ〳〵に枕さだめんかたもなしいかにねしよが夢に見えけんといふを本哥にて第二の句にその一首の意をこめていかにの結びをも本哥にゆづりてのと受たるみな上の哥共とおなじ

續拾二 定家卿 しひてなほ袖ぬらせとや藤の花春は〔いく〕かの。雨にさくらん

これは古今春下「ぬれつゝぞしひてをりつる年の内に春はいくかもあらじと思へばといふを本哥にて。其下句の意を「春はいくかといふ詞にこめて。のと受たり。本哥は「いくかもといへるもにて。いくのてにをはとゝのへるを。今は本哥にゆづりてもといはざれども。いくかもあらじと思ふといふ意をふくめたり。さてとぢめのらんは第二の句のやの結びなり。いくの結びにはあらず。よくせずばまぎれぬべし

新續古十三 順徳院 いのち〔やは〕あだの大野の草まくらはかなき夢も惜からぬ身を

これは古今戀二「いのちやはなにぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくにといふを本哥にてよませ給へり「なにぞは露のあだ物をといふ詞をば本哥にゆづりて其意をふくめてあだの大野へいひかけたまへるなり

〇右の如く本哥にゆづれる格は。その本哥をしらでは。てにをは心得がたかるべく。又今おぼろけの人のよむべき物にもあらず。よくせずば心得がたきえせ哥になりなんかし。

てにをは不調哥【廿一代集の内をむねとあぐ。撰集の外はことごとくはあぐるにたへざる故に。おほくはもらせり。】

〔ゝき〕

古十 ほとゝぎす峯の雲にやまじりにし＝ありとはきけど見るよしも。な〔き〕

上にぞのや何等のてにをはなくしてきと留れる哥。八代集の中には此一首のみなり

新勅十八 物どにわすれがたみをとゞめおきて涙のたゆむときのまも。な〔き〕

玉二 いかにせん見にもやくると山ざくらまたるゝ花も。散はてぬへ〔き〕

同十 ちぎりしもよもと頼まぬ此ゆふべまつとはなしにしづ心な〔き〕

同十二 人やかはるわがこゝろにや頼みまさるはかなきを。もたゞつねにう〔き〕

同十七 さきだつもとまるも同じ夢のよによそに驚く身さへはかな〔き〕

風二 何となき草の花さく野べの春空にひばりのこゑも。のどけ〔き〕

同十三 かはりたつ人の心の色やなに＝うらみんとすればそのふしとな〔き〕

同十七 人の世は久しといふも一ときの夢のうちにてさも程もな。〔き〕

〔ゝしき〕

新六 冬の來て山もあらはにこのはふり残る松さへ峯にさびしき

此哥は新古今の中の哥くづ也といへるさたあり。それは兼好がつれ〴〵草に。上の句のわろき故也とやうにいへり。誠に上の句もよろしくはあらねど。もしくはてにをはのとゝのはざる故にても有ぬべし。上にぞのや何等の辞なくて。しきと留れるは。八代集の中には。此一首のみ也。その後の十三代集にも。玉葉風雅にのみ有て。外の集には一首も見えず。

玉三 夏山の岩が根きよく水落てあたりの草のいろもすゞしき

同 吹風の竹になる夜は秋きぬとおどろくばかり袖にすゞしき

同四 ふりまさる雨夜のね屋のきり〴〵すたえ〴〵になる聲もさびしき

同十四 あまをとめ通ふ雲路はかはらねどわが立なれし世のみこひしき

風四 ほたるとぶかた山陰の夕やみは秋よりさきにかねてすゞしき

同六 夕日うつる柳のすゑの秋風にそなたの鴈のこゑもさびしき

同十三 人こそあれ我さへしひて忘れなばなごりなからんそれもかなしき

同 おもふ人こよひの月をいかに見るやつねにしもあらぬ色にかなしき

同十六 雲しづむ谷の軒端の雨のくれきゝなれぬ鳥の聲もさびしき

同十七 はるけずてさてやと思ふ恨みのみ深きなげきにそへてかなしき

おほよそ上にぞのや何等の辞なくして。きともしきとも結びたる哥の。廿一代集の中に載れるは右の如し。かくて右の廿首の内にも。玉葉風雅にのみおほくて。其他の集にはたゞ三首ならではなきを以て。此格のよろしからぬ事をさとるべし。【撰集の外には古くは重之集に「千年をばひなにてのみや過しけんこづるの池といひて久しき】玉葉風雅にはなほ件の哥どもの外にもあれど。さのみはうるさくてはぶきつ。すべて

此二つの集には。えもいはずくだ〳〵しくいやしき哥のおほかる中に。てにをはのことのはざるもいとおほきと。これにても知べし。然るに後世の人。此玉葉風雅をば風躰わろしとつねにいひながら。みづからよみいづる哥に。此二ッの集のごとく。ぞのや何こかゝらずして。き共しきこもむすぶがおほきはいかにぞや。てにをはを正さん人は。此格ゆめ〳〵よむべからず。調べことのはぬ琴の音をきくが如くにて。いと聞ぐるしくそゞろかなる物なりかし。

〔し〕

新勅十六　おいぬれば今年ばかりと思ひこ〔し〕＝又秋の夜の月を見るかな

同十四　しらざり〔し〕＝深きうらみはうつりはつる人にて人の見えけるものを

新拾十九　しらざり〔し〕＝心づくしのいにしへを身の思ひ出としのぶべしとは

右三首上にぞのや何等の辞なければしもじかなはず。はじめの哥は「こしにとにもじあらざればたらず。後二首はかならず「しらざりきと有べき格なり

〔る〕

拾十八　かきつ〔くる〕＝こゝろ見えなる跡なれど見ても忍ばん人やあるとて

新四　人よりもこゝろのかぎりながめ〔つる〕＝月はたれ共わかじ物ゆゑ

同十七　よの中のうき度ごとになぐさ〔むる〕＝よしいく程のなからましかば

右三首上にぞのや何等の辞なければ。くるつるむるといへるとゝのはず。拾遺の哥は「かきつけつと有べく。新古今のは「ながめてきと有てよろし

〔ぞ〕

六帖　春はまづ東路より〔ぞ〕若草のことのはつてよむさし野の風

躬恒集　このまより風にまがひてふる雪も春くといへば花かと〔ぞ〕見ゆ

清正集　夏のよも涼しかりける山川〔ぞ〕波の底にや。秋はやどれる

源氏末摘花　からころも君かこゝろのつらければ袂はかく〔ぞ〕そほぢつゝのみ

拾遺愚草　朝霜の花野のすゝきおきてゆく遠方人の袖かと〔ぞ〕見ゆ

件の哥どもいづれもぞ‖もじとゝのはず

續古十二　い。かさまにねてあかせとてまつ人のこぬだに有を秋風〔ぞ〕ふく

此哥「いかさまにといひて切るゝ所なくてぞといへるはかなはず「秋風の‖とあらためてよろし

風七　山をこえ水を渡りてしたふとも しらば〔ぞ〕けふの秋のわかれぢ

新拾十四　後瀬山のちもあはんと思ふに〔ぞ〕しぬべき物をけうまでもあれ。

此哥は萬葉四に在て。三の句念社(オモヘコソ)とある故に。れと留れり。然るを「おもへこそといふ詞。後世には耳どほきによりて。「思ふにぞと直されたる故に。てにをはとゝのはざる也。又萬葉今の本に「おもふこそと訓るも誤なり。おもへばこそといふ意なれば。「おもへこそと訓べき古哥の例也。そも〳〵代々の撰集に。万葉よりとられたる哥共は。皆かくのごとき誤有て。こと〳〵くに論ずるにたへざれば。みなもらしてこゝにはあげず。此哥をもてなずらへしるべし。

新續古十七　軒端なる木葉のいろはおそけれど秋や。と山の風〔ぞ〕身にしむ

これは「秋やときといふとを外山へいひかけたるなればぞもい‖たくひがとゝは聞えざれ共猶やに重なれるは宜しからず「風の。みにしむとぞあらまほしき

「や」

拾 十一　われこそ「や」見ぬ人こふるやまひすれあふひならではやむ薬なし

同 十四　しら波のうちしきりつゝこよひさへいかてかひとりぬるとか「や」きみ

後拾 九　これ「や」この月見るたびに思ひやるをばすて山のふもとなりけ。り

いせ物語　これ「や」このわれにあふみをのがれつゝ年月ふれどまさりがほなき（眞字本ハ）

「これやこのといふ例はおほかる中に右の二首はやの結びとゝのはず。すべて「これやこのといふ時も。やの結びはかならずつねのどし。四の巻やの部に考ふべし

貫之集　たかさごの峯の松さ「や」よの中をまもる人さ「や」我はなりなん

同　たちねさ「や」いひ「や」やらまし＝白雲のさふともなく宿にゐるらん

此二首はやもじ二つかさなれるいかゞ

いせ集　故郷はたゞれきかめさ（○んこかトアルベシ）「や」うぐひすの花よりさきに春をつぐらん

新勅 八　有栖川同じながれはかはらねご見し「や」昔の影ぞわすれぬ

新勅 五　身を秋のわかよやいたくふけぬらん月をのみ「や」はまつさなけれご

右の二首はやもじなくてあらまほし

同 十六　けふより「や」おのが春べさしら雪のふるさしかけて咲るうめがゝ

これは「けふよりはおのが春とや」と有べきなやもじのおきごころたがへり此誤りつねによくあると也よく心をつくべし

拾後 一　かすみたち雪もきえぬ「や」みよし野のみかきが原にわかなつみてん

續拾 五　立田姫今「や」こずゑのからにしきおりはへ秋のいろぞしくるゝ

此二首やもじなくてあらまほし

新続古十七 もしほやくあまのすさみのかやり火はわきて〔や〕たてぬ煙なるらん

此哥やもじのおきどころたがへり。上のはと入かへて「かやりびやわきてはたてぬとあらまほし

〔か〕

後拾十一 まてといひし秋もなかはに成ぬるをたのめ〔か〕おきし露はいかにぞ

此かもじきはめてわろし。あまり物也。然るをしひてたすけてかもじの説などいふはいたくひがことなり

〔何〕

續拾十五 おもかげを〔いかに〕わすれぬ心こそつらしと思ふをりも有しか

此いかにはいかに思ひめぐらしても心得がたくてにをはとゝのはずなんある

〔くさぐの誤〕

玉六 さそふべき木葉もいまはのこらねばはげし〔く〕とても山おろしの風

同十四 みやこ〔を〕ば春の霞を。分つれごなほ雪きえぬ山路なりけり

新続古五 雲ゐとぶ鴈のなみだも落そひてあはれよ深き老のねざめ〔に〕

同十七 一しぐれ過にけらしなみよしのゝ吉野のたき〔つ〕岩たゝくなり

右の哥どもくもじをもじにもじつもじみなひがとなり

拾六 旅ゆ〔か〕ば袖こそぬ〔るれ〕もる山のしづくにのみはおほせざらなん

上を「ゆかばといひて「ぬるれと結べるはとゝのはず。「ゆかばといはゞ「ぬれめと結ぶべし。もし「ぬるれならば。上を「ゆけばとこそいふべけれ

同十二 草がくれかれにし水はぬる〔くとも〕むすびし袖は今もかわか〔ず〕

「ぬるくともといはゞ下を「かわかじとこそ結ぶべきを。ずと結べるはたがへり。もし「かわかずばらば。上を「ぬるけれごゝいふべきさだまり也。これらは寫し誤なるべし

金 八 〔戀しさを〕妹しるらめや旅寐して山のしづくに袖ぬらす〔さは〕

「戀しさをと。終りのとはとあひかなはずひがことなり

續古 十五 しらざりき契りし中は跡たえて夕暮ばかり身にさま〔れ〕さは

結句「身にさまらんとはといはざれば。上の「しらざりきにかなはず。もし「とまれとはといはゞ。上を「思はざりきといはざればかなひがたし。

續千 五 しら〔ざりき〕秋のしほぢをこぐ船はいかばかりなる月を見るらん

二の句より下皆さしあたりたる其時の事なれば。初句「しらざりきといふ詞かなはず。すべてざりきは過去をいふ詞なれば也。此哥にてはたゞ「しらずとこそいふべけれ

同 十五 おのづから思ひいづこもかひぞな〔き〕ちぎりしまゝの心ならずば

三の句「かひぞなからんといはては。上の「いづとも。終りの「ならずばにかなはず。もしかひぞなきといはゞ。二の句「思ひいでゝも。結句「心ならねばとこそいふべけれ

拾 十五 身のうきを人のつらきさ思ふこそ我さもいは〔じ〕わりなかりけれ

此じはずを寫しあやまれるなるべしじにては切るゝ故にこそけれのてにをはにかなひがたし

拾 十六 かくばかりまつさしら〔ば〕や郭公こずゑ高くも鳴渡るかな

此ばはずの寫し誤りなるべし。もしは「しればやの誤歟とも思へど。さては切れざれば。留りのかなにかなはず。ばやといひてかなとは留らず

後拾 十三 東屋のかやが下ぶしみだるればい〔ま〕や月日のゆくもしられず

此まはさを寫し誤れるにて「いさやなる」べし

續後 十四 あふとのなぎさなればやみやこ鳥通ひし跡も絕てさひこ〔ず〕

此ずはぬの寫しあやまりなるべしぬにあらざれば上のやの結びとゝのはず

新續古 二 花〔ぞ〕なほみねよりおくに咲そめて雲に跡なきしをりをぞ。する

同 かざしつゝこゝろ〔ぞ〕花に成ぬれど老のすがたのかくれやはする

此二首のぞはともにはをうつし誤れるものなり

狹衣 敷たへのまくら〔も〕うきてながれぬる君なき床の秋のねざめに

此もはぞの寫しあやまりなるべしぞにあらざればぬると結べるにかなひがたし

堀川後百首 はれまなき心のやみにまよひつゝえこそをられ。ね月のかつら〔を〕

此をはもを寫し誤れるなるべしもしをならば「えこそをられね」といはざればかなはず「をられね」といふときけをとはいひがたし

○變格に同じくて不調哥

古 十九 戀しきか方もかたこそありときけたてれをれごもなきこゝち〔する〕

此する一本にはかたとあれどそれもよろしとはきこえず

後 十二 まどろまぬ物からうたてしかすがにうつゝにもあらぬこゝちのみ〔する〕

新 十四 わかれては昨日けふこそへだてつれちよしもへたるこゝちのみ〔する〕

新拾 八 こぬ人をまつ秋風のねざめにはわれさへあやな旅ごゝち〔する〕

新 六 夕なぎにとわたる千鳥浪間より見ゆる小嶋の雲にきえ〔ぬる〕

詞 三 荻の葉にことゝふ人もなきものをくる秋ごとにそよとこた〔ふる〕

新 二十 いづくにもわがのりならぬ法やあると空吹風にさへごこたへ〔ぬ〕

○玉のを二

玉 十三 ふたつあるこゝろをわれもたりけりうしと思ふにさてもわすれ〔ぬ〕

風 十二 なほざりに人は見るらん玉づさに思ふこゝろのおくはのこさ〔ぬ〕

同 十六 これやさばかはるならむそのふしと見えぬ物から有しにもに〔ぬ〕

右の哥共はいづれも上にあげたる變格の例なれどもいやしげにきこえてとゝのはず

一本にてにをはを寫し誤れる哥

これは八代集の中に。てにをはのもじをうつし誤れる本(ほん)ある哥共也。今これかれの本どもを考へ合せて。宜しきを〔 〕の内にしるし。あやまれる方をば。その右のかたはらに出して。イとしるせり。

古 三 ほとゝぎす人まつ山になくなれば我うちつけに戀まさりけ〔り〕(ぬイ)

同 六 わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせ〔ず〕(ぬイ)

同 十一 うきくさのうへはしげれる我なれや。深きこゝろをしる人〔の〕(ぞイ)なき

同 十三 玉くしげあけば君が名立ぬべ〔み〕(きイ)夜深くこしを人見けんかも

同 十四 くもり日の影としなれる我なれ〔ば〕(やイ)めにこそ見えねみをばはなれず

同 十七 難波がたおふる玉藻をかりそめのあまとぞ。我は成りぬべらな〔る〕(りイ)

同 十九 秋の野に妻なき鹿の年をへてな。ぞ吾戀のかひよと〔は〕(ぞイ)なく

此哥結句のはもじ古今集今の本には皆ぞとあれども上になぞといへればぞにてはとゝのはず六帖一本に「はとあるを用ふべし 此哥のてにをは猶論有卷ノ末にしるす

同 さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやぐ霜夜をわ〔が〕(れイ)ひとりぬる

後 一 くれなゐに色をばかへて梅花かぞ。こと〱ににほはざりけ〔る〕(りイ)

同 二 春くればこがくれおほき夕づくよおぼつかな〔し〕(くイ)も山陰にして

此哥第四の句のしもじ今本には皆くとあり誤なり六帖にしとあるをもちふべし

同三 風をだにまちてぞ花の散なまし心づからにうつろふがう「さ」(きイ)

同 色ふかくにほひしことは藤波の立もかへらで君とまれと「か」(はイ)

同五 けふより「は」(やイ)天の河原はあせなゝんそこひ共なくたゞ渡りなん

同 秋の夜の長きわかれをたなばたはたてぬきにこそ思ふべらな「れ」(りイ)

同 秋風のふけばさすがにわびし「はた」(きはイ)よのことわりと思ふものから

此はたは。古今夏「ぬしさだまらぬ戀せらるはた。後撰戀一「あはれとおもふを恨むらんはた。などあると同じ格也。然ろを今おほくの本に。きはとあるはひがと也。さては一首の趣とゝのはず。然るにきはとある方を用ひて。はたとある本を不レ用といへる説は。いかなるひがこゝろえぞも。

同 こむといひし程や過ぬる秋の野にたれまつ虫「ぞ」(のイ)聲のかなしき

同六 袖にうつる月のひかりは秋ごとにこよひかはらぬ影と見え「つゝ」(るイ)

同 秋くれば思ふこゝろぞみだれつゝまづもみぢばと散まさりけ「る」(りイ)

同七 もみぢ葉「は」(のイ)ちる木本にとまりけり過行秋やいづちなるらん

同九 よそながらやまん共せずあふ事は今こそ雲の絶間なるら「め」(んイ)

同 ながらへてあらぬまでにも言の葉の深きはいかにあはれなりけ「る」(りイ)

同十 よそにのみまつ「ぞ」(はイ)はかなき住の江の行てさへこそ見まくほしけれ

同十一 しのゝめにあかでわかれし袂をぞ露や分しと人「の」(やイにイ)とがむる

同十五 白川の瀧のいとなみみだれつゝよるをぞ人はまつといふな「る」(りイ)

同十六 はかなくてたえなんくもの糸故になにゝかおほくかゝむと「すらん」(思ふイ)

○玉のを二

同 十七 あだ人もなきにはあらず有ながらわが身にはまだきゝ〔ぞ〕（もイ）ならはぬ。

同 瀧つ瀬にたれ白玉をみだりけんひろふとせしに袖〔は〕（そイ）ひちにき。

同 十九 から衣たつ日をよそにきく人はかへすばかりの程もこひじ〔を〕（きイ）

拾 二 山がつの垣根に咲る卯花はたがしろたへの衣かけし〔ぞ〕（かイ）

同 六 わかるゝをうしとぞおも〔ふ〕（ひイ）つるぎばの身をきりくだく心ちのみして

同 九 いなをらじ露にたもとのぬれたらば物おもひけりと人もこそ見〔れ〕（るイ）

同 十四 津の國のいく田のもりのいく度かつらき心を我〔に〕（ぞイ）見すらん

同 津のくにのほりえの深くおも〔へ〕（ふイ）ごもわれ〔を〕（はイ）難波の何とだに見ず

同 十五 こひしなばこひもしねとや。玉ぼこの道行人にとつてもな〔き〕（しイ）

後拾 一 花見て〔ぞ〕（はイ）身のうきこともわすらるゝ。春はかぎりのなからましかば

同 七 岩くゞるたきのしら糸たえせで〔ぞ〕（もイ）久しくよゝにへつゝ見るべき。

同 十一 こほりとも人のこゝろを思はゞやけさたつ春の風〔に〕（ぞイ）とく〔や〕（べ）〔と〕（きイ）

同 廿 おもひ出ることもあらじと見えつれどやといふに。こそ驚かれぬ〔れ〕（るイ）

金 一 山吹にふきくる風も心あらば八重ながらを〔ば〕（やイ）ちらさゞらなん

同 二 卯花の青葉も見えず咲ぬれば雪〔と〕（そイ）は名のみかはるなりけり

同 八 よもの海のうら〳〵ごにあされ共あやし〔く〕（やイ）見えぬいけるかひ哉

同 物をこ。そ忍べばいは〔ね〕（ぬイ）いはしろのもりにのみもるわが涙かな

千 一 さきぬ〔や〕（こ）〔と〕（やイ）しらぬ山路に尋ねいる我をば花のしをるなりけり

同 六 須磨の關有明の空に鳴千鳥かたぶく月はなれもかなし〔や〕（きイ）

同十 うごきな〔く(キイ)〕猶萬代ぞ頼むべきはこやの山のみねのまつ風

同十四 しらざり〔き(レイ)〕雲ゐのよそに見し月の影を袂にやどすべしとは

新一 淺みどり花もひとつにかすみ〔つゝ(ルイ)〕おぼろにみゆる春のよの月

同七 君が代は。久しかるべ〔し(キイ)〕わたらひや五十鈴の川の流れたえせで

同八 おきそふる露ともに〔は(ヤイ)〕きえもせで涙にのみもうきしづむ哉

同十五 夏野ゆくをしかの角のつかのまも忘れず〔ぞ思(おも)ふ(ヘイ)〕妹がこゝろを

此哥は萬葉四に出て下句「妹が心をわすれて思へや」とあるを直されたるなれば「おもへ」とある方を宜しからんと思ふ人も有べけれどさてはとゝのはず

同十六 から衣たちかはりぬる春のよにい。かでか花のいろを見るべ〔き(クイ)〕

同十七 世をそむくかたはいづこ〔も(ニイ)〕あかぬべし大原山はすみよかりきや

同十八 うきながらあればあるよに故郷の夢をうつゝにさましかね〔つゝ(テモイ)〕

此つゝ一本にはつも共ありそれもよろし。てもは此つもをあやまれるなるべし

○上件の哥いづれも。かたはらにしるせる本(ほん)の方にては。大かた一首のてにをはとゝのはず。きはめてひが寫し也。さて右の外。新勅撰より下つかた十三代の集にも。てにをはを寫しあやまれる哥おほけれど。そは今は皆もらせり。右にあげたる哥どもになずらへて。よきあしきをわきまふべし。おほかたはもぞの三字。又りるれなどは。たがひに誤れること。いづれの集にも殊におほし。まどふことなかれ

○上の。一本にてにをはを寫し誤れる哥の中に出せる。古今十九の「秋の野に妻なき鹿の云々といへる哥のてにをはの事。結句のはもじをぞとするときは。上のなぞよりよもじまで。鹿の鳴言(ナクコトバ)にて。わが戀のかひは何ぞよといふ意也 然るをなぞといふ辭上に在て。下によもじある故に。とは聞とりにくきやうなれ共。古へはかくもよみけん。右のごとく見るときは。

○玉のを二

なぞの辭はよもじまでへかゝりて。その下へは及ばざる故に。ぞもじのてにをは不調にあらず。しかれどもなほ「かひよとはなくとあるぞ。事もなくやすらかに聞えたる。はもじなる時は。「わがこひのかひよといふが鹿の詞にて。なぞはそれをとがめたる作者の詞也。

詞瓊綸三之巻

〔は〕

○はの結びは。紐鏡の右の行の段々の辞にて。一の巻に出せる三轉證哥の如し。但し三轉のうち。ぞや何こその結びは紐鏡中の行左の行の定まりのどくにて。其外は大かたみだりに結びかたきを。はも徒の結びは。三轉の中の行左の行の辞を除きて其餘は。必しも右の行のむすびのさだまれる辞のみならず。てにをはにても何にても廣く留る也。然るにいまこれをかたく右の行に定むるとは。かの三轉の辞にて結ふとき。ぞのや何こそに對して。かならずさだまりあるがゆゑなり。

○動かぬ言にて結ぶは

古十九 青柳をかた糸によりて鶯のぬふてふ笠〔は〕うめの花笠

拾一 あらたまのとし立かへるあしたよりまたるゝ物〔は〕うぐひすの聲

新六 おのづから音するもの〔は〕庭のおもに木葉吹まく谷のゆふ風

同五 さびしさ〔は〕み山の秋の朝ぐもり霧にしをるゝ槇の下露

後十七 よをそむく苔のころも〔は〕たゞ一重かさねばうとしいざふたりねん

新十一 わが戀〔は〕槇の下葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいでめや

同十七 時しらぬ山〔は〕ふじのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん

○いひかけにて結ぶは

後拾十九 かへるさをまちこゝろ見よかくながらよもたゞにて〔は〕やましなの里

千十四 あふと〔は〕いなさ細江のみをつくし深きしるしもなきよなりけり

新 十七 世中をそむきにとてはこしかどもなほうきこと〔は〕‖おほはらの里

〇は‖を重ぬる格くさ〴〵

古 二 ふるさとゝなりにしならの都にもいろ〔は〕かはらず花〔は〕さきけり

同 四 いつ〔は〕と〔は〕とき〔は〕わかねど秋の夜ぞ物思ふことのかぎりなりける

これらはたゞ何となく重なれる也又一つの格あり

古 四 里〔は〕あれて人〔は〕ふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

同 五 秋〔は〕きぬもみぢ〔は〕宿にふりしきぬ道ふみ分てとふ人〔は〕なし

後 五 たのめこし君〔は〕つれなし秋風〔は〕けふよりふきぬ我身かなしも

新 五 ひと〔は〕こず風に木葉〔は〕ちりはてゝよな〳〵虫〔は〕聲よわる也

右のたぐひ一つの格なり又これとかれとを相對へていふ有

古 一 み山に〔は〕松の雪だにきえなくにみやこ〔は〕のべのわかなつみけり

同 一 人〔は〕いさこゝろもしらずふるさと〔は〕花ぞむかしのかにゝほひける

同 三 こゑ〔は〕して涙〔は〕見えぬ郭公わがころもでのひづをからなん

拾 十一 いかゞせん命〔は〕かぎり有物をこひ〔は〕わすれず人〔は〕つれなし

右の内「みやまには」の哥と。「聲はして」の哥とは。二つのは‖もじまさしく相對へり。「人はいさ」の哥は。上のは‖は花と對ひ。下のは‖は對はず。「いかゞせん」の哥は。上のは‖は下句と對ひ。下の二つのは‖は。前にあげたる一格のは‖なり。又は二つば‖二つある哥

古 一 年ふれば‖よはひ〔は〕おいぬしか〔は〕あれど花をし見れば‖物思ひもなし

〇一つのは‖

古十六 かず〳〵に我をわすれぬ物ならば山のかすみをあはれこ〔は〕見よ

後四 たなばたは天の川原を七かへり後のみそかをみそぎに〔は〕せよ

新勅八 かへりこば重なる山の峯ごとにとまるこゝろをしをりに〔は〕せん

菅万下 おもひには大空さへやもえ渡る朝たつ雲をけぶりに〔は〕して

いづれも四の句のはてにをと置たり。此ををもといへる哥も千載集十七にあり

○にはの意のは

後拾三 五月雨〔は〕みづのみまきのまこも草かりほすひまもあらじとぞおもふ

同 さみだれ〔は〕見えし小篠の原もなしあさかの沼のこゝちのみして

これら「五月雨にはといふ意也此後五月雨の哥に此はおほし

○はも

古十一 春日野の雪間を分て生出くる草のはつかに見えし君〔はも〕

同十七 さゝの葉にふりつむ雪のうれを重み本くだちゆく我さかり〔はも〕

同廿 水ぐきの岡のやかたに妹こ我とねての朝けの雪のふり〔はも〕

万三 やき津へわがゆきしかばするがなる阿倍の市路にあひしこら〔はも〕

此辞萬葉にはなほ巻々におほくあり古事記弟橘姫の哥にも「とひし君はもと有ていとふるきことばなり

○輕く添るは

ぞは【三の巻ぞの部に出せり】やは【四の巻やの部に出せり】かは【四之巻かの部に出せり】いづらは【四の巻何の部に出せり】こそは【五の巻こその部に出せり】よりは

右のたぐひのはは。たゞ輕く添たるのみにて意なし。故にのぞきても同じ事也。又もにかへて。ぞもやも

かも　よりもといひても同じ意也。

○はや　四の巻歎息(なげき)のやの部に出せり

〔ば〕

○濁(にご)るばに。既に然る事をいふと。未然事をかねていふとの二つあり。既に然る事をいふは。「花さけば」「花ちれば」「月出れば」「月いればなどのごとし。未然事をかねていふは。「花さかば」「花ちらば」「月いでば」「月いらばなどの如しさて既に然る事をいふばは。ども【どおなじ】と相對ひ。【「花さけばと「花さけどもと對ひ。「月見ればと「月見れどもと對ふがごとし】未然事をかねていふばは。上を轉じてとも。と對へり。【「花さかばと「花さくとも。と對ひ。「月いでばと「月いづとも。と對ふがごとし。上を轉ずとは。かはくに轉じではづに轉ずるがごとし】

○をば　これはをも共をぞ共をこそ共をや共轉じていはるゝ也。かくの如く轉ずるは。をばのばのみなり

をば二つ相對へてよめる哥

古 八　秋萩の花〔をば〕雨にぬらせども君〔をば〕ましてをしとこそ思へ

○しかば　此しはいはゆる過去のし也。さてしかとつゞけるは。こその結びのしかと一つ也。又しかばはしかどもと相對ふ辭也。

古 十五　もろこしも夢に見〔しかば〕近かりき思はぬ中ぞはるけかりける

同 十八　我を君なにはのうらにあり〔しかば〕うきめをみつのあまと成にき

後 九　秋の田のいねてふことをかけ〔しかば〕思ひいづるがうれしげもなし

新 十六　たのめこし人をまつちの山のはにさよ更〔しかば〕月もいりにき

にしかば　てしかばといへるも有

拾十二 身に戀のあまり〔にしかば〕忍ぶれど人のしるらんこそわびしき

後拾十九 ひかりいづるあふひのかげを見〔てしかば〕年へにけるもうれしかりけり

○なば

古十五 われのみやよをうぐひすと鳴わびん人のこゝろの花とちり〔なば〕

後八 山ちかみめづらしげなくふる雪のしろくやならん年つもり〔なば〕

古八 かへる山ありとはきけど春がすみ立わかれ〔なば〕こひしかるべし

同十三 あはずしてこよひあけ〔なば〕春の日の長くや人をつらしと思はん

なば二つあるは

後六 しぐれふりふり〔なば〕人に見せもあへずちり〔なば〕惜みをれる秋萩

○てば これはたらばといふ意にてなばと相雙ぶ辭也〔すべてなとてとあひならぶと六の巻のつ つるの部にくはしくいへり〕

万十五 秋はぎにゝほへるわが裳ぬれぬ共君が御船の綱しとり〔てば〕

古一 うめが香を袖にうつしてとゞめ〔てば〕春はすぐ共かたみならまし

同七 わがよはひ君が八千代にとりそへてとゞめおき〔てば〕思ひ出にせよ

同八 わかれ〔てば〕ほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

同十三 みちのくに有といふなる名取川なきなとり〔てば〕くるしかりけり

同 わが戀をしのびかね〔てば〕あし引の山たちばなの色に出ぬべし

後十一 あひ見〔てば〕なぐさむやとぞ思ひしになごりしもこそ戀しかりけれ

新十八 大そらにてるひの色をいさめ〔てば〕天の下にはたれかすむべき

紫式部日記　たゞならじとばかりたゝくくひなゆゑあけ〔てば〕いかにくやしからまし

右のてば。いづれもばもじ濁るべき辞なるを。清てよむはひがことなり。萬葉にもみな濁る音の字をかけり。

古今十五「ながれては妹脊の山の云々のたぐひのてはとは異なり

〇せば　せばといへばおほくは下にましといふ例也

古一　世中にたえてさくらのなかり〔せば〕春のこゝろはのどけからまし

同五　もみぢ葉のながれざり〔せば〕立田川水の秋をばたれかしらまし

同六　梅の香のふりおける雪にまがひ〔せば〕たれかこと〱分てをらまし

同十四　いつはりのなきよなり〔せば〕いかばかり人のことのはうれしからまし

同十一　早き瀬にみるめおひ〔せば〕我袖のなみだの川にうゑまし物を

同十二　おもひつゝぬればや人の見えつらん夢としり〔せば〕さめざらましを

又せばと留りたるは上へかへりてましといへり

古十五　わすれ草たねとらましをあふことのいとかくかたき物としり〔せば〕

後拾一　よの中をなになげかまし山ざくら花見るほどのこゝろなり〔せば〕

又ましといはざるもまれには有【これはいと〱まれなること也】

古四　をみなべしおほかる野べにやどり〔せば〕あやなくあだの名をや立なん。

後九　わたつ海に深きこゝろのなかり〔せば〕なにかは君を恨みしもせん。

拾二　さよ深くねさめざり〔せば〕郭公人づてにこそきくべかりけれ

〇上ににを添てにせばともいへり證哥五の巻のにの部に出せり

〇ましかば　これは下に必又ましといふ例也

古十五 人しれずたえな「ましかば」わびつゝもなき名ぞとだにいはまし物を

後二 山里にちりな「ましかば」さくら花にほふさかりもしられざらまし

同十二 あかつきのなから「ましかば」白露のおきてわびしき別れせましや

拾十九 おやのおやとおもは「ましかば」とひてまし我子の子にはあらぬなるべし

新十六 露のいのちきえな「ましかば」かくばかりふる白雪をながめましやは

又ましかばと留りたるは上へかへりてましといへり

後十六 思ひ出てとふ言の葉をたれ見まし身のしら雲となりな「ましかば」

新十三 たれゆきて君につげまし道芝の露もろ共にきえな「ましかば」

同十九 うれしさもあはれもいかにこたへまし故郷人にとはれ「ましかば」

又ましかばと留りて上へはかへらず下に意をふくめたる有

拾三 いたづらに過る月日をたなばたの逢夜の數とおもは「ましかば」

これ逢夜のかずと思はましかばうれしからましといふ意なるをその「うれしからましといふ意をば下にふくめていひのこせる物也次の哥共も皆同じ格也

後拾一 花見てぞ身のうき事もわすらるゝ春はかぎりのなから「ましかば」

同八 みやこいづる今朝ばかりだにはつかにも逢見て人をわかれ「ましかば」

同十五 月影のいるをゝしむもくるしきに西には山のなから「ましかば」

同十六 あかつきのかねの聲こそきこゆなれこれを入相とおもは「ましかば」

新十三 たのめぬに君くやとまつよひのまのふけゆかでたゞあけな「ましかば」

同 たのめこし言の葉ばかりとゞめ置て淺茅が露ときえな「ましかば」

右の格後拾遺集に殊におほし其後もつぎ〳〵おほかり

後拾十五　山のはゝかゝら［ましかば］池水にいれ共月はかくれざりけり

これは留りにあらざれどもましかばにて切て「うれしからましといふ意をふくめたると留りの格に同じ

拾二十　よの中にあら［ましかば］とおもふ人なきがおほくも成にける哉

これは「あらましかばよからましといふ意なるをその「よからましといふ意を例のふくめこととと擧たるなり

右の哥どものごとく。下に意をふくめていひすつる例は。他にもあれど。ましかばは殊に多く有て一格の如し。

【ましかばの外には後拾遺四「たなばたの逢夜の數のわびつゝもくる月毎の七日なりせば　同十九「有てやはおこせざるべき津の國の今ぞいくたのもりといひしは　千載十三「すがたこそねざめの床に見えず共ちぎりし事のうつゝなりせばこれらも皆いひすてゝ意をふくめり萬葉にも四の卷に「うつゝにはさらにもえいはず夢にだに妹がたもとをまきぬとし見ば　同十「人言は夏野の草のしげく共妹と我としたづさはりねば　同十五「秋萩ににほへる我裳ぬれぬとも君が御船のつなしとりてば　これらも同じ】

○ませば　これはましせばの約まりたる也。是もおほくは下にましといふ

後十　夢路にも宿かすひとのあら［ませば］ねざめに露ははらはざらまし

同十九　さらばよと別れし時にいは［ませば］我も涙におぼゝれなまし

拾万二八　飛鳥川しがらみわたしせか［ませば］流るゝ水ものどけからまし（にかあら万）

新八　あはれ人けふのいのちをしら［ませば］なにはの芦に契らざらまし

後拾十二　杉たてる門なら［ませば］とひてまし心のまつはいかゞしるべき

下にましといはざるは

万十五　かくばかりこひんとかねてしら［ませば］妹をば見すぞあるべかりける

此哥拾遺集十四にもすこし直して入られたりさて萬葉にもませばといへるはおほきを。此哥の外はみな下にましといへり

○ぬにの意のねば

古四　天の川淺瀬しら波たどりつゝわたりはて〔ねば〕あけぞしにける

新古十一　まきむくの檜原もいまだくもら〔ねば〕小松が原に沫雪ぞふる

此哥万葉にては冬の哥にて「くもらぬにといふ意也新古今には春の部に入られたれは「かすまねばといふ意にとられたる歟もしらね共今は萬葉の意にてこゝには出せり

此辭萬葉になほ多し。七の卷古風の部に出せり

○ばや　此辭三くさあり。皆四の卷やの部に出せり

〔も〕

○もの結びはと全く同じ。はの部にいへるがごとし

○動かぬ言にて結ぶも

新十七　花ならでたゞ柴の戸をさして思ふこゝろのおく〔も〕みよしのゝ山

續古一俊成卿　明石かたゑじまをかけて見渡せば霞のうへ〔も〕おきつ白浪

兼輔卿集　時鳥なきふるさとのしげゝれば山べに聲のせぬ〔も〕ことわり

金八　ぬす人といふ〔も〕とわりさよ中に人のこゝろをとりにきたれば

新十八　さゝがにの空にすかく〔も〕同じことまたき宿にもいくよかはへん

○いひかけにて結ぶも

後十五　これやこのゆくもかへるもわかれつゝしるもしらぬ〔も〕あふ坂の關

金七　しのぶれどかひ〔も〕なぎさのあまをぶね浪のかけても今はたのまじ

千九　年をへてむかしをしのぶこゝろのみうきにつけて〔も〕ふかくさのさと

新十四　我戀は庭のむら萩うらがれて人をも身を〔も〕あきの夕ぐれ

同十七　一すぢになれなばさて〔も〕すぎの庵によな〳〵かはる風の音かな

〇もを重ぬる格

古一　君ならでたれにか見せんうめの花色を〔も〕香を〔も〕しる人ぞしる

新十　するがなるうつの山べのうつゝに〔も〕夢に〔も〕人にあはぬなりけり

古二　たれこめて春のゆくへ〔も〕しらぬまにまちし櫻〔も〕うつろひにけり

新十六　見て〔も〕又々〔も〕見まくのほしかりし花のさかりは過やしぬらん

これらはつねのことなり

後拾六　このはちる宿はきゝわくとぞなき時雨するよ〔も〕しぐれせぬよ〔も〕

これはとぢめにある故に一けしき有て聞ゆ四つ重なれるは

同十四　白露〔も〕ゆめ〔も〕此世〔も〕まぼろし〔も〕たとへていはゞ久しかりけり

これは一つゞきに四つかさなれり又二つづゝ二つ重なれるは

古十三　君が名〔も〕わが名〔も〕たてじ難波なるみつと〔も〕いふなあひきと〔も〕いはじ

後十五　これやこのゆく〔も〕かへる〔も〕別れつゝしる〔も〕しらぬ〔も〕相坂のせき

五つ重なれるは

後拾四　秋〔も〕秋こよひ〔も〕こよひ月〔も〕月ところ〔も〕ところ見る君〔も〕きみ

六つは

六帖 をとゝし〔も〕こぞ〔も〕ことし〔も〕をとゝひ〔も〕昨日〔も〕けふ〔も〕我戀る君

○んの意のも‖

千四 人もがな見せ〔も〕きかせ〔も〕萩が花さく夕かげのひぐらしの聲

千五百番 もとあらの萩の下根になく虫のこゑをばたれにみせ〔も〕きかせ〔も〕

此哥も右の和泉式部が哥によりてよめる也。ともに「見せんきかせんといふ意也然るに六百番哥合に有家卿「雪うづむ松をみどりに吹かへし見せもきかせも山おろしの風是は上の和泉式部が哥を。「見せもきかせもせんといふ意に見誤りて。「見せもきかせもする山おろしの風といふ意によまれたり。ひがこと也。後にも此意に誤りよめる哥おほし

ん‖をもといへる例。なほ萬葉におほし。七の巻古風の部に出せり。其外菅家万葉に「うべもといふに郁子牟とかき。ても‖を店とかき又蜻蛉の日記にはもといふべき所にんとある事多し。これらも相通ふ例也。

○輕く添るも‖

古十五 あしべより雲ゐをさして行鴈のいや遠ざかる我身かなし〔も〕

同墨けし わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるし〔も〕

拾三八万 秋たちていくかもあらねど此ねぬる朝けの風はたもとすゞし〔も〕

同十三 わがせこがありかもしらでねたるよは曉かたのまくらさびし〔も〕

同二 郭公なくやさ月のみじか夜もひとりしぬればあかしかねつ〔も〕

千二十 神代より津守の浦に宮ゐしてへぬらん年の限りしらず〔も〕

後十二万 春くればこがくれおほき夕月夜おぼつかなし〔も〕花陰にして

此「なしもを今の本に「なくもとあるは誤りなり六帖に「なしもとあるぞ正しき萬葉の訓も「なしも也

右の外「らしも‖「けらしも‖などゝ。其餘ももと留る格おほし。萬葉には殊にくさ〴〵あり。七の巻古風の部に出せ

○玉のを三

り。さて右の類のもは。輕く添たるうちに。いさゝか歎息(なげき)の意をこめたり。

「さへも」「だにも」「よりも」「なほも」「うべも」「なぞも

此たぐひのも萬葉には猶多し古風の部に出せり

はも【三の卷はの部に出せり】ぞも　もぞ　しもぞ【いづれも三の卷ぞの部に出せり】もこそ　しもこそ【ともに五の卷こその部に出せり】やも【四の卷やの部に出せり】かも【四の卷かの部にいだせり】しも【五の卷しの部に出せり】

○とても【俗に迚の字をかく也】

新拾 十　〔とても〕かくかりの世ならばかりにだになどなき人のかへらざるらん

新後拾 十六　なげかじよ久米のいは橋〔とても〕よを渡りはつべき我身ならねば

これはいやしき詞にて古くは哥にも文にも見えたるとなし心すべし【「ありとても「なしとてもなどやうにいふとてもは別也】

〔ぞ〕

○ぞの結びは。紐鏡の中の行の段々の辞にて。一の卷に出せる三轉證哥の如し。【其中にぞはると結べる哥おほくして。んとはぬる類の哥はおのづからおほからず又や　何などは。疑ふ辞なる故に。おのづからんとはぬる哥おほくして。ると結ぶ類はすくなし。これおのづからよりきたるもの也】もろ〳〵のてにをはの中にぞや何こそは殊に結びを正(ただ)しくせざればとゝのひがたきものなり

○ぞの結び辞をおきながら猶下へつゞきたる哥

後 十一　あひ見てはなぐさむやと〔ぞ〕思ひしになごりしもこそ戀しかりけれ

堀川百首　はりまがたうらみてのみ〔ぞ〕すぎしかどこよひとまりぬあふの松原

後拾六　おなじく〔ぞ〕雪つもるらんと思へども君ふるさとはまづぞとはるゝ

右の哥共しといひらんといへるは。ぞの結びなれども。皆下へつゞきたる故に。いづれも聞よからず。此類の格は心すべき也。【俊成卿の哥に「行年をゝしめば身にぞとまるかとおもひいれでやけふを過まし。此哥は殊に聞よからずとゝのひがたし。思ふにこれははをぞに寫し誤れる物なるべし。

〇ぞの結び辭を轉(はたら)かして下へつゞけたる哥

玉葉二 小式部　雪かと〔ぞ〕よそに見つれどさくら花をりては似たる色なかりけり

同十八 能因　行末もさ〔ぞ〕なうからん身のはてをしらぬばかり〔ぞ〕頼みなれども

千五百番　めづらしき春も明日と〔ぞ〕聞ゆればくれなん年をなにかをしまん

右いづれもると結ぶべき所を。れとはたらかして下へつゞけたり。此格もきゝよからず。心すべし。【千五百番哥合なる哥は。すなはちそのかみも。二三の句聞よからずと難ぜられたりき。】

〇ぞとかゝりてかなと結べる哥【附つゝと結ぶ事】

菅家萬葉　しら雪の八重ふりしけるかへる山かへる〱〔ぞ〕老にけるかな

此ぞは曾の字を書たれば寫し誤りともいひがたし古今集には「かへる〱もとありこれ正し

俊成卿集　さくら花おもふあまりにちるとのうきを〔ぞ〕風におふせつるかな

玉十一　見てしも〔ぞ〕まさるうつゝの思ひかなそれとばかりのうたゝねの夢

右いづれもてにをはとゝのはず【風雅十九「うまれきてつかふる事も神垣にちぎりある身ぞたゞ頼むかな。これはとをぞと寫し誤れる也一本にとゝあるよろし。堀川百首「けさかふるせみの羽衣きて見ればたもとに夏はたつにぞ有かな。是も寫誤也一本に「有けるとあるぞ宜しき。〇新後拾遺六「雲のぼるふじの山風空さえてけぶりも見えず雪ぞふりつゝ。此ぞも寫し誤りなり。古本にはとありこれよろし。凡てぞとかゝりてつゝと結ぶも例なしひがこと也】

〇動かぬ言にて結ぶぞ‖

古十八 神無月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮のふると〔ぞ〕これ‖

「ぞこれと留りたる哥万葉にもこれかれ見ゆ又ぞといはずして‖これと留りたるも万葉廿の巻に見えたり

後十二 ひたふるに思ひなわびそふるさるゝ人のこゝろはそれ〔ぞ〕よのつね‖

後拾十一 おぼめくなたれともなくてよひ〳〵に夢に見えけむ我〔ぞ〕そのひと‖

新勅十五 かた糸のあはずばさてや絶なましちぎり〔ぞ〕人の長き玉のを‖

續後撰十七 年ふれどかはりもやらぬ名取川うき身〔ぞ〕今は瀬々のうもれ木‖

古十七 大かたは月をもめでじこれ〔ぞ〕このつもれば人の老となるもの‖

此ぞもとぢめのもの‖といふにて結ひたれば同じ格也。「これぞこのといへる。上の「これは月をさし。下の「このは老をさせり。すべて「これぞこの「これやこのなどいふ詞は。みな正しくさす所ある事也。みだりにいふべきにあらず。又てにをはのとゝのひをもよく思ふべきもの也。

後十五 うば玉のこよひばかり〔ぞ〕あけごろも‖あけなば人をよそにこそ見め

狭衣 もえわたるわが身〔ぞ〕ふじの山‖よ。たゞ‖ゆきつもれ共けぶりたちつゝ

これはよ‖たゞといふ詞を下へそへたり。めづらし。‖たゞといふ詞も上へつきたり

古十七 水のうへにうかべる船の君ならばこゝ〔ぞ〕とまりと‖。いはまし物を

千十一 わりなしやおもふこゝろの色ならばこれ〔ぞ〕それと‖。も見せまし物を

万十八 さくら花いま〔ぞ〕さかりと‖。人はいへど我はさぶしも君としあらねば

これらも同じ格なるをと受て下へつゞけたる也

〇いひかけにて結ぶぞ‖

千五 雪ならばまがきにのみはつもらじと思ひとくに〔ぞ〕しら菊の花

同十七 なほざりにかへるたもとはかはらねど心ばかり〔ぞ〕すみ染のそで

新十六 うつろふはこゝろのほかの秋なれば今はよそに〔ぞ〕きくの上の露

拾六 わかるればこゝろをのみ〔ぞ〕つくし櫛さして逢べきほどをしらねば

後拾十九 有てやは音せざるべき津の國のいま〔ぞ〕いくたの杜といひしは

千六 こえかねていま〔ぞ〕こしぢにかへる山雪ふるときの名にこそ有けれ

新十七 あけくれはむかしをのみ〔ぞ〕しのぶ草葉末の露に袖ぬらしつゝ

同十二 もらさばやおもふ心をさてのみはえ〔ぞ〕やましろの井手のしがらみ

此哥は「やましといふ意のいひかけなれば「えもと有べきをぞといひて意をつよくせる也いひかけなればかくてもあしからず

古十三 こひ〳〵てまれにこよひ〔ぞ〕あふ坂のゆふつけ鳥はなかずもあらなん

これは「あふといひかけたる相坂にて切れず。のとつゞき。又ゆふつけ鳥にても切れず。猶はとつゞきて。下の語のはたらきたるは。餘の格と異也。やの部のいひかけの結びに此格あり。考へあはすべし。

〇ぞ二つある哥

古九 北へゆく鴈〔ぞ〕なくなるつれてこし數はたらで〔ぞ〕かへるべらなる

拾一 物もいはでながめて〔ぞ〕ふる山ぶきの花に心〔ぞ〕うつろひぬらん

金九 なき名に〔ぞ〕人のつらさはしられける忘られしには身を〔ぞ〕恨みし

玉葉五「秋ぞかはる月と空とは昔にてよゝへし影をさながらぞ見る。これは右の哥共と同じ格なれどもこよなくいやしくて二つのぞもじいと聞ぐるし

拾七　おもかげにしば／＼見ゆる君なれど戀しきと〔ぞ〕とき〔ぞ〕ともなき

此哥は上のぞは「なきといふにて結びたり下のぞは切るゝぞたるをとと受てつゞけたるなり

堀川百首　秋風になびく尾花を夕まくれたが袖〔ぞ〕と。〔ぞ〕あやまたれける

これは上のぞは問かくるぞにて。切れたるを。とと受てつゞけ。下のぞはけるにてむすべり

〇切るゝぞ　語のとぢめにおくぞ也

古十一　いでわれを人なとがめそ大ぶねのゆたのたゆたに物おもふころ〔ぞ〕

同十二　わが戀はゆくへもしらずはてもなしあふをかぎりと思ふばかり〔ぞ〕

後九　淺してふことをゆゝしみ山の井はほりしにごりに影は見えぬ〔ぞ〕

詞十　花ずゝきまねかばこゝにとまりなんいづれの野べもつひのすみか〔ぞ〕

後廿　君がためいはふこゝろの深ければひじりのみよの跡ならへど。〔ぞ〕

とぞと留りたる哥万葉にもこれかれ見えたり

古四　名にめでゝをれるばかり〔ぞ〕女郎花われ落にきと人にかたるな

同十二　ことにいでゝいはぬばかり〔ぞ〕みなせ川下に通ひて戀しき物を

拾十四　見る夢のうつゝになるはよのつね〔ぞ〕うつゝの夢になるぞかなしき

千十三　かねてより思ひしこと〔ぞ〕ふしゝばのこるばかりなる歎きせんとは

新二　から人のふねをうかべてあそぶてふけふ〔ぞ〕わがせこ花かづらせよ

又ぞと切たるをとと受て下へつゞけたる哥

古十五　人しれずたえなましかばわびつゝもなき名〔ぞ〕と。だにいはまし物を

後三　又もこむとき〔ぞ〕と。思へど頼まれぬ我身にしあれば惜き春かな

同 九 逢事のかた糸〔ぞ〕と。はしりながら玉のをばかりなにゝよりけむ

古 十二 わがごとくものやかなしきほとゝぎすとき〔ぞ〕と。もなくよたゞ鳴らん

同 十三 秋の夜も名のみなりけりあふといへばこと〔ぞ〕と。もなく明ぬる物を

又

これらのぞはかろし然れども切てとと受て下へつゞけたるとは上に同じ又

後拾 十五 ながむれば月かたぶきぬあはれわが此世のほどもかばかり〔ぞ〕かし

新 十七 いかにせんしづが園生のおくの竹かきこもるとも世の中〔ぞ〕かし

同 六 もみぢばをおのが染たるいろ〔ぞ〕かしよそげにおけるけさの霜かな

千 十七 たれもみな露の身〔ぞ〕かしと。思ふにも心とまりし草のいほかな

これらは切るゝぞの下へかしを添たる也すべてかしは切るゝ言の下へおく辭也委く五の巻かしの部にいへり

○疑ひて問かくるぞ　これは必上に何等の辭をおきてぞと切る也

拾 二十 こゝにたにつれ〴〵となくほとゝぎすましてこゝひの杜はいかに〔ぞ〕

後 一 春雨にいかに〔ぞ〕梅やにほふらんわがまつ枝はいろもかはらず

拾 十二 夢かともおもふべけれどねやはせしなに〔ぞ〕こゝろにわすれがたきは

これらはなにいかになどの下に他の言をへだてずしてたゞにつゞけてぞといへり又言を中にへだてたるは

後 六 をみなべし草むらどにむれたつはたれまつ虫の聲にまよふ〔ぞ〕

同 十六 あはぬまに戀しき道もしりにしをなどうれしきにまどふこゝろ〔ぞ〕

拾 八 みわのやましるしの杉は有ながら教へし人はなくていくよ〔ぞ〕

同 十 しろかねのめぬきのたちをさげはきてならの都をねるはたが子〔ぞ〕

新六　いかだしよまてとゝはんみなかみはいかばかりふく峯のあらし〔ぞ〕

源氏紅葉賀　いかさまにむかし結べる契りにて此世にかゝる中のへだて〔ぞ〕

後七　たれきけとなく鴈がね〔ぞ〕わがやどの尾花が末を過がてにして

拾十四　いかばかりくるしきもの〔ぞ〕かづらきの久米路の橋の中の絶間は

同十八　いくよへしいそべのまつ〔ぞ〕むかしより立よる波や數はしるらん

又

金八　あさましやこはなにどのさま〔ぞ〕とよ戀せよとても生れざりけり

堀川百首　あさがほの花のすかたのゆかしきになにぞは長き秋の夜〔ぞ〕とよ

これらは下にとよといふ辭をそへたり猶とよの證哥は五の卷よの部に出せり。後拾遺十「わかれにし人はくべくもあらなくにいかにふるまふさゝがにぞこは。此こはゝ是は也

〇ぞは　これも上の問かくるぞにてはを添たる也はには意なし

六帖　しろたへのころもかたしき春日野のわかなつみしもたがために〔ぞは〕

源氏竹川　あはれてふつねならぬよの一ともいかなる人にかくるもの〔ぞは〕

六帖　たれにより思ひみだるゝこゝろ〔ぞは〕しらぬぞ人のつらさなりける

又

古八　かへる山なに〔ぞは〕有てあるかひはきてもとまらぬ名にこそ有けれ

同十二　いのちやはなに〔ぞは〕（も六帖）露のあだ物をあふにしかへばをしからなくに

同十九　まめなれどなに〔ぞは〕よけくかるかやのみだれてあれどあしけくもなし

古万下　かゝるよになに〔ぞは〕露のおきかへり草のまくらをしば〳〵すらん

○ぞも　これも問かくるぞにもを添たる也

古　一　色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅〔ぞも〕

同　四　ぬししらぬかこそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤ばかま〔ぞも〕

後拾　四　いそぎつゝ我こそきつれ山里にいつよりすめる秋の月〔ぞも〕

新　十六　むらさきの雲にもあらで春霞たなびく山のかひはなに〔ぞも〕

堀川百首　かやり火をまぢかくたてゝ山がつのおのれ烟にむせぶなに〔ぞも〕

○ぞや　これも問かくるぞにやを添たる也やは疑ひにあらず歎息(なげき)のや也

拾　七　いさりせし海士の教へしいづく〔ぞや〕嶋めぐるとて有といひしは

新勅十三　小侍従　いかなりしこき〔ぞや〕夢に見しとはそれさへにこそ忘られにけれ

此たぐひ「いかにぞや」「なにぞや」などゝ文に多しいづれもやはうたがひのやに似たれ共さにあらず歎息のやなり

源氏　あげ巻　いつ〔ぞや〕。も花のさかりに一め見し木本さへや秋はさびしき

これも同じぞやにて今世の俗言にいふ「いつぞやと同じいひざまなり

○なぞやは四の巻何の部に出せり

○一つのそ　これは清(すみ)てよめり但し實は清(すむ)べきか濁(にご)るべき歟さだかならず

後　十六　みこし岡いく〔そ〕のよゝに年をへてけふのみゆきを待て見つらん

拾　十四　あさましや木の下陰のいはし水（わすれ水　金葉八）いく〔そ〕（いくら）の人の影を見つらん

同　十五　かぎりなき思ひの空にみちぬればいく〔そ〕のけぶり雲となるらん

好忠集　えもたわにしをれぬるかこ思ふまでいく〔そ〕かおける萩の上の露

同　あじろ守宇治の川瀬に年つもりいく〔そ〕月日をかぞへきぬらん

○玉のを　三

○玉のを三

兼盛集 あしたづのむれゐる末のまつ山はいく(そ)かさねの千年成らん

新十四 うき人の月はなに(そ)のゆかりぞと思ひながらもうちながめつゝ

此哥なるは問かくるぞの如くにも聞ゆめれど。のと受て。下に問かくるぞはあれば。さにあらず。「いくそのそに同じくきこゆ

上件「いくそのそは十歟とも思はるれど。古今集物名に「いくそばく共よみ。又右の「なにそことよめるをも見れば。十にはあらで添へたる辞歟とおぼしき故に。こゝに出せり。もし然らば「いくそたびなどいふそも同じくて。十にはあらざるべし。もし又皆十の意ならば。新古今の「なにそのことよめるは。例なきひがことにやあらん。さだめがたくなん

○もぞ これは行末をかねておしはかりて。あやぶむ意のてにをは也。つねのぞと一つながら意かはる也。【結びは常のぞに同じ。但しんと結べる例はなし。せんなどゝいふべき所をも。するとやうにむすびたり。】

後十五 ふりぬとて思ひもすてじ唐衣よそへてあやなうらみ(もぞ)する

金一 春雨にぬれてたづねん山ざくら雲のかへしのあらし(もぞ)ふく

詞三 秋山の清水はくまじにごりなばやどれる月のくもり(もぞ)する

新十一 玉のをよたえなばたえねながらへば忍ぶることのよわり(もぞ)する

後五 天の川ながれてこひばうく(もぞ)あるあはれと思ふせにはやく見ん

又同じ意ながらあやぶむことはなきもまれに有

正治二年百首定家卿 柴の戸のあと見ゆばかりしをりせよわすれぬ人のかりに(もぞ)とふ

新十八 うつろはでしばし信太のもりを見よかへり(もぞ)する葛のうら風

また

新勅十四 万十一 立て思ひゐて〔もぞ〕思ふくれなゐのあかもたれ（すそ万）ひきいにしすがたを

これはたゞもの重なりたるのみにて。常のぞと同意也。上の格とは異也。萬葉には此てにをは猶これかれあり。古今集よりこなたには此格は見えず。たゞ續後撰十七定家卿しぬばかりなけくなげきを身にそへて命はさもぞかぎり有ける。これは此格に似たり

○しもぞ これはしもとぞとを重ねたるにて。ぞはつねのぞの意なり。もぞの意にあらず。さてしもに却（かへり）てといふ意を軽くふくめり

古一 青柳の糸よりかくるはる〔しもぞ〕みだれて花のほころびにける

拾六 露にだにあてじと思ひし人〔しもぞ〕時雨ふるころ旅にゆきける

同七 あだなりと人もごきくるもの〔しもぞ〕花のあたりを過がてにする

後拾十一 うれしとも思ふべかりしけふ〔しもぞ〕いとゞ歎きのそふこゝちする

續古三 俊頼朝臣 さくらだにちりのこらばといひしかど花見て〔しもぞ〕春は戀しき

新十四 天の戸をおし明がたの月見ればうき人〔しもぞ〕戀しかりける

此哥のみは却ての意をふくまず聞ゆ

○さぞ

後拾十 思ひやるあはれなにはのうらさびて芦のうきねは〔さぞ〕なかれけん

新勅八 長家卿 神なびの森のあたりに宿はかれくれ行秋も〔さぞ〕とまるらん

續後十三 古ゝ哥 ともすればあとたえぬべきかへる山こしぢの雪は〔さぞ〕つもるらん

續古五 ふく風も〔さぞ〕寒からしうづらなくかち野のをのゝ秋の夕ぐれ

同 夜寒なるほやのすゝきの秋風にそよ〔さぞ〕鹿も妻をこふらん

續千十　たづねいる道こそ今もかたからめまよふを〔さぞ〕こしる人のなき
　玉葉十八に「けふや‖さぞ西に心はいそぶらゝ　ふたぶく月ぞ今にをしまじ。これは上にや‖といへり。とゝのへり共聞えず
　又下にな‖を添たるもおほし

千十四和泉式部　これもみな〔さぞ〕な‖むかしの契りぞとおもふ物からあさましき哉

新四　深からぬ外山のいほの寐覺だに〔さぞ〕な‖このまの月はさびしき

同十　袖にふけ〔さぞ〕な‖旅寐の夢も見じ思ふ方より通ふうら風
　又や‖を添たるはめづらし

續古十三公實卿　我を君まつよもあらばいひてましたのめてこぬは〔さぞ〕や‖つらきと
　又右の哥共のごくおしはかりたる意にはあらで。たゞ然ぞといふ意にて。已がうへのさしあたりたる事をいへるもあり。

新五　露は袖に物思ふころは〔さぞ〕な‖おくかならず秋のならひならねど

續後十四定家卿　〔さぞ〕なげく戀をするがのうつの山うつゝの夢の又と見えねば

堀川百首　きりぎりす秋のうければ我も〔さぞ〕長きよすがら鳴あかしつる

〇やぞ‖　四の巻や‖の部に出せり

〇「な云々そ‖【こゑなきかせそなどのたぐひなり】　五の巻な‖の部に出せり

〔の〕

〇の‖の結びは。紐鏡の中の行の段々の辞にて。ぞ‖や‖何‖などゝ同じき事。上に出せる三轉證哥の如し。但しぞ‖や‖何‖にくらぶれば。のはやゝ輕き故に。かの定まれる格にはづれて結ぶともなきにあらず。左にあぐるがごとし。

古 二 山吹はあやなゝさきそ花見んとうゑけん人〔の〕こよひこなくに‖

同 十四 あふまでのかたみも我はなにせんに見てもこゝろ〔の〕なぐさまなくに‖

同 十五 我のみやよをうぐひすとなきわびん人のこゝろ〔の〕花とちりなば‖

同 十七 ちはやぶるうぢのはし守なれをしぞあはれとは思ふ年〔の〕へぬれば‖

新 十三 おもかげのわすらるまじきわかれ哉なごりを人〔の〕月にとゞめて‖

かくのごとくてにをはにても留りたり

又

古 六 花の色は雪にまじりて見えず共かをだにゝほへ人〔の〕しるべく‖

後拾 十七 きえもあへずはかなき程の露ばかり有やなしやと人〔の〕とへかし‖

かくさまにもむすべり

又

金 一 ちりかゝるけしきは雪のこゝちして花には袖〔の〕ぬれぬ‖なりけり‖

これはぬ‖へかゝりたれども猶下へつゞきてけり‖と留れり

又

同 三 今よりはこゝろゆるさじ月影〔の〕ゆくへもしらず人さそひけり‖

新 三 むすぶ手に影みだれゆく山の井のあかでも月〔の〕かたぶきにけり‖

これらも定まれる格のごとくける‖と結びては中々にわろき故に格をはづれてけり‖と結べり

千 六 玉づさになみだのかゝるこゝちしてしぐるゝ空にかり〔の〕なくなり‖

これはなる‖と結びてもわろからね共又なり‖にても宜しき也又一本には「鴈ぞなくなる」と有これはおとれり

〇玉のを三

件の哥共いづれも定まれる格にははづれたり。ぞや何などにはかゝる例なし。のはいさゝか異なる所也。然れども右のごとくけりなりなどゝ結ぶとは。いとまれなる例にて。其哥のいきほひによれる物也。ゆめ〳〵これらを思ひてみだりにはよむべからず

〇のの結びにてなかばにて切たる哥　これはいとまれなる事也

古七　ちはやぶる神のきりけんつくからに千年の坂もこえぬべらなり

万九　ひこぼしのかざしの玉の妻ごひにみだれにけらし此川の瀬に

六帖　春風のいたくふくらしなだの海士のつりする小船さし帰る見ゆ

拾玉　くれなゐに霞の袖のなりにけり春のわかれの暮方のそら

〇のもじおほく重なれる哥　三つはつねなれば出さず

古二　今もかも咲にほふらんたちばなの小嶋の崎の山ぶきの花

いせ物語　をしめども春のかぎりのけふの日の夕暮にさへ成にける哉

これらは四つかさなれり

五つは

万三　いほばらの清見の崎のみほの浦のゆたに見えつゝ物思ひもなし

此哥五つ重なれる中に「浦のゝは俗にがといふ意にて上四つのゝと異也

六つは

新六　冬がれのもりの朽葉の霜のうへに落たる月の影の寒けさ

これは四つと二つと六ッ也

又

同二 風かよふ寐覺〔の〕袖〔の〕花〔の〕かにかをるまくら〔の〕春〔の〕夜〔の〕夢

これけ三ッづゝ二つ也但し「袖のの‖の‖はがの意にて餘の五つと異なり

○のこ留れる哥‖

古十五 吹まよふ野風を寒み秋はぎのうつりもゆくか‖人のこゝろ〔の〕

好忠集 野がひせし駒の春よりあさりしにつきずも有哉‖淀のまこも〔の〕

源氏螢 あらはれていとゞ淺くも見ゆるかな‖あやめもわかずなかれけるね〔の〕

栄花ゆふで こくこだに見えずも有かな‖冬の夜のかたしく袖にむすぶこほり〔の〕

○用の語より受たるの‖

古十四 君やこむわれやゆかん‖〔の〕いさよひに眞木の板戸もさゝずねにけり

後十四 夕さればおもひぞしげきまつ人のこんやこじや‖〔の〕さだめなければ

拾十三 わすれじ‖〔の〕行末まではかたければけふをかぎりの命ともがな

同十四 うらみわびまたじ今は‖〔の〕身なれ共思ひなれにし夕暮のそら

同十六 有明の月ばかりこそ通ひけれくる人なし‖〔の〕宿の庭にも

續後十八俊成卿女 見し人もなきが數そふ露の世にあらましかば‖〔の〕秋の夕暮

万十二 丹波路の大江の山のさねかづらたえん‖〔の〕心わが思はなくに

又玉葉十「こはんしも今はうしやの‖明方もまたれずはなき月のよすがら

同十二「あらばもしのたのみもいつぞ‖うさをのみ見きく命のはてぞかなしき

同十三「身のうきに思ひあまりのはて／＼‖は親さへつらきものにぞありける

風雅二「さびしさは花よいつかの‖ながめしてかすみにくるゝはるさめのそら

○玉のを三

同十二「かぎりなく深きちぎりをきく中に人にもさぞのなからましかば‖

これらはしひて言をたくみになせる物にて同じき格ながらもいと〳〵いやしく聞ぐるしきいひざま也

〇さ‖こ結ぶの‖

古四　秋はぎをしがらみふせてなく鹿のめには見えずて音〔の〕さやけさ‖

同十八　鴈のくる峯のあさぎりはれずのみ思ひつきせぬよの中〔の〕うさ‖

後十四　あふばかりなくてのみふるわが戀を人めにかくること〔の〕わびしさ‖

同廿　夕さればねにゆく鴛のひとりして妻ごひすなる聲〔の〕かなしさ‖

此格なほいとおほし此留りのさ‖を寫し誤りてき‖と書る本のあるによりて後世の人これをき‖とも留るとあるはひがと也かならずさ‖也万葉にもおほし

古今序　咲花に思ひつく身〔の〕あぢきなさ‖身にいたつきのいるもしらずて‖

續古廿定家卿　君をいのるけふ〔の〕たふとさ‖かくしこそ治れる世はたのしきをつめ

万三　さゞらなみいそこせぢなるのこせ川音〔の〕さやけさ‖たぎつ瀬ごに

かくのごとくなかばにもいへりされど是はいとまれなると也

又

金四　はつ雪は眞木の葉白く降にけりこや‖小野山の冬〔の〕さびしさ‖

好忠集　みぞれふりくもれる冬のはれずのみつきせぬ物や‖まろが身〔の〕うさ‖

これらは上にや‖とかゝりたればつねの格とは異にしてのもじの意もいさゝかかはれり「冬のさびしさ「まろがみのうさといふ一句を一つの躰の語のごくいひなしたる物にしてかのや‖といひて動かぬ言にて結べる格と同じ

○後拾遺十八「われはかりながらの橋は朽にけりなにはの事もふるゝかたしさこれは上にのといはずもといひてさと留れりめづらしき格也又後撰十二「なにはめのみつさはなしに芦の根のよのみじかくてあくるわびしさこれはのもじ三ッあれども三ッながら留りのさへはかゝらざればのもじなきに同じ

○がとかゝりてさと結ぶ例は此次がの部に出せり

○俗語にがといふ意のの

古十七 水のうへにうかべる船「の」君ならばこゝぞとまりといはましものを

同廿 をぐろさきみつの小嶋「の」人ならば都のつとにいざといはましを

後拾十四 君がためおつるなみだ「の」玉ならばつらぬきかけて見せまし物を

千十一 わりなしや思ふこゝろ「の」色ならばこれぞゝれとも見せまし物を

金八 まつ人「の」大空わたる月ならばぬるゝたもとに影は見てまし

これらは下にならばといひましといへるおのづから一格の如し

さて

古十二 君こふるなみだ「の」とこにみちぬればみをつくしとぞ我はなりける

後十五 ふるさとの三笠のやまはとほければこゑはむかし「の」うとからぬ哉

同十六 おもひ出てこふ言の葉をたれ見まし身「の」白雲になりなましかば

同十九 わかれゆく道「の」くもゐになりゆけばとまる心も空にこそなれ

拾十七 朝戸明てながめやすらんたなばた「の」あかぬ別れの空をこひつゝ

後拾七 萬代に千代「の」かさねて見ゆる哉かめの岡なる松のみどりに

詞八 こゝろをばとゞめてこそはかへりつれあやしや何「の」くれをまつらん

同廿 人〔の〕世にふたゝびしぬる物ならば忍びけりやとこゝろ見てまし

同十 みなかみ〔の〕さだめてければ君が代に二たびすめる堀川のみづ

新一 あまの。はらふじのけぶり〔の〕春の。色の。霞になびく曙の。そら

同二 風かよふねざめの。そで〔の〕花の。香にかをる枕の。春の。よの。夢

万八 郭公こゑきく小野〔の〕秋風に萩さきぬれや聲のともしき

右の哥どもいづれものゝもじをがにかへて見れば俗によくきこゆる也【新古今なる二首はのもじおほく重なりたる中に一つ此のにて上下ののと異也心をつくべしよくせずばまどひなんかし】

‖〇の如くといふ意のの‖

古十一 よし野川いは浪たかくゆく水〔の〕早くぞ人を思ひそめてし

同 夕月夜さすや岡べの松の葉〔の〕いつともわかぬ戀もするかな

このたぐひ「行水のごとく「松の葉のごとくといふ意也此格古哥にはいとおほし

〇言をへだてゝ下へかゝるの‖

古二 夏の夜〔の〕ふすかとすれば郭公鳴一こゑに「あくるしのゝめ

後十一 あな戀しゆきてや見まし津の國〔の〕（六帖に）今もありてふ「浦のはつ嶋

後拾六 宇治川〔の〕はやく「あじろはなかりけり何によりてかひをばくらさん

〇いきほひあるの‖

新四 はらひかねさこそは露のしげからめやどるか月〔の〕袖のせばきに

續古二 後京極殿 けふ。こずば庭にや跡のいとはれんとへかし人〔の〕花のさかりを

これら「袖のせばきに月のやどるか「花のさかりを人のとへかしといふ事を二重にちかへしていへる故に殊にのもじにい

きほひあり又新古今五「きり〳〵す夜さむに秋のなるまゝによわるか聲のとほざかりゆく。これもしらべは同じけれど「聲のとほざかりゆくと直につゞきて上へかへらざる故に右の二首とはかはれり

○一つのの‖

千十一 大かたの戀する人にきゝなれてよのつね〔の〕とや君おもふらん

これは「よのつねの戀とやといふ意也此の‖は文にはつれにおほかるを哥にはこれらの外はをさ〳〵見えず

好忠集 人妻とわが〔の〕とふたつ思ふにはなれこし袖はあはれまされり

これも「わが妻とゝいふ意にて右の哥のの‖と同じ意なるをいひざまのすこし異なる也此哥は辛(かのと)といふとをかくしてよめり

○一つのの‖

新十八 君が代にあはずばなにを玉の緒。〔の〕長くと迄はをしまれじ身を

是は「あはずば何を玉の緒にせんといふ本哥をとりて。玉の緒といへる下へ本哥の詞の「にせんといふ意をふくめて三の句にて意は切たるをその玉の緒をやがて下へいひつゞけたるもの也

同十九 いすゞ川空やまだきに秋。〔の〕こゑ下つ岩根のまつのゆふ風

是は「秋といへる下へ「ならんといふ意をふくめて「空やまだきに秋ならんといふ意にて「秋にて意は切たるをその秋をやがて下へも用ひて松の風は秋の聲のするといふ意也

右の哥共。たゞ一わたりに聞ては。てにをはおだやかならず。すべて新古今のころは。かくむつかしく詞をつかひたる事おほし。これらは殊に。後世におぼろけの人のまねふべき格にあらず。

○物の‖

古十四 うつせみのよの人言のしげゝればわすれぬ。〔ものゝ〕かれぬべら也

詞二 なく聲もきこえぬ。〔ものゝ〕かなしきはしのびにもゆる螢なりけり

○玉のを三

新十三 いせ物語　君こんこいひしよごこに過ぬればたのまぬ「ものゝ」こひつゝぞふる

〇のや‖　これはたゞのこいふべき所へ‖やを添たるのみにてや‖はいこかろし

古二十　あふみ「のや」鏡の山を云々　万拾十四　いかほ「のや」いかほの沼の云々

新古十九 續小大君　しなの「のや」木賊における白露は云々　万二　石見「のや」高角山の云々

六帖　河内「のや」かたしき山の云々　定家卿　はつせ「のや」ゆづきが下に云々

日本紀の哥にも「あふみのや‖けなのわくごがとよめり

又地名の下ならでも

万十四　みなこ「のや」‖芦が中なる云々　堀川百首 萩の哥　にしき「のや」‖ひもこく花こ見ゆる哉

又六帖に「こよひのや云々是は万葉の哥を直せる誤也又玉葉十八「うれしのや‖云々これは「うれしやといふにのを添玉へり

例なきひがとなり

〇疑ひの辭ある下におくの‖

古一　春日野のわかなつみにや‖しろたへの袖ふりはへて人「の」ゆくらん‖

同十四　たえずゆく飛鳥の川のよこみなばこゝろありこや‖人「の」おもはん‖

同二　雪このみふるだにあるをさくら花いかに‖せよこか風「の」ふくらん‖

同四　昨日こそさなへこりしかいつ‖のまにいなばそよぎて秋風「の」ふく‖

同八　いのちだにこゝろにかなふ物ならばなにか‖別れ「の」かなしからまし‖

これらは上にや‖何など‖ゝうたがひの辭をおきて下をその結びにてとぢむる中間におくのもじ也此格いとおほし

古一　春たてば花こや‖見らん‖しら雪のかゝれる枝にうぐひす「の」なく。

同八　けふわかれ明日はあふみこ思へども夜や‖ふけぬらん‖袖「の」露けき。

後十六　大あらきのもりの草とや成にけんかりにだにきてとふ人〔の〕なき。

拾七　神なびのみむろの岸やくづるらん立田の河の水〔の〕にごれる。

千四　秋風やなみだもよほすつまならんおとづれしより袖〔の〕かわかぬ。

新六　秋篠や外山の里やしぐるらんいこまのだけに雲〔の〕かゝれる。

これらは上にやとかゝり。んと結びて。さて其下に云々の云々といひてとぢむる格なり。此格もいとおほし

件ののもじは。つねののに異なる事なけれど。かやうの所はかならずのといふべき格なることをしらしめんために出せり。

○云々の云々やといふの【後拾遺に「あなあやにくの春の日やなどいへる類なり】四の巻やの部に出せり

〔が〕濁

○がはのと同意にて結びものの格と同じ

古十九　さかしらに夏は人まねさゝのはのさやぐ霜夜をわ〔が〕ひとりぬる。

拾一　わがやどの梅の立枝や見えつらん思ひの外に君〔が〕きませる

同十九　我こそはにくゝもあらめわがやどの花見にだにも君〔が〕きまさぬ

万二　わがせこをやまとへやるとさよ更て暁露にわ〔が〕立ぬれし

同　さゝなみのしがさゞれ浪しく〳〵につねにと君〔が〕おもほせりける

右の哥共の結び皆のの格也

又むすびにあづからぬがは

古十六　ぬる〔が〕うちに見るをのみやは夢といはんはかなきよをもうつゝとは見ず

○玉のを三

後九　秋の田のいねてふことをかけしかば思ひいづる〔が〕うれしげもなし

同廿　もゝこせごいはふをわれは聞ながら思ふ〔が〕ためはあかずぞ有ける

同　こゝらよをきく〔が〕中にもかなしきは人のなみだもつきやしぬらん

拾廿　よの中にあらましかばこおもふ人なき〔が〕おほくも成にける哉

○さゝ結ぶが‖

古十三　うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるこ見る〔が〕わびしさ‖

後三　風をだにまちてぞ花のちりなまし心づからにうつろふ〔が〕うさ‖

同十六　なほき木にまがれる枝も有ものをけをふき疵をいふ〔が〕わりなさ‖

万四　こほくあればわびてもあるを里ちかくありこ聞つゝみぬ〔が〕すべなさ‖

此の格なほ萬葉におほし。すべてさと留る哥。躰の語の下を受たるは皆のとかゝれりの‖の部に證哥おほく出せるが如し。用の語の下を受たるは右のごく皆が‖とかゝれり。但し万葉に「妹が‖かなしさ‖などいへるは躰の語の下なれどが‖と受たり此事猶次にいへり

○つねにはのごいふ所をも萬葉にはが‖こいへるとおほし。古今集よりこなたは。大かた躰の語の下を受るはの‖。用の語の下を更るはが‖也。但し「わが‖「おのが‖「たが‖「君が‖「妹が‖なごの類は。躰の語の下なれご。後までもが‖こいへり。其外「萩が‖花「梅が‖枝「淺茅が‖原「甲斐が‖根なごのたぐひもがこいひならへる有也。

○がなの意のが‖　六の巻がなの部に出せり

詞瓊綸四之巻

〔や〕

○やの結びは。紐鏡の中の行の段々の辞にて。一の巻に出せる三轉證哥のごとし。【ぞのや何の四つは。結びの辞同じき中に。や何は疑ひの辞なる故に。おのづからんとはぬる哥おほくして。るなどゝ留るはおほからず】

○動かぬ言にて結ぶや

古一 たに風にとくるこほりのひまごとにうち出る波〔や〕春のはつ花

後拾十四 いつとなくこゝろ空なるわがこひ〔や〕ふじの高根にかゝる白雲

千四 てる月のたびねの床〔や〕しもとゆふかづらき山のたにの川の水

新九 これ〔や〕さは雲のはたてにおるときくたつとしらぬ天のは衣

万一 これ〔や〕このやまとにしてはわがこふるきぢに有とふ名におふせの山

同十五 これ〔や〕この名におふ鳴門のうづしほに玉藻かるとふあまをとめども

いせ物語 これ〔や〕この天のはごろもうべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

又

金四 はつ雪は眞木の葉しろく降にけりこ〔や〕小野山の冬のさびしさ

好忠集 みぞれふりくもれる冬のはれずのみつきせぬ物〔や〕まろが身のうさ

これらは「冬のさびしさ「まろがみのうさなどは動く用の言なるを動かぬ躰の語にいひなして結びたるものなり

新十九 いすゞ川そら〔や〕まだきに秋の聲下ついはねの松のゆふかぜ

○玉のを四

是はやのてにをはゝ「秋といふ迄へかゝりて「聲までへはかゝらず。然るをその「秋をやがて下へも用ひて「秋の聲とつゞけたる也。されば上の句の意は。いすゞ川空やまだきに秋ならん秋の聲のするといふ意也此哥の事三の卷の部にもいへり

また

千 十五 おもひ出よゆふべの雲もたなびかばこれ〔や〕歎きにたへぬけふりと。

新 八 あはれなりわが身のはて〔や〕淺みどりつひには野べの霞と。おもへば

同 十六 めぐりあひて見し〔や〕それともわかぬまに雲がくれにしよはの月影

これらもやの結びは動かぬ言なるをとと受て下へつゞけたる也

○いひかけにて結ぶや

後 十五 これ〔や〕このゆくもかへるもわかれつゝしるもしらぬもあふ坂のせき

後 十七 難波津をけふこそみつの浦ごとにこれ〔や〕このよをうみわたる船

後拾 十六 あぢきなく思ひこそやれつれ〴〵とひとり〔や〕ゐるでの山吹の花

金 三 東路をはるかにいづるもち月の駒にこよひ〔や〕あふさかの關

新 十二 山がつの麻のさごろもをさをあらみあはで月日〔や〕すぎふける庵

同 四 秋の夜の月〔や〕をじまのあまのはら明方ちかきおきのつり船

同 六 からにしき秋のかたみ〔や〕たつた山散あへぬ枝にあらしふく也

同 十 みやこにも今〔や〕ころもをうつの山夕霜はらふつたの下道

同 十一 うつせみのなくね〔や〕よそにもりの露ほしあへぬ袖を人のとふ迄

拾 十九 あふとのかくて〔や〕つひにやみの夜の思ひもいでぬ人のためかは

此哥は「やみなんといふ意にいひかけたるその闇の夜にて切れずしてのといひて下へつゞきたるはなべての格と異也その

○切るゝや‖　語のとぢめにおくやなり‖

古十四 妻こふる鹿ぞなくなるをみなべしおのがすむ野の花としらず「や」

後四 數ならぬわがみ山べのほとゝぎす木葉がくれの聲はきこゆ「や」

後拾十 とはゞやとおもひやるだに露けきをいかにぞ君が袖はくちぬ「や」

同十八 うかりけるみのふの浦のうつせ貝むなしき名のみたつはきゝき「や」

同十一 にしき木はたてながらこそ朽にけれけふのほそ布むねあはじと。「や」

同十六 とへとしもおもはぬ八重の山ぶきをゆるすといはゞをりにこんと。「や」

新古十一いせ集 難波がたみじかき芦のふしのまもあはで此世を過してよと。「や」

同十五いせ おもひいづ「や」＝みのゝを山のひとつ松契りしことはいつも忘れず

詞一 ちる花もあはれと見ず「や」＝いそのかみふりはつる迄をしむ心を

新十 袖にしも月かゝれとは契りおかず涙はしる「や」＝うつの山ごえ

拾十六 春の野にこころもとむといふなるはふたりぬばかり見でたり「や」＝君

新十三 きく「や」＝いかに。うはの空なる風だにもまつに音するならひありとは

此「きくやいかには「ぬしやたれなど」ゝいふ格とは異にして「きくやにて切るゝ也故にうちかへして「いかにきくやといひても同じ事そ萬葉八に「ふる郷のならしの岡のほとゝぎすとつてやりきいかにつげきやとある結句と同じこれも「いかににて切るゝ故にうちかへして「つげきやいかにといひても同じと也たがひに相照して心得べし

古十 波のうつ瀬見れば玉ぞみだれけるひろはゞ袖にはかなからん。「や」

後十五いせ集 言の葉に絕せぬ露はおくらん。「や」＝昔おぼゆる圓居したれば

○玉のを四

○玉のを四

右のごくんや‖といふと文にはおほく有て哥にはいとまれ也

又

後拾十六 かしは木のもりの下草くれごとになほ頼めと。〔や〕‖もるを見る〳〵

大和物語 われはさは雪ふる空にきえねと。〔や〕‖立かへれ共明ぬいた戸は

狹衣 あふ坂をなほゆきかへりまどへと。〔や〕‖關のとざしもかたからなくに

件の哥どものごくなかばにてとや‖と切たる哥はまれ也。なかばにあるとやは‖。おほくは切れざるやなり○又にや‖といひで切るとも。文にはおほかれ共。哥には見あたらず。續後撰八「冬きぬといふばかりにや‖神無月けさは時雨のふりまさりつゝ」此にやは切れざるやうなれ共やといひてつゝ‖と結ぶ格なければいかゞ也。これはかの「春きぬといふばかりにや‖みよしのゝ云々の哥と全く同じさまなれば。結句を「ふりまさるらんと有てこそよくかなへるに。らんと疑ふをいかゞと思ひて。つゝ‖とはとぢめられたりけん○又新古今六。「秋の色をはらひはててや‖久方の月のかつらにこがらしの風。千五百番哥合「秋のよは月見よとてや‖長月の有明にさへなりにけるかな。風雅四「ほとゝぎす人のまどろむ程とてや‖忍ぶるころはあけてこそなけ。これらてや‖といひて切たる歟。切てはいかゞにきこえ。切れざればやの結びたがへり。とにかくによろしくもきこえず

おほよそ疑ひのや‖に。語のなかばにおきて下をその結び辭にて結ぶと。語のとぢめに置て切ると二つ有て。おの〳〵上より受る言の格に定まりあり。なかばにおくやの上は‖。かならずつゞく格の辭より受け。とぢめにおきて切るやの上は‖。必切るゝ格の辭より受るが定まり也。【つゞく格の辭とは。紐鏡の中の行の段々なり。切るゝ格の辭とは。右の行の段々也。此事一の卷のはじめにくはしくいへるがごとし】さてなかばにおくやの上は‖。つゞく辭より受る事は。大かたたれもおのづから誤るとはなき物なるを。とぢめにおきて切るやの上は‖必切るゝ辭より受る事は。古ヘ人はおのづからよくわきまへて。一つも誤るとなかりしを。後世の人はともすればこれを誤りて。つづく格の辭より受るとおほし。その例を一つ二つ出してわきまへいはゞ。「あり‖や「なし‖やといふが定まりに

て。「あるや「なきや　とはいはず【「あり「なしはひも鏡の右。行にて切るゝ辞。「ある「なきは中。行にてつゞく辞也。新後撰十七「なれぬればつらき心もあるやとてたなばたつめのまれにあふらん。これひがと也「ありやとてと有べき格也風雅十四にも此あやまりあり】又「ありきや「なかりきやとやうに。きや　といふが定まりにて。「ありしや「なかりしやなどゝはいはず。又「見ずや「きかずやなどやうにずや　といふがさだまりにて。「見ぬや「きかぬ　やなどゝはいはず又「見ゆや「聞ゆや　といふが定まりにて。「見ゆるや「聞ゆるやなどゝはいはず。【右いづれもみなひも鏡の右行と中行とを以てわきまへしるべし】すべて語のとぢめに至て切るやの上は。「みな右の格と心得べし。さて又語のなかばにおくやの上は「あるや戀しきなきやかなしきなとやうに。つゞく辞より受る事也。餘もこれになずらへて心得べし。【これはやもじにのみはかぎらず。いづれのてにをはにも皆。つゞく辞より受ること。切るゝ辞より受ることの定まりは有事也。古人の跡をよく尋ねてみだりにすべからず。其中にたれもおのづからよくわきまへて誤らぬもあり。又つねによく誤るもおほし。哥も文もかやうのところにて得たることまだしきことはよく見えわかるゝ物なれば。いとはづかしきわざぞかし

古一　うぐひすの笠にぬふてふうめの花折てかざゝん老かくる〔や〕と。

同十　花の中めにあく〔や〕とて分ゆけば心ぞともにちりぬべらなる

同十九　ありぬ〔や〕とこゝろ見がてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ戀しき

これらはやと切たるをとと受て下へつゞけたる也

また

拾八　露のいのちをしとにはあらず君を又見で〔や〕と思ふぞかなしかりける

新十九　人しれずいま〔や〕いま〔や〕とちはやぶる神さぶるまで君をこそまて

これらは實は切るゝやにはあらず。語のなかばにおくやなるを。下の言をはぶきて其意をふくめて。やにて切てとゝ受たる

也。拾遺なるは「君を又見でやしなんと思ふぞかなしかりけるといふ意なるを。「死なんといふ意をはぶきて。其意をふくめ。新古今なるは。「今や來る今や來ると君をこそまてといふ意なるを。「來るといふ言をはぶきて。其意をふくめたる也

○やを重ぬる格くさぐ

古一　年のうちに春は來にけり一とせをこぞと〔や〕いはんことしと〔や〕いはん

同十五　夢にだに逢事かたく成ゆくは我〔や〕いをねぬ人〔や〕わするゝ

新八　よもすがら昔のことを見つるかなかたる〔や〕うつゝ有しよ〔や〕夢

源氏夕霧　あはれをもいかにしりてかなぐさめんある〔や〕戀しきなき〔や〕かなしき

古三　夜〔や〕くらき道〔や〕まどへるほとゝきす我やどをしも過がてになく

同十三　君〔や〕こしわれ〔や〕行けんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

同十五　月〔や〕あらぬ春〔や〕むかしの春ならぬ我身ひとつは本の身にして

風雅一 忠良　花〔や〕雪かすみ〔や〕けぶり時しらぬふじの高根にさゆるはる風

古八　えぞしらぬ今こゝろ見よ命あらば我〔や〕わするゝ人〔や〕とはぬと。

同一　春〔や〕とき花〔や〕おそきときゝわかん鶯だにもなかずも有かな

後十三　こず〔や〕あらんき〔や〕せんとのみ川岸のまつの心をおもひやらなん

古十四　君〔や〕こん我〔や〕ゆかんのいさよひに眞木の板戸もさゝずねにけり

右の哥共はみなかばにおくやの重なれる也

又切るゝやの重なれるは

新十七　天の川かよふうきゝにことゝはん紅葉の橋はちる〔や〕ちらず〔や〕

千十四　わすれぬ(ぬ也)〔や〕しのぶ〔や〕いかにあはぬまの形見とし聞しあけぐれの空

新十三 夕暮に命かけたるかげろふのあり〔や〕あらず〔や〕＝とふもはかなし

千十二 たのめと。〔や〕いなと。〔や〕＝いかに＝いな船のしばしと待し程もへにけり

古九 名にしおはゞいざことゝはんみやこ鳥わが思ふ人はあり〔や〕なし〔や〕と。

又

万四 かくして〔や〕なほ〔や〕まからん‖近からぬ道のあひだをなづみまゐきて

同七 かくして〔や〕なほ〔や〕老なんみ雪ふる大荒木野のさゝならなくに

これらはなかばにおくや‖なるが。重ねざまよのつねとかはりて。二つのや‖をたゝみて。一つに結びたり。古今集よりこなたには此格なし　又

千十七 これ〔や〕ゆめ‖＝いづれか。うつゝ‖＝はかなさを思ひわかでも過ぬべきかな

これはや‖とか‖とを重ねたりめづらし

○や‖何‖とつゞく格

後十三 雨ふれどふらねどぬるゝ我袖のかゝる思ひにかはかぬ〔や〕なぞ‖

同十九 君をのみ忍ぶの里へゆくものを會津の山のはるけき〔や〕なぞ‖

拾十四 玉川にさらすてづくりさら〳〵に昔の人のこひしき〔や〕なぞ‖

新四 萩が花眞袖にかけて高圓の尾上の宮にひれふる〔や〕たれ‖

赤染衛門集 浪さわぐ風にまかせて行船の帆かげに見ゆるかぢとり〔や〕たれ‖

古一 春がすみたてる〔や〕いづこ‖＝みよし野の吉野の山に雪はふりつゝ

同十七 ぬし〔や〕たれ‖＝とへどしら玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はん

同 玉だれの小がめ〔や〕いづら‖＝こよろぎの磯の浪わけおきに出にけり

玉三 定家卿 露わけん秋のあさけは遠からでみやこ〔や〕いくか‖まのゝかや原

また

後 三 うちはへて春はさばかりのどけきを花のこゝろ〔や〕なにいそぐらん‖

同 露だにもなたゝる宿の菊ならば花のあるじ〔や〕いくよなるらん‖

後拾 九 おぼつかなみやこの空〔や〕いかならん‖こよひあかしの月を見るにも

新 十三 おきそふる露〔や〕いかなる露ならん‖今はきえねと思ふ我身を

又

堀川百首 みながらにこゝろもさけず岩代の松〔や〕たれかは結びおきけん‖

これはかは‖なはさめりめづらし

又

拾遺愚草 はつ雪のいのる〔や〕なに‖の手向していそぐ生田のもりの白ゆふ

これは「いのるやなにのたむけぞと切るゝ意なるをやがて下へつゞけたりめづらし

また

後 二十 君がいにしかた〔や〕いづこぞ‖しら雲のぬしなき宿と見るぞかなしき

新十一 いせ物語 みるめかるかた〔や〕いづくぞ‖さをさして我にをしへよあまのつり船

躬恒集 ゆきやらぬこゝろ〔や〕なにぞ‖秋の野の道は千年もあらじと思ふを

これらはぞ‖を添たり

又

後 十一 なみだ川ながす寐覺もあるものをはらふばかりの露〔や〕なに‖なり‖

此類は猶おほし。二の巻變格の部に出せり考へ見べし

又

新十三 きく〔や〕＝いかに＝うはの空なる風だにもまつに音するならひ有とは

これは切るゝやにて別也。上の切るゝやの條に出せり

○なごや なぞや

風十 藤信朝臣 うめがゝはしるべがほなる春風のたがゆくへともなご〔や〕ふきこぬ。

千十二 なご〔や〕かくさも暮がたき大空ぞ。わがまつとは有としらずや

六帖 おいぬとてなご〔や〕(か古今)わが身をせめぎけん。おいずばけふにあはまし物か

後十 大かたはなぞ〔や〕我名のをしからん。昔の妻と人にかたらん

拾十七 琴の音はなぞ〔や〕かひなき。たなばたのあかぬ別れを引しとめねば

詞八 浅茅生にけさおく露の寒けくにかれにし人のなぞ〔や〕戀しき。

續古十一 藤信公 なぞ〔や〕＝かく忍べばくるし花すゝきいかなる野べにほにはいづらん

此哥はなぞやにて切るゝ也。下へつゞけてはてにをはとゝのはず

大かた何等の下はみな。かと受る例なるに。右のごとくなごとなぞとの二つのみ。やと受る例あり。その中になごはかと受るがおほくして。やと受たるはいとすくなし。なぞはやと受る例のみにて。かと受ることなし。○「なになれや「いかなれやなごは別に下のれやの條に出せり

○やはの意のや

古五 うゑしとき花まちどほに有し菊うつろふ秋にあはんと〔や〕見し。

同十一 秋の田のほのうへをてらすいなづまの光のまにもわれ〔や〕わするゝ。

同十四 こゝろをぞわりなき物とおもひぬる見ぬ物から〔や〕戀しかるべき。

後八 もみぢ葉も時雨もつらしまれにきて歸らん人をふり〔や〕とゞめぬ。

同十　難波がたかりつむ芦のあしつゞのひとへも君をわれ〔や〕へだつる。
古一　見てのみ〔や〕人にかたらん。山ざくら手ごとに折て家づとにせん
右はみななかばにおくや也‖　此下はみな切るゝやなり
古一　けふこずば明日は雪とぞふりなましきえずはあり共花と見ま。し〔や〕
同十五　こゝろこそうたてにくけれ染ざらばうつろふともをしからま。し〔や〕
後拾廿　さかざらばさくらを人のをらま。し〔や〕櫻のあたはさくらなりけり
續古三小左近　きかま。し〔や〕山ほとゝぎすひとこゑもまてと頼むる人なかりせは
すべてましやといふときのやはみなやはの意也
後二十　もろともにおきゐし秋の露ばかりかゝらん物と。おもひかけき〔や〕
新八　淺茅はらはかなくおきし草の上の露を形見と。おもひかけき〔や〕
栄花衣の玉　いにしへはおもひかけき〔や〕＝とりかはしかくきん物と。＝のりの衣を
拾三　かりにとてくべかりけり〔や〕＝秋の野の花見る程に日も暮ぬべし
新十四　ちぎりき〔や〕＝あかぬわかれに露おきしあかつきばかりかた見なれと。は
古十八　おもひき〔や〕＝ひなのわかれにおとろへて海士の繩たきいさりせんと。は
後十　おもひき〔や〕＝逢見ぬとをいつよりとかぞふばかりになさんものと。は
古十八　わすれては夢かとぞ思ふおもひき〔や〕＝雪ふみ分て君を見んと。は
後二十　春の夜の夢のうちにもおもひき〔や〕＝君なき宿をゆきて見んと。は
すべて「思ひきや‖のやは皆やはの意也。さて「思ひきやといへばかならずとはと結ぶ外はなき事と思ふはかたくなし。たゞ
とゝのみもむすべり

来花去の玉 おもひき〔や〕＝ふぢのころもをほども なくふたつ重ねて涙かけんと。
これはたゞととゞめたり 又とは＝た上におけるもあり

後十六 をちこちの人めまれなる山里に家居せんとはおもひき〔や〕＝君

千十五 うき人を忍ふべしとはおもひき〔や〕＝わがこゝろさへなどかはるらん
又上にとこのみおけるもあり

新十 年たけて又こゆべしとおもひき〔や〕＝命なりけり佐夜の中山
又上にと、いひて下にも又とはといへるも有。これはいかにぞや聞ゆ

後廿 かけてだにわが身のうへと思ひき〔や〕＝こん年春の花を見じとは
すべて「思ひきやは過し方をいひ。【きは過去にてしと同意也】「思はずよは今の事をいひて。其意異なるを、一つ意と思ひ居る人もあるは誤也、末の撰集の中にも。「思ひきやとあるべき所を。「思はずよとよめる哥ありひがこと也、必わきまふべき事也

○やは

古一 春の夜のやみはあやなしうめの花色こそ見えね香〔やは〕かくるゝ。

同二 吹風をなきてうらみよううぐひすは我〔やは〕花に手だにふれたる。

同八 もろともに鳴てとゞめよきりぎりす秋の別れは惜く〔やは〕あらぬ。

同十五 からころもなればば身にこそまつはれめかけてのみ〔やは〕戀んと思ひし。

同十八 野となならばうづらと鳴て年はへんかりにだに〔やは〕君はこざらん。

同十四 そこひなき淵〔やは〕さはぐ＝山川の淺き瀬にこそあだ波はたて

同十六 時しもあれ秋〔やは〕人の別るべき＝あるを見るだにこひしきものを

同 ぬるがうちに見るをのみ〔やは〕夢といはん。＝はかなき世をもうつゝとは見ず

後拾十一 かくとだにえ〔やは〕いぶきのさしも草＝さしもしらじなもゆる思ひを

金八 津の國のまろ〔やは〕人をあくた川＝君こそつらき瀬には見えしか

此哥は芦のまろ屋の事を「我やはといふ意にいひかけたり

やは二つある哥

大和物語 いさゝめに吹風に〔やは〕なびくべき。＝野分過しゝ君に〔やは〕あらぬ。

右の哥共はみな中におくやは也。結びやと同じ。これより下なるはみな切るゝやはなり

古二 ちる花のなくにしとまる物ならば我うぐひすにおとらまし〔やは〕

同十四 いそのかみふるの中道なか／＼にみずば戀しと思はまし〔やは〕

同八 かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人をこゝろにおくらさん〔やは〕

同十九 思ひけん人をぞともにおもはましまさしやむくいなかりけり〔やは〕

後四 色といへばこきもうすきも頼まれずやまとなでしこちるよなし〔やは〕

新十五 數ならばかゝらまし〔やは〕＝よの中にいとかなしきはしづのをだまき

同四 たへて〔やは〕＝思ひありともいかゞせんむぐらの宿の秋のゆふぐれ

此哥のやはめづらしきつかひざま也。下へつゞくやうなれど。つゞきてはてにをはとゝのはず。切れて意をふくめるやは也

千十四 人づてはさしも〔やは〕。とも思ふらん見せばや君になれるすがたを

これはやはと切れたるをとと受てつゞけたり　〇續後拾遺十七好忠「あればいとふなければ忍ぶ世中に我身ひとつはすみわびぬやは。此やはは心得ず。歎息（なげき）のやにはを添たるにやとよとあらまほしきところ也

又一格

古一 さくら花春くはゝれるさしだにも人のこゝろにあかれ〔やは〕せぬ。

同二 ほとゝぎす聲も聞えず山びこはほかに鳴音をこたへ〔やは〕せぬ。

新十五 おもひやるこゝろも空にしら雲の出たつ方をしらせ〔やは〕せぬ。

いせ集 秋の野に出ぬさきくを花ずゝき忍びに我をまねき〔やは〕せぬ。

源氏みをつくし うちつけのわかれをゝしむかどにて思はん方にしたひ〔やは〕せぬ。

同藤のうらは 我宿の藤のいろこきたそかれに尋ね〔やは〕せぬ。＝春のなごりを

後十一 道しらでやみ〔やは〕＝しなぬ。＝逢坂の關のあなたはうみといふ也

作の哥どものやはは一つの格にて。初學の輩の心得がたく思ふと也。古今の「あかれやはせぬは。何とてあかれぬ事ぞ。あかれよかしといふ意。「こたへやはせぬは。何とてこたへぬこぞ。こたへよかしといふ意也。其外のもこれになぞらへて心得べし。後撰なる「やみやにしなぬも「やみやはせぬといふと同意の辞なり。

○やの意のやは

新十九 おく霜に色もかはらぬ柳葉の香を〔やは〕人のとめてきつらん。

古十八 よの中はむかしより〔やは〕うかりけん。＝我身ひとつのためになれるか

拾十一 よそにのみ見て〔やは〕こひん。＝くれなゐの末つむ花の色にいでずば

同十二 かづらきや我〔やは〕久米の橋つくり。＝あけゆく程は物をこそおもへ

後拾十三 なみだ〔やは〕又もあふべきつまならん。＝なくより外のなぐさめぞなき

右はみななかばにおくやはなり　切るゝやはは

後拾十九 わすられぬ人の中には忘れぬをまつらん人の中にまつ〔やは〕

すべてやはは。やにはを添たるのみにて。本はたゞやとのみいふと同意也。故に古へはより來るまゝにや共

やはとも通はしていへり。【ここにいふもこそはといふも同じきがごとし】然れども後世になりては。やはたゞ疑ひの辭。やはは意のうらへかへる辭にて。別なるが如くなれる故に。今もしばらくこれを分ちて。やはゝ意やの意とはいへり。

万葉にはもを添てやもといへるとおほし。これもたゞやの意にも。やはの意にも通はしてよめり。萬葉にやはといへるとはをさ〳〵見えず。九の巻に「まつがへりしひにてあれやは」云々などあるのみ也。八の巻に「おもやは見えん」とあるは。文字のあやまりと見ゆ。

○ばや

古 四 天の川紅葉を橋にわたせ〔ばや〕たなばたつめの秋をしもまつ。

同 十二 久かたの月のかつらも秋はなほ紅葉すれ〔ばや〕てりまさるらん。

同 十二 夕されはほたるよりけにもゆれども光見ね〔ばや〕人のつれなき。

後 九 塩みたぬ海ときけ〔ばや〕よとゝもに見るめなくして年のへぬらん。

古 十二 思ひつゝぬれ〔ばや〕人の見えつらん。夢としりせばさめざらましを

右のごとくなるばやはみなばにやといふ意也

また

千 十三 くれなゐにしをれし袖もくちはてぬあら〔ばや〕人に色も見すべき。

万 十一 ころもしもおほくあらなんとりかへてきな〔ばや〕君が面わすれたらん。

六帖 いせ物語 秋の夜の千夜を一よになずらへて八千夜しね〔ばや〕あく時のあらん。

古 一 心あてにをら〔ばや〕をらん。初霜のおきまどはせるしら菊の花

續後 三 八條院高倉 さきもあへず枝にわかるゝさくら花いは〔ばや〕しらん。おもふこゝろも

ほのかにも見〔ばや〕なぐさむと思ひしに心をしらぬこゝろなりけり

右の如くなるばやは。やもじを下の語の切るゝ所へうつして。かにかへて見れば。よく聞ゆる也。「あらばや人に色も見すべきは「あらば人に色も見すべきか也。「きなばや君が面わすれたらんは「きなば君が面わすれたらんか也。「八千夜しねばやあく時のあらんは「八千夜しねばあくときのあらんか也。「をらばやをらんは「をらばをらんか也。「いはゞやしらんは「いはゞしらんか也。「見ばやなぐさむは「見ばなぐさむか也皆かくのごとく心得て其意明らか也○新古今十八西行「いかゞすべき世にあらばやはよをもすてゝあなうの世やとさらに思はん。是は世にあらばといひて。やは「あはれなどいふやうの歎息の辞也。されど此辞は哥には例なく。聞よからず。西行哥には此外もあり。又新千載一「袖ふれてならばやをらんわぎもこがすそひく庭ににほふ梅がえ。これは右に引る古今集の哥をあしく心得て誤れる也。此哥にては「をらばやとのみにてよろしきを。下の「をらんといふ詞あまれり。又新後拾遺九「いにしへも今もあらばやわがごとく思ひつきせぬわかれする人

これはめやをばやと寫しあやまれるなるべし

○右の外に願ふ意のばやあり。下の雑やの部に出せり

○めや　めやは　めやも　らめや

すべてめはんのはたらける辞にて。めやはんやはの意也。いづれも意のうらへかへるときに用ふ。

古 五　うゑしうゑば秋なき時やさかざらん花こそちらめ根さへかれ〔めや〕

同 十三　さゝのはにおく初霜のよを寒みしみはつくとも色にいで〔めや〕

同 十二　秋なれば山とよむまで鳴鹿にわれおとら〔めや〕獨ねる夜は

同 十五　こ〔めや〕とは思ふものからひぐらしの鳴夕ぐれはたちまたれつゝ

拾 一　散そむる花を見すてゝかへら〔めや〕おぼつかなしと妹はまつ共

新 三　わすれ〔めや〕あふひを草に引むすびかりねの野べの露のあけぼの

○玉のを四

古 十一 たねしあれば岩にも松はおひにけりこひをしこひばあはざら〔めやは〕

同 十四 みよしのゝ大河の邊の藤なみのなみにおもはゞわがこひ〔めやは〕

後 十二 けふそへにくれざら〔めやは〕と思へどもたへぬは人のこゝろなりけり

古 墨滅 山しなの音羽のたきの音にだに人のしるべくわがこひ〔めやも〕

續古 十二 定家卿 あだ波の高師のはまのそなれ松なれずばかけてわがこひ〔めやも〕

新 一 今さらに雪ふら〔めやも〕かげろふのもゆる春日と成にしものを

・めやもは萬葉にいとおほしめやはと同意也万葉にはめやはといへるはひとつもなし

古 十二 津の國のなにはのあしのめもはるにしげきわが戀人しる〔らめや〕

後 十八 あし引の山下とよみなくとりもわがごとたえず物おもふ〔らめや〕

後拾 十二 しる〔らめや〕身こそ人めをはゞかりの關になみだはとまらざりけり

らめやはらんやはの意なり

○れや　五くさ

古 四 秋の野におくしら露は玉な〔れや〕つらぬきかくる蜘のいとすぢ

同 里はあれて人はふりにしやどな〔れや〕庭もまがきも秋の野らなる

同 十 くべきほどときすぎぬ〔れや〕待わびて鳴なる聲の人をとよむる

同 十一 いせの海につりする海人のうけな〔れや〕心ひとつを定めかねつる

同 うき草のうへはしげれる淵な〔れや〕深きこゝろをしる人のなき

同 十二 わが戀はみ山がくれのくさな〔れや〕しげさまされどしる人のなき

同 十五 すまのあまの塩やき衣のをさをあらみまどほにあ〔れや〕君がきまさぬ

同 十七 咲そめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる

同 十八 水のおもにおふるさ月のうき草のうき事あれやねを絶てこぬ

後 五 ひぐらしの聲きく山のちかけれや鳴つるなへに入日さすらん

同 八 天の川冬はこほりにこぢたれや岩間にたぎつ音だにもせぬ

同 十七 しら雲のきやごる峯の小まつ原枝しげゝれや日の光見ぬ

千 十一 おぼつかなうるまのしまの人なれやわが言の葉をしらずがほなる

右のれやは皆ればにやといふ意也。然るにそのにを畧きてればやといへる例は。外にもつれにおほきを、又そのばをも畧きてれやといへる例も。萬葉には外にもつれにおほし。ゆけばやをゆけやといひ。思へばやを思へやといへるたぐひ是也。さて此れやは語切れず下へつゞきて。とぢめは皆やの結びなり。

古 十九 せどう歌 春されば野べにまづさく見れどあかぬ花まひなしに只なのるべき花の名なれや

同 十一 思ふともこふともあはんものなれやゆふてもたゆくとくる下ひも

源氏 さわらび しほたるゝ海士のころもにことなれやうきたる波にぬるゝわが袖

右のれやは皆りやはといふ意にて。「花の名なれやは。「花の名なりやは只なのるべき花の名にはあらずとやらに。意のうらへかへるてにをは也。皆これになずらへてさとるべし。此格のれや萬葉には猶おほし。七の巻古風の部に出せり。さて此れやはみな切るゝ辭にて。下のとぢめはやにかゝはらず。

古 十三 風ふけば波うつ岸のまつなれや根にあらはれてなきぬべらなり

後 十二 うつゝにもあらぬこゝろはゆめなれや見てもはかなき物をおもへば

同 十五 ひるなれや見ぞまがへつる月影をけふとやいはん昨日とやいはん

拾 六 わかれぢは戀しき人のふみなれやがてのみこそ見まくほしけれ

後拾十一　みつしほのひるまだになき浦なれや—通ふ千鳥の跡も見えぬは
同十九　川かみやあらふの池のうきぬなはうき事あれや—くる人もなし
金九　世中はうき身にそへるかげなれや—思ひすつれどはなれざりけり
詞七　影見えぬ君はあま夜の月なれや—出ても人にしられざりけり
同　わが戀はよしのの山の奥なれや—おもひいれ共あふ人もなし
同　むねはふじ袖は清見が關なれや—けぶりも波もたゝぬ日ぞなき
千十七　跡たえてよをのがるべきみちなれや—岩さへ苔の衣きにけり
新十　あけば又こゆべきやまの峯なれや—空行月の末のしら雲
同十五　やはらぐるひかりにあまる影なれや—いすゞ川原の秋のよの月
玉葉一　花なれや—外山の春の朝ぼらけあらしにかをる峯の白くも
新万下　わが身をばひごつ朽木になしたれや—ちゞの春にもおへるかひなし
六帖　あだ人のこゝろは空の神なれや—雲ゐるにのみもなりまさる哉

右のれやは皆りやと疑ふ意也　さて皆切るゝやにて、とゞめはやの結びにかゝはらず。さて右の内に、ればにやの意なると まがひて聞ゆるもおほけれ共、ればにやの意なるは、下へつゞきて、必やの結びにてとゞむる也。此りやの意なるは、切れて、下はやの結びにあらず。これをもて分つべし。萬葉十に「もゝしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝにつどへる」これはいとまあればにやの意にて、切れざる故に、留りやの結びなり。然るを閑吟集又新古今には下句を「さくらかざしてけふもくらしつ」と改めて入られたり。此時は「いとまありやといふ意にて、やにて切るゝ也。故に留りやにかゝはらず　これもとがめの辞にて分つべしよくせずはまよひなん

古十七　たがために引てさらせる布なれや—よをへて見れどとる人もなき

詞八 あれにけりあはれいくよの宿なれや〔れや〕すみけん人の音づれもせぬ
拾十六 春くれば瀧のしら糸いかなれや〔れや〕むすべ共猶沫に見ゆらん
千五 さをしかのつまごふ聲もいかなれや〔れや〕ゆふべは分てかなしかるらん
新勅五 ころもうつひゞきは月のなになれや〔れや〕さえゆくまゝにすみのぼるらん

右のれやは皆、上になにいく、何などいふ詞をおきて、下をその結びにてとぢめたる中間にあり、もとじなほにかへて見れば心得やすし

後十九 草まくらゆふてばかりはなになれや〔れや〕露も涙もおきかへりつゝ
新勅十二 程もなくこふるこゝろはなになれや〔れや〕しらでだにこそ年はへにしか
新六 神無月しぐるゝころもいかなれや〔れや〕空に過にし秋の宮人
詞十七 山かげにすまぬこゝろはいかなれや〔れや〕をしまれている月もあるよに

右のれやは皆、上に何などいふ詞有て、それにて詞るゝ也、故に下は何〻の結びにかゝはらず。一首〻なになれやはなにゝなるぞ也「いかなれやはいかにてあるぞ」といふ意也

右五くさのれや、皆同じ詞の格にて、意はおの〳〵異也。よく〳〵ずはまがひぬべし。又切るゝと切れざるとによりて、留りもやゝ変るとうけざるとのかはり有。よくわきまふべし。

〇右の外になにゝ歎息のやにもくさ〴〵のれやあり下に出せり。

〇やぞ

後九 はかなくて同じこゝろに成にしをおもふがごとはおもふらん〔やぞ〕
此詞の留り信明家集にはやいとあり。中務集には後撰に同しくやそと有
拾三 年にありて一夜妹にあふ彦星も我にまさりて思ふらん〔やぞ〕

蜻蛉日記　世中をはかなきものとみさゝきのうもるゝ山になげくらん〔やぞ〕

同　宿見ればよもぎの門もさしながら有べきものとおもひけん〔やぞ〕

後拾遺集　澤水におりぬる影を見るたづの鳴音雲ゐにきこゆらん〔やぞ〕

好忠集　夏ぎぬの有しながらも冬の夜はせなとしねなば寒からん〔やぞ〕

同　よの中をうしとらいはゞかた時もありへなん〔やぞ〕忍ぶればこそ

此やぞといふことば。萬葉古今などにも見えず。又後拾遺よりこなたの集にもすべて見えず。きゝよくもあらぬ辞なり。

○やといひてとすらんと結ぶ格

後十九　もみぢ葉をぬさとたむけてちらしつゝ秋と共に〔や〕ゆかんとすらん

此例の哥はなほ六の卷らんの部にあまた出たり

○やらん

千五百番　谷がくれ木葉が下のうもれ水こほれば〔やらん〕おとづれもせぬ。

夫木慈鎭　春の野にふご手にかけてゆくしづのたゞなど〔やらん〕物あはれなる

すべてやらんといふはいやしき辞にて。哥にも文にもふるくは見えず。今の世の人これをよき詞と思ふはひが心得也。右の千五百番の哥合の哥も。むげにをさなしと難ぜられたり。

はじめよりこれまでの條々はみな疑ひのやなり

○歎息(なげき)のや【なげきとは。後世にはたゞうれひかなしむ事にのみいふめれど。さにあらず。うれしきにもおもしろきにもあはれなるにもわたりて。すべて心に深く感ぜらるゝ時に。長く息をつく事也。さて此やは。その歎息の聲なる故に。今かりに歎息のやといひて事をわかてり。】

古十一 あしがものさわぐ入江のしら波のしらず〔や〕人をかくこひんとは

同十九 思へどもおもはずとのみいふなれはいな〔や〕思はじおもふかひなし

後十八 よの中はいかに〔や〕いかに風の音をきくにも今は物やかなしき

拾六 をしむとも かたし〔や〕わかれ心なるなみだをだにもえやはとゞむる

後拾十六 ねぬなはのねぬ名のいたく立ぬればなほ大澤のいけらじ〔や〕よに

金八 音にきく高師の濱のあだ波はかけじ〔や〕袖のぬれもこそすれ

新二 うらみず〔や〕うき世を花のいとひつゝさそふ風あらはと思ひけるをば

同三 きかでたゞねなまし物をほとゝぎす中々なり〔や〕よはの一聲

同八 あはれなるわが身のはて〔や〕淺みどりつひには野べの霞とおもへば

同十 人をなほうらみつべし〔や〕都鳥ありやとだにもとふをきかねば

古廿 かひが根をねこし山こし吹風を人にもがも〔や〕ことつてやらん

万五 あまとぶや鳥にも。がも〔や〕みやこまでおくりまをしてとびかへるもの

金七 池にすむわか名をゝしのとりかへす物にも。がな〔や〕人をうらみじ

狭衣 あさりする海士とも。がな〔や〕わたつ海の底の玉藻もかづき見るべく

後十五 しら川のたきのいと見まほしけれどみだりに人をよせじ物を〔や〕

件の哥共のやみな歎息のやにて。これを除(のぞ)きても意は同じことなれ共。此もじにてその情深くなる也。或はよ或はななどに通ひ。又かなといふ意にも通へり。右の外古今二「なけや鶯。同三「やよやまて。後拾遺三「いそげやさなへ。詞花三「そゝや秋風。などのや。又「いでや「いさや「よしやの類。又「はかなしや「こゝわりや「かひなしや「あさましや「めづらしや「わりなしや「うらめしや「くるしやなどの類のやも

○玉のを　四

みな同じ。

万葉にも十の巻に「本つ人ほとゝぎすをや。此をやはよやといふに同じくて。同じ歎息のや也。又十二に「わぎもこや。十六に「だんをちや。十九に「ゆめよるた人やなどいへる皆同じ

又一つの格

後拾十二　いかにせんあなあやにくの春の日〔や〕よはのけしきのかゝらましかば

金八　花うるしこやぬる人のなかりけるあなはらぐろの君がこゝろ〔や〕

千三　五月雨はこまのしづくに袖ぬれてあなしほたれの波のうきね〔や〕

これらは上にあなといひのと受てやと結べり。これも歎息のやなり

また

六帖　玉だすきかけねばくるしかけたればあなわづらはし人のこゝろ〔や〕

此哥は中にのもじなく又「わづらはしにて語切るゝ故によくもとゝのはず

また

詞十　朝な〳〵鹿のしがらむ萩がえの末葉の露のありがたのよ〔や〕

新十五　あふこ見てこゝぞ共なく明にけりはかなの夢のわすれかたみ〔や〕

同十六　おのがはに同じ末葉ぞしをれぬる藤さく田子の恨めしの身〔や〕

同十　ふしわびぬしのゝ小篠のかりまくらはかなの露〔や〕一夜ばかりに

これらはあなといはず。たゞのとのみいひて　やと結べり。但しのを二つたゝみたるがおほき也

○はや　此ははわの如くよむ也

拾六　君がすむやどのこずゑのゆく〳〵とかくるゝまでにかへり見し〔はや〕

六百番 顯昭　夜川たつ五月きぬらしせゞをとめ八十こものをもかゞりさす「はや」

此はやはいと古き辞にて。古事記日本紀に倭建ノ命の御詞に「あづまはや」と見え。其外もこれかれおほし。七の巻古風部に出せり。又源氏物語などの文にもおほし。それを者也（ハヤ）と釋せるはあたらぬことなり。

○れや

後十六　世中はうきものな「れや」＝人言のとにもかくにもきこえぐるしき

詞九　あだ人はしぐるゝよはの月な「れや」＝すむとてえこそ頼むまじけれ

千十一　あら礒のいはにくだくる波な「れや」＝つれなき人にかくるこゝろは

新一　雨ふれば小田のますらをいとまあ「れや」＝苗代水を空にまかせて

同六　津の國のなにはの春はゆめな「れや」＝あしの枯葉に風わたる也

同十三　有明はおもひ出あ「れや」＝よこ雲のたゞよはれつるしのゝめの空

六帖　わが戀はそらなる星のかずな「れや」＝人にしられで年のへぬれば

同 いせ物語　秋の夜は春日わするゝものな（成）「れや」（いせ眞字本者）＝かすみに霧やちへまさるらん

これら「なれやは「なりといふに歎息のやを添たる意「あれやは「ありといふに同やを添たる意にて。「なれやは「なるかな。「あれやは「あるかなの意にかよへり

後拾三　ありあけの月だにあ「れや」＝ほとゝぎすたゞ一こゑのゆく方も見ん

新勅十二 隆季卿　逢坂の關のせきもりこゝろあ「れや」＝岩間の清水影をだに見ん

續古十六 朝忠卿　夢かとぞわびてはおもふたまさかにとふ人あ「れや」＝又やさむると

これらの「あれやは。「あれと願ふ言に。歎息のやを添たるにて。「あれなとなを添るに同じ。此「あれや万葉にも見ゆ。七の巻古風部に出せり

○玉のを四

評釋五 後京極
ひとりねのよさむになれる月見れば時しもあ〔れや〕‖衣うつ聲

堀川後百首
時しもあ〔れや〕‖みなぶち山を朝ゆけばこのもかのもにかはづ鳴なり

これらは「時しもあれと常にいふ言なるに。歎息のや‖を添たる也。堀川後百首の哥は。やもじなくて調べよろしきを。いかなればわづらはしく添たりけん。いと心得ず。これを夫木集には「時もあれやと有り。これもわろし ○堀川百首に「こゝろこそ心をころす物なれや‖思はぬ人を何思ひけん。是はこその結びになれといへる下へや‖を添たり。とゝのへり共聞えず。

すべてなれや‖ あれや‖ などいへるれや‖は。疑ひのや‖なるもくさ〴〵有て。上にあげたるが如し。又歎息のや‖なるも右のごとく種々あり。いとまぎれやすし。おの〳〵其哥の意をよく味ひてわきまふべき也。

○ぞや‖ 三の卷ぞの部に出せり

○かや‖ 四の卷かの部に出せり

これまでの條々はみな歎息(なげき)のや‖なり【いづれも下の結びはや‖にかゝはることなし】

○雑のや‖

○一つのや‖

「すがはら〔や〕伏見の里 「大原〔や〕をしほの山 「かづらき〔や〕高間の山 「さらしな〔や〕姨すて山 「さゝなみ〔や〕しがの浦

これらのたぐひは。地名を重ねいふ時に。中におくや‖にて。のといふに通へり。これは上と下との地名別所なるを。二つならべいふにはあらず。上なるは廣くして。下なるは其中にある地名也。然るに「かづらきや高間の山などを。「かづらきと「たかまと二所と心得るはひがこと也。葛城の内にある高間山也 ○拾遺十二「かづらきや我やはくめの橋つくり云々。これは「我やはといふ詞をへだてゝ。「久米へかゝれり。めづらし

また

「あふ坂〔や〕「いせの海〔や〕「しがのうら〔や〕「なにはえ〔や〕

かくのみいひて下へ地名を重ねざるもつねのとなり

また

「しき嶋〔や〕やまと「おしてる〔や〕難波「神風〔や〕いせ

此たぐひは。上は枕詞にて下は地名也。古風にも「さひづるや‖から「あまとぶや‖かるなどよめり。但し千五百番哥合に「たまほこや‖「ものゝふや‖などよめるをば難ぜられたり。まとにこれらは聞よからずかし

又

後拾遺「榊葉〔や〕　同「ゆふしで〔や〕　新古今「さむしろ〔や〕　同「天の戸〔や〕　同「荻の葉〔や〕　また「にほてる〔や〕「山陰〔や〕「杣山〔や〕「淺茅生〔や〕

此たぐひいとおほし

○のや‖　三の巻のゝ部に出せり

○一つのや‖

古今序「なには津にさく〔や〕この花　同 十一「ほとゝぎすなく〔や〕さ月の　同 十一「夕月夜さす〔や〕岡べの

拾 十三「なはをなみねる〔や〕ねりその　新 二「柴の戸をさす〔や〕日影の　同 五「きり〴〵すなく〔や〕霜夜の

新勅 十三「ゆふなぎにやく〔や〕もしほの

此たぐひ猶いとおほし

新 三　おのがつまこひつゝなく〔や〕五月やみ神なみ山の山ほとゝぎす

玉 六 定家卿　あともなき末野の竹の雪をれにかすむ〔や〕けぶり人は住けり

これらのや‖も上なると同じとながらいさゝかいひざまかはれり

○玉のを四

○玉のを四

また

拾 二 花ちるといとひし物をなつ衣たつ〔や〕おそきと風をまつ哉

後拾 一 春霞たつ〔や〕おそきと山川のいはまをくゞる音きこゆなり

此やはもと疑ひのやにて。夏衣をたつがおそき歟と疑ふばかりまちかねたるやうに。いつしかとはや風をまつといふ意也。春霞の哥もその意也。故に下をやの結びにきといひてと受たり。然れども此やはいと輕く聞えて。うちまかせては疑ひ共なきが如くなる故に。しばらくこゝに出せり。

○物二つの間にはさむや

風十七 藤原惟規 なにとなく花〔や〕紅葉を見る程に春と秋とはいくめぐりしつ

此哥の外に「花や紅葉とよめると。撰集には玉葉十九に光俊朝臣の哥。又風雅八に後鳥羽院御製などあるのみにて。外には見えず。撰集の外には頼政卿集小侍従が哥に。「雪とだに見るべき花のなどやさは雨やみぞれとふらんとすらん。又詞には大鏡に。「哥や詩などを云々。又「忠岑や躬恒などは云々。童蒙抄に「久かたとは月や空などをこそよめれ云々。などあり。すべて此やは。今の世にはあまねくよむ事なれ共。ふるき哥にをさ〳〵見えず。いやしげなる辞也 ○枕册子に「みな人は花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞしりける。源氏物語などにも「花やてふやといふとあり。これは「花よてふよといふに同じくて歎息のやなり。故に下の蝶にもいへり。語のいひざまも異なり。思ひまがふべからず。又上に出せる「かづらきや高間の山などをも。此「花や紅葉などのやと同じ格と心得るもひがとなり。

○ばや これはかくあらまほしと願ふ辞也

古 三 さ月こばなきもふりなん郭公まだしきほどの聲をきか〔ばや〕

後 三 あたらよの月と花とを同じくはあはれしれらん人に見せ〔ばや〕

後拾 一 こゝろあらん人に見せ〔ばや〕津の國の難波わたりの春のけしきを

同 十一 霜がれの冬野にたてるむらずゝきほのめかさ〔ばや〕おもふこゝろを
同 十四 わが袖を秋の草葉にくらべ〔ばや〕いづれか露のおきはまさると
仝 七 よとゝもに玉ちる床のすがまくら見せ〔ばや〕人によはのけしきを

右の外「しらせばや」「もらさばや」など猶おほし

又

「見せ〔ばや〕な」「きか〔ばや〕な」「いは〔ばや〕な」「とは〔ばや〕な」「ゆか〔ばや〕な」

右のごとく下になを添てもいへり

また

「見せな〔ばや〕」「やみな〔ばや〕」「いりな〔ばや〕」

かくのごとくなを上にもおけり。但し下に添るなと。上におくなとは同じからず。そのたがひは五の巻なの部にくはしくいへり

右條々雑のやなり。いづれも切るゝ故に下の結びにはかゝはらず

〔か〕

○すべてかはやに似たる辞にて。やと通はしいひてよき所もおほし。故に萬葉にはやといふべき所をかといへる事おほし。されど又かならずやといふべき所と。必かといふべき所と。たしかに分れたるも多し。みだりにはつかひがたし。

古 十 みよし野のよしのゝ瀧にうかび出る沫を〔か〕玉のきゆと見つらん
新勅 四 万 八 あすか川ゆきゝの(たむ 万)岡の秋萩はけふふる雨にちり〔か〕過なん
同 ふるさとの本あらの小萩いたづらに見る人なしにさき〔か〕ちるらん

源氏明石　おもふらんこゝろのほどややよいかにまだ見ぬ人のきく〔か〕なやまん‖

古十一　おく山の菅のはしのぎふる雪のけぬと〔か〕いはん‖＝戀のしげきに

千六　いもがりとさほの川邊を分ゆけばさよ〔か〕更ぬる‖＝千鳥なく也

新二　かはづなく神なみ河に影見えて今〔か〕咲らん‖＝山ぶきの花

新勅十二　いたづらにいく年波のこえぬらんたのめ〔か〕おきし‖＝末の松山

源氏宿生　よそへてぞ見るべかりける白露のちぎり〔か〕おきし‖＝朝皃の花

右の哥共のか‖は。語のなかばに在て。やに通ひて。結びもやの格に同じ

又

後八　物おもふと過る月日もしらぬまに今年もけふにはてぬと〔か〕きく‖

新五　いつのまに紅葉しぬらん山ざくらきのふ〔か〕花のちるを、しみし‖

同十七　世をそむくところと〔か〕きく‖＝おく山は物思ひにぞ入べかりける

右の哥共のか‖は。結びはやの格に同じくて。やには通はず。かもじをやらんと譯して聞ゆる也

また

拾十一　命をばあふにかふと〔か〕きゝしかどわれやためしにあはぬしにせん

後拾十一　あふみに〔か〕ありといふなるみくりくる人くるしめのつくま江の沼

同十九　みゆきと〔か〕よにはふらせて今はたゞこずゑの櫻ちらすなりけり

これらのか‖も‖やらんの意なるとは上に同じくて。結びをたしかに結ばず

○切る、か‖　語のとぢめにおくか‖なり

古十五　夕さればひなきとこをうちはらひなげかんためとなれる我身〔か〕

同 十七 わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる船のかいのしづく〔か〕

同 十八 世中はむかしよりやはうかりけんわが身ひとつのためになれる〔か〕

後 十七 わがためにをきにくかりしはし鷹の人の手にありときくはまと〔か〕

拾 十七 水のおもにやどれる月ののどけきはなみゐて人のねぬよなれば。〔か〕

古 五 秋の月山べさやかにてらせるはおつる紅葉の数を見よと。〔か〕

同 かれる田におふるひつちのほに出ぬはよを今さらにあきはてぬと。〔か〕

万葉には「らんか」「なんか」などいへる留り多しその例は古今集よりこなたには見えず拾遺八に「塩みつらんか」などあるは万葉の哥なり

古 二 春雨のふるはなみだ〔か〕＝さくら花ちるををしまぬ人しなければ

同 四 秋の野の草のたもと〔か〕＝花ずゝきほに出てまねく袖と見ゆらん

後 十 わが袖は名にたつ末のまつ山〔か〕＝空より浪のこえぬ日はなし

詞 八 御かり野のしばしのこひはさもあらばあれそりはてぬる〔か〕＝やかたをの鷹

後拾 四 明ぬる〔か〕＝川瀬の霧のたえ〴〵にをちかた人のそでの見ゆるは

新 十四 絶ぬる〔か〕＝影だに見えばとふべきをかたみの水はみくさゐにけり

又新古今のころは句の中にもおける哥おほし花やかなるものなり

新 五 きり〴〵す夜寒に秋のなるまゝによわる〔か〕＝聲のとほざかりゆく

同 あけぼのや河瀬の波のたかせ船くだす〔か〕＝人の袖の秋ぎり

同 六 うつりゆく雲に嵐の聲すなりちる〔か〕＝まさきのかづらきの山

同 十七 我ながら思ふ〔か〕＝物を。しとばかりに袖にしぐるゝ庭のまつ風

此哥などは詞を下上にうちかへしたる故にいよ〳〵花やか也

又

同十五 ゆめ〔か〕とよ見し面影も契りしもわすれずながらうつゝならねば

此かも切るゝかなるを下へとよといふ辞を添たり

また

同四 月をなほまつらんもの〔か〕むら雨のはれゆく空の末のさと人

これはものといふ言に意なしたゞ「まつらんかといふ意也

また

同八 いせ物語 しら玉〔か〕なにぞと人のとひし時露とこたへてけなまし物を

かくもよめり

すべて語のとぢめにおきて切るゝかの上は。つゞく格の辞より受る定まり也。又やの部にいへる如く。切るゝやの上は。切るゝ格の辞より受る定まり也。これやとかとの格のかはり也。一二例をいはゞ。切るゝやは。「ありやなしやといひ。かは「あるか「なきかといふ。【「ある「なきはつゞく格の辞「あり「なしは切るゝ格の辞也】又切るゝやは。「見ゆや「きこゆやといひ。かは「見ゆるか聞ゆるかといふ。いづれの言も皆これらの格也。准へてさとるべし。猶四の巻やの部の切るゝやの條に委くいへり。

後拾三 きかばやなそのかみ山の郭公有しむかしのおなじこゑ〔か〕と。

金八 あはずともなからん世には思ひ出よ我ゆゑいのち絶し人〔か〕と。

古一 みよし野の山べに咲るさくら花雪〔か〕とのみぞあやまたれける

同三 夏の夜のふす〔か〕とすればほとゝぎすなく一聲にあくるしのゝめ

同 六 浦ちかくふりくる雪はしらなみの末のまつ山こす「か」とぞみる

同 十四 玉ぼこの道はつねにもまどはなん人をとふとも我「か」と思はん

右の哥共はかにて切れたるをとと受て下へつゞけたる也

○かを重ぬる格

古 三 こぞの夏なきふるしてしほとゝぎすそれ「か」あらぬ「か」聲のかはらぬ

同 十八 よの中は夢「か」うつゝ「か」うつゝともゆめ共しらず有てなければ

後 十六 あはれともうし共いはじかげろふのある「か」なき「か」にけぬる身なれば

拾 七 津の國のなにはわたりにつくる田はあし「か」なへ「か」とえこそ見わかね

同 十八 いきたる「か」しぬる「か」いかにおもほえず身より外なる玉くしげかな

新 十七 わがよをばけふ「か」あす「か」とまつかひの涙の瀧といづれたかけん

同 十八 おもふべきわが後の世はある「か」なき「か」なければこそは此世にはすめ

これらは二つ重なれる。つれの事也

又三つは

古 五 秋風のふきあげにたてるしら菊は花「か」あらぬ「か」波のよする「か」

新 十七 はるゝ夜の星「か」河邊のほたる「か」もわがすむかたのあまのたくひ「か」

万 十二 うつゝに「か」妹がきませる夢「か」もわれ「か」まどへる戀のしげきに

此萬葉の哥なるは中のかは切るゝかにてもの添たる也。上下なる二つは下へつゞくか也

又四つは

古 十三 君やこし我やゆきけんおもほえず夢「か」うつゝ「か」ねて「か」さめて「か」

○玉のを四

新勅十八　おもへたゞ夢〔か〕うつゝ〔か〕わきかねてある〔か〕なき〔か〕になげく心を

此哥は二つづゝ二つ重なれり

〇かはの意のか‖

後拾八　つねならばあはでかへるもなげかじを都いづこ〔か〕人のつげゝる‖

此かは語のなかばに在て下へつゞくかにてかはの意也。此下はみな切るゝかなり

古十七　おいぬとてなどか我身をせめきけんおいずばけふにあはまし物〔か〕

拾廿　うきよをばそむかばけふもそむきなん明日もありとは頼むべき身〔か〕

後十六　かくてのみやむべきもの〔か〕ちはやぶるかものやしろの萬代を見ん

後拾十四　わがこゝろかはらんものの〔か〕かはらやの下たくけぶりわきかへりつゝ

新十四　わすれなばいけらん物〔か〕°と思ひしにそれもかなはぬ此世なりけり

玉四西行　鹿の音をかきねにこめてきくのみ〔か〕月もすみけり秋の山ざと

〇かは‖

古二　こゑたえずなけやうぐひす一とせに二度とだにくべきはる〔かは〕

同四　ちぎりけんこゝろぞつらきたなばたの年に一たびあふはあふ〔かは〕

後十八　みちのくのをぶちの駒も野がふにはあれこそまされなつく物〔かは〕

詞七　くれなるになみだの色も成にけりかはるは人のこゝろのみ〔かは〕

同十　わがおもふことのしげきにくらぶれば信太の森のちえはもの〔かは〕

千九　かなしさをかつは思ひもなぐさめよ誰もつひにはとまるべき〔かは〕

古十一　人めもるわれ〔かは〕あやな花すゝきなどかほに出てこひずしもあらん

後二 立わたるかすみのみ〔かは〕山たかみ見ゆるさくらの色もひとつを

同十四 まぢかくてつらきをみるはうけれどもうきは物〔かは〕戀しきよりは

千三 をちかへりぬることもきなけ時鳥いまいくか〔かは〕さみだれのそら

同十一 もらさばや忍びはつべきなみだ〔かは〕袖のしがらみかくとばかりは

○かの意のかは

千三 あふひ草てる日は神のこゝろ〔かは〕影さすかたにまづなびくらん

新勅八 くればまたわがやどり〔かは〕たび人のかち野の原の萩の下露

古十 花どにあかずちらしゝ風なればいくそばくわがうしと〔かは〕思ふ

同十八 いかならんいはほの中にすまば〔かは〕よのうき事の聞えこざらん

右の外にもなにたれいくなどの詞の下にあるかははすべて皆かの意也

すべてかとかはとは本同意にて。古へは通はし川ひたり。然れども後世には別意なるが如くなる故に。しばらくかはの意かの意と分て擧ると。やとやはとの例のごとし

○かなの意のか

古一 淺みどり糸よりかけてしら露を玉にもぬける春の柳〔か〕

同二 ことむべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふ心〔か〕

同十二 風ふけば峯にわかるゝしら雲の絶てつれなき君がこゝろ〔か〕

同十五 つれなきを今はこひじとおもへども心よわくもおつるなみだ〔か〕

同十七 こゞめあへずうべもとしとはいはれけりしかもつれなく過るよはひ〔か〕

同二 うつせみのよにも似たる〔か〕櫻花さくと見しまにかつ散にけり

同十五 天雲のよそにも人のなりゆく〔か〕さすがにめには見ゆる物から

同十六 うちつけにさびしくも有〔か〕もみぢ葉もぬしなき宿は色なかりけり

同十七 ぬきみだる人こそ有らししら玉のまなくもちる〔か〕袖のせばきに

金三 行人をまねく〔か〕野べの花すゝきこよひもこゝに旅寐せよとや

新四 はらひかねさこそは露のしげからめやごる〔か〕月の袖のせばきに

〇かも‖これはもは添たる辭にてたゞかといふ意也‖

古二 今も〔かも〕咲にほふらんたちばなの小嶋の崎の山ふきの花

拾十三 万十一 あし引の山鳥の尾のしだりをの長々し（長きなが万）夜をひとり〔かも〕ねん

大かた此類の‖かも‖は語の中に在て下へつゞけり〇新續古今五「君のみやあかずかも見んをのゝえの朽にし山の峯のもみぢ葉。是は‖やとか‖と重なれりひがと也

古二 春がすみいろの千種に見えつるはたなびく山の花のかけ〔かも〕

同九 天のはらふりさけ見れは春日なる御笠の山に出し月〔かも〕

同十三 玉くしげあけば君が名たちぬべみ夜深くこしを人見けん〔かも〕

拾十二 かやり火は物おもふ人のこゝろ〔かも〕夏のよすがら下にもゆらん

同万十三 秋の夜の月〔かも〕君は雲がくれしばしも見ねばこゝら戀しき

此たぐひはみな切るゝ‖かも‖也

また

後七 秋の夜に鴈〔かも〕‖なきて渡る也わが思ふ人のことつてやせし

此‖かも‖は下へつゞくやうに聞ゆれども然らず。猶切るゝ也。其故はすべて‖かの結び‖はやと同格なるに。三の句なりとある

は。かの結びにあらず。其上つゞきては哥の意もさだかならざれば也 ○風雅十五「今もかも絶せぬ物か年ごとの秋の半の望月の駒。此「今もかもはたゞ「今もといふ意にて。かもはやすめ辞におかれたりひがごと也。古今の哥の「今もかも咲にほふらんなどのてにをはを。よくもわきまへずしてとられたるなり。すべて「今もかもといふは。もは二つ共にやすめ辞にて「今かといふ意なる物をや

○かなの意のかも

古十七 わたのはらよせくる浪のしば〳〵も見まくのほしき玉津嶋〔かも〕

同二十 霜八度おけどかれせぬ榊葉の立さかゆべき神のきね〔かも〕

此かも萬葉にいとおほし。すべてかの集にはかなといふことはなくして。みなかもとのみいへり。拾遺集などにおほかるもみな万葉の哥也

○めかも

古廿 山科のおとはの山の音にだに人のしるべくわがこひ〔めかも〕

万廿東哥 たちばなの下ふく風のかぐはしきつくはの山をこひずあら〔めかも〕

此外万葉十四の東哥にも二つ三つ有又古今序の文に「今をこひざらめかもと有

○かに

古七 さくら花ちりかひくもれおいらくのこんといふなる道まがふ〔かに〕

同十六 なくなみだ雨とふらなんわたり川水まさりなばかへりくる〔かに〕

拾二 山ざとにしる人もがなほとゝぎすなきぬときかばつげにくる〔かに〕

古二十 まきむくのあなじの山の山人と人も見る〔かに〕山かつらせよ

此かにのかな後世にけ清てよめども本濁るべき辞也万葉にがに共がれともいへるおほし七の巻古風の部に出せり

〇かや‖

玉十　わかるべきとき〔かや〕されば かきくらすわが涙にはあけぬよのそら

小大君集　なのりせでこずゑにこずば郭公春かけてこし鳥と〔かや〕見ん

〇新千載十八忠岑「咲花のはかなかるかやにほひつゝ人の心をあだになすらん。新拾遺廿貫之「秋のゝを分けつゝゆけば花もみなちりかゝるかや袖にしむらん。此二首はかるかやを隠せる哥にてかやは香やなり辞にはあらず

拾七　な。にと〔かや〕くきのすがたはおもほえてあやしく花の名こそ忘るれ

源氏藤末葉　な。にと〔かや〕けふのかざしよかつ見つゝおぼめく迄も成にけるかな

「なにとかやといへる初句此外千載十三新古今十八などにも有

〇何等の下におくか‖ かは同 次の何の部に出せり

〇がなの意のが‖ がも‖ 六の巻かなの部に出せり

〇こその結びのしか‖ ましか‖ 五の巻こその部に出せり

〇しかば‖ ましかば‖ 三の巻ばの部に出せり

〇しかと‖ 五の巻との部に出せり

〔何〕

〇なに‖ なと‖ なぞ‖ たれ‖ たが‖ いかに‖ いかゞ‖ いかで‖ いづれ‖ いづら‖ いつ‖ いく‖ 件の類皆てにをはの結びの格同じき故に一つに合せて何の部とす。【大かた此書に何等といふは。件の辞ともをすべあはせて一つにいへりとこゝろうべし】ひも鏡の頭(かしら)に何と擧たる是也。さてその結びは。いづれも同じく。中の行の段々の辞にて。一の巻に出せる三轉證哥の如し。その證哥には。右の辞共の内。いづれにまれひとつづゝを出せり。それに准へて。此部の内なる辞は。みな同格の

結びこ知べし。
○何の下におくか　かは
何等の辞をおきて。その下の結びこの間に。かもじをはさむと常におほし。「なに　かうらみん。「たれ　か　しらまし。「いつかきなかんなごの如し。又「夢になにかはなぐさまん。「いつ　かは雪の消る時あるなごの如く。かは共おけり。さて此かは。右のごこく何等の下にやがてつゞけてもおき。又言をへだてゝもおけり。「なにをうしこか人のかるらん。「たがまことをか我は頼まんなごの如し。かはも同じ。

後十三　いつまでのはかなき人の言の葉〔か〕こゝろの秋の風をまつらん

同　たがためにわれが命を長はまの浦にやごりをしつゝ〔かは〕こし

かやうに詞をおほく句をへだてゝもおけり。されごその哥の意にしたがひて。おくべき所は必さだまれり心にまかせていづこにも〳〵おく事にはあらず。さればおき所のよろしからぬ哥古へにもこれかれあり。左に出す。

新三　行末をたれしのべこて夕風にちぎり〔か〕おかん宿の立ばな

新勅十八　あはれなご又こ〔か〕影のなかるらん雲がくれても月はいてけり

續後九　かたそぎの行合の霜のいくかへりちぎり〔か〕むすぶ住吉の松

玉十五　いく聲にゆめ〔か〕おごろくあかつきの寐覺の後のかねぞすくなき

万十二　神無月雨の間もおかずふりにせばたが里の間にやご〔か〕からまし

元輔集　萬代の春の子日に出て見ん松はいく度おひ〔か〕かはるこ

源氏椎本　雪ふかみみぎはの小ぜりたがためにつみ〔か〕はやさん親なしにして

件の哥どものかもじは。皆かならず△のしるしの所におくべき意なるを。そこにはおきがたき故に。せんかたなく所をかへて下における物にて。いづれも聞よからず。後世此例をまれぶべきにあらず。○後撰七「などさらに秋かとゝはんからにし

き立田の山の紅葉しるきを。此かはたゞ「秋かといへる辭にて。上のなどにはかゝはらねば別事也

又なにしか　なにしかも　なにしかは　たれしかも　いつしか　いつしかも　なとこもいへるは。しも　ももやすめたる辭にて。たゞなにか　たれか　いつかといふに同じ

近き世の人は。右の如く何等の下におくかもじを誤りて。やといふとおほし。「なにをうしとか人のからんといふへきを。「なにをうしとや人のかるらんといひ。「たがまことをか我はたのまんといふべきを。「たがまことをや我はたのまんとやうによむめり。すべてかゝる所にやとおくは皆ひがこと也又哥ならぬたゞの詞には殊に此誤り多し。「なにゝかといふべきを「なにゝやといひ。「いかなるゆゑにかといふべきを。「いかなるゆゑにやといひ。「たれにかといふべきを。「たれにやとやうにいふ類皆ひがこと也。古へ人の文には此誤りある事なきを。今の世には文よくかくと思ふ人も。をさ〳〵此格を辨へ知れるはなし。すべて何等の下には。やといふとなく。皆かなりと心得べし。【後撰一「春雨にいかにぞ。梅やにほふらん云々。これは「いかにぞにて切るゝ詞なれば。下のや妨なし。續古今四「たれとなく心に人のまたるゝやながむる月のさそふなるらん。これは「たれとゝいへれば。たれのとゝのひは下へ及ばず。源氏眞木柱「かきたれてのどけき比の春雨に故郷人をいかにしのぶや。これはいかにゝて切ルればやもじ妨なし。これらの哥などをあしく見てまどふべからず。千五百番哥合に「春きては霞の衣いくかさね袖師の浦の波やたつらん。此やもじは誤りなり

但しなどや　なぞや　いかにぞや　いづくぞや　なになれや　いかなれや　などは。別に一つの格にて。【これらの格は皆四の卷やの部にしるせり】おしなべての事にはあらず。【又やいかに　やなになどゝ。やもじを上におく格もあり是もやの部にいだせり

〇動かぬ言にて結ぶ何

後拾十一　をぶねさしわたのはらからしるべせよ〔いづれ〕かあまの玉藻かる浦

新 一　いはねふみかさなる山を分すて、花も〔いく〕へのあとのしら雲‖

同 六　ちりかゝる紅葉ながれぬ大井川〔いづれ〕ゐせきの水のしがらみ‖

同 十四　しられじな同じ袖には通ふとも〔たが〕夕暮と頼む秋かぜ‖

貫之集　あけたてばまづさすひもの糸よわみ絶てあはずば〔なご〕いけるかひ‖

後 十二　ちかけれど〔なに〕かはしるし‖逢坂の關の外ぞとおもひ絶なん

後拾 十一　〔いか〕なればしらぬにおふるうきぬなは‖くるしや心人しれずのみ

○いひかけにて結ぶ何‖

金 五　〔いか〕ばかり神もうれしとみ‖(見)かさ山二葉の松のちよのけしきを

同 八　あふみてふ名は高嶋に聞ゆれど〔いづら〕はこゝにく‖(來)る木のさと

詞 八　〔いく〕かへりつらしと人をみ‖くま野のうらめしながら戀しかるらん

新 四　〔たれ〕をかもまつ‖ちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし

同　大かたの秋のねざめの露けくばまた〔たが〕袖にあり‖明の月

同 六　月ぞすむ〔たれ〕かはこゝにき‖の國や吹上の千鳥ひとりなく也

同 十　〔いづく〕にかこよひは宿をかり‖ころもひもゆふ暮の峯のあらしに

同 十六　なれ〳〵て見しはなごりの春ぞとも〔なご〕しら‖(不知)川の花の下陰

同 十八　〔いかに〕して今までよにはあり‖明のつきせぬ物をいさふこゝろは

同 二十　おさにきく君がり〔いつ〕かいき‖の松まつらん物を心づくしに

万 九　瀧のうへの御船の山ゆ秋つべにきなき渡るは〔たれ〕よぶ‖こ鳥

○金葉三「いにしへのなには‖のことを思ひ出て高津の宮に月のすむらん。これは難波をやがてなにてふ辭にいひかけたり‖一

〇切る、何‖の格也　語のとぢめにあり

後 十三　おもふてふことのは〔いかに〕‖なつかしな。後うき物と思はずもがな

拾 十八　いきたるかしぬるか。〔いかに〕‖おもほえず。身より外なる玉くしげかな

源氏 竹河　いでや〔なぞ〕‖数ならぬ身にかなはぬは人にまけじの心なりけり

又下にか‖かは‖を添て切れるもあり

後 十二　よのつねの人のこゝろをまだ見ねば〔なに〕か‖此度けぬべき物を

拾 十五　ひたふるにしなば〔なに〕かは‖さもあらばあれいきてかひなき物思ふ身は

〇右の外にいづら‖といひて切るゝおほし。それは下なるいづら‖の條に別に出せり。又や何‖と上にやもじあるは。四の卷や‖の部に出せり。

〇何‖を重ぬる格

後 十八　世中は〔いかに〕や〔いかに〕風の音を聞にもいまはものやかなしき

拾 八　よのなかをかくいひ〳〵のはて〳〵は〔いかに〕や〔いかに〕ならんとすらん

大鏡 下　此世をも後をも〔いかに〕〔いかに〕せんもえんけぶりもむすぼゝれつゝ

これらはたゞに重ねたるなり

また

後 十八　玉江こぐあしかり小ふねさし分て〔たれ〕を〔たれ〕とか我は定めん

拾 二十　おもひしる人も有ける世中を〔いつ〕を〔いつ〕とて過すなるらん

千 三　わがやどの花たちばなにふく風を〔たが〕里よりと〔たれ〕ながむらん

同 五　「たが」ために「いかに」うてばかからころもちたび八千度聲のうらむる
新 八　「いつ」なげき「いつ」思ふべきことなれば後のよしらで人のすぐらん
同 十五　「いかに」して「いかに」此世にありへばかしばしも物をおもはざるべき
續後五 西行　「なに」ごとを「いかに」思ふとなけれどもとかわかぬ秋のゆふぐれ
万 四　はつ〳〵に人をあひ見て「いか」ならん「いづれ」の日にか又よそに見ん

又相對へて重ねたるもあり

後 二十　故郷に君は「いづら」とまちとはゞ「いづれ」の空のかすみといはまし
拾 九　をりからに「いづれ」ともなき鳥の音も「いかゞ」さだめん時ならぬ身は
後拾 八　「いか」ばかり空をあふぎて歎くらん「いく」雲ゐともしらぬわかれを

○廣田社哥台に「いくとせの春にしられて過ぬらん老木に花はいつかさくべき。俊成卿判に「いくとせと「いつかと重なれるを難ぜられたり。まことにこれはよろしからず。又風雅二「人もなきみ山のおくのよぶこ鳥いく聲なかばたれかこたへん。同十七「露きえんいつのゆふべもたれかしらんとふ人なしのよもぎふの庭。これらもいみしくわろし。すべてみだりには重ぬべきことにあらず。

○もと受る格　此格結びにかゝはらず

古 二　ぬれつゝぞしひてをりつる年の内に春は「いく」かもあらじと思へば
同 十三　うば玉のやみのうつゝはさだかなる夢に「いくら」もまさらざりけり
同 十八　「いく」よしもあらじ我身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるゝ
後 一　まつにくる人しなければ春の野のわかなも「なに」もかひなかりけり
同 六　「いつ」とても月見ぬ秋はなきものを分てこよひのめづらしき哉

○玉のを四

拾 二 〔いづく〕にも‖さきはすらめど我屋戸のやまと撫子たれに見せまし

後拾 四 さびしさにやどを立出てながむれば〔いづく〕も‖同じ秋の夕暮

同 八 〔たれ〕がよも‖わが世もしらぬよの中にまつほどいかゞあらんとすらん

同 十五 月見れば〔たれ〕も‖心ぞなぐさまぬ姨捨山のふもとならねど

同 〔いつ〕よりも‖くもりなきよの月なれば見る人さへに入がたきかな

新 十四 〔いつ〕も‖きく物とや人のおもふらんこぬ夕ぐれのまつ風の聲

同 ならひこし〔たが〕いつはりも‖まだしらでまつとせしまの庭の蓬生

件の哥どものごくも‖と受るときはその下の結びにはかゝはらず

○なぞ‖ものも‖は別なり

拾 九 大かたの秋に心はよせしかど花見るときは〔いづれ〕とも‖なし

同 七 わがこひはふたみかはれる玉くしげ〔いかに〕すれども‖あふかたぞなき

新 七 わかれてもこゝろへだつな旅衣〔いく〕へかさなる山路なりとも‖

右の如くとも‖ども‖と受るもも‖に同じ

○もと受る意にても‖もじなき格

古 十 いま〔いく〕か春しなければ鶯も物はながめておもふべらなり

後拾 十一 おく山の眞木の葉しのぎふる雪の〔いつ〕とくべしと見えぬ君かな

詞 七 わがためにつらき人をばおきながら〔なに〕のつみなき世をや恨みん

新勅 一 玉ほこの道のゆくてのはる風に〔たが〕里しらぬ梅の香ぞする

風十 敦忠卿 人しれず思ふこゝろはとしへても〔なに〕のかひなく成ぬべきかな

これらいづれももといはざれ共。もと受たる意也。△のしるしのところにもを入れて心得べし ○風雅十二爲家卿「契りしをたのめばつらし思はねばなにを命のなぐさめぞなき。これはすこしいかにぞや聞ゆ

○一つの何 此格結びにかゝはらず

古十四 みちのくの忍ぶもぢずり〔たれ〕ゆゑにみだれんと思ふ我ならなくに

同 津の國の〔なに〕(難波)はおもはず山しろのとはに逢見んことをのみこそ

同二十 みちのくは〔いづく〕(いづこも六帖)はあれど塩がまの浦こぐ船のつなでかなしも

万八 〔いづく〕にはなきもしにけん郭公わぎへの里にけふのみぞなく

同十七 梅花〔いつ〕はをらじといとはねどさきのさかりは惜き物なり

此格は。そのさしていふ物に對へて。それならぬ他の物を何といふ也。古今十四の哥は。思ふ人に對へて。其他の人をたれといへり。君をおきて他の人故にみだれんと思ふ我ならなくに也。又「なには思はずは。とはに逢見ん事をのみこそ思へ。其他の事は思はず也。「いづくはあれどは。他の所はあれどなり。「いづくにはなきもしにけんは。他の所にはなきもしにけん也。「いつはをらじと思はねどは。他の時はをらじと思はねどなり

○此格たれ たがといへるは猶あまたあり。別にたれ たがの條に出せり

右の條々は何の類の辭共の。すべてにわたる格ども也。一つの辭ごとにおの／＼すこしづゝかはれる格あるは。此下に分て出せり。

○なに

○なにゝ

古十五 あひ見ねば戀こそまされみなせ川〔なに〕に深めて思ひそめけん

○玉のを四

後九　あふとのかた糸ぞとはしりながら玉のをばかり〔なに〕によりけん

これらはにを添たり又「なにゝたとへんなどいふたぐひのには是とは別也

○なにせんに

古十四　あふまでのかたみも我は〔なに〕せんに見ても心のなぐさまなくに

後十五　〔なに〕せんにへたのみるめをおもひけんおきつ玉藻をかづく身にして

これはせんにといふ事を添たり。さて古今なるは切れ。後撰なるは切れず。いひざまいさゝかこと也。

○なにせん

拾十一　こひしなん後は〔なに〕せんいける日のためこそ人は見まくほしけれ

これはせんといひてにもじはなし

○なにしに

新勅十一 藤原盛方　すみだ川せぎりにむすぶ水の沫のあはれ〔なに〕しに思ひそめけん

六百番　わかれぢの有けるものをあふ坂の關を〔なに〕しにいそぎこえけん

○なにし

六帖　〔なに〕し（に後撰七）菊いろそめかへしにほふらん花もてはやす君もこなくに

風二 白河院　山ふかくたづねにはこでさくら花〔なに〕しこゝろをあくがらすらん

○なにと

新後二 西行　〔なに〕とかくあだなる花の色をしも心にふかくおもひそめけん

新續古十 後鳥羽院下野　ゆきくれて一夜やどかる松が根に〔なに〕と。嵐のとこはらふらん

○なにとて

後十一 夢のごとはかなき物はなかりけり〔なに〕とて人にあふと見つらん
堀川百首 はかなしやわがよものこりすくなきに〔なに〕とて年のくれをいそぐぞ
○なにそ
新十四 うき人の月は〔なに〕そのゆかりぞとおもひながらもうちながめつゝ
此そはめづらし。猶三の卷ぞの部いくその條にくはしくいへり
○萬葉にはなにすとかといへると多し。又なにすれぞ共あり。これら古今以後には見えぬ辭也
○一つの格
金五 長濱のまさごの數も〔なに〕ならず。つきせず見ゆる君が御代かな
續後廿公賞卿 君が代の數にくらべば〔なに〕ならじ。千尋の濱の眞砂なり共
大和物語 〔なに〕ばかりたかくもあらず。よのつねのひえを外山と見るばかり也
堀川百首 あひみてのあしたの戀にくらぶればまちし月日も〔なに〕ならぬ哉
○なにとは　三の卷ぞの部に出せり
○なになれや　此卷やの部に出せり
○なにとかや　此卷かの部に出せり
○なになりとこぢむる格　二の卷變格の部に出せり
右の外ことなる事なし
○など
○下にかもじをおく例。なごか　なごかはとつゞけて置るのみ也。下に詞をへだてゝおける例は見えず。【後撰七なごさ

らに秋かごとはん云々此かはなどにあづかれる辭にあらざること上にいへるがごとし】

〇などて

後拾 十 〔など〕てかく雲がくるらんかくばかりのどかにすめる月もある世に

千 三 〔など〕てかくおもひそめけん郭公雪のみやまの法のこゑかは

いせ物語 〔など〕てかくあふごかたみになりにけん水もらさじとむすびし物を

これらてを添たり又てかはといへるは

後拾 二 みちよへてなりける物を〔など〕てかはもゝとしもはた名づけそめけん

〇などや　此巻やの部に出せり

右の外ことなることなし

〇なぞ

〇下にかもじをおく例なし

〇なぞも

古 十一 かゞり火にあらぬ思ひの〔なぞ〕もかく涙の河にうきてもゆらん

金 七 〔なぞ〕もかくこひぢにたちてあやめ草あまり長くも五月なるらん

新後撰一 後さがの院 みな人の家路わするゝ花ざかり〔なぞ〕しもかへる春のかりかね

なぞしもはめづらし

〇なぞや　此巻やの部に出せり

〇なぞと　五の巻との部に出せり

右の外となることなし

○たれ　たが

○一つの格

古十四　みちのくのしのぶもぢずり〔たれ〕ゆゑにみだれんと思ふ我ならなくに

後四　まつ人は〔たれ〕ならなくに郭公おもひの外になかばうからん

拾十一　しのぶるも〔たれ〕ゆゑならぬ。物なれば今はなにかは君にへだてん

古四　〔たが〕秋にあらぬ。ものゆゑ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ

同十二　こひしなば〔たか〕名はたゝじ。世中のつねなき物といひはなすとも

後十二　ちかひても猶おもふにはまけにけり〔たが〕ためをしき命ならね。ば

万七　あさしものけやすき命〔たが〕ために千年もかもとわが思はな。くに

同　みなぞこにしづくしら玉〔たが〕ゆゑに心つくしてわがおもはな。くに

同十一　おしてる難波菅笠おきふるし後は〔たが〕きん笠ならな。くに

同十二　里人もかたりつぐかねよしゑやし戀てもしなん〔たが〕名ならめや

萬葉には猶おほし。此格は上に出せる古今廿「みちのくはいづくはあれど云々などの哥と同じ意なれども。たれ　たがといへるは。中にも多き故に別に分てこゝに出せり。其意はかしこにいへるごとく。他の人をさしてたれ　たがといふ也。

此外ことなることなし

○いかに

○玉　の　を　四

○いかさま　いかなる　いかなりし　いかなれば　いかならん　などいふいかならんに切るゝと切れざるとあり

新六　深みどりあらそひかねて〔いかならん〕まなく時雨のふるの神杉

これは切たり切れず下へつゞくは

古十八　〔いかならん〕いはほの中にすまばかは世のうき事の聞えこざらん

○ねがふ意のいかにして　俗語になにとぞしてといふ意也

後十　ひとりのみ思ふはくるし〔いかにして〕おなじ心に人をゝしへん

同十三　〔いかにして〕かく思ふてふことをだに人づてならで君にかたらん

同十四　〔いかにして〕ことかたらはんほとゝぎすなげきの下になけばかひなし

猶此意なるはいかでといへるに多し下のいかでの條に出せり

○いかなれや　此巻やの部れやの條に出せり

右の外ことなるとなし

○いかゞ

○下にかもじをおく例なし

○いかゞは

拾十九　よのなかは〔いかゞ〕はせまししげ山の青葉の杉のしるしだになし

新十二　ものおもふといはぬばかりは忍ぶとも〔いかゞ〕はすべき袖のしづくを

かくの如く下にはを添てもいへり

此外ことなる事なし

○いかで

○下にかをおく事。いかでか　いかでかはとつゞけておけるのみにて。詞をへだてゝおく例はなし

○ながふ意のいかで　俗言になにとぞといふ意也　此格結びにかゝはらず

後 十五 「いかで」かの年ぎりもせぬたねもがなあれたる宿にうゑてみるべく

同 十九 「いかで」なほかさとり山に身をなして露けき旅にそはんとぞ思ふ

拾 六 たよりあらば「いかで」みやこへ告やらんけふ白川の關はこえぬと

同 十一 戀しといへば同じ名にこそ思ふらめ「いかで」我身を人にしらせん

同 十三 夢をだに「いかで」かたみに見てしがなあはでぬるよのなぐさめにせん

同 十七 「いかで」なほあじろのひをにことゝはんなにゝよりてか我をとはぬと

新勅 七 公忠 みな人の「いかで」とおもふよろづよのためしと君をいのるけふ哉

又かを添ていへるもあり

拾 十一 「いかで」かとおもふこゝろのあるときはおほめくさへぞうれしかりける

又もを添たるは

夫木 いせ 「いかで」もと思ふ心はほりかねの井よりも猶ぞ深さまされる

又二つ重ねたるは

拾 十五 「いかで」「いかで」こふる心をなぐさめて後の世までの物をおもはじ

右の外ことなるとなし

○玉のを四

○いづれ

○いづく　いづこ　いづち　いづかた　などもいふ

○「いづれまされりととぢむる格　二の巻變格の部に出せり

右の外ことなるをなし

○いづら

○すべていづらは皆切るゝ格にて下へつゞくる例はなし【つゞきたる如くに聞ゆるもみな切るゝなり】

古十七　玉だれの小がめや〔いづら〕こよろぎの磯の浪わけおくに出にけり

後廿　ふるさとに君は〔いづら〕とまちとはゞいつれの空の霞といはまし

いせ物語　いにしへのにほひは〔いづら〕さくら花こけるからとも成にけるかな

古十八　よの中に〔いづら〕我身の有てなしあはれとやいはんあなうとやいはん

新十五　いなづまはてらさぬよひもなかりけり〔いづら〕ほのかに見えしかげろふ

狭衣　たのめこし〔いづら〕ときはの杜やこれ人だのめなる名にこそ有けれ

又下へはを添てもいへり

古十九　むつごともまだつきなくに明ぬめり〔いづら〕は秋の長してふよは

後十　ともかくもいふ言の葉の見えぬかな〔いづら〕は露のかゝりどころは

金八　あふみてふ名は高嶋にきこゆれど〔いづれ〕はこゝにくり本の里

右の外ことなる事なし

○いつ

○いつしか　これはいつかといふにしをはさめる物にて。しはやすめ辞なればもとは意なし。然れども後世には。いつしかといへば。別に一つの言のごとくなれり

後一　松もひきわかなもつまずなりぬるを「いつしか」さくらはやもさかなん

拾十九　「いつしか」もつくまのまつりとくせなんつれなき人のなべの數見ん

古四　けふよりは今こん年のきのふをぞ「いつしか」とのみまち渡るべき

後八　「いつしか」と山のさくらもわがごとく年のこなたに春をまつらん

同九　「いつしか」とわがまつ山に今はとてこゆなる浪にぬるゝ袖かな

拾十二　「いつしか」とくれをまつまの大空はくもるさへこそうれしかりけれ

同二十　「いつしか」と君にと思ひし若菜をば法のためにぞけふはつみつる

件の哥どものいつしかは。いつか／＼と待つ意也

また

拾九　「いつしか」とあけて見たればはま千鳥跡あるとにあとのなきかな

六帖　「いつしか」もけふはくらしつ明日香川わたりて早くたまもかづかん

これらは待つ意にはあらざるが如く聞ゆれ共。なほ待意也。拾遺の哥は。いつかとまちてあけて見たれば也。六帖のは。四の句の上へうつして心得べし。いつかも渡りてと待意なり

また

金一　「いつしか」と明行空のかすめるは天の戸よりや春はたつらん

同　「いつしか」と春のしるしにたつ物は朝のはらの霞なりけり

千十一　おもふより「いつしか」ぬるゝたもと哉なみだぞ戀のしるべなりける

同十三　よそにしてもどきし人に「いつしか」と。袖のしづくをとはるべきかな

新十八　賴みこしわがふる寺のこけの下に「いつしか」くちん名こそ惜けれ

玉四 泉式部　しのゝめの空きりわたり（し家集）「いつしか」と（○に同）秋のけしきに世は成にけり

赤染衛門集　「いつしか」と。かすめる空のけしき哉春まつ人はいかゞ見るらん

右の哥共のいつしかは。はやいつのまにかといふ意也

右の外ことなるとなし

○いく

○いくら　いくばく　いくそばく【古今物名】いかばかり　などいふ

○すべていくといふ辭。初學の輩はみだりに「いく千年「いく萬代などゝいひて。たゞ多きと久しきとゝ心得たるはひが事也。いくは疑ひの辭なれば。たゞ「いく千代などゝのみいひては。いく千代ぞと千代の數を問（とふ）とば也。「いく千代もといへば。もにて久しき意になる也。たとへば「いく千代にほへ菊の花といひては。いくの辭かなはず。「いく千世もにほへといへばよろしき也。すべて此けぢめをよくわきまへてつかふべき辭なり。【千載三「をちかへりぬる共きなけ時鳥今いくかかは五月雨のそら。玉葉十四和泉式部「つれ〴〵とながめくらせば冬の日も春のいくかにことならぬかな。これら只いくとのみいひて。多くの日數の事とせる。いかにぞや聞よからず。又風雅十七「うしとてもうからずとてもよしやたゞ五十の後のいくほどのよは。これ又たゞ「いくほどゝのみいひて。いくほどもなき意にせるはいかゞ。すべてかかるたぐひ心すべき事也。いくてふ辭のつかひざまにて。よく巧拙のみゆるとある物也

○いくそ　三の卷ぞの部に出せり

○「いく夜ねざめぬの類【いくの結びはぬるなるにぬと結ぶは常の格に異なり】二の卷變格の部に出せり

右の外となることなし

詞瓊綸五之巻

〔こそ〕

○こその結びは。紐鏡の左ゆ行の段々の辞にて。一の巻に出せる三轉證哥のごとし。凡てこその結びとなる辞は。上にこそなくて。切るゝときは。おほくは仰する辞【いはゆる下知の詞なり】なるを。こそとかゝれば。仰する辞にならず。【「思へ「ゆけなど」いふたぐひ。上にこそなきときは仰する辞なるを。こそといへば仰するとばにならず】又上にこそなくて。語のつゞく所にある時は。みなかならずばとどとの二つの辞へつゞく也。【「よければ「あしければ。「よけれど「あしければ。又「いひしかば「聞しかば。「いひしかど「聞しかど。又「思はめど「ゆかめどなどのたぐひ也。けれしかめなどみなこその結び辞也。餘は是に准へて考へ試むべし。此格のたがふは一つもなし】大かたてにをはの定まりの妙なるとかくの如し。又今の世の俗語のてにをはにても。こその結びばかりは。皆おのづから雅語の格と異なるとなし。これ又おのづからの妙也。

○動かぬ言にて結ぶこそ

新 十五 人ならばおもふこゝろをいひてましよしやさ〔こそ〕はしづのをだ巻

新勅 十八 まよひこし夢路のやみを出ぬればいろ〔こそ〕よそのすみぞめの袖

六帖 しらねどもむさし野といへばかこたれぬよしやさ〔こそ〕は紫のゆゑ

新後十五 定家卿 かたみ〔こそ〕あだの大野の萩の露うつろふ色はいふかひもなし

大和物語 こよひ〔こそ〕なみだの河にゐる千鳥なきてかへるさ君はしらずや

源氏 末摘 なれ〔こそ〕は岩もるあるじ見し人のゆくへはしるや宿のまし水

○いひかけにて結ぶこそ

金七　こひしなでこゝろづくしに今までも頼むれば〔こそ〕いきのまつ原

新十八　かきながす言の葉をだにしづむなよ身〔こそ〕かくてもやま川のみづ

後十七　なにはづをけふ〔こそ〕みつの浦ごとにこれやこのよをうみわたる船

後拾十二　しるらめや身〔こそ〕人めをはゞかりの關に涙はとまらざりけり

金七　逢見んとたのむれば〔こそ〕くれはとりあやしやいかゞ立かへるべき

新六　さよ千鳥こゑ〔こそ〕ちかくなるみがたかたぶく月にしほやみつらん

○こそとぢむる格

古十四　津の國のなにはおもはず山しろのとはに逢見んとをのみ〔こそ〕

後十一　あしたづの澤邊に年はへぬれ共こゝろは雲のうへにのみ〔こそ〕

玉七 行成卿　めづらしきけふの圓居は君がため千代に八千世にたゞかくし〔こそ〕

大和物語　かさゝぎのわたせる橋の霜のうへをよはにふみわけことさらに〔こそ〕

すべてこそとぢむるは。言をいひのこして。下へその意をふくめたる物也○風雅十七又拾玉「いへばうししぬる別れののがれぬを思ひもいれぬよのならひこそ。又千五百番「花もなし人めもしらぬ柴の戸もさすかに春のくるゝけふこそ。これらはとゝのはざる哥なり

万十一 せどう哥　いきのをに我は思へど人めおほみ〔こそ〕吹風にあらばしば〳〵あふべき物を

かくなかばにて切れたるはめづらし

○こそ二つある哥

後拾十　深さ〔こそ〕藤のころもはまさるらめなみだは同じいろに〔こそ〕しめ

万葉六長哥 此山のつきばのみ「こそ」この川のたえばのみ「こそ」云々やむ時もあらめ‖

此万葉の哥はこそを二つたゝみて一つのめにて結べるいとめづらし

○こそは‖

古十四 石間ゆく水のしらなみ立かへりかく「こそ」は見めあかずも有かな

同十七 大はらやをしほの山もけふ「こそ」は‖神代のこともおもひいづらめ

かくのごとく下へはを添るとつねにおほし。はには意なし

○もこそ‖ もこそは行末をおしはかりてあやぶむ意の辞也。つねのこそと意かはれり。【ぞともぞとのけぢめのごとし。三の巻ぞの部のもぞの條とかむかへあはすべし】

古二 花見ればこゝろさへにぞうつりける色にはいでじひと「もこそ」しれ‖

同四 こよひこむ人にはあはじたなばたの久しき程にまち「もこそ」すれ‖

後十三 淵ながら人かよはさじなみだ川わたらば浅き瀬「もこそ」は。見れ‖

拾十六 おもふといはでやみなん春がすみ山路もちかしたち「もこそ」きけ‖

千三 五月雨にぬれ〳〵ひかんあやめ草沼の岩かきなみ「もこそ」こせ‖

新六 みかりするかた野のみ野にふる霰あなかままだき鳥「もこそ」たて‖

同十八 かくばかりうきをしのびてながらへばこれよりまさる物「もこそ」思へ‖

又同じとながらあやぶむ意のなきは

後九 人のうへのことゝしいへばしらぬかな君も戀するをり「もこそ」あれ‖

拾一 身にかへてあやなく花を惜むかないけらば後の春「もこそ」あれ‖

新二 山ざとの庭よりほかの道もがな花ちりぬ。やと人「もこそ」とへ‖

〇玉のを五

後拾十一 思ひしる人〔もこそ〕あれ‖あぢきなくつれなき戀に身をやかへてん

又たゞ常のこその上にもの添たるは

古十三 うつゝにはさも〔こそ〕あらめ‖夢にさへ人めをもると見るがわびしさ

拾二 春かけてきかんとも〔こそ〕思ひしか‖山ほとゝぎすおそくなくらん

同十二 玉ぼこのさほ道も〔こそ〕人はゆけ‖なご時のまも見ねは戀しき

六帖 月夜にはこぬだにも〔こそ〕まつときけ‖くるをもかへす物にざりける

大和物語 かくさける花も〔こそ〕あれ‖わがために同じ春とやいふべかりける

山家集 あはれとも心に思ふほどばかりいはれぬべくばとひも〔こそ〕せめ‖

これらは行末をおしはかる意にあらず。上なるもこそとは異也　此格は大かたは聞よからぬ物なり。故に右の山家集の哥も新古今には「とひこそはせめ」と直して入られたり。土左日記の詞に「まなこもこそ二つあれ」といへるも。此格のもこそ

〔しもこそ　是はしもとこそと重なりたる物にして。【もこその上にしの添たるにはあらず】もこその意とは異也。【しもぞの格に同じ。三の卷ぞの部のしもぞの條と考へ合すべし】さてしもこそといふに。輕く却(かへり)ての意をふくめり。さればこその下へ「かへりて」といふ言を加へて見れば。哥の意明らかなり。

後十一 逢見てばなぐさむやとぞ思ひしになごり〔しもこそ〕戀しかりけれ

拾十三 わすれなん今はとはじと思ひつゝぬる夜〔しもこそ〕夢に見えけれ

千三 ほとゝぎす又もやなくとまたれつゝきくよ〔しもこそ〕ねられざりけれ

續拾十五 ながらへて又あふまでの玉の緒よたえぬ〔しもこそ〕くるしかりけれ

玉十 たのめしをまつよの雨の明方にをやむ〔しもこそ〕つらく聞ゆれ

續千十五 俊成卿 わすれ草つみにこしかど住吉の岸に〔しもこそ〕袖はぬれけれ

清正集 かたみにはなぐさむやとてからころもきるに〔しもこそ〕ぬれまさりけれ

千九 ちり〳〵にわかるゝけふのかなしさになみだ〔しもこそ〕とまらざりけれ

此一首のみは「かへりての意なし。たゞ「涙もとまらざりけりといふ意也。めづらし

○さこそ 下にはを添たるも同じ。はにには意なし

是に三つのかはり有。一には「さやうにこそといふ意

拾二十 朝がほをなにはかなしとおもひけん人をも花は〔さこそ〕みるらめ

千十三 今朝とはぬつらさに物は思ひしれ我も〔さこそ〕は。うらみかねしか

金八 あふとは夢ばかりにてやみにしを〔さこそ〕見しかと。人にかたるな

新十五 おのづから〔さこそ〕は。あれと。おもふまにまことに人のとはずなりぬる

同二十 おしなべてうき身は〔さこそ〕なるみがたみちひるしほのかはるのみかは

二には「さぞこそおしはかる意

金四 ことわりやかた野の小野になくきゞす〔さこそ〕は。かりの人はつらけれ

千六 いつのまにかけひの水のこほるらん〔さこそ〕嵐のおとのかはらめ

新八 なきあとの面影をのみ身にそへて〔さこそ〕は。人の戀しかるらめ

新勅 定家 五 しぐれつゝ袖だにほさぬ秋の日に〔さこそ〕みむろの山はそむらめ

新五 もみぢ葉を〔さこそ〕あらしのはらふらめ此山本もあめとふるなり

三には「いかにと心得て聞ゆるさこそ

金七 あさましやなごかきたゆるもしほ草〔さこそ〕は。あまのすさみなりとも

千十二 こひしなばわれゆゑとだに思ひ出よ〔さこそ〕は。つらきこゝろなりとも

金九 草まくら〔さこそ〕は。旅のここならめ‖けさしもおきてかへるべしやは

千五 秋にあへず〔さこそ〕は。葛のいろづかめ‖あなうらめしの風のけしきや

新十七 山ふかく〔さこそ〕こゝろはかよふとも‖すまであはれはしらんものかは

これらのさこそは。初學の耳にはいさゝか聞とりがたし。されば本より‖いかにといふ意にはあらざれども。さやうに心得るときは聞とりやすし。「さこそはあまのすさみなりともは「いかにあまのすさみなればとてもと心得て聞え。「さこそはつらき心なりともは「いかにつらき心なればとてもと心得て聞え。「さこそは旅のとこならめは「いかに旅のとこなればとてと心得て聞え。「さこそはくずの色づかめは「いかに葛のいろづけばとてと心得て聞え。「さこそ心は通ふともは「いかに心はかよへばとてもと心得て聞ゆる也　山家集に「あながちに庭をさへふく嵐かなさこそ心に花をまかせめ。これも「いかに花を心にまかすればとてと心得て聞え。又「あだにちるさこそ梢の花ならめすこしはのこせ春の山風。これも「いかにあだにちる梢の花なればとてもと心得てよくきこゆるなり

新四 はらひかね〔さこそ〕は。露のしげからめ‖やどるか月の袖のせばきに

これはさぞ‖とおしはかる意歟。又は「いかに露のしげゝればとてと心得る方歟。さだめがたし。いづれにしても下句とのかけ合ほのかなり

同十五 人ならばおもふこゝろをいひてましよしや〔さこそ〕は。しづのをだ巻

これは下句の意聞えがたければ。‖さこその意も定めがたし

○さもこそ‖　下にはの添たるも同じ‖

古十三 うつゝには〔さもこそ〕あらめ‖夢にさへ人めをもるさ見るがわびしさ

後拾十一 あふとは〔さもこそ〕人めかたからめ‖こゝろばかりはさけてみえなん

千十六 〔さもこそ〕は。影さゞむべき世ならねど‖あさなき水にやどる月かな

續千 十五 戀しさは〔さもこそ〕あらめなにこ又つらきかたにも忘れざるらん

詞 戀 うきふしは〔さもこそ〕あらめねにたつる此ふえ竹はかなしからずや

件の哥どものさもこそは「さやうにもといふ意也

金 七 夢にだにあふさは見えよ〔さもこそ〕は。うつゝにつらきこゝろなりとも

拾 十五 〔さもこそ〕は。逢見んとのかたからめわすれずとだにいふ人のなき

後拾 九 〔さもこそ〕は。みやこのほかにやごりせめうたて露けき草まくらかな

同 十六 〔さもこそ〕は。心くらべにまけざらめはやくも見えし駒のあし哉

同 二十 〔さもこそ〕は。宿はかはらめすみよしの松さへ杉になりにけるかな

金 三 〔さもこそ〕は。みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬるゝ袖かな

新 八 〔さもこそ〕は。同じたもとの色ならめかはらぬねをもかけてける哉

これらは上のさこその中の「いかにと心得る格と同じ意にて。「さもこそはあひ見んこのかたからめは、「いかに逢見んこのかたければとてもと心得て聞ゆる也、その外の哥どもゝ　これになずらへて心得べし。

○しかこ結ぶ格　此しはいはゆる過去のしにて下にかの添たる也。かは疑ひのかにあらず。輕く聞ゆ。此か清てよむべし。濁るはひがこ也。

後 九 あひも見ずなげきもそめず有し時おもふこと〔こそ〕身になかりしか

後拾 十四 まつ嶋やをしまの磯にあさりせしあまの袖〔こそ〕かくはぬれしか

金 三 有明の月もあかしの浦かぜに波ばかり〔こそ〕よるこ見えしか

古 十五 花ずゝき我〔こそ〕したに思ひしかほに出て人にむすばれにけり

拾 二 春かけてきかんこも〔こそ〕おもひしか山ほとゝぎすおそく鳴らん

同十六 さきしときなほ〔こそ〕見しか桃の花ちるは惜くぞおもひ成ぬる

同十九 しのびつゝよる〔こそ〕きしかから衣人や見んとは思はざりしを

後拾十七 しぬばかりなげきに〔こそ〕はなげきしかいきてとふべき身にしあらねば

また

同十九 たらちねははかなくて〔こそ〕やみにしかこはいづことて立とまるらん

にしかけめづらし。されど同じ過去のしなれば。格は同じ事也

こそとかゝりてしかと結ぶ格は。三轉の内に在て。【ひも鏡第三段の左の行也】證哥は一の巻に既に出せるを。今又別にかくあまた出せる故は。此格萬葉集よりはじめて。廿一代集には數しらず多く見えて。いとみやびやかなる詞なるに。近き代にはをさ〳〵此格の哥を見ざる故に。殊に世人にしらしめんとて也。

詞花一「きのふかも霰ふりしかしがらきの外山の霞春めきにけり。新後撰十六「ことわりと戀しきまでは思ひしかつらきにだにもぬるゝ袖かな。これらはこそといはずしてしかと結べり。詞花の哥は。古今の「きのふこそさなへとりしか云々と同じ意なれば。こそにてよろしきを。かもと改めたる中々にわろし。新後撰なるも「戀しきにこそといひて宜しきを。さはあらぬは。にもじの重なるをいとひてにや。されど「までといへるも猶いかにぞやおぼゆ。又續古今四慈鎭「なみだよりかつかつ袖に露ちりてまちしか人の秋の初風。此しか心得ず。又土左日記の詞に「一もじをだにしらぬものしかあしは十もじにふみてぞあそぶ。此しかいとめづらし

○ましかと結ぶ格　此かもしかのかに同じ。清(すみ)てよむべし

赤染衛門集 をしむにし花のちらずばけふもたゞ春ゆくと〔こそ〕よそに見ましか

金四 こしくれぬとばかり〔こそ〕はきかましかわがみのうへにつもらざりせば

千十四和泉式部 まつとてもかばかり〔こそ〕はあらましか思ひもかけぬ秋のゆふぐれ

○しと結ぶ格　附からし　けらし

後 八　もみちばゝをしき錦と見しかども時雨と共にふりて〔こそ〕こし

拾九 長謌　こだかき陰とあふがれん物と〔こそ〕見し云々

これらしかと結べると同意にて。かといはず。たゞしとのみいへる也

また

新後撰 八　おとに〔こそ〕ふく共きゝし秋風の袖になれぬるしら川のせき

萬十三 伊京お段　われと〔こそ〕ながめなれにし山のはにそれも形見のあり明の月

これらはしと受たれども切れずして猶下の言へつゞけり

また

古 四　秋の夜は露〔こそ〕とに寒からし草むらごとにむしのわぶれば

同 五　霜のたて露のぬき〔こそ〕よわからし山のにしきのおればかつちる

これらはからしと結べり。此しは過去のしにはあらず。からんを轉じてからしといへるなり。又

後拾 六　かもめ〔こそ〕よがれにけらしゐな野なるこやの池水うはごほりせり

新 一　ほの〱と春〔こそ〕空にきにけらし天のかぐ山かすみたなびく

これらはけらしと結べり

また

後 八　こほり〔こそ〕今はすらしも。みよし野の山のたきつせ聲も聞えず

これはらしもと結べり。すべてらしもは万葉におほかる辞也。そも〱こそとかゝりてらしと結ぶ格は。一の卷三轉の次に證哥ゐ出せり。是はその下にもの添たるなり

○をと結ぶ格　をはものをといふ意のをなり

千十一 よそ人にとはれぬるかな君に〔こそ〕見せばやとおもふ袖のしづくを‖

續古十 したに〔こそ〕人のこゝろもうつろふを‖色にみせたる山ざくらかな

五社百首 俊成卿 夢に〔こそ〕みやこの事も見るべきを‖袖に波こすちかのしほがま

また

新千十三 したに〔こそ〕かよひし物を‖いかにしてにほのうきすのうき名たつらん

同十七 たえず〔こそ〕つかへし物を‖わが身よになごよどむらん關のふぢ川

此二首は間にしもじあれば。上のしと受ながら切れずして下へつゞく格にもかなへり

〇にと結ぶ格

躬恒集 明ぬればつれなくなりぬ女郎花人しれず〔こそ〕をらんと思ふに‖

金十 いにしへは月をのみ〔こそ〕ながめしに‖今は日をまつ我身なりけり

これらのには力ありて。ものをといふ意にちかし。又金葉の哥は間にしもじあれば。しと受ながら切れずして下へつゞく格にも入べし。又しになしかと云てもよき哥也

〇ともと受る格

後十八 せきいれたる名〔こそ〕流れてとまるとも‖絶ず見るべき瀧の糸かは

千十三 すがた〔こそ〕寐覺の床に見えずとも‖契りし事のうつゝなりせば

新勅十四 元良親王 あさく〔こそ〕人はみるとも‖關川のたゆる心はあらじとぞ思ふ

續後撰十四 こゝろ〔こそ〕ちぎりしまゝにかはるとも‖同じ空なる月や見るらん

〇ども又どと受る格

後拾十九 信濃なるそのはらに〔こそ〕あらねども‖わがはゝきゞと今は頼まん

新十六 和哥の浦に家の風［こそ］なけれども波ふく色は月に見えけり

續後撰十七忠家 うき身［こそ］なほ山陰にしづめども心にうかぶ月を見せばや

續後拾二中務 かすみ［こそ］たちかくせども春の夜の月をぞ人は見るべかりける

後拾十三 逢坂はあづまぢと［こそ］聞しかど心づくしの關にぞ有ける

玉十二弁乳母 ちぎりこし君［こそ］とはずなりぬれど宿には絶ぬまつ虫の聲

源氏手習 こゝろ［こそ］うきよの岸をはなるれどゆくへもしらぬ海士のうきゝを

○こそのてにをはとゝのはざる哥

後十六 あはれてふと［こそ］つねの口のはにかくるや人をおもふなるらん

新拾遺十七 かりに［こそ］ときおくのりのことわりにとまりて人や猶まよふらん

これらの哥こそを受たる辞なし

六帖 こむといひてこざりしよるも有しかばまたぬしも［こそ］まつにまされる

蜻蛉日記 萬代をよばふ山べのゐのこ［こそ］君がつかふるよはひなるべし

榮花玉のかざり わかれにし玉はかへすにかたけれどなみだのみ［こそ］袖にかゝれる

これらは結び辞たがへり

信明集 こしふればわすれやせんと思ふ［こそ］あひみぬよりも我はわびしき

こそとかゝりてきと結ぶ事。日本紀萬葉の哥には例あれども。古今集よりこなたには絶て見えず。聞よからぬもの也。

貫十 さてもとはれぬ今はまたつらし夢なれと［こそ］いひし。物から

これは下に過去のし有て切れざる格にはづれざれ共猶とゝのはぬ哥なり

千五百番 あふとは夢にのみ［こそ］ならひきてうつゝ共なきこよひなりけれ

○玉のを五

これはけれとは留りたれ共。こその辞けれ迄へはかゝらず。此哥のけれは。「こよひにこそ有けれとといはざればかなはず。もし又「夢にのみこそといはゞ。三の句を「ならひきつれとやうにいはざればかなはず。すべてその結び辞は有ても。おき所によりて。上のてにをはとかけあはざると。是にてさとるべし。初學の人の哥には。此誤りつねにあると也

同 夏はつるかもの河原のみそぎ〔こそ〕神やうくらん秋風のこゑ

これはらんと結べるがたがへるのみならず。間に疑ひのやもじさへあれば。いみしきひがとなり。然るに此哥勝にけるは。いかなるとにか心得ぬわざなり。

右の哥どもいづれもこそのこゝのひわろし。大かたこその結びは。上にあげたる如く。三轉の外にも種々あるとなれども。其例にはづれてみだりによむときは。必ひがとあるわざ也。

〔こ〕

〇こはすべて切るゝ語をつゞくるてにをは也。さる故に。上のてにをはのこゝのひは。大かたこより下へは及ばざる也。猶それに種々の格あり。左にしるすが如し。

〇定まれる格にて切れたる語をつゞくるこ

後拾 六 おなじくぞ雪つもるらん〔こ〕おもへども君ふるさとはまづぞことはるゝ

金 二 いなり山たづねや見まし郭公まつにしるしのなき〔こ〕おもへば

古 一 春やとき花やおそき〔こ〕きゝわかんうぐひすだにもなかずも有かな

同 二 ひとめ見し君もやくる〔こ〕さくら花けふはまち見てちらばちらなん

同 八 えぞしらぬ今こゝろ見よ命あらば我やわするゝ人やとはぬ〔こ〕

同 十五 わがごとく我をおもはん人もがなさてもやうき〔こ〕よをこゝろみん

同十七 かゞみやまいざ立よりて見てゆかんとしへぬる身はおいやしぬる〔こ〕

後六 秋の野におく白露をけさ見れば玉やしける〔こ〕おごろかれつゝ

古三 あし引の山ほとゝぎすをりはへてたれかまさる〔こ〕ねをのみぞ鳴

同十七 住よしのきしのひめ松人ならばいくよかへし〔こ〕とはまし物を

同十九 身はすてつこゝろをだにもはふらさじつひにはいかゞなる〔こ〕しるべく

後三 こもにこそ花をも見め〔こ〕まつ人のこぬ物ゆゑに惜き春かな

右のたぐひ。上にぞのや何こそといひて。おの〳〵その定まりの結び辞にて切たるを。とゝ受てつゞけたる也。はもなとの下のとも。これに准へてしるべし。

○定まれる結び辞の格をたがへて受たると

後十一 みるめかるかたぞあふみになし。〔こ〕きくたまもをさへやあまはかづかぬ

續千六 家隆卿 かねの音に今やあけぬ。〔こ〕ながむれば猶雲ふかし峯のしら雪

新千七 致忠朝臣 うちつけにおもひやいづ。〔こ〕ふる里の忍ふ草してすれるなりけり

拾五 色かへぬ松と竹との末のよをいづれ久し。〔こ〕君のみぞ見ん

後拾十一 おく山の眞木の葉しのぎふる雪のいつとくべし。〔こ〕見えぬ君哉

眞名いせ物語 いづくまでおくりはしつ。〔こ〕人とはゞあかぬわかれのなみだ川まで

右の哥どもは。上にぞや何などの辞あれ共。その結び辞の格をたがへて。とゝ受たり。此格はなべての事にはあらず。其哥のさま詞のしらべにしたがひて。よくもあしくも聞ゆべし。重家朝臣家の哥合に「おのづからあふにやかふと思はずば戀には身をもなげつべきかなといふ哥を。「あふにやかふといへる程。もじのたらぬにやあらんと。俊成卿の判に見えたるは。「かふるといはでは。やの結びにあらず。るもじのたらぬ故に。おのづからもじたらぬやうに聞えたる也。されど右にあげた

る如く。此例も多かれば。深き難とはすべからず。又菅家万葉下卷に「山澤の水なきとこそ見え渡れ秋の紅葉の落てかくせば。これは上にのといひて「なきといへる。結びの格かなひたれども。かへりてきゝじ耳にさはりて聞ぐるし。「なしといはん方まされり。

○詞を畧き意をふくめて受るヿ

古 四 いつは〔と〕はときはわかねど秋の夜ぞ物思ふヿのかぎりなりける

同 八 しひてゆく人をとゞめんさくら花いづれを道〔と〕まどふ迄ちれ

同 十五 わすれ草なにをかたね〔と〕思ひしはつれなき人のこゝろなりけり

拾 二十 世中にあらましかば〔と〕おもふ人なきがおほくも成にけるかな

これら△のしるしのところに詞をはぶきてその意をふくめてとゝ受たり

○何等の下をとゝ受る格

古 十一 夕月夜さすや岡べの松の葉のいつ〔と〕もわかぬ戀もするかな

後 一 いつこ〔と〕も。春のひかりはわかなくにまだみよしのゝ山は雪ふる

古 十四 秋風に山の木葉のうつろへば人のこゝろもいかゞ〔と〕ぞ思ふ

同 十八 みやこ人いかに〔と〕とはゞ山たかみはれぬ雲ゐにわぶとこたへよ

また

古 四 いつは。〔と〕は時はわかねど秋のよぞ物思ふヿのかぎりなりける

新 十三 なにゆゑ〔と〕おもひもいれぬゆふべだにまち出し物を山端の月

右のくさ〴〵の格どもいづれも上のてにをはのとゝのひはとの下へは及ばず

○上のてにをはのとゝのひのとの下まで及ぶ格

古六 雪ふれば木毎に花ぞ咲にけるいづれを梅〔と〕分てをらまし

同十六 たれ見よ〔と〕花さけるらんしら雲のたつ野と早く成にし物を

後十八 いづく〔と〕てたづねきつらん玉かづらわれはむかしの我ならなくに

新十一 みかの原わきて流るゝいづみ川いつ見き〔と〕てか戀しかるらん

同十七 時しらぬ山はふじのねいつ〔と〕てかかのこまだらに雪の降らん

六帖 きのふきてこよひばかりを旅衣いくよへぬ〔と〕か袖はひづらん

此たぐひ猶いとおほし

○と二つ三つある哥

古三 くるゝか〔と〕見ればあけぬる夏の夜をあかず〔と〕やなく山ほとゝぎす

後拾一 いかにねておくるあしたにいふとぞきのふをこぞ〔と〕けふを今年〔と〕

後十 わりなし〔と〕いふこそかつはうれしけれおろかならず〔と〕見えぬ〔と〕思へば

○との意のと

古一 くる〔と〕あく〔と〕めかれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらん

此二つのと。「暮ル」とて「明ク」とてといふこゝろ也。「くるゝ與あくる與といふ意にはあらず。與の意の時は「くるゝと「あくるとゝいふ格也。拾遺十二「日のうちに二たびものをおもふかなとく明ぬるとおそくくるゝと。これにて知べし。

なほ此格なけぢめある事は。下にくはしくいへり。

同五 ほにもいでぬ山田をもる〔と〕ふぢ衣いなばの露にぬれぬ日ぞなき

同八 物おもふ〔と〕過る月日もしらぬまにことしもけふにくれぬとかきく

○ともの意のと　ともは雖の字の意也

金 七　たちながらきたり〔こ〕あはじ藤ごろもぬぎすてられしみぞこ思へば

新 十三　たのめずば人をまつちの山なり〔こ〕ねなましものをいさよひの月

かげろふ日記　あらしのみふくめる宿に花ずゝきほに出たり〔こ〕かひやなからん

堀川後百首　わぎもこがあふみなりせばさり〔こ〕わがふみも見てましこゝろきの橋

同　ゑにかく〔こ〕筆も及ばじをこめこが花のすがたを誰に見せまし

抑濁(にご)るどもを略きてどといふはつねにて。事もなきを。右の如く。清(す)むともを略きてとゝいへるは。いといやしげにて聞にくし。故にその例まれなると也。好ましからぬ辞になん

○一つのこも

後 十五　あし引の山におひたるしらかしのしらじな人を朽木なり〔こ〕も

後拾 十一　いはぬまはまだしらじかしかぎりなくわが思ふべき人はわれ〔こ〕も

新 十七　おく山のこけのころもにくらべ見よいづれか露の置まさる〔こ〕も

續後 六　むかしだに猶ふるさとの秋の月しらずひかりのいくめぐり〔こ〕も

これらのこもは。つねの雖の字の意のともとは別にして。たゞとにもの添たる物にても軽し。さる故にとはといひてもたがはざるなり

○一つのこ

古 十一　しるしなきおもひやなぞ〔こ〕あしがきのまぢかけれ共あふよしのなき

此なぞとはたゞなぞにて。とに意なし。此と外に例なしめづらしき辞也。六帖にはなにぞと有てともじなし。又後撰十是則「しるしなき思ひやなぞとあしたづのねになくまでにあはずわびしき。上二句全く右の古今の哥と同じ。但しこれは「なぞとねになくといふ意かとも聞ゆ。もしその意ならばつねのとなり。

同 五 わがきつる方もしられずくらぶ山木々のこのはのちり〔と〕まがふに

貫之集 こじと思ふこゝろはなきをさくら花ちる〔と〕まがふにさはるなりけり

此ともめづらし

○一つのとも

後 十四 わがためにかつはつらしとみ山木のこり〔とも〕こりぬかゝる戀せじ

同 十八 よのなかはいさ〔とも〕いさや風の音は秋に秋そふこゝちこそすれ

此ともは。同じ言を重ねてつよくいふとき。中にはさめり。日本紀の哥にも「うづまさは神とも神ときこえくるとこよの神をうちきたますもと見え。源氏物語玉かづらの巻の詞にも「うれしともうれしと有。

○相對へていふと 與の字の意也

これは「夏と秋と。「君と我となどゝ。相對へていふとにて。ここなる事なし。但し常のてにをはのとは。上を切るゝ格の辞より受るを。【此事前にくはしくいへり】此とはつゞく格の辞【ひちかゞみ中の行の辞也】より受る定まりなり。

古 三 夏〔と〕秋〔と〕ゆきかふ空の通ひちはかたへすゞしき風やふくらん

かやうに二方ともにといふはつねなり

また

同 ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲しより妹〔と〕わがぬるとこなつの花

かやうに一方にのみいふもおほし

また

新 十八 ながれ木〔と〕立しらなみ〔と〕やくしほ〔と〕いづれかからきわたつみの底

かやうに三つなどもいへり

○玉のを五

また

同四 月影の。はつ秋風〔と〕ふけゆけばこゝろづくしに物をこそ思へ

これは「初秋風の方にのみとゝいひて。「月影の方には。のといひてとゝいはざるは。月影の方を主としていへる故也。此例もおほし

〇とても　三の巻もの部に出せり

〇とよ　この巻よの部に出せり

〇おほよそとの上は。切るゝ格の辭より受るが定まりなり。【切るゝ格の辭とはひも鏡の右の行の段々の辭なり】一二例をいはゞ。「あり　と云々「なし　と云々【「ありとやこゝに云々「よをばなしとや云々のたぐひ】といふが定まりにて。「あると云々「なき　と云々とはいはず。【「あり「なしは切るゝ辭「ある「なきはつゞく辭なり。下みなこれに准へて知べし】又「ありき　と云々「なかりき　と云々といふが定まりにて。「有し　と云々「なかりし　と云々とはいはず。又「なりと云々「けり　と云々といふが定まりにて。「なる　と云々「ける　と云々とはいはず。又「あく（明）　と云々「いづ（出）　と云々といふが定まりにて。「あくる　と云々「いづる　と云々とはいはず。外もすべてこれらになずらへてしるべし。近き世の人は此けぢめを誤るとつねにおほし。【續後拾遺三「ひと聲にあくる　ときけど時鳥まだ深きよの月に鳴也。同十九「いづる　ともいる共見えて足引の山の尾上にすめる月影。風雅八「うすぐもりをり〳〵寒くちる雪にいづる　ともなき月もすさまし。新拾遺十四「きの國のあくらの濱の忘貝我は忘れじ年はふる　とも。右の哥共みな。との上の受る辭の格たがへり。新の哥は。万葉十一に在て今の本の訓は「我はわすれず年はふれども　と有也。四の句「我はわすれじといはど。結句は必「年はへぬとも　とこそいふべきに。「ふるとも　とあるはひがと也。又新拾遺十四「あしたゆくくる　てふ海士にこゝとはんかれなでのこるみるめありやと。是は古今の本哥をとりて。「くるてふとは。「くるといふといふ意なれば。とと受る格にて。「くてふといふべきを。「くるてふといへるはたがへり。】但し上にその　や　何　こそなどの辭あれば。その結び辭

より受ること。上に出せる證哥どもの如し。

〔ど〕

○どは下へもを添てどもともいふ。【かをかもともいひ。ぞをぞもともいふ類と同じきなり】雖の字の意也。此雖の字の意の言に清と濁とのかはり有。既に然る事をいふにはど どもと濁り。いまだ然らざる事をあらましにいふにはと ともと清ていふ。此清濁りによりて上の受る言の格も異也。「花はさく とも」といふと。「花はさけ ども」といふとこれ也。外もこれになずらへてさとるべし】二つともにことなることもなきは今出さず。清かたのとは上のとの部に出せり。さて濁るかたにしかども しかどといふ事有

古十二 ねになきてひぢにしか〔ども〕春雨にぬれにし袖とはゞこたへん

同十八 人ふるす里をいとひてこしか〔ども〕ならのみやこもうき名なりけり

新十五 身にちかくきにける物を色かはる秋をばよそにおもひしか〔ども〕

古十六 つひにゆく道とはかねてきゝしか〔ど〕きのふけふとは思はざりしを

後十六 むさし野は袖ひづばかりわけしか〔ど〕わかむらさきは尋ねわびにき

千十七 くらゐ山花をまつこそ久しけれ春のみやこに年はへしか〔ど〕

此しかはこその結びのしかと一つなり。さてしかども しかどとは。しかばと相對へる辭なり。

此外のど どもはことなる事もなし

〔を〕

○つねのをはことなることなければ出さず

〇やすめ辭におくを‖

古 十三 人はいさわれはなき名のをしければ昔もいまもしらずと。〔を〕いはん

後 十九 袖ぬれてわかれはすともかりころもゆくとないひそきたりと。〔を〕見ん

拾 十 ゆふだすきかゝるたもとはわづらはしゆたけにとけてあらんと。〔を〕しれ

後拾 十九 よろづよを君がまもりといのりつゝ大刀造江のしるしと。〔を〕見よ

玉葉 三 好忠集 五月雨の月のほのかに見ゆる夜はほとゝぎすだにさやかに。〔を〕なけ

古 四 萩が花ちるらん小野の露霜にぬれて。〔を〕ゆかんさよはふくとも

同 五 立とまり見て。〔を〕わたらんもみぢばゝ雨とふるとも水はまさらじ

同 十三 こひしくばしたに。〔を〕おもへむらさきのねすりの衣いろにいづなゆめ

拾 三 よもすがら見て。〔を〕あかさん秋の月こよひの空に雲なからなん

同 露けくてわがころもてはぬれぬともおりて。〔を〕ゆかん秋萩の花

新 十五 君があたり見つゝ。〔を〕をらん伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも

〇ものをの意のを‖

古 四 ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむ宿に植てみまし〔を〕

同 五 秋のきくにほふかぎりはかざしてん花よりさきとしらぬわが身〔を〕（ナルモノヲ）

同 十 秋くれど月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすばかり〔を〕（ナルモノヲ）

同 十六 つひにゆく道とはかねて聞しかどきのふけふとは思はざりし〔を〕

同 十七 うれしきをなにゝつゝまんからころもたもとゆたかにたてといはまし〔を〕

同 二 雪とのみふるだにある〔を〕‖さくら花いかにちれとか風のふくらん

同 三 夏の夜はまだよひながら明ぬる〔を〕雲のいづこに月やどるらん

同 五 しら露の色はひとつ〔を〕(ナルモノヲ)いかにして秋の木葉をちゞにそむらん

同 十一 人の身もならはしもの〔を〕(ナルモノヲ)あはずしていさこゝろみんこひやしぬると

同 十二 今はゝやこひしなまし〔を〕あひみんと頼めしことぞ命なりける

右のたぐひのをはものをといふ意也其中になるといふ言を加へてなるものをといふもありそれも意は同じ

〇にに通ふを

古 六 花のいろは雪にまじりてみえず共か〔を〕だににほへ人のしるべく

後拾 八 みやこいづるけさばかりだにはつかにも逢見て人〔を〕わかれましかば

古今集の詞書などにも此をあり萬葉の哥にも有

〇一ツのを

古 七 めづらしき聲ならなくに郭公こゝらの年〔を〕あかずも有かな

同 十五 あふこと〔を〕ながらの橋のながらへてこひ渡るまに年ぞへにける

これはあふことをこひわたるといふ意にはあらず。あふことなしといふいひかけ也

〔に〕

〇つねのにはことなることなければいださず

〇にき にし にけり にけん にたり にしがな

此たぐひのには万葉に去の字をかけり「來(き)にて「なりにてなどのにも同じ

また

〇玉のを五

後拾十三　中々にうかりしまゝにやみ〔に〕せば。わするゝ程になりもしなまし

玉九盛経　くやしさのそふばかりだになれ〔に〕せ。ばわするゝまでにとはざらめやは

新千十九道綱母　深草の野べのけぶりとなり〔に〕せ。ばいづれの雲を分てとはまし

万十二　神無月雨間もおかずふり〔に〕せ。ばたが里のまに宿かからまし

赤染衛門集　玉ぼこの道のそらにてきえ〔に〕せ。ばうきとありとたれかつげまし

これらのに‖も同じ。猶此に‖もじの事。六の巻なるぬ‖ぬるの部にくはしくいふを考へあはすべし

〇ものを‖といふに近きに‖

古十五　それをだにおもふことゝてわがやどを見きとないひそ人のきかく〔に〕

同十七　ぬきみだる人こそ有らし白玉のまなくもちるか袖のせばき〔に〕

後七　秋の野のにしきのごともみゆる哉色なき露はそめじと思ふ〔に〕

万十五　青によしならの都にゆく人もがも草まくら旅行船のとまりつげん〔に〕

新三　有明の月はまたぬ〔に〕出ぬれどなほ山ふかきほとゝぎすかな

同　庭のおもはまだかわかぬ〔に〕夕だちの空さりげなくすめる月かな

右のたぐひのに‖は。ちから有て。つねのに‖もじにことなり

〇なくに‖

古二　さくら花ちらばちらなんちらずとて故郷人のきても見なく‖〔に〕

同十四　みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれんと思ふ我ならなく‖〔に〕

同十七　たれをかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなく‖〔に〕

同二　春雨ににほへる色もあかなく‖〔に〕かさへなつかし山ぶきのはな

同十九 むつごともまだつきなく〔に〕明ぬめりいづらは秋の長してふよは

○なしに

古十一 淺茅生の小野のしの原忍ぶとも人しるらめやいふ人なし〔に〕

万四 てる月をやみにみなしてなく涙ころもぬらしつほす人なし〔に〕

古二 とゞむべき物とはなし〔に〕はかなくもちる花ごとにたぐふ心か

同三 ほとゝぎす我とはなし〔に〕うの花のうきよの中に鳴わたるらん

○一つのに

新二 赤人 春雨はいたくなふりそさくら花まだ見ぬ人〔に〕ちらまくもをし

これは萬葉より出たりかの集にはなほ此たぐひのにもじこれかれあり

○一つのに

玉四 また秋のうれへの色にむかふなり尾花が風〔に〕庭の月影

同五 あれわたる庭は千くさ〔に〕虫の聲かきほはつたのふるさとの秋

同十 うれしきにうきはそひけるならひかなまち見し宵〔に〕今の別路

かやうにこれとかれと二つ事をいひたつる間にはさめるにもじ。いやしげに聞ゆる物也。又似たることながら。風雅五後京極殿「物思へとするわざならし木間より落たる月にさをしかの聲。此たぐひはわろからず。月に鹿のなくをいへるにて。月と鹿とをならべていひたてたるにはあらざればなり。

○一つのに

風一 さくらばないざや手ごにたをりもてともに千年の春〔に〕かざゝん

新後拾八 秋〔に〕見し色もにほひもそれながら霜にのこれる庭のしら菊

此たぐひのにもじ殊にいやしく聞ゆ。「秋に見しなどは。近き世にはつれの事になりぬれど。古き哥には見えざると也。これけ必「秋見しといふべきことなるを。さてはもじたらず。やむとえずば「秋見てしとこそいはめ。式子内親王の「春にかすめるよのけしき哉などは。かすみて春のけしきになれるよしなれば意異也

○なにせんに　四の巻何の部に出せり

○かに　四の巻かの部に出せり

〔て〕

○つねのてはこゝなるとなし

○てき　てし　てば　てよ　てん　てけん　てまし　てしがな　てけり

右のたぐひのてはつの轉用也。此事六の巻つ　つるの部に委くいふを考ふべし。【○てけりといふ時にけを濁りてよむはひがこと也。濁るべきよしもなく例もなし。たゞ清てよむべし】

後　三　かくながらちらでよをやはつくし〔て〕ぬ花のときはも有と見るべく

此ても右のてと一つなり。此哥上句は「さくら花春くはゝれる年だにも人のこゝろにあかれやはせぬといへる哥の下句と同じ格のてにをは也

○にて

新　十七　よの中をこゝろだかくもいとふかなふじのけぶりを身の思ひ〔にて〕

後　十四　おもひつゝへにけるとしをしるべ〔にて〕なれぬる物はこゝろなりけり

同　十八　今こんといひしばかりをいのち〔にて〕まつにけぬべしさくさめのとじ

拾　十八　こむらさきたなびく雲をしるべ〔にて〕くらゐの山の峯を尋ねん

同　まつがえのかよへる枝を。こぐら〔にて〕すだてらるべきつるのひな哉

同 廿　ひこなしゝむねのちぶさを。ほむら〔にて〕やくすみ染の衣きよきみ

後拾 十　さきにたつなみだを。道のしるべ〔にて〕われこそ行ていはまほしけれ

新 四　深草の露のよすがを。ちぎり〔にて〕里をばかれず秋はきにけり

同　身にこまるおもひを。荻のうはゞ〔にて〕此ごろかなし夕暮のそら

かくのごとく上にをとかゝりてにてといふ。一つの格なり。此外つねのにてはことなるとなし

○ずて　ずしての意也

古今序　さく花に思ひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるもしら〔ずて〕

拾十四 万十一　浪間より見ゆる小嶋のはまびさし（万さ）久しくなりぬ君にあは〔ずて〕（万ずして）

古 四　秋萩をしがらみふせてなく鹿のめには見え〔ずて〕音のさやけさ

後 二　君こ〔ずて〕年はくれにき立かへり春さへけふに成にける哉

同六 万八　わがやどの尾花がうへのしら露をけた〔ずて〕玉にぬく物にもが

○てへ

古 十八　今さらにこふべき人もおもほえず八重むぐらして門させり〔てへ〕

拾 十七　むかしより名高きやどの言の葉はこの本にこそ落こまる〔てへ〕

同 十八　我のみや子もたる〔てへ〕ば高砂の尾上にたてる松も子もたり

六帖　こひ〔てへ〕ばしらぬ道にもあらなくにあやしくまごふわが心かな

これらはといへをつゞめててへといへる也といふをつゞめてていふにて心得べし。さてこれはての部に入べき辞には非れ共しばらくてもじによりてこゝに入つ

○ては　三の卷ばの部に出せり
○てよ　五の卷よの部に出せり
○なごて　四の卷何の部に出せり

〔で〕濁

○ではずしてのつゞまりたる辞也。つねのでこゝなるとなし
○なで　此なはなんなごのなゝ一つにて。去の轉じたるなり

古十三　みるめかるわが身をうらさしらねばやかれ〔なで〕海士の足たゆくくる
後十八　かひもなき草の枕におく露のなにゝきえ〔なで〕落こまるらん
拾八　うきよにはゆきかくれ〔なで〕かきくもりふるは思ひのほかにも有かな
新六　中々にきえはきえ〔なで〕うづみ火のいきてかひなき世にも有かな
同八　おもへ君もえしけぶりにまがひ〔なで〕立おくれたる春のかすみを
同十五　つらからば戀しきとはわすれ〔なで〕そへてはなごかしづ心なき
同十八　つきもせぬひかりのまにもまぎれ〔なで〕おいてかへれるかみのつれなさ
同十二　もしほやくあまのいそやの夕けふり立名もくるし思ひたえ〔なで〕
萬葉三「天の川かへさの舟に涙かけでのりわづらはゞ程もふばかり。此でもなでの意なり

〔な〕

○「けりな「けらしな「じな【「わすれじな「しられじなのたぐひ】「ばやな【「見せばやな「ゆかばやななごのたぐひ】

「がもな」「かしな」「よな」「さぞな」「あれな」「かなしな」「つらしな」「ちぎりきなのたぐひ猶おほし【千五百番に「おもはずな」夫木俊頼哥に「うれしやな」同顯昭哥又風雅慈鎭僧正哥に「さりともな」これらはいやしくきこゆ】又萬葉には「んなこいへるおほし。【古今よりこなたには此例なし。文にはをり〳〵見えたり】又「たまへな」「まぎらはしもな」「音高しもななども有。「うべな〳〵」は古事記の哥にもあり

後十三 人ごこのたのみがたさは難波なるあしのうら葉の恨みつべし〔な〕

同十四 世中になほ有明のつきなくてやみにまごふをこはぬつらし〔な〕

拾七 秋風によもの山よりおのがじゝふくに散ぬる紅葉かなし〔な〕

後拾八 天の川後のけふだにはるけきをいつ共しらぬ船出かなし〔な〕

いせ物語 いこあはれなくぞ聞ゆるこもしけちきゆる物こも我はしらす〔な〕

これらはなとゝぢめたる哥也

○なば【三の巻ばの部に出】なで【此巻ての部に出】なまし なゝん なばや

右の類のなはぬの活(はた)らきたるにて去(な)の意也。此事六の巻のぬ ぬるの部にくはしくいふを考へあはすべし

後十一 道しらでやみやはし〔な〕ぬ逢坂の關のこなたはうみこいふなり

此なも同じな也

○無(なし)の意のな

古十一 人めもる我かはあや〔な〕花すゝきなこかほに出て戀すしもあらん

後七 いづかたに夜は成ぬらんおぼつか〔な〕明ぬかぎりは秋ぞこ思はん

拾十五 ひこぼしの妻まつよひの秋風に我さへあや〔な〕人ぞ戀しき

此なは猶いとおほしなずらへしるべし

〇勿(なふれ)の意のな‖

古三　夏山になくほとゝぎす心あらば物思ふ我に聲〔な〕きかせそ‖

同四　もゝくさの花のひもとく秋の野に思ひたはれん人〔な〕とがめそ‖

新九　すゞしさはいきのまつ原まさる共そふる扇の風〔な〕わすれそ‖

古一　春日野はけふは〔な〕やきそ‖わか草のつまもこもれり我もこもれり

同　山たかみ人もすさめぬさくら花いたく〔な〕わびそ‖我みはやさん

同五　こひしくはみてもしのばんもみぢ葉をふき〔な〕ちらしそ‖山おろしの風

壬二集「春の花秋の紅葉も見て過し心な戀にいたくくだきそ‖此哥はなもじのおき所あしくていかにぞや聞ゆ。「いたくなくだきそ‖といふべき定まり也。また

万七　妹があたりわが袖ふらん木間よりいでくる月に雲〔な〕たなびき

同十七　我なしと〔な〕わび‖わがせこ郭公なかんさ月は玉をぬかさね

これらは下にそもじなし。此外も萬葉には此例おほし。古今よりこなたには見えず。又万葉にはその下へねをそへてそねといへるも多し。七の卷古風の部に出せり。又十七の卷長哥には。「ねもころになこひそよとぞ云々。共よめる有。源氏物語若菜下の詞にも。「つきゞりなるとなのたまひそよとあり。また

新拾廿 重之集　ちはやぶるいづしの宮の神のこまゆめ〔な〕のりそやたゝりもぞする

これは下にそやといへり

また

拾十六　花の色はあかず見るともうぐひすのねぐらの枝に手〔な〕なふれそも‖

元輔集　春がすみたちな‖なよりそ‖うすくこき錦と見ゆる山のさくらに

これらはなを二つ重ねたる。一つはあまりて聞ゆいかゞ。又拾遺の哥は。その下へもを添たり。此例は六帖にも。「雪なふりそも「風なふきそもなど有。されどこれらは万葉の哥を直して入たるにて。實にあらず

また

古 二 山ぶきはあやな〔な〕さきそ花見んとうゑけん人のこよひこなくに

これはなもじ二つ重なりたれ共。上のなは無（なし）の意なればこと事也。又此哥の二の句を。「あやなくさきそと書る本あり。寫し誤也。

〇六帖「わがせこがふりさけ見つゝなけくらん清き月夜に雲たなびきそ。これはなを略きて下にそとのみいへる。いみしきひがこと也。下のそは略ける例あれども。上のなを略くとは例も理りもなし。此哥は万葉十一に在て。結句雲莫田名引（クモナタナビキ）とあるを直せる誤也。すべて六帖のうち。万葉の哥をとれるには。えもいはぬひがこと多きぞかし。さて夫木源仲正。「ちりぬとも外へはやりそいろ〳〵の木葉めぐらす谷のつぢ風。同寂蓮。「牛の子にふまるな庭のかたつぶり角あればとて身をばたのみそ。これらの哥もなもじなし。皆ひがとなり。近き世にも此誤をり〳〵見ゆ。

右の外「わするな「うらむなごやうになを下におくはことなるとなし

〔み〕

〇一つのみ

古 十一 秋の野の尾花にまじりさく花の色にやこひんあふよしをな〔み〕

同 一 春のきるかすみのころもぬきをうす〔み〕山風にこそみだるべらなれ

同 四 秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつまし〔み〕旅ならなくに

同 十三 ねぬる夜の夢をはかな〔み〕まどろめばいやはかなにもなりまさる哉

○玉のを五

後六 秋の田のかりほのいほのとまを。あら〔み〕我衣手は露にぬれつゝ

万八 春の野にすみれつみにとこし我ぞ野を。なつかし〔み〕一夜ねにける

後万十五 天の川せゞのしら浪たかけれどたゞ渡りきぬまつにくるし〔み〕

古五 さほ山のはゝその紅葉ちりぬべ〔み〕よるさへ見よとてらす月かげ

同十四 かず〳〵に思ひおもはずとひがた〔み〕身をしる雨はふりぞまされる

同十五 ゆきかへり空にのみしてふるとはわがゐる山の風はや〔み〕なり

後六 時雨ふりふりなば人に見せもあへずちりなばをし〔み〕をれる秋萩

同七 藤ばかまきる人な〔み〕やたちながらしぐれの雨にぬらしそめつる

同 秋の月ひかりさやけ〔み〕もみぢ葉のおつる影さへ見えわたるかな

右の外「風をいたみ‖「瀬をはやみ‖「春を淺み‖「山高み‖「秋ふかみ‖「風はやみ‖「冬さむみ‖のたぐひは猶おほし【上にをこいへるヿ。をもじなきヿありあるもなきも同じ意也】又萬葉には此みを用ひたるヿ殊に廣くして。後の哥の用ひざまといさゝか異なるもおほし。「袖のわかれをかたみ‖して。「いふせみ‖と。「ともしみ‖と。「戀をしげみ‖と。などやうにもいへり。

古十三 あさ〔み〕こそ袖はひつらめなみだ河身さへながるときかばたのまん

これは淺き所をさして「あさみといへるやうに聞ゆめれど。さにはあらず。此み‖も右の哥共のみ‖と同じくて。「淺きにこそといふ意也。但し源氏葵卷に「淺みにや人はおりたつ云々とよめるは。此古今集の哥を。淺きところの意と見てとれる也 ○新續古今五經信卿「さをしかの聲のさやけみ‖聞ゆるはひとりやぬらん小野の草ぶし。此み‖はく‖を寫し誤れるなるべし。又風雅七「ぬれておつる桐の枯葉は音をおもみ‖嵐はかろき秋のむらさめ。此み‖はひがと也

○一つのみ

後拾一 難波がた浦吹風に浪たてばつのぐむ芦の見え〔み〕見えず〔み〕

千十三 みつしほの末葉をあらふ流れ蘆の君をぞ思ふうき〔み〕しづみ〔み〕

後八 神無月ふり〔み〕ふらず〔み〕さだめなき時雨ぞ冬のはじめなりける

後拾十三 みちのくのをだえの橋やこれならんふみ〔み〕ふまず〔み〕心まごはす

万十二 あづさ弓ひき〔み〕ゆるし〔み〕思ひ見てすでにこゝろはよりにし物を

此外「おひみいだきみ。又「ゑみゝいかりみ。なども萬葉にあり。又文にも「くもりみはれみ。又「なきみわらひみなごおほし。又萬葉十八長哥に「をこめらにつこにもやりみ白妙の袖にもこきれかぐはしみおきてからしみ云々かやうにもよめり【此中に「かぐはしみのみは。上の「山高みなごのみにて。こゝのみにあらず別なり】また

万十八長哥 はしきよしそのつまの子こあさよひにゑみ〔み〕ゑまずもうち歎き云々

菅家万葉下 あかずして君をこひつるなみだこそうき〔み〕しづみて有わたりつれ

貫之集 おく山の見え〔み〕見えぬは年くれて雪のふりつゝかくすなりけり

かくの如く上に一つみといひて。下に今一つをばいはぬもあり。されどこれはきゝよくもあらず。〇菅家万葉下巻に「春の日に霞分つゝ行鴈の見江須(ミエズ)見江須(ミエズ)も雲かくれつゝ」これは上の須の字は必寫し誤りなるべし。「見えみ見えずもと有べきと也

〇一つのみ

拾十三 夏草のしげ〔み〕におふるまろこ菅まろがまろねよいくよへぬらん

源氏葵 あさ〔み〕にや人はおりたつわがかたは身もそほづ迄深きこひぢを

後鳥羽院集 雨をやむ雲のうす〔み〕を行月の影おほろなる夏の夜のそら

これはしげき所をしげみ。淺き所をあさみ。うすき所をうすみといへる也

〔よ〕

〇玉のを五

○玉のを五

後 九 たえはつるものとは見つゝさゝがにの糸をたのめる心ぼそさ〔よ〕

拾 十二 春の野におふるなきなのわびしきは身をつみてだに人のしらぬ〔よ〕

千 二 けふくれぬ花のちりしもかくぞ有しふたゝび春は物をおもふ〔よ〕

後 十九 さらば〔よ〕とわかれし時にいはませば我も涙におぼゝれなまし

拾 十 おひしげれひら野の原のあや杉〔よ〕こきむらさきにたちかさぬべく

同 十二 ゆめ〔よ〕夢戀しき人にあひ見すなさめての後はわびしかりけり

同 かた岸の松のうきねと忍びしはされば〔よ〕つひに顯はれにけり

同 十三 夏くさのしげみにおふるまろこ菅まろがまろね〔よ〕いくよへぬらん

同 十七 秋風〔よ〕たなばたつめにことゝはんいかなるよにかあはんとすらん

後拾 十二 有馬山ゐなのさゝはら風ふけばいでそ〔よ〕人を忘れやはする

新 六 や〔よ〕しぐれ物おもふ袖のなかりせば木葉の後になにを染まし

同 十四 たづね見るつらきこゝろのおくの海〔よ〕しほひの潟のいふかひもなし

「世中よ」‖「玉のをよ」‖「いかだしよ」‖「なげかずよ」‖「おぼえずよ」‖「忘れずよ」‖「うらみずよ」‖「しのばじよ」‖「わすれじよ」‖「わするなよ」‖「こゝへよ」‖「もらすなよ」‖「ちらすなよのたぐひとおほし。又二つ重ねたるは

千 十六 此ごろのをしのうきねぞあはれなる上毛の霜〔よ〕下のこほり〔よ〕

○仰（おほ）するよ‖

古 四 萩の露玉にぬかんとこればけぬよし見ん人は枝ながらみ〔よ〕

同 七 わがよはひ君が八千代にとりそへてとゞめおきてば思ひ出にせ〔よ〕

此たぐひいとおほし

また

古十六 みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よ‖かわきだにせ〔よ〕

新六 ながむればわが山のはに雪しろしみやこの人よ‖あはれ共見〔よ〕

狭衣 早き瀬のそこのもくずと成にきとあふぎの風よ‖ふきもつたへ〔よ〕

これらはよ‖二つ有て。上なるは呼出すよ。‖下なるは仰するよ也‖〇玉葉十「なきなげきとも人こひてながめしと思ひ出よ‖ゝ夕暮の空。かく重なれるはひがと也

〇てよ‖

古四 ひさかたの天の川原のわたし守君わたりなばかぢかくし〔てよ〕

新十三 たのめおかんたゞさはかりをちぎりにてうきよの中の夢になし〔てよ〕

伊勢物語 彦星に戀はまさりぬあまのがはへだつる關を今はやめ〔てよ〕

新十一 いせ集 なにはがたみじかき芦のふしのまもあはで此世を過し〔てよ〕とや

後拾十六 いのりけんことは夢にてかぎり〔てよ〕さても逢てふ名こそ惜けれ

詞十 かくてのみよに有明の月ならば雲がくし〔てよ〕天降る神

万二十 ほとゝぎすこゝにちかくをきなき〔てよ〕過なん後にしるしあらめやも

〇とよ‖

古三 やよ。やまて山ほとゝぎすことつてんわれ世中にすみわびぬ〔とよ〕

万廿 わが妹子がしのびにせよ。とつけし紐いとになる共わはとかじ〔とよ〕

堀川百首 さくら花山路も見えずちりにけりこれより春はくれゆくか〔とよ〕

金八 あさましやこはなにどのさまぞ〔とよ〕戀せよ。とても生れざりけり

新十五　夢か〔こよ〕見し面影もちぎりしも忘れずながらうつゝならねば

狭衣　夢か〔こよ〕見しにも似たるつらさかなうきはためしもあらじと思ふに

○よな

拾三　長月の九日ごとにつむ菊の花のかひなくおいにける〔よな〕

狭衣　同じくはきせ〔よな〕あまのぬれ衣よそふるからにくからずやと

同　かすめ〔よな〕おもひきえなんけぶりにも立おくれてはくゆらざらまし

〔ね〕

後十　おもはんと頼めしこと有物をなき名をたてゝたゞに忘れ〔ね〕と

拾十五　あふとは心にもあらすつらくともさやは契りし忘れはて〔ね〕と

後十三　わすれ〔ね〕といひしにかなふ君なれどとはぬはつらき物にぞ有ける

同十九　君が代は鶴の郡にあえてき（来）〔ね〕さだめなきよのうたがひもなく

拾十一　あふことを月日にそへてまつ時はけふ行末になり〔ね〕とぞ思ふ

同十六　春風は花のなきまにふきはて〔ね〕さきなば思びなくて見るべく

新十一　玉のをよたえなばたえ〔ね〕ながらへば忍ぶるとのよわりもぞする

同十二　きえ〔ね〕たゞ忍ぶの山の峯の雲かゝるこゝろのあともなきまで

此ね‖はいはゆる下知‖の活用（はたら）けるにて。仰（おほ）する辞也　○新後撰十四玉葉十一千五百番哥合定家卿哥などに「わすれねよと。よ‖を添てよめる有。聞よくもあらず

○さね‖そね‖　これらは古今集よりこなたには見えず。七の巻古風部に出せり

○やすめ辞のし‖

古一　こゝろざし深くそめて「し」をりければ‖消あへぬ雪の花と見ゆらん

同　年ふればよはひはおいぬしかはあれど花を「し」見れば‖物思ひもなし

同二　までといふにちらで「し」とまる物ならば‖何を櫻におもひまさまし

同　のこりなくちるぞめでたきさくら花在てよの中はて「し」（一本の）うければ‖

同　春雨のふるはなみだかさくら花ちるをゝしまぬ人「し」なければ‖

同　いつまでか野べに心のあくがれん花「し」ちらずば‖ちよもへぬべし

同　散花のなくに「し」とまる物ならば‖われうぐひすにおとらましやは

同　ふく風とたにの水と「し」なかりせば‖みやまがくれの花を見ましや

同　をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道に「し」たちぬと思へば‖

同四　秋の夜の月のひかり「し」あかければ‖くらふの山もこえぬべら也

同六　故郷はよし野の山「し」ちかければ‖一日もみ雪ふらぬ日はなし

同八　おもへども身を「し」分ねば‖めに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

同　からころもたつ日はきかじ朝露のおきて「し」ゆけば‖けぬべき物を

同　朝なけに見べき君と「し」たのまねば‖おもひたちぬるくさまくらなり

同九　名に「し」おはゞ‖いざことゝはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

○玉のを五

同 十 春霞中〔し〕かよひぢなかりせば秋來る鴈はかへらざらまし

古 十四 ちゞの色にうつろふらめどしらなくに心〔し〕秋の紅葉ならねば

大方やすめ辭のしは。右の哥どものごとく。いづれも皆下にばと受たり。よく〳〵心をつけて語のしらべを味ふべし。これぞらちまかせたる格には有ける。

古 八 したはれてきにし。心の身に〔し〕あればかへるさまには道もしられず

万 十二 おもふに〔し〕あまりにしかばすべをなみ我はいひてきいむべきものを

これらはにし二つ有て。一つのしはいはゆる過去のし。一つのしはやすめ辭也。

また

古 九 ほの〴〵と明石のうらの朝霧に嶋がくれゆく船を〔し〕ぞ思ふ

同 十七 ちはやぶる宇治の橋守なれを〔し〕ぞ。あはれとは思ふ年のへぬれば

万 八 たちばなの花ちる里のほとゝぎすかた戀しつゝなく日〔し〕ぞおほき

同 十五 此ごろは君をおもふとすべもなき戀のみしつゝねのみ〔し〕ぞなく

これらはしぞとつゞける格なり

また

古 二十 あたらしき年のはじめにかく〔し〕こそ千年をかねてたのしきをつめ

いせ物語 これやこの天の羽ごろもうべ〔し〕こそ君がみけしとたてまつりけれ

これらはしこそとつゞける格也。なほ此格は萬葉におほし

また

古 一 たれ〔し〕かも。とめてをりつる春がすみ立かくすらん山のさくらを

同四 けふよりは今こんとしの昨日をぞいつ〔し〕か‖とのみまち渡るべき

同十二 あづまぢのさやの中山なか〳〵になに〔し〕か‖人をおもひそめけん

同十三 たきつ瀬の早きこゝろをなに‖〔し〕か‖も人めづゝみのせきとゞむらん

これらは何等‖の下におきて。か‖もじとの間にはさめる格也

また

古十一 秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心にわすれ〔し〕も‖せん

同 人めもる我かはあやな花ずゝきなどかほに出てこひず〔し〕も‖あらん

同十四 月夜よしよゝしと人につげやらばこてふにゝたりまたず〔し〕も‖あらず

同十九 うめの花見にこそきつれうぐひすのひとく〳〵といとひ〔し〕も‖をる

後九 わたつ海に深きこゝろのなかりせばなにかは君をうらみ〔し〕も‖せん

後拾五 きくにだにこゝろはうつる花の色を見にゆく人はかへり〔し〕も‖せじ

源氏若紫 立とまり霧のまがきのすぎうくば草のとざしにさはり〔し〕も‖せじ

古四 わがためにくる秋に〔し〕も‖あらなくに虫のねきけばまづぞかなしき

同十五 秋風は身を分て〔し〕も‖ふかなくに人のこゝろの空になるらん

同十七 かぎりなき君がためにとをる花は時〔し〕も‖わかぬ物にぞ有ける

同十八 いくよ〔し〕も‖あらじ我身をなぞもかくあまのかるもにおもひ亂るゝ

後十七 たらちめはかゝれとて〔し〕も‖うば玉のわが黑髮はなでずや有けん

これらはしも‖とつゞける格也。但し此しも‖は。も‖といふべき所に。し‖を上にやすめ辭における物にても‖はつねのも‖也。しも‖二もじ共にやすめ辭なるは。別に下に出せり

○玉のを五

古十五 いま〔し〕はとわびにし物をさゝがにの衣にかゝりわれをたのむる

これは古風の格にて。万葉に例あり。万葉には「今しはしと。やすめ辞のしを二つかさねておけることも有なり

おほよそやすめ辞のしもじの格。萬葉には猶さま〴〵おほくありて。七の巻古風の部に出せり。今も古風の哥をよまんには。それにならふべし。然るに古今集よりこなたは。おのづから定まりあるが如くになりて。右に出せる格共にはづれたるは。をさ〳〵見えざれば。古今よりこなたの風をよまんには。右の格をよく心得て守るべし。みだりにはおくべきにあらず。

古九 からころもきつゝなれにしつま〔し〕あればはる〴〵きぬる旅を〔し〕ぞ思ふ

同十一 たね〔し〕あれば岩にも松はおひにけり戀を〔し〕こひばあはざらめやは

これらは此しもじ二つあれども。いづれも右の格にはづれず近き世の人の哥を見るに。もじのたらぬ所には。みだりに此しもじをおきて。いともいやしけなるがおほき故に。今殊に古哥をおほく引出て。其格をしめすなり

いせ物語 よをうみのあまと〔し〕人を見るからにめくはせよ共たのまるゝかな

これは件の格どもにはづれたれども。よくとゝのひて聞えたり。おのづからの事なり

新千廿 我かくて君が七代にあふさかの關〔し〕まさしき道ぞしらるゝ

これは古今八「相坂の關しまさしき物ならば。あかずわかるゝ君をとゞめよ。といふを本哥にてよめる故に。右の格共にはつれたれども。しもじあしからず。もし本哥なくてかくあらんにはよろしからざるおきざま也

○千載七「あはれとし思はん人は別れじを心は身より外の物かは。風雅十九「わが君をまもらぬ神したけれども千世のためしは住吉の松。これらのしは聞よくもあらず。玉葉十二「けふしだに契らぬ中はあふとを雲ゐにのみもきゝ渡るかな。續千載十六「山はなほみ雪しふれどかげろふのもゆる野ばらの春のさわらび。これらのしもじはいといやしげに聞えたり。今の人心すべし。

○しも　これは二もじ共にやすめ辭也。上に出せるもに意あるしもとはかはれり

古 三 夜やくらき道やまどへるほとゝぎす我やどを〔しも〕過がてになく

同 十三 今朝は〔しも〕（霜をふくめたり）おきけんかたもしらざりつ思ひいづるぞ消てかなしき

同 十四 たが里によがれをしてか郭公たゞこゝに〔しも〕ねたる聲する

金 三 今は〔しも〕ほに出ぬらん東路のいはたの小野のしのゝをずゝき

これらのしもはいさゝかも意なきやすめことばなり

また

古 三 むかしへやいまも戀しきほとゝぎす古鄕に〔しも〕鳴てきつらん

同 四 天の川紅葉をはしに渡せばやたなばたつめの秋を〔しも〕まつ

拾 十一 あまた見しとよのみそぎのもろ人の君〔しも〕物をおもはするかな

同 十二 夢のどなごかよる〔しも〕君を見んくるゝまつまも定めなき世に

同 十七 こゝに〔しも〕なにゝほふらん女郎花、人のものいひさがにくきよに

これらは同じやすめ辭なるうちにも。いさゝか意あり　あるが中にてえり出たる事におけり。「故鄕にしもは所もおほき中に故鄕にしもと　故鄕をえり出したるなり。「秋をしもは。時もおほき中に秋をしもと。秋をえり出たる也　外もなずらへて心得べし

千五百番歌合 草も木もいかに契りて藤の花松にと〔しも〕は。かかりそめけん

是も同じしもにて。下にけを添たるはめづらし

右の外。萬葉にはしもといふやすめ辭猶さまざまにおほし。七の卷古風の部に出せり

拾 六 さき〔しも〕あれ秋〔しも〕人のわかるればいとゞたもとぞ露けかりける

これはしも二つ有。上なるはこそに通ふしも。下なるはえり出たるしもなり

○續古今十五「ながれてと思ひし物をふじ川のいかさまにしもすまずなりけん。此しもは寫し誤り也。古本にしてとあるぞ正しき。又風雅十六「今しもは嵐にまさるあはれかな音せぬ松の夕暮の山。此しもはいたくわろし。「今はしもとこそいふべけれ

○こそに通ふしも

すべて「をりしもあれ。「時しもあれなどいふは。「をりこそあれ。「ときこそあれといふに同じ。さる故にこその格にれと結べり。万葉十八の長哥に。「こゝをしもあやにくすしみ云々いひつぎにすれとよめる。是もしもとかゝりて。れと結べり。又新古今六に「をりこそあれながめにかゝる云々。これ「をりしもあれといふと全く同じ事也。又蜻蛉日記の詞に「よに道しもこそはあれと重ねてもいへり。【哥にしもこそと重ねいふ例は五の巻こその部におほく出せり】又

後拾四　をみなべしおほかる野べにけふ〔しも〕あれうしろめたくも思ひやるかな

此三の句は「をりこそあれけふしもといふ意也。かくのごとくいふも又一つの格也

馬内侍集　君〔しも〕（しまれ新古今十五）あれ道のゆきゝを定むらん過ぬる（にし同）人は（を同）かつわすれつゝ

これも右の後拾遺の哥と同じ格にて。「人こそあれ君しもといふ意也。此哥新古今には初の句「君しまれとあり。これは「しもあれをつゞめていへるにて同じとなり。○風雅十三「今しもあれ人のながめもかゝらじをきゆるもをしき雲の一むら。これは例のひがごと也。すべて玉葉風雅にはかゝるみだりなることぞつねにおほかる

○しもぞ　三の卷ぞの部に出せり

○しもこそ　五の卷こその部に出せり

〔らく〕

古七 さくらばなちりかひくもれおい「らく」のこむこいふなる道まがふかに

拾十五 塩みてば入ぬるいその草なれや見「らく」すくなくこふ「らく」のおほき万七

此外此ことば万葉に多し。七の巻古風の部に出せり

「まく」附「ま」

古十三 いたづらにゆきてはきぬる物ゆゑに見「まく」ほしさにいざなはれつゝ

同十七 おもふどちまとゐせる夜はから錦たゝ「まく」惜き物にぞありける

同十八 いざこゝにわが世はへなんすがはらや伏見の里のあれ「まく」もをし

同十七 わたのはらよせくる浪のしばくも見「まく」のほしき玉づしまかも

拾十六 雪をうすみかきねにつめるからなづななづさは「まく」のほしき君かな

しらべのたらぬ時は。かやうにのもじを添てもいへり。其外萬葉には用ひざまことなるおほし。七の巻古風部に出せり〇天王寺百首総鎮「かけまくもかけてぞ頼む」云々。これはいみしきひがことなり

又作のまくを畧きてま共いへり。「見まほし」「きかまほしなどのたぐひ也。拾遺十六の哥には「見まうきこもよめり。

元真集 里よぎてまづもなかなんほとゝぎす身のうき事もつたへ「ま」はほし

これは下へはを添たり。いとめづらし。もしはくの誤りにはあらざるにや

「けく」附「けし」「けき」

古十八 世中のう「けく」にあきぬおく山の木葉にふれるゆきやけなまし

同十九 まめなれどなにぞはよ「けく」かるかやのみだれてあれどあし「けく」もなし

後三 さくら色にきたる衣の深ければ過る月日のをし「けく」もなし

大和物語 なが「けく」もたのみけるかなよの中を袖になみだのかゝる身をもて

なほ万葉には「たひらけく」「こひしけく」「ほしけく」「やすけく」「いたけく」「かなしけく」「いらなけく」「ねたけく」「うれしけく」「つらけく」などおほし

又「寒けし」「露けし」「さむけき」「つゆけき」などのけしけきは。右のけくと同じ辞のはたらけるにて。ことなることなし。

「かし」

○かしは切れたる辞の下に添ることば也。もし上にぞのや何などの辞あれば。又其格の結び辞にて切たる下にもおく事あり。

古十 たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなんそれとうつせ見ん。「かし」

後十八 ひぐらしの聲を戀しみけぬべくばみ山どほりにはやもきね。「かし」

拾十九 いはみがたなにかはつらきつらからば恨みがてらにきても見よ。「かし」

後拾十五 ながむれば月かたむきぬあはれわが此世のほどもかばかりぞ。「かし」

同 ゆかばこそあはずもあらめはゝきゞのありとばかりはおとづれよ。「かし」

同十七 きえもあへずはかなき程の露ばかりありやなしやと人のとへ。「かし」

元輔集 松をのみ引てかへらばうめの花おもふこゝろの殘るらん。「かし」

後拾十四 おもひには露のいのちぞきえぬべき言の葉にだにかけよ。「かし」君

同 三 みなかみもあらぶるこゝろあらじ。「かし」波もなごしのみそぎしつれば

同 十六 長しとて明ずやはあらん秋のよもまて。「かし」槇のとばかりをだに

千 十七 たれもみな露の身ぞ。「かし」と思ふにも心とまりし草のいほかな

新 一 とめこ。「かし」梅さかりなるわが宿をうときも人はをりにこそよれ

いせ物語 戀しくばきても見よ。「かし」ちはやぶる神のいさむる道ならなくに

大和物語 さてもきみわすれけり。「かし」鶯のなくをりのみや思ひいづべき

〇元輔集に「年深き谷の朝霧かつ見てもおほつかなくぞわすられぬかし。是は上にぞといへれば。ぬるかしといふべきを。ぬかしといへるは。ぞの結び辭たがへり

後拾 十七 とへ。「かし」ないくよもあらじ露の身をしばしも言の葉にやかゝると

新 八 とへ。「かし」なかたしく藤のころも手になみだのかゝる秋のねざめを

かくのごとく下へなを添てもいへり。又濱松中納言物語の詞には。かしやとやを添ていへるところも見ゆ

初學のともがら。「見よかし「とへかしなどいへるたぐひのおほきにならひて。かしはたゞ願ふ意の辭ぞとのみ心得るはひがと也。右に引る哥どもの中にも。願ふ意にあらざるも多きを思ふべし。又文章には殊に此ことばおほき中に。「きかし「ずかし「りかし「つかし「るかし「らん かし「けん かしなどもつねにいへるをや。

詞瓊綸六之巻

むすび辭　紐鏡三轉四十三段。又そのほかなるも。すべて結び辭を此卷に出せり。其中にことなるとなき辭は。はぶきていださず。

〔し〕〔き〕　ひも鏡第一段より第五段まで

〇おほよそしときと相轉る言に三つのかはり有。一には紐鏡第一段。右の行りし。中の行りき。【左ノ行はけれ也】これ也。二には第二段。右の行りし。中の行りしき。【左ノ行はしけれ也】これなり。三には第三段。右の行りき。中の行りし。【左ノ行はしか也】これ也。第四段第五段は第三段に同じ。さて此三つの中に。上二段【第一第二】のしは。いはゆる現在のし。下三段【第三第四第五】のしは。いはゆる過去のしなり。【後世の名目に。しにのみ現在過去の稱有て。きには此稱あるとをきかず。そも〳〵此五段ともに。しときとは。たゞその言の切るゝと。下へつゞく所とのけぢめにて。上のてにをはにしたがひて。かはるのみにこそあれ。意は全く同じくて。きにもしのごとく。現在過去の意はあれば。上二段のきは。現在のきといふべく。下三段のきは。過去のきといふべきにこそ】かくて上二段は。はも徒のかゝりの時しと結び。ぞのや何のかゝりのときと結ぶを。下三段は。うちかへては も 徒のかゝりの時きと結び。ぞ の や 何のかゝりの時しと結ぶ。此事初學のともがらはまどひやすし。紐鏡と此一の卷の三轉證哥とをよく考へ合せてわきまふべし

〔ず〕〔ぬ〕〔ね〕　第六段

〇不のいまだ然らぬをかねていふときはじといふ。【「見じ「きかじ「せじの類也】さてじは上のてにをはの格ずと同じ

くて。は も 徒の結びなり。上にぞ の や 何とおきては。じとむすぶとなし。

○たゞじといふべきを。せじといひ。ぬといふべきを。せぬといふ事あり。「おいせじ「絶せじ「枯せじ「つきせじ。「老せぬ「絶せぬ「つきせぬ「消せぬなどの如し。ずといふ時も此格有也。此せは爲の意也。【萬葉に「はえすれ「死せぬなどもいへり。又源氏野分巻に。「吹みだる風のけしきに女郎花しをれしぬべきこゝちこそすれ。又玄々集に「本あらの小萩しをれしぬらんなどあるしも爲にて。しすせとはたらく同じことば也。堀川百首萩の哥に「しをれせさする共よめり】

〔なり〕〔なる〕〔なれ〕第九段

○ぬなりと。上にぬ【いはゆる畢ッぬ也】をおきてもいひ。又「聲たてつなりなど、。つをおきてもいへり。皆なる なれも同じ。

○「べらなり。【なる なれ同じ】これは萬葉にも一つも見えず。又後にもをさ／＼よまぬ辭なるに。たゞ古今集の比の哥にはいと／＼おほし。

○一つのなり

新貫之集二 わが宿のもの〔なり〕ながらさくら花ちるをばえこそとゞめざりけれ

此なりはきゝなれぬことちすめれ共。にありをつゞめてなりとはいふなれば。我宿の物にては有ながらといふと也。同じ貫之集に「くるゝ夜はおほかりながらたゞたは年に一よやよるをしるらん。此「おほかりながらも。おほくありながらをつゞめたるにて。同じと也。是にはかぎらず。すべてなりといふ辭は。皆にありのつゞまりたるなり。さる故に万葉には在(なり)とも有(なり)ともかけり

○なになりとこぢめたる格あり。二の巻變格の部に出せり

〔けり〕〔ける〕〔けれ〕第十一段

〇にけりと。上ににをおきてもいひ。又てけりとてをおきてもいふなり。さて此てけりの時のみ。けを濁りてよむはひがこと也。例なし。たゞ清てよむべきなり。【皆ける けれ も同じ】

〇けりなと。下になを添ることもあり

〇和泉式部物語に「なりけりき」といへる詞あり。けりき例なきこと也。いかゞ

〇「物にざりけるといふ事。古哥にをり〳〵あり。これは「物にぞありけるの。ぞありをつゞめてざりといへる也。【不有來にはあらず】さる故に。此時のみは。上にぞ の や 何の辞なくしてけると結べり。【菅家万葉下卷に「秋のよをあかしわびぬといひけるぞ物思ふ人のためにざりける。是は上にぞといひて。ざりけると結べる。ひがこと也。例もなくことわりもかなはず。ぞはもとはなりしを。誤りてぞと書るまゝに。つひに曾ノ字にさへ書るなるべし。かの書下卷は。菅原大臣のえらび玉へる物とは見えず。やゝ後の人のえらびと見えたれば。かゝるひがことも有なるべし〇万葉には此ざりけるは見えず。十一の卷に。戀在と書るを。【こひにざりけりとよめるは訓の誤也。集中に例なきうへに。けるといふべきを。けりとつけたるもひがこと也。

〇おしはかるけり

後拾 六　雪ふかき道にぞしるき山ざとは我よりさきに人こざり〔けり〕
金 四　高瀬ぶねさをの音にぞしられぬるあし間の氷ひとへしに〔けり〕
新勅十六 殷富門院大輔　ほのかにも軒端の梅のにほふかなとなりをしめて春は來に〔けり〕
千 六　浪間より見えしけしきぞかはりぬる雪ふりに〔けり〕まつがうら嶋

同　一　おしなべて花のさかりになりに「けり」山のはどにかゝるしら雲

新　一　ふりつみし高根のみ雪とけに「けり」清瀧川の水のしら浪

同　かづらきや高間のさくら咲に「けり」たつたのおくにかゝる白雲

同　二　みよし野のたかねのさくら散に「けり」嵐もしろき春のあけぼの

同　三　ほとゝぎす深き峯より出に「けり」外山のすそに聲の落くる

同　さなへとる山田のかけひもりに「けり」ひくしめ繩に露ぞこぼるゝ

好忠集　岩間にはこほりのくさびうちて「けり」もりこし水も絕て音せず

件の哥共のけりは、これをもてかれをおしはかりしるところにおけり。つねのけりとは意かはれり。

「ぬ」「ぬる」「ぬれ」第十九段

○此ぬはいはゆる畢ヌぬ也。【ぬるぬれも同じ】萬葉に去の字を書て。なにぬねとはたらく辞なり。そのよしは。なんなばなでなましなばやなどのな。又にきにけりにしにたりにけんなどのに。又「きえね「たえね「忘れねなどの類のねなど。皆此ぬのはたらきたる辞にて。その言のつゞきにしたがひて。な共に共ぬ共ね共なるなり。【成といふ言につきて其例を一ついはゞ。「なりなん「なりなばなど、いへばなとなる。「なりにき「なりにけりなど、いへばにとなる。「なりぬといへばぬとなる。「なりねといへばねとなる。これをもてなにぬね皆一つ辞なることをさとるべし。】さて此なにぬねと。つてと相双ぶよし有。次のつつるの部にいへり。

○ぬべし　ぬなり　ぬめり　ぬらん　ぬらしなど、もつゞけり

○るといふべきに似たる所をぬといふ格

後 十八　さゝがにの空にすかける糸よりも心ぼそしやたえ〔ぬ〕とおもへば

拾 三　うつろはんことだにをしき秋萩にをれ〔ぬ〕ばかりもおける露かな

後拾 三　よもすがらまちつる物をほとゝぎすまただになかですぎ〔ぬ〕なる哉

同 十四　かぎりぞと思ふにつきぬなみだかなおさふる袖もくち〔ぬ〕ばかりに

新續古十七 中務　ほどちかくき※〔ぬ〕なる物をいかなれば春かもあはで年のゆくらん

萬 二十　高圓の尾上の宮はあれ〔ぬ〕ともたゝしゝ君が御名わすれめや

此格のぬを。今の人はおほくは誤りて。皆るといふ也。右の哥共にていはゞ。「たえぬと思へばといふべきをば、「たゆると思へばといひ。「をれぬばかりもといふべきをば。「をるゝばかりもといひ。「すぎぬなるかなといふべきをば。「すぐるなるかなといひ。「くちぬばかりにといふべきをば。「くつるばかりにといひ。「きぬなるといふべきをば。「くるなるといひ。「あれぬともといふべきなれば。「あるゝともといふ。かゝるたぐひみなひがと也。哥にも文にも。古への人は此あやまりある事なし。今の人は此格をしらで皆誤れり。續拾遺十「ときはなるかげはかはらじ眞木の村あまの露霜いくよふるとも。此「ふるともは。露霜の降る共ならばよろし。もし又いく代へかゝりて。經る共の意ならばひがと也。それならば「へぬともとこそいふべけれ

〇堀川後百首に「をし鳥のつたふ岩根に涙かけてうきたしづみぬ身をぞうらむる。此ぬはつねにはよくいふ辞なれ共。古へ哥にも文にも雅言には見えず。又此格にいふつも同じ

〔つ〕〔つる〕〔つれ〕第二十段

〇此つは上件のぬと相ならびて同意にて。かれはなにぬねとはたらき。これはつてとはたらけり。さる故にかのなにぬねと。此つてとつねに相ならぶ也。【ぬとつとならびなにねとてとならべり】そはまづぬるとつるとならび。ぬれとつれとならび。ぬなりとつなりとならび。ぬべしとつべしとならび。ぬらんとつらんとならび。ぬらしとつらし

とならべり。又なばとてばとならび。なんとてんとならび。なましとてましとならべり。又にきとてきとならび。にしとてしとならび。にけりとてけりとならべり。又「きえね「たえね「忘れねなどを。「きえてよ「たえてよ「忘れてよといひても同意にて。これねとてとならべる也。又てぬとなぬと同意にてならべる有。

後三 かくながらちらでよをやはつくし〔てぬ〕花のときはもありと見るべく

同十一 道しらでやみやはし〔なぬ〕あふ坂の關のあなたは海といふなり

此二つ共にぬは不の意のぬなれば。こゝの論にあづからず。今はてとなと相ならひて同じ意なるとをいふなり

〔ぬ〕〔ぬる〕〔ぬれ〕第十九段也上に出づより下第三十二段〔う〕〔うる〕〔うれ〕まで合せて十四段の事

○此十四段のてにをはのとゝのへは。後世の人つねに誤るとおほければ。今くはしくわきまへさとす也。そはまづ此下第三十三段より。第三十八段までの六段【く す つ ふ む るの六段なり】と。こゝの十四段とを。同じ格に心得るから誤る也。かの下の六段の言は。たとへば。聞行(きくゆく)は。「きく「ゆくなどゝのみいひて。「きくる「ゆくるなどゝはいふとなし。さる故に切るゝ時もつゞく時も同じとにて。上のかゝりはも徒の時も。ぞのや何の時も。同じむすびなるを。こゝの十四段の言は。ぬ共ぬる共。つ共つる共。る共るゝ共いはるれば。かの六段の格とは異にして。上のてにをはにしたがひて。結びもかはるとなり。すべてぬ ぬる。つ つる。す する。る るゝ。く くる。ふ ふる。む むる。ゆ ゆる。かくのごとくに下へるを添てもいひ。添へずてもいふ詞は。皆此十四段の格。く す つ ふ む るとのみいひて。下へるを添てはいはぬ詞は。みな下の六段の格と心得べし。さて此十四段の格と。下六段の格とのけぢめは。こその結びにてよく分るゝ也。その例を「恨むと「悲しむとの二つの言にていはゞ。「うらむは此十四段の格なる故に。は も 徒の結びの時は

「うらむ。ぞ の や 何の結びの時は「うらむる。こその結びの時は「うらむれなり。かくのごくこその時もむもじは動かずして。三轉共にむこいふ。此十四段の格は皆然也。さて「かなしむは下の六段の格なる故に。は も 徒の結びの時も。ぞ の や 何の結びの時も同じく「かなしむにて。こその結びの時は「かなしめ也。かくのごくむもじ動きて。こその時はめこなりて。むこはいはず。下の六段の詞は皆かくのごし。これをもて外の詞共をもなずらへしるべし。さて此十四段の詞は。結びの時上のてにをはにしたがひてかはるのみならず。語のなかばに在て下へつゞく所にても。その下の受る辭によりてかはる也。その例を一つ二ついはゞ。「なりぬるを「なりぬる になごゝつゞく時は。ぬるこいひて。「なりぬ を「なりぬ になごゝはいはず。然るを「なりぬこ「なりぬ や なごゝつゞく時は。ぬこいひて。「なりぬる こ「なりぬる やこはいはぬ格也。これを になご、受るこ。こ やなごゝ受るこ。その受る辭によりてかはるなり。また可為は「すべしこいひて。「するべしこはいはず。勿為も「すなこいひて。「するなこはいはず。此たぐひもみな定まれる格ありて。古人はおのづからあやまるとなかりしを。今の人はこもすればあやまると也。さて又自他のかはりにて。此十四段の格こ下の六段の格こ。二様にわたる詞もある也。其例をいはゞ。解は。みづからこくるをいふ時は。「こく共「こくる共いひて。此十四段の格なるを。他をこくをいふ時は。たゞ「こくこのみいひて。「こくるこはいはず。下の六段の格也。碎は。みづからくだくるには。「くだく共「くだくる共いひて。此十四段の格。他をくだくには。「くだくこいひて。「くだくるこはいはず。下の六段の格なり。折【をる をるゝ】闕【かく かくる】切【きる きるゝ】破【やぶる、やぶるゝ】なごも同じ。此類皆なずらへ知べし。又立は。みづからたつをいふ時は。只「たつこのみいひて。「たつるこはいはず。下の六段の格也。他をたつるには。「たつ共「たつる共いひて。此十四段の格也。頼は。みづからたのむには。只「たのむこいひて。「たのむるこはいはず。下の六段の格也。他を「たのむるには。「たのむ共「たのむる共いひて。此十四段の格也。續【つゞく つゞくる】入【いる いるゝ】沈【しづむ しづむる】添【そふ そふる】なごも同じ。此類なほおほしなずらへ知べし。後世の人は。件の自他のけぢめをわきまへずして。或は戀の哥なごに。みづから頼むこ。

人を頼むることを。一つに心得。あるひは露などをよむとて。「おきそふといひては。一もじたらぬ時は。「おきそふるとよむたぐひ。皆ひがことなり。「たのむるといふは。萬葉に令憑と令の字を添て書て。人をして頼ましむる意なれば。みづから頼むとは異也。又露のみづからおきそふを。「おきそふるとはいひがたし。さる故に古人は。一もじたらぬ時は。「おきそはるとよめり。「そはるは「そふと同じ意也。「そふるは他を添る事にいふ辭也。これらにて自他の意をわきまふべし。すべて此十四段の辭は。右のごとくさく〳〵心得あること也。みだりにすべからず。

「ん」「め」第三十九段

○んはことなる事なし。めはんといふべき所を。上のかゝりこそなればめといふ。これはつね也。又んやといふべきを。めやといふもあり。【「見んやを「見めや。「きかんやを「きかめや。「ゆかんやを「ゆかめやといふたぐひ也】これは意を裏へかへして。つよくいふ時の辭也。めやの事。四の巻やの部にいへり。又下をど ども受る時も。んを轉じてめといふ。

古 十 花の木にあらざら〔め〕ども咲にけりふりにしこのみなる時もがな

万 二 いそのうへにおふるあしびをたをら〔め〕ど見すべき君が有といはなくに

古 一 色も香も同じむかしにさく〔らめ〕ど年ふる人ぞあらたまりける

同 二 春ごとに花のさかりはあり〔なめ〕どあひ見んとはいのちなりけり

件のんとめとの格どもは皆。らん らめ けん けめ なん なめ てん てめなどにもわたりて。みな同じことなり。

「らん」「らめ」第四十段

〇上にぬ又つをおきてぬらん　ぬらめ　つらん　つらめ共いへり
〇かなの意に通ふらん

古一　心ざし深くそめてしをりければきえあへぬ雪の。花と見ゆ〔らん〕
同二　久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の。ちる〔らん〕
同　春のいろのいたりいたらぬ里はあらじさけるさかざる花の。見ゆ〔らん〕
同　わがやどに咲るふぢなみ立かへり過がてにのみひとの。見る〔らん〕
同四　秋萩にうらびれをればあし引の山下とよみしかの。なく〔らん〕
同十　こゝろから花のしづくにそほぢつゝうくひずとのみ鳥の。なく〔らん〕
同十二　秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人の。戀しかる〔らん〕
同十三　しるといへば枕だにせでねし物をちりならぬ名の。空にたつ〔らん〕
同十四　あまのすむ里のしるべにあらなくにうらみんとのみ人の。いふ〔らん〕
同　ふる里にあらぬ物からわがために人のこゝろの。あれてみゆ〔らん〕
同十五　山の井の淺きこゝろも思はぬに影ばかりのみ人の。見ゆ〔らん〕
同　秋風は身を分てしもふかなくに人のこゝろの。空になる〔らん〕

右の哥共いづれも上にのとかゝりてらんと留りたり又のもじなきもありそれは

古三　ほとゝぎすわれとはなしにうの花のうき世中になきわたる〔らん〕
同八　わかれてふとは色にもあらなくにこゝろにしみてわびしかる〔らん〕
同十八　わが身からうきよの中となげきつゝ人のためさへかなしかる〔らん〕（此のは下へかゝるのにあらず）

これらは上にのとはかゝらず

件の哥どもらんとは結びたれ共。皆其事を疑ふにはあらず。然るゆゑを疑へるてにをは也。さる故に皆かなといふに通へり。始に引る古今一の「心ざし深く染てし云々の哥にていはゞ。消あへぬ雪の花と見ゆる其事は疑ひにあらねば。「花と見ゆるかなといふ意なるを。さやうに花と見ゆるゆゑを疑ひて。何とて花とは見ゆらんといふ意にて。らんとは結べり。然れば「花と見ゆるかな何とて花と見ゆらんといふ意也。次に同二「ひさかたのひかりのどけき云々の哥は「しづ心なく花のちるかな。何とてしづ心なく花のちるらんといふ意なり。次々の哥もみな此格に同じ。いづれも△のしるしを附たる所に。何とてといふ言を加へて心得べし。さて此らんをかなに通ふといふとは。右の古今一なる「心ざし深くそめてし云々の哥の結句を。顕昭が本には「花と見ゆるかと有。此かはかなの意也。又新古今九貫之「見てだにもあかぬ心を玉ぼこの道のおくまで人のゆくらん。此哥も同じ格なるを。六帖には下句を「みちのく迄も人のゆくかなとあり。これらにてさとるべし

新十五 君しまれ道のゆきゝをさだむ（らん）過にし人をかつわすれつゝ

風二 [illegible]王母 雁がねの花のをりしもかへる（らん）たづねてだにも人は惜むに

これらはなからにあれども同じ格のらんなり。また

古三 むかしへや今もこひしきほとゝぎす故郷にしもなきてきつ（らん）

同四 人の見ることやわびしきをみなべし秋霧にのみたちかくる（らん）

同十二 わがごとくものやかなしきほとゝぎすときぞ共なくよたゞ鳴（らん）

同一 あふさかのゆふつけ鳥もわがごとく物やかなしきねのみ鳴（らん）

同四 秋の野の草のたもとか花ずゝきほにいでゝまねく袖とみゆ（らん）

同十四 大空は戀しき人のかたみかはもの思ふごとにながめらる（らん）

これらのらんもみな上なる哥共と同じ格なるうちに。これは上へかへりてそのゆゑをとひかくる格也。この故に皆上に疑ひのてにをは有て。語切れたり。古今三「むかしへや云々の哥にていはゞ。「郭公故郷にしも鳴てきつるかな　何とて故郷にしも鳴てきつらんと。そのゆゑを疑ひて。さて上へかへりて「昔へや今も戀しきとそのゆゑを問かくる也。外の哥どもゝみなかくのごとし

○かなの意に通ふ格。らんのみならず。けんにもまれにあり。けんの部に出せり

○んとすらん じとすらん

後 九 今とのみたのむなれどもしら雲の絶間はいつかあらん〔とすらん〕
同 十一 いたづらにたび〱しぬといふめればあふにはなにをかへん〔とすらん〕
同 十六 かぎりなくおもふこゝろはつくはねのこのもやいかゞあらん〔とすらん〕
拾 十八 君が代にいまいくたひかかくしつゝうれしき事にあはん〔とすらん〕
同 廿 おもかげに色のみのこるさくら花いくよの春をこひん〔とすらん〕
新 三 夏はつるあふぎと秋のしら露といづれかさきにおかん〔とすらん〕
同 九 わすれなんよにもこしぢのかへる山いつはた人にあはん〔とすらん〕
同 十八 夢やゆめうつゝや夢とわかぬかないかなる世にかさめん〔とすらん〕
後 十九 もみぢ葉をぬさとたむけてちらしつゝ秋と共にやゆかん〔とすらん〕
拾 十八 うたがはし外にわたせるふみ見れば我やとたえにならん〔とすらん〕
後拾 八 くれてゆく年と共にぞわかれぬる道にや春はあはん〔とすらん〕
千 十二 こひしなんなみだのはてやわたり川ふかきながれとならん〔とすらん〕

これらは上に何あるひはやなどいふ疑ひの辞あり

また

拾八　世中をかくいひ〳〵の（でイ）はて〳〵はいかにやいかにならん（こすらん）

これは何を二つ重ねたり

また

同廿 俊成卿　まとにや松はさかへり花さくさ君にぞ人のさはん（こすらん）

金三　明日よりはよもの山べの秋霧のおもかげにのみたゝん（こすらん）

これらは疑の辞なくしてぞのなどのてにをはよりかゝれり

また

後拾八　わかれぢはたつけふよりもかへるさをあはれ雲ゐにきかん（こすらん）

同十七　あけぬなりかもの川瀬に千鳥なくけふもはかなくくれん（こすらん）

同十九　みやこへさいきのまつ原いきかへり君が千年にあはん（こすらん）

これらはぞのや何のてにをはなし

また

後拾十二　きのふけふなげくばかりのこゝちせば明日に我身やあはじ（こすらん）

新勅二 殷富門院大輔　さくら花ちるをあはれさいひ〳〵ていづれの春にあはじ（こすらん）

源氏 すゝ虫　へだてなくはちすの宿をちぎりても君がこゝろやすまじ（こすらん）

これらはんといはずしてじとすらんといへり

○らんを重ねたる哥

後拾三　わすれなんそれも恨みず思ふ（らん）こふ（らん）さだに思ひおこせよ

〔けん〕〔けめ〕第四十一段

○上にに又てをおきてにけん　てけんこもいへり。其中ににけんはつねの事也。てけんはすくなし

万十　わがためさたなばたつめのそのやどにおるしろたへはおりて〔けん〕かも

同十五　おきつなみ高くたつ日にあへりきさみやこの人はきゝて〔けん〕かも

元輔集　年へにし人のかたみのふぢごろもすてやして〔けん〕まだやかけたる

同　ふく風のたよりにもしやきゝて〔けん〕けふこ契りし山のもみぢも

信明集　手ずさみに火桶のおきやわりて〔けん〕戀しき人にあはぬころかな

○けるかなの意に通ふけん

古十五　よそにのみきかまし物をおとは川わたるとなしにみなれそめ〔けん〕

これは上に出せるかなに通ふらんと同じ格にて。「渡るとなしにみなれそめけるかな。何とて渡るとなしにみなれそめけん
といふ意也。△のしるしの所に何とてといふ言を加へて心得べし

○けん二つある哥

拾六　わかれてふことはたれかはじめ〔けん〕くるしき物としらずや有〔けん〕

万七　いにしへにあり〔けん〕人のもとめつゝきぬにすり〔けん〕眞野のはり原

○からんの意のけん

古十四　あづさ弓ひき野のつゞら末つひにわが思ふ人にことのしげ〔けん〕

新十七いせ物語　わが世をばけふか明日かとまつかひの涙のたきといづれたか〔けん〕

新勅二鎌倉右大臣　さくら花ちらばをし〔けん〕玉ぼこの道行ぶりにをりてかざゝん

此けんはつれのけんとは本より別也。「よからんを「よけん。「なからんを「なけんとやうに。からんをけんとはいへるなり。此辞なほ萬葉に多し。七の巻古風の部に出せり

「なん」「なめ」第四十二段

○つねのなんはことなることなし

○願ふ意のなん　此格二つ有。ひとつにはかさたなはまらよりつゞけり

古十五 わすれ草かれもやするとつれもなき人のこゝろに霜はおかなん

「きかなん「とかなん「ふかなん「なかなん「ゆかなんのたぐひ同じ

後十七 いはのうへにたびねをすればいと寒し苔のころもを我にかさなん

「なさなん「まさなん「こさなん「わたさなん「てらさなんのたぐひ同じ

拾十七 をぐら山みねのもみぢ葉心あらば今一たびのみゆきまたなん

「たゝなん「けたなん「もたなん「はなたなんのたぐひ同じ

古十三 人しれぬわが通ひぢの關守はよひ〳〵ごとにうちもねななん

「見えなゝん「きえなゝん「くれなゝん「あせなゝんのたぐひ也又「なりなゝん「ゆきなゝん「たちなゝんのたぐひ猶おほし

古十二 しぬるいのちいきもやするとこゝろみに玉のをばかりあはんといはなん

「あはなん「とはなん「思はなん「にほはなんのたぐひおなじ

新葉一 春日山をのへの雪もきえにけりふもとの野べの若菜つまなん

「やまなん「くまなん「すまなん「うづまなんのたぐひおなじ

古十二 たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬこゝろを人はしらなん

○玉のを六

「ちらなん「あらなん「ならなん「をらなん「ふらなんのたぐひおなじ

右の格はすべてみな願ふ意になるなり。こぢめにかぎらず。いづれの句にありてもおなじことなり。

ふたつにはえけせてへめれゑよりつゞけり

古十八　人しれずおもふこゝろは春がすみたち出て君がめにも見え〔なん〕

同十一　春たてばきゆるこほりの殘りなく君がこゝろは我にとけ〔なん〕

後十四　しら雲のゆくべき山もさだまらず思ふかたにも風はよせ〔なん〕

同十九　此たびも我をわすれぬものならばうち見ん度に思ひいで〔なん〕

同二十　年のかずつまんとすなる重荷にはいとゞこづけをこりもそへ〔なん〕

後拾三　夏の夜の月はほどなくいりぬともやどれる水に影はとめ〔なん〕

後十四　さをしかのつまなき戀を高砂の尾上のこまつきゝもいれ〔なん〕

夫木　まれにきて戀もつきぬにいそぎゆく人をおさへの關もすゑ〔なん〕

右の格も。いづれの句に在てもみな願ふ意也。但しえけせてへめれゑよりつゞくは。つねのなんと同じ格なれば。【「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなん「人ごゝろうさこそまされ春たてばとまらずきゆるゆきかくれなんなどの類は。右の哥共と同じ格なれども。つねのなんなり】其哥の意によりて心得わくべし

右二つの格の中に。上のかさたはまらの方は。皆くすつふむるど結ぶ言にて。ひも鏡第卅三段より第卅八段までの六段の格の言也。次のえけせてへめれゑの方は。皆第十九段より第卅二段までの十四段の言也。かくの如く定まれる中に。なよりつゞきて。なゝんといふ上の言のみは。かの十四段の言六段の言。二つ共に通はしいふ格也。「ねなゝんのねは。ぬ共ぬるともいひ。「見えなゝんの見えは。「見ゆ共「見ゆる共いひて。これらはかの十四段の格の言也。又「なりなゝんの「なりは。「なるとのみいひて。「なるゝとはいはず。「ゆきなゝんの「ゆきは。「ゆくとのみいひて。「ゆくるとはいは

ず。これらはかの六段の格の言なり

また

源氏すゞ　山がつのいほりにたけるしばしばもこと問ひこ〔なん〕こふるさと人

これは右の二つの格にはづれたり。來はく共くる共結ぶ詞にて。かの十四段の格なれば。「けなんといふべき格なれども。さはいひがたき故に「こなんといひて。おのづから願ふ意に聞えたり

後十二　すみぞめのくらまの山にいる人はたどるたどるもかへりきな〔なん〕

これもなゝんの上は。かの十四段の格の言の時は。「きなゝんといひて。えけせてへめれゑよりつゞく定まりなれば。「けなゝんといふべき格なれ共。さはいひがたき故に。「きなゝんといひて。おいづからかなへること。右の源氏物語の哥と同じ。すべて見來などのはたらきは。中古以來の語にては。定まりの如くにはいひがたき事有故にかくの如し　來はもときくけとはたらく言也

万十七長哥　ほとゝぎすきなかん月にいつしかも早くなり〔なん〕云々

これは「ならなんといふべき格たるを「なりなんといへり。但し上に「いつしかもとあれば。いつかならんと思ひて待つ意としても見るべし。その時はつねのなんなり

すべて願ふ意のなんの上のかゝりは。はも徒のみ也。ぞのや何などの辞をおく例なし。【續後拾遺十七「こにかくにうき身はなれぬうきよとはいとひて後ぞおもひしらなん。此哥上にぞといひて。「しらなんと。願ひの格のなんにてとぢめたるはひがと也。たとひ上にぞはなくても。本より「しらなんといふべき哥にはあらず。もしいまだ世をいとはぬさきに。末をおしはかりたる意ならば。「しりなんといふべし。もしはらはりを寫し誤れるにや。然れ共一首の趣。すでに世をいとひはなれて後に。思ひしれる意のごとく聞ゆれば。かならず「しりぬると結ぶべき哥なるをや】

〇なん二つある哥

古二　いざゝくらわれもちり〔なん〕ひとさかりありなば人にうきめ見え〔なん〕

〇玉のを六

これは二つともにつれのなん也

また

後五　けふよりは天の川原はあせな〔なん〕そこひともなくたゞわたり〔なん〕

新一　やかずとも草はもえ〔なん〕春日野をたゞ春の日にまかせたら〔なん〕

右後撰なるは。上は願ひ。下はつれのなん也。新古今なるは。上はつれの格。下は願ひのなんなり

〇その意に通ふなん

古十　たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれ〔なん〕それとうつせ見んかし

後拾十一　かく〔なん〕と。あまのいさり火ほのめかせいそべの浪のをりもよからば

六帖　つれ〴〵になにかなみだのなかるらん人〔なん〕われを思ふともなく

信明集　かく〔なん〕と。人しるらめやゆく道もこゝろとゞめておもほゆるかな

好忠集　わがせこが袖しろたへの花のいろをこれ〔なん〕梅と。けふぞしりぬる

蜻蛉日記長歌　春の末花〔なん〕ちること。さわぎしを云々

此なんは。哥にはいとまれにして。右の外はをさ〳〵見あたらず。文章にはいとおほし。古今の序に。「赤人は人まろが下にたゝむとかたくなん有ける。などゝあるなん也。猶七の巻文章の部に委くいふべし。さて此なんを上代にはなもといへり。

万十二　いつは〔なも〕こひずあるとはあらね共うたて此ごろ戀のしげきも

〔まし〕　これより下かなまでは。はたらかぬ辞なる故に。紐鏡三轉の外なり。

〇おほよそましは。んを延たる如く聞えて。大かたんといふと同じ意なり。然れども。んといふべき所を。皆ましとい

ひては。かなはぬことおほし。そのけぢめは。古への哥又文をつら〳〵味ひ見てわきまふべし。然るを後世の哥には。らんなんなどゝいふべき所をも。みだりにましといへるひがことおほし又しもじを濁りて。まじと唱るもひがこと也。必清べき辭也。これを濁るから。初學の輩は。不の意のまじと一つに心得て。まぎらはすこそおほきぞかし。かの不の意のまじは。別に下に出せり。

○なまし てましと。上になてをおきてもいへり。

○古き哥の例を考るに。ましと結べるは。おほくは上にばといふ辭あり【此ばははもぞのや何などの外に別にありて。三の巻に出せり】

古 二 花のごとよのつねならば過してしむかしはまたもかへりきなまし

同 吹風にあつらへつくる物ならば此一もとはよぎよといはまし

同 一 うめがゝを袖にうつしてとゞめてば濁るは也春はすぐ共かたみならまし

同 よの中にたえて櫻のなかりせば春のこゝろはのどけからまし

古哥おほくは右のごとく上にばもじあり心をつくべし。又下よりかへりて。上にてましと結べるは。必下にばもじ有

後拾 一 思ひおくことなからまし庭ざくら散ての後の船出なりせば

新 十六 わすれじよわするなとだにいひてまし雲ゐの月のこゝろありせば

又上にはもじのなきは

後 廿 よそにをる袖だにひぢし藤衣なみだに花も見えずぞあらまし

後拾 十八 こしをへて見る人もなきふる里にかはらぬ松ぞあるじならまし

かやうに上にばもじなきは。いと〳〵まれ也。但しや何などゝかゝりたるには。はのなきも多し。又ましをまし物をなどゝ留れるにも。上にばのなきもおほし。

○ましを【此をは物をの意のをなり】まし物を　ましや　ましやはなどいへるもおほし。又こその結びにましかどいへる有。五の卷こその部に出せり。

○ましかばと上にいへば。必又ましといひて結ぶ格也。ませばも同じ。又せばと上にいへるも。おほくはましと結べり。

これらの證哥三の卷ばの部に出せり。

○下の詞へつゞくまし

源氏夕霧　かずならば身にしられ〔まし〕世のうさを（此をハ一なる物をといふ意也）人のためにもぬらす袖かな

千十二　なれてのちつらから〔まし〕にくらぶればなき名はとの数ならぬかな

○まし二つある哥

古一　けふこずば明日は雪とぞふりな〔まし〕きえずはあり共花と見〔まし〕や

○一つのまし

古一　見る人もなき山ざとのさくら花外のちりなん後ぞさか〔まし〕

千九　さくらばな見るにもかなし中々にことしの春はさかずぞあら〔まし〕

新八　花見んとうゑけん人もなき宿のさくらはこぞの春ぞさか〔まし〕

大和物語　さる澤の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひな〔まし〕

後三　風をだにまちてぞ花のちりな〔まし〕心づからにうつろふがうさ

此ましはみな上にぞもじをおけり。つねのましながら。いさゝか意かはりて。一つの格也。その意は。「かやうにこそ有べきとなれといふ意にて。さやうにあらせまほしくねがふこゝろある也。始めの哥にていはゞ。「外のちりなん後にこそさくべき事なれといふ意にて。外の花のちりたらん後にさかせまほしく思ふ意なり。いづれも皆これになずらへて心得べし。

又

古十八 おもひけん人をぞともに思は〔まし〕まさしやむくいなかりけりやは

此哥はつねのましの意にても聞え。又こゝの格としても聞ゆるうちに。こゝの格にちかきなり。

〇まじ【不の意也】これはましとは本より別なる辭なれ共。ついでにこゝに出せり。

詞十 此世には又も見る〔まじ〕うめの花ちり〲ならんとぞかなしき

夫木 匡房卿 河ごしの柴つみぐるまいかゞする氷のくさびふゆはたへ〔まじ〕

此辭はいやしく聞よからぬもの也。さる故に古への哥文には。これらの外はをさ〲見えず。「見るまじは「見じといひ。「たへまじは「たへじといふぞ。雅言には有ける。但し語を下へつゞくる時に。「見るまじき云々「たふまじき云々などいふはつねの事にて。日本紀の哥にすら「よるまじき川のくま〲など見え。万葉又後の哥文にも有。

〔らし〕附〔けらし〕

〇らしはらんのはたらきたる辭にて。疑ひの重きと輕きとのけぢめと聞ゆめれど。古き哥共を考るに。又さる意のみにもあらぬがごとし。但しや何などの結びにはらんのみおほくして。らしはいと〲まれ也。後撰五「こひ〲て逢んと思ふ夕暮はたなばたつめもかくやあるらし。是も一本にはかくぞあるらしと有。此外一の巻三轉證哥の中に一つ二つ出せるが如し。さて又らんは。下へ語のつゞく所にもつねにおけり。「萩が花ちるらん小野の云々などの如し。然るにらしは下へつゞく例はをさ〲見えず。たゞ萬葉十八長哥に。「大君のつぎてめすらし高圓の野べ見るごとにねのみしなかゆ。これらは下へつゞけり。

〇ぬらし つらしと。上にぬつをおきてもいへり。又らしもと。下にもをそへてもいへり。

〇あらし ならし からし【「深からし「高からし「寒からし「よわからしなどのたぐひ】これもあらん ならん からん

のんをはたらかして。しこいへるなれば。つねのらしこ同じきが如くなれ共。つねのらしは。上の言こ離れて一つの辞なるを。【上の言こはなれたりこは。たこへば「ゆくらし「ちるらしなごいふ。上の「ゆく「ちるの言こ。らしこは別に離れたるをいふなり。】此らしは。らは上の言に附たれば。【「あらしの「あらは。「あり共「ある共はたらきて。らは上の言に附たり。つねつらしのらは。はたらくとなし。又「ならしの「ならも。「なり共「なる共はたらき。「からしの「からも。「寒かる共「寒かりこもはたらく事。「あらしの例に同じ。さて「ならしは「にあらしのつゞまりたる辞。「からしは「くあらしのつゞまりたるにて。「寒からしは「寒くあらし也。「深からしは深くあらし也。さるゆゑに「ならしも「からしも。「あらしこ同じ例なるなり。】いさゝか異也。されごてにをはのこゝのへの格は。みなつねのらしに同じ。

○けらしこれはけり　ける　けれのはたらきたるにて。ら　り　る　れのはたらきは右のあらしなごの格こ同じけれ共。下のしはこれのみは。んこはたらくとなし【けらんこはいはず】然ればこれは本よりらしこは別なる辞なり。【一説にけらしはけるらしのつゞまりたる辞也こいへごも。万葉に「けらずやこいへるともあまたあるを。「けるらずやこはいひがたし。「けるらずこいひては。らもじあまりて附ゝこころなし。しかれば「けらしも。かの「けらずやのたぐひにて。らはけり　ける　けれ　けらこはたらきたる物也】されごてにをはのこゝのへの格は。これもらしにおなじ。

○にけらしこ。上ににをおきてもいふ。又けらしも　けらしなこ。下にも　なを添てもよめり。上にぞこいひて。けらしなこ結べる哥。

新勅十四　延喜御哥　しぐれつゝ色まさりゆく草よりも人のこゝろぞかれに〔けらし〕な

能宣集　夜を寒みまがきの草を見わたせば今朝ぞ初霜置に〔けらし〕な

また

萬　九　つかのうへに木枝なびけりきくがごこちぬをここにしよるべ〔けらし〕も。

此「よるべはつねにいふよるべにはあらず。べは可の意。「けらしのけは。その「べきのきのはたらきたるにて。「べけれのけ

と同じ。然れば一句の意「よるべかりけらしといはんが如し。

〔つゝ〕

〇てに通ふつゝ

古四 物ごとに秋ぞかなしきもみぢ〔つゝ〕うつろひゆくをかぎりと思へば

同 をみなへしうしと見〔つゝ〕ぞ行過るをとこ山にしたてりとおもへば

同五 花見〔つゝ〕人まつときは白妙の袖かとのみぞあやまたれける

同七 春日野にわかなつみ〔つゝ〕萬代をいはふ心は神ぞしるらん

同十一 あふことは雲ゐはるかになる神の音にきゝ〔つゝ〕戀渡るかな

右のたぐひのつゝは。てといひてもよろし。但しては廣く。つゝは狹し。さる故に。つゝといふべき所を。てとはいはるれども。てといふべき所を。つゝといひてはかなはぬとおほし。抑ては廣く。つゝは狹きゆゑは。一つの例をもていはゞ。「音に聞て戀わたるといふは。先ッ音に聞て。後に戀渡るにもいひ。又音にきくと戀わたると。同時に相交るにもいふ也。然るを「音にきゝつゝ戀わたるとは。音にきくと戀渡ること。同時に相交るにのみいふ辞にて。先ッ音に聞て後に戀渡るにはいひがたし。すべてつゝは此意にて。これをしつゝ。かれをも相まじへてするをいふ。此故に。上にいふ事と。下にいふ事と。たがひに同時に相まじはる時に。その中間におく辞也。然るに後世の人は。此けぢめをわきまへずして。てといはんに。もじのたらぬときは。みだりに通はしてつゝといふはひがと也。てはつゝにかよへ共。つゝはてに通はしがたき所ありとしるべし。

古四 山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねにめをさまし〔つゝ〕

同十八 筑波根のこのもとごとに立ぞよる‖春のみやまの陰をこひ〔つゝ〕

後三 いつのまにちりはてぬらん‖さくら花おもかげにのみ色をみせ〔つゝ〕

同五 天の川戀しきせにぞわたりぬる‖たきつ涙に袖はぬれ〔つゝ〕

拾十五 君をなほうらみつるかな‖あまのかるもにすむてふ虫の名を忘れ〔つゝ〕

右のたぐひのつゝは。留りにあれども。上へかへる格なる故に。中にあるも同じことにて。上の件のつゝとひとつなり。

古十一 音羽山音にきゝ〔つゝ〕あふ坂の關のこなたに年をふるかな

同十二 たのめ〔つゝ〕あはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん

同十五 月夜には來ぬ人またるかきくもり雨もふらなんわび〔つゝ〕も。ねん

同 人しれずたえなましかばわび〔つゝ〕も。なき名ぞとだにいはまし物を

後四 うらめしき君が垣根の卯花はうしと見〔つゝ〕も。猶頼む哉

これらのたぐひのつゝは。ながらといふに通ひて聞ゆ。されど上のつゝと別なるにはあらず。同じつゝの中に。おのづからかく聞ゆるがあるなり。さて此ながらに通ひて聞ゆるつゝは。下にもを添たるがおほき也。【すべてつゝは。てといひてもよろしき故に。つゝもはてもといひてもよろし。さてそのてもは。卽ながらもといふに通へり】

○下にこゝろをふくめていひすつるつゝ

古一 春がすみたてるやいづこみよしのゝよし野の山に雪はふり〔つゝ〕

雪はふりつゝ「春とも見えぬ物をといふ意をふくめたり

同 梅枝にきゐるうぐひす春かけてなけ共いまだ雪はふり〔つゝ〕

雪はふりつゝ「春ともなきとよといふ意をふくめり

同 君がため春の野に出てわかなつむ我衣手に雪はふり〔つゝ〕

雪はふりつゝ「いと寒きにつめる若菜ぞといふ心をふくめたり

同 山ざくらわが見にくればはる霞みねにもをにも立かくし〔つゝ〕

立かくしつゝ「見せぬ事よとふくめり

同四 やどりせし人のかたみかふぢばかまわすられかたきかにゝほひ〔つゝ〕

香ににほひつゝ「いとなつかしきはとふくめてさてそれはやどりせし人の形見かといふ也

同五 風ふけばおつるもみぢ葉水きよみちらぬ影さへ底にみえ〔つゝ〕

底に見えつゝ「えもいはずおもしろきけしきなる哉とふくめり

同六 あらたまの年のをはりになるごとに雪もわが身もふりまさり〔つゝ〕

ふりまさりつゝ「老もてゆく事よとふくめり

同十一 こひしねとするわざならしうば玉のよるはすがらに夢に見え〔つゝ〕

夢に見えつゝ「うつゝには逢事なくてたへがたきまで戀しきはこひしねとするわざならし也

同 夕さればいとゞひがたきわが袖に秋の露さへおきそはり〔つゝ〕

露さへおきそはりつゝ「いとゞぬるゝことよ

同十三 いたづらにゆきては來ぬる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれ〔つゝ〕

見まくほしさにいざなはれつゝ「猶ゆく事よ

同 あけぬさてかへる道にはこきたれて雨もなみだもふりそほぢ〔つゝ〕

ふりそほぢつゝ「いとゞわびしくかなしき別れなるかな

同 花すゝきほに出てこひは名をゝしみ下ゆふひものむすぼゝれ〔つゝ〕

むすぼゝれつゝ「下にのみこふるとのくるしさよ

同十五　こめやこは思ふものからひぐらしの鳴ゆふぐれはたちまたれ〔つゝ〕

立またれつゝ「またではえあらず戀しき事よとふくめたり

後六　秋の田のかりほのいほのこまをあらみ我ころもでは露にぬれ〔つゝ〕

露にぬれつゝ「秋の夜をもりあかす事のわびしさよといふ意をふくめり

万拾八一　春の野にあさるきゞすの妻戀におのがありか(あたり万)を人にしれ〔つゝ〕

人にしれつゝ「とらるゝ事のあはれさよとふくめたり

右の哥共のどくつゝこいひすてゝ。上へかへらぬは。皆詞の外に意をふくめり。そのふくめたる意は。一首の趣をよく味ふれば。おのづから心にうかびてしらるゝものなり【初學のこもがらは。此格はみだりによむべからず。かならずひがことあるとぞかし。】

新六　田子のうらにうち出て見れば白妙のふじの高根に雪はふり〔つゝ〕

此哥は萬葉三に出て。初句「たごの浦ゆ。三の句「ましろにぞ。終の句「雪はふりけるとあるを。朗詠新古今に今のごとくかへて入たれど。「白妙のといひて「ふりつゝと留りたるはいかゞ也。もしつゝと留らば。「しろたへにとこそ有べきを。にもじこしあふ故に。哥ざまを優ならしめんとて。のとは直されたるなれど。ことわりさだかならず。後世これに說あれども。いとをさなきとなればよるにたらず。

〔かな〕

〇おほよそかなは。かこいふ辞になを添たる物也。【なは「けりな「けらしな「がもななごのたぐひのなり】此故にかなこいふべき所を。かこのみいひたるもおほし。四の巻かの部に出せるが如し。又万葉にはかなこいへる辞なし。後にか

なといふ意なるをも。皆かもといへり。【哉ノ字を書る所二つ三つあれ共それもかもと訓べき也。日本紀には此字をかねと訓る事もあり】さてかなは上のかゝりはも徒の也。證哥一の巻に出せるがごとし。【ぞや何このかゝりにてはかなとはとまらず】其中にも。もとかゝれるが殊におほき也。

古 一 春やとき花やおそきときゝわかんうぐひすだにも鳴ずも有〔かな〕

同 八 をちこちのたづきもしらぬ山中におほつかなくもよぶこ鳥〔かな〕

同 八 むすぶ手のしづくにゝごる山の井のあかでも人にわかれぬる〔かな〕

同 十一 ほとゝぎすなくや五月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする〔かな〕

次に徒なるもおほし

古 二 まつ人もこぬものゆゑにうぐひすの鳴つる枝をゝりてける〔かな〕

同 十一 おとは山音にきゝつゝあふ坂の關のこなたに年をふる〔かな〕

同 つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまでなげきつる〔かな〕

同 十二 秋の野にみだれて咲る花の色の千種に物をおもふころ〔かな〕

次にのとかゝれるもおほし

古 四 まつ人にあらぬものから初鴈のけさなく聲のめづらしき〔かな〕

同 十四 かれはてん後をばしらで夏草のふかくも人のおもほゆる〔かな〕

後 四 しろたへにゝほふ垣根の卯花のうくもきてとふ人のなき〔かな〕

同 十四 さしてこと思ひし物をみかさやまかひなく雨のもりにける〔かな〕

次にはとかゝれるはいとまれにあり

拾 二十 うきながらきえせぬ物は身なりけりうらやましきは水の沫〔かな〕

詞 二 さしをへてかけしあふひはかはらねどけふのかざしはめづらしき〔かな〕

〇もどく意のかな

古 二 まつ人もこぬものゆゑに鶯のなきつるえだををりてける〔かな〕

同 十三 まくらより又しる人もなきこひを涙せきあへずもらしつる〔かな〕

同 十六 夢こそいふべかりけれよの中にうつゝある物とおもひける〔かな〕

同 十九 君が代にあふ坂山のいはし水こがくれたりと思ひける（何おもひけん 六帖）〔かな〕

これらはみづからのうへをもどけり。六帖に「なに思ひけん共あるをもて。もどける意なることをさとるべし。いづれの哥もみなおなじ。

同 二 しるしなきねをもなく〔かな〕うぐひすの今年のみちる花ならなくに

同 十五 あひ見ぬもうきも我身のから衣おもひしらずもとくるひも〔かな〕

これらは鶯のなくをもどき。紐のとくるをもどけり。

〇ぬかな

古 十九 出てゆかむ人をとゞめんよしなきにとなりの方にはなも。ひぬ〔かな〕

後 十 わが門の一むらずゝきかりかはん君がたなれのこまも。こぬ〔かな〕

六帖 我をこそとふにうからめ春霞花につけても立よらぬ〔かな〕

これはしか〳〵あれかしとねがふことの。さもえあらぬを。深くなげきていふかななり。此格万葉におほし。

〔がな〕濁 附〔が〕〔がも〕

〇おほよそもがなとつゞく時は。すべてかを濁りて。願ふ意の辞也。又しがな にしがなにも。かを濁りて願ふ意なる

あり。てしがなは皆濁りて願ふ意也。

○もがな

古七 かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよし〔もがな〕

同十 花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時〔もがな〕

後十一 名にしおはゞ相坂山のさねかづら人にしられでくるよし〔もがな〕

同十八 ちりにたつ我名きよめんもゝ敷の人のこゝろをまくらと〔もがな〕

もがなとつゞくときは。みなかを濁りて願ふ意也。かを清てつねのかななるはなし。

○しがな

金三 秋ならでつまよぶ鹿をきゝ〔しがな〕をりから聲の身にはしむかと

これは願ふ意也。又しかなにはつねのかなもおほし。後拾遺十二「やすらはでねなまし物をさよふけてかたぶくまでの月を見しかな」新古今十四「ほの見えし月を戀しとかへるさの雲路の涙にぬれてこしかな。新勅撰十一敦忠卿「雲ゐにて雲ゐに見ゆるかさゝぎの橋を渡ると夢に見しかな。これら願ふ意にあらず。つねのかな也。

○にしがな

赤染衛門集 みやこ出てけふこゝぬかに成にけりとうかの國にいたり〔にしがな〕

大卜俊成卿 いそがくれまかぢしげぬきこぐふねの早くうき世をはなれ〔にしがな〕

これらは願ふ意也。又文章には願ふ意のにしがな多し。つねのかななるは。新古今十三「秋の夜の有明の月のいるまでにやすらひかねてかへりにしかな。新勅撰十八國信卿「朝夕になげきをすまにやくしほのからくけぶりにおくれにしかな。源氏幻巻「なく〳〵もかへりにしかなかりのよはいづくもつひのとこよならぬに。齋宮女御集「すゞか山音にきゝけん君よりも心のやみにまどひにしかな。これら願ふ意にあらず

○玉のを六

〇てしがな

古十九　みゝなしの山の口なしえ〔てしがな〕思ひのいろの下ぞめにせん

後十四　おもひつゝまだいひそめぬわがこひをおなじ心にしらせ〔てしがな〕

同　あかずしてまくらのうへにわかれにし夢路を又も尋ね〔てしがな〕

拾八　ひさかたの月のかつらもをるばかり家の風をもふかせ〔てしがな〕

同十四　我やうき人やつらきとちはやぶる神てふ神にとひ見〔てしがな〕

大かたてしがなは皆ねがふ意也。つねのかなには例なし。然るに續後撰九「ひかりをば玉くしの葉にやはらげて神の國ともさだめてしかな。是はつねのかな也。いとめづらし。

〇もが　これはつねのかなをかとのみもいふ如く。願ふ意のがなを。がとのみいへる也。【もかなに同じ】

古十一　こゝろがへするものに〔もが〕かた戀はくるしき物と人にしらせん

万六八　わがやどの尾花がうへのしろ露をけたずて玉にぬく物に〔もが〕

此外もがは萬葉にいとおほし

〇しが　しがなにおなじ

古二十　かひがねをさやにも見〔しが〕けゝれなくよこほりふせるさやの中山

万十一せどう歌　まそ鏡見〔しが〕と思ふ妹にあはんかも玉のをのたえたる戀のしげき此ごろ

〇にしが　にしがなに同じ

後十三　いせの海にあそぶあまともなり〔にしが〕浪かき分てみるめかづかん

好忠集　こゝろうし深き山にもいり〔にしが〕のどかにをりてうきよすぐさん

斎宮女御集　いかでなほ春日かすみになり〔にしが〕おもはぬ山にかゝるわざせし

○てしが　てしがなに同じ

古十四　あな戀し今も見〔てしが〕山がつのかきほにさけるやまとなでしこ

同二　おもふどち春の山べにうちむれてそこ共いはぬ旅寐し〔てしが〕

後十二　いとかくてやみぬるよりはいなづまのひかりのまにも君を見〔てしが〕

此外万葉にも有

○もがも

古廿　かひがねをねこし山こし吹風を人に〔もがも〕や。ことつてやらん

万一　かはらのゆづ岩むらに草むさずつねに〔もがも〕な。ことをとめにて

此外万葉におほし。又てしがもかの集にはこれかれ有

おほよそ願ふ意のがな【が　がもも同じ】は。かならずもがなしがな【にしがなてしがな】といふにかぎれること也。其外は例なし。

新勅撰十九「いせの海おきつ白浪花にがもつゝみて妹が家づとにせん　これは例なきひがこと也。此哥は万葉三に在て。「花にもがとあるを。改めて入れられたる也。六帖にも。万葉の哥をかくあらためて入たる誤り所々にあり。又源氏橋姫巻の詞に「かの君たちをがなとあるは。もををに寫し誤れるなるべし

○がなとかなとある哥

拾十二　君がためをしからざりしいのちさへ長くも〔がな〕と思ひける〔かな〕

詞瓊綸七之卷

古風(いにしへぶり)の部

〇萬葉集によりて。古風の哥をよむともがら。假字(かな)づかひをばくはしくさだすめれど。てにをはのとはたえてさだせず。さる故に。哥ちさらぬ詞も。とゝのはざるとのみぞおほかる。さるはかのかなづかひは。定まれるのりなければ。みづからのちからもて。こゝろえわきまふることはなくして。たゞふるきふみ共にかけるあとによるよりほかのわざしなければ。いとたやすきを。てにをはゝみな定まれるとゝのひの有て。そをよくさとる時は。こともなけれど。そのさだまりをわきまへさとるとたやすからず。さる故にすべて後の世には。大かた言の葉の道心得たりと。みづから思ひゆるせる人も。猶たど〳〵しく。ともすればあやまるとおほきぞかし。哥にまれ詞にまれ。此てにをはのとゝのはざるは。たとへば。つたなき手して縫たらん衣のごとし。その言葉はいかにめでたき綾錦なり共。ぬへるさまのあしからんは。見ぐるしからじやは。然るを古風をまねぶともがら。これをばとゝのへむ物とも思へらぬは。いにしへぶりには。てにをはの定まりはなきことゝや思ふらむ。そも〳〵此とゝのひは。さらに後の世に定めたる物にはあらず。神代の始より人の言の葉にしたがひて。おのづから定まれる物にし有ければ。ことさらに心せざれども。おのづからよくとゝのへりければ。いにしへはここにこれをさだし學ぶともなかりしを。後の世になりて。やう〳〵ことばいやしく。みやひどは物うとくなるまゝに。たがふふしもあるによりて。とかくさだすることもはじまりしを。まとに今は。ことさらにたづねもとめざれば。あきらめえがたくなん成にける。然るを古へはてにをはといふ名なく。さだもなかりし事也とて。すつべきことわりあらむやは。かのかなづかひも古へはおのつからわかれたる言葉の聲につきて。定め書つる物にて。心せねども。おのづからたがふとはなかりし故に。殊にそのさだはなかりしを。後にみだれたるによりて。そのさだは出來しにあらずや。いで

上つ代よりてにをはの定まりの。正しかりけるとを。くはしくいはむ。まづ古事記と日本紀とにのれる哥。長き短き合せて百八十餘首ある。皆いと神さびて。今の世に耳遠き詞共はおほかれども。てにをはにいたりては。古今集よりこなたのとゝのへと。もはら同じくて。ことなることなし。其中に。たゞ仁徳の御巻なる皇后の御哥に「ころもこそ二重もよき。」天智の御巻の童謡に「あゆこそは嶋べもえき」【えきはよき也】とある此二つは。こそとかゝりて、きと結びたる。後の格にたがへり、但しこれも萬葉には例おほければ【下に出せり】上つ代の一つの格と見ゆ。又推古御巻聖徳太子の御哥に。「おやなしになれなりけめや」とあるは。汝親なしになりたりやといふ意なれば。後世の格ならば。「なりけんや」と有べきを。「けめや」とあるは。異也。但し此格も万葉には殊に多くあれば。【下に出せり】古への格なるべし。後の哥にも例はある也。【拾遺集二「みやこ人ねてまつらめや時鳥今ぞ山べを鳴ていづなる。源氏をとめの巻「日影にもしるかりけめやをとめこが天の羽袖にかけし心は】右の三首をおきては。ことごとく定まれる格のごとくにて。いさゝかもことなるとなければ。上つ代よりしておのづから定まり有と明らけし。古風をよまん人も。いかでかてにをはをたゞさずては有べき。そのともがらもとより是をさだする事なく。心にかけざる故に。あけくれ古への哥をば見れ共。此とゝのひあるとをしらざる也。次に萬葉集も。二十巻四千五百餘首の中には。さまざまめづらしき詞。又いひざまつゞけざまなどは。いたく異なるとのみおほかれど。てにをはのとゝのひにいたりては。もはら中昔の格と同じくて。たがへる哥は百にひとつも見えず。然れば此てにをはのとゝのへのみは。たゞ古今集よりこなたのを守りて。つゆたがふとなければ。今此部に。古へのとゝのへとては別にあげず。古風をよまむ輩も。同じく紐鏡三轉の證哥をよく考へて。あきらめしるべきなり。

○萬葉集の中てにをはたがへる哥

十四ノ廿七 たくぶすましら山風のねなへどもころがおそきのあろこそえしも。

「えしもはよしも也。さて上にこそとかゝりて。きと結ぶ格は。集中に多きを。これはしと結べるはたがへり。もしは志は吉の誤歟。とぢめのもは。添たるのみの辞なればかゝはらす

十九ノ四十四 天地とあひさかえんと大宮をつかへまつればたふとくうれ〔しき〕

これは上にぞのや何などのてにをはなくして。しきと結べる。たがへり

五ノ廿三 たらし姫神のみとのなつらすとみたゝしせりしいしをたれ見〔き〕

これは上にたれといへれば。「見しと結ぶべきを。「見きといへるはたがへり。もしはこれも。志を吉に誤れる歟。草書はいとよく似たり

十四ノ廿九 妹をこそあひ見にこしかまよ引の横山べろのしゝなすおも〔へる〕

これは上にぞのや何などのてにをはなければ。おもへりと結ぶべき格也。然れ共へりといひてはよろしからず。へるといふべき哥也。後世にも此例あり。二の卷變格の部に見ゆ

十九ノ十六 しら玉のみがほし君を見ずひさにひなにしをればいけ〔る〕ともなし

これはかならず「いけりともなしといふ格也。もしは流ノ字は理などのあやまりにはあらざるにや。又とはてにをはにあらざる歟

十ノ四十三 秋田かるかりほをつくりわがをればころもでさむく露おきに〔ける〕

此結句の例を他の哥に考るに。いづれも「露ぞおきにけるとあれば。これも後にぞもじを脱せるなるべし。ぞといはでけるとは結びがたし

二十ノ廿五 からころもすそにとりつきなくこらをおきてぞき〔ぬ〕やおもなしにして

これは上にぞといへれば。「きぬるとこそいふべきを。「きぬやといへるはとゝのはず。やもじはあるもなきも。てにをはの格にあづからず。ぬるといふべきを。ぬとのみいへるがたがへる也

二十ノ廿四 あしがきのくまごに立てわぎもこが袖もしほゝになきしぞもは〔ゆ〕

此結句は泣しぞ思ほゆといふと也。上にぞとあれば。ゆると結ぶべきを。ゆと結びたるは。るもじたらでとゝのはず

四ノ廿九 いきてあれば見まくもしらず何しかもしなんよ妹といめに見え〔つる〕

これはぞのや何などなくして。つると結べる。かなはず。上の「何しかもは。此結びへはかゝられば也。但し初句を「いきてあらばと訓ムときは。二の句の意かはりて。「何しかもの言。つる迄かゝれば難なし

九ノ八 風莫のはまのしら波・いたづらにこゝにより〔くる〕見る人なしに

これも上にぞのや何なければ。「よりくといふべきを。くるといへるはたがへり。一云於斯依來藻（コヽニヨリクモ）とある。これよくととのへり。すべて万葉のころの格を見るに。一もじたらぬところは。もを添てしらべをたす例なり

十四ノ六 むざしねのをみね見がくしわすれゆく君が名かけてあをねしな〔くる〕

結句これと同じき。同巻廿一のひらに今一首あり。「あをねしなくるとは。我をねに泣（ナカ）するといふことにて。その「なかするのかすをつゞめて。くさなれる也。然るに此哥は。上にぞのや何のてにをはなければ。「なかすとこそいふべけれ。「なかするといひてはたがへり。然ればとちめのるもじよろしからず。但し變格の例也。さて此哥は「さかみねのをみね見そぐしわすれくる妹が名よびてわをねしなくなとある哥の次に。或本哥とてのせたり。「なくなの下のなは。添たる辞なれば。これはよろし。又同巻廿のひらに。「あをねしなくよ。又廿の巻四十三のひらに「あをねしなくも。などもあり。これらもよ又もは添たる辞なればよろし。皆「なくは「なかすをつゞめたる也。さてこれらに「なくといひて。下によもなどいふ辞を添たるを以ても。「なくるといふかよろしからぬことをさとるべき也

十八ノ十九 ほとゝぎすいとねたけくはたちばなの花ちる時にきなきとよ〔むる〕

これも上にぞのや何のてにをはなければむると結べることよろしからず

十一ノ二十 めづらしき君を見んとぞひだり手の弓とる方のまゆねかき〔つれ〕禮

これは上にぞといひてつれと結べり。もしは禮は類（ルレ）字などの誤りにはあらざる歟。六帖には二の句を。「君見んとこそと直して入たり

十八ノ廿四 長哥 うつせみの世の人我もこゝをし。もあやにくすしみゆきかへる

○玉のを七

年のはごとに天の原ふりさけ見つゝいひつぎに〔すれ〕

これは上にこそといはずして。すれと留りたるいかゞ。但し上にしもといふ辞あり。此辞こそに通ふ例あり。五の巻しの部に出せり

十七ノ五十一 なかとみのふとのりとごといひはらへあがふいのちもたがために〔なれ〕

此結句はいかにいへるにか。ことの意も得がたし。上にたがといひて。なれと結べることいかゞ。もしは「なれは汝（ナレ）かとも思へど。さにもあらじ。猶よく考ふべき事也

二十ノ四十五 ほとゝぎすまづなく朝けいかにせば我門すぎ〔じ〕かたりつぐまで

これは上にいかにとあれば。「過ざらんといはではかなはぬを。さはいひがたきまゝに。「すぎじといへるいかゞ也。これらにならひて。てにをはをみだりにすべきにあらず

二十ノ十五 かしこきやみとかゞぶり明日ゆり〔や〕かへがいむたねをいむなしにして

此哥はやもじのむすびなし。いかゞ

十二ノ十 うらぶれてかれにし袖を又まかば過にしこひやみだれこん〔かも〕

これは上にやといひて。又かもとむすべるかなはず。「戀のとこそあるべけれ

九ノ十 河の瀬のたぎつを見れば玉も〔かも〕ちりみだれたるこの川ご〔かも〕

かくいひては。かも二つ重なりたる。とゝのひがたし

十三ノ廿九 草（長哥）こそはとりてかへ〔かに〕水こそはくみてかへ〔かに〕云々

此「かへかに二つともに。飼皁と書り。いと心得ず。皁はきはめて誤字なるべし。かにといひてはてにをはとゝのはず。もしは嘗ノ字の誤りにて。二つ共に「かひなめと訓べき歟。とまれかくまれ誤字なるとは疑ひなし。されどしばらく今の本のまゝに訓てこゝには出せり

上の件あはせて二十首ある中に。字の誤れる。訓のあやまれる。又字のおちたるなどにやとおぼしき哥。又變格の例にははづれぬなど。これかれ十首ばかりあり。又すべてのうち六首は東哥也。然ればこれらをのぞきて。まさしくたがへるは。たゞ八九首なり。猶集中をくりかへし考ねば。今二三首などはありもしなんか。そも／＼萬葉は。よき哥とてえり出たる集にもあらず。たゞきくにしたがひ見るにしたがひて。かきあつめたる集なるすら。四千五百餘首の中にとゝのはぬはわづかにさばかりならではまじらぬをもても。古よりてにをはのとゝのひは。おのづから定まり有つることをさとりつべし。

○同集の中てにをは違へるに似て違へるにあらざる歌

二ノ十二 玉かづら花のみさきてならざるはたがこひにあら〔め〕わがこひ思ふを

三ノ四十一 見えずともたれこひざら〔め〕山のはにいさよふ月をよそに見てしが

四ノ四十 あらかじめ人言しげしかくしあらばしゑやわがせこおくもいかにあら〔め〕

七ノ四十一 わがせこをいづちゆか〔め〕とさき竹のそがひにねしく今しくやしも

十三ノ廿一 長哥 こぎわたりつゝもあひかたら〔め〕を【但し此めは妻ノ字を書りもしくは誤字にてもあらんか】

十四ノ十六 みちのくのあたゝら眞弓はじき置てせ(反)らしめきなばつら(弦)はが(着)〔め〕かも

同 十五 しだの浦を朝こぐ舟はよしなしにこぐ〔らめ〕か。もよなし(何)こざる〔らめ〕

十六ノ三十 長哥 なにせんにわをめす〔らめ〕や。云々うた人とわをめす〔らめ〕や。ふえふきとわをめす〔らめ〕や。琴ひきとわをめす〔らめ〕や。云々

一ノ十七 長哥 いかさまにおもほし〔けめ〕か。云々

三ノ五十四 長哥 いかさまに思ひ〔けめ〕か。も云々

四ノ卌七 いかばかりおもひ〔けめ〕か。も敷たへのまくらかたさりいめに見えこし

件の哥ども。んらんけんといふべきところを。めらめけめといへる。たがへるに似たれども。集中にかくのごとく例おほく。又上に出せるごとく。日本紀の哥にも見え。後の哥にもこれかれ例あり。

四ノ四十八 うまさけをみわのはふりがいはふ杉手ふれしつみ〔か〕君に逢がたき

二十ノ五十九 うらめしく君はもある〔か〕宿の梅の散すぐるまで見しめず有ける

七ノ四十二 玉づさの妹は玉〔かも〕あし引のきよき山べにまけばちりぬる

十ノ五十七 秋の夜の月〔かも〕君は雲がくりしばしも見ねばこゝたこひしき

これらのかかもは。皆切れて。下へはかゝはらざるに。猶かの格の結び辞にてとぢめたるは。逢へるに似たれ共。集中に此格なほあまた見えたり

四ノ廿九 あひ見ずてけながくなりぬ此ごろは〔いかに〕好しや。いふかしわぎも

八ノ三十 ふるさとのならしの岡のほとゝぎすことつげやりし〔いかに〕つげきや。

十六ノ九 長うた 〔たが〕子ぞ。こやおもひてあらん云々

十八ノ卅四 長哥 〔なに〕しかも秋にしあらねばことゞひのともしきこら云々

これらはいかにたがなになどいへる。下にやもじあれ共。いかには二つともに切れたり。たがはぞにて切れたり。下へはかゝはらず。何しかもは「こらにて切れたり。「こらぞといふ意也。

十一ノ三 せどう哥 いきのをにわれは思へど人めおほみ〔こそ〕吹風にあらばしば〳〵逢べきものを

十七ノ卅二 長哥 闕さへになりてあれ〔こそ〕よしゑやし云々

これらはこそにて切れたる故に。下のてにをはにかゝはらず

十一ノ十八 きのふ見てけふ〔こそ〕あひだわぎもこがこゝたくつぎて見まくほしきも

十六ノ十七 はちすばゝかく〔こそ〕ある物おきまろが家なるものはうものはにあらし

同廾一 （長哥）馬に〔こそ〕ふもだしかくもの‖云々

これらのこそは。動かぬ言にて結ぶ格にて。切るゝ所あるゆゑに。下のてにをはにかゝはらず

十一ノ四十一 わたのそこおきをふかめておふる藻のもともいま〔こそ〕戀はすべなき‖

同四十六 かへらまに君〔こそ〕われのたくひれの白濱浪のよるときもなき‖

十二ノ四 玉くしろまききぬる妹もあらば〔こそ〕夜の長きもうれしかるべき‖

十七ノ四十四 （長哥）野をひろみ草〔こそ〕しげき‖云々

十一ノ廿七 なには人あし火たく屋のすしたれどおのが妻〔こそ〕とこめづらしき‖

これらはこそとかゝりて。き‖と結べり。此例日本紀にも二首ありて。上にあげたり。古へのひとつの格也。古今集よりこなたには此格なし

一ノ十一 （長うた）いにしへもしかにあれ〔こそ〕うつせみも妻をあらそふらしき‖

六ノ四十七 （長哥）うべし〔こそ〕見る人ごとにかたりつぎしぬびけらしき‖

こそに。らし‖けらし‖と結ぶはつねの格也。又六の四十四のひら。十八の廿八のひらなどに。こそとかゝりて。けらしも‖と。も‖を添ても結べり。然るに右にあぐる二首は。下にき‖を添たる。めづらしき格也。されどき‖と結ぶ例は。上に出せるが如し。又らしき‖といへる例は。推古紀の大御哥に「うべしかも蘇我のこらを大君のつかはすらしき‖とあり

十四ノ廿三 ひるとけばとけ（不解）なへひものわがせなにあひよると〔かも〕よるとけや。する

これはかとやと重なりたれども。とゝのはずとは聞えず。又とぢめの流（ル）ノ字。一本には家（ケ）とあり。そのときは解易（トケヤス）きといふことなれば。や‖はてにをはにあらず

十八ノ廾一 こぞの秋逢見しまゝにけふ見ればおもや。めづらしみやこがた人

此四の句は面彌（オモイヤ）めづらし也。や‖もじてにをはにはあらず

○玉のを七

二ノ九二 長歌 〔なに〕しかも‖（此間六句）よろしき君が朝宮をわすれ玉ふや。夕宮をそむき給ふや。（此間廿句）あぢさはふまごこもたえぬ。云々

これは「なにしかもにて切れたり。さる故に下に何‖の結びなし。「玉ふやのや‖へかけて見べからず。又下の「まごもたえぬの‖ぬへもかゝらず

十九ノ廿八 長歌 〔なに〕しかも‖（此間十二句）こゞめもえず。云々

これも同じく「何しかもにて切れたり。下の「えずのず‖へかけては見べからず

○右二首の「なにしかもは。切れたる辞なれ共。切れざるがごとく聞えて。さて下に其格の結び辞はなくて。や‖といひ。又ず‖といへるなど。よくせずばまぎれぬべし。今の世の人。長哥をよまんに。これらの哥共をあしく心得て。てにをはをみだりにすることなかれ。おほよそ集中に長哥二百六十餘首ある。いづれもてにをはたがふことなし。詞はいくら長くつゞきても。切れざるかぎりは。上のてにをはを守りて。切るゝ所にいたりて。その定まりの結び辞をおくと也

二ノ四十 長歌 〔いか〕さまに思ひをれか‖云々

三ノ五十四 長歌 〔いか〕さまに思ひけめかも‖云々

これらも上の「何しかもと同じことにて。か‖かもにて切れたり。さる故に下にいかさまの結びことばなし

○長哥の一つの格の詞

二ノ二十 あまづたふ入日さし〔ぬれ〕云々
三ノ五十四 夕やみさかくりまし〔ぬれ〕云々
三ノ五十八 久かたのあめしらし〔ぬれ〕云々
五ノ五 うちなびきこやし〔ぬれ〕云々
五ノ四十 玉きはるいのちたえ〔ぬれ〕云々
同九 こゞみかね過しやり〔つれ〕云々
十七ノ廿七 いたづらに過しやり〔つれ〕云々
十九ノ廿七 露霜の過ましに〔けれ〕云々
二ノ卅四 大雪のみだれてきた〔れ〕云々
十七ノ四十六 かへり來てしはぶれつぐ〔れ〕云々

十八ノ二十 こがねありとまうし玉へ〔れ〕云々 同廿七 かしこくものこし給へ〔れ〕云々
十九ノ十三 かたりつぎながらへきた〔れ〕云々
仲の哥ども。上にこそとかゝらずして。れといひて切れたり。又
五ノ廿一 遠きさかひにつかはされまかりいま〔せ〕云々 二十ノ卅七 惜みつゝかなしびいま〔せ〕云々
古事記上八千矛神 よばひにありかよは〔せ〕云々
これらも上にこそなくして。せといひて切たる。上のれと同じ格也。此れせは。皆長哥のなかばに在て。事の他へ轉る際にいふ。一つの格にて。下へばを加へて。ればせばと見ればよく聞ゆる也。右に引る二の卅四のひらなる。「大雪のみだれてきたれを一云「あられなすそちよりくればともあるにて心得べし。さて此格短哥にはたゞ一首あり。
三ノ五十七 家さかりいますわぎもをとゞみかね山がくり〔つれ〕たましひもなし
これなり。此哥もつればと。ばもじを加へて聞ばよくきこゆ
〇同集てにをはの訓を誤れる哥
集中にてにをはの字を畧きて書る哥おほし。或は上をはぶき。或は下をはぶき。或は上下共に畧き。又無と書るは。「なし共「なきともよまれ。有と書るは。「あり「ある「あれ。來と書るは。「けり「ける「けれ。いづれにもよまる。かくの如きたぐひは。すべて證としがたければ。今此書にあぐることなし。但し今の本。すべての訓には誤りいとおほけれ共。てにをはの訓には。大かた誤りすくなし。【十六の卷廿四のひらなる「ばら門の作れる小田をはむからすまなぶたはれてはたほこに居。此居の字。今の世の人ならば。必「をると訓べきに。「をりと訓るは。中昔までもかゝる詞づかひ亂れざりし也。此哥上にぞのや何の辭なければ。必「をりと留る格也。又十三の卷九のひら長哥に「しかれども吾者事上爲あめつちの云々。同卷十のひらなる長哥に「しかれども辭擧敍吾爲言幸云々。此二つの爲ノ字。一つは上のかゝりはなる故にすとよみ。一つは上のかゝりぞなる故にすると訓り。かくのごとく同じさまなる爲字なれども。上のてにをはに

したがひてよめり。おほかた皆此たぐひにて。集中に字を畧けるところを。よみそへたるてにをはなども。大かたはよろしくして。誤れるはすくなし】その中にまれ〳〵によみ誤れるを。今左に引出て論ふ。

十五ノ廿九 もみぢ葉の散なん山にやどりぬる君をまつらん人〔之〕かなしも

此結句の之ノ字。のと訓るは誤なり。のなれば下を「かなしきとか。「かなしさとか結ぶ格なり。これは「かなしもと結びたれば。之ノ字しとよむべし

十六ノ廿一 ぬば玉のひだの大黒見るごとにこせの小黒〔之〕おもほゆるかも

此之ノ字がと訓り。それもあしからねど。猶しとよむべきなり

右の外にも之ノ字しとよむべきを。誤りてのと訓る哥これかれ有。なずらへて知べし

二ノ廿七 長哥 あさるどに御言とはさず月日の〔數多成塗〕そこゆゑに云々

この數多成塗を「あまたになりぬと訓るはあやまりなり。上にのとあれば。ぬとは結びがたし。ぬると結ぶ格なり。そのうへ塗ノ字をぬとのみよまんともいかゞ。されば此句は「まねくなりぬると訓べき也。數多字「まねくとよむべきところ。此外にもおほくあるなり

七ノ四十 こさけばおきゆさけ〔嘗〕みなとよりへつかふ時にさくべきものか

これは上にこそなければ。嘗ノ字「なめと訓るはひがこと也。「なむとよむべし

九ノ廿二 長哥 ますらをのゆきのすゝみにこゝに〔偃有〕

此偃有は上ののもじを。「ゆきのすゝみにといふへかくるときは。「ふしたり共「こやせり共よむべし。もし上ののを。「ここに偃有といふ所へかくるときは。「ふしたるとか「こやせるとか訓べし

十ノ十二 もゝしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝに〔集有〕

これは上にやとあれば。「つどへりと訓るはかなはず。「つどへると訓べし。此哥のやもじの事。四の巻やの部にやの條にい

へり

十二ノ三 山しろのいはたのもりにこゝろおそく手向したればや妹にあひ〔難(かたき)〕

此哥上にぞのや何の辞なければ。難ノ字「がたきとはよむべからず。「がたしとよむべし。但し四の句「たむけしたれや歟

同廿二 わぎもこを夢に見えこそやまこぢのわたり瀬ごにたむけ〔吾(われ)〕する

此哥上にぞのや何の辞なければ。吾をわれとよみては。すると留りがたし。然れば吾ノ字「わがと訓べし。がの結びは。の

と同格なれば。すると留れるにかなへり

十二ノ廿八 みやこへ君はいにしをたがこけかわがひものをの〔結(ゆふ)手(て)懈(たゆし)毛(も)〕

此結句を。板本に「むすびてとけもと訓るは。いふにたらぬひがこと也。又「ゆふてたゆしもとも訓り。これけよろしけれ共。

上のたがといへる辞の結びにかなはず。「たゆきもと訓べし。四の巻五十一のひらあはんよはいつもあらんをなにすとかその

よひ逢てこの繁(シゲキ)も。此哥も上になにとある故に「しげきもと訓り。こゝの哥もこれと同じ格なり

十九ノ九四 長哥 天地の神はなかれやうつくしきわがつま〔離(さかる)流〕云々

これは上にやとあれば。「はなるゝここそ結ぶべけれ「はなるにてはかなはず。「さかるとよむべし。奥に「なさけそといへる言もあれば。必「さかるにてよろし

右のたぐひのよみ誤り。くはしくたづねば猶もありなん。みなならへてさとるべし

○古風の辞

これは萬葉集のうちに。古今集よりこなたの哥には見えぬ辞。また同じき辞も。つかひざまなどの古風なるかぎりを。大かたにぬき出て。たぐひをわかち集めしるせり。されど此辞ども。すべててにをはの本末のこゝのひにいたりては。つねの定まりにことなるとなし。心をつくべし。此辞どもをあしく見て。今よまむ哥のて

〇玉のを七

にをはをみだりにして。あやまることなかれ。

〔も〕

一 さゝなみの國つみ神のうらさびてあれたるみやこ見ればかなし‖〔も〕

二 久かたのあめ見るごとくあふぎ見しみこの御門のあれまくをし‖〔も〕

六 ふるさとのあすかはあれど青によしならの飛鳥を見らくしよし‖〔も〕

七 わがせこをいづちゆかめとさき竹のそがひにねしく今しくやし‖〔も〕

八 秋たちていくかもあらねば此ねぬる朝けの風は‖たもとさむし‖〔も〕

二十 はふくずのたえずしのばん大君のめしゝ野べには‖しめゆふべし‖〔も〕

三 おく山のいはもとすげを根ふかめてむすびし心わすれかねつ‖〔も〕

同 ものゝふの八十うぢ川のあじろ木にいさよふ浪のゆくへしらず‖〔も〕

五 梅のはなちらまくをしみわが園の竹のはやしにうぐひすなく‖〔も〕

七 春がすみ井のべゆたゞに道はあれど君に逢んとたもとほり‖來く‖〔も〕

十五 朝びらきこぎでゝくればむこの浦の塩干のかたにたづが聲‖爲す‖〔も〕

二十 ほりえこえとほき里までおくりける君がこゝろは‖わすらゆまじ‖〔も〕

同 あもとじも玉にもがもやいたゞきてみづらの中にあへまかまく‖〔も〕

十 野べ見ればなでしこの花咲にけりわがまつ秋は‖ちかづくらし‖〔も〕

五 天地のともに久しくいひつげと此くしみたましかしけらし‖〔も〕

二 玉くしげみむろの山のさなかづらさねずばつひにありかてまし‖〔も〕

十一 きのふ見てけふこそあひだ＝わぎもこが‖こゝたくつぎて見まくほしき〔も〕
七 まとかたのみなとのす鳥浪たてや‖妻よびたてゝへにちかづく〔も〕
四 あはんよはいつもあらんを何‖すとかそのよひ逢てとのしげき‖〔も〕
十七 家にしてゆひてしひもをときさけず思ふこゝろをたれ‖かしらん‖〔も〕
十五 秋の夜を長みにかあらんなぞ‖こゝばいのねらえぬ‖〔も〕＝ひとりぬればか
三 長哥 まがことか‖わがきゝつる‖〔も〕云々
十四 東路の手兒のよび坂こえがねて山にか‖ねん‖〔も〕＝やどりはなしに
六 みかのはらふたいの野べを清みこそ‖大宮どころさだめけらし〔も〕

右の哥どもいづれも。上のてにをはは。おの〳〵その定まりのごとく結びて。その下へも‖を添たるもの也。も‖はてにをはのととのひにはかゝはらずと知べし

○「もしも‖「まづも‖「すらも‖「うべも‖「いとども‖「まとも‖「いまだも‖「こゝたくも‖「はやも‖「あれをばも‖【かやうに添たるも‖もじいとおほし】

○もを二つ重ねて添る例「今もかも‖「けふもかも‖「あすもかも‖

○くも‖「もしくも‖「けだしくも‖「しましくも‖

○はも‖

四 わが名〔はも〕千名のいほ名にたちぬとも君が名たゝばをしみこそなけ
同 長哥 早川の瀬にをる鳥のよしをなみ思ひて有しわがこ〔はも〕あはれ
五 ひる〔はも〕なげかひくらしよる〔はも〕いきづきあかし云々
十九 あめに〔はも〕いほつ綱はふ萬代に國しらさんといほつゝなはふ

○玉のを七

二十 うらめしく君〔はも〕あるか宿の梅の散すぐるまで見しめず有ける

又こぢめのはも‖

二 高ひかるわが日の御子の萬世に國しらさまし嶋のみや〔はも〕

三 かくのみに有ける物を萩の花さきてありやとゝひしきみ〔はも〕

十 秋萩の花野のすゝきほにはいでずわが戀わたるこもりづま〔はも〕

猶巻々におほし。古今集にも有て。三の巻はの部に出せり

〇もよ‖

「かたまもよ一ノ七‖「ふぐしもよ同‖「もち鳥のかゝらはしもよ五ノ七‖「しりびかしもよ十四ノ十六‖

古事記上巻にも「あはもよ吾‖顯宗紀哥にも「ぬでゆらぐもよ‖又「おきめもよ‖などあり

〇もや‖やも‖【下のやの條に出】かも‖【下のかの條に出】ぞも‖【下のぞの條に出】しも‖【下のしの條に出】

〇んの意のも‖

四 あひ思はぬ人をやもとなしろたへの袖ひづまでにねのみしなか〔も〕

これは泣裳とかけり。板本に「なくもと訓るは。上のやの結びにかなはず誤也。「なかもと訓べし。「なかんの意なり

八 高山の菅の葉しぬぎふる雪のけぬとかいは〔も〕こひのしげゝく

十二 人めおほみたゞにあはずてけだしくもわがこひしなばたが名にかあら〔も〕

これは將有裳と書るによりて。「あらんもと訓るはひがと也。「あらもと訓ては。將ノ字あまれるが如くなれ共。かく書る例あり。「しらにを不知爾シラニとかけるたぐひなり

十四 かみつけぬ佐野田の苗のむら苗にことは定めつ今はいかにせ〔も〕

二十 よそにのみ見てやわたら〔も〕なにはがた雲ゐに見ゆる嶋ならなくに

〔ぞ〕

十七 春花のうつろふまでにあひ見ねば月日よみつゝいもまつらん〔ぞ〕

十八 をりあかしこよひはのまんほさゝぎすあけんあしたは鳴わたらん〔ぞ〕

かくのごくんぞとつゞけいへるは。古今集よりこなたには見えず

○はぞ

六 長哥 たもとほり我〔はぞ〕こふる云々　同 長哥 われ〔はぞ〕まかる云々

十二 あひ思はず君はませごもかた戀にわれ〔はぞ〕こふる君がすがたを

はぞとつゞけいふこと。古今集よりこなたには見えず

○もぞ

二 長哥 玉藻〔もぞ〕たゆればおふる川藻〔もぞ〕かるればはゆる云々

同 長哥 よけく〔もぞ〕なき云々

十一 立ておもひゐて〔もぞ〕おもふくれなゐのあかもすそびきいにしすがたを

これらのもぞは。古今集よりこなたのもぞの意とは異にして。たゞもとぞとおのづから重なりたるのみ也

○ぞも

十 わがまちし秋はきたりぬしかれごも萩のはな〔ぞも〕いまださかずける

十一 逢見てはこひなぐさむさ人はいへご見て後に〔ぞも〕こひまさりける

十三 長哥 なれを〔ぞも〕われによるこふわれを〔ぞも〕なれによるこふ云々

十五 人よりは妹〔ぞも〕あしきこひもなくあらましし物を思はしめつゝ

右のたぐひ。ぞにもを添たる也。結びはぞの格也。此外に何ぞもなどゝとひかけて結ぶぞもは。古今集よりこなたにもおほ

し。三の巻ぞの部に出せり

〇かに通ふぞ

四 はねかづら今する妹はなかりしをいづれのいも〔ぞ〕こゝたこひたる

五 長哥 いづくよりきたりし物〔ぞ〕まなかひにもとなかゝりてやすいしなさぬ

十 わがまちし秋はきたりぬ妹とわれなにごあれ〔ぞ〕ひもとかざらん

十三 年わたるまでにも人はありちふをいつのまに〔ぞ〕もわが戀にける

同 長哥 いかなる〔疑ひのやにあらず〕や人の子ゆゑ〔ぞ〕かよはすも。あご云々

十四 柳こそきればはえすれよの人の戀にしなんをいかにせよと〔ぞ〕

同 たれ〔ぞ〕この屋の戸おそぶるにふなみにわけせをやりていはふ此戸を

十七 ほとゝぎすなにのこゝろ〔ぞ〕たちばなの玉ぬく月しきなきとよむる

十八 いかにせる布勢のうら〔ぞ〕もこゝたくに君が見せんと我をとゞむる

右の哥共いづれも。上に何などいふ辞有て。ぞにて切れたるがごとく聞ゆめれど。切れず。これ古今集よりこなたの哥ならば。必かといふべき所を。ぞといへるもの也。さる故に下のむすびも。皆上の何等をうけて。その格に結べり。古事記雄畧天皇の大御哥に。たれぞ大まへにまをすとあり。これを日本紀には。たれかこの事おほまへにまをすと有。これをもて此ぞは。かに通ふとをしるべし。又さいばら淺水の哥に。たれぞ此中人たてゝみもとのかたちせうそこしとぶらひにくるや。又色葉哥に。「わがよたれぞつねならん。これらも皆同じくて。かに通ふぞ也

〔の〕

〇こに通ふの

五 あめつち〔の〕ともに久しくいひつげと此くしみ玉しかしけらしも

八 ほとゝぎすきなきとよもす卯花〔の〕ともにやこしとゝはまし物を

これらののは。とに通ひて聞ゆ。貫之集にも「をちかたの花も見るべく白波のともにや我も立わたらまし。又「我宿を春のともにしわかるれば花はしたひてうつろひにけり。古今八にも「秋霧のともに立出て云々

○一つのの

六 長哥 につゝじのにほはん時〔の〕さくら花咲なん時。に云々

十三 長哥 わしり出のよろしき山〔の〕いでたちのくはしき山ぞ云々

かやうにいへるのもじ。長哥になほあまたあり

○一つのの

四ノ十三 「わがせこがゆ(往)きのまに〳〵 同 廿五 「大ぶねをこぎのすゝみに

九ノ廿三 「ますらをのゆきのすゝみに 同 「父母がなしのまに〳〵

又

十八 長哥 もゝ鳥のきゐてなく聲春さればきゝ(聞)〔の〕かなしも云々

二十 長うた 山見れば見〔の〕ともしく川見れば見〔の〕さやけく云々

○一つのの

三 いなといへどしひる志斐(シヒ)〔の〕がしひがたり此ごろきかずて我戀にけり

十八 しなざかるこしの君〔の〕とかくしこそ柳かづらきたぬしくあそばめ

十四 ひのぐれにうすひの山をこゆる日はせな〔の〕が袖もさやにふらしつ

これらののもじ。聞なれぬいひざまなる故に。くさ〳〵説あれども、たゞ本のまゝにて右の三首同じ古言の一つの格なり

○玉のを 七

「や」

三 河風のさむき初瀬をなげきつゝ君があるくににる人もあ「へや」
十一 あづさ弓末のはら野にとがりする君がゆづらの絶んと思「へや」
十二 わぎもこやあをわすらすないそのかみ袖ふる川のたえんとおも「へや」
十五 妹が袖わかれてひさになりぬれど一日もいもを忘れておも「へや」
四 うつたへにまがきのすがた見まくほりゆかんとい「へや」君を見にこそ
十四 うなはらの根やはら小菅あまたあれは君はわすらすわれ忘る「れや」
十八 長歌 なぐさむるこゝろしなくばあまざかるひなに一日もあるべくあ「れや」
同 かくしてもあひ見るものをすくなくも年月ふれば戀しけ「れや」も。
九 あぶりほす人もあ「れや」も。ぬれ衣を家にはやらなたびのしるしに
十九 長歌 おほろかにこゝろつくしておもふらんその子な「れや」も。云々

件の「へや」「れや」は。みな意のうちへかへる辞にて。「おもへやは」思ふかは思ひはせずといふ意。「わするれやは」わするゝかは忘れはせずといふ意たり。餘もこれになずらへしるべし　下にもの添たるも同じ。此格は古今集よりこなたにも有て。四の巻のやの部に出せり

九 とこしへに夏冬ゆ「けや」かはごろも扇はなたぬ山にすむ人
四 我思ひを人にしら「せや」玉くしげひらきあけつと夢にし見ゆる
同 眞野の浦のよどのつぎ橋心ゆもおも「へや」いもが夢にし見ゆる
十二 みどりごのためこそおもはもとむといへ乳の「めや」君がおもゝとむらん

六 湯の原になくあしたづはわがごとく妹にこふ〔れや〕時わかずなく

七 しほみてば入ぬる磯の草な〔れや〕見らくすくなくこふらくのおほき

七 長哥 勢の山にたゞにむかへる妹の山こともゆる〔せや〕もうちはしわたす

十五 世中の人のなげきは相おもはぬ君にあ〔れや〕も云々やとりせるらん

これらは皆やの上にばな畧ける例にて。「ゆけやは。ゆけばや。「しらせやは。しらせばや。「思へやは。思へばや。「こふれやは。こふればや也。餘もみな同じ。下にもを添たるも同じ。さて此格いづれも下はやの結びにてとぢめたり。集中に此格のうち。れやは殊におほくある也。古今集よりこなたの哥にもおほし。四の巻やの部に出せるがごとし

二 長哥 わが戀のちへの一重もなぐさもる心もあ〔れや〕と云々

六 玉藻かる辛荷のしまにあさりする鵜にしもあ〔れや〕我思はざらん

七 いはくらの小野ゆ秋津に立わたる雲にしもあ〔れや〕時をしまたん

これらはたゞ「あれと願ふ意にて。やは添たる歎息のや也。疑ひにあらず。日本紀衣通姫の哥に。「とこしへに君もあへやも云々とあるも同じ格也。又後の哥にも此格有

すべて右のけや　せや　てや　へや　めや　れやのたぐひ。今の本は訓を誤りて。念哉と書るを。「おもふやとよみ。有哉と書るを「ありや「あるやなどよめるたぐひおほし。よくてにをはの格を正して改むべし。すべてかゝるたぐひ。一もじの訓の誤りにて。一首の意をもあやまる也。おろそかにすべからず。

○はや

七 あふみの海浪かしこみと風まもりとし〔はや〕へなんこぐとはなしに

九 おくれゐてわれ〔はや〕こひん春霞たなびく山を君かこえいなば

これらのはやは。たま〳〵はとやと重なれるのみにて。ことなる事なけれど。後の哥には聞なれぬ故に出せり○又古事記崇

神ノ段の哥に「みまきいりびこはや‖。倭建ノ命の御詞に「あづまはや‖。同御哥に「その大刀はや‖。日本紀允恭ノ巻新羅人の詞に「うねめはや‖みゝはや‖。雄略ノ巻哥に。「いひしたくみはや‖あたらたくみはや‖。又仁賢巻の詞に「あがつまはや‖などあるはやは。語の終りに在て。歎息の辞也。かの仁賢ノ巻なるを。阿怜矣(ハヤ)とかけり。さて此はやは‖。万葉には見えず。後の哥に一つ二つ有。四の巻のやの部に出せり

○もや‖

二 われは〔もや〕やすみこえたりみな人のえがてにすとふやすみこえたり

これは「かたまもよ‖などのもよ‖と同じくて。疑ひのや‖にはあらず。古事記顕宗ノ段ノ哥に。「ぬでゆらくもや‖。又「おきめもや‖。日本紀皇極ノ巻童謡に「家もしらずもや‖など皆同じ

○やも‖

三 こゝにして家〔やも〕いつく‖しら雲のたなびく山をこえてきにけり

これはたゞ疑ひのやに。も‖の添たるのみなり

三 こもりくのはつせをとめが手にまける玉はみだれてありといはず〔やも〕

四 うつせみのよ〔やも〕ふたゆく‖なにすとか妹にあはずてわがひとりねん

六 をのこ〔やも〕むなしかるべき‖萬代にかたりつぐべく名はたゝずして

これらも同じとながらやは‖の意なり

一 秋はぎのにほへる妹をにくゝあらば人妻ゆゑにわがこひめ‖〔やも〕

四 玉の緒をあわをによりてむすべれば有て後にもあはざらめ‖〔やも〕

二十 にほ鳥のおき長川はたえぬとも君にかたらんことつきめ‖〔やも〕

十五 年にありて一夜妹にあふ彦星も我にまさりておもふらめ‖〔やも〕

七 眞木柱つくる杣人いさゝめにかりほのためさつくりけめ〔やも〕

これらのたぐひ。んといふべき所を。めといひて。やへつゞけたるは意のうらへかへる辞也。此格に。めとよむべきところを。今本には誤りて。んと訓るおほし。正し改むべし

○右の外にへやも　れやも　せやも　なごいへる類は上に出せり

○けらずや

二 つまもあらばつみてたげまし佐美の山野のうへのうはき過に〔けらずや〕

五 梅花さきたるそのゝ青柳はかづらにすべくなりに〔けらずや〕

六 泊瀬女のつくる木綿花みよし野の瀧のみなわにさきに〔けらずや〕

八 此花の一よのうちはもゝくさの言もちかねてをらえ〔けらずや〕

此やは。やはの意にて。「けらずやは。けりといふ意におつる也。

〔か〕

一 あごのうらにふなのりすらんをとめらが玉裳のすそに塩みつらん〔か〕

九 衣手のなぎの河べを春雨にわれたちぬると我思ふらん〔か〕

一 しほさるにいらごの嶋べこぐ船に妹のるらん〔か〕あらき嶋まを

八 夏まけてさきたるはねず久かたの雨うちふらばうつろひなん〔か〕

二十 青波に袖さへぬれてこぐふねのかしふる程にさよふけなん〔か〕

かくのごとく。らんか　なんかなどいへるは。古今集よりこなたの哥には見えず

○ぬか

四 ひさかたの雨もふら〔ぬか〕あまづゝみ君にたぐひて此日くらさん

同 佐保川のさゝれふみ渡りぬば玉の駒のくる夜は常にもあら〔ぬか〕

七 やみの夜はくるしきものをいつしかとわがまつ月もはやもてら〔ぬか〕

此たぐひのぬかは。「ふらぬかはふれかし。「あらぬかはあれかし。「てらぬかはてれかしといふ意にて。こひ願ふ意におつることばなり

〇かも

二 石見なる高角山のこのまゆも我袖ふるをいも見けん〔かも〕

十五 かへりきて見んと思ひしわがやどの秋萩すゝき散にけん〔かも〕

八 沫雪にふらえて咲る梅花君がりやらばよそへてん〔かも〕

これは上のらんかなんかなどゝ同じ事にて。下へもじのそはりたるなり

〇ぬかも

六 人みなの命もわれもみよし野の瀧のとこいはの常なら〔ぬかも〕

七 ぬばたまのよわたる月をとゞめんに西の山べに關もあら〔ぬかも〕

八 長月のそのはつかりのつかひにもおもふこゝろはきこえこ〔ぬかも〕

これは上のぬかと同じくて。下へものそはれる也。こひねがふ意になるなり

〇ろかも

三 長哥 つねなりしゑまひふるまひいや日けにかはらふ見ればかなしき〔ろかも〕

五 長哥 神ながらかむさびいますくしみたま今のをつゝにたふとき〔ろかも〕

ろかもは。古事記應神ノ段仁徳ノ段雄畧ノ段。日本紀仁徳ノ卷などの歌にも有

○右の外に　めかも【四の巻のかの部に出】こせぬかも【下のこその條に出】

○ぞに通ふか‖

四　こゝこしはたがこゝにある〔か〕＝小山田の苗代水の中淀にして

十二　玉がつまあはんといふはたれなる〔か〕＝あへる時さへおもがくれせす

此哥は三の句「たれなれか共よむべし。もし然訓ときは。「誰なればにかゝといふ意なれば。かはぞに通ふにはあらず。右に擧る如く「なるかとよむときは。「なるぞといふに同じ

○やに通ふか‖

一　わがせこはいづくゆくらんおきつものなばりの山をけふ〔か〕こゆらん

同　ながらふるつまふく風の寒きよにわがせの君はひとり〔か〕ぬらん

同　よひに逢てあしたおもなみなばりに〔か〕け長き妹がいほりせりけん

六　すまのあまのしほやきゞぬのなれなば〔か〕一日も君を忘れて思はん

七　いにしへに有けん人もわがごと〔か〕みわの檜原にかざし折けん

同　むらさきのなだかの浦のまなごぢに袖のみふれてねず〔か〕成なん

八　飛鳥川ゆきたむ岡の秋はぎは今日ふる雨にちり〔か〕過なん

十　秋萩は鴈にあはじといへれば〔か〕聲を聞ては花に散ぬる

十五　大船にかしふりたてゝ濱きよきまりふの浦にやどり〔か〕せまし

三　あらたへの藤江のうらにすゞきつる海士と〔か〕見らん旅ゆく我を

これらのか‖は。後の哥なればみなや‖といふところなり

一　こぶ鳥のあすかの里をおきていなば君があたりは見えず〔か〕も。有ん

〇玉のを七

三 いもゝ我もひこつなれ〔か〕もみかはなる二見の道ゆわかれかねつる

八 たぶてにもなげこしつべき天の河へだてれば〔か〕もあまたすべなき

同 今朝なきて行し鴈がね寒み〔か〕も此野の淺茅色付にける

これらもやに通ふかに。ものそはりたる也。後の哥なればやといふところをかもといへり

〔し〕

〇おほよそやすめ辞のしもじ。萬葉集には殊にさま〴〵にひろくつかひたり。その中に後の哥にもある格なるは。既に五の巻のしの部に出せればはぶきてあげず。今はたゞ古今集よゝこなたには見えざる格なるかぎりを出せり
「家ししぬばゆ一ノ廿六 「かりいほしおもほゆ同九 「わか名しをしも二ノ十 「山からしたふこかるらし水からしさやけかるらし三ノ廿六 「山し見がほし同廿九 「川しさやけし同 「酒にしあるらし同九二 「ゑひなきするしまさりて有らし同 「なみだしながる同五十二 「神ししらさん四ノ廿六 「棚引山の方にしあるらし同廿八 「こきしはあらんを同三十 「夢にし見ゆる同九二 思ふにし我身はやせぬなけくにし袖さへぬれぬ同四十九 「思へりしくし面影に見ゆ同五十四 「まつこにしあらし同五十九 「いめにし見えん五ノ十二 「琴にし有べし同十二 「君をしまたん同廿二 「うへし神代ゆさだめけらしも六ノ十 「かりしこもしも同廿二 「ちらん時にし行てたむけん同廿四 「妹が袂しおもほゆるかも同九八 「まちにしまたん同四十二 「なけきしまさる同四十三 「こゝにし有けり七ノ十二 「おもひし思へば同 「大宮人しあさりすらしも同廿七 「かきつばたをし夢に見しかも同卅三 「今しくやしも同四十二 「しぐれの雨しまなく降らし八ノ四十三 「夢にし見つゝ同五十 「見らくしよしも同五十八 「今しちるらん十ノ九 「たれしの人も十一ノ廿五 「末はししらず十二ノ十六 「母しもらすも同十七 「ねのみしなかゆ十三ノ廿五 「こゝろしいたし同 「池しうらめし十六ノ七 「つねかくし見ん十七ノ十九 「なほし見がほし十八ノ廿八 「あひしゑみてば同九八 「名をしたつべし十九ノ十五 「猶ししぬばゆ同十九 「おひてしゆかん同九八 「今しくらしも二十ノ十三 「昔の人しおもほゆるかも同五十五 「明日にしあるらし同五十七

大かた右のごとし。猶これかれおほかり又二つ重ねたるは

「今しはし四ノ五十二「かくのみしこひし渡れば九ノ廿六「命をしまたくしあらば十五ノ廿三

十二の卷十二のひらに「思ふにしあまりにしかば云々。これは下のしは過去のし也。助辭にあらず。又十九の卷卅九のひらに「國見しせして云々。此しは二つ共に助辭にあらず。これは古言に「見るを「見すといひ。「するを「せすといふ。二つ共にそのすをはたらかして。しといへる也「きくを「きかす。「ゆくを「ゆかすなどいふを。又「きかし共「ゆかし共はたらかすが如し。然れば「きかしはたゞ「きくといふに同じきがごとく。「見しはたゞ「見といふ事也。集中に「見玉ふを「見し玉ふなどいへるおほし。同卷の四十二のひらに。豐明見爲（トヨツアカリミシセス）とあるも。「見しせすと訓べし。

〇よし

「あをによし「あさもよし「眞菅よし「玉藻よし「はしきよし

〇やし

「はしきやし「よしゑやし

〇しも

「國はしもさはにあれども一ノ十八「ときはしもいつもあらんを三ノ五十六「梶しもあらなん七ノ廿四「雲にしもあれや同廿六「昨日しも見けんがごとも九ノ卅五「もゝよしもちよしもいきてあらめやも十一ノ廿二「名をしもをしみ同廿五「こゝをしもまぐはしみかも十三ノ五「人はしもみちてあれども君はしもおほくいませど同廿七「いつはしも戀ぬときはあらねども同三十「山をしもさはにおほみと十八ノ十八「こゝをしもあやにたふとみ同廿一

〇しぞ

「ねのみしぞなく四ノ十七「なく日しぞおほき八ノ廿四「ぬる夜しぞおほき十一ノ三

此外に「をしぞ思ふといへるありそは古今集よりこなたにもおほかり

〔な〕

○しこそ

「かくしこそ「うべしこそ

一 こせ山のつら〳〵つばきつら〳〵に見つゝおもふ〔な〕こせの春野を

四 大ぶねのおもひ頼みし君がいなば我はこひん〔な〕たゞに逢迄に

十 秋はぎのちりすぎゆかはさを鹿はわびなきせん〔な〕見ねばこもしみ

十七 ほとゝぎすあふちの枝にゆきてゐば花はちらん〔な〕玉と見るまで

十 梅花それとも見えずふる雪のいちじろけん〔な〕間使やらば

一云ふる雪にまづかひやらばそれとしらん〔な〕

七 家にして我はこひん〔な〕いなみ野の淺茅がうへにてりし月夜を

○んの意のな

「ゆきてはや(早)見な四ノ五十六「あそびくらさな五ノ十六「しな(死)なと思へど同廿八「いななと思へど同「にほひてゆかな【六ノ十五九ノ卅二十ノ廿六此外も「ゆかなは多し】「ひもときまけな八ノ廿二十二ノ廿二「いざぬれな同五十六「家にはやらな九ノ十「風まつりせな同廿二「もみぢたをらな同廿三「裳のすそぬれな十一ノ二「たえてみだれな同四十一「いでわれはいか(行)な十四ノ廿五「こりてなつけな十九ノ十九「をゝてかざゝな同廿八「ひもときあけな廿ノ十「見つゝしぬばな同十四「道ゐ尋ねな同五十二「つとにつゝみこ(來)な同「我はむすばな同六十「袖にこきれな同六十二「いざむすびてな一ノ十五「玉藻かりてな二ノ十六七ノ十四 六ノ廿二「かざしにしてな五ノ十五「けふむすびてな十一ノ卅七「袖はふりてな十四ノ十「みなうらはへてな十七ノ五十「君によりなゝ二ノ十四

此な古事記日本紀の哥にもあり。いづれも皆んと同意也。てなはてん。なくはなん也。とさまにいへる說共あれども。皆か

なはず。たゞなをんにかへて心得る外なし。但しんは。みつからの事にも。又他のうへにもわたりていふを。此なはたゞみづからしかせんとする事にのみいひて。他のうへをおしはかりうたがふやうの事にいへる例はなし。これんとのたがひめ也。十七の巻に「道のなか國つ御神は旅ゆきもしらぬ君をめぐみたまはな。これは他のうへにいひて。「たまはなんとこひねがふ意に聞えたり。例なきこと也。もしは奈ノ字は。尼か年かなどの誤にて。「たまはねにはあらざるにや。

〔ゑ〕

四 山のはにあぢむらさわぎゆくなれど我はさぶし〔ゑ〕君にしあらねば

十一 たらちねの母にしらえずわがもてる心はよし〔ゑ〕君がまに〳〵

十四 かみつけぬ佐野のくゝたち折はやし我はまたん〔ゑ〕ことしこず共

此外「よしゑやし「しゑやなどのゑも此同じゑ也。日本紀哥に「ゑくるしゑと。重ねてもいへり

〔い〕

三 いなといへどかたれ〳〵とのらせこそしひ〔い〕はまをせしひがたりといふ

同 玉(長哥)のをのたえじ〔い〕。妹とむすびてし云々九菟原をとこ〔い〕。あめあふぎ

四 わがせこか跡ふみもとめおひゆかば紀の關守〔い〕とゞめてんかも

七 むかつをのわかゝつらの木しづえとり花まつ〔い〕。間に歎きつるかも

十 青柳の糸の細紗春風にみだれぬ〔い〕。間に見せんこもがも

十二 ありち(ら歟)がたありなぐさめてゆかめども家なる妹〔い〕。いふかしみせん

件のいはみな上の言に附て下にあり。日本紀の哥にも「けなのわくごい笛ふきのぼると有其外續日本紀の宣命の詞にもおほく見えたり。考へ見るべし。然るを此いをうたがひてくさ〴〵にいへる說あれど。みなわろし

○玉のを　七

○右の外に言の頭に發語におけるいもじおほし。そは今畧きて出さず

〔くさ〴〵のやすめ辭〕

○ろ又らを助辭に添たる多し。東哥には殊にろもじおほし。又十六の巻に。「めこのなりをは思はずろ云々。此ろなどはこゝにめづらし

○かを上におく事あり「かやすし「かぐろし「かあを靑

○たを上における有「道をたこほみ十七ノ二十同二十三「たもこほり十七ノ十八同九六同四十四同四十六十八ノ七

此たは。「たやすし「たわすれてなどいふたと一つ歟。又回の意にても有べし。回は「たむともはたらきて。出りゆくやうの意なり。運字轉ノ字などをも書り。「こぎたみゆく。又「たみたる道などおほく見えたり

〔ばを畧く格〕

「あれや「なれや「こふれや「ゆけや「たれや「のめや「すれや「なかれや「ゆるせや「しらせや「思へや【これらは上のやの條にも出せるとば也　みなやの上にばを加へて心得べし】

「おもへか四ノ廿三十五ノ十七「思へかも四ノ十四同卅十二ノ廿三「たがこけかわがひものをのゆふてたゆきも十二ノ卅八「こふれかも十三ノ九「家人のいはひまたねか十五ノ廿三「あれかも十七ノ四十七

これらはかの上にばを加へて心得べし

「家人のいはへにかあらん二十ノ卅八

これはかの上ににをへだてゝばを畧けりめづらし

「なねがこふれぞ四ノ五十「なにどあれぞ十ノ廿八

これらはぞの上にばを加へて心得べし

「天地もよりてあれこそ一ノ廿二「戀みだれこそ二ノ十五「のらせこそ三ノ十二【これを「のればこそとよむは誤りなり】「かくこふれこそ四ノ廿七「おもへこそ十四ノ五十二 十七ノ十六 十二ノ四 十八ノ十八「こゝろあれこそ七ノ廿六「こひけれこそは十七ノ卅二「しかれこそ十八ノ廿八「ふる雪のちへにつめこそわれ立かてね十九ノ廿三

これらはこその上にばを加へて意得へし

右のごくばを畧く格け せ て ね へ め れの下。や か ぞ こその上にかぎれるゝ也。【いづれも後世には耳なれざるいひざまなる故に。今の本には訓を誤れるこころおほし古言をよくわきまへて正すべし】

〔られるを畧く格〕

「國のこほかば十四ノ九「まさかしよかば同十三

これら「からばさいふべき所を。らをはぶきて。「かばといへり

「こほけども十四ノ廿五 十七ノ廿三「をしけご五ノ十 十七ノ廿三「ならの大路はゆきよけご十五ノ廿一「こほけば十七ノ廿六

これら「けれど「ければといふべき所を。れを畧きて。「けど「けばといへり

○「見らん「見ごも

これは後世の格をもて思へば。「見るらん「見るとものるをはぶけるが如く聞ゆれど。さにはあらず。すべて万葉には。みな「見らん「見とものみいひて。「見るらん「見るともといへるは一つもなしこれもとよりしかいふべき格の言なれば也右のられを畧ける格とは同じからず。十の卷十一のひらに「春野のうはぎつみてにらしもといへる。「にらしも同じ格にて。後世ならば是も「にるらしといふべきを「にらしといへり。「見らんは古今集の哥にもあり

〔るに通ふゆ〕〔れに通ふえ〕

「ねのみしなかゆ五ノ卅八 廿ノ五十四 同十五ノ十三 六十二 卅二「おもはぬ人の衣にすらゆな七ノ卅三「なほししぬばゆ十九ノ十九「わすらゆまじも二十ノ五十五「しばしも「かくゆけば人にいとはえかくゆけば人ににくまえ五ノ十「見るにしらえぬ同二十「都のてぶりわすらえにけり同廿六「しばしもわれはわすらえぬかも十三ノ十「いのねらえぬに十五ノ二十 廿二ノ廿三

おほよそ後世に。らるられなどいふ言。万葉に假字（カナ）に書る所は。いづれも皆右のごとく。らゆらえなどゝのみ書て。らるられなどゝ書るはいと〳〵まれ也古事記日本紀などの哥もみな同じ然れば所泣所知所忘所偲などゝ眞字（マナ）に書る所も。みな假字書きの例のまゝに。「なかゆ「なかえ。「しらゆ「しらえ。「わすらゆ「わすらえ。「しぬばゆ「しぬばえなどと訓べし。今の本にこれらのゆえを。るれと訓るは古言にあらず。みな正すべし

〔よに似たるを〕

二 朝日てるさだの岡べになく鳥のよなきかはらふ此としごろ〔を〕

七 はつせ河しらゆふ花におちたぎつ瀬をさやけみと見にこし我〔を〕

十二 あし引の山よりいづる月まつと人にはいひて妹まつわれ〔を〕

同 わがいのちの長くほしけくいつはりをよくする人をとらふばかり〔を〕

二十 あられふり鹿嶋の神をいのりつゝすめらみくさに我はきにし〔を〕

三 長哥 はる日〔を〕かすがの山の云々

十 本つ人ほとゝぎす〔を〕やめずらしく今やながくる戀つゝをれば

十一 をとめら〔を〕袖ふる山のみづがきの久しき時ゆもひ（思）きつ我は

同 逢見ては千年やいぬるいな〔を〕かも我やしか思ふ君まちがてに

十五 いのち〔を〕しまたくしあらばありぎぬの有て後にもあはざらめやも

右のをは。皆たすけたる辞にて。よといふに同じ　○四の巻四十一のひらに「なをとわを云々。これは汝と吾をといふことなるを。吾をといへると同じく。汝へもをゝいへる也。他のよに似たるをとはかはれり又七の巻十一のひら。十の巻卅のひらに「舟わたせをとよばへども云々。此をは。すなはちよばふ聲なるべし

〔みに通ふかり。〕

十二 わぎもこにこひすべな〔かり〕むねをやき朝戸ひらけば見ゆる霧かも

十七 わがせこにこひすべな〔かり〕あしがきのほかになげかふあれしかなしも

これら「すべなかりは。「すべなみといふに通ひて聞えたり。さて中昔よりの辞に。「なにがるといふと有。がり共はたらけり。「かなしがる「戀しがるなどのたぐひ也。此がる　がり　も本一つにや。但しかのがる　がりは。かならず他のうへをいふ時の辞。こゝのかりはみづからのうへにいひて。自他のたがひはあれど。意はかよふめり

〔ずに通ふに。〕

不知を「しらにといへるおほし。其外には。「見れどあかにけん十七ノ八「そこもあかに同廿六　これらなり

〔ねば〕

四 つくしぶねいまだもこ〔ねば〕あらかぢめあらぶる君を見るがかなしさ

同 見まつりていまだ時だにかはら〔ねば〕年月のごおもほゆるきみ

八 霜雪もい。まだすぎ〔ねば〕おもはぬに春日の里にうめの花見つ

同 卯花もい。まださか〔ねば〕ほとゝぎす佐保の山べをきなきとよもす

同 秋たちていくかもあら〔ねば〕此ねぬる朝けの風はたもと寒しも

同 秋田かるかりほもい。まだこぼた〔ねば〕かりがね寒し霜もおきぬがに

同 わがやごの萩の下葉は秋風もい。まだふか〔ねば〕かくぞもみでる

十 一とせに七日の夜のみあふ人の戀もやま〔ねば〕よはふけゆくも

同 天川あなやみわたり君が手もい。まだまか〔ねば〕よのふけぬらく

同 秋はぎのこひもつき〔ねば〕さを鹿の聲はつぎ〲戀こそまされ

同 あき山のこのはもい。まだもみぢ〔ねば〕けさふく風は霜もおきぬべし

同 まきむくの檜原もい。まだくもゐ〔ねば〕小松がうれゆ沫雪ながる

十二 人國によばひにゆきて太刀がをもい。まださか〔ねば〕さよぞ明にける

此ねばは皆ずにといふ意也。古今集などにもまれに此格あり。さておほくは。上に「いまだといふ言あり。まれに「いまだといはぬも。△のしるしを付たる所に。必その意をふくめり

十 さねそめていくたもあら〔ねば〕白妙の帯こふべしやこひもやま〔ねば〕

此哥は同じねば二つ有て。二所に「いまだの意をふくめり

十の巻五十八のひらに「もみぢばにおく白露の色にはもいでじと思へばことのしげけく。「此思へばも「思ふにの意なれば。右のねばと同し格也

〔ずば〕。

二 かくばかりこひつゝあら〔ずば〕たか山のいはねしまきてしなまし物を
同 おくれゐて戀つゝあら〔ずば〕おひしかん道のくまわにしめゆへわがせ
同 わぎもこに戀つゝあら〔ずば〕秋萩の咲てちりぬる花にあらましを
三 中々に人とあら〔ずば〕酒壺に成にてしがも酒にしみなん
四 おくれゐて戀つゝあら〔ずば〕木の國の妹脊の山にあらまし物を
同 かくばかり戀つゝあら〔ずば〕岩木にもならまし物を物思はずして
同 よそにゐて戀つゝあら〔ずば〕君が家の池にすむちふ鴨にあらましを
同 わが思ひかくてあら〔ずば〕玉にもがまことも妹が手にまかれなん
十一 かくばかり戀つゝあら〔ずば〕朝に日に妹がふむらんつちにあらましを
同 わぎもこに戀つゝあら〔ずば〕かりこもの思ひみだれてしぬべきものを
十二 中々に人とあら〔ずば〕くはこにもならまし物を玉の緒ばかり
同 おくれゐて戀つゝあら〔ずば〕たごの浦のあまならましを玉藻かる〳〵
同 いつまでにいかむいのちぞおほかたは戀つゝあら〔ずば〕しぬるまされり
八 秋はぎのうへにおきたるしら露のけかもしなまし戀つゝあら〔ずば〕
十 あき萩の枝もとをゝにおくつゆのけかもしなまし戀つゝあら〔ずば〕
同 秋の穂をしぬにおしなべおく露のけかもしなまし戀つゝあら〔ずば〕
十一 つるぎだちもろはのうへにゆきふれてしせかもしなん戀つゝあら〔ずば〕
同 すみのえの津守あびきのうけのをのうかれかゆかん戀つゝあら〔ずば〕
同 白浪のきよする嶋のありそにもあらまし物を戀つゝあら〔ずば〕

○玉のを七

三　しるしなき物をおもは〔ずば〕一杯のにごれる酒をのむべくあらし

五　おくれゐてながこひせ〔ずば〕御園生のうめの花にもならまし物を

八　こゝしげき里にすま〔ずば〕今朝なきし鴈にたぐひていなまし物を

十二　なかなかに君にこひ〔ずば〕ひらの浦のあまならましを玉藻かりつゝ

十　長き夜を君にこひつゝいけら〔ずば〕咲て散にし花ならましを

右のずば皆一つ意にて。んよりはといふ意也。「戀つゝあらずばは。「戀つゝあらんよりは也。「おもはずばは。「思んよりは也。外もみなずらへて知るべし。哥毎に事はかはれども。いづれの哥もみな右の意をもて心得るときは。一つにつらぬきて。一首の趣もみないと明らかなり。又八の巻に「玉きはる命にむかひ戀んゆは君が御船のかぢつかにもが。此「戀んゆはと。「戀つゝあらずばと同じ意にて。一首の趣も。ずばとよめる右の哥どもと全く同じきをおもふべし。然るにたれもたれも此ずばの辞を心得かねて。くさぐさの説あれども。哥どもに其意かはりて。一つにつらぬかず。明らかなる説あることなく。一首の意もみなおだやかならざるをや

〔ずけり〕〔ずける〕〔ずけれ〕〔ずけん〕

「猶しかずけり三ノ廿二 同五十七 六ノ廿二 十二ノ十八 八ノ卅七「戀やまずけり十七ノ卅三「見れどあかずけり十八ノ九「まてどこずける四ノ三十「いまださかずける十ノ卅七

「いねらえずけれ四ノ卅七「雪はけずけれ十ノ五十九

「もこめあはずけん十七ノ四十七「さきでこずけん廿ノ十六

これはざりけりをずけりといひ。ざりけんをずけんといへる格也

〔からんの意のけん〕

「戀しけんかも三ノ廿六「さぶしけん四ノ廿九「戀のしげけん七ノ卅二「こゝのしげけん同卅九「けなばをしけん八ノ五十六「船のはやけん九ノ廿九「年

はながけん十ノ廿二「ちらばをしけん同卅六「いちじろけんな同六十二「うらがなしけん十五ノ四「きかぬ日なけん十七ノ十「しなばやすけん同十六「こふる日おほけん同卅九「けのながけんぞ同四十二

此格古今集よりこなたにもまれに見ゆ。さいばらに「御肴になによけんなどあるもこれ也。又右の外に

八 こひし〔け〕ば形見にせんと我やごにうゑし藤なみ今咲にけり

十二 今だにも目なともしめそあひみずて戀ん年月久し〔け〕まゝに

十九 天雲をほろにふみあだし鳴神もけふにまさりてかしこ〔け〕めやも

これらのけもからの意にて。「戀しけはは「戀しからば也。久しけまくは「久しからまく也。「かしこけめやもは「かしこからめやもにて。皆「からんを「けんといふと同格也

〔こそ〕〔こすな〕〔こせぬかも〕

「夢に見えこそ四ノ卅三 五ノ十 十一ノ十三 同廿一 同廿五「うめが花ちらずありこそ五ノ十八「酒にうかべこそ同十九「五百夜つぎこそ六ノ廿八「あそびのみこそ同二十九「我につげこそ七ノ廿三「まさきくありこそ九ノ三十「衣すらんにゝほひこそ十ノ廿一「いもにつげこそ同六七 同五十一 十一ノ廿五 同四十 廿ノ廿六「神も我をばうつてこそ十一ノ廿八「やまず見えこそ十二ノ十三「はやくゆきこそ十二ノ卅五 古事記神代の哥には。こせねとも有。こそと同意也。

件のこそは。集中に與乞社 欲得 欲など〻書り。此中に欲得 欲など〻書る所をば。今の本みな訓を誤れり。又與ノ字を書るにも。訓を誤れる所あり。又有社を「あれこそ 續許增を「つげこそと訓るなどもひがこと也。五の巻の哥に阿利許曾。十の巻の哥に爾保比與と書る。これらを證として。いづれをも此格によむべし。六の巻なる飲與を。「のめこそ。十二の巻の去欲を。

「ゆけこそなどゝよまんもひがと也。これらは板本の訓は。猶いみしくあやまれゝども。そはしばらくおきて。今は訓を正(タヾ)さん後の人のためにおどろかしおく也

伊勢物語の哥に「秋風ふくと鴈につげこせとあるこせは此こその轉(ウツ)れるにて。同意なり。然るを越(コセ)の意と心得るは。古へをしらぬひがと也

「ちりこすなゆめ八ノ十七同五十八同六十十五ノ廿七同九十九「戀する道にあひこすなゆめ十一ノ四

「たゆ(絕)こふ(云)とをありこすなゆめ同九十四

こそといふは願ふ辞なるを。こすなといへば。また勿(ナカ)れと願ふ意になるなり

「ありこせぬかも二ノ十五六ノ卅七五ノ十四「つぎこせぬかも十ノ廿九

これは上のかの條に出せる。ぬか ぬかもと同じ格にて。「ありこそ「つぎこそといふと同意におつめり。「こせぬかもとよめる。右の外にも猶有。又今本訓を誤れるも有

〔がね〕〔がに〕

三　ますらをの弓末ふりおこしいつる矢を後見ん人はかたりつぐ〔がね〕

四　佐保川のきしのつかさの小歴木なかりそ有つゝも張之來者立隠〔がね〕

十　梅花われはちらさじ青丹よしならなる人のきつゝ見る〔がね〕

同　たちばなのはやしをうゑん郭公つねに冬まですみ渡る〔がね〕

同　あし引の山田つくる子ひでずともしめだにはへよもるこしる〔がね〕

同　あきつ羽ににほへる衣われはきじ君にまださばよるもきる〔がね〕

同　雪さむみさきにはさかず梅の花よし此ごろはさてもある〔がね〕

十八 しら玉をつゝみてやらばあやめ草花たちばなにあへもぬく〔がね〕
十九 ほとゝぎすきけ共あかずあみごりにとりてなつけなかれずなく〔がね〕
十二 里人もかたりつぐ〔がね〕よしゑやし戀てもしなんたが名ならめや
五 長哥 よろづよにいひつぐ〔がね〕と云々
十七 長哥 おとのみも名のみも聞てともしぶる〔がね〕
八 秋田かるかりほもいまだこぼたねばかりがね寒し霜もおきぬ〔がに〕
十四 おもしろき野をばなやきそふる草ににひ草まじりおひばおふる〔がに〕
四 わが屋戸の夕陰草のしら露のけぬ〔がに〕もとなおもほゆるかも
十 うれたきやしこほとゝぎす今こそは聲のかる〔がに〕きなきとよまめ
同 秋づけば水草の花のあえぬ〔がに〕おもへどしらじたゞに逢ざれば
十一 さ寐（ぬ）〔がに〕はたれともねめどおきつものなびきし君が言まつ我を
十四 むろがやのつるのつゝみのなりぬ〔がに〕ころはいへ共いまだねなくに
八 長哥 おふるたちばな玉にぬく五月を近みあえぬ〔がに〕花咲にけり云々
十三 長哥 あまをとめらがうながせるひれもてる〔がに〕云々白妙の袖ふる見えつ云々

上件がねは。中昔の言に。きさきがね「坊がね「むこがね「博士がねなどいへるがねと同じくて。かねてその料にまうけてまつ意也。又がには。がねにといふとにて。ねにをつゞめてにといへるなり。がねともはら同じ意也。さて集中假字書の例。みなかには濁音の我ノ字をかければ。かならずにごるべき辞なり

〔され〕

「かやをからさね(刈)一ノ十二「ながなのらさね五ノ七 九ノ十五「秋萩の花をふかさね(葺)十ノ五十六
「たえずゆかさね十二ノ四十「ゐねてやらさね十四ノ十「ひもむすばさね同十五
「せなこつまさね同十八「袖をふらさね十五ノ三十「玉をぬかさね十七ノ卅九
「けふはくらさね十九ノ十二「さかえいまさね同十六「鵜川たゝさね同廿一
「おやにまをさね二十ノ三十八

此さねは。まづ茳(かや)をかれといふ事を。「かりね共いふ。此ねは後の哥にもよむことにて。五の巻のねの部に出せれば。こゝにけ出さず。さて又かのか(刈)れを。古言には「からせともいふ。その「からせを。かの「かりねの例のごとくに。ねを添ていふときに。「からさねとなるなり。餘もこれになずらへてわきまふべし。然ればさはせのはたらける言。ねは「かりね「のりねなどいふねと同じくて。さねとつゞきたる一つの辞にはあらざれども。かくいふ例は。古今集よりこなたにはなき故に。こゝに別に出しつ

〔そね〕

「塩干なありそね二ノ四十三「野べの秋はぎなちりそね同四十四「柴なかりそね七ノ廿六
「雨なふりそね九ノ九「なふみこね雪は十九ノ卅一「雪なふみそね同卅二
「なふみそねをし(惜)同四十四「浪なさきそね二十ノ十九

これはつねにけそとのみいふ所を。其下にねを添たる也。

「雨なふり行年(そね)十三ノ廿三「風なふき行年(そね)七ノ廿一「犬なほえ行年(そね)十三ノ十六
集中に嫌(ツネ)とかけり

これらの行年を。今の本にはみなこそと訓れ共。他にこそを行年と書る例なく。又上になといひて。こそと結べる例も他

になければ。此行年は決（キハメ）てこそにはあらず。右に擧たるそねの格と。全く同じければ。これらも必そねと訓べき也。行はもしは所（ソ）ノ字などの誤りにもやあらん。文字のとは。いまだいかに共思ひえずなん

〔もの〕

四 わがもてる三相によれる糸もちてつけてまし〔もの〕今ぞ悔しき

五 あまごぶや鴈にもがもやみやこまでおくりまをしてこびかへる〔もの〕

これらのものは。ものをといふ意也。古事記履中ノ段ノ哥に「もちてこましもの。又雄畧ノ段ノ哥「かなすきも いほちもがも

十六 はちす葉はかくこそある〔もの〕おきまろが家なる物はうも（芋）の葉にあらし

すきばぬるもの。これらも同じ

同 馬（長哥）にこそふもだしかく〔もの〕牛にこそ鼻縄はぐれ云々

これらのものは。ものなれさいふ意なり

〔して〕

三 よし野なる夏箕の河の川淀に鴨ぞなくなる山陰に。〔して〕

同 みごりごのはひたもこほりあさよひにねのみぞあがなく君なしに。〔して〕

四 こさでしはたがとにあるか小山田の苗代水の中よごに。〔して〕

十一 いせの海人のあさなゆふなにかづくちふあはびの貝のかたもひに。〔して〕

十四 ひろはしを馬こしかねてこゝろのみ妹がりやりてわはこゝに。〔して〕

これらのにしては。にてといふ意に聞えたり

三　君にこひいたもすべなみあしたづのねのみしなかゆ朝よひに。〔して〕

十二　しろたへのわがころもでに露はおきぬ妹にはあはずたゆたびに。〔して〕

三　みちのくの吉野のかや原とほけどもおも影に。〔して〕見ゆとふものを

八　雨はれてきよくてりたる此月夜又さらに。〔して〕雲なたなびき

これらはたゞにといへるにてことたれるを。しては添へたるごとく聞ゆ

〔しく〕

四　夜のほごろわが出てくればわぎもこが思へり〔しく〕しおもかげに見ゆ

七　今〔しく〕は見めやと思ひしみよし野の大川淀をけふ見つるかも

同　住のえの名兒のはまべに馬なべて玉ひ（拾）りひ〔しく〕つね忘らえず

同　わがせこをいづちゆかめとさき竹のそがひにね〔しく〕今し悔しも

八　秋の野のを花がうれをおしなべてこ〔しく〕もしるくあへる君かも

十　こひ〔しく〕はけながき物を今だにもともしむべしや逢べき夜だに

二十　はつ雪は千重にふりしけこひ〔しく〕のおほかる我は見つゝしぬばん

十二の巻九のひらに唯毛とあるを。「たゞしくもと訓り。此訓によらばこれも同じしく也。應神紀ノ哥に「ねしくをしぞ云云。これも同じ。又履帝紀の宣命に。今之紀乃間方（イマシキノアヒダハ）と有この之紀（シキ）もこゝのしくと通ひてきこえたり

〔ほり〕

四　月夜には門に出たちゆふけとひあし占をぞせしゆかまくを〔ほり〕

同 道とほみこじとはしれるものからにしかぞまつらん君がめを〔ほり〕

此外「おやのめをほり」‖「つまのめをほり」‖「妹がめをほり」‖など留れる有

〔く〕

三 もゝしきの大宮人のにぎたつにふなのりしけん年の‖しらな〔く〕

同 いはとわるたぢからもがもたよわきめにしあればすべの‖しらな〔く〕

七 初瀬川ながるゝみをの瀬を早みゐでこす浪の音の‖さやけ〔く〕

八 高山の菅の葉しぬぎふる雪のけぬとかいはも戀の‖しげゝ〔く〕

十 あまのがはあなやみ渡り君が手もいまだまかねばよの‖ふけぬら〔く〕

十九 あし引の山のもみぢに雫あひておちん山路を君が‖こえま。〔く〕

これら上にの‖といひて。く‖ととぢめたり。此格集中になほおほし

二 みよし野の山松がえははしきかも君が御言をもちてかよは〔く〕

三 見わたせば明石のうらにもゆる火のほにぞ出ぬる妹にこふら。〔く〕

十 あひ思はずあるらんこゆゑ玉のをの長き春日をおもひくらさ〔く〕

十一 あしびきの山田もるをぢがおく鹿火の下こがれのみわがこひをら〔く〕

四 世中しくるしきものに有けら。〔く〕‖こひにたへずて死ぬべき思へば

同 春の雨はいやしきふるにうめの花いまださかな〔く〕‖いとわかみかも

これらは上にの‖といはずしてく‖と結びたり

○玉のを七

〔らく〕

「こふらく「見らく「すぐらく「たゆらく「さぬらく「つぐらく「あらくもしるし三ノ十六「あかしつらくも四ノ十二「くらく（来）同五十四「ちらく（散）五ノ十五「ふせらく同廿八「あるらく（流）八ノ四十五「かくらく（隠）七ノ十九「よのふくらく同四十二「雨のふらく八ノ四十三「思はしむらく十ノ五十一「さくらく十一ノ十八「おもはゆらく十二ノ廿九「年のへぬらく十五ノ三十「かざしつらく十八ノ卅七　いづれもるを延てらくといへる也。次なるも同じ

「あへらく十六ノ卅十ノ卅一「まさらく十ノ四十八「しれらく同五十四「たてらく「をらく（居）十三ノ十四

これら板本に訓を誤れり。「あへらくを「あふらく。「まさらくを「ますらく。「しれらくを「しるらく。「たてらくを「たつらく。「をらくを「をるらくと訓り。皆ひがと也。すべてらくはるを延たる辞にて。「あへらくは「あへるといふに同じきを。「あふらくとよみては。「あふるといふ事になれり。然はたらく言にはあらず。又「たてらくは「たてるといふと同じきを。「たつらくと訓てけ。「たつるといふ事になれり。是はみづからの事をいへるなれば。「たつるとはいひがたし。「たつるは他を立るにいふ言なればなり。餘もこれらになずらへてわきまへしるべし

〔まく〕〔けまし〕〔けまく〕

「ふくまくは後二ノ廿二「見まくもしらず四ノ廿九「ふかまくしらず七ノ十四「こひまく思へば同廿「見まくほり八ノ卅二「ふらまくを見ん同五十五「ちらまくも見ん十ノ四十二「見まくしもよし同四十五「しなまくのみぞ十一ノ四十二「こひまくもおほく同四十四「すぎまくを十三ノ三十「見まくちかけん十六ノ廿三「君がこえまく十九ノ卅一「君を見まくは二十ノ十三「つげまくは同五十三

右いづれもまくはむをのべたることばなり

また

三 長歌 角さはふいはれの道を朝さらずゆきけん人の思ひつゝ通ひ「けまし」は云々萬代にたえじとおもひてかよひけん君をば云々

此けましはけんといふ意也。思ひつゝ通ひけんやうは云々と。その思ひし事共をいひつらねて。かくの如くして萬代に絶じと思ひて通ひけんといへる也。ましとんと同意也

十八 長歌 はしきよしそのつまのことあさよひにゑみゝゑまずもうちなげきかたり「けまく」は云々

これもけまくはけんを延たるにて。右のけましと同じこゝろばへなり。くは久ノ字を書れば。もしくは之の誤にて。これもけましにてもあらんか。されどむを延てまくといふもつねなれば。けまくにてもよろしき也

文章の部

〇てにをははたゞ哥のうへの事とのみ心得て。さらぬ詞には。さだまれるとゝのへなどもなき物とや思ふらん。後世人のかける物を見るに。皆かなはねとのみぞおほかる。そも〳〵此とゝのへは。哥のみにはあらず。たゞのことばにも。もとよりみなさだまりあることにて。いにしへ人のは。なほざりにたゞ一くだり書すてたる物までも。たがへるふしはさらになし。おのづからのことなるがゆゑなり。さてそのさだまりは。もはら哥のてにをはとひとつにて。あひだのことばの長きみじかきけぢめこそあれ。上下のとゝのへは。いさゝかもことなるとなし。いづくにまれ語の切るゝところは。かならず上のてにをはのかゝりをまもりて。りとると。るとるゝと。つとつると。ぬとぬるとのたぐひなど。こと〴〵く哥のさだまりと同じこと。結びに心をつくべきものなり。たとひ文章などゝ。こと〴〵しくいふばかりの物にもあらで。

何となくたゞありに。一くだりかゝむ言の葉なりとも。此てにをはばかりは。みだりにすべきにあらず。いさゝかもたがへるふし見えたるは。その人の物かく筆の。大かたのつたなさ思ひはかられて。心おとりせらるゝは。はづかしきわざならずや。かくていま此事をいふに。まづふるき文には。延喜式の八の巻に集め載せられたるもろ〳〵の祝詞。また續日本紀などの御代々々の宣命の詞などのこれり。これらも事にしたがひ時代にしたがひて。詞のふりことり〴〵にふるめかしけれ。てにをはのとゝのひは。もはらことなることしなければ。今別には出さず。たゞ今の京になりての歌の集の序の詞。はしがきなど。又物語日記などを一つ二つ引出て。大むねをさとす物ぞ。

古今集序

「たけきものゝふのこゝろをもなぐさむる〔は〕うた〔なり〕
「ありはらのなりひら〔は〕こゝろあまりてことばたら〔ず〕
「小野ノ小町〔は〕いにしへの衣通姫の流〔なり〕
「大友ノ黒主〔は〕そのさまいや〔し〕
「これ〔は〕君も人も身をあはせたりといふなるべ〔し〕
「此哥〔も〕かくのごとくなるべ〔し〕
「天地のひらけはじまりける時よりいできに〔けり〕
「また山部ノ赤人といふ人あり〔けり〕
「わづかにひとりふたりなり〔き〕
「しれる人よむ人おほから〔ず〕
「ゐにかける女を見て徒に心をうごかすがごと〔し〕

右はは も 徒のかゝりにて皆ひも鏡の右の行りの辞也

「よろづの言の葉と〔ぞ〕なれり〔ける〕

「かくて〔ぞ〕花をめで云々さま〴〵になりに〔ける〕

「からのうたにもかく〔ぞ〕あるべ〔き〕

「さゞれ石のいはほとなるよろこびのみ〔ぞ〕あるべ〔き〕

「〔いづれ〕かうたをよまざり〔ける〕

右はぞのや何のかゝりにてみな紐鏡の中の行りのことば也

上件の語どもをもて。文章のてにをはも。すべて歌と全く同じきことをさとるべく。又みだりならぬほどをもしるべきなり。

〔なん〕【此なんをふるき文にはみな奈毛（ナモ）といへり】おほよそ文章には。なんとかゝるてにをはおほし。ぞといふべきところを。なだらかにのどめていふ辞也。さる故に結びも皆ぞと同じ格なり。これは哥にはをさ〳〵つかはぬ辞なる故に。今殊に例をあぐ。

「そのはじめを思へばかゝるべく〔なん〕あら〔ぬ〕「かきの本の人まろ〔なん〕哥のひじりなり〔ける〕「雲かとのみ〔なん〕おぼえ〔ける〕「えたる所えぬところたがひに〔なん〕あ〔る〕「よつの時九かへりに〔なん〕なり〔ぬる〕「此事の時にあへるを〔なん〕よろこび〔ぬる〕これらにて心得べし。皆ぞと同じむすび也

土佐日記に「心あるものははぢずぞなん來ける。これにぞとなんとを重ねおけるは。例なきことなり。誤なるべし。一本には「はぢずきなんわたりけるとあれど。是も心得がたし。又かげろふの日記に。「あはれになんぞある。これも重なりたりいかが。後のあやまりなるべし

今の世の人の。文とてかくを見るに。此なんのおき所をも誤り。又その結びの辞もみだりにて。とゝのはぬがおほきはいかにぞや。【おきごころのたがふとは。たとへば「柿本ノ人まろなん哥のひじりなりけるといふを。「柿本ノ人まろは哥

のひじりになん有けるといへば。すべての語の意かはるを。今の人はそのおくべき所をしらで。みだりにおくめり。本のごとく「人まろなんといふは。哥のすぐれたる人の事をいはんとて。人まろをえり出ていふ辞也。然るを「ひじりになんといふ時は。人まろの事をいふとて。哥のひじりなるよしをえり出ていふになる也。是をもてすべてなんのおきどころの大事なる事を准へしるべし

又語のとぢめにおく事もあり。秋下敏行朝臣哥の左の注に「此哥はまだ殿上ゆるされざりける時にめしあげられてつかふまつるとなん」。などの如し。物語などに此格ことにおほし。これもぞといふに同じき也〔となんはとぞといはんがごとし

同集哥のはし書

「ふるとしに春たちける日よめ〔る〕」「雪の木にふりかゝれるをよめ〔る〕」「哥奉れと仰られし時よみて奉れ〔る〕」「梅花をゝりて人におくり〔ける〕」此たぐひ。上にぞ の や 何などの辞なければ。「よめり「奉れり「おくりけりといふべき格なるを。りといはずして。皆るといふはいかにといふに。すべて哥のはし書は。其哥へかゝりていふ物なる故に。常の語のとぢめとは異にして。語は切れても意は切れずして。やがて哥へつゞく也。「云々の時によめる哥といはんがごとし。然るをつねの詞のごとく。りといひ切ては。語も意も清く切れて。哥へかゝらざる也。これは集の哥のはし書のみにもあらず。すべて物語文などにても何にても。哥へかゝる所の詞のとぢめは皆同じ事也。【古人の家集などに。「よみてやりし。「人につかはしゝなどある。しも同じ格也。又屏風の繪などの哥を載たる詞書に。「さくらの花のちるを見たる。「藤の花松にかゝれる。「はつ鴈をきける。「稲かりほせるなどあるも。同じ格なり。然るにまた。「山里に郭公鳴たり。「野山に花の木ほれり。「霧山をこめたり。「女の家に男いたりてたてりなどもあるは。るをりと寫し誤れるにやとも思へど。さにはあらで。もとよりかく書る也。繪の哥をしるす詞書などは。かくも有べき事也。なべての哥のはし書には。此格はよろしからず。よく〳〵わきまふべし。】又離別部「から衣たつ日はきかじ云々の哥の左の注に。「此うた はある人云々よみてつかはし〔ける〕と有。上にぞのや何などいふ辞なくて。けるととぢめたる。これははし書にはあらざれ共。け

りといひてはかへりてよろしからざるこゝろなり。「よみてつかはしける哥也とやうに。下へ意をふくめるさまにて。必けるといはではよろしからず。これらはてにをはのおのづからの心ばへをよくさとりえてば。おのづから明らかならん。

土左日記

「をとこも〔す〕といふ日記といふ物　「門出〔す〕　「これかれしるしらぬおくり〔す〕　「うまのはなむけ〔す〕　「卯の時ばかりに船出(ふなで)〔す〕　「よねしてかへりと〔す〕

右のたぐひのすを。今の人はおほくするといふはひがこと也。

上にその　や　何の辞なくては。するとはいはぬとなり

「物にかき〔つ〕く　「人々たえずとぶらひに〔く〕　「海ぞくおひ〔く〕といふとたえずきこ〔ゆ〕　「よね酒なごく〔る〕　「みな人々の舟い〔づ〕

右のたぐひも。上のすと同じ格なり。今の人はおほくは。「かきつくを「かきつくる。「とぶらひにくを「とぶらひにくる。「おひくを「おひくる。「きこゆを「きこゆる「くるを「くる〻。「いづを「いづるとやうにいふは。みなひがことなり。よく心してかくべきわざぞ

今かく此日記を殊に引出ていふは。旅路の日記などかゝん人の心得にとてなり。又右の格は。ことに人のよく誤るとなるが故に。とり分て出せり

後世兼好法師がつれ〴〵草に。「心づかひせらる〻とこそ仰られけれ。「かばかりになりてはとびおる〻ともおりなん。「ほむるともき〻いれじ。「人に酒す〻むるとて。これら皆右の格を誤れり。「心づかひせらるとこそ。「とびおるとも。「ほむとも。「酒す〻むとて。とあるべきを。みなる〻むるなどいへるは。とと受る辞の格にたがへり。すべて此つれ〴〵草は。文よきものとて。今の世の人のもてあそぶ書なる故に。おどろかしおく也。されどすべては。てにをはの誤はいとすくなし。

伊勢物語

第二段「西の京に女あり〔けり〕」その女世人に〔は〕まされり〔けり〕」その人かたちよりはこゝろ〔なん〕まさりたり〔ける〕」

此物語の文はすべて。けりけるといふ辞を。殊におほくつかひたるに。そのりとるとの格。一つもたがへることなし。心をつけて考ふべし

第十段「むかし男むさしの國までまどひありき〔けり〕」さてその國にある女をよばひ〔けり〕」ちゝはこと人にあはせんといひけるを。はゝ〔なん〕あてなる人に心つけたり〔ける〕」父はなほびとにて。はゝ〔なん〕藤原なり〔ける〕」さて〔なん〕あてなる人にと思ひ〔ける〕」此むこがねによみておこせたり〔ける〕」すむところ〔なん〕入間の郡みよし野の里なり〔ける〕」（哥）みよしのゝ云々

此段のけりとけると。もとより皆定まれる格のまゝなる中に。「よみておこせたりけるといへるけるは。上にぞ共なん共いはざれば。けりといふべきをけるといへるは。上にもいへるごとく。哥へかゝる所の格也。その次に「すむところなん入間郡云云の語をへだてたれ共。此語は哥に「みよしのゝとよめるゆゑをしらさん料の注にて。別の事なれば。「よみておこせたりけるといふより哥へはかゝる格也。此例つねにあり。伊勢集に「ある大納言の家のひえ坂本に音羽といふところにいとおかしくつくりて有けるを見てやり水のほとりなる岩にかきつけける音羽川に瀧などおとしたりける。「音羽川せきいれておとす云々と有。これもかきつけゝるといふより哥へかゝれり。さてその次に「音羽河に瀧など云々の詞は。哥に瀧をよめる故を注したる也。さてその詞も同じく哥へかけていふ故に「たりけるといへり。今もこれらと同じ例也。心得おくべし

第八十二段「みこのたまひ〔ける〕」（詞）かた野をかりて云々

第九十六段「女いひおこせ〔たる〕」（詞）今は何の心もなし云々

此けるたるも。哥へかゝる所と同じ格にて。次の語へかけていへる也。次の語すなはちみこのゝたまへる詞。女のいひおこせたる詞なれば。哥と同じ事也。すべて其時に人のいへる詞へかゝる所のとぢめは。みな此格とこゝろうべし

第四十一段「いやしき男もた〔る〕。しはすのつごもりに云々

此るは「もたる女といふ意にて。女といふことをふくめたる格也。此格もつねにおほし。心得おくべし。一本には「もたるがとがもじあれ共。そはなか〳〵につたなし

第百一段「あるじのはらから〔なる〕。あるじゝ給ふこきゝてきたりければこらへてよませ〔ける〕もこより哥の事は云々

此「はらからなるも。右の「もたると同じ格にて。「はらからなる男といふ意也。さてまた「よませけるは。「けるをとか「けるにとか。下へ辞を添て心得る格也。「けるがと。がもじを添て見れば。俗には心得やすし。此格もつねにあると也。紫式部家集に「はやうよりわらは友だちなりし人に年ごろへてゆきあひたる。ほのかにて十月十日のほど月にきほひてかへりにければといへる。此「ゆきあひたるも同じ格にて。「たるをとか「たるにとかいふ意なり。「たるがとがを添て見れば聞えやすし。かくの如き所を。今の人は必がといふ也。然れどもがさいひてはつたなし。が共を共に共いはずして。たゞに次の語へいひうつる格なり。かならず此格にいふべき語のいきほひ。常にあると也。よく心得おくべし

第六十三段「三郎なりける子〔なん〕よき御男〔ぞ〕いでこ〔ん〕。ごあは〔する〕に云々

これは二重のてにをはの格にて。上のなんは。廣く下までかゝりて。「あはするのするにて結べる。其中間に。「ぞいでこんさいふ短き語のはさまりたるを。とと受ていひくだせる也。此格哥にも有て。二の巻に出せり。文には殊におほし。さて又ごは「あはするにて。上のなんを結びたるを。にと受て。又下へつゞけたる也。かくのごとく。切たるところをやがて又下へつゞくる事も。文にはおほくある格なり

第百廿四段「〔いか〕なりける事を思ひけるをりに〔か〕よめる

此かを。今の人はおほくやさいふ也。すべて何などの下は。皆かといふ事にて。やさいふはひが事なると。四の巻何の部に委くいへるがごとし。今の人。文には殊によく誤る事なるがゆゑに。今又おどろかしおくなり

第六十三段「ふたりの子〔は〕なさけなくいらへてやみ〔ぬ〕【上にはこいへる故にぬこ結べり。ぬるこは結ばず】

同段「こゝ人［は］いとなさけな［し］【上にはといへる故になしと結べり。なきとはむすばず】

第八十七段「はしりかゝる水［は］せうかうじくりの大きさにてこぼれお［つ］【「おつるとは結ばず】

第六十三段「まとならぬ夢がたりを［す］【上にぞのや何の辞なき故にするとは結ばず】

同段「女なげきて［ぬ］とて【上にぞのや何の辞なき故にぬるとてとはいはず。今の人はかゝる所をかならずぬるとていふ。そはひがことなり】

第九十六段「これをやれとてい［ぬ］【いぬるといはんはひがこと也】

第六十五段「それに［ぞ］あゝ［なる］とはきけど【この上はなりといふ格なれ共。これは上にぞといへる故になるといへり。此事五の巻との部に委し】

第四十段「なほ思ひて［こそ］いひ［しか］第四十五段「かく［こそ］思ひ［しか］といひけるを

件の格どもは。人のつねに誤るとなる故に。かつ〴〵出せり。すべて文のてにをはも。哥の格ともはら同じきと。これらの語にてもさとるべし。

源氏物語

桐つぼ「［いづれ］の御時に［か］女御更衣あまた云々

同巻「［いか］さまに［か］とおぼしめしまどはる

同巻「［いかに］すべきわざに［か］とも云々

此たぐひすべて。何等の下のかをやといふは。ひがことなると。上にも所々いへれど。こは殊に今の人のみな誤りて。やとのみいひて。かといふべき格なる事をしらざる故に。かへすぐ〳〵うるさきまで出せり

同巻「父の大納言はなくなりて母北のかた［なん］古への人のよしあるにておやうちぐしさしあたりて世のおほえ花やかなる御かた〴〵にもおとらず何事のぎしきをもてなし給ひ［けれど］云々

此なんは。「給ひけれどゝいふまでへかゝれり。なんの結びなれば。けるといふべきを。轉じてけれどといひて。やがて下へつゞけたる物也。さて又こゝの文のごく。語の長くつゞくところは。後世人の文には。やゝもすれば。上のかゝりのてにをはのとゝのへをわすれて。其結びはいづれの所ともさだかならず。まぎれゆくこおほきは。文にもかならずてにをはのとゝのへのあることをしらざるゆゑの誤りなり。これ又よく心得おくべき事也

同　卷「參り給はんことをのみ〔なん〕おぼしいそぐ〔めれば〕云々

これもなんの結びはめるなるを。轉じてめれば云々と。やがて下へつゞけたること。右と同じ。此格哥にはいとすくなく。

文にはつねにおほきとなり

○此源氏物語などは。すべて人のいへる詞の。いとこまやかなるこころ。又思へる心のうちのくま〴〵などまで。いといとくはしくかきあらはせる物なれば。くさ〴〵にはたらきたるてにをは。又ぞ　なん　こそなどゝかゝりて。あまたの言をへだてゝ。下のいと遠き所にて結べるなど。或はその中間に。二重にも三重にもかさなれるてにをはなどもあれば。そのこころ〴〵のなべての語の意を。よくもわきまへずして。なほざりに見れば。まぎらはしきこころおほし。さるたぐひも。みなこまかに心をつけて。よくわきまへ見るときは。とゝのへのすぢ〴〵いとよくわかれて。すべててにをはのみだりなるとは。をさ〳〵なき也。

○いづれの書にも。りとるとは。上よりつゞけて書る所は。字の形のよく似たる故に。見まがへてたがひに寫しあやまれるがおほきを。その心して見ずば。うたがひ有なんものぞ。

上件古今集土左日記いせ物語源氏物がたりと。あるが中に。この四くさのふみをしも引出たるとは。なべての詞もめでたく。又殊に人のめぢかくよみなれつる物なればぞかし。さて又此書共を。こと〳〵に分ては擧つれども。そのふみ〳〵のてにをはとて。おの〳〵ことなる物にはあらず。いづれのふみなるも。とゝのへはひとしくて。かはれることなければ。これかれかよはして。みなひとつに意得べし。猶文章のてにをはの事も。今す

こしこまかにいはまほしきふしはおほかれど。いひもてゆけば。みな哥のこゝのへこもはら同じとなれば。うるさくておほくはもらしつるを。物のついでもあらば。また〳〵もいひてんかし。

あやしかも。くしびなるかも。言たまのさちはもよ。畏きや天照大御神の。きこしめしめで賜ひて。さしこもらしし天の石屋戸を出賜ひて。常夜ゆきけむ此世の。またとこしへに照明れりけるも。いかし矛中とりもたす中臣の。天津告刀のふとのり詞の。美麗しかりしによりけらずや。こゝを思へば。言の葉のこゝのへよ。そらかぞふおほにし思ひはなつべきならぬを。ちはやぶる何れの神の御心なりけむ。中つ代の末つ方。天の下みだれにみだれて。よろづのわざも。秋草のおころへゆくまに〳〵。此こゝのへはた緒だえし玉のみだれそめては。其緒又つぎ。貫あらたむる人もなくて。あまたのよゝを經にけるに。時のゆければ今はよ又。天の下に鞆の音も聞えず。弓はずのさわぎもなくなりはてゝ。萬代までに。動くべからぬうらやすくにこしづまりて。咲花のにほふがごとく。榮ゆくこの大御世になも。春霞立かへりにたれば。萬のわざも。又いにしへに立かへるべき時かたまけぬるかも。吾鈴の屋の本居、大人い。あらたまの年まね

くいそしみまして。眞男鹿の和毛の眞筆を。處女のたゝりとかたく取して。かきかぞふ三條のこの玉のをゝ。くるゝ〳〵によりとゝのへて。此七まきになも巻こゝのへ賜ひける。かく此度よりこゝのへ。まきこゝのへ賜ひつれば。今より後は。いかしの御世の靜まりこゝもに。よの人のことばの玉のいほつゝごひも。ゆきあひのまよひなく。をだえのみだれもさねなからむこ。綾にむかしき此書なるかも。かく云は。このうしに物ならへる。美濃ノ國人田中道万侶

玉霰序

世のうつりきぬるまゝに。人のよろづの言の葉も。やう〳〵に飛鳥の川のかはりきぬるごとは。久米のさら山さらにもいはず。詞は古へに同じき物から。つかふ心のあらずなれる。あるは詞も心も同じくて。つかひざまのかはれるなど。歌詞文詞。此集彼集。此物語かのものがたりごと。呉竹のよゝにしたがひて。一ッ松一ッ詞も一トやうならず。さるまゝに。ちかのしほがま近き世になりては。いよいよしづたまきいやしき言の葉。ここやうなるつゞけざまなどうちまじりて。よみ出る歌にも。かき出る文にも。昔シ聞えぬことゞもなむ多かりける。そも〳〵言の葉の道は。うるはしくみやびやかなる古へをこそ。ならひまねぶべきわざなれ。今の世のやうに。心詞のさこびあやしきをもえらばずて。歌文のみやびを好むは。たとへば花鳥のなさけをしらで。くれゆく春をゝしむがごとし。吾師の君。としごろ此事を深く歎きて。さきには詞の玉の緒をよりごゝのへて。てにをはのみだれを明らめ。こたみ又。かの大石にはひまごへる礒のしたゞみ。た

みたるを正し。山崎にうるてふまがりの。まがれるを直さむとて。音たて給ふ。槇の板やの此玉あられよ。いなのめのいざとき人は。空とぶ鳥のとくおどろきてむを。猶いぎたなくて。耳も心も。秋の田のおくての稲の。おそからむ人は。あふみの海のいかゞさき。いかゞはせむは。高蔭らがためには。かの詞の玉緒と。此玉あられと二つの書は。手習ふわらはの難波津淺香山と。父母のやうにその海山の高くあふぎ。深くたのむとゝろから。うひまなびのたどく\しさをも思ひはからで。筆のゆくまゝに。つたなき言ばを書くはへつ。

三井高蔭

玉あられ

まなびのまどに音たてゝ

おどろかさばやさめぬ枕を

有がたき御代のめぐみは、くらき夜の明ゆくやうにて、萬のまなびの道々も、やう〳〵にあかりきぬるころほひなるに、なほ心ぐるしきは、暁しらぬよの哥人のいぎたなさ也けり、そはいかなる故ぞや、哥をも文をも、古へのをばよくも見ずて、たゞちかき世の人の物せるにのみ、かゝづらひならへばぞかし、そも〳〵近きよの人のものせることは、古へにあへりやたがへりや、よくかむがへ、よきあしきをよくわきまへてこそ、ならひとるべきわざなるに、さる心もなく、みだりにひたぶるにならひて、物するから、よからぬ詞、えもいはぬひがことゞもの、世にあまねくひろこりて、さだまれることのごとなれるは、いとかたはらいたきわざになむありける、そも今こそ猶物見しれる人まれなめれば、よきもあしきも、さてまぎれつべけれ、今より後、いよ〳〵道明りゆかむほどの世の人の、いとよく見しりなむは、いとはづかしきわざならずや、のりながら、近きよの此わろきくせを、世ノ人どものさもえさとらで、たゞよしとのみ思ひをるが、かたはらいたさに、それおどろかさまほしくて、常にみゝなれたることゞも、おもひ出るまゝに、これかれと書出て、いさゝかづゝさだめいへり、もらせることはなほいと多かるを、そばみなすらへてもさとりねかしとぞ、ちかき世のくせとは、廿一代集過て後のをいへり、さるは中ごろより新續古今集までの哥は、玉葉風雅の二つの集をのぞきては、大かたはおなじさまにて、ことなるわろきくせも見えざなるを、其後になりてなむ、いたくいにしへとはかはりて、聞なれぬことゞもの、おほく出まうできつれば也、されどひさかたの雲のうへ、くらゐ高き人々のは、何事もあなかしこ、殊なるゆゑあることなるべければ、いやしきわれらが、うかゞひしるべききはにあらず、今これにさだめいふは、たゞおのがひとしなみなる、下ざまのことぞよ、

本居宣長

歌の部目録

文の部目録

哥の部

「月清み」「山高み」「冬寒み」「風をいたみ」「露をおもみ」「瀨を早み」などのたぐひのみは、本の意を委くいはゞ、初學の輩中々にまどひぬべし、たゞ近くいはゞ、「月が淸さに」「山が高さに」「冬が寒さに」「風がいたさに」「露が重さに」「瀨が早さに」といふ意也、をもじは、あるもなきも意は同じ、近き世の人、此みもじのつかひざまをわきまへず、或は「月淸く」「月淸き」などいふべき所をも、みだりにみといふこと多し、心すべし、

やすめ詞のしもじ、おきざまあしきは、いと聞ぐるしき物也、ちかき世の哥に、「道しある世」などおほくよむ、これら「道しあれば」といふごときは、しもじ優なるを、下を「ある」といふこころにおきては、こちなく聞ゆるなり、餘もこれになずらへてわきまふべし、すべてかやうの事、古への哥をよく考へてつかふべき也、

近き世の人「春にのどけき」「秋に見し」などおほくよむ、此たぐひの「春に」「秋に」などいふにもじ、いといやし、又戀の哥に、「人にうれしき」「人にわりなき」「人にうき」などいふには、殊にいやしげなり、

「花や紅葉」、又「梅や柳」などいふやもじ、いやしき詞なり、これはもと「蝶や花や」などいひて、そは「蝶よ花よ」といふと同じこと也、さる故にやもじ下にもあり、然るに「花や紅葉」などいふは、其意にはあらで、花又は紅葉といふ意なれば、やもじかなはざる也、

何の類の下にやもじをおく事

なに　いかに　いづれ　いく　たれ　たがなどの下に、かもじをおくこと常なり、そはなにか　いづれか　たれか　など、やが

てつゞけてもおき、又中に詞をへだてゝもおく也、そのつゞけておくかもじは、今の世にもをさ〳〵誤ることはなきを、中に詞をへだてゝおくかもじをば、誤りてやもじをおくこと多し、たとへば「いかなることにかあらん、「たれにかあらん、などいふべきを、「いかなることにやあらん、「たれにやあらんなどいひ、また「いく年月をかへぬる、「たが里よりかきぬらん、などいふべきを、「いく年月をやへぬる、「たが里よりやきぬらんなどいふ、かやうの類のやは皆ひがこと也、古への哥文を見てわきまふべし、大かた今の世には、哥をも文をもよくよみかくと思ひほこる人も、此誤りをまぬかるゝはすくなし、但し「何事ぞ「たれぞ「いかにぞなど、ぞもじをおく時は、其下にはかといふことなし、その下には、「いかにぞ やなど、やもじをおくことあり、これは疑ひのやにはあらず、よに通ひて、「いかにぞ よなといふに同じければ、別事也、又「いづらや「いかにや「などや などいふやも、疑ひにあらず、ぞやのやの如し、これらと思ひまがへてあやまることなかれ、

とゝ受る上の格

すべてとゝいふ詞の上の受(ウケ)、定まれる格あることなるを、今の人のつゞけざまはいとみだり也、定まれる格とはたとへば、「花さき ぬ とゝいひて、「咲ぬる とゝはいはず、「郭公聞つ とゝいひて、「聞つる とゝはいはず、「夜あく とゝいひて、「あくる とゝはいはず、又「あり ともといひて、「ある ともとはいはず「無し とゝいひて「無き とゝはいはず、此たぐひの格、ひも鏡の右ノ行ッと中ノ行ッとにて、こと〴〵く分るゝ事にて、との上の受ヶは、皆右ノ行ッの格也、これらも古へ人はおのづからよくわきまへて、をさ〳〵誤ることはなかりしを、ちかき世の人は、此けぢめをしらず、みだりにつゞくる也、哥のみにもあらず、文にも道の記などに、「某山(ソノ)をこゆる とてなど、誰もかく、これも「こゆ とてといふ格にこそあれ、すべて上の詞をうけてつゞくる所の格は、いづれの詞もみな定まり有て、とのみにはかぎらざれども、との上は殊に誤ること多き故に、此一つを出せり、いづれの詞も、古人の例をよく見てつゞくべき也、さてともじも、「これとかれと、二つのとをいふ與(ト)の意のとは、受る格、てにをはのとゝはかはれり、詞の玉の緒にいへるがごとし、

るもじたらぬ語

たとへば「ながるゝ水、「かくるゝ月、「聞ゆるこゑ、「すぐる月日、などいふを、初學の輩「ながる水、「かくる月、「聞ゆ聲、「すぐ月日、などやうによむもあり、さてはるもじたらで、語とゝのはず、【万葉には、「ながる水といふ類あれ共、そは古言の格にて、後の例にはいひがたし】さて又此類の中に、るのあるとなきとにて、自他の意のかはる詞もおほし、たとへば「とく紐といへば、紐を人のとくこと「とくる紐といへば、紐のおのづからとくる事也、又「たつ烟といへば、煙のおのづからたつを、「たつる煙といへば、烟を人のたつること也、初學の哥文には、これらのまがひ、つねによくあること也、

てもじたらぬ語

必てといふべき所に、てもじをおかざれば、語うきて聞ぐるしき事あり、たとへば「花咲て人ぞ見にくるといふを、「さくらさき人ぞ見にくるといひては、いかゞなるがごとし、此たぐひ多し心すべし、又文には、かならずてもじをいくつも重ねていふへきとも多きを、その重なるをいとひて、畧くと、まだしき人の文におほし、そは中々にひがとなり、古き物語などを見べし、必おくべき所には、いくつ重なりてもいとはず、重ねておけるをや、

なもじたらぬ語

「たちなかくしそ、「物な思ひそなどいふ類を、もじの五七の調にあまる時は、「たちかくしそ、「物思ひそなどやうに、なもしをはぶくと、ちかき世にをり〳〵見ゆるは、いみしきひがと也、下なるそを畧けるは万葉などには、多くあれども、それも古今集よりこなたには見えず、ましてなをはぶける例は、すべてなきと也、こはなもじをのぞきては、聞えぬ詞なるものをや、

もぞ　もこそ

たゞぞといひこそといふと、もぞもこそといふとは、意の異なることにて、言葉の玉ノ緒にいへるがごとし、然るを近世人は、たゞ同じ事と心得たるにや、ぞこそといふべきところを、さてはもじのたらぬ時は、もを添て、もぞもこそとよむ

は、いとみだり也、

き」しき」

終りを「なき」「うき」「のどけき」「露けき」「寒けき」「はかなき」又「うれしき」「かなしき」「さびしき」「戀しき」「くやしきなど結ぶ、此き」しき」は、上にぞ」の」や」何」の類などのかゝりのてにをはなくては、とゝのはぬことなるを、近き世には、此格にかゝはらず、上にぞ」の」や」何」のてにをはなくして、き」共しきとも結べる哥おほきは、いと／＼いやしげにねぢけてぞ聞ゆる、古へに心あらむ人は、きはめてよむまじきことなり、殊にきの方は、し」と結べばこともなきを、ことさらにきと結ぶばいかにぞや、たゞ同じことゝや心得たるらむ、例のいとみだり也、

詞に三つのいひざまある事

たとへば花に「さく」「さける」「さきし」、「ちる」「ちれる」「ちりし」、雪に「ふる」「ふれる」「ふりし」、鳥などに「なく」「なける」「なきし」などいふたぐひ、或は「あふ」「あへる」「あひし」、「思ふ」「思へる」「思ひし」、「たつ」「たてる」「たちし」などいふたぐひ、大かたいづれの言も、此三つのいひざまによりて、いさゝかその意も差別ありて、花に「さく」といふは、今咲くこと、「さける」といふは、「さきたる」といふと同じことにて、咲てあること、「咲し」といふは、前に咲しことを、後にいふ詞也、大かたかくのごとし、いづれの詞も是になずらへて、心得わくべし、其内「さける」といふべきを、「さく」といふことはあり、「さく花に」云々などのごとし、これらは「さける花に」といふ意也、然れども「さく」といふべきを、「さける」「さきし」などいひてはたがへり、然るを近世人は、此差別をわきまへず、哥にも文にも「さく」とやうにいふべき所を、「さける」といひ、「さける」とやうにいふべきこころを、「さきし」といふたぐひのたがひ、いづれの詞にもおほし、たとへば他時に、花のさく春のことをいはむには、「花さく春」といふべきを、「花さける春」といはむはひがこと也、「咲る春」とは、その花の咲たる時にいふ詞也、又今咲てある花のことを、「咲し櫻」などいふもわろし、そは「さける」とこそいふべけれ、「咲し」とては、前にさきしことを、後にいふになる也、又文に、たとへば、古人のかける書、いへる説などの事をいふに、今その書その説をとらへて、其事につきていはむには、

「云々かける」「云々いへる」といふべし、又そのかきたりし昔いひたりしむかしの事をいふには、「云々かきし」「云々いひし」といふべし、たとへば古今集序をとらへて、其事をいはんには、此序は延喜の御代に貫之のかける也といふべし、又そのむかしの事をいはむには、　延喜の御世に貫之の此序かきし時、或はかきたりし時などいふべし、然るを近世人は、すべてこれらのけぢめなく、「古今集の序は貫之のかきし文なり、などやうにいふはたがへり、又當時の人のうへをいふに、「何がしは哥をよくよめる人にて、などいふたぐひもひがこと也、當時の事ならば必「よむ人といふべし、「よめる人といひては、「よみたる人といふと同じくて、或は昔の人の事か、又當時の人にても、今までによみたる事になりて、今もよむことにはならず、今の人のかく文には、此誤り殊に多し、すべて何れの詞も右の三つのけぢめをよくわきまへて、つかふべきなり、

つる　ぬる　たる　ける

詞によりて下を、つるといふべきと、ぬるといふべきとの差別あり、たとへば「ありといふ詞の下は、必「有つるとのみいひて、「有ぬるといふことはなし、「見る」「聞クも、「見つる」「きゝつるといひて、「見ぬる」「聞ぬるとはいはず、又「ちり」「ふりなどは、「ちりぬる」「ふりぬるといひて、「ちりつる」「ふりつるとはをさ〳〵いはず、又つるにてもぬるにてもよき詞もあり、又つる　ぬるといふを、事によりては、たるといひてよき所あり、けるといひてよき所もあり、然るに近き世の人は、これらのわきをしらず、みだりなる中に、つるといふべきを、ぬるといふことの殊におほき也、大かた初學の輩などは、つるといふことをば、しらざるが如くにて皆ぬるといへり、又たる或はけるといひてよき所をも、今の人多くは其味をしらず、皆ぬるといふ、これら古への哥に心をつけて、つねによく見おきて、その例をしるべき也、

そひ　そふ　そへ　そふる

たとへば露に、「おきそひ」「おきそふなどいふは、露のおのづからおきそひたると也、【俗言にいへば、露が自身とひとりでにそひたるなり、】「おきそへ」「おきそふるなどいふは、他の物の露をおきそはすると也、【外の物が露をおきそへるなり、】　然るに近世人は、多く此差別なく、　そひといふべきを、「そへ共いひ、「そふといふべきを、もじのたらねば、「そ

ふるといふたぐひおほし、いとみだり也、「そふといふべき時、もじのたらねば、古人は「そはるとこそいへれ、

まがひ　まがふ　まがへ　まがふる

たとへば菊の花に「霜のおきまがひ「おきまがふなどいふは、霜の置たるが、おのづから菊の色にまがふ也、「まがへ「まがふるなどいふは、霜のまがはする也、これおのづから然ると、ことさらに然らしむるやうにいふとの差別あり、然るに近世人は、これも一つに心得て、誤るとおほし

かはり　かはる　かへ　かふる

たとへば秋の來て「風の吹かはり、「吹かはるなどいふは、おのづからにかはる也、「吹かへ「吹かふるといふは、風を吹かはらする也、然るにこれも近き世の人は、一つに心得て、「ふきかはりてといふべきを、もじのあまれば、「ふきかへてといふたぐひ、みだり也、又風に「ふきいるといふべきを、もじのたらぬときは、「吹いるゝといふ、是も同じく自他のたがひあり、猶此たぐひいと多し、なずらへてさとるべし、上のそひ　そへよりこれまで、みな自他のけぢめにて、いづれの詞もみな此けぢめはあるを、其中につねによく人の誤るを、二つ三つことにはあげたる也、

見ゆる　見えて　見する　見せて

「見ゆる「見えては、おのづからに然るさまにいふ詞也、「見する「見せては、然らしむる也、たとへば風に雲の晴て、月のさやかなるとをいはむに、「さやかに見えてといふは、たゞ月のさやかに見えたるこころのまゝをいふにて、風の雲を吹はらへる事にはかゝはらず、おのづから然るこころをいふ詞なり、それを「さやかに見せてといふときは、雲を吹はらひて、風の月をさやかに見せたる意になる也、【月を風がさやかに見せるなり、】此たぐひ何方にいひてもよきときは、「見ゆる「見えての方、大やうにしておだやか也、「見する「見せての方は、花やかにはあれど、さかしだちて、少しいやしき方に近し、然るを近世人は、「見する「見せての方を多く好めり、哥のおもむきにしたがひてはからふべき也、

だに　さへ　すら

かならずさへといふべき所をも、近世人は多くだにといふ、こはだにをもさへをもすらをも、今の俗言には、皆おしこめて一つにさへといふ故に、さへをば俗と思ひ、たゞだにをのみ雅言のやうに心得て、共に雅言にして、其意差別あるヿをしらざる也、まづだにはたとへば、俗言にこれはならずとも、せめてこれなりともといふやうの意、さへは、この事のあるうへに、又此事もそひくはゝるやうの意、すらは、やはり猶といふ意にちかし、然るに古今集よりこなたは、すらの意をも、ともにだにといへり、さればすらの意をだにといふはともなし、さへの意をだにといふは誤也、抑此三つの詞のつかひざまは、猶心得あることなれども、委くいはんにはいと事長し、まづ大かた右のごとくこゝろえて、たがふヿなし、

まし

ましは、ん又べき べしといふと大かた同じ意にて、「せましは、「せん又「すべき「すべしの意、「いはましは、「いはん又「いふべき「いふべしの意、「ならまし物をは、「ならん物を、又「なるべき物をの意也、古今集の哥に「鶯の谷より出るこゑなくば春くることをたれかしらましとあるは、春くるヿをたれかはしらん、又たれかはしるべきの意也、【俗言にいはゞ、たれがしらうぞなり、】然るに今の世初學のともがら、多くしを濁りてまじとよみ、不の意と心得て、「せじといふヿを「せまじ、「いはじを「いはまじなどよむは、いみしきひがヿ也、此詞もし其意ならば、右の古今集の哥の結句など、「たれもしるまじといはでは聞えず、然いひてはいとあやしき詞也、よく〳〵わきまふべし、

。

つゝ

ちかき世の人、てといふべき所を、さてはもじのたらぬ時は、みだりにつゝといひ、又文に、てもじの重なるをいとひて、つゝといふたぐひ多し、皆ひがヿ也、てとつゝとのけぢめ、ては意廣ければつゝといふべきを、てといひたるは、たがふ所すくなきを、てといふべきを、つゝといひては、たがふヿおほし、つゝは、此事をしながら、かの事をもし、又此事のあるに、かの事も相まじはるやうの所に用る詞也、なほ言葉の玉緒にいへるが如し、又文に、ての重なるをいとひて、或ははぶき、或はつゝにかへなどしたるは、中々につたなし、此事既に上にもいへり、

なほ

なほは、俗言に、まだ或はそれでも或はやつはり、などいふにあたれり、然るを「いよ〳〵といふ意につかふは、後のこと也、そはたとへば「なほいろまさるなどいふは、もとよりよき色の、まだ其うへにもまさるこゝろなるが、いよ〳〵まさることいふに近く聞ゆる、かやうの所よりまぎれそめたる物なるべし、かくていよ〳〵の意に用るも、むげに近き世の事にもあらず、やゝふるくも見えたれ共、そは聞よからず、近世に「いとゞなほと多くよむなどは、殊に聞ぐるし、

いく

いくは、其数の知れざるを、疑ひて問フ意の詞なれば、上下の趣てにをはのはこびなども、其意を以てよむべきことなるに、近世人は、たゞ多きことゝ心得て、「いく千世などいふを、千世の数の多き事に定めてよむは、ひがこと也、「いく千世といふは、千世の数の知れざるを、いくらばかりの千世ぞ、と問フ意なるをや、但し「いく千世もなどいへば、もにて数の多き意になるを、もといはでは、其意にはなりがたし、こは今の世にもいふ平語にてもよく分れたることぞかし、たとへば日の数をいはむに「いくかもといへば、日を重ねて多きことになるを、もといはず、たゞ「いくかとのみにては、其数の知れぬを、疑ひてとふ詞にあらずや、これを以てすべていくといふ言のつかひざまをこゝろえわくべし、

物から

此詞は、古今集夏「郭公ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから、此下句を、俗言にいへば、「思ひはすれども、それでもうとまれる、又「思ひながらも、やつはりうと〳〵しく思はれる、などいふ意也、又秋上「まつ人にあらぬ物から初鴈のけさ鳴聲のめづらしきかな、此初二句は、「まつ人ではなけれどもといふ意也、又物名「あぢきなしなげきなつめそうきことにあひくる身をばすてぬ物から、此結ノ句は、「捨テもせずにゐながらといふ意也、大かたこれらの哥にて、其意明らかなり、然るを今ノ世の人は、いかに心得たるにか、「思ふからといふべき所を、「思ふものからといひ「あらぬ故にといふべき所を、「あらぬ物からといふたぐひいとおほきは、たゞからといふと、同じ意とおもひ誤れるなめり、たゞから

と物からとは、おほかたうらうへのたがひあるをや、そも〳〵此詞は、哥にも物語の詞などにも、常におほく見えて、其意まぎるべくもあらぬ詞なるに、今ノ世には、哥をも文をもよくよみかくと思ひおごれる人も、多く此ひがことあるは、いといとかたはらいたきわざなりかし、

やらぬ

たとへば雪の消やらぬといふは、春になりて猶寒きに、雪もはやくきえよかしと思へ共、つれなくきえぬ意、「花の咲やらぬといふは、早くさけかしとまてども、さくことのおそき意、「道を行やらぬといふは、はやくゆかむといそげども、思ふがごとえゆかぬやうの意にて、やらぬは皆かくのごとし、然るを近世の人は、これらの類をもたゞ雪のきえぬと、花のさかぬと、道をゆかぬとのみ心得たるにや、或は花のまだちらであるを、「ちりやらぬといひ、月のまだいらぬを、「入やらでなどよむ類多きは、ひがこと也、さては花を早くちれかしと願ひ、月をとく入れかしと願ふ意になるをや、

はてゝ

花に「ちりはてゝといふは、こと〴〵く散て、いさゝかも残りなき意、戀の哥などに「絶はてゝといふは、全く絶ていさゝかもかゝりなき意也、すべてはてゝは、右の如き意をいふべき時に添る詞なるを、近世人はたゞ「散て「絶てとのみいひてよきところをも、詞のたらねば、「ちりはてゝ「たえはてゝとよむは、はてゝといふこといたづらなり、

とても

「ありとても「なしとてもなどやうのとてもは、たゞてにをはの重なりたるなれば、こともなきを、後世には、此てにをはにはあらで、別に一つの詞にして、「とても云々(シカク)といふこと有、【俗言に「とてものことに「とてもかなはぬなどいふ「とてもなり】いといやしげ也、哥などによむべきことばにあらず、

やがて

やがては、俗言に「そのまゝですぐにといふ意にて、たとへば春の日のいたく霞めるが、そのまゝですぐに春雨になる

を、「霞める空のやがて春雨になるといふたぐひ也、然るを近世人は、程なく追付といふ意によむは、俗意なり、かの「やがて春雨になるも、追付春雨になる意にはあらず、思ひまがふべからず、古への哥文に、其意にいへるはなし、

經　舊

ちかき世に、經と舊とまぎれて、誤れる哥おほし、たとへば「年ふりてといふは、年久しくして、舊くなりたることにて、「年經てといふとは異なる詞なるを、ふりを經と一つと心得たるにや、へてといふべきを、もじのたらねば、通はしてふりてとよむ、これひがこと也、すべてふるくなりたる事ならでは、ふりてとはいひがたし、舊はふり　ふるとはたらき、經はへ　ふ　ふるとはたらきて、ふりとははたらかぬ詞也、されば五月雨などの哥に、日數の經ること、雨の降ることをかねていはむにも、「日をふるといふはよし、「日をふりてといひては、日數を經ることにはなりがたしと知べし、

あだ

あだなることは、花のちりやすき、露の消やすき、或は人の心のうつりやすき、などをいふ詞なるを、近世人は、「月日をあだに過すなど、いたづらにといふ意につかふはひがこと也、

したふ

近世人の哥には、したふといふまじき所を、したふとよむこと多し、そは「戀る「思ふ「しのぶなどいひてよろしきところをも、多くしたふといふなり、此詞は、古哥によめるやうをよく考へてつかふべし、

むかふ

むかふとは、まさしく其物にさし對ふ事の用なくては、いふまじきことなるに、近き世には、花にまれ月にまれ何にまれ、ただ見るといひてよき事を、みだりにむかふとよむこと、殊に多きは、聞ぐるし、

いとふ

いとふは、物にまれ事にまれ、有ルをにくみきらふことなるに、近世には、或は花のちるをいとふ、人のとはぬをいとふ、

などいふ類、すべてうしと思ふことをば、皆いとふとよむは、たがふ事おほし、

ものうき　【これは「ものうしとあぐべき詞の格なれ共、初學の輩まで、耳ぢかくたしかにさとさむために、今の世の格に、きとはあげたる也、すべて此たぐひ皆然り、抑此書は、かゝる詞づかひの誤をたゞすとして、かゝるはなぞと、物よく見しらむ人の、とがむべきによりて、かくはいふ也、】

ものうきは、俗にいふ、ぶせうにて、何事にもせよ、することのいやなる意、しともなきといふ意也、然るを近世人、たゞうきといふ一つに心得たるにや、うきといふべき所に、此詞をつかふはたがへり、うきとは同じからず、古今集に「梅枝に物うきほどにちる雪をとあるも、雪のひた〳〵とはふらで、たゞいさゝかづゝちるをいへるにて、俗に「いやさうにふりともなさうに、ふせう〴〵にふることいふ意、又「ものうかる音に鶯のなくとよめるも、「いやさうに、なきともなさうな聲になくといふこと也、これらにて心得べし、

心ぐるしき

こゝろぐるしきは、物語に多き詞にて、俗に「氣の毒なといふ意、又「物の氣遣はしく案じらるゝといふ意也、然るを近世人、たゞくるしきことにつかふはたがへり、

思ひぐまなき

これは俗に、「思ひやりのないといふ意也、此詞も物語に多し、哥には、後撰集戀三、「いづ方に立かくれつゝ見よとてか思ひぐまなく人のなりゆく、【上句は、くまといふ詞の緣につきてよめるなり、】此下句にて心得べし、おもひやりもなくつれなくなりゆく也、然るを近世に、思ふ事なく、心のすめる意によむは、おぼつかなし、千載集俊頼朝臣、「おもひぐまなくても年のへぬるかな物いひかはせ秋の夜の月、これは己が心をいひて、思ひへだつる心のくまもなきよしか、然らば近き世によむ意にちかし、されど又、年ごとになれて見れども、猶月のうと〳〵しきを恨みて、思ひやりのなきことよ、といへるやうにもきこゆるをや、

くらべぐるしき

これは、人の心の底のしりがたくて、交はりにくき意にて、俗に「つきあひにくい、などいふほどのとなり、然るを近世人は、物のすぐれたるよしをいふとて、たとへば「春の櫻もくらべぐるしきなどやうに、くらべがたき意に用るは、いたくたがへり、上の物うきよりこれまで、いづれも物語などに多き詞なるを、いづれもその古人のつかひたるやうを、よくも考へずして、たゞその詞のさまにつきて、おしあてに、物うきは物のうきと、心ぐるしきは心のくるしきとよとやうに、おほよそに心得て、みだりに用るから、いたくたがへることの多きぞかし、さればいづれの詞も、近き世の人のよめるにはすがらず、古への哥文につかひたる意を、よく考へてつかふべきわざ也、

たのめ　たのむる

たのめ　たのむるとは、人の我を頼ましむるをいひて、頼み　頼むといふとは、こなたかなたのかはりあり、たとへば人の今夜參らんといひおきて來ぬを、「たのめてこぬと、いふにて心得べし、頼ませておきて來ぬ也、又人だのめといふも、人を頼ませておきて、さもあらぬこと也、【此人は、あなたよりいふ人にて、こなたのことなり、】「逢坂は人だのめなる名にこそ有けれといふは、逢といふ名なれば、定めて逢ふべきぞと、頼みにさせて、さて逢事はなきをいへり、これらにてもさとるべし、然るを今の人、こなたより頼むことを、たのめて　たのむるなどよむはたがへり、

すなほなる

すなほなるとは、つくろふことなく、たゞありなるをいふ、然るに近世人の「すなほなる御代などよむは、曲れる事なく、正しく直き意と思ふにや、たがへり、

すぐなる

曲らず直きことを、すぐなるといふは、俗言にこそあれ、哥にも文にも、古くはさらに見えぬことなるを、近世に「すぐなる御代など、おほくよむはいかにぞや、

そのかみ

そのかみとは、過し世の事をいふ語の中に、上をうけて、「其時とさしていふ詞にて、たとへば「しか〳〵の事有しに、そのかみ云々と、其しか〳〵の事の有し時をいふ也、然るを上にさすところなくて、たゞひろく昔といふことに用るは、たがへり、

天が下

むかしは「天の下とのみこそいへれ「天が下といふは、後の世の事也、これらは、ひがことゝいふばかりのことにもあらねど、古へにしたがふぞ言の葉の道なるを、今の人心つかず、「天が下とのみいふ故に、おどろかしおくになん、

四つの海

「よつの海といへることは、やゝふるくも見えたれど、ひがこと也、古への哥文には、多くは「よもの海とこそいへれ、四海（シカイ）といふもじも、四方の海といふ意也、四つの海といふことにはあらず、「四つの海とては、海の四つあることになるぞかし、

おひ風

おひ風は、うしろの方より吹來る風也、船にて、さしてゆく方へふく順風をいふにて知るべし、然るを梅の哥などに、たゞ梅ノ花の方より吹來る風を、「梅のおひ風とよむなどは、いかゞ、

そとも

そともは、日本紀の成務天皇の御卷に、背面（ソトモ）とあるごとく、うしろのことなるを、後世には、外面と心得てよむは、ひがこと也、こは意のたがへるのみならず、そとゝいふ詞もいやし、すべて外をば、ととこそいへ、そとゝいふことなし、外をそとゝいふは、むげに俗言也、

野もせ　庭もせ

野もせは、野も狹きまで、物のみちたること、庭もせは、庭も狹きまで、みちたることなるを、たゞ「野に「庭にといふことを、

野もせに庭もせにとよむはひがと也、そはもを面の意と心得たるにや、さてはせもじをば何のこゝろとかせむ、

庭のおも

たゞ庭にてよろしきこゝろを、庭の面とよみては、面といふと用なく、又哥によりては、さまたげともなれり、心すべし、

みぎり

其縁もなく、用もなきに、砌とよむと近世に多し、いかゞ、

こぼそ

こぼそは、樞ノ字を書て、ひらき戸のほそ也、然るを、「柴の戸ぼそなど、たゞ戸のとによむはいかゞ、こはやゝふるき哥にも見えたれど、心得おくべし、

こす

簾をこすといふは、誤なるを、近世の哥に、殊に多くよむ、いとうるさし、そはもと古き書に、小簾と有て、をすなるを、後に誤りてこすとよみならへるにつきて、つひに又別に字をあてゝ、鈎簾と書などもし、鈎簾といふ名は、なきとなるをや、

ほたる火

螢を、初學の輩の哥に、ほたる火とよむとおほし、こは漢文に螢火とある字を、そのまゝに心得たるひがとなり、螢火といふは、卽ちほたるにこそあれ、神代紀に、螢火光神とあるを、「ほたるびのかゞやく神とよめるも誤也、そは「ほたるなすかがやく神とこそよむべけれ、

春をむかふる

春をむかふるとは、漢文にて、皇國の意にあらず、すべてむかふるとは、他所より來る人などを、或は玄關、或は門、或は里の入口などまで立出て、迎るをこそいへ、たゞ居て待受るをば、むかふるとはいはず、然れば春の來るをも、門口又は里の入口などまで行て、迎るものならばこそ、むかふるとはいはめ、春はたゞ來るのみにこそあれ、さやうに迎る

物にはあらざれば也、題に貴賤迎春などあるは、漢文也、すべて題は、漢文の格なるも多ければ、其文字のまゝにはよまぬとおほし、然るにこの「春をむかふるといふとは、後世には、俗語にもいひ、哥にも文にも常の事なれども、古へにはをさ〳〵いはざりしと也、同じことながら、歳暮の哥に、「おくりむかふるいそぎなどよむは、よしある事にて、それは客を送り迎る事になすらへて、然よみなせる趣意也、さる故にそのあへしらひ有て、「いそぎ「いとなみなどいへり、「いそぎ「いとなみは、俗にいふ用意支度也、たゞ何となく年のくるゝとを、「送るといひ、春の來るとを、「むかふるといふにはあらず、たとへば「春のきる霞の衣などいふも、實には春は衣をきる物にはあらざるを、人の衣をきるになすらへたる趣意にて、かの「おくりむかふるも、是に同じ、然るをたゞ春の來たるとを、うちまかせて「春をむかふるといふは、はるの空のかすみたるを、うちまかせて「春が霞の衣をきたりといはんが如し、よくわきまふべし

こひよる

こひよるといふは、近き世の人の、つねによくよむとなれ共、古へは「立よるなどこそいひたれ、こふとをこひよるとよめるとなし、

中に

戀の哥に「うき中「逢見ぬ中「絶にし中など、男女の間を、中といふとつね也、そは皆右のごとく、「逢見ぬ、「たえにしなど、上よりつゞきたる詞有て、「しか〳〵の中とこそいへ、上よりつゞきたる詞なくて、かしらにたゞ中といへるとはなし、たとひ句のかしらにあるも、上なる句よりつゞきたる詞有ていふと也、然るを近世には、上につゞきたる詞なくて、たゞ「中にうれしき、「中にくやしき、などおほくよむはいかゞ、いと〳〵聞くるしきと也かし、

落葉して

近き世いまだしき人の哥に、落葉してとよむとあり、ひがことなり、もみぢしてとはいへど、落葉にしてといへる例なし、今もかも　けふもかも

これは「今か」「今日かといふことにて、かは疑のか也、もは何れも二つながらやすめ詞にて、意なし、古哥によめるを見て知べし、然るを近世には、「今も」「今日もといふ意によむは、いとみだりなるひがこと也、

はうし

近世人、はうしとゝぢむる哥多し、「散なんはうし、「しられんはうし、「とひこぬはうし、「逢見ぬはうしなどの類也、こはてにをはのとゝのはざるにはあらざれ共、何とかや近き世めきて、いやしく聞ゆる調也、

春やきぬらん

かならず「春は來にけり「秋は來にけり、とあるべき哥を、初學のともがらなど、詞のえんなるを好むとては、「春や來ぬらん「秋やきぬらん、とよむこと多し、そもけりとらむとのけぢめをもしらぬほどの人は、せむかたなけれど、こればかりの事は、よくわきまへつべきほどの人も、をり〳〵此ひがことあるは、いかにぞや、俗語に、「春がきたわいといふほどの意、「春やきぬらんは、「春が來たかしらぬ、といふ意也、然るに、「春がきたわい、といふべき所を、「春がきたかしらぬ、といひて聞ゆべしやは、よく思ふべし、

神にちかひ　光やはらぐ　塵にまじはる

神祇の哥に、「誓とよみ、又「光やはらぐ「塵にまじはるなどよむことは、やゝふるくより見えて、常の事なれども、すべて、神に誓といふことは、さらになし、そは佛の道にて、佛を本地とし、神をばその垂跡といふから、神をも、ひたすら佛の意にして、僧のいひ初めたるひがことなるを、何のわきまへもなく、おしなべてよむことゝなれる也、又「ひかりやはらぐ「ちりにまじはるなどいふことも、もと老子といふからぶみに、和光同塵、といへるより出たるひがことにて、神の御うへには、さらによしなきことなるを、これも佛道の意にかなへる語なる故に、例の神を佛にして、僧のよみそめたることなるべし、これらのひがこと、やまとだましひあらん人は心すべし、

みといふ詞を見ゆの意にいひかくる事

「みよし野「三輪「美豆野など、すべてみ云々といふたぐひは、見る意にこそいひかくべきとなれ、見ゆる意にはいひかけがたし、みとのみにては、見るとにこそなれ、ゆゑなどのもじなくては、見ゆるとにはなりがたし、見るは、こなたよりあなたを見るとと、見ゆは、あなたよりこなたへ見ゆるとにて、別なるをや、然るに近世には此差別なく、み云々といふとを、見ゆる意にいひかくるは、みだりなり、

嵐のいひかけ

嵐を、不レ有の意にいひかくる事、ゆくさきをかけて、あらじ【俗言にあるまいといふこゝろ】といふにはよろしけれども、近世人の、今さしあたりてあらず【俗言に無いといふ意】といふにもいひかくるは、みだり也、

夕のいひかけ

夕を云にいひかくるは、殊にみだり也、古へは假字ちがひのいひかけだにせざりしに、假字づかひみだれてよりは、假字ちがひのいひかけは、やゝふるくもおほかる、それだにこゝろよからぬを、夕と云とは、ゆといとのたがひなれば、いかではいひかくべき、

もじあまりの句

五もじの句を、六もじによみ、七もじの句を、八もじによむことは、其句のなからに、あいうおの内のもじある時にかぎれるとなり、たとへば「身にしあれば、「須磨のあまの、「花のいろは、「きくやいかに、「いせのうみや、「しがのうらや、「風のおとは、「いはでおもふ、などの如し、七もじの句も、なすらへて知るべし、大方古今集よりこなた、此格にはづれたる哥は、をさ〳〵なきを、新古今集のころにいたりて、西行慈圓など、これを犯して、みだりにもじのあまれる句を、おほくよまれしより、近き世になりては、殊に多し、右の格にはつれたるは、いと聞くるしき物也、そも〳〵古き哥には、五もじの句を七もじに、「さもあらばあれとよめるさへこれかれあれど、わろからぬは、あまれる二もじ、あもじなる故ぞかし、又古今集に、「日ぐらしの鳴つるなへに日はくれぬ句とおもふは山の陰にぞ有ける、これらは、ともじ下な

る句につく故に、四の句もじあまりにて、三の句は然らず、すべて「云々と思ふ、とつゞく所には、此例多し、かやうなるはともじは、次の句へつくと也、大かたもじあまりは、右の如くあいうおの四つの内のもじの、なからにある句にあらずは、よむまじき也、

くさ〴〵

近き世の人の、好みてつねによむとはに、聞ぐるしきが猶多かるを、思ひ出るまゝに、あつめてこゝにひとつにいはむ、

春風などにゆるきといふと、花に一花といふと、松柳などにけぶりけぶる、

花の哥に、用なきに色香といふと、こゝにとは、よそに對する事ある時にこそいふべけれ、さいはでもよき所に、こゝにといへるは、をさなきもの也、江は、「入江「ふる江「みなと江「ながれ江などやうに、何江といひたるこそよけれ、たゞ江とのみいひては、聞よからぬを、「江の水「江の浪、など多くよむと、七夕の哥に、「星合の空「星の逢瀬などよむは、常の事にて、あしからぬを、「星やさぞ「星や恨むる「星やうれしき、などいふ星はわろし、船に、「眞帆ひくといふといかゞ、ひくとは、いかにするをいふにか心得ず、もしは引延る意にや、そは横に長く引ク物にこそいへ、帆なとのやうに、上へ高くあぐるを、引とはいひがたし、又帆をあぐとて、其綱をひくをいふか、それもいかゞ、あぐるこそ帆の用なれ、そをおきて、引クかたをのみいふべきことにあらず、納涼の哥に、「すゞみとるといふひがと也、漢文に取ル涼ヲといふは、涼しきをとるにて、すゞむすゞみといふは、すなはち取ル涼ヲことなるに、又とるといふべきよしなし、「白きを後といふと、始めてよみたらんは、めづらしくも有べけれど、近世には、人毎によむほとに、いとうるさし、すべてかうやうの事は、人の一たびよみたらんには、又とはよむへきにあらざるをや、鶯の哥に、「もゝよろこびも耳かしまし、「鐘をきく「雨をきくなど、そのいひざまによりて、漢文めくとなるを、たとに「鐘きく「雨きくなどよむは、殊にわろし、「見よや「蚊のこゑ「藤がえ、いやしく聞ゆる詞なり、

擣衣の哥に、「まきかへすといふも、聞よからず、岸といひてもじのたらぬ時、岸根とよむと、古へに聞ヵぬ詞也、「山窓

「流れ藻「身をおく山、これらわろき詞共なけれど、近世めきて聞ゆ、「松も檜も、或は「松原も檜原も、とこそいふべきを、さはいひがたきまゝに、「松も檜原もといふ、原といふこと、たらず又あまりて、せんかたなげにきこゆ、「すゝきかやといはむは、ことも なきを、「すゝき高がやといふ、高も、せんかたなげ也、右の詞ども、必ひがことにはあらぬも、近き世めきて聞ゆる也、此たぐひなほ多かるべし、

いやしげなる句

「花よしれ、「色に香に、「月こよひ、「月ひとり、「松ひとり、「たぐひなや、「思ふぞよ、「したふぞよ、「をしむぞよ、「思へ人、「うしや人、これらいやしく聞ゆる句也、此たぐひ猶有べし、「さなきだには俗言也、これは「さらでだに共、「さらぬだに共いひてよろし、「いつしかには俗也、「いつしかと、又は「いつしかもといふべし、「いとゞなほは、「いとゞしくといふべし、此なほは俗意也、「なごりなは、「今年なほのたぐひ、近き世のつゞけざま也、猶といふ詞は、すべてかやうにうごかぬ詞より、たゞにつゞくることは、古哥には例なし、「雪は猶「春も猶などやうに、あひだにてにをはを置てこそいへれ、「なごり「今年などは、うごかぬ詞なるに、たゞにつゞく故に、猶といふこといやしく聞ゆる也、「なごりも なほ「今年もなほ、などいへばよろし、「とばかりに【には、は共も共を共よむ、皆同じ】といふことは、新古今などにあるは、めでたくめづらかなるを、近世には、あまりみだりに多くよむ故に、うるさく聞ゆ、「日にそひては、「日にそへてといふべし、こは「そひてといふ方、あたれるやうなれども、古へはさいへる例なし、皆「そへてぞいへる、「思ひきやといふべきを、「思はずよといひて、同じことゝ思ふは、ひがこと也、「思ひきやは、過にしかたのこと、「思はずよは、今のことにて、其意異なる物をや、「瀧おとし水はしらせて、とつゞきたる二句、近世人の好みてよむことなり、こは物語の詞なれ共、哥にはいかゞ、されどはじめてよみ出たらむは、めづらしきに、猶一たびはゆるさるゝやうも有べし、二たびとはよむべき句がらにあらざるをや、すべて詞にもあれ意にもあれ、よになべてならず、よくもあしくも、一ふしめづらしきことは、人のよみ出たらんをば、又とはよむべきにあらず、もししらずして、おのづからによみあはせたらんにも、後にしらば、すつべきこと也、然

るを近き世の人は、きのふけふの人の、めづらしくよみ出たるふしをも、いさゝかもはゞからで、人ごとにきそひよむ、いといと心きたなく、かたはなるわざなりかし、さるはふるくも、ぬしある詞とて、いましめられたることあるをば、たれもよく知りながら、たゞむかしのをのみはゞかりて、ぬしある意詞は、今もつねに多かることを、わきまへざるはいかにぞや、近くよみ出たることは、いづれかさきとも後とも、しられずなり、又いかにおもしろきこゝろ詞も、たぐひ多く、常の事になりぬれば、中々にうるさくさへ聞ゆれば、かた〴〵はじめのぬしのためにも、いと心うきわざなり、ましてよろしくもあらぬふしを、うらやましげにとりてよむは、かへす〴〵心づきなし、

文の詞を哥によむ事

同じき雅言(ミヤビゴト)の中にも、文章に用ひて、哥にはよむましきも多し、たとへば「ふみをやるなどいふことは、雅言ながらも、哥にはよまぬ詞なり、すべてふみのことをば、古へのよき哥共には、「水ぐき「玉づさ「跡などのみよみて、ふみといふことは、或は「まだふみも見ず天の橋だてなどやうに、橋を踏(フミ)ゆく事などによせてこそよみたれ、たゞにふみとは、をさ〳〵よまざりき、又答(コタ)へすることを、いらへといふは、文章には常のことなれども、古へのよき哥には、をさ〳〵見えず、哥に多くよむは、近き世の事也、大かた此たぐひいと多かるを、今はえしもあげず、みなもらしつ、なすらへてわきまふべし、物語の語をとりてよむにも、此こゝろえあるべき事にて、文章にてはめでたき詞も、哥によみては、いやしきがあるぞかし、又同じ言も、文と哥とにて、いひざまつゞけざまのかはるべきもおほし、しかるを近世人は、すべてこれらのわきまへなく、哥にはよむまじき詞を、好みよみて、それをかへりてめづらしくおかしきことに思ふめり、大かた近き世、すべて戀の哥の、殊につたなくいやしげなるも、おほくは此ゆゑ也、或は物語の詞つゞきを、やがてそのまゝによみなどして、哥のやうにもあらぬがおほきを、きく人はたえわきまへで、めづらか也とめではやしあふめるは、かへす〴〵もかたはらいたし、

文の部

大かた哥にも文にもわたることゞもは、すでに哥の部にあげつ、今はたゞ文に物する事共をあぐべし、そも〳〵ちかき世の人、文も哥もともにつたなき中に、文はことにおしなべてつたなくして、いさゝか哥のはし詞を、二くだり三くだり物する中にも、ひがことのみおほく、或はから書よみの詞づかひをえはなれず、あるは今の世のさとび言のふりに流れなど、すべて雅言（ミヤビゴト）のさまを、よくわきまへしれる人の、をさ〳〵よになきは、いかにぞや、よくこそえあらずとも、いみしきひがことのまじらぬほどにだに、あらまほしきわざになむ、

それ

文のはじめを、それ云々と書出すは、漢文の夫（ソレ）にならへるにてさらにこゝの語にかなはず、必かくまじきこと也、やゝふるきものにも、まゝ見えたれど、そは漢文にならへる物にて、ひがことなり、

いふことしかり

序などの終りを、いふことしかりとゝぢむる、これも漢文にて、いみじきひがこと也、すべてこゝとかしことは、詞のつゞけざまいひざま、異なる物なれば、いさゝかにても、かの國文のふりをば、まねぶまじきわざなるに、世の人、こゝの文のさまをば、むげにえしらず、たゞはし〴〵見なれたる、漢文の詞つきを用ひて、まぎらかしおくは、かへす〴〵見ぐるしきわざぞかし、雅言（ミヤビゴト）をしらざらむには、中々にしか漢文のふりならんよりは、俗語（サトビゴト）ならむこそまさりたらめ、【いふことしかりといふとは、漢文の序の終などに、云爾と多くあるを、昔より然よみたれども、此訓あたらず、云爾は、二字ともに助辞なれば、然よむべきにあらず、まして皇國の文にかくべきことかは、

ものならし

近世人序の終りは、かならずものならしとゝぢむる物とや心得たるらむ、そは此詞を、いかなる意と思へるにかいと〳〵心得ず、物ならしは、俗語に「ものであらうといふ意也、然るにみづからいひたる事をさして、「物であらうと、よそげにい

ひてよからんやは、

二つの年 三つの年

今の人、文のしりに、其時の年号をしるして、元年をはじめのとしとかくは、こともなし、二年三年などを、ふたつのとしみつのとしなどかくとは、中昔の文にも例はあれど、皇國の物いひざまにあらず、ひがとなり、さやうにいひては、年の二つ三つあるとになる也、たとへば「二つの目「五つの指といへば、目二つ指五つのとにあらずや、又「寛政の三つのとしといへば、寛政といふ人の、三歳の時とも聞ゆるをや、されば二年三年などみな、「ふたとせといふとし「みとせといふとしとやうにかくべく、もし又むかしのとならば、「いつのふたとせといひし年「みとせといひしとしなど書べし、かゝるぞ御國のものいひなる、

某がしるす 某がいふ

近きころの人、文のしりに、みづからの名を、「某(ソレ)がしるす「某がいふとかく、此がもじひがこと也、此詞をおくべきところにあらず、すべてのといひがといふとは、所によりて、かなはぬと多くて、思ひのほかにつかひにくき詞なるを、近世人その味をしらざるから、かゝるみだりなるともあるなり、

おのれ某

近きころの人、文の中に、みづからの名を、おのれ某【こゝに某といふは其名也】とかくとわろし、こはおのれとかくか、又は名をかくか、何れにもあれ一つなるべきを、おのれといひて、又名をいふは、古へに例なきと也、そは漢文に「不佞某とかくなどを思ひて、いひそめたるひがとなるべし、【さてついでにいはむ、漢文にては、みづからのとをば、吾予僕などいひて、己(オノレ)といふとはなきを、御國の文には、われともおのれともいへり、これ漢文とのたがひめ也、又われ おのれといはで、名をいふもつねのとなりき、こは漢國も同じと也、然るを今の世には、私おれ拙者などのみいひて、みづから名をいふとはなきは、古へと今とのかはりなり、】

人の名をさしていふ事

人のもとへ、そなたの名【今いはゆる實名名乘なり】をさしていひやるは、無禮(ナメシ)きこと也、然るに今の世、哥人どもなどの中にては、ひたふるに名をかくを、雅なりと心得て、上としていたくうやまふ人の許へさへ、其名をさして、某(ソレ)ノ大人など書やるは、いとあるまじきこと也、そも〳〵名はもと、其人をほめたふとみてつけたる物にて、上(アガ)れりし代には、うやまひても其名をよぶこと、常なりしによりて、古學のともなどは、今も人の名をよぶことを、なめしとは思はざめれど、中古よりこなた、すべて人の名も、もろこし國の格のごとくになりて、これをよぶをば、なめしとすること、上下おしなべての定まりにしあれば、こは上れりし代のぢやうにはいひがたきこと也、

某なる者

すべて人の名をいひ出るには、或は「某(ソノ)國に某(ナニ)といふ人あり云々、或は「むかし某といひし者の云々、などあるべきを、近きころの人の文には、「某なる人有ッ云々、「某なる者の云々などかく、此なるといふ詞、いみしき誤也、是も漢文の近年の訓点に、「有(リ)二某者(ナル)一と附ヶたるを、見ならひて、書はじめたるなめり、漢文もふるき訓点には、トイフを讀付(ヨミツケ)て、「有(リ)二某(トイフ)者一とよめる、これぞ正しきよみざまなるを、近年の人、なまさかしらに、しひて言ずくなによまむとて、ナルモノとは附ヶたるなれど、然いひては聞えぬこと也、そも漢文はともかくもあれ、御國の文にさへ、さるひがことをまじふべきとかは、なるは、もとにあるのつゞまりたる詞なる故に、古ヘの文には、あるは「中將なる人、「式部ノ丞なる者、あるは「京なる人、「つくしなる者など、官又地ノ名などにこそ、なるとはいひつれ、そは「中將の官にてある人、又「京に居る人、といふ意なればぞかし、されば人の名に、「在原ノ業平なる人「紀ノ貫之なる者、などいへる例はさらになし、さいひては「業平にある人、「貫之にある者、といふ意なるを、さてはなることいふこと、何のよしぞや、いと〳〵をかし、さしもさかしだつ近年の人、これはかりの事にだに心のつかで、いとみだりなるこそ、かへす〴〵かたはらいたけれ、

そこなる某

今世の人の文に、たとへば京の人大坂の人の事を、「京なる某「難波なる某とかくは、大かたはよろしからず、なるはにあるといふとなれば、なるといひては、他國の人の、今時京に居、難波にをるやうに聞ゆれば也、さればこは「京の某「難波の某とかくぞよろしきを、かやうの所を、のといふは、をさなきやうに心得ためるは、中々にひがこゝろえ也、但し其趣によりては、本より其所の人をも、なるといふまじきにもあらず今はたゞ大かたをいふになん、

友かき　友どち

今世人、友だちといふをば、俗たりとやこゝろうらむ、多く友かき又友どちとかく、これ中々にわろし、古き集の詞書、又物語などにも、皆友だちとこそいひたれ、友かきはことやう也、又友どちといふは、意たがへり、すべてどちといふは、俗言にどうしといふとなれば、其意なくて、たゞ友のとに、友どちとはいふべきにあらず、

おほきみ

大きみとは、まづむねとは天皇を申奉り、さては親王諸王にわたりて、必皇胤にして、臣下の氏ならざる人にかぎりて申す御号なり、いかに貴しといへども、臣下の氏なる人をば、申せるとなし、然るを今の人の文には、いさゝかも己がたふとむべき人をば、みだりに大君とかくは、あなかしこ、いみしきひがとなり、

がり

妹がり君がりなどいふがりは、許といふと也とは、たれも知りためれど、猶それに心得あり、「もとへといふ意にのみつかひて、「もとよりといふ意には、つかひたる例なし、されば其さして至る方をいふ詞にて、出たつ方にはいひがたし、萬葉に「わがり來むとあるも、人の我許へ來ん也、わが許よりゆくを、「わがりゆくとはいひかたし、「妹がりゆくは、妹が許へゆく也、妹が許より來るを、「妹がり來とはいひがたし、然るを今の人、某が許よりそこへゆくといふとを、「某がりそこへゆくとやうにかくとあるはたがへり

哥に一くさ　二くさ

哥の數を、近きころの人の、一くさ　二くさなどいふは、例もことわりもなき、いみしきひがと也、古へは一うた　二うたとこそいへれ、古今集ノ序に、「この二うたは、とあるなどにても知べし、土左日記にも、「ひとうたにことのあかねば、今一つ、などもあり、もし上に哥といふとありて言重なりわづらはしき所なとには、一つ　二つ共いへり、然るを、一くさ　二くさとしもいふひがとは、思ふに、古今の序の細注に、「おほよそむくさに分れんとは云々、とあるなどを、心得たがへて、いひそめつるにやあらむ、かれは「六種といへるにこそあれ、六首の意にはあらざるをや、

ひなぶり

みづからの哥をひげして、ひなぶりといふは、ことわりはさもあるべけれど、これはもと神代の哥に、ひなぶりといふがあるを、邊鄙のふりと心得來りて、たれも然思ふよりいふめれど、かのひなぶりといふ名のよしは、別事コトくにて、邊鄙のふりといふとにはあらず、此事おのれ古事記傳にくはしくいへり、

あがた

田舍のとをあがたといふは、みだり也、あがたとは、京より下る田舍の官人の、その任國をさしていふ名也、古今集の詞書に「あがた見にはえ出たゝじやとあるも、參河掾になりて下るにつきて、その任國の參河をいへるにこそあれ、昔よりこれを、たゞるなかと心得たるは、くはしからず、土左日記に、「ある人あがたの四とせ五とせはてゝとあるも、貫之主の、土佐の國守にてありしほどをいへり、大かたこれらにて心得べし、たゞ何となく田舍をいへる例なし、なほ縣アガタのもとの委しき事は、古事記傳成務天皇の御卷にいへり、

あづま　むさし

今の世の人、江戸にゆくとを、或は「あづまにまかりける、或は「むさしの國にくだり給ふ、などかくはわろし、こは江戸といふ名を書を、俗なるやうに思ひてなめれど、地名なれば、なてふとかはあらむ、まさしく江戸をさしていふとに

は、たゞ江戸とかくこそよろしけれ、事のさまによりて、ひろくいひてもよき時は、あづまとはいふべけれど、それも猶たしかに其所をさしてよきときは、さいはんはわろし、又武藏ノ國にとかくは殊にわろし、今は天の下に二つなき大江戸なるに、其名をおきて、國の名をしもいふべきことにあらず、たとへば昔の人も、京にのぼるを、「山城にとはいはざりしをや、

あそぶ

今の人の文に、「吉野にあそぶ、「難波にあそぶなどかくあそぶは、漢文の遊ノ字よりうつれる誤也、物へゆくをあそぶといふとなし、又人のでしになりて物まなぶことを、「某ノ大人の門カドにあそぶなどかくは、遊アソぶはさらにもいはず、門カドも漢カラ也、すべて詞をばこゝのに直しても、文字のまゝにいひては、なほからをはなれぬ事多きぞかし、

道行ぶり

道ゆきぶりとは、道にてゆきあひふれたるをいふ、然るに此ごろの人のかける物を見れば、旅路の日記ニキのことを、然いへるあり、いみしきひがことなり、

川をこす

山はこゆといひ、川は渡るといふぞさだまりなる、然るを今の人、旅路の日記などに、「某川をこしてなどかくは、いみしきひがこと也、今時の人は、かち渡りならでは、わたるとはいはねど、むかしは海川は、橋にまれ船にまれ何にまれ、すべてわたるとこそいひつれ、又山はこゆといへども、それもこすとはいはず、こゆとこすとは、自他のけぢめあり、ましてて川にこすといふことあらめやは、【今世に、川ごしとて、人を渡す者あり、これはみつから渡ることをいふとはかはりて、川ながらもこすといふべきよしあるなり、】

賀す

今の人、賀の哥のはし書に、「某の七十を賀してよめる、などかくは、賀してといふこと漢文也、同じき字音ながら、「七十の賀によめるといふぞ、雅言ミヤビゴトには有ける、皇國にては、賀といふは、そのいはひとするわざをいふ名目にて、うごかぬ詞

なる故に、「賀をする「賀をしてといふ意に、賀す 賀してといふはよろしきを、「六十を賀す、「七十を賀してなどいへば、賀ノ字はたらきて漢文也、よくわきまへて書べし、

ことぶき

ことぶきは、古言にことほぎといへるが轉じたるにて、いはふことなり、然るを、人の命のことを、「ことぶき長し、ことぶきいくつなどいふは、たがへり、そは漢文に、人をいはふことをも壽といひ、又長壽壽命など、命のことをも壽といふから、まぎれつる誤也、壽命のことをことぶきといふことなし、すべて漢字の訓によりて、詞の意を誤ること、此たぐひいとおほし、こころすべし、

いさほし

近きころの人、古書にある功ノ字などを、いさほしとよみ、みつからの文にも然かく、これ誤也、いさをといふぞ正しき、それをいさをしといふは、言をはたらかして、用にいふ時のことにこそあれ、體にいふ時はいさを也、たとへば戀を、體にいへばこひなるを、こひしといふは、はたらかして用にいふときのことにて、いさをゝいさをしといふも、これゝ同格の詞也、然れば體にいふときは、「いさをあり、などいふべきを、「いさをしありといはんは、「戀をするといふをこひしをする、といはむに同じひがこと也、又假字も、三代實錄の中の宣命に見えて、いさをなるを、をゝほとかく、これも誤なり、

とみに

とみにといふは、俗言に、「きふに「早速にといふ意、とみの事は「きふな事といふこと也、然れ共つかひやうのある詞にて、たとへば俗語に「きふには來ぬ「早速には出來ぬといふことを、とみにも來ぬ、とみにもいでこず、などはいへども、「早速に來た 早速に出來たといふことを、とみに來つ、とみに出來つ、などはつかひたることなし、此わきまへ有べき也、今の人は此わきまへなく、みだりにつかふめり

かいつけて

「書付(カキツケ)てを、かいつけてといふは、後の音便にて、正しき詞にはあらざるを、近きころの人は、かへりてそを雅(ミヤビ)たりと心得たるにや、ひたすらに好むは、ひがこと也、これらは、物語などにも有て、かならずわろき詞也、といふにはあらねど、あまり人どに好みてかくがうるさき也、すべてたゞ「書てとのみいひてよき所と「書つけてといひてよき所と、差別あるとなるを、今の人は、此かいつけてを好むから、たゞ「書てやりける、などいふべき所をも、みだりに「かいつけてやりける、などかくほどに、其類は殊にうるさく聞ゆかし、

きこゆ

人に物申すを、聞ゆといふことあり、そはもと、我より上なる人に申すことなる故に、たとひ同輩どちの間にても、いふ方よりあなたを敬ふ語に用る詞也、昔の物語などにいと多し、見て知べし、又たゞ詞の下に附ていふ事も有、たとへば「戀きこゆ「待きこゆなどのごとし、こは「戀奉る「待奉るの輕きにて、俗言に「戀申す「待申すなど、申すといふことを付ていふと同じ、これもあなたを敬ひたる詞也、然るに近きころの人の文共を見るに、我方へ人のいひおこせたることを「某(ナニガシ)が許よりしか〳〵きこえければ、などかくは、いみしきひがこと也、さやうに人の我にいふを、聞ゆといひては、みづから己をうやまふ也、いとをかし、【こは思ふに、万葉集などに、のたまふといふことを、きこすといへるが多きを見て、きこゆをも、かのきこすと同意と思ひまがへたるよりや出つらん、かのきこすは、いふ人をうやまひたる詞にて、のたまふといふに同じく、きこゆは、あなたをうやまひての詞にて、申すといふに同しければ、意異なる物をや、】

侍る

近世人、哥の詞書には、かならず侍るといふことをそへざれば、雅語にならざるやうに心得て、おしなべて「しか〳〵の時よみ侍る、「しか〳〵の所へよみておくり侍りけるなどかくは、あたらぬことおほし、すべて侍るといふ詞は、つかふべき文と、つかふまじき文と有り、みだりにはいふまじき也、其故は、これは人に對して、敬ひていふ語の内の、己がうへにつきたる事に添へていふ詞にて、たとへば「庭の花を見侍りてよみ侍るといふは、俗語に「庭の花を見ましてよみましてござります

といふに同じ、侍るは、此俗語のましてといひ、ござりますといふにあたれり、されば人のもとにいひやる文などには、いくらも書べし、重なるをいとふべからず、さもあらぬたゞの文章には、一つもかくべきにあらず、然るを近世人の如く、何のわきまへもなく、みだりに侍る侍るとかくは、たとへば奴僕などに對しても、「花を見ましてよみましてござりますといひ、又ひとりいふ語にも、然いはんが如し、をかしからずや、こは哥の詞書のみならず、すべて何の文にも、右の心得あるべき也、古き物語どもを見べし、此詞は、人と人と語る語の内には、いくつ共なく重なりて多く有て、たゞ地の語、又は我より下ざまなる者、奴僕などに對していふ語などには、一つもあることなし、よく／＼心をつけて考ふべし、抑近世人の、此詞をみだりに添ることは、代々の撰集の詞書にならへるひが事也、撰集は、おほやけに奉る物なれば、撰者の、みかどに對ひ奉りて申す心ばへを以て、此詞をば多くおける也、されど古今集の詞書にはすくなし、後撰集よりこなたいとおほし、其中に拾遺集は、花山の帝の御自撰也と申すなるに、此詞の多かるは、かの集は、御清撰にもあらざるやうに申すなれば、人々の書て奉りたるなどを、おの／＼やがてしるさせ給ひなどせしまゝにやあらむ、心得ぬ事なりかし、又新古今集は、後鳥羽ノみかどの御自撰のぢやうなるに、是も此詞の多きは、其ころほひなどにいたりては、はやくかゝるたぐひの詞づかひなども、くはしからずなりて、たゞさき／＼の集どもの例のまゝにかゝれたりとぞ見ゆる、さて又わたくしの家々の集共などを見る、に哥どに此詞あること、一集(ヒト)のうちにをさ／＼なきことがあるは、此詞なきは、たゞ何となくかき集めおきたる集多くあるは、おほやけに奉り、又さらでも、貴人へ書て御覽ぜさせしなどなるべし、古き集共は、大かた此けぢめぞ見えたる、今の世のならひになづまず、古へをしたはん人は、わきまへあるべきことになむ、

給ふ　給はる

給ふは、あたふる人につきていふ詞、給はるは、受る人につきていふことば也、【給ふは、俗言に、「くれる「とらす「下さる、などいふにあたり、給はるは、「もらふ「いたゞく「拜領する、などいふにあたれり、】たとへば「君の臣に物を給ふといふは、あたふる君の方につきていふ語なる故に給ふ也、又「臣の君より物を給はるといふは、君より給ふ方をいふ

にはあらず、受る臣の方につきていふ語なる故に、給はるとはいふ也、かくのごとくなる故に、古き物には、給はるをば被ル賜ハと書たり、然るを今世人は、此差別なく、給ふことをも、給はると、通しいふは、ひがこと也、

給ふける

玉ひけるといふべきを、玉ふけるといふは、中昔よりこなたの音便にて、正しき詞にはあらず、然るを今世人は、かへりてこれを雅ミヤビたりと思ふは、ひがこと也、又これは音便の詞なれば、給うけると書べきに、うをふとかくもわろし、すべて音便の言には、うを用ふべき例也、つかうまつるなども、ふをかくはわろし、猶音便の委しき事は、おのが漢字三音考にいへり、考へ見べし、

つかはす　つかはさる

つかはすとつかはさるとは、是も給ふと給はるとのけぢめのごとくにて、つかはすは、やる人につきていふ詞、【俗言にもやるといふにあたれり、】つかはさるは、ゆく人につきていふ詞にて、被ル遣ハサなり、【俗言に「使にゆくといふことなり、」】然るをこれも今の人は、わきまへなく、つかはさるをも、たゞつかはすを尊タフトみていふ詞と心得て、たとへば「某殿より某を御使につかはされけるに、などと書は誤也、此詞はたとひ貴人のうへにても、たゞつかはしける、などいふ例なり、古き書共を見て知べし、「つかはされける、或は「つかはし給ふなどはいはぬこと也、物を贈る事をいふも同じ、然るを「つかはさるといひては、その使にゆく者のことになり、又物を贈るをさいへば、其物のうへをいふになる也、

こす

おこすをこす、おこせしをこせしといふは、いやしき詞なり、然るを今の人は、かへりておこす おこせしを俗サトビたりと心得て、「しかじかの事申しこせしに、などかくはひがこと也、俗文に「申越候などかくも、「申シおこせといふことにて、越は借リ字なるを、此字の意と心得たるにや、すべて他アダシ詞には、おをはぶきてもいふ例多けれども、おこすをこすといへることは、昔の正しき書にはなきこと也、

ませし

おはしまし丶などいふべきを、おはしませしといふは、わろし、すべて「坐しは皆まし丶といふ例にて、ませしは俗也、

ます

敬ひ詞に玉ふといふ事を、奈良以前の文には、坐（マス）といへる事も多し、「來給ふを「來（キ）ます、「入玉ふを「入ます、「かへり給ふを「かへりますといへるたぐひ也、然れどもこれは其事によりて然いへるにて、こと〴〵く然るにはあらず、「詔（ノリ）玉ふ「申し給ふ「さとし玉ふなどのたぐひ、上古より必給ふといへる事も多し、これらを「のります「申ます「さとしますなどいへる例なし、然るを近きころ古學のともがら、文をしひてふるめかさむとて、かならず給ふといふべき所をも皆、ますと書くは、なか〳〵に古文の例に違ふ事おほし、すべて古代の詞づかひを、よくもわきまへず、みだりにしひてふるめかしたるは、文も歌も、いと〳〵うるさきものぞかし、

てふ　ちふ　とふ

といふといふ事を、哥にはさまによりて、てふ共いひ、萬葉などには、ちふともとふ共多くあり、皆といふをつゞめ、又はいをはぶけるなとにて、いづれも哥詞也、しかるを近きころ古學の輩、例のしひてふるめかさむとては、文にも、といふといふべき所をば、おしなべて皆てふ又ちふとかくは、いと聞ぐるしきわざなるを、よき事と思ひてや、中古のふりの文にさへ、然かく人おほき、そは誠に聞くるし、抑これらは、哥の詞にこそあれ、文には、古へより例なき事なれば、古體にも、すべて書べき詞にあらず、中古のふりにはさら也、但しふるくも「たれてふ人か云々、「しか〳〵てふ詞は云々、などやうにいへる事は、まれ〳〵見えたり、されどこれは、「しか〳〵てふ某（ナニ）と、定まれる物有て、その物をさしていへるなれば、なべての例には引べきにあらず、

ゆ

よりといふ事を、萬葉などの哥には、ゆともよともよめる多し、これによりて、近きころの人、文にも、よりといふべき

所を、皆ゆゑかくは、わろし、古へも哥にこそあれ、文には皆よりといひて、ゆ共よ共いへることなし、然るを古學の輩、ひたすらかやうの耳なれぬ詞を好みて、多くかくは、いと心づきなく、かへすがへすうるさし、

と

「某書にいはく云々といへり、「某人の語りけるは云々と語りけり、かくの如く、上にいはくといひ、或は語りけるは、などやうにいひても、其語の終りに、又といへり、と語りけり、などいふぞ、むかしの文の定まりなりける、然るを此ころの人の文には、上にいはくといひて、終りに又といへりなどいふをば、同じ言の重なりて、わづらはしく拙しとや思ふらん、終りをばたゞとゝのみいひて、次の語へうつるは、後ノ世心のなまさかしらにて、古への例にたがへるのみならず、とゝのみにては、次の語へもうつりがたく、とぢめにもなりがたければ、いみじきひがこと也、すべて近きころの人、文はことずくなにみじかく書くを、よきことゝ心得ためれど、さて中々にはぶき過して、語のとゝのはぬこと、此類ほかにも猶おほきぞかし、【漢文に、「某曰ク云々トと、其語の終リにトと点を附ること、これも近きころの事にこそあれ、古き訓点にはトイヘリとよみつけたり、これ古への語の格によれるもの也、そも漢文の点は、ともかくもあれ、それにならひて、ひがことすべきにあらず、】

が

古今集戀三詞書に、「門よりしもえいらで、かきのくづれより通ひたるを、たびかさなりければ云々、戀五「ほいにはあらで物いひわたりけるを、む月の十日あまりに云々、又「なりひらの朝臣、紀ノ有常がむすめにすみけるを、恨むる事ありて云々、これらのけるをのたぐひのをもじ、今の人の文なれば、必皆がといふ所也、かやうの所をがといへるとも、やゝむかしの物にも見えたれど、古へのよき文には、皆をといへり、然るを今時の人は、かやうの所ををといふべきことをば、をさをさしらずして、皆がとのみいふは、雅たらず、俗言に近し、こは哥の詞書、又さらぬ種々の文にも、つねによくあること也、心得おくべし、此がもじ一つにて、大かた其文のつたなさも、しらるゝことぞかし、すべてがといふ詞は、別につ

かひごころあり、右の如くなる所には、つかはぬと也、そのけぢめをいはむには、いと事長ければ、もらしつ、古へのよき文どもをよく見て、あぢはひ知べし、

よりて

よりては、「云々のことによりてと、上に詞有てつゞけいふと也、ことばの頭にたゞよりてといふとなし、もし上なる語をば切ッて、次に語をおこしていふときは、これによりてといふべし、たとへば上よりつゞけていふ時は、「日も暮ぬるによりてやどりぬ、といふを、上を切ッていふときは、「日もくれぬ、これによりてやどりぬ、といふたくひ也、然るを近きころの人は、「日もくれぬ、よりてやどりぬとやうに、上の語の切れたる所に、よりてといふは、漢文ぶりのひがことにて、御國の詞づかひにたがへり、

ゆゑに

ゆゑにも、よりてと同じさまにて、もし上を切ッて、おこしていふときは、このゆゑにとも、さるゆゑに共いふべし、詞のかしらにたゞにゆゑにとはいふべきにあらず、【古文にては、語のかしらにては、かれといひて、故ノ字を書り、又漢文に、句のかしらにある故ノ字は、昔よりかるがゆゑにと訓ミ来れり、これかゝるがゆゑにといふとなり、かやうによめるも、語のかしらに、たゞにゆゑにとはいふまじきがゆゑ也、昔は漢文をよむにも、かく詞のつかひざまを正して、今のごとみだりにはあらざりき、】

のみ

のみとは、たゞ其物其事ばかりにして、ほかの物ほかの事のまじらざるをいふ詞なるを、近きころの人の文には、其意ならで、たゞ語の勢ひに、のみといひとぢむること多きは、漢文にならへるひがこと也、大かた皇國の語には、さやうにのみといひて、とぢむる例はなきこと也、古き哥に「たゞ一夜のみ、「たゞ一人のみ、などとぢめたるあれど、これらは、一夜に限り、一人にかぎりて、二つなきをいへるにて、たゞ語の勢ひに添へたるにはあらねば、別事也、

かつ

かつは、此事をしながら、彼ノ事をもし、或は此事のあるに、彼ノ事もまじはるやうのこころにつかふ詞也、然るを近きころの人は、此詞をつかふまじき所に、つかふこと多し、そはもと漢文の且ノ字にならへるひがこと也、抑漢文なる且ノ字は、かつと訓ムべきと、またと訓ムべきと、そのうへと訓ムべきと有て、古き訓点には、右のごとく訓ミ分ケたるを、近世には、差別なく、いづれをも皆かつとよむから、それにならひて、皇國の文にも、またといふべき所、そのうへといふべきところなどを、かつといふこと、近きころ多し、然いひても聞ゆるやうなれども、それも又かの近世の漢文訓ミになれたるひが耳にことあれ、すべて世のならひにて、聞えぬとも、耳なれぬれば、さて聞ゆる物ぞかし、

いと

「いと寒し、「いとあつし、などいふいとは、つかひやうのある詞也、たとへば「いと戀し「いとかなしなどいふはよろし、然るを同じ詞ながらそれを、「いと戀る。「いとかなしむ。といひてはわろき也、「戀る。「かなしむ。といふときは、いたくいみしくなどいふ也、他の詞どもにいふをも、この「戀る「かなしむなどになずらへて、わきまふべし、いとといたくとは、意は同じきを、つかひやうは、かく異なることあり、すべて同やうなる詞も、つかひざまは、かうやうにけぢめあることを、思ひはからひて物はかくべき也、今の人は此けぢめをしらねば、いとといひてはわろき所を、「いと云々といひて、こちなきこと猶さまぐ〵あり、

哥と文との詞の差別

おほよそ同じき雅言の中にも、哥の詞と文の詞と、差別あるがあるを、今の人は此差別なくして、哥の詞にして、文にはつかふまじきを、文につかふことおほし、心すべし、たとへば花にたをるといふは哥詞也、文にはたゝをるといふべし、車を小車といふは哥詞也、文にはたゞ車といふべし、さよふけてといふは哥詞也、文には夜ふけてといふべし、水ぐき玉づさなどいふは哥詞也、文にはふみといふべし、かやうのたぐひいと多し、今は思ひ出るまゝに、たゞ一つ二つをあげつ、但

し文には、くさ〴〵のふり有て、序など其ほかにも、或は枕詞をおきなどして、すべて哥のごと、詞を花やかにしたつるやうもあり、そはその文のふりによること也、又なべてはさらぬ文の中にも、事によりては、一言二言哥詞をことさらにまじふるやうのこともあり、猶さやうのこまかなる事共までは、たやすくはつくしがたし、又ついでもあらば、別にくはしくいふべし、今はたゞ大かたをおどろかしおくのみぞ、

せうそこ文の詞

今の人、消息文を雅(ミヤビ)てかくとては、「いよゝたひらかにおはしますやなどかく、いよゝのつかひざま俗(サトビ)たり、雅文には、かやうの所にいよゝといへることなし、又物をおくりたるなどを謝することを、「ゐやを申す、などかくも俗意也、これは俗語に、「禮(レイ)をいふ、「禮(レイ)にゆくなどいふを古言に直していへるなれど、【ゐやは古言にて、禮ノ字を書クなり、】俗語にこそさはいへ、雅言には、謝することをゐやといへることなし、謝するをば、雅言にはよろこびといへり、【俗に「禮をいふといふをば、「よろこびをいふといひ、「禮にゆくをば、よろこびにゆくといへり、】又物えさせなどしたるを謝して、かたじけなし、有がたし、などいふも俗也、雅言には、それをばうれしといへり、雅言のかたじけなしは、俗に「おそれおほい、「もつたいない、などいふ意、有がたしとは、有ルことのかたくして、まれなるをいへり、これら皆古き物語などに多きこと也、見て知べし、すへて其詞は雅言ながらも、雅文のつかひやうにたがひては、猶俗をはなれざること、右のたぐひいと多し、又いふことのおもむきも、今の俗文にかくまゝにては、たとひ其詞をばこと〴〵く雅言に直しても、猶俗意なることも多ければ、其趣も、古へのをよく考へてかくべし、今の人の文には、さるたぐひのひがことの、いと多きぞかし、

漢文ぶりの文

近世人の文に、ことさらに漢文のふりを好みて、多くかきまじふるは、殊にうるさきわざ也、そはもと雅文をえさるからのしわざにて、つたなさをまぎらかさんとてぞ、そもまことの漢文は、もじの顚倒、助字のおきやうなど、何くれとむつかしくこころせきを、假字書にては、さやうのすぢにも力いらず、たゞ假字書キにしたる漢國の軍書やうの物を見ても、か

かるゝわざなれば、いとたやすくして、俗人の耳には、物々しく、物しりめきて聞ゆるを、たけき事に思ふめる、いと心ぎたなきわざならずや、昔のよき文には、たとひまれ〳〵に、もろこしぶみなる事をかけるも、ことばつきはこゝのふりにこそ物したれ、かしこのふりのまゝには、かけることなし、又字音の詞もあれども、それはたつかひざまつゞけざまは、こゝのふりなるをや、

時代のふりのたがひ

今の人の文は、時代のわきまへなくして、中昔のふりなる文に、奈良以前の詞も、をり〳〵まじり、又ふるきふりなる文に、むげに近き世の詞もまじりなどして、かの鳴聲ぬえに似たりとかいひて、むかし有けむけだものゝこゝちするぞ多かる、

後撰集詞のつかね緒

後撰集は、いまだよくもえりとゝのへられざりしまゝにてや、傳はり來ぬらむ、哥のよきあしきわきためなく、集められたり、哥のみならず、よみ人のしるしざまも、みだりにて、しどけなきを、詞書はしも、時(トキ)世のふるければ、すべてみやびたることは、後ノ世の人の及ばぬさまなるを、それにあはせては、しるしざまの、いと〳〵みだりがはしくして、こゝろえがたきふしぶしもまじり、又例もさだまらずなどして、主客(コナタカナタ)のいひざまのたがへることなどつねに多し、主客(コナタカナタ)とは、たとへば男と女とのあひだの事をかくに、男の哥の詞書には、その男の方を主(コナタ)とし、女のかたをかなたとし、女の哥の詞書には、その女を主(コナタ)とし、男を客(カナタ)として書べきをいふ、然るに此集、此いひざまみだれて、まぎらはしきことのみおほき也、そも〳〵詞書のさま、三代集の中に、古今集はいと正しくして、たがへるふしをさ〳〵見えず、拾遺集は、しどけなきことも、おほくまじりたれど、この後撰集のごとみだりにはあらず、此集ぞ殊にみだりなりける、されば此集をよむ人、哥はさる物にて、まづ詞書のこゝろえがたきに、くるしむところ〳〵おほかめるが、心ぐるしさに、おほけなきしわざにはあれども、宣長今、そのわろき詞書どものかぎりをあげて、こゝろみに改めなほしもし、又のぞくべき詞、くはふべき詞などをもしるして、みなそのよしをさとして、此集よまむ人のしるべとす、拾遺集よりこなたのよゝの集ども、詞書のよきあしきも大か

たこれになすらへてしるべし、さて今詞書のかしらに、〇を書るは、改めたるしるし也、かたはらにちひさき〇を付たるは、今くはへたる詞のしるし也、「　」のうちに書たるは、のぞくべき詞のしるし也、又左のかたはらに、●をつけたるは、詞のはたらきを、いさゝか改めたるしるしなり、「を書るは、論ある詞書也、見む人みな心得て見べし、

一の巻　春哥上

ある人のもとに、にひ參りの女、〔の侍りけるが〕月日久しくへて、むつきのついたちごろに、まへゆるされたりけるに、雨のふるを見て、　　よみ人しらす

白雲のうへしるけふぞ春雨のふるにかひある身とはしりぬる

此詞書、もしよみ人の名を擧たる哥のならば、にひ參りの女の侍けるがとは、書まじき例也、卽チ其人の哥なれば也、然れども名をあげずして、たゞ女或は男或はおや或はむすめなどいへる詞書は、かやうにも書ク例なれば、これは難にはあらざるを、なほの侍りけるがといふ詞は、のぞくべき也、さてまへゆるさるとは、主人の前に出る事をゆるさる也、哥のうへしるも其意也、

○紀長谷雄朝臣の家にまかれりける時見けるに、梅の木侍けり、あるじ、此花咲なむ時、かならずせうそこせんといひ侍けるを、音なく侍ければ、　　朱雀院の兵部卿のみこ

梅の花今はさかりになりぬらんたのめし人のおとつれもせぬ

此かへし、紀長谷雄朝臣なれば、家は其家なるを、あひしりて侍ける人の家とあるはひがこと也、此たがひ集中に多し、皆なずらへてさとるべし、

○兼輔朝臣の、ねやのまへに、紅梅をうゑて侍けるを、三とせばかりの後花咲ける時に、かの家にまかれりけるに、女ども其枝をゝりて、みすの內より、これはいかゞといひ出して侍ければ、　　貫之

春ごとに咲まさるへき花なれはことしをもまだあかすとぞ見る

此詞書、今くはへたる詞なくては、ことたらぬこゝちす、

二の巻　春哥中

○友だちにて伊勢が、おもしろきさくらををりておこせたりければ、　　よみ人しらす

さくら花色はひとしき枝なれとかたみに見れはなくさまなくに

此かへし伊勢なれば、いせがとこそ有べきに、友だちのといへるは、例のたがへり、又おこせといふべきを、つかはしといへるもわろし、すべて其哥のよみ人の方へ、他(ホカ)よりおこせるを、つかはしと書る所、いとおほかる、こは他集にも例はあれども、なほ正しからず、つかはすとは、他へやるをこそいへ、こなたへおこせるをいかでかさはいはん、

○家のうづまさに侍けるに、そこの花おもしろかなりときこしめして、內よりをりにつかはしたりけるに、そへて奉るとて聞えさせたりける、　　衛門の御息所

山里に散なましかはさくら花にほふさかりもしられさらまし

こは件のごとく有べき也、御息所の哥なれば詞書のはじめに其名

をいへるは、他人のと聞えてたがへり、又次の哥御かへしとあれば、これはみかどの聞しめし及びて、折につかはしたるなるに、本のまゝにてはいづこよりとも知がたし、又御かへしによるに、花を折て奉りたる也、然るに、そへて奉るといふ詞なくては、たゞ此哥ばかりを聞えさせたるごとく也、また作者を擧る所に、その名なければ、この哥も上の藤原師尹朝臣の哥ときこえて、いとまぎらはし、

忍びたりける男のもとに、春行幸有べしと聞て、さうぞく一くだりてうじてつかはすとて、櫻色のしたがさねにそへて侍ける、

よみひとしらす

わか宿の櫻の色はうすくとも花のさかりは來てもをらなん

こは春行幸有べしと聞て、男のもとへさうぞくをおくる也、行幸はいづこへともなし、然るに此詞書のさま、男の家へ行幸有べしといへるやうにてまぎらはし、されど古への雅文には、かくさまにいへる例もつねのことなり、をとこの許にさうぞくをおくるは、供奉の料に也、

三の卷　春哥下

あれたる所に住侍ける女、つれ〴〵におもほえ侍ければ、庭にあるすみれの花をつみて、人のもとにいひつかはしける、

○詞のつかれを

よみ人しらす

我やとにすみれの花のおほかれはきやとる人やあるとまつ哉

人のもとに、或は男のもとになどいふことなくては、ことたらずしどけなし、此例集中の詞書にいと多し、みな詞をくはふべし、

○春花見に出たりけるを見つけて、ある男の文おこせたりけるを、かへりごともせざりければ、あくる朝、昨日のかへり事と、こひにおこせたりければ、いひ遣したりける、

よみ人しらす

春霞立なから見し花ゆゑにふみとめてける跡のくやしさ

此詞書、主客の詞たがひていとまぎらはしければ、右のごとくあらたむべし、

〔もとよしのみこ〕兼茂朝臣のむすめにすみ侍けるを、法皇のめして、かの院にさふらひければ、えあふ事も侍らざりければ、明るとしの春、櫻の枝にさして、かのざうしにさしおかせける、

もとよしのみこ

花の色はむかしなからに見し人の心のみこそうつろひにけれ

はじめのもとよしのみことゝいふことゞひがこと也、のぞくべし、

○敦忠朝臣、すけのぶが母の家に、身まかりて後も、さき〴〵まかりかよひけるを、さくらの花のちりけるをりにまかりて、木のもとに侍ければ、家の人のいひいだしける、

よみ人しらす
今よりは風にまかせむさくら花ちる木のもとに君とまりけり
右のごとく改めて見べし、助信は、敦忠卿の子也、
○源清蔭朝臣あひしれりけるを、久しうとはざりければ、花盛にいひつかはしける、　讀人しらす
我をこそとふにうからめ春霞花につけても立よらぬかな
此詞書、あひしれりける人のさあるはわろし、右の如くあらためて見べし、
山さくらを折て、人のもとに送り侍るとて、
い　せ
きみ見よと尋ねてをれる山櫻ふりにし色とおもはざらなん
○ある人のやまとにまかりて、ほど久しく侍けるに、あひしりて侍ける人のもとより、月ごろはいかにぞ、花は咲たりやといひて侍ければ、　よみひとしらす
みよし野のよしのゝ山のさくら花しら雲とのみ見えまかひつゝ
此詞書、右のごとく改めて見べし、ほうしにならんの心ありけるといふ詞は、此作者のみづからの家集に有しまゝなるべし、哥にあづからぬことなれば、此集にてはようなきいたづらごと也、
やよひの下の十日ばかりに、〔三條右大臣〕兼輔朝臣の家にまかり渡りて侍けるに、ふぢの花さけるやり水のほとりにて、かれこれおほみきたうべけるついでに、
三條右大臣
かぎりなき名におふふぢの花なればそこひもしらぬ色の深さか
ついでにいふ、此三首の次の詞書に、琴笛なとして云々とあるも、此同時のことにてつゞけり、
○つねにまうできあひける所に、紀貫之さはると有て、久しくまできあはずして、さしかへりにけり、あくる春、やよひのつごもりにつかはしける、　藤原雅正
君こすて年はくれにき立かへり春さへけふになりにけるかな
三月のつごもりの日、人の許に、久しうまうでこぬよしいひやりける文のおくに、書つけ侍ける、　つらゆき
又もこむ時ぞと思へとたのまれぬ我身にしあれは惜き春哉
此詞書、まぎらはし、いひて侍る文とは、人の許よりか、然らば人のもとよりといふこと有べし、又つらゆきより、人の許へいひやるならば、右のごとく、人の許にといふことをくはふべし、さていづれにても、まうでこぬとは、參らぬといふこと也、

四の卷　夏哥

○卯月ばかり、友だちの、ちかき所に住侍りて、かならずせうそこつかはしてんと侍けるに、おとなく侍ければ、

よみ人しらす

郭公きゐるかきねはちかなからまちどほにのみ聲のきこえぬ

此詞書、いひさまぎらはしければ、右のごとく改めて見べし、又おとなくなり侍ければと有本はわろし、又哥の三の句ちりなからとある本も誤也、

物いひかはし侍ける人の、つれなく侍ければ、その家の垣ねの卯の花を折て、いひいれて侍ける、　よみひとしらす

うらめしき君かかきねの卯花はうしと見つゝも猶たのむ哉

此詞書、ものいひつかはしとある本は誤也、

題しらす　よみひとしらす

時わかす月か雪かと見るまてにかきねのまゝにさける卯花

此題しらすといふこと、おちたる本有

卯月ばかり、〔の〕月おもしろかりける夜、人につかはしける、　よみ人しらす

あひ見しもまだみぬ戀もほとゝきす月になくよそよにゝさりける

○藤原かつみの命婦にすみ侍けるに、人の手にうつり侍りにける又のとし、杜若につけてつかはしける、　東峯義方朝臣

いひそめし昔のやとのかきつはた色はかりこそかたみなりけれ

此詞書いとまぎらはしくてわきまへがたし、をとことあるは、哥によるに、作者のみづからのごとく聞ゆれば、のぞきて、右のごとく改めて見べし、もしくは男は、他の男にて、そのをとこの、他の女の手にうつれることを、とふらひにやれるか共思へど、さては哥にあはず、人の手にうつるは、かつみが、他のをとこにうつれるなり、

三條右大臣、少將に侍ける時しのびにかよふ所侍けるを、うへのをのこども、五六人ばかり、五月の、なが雨すこしやみて、月おぼろなりける夜、酒たうべんとて、かの女のもとにおし入て侍けるを、少將はかれかたにて、侍らざりけるに、たちやすらひて、あるじいだせなどたはふれ侍ければ、あるじのをんな、

五月雨にながめくらせる月なればさやかに見えす雲かくれつゝ

あるじとは、少將をいへるか、

○五月長雨のころ、久しく絶侍りけるに男の、まできたりければ、をんな、

つれ〳〵となかむる空のほとゝきすとふにつけてそ音になかれける

〔女の〕もの見にまかり出たりけるに、ことくるま、かたはらにきたりけるに、物などいひかはして、後につかはしける、　伊せ

ほとゝきすはつかなる音を聞そめてあらぬもそれとおぼめかれつゝ

女のといふこのぞくべし、又まかり出の、出の字なき本はわろし、

○詞のつかねを

師尹朝臣の、またわらはにて侍ける時、とこ夏の花をなりて、もちて侍ければ、この花につけて、内侍のかみのかたにおくり侍ける、

太政大臣

なてしこはいつれともなくにほへともおくれてさくはあはれ成けり

師尹は、作者貞信公の末の子也、内侍のかみは、貴子といひて同く長女也、

月ごろわづらふと有て、まかりありきもせで、藤原雅正がもとにえまでこぬよしいひて、文のおくに、

つらゆき

花もちり時鳥さへいぬるまできみにもゆかずなりにけるかな

までこぬは、参らぬといふ也、

五の巻　秋上

○文月ばかり、業平朝臣のもとにいひつかはして侍ける、女、

秋萩を色どる風の吹ぬれは人の心もうたかはれけり

○源昇朝臣、時々まかりかよひける時に、文月の四五日ばかりに、なぬかの日のれうに、さうぞくてうじてといひおこせて侍ければ、

閑院

あふ事はたなはたつめにひとしくてたちぬふわざはあへずそ有ける

○七月七日に、ゆふかたまでこんといひつかはして侍ける人のもとに、雨ふり侍ければ、まからでいひ遣しける、

源中正

雨ふりて水まさりけり天の川こよひはよそにこひんとや見し

かれにける男の、七日の夜まできたりければ〔女のよみて侍ける〕

ひこほしのまれにあふよのとこ夏はうちはらへとも露けかりけり

上に、男のといふとあれば、女の云々はなくて有べし、

六の巻　秋哥中

○はゝのぶくにてさとに侍けるに、内より御ふみ給へりける、御返事に、

近江更衣

さみたれにぬれにし袖にいとゝしく露おきそふる秋のわびしさ

ぜんていと書るは、いかゞ也、

亭子院の御前の花の、いさおもしろく、朝露おけるを、めして、伊勢に見せさせ給ひて、

法皇御製

白露のかはるも何かをしからむありての後もやゝうきものを

めしては、いせをめして也、

○いせをあひしりて侍けるに、あだ名たちて侍ければ、久しくとふらはざりけるに、八月ばかりになどかいとつれなきといひおこせて侍ければ、

よみひとしらす

しら露のうへはつれなくおきゐつゝ萩の下葉の色なこそ見れ

○伊勢か許より、をばなのいと高きをおこせたりける、返事に、しのぶ草をくはへて、

中宮宣旨

花すゝきほにいつるこさもなきやごは昔しのふの草をこそみれ

右の三首の詞書みな、伊せが家集に書たるまゝにのせられたる故に、主客（コナタカナタ）の詞たがへり、集中此たぐひ、たがひのいと多きは、いづれも其家集のまゝと見えたり、

七の巻　秋哥下

○藤原雅正がとなりに住侍ける時、九月八日家の菊に、わたをきせにおこせたりけるを、又のあしたをりてかへすとて、

いせ

數しらす君かよはひをのばへつゝなたゝる宿の露さならなん

○あひしりて侍ける男、のち〳〵までこずなりにけるな、そのをとこのおやのきゝて、なほまかりさへと申をしふときゝて、後にまできたりけるときに、

平伊望朝臣女

秋ふかみよそにのみきくしら露のたがことの葉にかゝるなるらん

菊の花をれりとて、人の、いひ侍ければ、

よみ人不知

○詞のつかねを

いたつらに露におかるゝ花かとてこゝろもしらぬひとやなりけん

此詞書は、或人の家の菊花を、人のをれるを、あるしのいかりて、いひとがむるを、此作者のきゝてよめるよし也、いひ侍るとはその事をとがめいふ也、

長月のつごもりの日、もみちにひをゝつけて、人のもとよりおこせて侍ければ、

ちかぬかむすめ

宇治山の紅葉を見すは長月の過行日をもしらすそあらまし

人のもとよりといふと、はしめにくはへんも、よろしかるべし、又は終りを、おこせて侍ける人の許にとしてもよし、

八の巻　冬哥

○すますなりにけるいせが家にまかりて、紅葉にかきていひつかはしける、

枇杷左大臣

人すまずあれたる宿をきて見れは今そ木葉は錦おりける

すまぬは、此作者のかよひすまぬ也、

おやの、ほかにまかりて、おそくかへりければ、つかはしける、人のむすめのやつになりける、

神な月時雨ふるにもくるゝ日をきみまつほとはながしとそ思ふ

人のむすめの云々といふと、右のごく、詞書に書つゞくべし、さておそくかへるといふは、すべてかへることのおそきよしにて、

○詞のつかねを
いまだ歸らぬをいふ詞也、

九の卷　戀哥一

源おほきが通ひ侍けるを後々はまからずなり侍けるを、となりのかべのあなより、〔おほきを〕はつかに見てつかはしける、
するか

まとろまぬかへにも人を見つるかなまさしからなん春の夜のゆめ

おほきをといへるは、つたなし、

○ふぢ原かつみをあひしりて侍けるに、かへりこと見むとてつかはしける、　もとよしのみこ

くや〳〵とまつ夕くれと今はとてかへるあしたといつれまされる

○あひまちけるに、平定文、ひさしうせうそこせざりければ遣しける、　きのめのと

影たにも見えすなり行山の井はあさきよりまた水や絶にし

女に、年をへて心ざし有よしを、のたまひわたりけるに、〔女〕なほことしをだにまちくらせとたのめけるを、その年もくれて、明る春までいとつれなく侍ければ、
よみ人しらす

このめはる春の山田をうちかへし思ひやみにし人そ戀しき

一本に、わたりけるをと、をもじあれど猶にゝてよろし、

○いせが許に遣しける、　贈太政大臣

ころをへてあひ見ぬ時はしら玉のなみたも春は色まさりけり

○あつよしのみこの、こゝかしこにかよひすむ所おほくて、つねにしもとはざりけるを、みづからも又、色このみなる名たちけるを、みこのうらみ侍ける、かへり事に、　源たのむかむすめ

つらしともいかゝ恨みんほとゝきすわかやとちかくなく聲はせで

○あひかたらひ侍ける人の、後に久しうせうそこもせざりければ、
よみひとしらす

うれしげに君かたのめし言の葉はかたみにくめる水にそ有ける

〔をさこの〕はじめて女のもとにまかりて、あしたに雨のふるにかへりて、つかはしける、
よみひとしらす

今そしるあかぬわかれのあかつきはきみをこひぢにぬるゝ物とは

をとこの、こと女むかふるを見て、おやの家にまかりかへるとて女、

わかれなはかなしきものときゝしかとうしろやすくもおもほゆる哉

○心みじかきやうにこそ聞ゆれと、女のいひければ、
よみ人しらす

いせのうみにはへてもあまるたくなはのながき心はわれそまされる

此詞書のさま、あやしくて心得にくし、聞ゆとは、いふとをきくに、心みじかき人のやうにきこゆると、いへるにや、又は心

みじかき人のやうに世中にていふ人也といふ意か、いづれにしても、人也といふ詞いかゞなり、さだかならねど、こゝろみになほさば、右のごとく有べき也、

○源信明がもとに遣しける、　　中務

はかなくておなし心に成にしをおもふがごとはおもふらんやぞ

十の卷　戀哥二

○まかり出たるに、御ふみたまはせたりければ、　　中将更衣

けふ過ばしなましものを夢にてもいづこをはかさ君がとはまし

○おほつぶねをいひわづらひて、つかはしける、　　平定文

何事を今はたのまむちはやふる神もたすけぬ我身なりけり

○あひしりて侍ける人のもとに、久しうとはずしてまかりたりけるに、門よりかへしければ、　　壬生忠岑

すみのえのまつに立よるしら波のかへるをりにや音はなかるらん

○定國朝臣の、御やす所と、みちのくにゝあるところ〴〵をつくして、哥によみかはしたりけるに、今はよむべき所なしといひければ、　　源清蔭朝臣

さてもなほまかきのしまの有ければ立よりぬべくおもほゆる哉

○詞のつかねを

かたふたがりけるころ、たがへにまかるとて、女に、　　藤原有文朝臣

かた時も見ねはこひしき君をおきてあやしやいく夜外にねぬらん

○人を思ひかけて、こゝちもあらず有て、物もいはずして、日くれぱおきもあがらざりけるを、きゝて、此おもひかけたる女の許より、などかくすき〴〵しくはといひて侍ければ、　　よみひとしらす

いはで思ふ心ありその濱風にたつしら波のよるそわひしき

○心かけて侍けれど、いひつかむかたもなく、つれなきさまに見える女のもとに、つかはしける、　　よみ人しらす

ひとりのみこふれはくるしよふこ鳥聲になきいてゝ君にきかせん

○あひしりて侍ける女に、ふみつかはしけるを、返事もせで、たえにければ、又つかはしけるに、　　よみひとしらす

ふしなくて君か絶にししら糸はよりつきかたきものにそ有ける

此詞書、本のまゝにては、いまだあはぬ女のもとへ、文やりたるごと聞えて、絶にければといふにも、哥にもかなはず、又男のといふことはのぞくべし、

○おほつぶねを思ひかけて、つかはしける、　　平定文

濱千鳥たのむをしれとふみそむる跡うちけつな我をこす波

〇かくいひやり侍ければ、又の朝に、とこ夏の花につけて、かへし、

よみひとしらす

おく露のかゝるものとは思へともかれせぬものはなてしこの花

宮つかへ云々の詞は、さしも用なければ、なくても有べし、一本によみ人しらずと有よろし、

〇又かへし　　もろあきらの朝臣

かれすともいかゝ頼まむなてしこの花はときはの色にあらねは

十一の巻　戀哥三

〇かりそめなるところに侍けるころ、心かはりにける男の、こゝはかくびんなき所なれば、心ざしは有ながらなんえ立よらぬといへりければ、所をかへてまちけるに、見えざりければ、

よみ人しらず

宿かへてまつにも見えす成ぬれはつらき所のおほくもあるかな

とき／＼見えける男の、ゐる所のさうじに、とりのかたを書つけて侍ければ、あたりにおしつけ侍ける、

本院侍従

ゐにかける鳥とも人を見てしがなおなし所をつねにとふべく

此詞書、男のゐる所とは、此哥をよみたる時に、此をとこの居たる所をさしていへるにて、侍従がつかへ居る、本院の内なるべし、さうじは、障子也、曹司といへる説はひがと也、かきつけて侍とは、たゞ書てあると歟、然らば、つけてといふ事いかゞ也、書て侍ければとこそいふべけれ、もし又つけてといふに意あるか、そはさだかならず、

大納言國經朝臣の家に侍ける女に、(平定文)いと忍びてかたらひ侍て、行末までちぎり侍けるころ、この女にはかに贈太政大臣にむかへられて、わたり侍にければ、ふみたにもかよはすかたなくなりにければ、かの女の子のいつゝばかりなるが、本院のにしのたいにあそびありきけるを、よびよせて、はゝに見せ奉れとて、かひなに書つけ侍ける、

平定文

むかしせしわかかねとのかなしきはいかにちぎりし名残なるらん

内にまゐりて、久しう音せざりける男に、

(をんな)

もゝしきはをのゝえくたす山なれや入にし人のおとつれもせぬ

をとこと一方をいへば、一方は女といはでも女と聞え、女と一方をいへば、一方は男といはでも男と聞ゆる也、すべて此例也、

〇おやにしのびて、をとこをかよはせけるを、男もしばしは人にしられじといひ侍ければ、

よみ人しらす

なき名そと人にはいひて有ぬへし心のとはゞいかゝこたへむ

〇われもひともつゝむと有て、はなれぬべく侍ければつかはしけ

ろ、男、

あひ見てもわかるゝ事のなかりせはかつ〳〵ものはおもはさらまし

此詞書、しどけなくて、あひかたらひける人といへる、人も、こちなきいひさま也、哥もをとこのか、女のかわきまへがたし、今男さいふもじを加へたるは、女とも有べし、

◯小野好古朝臣の女に、遣しける、　これまさの朝臣

人しれぬ身はいそけともとしをへてなとこえかたきあふさかの關

人をあひしりて侍けるに、やむことなきことによりて、遠き所にまかりて、たゝん月ばかりになん、まかりかへるべきといひて、まかりくだりて、道より遣しける、　つらゆき

月かへて君をは見んといひしかと日たにへたてすこひしき物を

此詞書、本のまゝにては、言たらず、

◯いせが宮づかへして侍けるを、あひしりて侍けるを、ほど久しく有て、物いはんといひ侍けるに、おそくまかり出ければ、

枇杷左大臣

よひのまにはやなくさめよいそのかみふりにしとこも打はらふべく

おそくまかり出とは、局より出て、逢ことの遲き也、

◯兼覽王をあひしりて侍けるにまうでこずなりて後、心にもあらず、こゑをのみきくばかりにて、又音もせず侍ければ、つかはしける、　よみひとしらす

◯詞のつかねを

かりかねの雲ゐはるかにきこえしは今はかぎりのこゑにそ有ける

◯思ひかれて、まからすなりにける女の許より、なほさりになどか音もせぬと、いひおこせたりければ、　よみひとしらす

わすれなんと思ふ心のやすからはつれなき人をうらみましやは

なほざりには、なほざりにもの意也、

よひに女にあひて、かならず後にあはむとちかごをたてさせ侍けるに、あはざりければ、あしたにつかはしける、

藤原滋幹

ちはやふる神ひきかけてちかひてしこともゆゝしくあらがふなゆめ

◯下野が許につかはしける、　源中正

あふみちをしるへなくても見てしかな關のこなたはわひしかりけり

十二の巻　戀哥四

◯源巨城がつらくなりにければ、今はとて、さうぞくなどかへしかはすとて、　平なかきかむすめ

今はとて梢にかゝるうつせみのからを見んとはおもはさりしを

(男の)物なといひつかはしける女のゐなかの家にまかりて、たゝきけれども、きゝつけずやありけん、かどもあけずなりにければ、田のほさりに、かへるのなきけるをきゝて、

よみひとしらす

あしひきの山田のそほづ打わひてひとりかへるの音をそ鳴ぬる

此詞書、いひつかはしは、いひかはしを寫誤れるなるべし、さる例上にもありき、

○いせが許につかはしける、　贈太政大臣

ひたすらにいとひはてぬるものならはよしのゝ山に行へしられじ

○伊せが許に遣しける、　よみ人しらす

すみよしのきしにきよする沖つ波まなくかけてもおもほゆる哉

○贈太政大臣、つらかりければ、つかはしける、　伊せ

こひてへんと思ふ心のわりなさはしにてもしれよ忘れかたみに

秋きりのたちたるつとめて、いとつらければこのたびばかりなんいふべきと、男のいひたりければ、　いせ

秋とてや今はかぎりの立ぬらん思ひにあへんものならなくに

此哥四の句、家集にあへんとあるぞよろしき、あへぬは誤なり、

○心のうちに思ふと有ければ、

見し夢の思ひ出らるゝよひごとにいはぬをしるはなみた成けり

此詞書、本のまゝにてはしどけなし、

とき〲物いひ侍けるをとこの、ほどひさしうとはず侍ければ、　よみ人しらす

高砂の松をみどりと見しことはしたの紅葉をしらぬ也けり

○三條右大臣、せうそこし侍けるにいなふねのといふことをかへりごとにいひやりて侍ければ、たのみていひわたりけるに、なほ逢ざりければ、しばしと有しを、いかなればかくはと、いひおこせて侍けるに、いひつかはしける、　よみひとしらす

なかれよるせゝの白波あさければとまるいなふねかへるなるへし

○源是茂朝臣、心ざしおろかに見えけるに遣しける、　なかきかむすめ

またさりし秋はきぬれと見し人の心はよそになりもゆく哉

○春澄善繩朝臣の女に、せうそこしば〱つかはしけるを、ちゝはゝのせいし侍ければ、えあひ侍らで遣しける、　源よしの朝臣

あふみてふかたのしるへもえてしかなみるめなきこと行て恨みん

をとこのもとより、かくしつゝよをやつくさむ高砂のといふことゝを、いひおこせて侍ければ、　よみひとしらす

高砂のまつといひつゝ年をへてかはらぬ色ときかはたのまん

○いとしのびて、まかりて、あひたる人に、　よみひとしらす

まどろまぬ物からうたてしかすかに現にもあらぬこゝちのみする

此詞書の、ありきてはうつし誤なるへし、心みにいはゞ、右のごくなどにや、

○大輔がもとにまかりたりけるに、侍らざりければ、かへりてまたのあしたに遣しける、

朝忠朝臣

いたつらに立かへりにししら波のなごりに袖のひる時もなし

よしふるの朝臣に、さらにあはじと、ちかごとをして、又のあしたに遣しける、

藏内侍

ちかひても猶思ふにはまけにけりたがためをしき命ならねは

此詞書、よしふるの朝臣にの、にもじなき本は誤也、女のもとに、しのびてまかりけれど、あはざりければ、

みち風

なにはめにみつさはなしにあしのねのよのみしかくて明ぞわひしさ

ものいはんとて、大輔がもとにまかりたりけれど、さきだちて、むねもちが侍ければ、はやかへりねとひ出して侍ければ、

かへるへきかたもおほえす泪川いつれかわたるあさせなるらん

十三の卷　戀哥五

○せうそこかよはしけれど、まだあはざりける女を、これかれ、逢にけりさいひさわぐを、あらがはざなりと、女のうらみおこせたりければ、

よみひとしらす

はちす葉のうへはつれなきうらにこそ物あらがひはつくといふなれ

これかれ、逢にけりといひさわぐは、逢にけりと、これかれの人々のいひさわぐ也、あらがはざなりは、いまだ逢はずと、あらがふべきとなるに、などてあらがはざるぞと、女の男を恨むる也、此詞書、本のまゝにては、男をといへる、主客のたがひ有て、すべてまぎらはし、さて哥の意は、あらがはずして、つれなくてあるこそ、言にいてゝあらがふにはまさりて、あらがふにはあれといふ意也、

○いせが許より、いとなんこひしきと、いひおこせたりければ、おにのかたなかきてやるとて、

一條

こひしくは影をだに見てなくさめよわからちとけてしのぶかほ也

「人のむすめに、しのびてかよひ侍けるに、つらげに見えて侍ければ、せうそこ有ける返事に、

よみ人しらす

人ごのうきなもしらすありかせしむかしなからの我身ともかな

見なれたる女に、物いはんとてまかりたりけれど聲はしながら、かくれければ遣しける、

よみひとしらす

ほとゝきすなつきそめにしかひもなく聲をよそにも聞渡る哉

此詞書、女にの下に、又とある本は、ひがこと也、

○しのびてかよひけるをんなの許に、霜のいたくふりける夜まからで、つとめて遣しける、

よみひとしらす

おく霜の曉おきを思はすはきみかよどのによがれせましや

此詞書、本のまゝにては、いとまぎらはし、

〇詞のつかねを

えがたう侍ける女の、家のまへよりまかりけるを見て、いづこへいくぞと、いひ出して侍ければ、　藤原爲世

あふとのかた野へとてそわれはゆく身をおなしなに思ひなしつゝ

此詞書、まぎらはし、女のと讀切べし、さて家け、女のいへにて、まへよりまかるは、其家のまへを、爲世がわたるなり、見ては女の、ためよを見て也、上の女のといへる詞は、此見てへかゝれり、

〇やまひにわづらひて、女の許に久しうまからで、つかはしける、

よみひとしらす

今までもきえて有つる露の身はおくへき宿のあれは成けり

〇西四條の前齋宮、まだみこにものしたりし時、心ざしありて思ふ事侍ける間に、齋宮にさだまりにければ、そのあくるあしたに、さか木の枝につけて、さしおかせ侍ける、

敦忠朝臣

いせの海のちひろの濱にひろふとも今はなにてふかひかあるへき

此詞書、ものし玉ひし時、又さだまり給ひにければとある、給ッといふ詞、例にたがへり、右のごく改むべし、

〇朝よりのあそん、としごろせうそこかよはし侍けるを、えうなし、今はわすれねと、いひつかはして侍ければ、後にこと女にいひつきて、せうそこもせずなりにければ、

本院のくら

わすれねといひしにかなふ君なれととはぬはつらき物にそ有ける

〇おやのまもりける女を、いなともせともいひはなたでと、男のいひければ、　伊せ

いなせともいひはなたれすうき物は身を心ともせぬよ成けり

〇ものいひ侍ける女の許に、久しくおとづれずして、ほどへてまかりたりけるに、などかひさしうといへりければ、

よみひとしらす

年をへていけるかひなき我身をは何かは人にありこしられん

〇女の許に、いとしのびてまかりたりけるに、せいする人ありて、ののしりければ、まかりかへりて遣しける、

よみひとしらす

あさりする時そわひしき人しれすなにはの浦にすまふ我身は

公賴朝臣思ひかれて、今まかりかよふをんなの許にのみ、まかりければ、　寛湛法師母

なかめつゝ人まつよひのよふこ鳥いつ方へとかゆきかへるらん

〇兼輔朝臣しのびてかよひ侍けるを、今かへりてなどたのめおきて、おほやけのつかひにいせのくにゝまかりて、かへりまうできて、久しうとはず侍ければ、　少將內侍

人はかる心のくまはきたなくてきよきなきさをいかてすきけん

○つねにまかりて物などいふ女の、いまはなまうでこそ、人もうたていふなりと、いひいだして侍ければ、

よみ人しらす

きてかへる名なのみぞたつから衣したゆふひもの心とけねは

○こと女に物いふときゝて、もとのめなる、中将内侍のふすべ侍ければ、

よしふるの朝臣

めも見えすなみたの雨のしくるれは身のぬれきぬはひるよしもなし

○人のもとにまかり通ひけるを、門よりのみかへしけるに、からうじてすだれのもとによびよせて、かうでさへや心ゆかぬと、いひいだしたりければ、

よみひとしらす

いさやまた人の心もしら露のおくにもとにも袖のみそひつ

此詞書、まかりたりけるにとあるは、門よりのみとある、のみにかなはず、又からうじてにもかなはず、のみといふは、いつもいつも門よりのみの意、からうじても、たゞ〳〵かよへるうへの事なるに、まかりたりけるにとては、一度のことゝ聞ゆ、同しことながら、此次なる詞書は、いひさまさても有べし、

いせに久しういひわたり侍けるに、つれなくのみ侍りければ、

仲平朝臣

たのめつゝあはて年ふるいつはりにこりぬこゝろを人はしらなん

此哥のよみ人の事、古今集戀二餘材抄にくはしく論じたり、なか平朝臣也、

つねに雨にもさはらずまできて、そら物語などしけるをとこの、門よりわたるとて、けふは雨のいたくふればなん、まかりすぎぬるといひたれば、

よみ人不知

ぬれつゝもくると見えしは夏引の手ひきにたらぬ糸にや有けん

○朝綱朝臣ふみなとおこせて侍けるを、こと女にいひつきてひさしうなりて、秋とふらひて侍ければ、をんな、

いつかたにとつてやらんかりかねのあふ事まれに今はなるらん

○をとこのかれはてぬに、こと男をあひしりて侍ける女、もとの男の、あづまへまかりけるをきゝてつかはしける、

よみひとしらす

ありとたに聞へきものをあふさかのせきのあなたそはるけかりける

○かれにける女の許に、思ひいてゝまかりて、物などいひてかへりて、

よみ人しらす

かつらきやくめぢにわたす岩はしの中々にてもかへりぬるかな

十四の巻　戀哥六

○女の許にまかりて、物いひ侍けるに、ほどもなく夜のあけ侍りにければ、まかりかへりて、

よみひとしらす

うきよとは思ふものから天の戸のあくるはつらき物にそ有ける

○いひわづらひてやみにける女を、又思ひいでゝさふらひ侍けれ
ば、いとさだめなき心かなといひて、あすか川のこゝろをいひお
こせて侍ければ、
よみ人しらす
明日香川心のうちになかるれはそこのしからみいつかよとまむ
○おなじ所に侍ける女を、思ふ心侍けれど、いはでしのびけるを、い
かなるをりにか有けん、其をんなのあたりにかきておとしける、
よみ人しらす
しられしなわか人しれぬ心もて君を思ひのなかにもゆとは
心ざしをはあはれとおもへど、人めになんつゝむといひて侍ける
人に、
よみひとしらす
あふばかりなくてのみふるわか戀を人めにかくることのわひしさ
○甲斐をあひしりて侍けるに、又人ものいふと聞て、
藤原守文
松山に波高き音そきこゆなる我よりこゆる人はあらじを
此哥の詞書の事、季吟抄の説、さもあるべし、
○女に物いはんとてまかりたりけれど、こと人にものいひければか
へりて、
よみひとしらす
わかためにかつはつらしと三山木のこりともこりぬかゝるこひせじ
○まかりて物いひける女に、大かたはむつましかりけれど、ちから
はえあはずして、
よみ人しらす
まちかくてつらきを見るはうけれともうきは物かはこひしきよりは
○あひしりて侍ける人のもとに、久しうまからざりけるに、わすれ
草何をかたねと思ひしはといふことを、いひおこせたりければ、
よみひとしらす
わすれ草名をもゆゝしみかりにてもおふてふ宿は行てたに見し
人をいひわづらひて、こと人にあひ侍てのち、いかゞ有けん、は
じめの人に思ひかへりて、猶えあはでほどへにければ、ふみはや
らずして、あふぎにたかさごのかたかきたるに、つけて遣しける、
源庶明朝臣
さをしかのつまなき戀を高砂のをのへの小松きゝもいれなん
○をとこの、久しうまでこずなりにければ、十月ばかりに雪のすこ
しふりたるあしたに、いひ侍ける、
右近
身をつめばあはれとそ思ふはつ雪のふりぬることも誰にいはまし
○女の、うらむるとありて、おやのもとにまかりわたりて侍けるに、
雪の深く降て侍ける朝に、むかへに車つかはしけるせうそこにく
はへて遣しける、
兼輔朝臣
しら雪のけさはつもれる思ひかなあはでふるよのほともへなくに

十五の巻　雜哥一

「はちすのはひをとりて、
よみ人しらす

はちす葉のはひにぞ人は思ふらんよにはこひぢの中におひつゝ

此詞書、云々とりて、人のもとに遣しける、など有べき哥のさま也、はひは、和名抄蓮類に爾雅云其本蔤郭璞注云莖下白蒻在二泥中一者也和名波知須乃波比、

○あひしりて侍ける女を、心にもいれず侍ければ、こと人の心さしあるにつき侍にけるを、なほしもあらず、ものいはんと申つかはしたりけれど、返事もせず侍りければ、

よみひとしらす

はまちとりかひなかりけりつれもなき人のあたりは鳴わたれども

○齋院のみそぎの垣下に、殿上の人々まかりて、曉にかへりにけるにうまか許に遣しける、

右衞門

我のみは立もかへらぬ曉にわきてもおける袖の露かな

人のもとに、ひたゝれこひにつかはしけるに、うらなんなき、それはきじとや、いかゞといひたれば、

藤原元輔

住吉のきしともいはしおきつ波なほうちかけようらはなくとも

法皇のはしめて御ぐしおろし給ひて、山ぶみし給あひだ、后なはじめ奉て、女御更衣なほひとつ院にさふらひ給ける、三年といふになん、みかとかへりおはしましたりける、むかしのごとおなし所にて、御ぐしおろし玉ふけるついでに、

○詞のつかねを

言の葉に絶せぬ露はおくらんや昔おほゆるまとゐしたれは

七條のきさき

此詞書、昔のごと同じ所にてとは、法皇の御ぐしおろさせ給ひし時のごとく、又おなじ所にて、此后も同じさまに、御ぐしおろし給ふよし也、御哥にむかしおぼゆる圓居とよみ給へるも、法皇の御かざりおろし玉ひし時の事をのたまへる也、

○しがのからさきにて、人のはらへしける所にまかりける時に、かの下づかへにみるといふ侍けるに、心をつけていひたはふれけり、はらへはてゝ車より物かづけゝる、その裳のこしにかきつけて、みるにおくり侍ける、

くろぬし

なにせむにへたの見るめを思ひけんおきつ玉もをかづく身にして

元長親王すみ侍ける時、てまさぐりに、なにいれて侍けるはこにか有けん、したおびしてゆひて、又こむ時にあけんとて、物のかみにさしおきて、出侍にけるのち、つねあきらのみこに、とりかくされて、月日久しく侍て、ありし家にかへりて、このはこを元長のみこにおくるとて、

中務

あけてたになにゝかはせむみつのえのうら嶋のこを思ひやりつゝ

とりかくされては、常明親王の、中務をとりてゐて、こと所にかくし給へる也、かのはこのとにはあらず、

〔兼輔朝臣〕宰相中將より、中納言になりて、又のとし、のりゆみ

○詞のつかねを

のかへりだちの、あるじにまかりて、これかれ思ひをのぶるつい
でに、　兼輔朝臣

故郷のみかさの山は遠けれとこゑはむかしのうとからぬ哉

○むすめに、源かねきが住侍けるを聞て、いみしうせいし侍ければ、しのびたる方にてかたらひける所へ、しらずして俄にいきければ、かねきが、にげてまかりにけるに、つかはしける、女のはゝ、

小山田のおどろかしにもこざりしをいとひたふるににげし君かな

○父の大臣みまかりて、あくる年の春、大臣めしありときゝて、齋宮のみこにつかはしける、　三條右大臣のむすめの女御

いかてかのとしきりもせぬたねもかなあれたる宿にうゑて見るへく

齋宮のみこは、雅子内親王にて、御母高藤公の女にて、三條右大臣の妹たれば、むすめの女御の、御をばみこにおはせり、

○雅正がとのゐものをとりたがへて、もてきたりけるを、おくりつかはすとて、　大輔

ふるさとのならの都のはしめよりなれにけりとも見ゆる衣か

○男の、こと女のふみを、かくしたりけるを見て、書付侍ける、
四條御息所女

へたてつる人の心のうきはしをあやうきまてもふみ見つる哉

十六の卷　雜哥二

○思ふ心有て、前太政大臣のもとによみておくりける、
在原業平朝臣

たのまれぬうきよの中をなけきつゝひかけにおふる身をいかにせん

よせてさては、詩のやうにていかゞ也、

やまひして侍て、あふみの關寺にこもりて侍けるに、まへのみちより、閑院のご、いし山にまうでけるを、たゞ今なんゆきすぎぬると、人のつげ侍ければ、おひて遣しける、
さしゆきの朝臣

あふ坂のゆふつけになく鳥の音をきゝとかめずぞ行過にける

此詞書なる、閑院のごを、閑院のみこと書る本は、誤也、

○贈太政大臣の家よりまかりいでゝありけるに、かの家に、ことにふれて、日ぐらしといふ事なん侍ければ、
前中宮宣旨

み山よりひゞききこゆるひくらしの聲をこひしみ今もけぬべし

かの家のうちの人々、たはふれ言に、日ぐらしといふことを、いひあへりしなるべし、

かはらに出て、はらへし侍けるに、左のおほいまうち君もいであひ侍ければ、
あつたゝの朝臣母

ちかはれしかものかはらに駒とめてしはし水かへ影をたに見ん

○戒仙が、ふかき山寺にこもり侍ける許に、こと法師、まかりとふら

ひけるを、雨にふりこめられて、　よみ人しらす

いつれをか雨ともわかむ山ふしのおつるなみたもふりにこそふれ

○みちの國へ、人のむすめをゐてくだりけるに、その女のはゝ、男の心かはりたりと聞て、心うしといひおこせたりければ、

よみひとしらす

雲ゐ路のはるけきほどの空とはいかなる風のふきてつけゝむ

○女の、たまさかにかよはしたりける文を、こひかへしければ、其文にぐして遣しける、　もとよしのみこ

やれはをしやらねは人に見えぬへしなく／＼も猶かへすまされり

○やまひしけるを、女のさふらはで、あり／＼てやみかたにとへりければ、　よみひとしらす

思ひいてゝとふ言のはをたれ見まし身の白雲に成なましかは

をそこのかくれて、〔女を〕見たりければ遣しける、　よみ人しらす

かくれゐてわかうきさまをみつのうへのあわともはやく思ひ消なん

○女に物いひけるを、さわぎければ、かへりてあしたに遣しける　よみひとしらす

白波のうちさわかれてたちしかは身なうしほにそ袖はぬれにし。。

人のやまひしける、〔を〕からうじておこたれりと聞て、　よみ人しらす

しての山たとる／＼もこえなゝんうきよの中になにかへりけむ

○まかりかよひける男のもとより、年月もへぬるを、今さへかく心とけずのみ見ゆることゝ、いひおこせたりければ、

よみひとしらす

なにはかた汀のあしの老かよにうらみてそふる人のこゝろを

むかしおなじ所にみやづかへし侍ける女の、をとこにつきて、人の國におちゐたりけるを聞つけて、心ありける人なれば、いひ遣しける、　よみ人しらす

をちこちの人めまれなる山里にいへゐせんとは思ひきや君

心有ける人とは、女をいへる也、此哥をつかはす人のことにはあらず、

をとこなど侍らずして、としごろ山里にこもり侍ける〔女〕を、むかしあひしりて侍ける人、みちまかりけるついでに、ひさしうきこえざりつるを、こゝになりけりと、いひいれて侍ければ、　土左

あさなけによのうきことを忍ひつゝなかめせしまに年はへにけり

○春日にまうでけるみちに、さほ川のほとりに、はつせよりかへる女ぐるまのあひて侍るを、すだれのあきたるよりはつかに見いれければ、あひしりて、心ざし深く思ひかはしながら、はゞかる事侍て、あひはなれて六七年ばかりになり侍にける女になん侍けれ

○詞のつかねを

ば、車にいひいれて侍ける、　閑院左大臣

故郷のさほの川水けふもなほかくてあふせはうれしかりけり

○びはの左大臣、よう侍て、ならの葉をもとめ侍けるを、あひしりて侍ける、ちかぬを、とりにおこせたりければ、

俊子

我やとないつならしてかならのはなならしかほには折におこする

○ともだちのまできけるが[illegible]あまたゝびになりにければ、にげてまかりけるを、とゞめわづらひて、もて侍ける笛をとりとゞめて、又のあしたにつかはすとて、　よみ人しらす

かへりてはこゑやたかはん笛竹のつらき一よのかたみと思へは

○はりまのくにゝたかかたといふ所に、おもしろき家もちて侍ける人、京にて、はゝが思ひにて久しうまからで、かしこに侍る人にいひ遣しける、　よみひとしらす

物おもふと行ても見ねはたかかたのあまのとまやはくちやしぬらん

十七の卷　雜哥三

○かしこまると侍りて、里にのみ侍ける時、しのびて、ざうしにまゐれりけるに、などかおともせぬと、○のおほいまうちぎみの、うらみ侍ければ、　大輔

わか身にもあらぬ我みの悲しきは心もとになりやしにけむ

此詞書に、おほいまうち君とのみいへるは、しどけなし、或は左の大臣、或は右の大臣とあるべき也、此よみ人は集中に、左大臣も、右大臣も、よみかはし給へる哥見えたれば、今いづれともさだめがたし、

○あつたゝの朝臣の、物へつかはしける文を、もてたがへてざうしにもてきたりければ遣しける、　大輔

道しらぬものならなくにあし引の山ふみまとふ人も有けり

○いひ契て侍ける女の、と人につきぬときゝて、

よみ人しらす

いふとのたがはぬものにあらませば後うきとも聞えさらまし

いとしのびてかたらひける女のもとに、つかはしけるふみを、心にもあらで、女のおとしたりけるを、見つけて遣しける、

よみひとしらす

嶋かくれありそにかよふあしたつのふみおく跡は波もけたなん

○男の許に、文つかはしたりけるを、人に見せけりときゝて遣しける、　よみひとしらす

みな人にふみ見せけりなせ水無瀬川その渡りこそまづはあさけれ

此本の詞書は、男の許より、女のもとへ、つかはしたる文を、女の人に見せたると聞ゆれども、然にはあらず、つかはしけるとよみ切て、男人に云々の意也、まきらはしければ、右のごとく

改めて見べし、
つくしの白川といふ所に住侍けるに、まへより大貳藤原興範朝臣
のまかりわたるついでに、水たべむさて、うちよりてこひ侍けれ
ば、水をもていでゝ、よみ侍ける、　　ひかきの嫗
年ふれはわか黒髪もしら川のみつはくむまて老にけるかな
此詞書、まへよりさいふ言なき本は誤也、まへよりまかりわた
るとは、俗にまへをとほるといふと也、
「しぞくに侍ける女の、をさこに名たちて、かゝることなんある、
人にいひさわげと、いひ侍ければ、　　つらゆき
かさすとも立とたちなんなき名をはことなし草のかひやなからん
此詞書のさまあるまじきとなるらへに、哥と相かなはず、寫
し誤有なるべし、今こゝろみにいはゞ、云々名たちて侍けるに、
かゝるとなんある、いひあらがへと、人のいひ侍ければ、など
有べし、
女のもとに文遣しけるを、返事もせずして、のち〳〵は〔ふみを〕
見もせで、とりなむおくと、人のつげければ、
　　よみひとしらす
大空をゆきかふ鳥の雲ちをそ人のふみ見ぬ物といふなる
○紀の介に侍ける男の、まかりかよはずなりにければ、その姉のも
とに、うれへやりて侍ければ、いと心うき事かなと、いひおこせ
たりける返事に、　　よみ人しらす
きの國のなくさの濱は君なれやとのいふかひありと聞つる
○すみ侍ける女、みやづかへし侍けるを、その友だちなりけるをん
なと、おなし車にてまうできたりけり、妻なる女、まらうどに、あ
るじせんとて、まかりおりて侍りけるほどに、かの女を思ひかけ
て侍ければ、しのびて車にいひいれ侍ける、
　　つらゆき
波にのみぬれつる物を吹風のたよりうれしきあまのつり舟
男のものにまかりて、ふたとせばかりありて、まうできたりける
を、ほどへて後に、ことなしびに、と人に名たつときゝしは、まと
なりといへりければ、　　よみ人しらす
みとりなるまつほと過はいかてかはした葉はかりももみちせざらん
此詞書に、まうできたるとは、京にかへりたると也、かくいへ
る例多し、女の許へきたるにはあらず、
○さだめたるめもなく獨ぶしをのみすることゝ、女友たちのもとよ
り、たはふれて侍ければ、　　よみ人しらす
いつこにも身をははなれぬかけしあれはふす床ことに獨やはぬる
侍らずといふと、これにはいかゞ、なくとこそ有べけれ、又ひと
りぶしをのみすと、といひては、みづからおのが事をいへるや
うにていかゞ、さてこれは男の哥なるに、をんな友だちとはめ
○詞のつかねを

づらし、をとこにても、女をも友たちといひしにや、

〇せんざいの中に、すろの木のおひて侍けるをきゝて、ゆきあきらのみこの許より、ひと木と、こひにおこせたりければ、

眞延法師

風霜に色も心もかはらねはあるしにゝたるうゑ木也けり

〇人のむすめに、しのびてかよひ侍けるを、父母聞つけて、からじし侍けるを、月日へて猶かくれてかよひけるを、ある時雨(アメ)ふりて、えまかり出侍らで、こもりゐ侍けるを、ちゝはゝきゝつけて、いかゞはせむずるぞと、ゆるすよしいひて侍ければ、

よみ人不知

したにのみはひわたりにしあしのねのうれしき雨にあらはるゝ哉

人の家にまかりたりけるに、やり水なる瀧、いとおもしろかりければ、かへりて遣しける、

よみ人しらす

たきつせにたれ白玉をみたりけんひろふとせしに袖はひちにき

十八の巻　雑哥四

〇女の心とけざりけるけしきを見て、あやしく思はぬさまなることゝ、いひけるをとこのけしきも、いかにおもへさるまにか有けむ、女、

みちのくのをふちのこまも野のふにはあれこそまされなつく物かは

遠き國に侍ける人を、京にのほりたりときゝて、あひまつに、〔まうてきなから〕とはざりければ、

よみひとしらす

いつしかとまつちの山のさくら花まちてもよそにきくかかなしさ

〇むこの、今まうでこんといひて、まかりけるが、又ふみかよはす人有ときゝて、久しうまうでこざりければ、あとうがたりの心をとりて、かんなん申けるといひ遣しける、をんなのはゝ、

今こむといひしはかりをいのちにてまつにけぬへしさくさめのとじ

つねにまうでくとて、女のうゐさがりて、かくれければ遣しける、

よみ人しらす

有ときく音はの山のほとゝきすなにかくるらんなく聲はして

〇をんな友だちの、つねにいひかはしけるが、久しくおとづれざりければ、十月ばかりにあだ人の思ふといひし言の葉はと、いふふるとをいひ遣したりければ、竹のはにかきつけておこせける、

よみひとしらす

うつろはぬなにながれたる川たけのいつれのよにか秋をしるへき

亭子院にさふらひけるに、御ときのおろしたまはせたりければ、

いせ

いせの海に年へてすみしあまなれとかゝるみるめはかづかさりしを

一本に、いせが亭子院にとあるはわろし、

〇こと人をあひかたらふと、きく人の許につかはしける、

よみひとしらす

うきながら人をわすれんことかたみわか心こそかはらざりけれ
○あるほうしのまできて、ずゞのすがりをおとしおけるを、あしたにおくるとて、　源ひとしの朝臣
うたゝねのとこにとまれる白たまは君かおきつる露にやあるらん
○人にわすられたりと聞て、いせが許に遣しける、
よみ人しらず
よの中はいかにやいかに風の音をきくにも今は物やかなしき
十月ばかりむかしおもしろかりし所なりければ、北山のほとりに、これかれ〔まかりて〕あそび侍けるついでに、〔おなし心を〕
坂上是則
峯たかみ行ても見へきもみち葉をわかゐなからもかさしつる哉
しはすばかりに、あづまよりまできける男の、〔もとより京に〕あひしりて侍ける女の許に、正月ついたちまでおとづれず侍ければ、
よみ人しらず
まつ人はきぬときけどもあら玉の年のみこゆるあふさかの関

十九の巻　離別

あひしりて侍ける人の、東のかたへまかりけるに、櫻の花のかたに、ぬさをしてつかはしける、　よみひとしらず
あた人のたむけにをれる櫻花あふさかまてはちらずもあらなん
○詞のつかねを

此詞書、ぬさをしては、ぬさをさくらの花のかたにしたる也、ぬさをさしてとある本は、わろし、
○いなばの國へまかりける人、むすめないかなることか侍けむ、心うしさて、京にとゞめおきて、くだりければ、むすめ、
うちすてゝきみしいなはの露の身はきえぬはかりそありと頼むな
○いせへまかりける人に、たびのてうどなどとらするに、とくいなんと、心もとながるときゝて、たゝう紙に書てそへける、名をばうまといひけるに、
をしと思ふ心はなくて此たびはゆく馬にむちをおほせつるかな
まかりけるとは、既にまかりたるにはあらず、まからんとするをいふ也、これ雅言の格也、こゝろもとながるは、いせへはやく下らんとまつ意也、
○旅にまかりける人の、此たびのいでたちなん、ものうくおぼゆるといひければ、　よみひとしらず
はつ鴈の我も空なるほとなれは君も物うき旅にやあるらん
○みちのくにへまかりける人に、あふぎてうじて、繪にかゝせて遣しける、　よみひとしらず
わかれ行道の雲ゐになりゆけばとまる心も空にこそなれ
平たかとほがいやしき名とりて、人の國へまかりけるにわするなといへりければ、〔たかとほか〕めのいへる、

わするなといふになかるゝ涙川うき名をすゝくせともならなん

羇旅

たはれしまを見てよみ侍ける、

よみひとしらす

名にしおはゝあたにそ思ふたはれ嶋波のぬれきぬいくよきつらん

○法皇とほき所に山ぶみし給ひて、京にかへり給ふほど、たびの御やどりにて、御ともにさふらふ道俗に、哥よませ給けるに、

僧正聖寶

人ことにけふ〳〵とのみこひらるゝみやこちかくもなりにけるかな

○京に思ふ人侍て、遠き所よりかへりまうできけるみちに、とゞまることありて、九月ばかりに、

よみひとしらす

おもふ人ありてかへれはいつしかのつまゝつよひの秋そかなしき

廿の巻　慶賀

○父の宰相のために、賀し侍けるに、眞朝法師の、もからきぬをぬひておくりければ、

典侍あきらけいこ

雲分る天のは衣うちきては君か千とせにあはざらめやは

今上、帥のみことききこえし時、〔太政大臣の〕家にわたりおはしまして、かへらせ給ふ御おくりものに、御本たてまつるとて、

太政大臣

君かためいはふ心のふかけれはひちりのみよのあとならへとぞ

今上、梅壺におはしましゝ時、たき木こらせて奉り〔給ひ〕ける、

太政大臣

山人のこれるたき木は君かためおほくの年をつまんとそ思ふ

給ひといふこと、撰集の例にたがへり、

十二月ばかりに、人の子の、からふりする所にて、

つらゆき

いはふと有てなるへしけふなれと年のこなたに春もきにけり

哀傷

あつとしが身まかりにけるを、まだきかで、人の、東よりうまをおくりて侍ければ、

左大臣

まだしらぬ人も有けり東路にわれも行てそすむへかりける

かへし

やと見れはねてもさめてもこひしくて夢うつゝ共わかれさりけり

此うた、よみ人なきはいかゞ、

女四のみこ身まかり侍て後に、その文の侍けるに、かきつけて、内侍のかみにおくり侍ける、

右大臣

たねもなき花たにちらぬ宿もあるをなさかゝたみのこだになからん

「女四のみこのと、さふらひ侍さて、　い　せ

こゝらよを聞がなかにもかなしきは人の涙もつきやしぬらん

此詞書、云々とふらひ侍るさて、某人の許にとあるべき也、返哥よみ人しらずなれば、その人たれとも知がたし、

○七月ばかり、左大臣のはゝ、みまかりにける思ひに侍ける時、きさいの宮より、萩の花をゝりて玉へりければ、

太政大臣

をみなへし枯にし野へにすむ人はまづ咲花をまでとも見ず

○人をとふらひにまかりたりけるに、はやくなくなりにきといひ侍ければ、かへてのもみぢにかきつけける、

戒仙法師

過にける人を秋しもとふからに袖は紅葉の色にこそなれ

○大輔が人をなくなして、かぎりなくこひて、おもひいりて寝たる夜のゆめに見えければ、思ひける人なりければ、かくなんといひおこせたりければ、　玄上朝臣女

ときのまもなくさめつらんさめぬまは夢にたに見ぬ我そかなしき

妻のみまかりてのとしのしはすのつごもりの日、ふるといひ侍りけるに、　兼輔朝臣

なき人のともにしかへる年ならはくれゆくけふはうれしからまし

○詞のつかねを（跋）

ふるといふとは、身まかりし人のことを、いひけるをいふなるべし、

つかねてぞそれとも見ましあやめなく
かりみだりたる言の葉ぐさは

本居宣長

こは父翁の。こその秋。そのついてに思ひよりて。いさゝみにものせられたるを。そのほどやかてゐり巻にせむとて。清く書はしめけれと。えかきはてすて。みまかられたりける。その月ころは。此詞のみたれのとのみ。明くれ心にかゝりて。いとくるしき病のうちにも。とかういひあけつらひ。おもひつかねられけるともありしかは。そのほいとけむとて。かの書はしめおかれたる三ひらに。かきつゝけさせて。此ころさしいそきて。板にゐらせつ。

享和二年五月晦

本居春庭

漢字三音考序

孔子曰後生可畏於吾　本居先生乎方知其信也矣　先生能窮古言妙解古書所著古事記傳可以見矣又嘗著馭戎慨言二卷盛稱皇國之尊無伉以警學者漢習尋有此書之作焉論漢土之方音律以皇國之正音大意謂皇國斯日月所生焉日孫降臨之域而居萬國之首爲萬國之宗也是故稻穀優乎八荒寶貨冠乎四海蓋天地純粹祥氣欝勃所蒸爲爾其人言之音之明亮單直也亦正之純者也比諸異邦溷雜曲僻之音豈翅霄壤至若夫漢吳二音亦傳之于此則翦除其鄙俚揀擇協于自然之聲調夫然後稍近雅正已此皆前人未發之說可謂奇矣哉後生可畏於　先生乎方知其信也者非耶嗚呼世之漫認侏離以爲正不解正之所以爲正之徒一得此書而玩味焉則思過半矣

天明四年甲辰五月

石見濱藩文學　小篠敏謹序

漢字三音考

目錄

附錄

漢字三音考

本居宣長撰

漢字トハ。字ハ皇國ノ字ニ非ズ。漢國ノ字ナルガ故ニ云フ。三音トハ。其音漢呉ノ二ツアルニ。近世ノ唐音ヲ加ヘテ云也。然ルニ其漢音呉音ノ來由正不正及ビ三音ノ優劣ナド。諸説紛々トシテ一定シガタク。世ノ人コレニ惑フガ故ニ。今此書ヲ著シテ委ク是ヲ辨ヘ定メ。凡テ字音ニ關レルコトヲ論ズルニ。先ツ首ニ皇國ト外國ト自然ノ聲音ノ甚異ナルヿヲ云テ。次ニ三音ヲ論ズ。ソハ此ト彼ト自然ノ聲音ノ異ナルヿヲ先ツ明ラメ置ザレバ。字音ノ辨論明ラカナラザルガ故ナリ。

皇國ノ正音

皇大御國ハ。天地ノ間ニアラユル萬ノ國ヲ御照シ坐マス。天照大御神ノ御生坐ル本ツ御國ニシテ。即其御後ノ皇統。天地ト共ニ動キナク無窮ニ傳ハリ坐テ。千萬御代マデ天ノ下ヲ統御ス御國ナレバ。懸マクモ可畏天皇ノ尊ク坐マスコト。天地ノ間ニ二ツナクシテ。萬國ノ大君ニ坐マセバ。異國々ノ王等ハ。悉ク臣ト稱ジテ。吾御國ニ服事ルベキ理リ著明シ。然ルヲ禍津日ノ神ノ心ニヨリテ此ノ理蔽ハレテ未タ顯ハレズ。世ノ人ノ心皆外國籍ニ眩惑セラレテ。是レヲ悟ルヿアタハズ。イトモ悲シキワザナリケリ。サテ如此尊ク萬國ニ上タル御國ナルガ故ニ。方位モ萬國ノ初ニ居テ。人身ノ元首ノ如ク。萬ノ物モ事モ。皆勝レテ美キ中ニ。殊ニ人ノ聲音言語ノ正シク美キコト。亦夐ニ萬國ニ優テ。其音清朗トキヨクアザヤカニシテ。譬ヘバイトヨク晴タル天ヲ日中ニ仰ギ瞻ルガ如ク。イサヽカモ曇リナク。又單直ニシテ迂曲レルヿ無クシテ。眞ニ天地ノ間ノ純粹正雅ノ音也。サテ其古言ノ正音ハ。タヾ四十七ニシテ。ヤノ行ノイエト。ワノ行ノウトヲ加フレバ。都テ五十ナリ。【此イエウノ三音ノ各二ツアルヿ所以アリ。二ツカト思ヘバ一ツ。一ツカト思ヘバ二ツニシテ。一ツ𪜈

二ツモ云ガタシ。此ノ妙處ハアヤワ三行ノ音ノ分レタルユヱヲヨク了解セバ。オノヅカラ明ラカナルベシ。其大抵ハ字音假字ヅカヒニアラハセリ。】是レニカノ行リサノ行タノ行ハノ行ノ濁音。合セテ二十ヲ加フレバ。都テ七十ナレドモ。濁音ハタヾ清音ノ變ニシテ。モトヨリ別ナル者ニ非ル故ニ。皇國ノ正音ニハ。是ヲ別ニハ立テズ。清音ニ攝スルモノ也。【一音ノ言ニ濁ル例ナク。又二音三音ヲ合セタル言ニモ。首ヲ濁ル例ナシ。凡テ濁ハタヾ其中下ニノミアリ。然ルニ上ヘ他ノ言ヲ連ネテ合セ云フトキハ。首ヲモ濁ルヿ多シ。月ヲモ望月ナドヽ云トキハ。ツヲ濁リ。川ヲモ谷川ナドヽ云トキハ。カヲ濁ルガ如シ。此例ヲ以テ見レバ。一言ノウチノ中下ニ濁アル者モ。其本ハ二言ノ連合セルモノナラムカ。其意得ヤスキ者ヲ一ツ二ツ例ニイハヾ。祖父祖母ハ大父大母ノ義。柳ハ箭之木。窻ハ間戸。袖ハ衣手。筆ハ文手。札ハ文板ニテ。皆二言ノ一言ニナレルニテ。濁音ハ何レモ連聲ノ便也。然レバ此餘ノ。義ノ知ガタキ言ノ濁音モ。皆此類ナルベキカ。サレドコレハ決メテハイヒガタシ。】サテ其五十ノ音ハ。縦ニ五ツ横ニ十ヅヽ相連リテ。各縦横音韻調ヒテ亂ルヽヿナク。其音清朗ナルガ故ニ。イサヽカモ相渉リマギラハシキヿモナク。一一ノ音ニ平上去ノ三聲ヲ具シテ。言ニ隨テ轉用ス。【此事下ニ委クイフベシ】又五十ニ〆足ザル音モナク。餘レル音モナキ故ニ。一ツモ除クコトアタハズ。亦一ツモ添ルヿアタハズ。凡ソ人ノ正音ハ此ニ全備セリ。サレバ此ノ五十ノ外ハ。皆鳥獸萬物ノ聲ニ近キ者ニ〆。溷雜不正ノ音也ト知べシ。【然ルニ外國人ドモノ。皇國ノ人ノ音ヲ聽テ。東方ノ國ナル故ニ。音聲イマダ開ケザル所アリナドヽ云メルハ。各其國ノ溷雜ノ音ニナラヒテ。正音ノ正音ナルヿヲ知ラザルモノナリ。】

皇國言語ノ事

皇國ノ古言ハ五十ノ音ヲ出ズ。是レ天地ノ純粹正雅ノ音ノミヲ用ヒテ。溷雜不正ノ音ヲ厠ヘザルガ故也。サテ如此ク用ル音ハ甚少ケレドモ。彼レ此レ相連ネテ活用スル故ニ。幾千萬ノ言語ヲ成ストイヘドモ。足ザルヿナク盡ルヿナシ。ソノ

ウヘ一言ノウヘニモ亦活用アリテ。假令バ言思ノ如キハ。ハヒフヘト轉用シテ。イハムイヒイフイヘ。オモハムオモヒオモフオモヘト活キ。往還ノ如キハ。往ハカキクケ。還ハラリルレト轉用シテ。ユカムユキユクユケ。カヘラムカヘリカヘルカヘレト活ク。諸ノ言皆此格ニテ。第一ノ音【アカサタナハマヤラワ】ハ未ダ然ラザルニ用ヒ。第二ノ音【イキシチニヒミイリヰ】ハ方ニ然ルヲ下ヘ云ヒオクルニ用ヒ。第三ノ音【ウクスツヌフムユルウ】ハ方ニ然ルヲ云ヒサダムルニ用ヒ。第四ノ音【エケセテネヘメエレヱ】ハ然セヨト令スルニ用フ。【又上ニコソノ辭アルトキハ。第三ノ音ト同意ニナルナリ。】タヾ第五ノ音【オコソトノホモヨロヲ】ノミハ。如此クナル活用ノ例ナシ。又上件ノ外ニモ種々ノ活用アリテ。千言萬語各皆其ノ例格違フコトナシ。又言ヲ連ネテ語ヲナスニ。ハモゾコソテニヲヤカム等ノ辭アリテ其意ヲ分ツ。凡テ如此ク。活用助辭ニ因テ。其義ノ細ニクハシク分ル丶コト甚ダ妙ニシテ。外國ノ言語ノ能ク及フ所ニ非ズ。凡ソ天地ノ間ニ。カクバカリ言語ノ精微ナル國ハアラジトゾ思ハル丶。

外國ノ音正シカラザル事

外國人ノ音ハ。凡テ朦朧ト渾濁リテ。譬ヘバ曇リ日ノ夕暮ノ天ヲ瞻ルガ如シ。故ニアヽト呼ブ音ノ。オヽノ如クニモ聞エ。ワアノ如クニモ聞エ。又オヽト呼ブ音ノ。ウヽノ如クニモホオノ如クニモ聞ユル類。分曉ナラザルコト多ク。又カキクケコトハヒフヘホトワヰウヱヲト相渉リテ聞エナド。諸ノ音皆皇國ノ音ノ如ク分明ナラズ。〇又溷雜紆曲ノ音多シ。東西ヲ今ノ唐音ニトンスヰト呼ブガ如キ。トトント雜リ。ストヰト雜リ。又トヨリンヘ曲リ。スヨリヰヘ曲ル。春秋ヲチユインチユウト呼ブガ如キ。チトユトイトント雜リ。チトユトウト雜リ。又チヨリユヘ曲リイヘ曲リンヘ曲リ。チヨリユヘ曲リウヘ曲ル。古ヘノ音モ皆如此シ。一音ニシテ如此ク溷雜シ。二段三段四段ニモ拗レ曲ルハ。皆不正ノ音ニシテ。皇國ノ音ノ正シク單直ナルト大ニ異ナリ。〇曲ラザル音モアレドモ。ソレモ皇國ノ正シキ單音ノ如クニハ非ズ。アヽイヽウ

丶カア キイ クウナドヤウニ。皆必ス長ク引テ。短ク正シクハ呼ッコトアタハズ。短ク呼ヘバ必韻急促リテ入聲トナルナリ。○外國ノ入聲ハ。皇國ノ字音ノ入聲ノ如キ。ク キ ツ チ フ等ノ顯ナル韻ハ無クシテ。單音ノ如クナレド。正シキ單音ニハ非ズ。其尾物ニユキアタリタル如クニ急促リテ。喉ノ內ニ隱々ト〆韻ヲ帶ベリ。此方ニテ惡-鬼一-旦鬱-結悅-氣臆-見甲-子吉-凶ナド丶連ネ呼ットキノ。惡一鬱悅臆甲吉等ノ音ノ如シ。故ニ今此書ニ入聲ノ形ヲ云ッニハ。假ニ其音ノ下ニㇰ點ヲ施シテ識トス。日月ノ唐音ヲジㇰ エㇰト書クガ如シ。コレ新奇ヲ好ムニ非ズ。其韻ヲ示スベキ假字ナキガ故也。此點ヲ施セルハ皆急擊ル韻ト心得ベシ。サテ如此ク韻ノ急促ルハ甚不正ノ音也。皇國ノ音ハイカニ短ク呼ヘドモ。正シク舒緩ニ〆急促ルヿナシ ○又外國ニハ。韻ヲントハヌル音殊ニ多シ。ンハ全ク鼻ヨリ出ル聲ニ〆。口ノ音ニ非ズ。故ニ餘ノ諸ノ音ハ。口ヲ全ク閉テハ出ザルニ。此ンノ音ノミハ。口ヲ緊ク閉テモ出ル也。サレバ皇國ノ五十連音ノ五位十行ノ列ニ入ラズ〆。縱ニモ橫ニモ相通フ音ナク。タヾ孤リ立チナリ。然ルニ外國人ノ音ハ。凡テ渾濁テ多ク鼻ニ觸ル丶中ニ。殊ニ此ンノ韻ノ多キハ。物言ニ口ノミナラズ鼻ノ聲ヲモ廁借ル者ニ〆。其不正ナルヿ明ラケシ。皇國ノ古言ニハ。ンノ聲ヲ用ル者一ツモアルヿナシ。【此事猶下ニ委ク云ベシ】○又外國ニハ。ハ ヒ フ ヘ ホニ清濁ノ間ノ音アリ。濁音ヲ呼ブ如クニ脣ヲ彈テ清音ニ呼ブ【ハヲ烟波ノ波ノ如ク。ヒヲ尊卑ノ卑ノ如ク。フヲ南風ノ風ノ如ク。ヘヲ權柄ノ柄ノ如ク。ホヲ一本ノ本ノ如ク呼ブ是ナリ。】此方ニテ半濁ト云フ。漢國ニテハコレヲモ清音トスル也。此レ殊ニ不正鄙俚ノ音ナリ。皇國ノ古言ニ此音アルヿナシ。○上件種々ノ音ハ。是レ鳥獸萬物ノ聲ニ近キ者ニ〆。皆不正ノ音也。諸ノ外國異同ハアレド。皆是レアリ。其中ニ今ハ漢字音ノ論ノタメナル故ニ。漢國ノ音ニ就テ云ルナリ。

天竺國ノ音

天竺ニハ。皇國ノ五十音ノ如クナル正シキ音モアレド。又上件ノ如キ種々ノ溷雜不正ノ音モ多シ。サテ何レノ音ニモ長

短ノ二ツアリ。コレヲ單音ニテイハヾ。皇國ノ正音ノ如クナルヲ短聲トシ。彼漢國ノア‖ヽイ‖ヽウ‖ヽナドノ如ク引クヲ長聲トシテ。長聲ニハ。其字ノ傍ニ引點ト云モノヲ加フルヿ也。又韻ヲン‖トハヌルヲバ大空ノ音ト云テ。字ノ上頭ニ圓點ヲ加フ。是レヲ空點ト云。又漢國ノ入聲ノ如ク韻ノ急促(ツマ)ルヲ涅槃ノ音ト云テ。字ノ傍ニ二圓點ヲ加フ。是レヲ涅槃點ト云リ。此ノ四ツノ差別ヲア‖ノ音ニテイハヾ。梵ノ阿字。短聲ハア‖也。其字ニ彼ノ傍點ヲ加フレバ。長聲トナリテア‖ヽ也。空點ヲ加フレバ。大空ノ音ニナリテアン‖也。【是ニ三内ノ差別アリ。下ニ云ベシ】涅槃點ヲ加フレバ。涅槃ノ音ニナリテアツ‖也。【是亦三内ノ差別アリ下ニ云ベシ。凡テ此涅槃點ノ字。中天竺ノ音ニハ。對注ニ多クハ入聲字ヲ用ヒ。南天竺ノ音ニハ。入聲字ヲ用ヒザルヿ多シ。是レ其韻ニ輕重ノ異アルナルベシ。凡テ五天竺各其方土ノ音異ナルコト多クアルナリ。】諸字ノ音皆此例也。又梵ノ仰壞孥(ダウ)曩莽ノ五字ヲ。五句ノ字ト云テ。連聲ノトキ。是等ノ字下ノ字ノ上頭ニアレバ。【字ノ上頭ニ字アルヿハ。凡テ梵字ノ法ハ。二三字四五字ヲモ合セテ一字トナスガ故ナリ。漢字ノ法ト同ジカラズ。】其上ノ字空點無ケレドモ。空點ノ音ニナリ。野囉羅嚩奢沙娑訶ノ八字ハ。連聲ノトキ。是等ノ字下ノ字ノ上頭ニアレバ。其上ノ字涅槃點ナケレドモ。涅槃ノ音ニナル。此二類ヲ五句八字ノ連聲ト云テ。種々ノ子細アリ。【仰壞等ノ五字ハ。三十五字ノ躰文ノ中ノ。初メノ二十五字ヲ。比聲ト云テ。牙齒舌喉脣ノ五聲各五字ヅヽニテ。是ヲ五句ト云。其句ゴトノ第五ノ字也。野囉等ノ八字ハ。躰文ノ中ノ後ノ十字ヲ。超聲トモ遍口聲トモ云フ。其内ノ終リノ二字ヲ除キタルナリ。】猶右ノ外種々ノ事ドモ。アレドモ。事長ケレバタヤスクハ盡シガタシ。其師ニ依リ其書ニ就テ學ブベシ。抑今カク天竺ノ音ノコトヲイサヽカ云ルハ。凡テ外國ノ音ノサマノ。皇國ノ音トハ異ナルヿヲモ諭シ。【コハ天竺ノミナラズ。其餘ノ國々ノ音ヲモ識(シ)リナバ。何レモ其益アルベケレド。余ガ知ザル所ナレバ。云コトアタハズ。タマ〳〵天竺ノ音ノコトハ。傳ヘノアルニ依テ。カツ〴〵コレヲシルスノミナリ。】又其對注ニ就テ。漢字ノ古ヘノ音ヲ知ルベキ便リトナルヿ多キ故ニ。此書往々ニ悉曇ヲ引テコレヲ論ズル

ヿアレバ。其爲ニ先ッソノ大較ヲ云ヒオク也。凡ソ音韻ヲ學バム者。必悉曇ヲ知ラズバアルベカラズ。【世ノ韻學者。タヾ漢字ノ韻書ニノミ執滯セル故ニ。天下ノ音韻ノ大躰ヲ知ラズ。或ハ今ノ唐音ヲノミ據トシテコレヲ論ズルナド。皆非ナリ。又梵學者ハ。タヾ此ノ方ノ字音ヲノミ知テ。漢國ノ音如何ト云ヿヲ問ハズ。對注ヲ皆此方ノ字音ノウヘニテ論ズル故ニ。梵音ノ要領ヲ得ザルヿ多シ。サレバ梵學者モ亦必今ノ唐音ヲモ知テ。漢國ノ古ヘノ音ヲ考ヘズバアルベカラズ。畢竟今ノ世ニ〆此方ニテ。梵音ノ眞ハ學ビ得ベキニ非ズトイヘ𪜈。對注ノ漢字ノ古ヘノ音ト今ノ音ト。又此方ノ漢音呉音ト。傳來ノ說ト。カレコレヲ參考シテヨクカムガヘナバ。其大躰ヲバ得ベキモノナリ。】

鳥獸萬物ノ聲

大凡ノ上件ニ云ル。外國ノ引ク音曲ル音急促ル音ンノ音ハノ行ノ半濁音等ハ。皆是レ不正ノ音ニ〆。人ノ正音ニ非ズ。鳥獸萬物ノ聲ニ類セル者也。イカニト云ニ。先ッ鳥獸ノ聲ハ。馬ハニイ牛ハモオナド丶。皆必長ク鳴テ。ニ𪜈モ𪜈短クハ鳴コトアタハズ。彼ノ外國人ノ引ク音コレニ近シ。又雉ハキン犬ハワン鼠ハチウ猫ハニヤウト鳴タグヒ。外國人ノ曲ル音ンノ韻ナド是ニ近シ又烏ハカア〱ト鳴ク。若シ短ク鳴クトキハ。必カワ〱ト急促リ。蛙鴨ナドノギヤワ〱ガワ〱ト鳴クタグヒ。凡テ短聲ノモノ。外國人ノ入聲コレニ近シ。【鳥ノカワ〱蛙ノギヤワ〱鴨ノガワ〱ノ類。ミナ其韻ハアラハナラザレ𪜈。急促ル所ニ隱々ト響アルヿ。全ク入聲ノ如シ。】サテ又絲ノ聲ハピン　ボン。竹ノ聲ハヒイ　フウ　ビイ　ブウ。金ノ聲ハチン　チヤン　チヨン　グワン　ボン。革ノ聲ハデン　ドン　カン　ポン。木ノ聲ハカワ〱。石ノ聲ハコワコワナド丶鳴ル。萬ノ物ノ聲皆此類ニテ。長キ者ハ必ス響アリテ短キヿアタハズ。短キ者ハ必急促テユルヤカナラズ。凡ソ鳥獸萬物ノ中ニ。其聲ノ皇國ノ五十音ノ如ク單直ニ〆正シキ者ハ。一ツモアルヿナク。皆サマ〲トクセアリテ。外國人ノ音是ニヨク似タルモノ也。コレ皇國ノ音ハ正シク。外國ノ音ハ正シカラザル明徵也。、然ルヲ近世儒者ナドノ。返

テ皇國ノ聲音言語ヲシモ。侏離鴃舌ト云フナルコソ。イトモ〳〵意得ネ。抑漢國人ノ他國ノ言語ヲ然云ナルハ。其ノ解ガタクテタヾ鳥ノサヘヅル如クニ聞ユル故也。皇國ニテモ。韓サヘヅリ𪜈。サヒヅルヤ漢トモ云テ。誠ニ戎狄ノ言語ハ鳥ノサヘヅルガ如シ。サレバ是ハ各タガヒニ他國ノ言語ヲコソ云ベキヿナレ。實ニハ何レヲソレ𪜈定ムベキニ非ルガ如シ。然レ𪜈諸國ノ音聲言語勝劣ナキニ非ズ。其中ニ獨リ勝レテ實ニ正シキハ皇國ニノミ。外國ハ正シカラズ。鳥獸萬物ノ聲ニ類セルヿ。上件ノ如ク其證著明ケレバ。是ゾ實ニ侏離鴃舌ニハアリケルヲ。彼ノ漢國人ノ云ルニナラヒテ。皇國人ノ皇國ノ言音ヲシモ然也ト云ヒナスハ。甚シキ狂言也。凡テ何事ニモ。ヨシナキ漢國ヲヒタスラ尊尙シテ。皇國ヲバ漫ニ貶シメ賤シムルヲ卓見ノ如ク意得ルハ。近世狂儒輩ノナラヒ也。抑他國ヲ尊ミテ本國ヲ卑シムルガ孔丘氏ノ敎ニヤ。カヘス〳〵モ意得ヌコトナリカシ。

漢國字多キニ過テ音足ザル事

漢國ハ字甚多クシテ。煩ハシククダ〳〵シク返テ不便也。爾雅、釋詁ニ。林蒸天帝皇王后辟公侯君也。マタ柯憲刑範辟律矩則法也。マタ辜辟戾辠也ナドアルガ如キ。凡テ如此ク同ジコトニ字ノ數多アルハ。各少シヅヽ義ノ異ナルヲ以テ。分ケテ名ケタルハ精シケレ𪜈。其中ニハサノミ義ノ異ナルヿナキニモ數字アルハ。無益ノコト也。又イト精シク分レタルカト思ヘバ。右ノ內ノ辟ノ字ノ。君ト法ト罪トノ義アル如ク。一字ヲ多義ニ用ルハ。マギラハシク甚不便也。又カノ后ノ字ヲ。君ニモ用ヒ君ノ妻ニモ用ルガ如キハ。殊ニマギラハシ。凡テ如此ク一義ニ多字アリ。又一字ニ多義アラムヨリハ。一義一字ナラムコソ宜シカラメ。又同書釋畜ニ馬ノ品ヲ云ルニ。膝上皆白惟馵。四骹皆白驓。四蹢皆白首。前足皆白騱。後足皆白翑。前右足白啓。後右足白驤ナド、。馬ノ足ノ毛色ノ少シヅヽノ差ニマデ。各其字ノアルハ。甚クダ〳〵シク不便ノ至リナリ。抑萬物萬事ヲ悉ク如此ク細碎ニ分ムトセバ。幾千萬ノ字アリ𪜈盡ルヿアルベカラズ。故ニサバカリ字多

ケレ𪜈。終ニ萬物萬事ヲ各一字ヅヽニテハ盡スヿアタハズシテ。二字三字連接セル名稱モ多カルヲヤ。サテ又字ハ多キ故ニ。目ニコレヲ視レバ義理ヨク分ルレ𪜈。字ノ多キニ比スレバ。音ハイト少クテ。一音ニ數字數言ヲ兼ル故ニ。耳ニ其言ヲ聽テハ。義ノ分ラヌコトツネニ多シ。又音卽チ言ナルガ故ニ言ニ活用ナシ。其例ヲイハヾ。飲食ノ如キ。皇國言ニテハ。ノム　クラフ𪜈ノマム　クラハム𪜈ノメ　クラヘ𪜈活キテ。其義ヲ分ツヲ。漢國ニテハタヾ飲食ト云ヨリ外ナクメ。活カザル故ニ。【食ニ別ニ飼ノ音アリテ義ノカハルヿハ末ニ云ヘリ】ノム　クラフモノマム　クラハムモノメ　クラヘモ。一ツニメ差別ナシ。タヾ其時ノサマト。上下ノ言トニ隨ヒテ意得分クルノミニコソアレ。其一言ノウヘニテハ分リ難シ。諸ノ言語皆然也。是ハ漢國ノミナラズ。諸ノ外國皆如此シ。サレバ皇國ノ言ハ生言。異國ノ言ハ皆死言ノ如シ。サテ皇國ノ音ハ。タヾ五十ニメ甚少ケレ𪜈。正音全備シテ闕タル者ナシ。漢國ノ音ハ。コレニ比スレバ甚多ケレ𪜈。タヾミダリニ駁雜ニメ全備セズ。闕タル音多シ。故ニ他國ノ音ヲ譯スルニ。足ラザルヿ多クシテ甚不便也。カノ梵音ヲ譯セルガ如キ。先ッ悉曇ノ長短ノ聲ヲ分テ譯スルヿアタハザル故ニ。或ハ長短ト注シ。或ハ長ニハ引ト注シ。短ニハ入聲字ナドヲモ用ヒテ。注ヲ添タリ。是レ入聲ハ隱ニ急促ル韻アリテ。正シキ短聲ニハ叶ハザレ𪜈。當べキ字音ノ無キニヨリテ也。諸ノ對譯凡テ此類ニテ。髣髴ナルヿノミ多クテ。梵音ニアタリガタキ故ニ。サマ〴〵ト注ヲ加ヘタリ。是ヲ皇國音ニテ譯スレバ。アア　イイ　ウウ　エエ　オオニテ。注ヲマタズ簡約ニメ。長短ノ聲調分明也。凡テ皇國ノ音ハ。單直ニシテクセナキ故ニ。コレヲ用ルニ便利ナルヿ如此シ。漢國ノ音豈ヨリ如此クナルヿヲ得ムヤ。餘ノ國々ノ音ヲ譯スルヿモ。准ヘテ知べシ。【皇國ノ音ニテモ譯シガタキ音モマレニハアレ𪜈。漢字ノ譯音ヨリハハルカニマサレリ。】【此間無二長短字一故以二長短一標レ之トコトワレリ】

皇國ニシテ漢字音ノ始

皇國ト外國ト。自然ノ音韻言語ノ甚異ナルヿ上件ノ如シ。然ルニ輕嶋ノ明宮御宇應神天皇ノ御世ニ。百濟國ヨリ阿直トイヒ和邇ト云シ二人ノ博士ヲ渡シ奉リ。又論語ナドノ漢籍ヲモ貢獻セル。是レ大御國ニ漢字漢籍ノ參入レル始メ也。【是レニ異說アリ。漢字漢籍ハ神武天皇以前ヨリ既クコレアリツラム𪜈云メレ𪜈。ソハ日本紀ノカキザマナドヲ看テ。ユクリナク然思ヘルモノナリ。日本紀ノ文ノコトハクサ〴〵論アリ。事長ケレバ此ニハ云ガタシ。余古事記ノ傳ニ委ク論ズルガ如シ。ユメ〳〵彼ノ紀ノ文ニナヅミテ。神代ヨリ漢字アリツラムカナド、疑フヿナカレ。又漢ノ武帝ガ時ニ始テ倭國ヨリ通ズト云ヿ。彼國ノ書ニ見エタルニヨリテ。ソノコロヨリヤ文字モ渡リ來ツラムト云人モアレド。コレモ非ナリ。別ニ其論モアレドモ此ニハ省ケリ。】カクテ皇子宇治ノ若郎子彼ノ二人ヲ師トシテ。始メテ其ノ漢籍ヲ讀タマヒテ。皆能ク通達タマヒシヿ正史ニ見エタリ。抑漢字ノ音ヲ知ラデハ。漢籍ハ讀コトアタハズ。又此方ニテハ。訓ナクテハ其文義ヲ解ルヿアタハザルワザナルニ。【タトヘバ論語ヲヨマムニ。首ニ論語卷之一トアル論語。學而第一トアル學而。子ノ曰トアル子ノ字ナド。皆必音讀ニスベケレバ。其音ヲ知ラデハ讀コトアタハズ。サテ學而時習レ之ハ訓ニ讀ム。但シコレハガクシテジシフスト音ニモヨムベケレド。亦不レ樂乎ナドハ。必訓ニヨマズバアルベカラザレバ。訓モナクテハカナハズ。タトヒ音ニヨム𪜈。學ハマナブ也。而ハテノ意也。時ハヨリ〳〵也。習ハナラフ也トヤウニ知ラザレバ。其義通ジガタシ。如此クニ知ルハ即チ訓也。サテ今訓ト云ルハ。漢字ニ皇國言ヲアテタルヲ云也。凡テ訓トハ。字ニツキテコソ云ベキ稱ナレ。世ニ皇國言ヲウチマカセテ訓ト云ハヒガコト也。】彼皇子ノサバカリ善ク了達シタマヒテ。同御世ニ高麗國王ヨリ使ヲ奉遣セシ時ニ。其表ヲ讀タマフニ。無禮ナル詞ノアリシニヨリテ。其使ヲ責タマヒシヿナドモ見エタレバ。當時既ニ此方ニテ讀ベキ音モ訓モ定マレリシナリ。若シ音訓ナクバ。イカデカ善ク讀テ其表文ノ无禮ナルヲ辨ヘ知リタマフバカリニハ了解タマハム。【然ルヲ或說ニ。ソノカミ和仁ガ始メテ敎ヘ奉リシハ。漢國ノ讀法ノ如クニテ。イマダ和讀ノ法ハアル

ベカラズト云ルハ非也。此方ノ人ハ。イカホドヨク學問シテモ。訓讀ナラデハ義理通ゼズ。近世儒者ノ說ニ。ヨク漢籍ニ熟シ唐音ニ遂シヌレバ。訓讀ニヨラズ。彼國ノ法ノ如ク直讀ニシテモ。ヨク通曉スト云ハ。甚虛妄ノ言也。タトヒ口ニハ直讀ニシテモ。心ニハ訓讀セザレバ義通ゼズ。人ニハ右ノ如ク敎ル者モ。實ニハ自モ訓讀ノ法ニ依ラザルヿヲ得ズト知ルベシ。】又履中天皇ノ御世ニハ。諸國ニ史ヲ置テ。言ト事トヲ記サシメタマヒシヿ見エタリ。如此ク漢字ヲ用ヒテ此ノ方ノ言事ヲ記スニ至テハ。イヨ〳〵其音モ訓モ定マラデハ能シガタキヿ也。【此方ノ事ヲ記スニ。地名ナドハサラニモ云ズ。鳥獸草木萬ノ物ノ名其外モ。當ベキ漢字ノサダカニ知レザルヲバ。假字ニ書ザルヿヲ得ズ。遙ノ後奈良ノコロノ書ニスラ。漢名ノ詳ナラザルヲバ。假字ニ書ルガ多ケレバ。マシテ上古ハオシハカルベシ。サテ古ヘノ假字ハ。イハユル万葉假字ヨニテ。阿伊宇延於ナドノ如ク書テ。皆音ヲ用ヒタリ。然レバ是ニテモ初メヨリ字音ノ定マレリシヿヲ知ベシ。假字定マラデハ事ハ記シガタク。字音定マラデハ假字ハ定メガタケレバ也。サテ假字ニ止女井ナドノ如ク訓ヲ用ルハ。奈良ノ末ツ方リヤヽ始マリテ。其古ハサラニ無キヿ也。日本紀ニ訓ナルガ二ツ三ツマジレルハ。皆後ノ誤寫也。サテ又訓定マラデハイヨイヨ事ハ記シガタシ。タトヘバアツシサムシト云ヿヲ記サムトスルニ。アツキハ暑ノ字。サムキハ寒ノ字ト知テ記ス。如此ク知ルヿハ此字ニ其訓アル故也。若シ訓ナクテハ。云々ハ某ノ字ト云ヿ知レザレバ。記スヿアタハズ。然ルヲ或說ニ。吉備ノ大臣和訓ヲ造リ和讀ノ法ヲ始ムト云ルハ。上件ノ事理ヲモヨク考ヘザル孟浪ノ說也。此ノ大臣ヨリ前ニ。此方ノ事ヲ漢文ニテ記セル古書ドモノアルヲバ何トカ解セム。又此方ニテモ古書ハ多ク漢文ノ法ニ書ルニ。文字ノ錯置ノ多キハ。コレ訓ニヨリテ作レル故也。若シイマダ訓讀ノ法アラズシテ。タヾ漢國ノ直讀ノ法ニヨリテ。其意ヲ得テ書ムニハ。錯置ハナキ理ナリ。抑上古ノ讀書ハ訓讀ナガラモ。タヾ其法ヲ闇ニ記エ居テ讀ムコトニテ。點ヲ施スヿハイマダコレアラズ。凡テ無點ニテ。今時唐本ヲヨムト同ジヿナリケムヲ。吉備ノ大臣ソレニ點ヲ施スコトヲ始メタマヘルヲ。誤テ和訓和讀ヲ始ムト

ハ云傳ヘタルナルベシ。點法ハ此ノ大臣ナドノ作ナルベシ。サテ又片假字モ。奈良ノ末ヨリヤヽ見エタレバ。是レモ此ノ大臣ナドノ作ナルベシ。然レ𪜈漢文ノ傍ニ此ノ片假字ヲ附テ讀ム法ハ。又後ノコト也。昔時ノ點法ハ。イハユルヲコト點ノタグヒニゾアリケレム。】然レバ皇國ニシテ漢籍ヲ讀ミ。又其字ヲ用ル。音モ訓モ。彼ノ若郎子王(ワキイラツコノミコ)ニ始メテ敎ヘ奉リシ時ヨリ定マリタリシヿ疑ヒナシ。サテ其時ニ用ヒラレシ字音ハ。漢國ノ音ノマヽナリケルカ。ハタ皇朝ニテ別ニ改メ定メラレタルカト云ニ。此事ハタシカナル傳ヘナケレバ。今明ラカニハ知ガタケレ𪜈。事理ヲ以テ考ルニ。皇國ト外國トハ人ノ聲音甚異ニシテ。相似ザルヿ上件ニ辨ズルガ如クナレバ。ソノカミ漢國ノ音ヲソノマヽニ取リ用ヒムトス𪜈。タヤスク學ビ得ベキニ非ズ。【同國同鄉ノ人モ。男子ハ男子ノ音。婦人ハ婦人ノ音。兒童ハ兒童ノ音。老人ハ老人ノ音。皆殊ナルトコロアリテ。タガヒニタヤスクマネビエガタキガ如ク。各國ノ音モ然也。サレバ漢人ノ音ヲ皇國人ノマネブモ。大躰コソアラメ。其ノ眞ハ得ガタキヿ也。譬ヘバ鶯ノ聲ヲ。ホヽオケキヨオトマデハマネベ𪜈。實ニハ鶯ノ聲ハ。人ノホヽオケキヨオトハ大ニ異ナルガ如シ。】又タトヒ學ビ得タリ𪜈。其侏離鴃舌不正鄙俚ノ音。サラニソノマヽニ取用フベキ者ニ非ズ。然レバ其時ノ字音。必彼國ノマヽニハアルベカラズ。或ハ拗音ヲ直音ニツヾメ。或ハ通音ニ轉ジ。或ハ鼻聲ヲ口聲ニ移シ。或ハ急蹙(ツマ)ル韻ヲ舒緩(ユルヤカ)ニ改メナド。凡テ不正鄙俚ノ甚シキ者ヲバ除キ去テ。皇國ノ自然ノ音ニ近ク協ヘテ。新ニ定メラレタルモノ也。【然レバ字音ハ。皇國ノ語音ニ似タルヲ以テ正トシ。イサヽカニテモ漢國ノ音ニ似タルヲ不正トスベシ。然ルニ人皆此義ヲ辨ヘズシテ。此方ノ字音ノ彼國ノ音ニ似ザルヲ以テ。タヾ訛舛ノ音トノミ思フハ。深ク考ヘザルヒガコトナリ。サテ拗ヲ直ニツヾメ。鄙俚ナルヲ轉ジナドシタル例。字音假字ヅカヒニ出セルガ如シ。凡テ此方ノ字音ニハ。今ノ唐音ノ如ク甚鄙俚ナル者ハ。一ツモ厠(マジ)ラザルヲ以テ。コトサラニ改メ定メタルモノナルヿヲサトルベシ。若シオノヅカラ訛レルモノナラバ。甚鄙俚ナル音モ必マジルベキ理ナルヲヤ。又マレニ反切ニ合ザル音ナドモアルハ。反切ノ字ノ音ハ。タマ〳〵

イヤシカラザル故ニ。本音ノマヽナルガ。歸字ノ音ニ至テイヤシキ故ニ。轉ジタルモアリ。又此等ノ例ノ外ニモ。反切ト合ザルガマヽ〱アルモ。多クハ所以アリテ然ル者ニ〆。ヒタスラ訛レルニハ非ズ。又此方ニテ初メテ字音ヲ定メラレシコロト。唐ノ代ノコロナドトハ。彼國ノ音モイサヽカ變ジタルコトモアルニヨリテ。韻書ニ合ザルコトモアルベシ。又四聲分ラズ清濁正シカラズナド云コトノ論ハ。末ニ委ク辨ズベシ。】

漢字音撰者ノ事

當時字音ヲ撰定セシハ。何レノ人ニカアリケムト云ニ。必彼ノ皇子ニ典籍ヲ教ヘ奉リシ。百濟國ノ博士阿直和邇ナドナルベシ。コレラハ韓地ノ人ナガラ。和邇ハ漢ノ高祖ガ子孫ナレバ。モト唐國ノ人ナルモ知ベカラズ。ヨシ然ラズトモ。唐國ノ音韻ニモヨク通ジテ。辨ヘ知テゾアリケム。サレド皇朝ニ參入テハ。イマダ幾バクモアラザリシホドナレバ。其音ノ皇國ノ語音ニ叶ヘリヤ叶ハズヤマデハ。イマダエヨクモ辨ヘ知マジケレバ。【難波津ノ歌ヲ。此ノ和邇ガ作ト云ルナドハ。傳ヘ誤レルモノナリ。】皇朝ノ賢キ人等ト共ニ相議テ。唐國ノ音韻ノ旨ニモ背カズ。此間ノ音ニモ甚遠カラヌ。宜シキホドヲ考ヘ撰テゾ定メツラム。【諸字ノ訓ヲ定メシモ。亦如此クニゾアリケム。】又彼ノ御世ナドニハ。唐國人ノ參入テ留マリ居タルモ。此レ彼レト有ツレバ。其人等ナドモ共ニ相議シコトモアルベシ。スベテサル細ナル事ドモマデハ。今詳ニ知ルベキニ非レドモ。事ノサマヲヨク考ルニ。必ズ然ルベキ者ナリ。ソノカミ新タニ渡リ參入來ツル書籍ヲ讀ミ初メケム時ノ事ノサマヲヨクヨク思ヒヤルベシ。文字ト云モノ。イマダ形ヲダニ見タルコトモナカリケムニ。假ニモ其讀音ヲ一々ニ識ムコト。甚容易ナルマジケレバ。イカニモ此方ノ人ノ口ニ誦ミヤスク學ビヤスク〆。然モ唐國ノ音韻ノ旨ヲ失ハヌサマヲ撰バズバアルベカラズ。是亦甚容易ナラヌコトナレバ。必此レ彼レト相議テ。深ク考ヘズバ。定メ得ベキニ非ルヲヤ。

呉音先ヅ定マレル事

サテ其時ニ初メテ定マリシ字音ハ必呉音ナルベシ。其故ハ昔ヨリ書典ヲ讀ムニハ漢音ヲ用ヒツレドモ。常ニ口語ニ呼ブコトニハ。漢音ヲ用ヒツルハイト〳〵罕ニメ。諸ノ物ノ名或ハ官名其餘ノ名稱ナドモ。皆呉音ニノミ呼來レリ。書籍ノ題目ナドヲサヘ。古ヘヨリ五經ハゴキヤウ。易ハヤク。【古ヘハエキトハ呼ザリキ】禮記ハライキ。周禮ハシユライ。檀弓ハダングウ。月令ハグワツリヤウ。千字文ハセンジモン。玉篇ハゴクヘンナドヽ呼來リ。【又佛家諸宗ノ法文ヲヨムニモ。昔ヨリ漢音ヲ勝レタリトシテ。別ニソレヲモ傳ヘナガラ。常ニハコレヲ用ルコトナクメ。名目モ何モスベテ呉音ニノミ呼來レリ。】又古書ノ假字ニモ呉音ヲノミ取テ。漢音ヲ取レルハイト〳〵スクナシ。【帝ヲテ。禮ヲレ。西ヲセニ用ヒタル類ハ。漢音ノテイ レイ セイナドヲ取レルニハ非ズ。呉音ノタイ ライ サイニメ。愛ヲエ。開ヲケ。米ヲメニ用ヒタルト同格也。弟子ヲ呉音ニデシト呼來レルモ。此例ナルヲ思フベシ。サテ漢音ヲ取レルハ。タヾ日本紀ニ。麻摩ヲバ。寐彌ヲビ。文矛ヲブ。謎ヲベニ用ヒタルナド是也。サレド他ノ古書ニハ。此等ノ例ハナキコト也。凡テ日本紀ノミハ。神ノ名人ノ姓名地名ナドノ文字モ。他ノ書ドモノ例ニ異ナルモノ多キナリ。】是等ヲ以テ知ベキ也。ヤヽ後ニ漢音ヲイタク尙バルヽ世ニナリテスラ。讀書ナラヌ常ノ語ニハ。ナホ呉音ヲノミ用ヒラレタレバ。マシテ上古ハ思ヒヤルベシ。【歷代天皇ノ漢樣ノ御諡號ハ。桓武天皇ノ御世ニ撰定セラレタルヲ。其御世ハ殊ニ漢音ヲ尙バレタルコロナレドモ。ナホカヽルコトニモ呉音ヲ用ヒラレタリトオボシクテ。神武崇仁文正聖ナドノ字。皆今ニ至ルマデ呉音ニノミ唱ヘ奉リ來レルハ。初メヨリノマヽトコソ聞ユレ。】抑唐國ニテ正シトスル漢音ヲバオキテ。呉音ヲシモ用ヒラレタルハ。如何ナル故ゾト云ニ。呉國ハ漢ヨリハ。地方モヤヽ皇國ニ近ケレバ。其音モ實ハ漢ヨリハヤヽマサリテ。皇國ノ音ニ近ク親シクメ。是ヲ聞クニモヤヽ平穩ナレバナリ。【又ソノカミ高麗百濟ナド。呉國ニ親シク往來セシコトナレバ。和邇ナドモ呉國ノ音ヲ殊ニヨク識テ。コレヲ敎ヘ奉リシニテモアラムカ。ソハイカナラム。今知リガタシ。】サテソノカミ初メテ定マリシ呉音ハ。即今ノ世マデ傳ハレル呉音ナリ。

漢音定マレル事

漢音ハ。　呉音ヨリ後ニ定マリシヿハ疑ヒナケレ𪜈。ソハ何レノ御代ヨリト云ヿハサダカニ知ガタシ。　繼體天皇ノ七年ニ。百濟ヨリ五經博士段楊爾ト云人ヲ貢ル。　同十年又同博士漢ノ高安茂ト云人ヲ貢テ。段楊爾ニ代ラシム。又欽明天皇ノ十四年易ノ博士暦ノ博士ナド。番上下相代ルベキ ムネヲ勅セラル。同十五年五經博士王柳貴ト云參リテ。固德馬丁安ニ代ルナドト云ヿ見エタリ。　右ノ件ノ人々ハ。漢國人カ三韓人カ知ラネ𪜈。　中ニ漢ノ高安茂トアルハ。　マサシク漢人ト聞ユ。此時イマダ音ノ博士ハ見エザレ𪜈。既ニ漢人五經博士トシテ。是ヲ敎ヘタラムニハ。漢音モコレラノコロヨリヤ定マリケム。サテ何レノ御世ニマレ。古ヘ用ヒ初メラレシ漢音モ。全ク彼國ノ音ノマヽニハ非ルベシ。上件ニ論ゼル如ク。彼國ノ音ハ甚タ殊ナレバ。此方ノ人ノ輒ク學ビ得ベキニ非ズ。亦タトヒ學ビ得タリトイヘドモ。侏離鴃舌不正ノ音。讀書ナドニ用フベキ者ニ非レバ。是モ亦カノ應神天皇ノ御代ニ。呉音ヲ定メラレタル如ク。異國ノ博士ト此方ノ賢キ人ト相議テ。彼國ノ音韻ノ旨ヲモ失ハズ。此方ノ音ニモ甚遠カラヌ。宜キホドヲ撰ビテゾ定メツラム。事理必ス然ラザルヿヲ得ザレバ也。サテ其時定マレル漢音ハ。即今ノ世マデ傳ハレル漢音也。抑初メヨリ用ヒナラヒタル呉音ニテ。事ハ足リヌベキニ。又更ニ別音ヲ並ヘ用ヒムハ。イト煩ラハシク益ナキヿナルニ。如何ナレバ又此漢音ヲモ用ヒ始メタマヒシゾト云ニ。初メ呉音ノ定マリシコロハ。イマダ書籍ニウヒ〲シキホドナレバ。タヾ是ヲ讀得テ義理ノ通ズルヲノミコソムネトシタルベケレ。イマダ其音ノ好惡ノサダマデハ及バザリケムヲ。其後年代ヲ歴テ。漸ク書籍ニ熟シタルウヘニテハ。彼國ニ於テ呉音ハ蠻夷ノ音ニ〆正シカラズトシ。中原ノ漢音ヲ正シトスルヿヲ所如看シ。又唐國三韓ヨリ參レル人ドモヽ。皆漢音正シキ由ヲ申シナドセシニヨリテ。不正トスル呉音ヲノミ用ヒテアラムヿヲ。アカズ所思看セルヨリ。漢音ヲモ相並ベテ用ヒ初メタマヒシナルベシ。然ラバ其時呉音ヲバ廢セラルベキニ。ナホ兼ネ用ヒラレシハイカニト云ニ。呉音ハ久シクナリテ。ソノカミ既

ニ天下ニ遍（アマネ）ク用ヒナレタルウヘニ。皇國ノ音ニヤヽ近クシテ。實ニハ漢音ヨリヤヽマサリタレバ。必ス廢セラレ難キ自然ノ勢ナルヲヤ。

皇國ノ漢呉音ノ論

漢音モ。此方ニテ宜キホドニ改メテ定メタラムニハ。唐國ノ眞ノ音ニハ非ズ。名ノミ漢音ニシテ。實ハ和音ナレバ。呉音ヲ用ヒムモ同ジヿ也ト思フ人モアルベケレ𪜈。然ニハ非ズ。呉音ハ彼國ノ呉音ニ依テ定メ。漢音ハ漢音ニ依テ定メタルモノナレバ。其差別ナキニ非ズ。今時ノ唐音ヲ以テコレヲ驗（コヽロ）ムルニモ。呉音ハ彼國ノ南方ノ音ニ近ク。漢音ハ北方ノ音ニ近シ。是ヲ以テ見ルニモ。二音共ニ眞ノ彼國ノ音ニハアラズトイヘ𪜈。古ヘ彼國ノ音韻ノ趣ヲヨク得テ定メタル者ニノ。サラニミダリナルヿニハ非ズ。悉曇ノ書ドモニ就（ツキ）テ。天竺ノ音ト。唐國ノ對譯ノ音ト。今ノ唐音トヲ相照シテ。ヨク考ヘ見レバ。此方ノ漢呉音ノ。全ク彼國ノマヽノ音ニハ非ルヿモヨク知ラレ。亦其ノ彼國ノ二音ノ趣ニ違ハザルヿモヨク知ラルヽナリ。【或説ニ。此方ノ字音今ノ唐音ニ似ズトテ。彼國ノ眞ノ音ニ非ズトハ云ベカラズ。今ノ唐音ハ訛謬ノ音ニノ。古ヘノ音ニ非ズ此方ニ傳ハレル字音ゾ。即彼國ノ古ノ音ナルト云ルハ。然ラズ。今ノ唐音ノ古ノ音トカハレルハサルコトナレ𪜈。大方ノ音聲ノスガタハ。萬國各ソノフリ〳〵アリテ。幾千年ヲ經レ𪜈。變ラヌトコロハ變ラヌモノナレバ。今ノ音ヲ以テモ。古ヘノ音ノ大方ノスガタハヨク知ラルヽヿナルニ。此方ノ字音ハ。ソノスガタ唐音ト大ニ異ナレバ。彼國ノ音ノマヽニ非ルヿ明ラケシ。又カノ宇治ノ若郎子ノ王ニ初メテ讀書ヲ敎ヘ奉リシ王仁（ワニ）ナドハ。百濟國ノ人ナレバ。此方ノ字音ハ其ノ傳ヘニテ。韓地ノ傳習ノ謬音也ト云説モアレ𪜈。今ノ朝鮮人ノ漢字ヲ呼ブ音ヲ考ルニ。此方ノ字音ニ近キ者モアレ𪜈。ソハマレニノ。大躰今ノ唐音ニ近シ。對馬ヲタイバアト呼ブガ如キ。タイハ全ク此方ノ音ト同ジキヲ。馬ヲバト呼バズノバアト呼ブハ。唐音ノ格也。但シ今ノ唐音ニハマアト呼ブ。バアハ古ヘノ漢音ナルベシ。又入聲ハ此

方ノ如ク韻尾ヲ顯ニ呼ブモノモ多シ。此等ハ此方ノ音ト似タレドモ。又日本ヲイルポン。百濟ヲペクチエ、ト呼ブナドハ。甚異音ニノ。其スガタ今ノ唐音ニ似テ。此方ノ音トハ甚遠シ。又此方ニテウト呼ッ韻ヲ。喉ノ内ニ渾濁ラシテ。クノ如ク呼ッ字ナド多シ。此外凡テ多クハ唐音ニ近シ。然レバ皇國ノ字音ハ。韓地ノ音ヲ傳ヘタルモノトハ見エズ。但シソノカミ諸字ノ中ニ。漢國ノ音ハイタク此方ノ自然ノ音ニ叶ハザルガ。タマ〳〵韓地ノ音ハ近キナドヲバ。ヤガテ其音ヲ取用ヒシヿナドハアリモスベシ。入聲字ニクキッチフノ顯ナル韻アルナドハ。彼ノ地ノ音ニナラヒテ定メタルニテモアラムカ。然レドモコレラモタヾ皇國ノ自然ノ音ニ背カザルトコロヲ擇テ。コトサラニ定メタルニコソアラメ。何トナク彼ノ謬音ヲ傳ヘタルニハ非ルヲヤ。又或說ニ。此方ノ字音ハ天竺ノ音ヲモマジヘタルモノ也ト云ハ。殊ニ非也。天竺國ニ漢字ヲ用ルヿヲ聞ザレバ。其音トテアルベキニアラズ。思フニ是レハ彼國ノ單音ノ。タマ〳〵皇國ノ正音ト同ジク。又五十連音ノ圖ハ。カノ悉曇字母ニヨリテ。造レルモノナル故ニ然言ッナルベシ。マコトニ五十連音ノ圖ハ。悉曇字母ニヨリテ。其學ノタメニ作レル者ニシテ。皇國ノ固有ニハ非ズ。又皇國ノ語音ノタメニ作レルモノニモアラズ。然レドモ其音ハ五十ナガラモトヨリ皇國ノ自然ノ正音ニシテ。サラニ彼國音ヲウツシ取レルニハ非ズ。ソハ古言ヲ以テ知ベキ也。然ルニ彼ノ圖ハタマ〳〵此正音ノ妙用ニ符合セル故ニ。コレヲ借リ用ルノミニコソアレ。彼圖ニヨリテ。此ノ妙用アルニハアラズ。抑天竺國ニハ。此皇國ノ正音ノ如クナル單音モアレドモ。又サマ〴〵溷雜不正ノ音モ多シ。其中ニカノ單音ノ。タマ〳〵皇國ノ音ニ同ジケレバトテ。必ス彼レヨリウツレルモノトハイカデカ云ベキ。凡テ皇國ニハ文字ヲ始メテ其餘モ。漢國ノ事ヲ取用ヒラルヽガ多キニヨリテ。オノヅカラニ他國ト同ジキコトノアルヲモ。皆他ヨリナラヘリトノミ思フメレドモ。ソハイミシキヒガ意得也。オノヅカラ相似タルコトモ。全ク同ジキコトモ。ナドカ無カラム。是ヲ皆他ヨリナラヘル者ゾトイハヾ。人ノ形ヲ始メ。山川草木鳥獸ナドノサマ。此間モ他國モ大抵同ジクシテ。サシモカハラザルハ。此等モ皆本ハ他國ヨリナ

ラヒテ造レリト云ベキニヤ。】

博士ヲ置テ字音ヲ正サレシ事

持統天皇ノ御世ニ。音博士唐ノ續守言薩弘恪ト云ッ見エテ。其後ツネニ大學寮ニ此職二人ヅヽヲ置テ。字音ヲ敎ル〻ヲ掌ラシメラル。又養老四年ニハ。此者僧尼妄作別音。宜下依漢沙門道榮學問僧勝曉等。轉經唱禮上。餘音並停之トイフ詔ナドモアリキ。抑如此ク博士ナドヲモ置テ字音ヲ正サレシハ。ソノコロニ至テハ。イヨ〳〵漢籍ニ熟セル故ニ。イヨ〳〵其讀音ノサダモアリテ。カノ先ニ定マリツル漢音ハ。彼國ノ音ニ異ナル〻ヲ。ナホアカズ所思看テ。全ク彼國ノ眞ノ音ヲ用ヒマホシク所思看シケルカラ也。サレバ此博士ニハ唐國ノ人ヲ用ヒラレツト見エテ。神護景雲ノコロモ。大學寮ノ音博士唐ノ袁晉卿ト云人ナド見エタリ。此外モナホアルベシ。又唐國ノ人ナラヌモ。彼國ニマカリ渡リテ學問シ。其音ヲヨク學ビ得タル人ヲゾ用ヒラレケム。サテ其後延暦十一年ノ敕ニ。明經之徒。不習正音。發聲誦讀。既致訛謬。熟習漢音。マタ同十二年ノ制ニ。自今以後。年分度者。非習漢音。勿令得度。マタ弘仁八年ノ敕ニ。宜下擇三十以下聽令之徒。入色四人白丁六人。於大學寮使上習漢語ト見エ。マタ朝野朝臣鹿取。少遊大學。頗涉史漢。兼知漢音。始試音生。マタ仁明天皇。能練漢音。辨其清濁。マタ菅道朝臣眞貞。以三傳三禮爲業。兼能談論。但舊來不學漢音。不辨字之四聲。至於敎授。總用世俗蹐訛之音耳。ナド丶モ史ニ見エタリ。コレラニ漢音トアルハ。ミナ其時ノ漢國ノ音ヲ云ルニテ。後世ニ唐音ト云ト同ジ心バヘナリ。此方ニテ古ヘ定メラレタル漢音ノコトニハ非ズ。ソノカミ既ニ此方ニテ定マレル字音アル故ニ。ソレニ對ヘテ漢國ノ音ヲ漢音ト云ルナリ。【右ニ引ル文ノ中ニ。誦讀既致訛謬。マタ世俗蹐訛之音ナドトアルハ。此方ノ漢呉音ヲサシテ云ル也。又ソノカミ既ニ和音ト云〻モ物ニ見エタリ。和音ト云ハサモアルベケレド。訛謬ナド丶ハ云ベキニアラズ。モトヨリ此方ノ字音ハ。此方ノ音ニ叶ヘテ。コトサラニ定メタルモノナレバ也。凡テ昔

ヨリ世ノ人皆ヒタスラニ漢籍ヲノミ尊信シテ。何事ニマレ彼レニ異ナルヲバ。皆ワロシトノミ心得テ。皇國ニスグレタル美アルヿヲエサトラヌカラ。如此ク此方ノ字音ヲバヒタスラ訛トハセルモノナリ。】其故ハ。此方ニテ定マリシ漢音ハ。ソノカミ大抵アマネク人モ知ルベク。知ッテハ呼ビガタキ音ニ非ズ。誰モ能スベケレバ。博士ニ就テ學ブマデモアルベカラザルニ。朝野鹿取卿知二漢音一ト云ヒ。仁明天皇能練二漢音一ナド、國史ニモ記サレ。又善道ノ眞貞ノ朝臣ハ不レ學二漢音一ナドモアルヲ以テ。此方ノ漢音ニアラズ。彼國ノ眞ノ音ニメ。タヤスク學ビ得ガタキ者ナリシヿヲ知ベシ。【或說ニ金禮信ト云人對馬ニ來テ。初テ吳音ヲ傳ヘ。次ニ表信公ト云人筑紫ニ來テ。漢音ヲ傳フ。是レ此方ニテ吳音漢音ノ始也ト云リ。此ノ金表二家ノ音ノコトハ。元慶ノコロノ或書ニモ見エテ。浮タル說ニハ非ズ。然レドモ其趣ヲ考ルニ。始メテ此ノ二音ヲ傳ヘタル人ニハアラズ。其時代サダカニハアラザレドモ。大抵奈良ノ末ヨリ延曆弘仁ノコロマデノ間ニ來レリシ人等ト聞エタリ。サテ同書ニ。又承和ノ末ニ正法師來リ。元慶ノ初ニ聰法師來ル。此兩法師漢音吳音ヲ說クト云テ。コレヲ新來ノ二家ト云ヒ。彼ノ金表ヲ舊來ノ二家ト云リ。此四家各其時ノ唐國ノ音ヲ傳ヘタル人ナリ。然ルヲ金表ヲ。吳音漢音ノ初ノト云ルハ。傳說ノ誤ナルベシ。又表信公ト云ハ。カノ神護景雲ノコロノ音博士袁晋卿ヲ訛リ傳ヘタルニハアラザルカ。袁ト表ト形近ク。晋ト信ト音近ク。卿ト公ト義近ケレバ也。若シ此ノ誤ッナラバ。彼ノ或書ニ表トアルモ。袁ヲ後ニ寫シ誤レルモノナルベシ。晋卿ガ事ハ。空海性靈集ニモ。遙慕二聖風一。遠辭二本族一。誦二兩京之音韻一。改二三吳之訛響一。口吐二唐言一。發二揮嬰學之耳目一ナドモアリテ。音ニ名高カリシ人ナリ　〇又或說ニ。百濟國ノ尼法明對馬ニ來テ。吳音ヲ以テ佛經ヲヨメル。是レ此方ニテ吳音ノ初ノ也ト云リ。コレハ鎌足ノ大臣ノ病ノ祈ッニ。百濟ノ法明ト云シ尼ノ。維摩經ヲ讀タリシヿ。政事要略元亨釋書ナドニ見エタリ。此事ヲ誤リ傳ヘテ。吳音讀經ノ始トハ云ルナルベシ。但シ此尼異國ノ人ナレバ。ソノ讀經ノ音。此方ノ字音ト異ニメ。眞ノ吳音ナリシ故ニ。此傳說アルニテモアルベシ。トマレカクマレ吳音ノ初ノト云ハヒガコ

ト也〇又或說ニ。延暦ノ詔ニ。佛書ヲヨムニハ呉音ヲ用ヒ。儒道ノ書ニハ漢音ヲ用ヒ。醫書ナドニハ二音ヲ兼用ヒヨトアリト云ヒ。或ハ此事。東寺ノ經藏ニヲサマレル古ヘノ太政官符ニ見エタリナドモ云ハ。ミナ御世彼ノ道々ノ讀書ノ音。右ノ如クナルニ就テ。好事ノ者ノ僞リ云ルヿ也。上ニ引ル延暦ノ制ニ。非レ習ニ漢音一勿レ令ニ得度一トアルヲ以テ。佛經ニモ漢音ヲ用フベキ制ナリシヲ知ベシ。カノ漢音トアルハ。眞ノ漢國ノ音ノコトニ〆。此方ノ漢音ニハアラザレド。既ニ彼國ノ眞ノ音ヲ習ハシメタマフホドナラムニハ。必彼國ノ漢音ニコソアリケメ。呉音ニテハアルベカラズ。ソノカミ彼國ニテモ。呉音ヲバイヤシメツレバナリ。】サテ如此漢國ノ眞ノ音ヲ尙ビタマヒテ。コレヲ用フベキヨシ。シバ〳〵制アリツレド。ソハモトヨリ皇國ノ音ニ甚遠クシテ。輙ク學ビ得ガタク。又タトヒ學ヒ得トイヘド。侏離鴃舌不正鄙俚ノ音ナレバ。實ニハ王公貴人ナドノ讀書ナドニ。サラニ用フベキ者ニ非ルガ故ニ。其音ハツヒニ世ニ行ハレズ絕ハテヽ。舊來ノ此方ノ漢呉音ノミ。弘ク天下ニ傳ハリ。其二音ノ中ニモ。呉音ハヤヽマサリテ。皇國ノ音ニ近キ故ニ。殊ニ遍ネク行ハレ來ツル也。【凡テ何事モ。上ノ制ハ制ト〆。其制ノ如クニハ行ハレガタキヿモ多カルモノナレバ。カノ養老延暦弘仁ノコロノ字音ノ制モ。思ヒヤルベシ。仁明天皇朝野ノ鹿取ノ卿ナドヲ。トリワケテ國史ニ稱美シタルニテモ。習ヒ得タル人ノ甚希ナリシヿハ知ラレタリ。然ルヲカノ制ノアリシヲ見テ。ソノカミノ人ハ皆漢國ノ音ヲヨクシテ。普ク用ヒタリシヿト思フハ。精シカラズ。ソノコロトテモ制ハ制トシテ。ナホ世ニ徧ク用ヒタリシハ。古ヘヨリノ此方ノ呉音漢音ナリシ也

〇サテ今ニ至ルマデ。二音ノウチ。大抵儒書ヲヨムニハ漢。佛書ヲヨムニハ呉ヲ用フ。此義イカニト云ニ。マヅ世ニハ漢音ヲ正シトスル故ニ。儒書ニハコレヲ用ヒ來レルナルベシ。佛家ニテモ漢ヲ正シト〆。古キ宗門ニハ別ニ一種ノ漢音ヲモ傳ヘタリ。然レド佛家ニハ。常ニハナホ呉ヲノミ用ルハ。トニカクニ皇國ノ自然ノ音ニ遠キト近キトノ故也。儒書ナドハ全ク音讀ニハセズ。訓ヲマジヘテヨムユヱニ。漢音ニテモ訓ノ間ニマジレルハ。サノミ耳ニタヽザルヲ。佛經ノ

如キハ旦暮音讀ニノ。殊ニ古ヘハ其聲調ノ美惡ヲサダセシヿナルニ。漢音ハ彼國ノサダメニ隨テ。正シトハスルモノノ。實ハ正シカラヌ故ニ。耳ニタチテ聞ヨカラヌカラ。オノヅカラ吳音ニノミ誦ナラヒ來レル也。又皇朝ノ律令格式等及ビ諸ノ文書ヲヨムニハ。便ニ任セテ二音兼用ル中ニ。定マレル名目ナドハ皆吳音也。又歌書物語文ナドニテハ。常ニハ漢音ニ呼ブヿヲモ。ミナ吳音ニヨメリ。今上ヲゴンジヤウ。孔子ヲクジト云タグヒ也　〇佛家ノ古キ宗門ニ傳ヘタル一種ノ漢音ト云ハ。乘勝稱證等ヲシノ音トシ。應ヲイ。行ヲケイ。進ヲシイトシ。又入聲ノ一ヲイ。十ヲシナド、シテ。韻ヲ省ケル多ク。或ハ白ヲハキ。國ヲケキトモシ。又極樂ヲキラク。釋迦ヲセキヤナド、呼フ。如此ク尋常ノ音ト異ナル者。凡ソ數十字アリ。或說ニ。是レ即カノ延暦ノコロ漢音ト云ル者ニシテ。唐國ノ古ヘノ正音也ト云リ。然レ𪜈是モ全ク彼國ノマヽノ音ニハ非ズ。ナホ此方ノ自然ノ音ニ叶ヘテ定メタルモノ也。其故ハ。上ニ云ル如ク。彼國ノ音ハ。ソノスガタ此方ノ字音トハ甚異ナルモノナルニ。件ノ音尋常ノ此方ノ字音ト異ナル者ハ。ワヅカニ數十字ニ過ズシテ。其餘ハ常ノ如ク。又ソノ異ナルモノモ。皆此方ノ字音ノ躰ヲ出ザレバ也。又其聲明ナドハ。節族ヲナシ四聲ヲ定メテ守ルヿナルニ。其ノ守ルトコロ。唐國ノ四聲ニカヽハラズ。連聲ノ便ニ隨テ轉變スルハ。是レ此ノ方ノ語音ノ例ニ叶ヘタルモノ也。若シ其音全ク彼國ノマヽヲ用フトナラバ。四聲モ彼國ノ如クニ守ルベキニ。サハアラズ。此方ノ語音ノ例ニ轉用スルヲ以テ。音モ亦然ルヿヲ知ベシ。其中ニ又連用ノ便ニ隨テ。一字ノ音ヲ彼此異ニセルモマヽアル。是又唐國ニハサラニ例ナキヿ也。コハ悉曇ノ穩便ヲ用ル法ナドニナラヒテ。音調ヲ擇ベルモノナルベシ。抑如此ク別ニ一種ノ音ヲ定メタル所以ハ。初ノ其人唐國ニマカリ渡リテ。音韻ヲヨク解レルニ。此方ノ舊來ノ字音。宜シカラザル者アリトシテ。ソヲ擇テ改メタルモノナルベシ。然レ𪜈コレハ唐國ノ其時世ノ音ト。其人ノ心トニヨリテ。定メタルトコロ異ナルニコソアレ。必シモ後ニ改メタル方ヲ正シ𪜈云ベカラズ。譬ヘバ梵漢ノ飜譯ノ。舊ト新トノ異ナルヿ多キ。必シモ新ヲノミ正シ𪜈定メ難キガ如

シ。例ヲイハヾ。カノ一十等ノ字ノ音ノ如キ。上古ニ定メタル時ニハ。唐國ノ入聲ノマヽニテハ。急促(ツマリ)テイヤシク。皇國ノ音ニ叶ヒガタキ故ニ。ツフノ韻ヲ添ヘテイツシフトセルヲ。此一家ハ。顯(アラハ)ニツフノ韻アリテハ。彼國ノ入聲ノ躰ニ違ヘリ。又急促(ツマリ)テハ此方ノ音ニ叶ハズトシテ。韻ヲ省キテタヾニイシト定メタル也。是レ何方(イヅカタ)ニモ其理アリ。此一家ノ音ノ中ニモ。同ジキ入聲ニ國ヲケキ白ヲハキト呼ブ類モアルヲ以テ。舊音ニ顯(アラハ)ナル韻アルヲモ。ヒタスラ非也トスルニハ非ルヿヲ知ベシ。サテ又乘等ヲシノ音トスルコトモ。梵字ノ對注ニモ。シノ音ニ勝ノ字。リノ音ニ陵ノ字。チノ音ニ登ノ字ヲ用ヒタルナド例アリ。又極ヲキト呼フモ。或書ニ極ト忌ト聲相近シナド云ルヿアリ。然レバ何レモ據アルヿニハアル也。

○又後ノ宗門禪家ノ諸派ニモ。此方ノ漢呉音ニモアラズ。今ノ唐音ニモアラザル異音ドモアリ。是レハ彼國宋ノ末ヨリ元ヲ歷テ。明ノ中ゴロマデノ間ノ音ヲ。各其時々ニ傳ヘ來リテ訛レルモノ也。銀子扇子ナドノ子ヲスト呼ッモ。彼國ノ古ヘノ音ノシイト。今ノ音ノツウトノ間ナレバ。右ノ時代ニハスウト呼シヲ傳ヘタルナルベシ。行脚行燈ナドノ行ヲ。アント呼フモ此類也。又黄檗派ノ音ハ。近キ代ノ唐音ニテ。コレ又此方ニテ展轉シテ多ク訛レル者ナリ。

此方ノ字音ハ古來誤リ無キ事

皇國ノ字音。今傳ハルトコロ漢呉共ニ。古ヘニ定マリツルマヽニシテ。訛レルヿナシ。其故ハ。此方ニテハ字音ハ。定マリテ既ニ人々慣(ナレ)タルウヘニテハ。訛マルマジキ理アリ。イカニト云ニ。先ッ自然ノ言語ハ郷土ノ方言アリテ。五方各同ジカラズ。又時世ニ隨ヒテモ移リカハルモノ也。然ルニ字音ハ。他國ノ音ヲウツセル者ニシテ。モト此方ノ自然ノ物ニ非ルガ故ニ。方音ノ差(タガヒ)アルヿナク天下同一ニ天ハテン地ハチニシテ。異音ナシ。如此ク五方ノ殊異ナキヲ以テ。古今ノ變易モ無キコトヲオシハカリ知ベシ。若シ古今ノ變アラバ。必五方ノ異モアルベキ理也。又自然ノ郷土ノ方言ハ。其訛謬モ亦自然ナル故ニ。各其國其郷ハ同一ニシテ。異ナキモノ也。然ルニ字音ハ自然ノ音ニ非レバ。若シ訛ラムニハ。字々天下同一

ニハ訛ルマジク。必ス人々マチ〳〵ニシテ。天ヲチン𪜈訛リタントモ訛ルベク。地ヲモツ𪜈訛リテ𪜈訛ルベケレバ。今時モ天ニチン　タン。地ニツ　テ等ノ音モアリテ。諸字皆如此ク。サマ〴〵ノ音アリテ傳ハルベキニ。古ヘヨリ今ニ至ルマデ。天ハテン地ハチニシテ。異音アルヿヲ聞カズ。是レ漢國ニテハ其音自然ノ生物ナルガ故ニ。方土ノ異モアリ。古今ノ變モアルヲ。此方ニテハ字音ハ。自然ノ生物ニ非ルガ故ニ。返テ異變無キ也。譬ヘバ生人ノ顏色容貌ハ。漸クニ變リユケ𪜈。ソレヲ模(ウツ)セル木偶人ノ顏貌ハ。幾年ヲ經レ𪜈初メノマヽニノ。カハルヿナキガ如シ。サテ又片假字平假字出來テヨリ以來ハ。【片假字ハ。上ニモ云ル如ク吉備ノ大臣ノ作ナルベキカ。平假字ハ今ノ京ニナリテ出來タリ。空海ノ色葉ノ歌其始メナラム。】イヨ〳〵字音ノ訛リハ出來ザル理也。天地ノ如キ。テムチ𪜈てむち𪜈記シオケバ。幾千年ヲ經(フ)トイヘ𪜈此假字動クヿナシ。サレバ古ヘノ書ニ。假字ヲ以テ記シオキタル字音ヲ見ルニ。今ト異ナルヿナシ。是レ古今ノ變易ナキ證也。又本音鄙俚ナル故ニ。通音ニ轉ジナドシテ定メタルハ。反切ニ合ハズ韻モ違ヘレバ。中古ノ識者必コレヲ考ヘテ。改メ正スベキヿナルニ。サモアラデ今ニ至ルマデ。合ハザルマヽニテ傳ハリ來ル類。コレラモ又諸字ノ音初メニ定マリタルマヽニテ。變ラザル證ナリ。若シ中古ノ人反切ニ依テ合ハザルヲバ改メモシ。又ハオノヅカラ訛リモシタラムニハ。諸字ノ中ニ必ズ鄙俚ナル音モ則(マヽ)リテコレアルベキニ。サル音ハ一ツモ無キヲ思フベシ。【數百字ノ中ニハ。マレ〳〵訛レル音モアルベケレ𪜈。ソレハタヾ其字ノウヘノミノ誤ニテ。凡テノウヘニハアヅカラズ。又明名命猛孟等ノ字。漢音ハベイ　バウナルベキニ。常ニメイ　マウト呼ブタグヒナドハ。所以アルヿナルベシ。此類餘モ准フベシ。】

皇國字音ノ格

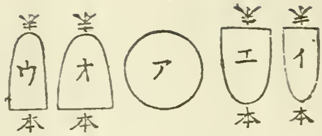
此方ノ字音ニ五ツノ別アリ。單音。イノ韻。ウノ韻。ンノ韻。入聲。是ナリ。サテ入聲ノ韻ニ又ク　キ　ツ　チ　フノ五ツアリ。

〇單音トハ。ア　イ　ウ　カ　キ　ク等ノ如ク。單ニシテ餘響ナキ音ニシテ。支脂微魚虞模歌麻等ノ韻【コレハ平聲ノ韻ノミヲ

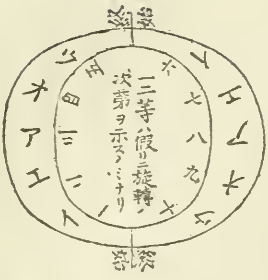
擧テ上聲去聲ノ韻ヲモ攝スルナリ下皆コレニ效ヘ】ノ字是也。其外東冬齊佳皆灰咍尤侯幽等ノ韻ノ字ノ呉音ニモコレアリ。然ルニ今ノ唐音ニハ。正シキ單音ハ一ツモナクノ。支等ノ韻モ。ヤア イヽ ウヽ キヤア キユイナドノ類ニ呼ベリ。彼國ノ音ハ古ヘヨリシテ如此キサマナルモノト見エタリ。【其故ハ。悉曇ノ短ノアノ對注ニ阿ノ字ヲ用ヒテ。短呼音近レ惡トモ注シ。或ハ入呼トモ注シ。或ハ音惡トモ注シ。又惡ノ字ヲ用ヒテ。烏舸反ナドトモ注セリ。コレ阿ノ字ハアヽノ音ニテ。短聲ニハ叶ハザル故ニ。入聲ノ惡ノ字ノ如ク短ク呼ベト云フ也。若シ阿ノ字此方ノ音ノ如クアナラバ。カヽル注ドモハアルベカラズ。次ニ長ノアニモ阿ノ字ヲ用ヒテ。依レ聲長呼ナドヽ注セルハ。本音ノマヽニアヽト呼ベト云フ也。長ク呼フハ本音ナレバ勿論ナレ𪜈。前ノ短呼ニ別ムタメニカク云ル也。次ニ短ノイニ伊ノ字ヲ用ヒテ。聲近シ於翼反ニト注セルモ。入聲ニ近キヤウニ短ク呼フヲ云。又億ノ字ヲ用ヒテ。以テ伊ノ上聲ヲ稍短ク呼レ之トモ。烏奚反短聲ナドトモ注セリ。次ニ長ノイニモ伊ノ字ヲ用ヒテ。依レ字長呼ト注セル。依レ字トハ。依レ聲ト云ルト同ジクテ。此字ノ本音ノマヽニイヽト長ク呼ベト也。凡テ悉曇ノ對譯ハ。唐以前ノコトナルニ。如此クナルヲ以テ。其代ノ音モ。阿ハアヽ伊ハイヽナリシヿヲ知ルベク。餘ノ字ドモノ音モ准ヘテ知ルベシ。】然ルニ如此ク必ス長ク引ク聲ハ。皇國ノ正音ニ叶ハザル故ニ。皆正シキ單音ニツヾメテ定メラレタル也。其中ニ拗音ニ呼來ル者ノ罕ニアリ。東冬ノ韻ノ呉音ニシユ。支脂ノ韻ニスヰ ツヰ ルヰ。魚ノ韻ニキヨ シヨ チヨ ニヨ リヨ。虞ノ韻ニチユ シユ 。歌麻ノ韻ニクワ シヤナドノ音アル是也。凡テ拗音ハ溷雜不正ナル故ニ。多クハ直音ニ轉ジタル中ニ。イササカ聞ニクカラヌヲバ。本ノマヽニテ用ヒラレタルナルベシ。○イノ韻トハ。齊佳皆灰咍等ノ韻ノ字。及ビ淸靑ノ韻ノ字ノ漢音等是レナリ。此中ニ佳皆灰咍ノ韻ノ字ハ。韻ノイヲ正シク呼ビ。齊淸靑ノ韻ノ字ハ。韻ノイヲ音便ニテエト呼ブ。【エイハエヽ。ケイハケエ。セイハセエ。テイハテエ。ネイハネエ。ヘイハヘエ。メイハメエ。レイハレエ。ヱイハヱエ ト呼ベリ。】是レエハイノ類音ニテ。殊ニ親シキ故ニオノヅカラ然ル也。サレ𪜈コレラハ中古以來ノコトニコソアラメ。古ヘハ正シ

クイト呼シナルベシ。假字ニハ今トテモイトノミ書テ。エト書クコトナシ。サテ今ノ唐音ハ。齊佳皆灰咍ノ韻ノ字ハ。イノ韻ニ呼ビ。淸靑ノ韻ハンノ韻ニ呼ブ　○ウノ韻トハ。東冬江蕭霄肴豪陽唐庚耕蒸登尤侯幽等ノ韻ノ字。及ビ淸靑ノ韻ノ字ノ吳音等是レナリ。此中ニ韻ノウチ正シク呼フ者ハ。イウ　キウ　シウ　チウ　ニウ　リウ。又クウ　スウ　ツウ　フウ　ユウ　シユウ　チユウ等ノミニシテ。【但シイウハユウ　キウハキユウ　シウハシユウ　チウハチユウ　ニウハニユウ　リウハリユウト呼ブ】其餘ハ皆音便ニテオト呼ブ。【オウハオヽ。コウハコオ。ソウハソオ。トウハトオ。ノウハノオ。ホウハホオ。モウハモオ。ロウハロオ。ヲウハヲオ。ト呼ビ。ヨウハヨオ。キヨウハキヨオ。シヨウハシヨオ。チヨウハチヨオ。ニヨウハニヨオ。ヒヨウハヒヨオ。ミヨウハミヨオ。リヨウハリヨオト呼ブ。サテ又アウヲオヽ。カウヲコオ。サウヲソオ。タウヲトオ。ナウヲノオ。ハウヲホオ。マウヲモオ。ラウヲロオ。ワウヲヲオト呼ビ。エウ　ヤウヲヨオ。ケウ　キヤウヲキヨオ。セウ。シヤウヲシヨオ。テウ　チヤウヲチヨオ。ネウ　ニヤウヲニヨオ。ヘウ　ヒヤウヲヒヨオ。メウ　ミヤウヲミヨオ。レウ　リヤウヲリヨオト呼ブ。此類ハ韻ノミナラズ。音ヲサヘ轉ゼリ。】是レオハウノ類音ニテ。殊ニ親シキ故ニ。オノヅカラ然ル也。サレド是亦中古以來ノコトニコソアラメ。古ヘハ皆正シクウト呼シナルベシ。【拾遺集物ノ名ノ歌ニ。紅梅ヲ隱シテ。子ヲバイカデカ生マムトスラムトヨメルハ。ソノカミ旣ニ紅ノ字ノ音ヲ。凡テコヲト呼シカ。但シ是ハウノ韻ニシテハヨミガタキ故ニテモアルベク。又芭蕉ヲハセヲバト云ル例ニテ。音ヲ轉シテ訓ノ如ク。常ニコヲバイト唱ヘシニモアルベシ。】假字ハ今トテモ皆ウトノミ書テ。オトハ書ズ。サテ今ノ唐音ハ。蕭霄肴豪尤侯幽等ノ韻ノ字ハウノ韻ニ呼ビ。【皆正シクウト呼ベリ。此方ノ後世ノ如ク。音便ニオト呼ブコトハナシ。但シ蕭霄ノ韻ナドハ。オノ如クニモ聞ユルナリ。サレドソレモ。此方ニテセウ　シヤウヲシヨオト呼ブ如クニハ非ズ。セオ　シヤオナドノ如ク聞ユ。】東冬江陽唐庚耕淸靑蒸登等ノ韻ハ。皆ンノ韻ニ呼ヘリ。○上件諸字ノ韻ノイトウトハ。韻ノ開合也。抑輕重開合ノ序次ハ。旣ニ字音假字ヅカヒニ圖ヲ著シテ委ク云ルガ如

ク。イエアオウト次第シテ。イハ開ノ始メ。ウハ合ノ終リニテ。相反スレドモ。却テ又甚近クシテ。殊ニ親シク通ヘル理アリ。左ニ其圖説ヲ著ハセリ。



五音ノ形狀。此圖ノ如クナルモノニメ。イハ開ノ始メナレバ。其形細小ニシテ。本窄スボク末開ケユク音也。エハイニ類シテ。稍ヤヽ大ニシテ。ナホ末開ケユク音也。アハ中極ノ音ナル故ニ。圓大ニメ本末ナシ。【故ニ悉曇家ニ此音ヲ開音トシテ。餘ノイエオウヲバ。皆合音トスルコトアリ。】オハ開ヨリ合ニ行ク音ナレバ。末窄リテ。ウニ類シテ。稍大ナリ。ウハ合ノ終リナレバ。其形細小ニメ。イヨ〱末窄リ極マル音也。右五音ノ形狀。ミヅカラ呼ヒ試ミテ知ルベシ。【カサタナハマヤラワノ九行ノ五音モ。其開合ノ次序。此ノイエアオウニ準ズ。】サテ右ハ開ノ始メヨリ合ノ終リヘ旋ル次第ナルヲ。又逆ニウオアエイト旋ラセバ。ウオアハ漸クニ開ケユキ。アエイハ漸クニ窄リユキテ。合ニ還ルイキホヒナリ。



此圖ノ如クニ旋轉循環シテ。終リヨリ又始メニカヘル。是レ聲音ノ自然ニメ。律モ亦同ジ〻也。サレバイトウトハ。開合ノ分ル〻所ニメ。然シカモ隣近ノ音ナルガ故ニ。諸字ノ韻此二ツニ分ル〻也。又イノ韻ナル者。音便ニテエトナリ。ウノ韻ナル者オトナルガ多キハ。各類音ニテ。近ク親シキ故ナル〻。此二ツノ圖ヲ見テ曉サトルベシ。

〇ンノ韻トハ。眞諄文欣元痕魂寒刪山先仙侵覃談鹽添咸銜嚴凡等ノ韻ノ字是ナリ。今ノ唐音モ件ノドモ韻ハ皆ンノ韻ニ呼フ也。【其外ニ東冬江陽唐庚耕清青蒸登等ノ韻ヲモント呼ベリ】凡テンノ韻ハ。イトウトノ變ニシテ。此二韻ヲ多ク鼻ヘカケテ呼フ者ナリ。抑ンハ是鼻ノ聲

ニメ。正シカラザル故ニ。皇國ノ古言ニハコレアルヿナケレバ。字音ノンノ韻モ。古ヘニ初メテ定メラレシ時ニハ。如何アリケム。本ノマヽニント呼シ歟。又轉ゾムトサダカニ呼シ歟。サダカナラザレ𪜈。皇國言スラ中古ニ至テ。ム等ハ音便ニント呼ブ者多クナリヌルヲ思ヘバ。字音モ原ハムナリシヲ。後ニ音便ニテ凡テント呼ブヿニナレルニモアルベシ。【大和ノ多武ノ峯ハ。古ヘハ今ノ如クタウトハ唱ヘズ。ムヲタシカニムト呼シニ。古ク談ノ峯トモ書タレバ。談ノ字タムト呼シカ。三郎ノ三ハ。今モサムト呼ベリ。】又凡テンハ鼻ノ聲ナル故ニ。開合ニアヅカラザルガ如シト云ヘ𪜈。開ニハ遠クシテ。合ニ近シ。其中ニ猶三ツノ異アリ。口ノ聲ヲ帶テ開クカタニ呼ベバ。イニミニ近ク。ソレヲ合スカタニ呼ベバ。ウヌムニ近ク。又口ノ聲ヲ帶ズシテ純ラ鼻ニテ呼ベバ。マサシキンナリ。今ノ唐音ノンノ韻ニモ。イサヽカ此等ノ差別アリゲニ聞ユル也。サレバ古ヘノ音ニモ差別アルベケレバ。此方ニテ始ノニ定メラレシ時ニモ。ニミヌムナドヽ分レタリシモ知ルベカラズ。【イトウトハ別ニソノ韻アレバ。此中ニアラズ。サテ錢ヲゼニ。蘭ヲラニ。燈心ヲトウシミ。正身ヲサウジミト云類モ。モトヨリ音ノママナルモ知ガタシ。佛家ニ至心ヲシヽモ。和南ヲクワナモナドヽ唱ルヿモアリ。國名ノ信濃因幡讃岐ノ信因讃ナドハ。ナヌナドノ韻トシテ取レルニ似タレ𪜈。凡テ地名ノ假字ハ。韻ヲサマ〳〵ニ轉ジ用ヒタレバ。此ノ例ニハ引ベキニアラズ。】梵字ニハ。空點ノ音ニ喉内舌内脣内トテ三ツノ差別アリ。漢ノ對注ニ。仰講向等ノ字ヲ用ヒタルヲ喉内聲ト云。【此方ノ音ニテウノ韻ナル字皆同ジ。】安見捍等ノ字ヲ用ヒタルヲ舌内聲ト云。唵嚴劔等ノ字ヲ用ヒタルヲ脣内聲ト云リ。【此方ノ音ニテンノ韻ナル字。皆舌内脣内ニ攝ス。】此ノ字ドモヲ此方ノ音ニテ分ツニ。仰等ハウノ韻ナレバ。喉聲ニ論ナキヲ。安等唵等ハ共ニンノ韻ニメ。舌脣ノ差別ナシ。故ニ脣内聲ヲバムトシ。舌内聲ヲントシテ。是ヲ分ツ也。然レ𪜈ンハ全ク鼻ノ聲ニコソアレ。舌ニハサラニ關ラザレバ。是ヲ舌内ニ充ルハ謂ナシ。因テ思フニ。舌内ヲバヌノ韻トスベシ。ヌハ舌聲ナレバ也。【沒羅憾麼孏ヲ或ハ婆羅門𪜈云ヒ。吠室羅摩拏ヲ或ハ毘沙門𪜈云ヒ。沙摩那ヲ或ハ沙門𪜈云ヒ。舍枳也謨尼ヲ或ハ

釋迦文圧云フ。コレラ麼(マ)-嬭(ネイ)-摩(マ)-那(ナ)-謨(モ)-尼(ニ)等ノ下ノ字。皆舌聲ノ字ナルニ。或ハ門文ナド圧譯セルヲ以テ。門文等ノ韻モ舌聲ニテ。モヌノ音ナルコトヲ知ルベシ。サレバ空點ノ音ノ三内ヲ。此方ノ音ニテ分ツトキハ。舌內聲ヲバヌノ韻ト定ムベキコト。明ラケキ物ヲヤ。】此ノ舌内ト脣内トノ對注ノ字ノ韻ハ。今ノ唐音ニテモイサヽカ差別アリテ。ヌニ近ク聞ユルト。ムニ近ク聞ユルトガアレバ。古ヘノ音モ差別アリシ也。サテ此ノ三内。喉ハウ。舌ハヌ。脣ハムナレ圧。皇國ノ音ノウヌムノ如ク分明ニハ非ズ。外國ノ音ハ凡テ渾濁(クモリ)テ清亮ナラザレバ。三内相遠カラズ。何(イツ)レモ鼻ニ觸テ。髣髴トシテ。皆ンノ如ク聞ユルナリ。カノ仰講向等ノ類ノ字モ。今ノ唐音ハ皆ンノ韻ニ呼ブヲ以テモ知ベシ。然レバ空點ノ音ハ。三内通ジテ一ツニ云トキハントセルモ謂(イハ)レタルヿ也。○諸字ノ韻。上件ノ如クイウンノ三ツニ分ルヽヿハ。先ツ韻ハ音ノ餘響ニテ隱微ナルモノナルニ。外國ノ音ハ凡テ鼻ニカヽリテ渾濁(クモ)レル故ニ。其韻殊ニ隱微ニシテサダカナラズ。【梵字ノ單音ノ對譯ニモ。ウノ韻ンノ韻等ノ字ヲモ用ヒタルヿ多ク。皇國ノ假字ニモ。イ ウ ン等ノ韻ノ字ヲモ。韻ヲ。除キテ用ヒタル多キハ。韻ハ隱微ナルガユヱナリカシ。】サレバ皇國ノ清朗ナル音ニウツセル所ニテコソ。イ ウ ンノ差(タガ)ヒ明ラカニテマギルヽヿナケレ。漢國ノ音ニテハ。相渉リテ分曉ナラズ。或ハ漢音ニテハイノ韻ナルガ。呉音ニテハウノ韻ナルモアリ。或ハ古ヘノ音ハイウノ韻ナルガ。今ノ唐音ハンノ韻ナルナド。此方ノ音ヲ以テ思ヘバ。如此キノ異ハアルマジキヿナレ圧。彼國ノ音ニテハ相近クシテ。甚異ナルヿハナキ故也。京ノ字漢音ケイ呉音キヤウ今ノ唐音キンナルガ如キ。皇國ノ清朗ナル音ニテハ。如此ク大ニ異ナレ圧。試(コヽロミ)ニ漢國ノ音ノ如ク渾濁(クモ)ラシテ鼻ヘカケテ。キエイ キ。ヤ。ウ キイント呼ブトキハ。相渉リテ遠カラズ。餘モ准ヘテサトルベシ。イサヽカ脣ヲ開クカタニ呼ベバイトナリ。ソレヲ多ク鼻ヘカケテ呼ベバンノ開トナリ。イサヽカ脣ヲ閉ルカタニ呼ベバウトナリ。ソレヲ多ク鼻ヘカケテ呼ベバンノ合トナル也。サレバ諸字ノ韻ハ。音ノ響ノタヾイサヽカナルケヂメニヨリテ。此三ツニハ分レタルモノ也。○入聲ノ韻。クキツチフノ五ツアリテ。【クキモツチモ開合ノ對

ニテ。平上去聲ノ韻ノウトイトノ如シ。サテク キトツ チトノ例ヲ以テ見レバ。フノ對ニヒノ韻モアルベキコトナルニ。是ノミ對ナキハ。按ニクハ多クノキハ少(スクナ)ク。ツハ多クシテチハ少ク。チハ呉音ニノミアリテ。漢音ニハアルヿナク。又呉音ニテモチハツ𪜈呼ブ者多シ。コレラノ例ヲ以見レバ。ヒナルベキ韻ヲモ。皆フニ合セテ定メラレタルニヤアラム。】東冬江陽唐庚耕登ノ韻。又清靑ノ韻ノ呉音。蒸ノ韻ノ漢音。コレラノ入聲ハ並(ミナ)クノ韻也。キノ韻ハ。淸靑ノ韻ノ漢音ノ入聲ト。蒸ノ韻ノ呉音ノ入聲トノ中ニ。少々アルノミ也。【佛家ノ古キ宗門ニ。國或惑ヲケキ。白百ヲハキ。即ヲセキト呼ブ漢音アルナリ】眞諄文欣元痕魂寒刪山先仙ノ韻ノ入聲。漢音ハミナツノ韻ニテ。呉音ハ常ニ呼ブトコロ。ツトチトアリ。【是ハ始メヨリツトチト二ツアリツル歟。又始メニハ皆チナリシ歟。今知ガタシ。歌書ナドニテハ皆チトセリ。】侵覃談鹽添咸銜嚴凡ノ韻ノ入聲ハ並(ミナ)フノ韻也。【此中ニマレ〱ニハ。常ニツノ韻ニモ呼フ字アルナリ。】サテ件ノクキツチフノ五ツ共ニ。連用ノトキハ。下ノ字ノ音便ニヨリテ。喉ノ内ニ急促(ツノ)テㇷノ韻ニ呼ブヿ多シ。但シ是ハ中古以來ノコトナルベシ。【キノ韻ノミハ。今モ音便ニウツラザルモノオホシ。】サテ今ノ唐音ノ入聲ハ。此方ノ入聲トハ大ニ異ニシテ。タヾ平上去聲ノ韻ヲ省(ハブ)キタル如クニテ。風(フオン)ノ入聲福ハフオㇷ。中(チヨン)ノ入聲竹ハチーヨㇷト呼ブ。其ノㇷハ甚タ微ニメ。無キガ如シ。皆此類ニメ。クキツチフ等ノ韻ハアルヿナク。凡テ韻ノ差別ナキガ如シ。抑彼國ノ入聲ハ。古ヘヨリシテ其韻。此方ノ如ク顯(アラハ)ニハアラザリツラメ𪜈。必其急促(ツマ)ル處ニ隱々トシテ五ツノ差別ハアリケムカシ。譬ヘバ鳥獸ノ聲木石絲竹ノ音ナド。短キ者ハ皆必急促(ツマ)ルヲ。其急促(ツマ)ルトコロノ韻。顯(アラハ)ニハ分レザレ𪜈。皆同一ニハ非ズ。各イサヽカノ異アリテ。彼ノ鳥蟲ナドノギヤㇷ〱ト鳴聲ヲ。人ノ聲ヲ以テマネブニ。ギヤフ〱ト云ヘバヨク肖(ニ)ルヲ。ギヤツ〱ト云テハ肖(ニ)ズ。木ヲ扣(タヽ)ク音ヲマネブニ。カチ〱ト云ヘバヨク似ルヲ。カク〱ト云テハ似ザル物アリ。石ヲタヽク音ヲマネブニ。コツ〱ト云ヘバヨク似ルヲ。コク〱ト云テハ似ズ。是レ其急促(ツマ)ルトコロニ異アル證也。サレバ入聲ノ韻モ。此方ニテハ彼ノ鳥獸木石等ノ聲ヲマネブ如クニ。其ノ顯(アラハ)

ナラザル差別ヲ顯ニナシテ。ク‖キ‖ツ‖チ‖フトハ定メタル者ナリ。是ハ何故ゾト云ニ。彼國ノ如クニ韻ノ急促ルハ。侏離不正ニシテ。甚鄙俚ナル故ニ。ソノマヽニハ用ヒガタケレバ也。サテ又入聲字ハ。連用ノトキ上中ニアレバ。韻ヲ省キテモ呼フコト多シ。是レモトハ其韻顯ナラザルモノナルガ故也。ナホ漢國ノ古ヘノ入聲ノ體ハ。悉曇ノ對譯ニテヨク知ラルヽヿアリ。ソハ上ニモ云ル如ク。カノ短ノア‖ニ阿ノ字ヲ用ヒテ。入呼トモ注シ。音惡トモ注シ。近レ惡トモ注シ。或ハ直ニ惡ノ字ヲモ用ヒタリ。又短ノイ‖ニ伊ノ字ヲ用ヒテ。音億トモ注シ。或ハ直ニ億ノ字ヲモ用ヒタリ。コレラヲ以テ。惡億等ノ字。此方ノ如クニ顯ナルクノ韻ハ無キヿヲ知ベシ。若シ顯ニクノ韻アリテハ。アノ音イノ音ニハ甚遠シ。餘字ノ對注モ准ヘテ知ベキ也。サテカク顯ナル韻ハナシトイヘドモ。又全ク韻ナキニハ非ル證ハ。梵ノアノ音ニ涅槃點ヲ加ヘタル字ノ對注ニ。多クハ惡噁等ノ字ヲ用ヒタリ。涅槃ノ音ハ韻ノ急促ル音ナレバ。惡噁等ノ音亦必ス然ルヿヲ知ベシ。若シ全ク韻ナクテハ涅槃ノ音ニ叶ハズ。又同ジキ涅槃ノ音ニ。阿痾等ノ字ヲ用ヒタルニハ。梵音惡ト注シ。或ハ入聲如レ握音ノ呼レ之ト注シ。或ハ用レ力出レ氣呼トモ。放レ氣急切呼。不レ同ニ初短聲阿一トモ注セリ。【放レ氣急切呼ナドヽ云ル。全ク入聲ノ躰也。末ヲ急ニ擊テ呼ブニハ。必ス喉ヨリ勵シキ氣ヲ出シ放テ呼フヿ也。用レ力出レ氣ト云ルモコレニ同ジ。】又彼ノ短ノア‖ニ惡ノ字ヲ用ヒタルニハ。烏舸ノ反ト注シ。短ノイ‖ニ億ノ字ヲ用ヒタルニハ。以ニ伊上聲一稍短呼レ之ト注シ。烏矣ノ反ト注セリ。【短ノアノ音イノ音ハ。短カケレドモ末ハ急促ラザルニ。惡億等ハ。入聲ニテ急促ル韻アリテ。全クハ叶ハザル故ニ。烏舸ノ反。或ハ以ニ伊ノ上聲一ナド云注ハアル也。若シ入聲ニ全ク韻ナクバ。カヽル注ハアルベクモアラズ。】又彼ノ涅槃ノ音ニモ。喉舌脣ノ三内ノ差別アリテ。對注ニ惡索等ノ字ヲ用ヒタルヲ喉內聲ト云ヒ。悉壹等ノ字ヲ用ヒタルヲ舌內聲ト云ヒ。濕澁等ノ字ヲ用ヒタルヲ脣內聲ト云フ。皆此方ノ入聲ノ韻ト合ヘリ。【ク‖キ‖ノ韻ナル字ヲ喉內ト云。ツ‖チ‖ノ韻ナル字ヲ舌內ト云。フ‖ノ韻ナル字ヲ脣內ト云リ。】又波羅弭多ヲ波羅密トモ飜シ。阿魯里迦ヲ阿魯力トモ飜セル類ヲ以テモ知ベシ。密ニツ‖ノ韻ナクテハ。弭多ノ多ノ音闕ケ。力ニキ‖

ノ韻ナクテハ里迦ノ迦ノ音闕ル也。又達磨ノ如キ。此方ノ音ニテハダツマ也。今ノ唐音ニテハダモオ也。然ルニ是ヲダラマダルマナド、呼ブ所以ハ。其梵ノ磨ノ字ノ頭ニ。半躰ノ囉字ト云者アル故ニ。其上ノ字ノ對譯ニ入聲字ヲ用ヒテ。其隱々タル韻ヲカノ囉ノ音ニアテタルモノ也。コレ入聲字ノ韻運用ノ便ニヒカレテ。ラノ如クニモルノ如クニモ聞ユル故ナリ。羯磨ヲキヤラマ　ケルマ。沒帝ヲボリテイ。薩嚩ヲサラバ　サルバ【即娑囉嚩トモ譯セリ】ト呼ブナドモ皆此例ナリ。若シ右ノ達羯沒薩等ノ字ニ韻ナクテハ。彼ノ囉ノ音闕ル也。然ルニ漢國ニハ。唐ノ後悉曇ノ學絶タル故ニ。如此キ子細アルコトヲ知ラズシテ。タヾ達磨ヲバダモオ。羯磨ヲバケモオト呼ブヲ。返テ是ヲ正シト心得テ。皇國ノ入聲ヲバ。入聲ノ體ヲ失ヘリナド、云ハ。例ノミダリナルコト也。今ノ唐音ノ入聲凡テ韻ナキガ如クニ聞ユルヲ以テ。近世ノ學者入聲ハ全ク韻ナキ物ト心得タルハ誤ナリ。抑平上去聲ニイ　ウ　ンノ差別アルウヘハ。入聲ニモ韻アリテ。必ズ其差別アラザルヿヲ得ズ。其中ニ方土ニ随テ輕重ハアリテ。大抵北方ノ音ハ其韻モ重ク。南方ノ音ハ韻モ輕キニコソアラメ。入聲トテモ全ク韻ナキニハ非ルヲヤ。

漢國ニテ漢音吳音ノ事

漢音吳音トハ。皇國ニテ云ノミニハ非ズ。モトヨリ唐國ニテモ此稱アリテ。漢音ト云ハ彼國ノ中原ノ音也。ソハ漢ノ代ニ胡國ナドニ對ヘテ。ミヅカラ漢ト云ルカラ。此號オノヅカラ中國ナド、云ト同ジ意ニナリテ。漢ノ代ハカハリテ後ニモナホ云ヒナレタルマヽニ。自モ他ヨリモ然云リシヿ。彼國ノ書ドモニモ多ク見エタリ。【唐ノ代ヨリコナタハ又唐トモ云テ。後ノ俗稱ニハ唐山ト云ヒ。今モ彼國ノ商客ナドモ。ミヅカラ唐人ト云リ。漢ト云號モ是ト同ジコトナリ。】サレバ音モ。吳音ニ對ヘテ中國ノ音ト云意ニテ。漢音トハ云ル也。【然ルヲ漢音ハ漢ノ代ノ音ト心得タル人モアルハ。大ナル誤ナリ。】サテ吳音ハ。吳地ノ音ナルヿハ論ナケレ𪜈。若シ中原ノ漢音ニ對ヘテイハヽ。四邊ノ國々各其音アルベキニ。獨リ吳ノミ其稱ア

リテ。漢ニ並べ云ッハイカニト云ニ。呉ハ三國ノ時孫氏此ニ據シヨリ始メテ。晉ノ東遷ノ後ハ王都トナリ。南北朝ト分レテ。代代南朝ノ都ナリシ故ニ。漢ニ對テ殊ニ其稱ハアルナリ。【北朝ハカノ中原ノ地ナレバ。モトヨリ其音ハ漢音也。】皇國ニテモ。上古ヨリ漢ヲアヤ呉ヲクレト云テ。漢某呉某ト並べ稱スルヿ多シ。サテ此二音ノ勝劣ハ。先ッ漢音ハ彼國ニテ中原ノ音ナル故ニ。古來コレヲ正トシ。呉音ハモト蠻夷トセシ地ノ音ナル故ニ。正シカラズト定メタリ。彼國內ニテハマコトニ然ルベキヿ也。サレド是ハ彼國人ノ常ニ誇リテ。ミヅカラ中國ト云ヒ。何事モミヅカラ正シトシ。他ヲバ不正ト定メタルヨリノ私論ニコソアレ。人ノ聲音ノ正不正。コレヲ律スベキ由ナキニ似タレバ。實ニハ如何ナルヲ正トモ定ムベキニ非ルガ如シ。【或人ノ云ク呉ハ周ヨリ以前コソ蠻夷ノ國ナリケレ。秦漢以來ハ南方ノ一都會ニテ。六朝以來殊ニソノ繁華天下無雙ニテ。四方ノ學士太夫搢紳先生ノ聚ルトコロ。人物風流此地ニ過ルヿナク。彬々タル君子ノ鄕トナリヌレバ。語音モ正シクナリテ。明ノ代ニハ南京ノ音ヲ天下ノ正音トス。南京ハ即呉地也。コレ秦漢以來漸ヲ以テ致ストコロニメ。實ハ南方ノ風氣ノ然ラシムルトコロ也。何ゾ是ヲ賤シメテ邊土ノ音トスルヿヲ得ムト云リ。此論一ワタリ理ハマコトニ然ルベキヿト聞エタリ。然レ圧實ニハ然ラザルコト也。人ノ聲音ハ其鄕土ノ自然ニ出ルヿニテ。正シキ地ハオノヅカラ正シク。正シカラザル地ハ。イカホド四方ノ君子ノ聚リテ。繁華風流代々ヲ經テモ。ソレニ移リテ正シクハナラヌモノニテ。他方ノ音ノ厠リタルハ。厠リタルマヽニ。ナホ素ヨリノ音ハ。幾百年ヲ經テモ變ラヌトコロアル物也。サレバ呉地ノ近世ノ音モ。タトヘバ舊來ノ鄕音六七分ニ。他方ノ音三四分バカリナドモ淆リタルガ如キモノニゾアルベキ。然ルニ此地ノ音ヲシモ天下ノ正音トスルハ。或人ノ云ル如ク。六朝以來久シク都會ニテ。後世イヨ〳〵繁華風流ナルニヨリテ。萬ノ事此地ヲ以テスグレタリトスルカラ。人ノ語音モ正雅ナルヤウニ聞ナサルヽニコソアラメ。實ニ正シキニハ非ルベシ。サレバ彼國內ニテノ論ハ。古ヘニ漢音ヲ正シト定メタルモ。亦是レト同日ノ論ニシテ。タヾ中原ノ音ナルヲ以テ正シトシタルニコソアレ。是モ實ニ正シキニハ非ズ。近

世ハカヘリテ呉地ナル南京ノ音ヲ正シトスルニテ。其實ハ定マレルコトナキヲサトルベシ。凡テ何事モ彼國人ノ説ハ皆如此シ。】然レド實ニ勝劣無キニ非ズ。其實ノ勝劣ヲイハヾ。漢ヨリハ呉ハ其地方ヤヽ皇國ニ近ケレバ。其音モ亦漢ヨリハヤヤ正雅ニ近シ。【上ニ或人ノ説ヲ辨ジテ。呉音實ニ正シキニハ非ジト云ルハ。姑ク彼國内ノ意ニナリテノ論也。今ハ其ノ彼國ノ私論ヲ離レテ。實ニ呉音ノ勝レルヿヲ云リ。是レカノ或人ノ説ノ繁華風流都會ノ故ニモ非ズ。南方風氣ノ故ニモ非ズ。皇國ニヤヽ近キガ故ニ。其地ノ音ノ勝リタル也。然レバ近世彼國ニテ此呉地ノ音ヲ正シトスルモ。國内ノ私論ノウヘニテハ。實ヲ失ヘルヿナレド。オノヅカラ公論ニハ叶ヘルモノ也。抑皇國ノ音ノ萬國ニスグレテ。天地ノ間ノ純粹ノ正音ナルヿハ。上件ニ委ク云ル如ク。其證明ラカナレバ。此正音ヲ準トシテ律(タヾ)ス。コレ天下ノ公論ナリ。何ゾ外國ノ私論ニ従フヿアラム。】サレバ此方ニテ古ヘ呉漢ノ二音ヲ定メラレテ。殊ニ漢音ヲ尚(タフト)ハレナガラ。ナホ呉音ヲノミ多ク用ヒラレシハ。當(マサ)ニ然ルベキオノヅカラノ勢ヒナリケリ。【漢音ヲ尚ビタマヒシハ。ソノカミ漢國内ノ論ヲノミ信ジタマヘル故也。此事上ニ云リ。】

今ノ唐音ノ事

唐音トハ唐國ノ音ト云ヿ。今トハ其音古ト今ト同ジカラザル故ニ。コレヲ分ケテ云也。【漢音ハ漢ノ代ノ音。唐音ハ唐ノ代ノ音ト意得ルハ非也。此方ノ中古ノ書ニ。唐音宋音ト並ベテ云ルナドハ。唐ノ代ノ音ヲ云ル ナレド。ソハ別ノコト也。又或人。古ヘニ漢音ト云ルハ雅音。唐音ト云ルハ俗音也ト云ルモ非也。是レハ古ヘヨリ彼國中原ニモ。雅音ト俗音トノアリシモノト心得タルカラ誤レルナリ。俗音訛音ナド云ルハ。邊土ノ方音ノコト也。ソレニ對ヘテ中原ノ音ヲ雅音トハ云リ。中原ニモ俗音モアリシニハ非ズ。タトヒコレアリトモ。漢ト唐トヲ以テ雅俗ヲ分クベキ由ナシ。畢竟漢音ト云モ唐音ト云モ一ツ也。漢音唐語ナド、並べ云ルモ。タヾ詞ノアヤニ字ヲカヘタルノミニテ。漢ト唐トニ異ナル義アルニハ非ズ。然レド今時ハ。唐國ノ音ヲ漢音ト云テハ。呉音ニ對ヘ云フ漢音ニマギルレバ。タヾ唐音ト云ゾ宜シキ。】近世狂儒輩コレヲ華音ト稱ズルハ。甚

シキヒガコト也。凡テ皇國人ノ唐國ヲサシテ。中國中華ナド、云ハ。イミシキ狂言ナルヲ。コトノコ、ロヲモ辨ヘザル者マデモ。儒者ノ言ニナラヒテ。ソヲヨキコト、心得テ。然云アヘルハ。イトモ〱アサマジキワザ也。【此事余サキニ馭戎慨言二卷ヲ著シテ委ク辨ゼリ。】其音モタヾ唐音ト云ゾ當レル稱ナリケル。【近世ノ儒者。彼國ヲ漢ト云ヒ唐ト云ヲバ。俗ナル言ノ如ク心得タルハヒガコト也。上ニモ云ル如ク。古ヘヨリ彼國ニテモ然云フハ常ノコトナルヲヤ。】サテ今ノ音。諸州各少シヅヽノ異アレドモ。大ニ異ナルヿハナキ中ニ。南京杭州ナドノ音ヲ以テ正シトスル也。サテ此方ニテ近世儒者ナド。此ノ今ノ唐音ヲ即古ヘノ正音也ト謂テ。コレヲ尙ブハ大ナル誤ナリ。今ノ唐音ハ古ヘノ唐音ニ非ズ。代々ヲ經テ訛舛レル者也。抑彼國ノ音ハ。皇國ノ音ノ如ク清朗單直ナラズ。朦朧タル渾成ノ音ニメ。溷雜紆曲セル故ニ。漸ク轉變セザルヿヲ得ズ。【皇國ノ正音ハ。五位十行分明ニシテ。イサヽカモ相混亂スルヿナシ。タトヒ故ニコレヲ亂ラムト欲スレドモ。亂ルコトアタハズ。是レ其音タヾ五十ニシテ。清朗單直ナル故也。サレバ言ハ漸クニ訛ルヿアレドモ。音ハ訛ルヿナシ。然ルニ漢國ノ音ハ。此皇國ノ音ヲ二ツモ三ツモ四ツモ合セツラネテ一ツニナシタル如クナル者ナル故ニ。ソノ合セツラネタル間ニ。必訛舛ノ出來ルハ當然ノ勢也。】ソハ上古ヨリ唐ノ代マデニモ。漸ク變リタルヿアルベケレドモ。其ノ際ノ差ハ今詳ニ知ガタケレバ。姑ク唐マデヲバ正シトシテ。其後ヲ云ニ。宋ヨリヤヽ古ヘニ違ヘルヿ見エテ。元ヲ經。明ニ至ッテ大ニ訛舛レリ。サルハ諸字ノ音此モ彼モ悉ク訛リツレバ。何レヲ準トシテ古ト今トノ同異ヲ徵スベキ由ナケレバ。其訛舛ヲ自ラ覺エズ。是ノ故ニイカホド韻圖詳明ニ。呼法精嚴ナリトイヘドモ。タヾ訛音ニ依テ訛音ヲ正スナレバ。何ノ益モナキイタヅラゴトナリ　〇字彙正字通ナドノ音釋。古ヘノ音韻ニカナハズ。反切ナドモ合ザル者多クシテ甚濫リナリ。【乘ノ字丞ノ字共ニ時征反音成トシ。主ノ字ヲ腫與反諸上聲トシ。予ノ字ヲ弋渚反音羽トス。凡テ如此キ類擧ルニ勝ズ。今見アタルマヽニ一二ヲ出スナリ。】字彙ノ直圖ニ京ノ韻ノ中ニ。凝餳稱繩升興陵仍孕及ビ認等ノ字ヲモ收シ。又聲アリテ字ナキ處ニ。音ノ相似タル字ヲ借レリトテ。

分墳溫文ノ四字ヲ塡タリ。此ノ京ノ韻ニ收シタル所ヲ見ルニ。多ク清青ノ韻ノ字ナルニ。右ノ凝等ノ八字ハ蒸ノ韻。錫ノ字ハ唐ノ韻。認ノ字ハ眞ノ韻也。又分等ノ四字ハ文ノ韻也。此等ノ韻。此方ノ音ニテスラ差別アルヿナルニ。皆混同シテ。イノ韻ウノ韻ンノ韻分別ナク一韻トセル。古ヘノ韻書ニ如此キ混淆ハサラニ無キヿナレバ。是レ後世ノ訛謬ナルヿ明ラケシ。抑外國ノ音ハ。モトヨリ鼻聲多キニ。後世ハイヨ〳〵鼻聲多クナリテ。古ヘハウノ韻ナリシ字ヲモ。ンノ韻ニ呼ブガ多クナリヌルハ。イヨ〳〵不正ノ甚シキ者也。【蔡沈ト云人ノ名ヲ。沈(チン)音澄(チン)ト注シタルニ依テ。サイチヨウト讀ムヿト心得ル人アレドモ。然ニハ非ズ。此音注ハ。明ノ代ニ侵ノ韻ト蒸ノ韻ト訛リ混ジテ。澄ノ字ヂンノ音ニナレル也。又或人云。東ノ字ハ漢音トンナルヲ。此方ニテトウトスルハ。ンノ假字イマダ出來ザリシ前ニ。ウヲンニ借リテ。トウトツケタル也。然ルヲ今トヲト呼ブハ誤也ト云リ。此說トウヲ今トヲト呼ブヲ誤也ト云ルハサルヿナレドモ。ンニウヲ借リテツケタリト云ルハ非也。若シ然ラバ。ンノ韻ノ字皆ウト假字ヲツクベキニ。ンノ韻ノ者ハ古ヘヨリ別ニンノ韻ナルヲヤ。凡テ今ノ唐音ヲ正シキモノト心得ルカラ。如此キヒカゴトヲモ云ナリ。】明ノ代ニテモ。洪武正韻ナドヲバ正シキ韻書トスルヿナレドモ。是レモナホ古ヘニ違ヘルモノナキニ非ズ。韻ノ分ケザマナドモ古ヘニタガヘリ。康熙字典ナドハ殊ニ近キ物ナレドモ。音釋皆古ノ韻書ニ依レル故ニ宜シキヲ。カノ字彙ナドハ。タヾ當時ノ音ヲ以テ定メタル故ニ。訛謬ハ多キ也。○今ノ唐音ハ。玉篇廣韻等ノ古韻書ノ反切ニ合ハズ。韻鏡ナドヲ以テ律(タヾ)スニモ。横呼多クタガヘリ。一ツ二ツ云ハヾ。支脂ノ韻ノ開口音ノ字。脣牙喉ノ音ハヒイ キイ イヽナド、呼ッヲ。舌音齒音ハ皆ツウ スウナド、呼ブ。コレ脣牙喉ノ例ニ違フノミナラズ。ツウ スウナドハ開口ノ音ニ非ズ。甚シキ謬音也。其中ニ地ノ字ヲデイヽト呼ブガ如キハ。彼ノヒイ キイ イヽ等ノ例ニハ近ケレドモ。地ハ廣韻ニ徒四ノ反ニテ。徒四ハ今ノ唐音ハド。ウ スウナレバ。ヅウト呼ブベキニ。デイヽト呼ブハ反切ト合ハズ。又知ハ陟離(チリイ)ノ反。支ハ章移(チヤンイ)ノ反ナレバ。共ニチイト呼ブベキヲ。ツウト呼ブ。此類皆反切ノ音ト合ハズ。右ノ外モナホ反切カナハザルモノ。開合タガヘル者ナド。

凡テ訛謬枚擧スルニイトマアラズ。○何不ヲ盍ト云ヒ。之乎ヲ諸ト云類ハ。義モ音モ二字ノツヾマリテ一字ニナレル者ナルヲ。今ノ唐音ニテハ。何不ハホオ ボオ。盍ハアナレバ。音相近カラズ。之乎ハツウ ウヽ。諸ハチユイナレバ是レモ遠シ。今ノ音古ヘノ音ニ非ルヿ如此シ。○或人。詩經ノ伐木丁々。【竹耕ノ反】八鸞瑲々。鳥鳴喈々。肅々其羽ナドノ類ヒ。註ニ其聲也ト云ル。此方ノ音ハ皆其聲ニ合ハズ。唐音ニテハ皆ヨク合ヘリト云ルハイカヾ。先ッ此方ノ字音ハ。モトヨリ彼國ノマヽヲ用ヒタル者ニ非レバ。合ハザルモ論ナシ。彼國ノ音ハ。如此キ類必合フベキ理ナルニ。今ノ音ニテハ合ハザル者多シ。丁々ハチエン〱ナレバ。木ヲ伐ツ聲ニ非ズ。【此方ノ音タウ〱ノ方返テ近シ】瑲々ハチヤン〱ナレバ。鸞ノ聲ニハ合ハズ。【是モ此方ノ音シヤ。ウ〱近シ】喈々ハ音皆又居奚ノ反也。皆ハキヤイ。居奚ノ反ハキイナレバ。是ハ何レニテモ鳥ノ聲ニ合ヘリ。【此方ノ音カイ〱 ケイ〱ニテモサノミ違ハズ】肅々ハスーオ〱又シーヨシーヨナリ。羽ノ音ニハ合ヘリヤ合ハズヤ定メガタシ。【此方ノ音シユク〱ニテモ同ジホドノコトナリ】サテ右ノ外。喓々草蟲。殷其雷。鼓レ鍾喈々ナド𪜈アル。何レモ其聲也ト註セルヲ。今ノ音ニテ喓々ハヤ。ウ〱。殷ハイン。喈々ハキヤイ〱又キイ〱ニテ。何レモ其聲ニハ甚遠シ。コレラヲバ如何トカセム ○今ノ唐音ハ。悉曇ノ對注ヲ以テ驗ルニモ。合ハザルヿ多シ。先ッ梵ノアノ音ニ。阿痾等ノ字ヲ用ヒタルニ。コレラノ字。今ノ音ハオヽト呼ブ。オヽニテハ梵音ト大ニ違ヘリ。諸ノ梵音ノ中ニ。悉曇ノ十二字ノ音ハ。殊ニ動クマジキ音ナルニ。アヲオヽト呼テハ。餘ノ諸ノ音モ皆亂ルヽヿ也。此ノ一ツニテモ今ノ唐音ノ正シカラザルヿ明ラケシ。○皇國言ヲ彼國ニテ譯シタル字ヲ以テ其音ヲ驗ムルニ。隋以前ノ書ニ。ヤマトヲ邪馬臺。【邪ハ以遮ノ反音耶ナリ。皇國音ヤマタイ。日本紀ニ苔ヲト。耐逃ヲドノ假字ニ用ラレタレバ。臺ニモトノ音アルベシ。今ノ唐音ハエヽ マア ダイナリ。】又邪摩堆【皇國音ヤマタイ。今唐音エヽ モオ トイ】津嶋ヲ對馬【皇國音タイマ。但シ對ハツヰトモ呼ブ。今唐音トイ マア】又都斯麻。【皇國音ツシマ。今唐音トオ スウ マア】筑紫ヲ竹斯國。【皇國音チクシ。今唐音チ

ヨスウ】肥前ノ松浦ヲ末盧國。【皇國音マツロ。今唐音モツロオ】筑前ノ怡土ノ郡ヲ伊都國。【皇國音イト。今唐音イヽトオ】ナド、書ルタグヒハ。此方ノ音ニテハイト近クメ。今ノ唐音ニテハ甚遠シ。然レ𪜈コレラハ。皇國人ノ書テ見セタル字ナルモ知ガタシ。右ノ外ニモ地名官名ナドコレカレ記セルアレ𪜈。ソノ指トコロ詳ナラザレバ。此ニ云ガタシ。北史隋書ナドニ。開皇二十年倭王姓阿毎字多利思比孤遣レ使云々ト云ル。是レハマコトノ皇朝ノ大御使ニハ非ズ。筑紫ニシテ僞僭ノ者ノシワザニシテ。【コレラノ事。委クハ馭戎慨言ニ論辨セリ】可畏クモ天足彥ト名告遣ハシタルモノ也。阿毎多利思比孤。今ノ唐音ニテハ。オヽムイトオリイスウピイクウナレバ。甚遠シ。但シ是レモ此方ヨリ右ノ如ク書テ示セタルモ知ガタシ。サテ唐ノ代ヨリ以來ノ書ニ見エタルハ。地名モ人ノ姓名モ何モ。此方ヨリ書テ示セタル者ナレバ。彼國ノ譯ニ非ズ。其中ニ鶴林玉露ニ。皇國ノ僧安覺ガ言ルコトヲ譯シタル語少々アリ。硯曰ニ松蘇利必一。【此方ノ音シヨウソリヒツ今唐音ソンスウリイピ】筆曰ニ分直一。【此方ノ音フンヂキ今唐音フウンヂ】墨曰ニ蘇彌一。【此方ノ音ソミ今唐音スウミイ】頭曰ニ加是羅一。【此方ノ音カシラ今唐音キヤアズウロオ】手曰レ提。【此方ノ音テイ今唐音デイ】眼曰レ媚。【此方ノ音ミ今唐音ミイ】口曰ニ窟底一。【此方ノ音クツテイ今唐音キユテイ】耳曰ニ弭々一。【此方ノ音ミヽ今唐音ミイ〱】面曰ニ皮部一。【皮ノ字誤寫歟】心曰ニ母兒一。【此方ノ音モニ今唐音モオルウ】脚曰ニ又兒一。【此方ノ音サジ今唐音ツアヽルウ】雨曰ニ下米一。【此方ノ音カメ今唐音ヒヤアミイ】風曰ニ客安之一。【此方ノ音カクアンシ今唐音ケアンツウ】鹽曰ニ洗和一。【此方ノ音センワ今唐音センホオ】酒曰ニ沙嬉一。【此方ノ音サキ今唐音サアヒイ】コレラ也。皇國音ニモ今ノ唐音ニモ遠キ者多シ。是レ南宋ノコロノ事ナレバ。其代ノ音ナルベシ。是レラニテモ。彼國ノ音ノ代々ニウツリ變ルヿヲサトルベシ。サテ明ノ代ニ至リテ譯セルハ。大カタ今ノ唐音ニテ合ヘル中ニ。ナホ髣髴タル者ノ多キハ。皇國ト聲音ノ全體ノ異ナルガ故ナリ。○今ノ唐音。牙音ノ内。疑母ニ屬スル字ヲアヤワノ行リノ音ニ呼ビ。喉音ノ内。曉母ニ屬スル字ヲハノ行ノ音ニ呼ビ。匣母ニ屬スル字ヲア

ヤワノ行ノ音ニ呼ブ。コレラ古ヘニ違ヘルヿアルカ。其故ハ。若シ古ヘノ音モ今ノ如クナラバ。此方ノ字音モ右ノ如クニ定メラルベキニ。サハアラズメ。牙音ハ四母並（ミナ）カノ行ノ音。喉音ハ影喩ノ二母ニ屬スル者ハアヤワノ行。曉匣ノ二母ニ屬スルモノハカノ行ノ音也。是レ漢國ノ音モ古ヘハ如此クナリシ故ナルベシ。但シアヤワノ行。カノ行。ハノ行ノ各音。此方ノ清朗ナル音ニテコソ。ヨク分レテマギルヽヿナケレ。異國ノ渾濁ナル音ニテハ。相渉リテ甚分曉ナラザレバ。古ヘヨリ相通ヒシヿモアリト見エテ。此方ニテモ吳音ニハ。匣母ニワノ行ノ音ナル者マヽアリ。【回會話和ナドノ如シ】又悉曇ノ對注ナドニモ。必アヤワノ行ノ音ナルベキニ。カノ行ノ音ノ字ヲ用ヒタルヿナドモ多シ。然レバコレラハ今ノ唐音モサノミ訛舛トモ云ベカラザルカ。【〇近世儒者ニ。唐音ヲ知ラデハマコトノ學問ハナリガタキコトノヤウニ云フ者アリ。其說マコトニサモアリゲニ聞ユレ𪜈。實ハ是ヲマナビ識テ學問ニ益アルヿナシ。其音タトヒ古ヘノマヽノ正音ナラムニテモ。ナホ知ラズ𪜈此方ノ音ニテ事足リヌベシ。況ヤ今ノ音ハ古ヘニ非ズ。大ニ訛レルモノナルヲヤ。但シ韻學者梵學者ナドハ。是ヲ知ラズバアルベカラズ。訛舛ノ音ナリトハイヘ𪜈彼國ノ聲音ノ大躰ヲバ存セレバ。古ヘノ音ヲ知ベキ便トハナルヿ也。】

唐國音韻ノ事

唐國ハ。上古ニハ音ノコトハサダセザリシ國ニテ。タヾ詩賦ナドニ韻ヲ押コトハアリツレ𪜈。【古文ニモ韻語ハアリ】古ヘノ押韻ハ甚簡疎ニシテ。後世ノ如ク某ノ韻々々ト定マレルヿナドハ無クシテ。タヾ似タル音テバ汎（ヒロ）ク通用シタリキ。然ルニ蕭梁ノ沈約ト云シ人。始メテ音韻ノコトヲサダセルヨリ後。天竺ノ悉曇ニナラヒテ七音ヲ立（タテ）ナド。漸ク其法クハシクナレリ。サテ上古ノ詩賦ナドヲ讀ムニ。叶韻ト云コトアリ。コレ素（モト）ヨリ叶韻ナルニハ非ズ。後ニ諸字ノ韻テ分局シタルニツキテ。其韻合ハザル故ニ。別音ヲ造リテ叶韻ト名ヅケテ。韻ノ叶フヤウニ讀ム。後人ノ私也。【凡テ後世トテモ。分韻ハ定マレルヿナシ。其數或ハ二百六。或ハ一百七。或ハ一百六十。或ハ七十六ナドサマ〴〵ニテ。其ノ定ムル人ノ心々ナリ。サレ

バ韻ハモトヨリサダカニ分レタルモノニ非レバ。古人ノヒロク用ヒタルコトウベナリ。】又後世反切ニ。音和類隔往還ナド云サマ〴〵ノ目アリテ分レタリ。是ハ古キ反切ノ。後世ノ音韻ニ全クハ合ハザル者アルヨリ出來タル名目ドモ也。後世音韻ノ法甚碎細ニナリタレバコソ。如此キコトモアレ。古ヘ其法簡疎也シ世ニハ。皆音和ナリシ也。モシソノカミ後世ノ如クナラムニハ。何ゾ音和ノ正シキヲ用ヒズメ。差(タガヒ)アル類隔ナドヲバ用フベキ。【類隔ナドヲ。古人鄕音ニヨリテ誤レルモノ也ナド云説ハ。古ヘト後世ト。音韻ノ法精疎ノタガヒアルヿヲ辨ヘズシテ。强(シヒ)タルモノナリ。】凡テ古ヘハ同音ナリシガ。後ニ漸クニ異音ニナリヌル字多カルベシ。然思ハル、例ヲ一二イハヾ。中ノ字ハ清音。忡ノ字ハ次清音。仲ノ字ハ濁音ナル。上古ハカカル差別ハアルベカラズ　又江紅舡功攻項貢空ナド。皆工ニ从ヒタレバ。上古ハ同音ナルベシ。龍(リヨウ)ハ冬ノ韻。籠朧(ロウロウ)ハ東ノ韻。瀧(ラウ)ハ江ノ韻ナル。コレラモ本ハ一ツナルベシ。【凡テ中ゴロ精ク分レタルガ。近世又混同シタルヿモ多カルベシ。今ノ唐音ニテ。東ノ韻ト冬ノ韻ト呼ブヿ全ク同ジキナド。オノヅカラ上古ニ近キナルベシ。】此類ヒ餘モ准ヘテサトルベシ。サレバ後世ノ韻書アマリ呼法ノ精細ナルハ。却テ古音ニ違フヿモ多カルベシ。又イカホド精細ニ呼ヒ分ケテモ。諸字ノ音ヲ一々ニ悉ク呼ヒ分ルヿアタハズ。ナホ數字同音ナル者多ケレバ。却テ古音ノ簡ナルニ及(シカ)ズ。

四聲ノ事

漢國ノ音ニ四聲ト云コトアリ。是ハ何レノ國ノ音ニモ。オノヅカラ如此キノ差別ハアルコトナレドモ。其名ヲ立テヽ某聲某聲ト定メ云ヿハ有リヤ無シヤ。他國ノコトハ知ラズ。漢國ニモ古ヘハサルヿハ無カリシヲ。梁ノ沈約始メテ平上去入ト云名ヲ立テヽ。諸ノ音ニ此ノ四ツノ別アルヿヲ知ラセタルヨリシテ。四聲ノサダハアル也。【古來コレヲアシク心得テ。沈約ヨリ始メテ四聲ヲ呼ビ分ケタリト思フメリ。抑字音ハ即漢國人ノオノヅカラノ語音也。然ルニ沈約其國中ノ人ノ語音ヲ。イカデカ俄ニ四ツニ呼分ケシムルヿヲ得ム。タトヒ王命ヲ以テ人ゴトニ是ヲ敎フトモ。决テ得ベカラザルヿ也。カノ天子聖哲ノ

四字ヲ以テ定メタリト云ハ。天ノ字ヲ呼ブガ如ク呼ブ聲ハ皆平。子ノ字ヲ呼ブガ如ク呼ブ聲ハ皆上。聖ノ字ヲ呼ブガ如ク呼ブ聲ハ皆去。哲ノ字ヲ呼ブガ如ク呼ブ聲ハ皆入ト。此四字ノ聲ニテ。諸字ノ四聲ヲ示シタルモノ也。或說ニ。四聲ト云コトハモトヨリアリツルガ。亂レ誤リタルヲ。沈約呼法ヲ定メテコレヲ正シタル也ト云モ非ナリ。國中ノ人ノ語音ヲ。沈約イカデカヨク俄ニ正シ改ムルコトヲ得ム。抑四聲ハタヾ讀書ノウヘノコトノミニハ非ズ。平常ノ語音ノウヘニアルコトナレバ。人力ヲ以テコレヲ改變スルコトハアタハザルワザナルモノヲヤ。】サテ是ヲ四ツニ分タルハ。精シキニ似タレドモナホ麁シ。其故ハマヅ漢國人ノ聲ハ長ト短トニツニシテ。其長短ニ各三ツノ差別アレバ。實ハ長ノ平上去。短ノ平上去ト。六聲ニ分クベキヲ。約メテ四聲ト定メタルハ。長聲ノ方ノミヲ三ツニ分ケテ。短聲ヲバ一ツニ渾ジテ入聲トシタルモノ也。入聲ハ短促ナル故ニ。三ツノ差別明ラカナラザルガ如クナレドモ。精クスルトキハ是亦長聲ノ如ク。平上去ノ別ナキコトアタハズ。然ルヲ千有餘載タヾ沈約ガ四聲ト定メタルマヽニ意得テ。入聲ハ卽平上去ノ短聲ニシテ。是亦其三ツノ差別アルコトヲ知ル人ナキハイカニゾヤ。○漢國ニテハ。四聲ニヨリテ同字モ義ヲ異ニスルコトアリテ。精ク分ルヽガ如クナレドモ。諸字皆然ルニハ非ズ。四聲ニ隨ヒテ義ノ變ル字ハ少々ノコト也。飮食ノ食ノ字ノ如キ。クラフ　クヒモノナドノトキハシヨクノ音ニテ。【吳音ハジキ】入聲。飯ノトキト。人ニ食ハシムル意【ヤシナフト訓ム】ノトキトハ。シノ音ニテ去聲也。思ノ字ノ如キ。オモフハ平聲ナルヲ。オモヒト體言ニ云フ【相思ナド云トキノ思コレナリ】トキハ去聲也。好ノ字ノ如キ。ヨシハ上聲。コノム　ヨシミハ去聲也。此類往々ニアレドモ。皇國ノ言ノ活用ノ精密ナルニ比スレバ甚疎也。彼ノ食ノ字ノ如キ。クラフトクラハシムトハ四聲ニテ分ルレドモ。クラハム　クラヒ　クラフ　クラヘナドノ差別ナシ。又治ノ字ノ如キ。治國ナドヽ云トキハ平聲ナルヲ。國治ト云トキハ去聲トナル。コレラハ殊ニ精キニ似タレドモ。餘ノ平齊脩正等ノ字ハ。平天下齊家脩身正心ト云トキモ。天下平　家整身脩　心正ト云トキモ同ジコトニテ。四聲カハルコトナケレバ。其中ニタヾ治ノ字ノミ其差別アルハ。何ノ

益カアル。返テ煩ハシキイタヅラゴトナラズヤ。【皇國ノ讀書ハ。如此キコトモ四聲ヲマタズ。ヲサムト云ト。ヲサマルト云ト。言ノ活用ノウヘニテオノヅカラヨク分レテ。右ノ平齊脩正等。又其餘ノ諸ノ字ミナ此ノ活用ニテ其義分レテ。相混ズルコトナキヲヤ。】○人皆漢國ノ四聲ハ。古今ニ亘リテ變易ナク。又諸州同一ニメ。轉訛ナク。甚儼然タルヿト思フメレ𪜈。大ニ然ラザルコト也。先ッ鄕土ニヨリテ四聲ノ違フヿハ。古ヘヨリコレアリテ。今時トテモ五方異ナルコトアリテ。同軌ナラズ。【此事ハ書ドモニモ見エテ。人モヨク知レリ。】又古今ノ轉變モナキニ非ズ。【是レハ書ドモニモイハズ。人ノ知ラザルコトナリ。】今ノ唐音ノ四聲ハ古ヘニ違ヒテ。亂レ訛レル者ニメ。却テ皇國ニ古ヘヨリ心得來レルトコロ。是レ四聲ノ正シキ者也。漢國ノ四聲モ。古ヘノ正シキハ。皇國ニ心得タルトコロト同ジクゾアリケム。其故ハ。皇國ニテハ。昇ラズ降ラズ平ナル聲ヲ平トシ昇ル聲ヲ上トシ。降ル聲ヲ去トシテ。其聲各其名ノ如クニメ。律ニ叶ヒ。絲竹等ノ物音ノ低昂ニヨク合ヘバナリ。然ルニ今ノ唐音ハ。去聲ノミタマ〳〵訛ラズ。平上ハタガヒニ訛リテ。平聲トスル者ハ。昇ル聲ナレバ。實ハ上聲。上聲トスル者ハ。平ラカナル聲ナレバ。實ハ平聲ニメ。皆其名ニ違ヒ。物ノ音ノ低昂ニ合ハズ。訛舛ナルヿ明ラケシ。抑イカナレバ如此クニハ訛レルゾト云ニ。天ノ字ノ如キ。古ヘハ平聲ニ呼シガ。イツトナク訛リ來テ。今ハ上聲ニ呼ブヲ。古ヘヨリ平聲ノ字ナル故ニ。今呼ブトコロヲ平聲ト心得テ。其實ハ上聲ニ變ジタルヿヲサトラザル也。凡テカヤウノ訛リハ。皆自然ノコトナル故ニ。諸ノ平聲ノ字。オシナベテ皆上聲ニナレルナリ。上聲ノ訛リテ平聲ニナレルモ亦同ジ。是レ譬ヘバ西ノ方ヘ向ヒテ漕出タル船ノ。漸ク行クマヽニイツトナク曲轉リテ。後ニハ南ノ方ヲサシテ行クヲ。乘タル人ノ始メノマヽニ舳前ノ方ヲバ西トノミ心得テ。今ハ南ニナレルヿヲ覺エザルガ如シ。今ノ唐音ノ平聲ト上聲トハ。此ノ西南ノ如ク違ヒテ。其名ニ合ハザレ𪜈。モトヨリ四聲ノ差別ハ。甚分明ナル物ニハ非レバ。平聲ゾト思ヘバ。平ラカナル如クニ聞エ。上聲ゾト思ヘバ。上ル如クニ聞ナサレテ。其違ヘルニ心モツカザルナルベシ。サレド物ノ音ノ低昂ニ合セテ呼ビ驗ムレバ。其違ヒ

分明ナル者ナリ。サテ此方ニテ心得タル四聲ノ。返テ正シキヿハ。其理アリ。イカニト云ニ。此方ニテ四聲ヲ云ッハ。自然ノ音ニ其定マリアルニハ非ズ。漢國ニナラヒテ云コトナレバ。タヾ其聲ノ形狀ニツキテ。平ラカナルヲ平。昇ルヲ上。降ルヲ去ト心得タル故ニ。其實ヲ失ハザル也。譬ヘバ彼ノ船ノ舳前ノ方ヲ西トハ定メズシテ。西ハ日ノ沒ル方。南ハ午時ニ日ノ在ル方ト心得ルガ如シ。【然ルヲ漢國ニテハ。舳前ノ方ヲ西ト定メタル如クニテ。凡テ某ノ字ハ某ノ聲ト。皆古ヘヨリ定マレル故ニ。其定マリニ委ネテ。其實ヲバ尋ネザルニヨリテ。イツトナク違ヒ訛レルモノナリ。】コレラノ義ヲヨクモ考ヘズシテ。ミダリニ此方ニ心得タルトコロヲバ訛リトシ。ヒタスラ今ノ唐音ノ四聲ヲ信ジテ。正シトスルハイカニゾヤ。○此方ノ字音ハ。タヾ入聲ノミ別アリテ。餘ノ三聲ハ定マレル別ナシ。是レ混亂シテ然ルニハ非ズ。大ニ所以アルヿ也。先ッ皇國ノ言語ノ法。連用ノ便ニ隨テ。同言モ三聲【平上去】轉變スルコトニテ。其轉變ニ依テ義ノ種々ニ分ルヽヿアリ。【日ハ平聲。樋ハ上聲。火ハ去聲ナルヲ。日影ト云トキノ日ハ上聲。掛樋ト云トキノ樋ハ去聲。火箸ト云トキノ火ハ上聲トナリ。山ハ平聲ナルヲ。山風山松ナドヽ云トキハ去聲トナリ。東山西山ナド云トキハ上聲ニナリ。宇治ハ去聲ナルヲ。宇治川トイヘバ上聲。宇治橋トイヘバ平聲ニナル如ク。何レノ言モ皆其聲轉ズルヲ。若シ本音ノマヽニ呼ブトキハ。其義異也。カノ山風山松ノ如キ。山ヲ本音ノマヽニ平聲ニ呼ベバ。山ト風ト二ツノコトニナリ。山ト松ト二ツノコトニナルヲ。轉ジテ去聲ニ呼ブニヨリテ。山ノ風山ノ松ノコトニナルガ如シ。サテ又山ハヤトマトノ二音。川ハカトハトノ二音ニテ。是ヲ一音ヅヽ分テ各四聲ヲ云トキハ。ヤハ上聲マハ平聲。カハ上聲ハハ平聲也。然レ𪜈又ヤマ𪜈カハ𪜈連ナリタル言ノウヘニ平上去アリテ。山モ川モ平聲也。東南ナド三音四音連ナリタル言モ。皆同ジコト也。然ルヲソノ連ナリタル音ヲ。一々分テ平上去ヲ定ムトスルトキハ。マギラハシクソ分明ナラズ。是レ一言ノ内ノ音ハ。親シクツヾキタルガ故也。サレバコレヲ連ネテ。一言ノウヘニテ定ムルトキハ。三聲分明也。】是ノ故ニ字音ヲ讀ムニモ。オノヅカラ此ノ格ノ如ク。連用ノ便ニ隨テ其聲轉ゼザルヿヲ得ズ。若シ此格

ニヨラズシテ。漢國ノ如ク諸字ノ四聲ヲ定メオキテ讀ムトキハ。却テ其音正シカラズ聞ユルヿ也。【凡ソ字音ニノ節奏アルモノ。郢曲朗詠ノタグヒ及ビ佛家ノ聲明陀羅尼ナド。皆漢國ノ四聲ヲバ守ラズシテ。此方ノ音便ノ四聲ニ依ルトイヘドモ。ヨク管絃ニ和シテ聲律タガフヿナシ。】且字音ハ此方ニテハ自然ノ音ニ非ル故ニ。諸字ノ四聲ヲ悉クソラニ辨ヘ識ルヿアタハズ。【常ニ詩ヲ作リナレタル者ハ僅ニ平ト仄トヲ辨ヘ知ル。サレドソレモ詩ニ常ニ用ル字ノミコソアレ。ヤヽ遠キ字ハワキマヘ知ルヿアタハズ。】又タトヒヨク辨ヘ知ルトイヘドモ。書ハ皆訓ヲ以テ讀メバ。四聲ハ無用ノイタヅラゴト也。音讀ニスル處モ。四聲ヲ分タザレドモ。義理ヲ解スルニ妨ナシ。ソレモタヾ此方ノ言語ノ如ク。連用轉變ノ格ニ隨テ讀ムニヨリテ。却テ義理ノコマカニ分ルヽヿ多シ。例ヲイハヾ。數ノ一十ノ如キ。タヾ十ノコトニ一十ト云ニハ。一ヲ上聲ニ呼ビ。一ト十ト二ツヲ云ニハ。一ヲ平聲ニ呼ブ。百萬ノ如キ。萬ヲ百合セタルヲ云ニハ。百ヲ上聲ニ呼ビ。百ト萬ト二ツヲ云ニハ。百ヲ平聲ニ呼ブ。如此キ類イト多シ。餘ハ准ヘテサトルベシ。漢國ノ如クニテハ此ノ差別ヲナスヿアタハズ。サレバ皇國ノ音ハ四聲ノ定マラズシテ。轉變スル所ニ妙用アリテ。字音モ亦コレニ隨フモノ也。然ルニコレラノ子細ヲ深クモ考ヘズシテ。ヒタスラ四聲混亂セル如クニ思ヒ謂ハ。例ノミダリナルヿ也。〇皇國ノ自然ノ音ニハ。平上去ノ三聲アリテ。入聲ハ無シ。短ク呼ベドモ韻急促ラザル故也。字音ノ入聲トイヘドモ。漢國トハ異ニシテ。是又實ハ平上去ノ三聲也。國ノ字ノ如キ。上國ト云トキハ平聲。他國ト云トキハ上聲。異國ト云トキハ去聲ナリ。餘字モコレニ准ヘテ知ベシ。【漢國ノ格ヲ以テ云トキハ。皇國ノ五十音ハ皆入聲ニ似タレドモ。入聲ハ急促ルヲ。皇國ノ音ハ急促ルコトナク舒緩ナレバ。同ジカラザルモノ也。故ニ古書ノ假字ニ。入聲字ヲ用ヒタルヿヲサ〳〵ナシ。イトマレニコレアルハ。其所以アルトコロ也。然ルニ近世儒者ナドノ。皇國ノ言ヲ漢字ニ譯スルニ。皆入聲字ヲ用ルハ大ニ非也。彼國ニテ譯セルモ。古ヘノ書ニハ入聲字ヲ用ヒタルハイトスクナキヲ。後世ニハ凡テ他國ノ言ヲ譯スルニ。多ク入聲字ヲ用ル。ソレヲヨキコトニ思ヒテナラヘルモノ也。凡テ入聲ハ急促テ甚

不正ノ音ナルニ。皇國ノ正雅ノ音ヲソレニ混同シテ。コトサラニ不正ノ音トナス亅。甚謂(イハ)レナシ。】

音釋呼法ノ事

漢國ニテ字音ヲ喩(サト)シ示スニ反切ヲ以テス。是レ二字ノ音ヲ連接シテ其音ヲ得ル法也。然レ𪜈此法麁闊ニシテ。ナホ曉(サト)リ得ガタキ故ニ。助紐トテ其切字【反切ノ上ノ字ヲイフ】ノ下ニ別ニ字音ヲ二ツ連ネ呼テ。其ノ口拍子ニテ歸納ノ音ヲ知ル。イハユル唐人反シ是ナリ。此法モ亦甚迂遠ニシテ。タシカナラズ浮タル亅ニテ。畢竟準的ナケレバ。口拍子一タビ違フトキハ。其音忽チ誤ル亅也。然ルニ此方ニテハ。假字ト云フ物アル故ニ。諸ノ字音ヲ識(シ)ル亅甚簡易ニシテ。シカモイカホドムツカシキ音モ。詳ニ分ルヽ亅。反切ノ法ナドノ及ブトコロニ非ズ。【且又一タビ假字ヲ施シオクトキハ。其音幾千年ヲ經(フ)トイヘ𪜈。舛(タガ)ヒ訛ル亅ナシ。タトヘバ皇國ノ言ニ。古ヘハノボラム‖クダラム‖ユカム‖コムト云ルヲ。訛リテ今ハノボロオ‖クダロオ‖ユコオ‖コオト云フ。然レ𪜈カノ古ヘノ言モ。皆假字書(ガキ)ニノコリテアル故ニ。今ノ言ノ訛リハヨク知ラルヽヲ。漢國ニハ假字ナキ故ニ。古ノ音ト今ノ音トノ同異ヲ驗(コヽロ)ミ知ベキ由ナシ。カノ昇降往來ノ如キ。今ハシン‖キヤン‖ワン‖ライト呼ベ𪜈。此音古ヘノマヽナリヤ訛レリヤ。何ヲ以テコレヲ徵セム。反切韻圖ナドアリトイヘドモ。其字ノ音モ亦共ニ皆古今ノ同異知ベカラザレバ。何ノ益カアラム。サテ又彼ノ反切ノ法ヲ以テ字音ヲ考ルモ。此方ニテハ五十連音ノ圖ニ依テ。假字反シニスルトキハ。甚細(コマカ)ニ分レテ。是亦イカホドムツカシキ音トイヘ𪜈。毫釐モ舛ヒ誤ル亅ナシ。【如此クシテ四聲清濁等ハ其反切ノ字ニヨリテ定ムベシ】サレバ此方ノ假字反シノ正シク詳ナルヲ以テ比(クラ)ブレバ。カノ助紐ノ法ナドハ腹ヲ抱テ笑フベキ亅也。然レ𪜈。彼國ニハ假字ノ如キ物ナケレバ。此方ノ如クナル簡明ノ法ヲ立ツベキ由ナク。音ノ形狀ヲ精クサトスベキ術ナキガ故ニ。ヤムコトヲエズ。反切助紐ノ如キ迂闊ナル浮タル法ヲ以テ。ワヅカニ是ヲ喩(サト)セル也。【然ルニ世ノ學者。漢國ノ法ニ拘泥シテ。此方ノ假字附ケ假字反シノ正シク詳ナルコトヲエサトラザルハ。美(メデタ)キ珠玉ヲ抱キナガラ。人ノ持タル瓦石ヲウラヤムガ如クニ

テ。イト〳〵愚昧ナルヿナリカシ。或人。假字反ハタヾ此方ノ語ニハ用フベシ。字音ニコレヲ用ルトキハ大ニタガフヿ也ト云ルハ。甚非ナリ。コレハ其實ヲモヨク察セズシテ。例ノミダリニ云ルカ。又ハ方戎ノ反風ノ如キヲ思ヒテ云ルカ。ソノコトハ字音假字ヅカヒニ云リ。凡テ近世學者ノクセトシテ。ワロクテモ漢國ノコトヲヨシトシ。ヨクテモ此方ノコトヲバワロシト云ハ。例ノコト也。サテ假字ニテハ四聲ナドハ分レザレドモ。上ニ云ル如ク此方ノ讀書ニハ。漢國ノ四聲ハ用ナケレバ。分タズトイヘドモ可也。又反切ノ法ヲ用フトイヘドモ。此方ノ人ハ其反切ノ字ノ四聲モ多クハ知ラザレバ。假字ト異ナルコトナシ。】凡テ漢國ノ音ハ。渾成シタルモノニテ。單直ナラザル故ニ。心モ鈍ク身モ重キ人ヲ駈使フガ如クニテ。是ヲ用ルニ意ニ任セヌヿ多クシテ。自國ノ音ヲ釋スルニモ。不便利ナルヿ上件ノ如ク。又他國ノ音ヲ譯スルニモ。甚不便ニシテ。昔梵音ヲ譯セルニモ。正シク當ル字ナクテ。種々ノ註ヲ加ヘテワヅカニ其音ヲ喩シタレドモ。ナホ髣髴タルヿノミ多カリシゾカシ。然ルニ皇國ノ音ハ純直ニシテ。溷雜迂曲セザル故ニ。假字ヲ用ルハ。イト便利ニシテ。心モ聰敏ク身モ輕捷キ人ヲ駈使フガ如クニテ。意ノ如クニハタラケバ。他國ノ音ナドモ甚詳ニ譯セラルヽヿ也。抑他國ノ音ヲマネブニ。其眞ハ得ガタキコト。上ニ云ルガ如シトイヘドモ。譯スベキカギリヲヨク譯シ得テ。コレヲ喩シ示ス法。假字ニ勝レル者ナキヲヤ。○漢國ノ字音ニ。開口合口輕重清濁撮口齊齒ナド云テ。種々ノ呼法アリテ。其說モ一準ナラズマチ〳〵也。是レ其音清朗單直ナラズ。渾濁駢拗ナル故ニ。訛リヤスク紛ヒヤスキニ。此方ノ假字ノ如キ物ナケレバ。サダカニコレヲ喩シ示スベキ由ナキガ故也。件ノ呼法ドモヽ。多クハ假字ニテハオノヅカラ分ルヽヿ也。先ッ開口合口ノ差別ハ。字音假字ヅカヒニ委ク辨ゼルガ如クニテ。固假字ニテ分ルヽヿニテ。サノミムツカシキコトニ非ズ。【開ト合トハ音ニ在テ韻ニハヨラズ。音韻ヲアハセテ開合ヲ云ハ非ナリ。】次ニ輕重ニハ古來種々アレドモ。近世殊ニ脣音ニカギリテイフ輕重アリ。ソハ脣ヲ合サズシテ呼ッ音ヲ輕トス。ハノ行ノ清音ト。ワノ行ノ音ト是也。【今ノ唐音ニハ脣音ニモワノ行ノ音アルナリ】脣ヲ合セテ呼ッ音ヲ重トス。ハノ行ノ半濁音ト。

全濁音ト。マノ行ノ音ト是ナリ。然レバコレ輕重モ假字ニテ分ル【半濁聲ニハ。假字ノ右肩ニ一小圏ヲ點ノ識トス。】次ニ清濁ハ。漢國ノ音ニハ清次清濁清濁ト四ツノ差別アリ。皇國ノ正音ハ。清ト濁ト二ツニメ。清音モ連用ノ便ニヨリテ濁ルヿアリ。故ニ字音モ其格ニ隨テ。連用ノ濁アリ。【此例漢國ニハナキコト也】サテ此方ニハ。清ト濁ト二ツノ外ナキ故ニ。彼ノ四ツノ差(タガヒ)ハ假字ニテハ分リガタシ。但シ此ノ差ハ今唐人ノ口ニ呼ブトコロモ分曉ナラズ。清音ト濁音トスラ。同ジキヤウニ聞ユル者モアレバ。マシテ四ツノ差ハタヾ韻書ニ定メタルノミニコソアレ。實ハ分リ難キヿ也。故ニ諸書異説モアルゾカシ。又撮口齊齒ナド云類モ。サル呼法ハアレ𪜈。實ニ呼ブトコロノ音ハサダカニ分リガタシ。コレラモ大抵ハ假字ニテ分ルヽヿモ多シ。其中ニカノ呼法ヨリハ。假字ニテ細(コマカ)ニ分ルヽモアリ。姑ク齒音ニテイハヾ。チエン　チヨン　チユンノ如キ。假字ニテハカク三ツニ分ルヽヲ。彼國ニテハ。何レヲモ撮口呼ト云テ。此三ツノ異ヲ分テ示スヿアタハズ。凡テ彼國ノ音釋呼法ハ。精密ナルヤウニ聞ユレ𪜈。ソハ其音ヲサダカニ示スベキ法ノナキ故ニ。イロ〳〵ト云ルニコソアレ。實ハ麤闊ナルコトナルヲ。此方ノ假字ハ。疎ナルニ似テ甚精シキモノ也。【唐人ニ皇國ノ五十音ヲ教ヘ。假字ヲ教ヘテ。假字附(ケ)假字反シノ法ヲ傳ヘテヨク心得サセタラムニハ。彼國ノ音韻ノ學ニ大ニ益アルベシ。】然ルニ世ノ學者其實ヲ察セズメ。何事モ謾(ミダリ)ニ漢國ヲ尙(タフト)ブ癖(クセ)ニテ。タヾ唐音ノ呼法ヲ甚精微ナルヿヽ信ジテ。マヂカキ假字ニ妙用アリテ。彼國ノ法ヨリ夐(ハルカ)ニ優(マサ)レルヿヲエサトラザルハイカニゾヤ。抑假字ハ書キ誤リ易(ヤス)ク。又心ニマカセテ改メモ添ヘモ削リモスレバ。ハカナク浮タル物ニテ。據(ヨリトコロ)トシガタシト思フメレ𪜈。ソレハ人皆假字ヲバアナドリテ。輕々(カロガロ)シク濫(ミダリ)ニスル故也。若シ緊要ノ物ナルヿヲ知テ。是ヲ重(オモ)ク嚴(オゴソカ)ニセバ。何ゾハカナク浮タルヿアラム。漢字ノ音釋トイヘドモ。輕忽ニセバ。是亦書キ誤マリナドモ多クアリテ。據トシガタカラムヿハ同ジコトナルベキヲヤ。

音便ノ事

皇國ノ古言ハ五十ノ正音ヲ出ズ。其餘ハ皆溷雜不正ノ音ナル故ニ。一ツモ厠フルコトナカリキ。然ルニ中古以來雅言トイヘ𪜈。雜音ノ厠レルヿアルハ。漸ク久シク漢字音ニ馴テハ。オノヅカラ其外國ノ音ノ正シカラズイヤシキヿヲオボエズ。後世ニ至テハ。却テ字音ノ語ヲ雅也ト心得テ。ケフ　アスト云ヨリハ。コンニチ　ミヤウニチト云ヲヨシトシ。ニシ　ヒムカシト云ヨリハ。トウ　ザイト云ヲヨシトスルヿニナリテ。年々月々ニ字音ノ語ヲ用ルヿ多クナリユクメリ。抑古ヘハ字音ヲバイヤシメテ。讀書トイヘ𪜈訓ニヨマルヽ限リハ訓讀ニシ。又字音ノ物ノ名ナドモ。常ノ言ニハナダラメテ。才ヲサエ。芭蕉ヲハセヲ。襖ヲアヲ。篳篥ヲヒチリキ。雙六ヲスグロク。博士ヲハカセ。消息ヲセウソコ。朱雀ヲスサカナドヤウニ。皇國言ニ近ク轉ジテ呼タリキ。然ルニ中昔ヨリ。漸クニ字音ノイヤシキヿヲオボエズナリテハ。是ヲ嫌ハザルノミナラズ。皇國言ニサヘ音便ト云モノ出來テ。字音ノ如ク云ヒナスヿ多シ。【連聲ノ便ニ隨ヒテ。淸音ノ濁音ニナリ。或ハ平上去ノ三聲タガヒニ轉ズルナドハ。上古ヨリコレアリ。今此ニ云音便ハコレラニ異ナリ。】是レモト字音ヲ呼ビ馴タルヨリ移レル者ニシテ。皆正音ニ非ズ。外國侏離不正ノ音ニシテ。甚鄙俚ナル者多シ。其音便種々アリ。左ニ出スガ如シ。○イト云音便。キヲイト云ハ。朔【月立ノ意ナリ】ヲツイタチ。前比ヲサイツコロ。幸ヲサイハヒ。后ヲキサイ。三枝ヲサイグサ。置賜ヲオイタミ。秋田ヲアイタ。當麻ヲタイマ。築土ヲツイヒヂ。透垣ヲスイガイ。髪搔ヲカウガイ。衝重ヲツイガサネ。吹革ヲフイガウ。又カ　キ　ク　ケト活クキ。ヨキ　アシキナドノ類ヲヨイ　アシイナド云ヿ。ヤヽ古クヨリアルヿニテ。今時ノ言ハ凡テ皆然也。又中下ナルヒハ。口語ニハ皆イト云。【是ハヒノミナラズ。ハ　ヒ　フ　ヘ　ホハ。中下ニアルヲバ皆ワ　ヰ　ウ　ヱ　ヲト云リ。ハヲワト云例ニヨラバ。是ハヰトスベケレドモ。姑クヰノ條ニ出セリ。】又漢籍讀ニ。大キニヲオホイニ。行テヲ

ユイテ。置ヲオイテト云類多ク。【中古ノ物語書ナドニモ此例アリ】又字音ノシヲ長ク引テ。四時ヲシイシ。詩歌ヲシイカ。
飲食ヲインシイナド云。家司ヲケイシト云モ此例也。【是ハケヲ引タルモノナレバ。口語ニハケエシト云ヲ。ケイノ字音ノ
格ニナラヒテ。假字ニハケイシト書ク也。】〇ウト云音便　ウヲ添ヘテ云ハ。設ヲマウケ。賜ヲタウブ。清ラヲキヨウラ。八
日ヲヤウカ。夜ヲヨウサリ。葬ヲハウムリ。佐官ヲサウクワン。【コレラハ皆口語ニハ。マウケハモオケ。タウブハトオ
ブトヤウニ呼リ。是又カノ字音ノウノ韻ヲ多ク音便ニテオト呼フト同ジ格也。】漢籍ヨミニハ。然而ヲシカウシテト云ヒ。
字音ニハ。女官ヲニヨウクワン。女房ヲニヨウバウ。夫婦ヲフウフ。牡丹ヲボウタン。マヲウト云ハ。給ヲタウバリ。御
座ヲオハサウズ。宣ヲノタウブ。【漢籍ヨミニハ。ノタマハクヲノタウマクトイヘリ。】ミヲウト云ハ。上野ヲカウヅケ。
小路ヲコウヂ。手水ヲテウヅ。髮搔ヲカウガイ。疊紙ヲタヽウガミ。ムヲウト云ハ。日向ヲヒウガ。多武峯ヲタウノミネ。
手向ヲタウゲ。【俗峠ト書】候ヲサウラフ。ハヲウト云ハ。伯耆箒ヲハウキ。吹革ヲフイガウ。革堂ヲカウダウ。ヒヲウ
ト云ハ。眞人ヲマウト。首ヲオウト。【此外ニモ某人ト云人ヲウトヽ云類多シ】韓櫃ヲカラウト。折櫃ヲヲリウヅ。又中
下ナルフハ。口語ニハ皆ウト云。ヘヲウト云ハ。卿【前ツ君ノ意也】ヲマウチギミ。仕奉ヲツカウマツル。ホヲウト云
ハ。直會ヲナウラヒ。直衣ヲナウシ。【以上ハ　ヒ　フ　ヘ　ホヲウト云者ヲ。ハノ行ノ通音ト心得テ。多クフト書クハ誤也。
通音ニハ非ズ。和名抄ニコレカレ出タルミナ字ト書ケリ。音便ナレバ也。】クヲウト云ハ。藁鳥ヲワラウヅ。下鳥ヲシタウ
ヅ。又カ　キ　ク　ケト活クク。ヨク　アシクナドノ類ヲヨウ　アシウナド云ヿ多シ。今時ノ言ハ凡テ然也。【但シ東國人ハ今
モ多クク卜云ナリ】又篇子ヲカウシ。册子ヲサウシ。【俗草紙雙紙ナドヽ云リ】掐子ヲヒヤウシ。冒額ヲモカウ。族ヲゾウ
ト云類モ音便カ。法師ヲホウシト云モ同ジ。【但シ此類ハ。入聲ノ韻ヲナダラメテウト云ルニテ。音便ノ例ニハ非ルヿモア
ルベシ。】取出ヲトウデト云ルハ。リヲウト云ル也。【コレハ此ノ伊勢ノ國ナドノ鄙言ニ。取出スヲトンダスト云ト同類ノ音

便ナリ。】ハヒフヘト活クヒヲウト云ヿモアリ。歌物語ナドニ賜(タマ)ヒケリヲタマウケリ。漢籍讀(カラブミヨミ)ニ言而(イヒテ)ヲイウテ。思而(オモヒテ)ヲオモウテ。問而(トヒテ)ヲトウテ。從而(シタガヒテ)ヲシタガウテト云類多シ。俗言モ同ジ。【コレラハ音便ナレバ。皆ウト書ベシ。サイバラ古本ニ醉而ヲ惠宇天(ヱウテ)トカケルヲ以テ證トスベシ。然ルヲハノ行ノ通音ト心得テ。フト書クハ非也。音便ニフト云例ナシ。】音便ノウノ。本語ノ如ク聞ユル者アリ。凡テ古言ニハ。中下ニウノ音アルモノハヲサ〳〵見エズ。奈良ノ御代ノ末ッ方ヨリコレカレアリ。サレドソハモト。頭(カウベ)ハカミベ。申(マウス)ハマヲス。詣(マウデ)ハマヰデ。漸(ヤウヤク)ハヤヽ〳〵。【ヤウヤクト云ハ後ノコトカ】專(タウメ)ハタクメ。冠(カウブリ)ハカヾブリ。舅(シウト)夫(ヲウト)弟(オトウト)妹(イモウト)ナドノウトハヒトニテ。右イヅレモウハ正言ニ非ズ。音便ナリ。凡テ中下ナルハヒフヘホヲバ。口語ニハ皆ワヰウヱヲト呼ブ例ナル。【假字ニハ本音ノマヽニ書ナリ】其中ニウヲバ。書ヲ讀ミ歌詞ヲ誦シナドスルニハ。又再ビ音便ニテ。ヲト呼ブヿ多シ。合(アフ)負(オフ)ハア○ウ　オ○ウト呼ッベキ例ナルヲ。共ニオヲト呼ビ。歌(ウタフ)ヲウトヲ。舞(マフ)ヲモヲト呼べリ。凡テアフ　カフ　サフ　タフ　ナフ　ハフ　マフ　ラフ。又オフ　コフ　ソフ　トフ　ノフ　ホフ　モフ　ヨフ　ロフ。又テフ　ヱフト云類ノ言ヲバ。皆オヲ　コヲ　ソヲ　トヲ　ノヲ　ホヲ　モヲ　ヨヲ　ロヲ　チヨヲト呼ビテ。ウト呼ブ者ハタヾ第二ノ音【イ　キ　シ　チ　ニ　ヒ　ミ　リ　ヰ】第三ノ音【ウ　ク　ス　ツ　ヌ　フ　ム　ユ　ル】ヨリツヾク言ノミ也。【第二ノ音ナルハ言(イウ)ノ類。第三ノ音ナルハ咋(クウ)ノ類也。但シ是モ第二ノ音ヨリツヾクハ。イウハユウトヤウニ呼べリ。】コレラ凡テウノ韻ノ字音ヲ呼ブ音便ト全ク同ジ格ナリ。抑コレラモ古ヘハ皆本音ノマヽニゾ呼ビタリケム。ソハ何ヲ以テ知ルゾト云ニ。今俗ノ平話ニハ。却テ此ノ再ビノ音便ハ無ク〆。合(アフ)ヲバア○ウ。負(オフ)ヲバオ○ウ。歌(ウタフ)ヲバウタ○ウ。舞(マフ)ヲバマ○ウトヤウニ呼テ。ウヲト呼ブコトハナシ。【故ニ合ヲモ負ト混ジテ。共ニオヲト呼テ。上ノ音マデ轉ズルヿモナク。上ヲモ本音ノマヽニサダカニ呼べリ。】若シ上古ヨリオヲ(合負)　ウトヲ(歌)　モヲ(舞)トヤウニ呼テアラマシカバ。後世ハイヨ〳〵然呼ブベキニ。今ノ平話ハ却テ然ラザルヲ以テ。古ヘヲ推シ量ルベシ。昔シ音便ニ呼シ言ノ。後ニ正シキニ復(カヘ)レル例ハナケレバ也。【右ノ類ハ

ヒフヘホヲワキウヱヲト呼フ音便ハ。今モ同ジヿナレ𪜈。コレモ上古ハ本音ノマヽニ呼シナルベシ。】然ルヲ却テ人皆ア○ウ オ○ウ ウタ○ウ マ○ウトヤウニ呼ブヲバ俗言ト心得。オヲ ウトヲ モヲトヤウニ呼ブヲ雅言ト思フハ。中古以來書讀ノ音便ニ馴タル故也。○ント云音便ンヲ添ヘテ云ハ。眞字ヲマンナ。南ヲミンナミ。【コレハ假字ヲカンナト云ヒ。東ヲヒンガシト云ニナラヒテ添ヘタル也。】抽ヲヌキンデ。誦シヲズンジ。ナドヽ云辭ヲナンドト云類。物語文ヲヨムニ多ク。サイバラニモ。美濃山ニ繁ニ生タルヲシンジニ生タル。我家ヲワイヘントウタヘル類アリ。【古本ニハ之々爾ト書キ。和伊戸ト書リ。】猿樂ノ謠ナドニモ多シ。【捨テケリヲステヽンゲリトウタフタグヒナリ】漢籍讀ニハ。鑑ヲカンガミ。好ヲヨミンズ。惡ヲニクミンズ。不者ヲズンバ。トキハヲトキンバト云類多ク。俗言ニハ。備後ヲビンゴ。豐後ヲブンゴ。【豐原姓ヲ豐トノミ音ニテ云ニブント云モ此例也】假庋ヲ【本ハサズキ也】サンジキ。【棧敷トカクハ甚俗ナリ】役小角ヲエンノ行者。又力ヲ入レテ云ヿニ。眞中ヲマンナカ。眞圓ヲマンマル。唯ヲタンダ。今ヲインマ。手々ニヲテンデニ ト云類イト多シ。ミヲント云ハ。臣ヲオン。朝臣ヲアソン。忌部ヲインベ。公等ヲキンダチ。公卿ヲカンダチベ。大御ヲオホン。戒ヲインコト。筆ヲフンデ。笄ヲカンザシ。弓手ヲユンデ。漢籍讀ニハ。涙ヲナンダ。親スヲシタシンズ。疎スヲウトンズ。賤スヲイヤシンズ。重スヲオモンズ。輕スヲカロンズ。【親シクスルヲシタシミス。疎クスルヲウトミスト云類ハ。古言ノ格也。此例万葉集ノ歌ニ多シ。サレバ後世ノ漢籍ヨミハ。古言ノ遺リタルガ。音便ニクヅレタルモノナリ。】又讀テヲヨンデ。清テヲスンデ。富テヲトンデ。積テヲツンデト云類。俗言モ皆然リ。ムヲント云ハ。神某ヲ【神風神主神集ノ類】カン某。汝ヲナンヂ。東ヲヒンガシ。譽田ヲホンダ。茨田ヲマンダノ類。古ヘハ皆ムヲサダカニ呼シヲ。後ニ訛リテンニナレル也。又ユカム カヘラムノ類ヲ。ユカン カヘランナドヽ云ヒ。ケムラム ナム テム ナドヲモ。ケン ラン ナン テン ト云。凡テ此類辭ノンモ。古ヘハ皆サダカニムト呼シナルベシ。其故ハ。上ニコソト云辭アレバ。ン轉ジテメトナル。

是レ‖ムト通音ナル故也。‖ンニテハ通音ニ非ズ。其外モ萬葉集ニ。稲見(イナミ)ノ川ヲ將行乃河(イナミノカハ)。三室山ヲ將見圓山(ミムロヤマ)ナド𪜈書キ。見ム聞(キカ)ムナドヲ。‖ミモ‖キカモトモヨミテ。後ニ和泉式部ガ歌ニスラ。見(ミ)セム聞(キカ)セムヲ。‖ミセモ‖キカセモトヨミタリ。コレラモ‖マ‖ミ‖ム‖メ‖モハ通音ナル故也。若シ‖ンナラムニハ。‖ミ𪜈モ𪜈轉用スベキ由ナシ。【或人云ク。古言ニ‖ンノ音ナシトハ云ベカラズ。今ノ世ニ‖ント呼ブ音ハ。古ヘモ‖ント呼シ也。然ルニ古書ニハソレヲモ皆‖ムト書ルハ。ソノカミ‖ンノ音ニ書クベキ假字ノナカリシ故也ト云ハ非也。若シ古言ニ‖ンノ音アラバ。‖ムノ假字ノ外ニ。別ニ其假字モアルベキニ。古ヘハ其假字ナクメ。皆牟武(ムム)等ノ假字ヲ用ヒテ。サダカニ‖ムト呼ブ音ト差別ナカリシハ。共ニサダカニ‖ムト呼シ故也。凡テ古ヘノ假字ノ用ヒザマハ。甚精嚴ナリシヿヲ。ヨク知レラム人ハ疑フベカラズ。】言ノ首(ハジメ)ノ‖ムヲ。口語ニ‖ント云者アリ。【假字ニハ‖ムト書ク】生(ムマル)ヲ‖ンマル。埋(ムモル)ヲ‖ンモル。味(ムマシ)ヲ‖ンマシ。諾(ムベ)ヲ‖ンベ。馬(ムマ)ヲ‖ンマ。梅(ムメ)ヲ‖ンメ。棘(ムバラ)ヲ‖ンバラ。野干玉(ムバタマ)ヲ‖ンバタマト云コレラ也。【是レハ‖ムノ下ヲマノ行ノ音ト。‖ハノ行ノ濁音トニテ承(ウケ)タル言ニカギレル音便也。サテ此ノ‖ムハ。素(モト)ハ皆‖ウナリシガ。中古ヨリ‖ムニナレル也。生(ムマル)埋(ムモル)野干玉(ムバタマ)ナドノ‖ムハ。今モ‖ウ𪜈書ク也。サレドソレモ口語ニハミナ‖ント呼べリ。右ノ内ニ野干玉ハ。本ハ‖ヌバタマナリシガ。‖ウトナリ‖ムトナレル也。サテ件ノ言ドモ。今時モ皆‖ウノ如ク呼ブ國モアルヲ。方言トテ京人ハ笑(ワラ)フメレド。コレ返テ邊土ニ古ヘノ正言ノノコレル也。】‖モヲ‖ント云ハ。懇(ネモコロ)ヲネ‖ンゴロ。‖ニヲ‖ント云ハ。丹波(タニハ)ヲタ‖ンバ。難波(ナニハ)ヲナ‖ンバ。【サイバラ古本ニ。名光波乃宇美(ナムバノウミ)トアレバ。是レモヤヽ古キコトニテハアル也。サテタ‖ンナ‖ンハ丹難ノ字ノ音ナレバ。却テコレヲ正シト思フ人モアルハ。大ナルヒガコヽロエ也。コレハ本‖タニハ‖ナニハト云名ニ。後ニ音ノソレニ似タル字ヲ借リテ書ルノミナレバ。字ノ本音ニハ泥(ナヅ)ムベキヿニ非ズ。中昔ヨリ‖タンバ‖ナンバト云ハ。字音ニ依レルニハアラズ。音便ニ‖ニヲ‖ント云ナセルモノ也。凡テ諸國郡鄕等ノ名ニ。字音ヲ用ヒタル者ハ。皆假字ニテ。タヾ似ヨリタル音ヲ取レルノミナレバ。其本音ニハ泥(ナヅ)ムベカラザルヿ也。然ルヲ儒者ナド。タヾ其字ニナヅミテ。武藏安房信濃因幡播磨對馬ナドノ類ヲモ。本ハ

ミナ本音ノ如クナリケムヲ。後ニ唱ヘ訛レルモノト心得ルハ。地名ノ假字ノ例ヲ知ラズ。本末ヲ辨ヘ察セザルモノ也。コレラヲモ古書ニハ。身刺淡科野稻徇針間津嶋ナドヽモ書ルヲバ見ズヤ。】大贄ヲ【大嘗トモカケリ】オホンベ。掃部ヲカンモリ。【今時カモント云ハ殊ニ訛レル者也】漢籍讀ニハ。何ゾヲナンゾ。如何ヲイカン。成ニシヲナリンジ。遂ニシヲトゲンジ。ヌヲント云ハ。絹垣ヲキンカイ。リヲント云ハ。假字ヲカンナ。退出ヲマカンデ。衞所ヲマンドコロ。後取ヲシンドリ。件ヲクダン。漢籍讀ニハ。成ヌヲナンヌ。去ヌヲサンヌ。終リヌヲハンヌ。ルヲント云ハ。夜御殿ヲヨンノオトヾ。有ベシヲアンベシ。有メリヲアンメリ。又アルベカルメリト云ベキヲ。ルヲ二ツナガラ省キテ。アベカメリト書タルヲ。アンベカンメリト讀ムタグヒモ多シ。ハヲント云ハ。童部ヲ俗言ニワランベト云。ヒヲント云ハ。主水ヲモンドリ。【今時ハリヲ畧テモンドト云リ】築土ヲツインヂ。漢籍ヨミニハ。思看ヲオモンミル。慮ヲオモンパカル。又及テヲオヨンデ。忍テヲシノンデ。並テヲナランデト云類多シ。俗語モ同ジ。ホヲント云ハ。殆ヲホトンド。右ノ外ニモ中下ニント云フ言ナホアリ。ミナ音便ナルベケレド。其本語傳ハラズメ。考ヘ知ガタキ者ハ省キツ。抑ンハ鼻聲ニシテ不正ナル故ニ。古ヘハ字音スラ。蘭ヲラニ。紫苑ヲシヲニ。牽牛子ヲケニゴシ。木蘖子ヲムクレニジ。錢ヲセニ。燈心ヲトウシミ。正身ヲサウジミ。汗衫ヲカザミ。薫衣香ヲクヌエカウ。近衞ヲコノヱ。紫宸殿ヲシシイデン。冷泉ヲレイゼイ。面目ヲメイボクト云ヒ。或ハコレヲ省キテ。文字ヲモジ。反故ヲホグ。巾子ヲコジ。冠者ヲクワザ。本意ヲホイ。對面ヲタイメ。案内ヲアナイ。精進ヲサウジ。念佛ヲネブツナドヽ呼ビ。古キ物ニハ。延喜ヲエギ。喜撰ヲキセ。右近ヲウコナドヽ書ルヿモアルヲ。後ニ至テハ却テント云フ聲狂ナルガ如クニナリテ。漸ニ此音便ノ言多クナリテ。コトサラニ添ヘテサヘ呼ブコトヽナレリ。片假字ノンモ。平假字ノんモ。後世ニ出來タル字ニテ。中昔マデハコレラノ假字ハナカリシ故ニ。【顯昭モ。末ハネタル假字ノ文字テシト云リキ。或人。んノ字ハ毛ノ草書ノクヅレタル也トイヘリ。蜻蛉日記ニ必モトアルベキ處ヲ。ン

ト書ルヿ多キナドヲ思ヘバ。サルコトニテモアルベシ。又吾黨ナル人ノ考ヘニ。片假字ノニノ末ヲハネテンノ字ヲ作リ。平假字ノにノ末ヲハネテんノ字ヲ作レル也ト云リ。コレモオモシロシ。】口語ニ音便ニテント呼ブ言出來テ後ニモ。ムむノ字ヲ借リテ書シガナラヒトナリテ。後世ツヒニムむトンんトヲ混ジテ分タズ。通ハシ書テ。中下ナルヲバ凡テ皆ンんト書クカラ。中ゴロマデハムト讀シ言モ。皆ント讀ムコトニハナレル也。○ウ𪜈ン𪜈二タヤウニ云音便。神某ヲカウ某𪜈カン某𪜈云。【神ノ本語ハカミ又カムトモ云】巫ヲカウナギ𪜈カンナギ𪜈云。【本語ハカムナギナリ】嫗ヲオウナ𪜈オンナ𪜈云。【本語ハオムナ也】女ヲヲウナ𪜈ヲンナ𪜈云。【本語ハヲミナ也】大神ヲオホウワ𪜈オホンワ𪜈云。【本語ハ大三輪ノ義ニテオホミワ也。後世ニ此ノ大神ヲオホガト唱ルハ。オホウワナド云ヲ。オホガミノ意ト心得誤リタルヨリ出タルヒガコトナルベシ。】諸ノ司ノ長官ヲカウ𪜈カン𪜈云。【カウト云ハ小督又頭殿ナド是也。カント云ハ督ノ君ナドアル是ナリ。】笋ヲタカウナ𪜈タカンナ𪜈云。【本語ハ竹芽菜ノ義ニテタカメナナリ】商人ヲアキウド𪜈アキンド𪜈云。【本語ハアキビト也。此外ニモ某人ト云ニ此音便コレカレトアリ】仕奉ヲツカウマツル𪜈ツカンマツル𪜈云。【此ノウヲフト書クハワロシ】冠ヲカウブリ𪜈カンブリ𪜈云。【本語ハカヾブリナリ。】考ヲカウガヘ𪜈カンガヘ𪜈云。【本語未詳。】上件ノ言ドモ。ウモンモ共ニ音便ナリ。其中ニ本語ムナル者ハ。モトヨリント呼ンヿト心得メレ𪜈然ラズ。ムハ古ヘハサダカニムト呼ツルヲ。後ニ音便ニテントハナレル也。【コレヲ今改メ正シテ。サダカニムトヨムトキハ。却テ異ヤウニ聞ユルハ。音便ニヨミナレタル癖ナリ。】後世ハムトント混ジテ。古言ノムヲモ。中下ナルハ皆ント讀テ。ムトントハタヾ同ジキガ如クナレリ。古ヘハ皆サダカニムト呼ヒケムヲ。【此事上ニ云リ】後ニ音便ニテントモウトモ云。ユカン　カヘラン。ユカウ　カヘラウノ如シ。此二ツノ中ニ。ユカン　カヘランノ類ハ雅言。ユカウ　カヘラウノ類ハ俗言ノヤウナレ𪜈。二ツ共ニ後ノ音便ナレバ。必シモンヲ雅𪜈。ウヲ俗𪜈定ムベキニ非ズ。音ニ就テイハヾ。返テウハ雅。ンハ俗トスベシ。上ニ出セルウ𪜈ン𪜈二タヤウニ云フ言ドモノ例モ。

多クハウハ雅ニ近ク。ンハ俗ニ近キゾカシ。【サテ此ノユカウ　カヘラウノ類ノウヲ。口語ニハ又再ヒ音便ニテヲト云。ユコヲ　カヘロヲノ如シ。是ハ上ニ云ルハ　ヒ　フ　ヘ　ホヲワ　ヰ　ウ　ヱ　ヲト云音便ノ中ノウヲ。又音便ニヲト云。其格ト全ク同ジ。サテ鄙言ニハ又ツヒニ其ノヲヲ畧キテ。ユコヲユコ。カヘロヲカヘロトヤウニ云ナリ。】○急促ル音便　全ヲマッタク。最ヲモットモ。訟ヲウッタヘ。阿怜ヲアッパレ。備中ヲビッチユウ。服部ヲハットリ。ウヲ急促テ云ハ。佐官ヲサックワン。眞人ヲマット。夫ヲヲット。又言テヲイッテ。追而ヲオッテ。從テヲシタガッテト云類多シ。【コレラハ皆ウモ音便ナルヲ。又再急促テ云也】フヲ急促テ云ハ。貴ヲタットシ。新田ヲ【本ハニヒタ也】ニッタ。チヲ急促テ云ハ。以テヲモッテ立ヲタッテ。分テヲワカッテト云類多シ。ツヲ急促テ云ハ。奴ヲヤッコ。リヲ急促テ云ハ。欲ヲホッス。則ヲノットル。又返テヲカヘッテ。因テヲヨッテ。成ヲナッテト云類多シ。凡テ急促ル聲ハ。殊ニイヤシキ故ニ。古言ハサラニモイハズ。中古マデモ雅言ニハ是レアルヿナシ。故ニ今トテモ歌書ナドヲ讀ニハ。コレヲマジフルヿナシ。此音便ハタヾ漢籍ヨミト。俗語トニノミ多クシテ。俗語ニハ力ヲ入レテ云フ言ニハ。眞白ヲマッシロ。眞更ヲマッサラ。唯ヲタッタ。毎ヲイッツモト云類モツネニ多シ。音便ノウ　ンノ下ハ。凡テ清音モ濁ラルヽハ皆濁ル例ナルニ。此ノ急促ル聲ノ下ハ濁ル例ナク。濁音ノ上ハ急促ル例ナシ。急促ル聲ノ下。ハノ行ノ音ナレバ必半濁ニナル也　○ハ　ヒ　フ　ヘ　ホノ半濁ノ音便　是レハ字音ニ多シ。烟-波結-髪ナドノパ。彬-々橘-皮ナドノピ。南-風匹-夫ナドノプ。雪-片岸-壁ナドノペ。一-方反-哺ナドノポノ類也。字音ナラヌハ。漢籍讀ニ慮ヲオモンパカル。專ヲモッパラ。何人ヲナンピト　トイフハヲトイッパ。又軍書ナドニ。弓ヲヨク引テト云ヿヲ。ヨッピイテ。追入ヲボッパメナド云類。又俗言ニ　アッパレ　ヤッパリ　マッピラ　タップリ　スッパリ　コッポリナドノ類。皆力ヲ入レテ强メタル語也。凡テ此音便モ殊ニイヤシキ故ニ。雅言ニハコレアルヿナクメ。今ノ世トテモ歌書ナドヲヨムニハ。是ヲマジフルヿナク。タヾ漢籍ヨミト俗言トニノミ多シ。【此ノハノ行ノ半濁ハ。アルガ中ニイヤ

シキ音ニテ。皇國ニハ今時ノ俗語トイヘ𪜈。タヾ連聲ノ便ニノミコソアレ。言ニモ字音ニモ。首ニハコレアルコトナキヲ。漢國ナドニハモトヨリ此音ナルモノ多キハ。其不正鄙俚ナルヿ云モサラナリ。】凡テ此音便ハ。急促ル聲ノ下ト。字音ノンノ下トニ局レリ。【字音ノンノ下ノハノ行ノ音ハ。或ハ濁リ或ハ半濁ニ呼也。皇國ノ言ノンノ下ノハノ行ノ音ハ濁ル也。半濁ニ呼ブ例ハヲサ〳〵オボエズ。何人ナド云ハタマサカノコトナリ。】○字音連用ニ。アヤワノ行ノ音ハ。ンノ下ト急促ル韻ノ下トニアルトキハ。他ノ音ニ變ズル例多シ。ンノ下ニアレバナノ行ノ音トナル。先王ヲセンナウ。陰陽ヲインニヤウ。雲雨ヲウンヌ。因縁ヲインネン。安穩ヲアンノント呼ブ類是也。此外三位ヲサンミ。陰陽ヲオンミヤウト呼ブナドハ稀ナル例也。【經營ヲケイメイト云ハ。ンノ下ナラネ𪜈此例也。然ルニ此ケイメイヲ。敬命トスルハアタラヌヿ也。】急促ル韻ノ下ニアレバタノ行ノ音トナル。越王ヲエッタウ八音ヲハッチン。悉有ヲシッツ。闕腋ヲケッテキ。舌音ヲゼットント呼ブ類是ナリ。サテ又漢籍ヨミニハ。ヲ　ハ等ノ辞ヲモ此音便ニ呼ブヿアリ。仰レ天ヲ天ノ仰ク。仁者人也ヲ仁ナ人也トヨミ。以レ一ヲ一ト以テ。實ハヲ實タトヨム類是ナリ。【ハニハ此音便ノ例ハナキヿナレ𪜈。口語ニワト呼ブユヱニ。アヤワノ行ノ音ノ格ニナレル也。】○上件音便。イトウトント急促ル聲トハノ行ノ半濁音ト凡テ五ツニシテ。此外ハアルヿナシ。【字音連用ニアヤワノ行ノ音ノ他音ニナルモ。皆上ノンノ韻急促ル韻ニ引レテ然ルモノ也。】然ルニ漢字音ノ韻モ亦イトウトント急促ル聲ト四ツニシテ。ハノ行ノ半濁音モ韻ニハ非レ𪜈。コレ亦漢國ノ音ニ多ケレバ。凡テ五ツニメ。音便ノ五種全ク是ト同ジ。諸ノ音便皆漢字音ヲ呼ヒ馴レタルヨリウツレルモノ也ト云フヿ。コレヲ以テ決スベシ。サレバ古言ニハコレアルコトナケレ𪜈。奈良ノ御代ノ末ツ方ナドヨリヤアリソメケム。上ニ引ル頭中ナドノ類ハ。ヤヽ古ク聞エタリ。サテ上件五ツノ中ニイトウトハ。言ノ中下ニ置クトキコソ不正ニ渉レ。其音ハ五十ノ正音ノ外ナラザル故ニ。同ジキ音便ノ中ニ此二ツハヤヽ正シケレバニヤ。古ク聞ユ。サイバラノ古本ニモ。花ノ開タルヲ左伊多留トイヒ。左介乎太宇戸天太戸恵宇弖。マタ狛人ヲ己末宇止ナ

ドアリ。和名鈔ニモ人ヲウドト云類ナドハ往々ニ見エタリ。次ニンハ。本ヨリ不正ノ聲ナル故ニ。此音便ハ古クハ見エズ。サイバラ古本ニ。難波ノ海ヲ名无波乃宇美。左サマ右サマヲ止散加宇散。食テヲ波牟天トアル類ノムハ。サダカニムト呼テ。ントハ呼ザリケム。字音スラ判官ヲハウグワン。柑子ヲカウジ。林檎ヲリウゴウト云ル類アレバ。マシテ皇國言ニハ。ンノ音ヲバ用ヒザリケムコトオシハカルベシ。然ルニ中古ノ物語書ナドニ至テハ。此音便モイト多シ。困シテコウジト云ルカト思ヘバ。却テ又封ジテフンジト云ル類モアレバ。ソノカミ既ニウトントニツノ音便同ジホドノコトニゾアリケム。次ニ急促ル聲ト。ハノ行ノ半濁音トハ。殊ニ不正鄙俚ノ音ナル故ニ。中古マデハサラニモイハズ。今時トテモ歌物語ナドヲ讀ムニハ。ヲサ〳〵コレヲマジフルヿナシ。字音スラ入聲運用ノ急促ル韻ヲバ。多クハ省キテ。日記ヲニキ。絕句ヲゼク。律師ヲリシ。讀經ヲドキヤウトヤウニヨミ。達智門ヲタテイモント唱ルヨシナド物ニ見エ。六日本ハ今モニホンドモ呼ベバ。古ヘハサラ也。法華經ハ今モホケキヤウトノミ云リ。コレラヲ以テ思ヘバ。天平寛平ナドノ平ノ字。三品ノ品ノ字ナド。凡テンノ下ノ半濁音モ。古ヘハ今ノ如ク半濁ニハヨマズ。濁リテヨミ。急促ル韻ノ下ノ半濁モ。古ヘハ或ハ一品ヲバイチホンナドヽヨミ。或ハカノ日本ヲニホントヨム如クニナドヨミテ。凡テ上ノ急促ル韻ヲ避テ。下ヲ半濁音ニナラザルヤウニゾヨミツラム。【上ノ急促ル韻ヲ避レバ。オノヅカラ半濁音ハ出ザルヿ也。】然ルニ後世ハ書ヲヨムニ。此ノ急促ル韻ト。ハノ行ノ半濁トノ音便ヲ。殊ニ多ク用ヒテ。返テコレヲ雅ナル如クニ心得メルハ。物ヨムヤウノイタク鄙俗ニナリヌル也。漢籍トイヘドモ。風雅ノ道ヲ思ハム學者ハ。心シテ讀ムベキヿニナムアリケル。

漢字三音考 終

字音假字用格序

薦紳名流。斐然黼黻其章者。代不鮮矣。然論學識。則寥々亡聞焉。方今昭代之化。文運渙發。豪傑之士。勃焉崛起。先有契沖氏。而後有縣居翁。一則龍擧浪華。一則虎視江門。盛唱復古之學。海内爲之一新。然是猶擅力訓詁。未遑及修辭也。嗟夫併文藻與學識而大成焉者。吾未見其人。果其無人乎。吾本居先生。抱命世之才。學術精博。兼究永言之妙。其於歌也。翺翔八代之際。而衆美具之。其於學也。紹明二公之業。而成功過之。吾所謂其人也哉。斯編也。講業之暇。爲問字音假字者而作也。其説詳審精覈。一展卷。則瞭然在目矣。可謂萬世不朽之準則也。至如其發喉音三差之義理。辨於乎二音之錯置。則非命世之才。學術精博者。豈能至於此哉。蓋字音假字也。係於百家之學也。操觚之士不可不知。操觚之士不可不知。則是書不可不觀。是書不可不觀。則可以傳天下後世矣。爲之序。

安永四年春三月

門人　須賀直見謹撰

字音迦那豆訶比乃序

漢字音者母與。本彼國人之鳥成佐比豆理乎學取都琉物二四手。茂八羅大御國之雅而有與者。似而霜不在有祁禮婆。歌咏二毛俚氣久。誦讀二母鄙計九亘。古之大御代庭。五十小竹叢竹五十篠目之事問荷面。都由摩自倍受魚藻有來。然爾波雖有其國籍者下。水垣之久時從所傳來去而之在祁禮婆。遍曾禮讀慣聞習而。世々遠歷麻麻邇々。自然俚登母不知變。鄙止毛不所思化天。薄良氷之打解言者更爾文不云。內日刺雅語二尙稍宇知雜筒。後遂者外國言止斯母如不在爲以來乍。彌日異保姚許里氏。今之者之大凡之言之葉半者此字音乎那毛用阿布米流世西有者。牡鹿巢蟹許連我假字望不識而波多得不在和邪成乎。其者未照月之眞昭明爾記世流物母無。白玉椿委曲擧而有書志無禮婆。於物書惑敷布斯々々澤在之故二。己往日此須遲之書等彼之此之何倶列止取出考索乍。多々志能徑之正伎遠定而。芝藝之羽根搔書集置鶴二。又此假字之所由奈杼。思得而有事聊論多瑠乎霜於端方加而。許禮能一卷常葉成都。時者安永之四季云年正月之十日。如是云者伊勢人本居宣長

字音假字用格

目　録

○字音かな(目錄)

目錄終

字音假字用格

本居宣長著

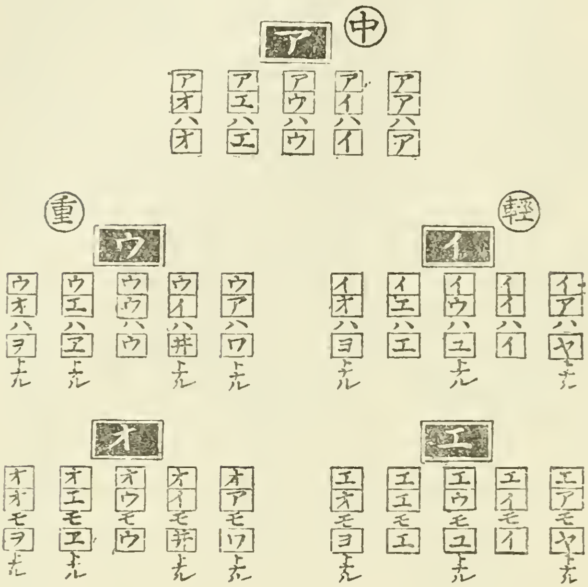
此書ハ漢字音ノ假字(カナ)ヲ正(タヾ)サン爲(タメ)ニ著セリ凡ッ其字音此方ニ古ヘヨリ傳ヘ用ルトコロ漢呉ノ二ッアリ又是レニ近世傳フル唐音ト云モノヲ加ヘテハ三ッ也此三ッノ音ノ事ハ予別ニ漢字三音考ヲ著シテ委ク辨セリサテ此ノ中ニ彼唐音ト云モノハ古來ノ傳ヘニ非ズメ世ニ普ク用ル者ニモ非レバ是ヲサシオキテ今ハタヾ漢呉二音ノ假字ヲ論辨ス抑此字音ノ假字ノ常ニマガヒヤスキハ多クハう卜引ク音ニアリあうトわうトおうト混ジきやうトきようトけうトマギル丶類也然レ圧是レラハ其所レ屬ノ韻ニヨリ又其入聲ノ字ナドニテモ分ル丶ヿナルガタヾ辨ヘガタキハ喉音三行【アイウエオ。ヤイユエヨ。ワヰウヱヲ】ノ差別ニテ其いゐえゑをノ假字ハ字音ノミナラズ御國言(ミクニコトバ)ニ於(オキ)テモ後世多クハ錯亂シテ善ク是レヲ辨フル人無クシテ數百年ヲ經(ヘ)タリ然ルニ近世難波ノ契沖僧始メテ是ヲ考ヘ出タシ和字正濫抄ヲ著セルヨリ古ヘノ假字再ビ世ニ明ラカニナリヌルハ比類ナキ大功ナリソノ後古學ノ道イヨ〳〵開ケテ古言ノ假字ヅカヒニオキテハ今ハ遺漏無キヲ【近年出來タル古言梯便リヨキ書也】字音ノ假字ニ至テハ未ク詳カニ考ヘ定メタルモノナクシテ喉音三行ノ假字ハ殊ニ明ラカナラズ故ニ今先ッ此三行ノ義ヲ辨ズルヿ左ノ如シ

喉音三行辨

先ッ大御國(オホミクニ)ノ喉音ニあやわ三行ノ差別アル所以ノ原(モト)ヲヨク明ラメオキテ後ニ字音ノ假字ヲ論ズベシ抑此三行ハあいうえおヨリ分レタル音ニシテ其本ハ一ナリサテ一ッニシテ三ッニ分レタル所以ハあいうえおノ五ノ音ノ下ヘ又各あいうえおノ五ノ音ヲ重(カサ)ヌレバ自然トツヾマリテやいゆえよわゐうゑをノ音トナルユヱニ別ニ此二行ハアルナリ【喉音ニノミ此差別アリテ餘ノかさたなはまらノ七行ニハ是レ無キハイカニト云ニマヅや行わ行ノ音ハモト二音ヅ丶重ナリタルモノナレバ實ハイハユル拗音也然レ圧喉音ハ餘音ニ類セズ柔輭隱微ナルユヱニ二音ツ丶重ナレ圧オノヅカラツヾマリテ直音ノ如クナルユヱニ此

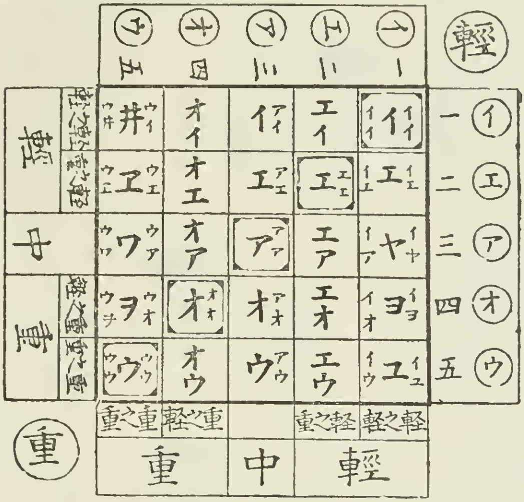
二行ノ音トナル也餘ノ七行ハ二音ヲ重ヌルトキハ二音ニ分レテサダカニ拗音ニシテ一音ニツヾマルヿナシ故ニ喉音ノ外ハミナ單行ナル也】 故ニ古言ノナカニあいうえおノ音ノ重ナリタル言(コトバ)ハ一ツモアルヿ無シ是ヾ其ノ明證也 【老肖(オイアエ)ナドノいえハや行ノいえナル故ニ おゆあゆトモ活用セリ 又地名ニ秋田ヲ阿伊太。置賜ヲ於伊太三トアル伊ナドハきノ轉ナレバ今ノ例ニアラズ】 サテや行モわ行モあ行ヨリ生ズル音ナルユヱニ 三行ニ分ルトイヘドモ或ハ髣髴トシテ一ツナルガ如ク一ツカト思ヘバ又サダカニ三ツニシテ古ヘハ混淆スルヿサラニ無リキ然レバ此ノ三行ハ是ヾ字音ヲ辨ズルニモ亦緊要ノ事也ヨク〳〵會得スベシ 【韻學家ニ喉音ヲ論ゼルヿアレドモ皆古言ニ昧クシテ三行ノ嚴然トメ相混ズマジキ義ヲ知ラザル故ニ皆混雜シテや行わ行ハ畢竟無用ノ長物ノ如シ又御國ノ音韻ハ甚悉曇ニ似タルヿ多シ 然レドモヒタスラニ 彼ノ法ニヨリテ是ヲ治スルトキハ又違フヿ多シ殊ニ喉音三行ハ吾古言ノ音ヲヨク解セル者ニアラズハ其義ヲサトルコトアタハジ】 五十連音ノ圖中ニ いゐえゑおをノ所屬ヲ錯リテ或ハゐヲや行又ハあ行ニ屬シ或ハゑヲあ行や行ニ屬スル類多シ惑フコト勿レ若シ一字モ 此所屬ヲ錯ルトキハ三行ノ辨ミナ明ラカナラズ先ッ初メニ是ヲ正シオクベシサテおハあ行、をハわ行也此事ハ別ニ下ニ委キ辨アリ 〇音ノ輕重ハ御國言ニ就テハ古來ソノサタモナク無用ノ論ナレドモ 【俗書ノカナヅカヒドモニ言語ノ輕重ヲ云ルハミナ杜撰ノ臆度ニテ一ツモ古ヘノ假字ニ

喉音三行分生圖



合ノコトナケレバサラニ論スルニ足ラズ】 あいうえおノ音ニ本ヨリ其次第アル故ニソレニ従ヒテや行わ行ノ音ニモオノヅカラ輕中重ノ科(シナ)アリ故ニ右ノ圖ニモ是ヲ標セリ字音ヲ辨ルニハイヨ〳〵此輕重ニテ假字ノ分ル丶子細アル故ニナホ精ク其位ヲサトスコト左ノ圖ノ如シ

喉音輕重等第圖



右ヨリ左へ斜ニいえあおうト下ル者是レ五音ノ正位ナリ
〇一二三四五ハ竪横共ニ輕ヨリ重ニユク序也

喉音ハ三行ナルニ此圖ニ五行ヲ立ル所以ハ初ノ圖ト照シ合セテコヽロウベシサテ五行ニ分ルトイヘドモ終(ツヒ)ニハ三行ニ歸(キ)スル理モ又彼圖ニテ悟ルベシ【此事ハナホ下ノ三會圖ノトコロニ委ク云】サテ如(ク)此ノ輕重ノ位ヲタテヽいえあおう等ト次第スルコハ予ガ臆斷ニ似タレドモ下ニ出ストコロノ字音開合ノ圖ト引合セ見テ實ニ然ルコヲ知ルベシ抑萬ツノ音聲ハあヨリ始マリテ【此事ハ梵學家ノ常談ナルガ信ニ然ルコトナリ】漸々ニ轉ゼルモノナルガ其ノ轉ズルトコロオノヅカラ輕ト重トニ分レユクコトナレバあハ輕重五行五位ノ中央ニ在ルコト必然ノ理也且右ノ次第ハ人々ノ口ニ呼ビ試テモ知ラル丶コ也又古ヘヨリ傳ヘレル樂家ノ譜ヲ見ルニあ行た行は行ら行等ノ音ヲ用テ其次第ハ皆右ノ如クいえあおう。ちてたとつ。ひへはほふ。りれらろるト定メテ物ノ音(ネ)ノ低昂ヲカタドレリ是レ五音ノ位ノ自然ト如(ク)此ナル故也又十行各五音相通スル中ニ初五ト二四ト三五トハ殊ニヨク通スルモ右ノ次第ニテイヅレモ其位隣近ナルガ故ナリ　〇右喉音三行ノ所由又其輕重ノ次序ナドハ必シモ字音ニツキテ云ニハ非ズ御國(クニ)ノ自然ノ音聲ニ具ハルトコロ也然(シテ)是レ即チ字音ノ假字ヲ辨ル緊要ナルユヱニ委ク論スルモノナリ

おハ輕クシテあ行ニ屬シをハ重クシテわ行ニ屬ス然ルヲ古來錯リテをヲあ行ニ屬テ輕トシおヲわ行ニ屬メ重トス諸說一同ニシテ數百年來イマダ其非ヲ曉レル人ナシ故ニ古言ヲ解クニモ此ノおをニツキテハ此レ彼レ快カラザルヿアリ又字音ノ假字ヲ辨ルニハイヨ〳〵舊本ノ如クニテハ諸字ノ假字一ッモ韻書ト合ッ者無ク諸說コヽニ至テ皆窮セリ是ニ因テ予年來此ノ假字ニ心ヲ盡シテ近キコロ始テ所屬ノ錯レルヿヲサトリ右ノ如ク是ヲ改メテ驗ルニ古言及ヒ字音ノ疑ハシキ者悉ク渙然トシテ氷釋セリマヅ古言ヲ以テイハヾ息ヲ於伎ト通ハシ云コレおハいト同クあ行ノ音ナル故也又居ヲ乎流トイヒ多和夜女ヲ多乎夜女トイヒ多和々ヲ登乎々トイヒ新撰字鏡ニ悎ノ字ヲ和奈々久又乎乃々久ト註セルコレラ皆をハわ行ナル故ノ通音也【右ノ言ドモノ於乎ノ假字ハミナ古書ニ出タレバ論ナシ】然ルニ是等ヲタヾあ行トわ行ト通ストノミ意得居ルハソノ解ヲ得ズシテ强タル者也サテ又山城ノ國ノ郡名愛宕ハ於多岐【阿多古ニモ愛宕ノ字ヲ用フ】尾張ノ郡名愛智ハ阿伊知【本ハ阿由知ナリ】相模ノ郡名愛甲ハ阿由加波近江ノ郡名愛智ハ衣知トアルコレラ愛ノ字ヲあえおトあ行ノ音ニ通用セリ又上野ノ郡名邑樂ハ於波良岐因幡ノ郡名邑美ハ於不美石見ノ郡名邑知ハ於保知遠江ノ鄕名邑代ハ伊比之呂トアルコレラニ邑ノ字ヲいトおトニ用タルモあ行ノ通音也又凡テ一音ノ地名ハ其ノ韻ノ音ノ字ヲ加ヘテ必二字ニ書ク例木ノ國ヲ紀伊トカクガ如シ【伊ハきノ韻也】遠江ノ鄕名滑伊出雲ノ鄕名斐伊【和名抄今ノ本ハ伊ヲ甲ト誤レリ風土記ニ伊ニ作ル】筑前ノ鄕名毘伊【比】肥前ノ郡名基肄【木伊】肥後ノ鄕名肥伊備中ノ郡名都宇【近江越後ナドノ鄕ニモ此ノ名アリ】同國ノ鄕名弟翳【勢】薩摩ノ郡名頴娃【江】和泉ノ鄕名呼唹【乎。神名式男ニ作】參河ノ郡名寶飫【穗。今本飫ヲ飯ニ誤レリ】日向ノ鄕名覩唹大隅ノ郡名囎唹コレラ皆同シ然ルニ呼唹寶飫覩唹囎唹ナドニをノ假字ヲ加ヘズシテ皆おニ用ル飫唹等ノ假字ヲ加ヘタル【契冲大隅ノ囎唹ニ疑ヒヲナシテ乎ヲカクベキニ唹ヲ書ルハ彼國ノ方言カト云ルハイカヾ和泉ノ呼唹ナドニハ心ツカザリシニヤ】凡テ韻ハあいうえおニ限レルコトナレバ是レ又あ行ハおナル明證ナリ【諸國郡鄕ノ名ハ和名抄ニ載テ其文字ハミナ奈良ノ御代和銅神龜ノコロ詔命ニヨリテ定マリシマヽナレバイト古シ】サテ又あいうおノ四音ハ語ノ中ニ在ルトキハ省ク例多シ【コレハ古言ヲ解セル人ハミナ

○字音かな

ヨク知ルコト也一ッ二ッイハヾ上ノ連聲ニアル韻ハあいうおイヅレモ省キテ跡ヲと穴ヲな市ヲち石ヲし磐ヲは浦ヲら海ヲみ上ヲへ馬ヲま面ヲも音ヲと生ヲふト云タグヒナリ】をハ省ク例ナシコレ又おハあ行ニテあいうト一例。をハわ行ニテ其例ニ非ル故ナリ

(又神樂サイバラ哥ノ古本ニ長ク引テウタフ聲ニハ各其韻ノ安以宇衣於ノ字ヲ下ニ添ヘテ書ルニこそとのほもよろをノ聲ニハミナ於ノ字ヲ添ヘタリ求子ノ哥ニ安波禮衣千者也布留賀茂能也之呂於乃於比女古於末川云々與呂川世於不止於毛於以呂於者安可者安良之トアルガ如シ是レ又阿行ノ第五位ハ於ニシテ乎ニハ非ル一證ナリ)

又歌ニ五モジ七モジノ句ヲ一モジ餘シテ六モジ八モジニヨムヿアル是レ必中ニ右ノあいうおノ音ノアル句ニ限レルコト也【えノ音ノ例ナキハイカナル理ニカアラム未レ考】古今集ヨリ金葉詞花集ナドマデハ此格ニハヅレタル歌ハ見エズ自然ノコトナル故ナリ【万葉以往ノ歌モヨク見レバ此格也千載新古今ノコロヨリシテ此格ノ亂レタル哥ヲリ〱見ユ西行ナド殊ニ是ヲ犯セル歌多シ】其例ヲ一二イハヾ源信明朝臣ほの〴〵と有あけの月の月影に紅葉吹おろす山おろしの風コレハ卅四モジアレ𪜈聞惡カラスハ餘レルモジミナ右ノ格ナレバ也又後ノ歌ナガラ二條院ノ讃岐ありそうみの浪間かきわけてかづくあまの息もつきあへず物をこそおもへコレハ句ゴトニ餘リテ卅六モジアリ其中ニ第二句ノわハ喉音ナガラあ行ノ格ニ非ル故ニ此ノ句ハスコシキヽニクシ其他ノ四モジハ皆右ノ格也故ニ多ク餘リタレ𪜈耳ニタヽザルハ自然ノ妙也【右ノ二首ハ後世ニ字餘リノ例ニ引ク哥也然レ𪜈右ノ定格ノ有ルコトヲ知ル人ナシ是ハ予ガ始テ考ヘ出セルトコロ也可秘々々】然レバオノヅカラニ如レ此格ノアルモおハあ行ナル一ッノ證也　○次ニ字音ニツキテイハヾ諸ノ古書【天暦以往】ニおトをトノ假字ニ用タル字ドモヲ考ルニおヲあ行。をヲわ行トスルトキハ悉ク韻書ノ旨ニ符合ス下ニ一々擧タル字ノ下ヲ撿テ悟ルベシ若シ舊慣ノ如クをヲあ行。おヲわ行トスルトキハ悉ク輕重錯亂シテ一字モ音韻ニカナフ者アルコトナシ　○五十連音ノ圖ハモト悉曇字母ニ依テ作レルモノナルガ【其由ハ別ニ委ク辨セリ】其悉曇ノあいうえおニ各短長ノ二音アル其おノ短長ヲ大日經金剛頂經文殊問經及華嚴續刊定記空海悉曇釋義等ニハ汙奥ニ作リ涅槃經ニハ烏炮ニ作リ大莊嚴經ニハ烏燠ニ作リ寶月三藏ハ鷗奥

ニ作リ難陀三藏ハ于奥ニ作リ智廣ノ字記ニハ短奥長奥ニ作レリ安然ノ悉曇藏ニ見エタリカクテ其烏ノ字ハ御國ノ古書ニをノ假字ニ用ヒ汙モ又をノ假字ナレバア行ハナホ舊ノ如クをナルベシト思フ人モアルベケレド凡テ悉曇ノ對譯ノ字ニテいゐえゑおをハ分リ難キコト也イカニト云ニマヅ同梵音ニ對譯ノ字ハ彼レト此レト音ノ異ナル事多シ是レ五天竺ノ風土ノ音ノ異ノミニモ非ズ又翻譯者ノ時世郷里ノ音ノ變異ノミニモ非ズ多クハ漢字ノ音ノ正シク梵音ニ當リガタキ故也何ゾト云ニ同中天同南天ノ音ヲ同時代ニ傳ヘタル書ニテモ對譯ノ字ノ音ハ一同ナラズ同書ノ内ニテスラ混雜セルモノ尠カラズ一二ヲイハバカノ金剛頂經ニ長ノうニ汙引短ノおニモ汙トアル是レニ一ツハ引ト註シタレドうトおトハタヾ引クト否ルトノ異ノミナランヤ梵音ハ必ス差別アルベキヲ同ク汙ノ字ヲ當タルハ漢字ノ音ニテ混セル事明ラケシ又大莊嚴經等ニハ短ノうニ烏【上聲】長ノうニ烏。短ノおニモ烏トアリ空海釋義ニハ長ノうニモ汙【長聲】短ノおニモ汙【長聲】トアリコレラ又長ノうト短ノおト全ク混セリうトおトハ豈長短ノ異ノミナランヤ又涅槃經ニハ長ノえニ野ノ字ヲ書キ自餘ノ書ニハ多クやノ音ニ野ノ字ヲカケリ是又えトやト混セリ凡テ梵音ハ如レ此混雜スベキヤウナシ悉曇ノ十二音ハ殊ニ正シク分レズハアルベカラズ此ノ音亂ルヽトキハ生字ノ音モ隨テ皆亂ルベシ然レバ是皆梵音ニ正シク當ル漢字ノ得ガタキ故ニ譯者ノ心々ニテ音ノ似タリト思フ字ヲ當タルモノニシテ或ヒハ上聲去聲或ハ短呼長聲或ハ聲近二某字一或ハ鼻聲彈舌ナドヽサマ〴〵ニ註セリ又後ノ人ノ註釋ニモ某ノ字某々ノ反本音ハ某々ノ反ト云ヒ或ハ不レ依レ字ニナド云ルモ對譯ノ音ノ梵音ト合ハザル故也既ニえトやト混シうトおトサヘ混セルウヘハ何ソおトをトヲ分ツコトヲ得ンカノ寶月ノ譯ノ鷗ノ字ハおうノ假字。字記ノ奥ノ字ハあうノ假字ニテコレラハ共ニ開口音ナレバおニ近クシテをニハ遠ケレバカノ烏等ニ作ル者ト合ハズナホ又慈覺ノ記ニハ短ニ於ノ字ヲ用テ以二本郷音一呼レ之ト註シ長ニ奥ノ字ヲ用タリ他ノ諸書ニハ多ク短ニハ汙烏于等ノ字ヲ用タルニ慈覺ヒトリ改メテ此ノ於ノ字ニ作レルハ三藏ノ口ニ呼ットコロノ梵音ヲ親ク聞テをニ非ズおナル事ヲ辨別ヘタルユヱ也御國人ハ其コロモおトをトノ音差別アリテ兒童モオノヅカラヨクワキマヘツレバ彼人ノ聽分シコト勿論也以二本郷音一呼レ之トアルニテ御國ノあいうえおノおハおニシテをニ非ル事イヨ〳〵明ケシ但シ五十連音ノ圖ヲ作リシ人ハカノ諸書ノ對譯ノ汙烏等ノ字ニ依テあ行ニをヲ置シモ知ガタシ又

後ニ誤テ入ッチガヒタルニテモアルベシタトヒ作者ノ意ニテ本ヨリ然ルニモアレサヤウニテハ御國ノ音韻ニ協ハザル丁上ニ擧タル諸證明白ナレバサラニ疑フベキニアラズ其ウヘカノ慈覺ノ於ニ改シヲ思ヘバ悉曇ノ方ニテモあ行ナルハ眞ノ梵音ハおナルヲ烏等ノ字ヲ以テ譯セシハ漢字音ノ正シク當ラザル丁明ラケキ物ヲヤ

字音假字總論

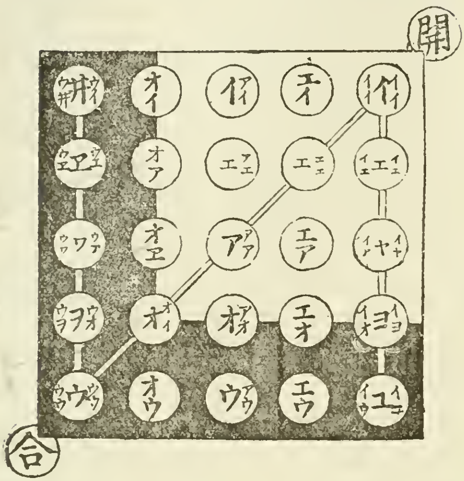
契沖又和字正濫要畧ヲ著セル中ニイサヽカ字音ノ假字ニ云及セルコトアリ其説ニ反切ノ上ノ字ヲ以テいゐえゑをお等ヲ分ツベシト云ルハ誤也假字ハ反切ニテ分ルヽ丁ニ非ズ此レハ或人モ既ニ難破セリ契沖ハカバカリノコトヲ考ヘ誤ルベキ人ニハアラザルヲ是ハ深ク心ヲ用ズシテタヾ一トワタリノ理ヲ以テフト定メタル説ト見エテ其證例ニアゲタル字ノ反切既ニソノ假字ニ合ハズマシテ其餘ヲヤ【强テ反切ヲ以テ分ントナラバ韻字ニヨルベシ韻字トハ下ノ字ヲ云喉音ノ三行ハ韻字ニテ分ルヽ所由ハナキニシモアラズ】○或人喉音假名三異辨ト云モノヲ著シテカノ要畧ヲ破シタルハマコトニイハレタリ然シテ其説ニ云ク凡字音ノ假名ニいゐをおえゑノ三異アレ圧其究竟ヲ尋ルニ全ク違例アルニ非ズマタ是ヲ韻書ニ考ルニ憑据スルトコロ無シ然レバタヾ何ノ故ト云丁モナク古來傳來タル慣例(クセ)ナルベシクセニハ法則ノアルベキ謂ナシ云々又云日本ノ字音ノ假名唐ノ反切ニ符合スベキ理ナシ各別ノ丁也イカニトイフニ唐ノ反切ハ三十六字ノ所屬ニテ切字ヲ定ム喉音ニ影曉匣喩ノ四母アリ各々同シカラズ日本ノ音ノ假名ニハ喉音あわやノ三ツノミアリ又其中ニいうえノ三ツハ兩屬ノ假名也サテ又あわやノ三喉音ニテ唐ノ影曉匣喩ノ四喉音ヲヨムニ似タルモノハ影喩ノミニテ匣曉二ツハあわやニ係ラズコレラヲ以テ唐ノ反切ト日本ノ字音ノ假名ト各別ノコトニテ牽强スベカラザル丁ヲ知ベシ【以上】今按此説理アルニ似タレ圧非ナリ是レタヾ影曉匣喩トあやわトヲ引合スルニ合ヒ難キ丁ヲノミ思ヒテ唐ノ反切ト此方ノ字音ノ假字トハ各別ノ丁ト謂ヒ韻書ニ憑据スルトコロナシト云ル是タヾ字母ニノミ泥ミテ其他ヲ考ヘザルモノ也あやわノ異ハ字母ニ係ル丁ニハ非ズ別ニ所由アルコトナルヲ何ゾ深ク尋ネザルヤ今ヨク考ルニ古書ノ字音ノ假字悉ク法則アリテ韻書ノ旨ト契合スルコトナルヲ何ノ故モナクタヾ古ヘヨリ傳來タルクセ也トハイカナル妄説ゾヤ凡テ近キコロノ學者ニハ此説ノ如キ見解ナル者多シ心スベキコトゾカシ　○或

説ニ字音ノ假字ハ連用ノ音便ニ從テ轉スルヿ多シ一例ニ定ムベカラズト云モ非ナリ凡テ御國言ニモ字音ニモ音便ニテ假字ノカハル例アルコトナシ此ノ外モ俗書ドモニ云ルコト𪜈アレド凡テ論ズルニモ足ラズ　○京師ノ韻學僧文雄ノ説ニ云ク喉音いゐえゑをおノ假字古ヘ何ニ依ルト云ヿ知ガタシトイヘ𪜈今ヲ以テ准擬スルニ以伊巳夷意異等ハ悉ク韻鏡ノ開轉ノ字也爲韋委威圍遺謂位等ハ悉ク合轉ノ字也又盈衣叡要曳愛等ハ悉ク開轉ノ字也惠慧衞會囘畫穢等ハ悉ク合轉ノ字ニシテ一ツモ混雜セルヿ無シ然レバいえハ開口音ニ用ヒゐゑハ合口音ニ用フベキコトヽゾ思フサテ此格ヲ以テ計レバをハ開おハ合ナルベキニをお共ニ合口音ニ屬シテ遠越弘袁乎等モ又於隱飫等モ共ニ皆合轉ノ字ニシテ差別アルヿナシ返テおノ音ニ用ル憶意等ノ字開音也然レバをおハ開合ニ依ラズ別ニ所由アリテ分タリト見ユ【以上】今按此ノ説甚タ善シマコトニ畢竟ハ開合ニテ分ルヽヿ也然レ𪜈未タ其ノ然ル所以ノ本ヲ明ラメ得ザル故ニ此説モナホ盡サヾルトコロ多ク且おをノ所屬ノ錯レルヿヲ悟ラザルユヱニ此(コヽ)ニ至テ亦窮セリ既ニいゐえゑハ開合ニテ分レタルニおをノミ其格ヲ離レテ別ニ所由アルベキ理ナキモノヲヤ又此三對ハ畢竟ハ開合ノ音ニテ分ルヽコトニハアレ𪜈ヒタスラニ韻鏡ノ開轉合轉ニノミ從ヒテハナホ違フヿ多シ是レニハ種々ノ子細アルヿ也委ク次ニ論スルガ如シ　○或説ニ云本邦ノ古ヘノ言語ノ音ニハいゐをおえゑ等差別アリテ必混スマジキ道理モアルベケレ𪜈字音ニハ假名ノ沙汰無用タルベシイカニトナレバ本ヨリ諸ノ韻書ニあやわ三行ノ差別トテハカツテ無キコトナレバ彼レト此レトアヒカナフベキ理モナク又所詮其假名ハイカヤウニ書テモ苦シカラヌヿナレバトカク論スルハ無益ノコト也【以上】今辨シテ云抑古ヘ御國言ノ音ニ漢字ノ音ヲ借リテ書ル是ヲ假字(カナ)ト云【古事記日本紀等ニ歌ナドヲ書ルモノ是ナリ】サテ其言ノ音ニ古ヘハいゐえゑおをノ差別アリシ故ニ彼ノ借リ用タル漢字ニモ此差別アリテ【いゐえゑおをナドハ本ヨリ分レタル御國ノ音ニテ假字ハ其音ニアテヽ定メタルモノ也然ルヲ後世ノ人ノ心ニハ假字ニヨリテ分レタルモノト思ヘルハヒガコト也】一ツモ混雜セルヿナク甚嚴密ニシテ天暦以往ノ古書ハイヅレモ符ヲ合セタルガ如シ是ヲ以テ觀レバソノカミ必ヨルトコロアリテ定メシヿ疑ナシ然レバ今トテモ一往考テ韻書ニ無キヿト云テ是ヲ廢スベキニ非ズ又古ヘ既ニ假字ニ用タル字差別アリテ一モ混セザリシウヘハ凡テノ字音ニ附ベキ假字モ又後俗ニマカセテ濫(ミダリ)ニスベキニアラズカ

リニモ古ヘヲ思ハン人ハ必ワキマヘ正スベキワザ也ナホイハヾ假字ハ即其字ノ音註反切ノ如クナル物ナレバ愼マズハアルベカラズ假令あうノ假字ヲ施スベキ字ニ誤テをうノ假字ヲ施ストキハ安闇等ヲをんトシ惡握等ヲをくトスルモ同ジコト也カクテモ或人ハナホ可也トセンカ　○御國ニ傳ハルトコロノ漢呉音ハ共ニ古ヘマノアタリ彼國ノ人ノ口ニ呼フ聲ヲ聞テソレヲ此方ノ音ニ協ヘテ定メシモノナレバ【此事委クハ三音考ニ云】喉音三行ノ假字モ彼人ノ呼フ聲ニツキテ分チシモノ也但シ彼國ニハモトヨリ此三行ノ差別ヲ立ザレバ其ノ呼フ人ハミヅカラ是ヲオボエズトイヘ𪜈此方ノ人ノ聞クトコロニ其差別ハアリシ也【タトヘバ御國言ノ音ニハ平上去入ノ四聲ヲ論スルヿナキユヱニイカナルヲ平聲イカナルヲ上去聲𪜈ミヅカラ覺ユルヿナケレ𪜈若シ漢人コレヲ聞バカナラズソノ聞トコロニハオノヅカラ四聲ノ分チアルベキガゴトシ】然レバ古ヘノ假字ハ全ク韻書ニ依ルヿナク又其三行ノ異ハ韻書ノ謂ザルトコロナレ𪜈本ト彼ノ眞ノ口聲ニヨリテ定メタルモノナレバオノヅカラ是レ唐以前ノ一家ノ韻書ノ如キコトアリ【是故ニ今返テ御國ノ假字ヅカヒヲ以テ彼國ノ後世ノ韻書ノ訛謬ヲ正スベキモノアリ委ク三音考ニ論ス】故ニ今諸ノ韻書ト照シ撿ルニ一往ハ合ヒガタキニ似タレ𪜈ヨク是ヲ考ルニ開合ヲ以テ分ツトキハ悉ク符合スルモノ也【但シ宋末以後ノ韻書ニハ誤多キユヱニ合ハザルコトオホシ】ソモ〱古ヘノ假字サラニ開合ヲ以テ分ケタルモノニハ非レ𪜈自然ト開合ニテ分ルヽ理アリマヅ開口音ハオノヅカラ輕ク合口音ハオノヅカラ重シ【此輕重ハ韻書ニ云トコロノ者ニ非ズ御國ノ音ノ輕重ヲ以テ云也音韻日月燈ニ開轉所レ屬字其聲單而闢故爲二之開一也合轉所レ屬字其聲駢而渾故爲二之合一也ト云ル此ノ言御國ノ音ノ輕重ニヨクアタレリ】故ニ御國ノ輕キ音ノ假字ニ用タルハ皆開口音ノ字。重キ音ノ假字ニ用タルハミナ合口音ノ字ナリサレハ今モ此格ヲ以テ御國ノ音ノ輕重ト字音ノ開合トヲ引合セテ諸ノ字音ノ假字ヲ定ムベシ其御國ノ音ノ輕重ハ上ニ出セル輕重等第ノ圖ヲ以テ考ヘ知ベク【ナホ下ニ委ク云】字音ノ開合ハ韻鏡ニ依テ定ムベシ【韻書多シトイヘ𪜈簡ニシテシカモ詳ニ且サトリヤスキコト韻鏡ニ及モノナシ此書ハ唐ノ末ニイデキタルベシト或人ノ云ルマコトニサモアルベシ然レバ此方ニ古ヘ假字ヲ定メシ時ヨリハ後ノ書ナレ𪜈イサヽカモ古ヘノ音韻ヲ誤レルヿナケレバ全クヨリドコロトスルニ足レリ】但シ此書今ノ諸本開合異同アリテ一定セズ故ニ今是ヲ考ヘ定ムルコト如レ左第一轉ハ合也【一本

ニ開トスルハ非也】第二轉ハ合也【一本ニ開合トスルハ非也】第四轉ハ開也【開合トスルハ非也】第八轉ハ開也【一本ニ合トスルハ非也】第十一轉ハ合也【一本ニ開トスルハ非也】第十二轉ハ合也【一本ニ開トスルハ非也】第廿六轉ハ開也【一本ニ合トスルハ非也】第卅八轉ハ開也【或ハ開合トシ或ハ合トスル本ミナ非ナリ】第卅九第四十第四十一轉ハ皆開也【皆合トスル本ハ非ナリ】其餘ハ諸本同シサテ右ノ如ク開合タガヒニ誤レル中ニ開ヲ誤リテ合トセルガ多キハ後世ノ韻書ニ依テ改メタルモノ也【隋ノ陸法言ガ切韻ノ序ニ古今聲調既ニ自有レ別諸家取捨亦復不レ同呉楚則時傷ニ輕淺ニ燕趙則多渉ニ重濁ニト云ルガ如ク大氏北方ノ音ハ重シ然シテ漢土後世ニハ北人多ク入リ雜レル故ニソレニウツリテ凡テノ人ノ音聲次第ニ重濁ニナレルニヨリテ古ヘノ開口音ノイツトナク合口音ニ變ジタルガ多キヲ後世ノ韻書ハタヾ當時ノ音ニヨリテ定メタルモノナル故ニ開合モナニモ古ヘノ音韻トタガヘルヿ多シ然ルヲ世ノ韻學者此義ヲワキマヘズタヾ其呼法ヲ論ジタルヿノ精密ナルニマヨヒテ是ヲ信ジ其書ヲ證トシテミダリニ韻鏡ノ開合ヲ改メタルハ返リテヒガコトナリケリ】サテ又心得ベキコトアリ漢音ト呉音トニテ開合ノカハルヿアルヲ【有右由久丘流等ノ字漢音いうきうりうハ開音。うゆくるハ合音ナルガゴトシ】韻鏡等ハタヾ漢音ヲ以テ定メタルモノニシテ呉音ニハカヽハラズ然ルニ御國ニハ漢呉ヲ並べ用ラルル中ニ古ヘノ假字ハ多クハ呉音ヲ用タル故ニ漢呉ノ異ニテ韻鏡ノ開合ト合ハザルヿモマヽアル也【是ハ一一其字ノ下ニコトワルベシ】又實ハ拗音ナルヲ直音ニ轉ジタルニテ開合ノ變ルコトモ又多シ【此事ハ下ニ委ク辨ス】如レ此種々ノ子細アル故ニタヾ韻鏡ノウヘバカリニテモ濟ガタシ故ニ今是ヲ圖ニアラハシテ詳ニ字音ノ開合ヲ決ス　○御國ノ音ノ輕重ノ位ニ任セテ開ト合ト等分ニスレ

字音開合指掌圖



バ正シク此圖ノ如クニナル也上ノ輕重等第ノ圖ト考ヘ合スベシ

○右圖中白位ニアルモノ是レ開音。黑位ニアルモノ是レ合音。白黑ノ交際ニアルモノハ開合ニ渉ル音也　○凡テ二十五音等分シテ開音九ツ合音九ツ開合音七ツ也　○あ行ノいえトや行ノいえト同字ナルモ共ニ合音ナル故ナリ是ニテモ假字ハ開合ニテ分ツベキヿヲ知ベシ　○いゐえゑおをノ三對ノ中ニいトゐトハ第一行ト第五行トニ在テ中ニ三行ヲヘダテえトゑトハ第二行ト第五行トニ在テ中ニ二行ヲヘダテヽ共ニ其位相遠キ故ニ此二對ハ分レヤスシおトをトハ第四行ト第五行トニナラビ在テ其音相近クソノウヘおモ全開ニ非ス開合ニ渉ルユヱニ此一對殊ニマギレ易キ所由右ノ圖ニテ明ラケシ

右ノ圖ト韻鏡ノ開合トヲ引合セテ字音ノ假字ヲ定ムベシ【其中ニ合ハザルモノアルハ上ニ云ル子細ドモアル故也】サテ此圖ハタヾ喉音ノミヲ著ハストイヘ尼餘ノ牙齒舌脣半舌齒ノ諸音モ皆此例ニ從フコト【きやしや等ハいやニ同クきよしよ等ハいよニ同シクきゆしゆ等ハいゆニ同クくゐするゐ等ハうゐニ同シクくわすわ等はうわに同シキガゴトシ】下ニ載ル三會ノ圖ノ如シ就テ考ベシサテ右ノ圖ヲ以テいゐえゑおをノ六音三對マサシク開合ニテ分ルヽ所以ヲ曉悟スベシ又ソノ中ニおノ一音開合ニワタルヿ下ノ於飫等ノ字ノ下ニ辨ズルト合セ考ベシ

○字音假字三會圖說

上ノ三行分生ノ圖及開合ノ圖等ニ准ゼバ此ニモ五會ノ圖アルベキヲ其二ツヲ欠テ三會ナルハイカニト云ニえおノ二ツニヨル拗音ハ字音ニ用ナケレバ也其故ハえハ輕中ノ重おハ重中ノ輕ナルユヱニおハ重中ノ重ノうニ攝シえハ輕中ノ輕ノいニ攝シテ別ニ此二音ニ屬スル字音ハ無キユヱ也悉曇家ニモえハいニおハうニ攝スルヿアリ自然ニ符合セリ又連聲ノ便ニヨリテ諸ノ字ノいノ韻ハえト聞エうノ韻ハおトキコユルヿ多シ京師ハけえし榮華ハえヽぐわト聞エ東ハとお公ハこおトキコユルタグヒ也コレラモえハいニ親シクおハうニ親シキユヱナリ

第一會

直音（ア）

	ア 開	イ 開	ウ 合	エ 開	オ 合開
喉音	ア アイ アウ 入アム	イ イウ 入イム	ウ ウウ 入ウム	エ エイ エウ 入エム	オ オウ 入オム
	カ カイ カウ 入カム	キ キウ 入キム	ク クウ 入クム	ケ ケイ ケウ 入ケム	コ コウ 入コム
	サ サイ サウ 入サム	シ シウ 入シム	ス スウ 入スム	セ セイ セウ 入セム	ソ ソウ 入ソム
	タ タイ タウ 入タム	チ チウ 入チム	ツ ツウ 入ツム	テ テイ テウ 入テム	ト トウ 入トム
	ナ ナイ ナウ 入ナム	ニ ニウ 入ニム	ヌ ヌウ 入ヌム	子 子イ 子ウ 入子ム	ノ ノウ 入ノム
	ハ ハイ ハウ 入ハム	ヒ ヒウ 入ヒム	フ フウ 入フム	ヘ ヘイ ヘウ 入ヘム	ホ ホウ 入ホム
	マ マイ マウ 入マム	ミ ミウ 入ミム	ム ムウ 入ムム	メ メイ メウ 入メム	モ モウ 入モム
拗音	㊥ヤ	○イ	○ユ	○エ	○ヨ
	ラ ライ ラウ 入ラム	リ リウ 入リム	ル ルウ 入ルム	レ レイ レウ 入レム	ロ ロウ 入ロム
拗音・喉音	○ワ	○井	○ウ	○ヱ	○ヲ

第二會

拗音（イ）

	ヤ 開	イ 開	ユ 合	エ 開	ヨ 合開
喉音	○イヤ	○イイ	○イユ	○イエ	○イヨ
	キヤ キヤウ 入	○キイ	キユ キユウ 入キユム	○キエ	キヨ キヨウ 入
	シヤ シヤウ 入	○シイ	シユ シユウ 入シユム	○シエ	シヨ シヨウ 入
	チヤ チヤウ 入	○チイ	チユ チユウ 入チユム	○チエ	チヨ チヨウ 入
	ニヤ ニヤウ 入	○ニイ	ニユ ニユウ 入ニユム	○ニエ	ニヨ ニヨウ 入
	ヒヤ ヒヤウ 入	○ヒイ	ヒユ ヒユウ 入ヒユム	○ヒエ	ヒヨ ヒヨウ 入
	ミヤ ミヤウ 入	○ミイ	ミユ ミユウ 入ミユム	○ミエ	ミヨ ミヨウ 入
喉音	イヤ イヤウ 入	○イイ	イユ イユウ 入イユム	○イエ	イヨ イヨウ 入
	リヤ リヤウ 入	○リイ	リユ リユウ 入リユム	○リエ	リヨ リヨウ 入
	○井ヤ	○井イ	○井ユ	○井エ	○井ヨ
		直音之長		混于直音	

第三會

拗音（ウ）

	ワ 合	井 合	ウ 合	ヱ 合	ヲ 合
喉音	○ウワ	○ウ井	○ウウ	○ウヱ	○ウヲ
	クワ クワウ クワイ 入クワム	ク井 ク井ウ 入ク井ム	○クウ	クヱ クヱウ クヱイ 入クヱム	クヲ クヲウ 入クヲム
	スワ スワウ スワイ 入スワム	ス井 ス井ウ 入ス井ム	○スウ	スヱ スヱウ スヱイ 入スヱム	スヲ スヲウ 入スヲム
	ツワ ツワウ ツワイ 入ツワム	ツ井 ツ井ウ 入ツ井ム	○ツウ	ツヱ ツヱウ ツヱイ 入ツヱム	ツヲ ツヲウ 入ツヲム
	ヌワ ヌワウ ヌワイ 入ヌワム	ヌ井 ヌ井ウ 入ヌ井ム	○ヌウ	ヌヱ ヌヱウ ヌヱイ 入ヌヱム	ヌヲ ヌヲウ ヌヲム
	フワ フワウ フワイ 入フワム	フ井 フ井ム 入フ井ム	○フウ	フヱ フヱウ フヱイ 入フヱム	フヲ フヲウ 入フヲ
	ムワ ムワウ ムワイ 入ムワム	ム井 ム井ウ 入ム井ム	○ムウ	ムヱ ムヱウ ムヱイ 入ムヱム	ムヲ ムヲウ 入ムヲム
喉音	○ユワ	○ユ井	○ユウ	○ユヱ	○ユヲ
	ルワ ルワウ ルワイ 入ルワム	ル井 ル井ウ 入ル井ム	○ルウ	ルヱ ルヱウ ルヱイ 入ルヱム	ルヲ ルヲウ 入ルヲム
	ウワ ウワウ ウワイ 入ウワ	ウ井 ウ井ウ 入ウ井ム	○ウウ	ウヱ ウヱウ ウヱイ 入ウヱム	ウヲ ウヲウ 入ウヲム
			直音之長		

右三會圖上ノ三行分生ノ圖及ヒ開合指掌ノ圖ト相照シテ考ベシサテ第二會ノ上ニ「イ」第三會ノ上ニ「ウ」ト標スルハやいゆえよニ屬スル諸ノ拗音ハ各上ニきしちにひみいりノ音ヲ帶テ是皆いニ屬スル音。わゐうゑをニ屬スル諸ノ拗音ハ各上ニくすつぬふむるうノ音ヲ帶テ是皆うニ屬スル音ナレバナリ サテ第一會ハ直音ナレバ此例ニ非ストイヘ圧上ノ分生ノ圖ト引合セテ考ルニ便リアラシメン爲ニ是レモシバラク「ア」ト標セリ

右三會ノ字音都テ九十六【圏(マルノ)中ナル者ヲ除ク】又各音ノ左右ニ細書スル者モ皆コレ字音ニシテ【入ト書ルハ入聲ノ音也タトヘバ第一會あノ音ノ下ナルハあくあつあふ等えノ音ノ下ナルハえきえつ等ナリ第二第三會モ是レニ准ヘテ心得ベシ】天下ノ漢呉音ヲ括盡セリ○第一會ノ諸音ハあいうえおニ屬シテ皆直音也サテ其中ニ不雅ナル者ハ通音ニ轉ジ呼フ例也不ハ甫鳩(ホキウ)ノ反婦ハ房久ノ反ニテ共ニ漢音ハひうナルヲふト呼ヒ問ハ亡運ノ反呉音むんナルヲもんト呼ヒ嫩ハ奴困ノ反呉音のんナルヲなんト呼ヒ腹ハ弗鞠ノ反ひくナルヲふくト呼フ此類ナホ多シ コレラヲ反切ニカナハズトテ訛也ト思フハ返テ古ヘヲ知ザル者ゾ 凡テ鄙俚ナル音ハ嫌ヒテ故(コトサラ)ニ轉ジテ定メシモノ也但シ開合ヲ分ツニハ凡テ轉ジタル音ニハヨラス反切ヲ考テ本音ニヨルベシ右ノ不婦等ノ字ノ如キモふハ合音ナレ圧本音ノひうハ開ナルユヱニ韻鏡開轉ニ收セリ第二第三會ノ拗音モ是レニ准ヘテ心得ベシ○第二會ノ諸音ハやいゆえよニ屬シテミナ拗音也凡テ拗音ハモト御國ノ音ニ非ズシテ多クハ不雅ナルガ故ニ【異國ニテハ雅トスルモ御國ニテハ不雅也故ニ古言ニ拗音アルコトナシ】直音ニ轉ジ呼ブ者多シ第二會ノ中ノ音ニテ其例ヲ少々イハヾ俱ノ字ハ擧朱ノ反ニテきゆナルヲくト呼ヒ縷ハ力主ノ反りゆナルヲるト呼フ韻鏡第十二轉ノ第三等ノ諸字ミナ此例也又第一轉ノ風ノ字ハ方戎(ハウジユウノ)反ひゆうナルヲふうト呼ビ豐モ芳馮(ハウヒユウ)又敷弓(フキユウノ)反ひゆうナルヲほうト呼ブ又允尹ハ共ニ余準ノ反いゆんナルヲゐんト呼ヒ【之允ノ反准。食尹ノ反盾。思尹ノ反筍コレラニテ允尹ノ本音いゆんナル「イヨ〳〵明ケシ」】倫ハ力迍又力遵ノ反りゆんナルヲりんト呼ヒ律ハ呂䘏(チユツ)又力出ノ反りゆつナルヲりつト呼ヒ聿ハ以出ノ反いゆつナルヲいつト呼フ第十八轉ノ第三四等皆此例也【其中ニ舌音齒音ノミ本音ノマヽニ呼フ】又第二轉ノ幞ハ房玉ノ反漢音びよくナルヲぼくト呼ヒ第一轉ノ宿ハ思六又息逐ノ反ナルニしゆくノ音ナレバ【しくノ音トスルハ返テ誤ナリ】六ハ實ハりゆく逐ハちゆく也叔モ式竹ノ反ニテ

しゆくナレバ竹モ實ハちゆくナリサテ育ハ余六(ヨリスク)ノ反いゆく菊ハ居六ノ反きゆく福ハ方六ノ反ひゆく目ハ莫六ノ反びゆく也此類ナホ多シ餘モ右ノ字ドモニ准ヘテイヅレモ其韻字ト【反切ノ下ノ字ヲ韻字ト云】歸納ノ音トヲ相照シテ本ト拗音ナルヲ直音ニ轉ジタルヿヲ悟ルベシ又漢音ト呉音トニテ拗直ノ轉換スルヿ多シ香ノ字漢きやう呉かう行ノ字漢かう呉ぎやうノ類也又常ニハ拗音ノマヽニ呼フ字ヲ歌書ニテ直音ニ云ル者多シ精進ヲさうじ脚病ヲかくびやう病者ヲばうざ修行者ヲすぎやうざ受領ヲずらう宿世ヲすくせ從者ヲずさ大咒ヲだいず大乘ヲだいぞう祇承ヲしぞう誦スルヲずスルト云タグヒ也【○或問云ク上ノ三行分生ノ圖ニヨラバやハ即いあ。ゆハ即いう。よハ即いおナレバ上ニ又いヲ加ヘテいやいゆいよトハ書ベカラズ若シいヲ加ヘバいあいういおトコソ書クベキニ第二會圖ニいやいゆいよトアルハイカガ答云マコトニ然リ故ニいやいゆいよノ音ハイヅレモいヲ省キテタヾやゆよトノミモ書也但シ此類音イヅレモきやしや等ト書テきあしあ等トハカヽスきゆしゆ等ト書テきうしう等トハ書ズきよしよ等トカキテきおしお等トハカヽザル例ニヨルニ喉音モいやいゆいよト書ザルコトアタハズわゐうゑをノ拗音モ是ニ准ヘテサトルベシ】○第三會圖ノ諸音ハわゐうゑをニ屬シテ是モ皆拗音也然ルニ此圖中ノ音ハわ行【圖ニ就テイフ下放(ナラヘ)レ之(ニ)】ノ第二位くわくわうくわいくわんくわつくわく。ゐ行ノすゐつゐゐ【又藥名ノ茴香ヲうゐきやうト呼ビ煨ヲうゐスルト云是モ同例ノ拗音也】ワヅカニ是レラノミ本音ノマヽニ呼テ餘ハ悉ク直音ニ轉ゼリ然ルヲ世ニ是ヲ皆本ヨリノ直音ト心得テ實ハ拗音ナルヿヲバ知ラズ【万葉ニ水ノ字ヲしノ假字ニ用タルコレ拗ヲ直ニ轉シタル例證ナリ】ソモ〳〵かノ外ニくわノ音アルカラハさノ外ニすわ。たノ外ニつわ。なノ外ニぬわ。はノ外ニふわ。まノ外ニむわ。らノ外ニるわノ音モアルベク又しノ外ニすゐ。ちノ外ニつゐ。りノ外ニるゐノ音アルカラハきノ外ニくゐ。にノ外ニぬゐ。ひノ外ニふゐ。みノ外ニむゐノ音モアルベキヿ圖ニテ悟ルベシ又次ノゑ行を行モ右ノ格也サレバコソ常ニハきノ音ニ呼フ字ニくゐノ假字ヲツケ【此例下ニ委クイフ】又歌物語ナドニ法華經ヲほくゑきやう變化ヲへんぐゑ源氏ヲぐゑんじ劵屬ヲくゑんぞく花足ヲくゑそくナドヽアルモ。きノ音けノ音ミダリニ拗音ニ呼ビナセルニハ非ズコレラミナ合口音ノ字ニテ本ヨリ此圖中ノ拗音ナルガタマ〳〵本音ノマヽニ云ルモノ也【直音ヲタヾ何トナク拗音ニ云ヒナセルモノト思フハ非也又拗

音ヲ雅直音ヲ俗ト心得ルモ非也御國ノ古言ノ音ハミナ直ナルガ故ニ古ヘハ直ヲ雅トシ拗ヲ俗トス故ニ拗ヲ直ニ轉ゼル例ノミコソ多ケレ直ヲ拗ニ轉ゼル例ハアルヿナシ凡テ韻學者流ニ直音拗音ヲ云モノミナ古ヘヲ知ラズ濫(ミダ)リナルコトノミナリ】ナホ此圖中ノ拗音ヲ直音ニ轉ジタル證ヲ少々云ハバ韻鏡第廿八轉平聲牙音ニ戈科訛(クワクワクワ)喉音ニ和(クワ)アレバ其例ニテ其横ノ唇音ノ波ハ博禾ノ反頗ハ滂禾ノ反ニテ共ニふわノ音也舌音ノ陁(タ)ハ丁戈ノ反詫(タ)ハ土禾ノ反ニテ共ニつわ也齒音ノ侳ハ子戈ノ反莎ハ蘇禾ノ反ニテ共ニすわ也喉音ノ倭ハ烏禾ノ反ニテうわ也半舌齒音ノ贏(ラ)ハ落戈ノ反ニテるわ也サテ其上聲去聲モ同シ格ニテ跛ハ布火ノ反ニテふわ也嚒ハ亡果ノ反ニテぶわむわ也坐ハ徂果又疾臥ノ反ニテすわ也播ハ補過ノ反破ハ普過ノ反ニテ共ニふわ也座ハ徂臥ノ反ニテすわ也又第卅轉ノ諸字モ此例也サテ第卅二轉ハ光荒黃ナドノ例ニテ其横ノ傍ハ歩光ノ反ニテふわう也汪ハ烏光ノ反ニテうわう也又第十四轉ノ杯ハ布回ノ反ニテふわい頽ハ杜回ノ反ニテつわい崔ハ才回ノ反、摧ハ在回ノ反。罪ハ祚隗ノ反ニテミナすわいナリ雷ハ力回ノ反ニテるわい也【故ニ胡雷(コルワイ)ノ反廻トナレリ】隈ハ烏恢ノ反ニテうわい也其餘ノ字モ准ヘ知ベシ第十六轉モ此例也又第廿四轉ノ盤ハ薄官ノ反ニテふわん端ハ多官又都丸ノ反ニテつわん暖ハ乃管ノ反ニテ吳音ぬわん酸ハ素官ノ反ニテすわん椀ハ烏管ノ反ニテうわん卵ハ盧管ノ反ニテるわんナリ又潑ハ普活ノ反ニテふわつ奪ハ徒活ノ反ニテづわつ撮ハ倉括ノ反ニテすわつ捋ハ郎活ノ反ニテるわつナリ第卅六轉ノ趚(サク)ハ查獲ノ反摵(サク)ハ砂獲ノ反ニテ共ニすわくナリ【以上ハわ行ノ音也】次ニ第五轉腄縋吹垂髓睡羸等ノ例ニテ陂ハ彼爲ノ反彼ハ補靡反ニテふゐ嬀ハ居爲ノ反規ハ居隋ノ反僞ハ危睡ノ反ニテ共ニくゐナリサテ是爲ノ反ハ垂(スヰ)旬爲ノ反ハ隨(ズヰ)力爲ノ反ハ羸(ルヰ)息委ノ反ハ髓(ズヰ)力委ノ反ハ累(ルヰ)ナレバ爲委ハ共ニうゐ也第七轉第十轉モ此例也サテくゐうすゐうつゐうぬゐうふゐうむゐっるゐっうゐうノ音ハ本音ノマヽニ呼ッ字一ッモ無レバ考フベキ由ナシトイヘドモ若シハ第一轉ノひゆうちゆう等ノ音本トコレニ近キカうゐんくゐん等モ考ヘガタシ是ハ第十八轉ノちゆんきゆんしゆんいゆんりゆん等ノ音近キカサテうゐくくゐく等ハ是又第一轉ノひゆくちゆくきゆくしゆくいゆくりゆく等近クうゐつくゐつ等は是又第十八轉ノちゆつきゆつしゆついゆつりゆつ等近キ歟猶考ベシ【以上ゐ行ノ音ナリ】次ニ第卅轉花華化等ノ字ノ吳音ヲくゑト云ル例アル如ク此轉ノ吳音ハ凡テつゑくゑすゑうゑるゑナリ第十四第十六轉ノ吳音モ同ジサテうゑうくゑう

等ハ考ヘガタシト云ヘ圧第卅四第卅六轉ノ第三等四等ノ呉音コレナルベシうゐいくゐい等ハ第十四轉ノ第三等第四等ノ諸字コレ也うゐんくゐん等ハ第二十二轉ノ源ノ字【音元】第廿四轉ノ眷ノ字ヲくゐんト云ル例ニテ此二轉ノ第三第四等ノ諸字コレナリ又其入聲即ふゐつつゐつくゐつすゐつうゐつるゐつぬゐつナリ【以上ゐ行ノ音ナリ】次ニ第十二轉ノ第一等ノ諸字ふをむをつをくをすをうをるをノ音也サテ第四十三轉ノ泓ハうをう肱薨弘ハくをう也第十八轉ノ第一等ト第廿二轉ノ第三等ノ呉音トコレうをんくをん等ナリ【但シ第廿二轉牙音ノ呉音ハ皆くわんト轉ジ呼フサレ圧元ハ愚袁ノ反願ハ魚怨ノ反ナルヲ以テ元願ナドモ本音ハぐをんナルコトヲ知ルベシ】うをつくをつ等ハ第十八轉ノ第一等ト【入聲】第廿二轉ノ第三等【入聲】ノ呉音ト是ナリ【コレモ第廿二轉ノ牙音ハくわちト轉シ呼ベ圧越ノ呉音うをちナルヲ以テ實ハくをちナルコトヲサトルベキナリ】うをくくをく等ハ第四十三轉ノ第一等【入聲】是ナリ【以上を行ノ音ナリ】右ゐ行を行ニ屬スル諸ノ拗音ハ本音ノマヽニ呼フモノ無レバ是ヲ證スベキ由ナキニ似タレ圧既ニわ行ゐ行ノ諸音ノ例アレハソレニ准ジテ此二行ノ諸音モ必ス實ハ右ノ如クナルベキ理リ疑ヒナシサテ上件諸ノ拗音多クハ直音ニ轉ジ呼フ故ニカノ開合ノ圖ト韻鏡ノ開合ト合ハザル者多キガ如クナレ圧右ノ如ク本音ニ返ヘシテコレヲ考ルトキハ一ツモ合ハザル者無シ

凡例

○假字ヅカヒ片假字ノイハ平假字ノいナリ。ヰハゐナリ。エハええナリ。ヱハゑナリ。オハおおナリ。ヲハををナリ是ハ童蒙ノタメニ云

○各音ノ下ニ圍中ニ書スルハ其下ニ擧ル諸字ノ韻也但シ平聲ノ韻ヲ標ノ上聲去聲ノ字ヲモ其下ニ攝ス音韻ヲ論ズル處モ同ジ是レ四聲ノ差別ハ假字ヅカヒニ用ナキ故ナリ

○假字ノマギルヽコト無キ音ノ字ハ擧ルヿナシ又マギルヽモ悉クハ擧ガタケレバタヾ日用ノ近キ字ノミヲ出ス餘ハ同韻ノ例ヲ以テモ推テ知ルベク又大氐ハ同傍(オナジツクリ)ナドノ例ニテモ違ハズ飴怡貽(イイイ)同ジク惟帷唯(ヰヰヰ)同ジキガゴトシ

○漢ト云ハ漢音呉ト云ハ呉音ナリ

○清音濁音ハ一ッニ雜ヘテ擧ク假字ニマギレナケレバ也假字ノマギルヽ濁音ノ字ハ別ニ卷末ニ出セリ

○音ヲ論ズルニ漢土ノ韻書ヲ引ズシテ毎(ツネ)ニ御國ノ古書ヲノミ引テ是ヲ證スルユヱハ此書ハモトヨリ音ヲ辨ズル書ニ非ズタダ其假字ヲ辨ズル書ナルガ假字ハ全ク御國ノ古書ニ據(ヨツ)ズハアルベカラザルガ故也

○いゐ之假字

〔い〕伊以異怡易已移夷肄【以上九字古書ニいノ假字ニ用タリ】貽飴詒倚猗姨頤圯彝醫矣意懿【以上廿二字漢呉共ニい】衣依扆【以上三字呉ハえ】

○右ノ字皆開口音ニテ韻鏡開轉ニ屬ス

〔ゐ〕爲韋位威謂渭偉委萎尉【以上十字古書ニゐノ假字ニ用タリ】惟維唯帷遺逶恚洧鮪違闈闈慰畏胃彙緯葦

○右ノ字皆合口音ニテ韻鏡合轉ニ屬ス【一本ニ帷ノ字ヲ第六開轉ニ載タルハ非ナリ】

〔いう〕〔尤〕尤郵幽憂優田油柚游遊猶猷攸悠酉卣誘有宥囿又友右祐【皆漢ナリ呉ハう或ハいゆ也】○幼字モいうノ音ナルベケレドモ常ニえうト呼フ】

○右開音ニテ開轉ニ屬ス

〔いゆう〕〔ゆう〕同〔東〕雄熊融肜【以上漢也呉ハいゆカラナルベシ雄ハ常ニ呉をうト呼フナリ】

〔鍾〕用勇邕【以上呉也漢ハいよう】〔遇〕裕【此字ハいゆノ音ナレドモ常ニいゆうト引テ呼】

○右合音ニテ合轉ニ屬ス但シいやいゆいよノ音ハ開合ニカヽハラズ皆いノ假字ナル例也【上ノ圖ニテ考ベシ】○此音いヲ省テゆうト書ベシゆハ即いゆナレバ也

〔いゆ〕〔ゆ〕同〔尤〕由油柚游遊猶猷攸悠酉誘【以上呉也漢ハいう】

〔虞〕愈逾喩癒庾臾裕

○右合音也虞ノ韻ノ者合轉ニ屬ス尤ノ韻ノ者開轉ニ屬スルハ漢音ニヨルガ故也○此音ノ中ニ尤ノ韻ノ者ハいゆうゆうト引テ書クモアシカラズ虞韻ノ者ハ引ベカラズサレド常ニ引テ呼ブ字モアリ

〔いふ〕【入聲】〔緝〕邑挹揖熠○右開音ニテ開轉ニ屬セリ

○日本紀ニ出雲ノ言屋社(イフヤノ)トアルヲ三代實錄ニ揖屋神(イフヤノ)延喜式ニ揖夜神社(イフヤノ)トカキ又和名抄ニ播磨ノ郡名揖保ハ伊比保(イヒボ)薩摩ノ郡

名揖宿ハ以夫須岐遠江ノ郷名邑代ハ伊比之呂ナドアル皆いノ假字ヨクカナヘリ

〇凡テ入聲ノ韻ニハうヲ書ズシテふヲ書ク例也其證ハ右ノ揖夜又志摩ノ郡名万葉ニ手節トアルヲ答志トカキ近江ノ郡名甲賀ヲ天武紀ニ鹿深トカヽレ備後ノ郡名甲奴ハ加不乃讃岐ノ郷名入野ハ爾布乃也ト見エ杏葉ハ行衣布。半挿ヲ波邇佐布ト和名抄ニ見エタリ其外モ相模ノ郡名愛甲ハ阿由加波佐渡ノ郡名雑太ハ佐波太肥後ノ郡名合志ハ加波志薩摩ノ郡名給黎ハ岐比禮トアルコレラモ甲雑合給等字ノ韻ヲはひふへほニ通シ用タリ是モふヲ書ベキ證也又万葉ニタユタフト云言ニ絶塔トカキ【和名抄ニモ塔ヲ太布トアリ】サニツラフヲ雑豆臘トカキ拾遺集物ノ名ニ四十九日ヲ隱シテオノカシヽフクニ散ヌルトヨメルハ是ラモ塔ハたふ臘ハらふ十ハじふノ假字ニトレリ但シ和名抄ニ玄番寮ヲ保宇之万良比止乃豆加佐【法師客ノ意ナリ】ト見エ夾纈ヲ加宇介知トアレハうトモ書ベシト思フ人モアルベケレドモ是レハ正シキ音ニ非ズ轉ジテ云ルニテタトヘバ緑衫之袍ヲロウサウノウヘノキヌト【伊セ物語又榮華物語殿上花見卷ニ見ユ】云ルト同例也是ヲ證トメ緑ヲろうノ音トハシガタキガ如シ

〔いやう〕〔やう〕同〔陽〕陽楊揚煬瘍羊洋佯痒養樣恙央〔淸〕影瓔永【以上三字ハ呉ナリ漢ハえい】〇右開音ニテ開轉ニ屬スタダ永ノ字ハ合轉ニ屬スレドモ開音ノ例ナルコトえいノ音ノ下ニ云ガ如シ〇陽楊養等ノ字古書ニやノ假字ニ用タリ又和名抄ニ陰陽ヲ於牟夜宇トアリ

〔いよう〕〔よう〕同〔鍾〕用甬勇俑踊容蓉庸雍擁邕癰【以上漢也呉ハいゆ】〔蒸〕膺鷹蠅孕媵　〇右鍾ノ韻ノ者ハ合轉蒸ノ韻ノ者ハ開轉ニ屬ス【ようハ開合ニ渉ル音ナルガ故ナリ】〇用容庸ヲ古書ニよノ假字ニ用タリ

〔いむ〕〔眞〕因姻茵氤寅湮禋印引蚓胤〔欣〕殷慇隱【以上三字漢ナリ呉ハおむ】〔侵〕音飲陰蔭【以上四字漢ナリ呉ハおむ】淫婬〇右開音開轉〇和名抄ニ因幡ハ以奈八【古事記ナドニ稲羽ニ作レリ】遠江ノ郡名引佐ハ伊奈佐ト見エ古事記ニ印惠【崇神天皇ノ御名】トアルヲ日本紀ニ五十瓊殖トカキ播磨ノ郡名印南ハ伊奈美【万葉ナドニ稲日モ書】トアルコレラいノ假字ヨクカナヘリ

〔ゐむ〕〔諄〕尹允勻筠〔眞〕韻殞隕〔仙〕員院

○尹允勻筠四字ハ實ハいゆむノ音ナルヲ直音ニ轉ジタル者也【上ノ圖說ニ云ルガ如シ】サテ轉ジタル直音ノ假字ハ他ノ例ニヨレバいむナレ𪜈是ハ姑クゐむト定ム其故ハ元日ノ宴會ノ儀式ニ大臣宣ニ侍座一ト云コトアリ是ヲ北山抄之支尹トカヽレ江次第ニモ敷尹トカヽレタル【尹ハ假字也】是レゐんノ假字ニテ合ヘリ韻鏡ニモ合轉ニ屬セリ韻殞隕モ疑ヒアレ𪜈姑クゐんト定ム。サテ員ハ圓ト同音ニテ王權ノ反又胡拳ノ反イヅレニテモゑんノ音也又乎軍ノ反ニテくん漢うん呉ノ音ハアリ伍子胥ガ名ノトキ音運ナリ然レ𪜈ゐんノ音ハ諸韻書ニ見エズ但シ韻鏡第二十轉ノ諸字。訓ハ許運ノ反ナレ𪜈きん𪜈呼ヒ佛ハ符弗ノ反ナレ𪜈音弼トモ見エテひつト呼フ例アリ【人ノ名佛肸ナド】文ニ民眠ノ音アリ又云雲ナドヲ天台宗ナドニ昔ヨリ漢音ノトキハゐんトヨム【右イヅレモ第三ノ音ヲ第二ノ音ニ呼ブ例也】コレラヲ思フニ第二十轉ハ第十八轉ノ如ク實ハひゆんきゆんいゆん等ノ音ナルヲ直音ニ轉ジテひんきんゐん【直音ナラバいんナルベケレ𪜈是ハ第十八轉ノ勻尹ナドノ例ニテゐんトス】等ト定メ又ふんくんうん𪜈通ハシ呼ッナルベシ然レバ員モ此例ニテ音運ト通ヒテゐんノ音モアル也【運ノ字モ第二十轉ニ屬ス】韻ノ字ヲモ音運トモアルコレモうんトゐんト通スル例也サテ假字ハいニ非ズゐ也和名抄ニ伊勢ノ郡名員辨ハ爲奈倍トアリサテ院ハ王眷ノ反瑗ト同音ニテゑんナリ又胡官ノ反くわん漢わん呉ノ音ハアレ𪜈ゐんノ音ハ見エズ同韻ノ諸字ニモ第二ノ音ノ例ナシ猶考フベシゐんノ音トスルニ付テ假字ハゐナルヿ疑ヒナシ

〔いく〕〔屋〕育昱郁或澳燠 ○右諸字實ハ拗音ニテいゆくノ音ナルヲ直音ニ轉ジタルモノ也【上ノ圖說ニ云ルガ如シ】皆韻鏡合轉ノ字ナレバ假字ハゐくカ𪜈云ベケレドいゆハ凡テいノ假字ナレバ直ニ轉ジテモ同ジヿ也故ニ和名抄ニ淡路ノ鄕名育波以久波トアリ是レいナル證ナリ

〔いつ〕〔質〕乙一壹逸佚溢佾〔迄〕乙【於乞ノ反漢ナリ呉ハおつ。質ノ韻ニ屬スルトキハ於筆ノ反呉モいつ也

○右開音ニテ開轉ニ屬ス○壹岐ヲ古事記ニ伊伎ニ作リ和名抄ニ伊勢ノ郡名壹志ハ伊知之トアル假字ヨクアヘリ

〔ゐつ〕〔術〕聿鷸 ○此二字以出ノ反ニテ本音ハいゆつ也第十八合轉ニ屬ス同轉ノ勻尹等ノ例ニ任セテゐノ假字トス○凡テ

入聲つノ韻ヲ呉音ニテハちト呼フコト多シ一日（イチニチ）ナドノ如シ越前越後ノ越ナドハ漢音ナレドちト呼ヘリイヅレモ假字ハつニ准ヘテ知ベシ

〔ゐき〕〔閾〕域棫閾洫　○右合音ニテ合轉ニ屬ス　○洫ハ曉母ニ屬セレバわゐうゑをノ音ノ例ナキニ似タレド呼ノ字モ万葉ニをノ假字ニ用ヒ賄モわいト呼フコレラモ曉母ナレバ洫モゐきノ音疑フベキニアラズ

〔いや〕〔いやく〕〔いよ〕〔いよく〕是ラノ音ハ開合ニカヽハラズ凡テいノ假字也　【ゐヲ書ベカラズ】　又いヲ省キテやゃくよよくトモ書ベシ

○えゑ之假字

〔え〕哀埃愛【以上三字呉ナリ漢ハあい】　衣依【此二字モ呉也漢ハい也】　延要曳叡【以上九字古書ニえノ假字ニ用タリ】　○右ノ字皆開音ニテ韻鏡開轉ニ屬ス然ルニタヾ叡ノ一字ノミ合轉【第十六】ニテ鋭ト同音也凡テいえおハ開ゐゑをハ合ニテ古書ニ用タル諸字悉ク此格ニ合ヘルニ此一字ノミ違フベキニ非ズ因テ思フニ同轉ノ蛙ノ字モ呉音わナルベキニ常ニあト呼フ此例ニヨラバ叡モ呉音ハえい歟イカニモアレえノ假字ニ用ヒタルヿ必所以アルベシ○哀埃愛ハあいノ音ナルヲえノ假字ニ用ルユエハ古書ニ開階ヲけ代ヲて杯珮背ヲへ米賣味ヲめノ假字ニ用タルト同例也【禮ヲれ帝ヲてニ用ルモ漢音ヲ取ルニアラズ右ノ格ニテ呉音ノらいたいニヨレリ】　又常ニモ怪解（クワイカイ）ノ呉音ハけ回淮（クワイクワイ）ナドノゑナルモ此格也又＃ノ字ノ如キ五愛ノ反ニシテ呉音げナレバ愛ニえノ音アルヿ疑ヒナシ

〔ゑ〕惠【呉ナリ漢ハけい】　隈穢【二字呉ナリ漢ハわい】　囘會繪淮【四字呉ナリ漢ハくわい】　衞【以上八字古書ニゑノ假字ニ用タリ】　慧【呉ナリ漢ハけい】　壞迴【二字呉ナリ漢ハくわい】　畫【呉也漢ハくわい又くわ】　○（附）烏　○右ノ字皆合音ニテ韻鏡合轉ニ屬ス

○繪畫ヲゑト云ハ御國言ノ如クナレドモ字音也○烏帽子ノトキ烏ノ字ノ假字ゑヲ書ベシをノ通音ナレバナリ

〔えう〕〔肴〕遥搖謠瑤姚陶要葽腰曜燿耀夭妖妖〔蕭〕幺窈杳〔肴〕拗【此字呉也漢ハあう】〔尤〕幼　○右開音ニテ開轉ニ屬ス○凡

テ宵蕭ノ韻ニ屬スル諸字ノ假字ノコト入聲借音ノ字ニ依ルトキハいやうきやうしやうちやうにやうひやうみやうりやうナルベキニ似タレ𪜈古書ニ要ノ字ヲえノ假字ニ用ヒ万葉十三ニ遥ノ字ヲえるノ假字ニ用ヒ【爾太遥マタ左可遥トアリニホフハハヒフヘノ活用ナレドモ巻十九ニモ爾太要盛而トアリ】和名抄ニ簫ハ世宇乃布江芭蕉發勢乎波【古今集物ノ名同】瘭疽ハ俗云倍宇曾ト見ユ是ラニ依ルトキハえうけうせうてうねうへうめうれうノ假字也世ニモ如レ此書キナラヘルハ古ヘノ假字ニ叶ヘリ又肴ノ韻ノ諸字ノ呉音モ右ニ同ジ拾遺集物ノ名ニ豹ノ皮ヲカクシテ底ヘ鵜ノ川波ワケテ云々トヨメル是レ其證ナリ

〔えふ〕【入聲】〔葉〕葉魘饜曄燁　○右開音ニテ開轉ニ屬ス
○和名抄ニ杏葉ハ俗云行衣布トアルえノ假字ニテ叶ヘリ

〔えい〕〔霽〕翳〔祭〕曳洩裔泄。鋭睿叡〔淸〕英霙嬰纓癭盈楹嬴瀛贏影郢映。榮營瑩永詠泳頴潁【英以下廿一字漢ナリ呉ハいやう】○右翳ヨリ泄マデト英ヨリ映マデト合セテ十八字ハ開轉ニ屬ス曳ノ字古書ニえノ假字ニ用ヒ又和名抄ニ信濃ノ鄕名英多ハ衣太加賀ノ鄕名英太ハ江多トアルナド假字ヨク合ヘリサテ鋭以下三字ハ第十六合轉ニアリ然レ𪜈叡ヲ古ヘえノ假字ニ用フ因テえいト定ム【えノ音ノ下ニ云ルガゴトシ】又榮以下八字モ第卅四合轉ニアリ然レ𪜈和名抄ニ薩摩ノ郡名頴娃ハ江トアリ又其入聲ノ役ノ字モ必えノ假字ナルベキ由アリ【役ノ字ノ下ニ云】コレラニヨリテえいト定ム【凡此第卅四轉ノ第三等第四等ハ開音ノ例ナルベキ所以アルニヤ永等ノ呉音いやう頃等ノ呉音きやうナドモ合音ノ例ニハアラズ】

〔ゑい〕〔祭〕衞　○合音ニテ合轉ニ屬ス　○古書ニゑノ假字ニ用タリ

〔えむ〕〔先〕煙咽宴燕讌醼〔阮〕堰偃〔鹽〕鹽炎琰奄淹饜檐閻弇厭魘魘豔艶〔仙〕延筵演焉衍羨。沿鉛鳶捐娟緣掾兗　○右羨以上廿八字開轉ニ屬ス【鹽ノ韻ノ者十四字第卅九第四十轉ニアリ此二轉ヲ合トスル本ハ非ナリ】○延ヲ古書ニえノ假字ニ用ヒ和名抄ニ飛鴦此間ノ音比衣無ト見エタルヨク叶ヘリ又出雲ノ鄕名鹽冶。神名式ニ鹽冶ノ神社コレハ風土記ニ夜牟夜ニ作リ日本紀ニ止屋淵トアルト同處ナレバやむやナリ【後世此所ヨリ出タル人ニえんや判官ト呼フアリ訛也又神名式和名抄今ノ本ハ字ヲ誤リ訓ヲ誤レリ】又伊勢ノ郡名奄藝ハ阿武義トアルコレラモ奄鹽ヲあ行や行ノ通音ニ用タルえノ假字ニテ合ヘ

リ○沿以下八字ハ第廿二轉合ニシテ袁遠越ナド丶同轉ニアレバゑむノ假字カノ疑ヒアリ然レ𪜈古今六帖伊セ物語等ニかち人の渡れどぬれぬえにしあればトヨメルえハ緣ヲ江ニ云カケタレバ緣ノ字えノ假字也【古ヘハ假字ノタガヘル云カケハアルヿナシ】因テ第二十二轉第四等ニ屬スル者ハえむノ假字ト定ム【袁遠越ナドハ第三等ニ屬セリ凡テ第三等ノ諸字ハ反切ノ字モ重ク第四等ノ諸字ハ反切ノ字モ皆輕クシテ同轉ナガラ輕重ヒトシカラザレバ第四等ハ若クハ吳音開ニヤアラン】

〔ゑむ〕〔元〕袁遠轅猿園爰援猨湲宛苑怨婉鴛垣寃【以上漢也吳ハをむ】〔先〕淵〔仙〕瑗媛圓　○右合音ニテ合轉ニ屬ス

〔えつ〕〔月〕謁〔屑〕噎咽〔薛〕悅閱　○右咽以上三字開轉ニ屬セリ悅ハ第廿二合轉ニアレ𪜈第四等ノ字えノ假字ナルベキ由えんノ音ノ下ニ云ルガ如シ○和名抄丹後ノ鄕名謁叡コレヲ神名式ニ阿知江(アチエ)トアレバ謁ノ字あ行ノ通音ニ用フえノ假字ヨクアヘリ

〔ゑつ〕〔月〕越粤曰鉞〔薛〕噦　○右合音ニテ合轉ニ屬ス
○越曰ハ古書ニをノ假字ニ用タリ又和名抄能登ノ鄕名越蘇ハ惠曾(エソ)トアリ

〔えき〕〔昔〕益亦奕易場液腋掖繹驛懌斁。役疫【ミナ漢也吳ハいやく】　○右斁以上十二字開轉ニ屬ス役疫ハ第卅四轉合ニ屬スレ𪜈此轉ノ第三四等ハえノ假字ナルベキヿえいノ音ノ下ニモ云ルガ如ク又和名抄ニ疫ハ衣夜美(エヤミ)トアル衣(エ)ハ卽疫ノ字音ト聞ユ【えだちト云言モモト役ノ字音ヨリ出タルベシ】

○おを之假字　附あわ

〔お〕於淤飫。意憶億隱磯乙膺【以上十字古書ニおノ假字ニ用タリ】○右意以下七字ハ開轉ニ屬ス於淤飫ノ三字ハ第十一合轉ニ屬セリおハ開合ニ渉ル音ナル故也或人問テ曰クおノ音ノ開合ニワタルヿハサモアルベシ然レ𪜈其音ノ假字ニ用タル於等ノ字合轉ニ屬スルトキハをノ音ト何ヲ以テ分ンコノ義イカヾ答云抑開合ニ渉ル音トハ前ノ圖ノ如ク開ト合トノ間ノ音ナリ然ルニ韻鏡ナドハ四十三轉ヲタヾ開ト合トノ二ツニ分テ其中間ノ音トテハ別ニタテズ【開合轉ト云ハ開音ノ字ト合音ノ字トヲマジヘ載ルユヱノ目(ナ)ニシテ開合ニワタル字ヲ載スト云ヿニアラザレバ別ナリ】故ニカノ開合ノ間ノ音ノ字ヲモ二ツニ

分テイササカニテモ開ノ方ヘ近キヲバ開トシイサヽカニテモ合ノ方ヘ近キハ合トセル者也サレバ於等ノ字モイサヽカ合ノ方ニ近シトシテ韻書ニハ合轉ニ収ストイヘドモ精ク云トキハ中間ノ音ナルユヱニをノ音ノ全合ナルト差別ナキヿアタハズ【上ノ開合ノ圖ニテ其位ヲ考フベシ】古ヘニ假字ヲ定ムルトキ於等ノ字彼國人ノ口ニ呼フ音をニハ遠クシテおノ方ニヨレル故ニ其音ノ假字ト定メシ者也於等ノ字ハ譬ヘバ相坂山ノ如ク近江ノ國ノ合轉ニハ屬スレドモ東近江ノをノ音ヘハ遠クテ山城ノ開音ニ近キナリケリ【又或問曰おヲ舊ノ如クわ行トスルトキハ於等ノ字合音ニテヨク叶ヘリイカヾ答云おヲわ行トスルトキハ於等ノ三字ノミコソ合轉ニテ叶ヘルニ似タレ古書ニをノ假字ニ用タル十餘字悉ク合轉ナルヲバイカニセム又同シおノ假字モ右ニアグル意以下七字皆開轉ナルヲイカニセム】又或曰於ノ字字書ヲ考ルニ烏ト同音也然ルニ烏ハをノ假字。於ハおノ假字ニ用ルヿイカヾ是レヲ以テ見レバ畢竟おを等ノ假字ヅカヒ實ハ差別ナキコト歟答云玉篇ニ於ヘ央閭ノ反居也又倚乎ノ反歎辭トアリ烏ト同音ナルハ此ノ倚乎ノ反歎辭ノ方【アヽト讀ムトコロ是ナリ】おノ假字ニ用ルハ央閭ノ反ノ方ニテ【漢音いよ呉音お】別ノ音也後世ノ韻書ニスラ此差別ハ見エタリ混同スベキニ非ズヽ【又或人ハ是ヲ辨ヘズシテタヾ烏於同音ト心得ルカラ烏ヲ漢音おナリト云ルモ非ナリ○又於ヲ助辭ニ乎ノ字ト同ジヤウニ用ルヿアルニ就テ同音カト疑フ人アレド是モ音ハ異也迷フコトナカレ於ト于トハ助辭ニ全ク同ジサマニ用テ于ノ字ノ註ニ於也トアレドモ其音ハ禹倶ノ反ニテ同ジカラズ於ト乎トノ音ノ異ナルヿモ是ニ准ヘテ知ベシ 後世ノ字書ニハ於ト于トヲ全ク同音トスレドモソレハ音韻ノミダレタル者也唐以前ノ書ニ同音トセルモノ無キヲ以テ訛謬ナルヿヲ知ルベシ】又古書ニ意ノ字ヲ多クおノ假字ニ用タルハ音憶トモアリテ卽此字ト通用スル方ヲ取也ト或人ノ云ルマコトニサモ聞エタリ然レドモ意ハいノ音コソ常ナレ憶ト通用スルヿハイトモ稀ナルヿナルニ其音ヲシモ取ムコトイカヾ依テ思フニ御國ノ古書ニ凡テ字ノ偏ヲ省テ用タル例多シ伎ヲ支ニ作リ枳ヲ只ニ作リ村ヲ寸ニ作リ健ヲ建ニ作レルタグヒ也【此事猶委ク古事記ノ傳ニ云リ】然レバ意モ通用マデモナク右ノ例ニテ憶ノ字ノ偏ヲ省ケルモノナルベシ

〔を〕袁遠怨烏乎呼嗚塢弘越曰惋廻【以上十三字古書ニをノ假字ニ用フ】汙惡 ○右ノ字皆合音ニテ韻鏡合轉ニ屬ス ○袁ハ雨

元ノ反遠ハ雲阮ノ反怨ハ於願ノ反ナレバ漢ゑん呉ハわんナルニ似タレドモ元阮願等ノ呉音實ハぐをんナルヿ上ノ圖說ニ云ルガ如クナレバ右三字呉音をんナルヿ疑ナシ烏ハ哀都ノ反漢を呉う也乎ハ戸呉ノ反音胡也然レバ漢呉共ニこナルベキヲをニ用タルハ如何ト云ニ胡ノ字匣母ニ屬ス凡テ匣母ノ字ハかきくけこノ音ナルガ呉音わゐうゑをニナル例多シ【皇黄ハわう淮ハわい又ゑ會ハゑナルタグヒ多シ】故ニ戸胡等ヲ切字ニ用タル字多クハ呉音わゐうゑをナリ【戸國ノ反惑。胡掛ノ反話。胡光ノ反黄ノタグヒ多シ又胡ノ字胡亂胡曹抄ノトキうノ音ニ呼ヘリ】呼ハ荒烏又火胡ノ反ナレバくを【直音こ】ナレドモ是モ呉音わ行ニナル例也【呼荒火ミナ曉母ニ屬ス曉母ニハわ行ノ音ノ例ナキニ似タレドモ上ニ出タル洫ノ字モゐきノ音也又賄ハ呼罪ノ反ニノわいの音ナレバ呼ニをノ音アルコトイヨ〳〵疑ヒナシ】弘ハ胡肱ノ反ナレバ呉をう也越曰ハ王伐ノ反【伐ハ房越又扶厥ノ反】又于厥ノ反【厥ハ居月ノ反】ナレバ漢ゑつ呉ハわつナルベキヲ【曰ハ常ニわつト呼】をつノ音ニ呼ッハ袁遠等ノ例也【越ハ即袁遠ノ入聲也又發髪ハ甫越ノ反ニシテ呉音はつ也是レ越ノ字呉をつナル證ナリ】曰ヲをノ假字ニ用タルハ姓氏錄ニ譯語氏ヲ曰佐トカキ和名抄ニ筑前ノ鄕名曰佐アリ【今ノ本ニ日佐ニ作レルハ皆誤寫ナリ】コレ也惋ハ烏貫ノ反ニテ【第廿四轉ニアリ】漢呉共ニわんノ音ナレドモ又於元ノ反トモアレバ袁遠等ト同例也廻ハ音回ナレバをニ用ルヿ通音ナガラ疑ハシ但シ耐若ヲミ乃ヲのニ用タルト同ジ格ニテわいヲをニ用ルニヤ【淮モ漢くわいニテ呉わいトモゑトモ呼ヘバ回廻モわいノ音アルマジキニ非ス】

〔おう〕〔證〕應【呉ナリ漢ハいよう】〔侯〕謳嘔鷗甌歐【以上漢也呉ハうナルベシ】○右開音ニテ開轉ニ屬ス　○万葉十八ニ應ヲおノ假字ニ用タリ

〔をう〕〔東〕翁甕瓮雄〔登〕泓〔遇〕嫗　○右合音ニテ合轉ニ屬ス

○泓ハ廣韻ニ乙肱ノ反ニテをう也【第四十三轉ニ屬ス】又烏宏ノ反ニテわう也【第三十六轉ニ屬ス】又玉篇ニテハ於昴ノ反ナレバあう也雄ハ呉音うカいゆカナルベケレドモ常ニをうト呼フ故ニ此ニ出ス【漢ハいゆう也】嫗ハ烏遇ノ反ナレバ是モうカいゆカナルベケレド常ニをうト呼ッ也

〔**あう**〕〔豪〕奧襖媪〔唐〕鴦盎〔陽〕央殃鞅【以上三字吳也漢ハいやう】〔耕〕櫻鸎鶯鸚甖【以上五字漢也吳ハいやう】○右開音ニテ開轉ニ屬ス

○日本紀ニ鞅ヲあノ假字ニ用ヒ和名抄ニ鸎實ハ阿宇之智トアルナドヨク合ヘリ又同書ニ襖子ヲ阿乎之トアルハうノ韻ヲをニ轉ジテ御國言ノ如ク云ヒナセル例ニテ芭蕉ヲはせをばト云ヒ拾遺集物ノ名ニ紅梅ヲ隱シテ鸎の巢作る枝を折つれば子をばいかでかうまむこすらん【今ノ本ニ第四ノ句こうはいかてかトアルハ誤也サテハ語ヲ成サヌナリ】ナドノ如シ又万葉ニ杲ノ字ヲかほノ假字ニ所々用タルハうノ韻ノ餘ノ例ニ異也メヅラシキ事也【韻ヲはひふへほニ用ルハ入聲字ノ例ナリ然ルニ又和名抄ニ淡路ノ鄕名賀集ハ加之乎トアルハ入聲ノ韻ノ例ニ異也コレモメヅラシ入聲ふノ韻ノ字ハ皆はひふへほニ通用セル例ナル事上ニ云ルガゴトシ】

〔**わう**〕〔陽〕王往枉旺〔唐〕汪尩○皇鳳黃〔庚〕横【皇以下四字吳ナリ漢ハくわう】〔耕〕泓　○右合音ニテ合轉ニ屬ス○王以下四字反切ニツキテ論アリ下ノきやうノ音ノ處ニ云べシ

〔**あふ**〕【入聲】〔狎〕狎【吳ナリ漢ハかふ】鴨押壓〔合〕凹　○右開音開轉ニ屬ス

〔**おむ**〕〔寖〕恩〔欣〕殷慇磤隱【以上四字吳也漢ハいむ】〔侵〕音陰飮【三字吳也漢ハいむ】　○右開音ニテ開轉ニ屬ス○磤ヲ日本紀ニおノ假字ニ用ヒ續日本紀ニ嫗ヲ音那トカキ和名抄ニ陰陽寮ヲ於牟夜宇乃豆加佐トアルナド皆假字ノ格ヨク合ヘリ【或說ニ恩ニおんトをんトニツノ假字アリトスルハ妄也】

〔**をむ**〕〔魂〕溫薀穩〔元〕袁遠園怨宛苑【以上六字吳ナリ漢ハゑん】　○右合音ニテ合轉ニ屬ス○袁遠怨ハをノ假字ニ用ヒ和名抄ニ紫苑ハ之乎迩ト見エ同物ヲ古今集物ノ名ニモ來しを香ぞトカクセル皆假字合ヘリ

〔**おく**〕〔職〕憶臆億【以上吳也漢ハいよく】　○右開音開轉ニ屬ス○憶億ハおノ假字ニ用

〔**をく**〕〔屋〕屋　○右合音ニテ合轉ニ屬ス

〔**おつ**〕〔迄〕乙【吳ナリ漢ハいつ】　○右開音ニテ開轉ニ屬ス　○和名抄山城ノ郡名乙訓ハ於止久迩假字ノ格ヨク叶ヘリ

〔をつ〕〔沒〕頞膃〔月〕越【此字吳也漢ハゑつ】○右合音合轉ニ屬ス○越ハをニ用タリ

○か行之假字

〔きう〕〔尤〕九鳩仇久灸咎柩臼舅舊求裘毬救究韭丘蚪糾糺糗廐休朽牛【以上漢也吳ハく也但シ牛ハ常ニ吳ごト呼】〔東〕弓躬窮宮【以上四字漢ナリ吳ハく】○右東ノ韻ノ者ハ實ハきゆうノ音ナレドきゆんきゆくきゆつ等ノ音皆きんきくきつト直音ニ轉ジ呼ッ例ナレバ是モきうト書ベキ也りゆうにゆう等モ是ニ准フベシ

〔きふ〕【入聲】〔緝〕急及汲吸笈給泣翕歙

〔かう〕〔豪〕高蒿稿鎬嵩豪膏毫告浩誥皓敖傲嗷鼇羔饈皐翺槔好尻考號耗昊顥杲羔〔唐〕岡綱剛鋼康糠糠慷亢抗吭阬航昂〔陽〕卬仰向香鄕强【以上六字吳ナリ漢ハきやう】〔庚〕庚坑行衡更梗鯁硬亨杏羹【以上十一字漢也吳ハきやう】〔耕〕幸倖耕耿鏗莖【以上六字漢ナリ吳ハきやう】〔肴〕肴殽膠爻交絞效咬郊効姣校挍孝敎巧樂【以上十七字漢也吳ハけう】〔江〕江杠扛舡項講巷港降絳肛【以上十一字漢ナリ吳ハこう】〔淸〕迎【此字宜京ノ反ニテ漢げい吳ぎやうナレド佛書ニ來迎らいかうト呼ッ故ニ此ニ出ス】○右豪ノ韻ノ者ハこうノ假字カノ疑ヒアルベシ古書ニ此ノ韻ノ中ノ高ノ字ヲこ。刀ノ字ヲこ。保寶褒報袍ナドヲほ。毛ノ字ヲもノ假字ニ用タレバ此韻ハ吳音凡テ皆第五位ノ音〔おうこうそうこうのうほうもうようろう】ナルベシ𪜈云ベケレド猶正音ハ第一位ノ音【あうかうさうたうなうはうまうやうらう】ナルベキ也其故ハ万葉十五ニ草ヲさノ假字ニ用ヒ杲ヲかほノ假字ニ用ヒ和名抄ニ筑前ノ郡名早良ハ佐波良安藝ノ鄕名造杲ハ佐宇加マタ草履ハ佐宇利。馬道ハ米多宇。徼道ハ古多宇。褒子ハ阿乎之馬腦ハ女奈宇ナドアルコレラミナ豪ノ韻ノ字ニテ第一位ノ音ナル證也然ルヲ第五位ノ音ノ假字ニ用タルハ通音ニテ耐迺苔ヲこニ用ヒ迺乃ヲのニ用タル類ナルベシ又次ノ唐陽ノ韻ノ格ヲモ考ヘ合スベシ○唐陽ノ韻ノ中ノ望忘莽等ノ字ヲ古書ニもノ假字ニ用タルヿアレ𪜈是モ通音ニテ正音ハ第一位ノ音ナルヿ豪ノ韻ニ同ジ卽カノ望莽ヲまノ假字ニモ用ヒ又方房芳防ヲは。牂裝藏相ヲさ。當黨宕ヲた。浪ヲら囊ヲだ又なニ用ヒ鞅ヲあニ用ヒ又古今集物ノ名ニ百和香ヲ隱シテいくそばくわがうしごかは思ふトヨミ和名抄ニ瘡ヲ佐宇トアルナドヲ以テ知ベシソノウヘ入聲ノ韻鐸藥ナルニテモ

明ケシ○庚耕ノ韻モ入聲ノ韻陌麥ナルニテ第一位ノ音ナルコ論ナク古今集物ノ名ニモ桔梗ヲ秋近ウ野ハナリニケリトヨメリ○肴ノ韻ハ疑ヒナシ○江ノ韻モ入聲ノ韻覺ナルニテ疑ナシ呉音ノコハ次ニ云ベシ

○右豪唐陽庚耕肴江ノ韻ノ諸字凡テ右ノ格ヲ以テ假字ヲ定ムベシ

〔**こう**〕〔東〕公蚣空控孔工功紅攻虹貢鴻洪鬨〔以上十四字漢也呉ハく〕〔侯〕口扣叩吼后垢苟鉤後寇厚侯候喉猴遘溝構篝【以上十九字漢也呉ハく但シ后後ナドハ常ニごト呼】〔登〕恒姮肯肱薨弘〔蒸〕興【此字呉也漢ハきよう】〔江〕江杠扛舡肛項講巷港降絳鬨【以上十二字呉ナリ漢ハかう】　○江ノ韻ノ諸字凡テ呉字ハ第五位ノ音【おうこうそうとうのうほうもうようろう】ト定ムベシ其故ハ先ツ其入聲朴ハぼくト呼ヒ濁ハぢよくト呼ブ例アリ又工ハ東ノ韻ニテ其字ニ从ヅ功紅等多ク同韻ナルニ江韻ノ江舡項等同シク工ニ从ヒ童モ東ノ韻ニテ其字ニ从ヅ者多クハ同韻ナルニ幢ハ江ノ韻也冓ニ从ヅ者ハ皆侯ノ韻ナルニ講傋ハ江ノ韻也又此韻ノ捉浞等足ニ从ヒ渥ハ屋ニ从ヒ又龐ハ廣韻ニハ薄江反ナルニ玉篇ニハ歩公ノ反也【江ハ江ノ韻公ハ東ノ韻】控ハ苦貢又枯洞ノ反ニテ東ノ韻ニアリテ又苦江苦講ノ反ニテ江ノ韻ニモアリコレラヲ考ルニ江ノ韻ハ東及ヒ冬侯ノ韻ト相通スルコ多クシテ必第五位ノ音ナルベキ由アル者ナリ　○東冬侯登ナドノ韻ハモトヨリ第五位ノ音ノ假字ナルコ論ナシ

〔**くわう**〕〔唐〕光晃恍廣曠壙荒肓。皇惶湟蝗遑篁黃簧【皇以下八字呉ハわう】〔庚〕横【漢ナリ呉ハわう】觥鑛〔耕〕宏閎轟嶸

〔**かふ**〕【入聲】〔合〕合蛤閤〔洽〕洽恰祫夾峽〔盍〕盍闔〔狎〕甲匣狎【狎ハ呉あふ】　○右合洽盍狎ノ韻ノ諸字第一位ノ音【あふかふさふたふなふはふまふらふ】ナルコ平上去聲ノ諸字ノ音ニテ明ラカ也古書ニモ甲ハかかふかは等ノ假字ニ用ヒ答ハたふ雑ハざは合ハかは等ニ用ヒシコ上ノいふノ音ノ下ニ引ルガ如シ但シ合狎ノ二韻呉音ハ第五位ノ音【おふこふそふとふのふほふもふろふ】ニナル歟其故ハ合ノ字ノ平聲含ノ字呉ごむナリ閤ノ字ノ上聲感去聲紺トモニこむご呼【河内ノ地名ニこむト云アリ是ヲ仁德紀ニ感玖神名式ニ咸古和名抄ニ紺口トカヽレタリ】又和名抄ニ衲ヲ能不トシルシ甲俗云古不ヿマタ爪甲豆女乃古佰マタ甲倉古不久良ナドアレバナリ猶考フベシ

〔**こふ**〕【入聲】〔業〕業刧怯【以上呉也漢ハけふ】

〔きやう〕〔陽〕薑姜彊疆羌強繦卬仰香享向鄕嚮響饗【以上十六字漢ナリ呉ハかう】。匡筐狂誑況貺怳〔庚〕行杏更梗【以上四字呉ナリ漢ハかう】〔耕〕莖䎃【以上二字呉ナリ漢ハかう】〔淸〕京卿敬驚慶輕頸景竟境鏡競。傾頃兄【以上十五字呉ナリ漢ハけい】〔靑〕經形刑【以上三字呉ナリ漢ハけい】　○右庚韻耕ノ韻ノ呉音きやうナルヿハ其入聲格客ハきやく又脣音ノ拍白ハひやく隔ハきやくナルナドヲ以テ知ベシ凡テ此韻皆倣レ之ニ○淸靑ノ韻ノ呉音モ又其入聲ニテ知ベシ○陽ノ韻ノ匡以下七字第卅二轉ニ屬ス此轉合也然ルニきやうハ合音ニ非ズ開音也依テ按スルニ匡ハ去王ノ反狂ハ巨王ノ反等ナルニヨルトキハ實ハくわうノ音ナルベシト思フニ其韻字ノ王ハ雨方ノ反【方ハ府良ノ反ニテ實ハ漢ひやう呉はう也】ナレバ實ハ漢いやう呉あう也是ニ依ルトキハ匡等きやうノ音ニテ合ヘリ然レ𪜈此レ合音ノ例ニ非ズソノウヘ王ノ字モ反切ニカヽハラズわうト呼フ是レ合音ノ例ニ叶ヘリ又其上聲ノ往ノ字モ于兩ノ反去聲ノ旺ノ字モ于放ノ反ニテ反切ニヨレハ共ニ漢いやう呉あうナルベキヲわうト呼フヿ王ノ字ノ格也然レバ匡等ヲきやうト呼フハ合音ノ例ニ違ヘ𪜈反切ノ本音ニ叶ヒ王等ヲわうト呼フハ反切ニ違ヘ𪜈合音ノ例ニ叶ヘリ互ニ如レ此ナルヿイカサマニモ所以アルヿナルベシ○淸ノ韻ノ傾以下三字是モ第三十四合轉ニ屬ス然ルニけいきやう共ニ開音ナルコトハ此轉ハ第三等第四等ハ皆開音ノ例ナルヿえいノ音ノ下ニ云ルガ如シ

〔きよう〕〔鍾〕共供拱恭蛬恐蛩邛凶匈胷兇龔顒【以上十四字漢ナリ呉ハく】〔蒸〕興矜競凝【以上四字漢ナリ呉ハこう】○鍾蒸ノ韻ノ假字入聲ニテ知ベシ

〔けう〕〔肴〕肴殽膠爻交絞效咬郊効姣校挍孝敎巧樂【以上十七字呉ナリ漢ハかう】〔宵〕喬驕矯嬌橋〔蕭〕堯驍曉皎叫竅徼梟翹澆

〔けふ〕【入聲】〔帖〕叶協夾俠頰莢狹愜篋〔葉〕挾〔業〕業刧怯脅【以上四字漢ナリ呉ハこふ】

○さ行之假字

〔しう〕〔尤〕周秋愁啾秀州洲酬囚酋遒收鄒搜蒐臭袖岫醜讎舟羞繡獸脩修首受授皺就酒手守狩聚驟【以上漢也呉ハしゆ又す】柔蹂【漢ナリ呉ハにゆ】

〔**しゆう**〕〔東〕衆終充嵩螽【以上漢ナリ呉ハしゆ】戎【漢ナリ呉ハにゆ】〔鍾〕從縱【漢ハしよう也呉音じゆナレド常ニじゆうト引テ呼故ニ出ス】〔虞〕主趨戍　○右しうトしゆうトヲ別ニ擧ル故ハしんトしゆん。しくトしゆく。しつトしゆつ是ラ皆別ナル例ナレバ也○虞ノ韻ノ者ハしゆニテしゆうト引ベキ音ニハ非レド常ニ引テ呼フ例多シ和名抄乳酪和名迩宇能可遊トアレバ【乳ハ虞ノ韻ナリ】引クモヒガコトニアラズ又此例ニ依ラバゆヲ省テしうト書ンモアシカラジ凡テ虞ノ韻皆倣レ之

〔**しふ**〕【入聲】〔緝〕十什汁拾入習楷褶執集緝楫葺輯澀濕隰襲

〔**さう**〕〔豪〕早草皁造慥曹糟漕遭喿操澡燥譟蚤搔騷嫂艘竈棗掃〔唐〕倉蒼滄臧藏桑顙奘葬喪〔陽〕壯莊狀牀裝妝床相想霜箱廂瘡創爽鏘象像【以上陽ノ韻ノ字漢呉共ニさうト呼フ者アリ漢さう呉しやうナル者アリ又漢しやう呉さうナル者アリ是ヲ韻鏡ニ考ルニ第二等ノ字ハ漢さう呉しやう第三等ノ字ハ漢呉共ニしやう第四等ノ字ハ漢しやう呉さう也大氐如シ此ノ然レドモ其反切又餘ノ牙喉半舌齒等ノ音ノ字ノ例ニ依ルトキハ右ノ如キ差別ナク凡テ漢しやう呉さうナルべキ也】〔庚〕鎗傖【漢ナリ呉ハしやう】〔耕〕爭崢諍箏【以上四字漢ナリ呉ハしやう】〔肴〕梢稍輎爪抓抄鈔巢鏁【以上九字漢ナリ呉ハせう】〔江〕雙双淙牕窻【以上五字漢ナリ呉ハそう】

〔**そう**〕〔東〕怱蔥總聰驄送葼稯稷緵叢崇【以上十二字漢也呉ハしゆ又す。崇ハ士隆ノ反ニテしゆうナレド常ニそうト呼フ故ニ此ニ出ス】〔冬〕宗綜宋【以上三字漢也呉ハしゆ又す】〔侯〕走叟趣奏輳湊蔟藪漱嗽【以上十字漢也呉ハしゆ又す】〔登〕曾僧增贈憎繒層〔江〕雙双淙牕窻【以上五字呉ナリ漢ハさう】

○古書ニ宗曾贈增層ナドヲその假字ニ用タリ

〔**さふ**〕【入聲】〔合〕雜颯帀〔洽〕臿揷〔盍〕卅〔狎〕翜

〔**しやう**〕〔陽〕章樟障彰昌唱菖倡娼倘商常嘗敞嘗賞裳將獎醬漿牆詳祥庠翔匠餉傷觴殤上【以上常ニ漢呉共ニしやう】壯莊狀牀床裝妝【以上常ニ漢さう呉しやう】相湘象像【以上常ニ漢しやう呉さう】襄讓穰壤攘釀【以上六字ハ日母ニ屬スレバ呉ハなうカにやうカナルべシ】〔耕〕爭諍箏【以上三字呉ナリ漢ハさう】〔清〕淸情精請晴生性姓牲胥笙正政征鉦成城誠盛淨

靜井省聲聖【以上二十五字吳也漢ハせい】〔靑〕靑晶星猩醒【以上五字吳ナリ漢ハせい】　○歌書ナドニしやうノ音ヲ直音ニ轉ジテさうト云ル者多シソノトキしやうハさう。しようハそうト書ベシ

〔しよう〕〔鍾〕鍾鐘種腫衝橦誦松訟頌從縱蹤舂惷悚竦【以上十七字漢ナリ吳ハしゆ】茸穴【此二字ハ吳ハにゆ】〔蒸〕稱升昇證勝丞蒸拯承繩澠乘仍

〔せう〕〔肴〕梢稍抄鈔鏁【以上五字吳ナリ漢ハさう】〔宵〕召昭照詔招邵詔沼紹小少肖宵霄消蛸銷硝逍焦蕉樵醮笑椒釗燒。蕘饒繞擾【蕘以下四字ハ吳ハねう】〔蕭〕蕭簫蠨瀟

〔せふ〕【入聲】〔葉〕妾接攝捷睫婕涉浹燮葉○附屑【先結ノ反】

○た行之假字

〔ちう〕〔尤〕宙抽紬胄丑紐肘紂酎籌儔疇晝稠惆糅【以上十六字漢也吳ハちゆト呼ベキ例也但シ惆糅二字ハ吳にゆナルベシ】

〔ちゆう〕〔東〕中仲沖忡忠蟲衷〔鍾〕重【此字吳也漢ハちよう】〔虞〕柱拄注註駐住株誅蛛廚躕【以上鍾韻虞韻ノ者貫ハちゆナレドモ常ニちゆうト引テ呼ッ故ニ此ニ出ス】〔侯〕頭偸【二字漢ハとう也吳つ也然レ圧偸ノ字常ニちゆうト呼ビ頭モ塔頭饅頭ノトキ然リ】○右ちうトちゆうトヲ別ニ擧ルハちんトちゆん。ちつトちゆつ是ラ別ナル例ニ依ルコトしゆうノ音ノ下ニ云ルト同ジ

〔ちふ〕【入聲】〔緝〕蟄縶

〔たう〕〔豪〕稻蹈滔韜刀叨桃逃到倒道導濤禱陶萄討嶋悼盜獶饕纛〔唐〕唐塘餹糖當棠棠黨儻湯蕩盪宕菪〔耕〕打橙【以上二字漢也吳ハちやう】〔肴〕棹【吳ハてう】橈【吳ハねう】〔江〕幢【漢ナリ吳ハこう】

〔とう〕〔東〕東棟涷同洞桐銅筒童董動慟僮曈通痛桶〔冬〕冬彤統【以上廿字漢也吳ハつナル例ナレ圧常ニ漢吳共ニこうト呼ッ通痛ナドハつうト呼】〔侯〕豆逗頭鬪斗偸透兜竇【以上九字漢ナリ吳ハつ】〔登〕登燈嶝磴鄧縢藤謄等〔江〕幢【此字吳也漢ハたう】

〔**たふ**〕【入聲】〔合〕答塔沓踏納【納ハ呉ハなふ】〔盍〕榻蹋

〔**ちやう**〕〔陽〕長張帳脹漲丈仗杖場暢腸昶鬯。孃娘釀【三字ハ呉ハにやう】〔耕〕打【呉ナリ漢ハたう】〔淸〕貞鄭【二字呉也漢ハてい】〔靑〕丁町頂定錠聽廳停挺【以上九字呉ナリ漢ハてい】

〔**ちよう**〕〔鍾〕重冢寵。濃醲穠〔蒸〕徵懲澄 ○万葉ニ澄ヲこノ假字ニ用タリ同韻ノ興ノ字呉こうナレバ澄ニモこうノ音アルベキ也

〔**てう**〕〔宵〕朝潮兆晁召超趙〔蕭〕挑誂窕眺迢貂調凋蜩鯛彫鵰鳥蔦弔。條刁釣肇糶鼂。尿溺嬈嬲【尿以下四字呉ハねう】

〔**てふ**〕【入聲】〔帖〕帖貼牒蝶疊捻【捻ハ呉ハねふ】〔葉〕輒聶

○な行之假字

〔**なう**〕〔豪〕腦惱瑙〔唐〕囊曩【以上五字呉也漢ハだう】

〔**のう**〕〔東〕農濃膿【以上三字漢ハごう也呉ハぬナレドモ常ニのうト呼フ】〔登〕能【呉ナリ漢ハごう】

○農濃ヲ古書ニハぬノ假字ニ用タリ【是ヲのト讀ムハ非也】美濃ナドモ古ヘハみぬナリ

〔**なふ**〕【入聲】〔合〕納衲【以上漢ハだふ也呉のふ𪜈書べキ歟其由ハ上ノかふノ音ノ下ニ云ルガ如シ】

〔**にやう**〕〔陽〕孃娘【二字呉也漢ハぢやう】

〔**によう**〕〔魚〕女【漢ハちよ呉によ也】○女院女御女官女房ナドノトキ引〃故ニ出セリ是ハ八日(ヤカ)ヲやうか牡丹ヲぼうたんト云類ナリ

〔**ねう**〕〔肴〕鐃【呉ナリ漢ハだう】〔宵〕饒【呉ナリ漢ハぜう】〔蕭〕尿溺【呉ナリ漢ハでう】

〔**ねふ**〕〔帖〕捻【呉ナリ漢ハでふ】

〔**にう**〕〔尤〕柔【漢ハじう也呉ハにゆナレ𪜈常ニにうト呼】〔虞〕乳【漢ハじゆ也呉ハにゆナレ𪜈和名抄ニモ迩字(ニウ)トアリ常ニモ然リ】

〔にふ〕〔緝〕入【呉ナリ漢ハじふ】

○は行之假字

〔はう〕〔豪〕保褒袌寶報袍抱暴。毛耄冒帽【毛以下四字漢ナリ呉ハまう】〔陽〕方芳房昉訪防彷妨坊放髣。亡妄罔望芒邙氓忘【亡以下八字ハ漢也呉ハまう】〔唐〕傍謗滂榜。茫忙莽漭【茫以下四字漢ナリ呉ハまう】〔庚〕亨烹彭。盲蝱孟猛【以上七字漢也彭以上三字呉ハひやう盲以下四字呉みやうナレ𪜈又まうト呼】〔耕〕棚【漢ナリ呉ハひやう】萠甍【二字漢也呉ハみやう】〔肴〕包苞庖疱胞飽泡鮑炮豹。茅卯昴貌【以上十四字漢也豹以上十字ハ呉ハへう茅以下四字ハ呉ハめう】〔江〕邦龐蚌。尨厖【以上五字漢也蚌以上三字ハ呉ハほう尨厖二字ハ呉ハもう也】

〔ほう〕〔東〕蓬鳳龐豐唱。夢蒙蠓瞢【以上九字漢也唱以上五字ハ呉ハふ夢以下四字ハ呉ハむ也但シ常ニもうト呼フ者モアリ】〔鍾〕封峯逢烽鋒縫奉捧棒俸【以上十字漢也實ハひようノ音ナルヲ皆ほうト轉ジ呼フコトユヱアルベキ也呉ハふナリ】〔侯〕部蔀菩掊剖捊仆裒。戊茂矛牟眸【以上十三字漢也裒以上八字呉ハふ戊以下五字呉ハむ也但シもト呼フ字モアリ】〔登〕朋崩鵬〔江〕邦龐蚌【以上三字呉ナリ漢ハはう】〔尤〕謀【漢也實ハびうナレ𪜈ぼうト轉シ呼フ呉ハむ也】

〔はふ〕【入聲】〔乏〕乏法【以上二字漢ナリ呉ハほふ】

〔ほふ〕【入聲】〔乏〕乏法【二字呉也乏ノ平聲凡ノ字去聲梵ノ字共ニ呉ハぼんノ音也是其入聲モ呉ぼふナル證也法ノ字モ法華其外モほつト呼フ例多シ】

〔ひやう〕〔清〕平評内病並幷瓶屏兵【以上九字呉ナリ漢ハへい】

〔ひよう〕〔蒸〕冰憑

〔へう〕〔肴〕豹【呉ナリ漢ハはう】〔宵〕表俵標漂褾瘭飃瓢麃鑣猋飈。苗廟眇【苗以下三字ハ呉ハめう】〔尤〕謬繆【二字實ハ漢びう呉むナレ𪜈漢べうト轉シ呼フサテ同韻ノ幼(イウ)ヲえうト呼フニ准テ假字ハべうト定メツ呉ハめうナルベシ】

○ま行之假字

〔**まう**〕〔豪〕毛髦冐帽〔唐〕汒忙莽漭〔陽〕亡妄忘望罔網輞魍〔庚〕盲孟猛【以上十九字漢ハ皆ばう也庚ノ韻ノ者ハ呉みやうナレ𪜈常ニ漢ヲまうト呼フユヱニ此ニ出ス】

〔**もう**〕〔東〕蒙朦艨【以上三字呉ナリ漢ハぼう】

〔**みやう**〕〔清〕明名命鳴〔青〕冥【以上五字呉也漢ハべいナレ𪜈皆常ニめいト呼】〔庚〕猛【呉ナリ】

〔**めう**〕〔肴〕貌【呉ナリ漢ハばう】〔宵〕苗猫廟妙【以上四字呉ナリ漢ハべう】

○ら行之假字

〔**りう**〕〔尤〕留溜騮霤柳劉流旒【以上八字漢ナリ呉ハる】〔東〕隆【實ハりゆうナレ𪜈りうト書クコトきうノ音ノ下ニ云ルガ如シ】〔鍾〕龍【漢ハりよう也呉りゆナレ𪜈引常ニテ呼ユヱニりうノ假字トスりゆうト書ンモアシカラジ】

〔**りふ**〕【入聲】〔緝〕立笠粒

〔**らう**〕〔豪〕老牢勞潦醪〔唐〕郎廊朗浪狼琅蜋粮

〔**ろう**〕〔東〕籠瀧朧聾壟弄【漢ナリ呉ハる又ハりゆナルベシ】〔鍾〕瓏隴【漢也實ハりようナレ𪜈常ニろうト呼フ呉ハりゆナルベシ】〔侯〕婁樓縷塿鏤髏螻髏陋漏【以上十字漢也呉ハる又ハろ】

〔**らふ**〕【入聲】〔合〕拉〔盍〕臘蠟

〔**りやう**〕〔陽〕良兩亮梁粱量糧涼諒魎〔清〕令冷領【以上三字呉ナリ漢ハれい】〔青〕苓笭零靈【以上四字呉ナリ漢ハれい】

〔**りよう**〕〔鍾〕龍【漢ナリ呉ハりう】〔蒸〕夌陵凌綾〔登〕楞稜【二字實ハろうナレドモ常ニりようト呼】○日本紀ニ稜ヲろノ假字ニ用ラル和名抄ニ相模ノ郡名餘綾與呂岐（ハヨロギ）

〔**れう**〕〔宵〕燎繚療〔蕭〕了聊料寮僚鐐鷯膋寥廖

〔**れふ**〕【入聲】〔葉〕獵鬣

○濁音じぢずづ之假字

濁音ノ假字ニじトぢトマガヒずトづトマガフヿ多シ此ノ分チハ齒音ト舌齒音トノ字ハしす也舌音ノ字ハちつナリ其中ニ齒音ト舌音トノ字ハ多クハ淸音ニモ呼コトアル故ニ分レヤスク舌齒音ノ字ハ淸音ニ呼フ例ナキ故ニ分リガタキコトアル也凡テ右ノ濁音ドモヲ分チ擧ルヿ左ノ如シ

〔じ〕自示次視辭慈事字兒寺侍時恃似姒。二貳耳餌珥兒爾尒邇而

○自辭貳餌珥兒尒時ナド古書ニじノ假字ヲ用タリ

〔ぢ〕治持痔。尼膩儞。附除【此字除目ノトキぢノ音ニ呼フ又神名式ニモぢノ假字ニ用タル所アリ】柱【琴ノぢ】○尼膩ヲ日本紀ニぢノ假字ニ用ヒタリ和名抄ニ痔知乃夜万比（チノヤマヒ）

〔じや〕蛇虵邪闍謝麝。若　〔ぢや〕　〔ぢゆ〕

〔じゆ〕樹壽受授就頌鷲桼娶豎。需儒孺濡。附入

〔じよ〕序叙徐舒助鋤恕絮。如汝茹筎

○序敘鋤茹ナド古書ニぞノ假字ヲ用タリ

〔ぢよ〕除杼篨絮。女　○杼ヲ古書ニごノ假字ニ用タリ

〔じむ〕神深甚尋腎盡燼迅訊。人仁刄忍仭壬任妊衽紝荏　〔ぢむ〕陣沈塵

〔じゆむ〕淳惇諄醇鶉准隼準盾循楯閏潤順馴旬巡純遵　〔ぢゆむ〕

〔じく〕孰。肉　〔ぢく〕竺軸舳䌷

〔じやく〕寂鵲雀。若弱　〔ぢやく〕著

〔じゆく〕粥熟塾　〔ぢゆく〕

〔じよく〕辱蓐褥　〔ぢよく〕濁

〔じつ〕實。日馹衵　○和名抄ニ鷽實ハ阿宇之智（アウシチ）　〔ぢつ〕帙袒。昵暱

〔じゆつ〕述術秫戌恤　〔ちゆつ〕朮怵

〔じき〕食飾植　○和名抄ニ土佐ノ郷名和食ハ和之岐(ワジキ)　〔ちき〕直　○うト引ク韻ノ字ハ皆上ニ出タル故ニ此(コヽ)ニハ畧セリ【さ行トた行ノ中ニテタヅヌベシ】

〔ず〕　〔づ〕豆頭圖途徒杜

〔ずゐ〕隋隨髓瑞蕊　〔づゐ〕

○韻ノいゐ之假字

〔い〕あい えい かい けい さい せい たい てい ない ねい はい へい まい めい らい れい わい ゑい くわい

右ノ諸音ノ下凡テ皆いノ假字也【開合ニカヽハルヿナシ】和名抄ニ絲鞋ハ之加伊(シカイ)。黄菜ハ王佐以(ワウサイ)。雙六ノ釆ハ佐以(サイ)。榛ハ奈以(ナイ)ナドヽアル是レラ其證也【此外諸國郡郷ノ名ナドニモ右ノ音ノ諸字ノ韻ヲハ多クハあいうえおやいゆえよノ通音ニ用タリ】

〔ゐ〕くゐ すゐ つゐ ゆゐ るゐ うゐ【此中ニ ゆゐ ト云音ハ實ハ有ルマジキ例ナルヿ上ノ圖ノ如シ然レ𪜈遺唯維等ノ呉音常ニ此音ニ呼ナリ】右ノ諸音ハ支脂微(シシビ)等ノ韻ノ拗音ニメ彼ノいノ假字ヲカク音【下ニいヲ書ク音ハ咍(タイ)皆齊灰佳(カイ)淸青等ノ韻也】トハ其類異也必ゐヲ書クベキヿ上ノ第三會ワヰウヱヲノ圖ヲ考テ知ベシ然ルニ和名抄ニ餹(ハ)子此間(ノニ)俗云都以(ツイ)之(シト)トアル【つゐノ音テ都以(ツイ)トセリ】是モ理ナキニ非ズトイヘ𪜈【本わハうあ。ゐはうい。ゑハうえ。をハうおナレバくいすいついゆいるいうい卜書シモ理アリ然レ𪜈和化ナドヲモくわト書テくあトハカヽズ會怪ナドヲモくわいトカキテくあいトハ書ズ觀官ナドヲモくわんト書テくあんトカクヿナシ此例ヲ以テ推スニ必くゐすゐつゐゆゐるゐうゐトカクベキヿナリ】猶いヲ書クハワロシ

○常ニハきノ音ニ呼フ字ヲ古來くゐト假字ヲ附ケタルヿアリ是ハ皆合口音ノ字ニテ韻鏡合轉ニ屬シテ本ハくゐノ拗音ナルヲきノ直音ニ轉ジタル者ニ限レルヿ也然ルヲ此差別ナク開合ニカヽハラズ凡テきノ音ノ字ハ皆くゐトモ書クベシト心

得ルハ誤也【前ニモ云ル如ク本ヨリノ直音ヲ拗音ニ云ヒナス例ハ御國ニハ無キコト也】くゐトモ書クベキ字ハ規闚窺貴匱季悸癸葵騤鬼愧魏巍危詭暉揮僞嬀龜軌歸喟諱麾毀逵馗夔簋虺卉【此餘モ合音ノ字ハ皆同シ】是等也此外開音ノ字ニハ書ベキニアラズ

○下中ノわ之假字

〔わ〕くわ　くわう　くわい　くわん　くわく　くわつ

右ノ諸音凡テわノ假字ナルヿ上ノ第三會ノ圖ニテ明ラカ也はノ假字ヲ書クハ大ニヒガコト也【凡テ三字ニカク字音ノ中ノ假字ハ喉音ノや行わ行ノ字ニ限レルヿ也】

○韻ノむ之假字

撥ハスル韻ノ假字ノコト或説ニ開口音ノ字ニハんヲ書キ合口音ノ字ニハむヲ書ベシト云ルハ甚シキ妄説ナリ其差別アルベキ由ナシ韻ノ假字ニハむん通用スベシ無武務牟等ノ音ニハ必スむヲ書クベシんトハ書マジキヿ也猶んノ音ノコトハ論アリ三音考ニ委ク云リ

字音假字用格 終

地名字音轉用例

本居宣長著

凡ソ諸國ノ名、又郡鄕ナドノ名ドモ、古ヘハ文字ニカヽハラズ、正字ニマレ借リ字ニマレ、アルベキマヽニ、身刺三野科野道奥稻羽針間津嶋、ナドヤウニ書キ、或ハ上毛野下毛野多遲麻ナド、字ノ數ニモカヽハラズ、三字ナドニモ書キタリシヲ、ヤヤ後ニナリテ、字ヲ擇ブコト始マリ、又必ズ二字ニ定メテ書クコトヽハナレルナリ、續紀和銅六年五月ノ詔ニ、畿內七道諸國郡鄕名、著二好字一ト見エ、延喜ノ民部式ニ、凡諸國部內郡里等名、並用二二字一、必取二嘉名一、ナド見エタルガ如シ、【嘉名ト云モ字ノコト也】但シ和銅六年ヨリ前ヨリモ、既ク字ヲ擇バレシコトモ有リシトハ見エタルヲ、彼ノ時ニ至リテ、ナホタシカニ定メラレタルナルベシ、出雲風土記ニ、鄕名ドモ、神龜三年改レ字トシルセル多ケレバ、和銅ノ後ニモ、ナホツギ〳〵改メラレシモ有リシナルベシ、又必ズ二字ニ定メラレタルモ、延喜式ヨリ始マレルコトニハ非ズ、既ク奈良ノ朝ノホドヨリ、多クハ二字ニ書ケリト見エタリ、サテ國郡鄕ノ名、カクノ如ク好字ヲ擇ビ、必ズ二字ニ書クニツキテハ、字音ヲ借リテ書ク名ハ、尋常ノ假字ノ例ニテハ、二字ニ約メガタク、字ノ本音ノマヽニテハ、其名ニ叶ヘ難キガ多キ故ニ、字音ヲサマ〴〵ニ轉ジ用ヒテ、尋常ノ假字ノ例トハ、異ナルガ多キコト、相模ノ相、信濃ノ信ナドノ如シ、カヽルタグヒ皆是レ、物々シキ字ヲ擇ビテ、必ズ二字ニ約メムタメニ、止ム事ヲ得ズ、如此サマニ音ヲ轉用シタル物ナリ、然ルニ後ノ世ノ人、此ノ義ヲタドラズシテ、國郡鄕ノ名ドモノ、其字音ニアタラザルコトヲ、疑フ者多シ、殊ニ漢學者ナドハ、タヾ漢籍ヲ見馴レタル心ニテ、字ヲ本ト心得ルカラ、其音ニ當ラザル地名ヲバ、後ニ訛レルモノトシテ、タトヘバ相模ハモトサウモ、信濃ハシンノウナリシヲ、サガミ シナノトハ、後ニ訛レル也トヤウニサヘ思フメリ、是レイミシキヒガコト也、サガミ シナノハ、本ヨリノ名ナルニ、相

模信濃ナドノ字ハ、後ニ塡タルモノニテ、末ナルコトヲ辨ヘザルモノ也、是ニヨリテ吾今、カヽル惑ヒヲサトサムタメニ、地名ノ唱ヘノ、其字ノ本音ニ合ハザルモノヲ、類ヲ分テ聚擧ケテ、轉用ノ例ヲ示スナリ、

○韻ヲ省キテ用ヒタル字音ハ、尋常ノ假字ニモ例多ク、ツネノ事ナレバ、此レニハ擧ケズ、國名ノアハヲ、安房ト書ルタグヒ是ナリ、

○凡ソ此レニ擧ルハ、國ノ名郡ノ名鄕ノ名ニテ、和名抄ニ出タルマヽナリ、其餘ノ地名ハ、大カタ擧ズ、然レドモ其モ、名高ク常ニ出ルヲバ、思ヒ出ルマヽニ、彼此トアゲタルモアリ、

○和名抄諸國ノ鄕名ノ中ニ、字音トオボシキハ、此レニ擧タル外ニモ、ナホイト多カレドモ。唱ヘヲ注セザルハ。イカナル名トモ知リガタケレバ、皆漏セリ、其中ニ、其國ニテハ、其名今モ殘リテ、唱ヘノ知ラレタルモアルベキヲ、其ハ此レニ擧タル例ドモニ倣ヒテ、其轉用ヲ知ルベシ、

○此レニ擧タル凡テノ例ヲ、初ノ條ナルサガラカニテ云ム、先ツさがらかト擧タルハ、其地名ナリ、次ニ相樂ハ、其音ヲ轉ジテ當タル字也、次ニ其下ニ細書ニ、山ト記セルハ、山城ノ國ノヨシ也、凡テ諸國何レモ、省キテ一字ヲ出セリ、郡ト記セルハ、郡名ノヨシナリ、鄕ハ鄕名ナリ、又郡トモ鄕トモシルサヾルハ、郡鄕ノ外也、次ニ佐加良加ト記セルハ、和名抄ニ注セル唱ヘナリ、和名抄ニ唱ヘヲ注セザルハ、他古書ニ見エタルヲ以テ記ス、其ハ其ノ書ノ名ヲ擧グ、凡テ何レモ右ノ例ヲ以テ心得ベシ、

‖ウノ韻ヲカノ行リノ音ニ轉ジ用ヒタル例

○さがむ　相模【國】佐加三　相ハサウノ音ナルヲ、韻ノウヲ轉シテ、サガニ用ヒタリ、【此ノ國名ハ、モトサガムナリシヲ、和名抄ニ佐加三ト注シタルハ、後ノ唱ヘナリ、古事記ニ相武ト書キ、哥ニモ佐賀牟トアリ、模ノ字モ、モノ音ナレバ、ム

ニ近クシテ、ミニハ遠シ、】○さがらか　相樂【山郡】佐加良加　相ヲサガニ用ヒタル、上ニ同ジ、【樂ノコトハ下ニ出】○かゞみ　香美【土郡　阿郷】加々美　○いかゞ　伊香【河郷】伊加々　○かゞと　香止【備前郷】加々止　コレラ香ヲカゞニ用ヒタル上ノ相ノ例ニ同ジ、

以上ウノ韻ヲガニ用ヒタリ

○おたぎ　愛宕【山郡】於多岐　○たぎの　宕野【勢郷】多木乃　コレラ宕ハ　タウノ音ナルヲ、タギニ用ヒタリ、○よろぎ　餘綾【相郡】與呂岐　綾ハリヨウノ音ナルヲ、【リヨヲ直音ニシテ、ロニ用ヒ、】韻ノウヲギニ用ヒタリ、○くらぎ　久良【武郡】久良岐　○みなぎ　美嚢【播郡】美奈木　○たぎま　當麻【和郷】多以末【此ノ郷名タギマナルヲ、和名抄ニ多以末ト注シタルハ、後ノ音便ノ唱ヘナリ、古事記ニ、當岐麻トモ當藝麻トモアリ、】○ふたぎ　布當【山】万葉六ニ見エタリ、【コレヲ今ノ本ニ、フタイト訓ルハ、當麻ヲタイマト云ト同ク、後ノ唱ヘニテ誤ナリ、】

右良ヲラギ、嚢ヲナギ、當ヲタギニ用ヒタル、上ノ宕綾ノ例ニ同ジ、

以上ウノ韻ヲギニ用ヒタリ

○うまぐた　望多【上總郡】末宇太　望ハマウノ音ナルヲ、ウノ韻ヲ轉ジテ、マグニ用ヒタリ、【上ノウニ當ル字ヲバ省ケリ、ウヲ省ク例ハ常也、サテ和名抄ニ、末宇太トアルハ、後ノ音便ノ唱ヘナリ、古事記ニ馬來田、万葉ニ宇麻具多トアリ、】○いくれ　勇禮【越後郷】以久禮　勇ハユウノ音ナルヲ、イクニ用ヒタリ、【ユヲイニ用ヒタル例ハ下ニ出】○かぐやま　香山【和】神武紀ニ、香山此云介遇夜摩トアリ、是レ香ノ音ヲ取レル也。【訓ヲ以テ香來山ナド書ルトハ異ナリ、思ヒマガフベカラズ、サテ書紀ニ、字音ニモ訓注ヲシタルコト、例アリ、興台產靈ト云神名ノ興台ノ二字モ、音ナルニ、訓注アリ、】

以上ウノ韻ヲグニ用ヒタリ

○いかご　伊香【近郡】伊加古　○あたご　愛宕【丹波】神名帳ニ、阿多古ト見エタリ、コレラ香ヲカゴ、宕ヲタゴニ用ヒタリ、【カノ神名ノ興台ノ興ナドモ、コウノ音ヲ取レルニテ、是レト同例ナリ、】

以上ウノ韻ヲゴニ用ヒタリ

上件ウノ韻ヲ轉ジテ、カキクコニ用ヒタル地名、其ノ轉ジタル音、皆濁音也、其中ニ久良ノキト、勇禮ノクトハ、清濁イカナラム知ラネドモ、餘ノ例ヲ以テ見レバ、此レラモ濁ルナルベシ、

ンノ韻ヲマノ行ノ音ニ通用シタル例

○いさま　伊參【上野郷】伊佐万　參ハサンノ音ナルヲ、サマニ用ヒタリ、　○なましな　男信【上野郷】奈万之奈　男ヲナマニ用ヒタリ、【信ノコトハ下ニ出】

以上ンノ韻ヲマニ用ヒタリ

○いじみ　夷灊【上総郷】伊志美　灊ハジンノ音ナルヲ、ジミニ用ヒタリ、【燈心ナドモ、此ノ例ナリ、】但シ古事記ニハ伊自牟トアリ、モトハ然云シナルベシ、【サレバイジミト云ハ、サガムヲサガミト云類ニテ、後ノ唱ヘカ、】書紀ニハ伊甚トアリ、　○あづみ　安曇【信郡】阿都三　曇ヲヅミニ用ヒタリ、　○みぐみ　美含【但郷】三久美　含ヲグミニ用ヒタリ、
○くたみ　玖潭【雲郷】風土記ニ久多美【和名抄ニ、潭ノ字ヲ澤ニ誤レリ、神名帳マタ風土記ナドニ、潭トアルナリ、】
○みたみ　美談【雲郷】風土記ニ三太三、　○しじみ　志深【播郷】之々美　書紀ニ縮見トアリ、古事記ニハ志自牟、
○いなみ　印南【播郡】伊奈美　南ハ、ナンノ音ヲ轉ジテ、ナミニ用ヒタルナリ、【訓ノミナミヲ取レルニハ非ズ、伊邪那美ノ神ノ御名ノ那美ヲ、書紀ニ冉ト書レタルモ、此レト同例也。冉ハ、史記ノ正義ニ奴甘ノ反トアリテ、呉音ナンナリ、コレ

ヲ書紀ノ今ノ本ドモニ、册ト作ルハ、寫シ誤ナリ、】○わざみ　和蹔【濃】天武紀ニ見ユ、万葉二ニ、和射見トアリ、蹔ヲザミニ用ヒタリ、　○みゝらく　旻樂【肥前】續後紀六ニ見ユ、万葉十六ニ、美彌良久トアル是ナリ、旻呉音ミンヲ、ミヽニ用ヒタリ、

以上ンノ韻ヲミニ用ヒタリ

○なめさ　南佐【雲郷】風土記ニ、云々故云南佐、神龜三年改字滑狹トアリ、然ルヲ和名抄ニ、南佐ト滑狹トヲ別ニ擧タルハ、マギレタル誤ナルベシ、

右ンノ韻ヲメニ用ヒタリ

○ゑども　惠曇【雲郷】風土記ニ惠伴ト見エ、惠杼毛社モアリ、

右ンノ韻ヲモニ用ヒタリ

ンノ韻ヲナノ行ノ音ニ通用シタル例

○しなの　信濃【國】之奈乃　信ヲシナニ用ヒタリ、古事記ニ科野トアリ、【濃ノ字モ、ヌノ假字ナレバ、モトハシナヌナリ】　○いなば　因幡【國】以奈八　古事記ニ稻羽トアリ、　○ゐなべ　員辨【勢郡】爲奈倍　○いなさ　引佐【遠郡】伊奈佐　○うなで　雲梯【和郷】宇奈天　○なましな　男信【上野郷】奈万之奈【男ノコトハ上ニ出】

以上ンノ韻ヲナニ用ヒタリ

○たには　丹波【國】太迩波　丹ヲタニ、用ヒタリ。【後世ニ此レヲタンバト唱ルハ、音便ニ頽レタルモノ也、ニヲント云音便、常ニ多シ、難波ヲナンバト云ナドモ同ジ、波モ、モト清音ナルヲ、ンノ音便ニ引レテ、濁ルナリ。凡テ音便ノンノ下ハ、

必ス濁レリ、此ノタニハヲ、タンバト云ヲ、字音ニ因レル唱ヘト思フハ非ズ、】 ○おさくに 乙訓【山郡】於止久迩 訓ヲクニ、用ヒタリ、【乙ノコトハ下ニ出】 ○をにふ 遠敷【若郡】乎尓布 ○やまくに 養訓【藝郷】也万久尓 ○なには 難波【津】古事記ニ那尓波、

以上ンノ韻ヲニ、用ヒタリ

○さぬき 讃岐【國】佐奴岐 讃ヲサヌニ用ヒタリ、 ○さぬき 散吉【和郷】是レハ神名帳ニ、讃岐ノ神社トアル處ナルベク思ハル、故ニ、サヌキトセリ、廣瀬ノ郡也、 ○みぬめ 敏馬【津】万葉ニ美奴面又三犬女ナドモアリ 敏呉音ミンヲ、ミヌニ用ヒタリ、 ○みぬめ 汶賣【同上】神名帳ニ見ユ、 ○ちぬ 珍【泉】万葉十六、又姓氏録ナドニ見ユ、古事記ニ血沼、書紀ニ茅渟、續紀ニ珍努ナドアリ、

以上ンノ韻ヲヌニ用ヒタリ

○うねび 雲飛【和】万葉七ニ見エタリ、

右ンノ韻ヲネニ用ヒタリ

○しのぶ 信夫【奥郡】志乃不 ○しのだ 信太【泉郷】 ○みのだ 民太【勢郷】三乃多 神名帳ニ、敏太神社トアル、是ナリ、【今ハ美濃田ト書ク也、】

以上ンノ韻ヲノニ用ヒタリ 但シ是レラ、古ヘハシヌブ シヌダ ミヌダト云シヲ、ヌヲノト云ハ、皆後ノ唱ヘニゾアラム、野篠角忍 陵ナド、古ヘヌト云シヲ、後ニハ皆ノト云例多ケレバ也、和泉ノ信太モ、万葉九ニハ、小竹田トゾアル、

ンノ韻ヲラノ行ノ音ニ轉ジ用ヒタル例

○さらゝ　讃良【河郡】佐良々　讃ヲサラニ用ヒタリ、

右ンノ韻ヲラニ用ヒタリ

○はりま　播磨【國】波里万　○へぐり　平群【和郡】倍久里　○はしりゐ　八信井　【近】万葉七ニ見エタリ、

以上ンノ韻ヲリニ用ヒタリ

○するが　駿河【國】須流加　駿ハシユンノ音ナルヲ、【シユヲ直音ニシテ、スニ用ヒ、】ンノ韻ヲ轉ジテ、スルニ用ヒタリ。　○くるま　群馬【上野郡】久留末　○つるが　敦賀【越前郡】都留我　敦ヲ、トヲツニ轉ジ、ンヲルニ轉ジテ、ツルニ用ヒタリ、但シ此ノ名モトハツヌガニテ、古書ニ角鹿トアリ、　○くるへ　訓覇【勢郷】久留倍　○くるべき　訓覓【藝郷】久留倍木

以上ンノ韻ヲルニ用ヒタリ

入聲フノ韻ヲ同シ行ノ音ニ通用シタル例

○あゆかは　愛甲【相郡】阿由加波　甲ヲカハニ用ヒタリ、【愛ノコトハ下ニ出】　○おはらき　邑樂【上野郡】於波良岐　邑ハ呉音オフナルヲ、オハニ用ヒタリ、【樂ノコトハ下ニ出】　○さはだ　雜太【佐郡】佐波太　○いざは　伊雜【志郷】神名帳ニ伊射波トアリ、【和名抄本雜ノ字ヲ椎ニ誤レリ、大神宮儀式帳ニ伊雜、】○そかは　蘇甲【讃郷】曾加波　○かはし　合志【肥後郷】加波志

以上フノ韻ヲハニ用ヒタリ

○いひほ。揖保【播郡】伊比保　揖ヲイヒニ用ヒタリ、○あひら。始羅【隅郡】阿比良　始ハ烏合ノ反ニテ、アフノ音ナルヲ、アヒニ用ヒタリ、○きひれ。給黎【薩郡】岐比禮　給ヲキヒニ用ヒタリ、○いひしろ。邑代【遠郡】伊比之呂　○さひか。雑賀【紀】万葉六ニ左日鹿、

以上フノ韻ヲヒニ用ヒタリ

○おほち。邑知【石郡 能郷】於保知　○おほく。邑久【備前郡】於保久　○ほゝき。法吉【雲郷】神名帳ニモ風土記ニモ、タヾ法吉トアリテ、ホヽキト唱フベキコトハ見エザレドモ、必ス然唱ヘベクオボユ、【其故ハ、風土記ニ、此ノ郷名ノ由縁ヲ記シテ云、神魂命御子宇武賀比賣命、法吉鳥化而、飛度静坐此處、故云法吉トアル。法吉鳥ハ、鳴ク聲ニヨレル名ニテ、必スホヽキドリト訓テ、鶯ノコトヽ聞エタリ、サレバ此ノ郷名、必スホヽキナルベシ、】

以上フノ韻ヲホニ用ヒタリ

入聲ツノ韻ヲ同シ行リノ音ニ通用シタル例

○しだら。設樂【三郡】志太良　設ヲシダニ用ヒタリ、【セヲシニ轉用シタル例ハ下ニ出】○たゝら。達良【房郷】太々良　○くたみ。忽美【雲郷】風土記ニ見ユ、【後ニ改メテ玖潭ト書リ、玖潭ノコトハ上ニ出、】忽ヲクタニ用ヒタリ、【コヲクニ轉用シタル例ハ下ニ出セリ】

以上ツノ韻ヲタニ用ヒタリ

○ちゝぶ。秩父【武郡】知々夫　秩ヲチヽニ用ヒタリ

右ツノ韻ヲチニ用ヒタリ　但シツノ韻ノ字、呉音ニハ、一日吉八ナドノ如ク、多クチノ韻ニ呼ヘバ、是レハ

通用ノ例ニハ非レドモ、秩ハメヅラシキ故ニ姑ク擧ツ、

○いだて　伊達【奥郡】　神名帳ニ、出雲ナドニ、伊太氐ト云社号多シ、

右ツノ韻ヲテニ用ヒタリ

○おとくに　乙訓【山郡】於止久迩　乙ヲオトニ用ヒタリ、【訓ノコトハ上ニ出】　○かとしか　葛餝【下總郡】加止志加　葛ヲカトニ用ヒタリ　但シ万葉ニハ勝鹿又可都思加ナドアリ【餝ノコトハ下ニ出セリ　サテ山城ノ郡名ノ葛野ノ葛ハ、古事記ノ御哥ニ、加豆怒トアリテ、カヅラノラヲ省ケルナレバ、字音ニアラズ、此ト混ズベカラズ】　○もとろゐ　物理【備前郷】毛止呂井　物ヲモトニ用ヒタリ【理ノコトハ下ニ出】　○かしと　佳質【備後郷】加之土　質ヲシトニ用ヒタリ。

○やけひと　益必【周郷】也介比止　必ヲヒトニ用ヒタリ、【益ノコトハ下ニ出】

以上ツノ韻ヲトニ用ヒタリ

入聲キノ韻ヲ同シ行ノ音ニ通用シタル例

○かとしか　葛餝【下總郡】加止志加　餝呉音シキヲシカニ用ヒタリ、【葛ノコトハ上ニ出】　○しかま　色麻【奥郡】志加万　○しかま　餝磨【播郡】　和名抄ニ唱ヘノ注ハナシ、　○あぢか　安直【藝郷】安知加　直ヲヂカニ用ヒタリ、

以上キノ韻ヲカニ用ヒタリ

入聲クノ韻ヲ同シ行ノ音ニ通用シタル例

○みまさか　美作【國】美万佐加　作ヲサカニ用ヒタリ、　○さがらか　相樂【山郡】佐加良加　樂ヲラカニ用ヒタリ、【相ノコトハ上ニ出】　○あすかべ　安宿【河郡】安須加倍　宿ヲ【シユヲ直音ニシテスニ用ヒ】韻ノクヲカニ用ヒ

タリ、【ベニ當タル字ハ省ケリ、字ヲ省ケル例下ニ出、】 ○かゞみ 各務【濃郡】加々美【務ノコトハ下ニ出】 ○つかま筑摩【信郡】豆加万 ○あさか 安積【奥郡】阿佐加 積ヲ【シヤヲ直音ニシテサニ用ヒ】韻ヲ轉ジテカニ用ヒタリ、
○さかご 尺度【河郷】尺ヲサカニ用ヒタリ、【和名抄本ニ、尺ノ字ヲ戸ニ誤レリ、相模伯耆ナドニモ、尺度ト云郷名例アリ】 清寧天皇ノ御陵坂門ノ原此ノ地ナリ、 ○かゞし 覺志【武郷】加々志 ○たから 託羅【阿郷】多加良 ○はかた 博多【和筑前】 ○はかた 伯太【河】 神名帳ニ見ユ、續紀十一ニ波可多、 ○ありまか 阿里莫【泉】神名帳ニ見ユ、崇峻紀ニ有眞香邑トアル是ナリ、

以上クノ韻ヲカニ用ヒタリ

○やきづ 益頭【駿郡】 益ヲヤキニ用ヒタル也、是ハモト燒津ナリ、然ルヲ和名抄ニ、末志豆ト注シタルハ、後ニ燒ト云コトヲ忌テ、益ノ字ノ訓ニ唱ヘカヘタルモノナリ、【サル例他ニモアリ、備後ノ安那ノ郡ハ、穴ナルヲ、安ノ字ノ訓ニカヘテ、ヤスナト唱ルナド、同ジコト也、又大和ノ十市ノ郡ノ郷名飫富ヲ、飯富ト書キカヘテ、イヒトミト唱ルモ此ノ類也、】 ○おはらき 邑樂【上野郡】於波良岐 樂ヲラキニ用ヒタリ、【邑ノコトハ上ニ出】 ○さへき 佐伯【藝郡】佐倍木 伯ヲヘキニ用ヒタリ、【ハヲヘニ轉用シタル例ハ下ニ出】 ○いふすき 揖宿【薩郡】以不須岐 ○つきや 筑陽【雲郷】 風土記ニ調屋トアリ、 ○しがらき 信樂【近】 續紀ニハ紫香樂トアリ、【信ノコトハ下ニ出】

以上クノ韻ヲキニ用ヒタリ

○やけひこ 益必【周郷】也介比土 益ヲヤケニ用ヒタリ、【必ノコトハ上ニ出】

右クノ韻ヲケニ用ヒタリ

イノ韻ヲヤノ行ノ音ニ通用シタル例

○はやし 拜師【加越中阿讃等郷】波也之 ○はやし 拜慈【備中郷】波也之 ○はやし 拜志【豫郷】波也之 コレラ拜ヲハヤニ用ヒタリ、此ノ外諸國ニ、拜志ト云郷名多シ、皆ハヤシニテ、林ノ意ナリ、

以上イノ韻ヲヤニ用ヒタリ

○あゆち 愛智【尾郡】 書紀ニ吾湯市又年魚市、万葉ニモ年魚市トアリ、然ルヲ和名抄ニ、阿伊知ト注セルハ、後ニ訛レル唱ヘナリ、【魚ノアユヲモ、今ノ人ハアイト云ニ同ジ、】愛ヲアユニ用ヒタリ ○あゆかは 愛甲【相郡】阿由加波【甲ノコトハ上ニ出】

以上イノ韻ヲユニ用ヒタリ

アノ行ノ音同シ行ノ通用セル例

○あご 英虞【志郡】阿呉 ○あいた 英多【作郡】安伊多 ○あが 英賀【備中郡 播郷】阿加 是ラ英ヲア又アイニ用ヒタリ、 ○あちえ 謁叡【丹後郷】 神名帳ニ阿知江トアル是也、謁ヲアチニ用ヒタリ、

○えち 愛智【近郡】衣知 愛ヲエニ用ヒタリ

○おたぎ 愛宕【山郡】於多岐 愛ヲオニ用ヒタリ、【宕ノコトハ上ニ出】 ○おはらき 邑樂【上野郷】於波良岐 ○おふみ 邑美【因郡 石播等郷】於不美 ○おほち 邑知【石郡 能郷】於保知 ○おほく 邑久【備前郡】於保久 邑ヲ如此オニ用ヒタルガ多キハ、此ノ字呉音オフナレバ也、サレバ此ハ通用ニハ非レドモ。此ノ字オフノ音ヲ、人多クハ知ラザル故ニ、姑ク擧ツ、

カノ行ノ音同シ行ノ通用セル例

○くゝち　菊池【肥後郡】久々知【神代紀ニ菊理媛ト云神名モアリ】後ノ世ニ是レヲキクチト云ハ、字音ニ依テ、訛レルモノナリ、　○くゝま　菊麻【上總郷】久々万【和名抄本、菊ノ字ヲ菓ニ誤レリ、】コレラ菊ヲク、ニ用ヒタリ、　○みぐみ　美含【但郷】三久美　含ヲグミニ用ヒタリ、【但シ此ノ字ヲ用ヒタルコトハ、メヅラシケレバ、フクミノ訓ヲ兼タル意モアルカ、　○くたみ　忽美【雲郷】　風土記ニ見ユ、【上ニモ出】忽ヲクタニ用ヒタリ、

○こむく　感口【河】　神名帳ニ見ユ、和名抄ニハ紺口トアリ、感呉音コンナリ、仁徳紀ニ感玖、又古事記ニ高目郎女、應神紀ニ滂來田皇女ナドアル、皆一ツ地名也、

サノ行ノ音同シ行ノ通用セル例

○しだら　設樂【三郡】志太良　設ヲシダニ用ヒタリ、【ツノ韻ヲタニ轉用セル例ハ上ニ出】○あすかべ　安宿【河郡】安須加倍【クノ韻ヲ轉用シタル例ハ上ニ出、】○すくゝ　宿久【津郷】　神名帳ニ須久々神社トアル地ナリ、【和名抄本ニ久ノ字ヲ人ニ誤レリ】コレラハ宿ノシユヲ直音ニシタルナレバ、【宿禰宿世ナドモ同ジ】通用ニハ非レドモ、姑ク擧ツ、

タノ行ノ音同シ行ノ通用セル例

○つくし　筑紫【國】筑【又竺トモ作リ】ヲツクニ用ヒタリ、　○つゝき　綴喜【山郡】豆々岐　綴ヲツヽニ用ヒタリ、【下ノツヲ濁ルハ非ナリ、古事記ニモ書紀ニモ、筒ト書タリ、然ルニメヅラシキ綴ノ字ヲシモ用ヒタルハ、清濁ヲ通ハシテ、ツヅルノ訓ヲ兼タル意モアルカ、上ナル美含ノ例思フベシ、】○つくは　筑波【常郡】豆久波　○あづみ　安曇【信郡】阿

都三曇ヲヅミニ用ヒタリ、　〇つかま　筑摩【信郡】豆加万　〇つるが　敦賀【越前郡】都留我　敦ヲツルニ用ヒタリ、
〇つくま　筑摩【近】　〇つくま　託馬【同上】　万葉三ニ見ユ。託ヲツクニ用ヒタリ、　〇つくぶすま　筑夫嶋　【近】
三代實錄卅五ニ見ユ。神名帳ニ都久夫須麻トアリ。【今チクブシマト云ハ訛也。竹ト書タルモツク也、】

ナノ行ッノ音同シ行ッ通用セル例

〇なら　寧樂　【和】　寧ハ奴丁反、漢音デイ、呉音ニヤウ【常ニハ漢呉共ニネイト呼フ】ナルヲ、ナニ用ヒタリ、【但シニヤウノニヤヲ直音ニスレバナトナル】諸樂乃樂ナド書ルハ、本音ニテ。韻ヲ省ケル例ナリ、【諸ハ奴各反ナレバ、呉音ナク也、伊邪那岐神ノ御名ノ那岐ヲ、書紀ニ諸ト書レタルモ、此ノ音ノ韻ヲ轉用シタルモノナリ、】

ハノ行ッノ音同シ行ッ通用セル例

〇あへ　阿拜【伊郡】安倍　敢トモ書ケリ。【ヘ清音也】拜ヲヘニ用ヒタリ、是レハ尋常ノ假字ニモ　賣米ヲメ、禮ヲレ、帝ヲテニ用ル類ト、同格ナリ、【禮帝ナド、漢音ノレイテイヲ取ルニハ非ズ、】又書紀ノ假字ニハ、哀愛ヲエ、開階ヲケ、西細ヲセ、俳珮ヲヘ、昧毎ヲメニ用ヒタル類ヒ多キモ同シ、　〇さへき　佐伯【藝郡】佐倍木　伯ヲヘキニ用ヒタリ、　〇くるへ　訓覇【勢郷】久留倍　覇呉音ヘナリ、然レドモ人多クハ、此ノ呉音ヲ知ラザル故ニ、擧ツ、此ノ字、續紀ノ宣命ナドニモ、ヘノ假字ニ用ヒラレタリ、【訓ノコトハ上ニ出】　〇覇多【遠郷】反多　此ノ反ハ、ヘント唱ルヨシカ、ハタヘカ、詳ナラズ、此ノ郷名國人ニ尋ヌベシ、　〇たへ　多配【讃郷】多倍

マノ行ノ音同行通用セル例

○さがむ　相模【國】模ヲムニ用ヒタリ、此ノ國名ノ事、上ニ云ルガ如シ、○かゞみ　各務【濃郡】加々美　務ヲミニ用ヒタリ、○まきむく　巻目【和】万葉七ニ見ユ、モクヲムクニ用ヒタリ、常ニ纒向ナド書ケリ、【マキモクト唱ルハ、ヒガコトナリ、】○こむく　高目【河】古事記ニ見ユ、此ノ地ノ事、上ニ出タリ、

ヤノ行ノ音同行通用セル例

○やむや　塩冶【雲郷】風土記ニ止屋又夜牟夜、崇神紀ニモ止屋トアリ、エンヲヤムニ用ヒタリ、後ノ世ニ此レヲエンヤト唱ルハ、字ニ依テ訛レル也、【和名抄本ニ冶ノ字ヲ沼ニ誤レリ、】○いくれ　勇禮【越後郷】以久禮　勇ヲイクニ用ヒタリ、

ラノ行ノ音同行通用セル例

○とゞろき　等力【甲郷】止々呂木　リキヲロキニ用ヒタリ、

雜ノ轉用

○はゝき　伯耆【國】波々岐　伯ヲハヽニ用ヒタリ、○つしま　對馬【國】都之万　古事記ニ津嶋トアリ、此ノ意ノ名也、然ルヲ對馬ト書ルハ、漢籍魏志ニ見エタリ、サレバ此ハモト、彼ノ國ニテ譯シタル字ナルヲ、ソノマヽニ用ヒラレタルモノナルベシ、其故ハツシニ對ノ字ヲ書ル、假字ノサマ、當昔皇國ノ假字ノ用ヒザマニハ似ザレバ也、○ふゝし　鳳至【能郡】不布志　ウノ韻ヲフニ用ヒタリ、○おほく　大伯【備前郡、邑久是ナリ、】書紀ニ見ユ、大來トモアリ、伯ヲクニ用ヒタリ、

【上ノオホノホノユカリニ、其通音ノハヘ連ケテ、ハクノ音ノ字ヲ用ヒタルカ、然ラズハ、クニハクノ音ノ字ヲ用フベキヨシナシ、】○さはら　早良【筑前郡】　佐波良　ウノ韻ヲハニ用ヒタリ、　○こゞろき　等力【甲鄉】止々呂木　トウヲトヾニ用ヒタリ、　○うなみ　宇納【越中鄉】　宇那美　ナフヲナミニ用ヒタリ、若シクハ納ハ、綱ヲ誤レル字カ、【丹後ノ鄉名ノ綱野ヲモ、納野ト誤レル例アリ、彼ノ綱野ハ、神名帳ニモ見エ、今モ綱野村ト云アリテ、マガヒナシ、】然ラバウノアミヲ切メテ、ウナミナリ、　○しゝぬ　漆沼【雲鄉】風土記ニ、舊志司沼ト書ルヨシ見エタリ、シツヲシヽニ用ヒタリ、　○もころゐ　物理【備前鄉】毛止呂井　理ヲロ井ニ用ヒタル、【ロキノ反リ】イトメヅラシ、　○かしを　賀集【淡鄉】加之乎　シフヲシヲニ用ヒタル、メヅラシ、【若シクハ乎ノ字ハ、布ヲ誤レルニハ非ルカ、此ノ鄉名國人ニ尋ヌベシ、】○しつな　志筑【淡鄉】之都奈　チクヲツナニ用ヒタルイカヾ、【奈字、誤寫ナルベシ、此ノ鄉名國人ニ尋ヌベシ、】○かくち　甲知【讃鄉】加久知　カフヲカクニ用ヒタルイカヾ、【久ノ字ハ誤寫カ】○かわら　考羅【山】仁德紀ニ見ユ、古事記ニ訶和羅、崇神紀ニ伽和羅トアル、同地也、ウノ韻ヲワニ用ヒタリ、　○にひき　新益【和】持統紀ニ見ユ、天武紀又持統紀ニモ、トコロ〴〵ニ新城トアルト一ツニテ、此ニ御世ニ、都ヲ遷シ賜ハムトセシ地也、【續紀ニ、寶龜五年八月、幸ニ新城宮ニトアルモ、此ナリ、今添下ノ郡ニ新木村ト云處也ト云リ、】キニエキノ音ノ字ヲ用ヒラレタルハ、【上ナル大伯ノ伯ノ如シ】好字ヲ撰ヒテナルベシ、　○かわら　各羅【筑前】雄畧紀武烈紀ニ見エテ、カワラト假字附ケセリ、カクヲカワニ用ヒタルカ、　○みまな　任那【外國】此ノ名ハ漢籍ニモ見エタレド、モト皇國ヨリ名ケタルニテ、ミマナノ假字也、【百濟ヲクダラ、新羅ヲシラキナド云トハ異ナリ、】任ヲミマニ用ヒタリ、【ニトミトハ通フ例多ク、又ンノ韻ヲ、マニ用ヒタル例モ、上ニ出セルガ如シ、】

韻ノ音ノ字ヲ添ヘタル例

タヾ一音ノ名ハ、二字ニ書クニ足ラザルガ故ニ、其ノ韻ノ音ノ字ヲ添ヘテ、二字トセリ、今其例ヲ此ニ擧ク、

○き 紀伊【國】是レ木ノ國ナルヲ、キノ韻ノイノ音ノ字ヲ、添タルモノ也、下皆此レニ效ヒテ知ルベシ、 ○き 基肄【肥前郡】肄音イ也 ○ゐ 渭伊【遠郷】井以コハ井ト注スベキ例ナルニ、井以ト注セルハイカヾ、 ○ひ 斐伊【雲郷】古事記ニ肥、書紀ニ簸ト書レタリ、【和名抄本ニ、伊ノ字ヲ甲ニ誤レリ、風土記ニ伊トアリ、】 ○ひ 毘伊【肥後郷】 ○つ 都宇【備中郡 近越後備後藝等郷】津 ○ゆ 由宇【周郷】 ○え 頴娃【薩郷】江乃 續紀一ニ、衣評トアル是ナリ、【郡ヲ評ト云コト、書紀ニモ、其外ニモ例アリ、】神代ノ可愛ノ山陵モ此ノ地也、【此ノ事ハ、古事記傳ニ委ク云リ、サテ此ノ郷名、今國人ハエイト云リ、和名抄ニ、江乃ト注シタルハイカヾ、思フニ此ハ、エノ郡ト云トキノ、ノヲ添テ書ルニコソハアラメ、】娃ノ字ハ、アイノ音ナルヲ、エニ用ヒテ、添ヘタル也、【アイヲエニ用ルハ、愛埃哀ナドノ如シ、】 ○せ 弟翳【備中郷】勢 翳ノ字ハ、エノ假字ニ添ヘタル也、 サテ弟ヲセト云フハ、女ヨリハ、弟ヲモ兄ト云ヘバ也、此ノ郷名、サル由アリテ、弟トハ書ルナルベシ、サテ此ノ弟ハ、字音ニ非ルニ、韻ノ音ノ字ヲ添ヘタルハ、メヅラシキ例也、 ○ほ 寶飫【三郡】穗 飫ハオノ假字也、 ○そ 囎唹【隅郡】曾於 書紀ニ襲ノ國トアル是也、サレバ曾ト注スベキ例ナルニ、曾於ト注セルハイカガ、 ○を 呼唹【泉郷】乎 古事記及神名帳ナドニ、男トアリ、 ○と 斗意【備後郷】意ハオノ假字也、 ○と 覩唹【日郷】 ○都於【石郷】 此レハ都ヲトノ音ニ用ヒタルカ、又ハ都ノ字ハ、覩ヲ寫シ誤レルモノカ、何レニマレト、云フ名ニ非レバ、下ノ於ノ字當ラズ、【若シツナラバ、下ノ字宇ナラデハ叶ハズ、ナホ此ノ郷名、國人ニ尋ヌベシ、】

字ヲ省ケル例

凡テ國名郡名鄕名、皆必二字ニ書クベキ、御サダメナルニ、長クシテ、二字ニハ約メ難キヲバ、字ヲ省キテ書タリ、其例ハ、國名上野下野ハ、カミツケヌ　シモツケヌ　ニテ、古事記ナドニハ、上ツ毛野下ツ毛野トアルヲ、毛ノ字ヲ省キ、大和ノ郡名磯城ノ上下ヲ、磯ノ字ヲ省キテ、城上【之岐乃加美】城下【之岐乃之毛】ト書キ、葛城ノ上下ヲバ、城ノ字ヲ省キテ、葛上【加豆良岐乃加美】葛下【加豆良岐乃之毛】ト書クタグヒ諸國ニ多キヲ其ノ例ニテ、字音ヲ以テ書ルニモ、字ヲ省ケリト見ユル、彼此有ルヲ、今此ニ擧ク、

○むざし　武藏□【國】藏ノ字ハ、ザニ用ヒタルナルベケレバ、シニ當タル字ヲ省ケルナルベシ、【藏ヲザシニハ用ヒガタカルベケレバナリ、】古事記ニハ牟邪志ト書キ、【邪モ藏モ濁音ナレバ、古ヘハサヲ濁リシナルベシ、】又古書ニ身刺トモ書タリ、【身ヲムト云ルコト、例多シ、】○たぢま　但□馬【國】太知万　是レモ但ノ字、タヂニハ用フベキニ非レバ、ヂニ當タル字ヲ省ケル也、古事記ニハ多遲麻、舊事紀ノ國造本紀ニハ但遲麻ト書リ、○みまさか　美□作【國】美万佐加　○あすかべ　安宿□【河郡】安須加倍　雄略紀ニハ飛鳥戸郡トアリ、○たぢひ　丹□比【河郡】太知比　古事記ニ多遲比トアリ、○あはちま　安八□【濃郡】天武紀ニ安八磨郡トアル是ナリ、　續紀三ニ、安八萬王ト云人ノ名アルモ、此ノ地名ニ由レリト聞ユ、【天武紀ニハ、アハツマト假字附ケヲシタレドモ、アハチマナルベシ、又今國人ハ、アンバチ郡ト云ッハ、字ニ依レルイヤシキ唱ヘナリ、】○こよめ　登□米【奥郡】止與米　○ちぶり　知夫□【隱郡】○あがた　英□太【勢鄕】阿加多　○ころも　擧□母【三鄕】古呂毛　○つがは　都賀□【石鄕】都加波　○やまくに　養□訓【藝鄕】也万久爾　○しがらき　信□樂【近】

上件字ヲ省ケル例トセル中ニ、韻ヲ轉ジタル例トシテ、上ニ出セル雜ノ轉用ノ中ニ收ルベキモアラムカ、又カノ雜ノ轉用ノ中ニ收レタルニ、字ヲ省ケル例ナルモアラムカ、此ノ二ツノ例、今慥ニハ分ケガタキモアレド、其ハ大カタニ分ケテ擧ツ、

うひ山ふみ

(イ)世に物まなびのすぢ、しな/\有て、一トやうならず、そのしな/\をいはゞ、まづ神代紀をむねとたてゝ、道をもはらと學ぶ有リ、これを神學といひ、其人を神道者といふ、又官職儀式律令などを、むねとして學ぶあり、又もろ/\の故實、裝束調度などの事を、むねと學ぶあり、これらを有識の學といふ、又上は六國史其外の古書をはじめ、後世の書共まで、いづれのすぢによることもなくて、まなぶもあり、此すぢの中にも、猶分ていはゞ、しな/\有べし、又哥の學び有リ、これにも、哥をのみよむと、ふるき哥集物語書などを解キ明らむるとの二タやうあり、大かた件のしな/\有て、おの/\好むすぢによりてまなぶに、又おの/\その學びやうの法も、教ふる師の心々、まなぶ人の心々にて、さま/\あり、かくて學問に心ざして、入そむる人、はじめより、みづから思ひよれるすぢありて、その學びやうも、みづからはからふも有ルを、又さやうにとり分てそれと思ひよれるすぢもなく、まなびやうも、みづから思ひとれるかたなきは、物しり人につきて、いづれのすぢに入てかよからん、又うひ學ビの輩のまなびやうは、いづれの書よりまづ見るべきぞなど、問ヒ求むる、これつねの事なるが、まことに然あるべきことにて、その學のしなを正し、まなびやうの法をも正して、ゆくさきよこさまなるあしき方に落チざるやう、又其業のはやく成るべきやう、すべて功多かるべきやうを、はじめよりよくしたゝめて、入らまほしきわざ也、同じく精力を用ひながらも、そのすぢそのまなびやうによりて、得失あるべきこと也、然はあれども、まづかの學のしな/\は、他よりしひて、これをとはいひがたし、大抵みづから思ひよれる方にまかすべき也、いかに初心なればとても、學問にもこゝろざすほどのものは、むげに小兒の心のやうにはあらねば、ほど/\にみづから思ひよれるすぢは、必スあるものなり、又面々好むかたと、好まぬ方とも有リ、又生れつきて得たる事と、得ぬ事とも有ル物なるを、好まぬ事得ぬ事をしては、同じやうにつとめても、功を得ることすくなし、又いづれのしなにもせよ、學びやうの次第も、一トわたりの理によりて、云々してよろしと、さして教へんは、やすきことなれども、そのさして教へたるごとくにして、果してよき

ものならんや、又思ひの外にさてはあしき物ならんや、實にはしりがたきことなれば、これもしひては定めがたきわざにて、實はたゞ其人の心まかせにしてよき也、詮ずるところ學問は、たゞ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、學びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかゝはるまじきこと也、いかほど學びかたよくても、怠りてつとめざれば、功はなし、又人々の才と不才とによりて、其功いたく異なれども、才不才は、生れつきたることなれば、力に及びがたし、されど大抵は、不才なる人といへども、おこたらずつとめだにすれば、それだけの功は有ル物也、又晩學の人も、つとめはげめば、思ひの外功をなすことあり、又暇のなき人も、思ひの外、いとま多き人よりも、功をなすもの也、されば才のともしきや、學ぶことの晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづをれて、止ることなかれ、とてもかくても、つとめだにすれば、出來るものと心得べし、すべて思ひくづをるゝは、學問に大にきらふ事ぞかし、さてまづ上の件のごとくなれば、まなびのしなも、しひてはいひがたく、學びやうの法も、かならず云々してよろしとは、定めがたく、又定めざれども、實はくるしからぬことなれば、たゞ心にまかすべきわざなれども、さやうにばかりいひては、初心の輩は、取リつきどころなくして、おのづから倦おこたるはしともなることなれば、やむことをえず、今宣長が、かくもやあるべからんと思ひとれるところを、一わたりいふべき也、然れどもその教へかたも、又人の心々なれば、吾はかやうにてよかるべき歟と思へども、さてはわろし(ロ)と思ふ人も有べきなれば、しひていふにはあらず、たゞ己が教へによらんと思はん人のためにいふのみ也、そはまづかのしな〴〵ある學びのすぢ〳〵、いづれも〳〵、やむことなきすぢどもにて、明らめしらではかなはざることなれば、いづれをものこさず、學ばまほしきわざなれども、一人の生涯の力を以ては、こと〴〵くは、其奥(ハ)までは究めがたきわざなれば、其中に主としてよるところを定めて、かならずその奥をきはめつくさんと、はじめより(ニ)志を高く大にたてゝ、つとめ學ぶべき也、然して其餘のしな〴〵をも、力の及ばんかぎり、學び明らむべし、さてその主としてよるべきすぢは、何れぞといへば、道の學問なり、そも〳〵此道は、天照大御神の道にして、天皇の天下をしろしめす道、四海萬國にゆきわたりたる、まことの道なるが、ひとり皇國に傳はれるを、其道は、いかなるさまの道ぞといふに、

（ホ）此道は、古事記書紀の二典（フタミフミ）に記されたる、神代上代の、もろ〳〵の事跡のうへに備はりたり、此ノ二典の上代の巻々を、くりかへしくりかへしよくよみ見るべし、（ヘ）又初學の輩は、宣長が著したる、神代正語を、數十遍よみて、その古語のやうを、口なれしり、又直日のみたま、玉矛百首、玉くしげ、葛花などやうの物を、入學のはじめより、かの二典と相まじへてよむべし、然せば、二典の事跡に、道の具備（ソナ）はれることも、道の大むねも、大抵に合点ゆくべし、又件の書どもを早くよまば、（ト）やまとだましひよく堅固（カタ）まりて、漢（カラゴヽロ）意におちいらぬ衞（マモリ）にもよかるべき也、道を學ばんと心ざすともがらは、第一に漢意儒意を、清く濯（スヽ）ぎ去て、やまと魂（タマシヒ）（リ）をかたくする事を、要とすべし、さてかの二典の内につきても、（チ）道をしらんためには、殊に古事記をさきとすべし、書紀をよむには、大に心得あり、文のまゝに解しては、いたく古への意にたがふ事有て、かならず漢意に落入べし、次に古語拾遺、やゝ後の物にはあれども、二典のたすけとなる事ども多し、早くよむべし、次に萬葉集、これは哥の集なれども、道をしるに、甚タ緊要の書なり、殊によく學ぶべし、その子細は、下に委くいふべし、まづ道をしるべき學びは、大抵上ノ件ッの書ども也、然れども書紀より後の、次々の御代々々の事も、しらでは有べからず、（ヌ）其書どもは、續日本紀、次に日本後紀、つぎに續日本後紀、次に文徳實錄、次に三代實錄也、（ル）書紀よりこれまでを合せて六國史といふ、みな朝廷の正史なり、つぎ〳〵に必ズよむべし、又件の史どもの中に、御世々々の宣命には、（チ）ふるき意詞のゝこりたれば、殊に心をつけて見るべし、次に延喜式、（ヲ）姓氏錄、和名抄、貞觀儀式、出雲國ノ風土記、釋日本紀、令、西宮記、北山抄、さては己が古事記ノ傳など、おほかたこれら、古學の輩の、（カ）よく見ではかなはぬ書ども也、然れども初學のほどには、件の書どもを、すみやかに讀ミわたすことも、たやすからざれば、巻數多き大部の書共は、しばらく後へまはして、短き書どもより先ッ見んも、宜しかるべし、其内に延喜式の中の祝詞（ノリト）の巻、又神名帳などは、早く見ではかなはぬ物也、凡て件の書ども、かならずしも次第を定めてよむにも及ばず、たゞ便にまかせて、次第にかゝはらず、これをもかれをも見るべし、又いづれの書をよむとても、（ヨ）初心のほどは、かたはしより文義を解せんとはすべからず、まづ大抵にさら〳〵と見て、他の書にうつり、これやかれやと讀ては、又さきによみたる書へ立かへりつゝ、幾遍（イクヘン）もよむうちには、始メに聞えざ

りし事も、そろ／＼と聞ゆるやうになりゆくもの也、さて件の書どもを、數遍よむ間々には、其外のよむべき書どものとも、學びやうの法なども、段々に自分の料簡の出來るものなれば、（タ）其末の事は、一々さとし教るに及ばず、心にまかせて、力の及ばむかぎり、古きをも後の書をも、（レ）廣くも見るべく、又簡約にして、そのみ廣くはわたらずしても有ッぬべし、さて又（ソ）五十音のとりさばき、かなづかひなど、必こゝろがくべきわざ也、（ツ）語釋は緊要にあらず、さて又（ネ）漢籍をもまじへよむべし、古書どもは、皆漢字漢文を借ッて記され、殊に孝德天皇天智天皇の御世のころよりしてこなたは、萬ッの事かの國の制によられたるが多ければ、史どもをよむにも、かの國ぶみのやうをも、大抵はしらでは、ゆきとゞきがたき事多ければ也、但しからぶみを見るには、殊にやまとたましひをよくかためおきて見ざれば、かのふみのことよきにまどはさるゝことぞ、此心得肝要也、さて又段々學問に入たちて、事の大すぢも、大抵は合点のゆけるほどにもなりなば、いづれにもあれ、（ナ）古書の注釋を作らんと、早く心がくべし、（ム）物の注釋をするは、すべて大に學問のためになること也、さて上にいへるごとく、二典の次には、（ラ）萬葉集をよく學ぶべし、みづからも古風の哥をまなびてよむべし、すべて人は、かならず哥をよむべきものなる内にも、（ウ）學問をする者は、なほさらよまではかなはぬわざ也、哥をよまでは、古への世のくはしき意、（キ）風雅のおもむきはしりがたし、萬葉の哥の中にても、やすらかに長ヶ高く、のびらかなるすがたを、ならひてよむべし、又長哥をもよむべし、さて又哥には、（ノ）古風後世風、世々のけぢめあることなるが、（オ）古學の輩は、古風をまづむねとよむべきとは、いふに及ばず、又後世風をも、棄ずしてならひよむべし、（ク）後世風の中にも、さま／＼よきあしきふり／＼あるを、よくえらびてならふべき也、（ヰ）又伊勢源氏その外も、物語書どもをも、つねに見るべし、すべてみづから哥をもよみ、物がたりぶみなどをも常に見て、いにしへ人の、風雅のおもむきをしるは、哥まなびのためは、いふに及ばず、古の道を明らめしる學問にも、いみしくたすけとなるわざなりかし、

上ノ件ところ／＼、圏の内に、かたかなをもてしるしゝたるは、いはゆる相じるしにて、その件ッ々にいへることの、然る子細を、又奥に別にくはしく論ひさとしたるを、そこはこゝと、たづねこめて、しらしめん料

のしるし也、

(イ)世に物まなびのすぢしな〴〵有て云々、物學とは、皇朝の學問をいふ、そも〳〵むかしより、たゞ學問とのみいへば、漢學のことなる故に、その學と分むために、皇國の事の學をば、和學或は國學などいふならひなれども、そはいたくわろきいひざま也、みづからの國のことなれば、皇國の學をこそ、たゞ學問とはいひて、漢學をこそ、分て漢學といふべきことなれ、それももし漢學のことゝまじへいひて、まぎるゝこころにては、皇朝學などはいひもすべきを、うちまかせてつねに、和學國學などいふは、皇國を外にしたるいひやう也、もろこし朝鮮於蘭陀などの異國よりこそ、さやうにもいふべきことなれ、みづから吾國のことを、然いふべきよしなし、すべてもろこしは、外の國にて、かの國の事は、何事もみな外の國の事なれば、その心をもて、漢籍唐籍といふべく、皇國の事は、内の事なれば、分て國の名をいふべきにはあらざるを、昔より世の中おしなべて、漢學をむねとするならひなるによりて、萬ッの事をいふに、たゞかのもろこしを、みづからの國のごとく、内にして、皇國をば、返りて外にするは、ことのこゝろたがひて、いみしきひがこと也、此事は、山跡魂をかたむる一端なる故に、まづいふなり、

(ロ)かのしな〴〵ある學びのすぢ〳〵云々、これははじめにいへるしな〴〵の學問のことなるが、そのしな〴〵いづれもよくしらではかなはざる事どもなり、そのうち律令は、皇朝の上代よりの制と、もろこしの國の制とを合せて、よきほどに定められたる物なれども、まづはもろこしによれることがらにして、皇國の古への制をば、改められたる事多ければ、これを學ぶには、其心得あるべく、又此すぢのからぶみをよく〳〵明らめざれば、事ゆかぬ學問なれば、奥をきはめんとするには、から書の方に、力を用ふること多くて、こなたの學びのためには、功の費も多き也、これらのこころをもよく〳〵心得べし、さて官職儀式の事は、これももろこしによられたる事共も、おほくあれども、さのみから書に力をもちひて、考ふることはいらざれば、律令とはことかはれり、官職のことは、職員令をもとゝして、つぎ〳〵に明らむべし、世の學者、おほく職原抄

を主とする事なれども、かの書は、後世のさまを、むねとしるされたる如くなるが、朝廷のもろ〳〵の御さだめも、御世御世を經るまゝに、おのづから古へとは變り來ぬる事ども多ければ、まづその源より明らむべき也、なほ官職の事しるせる、後世の書いと多し、もろ〳〵の儀式の事は、貞觀儀式弘仁の內裏式などふるし、其外江家次第、世におしなべて用ふる書なり、されどこれも、古へとはやゝかはれる事ども多し、貞觀儀式などゝ、くらべ見てしるべし、ちかく水戸の禮儀類典、めでたき書なれども、とのほか大部なれば、たやすくよみわたしがたし、さて裝束調度などのことは、世にこれをまなぶ輩、おほくは中古以來の事をのみ穿鑿して、古へさかのぼりて考る人は、すくなし、これも後世の書ども、いとあまたあれども、まづ古書よりよく考ふべし、此古書は、まづ延喜式など也、さては西宮記北山抄、此二書は、裝束調度などの學のみにはかぎらず、律令官職儀式、其外の事、いづれにもわたりて、おほよそ朝廷のもろ〳〵の事をしるされたり、かならずよくよむべき書なり、さて件のしな〳〵の學問いづれも〳〵、古へざまの事は、六國史に所々其事どもの出たるを、よく參考すべし、又中古以來のとは、諸家の記錄どもなどに、散出したるを、參考すべし、さて哥まなびの事は、下に別にいへり、むかし四道の學とて、しな〳〵の有しは、みな漢ざまによれる學びなれば、こゝに論ずべきかぎりにあらず、四道とは紀傳明經明法筭道これ也、此中に明法道といふは、律令などの學問なれば、上にいへると同じけれど、昔のは、その實事にかゝりたれば、今の世のたゞ書のうへの學のみなるとは、かはり有り、さてなほ外國の學は、儒學佛學其外、殊にくさ〳〵多くあれども、皆よその事なれば、今論ずるに及ばず、吾は、あたら精力を、外の國の事に用ひんよりは、わがみづからの國の事に用ひまほしく思ふ也、その勝劣のさだなどは、姑くさしおきて、まづよその事にのみかゝづらひて、わが內の國の事をしらざらんは、くちをしきわざならざらんや、

(ハ)志を高く大きにたてゝ云々、すべて學問は、はじめよりその心ざしを、高く大きに立て、その奥を究めつくさずはやまじと、かたく思ひまうくべし、此志よわくては、學問すゝみがたく、倦怠るもの也、

(ニ)主としてよるべきすぢは云々、道を學ぶを主とすべき子細は、今さらいふにも及ばぬことなれども、いさゝかいはゞ、ま

づ人として、人の道はいかなるものぞといふことを、しらで有べきにあらず、學問の志なきものは、論のかぎりにあらず、かりそめにもその心ざしあらむ者は、同じくは道のために、力を用ふべきこと也、然るに道の事をば、なほざりにさしおきて、たゞ末の事にのみ、かゝづらひをらむは、學問の本意にあらず、さて道を學ぶにつきては、天地の間にわたりて、殊にすぐれたる、まことの道の傳はれる、御國に生れ來つるは、幸とも幸なれば、いかにも此たふとき皇國の道を學ぶべきは、勿論のこと也、

(ホ)此道は、古事記書紀の二典に記されたる云々、道は此二典にしるされたる、神代のもろ〳〵の事跡のうへに備はりたれども、儒佛などの書のやうに、其道のさまを、かやう〳〵と、さして敎へたることなければ、かの儒佛の書の目うつしにこれを見ては、道の趣、いかなるものともしりがたく、とらへどころなきが如くなる故に、むかしより世々の物しり人も、これをえとらへず、さとらずして、或は佛道の意により、或は儒道の意にすがりて、これを說たり、其內昔の說は、多く佛道によりたりしを、百五六十年以來は、かの佛道によれる說の、非なることをばさとりて、其佛道の意をば、よくのぞきぬれども、その輩の說は、又皆儒道の意に落入て、近世の神學者流みな然也、其中にも流々有て、すこしづゝのかはりはあれども、大抵みな同じやうなる物にて、神代紀をはじめ、もろ〳〵の神典のとりさばき、たゞ陰陽八卦五行など、すべてからめきたるさだのみにして、いさゝかも古への意にかなへることなく、說クところ悉皆儒道にて、たゞ名のみぞ神道にては有ける、されば世の儒者などの、此神道家の說を聞て、神道といふ物は、近き世に作れる事也とて、いやしめわらふは、げにことわり也、此神學者流のともがら、かの佛道によりてとけるをば、ひがことゝしりながら、又おのが儒道によれるも、同じくひがことなる事をば、えさとらぬこそ可笑しけれ、かくいへば、そのともがらは、神道と儒道とは、その致一ッなる故に、これを假て說也、かの佛を牽合したる類ヒにはあらず、といふめれども、然思ふは、此道の意をえさとらざる故也、もしさやうにいはゞ、かの佛道によりて說ク輩も又、神道とても、佛の道の外なることなし、一致也とぞいふべき、これら共に、おの〳〵其道に惑へるから、然思ふ也、まことの神道は、儒佛の敎へなどゝは、いたく趣の異なる物にして、さらに一致

なるとなし、すべて近世の神學家は、件のごとくなれば、かの漢學者流の中の、宋學といふに似て、いさゝかもわきめをふらず、たゞ一すぢに道の事をのみ心がくめれども、ひたすら漢流の理窟にのみからめられて、古の意をば、尋ねんものとも思はず、其心を用るこころ、みな儒意なれば、深く入ルほど、いよ〳〵道の意には遠き也、さて又かの佛の道によりて說ることもがらは、その行法も、大かた佛家の行法にならひて、造れる物にして、さらに皇國の古への行ひにあらず、又かの近世の儒意の神道家の、これこそ神道の行ひよとて、物する事共、葬喪祭祀等の式、其外も、世俗とかはりて、別に一種の式を立て行ふも、これ又儒意をまじへて、作れると多くして、全く古への式にはあらず、すべて何事も、古への御世に、漢風をしたひ用ひられて、多くかの國ざまに改められたるから、上古の式はうせて、世に傳はらざるが多ければ、そのさだかにこまかなることは、知リがたくなりぬる、いと〳〵歎かはしきわざ也、たま〳〵片田舍などには、上古の式の殘れる事も有とおぼしけれども、それも猶佛家の事などのまじりて、正しく傳はれるは有がたかめり、そも〳〵道といふ物は、上に行ひ玉ひて、下へは、上より敷キ施し給ふものにこそあれ、下たる者の、私に定めおこなふものにはあらず、されば神學者などの、神道の行ひとて、世間に異なるわざをするは、たとひ上古の行ひにかなへると有といへども、今の世にしては私なり、道は天皇の天下を治めさせ給ふ、正大公共の道なるを、一己の私の物にして、みづから狹く小チヒサく說トキなして、たゞ巫覡などのわざのごとく、或はあやしきわざを行ひなどして、それを神道となのるは、いとも〳〵あさましくかなしき事也、すべて下たる者は、よくてもあしくても、その時々の上の掟のまゝに、從ひ行ふぞ、卽チ古への道の意には有ける、吾はかくのごとく思ひとれる故に、吾家、すべて先祖の祀リ、供佛施僧のわざ等も、たゞ親の世より爲シ來りたるまゝにて、世俗とかはる事なくして、たゞこれをおろそかならざらんとするのみ也、學者はたゞ、道を尋ねて明らめしるをこそ、つとめとすべけれ、私に道を行ふべきものにはあらず、されば隨分に、古の道を考へ明らめて、そのむねを、人にもをしへさとし、物にも書キ遺ノコしおきて、たとひ五百年千年の後にもあれ、時至りて、上にこれを用ひ行ひ給ひて、天下にしきほどこし給はん世をまつべし、これ宣長が志ザシ也、

（へ）初學のともがらは宣長が著したる云々、　神典には、世々の注釋末書あまたあるを、さしおきて、みづから著せる書を、まづよめといふは、大に私なるに似たれども、必ス然すべき故あり、いで其故は、注釋末書は多しといへども、まづ釋日本紀などは、道の意を示し明したる事なく、私記の說といへども、すべていまだしくをさなき事のみ也、又その後々の末書注釋どもは、佛と儒との意にして、さらに古の意にあらず、返て大に道を害することのみ也、されば今、道のために、見てよろしきは、一つもあるヿなし、さりとて又初學のともがら、いかほど力を用ふとも、二典の本文を見たるばかりにては、道の趣、たやすく會得しがたかるべし、こゝにわが縣居ノ大人は、世の學者の、漢意のあしきヿをよくさとりて、ねんごろにこれをさとし教へて、盛ンに古學を唱へ玉ひしかども、其力を万葉集にむねと用ひて、道の事までは、くはしくは及ばれず、事にふれては、其事もいひ及ぼされてはあれども、力をこれにもはらと入れられざりし故に、あまねくゆきわたらず、されば道のすぢは、此大人の說も、なほたらはぬヿ多ければ、まづ速に道の大意を心得んとするに、のり長が書共をおきて外に、まづ見よとをしふべき書は、世にあるヿなければ也、さる故に下には、古事記傳をも、おほけなく古書共にならべて、これをあげたり、かくいふをも、なほ我慢なる大言のやうに、思ひいふ人もあるべけれど、さやうに人にあしくいはれんヿをはゞかりて、おもひとれるすぢを、いはざらんは、かへりて初學のために、忠實（マメ）ならざれば、あしくいはむ人には、いかにもいはれんかし、

（ト）第一に漢意儒意を云々、　おのれ何につけても、ひたすら此事をいふは、ゆゑなくみだりに、これをにくみてにはあらず、大きに故ありていふ也、その故は、古の道の意の明らかならず、人みな大にこれを誤りしたゝめたるは、いかなるゆゑぞと尋ぬれば、みな此漢意に心のまどはされ居て、それに妨（サマタ）げらるゝが故也、これ千有餘年、世ノ中の人の心の底に染（シミ）著（ツキ）てある、痼疾なれば、とにかくに清くはのぞこりがたき物にて、近きころは、道をとくに、儒意をまじふるヿの、わろきをさとりて、これを破する人も、これかれ聞ゆれども、さやうの人すら、なほ清くこれをまぬかるゝヿあたはずして、その說クところ、畢竟は漢意におつるなり、かくのごとくなる故に、道をしるの要、まづこれを清くのぞき去ルにありとはいふ

也、これを清くのぞきさらでは道は得がたかるべし、初學の輩、まづ此漢意を清く除き去て、やまとたましひを堅固(カタ)くすべきことは、たとへばものゝふの、戰場におもむくに、まづ具足をよくし、身をかためて立出るがごとし、もし此身の固めをよくせずして、神の御典(ミフミ)をよむときは、甲冑をも着ず、素膚(スハダ)にして戰ひて、たちまち敵のために、手を負ふがごとく、かならずからごゝろに落入べし、

(チ)道をしらんためには、殊に古事記をさきとすべし、まづ神典は、舊事紀古事記日本紀を、昔より、三部の本書といひて、其中に世の學者の學ぶところ、日本紀をむねとし、次に舊事紀は、聖德太子の御撰として、これを用ひて、古事記をば、さのみたふとまず、深く心を用る人もなかりし也、然るに近き世に至りてやう〳〵、舊事紀は眞の書にあらず、後の人の撰び成せる物なることをしりそめて、今はをさ〳〵これを用る人はなきやうになりて、古事記のたふときことをしれる人多くなれる、これ全く吾師ノ大人の敎ヘによつて、學問の道大にひらけたるが故也、まことに古事記は、漢文のかざりをまじへたることなどなく、たゞ古ヘよりの傳說のまゝにて、記しざまいと〳〵めでたく、上代の有さまをしるに、これにしく物なく、そのうへ神代の事も、書紀よりは、つぶさに多くしるされたれば、道をしる第一の古典にして、古學のともがらの、尤尊み學ぶべきは此書也、然るゆゑに、己レ壯年より、數十年の間、心力をつくして、此記の傳四十四卷をあらはして、いにしへ學ビのしるべとせり、さて此記は、古傳說のまゝにしるせる書なるに、その文のなほ漢文ざまなるはいかにといふに、奈良の御代までは、假字文といふことはなかりし故に、書はおしなべて、漢文に書るならひなりき、そも〳〵文字書籍は、もと漢國より出たる物なれば、皇國に渡り來ても、その用ひやう、かの國にて物をしるす法のまゝにならひて書キそめたるにて、こゝとかしことは、語のふりはたがへることあれども、片假字も平假字もなき以前は、はじめよりのならひのまゝに、物はみな漢文に書たりし也、假字文といふ物は、いろは假字出來て後の事也、いろは假字は、今の京になりて後に、出來たり、されば古書のみな漢文なるは、古ヘの世のなべてのならひにこそあれ、後世のごとく、好みて漢文に書るにはあらず、さて哥は、殊に詞にあやをなして、一もじもたがへては、かなはぬ物なる故に、古書にもこれをば、別に假字に書り、

それも眞假字也、又祝詞宣命なども、詞をこゝのへかざりたる物にて、漢文ざまには書がたければ、これも別に書法有し也、然るを後世に至りては、片假字平假字といふ物あれば、萬の事、皇國の語のまゝに、いかやうにも自由に、物はかゝるゝとなれば、古へのやうに、物を漢文に書べきことにはあらず、便よく正しき方をすてゝ、正しからず不便なるかたを用るは、いと愚也、上件の子細をわきまへざる人、古書のみな漢文なるを見て、今も物は漢文に書クをよきことゝ心得たるは、ひがこと也、然るに諸家の記錄其外、つねの文書消息文などのたぐひは、なほ後世までも、みな漢文ざまに書クならひにて、これを男もじ男ぶみといひ、いろは假字をば女もじ、假字文をば、女ぶみとしもいふなるは、男はおのづからかの古へのならひのまゝに爲來シキタり、女は便にまかせて、多くいろは假字をのみ用ひたるから、かゝる名目も有也、

(リ)書紀をよむには大に心得あり云々、書紀は、朝廷の正史と立られて、御世々々萬の事これによらせ給ひ、世々の學者も、これをむねと學ぶこと也、まことに古事記は、しるしざまは、いとめでたく尊けれども、神武天皇よりこなたの、御代々々の事をしるされたる、甚あらくすくなくして、廣からず、審ならざるを、此紀は、廣く詳にしるされたるほど、たぐひなく、いともたふとき御典也、此御典なくては、上古の事どもを、ひろく知べきよしなし、然はあれども、すべて漢文の潤色多ければ、これをよむに、はじめよりその心得なくてはあるべからず、然るを世間の神學者、此わきまへなくして、ただ文のまゝにこゝろえ、返て漢文の潤色の所を、よろこび尊みて、殊に心を用るほどに、すべての解し樣ヤウ、ことごとく漢流の理窟にして、いたく古への意にたがへり、これらの事、大抵は古事記傳の首巻にしるせり、猶又別に、神代紀のうずの山蔭といふ物を書ていへり、ひらき見るべし、

(ヌ)六國史といふ云々、六國史のうち日本後紀は、いかにしたるにか、亡ウセて傳はらず、今それとて廿巻あるは、全き物にあらず、然るに近き世、鴨ノ祐之といひし人、類聚國史をむねと取リ、かたはら他の正しき古書共をもとり加へて、日本逸史といふ物四十巻を撰定せる、後紀のかはりは、此書にてたれり、類聚國史は、六國史に記されたる諸の事を、部類を分ケ聚めて、菅原ノ大臣の撰玉へる書也、さて三代實錄の後は、正しき國史は無し、されば宇多ノ天皇よりこなたの御世々々の

事は、たゞこれかれかたはらの書共を見てしるヿ也、其書ども、國史のたぐひなるも、あまた有、近世水戸の大日本史は、神武天皇より、後小松ノ天皇の、後龜山ノ天皇の御禪(ミユヅリ)を受させ給へる御事までしるされて、めでたき書也、

(ル)御世々の宣命には云々、書紀に擧られたる、御世々の詔勅は、みな漢文なるのみなるを、續紀よりこなたの史共には、皇朝詞の詔をも、載せられたる、これを分て宣命といふ也、續紀なるは、世あがりたれば、殊に古語多し、その次次の史どもなる、やう〳〵に古き語はすくなくなりゆきて、漢詞おほくまじれり、すべて宣命にはかぎらず、何事にもせよ、からめきたるすぢをはなれて、皇國の上代めきたるすぢの事や詞は、いづれの書にあるをも、殊に心をとゞめて見るべし、古へをしる助ヶとなるヿ也、

(ヲ)釋日本紀、此書は後の物にて、説もすべてをさなけれども、今の世には傳はらぬ古書どもを、これかれと引出たる中に、いとめづらかに、たふときヿゞもの有也、諸國の風土記なども、みな今は傳はらざらに、此書と仙覺が萬葉の抄とに、引出たる所々のみぞ、世にのこれる、これ殊に古學の用なり、又むかしの私記どもゝ、皆亡(ウセ)ぬるを、此釋には、多く其説をあげたり、私記の説も、すべてをさなけれども、古き故に、さすがに取ルべき事もまゝある也、さて六國史をはじめて、こゝに擧たる書共いづれも、板本も寫本も、誤字脱文等多ければ、古本を得て、挍正すべし、されど古本は、たやすく得がたきものなれば、まづ人の挍正したる本を、求め借りてなりとも、つぎ〳〵直すべき也、さて又ついでにいはむ、今の世は、古へをたふとみ好む人おほくなりぬるにつきては、おのづからめづらしき古書の、世に埋れたるも、顯れ出る有(リ)、又それにつきては、僞書も多く出るを、その眞僞は、よく見る人は、見分れども、初學の輩などは、え見分ねば、僞書によくはからるゝ事あり、心すべし、されば初學のほどは、めづらしき書を得んヿをば、さのみ好むべからず、

(ワ)古事記傳云々、みづから著せる物を、かくやむヿなき古書どもにならべて擧るは、おふけなく、つゝましくはおぼゆれども、上にいへるごとくにて、上代の事を、くはしく説キ示し、古學の心ばへを、つまびらかにいへる書は、外になければぞかし、されば同じくは此書も、二典とまじへて、はじめより見てよろしけれども、卷數多ければ、こゝへはまはし

たる也、

(カ)古學の輩の、古學とは、すべて後世の說にかゝはらず、何事も、古書によりて、その本を考へ、上代の事を、つまびらかに明らむる學問也、此學問、ちかき世に始まれり、契沖ほうし、哥書に限りてはあれど、此道すぢを開きそめたり、此人をぞ、此まなびのはじめの祖ともいひつべき、次にいさゝかおくれて羽倉ノ大人、荷田ノ東麻呂ノ宿禰と申せしは、哥書のみならず、すべての古書にわたりて、此こゝろばへを立テ玉へりき、かくてわが師あがたゐの大人、この羽倉ノ大人の教をつぎ給ひ、東國に下り江戸に在て、さかりに此學を唱へ玉へるよりぞ、世にはあまねくひろまりにける、大かた奈良ノ朝よりしてあなたの古への、もろ〳〵の事のさまを、こまかに精しく考へしりて、手にもとるばかりになりぬるは、もはら此大人の、此古學のをしへの功にぞ有ける、

(ヨ)初心のほどは、かたはしより文義を云々、文義の心得がたきところを、はじめより、一々に解せんとしては、とどこほりて、すゝまぬことあれば、聞えぬところは、まづそのまゝにて、過すぞよき、殊に世に難き事にしたるふし〴〵を、まづしらんとするは、いと〳〵わろし、たゞよく聞えたる所に、心をつけて、深く味ふべき也、こはよく聞えたる事也と思ひて、なほざりに見過せば、すべてこまかなる意味もしられず、又おほく心得たがひの有て、いつまでも、其誤リをえさとらざる事有也、

(タ)其末の事は、一々さとし教るに及ばず、此こゝろをふと思ひよりてよめる哥、筆のついでに、「とる手火も今はなにせむ夜は明てほがら〳〵と道見えゆくを、

(レ)ひろくも見るべく又云々、博識とかいひて、隨分ひろく見るも、よろしきことなれども、さては緊要の書を見ることの、おのづからおろそかになる物なれば、あながちに廣きをよきとのみもすべからず、その同じ力を、緊要の書に用るもよろしかるべし、又これかれにひろく心を分るは、たがひに相たすくることもあり、又たがひに害となることもあり、これらの子細をよくはからふべき也、

(ソ)五十音のとりさばき云々、これはいはゆる假字反シの法、音の竪横の通用の事、言の延(ノベ)つゞめの例などにつきて、古語を解キ明らむるに、要用のこと也、かならずはじめより心がくべし、假字づかひは、古へのをいふ、近世風の哥よみのかなづかひは、中昔よりの事にて、古書にあはず、

(ツ)語釋は緊要にあらず、語釋とは、もろ〳〵の言の、然云フ本の意を考へて、釋(トク)をいふ、たとへば天(アメ)といふはいかなること、地(ツチ)といふはいかなることゝ、釋(ト)くたぐひ也、こは學者の、たれもまづしらまほしがることなれども、これにさのみ深く心をもちふべきにはあらず、こは大かたよき考へは出來がたきものにて、まづはいかなることゝも、しりがたきわざなるが、しひてしらでも、事かくことなく、しりてもさのみ益なし、されば諸の言は、その然云フ本の意を考へんよりは、古人の用ひたる所をよく考へて、云々(シカ〳〵)の言は、云々の意に用ひたりといふことを、よく明らめ知るを、要とすべし、言の用ひたる意をしらでは、其所の文意聞えがたく、又みづから物を書クにも、言の用ひやうたがふこと也、然るを今の世古學の輩、ひたすら然云フ本の意をしらんことをのみ心がけて、用る意をば、なほざりにする故に、書をも解し誤り、みづからの哥文も、言の意用ひざまたがひて、あらぬひがこと多きぞかし、

(ネ)からぶみをもまじへよむべし、漢籍を見るも、學問のために益おほし、やまと魂だによく堅固(カタ)まりて、動くことなければ、晝夜からぶみをのみよむといへども、かれに惑はさるゝうれひはなきなり、然れども世の人、とかく倭魂(ヤマトタマシヒ)かたまりにくき物にて、から書をよめば、そのことよきにまどはされて、たじろきやすきならひ也、ことよきとは、その文辭を、麗(ウルハ)しといふにはあらず、詞の巧にして、人の思ひつきやすく、まどはされやすきさまなるをいふ也、すべてから書は、言巧にして、ものゝ理非を、かしこくいひまはしたれば、人のよく思ひつく也、すべて學問すぢならぬ、よのつねの世俗の事にても、辯舌よく、かしこく物をいひまはす人の言には、人のなびきやすき物なるが、漢籍もさやうなるものと心得居べし、

(ナ)古書の注釋を作らんと云々、書をよむに、たゞ何となくてよむときは、いかほど委く見んと思ひても、限リあるものな

るに、みづから物の注釋をもせんと、こゝろがけて見るときには、何れの書にても、格別に心のとまりて、見やうのくはしくなる物にて、それにつきて、又外にも得る事の多きもの也、されば其心ざしたるすぢ、たとひ成就はせずといへども、すべて學問に大に益あること也、是は物の注釋のみにもかぎらず、何事にもせよ、着述をこゝろがくべき也、

（ラ）萬葉集をよくまなぶべし、　此書は、哥の集なるに、二典の次に擧て、道をしるに甚益ありといふは、心得ぬことに、人おもふらめども、わが師ノ大人の古學のをしへ、專らこゝにあり、其説に、古への道をしらんとならば、まづいにしへの哥を學びて、古風の哥をよみ、次に古の文を學びて、古へぶりの文をつくりて、古言をよく知りて、古事記日本紀をよくよむべし、古言をしらでは、古意はしられず、古意をしらでは、古の道は知りがたかるべし、といふこゝろばへを、つね〴〵いひて、敎へられたる、此敎へ迂遠(マハリドホ)きやうなれども、然らず、その故は、まづ大かた人は、言(コトバ)と事(ワザ)と心(コヽロ)と、そのさま大抵相かなひて、似たる物にて、たとへば心のかしこき人は、いふ言のさまも、なす事(ワザ)のさまも、それに應じてかしこく、心のつたなき人は、いふ言のさまも、なすわざのさまも、それに應じてつたなきもの也、又男は、思ふ心も、いふ言も、なす事も、男のさまあり、女は、おもふ心も、いふ言も、なす事(ワザ)も、女のさまあり、されば時代々々の差別も、又これらのごとくにて、心も言も事も、上代の人は、上代のさま、中古の人は、中古のさま、後世の人は、後世のさま有て、おの〳〵そのいへる言となせる事と、思へる心と、相かなひて似たる物なるを、今の世に在て、その上代の人の、言をも事をも心をも、考へしらんとするに、そのいへりし言は、哥に傳はり、なせりし事は、史に傳はれるを、その史も、言を以て記したれば、言の外ならず、心のさまも、又哥にて知ルべし、言と事と心とは其さま相かなへるものなれば、後世にして、古の人の、思へる心、なせる事(ワザ)をしりて、その世の有さまを、まさしくしるべきことは、古言古哥にある也、さて古の道は、二典の神代上代の事跡のうへに備はりたれば、古言古哥をよく得て、これを見るときは、其道の意、おのづから明らかなり、さるによりて、上にも、初學のともがら、まづ神代正語をよくよみて、古語のやうを口なれしれとはいへるぞかし、古事記は、古傳説のまゝに記されてはあれども、なほ漢文なれば、正(マサ)しく古言をしるべきことは、萬葉には及ばず、書紀は、殊に

漢文のかざり多ければ、さら也、さて二典に載れる哥ごもは、上古のなれば、殊に古言古意をしるべき、第一の至寶也、然れごもその數多からざれば、ひろく考るに、こごたらざるを、萬葉は、哥數いと多ければ、古言はをさ〳〵もれたるなく、傳はりたる故に、これを第一に學べとは、師も敎へられたる也、すべて神の道は、儒佛などの道の、善惡是非をこちたくさだせるやうなる理窟は、露ばかりもなく、たゞゆたかにおほらかに、雅たる物にて、哥のおもむきぞ、よくこれにかなへりける、さて此萬葉集をよむに、今の本、誤字いと多く、訓もわろきとおほし、初學のともがら、そのこゝろえ有べし、(ム)みづからも古風の哥をまなびてよむべし、すべて萬ッの事、他のうへにて思ふと、みづからの事にて思ふとは、淺深の異なるものにて、他のうへの事は、いかほど深く思ふやうにても、みづからの事ほごふかくはしまぬ物なり、哥もさやうにて、古哥をば、いかほど深く考へても、他のうへの事なれば、なほ深くいたらぬところあるを、みづからよむになりては、我ヵ事なる故に、心を用ると格別にて、深き意味をしることこ也、さればこそ師も、みづから古風の哥をよみ、古ぶりの文をつくれとは、敎へられたるなれ、文の事は、古文は、延喜式八の卷なる諸の祝詞、續紀の御世々々の宣命など、古語のまゝにのこれる文也、二典の中にも、をり〳〵は古語のまゝなる文有リ、其外の古書共にも、をり〳〵は古文まじれるとあり、これかれをとりて、のりとすべし、万葉は哥にて、哥と文とは、詞の異なることなどあれごも、哥と文との、詞づかひのけぢめを、よくわきまへえらびてとらば、哥の詞も、多くは文にも用ふべきものなれば、古文を作る學びにも、万葉はよく學ばでかなはぬ書也、なほ文をつくるべき學びかた、心得なども、古體近體、世々のさまなど、くさ〴〵いふべき事多くあれごも、さのみはこゝにつくしがたし、大抵哥に准へても心得べし、そのうち文には、いろ〳〵のしなあるとにて、其品によりて、詞のつかひやう其外、すべての書キやう、かはれること多ければ、其心得有べし、いろ〳〵のしなとは、序、或は論、或は紀事、或は消息など也、さて後世になりて、萬葉ぶりの哥を、たてゝよめる人は、たゞ鎌倉ノ右大臣殿のみにして、外には聞えざりしを、吾師ノ大人のよみそめ給ひしより、其敎によりて、世によむ人おほく出來たるを、其人ごもの心ざすところ、必しも古の道を明らめんためによむにはあらず、おほくはたゞ哥を好みもてあそぶのみにして、

その心ざしは、近世風の哥よみの輩と、同じこと也、さればよき哥をよみ出むと心がくることも、近世風の哥人とかはる事なし、それにつきては、道のために學ぶすぢをば、姑くおきて、今は又たゞ哥のうへにつきての心得どもをいはんとす、そもそも哥は、思ふ心をいひのぶるわざといふうちに、よのつねの言とはかはりて、必ス詞にあやをなして、しらべをうるはしくとゝのふる道なり、これ神代のはじめより然り、詞のしらべにかゝはらず、たゞ思ふまゝにいひ出るは、つねの詞にして、哥といふものにはあらず、さてその詞のあやにつきて、よき哥とあしき哥とのけぢめあるを、上代の人は、たゞ一わたり、哥の定まりのしらべをとゝのへてよめるのみにして、後世の人のやうに、思ひめぐらして、よくよまんとかまへ、たくみてよめることはなかりし也、然れども、その出來たるうへにては、おのづからよく出來たると、よからざるとが有て、その中にすぐれてよく出來たる哥は、世間にもうたひつたへて、後ノ世までものこりて、二典に載れる哥どもなど是也、されば二典なる哥は、みな上代の哥の中にも、よにすぐれたるかぎりと知べし、古事記には、たゞ哥をのせんためのみに、其事を記されたるも、これかれ見えたるは、その哥のすぐれたるが故なり、さてかくのごとく哥は、上代よりして、よきとあしきと有て、人のあはれとき、神の感じ給ふも、よき哥にあること也、あしくては、人も神も、感じ給ふことなし、神代に天照大御神の、天の石屋（イハヤ）にさしこもり坐（マシ）し時、天ノ兒屋根ノ命の祝詞（ノリトゴト）に、感じ給ひしも、その辭のめでたかりし故なること、神代紀に見えたるがごとし、哥も准へて知ルべし、さればやゝ世くだりては、かまへてよき哥をよまんと、もとむるやうになりぬるも、かならず然らではえあらぬ、おのづからの勢ひにて、萬葉に載れるころの哥にいたりては、みなかまへてよくよまんと、求めたる物にこそあれ、おのづからに出來たるは、いとすくなかるべし、萬葉の哥すでに然るうへは、まして後世今の世には、よくよまんとかまふること、何かはとがむべき、これおのづからの勢ひなれば、古風の哥をよまん人も、隨分に詞をえらびて、うるはしくよろしくよむべき也、

(ウ)萬葉の哥の中にても云々、　此集は、撰びてあつめたる集にはあらず、よきあしきえらびなく、あつめたれば、古へながらも、あしき哥も多し、善惡をわきまへて、よるべきなり、今の世、古風をよむともがらの、よみ出る哥を見るに、万葉の

中にても、ここに耳なれぬ、あやしき詞をえり出つかひて、ひたすらにふるめかして、人の耳をおどろかさんとかまふるは、いと〳〵よろしからぬこと也、哥も文も、しひてふるくせんとて、求め過たるは、かへす〳〵うるさく、見ぐるしきものぞかし、萬葉の中にても、たゞやすらかに、すがたよき哥を、手本として、詞もあやしきをば好むまじき也、さて又哥も文も、同じ古風の中にも、段々有て、いたく古きと、さもあらぬとあれば、詞もつゞけざまも、大抵その全躰の程に應ずべきことなるに、今の人のは、全躰のほどに應ぜぬ詞をつかふこと多くして、一首一篇の内にも、いたくふるき詞づかひのあるかと見れば、又むげに近き世の詞もまじりなどして、其躰混雜せり、すべて古風家の哥は、後世家の、あまり法度にかゝはり過るを、にくむあまりに、たゞ法度にかゝはらぬを、心高くよき事として、そのよみかた、甚ダみだりなり、万葉のころとても、法度といふことこそなけれ、おのづから定まれる則は有て、みだりにはあらざりしを、法度にかゝはらぬを、古へと心得るは、大にひがこと也、既に今の世にして、古へをまねてよむからは、古へのさだまりにかなはぬ事有ては、古風といふ物にはあらず、今の人は、口にはいにしへ〳〵と、たけ〴〵しくよばゝりながら、古への定まりを、えわきまへざるゆゑに、古へは定まれることはなかりし物と思ふ也、萬葉風をよむことは、ちかきほど始まりたることにて、いまだその法度を示したる書などもなき故に、とかく古風家の哥は、みだりなることおほきぞかし、

(ヰ)長哥をもよむべし、　長哥は、古風のかた殊にまされり、古今集なるは、みなよくもあらず、中にいとつたなきもあり、大かた今の京になりての世には、長哥よむことは、やう〳〵にまれになりて、そのよみざまも、つたなくなりし也、後世にいたりては、いよ〳〵よむことまれなりしを、万葉風の哥をよむ事おこりて、近きほどは、又皆長哥をも多くよむことゝなりて、其中には、万葉集に入ルとも、をさ〳〵はづかしかるまじきほどのも、まれには見ゆるは、いとも〳〵めでたき大御世の榮えにぞ有ける、そも〳〵世の中にあらゆる諸の事の中には、哥によまんとするに、後世風にては、よみとりがたき事の多かるに、返て古風の長哥にては、よくよみとらるゝことおほし、これらにつけても、古風の長哥、必ズよみならふべきこと也、

(ノ)又後世風をもすてずして云々、　今の世、萬葉風をよむ輩は、後世の哥をば、ひたすらあしきやうに、いひ破れども、そは實によきあしきを、よくこゝろみ、深く味ひしりて、然いふにはあらず、たゞ一わたりの理にまかせて、萬ッの事、古へはよし、後世はわろしと、定めおきて、おしこめてそらづもりにいふのみ也、又古と後世との哥の善惡を、世の治亂盛衰に係(カヽ)ていふも、一わたりの理論にして、事實にはうときこと也、いと上代の哥のごとく、實情のまゝをよみいでばこそ、さることわりもあらめ、後世の哥は、みなつくりまうけてよむことなれば、たとひ治世の人なりとも、あしき風を學びてよまば、其哥あしかるべく、亂世の人にても、よき風をまなばゞ、其哥などかあしからん、又男ぶり女ぶりのさだも、緊要にあらず、つよき哥よわき哥の事は、別にくはしく論ぜり、大かた此古風と後世と、よしあしの論は、いと〳〵大事にて、さらにたやすくはさだめがたき、子細どもあることなるを、古學のともがら、深きわきまへもなく、かろ〳〵しくたやすげに、これをさだめいふは、甚ダみだりなること也、そも〳〵古風家の、後世の哥をわろしとするところは、まづ哥は、思ふこゝろをいひのぶるわざなるに、後世の哥は、みな實情にあらず、題をまうけて、己が心に思はぬ事を、さま〳〵とつくりて、意をも詞をも、むつかしくくるしく巧みなす、これみな僞りにて、哥の本意にそむけり、とやうにいふこれ也、まことに一わたりのことわりは、さることのやうなれども、これくはしきさまをわきまへざる論也、其故は、上にいへる如く、哥は、おもふまゝに、たゞにいひ出る物にはあらず、かならず言にあやをなして、とゝのへいふ道にして、神代よりさる事にて、そのよく出來てめでたきに、人も神も感じ給ふわざなるがゆゑに、既に萬葉にのれるころの哥とても、多くはよき哥をよまむと、求めかざりてよめる物にして、實情のまゝのみにはあらず、上代の哥にも、枕詞序詞などのあるを以てもさとるべし、枕詞や序などは、心に思ふことにはあらず、詞のあやをなさん料に、まうけたる物なるをや、もとより哥は、おもふ心をいひのべて、人に聞(カ)れて、聞(ク)人のあはれと感ずるによりて、わが思ふ心は、こよなくはるくることなれば、人の聞(ク)ところを思ふも、哥の本意也、されば世のうつりもてゆくにしたがひて、いよ〳〵詞にあやをなし、よくよまむともとめたくむかた、次第〳〵に長(チヤウ)じゆくは、必(ズ)然らではかなはぬ、おのづからの勢(ヒ)にて、後世の哥に至りては、實情をよめるは、百に

一ッも有がたく、皆作りごとになれる也、然はあれども、その作れるは、何事を作れるぞといへば、その作りざまこそ、世世にかはれることあれ、みな世の人の思ふ心のさまを作りいへるなれば、作り事とはいへども、落るこころはみな、人の實情のさまにあらずといふことなく、古への雅情にあらずといふことなし、さればひたすらに後世風をきらふは、その世々に變じたるこころをのみ見て、變ぜぬこころのあることをばしらざる也、後世の哥といへども、上代と全く同じきこころあることを思ふべし、猶いはゞ、今の世の人にして、万葉の古風をよむも、己が實情にはあらず、万葉をまねびたる作り事也、もしおのが今思ふ實情のまゝによむをよしとせば、今の人は、今の世俗のうたふやうなる哥をこそよむべけれ、古への人のさまをまねぶべきにはあらず、万葉をまねぶも、既に作り事なるうへは、後世に題をまうけて、意を作りよむも、いかでかあしからん、よき哥をよまんとするには、數おほくよまずはあるべからず、多くよむには、題なくはあるべからず、これらもおのづから然るべきいきほひ也、そも〳〵後世風、わろき事もあるは、勿論のこと也、然れどもわろき事をのみえり出て、わろくいはんには、古風の方にも、わろきことは有べし、一トむきに後世をのみ、いひおとすべきにあらず、後世風の哥の中にも、又いひしらずめでたくおもしろく、さらに古風にては、よみえがたき趣ども有ルこと也、すべてもろ〳〵の事の中には、古へよりも、後世のまされる事も、なきにあらざれば、ひたぶるに後世を惡しとすべきにもあらず、哥も、古へと後とを、くらべていはんには、たがひに勝劣ある中に、おのれ數十年よみこゝろみて、これを考るに、萬葉の哥のよきが、ゆたかにすぐれたることは、勿論なれども、今の世に、それをまなびてよむには、猶たらはぬことあるを、世々を經て、やう〳〵にたらひて、備はれる也、さればこそ、今の世に古風をよむ輩も、初心のほどこそ、何のわきまへもなく、みだりによみちらせ、すこしわきまへも出來ては、万葉風のみにては、よみとりがたき事など多き故に、やう〳〵と後世風の意詞をも、まじへよむほどに、いつしか後世風にちかくなりゆきて、なほをり〳〵は、ふるめきたる事もまじりて、さすがに全くの後世風にもあらず、しかも又古今集のふりにもあらず、おのづから別に一風なるも多きぞかし、これ古風のみにては、事たらざるこころのあるゆゑなり、すべて後世風をもよまではえあらぬよしを、なほいはゞ、まづ萬葉の哥を見るに、やす

らかにすがたよきは、其趣いづれも〳〵も、似たる事のみ多く、よめる意大抵定まれるが如くにて、或は下ノ句全く同じき哥などもおほく、すべて同じやうなる哥いと多し、まれ〳〵にめづらしき事をよめるは、多くはいやしげにて、哥ざまよろしからず、然るを万葉の後今の世まで、千餘年を經たる間、哥よむ人、みな〳〵万葉風をのみ守りて變ぜずして、しかもよき哥をよまんとせば、皆万葉なる哥の口まねをするやうにのみ出來て、外によむべき事なくして、新タによめる詮なかるべし、されば世々を經て、古人のよみふるさぬおもむきを、よみ出んとするには、おのづから世々に、そのさま變ぜではかなはず、次第にたくみもこまやかにふかくなりゆかではかなはぬだうり也、古人の多くよみたる事を、同じさまによみたらんには、其哥よしとても、人も神も感じ給ふことあるべからず、もし又古へによみふるさぬ事を、一ふしめづらしく、萬葉風にてよまんとせば、いやしくあしき哥になりぬべし、かの集の哥すらさやうなれば、まして今の世をや、此事猶一ッのたとへを以ていはん、古風は白妙衣のごとく、後世風は、くれなる紫いろ〳〵染たる衣のごとし、白妙衣は、白たへにしてめでたきを、染衣も、その染色によりて、又とりどりにめでたし、然るを白妙めでたしとて、染たるをば、ひたぶるにわろしとすべきにあらず、たゞその染たる色には、よきもありあしきもあれば、そのあしきをこそ棄ッべきなれ、色よきをも、おしこめてすてんは、偏（ヒトムキ）ならずや、今の古風家の論は、紅紫などは、いかほど色よくても、白妙に似ざれば、みなわろしといはんが如し、宣長もはら古學によりて、人にもこれを教へながら、みづからよむこころの哥、古風のみにあらずして、後世風をも、おほくよむとを、心得ずと難ずる人多けれども、わが思ひとれるこころは、上の件のごとくなる故に、後世風をも、すてずしてよむ也、其中に古風なるは數すくなくして、返て後世風なるが多きは、古風はよむべき事すくなく、後世風はよむ事おほきが故也、すべていにしへは、事すくなかりしを、後世になりゆくまに〳〵、萬の事しげくなるとおなじ、さて吾は、古風後世風ならべよむうちに、古と後とをば、清くこれを分ちて、たがひに混雜なきやうにと、深く心がくる也、さて又初學の輩、わがをしへにしたがひて、古風後世風ともによまんとせんに、まづいづれを先キにすべきぞといふに、萬の事、本をまづよくして後に、末に及ぶべきは、勿論のとなれども、又末よりさかのぼりて、本

にいたるがよき事もある物にて、よく思ふに、哥も、まづ後世風より入て、そを大抵得て後に、古風にかゝりてよき子細もあり、その子細を一ッ二ッいはゞ、後世風をまづよみならひて、その法度のくはしきをしるときは、古風をよむにも、その心得有て、つゝしむ故に、あまりみだりなるヿはよまず、又古風は時代遠ければ、今の世の人、いかによくまなぶといへども、なほ今の世の人なれば、その心全く古人の情のごとくには、變化しがたければ、よみ出る哥、古風とおもへども、猶やゝもすれば、近き後世の意詞のまじりやすきもの也、すべて哥も文も、古風と後世とは、全躰その差別なくてはかなはざるに、今の人の哥文は、とかく古と後と、混雜するヿをまぬかれざるを、後世風をまづよくしるときは、是は後世ぞといふヿをわきまへしる故に、その誤りすくなし、後世風をしらざれば、そのわきまへなき故に、返て後世に落るヿをおほきなり、すべて古風家、後世風をば、いみしく嫌ひながら、みづから後世風の混雜するヿをえしらざるは、をかしきこと也、古風をよむ人も、まづ後世風を學びて益あるヿ、猶此外にも有也、古と後との差別をだによくわきまふるときは、後世風をよむも、害あるヿなし、にくむべきことにあらず、たゞ古と後と混雜するをこそ、きらふべきものなれ、これはたゞ哥文のうへのみにもあらず、古の道をあきらむる學問にも、此わきまへなくては、おぼえず後世意にも漢意にも、落入ルヿ有べし、古意と後世意と漢意とを、よくわきまふるヿ、古學の肝要なり、

(オ)後世風の中にもさま〴〵よきあしきふり〳〵あるを云々、かの染衣のさま〴〵の色には、よきも有リあしきもあるが如く、後世風の哥も、世々を經て、つぎ〳〵にうつり變れる間々には、よきとあしきとさま〴〵の品ある、其中にまづ古今集は、世もあがり、撰びも殊に精しければ、いと〳〵めでたくして、わろき哥はすくなし、中にもよみ人しらずの哥どもには、師もつねにいはれたるごとく、殊によろしきぞ多かる、そはおほくふるき哥の、ことにすぐれたる也、さて此集は、古風と後世風との中間に在て、かのふるき哥どもなどは、萬葉の中のよき哥どものさまと、をさ〳〵かはらぬもおほくして、殊にめでたければ、古風の哥を學ぶ輩も、これをのりとしてよろしき也、然れども大かた光孝天皇宇多天皇の御代のころよりこなたの哥は、万葉なるとはいたくかはりて、後世風の方にちかきさまなれば、此集をば、姑く後世風の始めの、めで

たき哥とさだめて、明暮にこれを見て、今の京となりてよりこなたの、哥といふ物のすべてのさまを、よく心にしむべき也、次に後撰集拾遺集は、えらびやう甚〻あらくみだりにして、えもいはぬわろき哥の多き也、然れどもよき哥も又おほく、中にはすぐれたるもまじれり、さて次に後拾遺集よりこなたの、代々の撰集ども、つぎ〳〵に盛衰善惡さま〴〵あれども、そをこまかにいはむには、甚〻事長ければ、今は省きて、その大抵をつまみていはゞ、其間〻に新古今集は、そのころの上手たちの哥どもは、意も詞もつゞけざまも、一首のすがたも、別に一ッのふりにて、前にも後にもたぐひなく、其中に殊によくとゝのひたるは、後世風にとりては、えもいはずおもしろく心ふかくめでたし、そも〳〵上代より今の世にいたるまでを、おしわたして、事のたらひ備りたる、哥の眞盛(マサカリ)は、古今集ともいふべけれども、又此新古今にくらべて思へば、古今集もなほたらはずそなはらざる事あれば、新古今を眞盛といはんも、たがふべからず、然るに古風家の輩、殊に此集をわろくいひ朽(クタ)すは、みだりなる強(シヒ)ごと也、おほかた此集のよき哥をめでざるは、風雅の情をしらざるものとこそおぼゆれ、但し此時代の哥人たち、あまりに深く巧をめぐらされたるほどに、其中に又くせ有て、あしくよみ損じたるは、殊の外に心得がたく、無理なるもおほし、されどさるたぐひなるも、詞うるはしく、いひまはしの巧なる故に、無理なる聞えぬ事ながらに、うちよみあぐるに、おもしろくて捨がたくおぼゆるは、此ほどの哥共也、されどこれは、此時代の上手たちの、あやしく得たるこころにて、さらに後の人の、おぼろけにまねび得べきこころにはあらず、しひてこれをまねびなば、えもいはぬすゞろごとになりぬべし、いまだしきほどの人、ゆめ〳〵このさまをしたふべからず、されど又、哥のさまをくはしくえたらんうへにては、さのみいひてやむべきにもあらず、よくしたゝめなば、まねび得るとも、などかは絶てなからん、さて又玉葉風雅の二ッの集は、爲兼卿流の集なるが、彼卿の流の哥は、皆ことやうなるものにして、いといやしくあしき風なり、されば此一流は、其時代よりして、異風と定めしと也、さて件ッの二集と、新古今とをのぞきて外は、千載集より、廿一代のをはり新續古今集までのあひだ、格別にかはれることなく、おしわたして大抵同じふりなる物にて、中古以來世間普通の哥のさまこれなり、さるは世の中こぞりて、俊成卿定家卿の教へをたふとみ、他門の人々とても、大抵みなその掟を

守りてよめる故に、よみかた大概に同じやうになりて、世々を經ても、さのみ大きにかはれる事はなく、定まれるやうになれるなるべし、世に二條家の正風躰といふすがた是也、此ノ代々の集の内にも、すこしづゝは、勝劣も風のかはりもあれども、大抵はまづ同じ事也、さて初學の輩の、よむべき手本には、いづれをとるべきぞといふに、上にいへるごとく、まづ古今集をよく心にしめおきて、さて件ゞの千載集より新續古今集までは、新古今と玉葉風雅とをのぞきては、いづれをも手本として宜し、然れども件の代々の集を見渡すことも、初心のほどのつとめには、たへがたければ、まづ世間にて、頓阿法師の草庵集といふ物などを、會席などにもたづさへ持て、題よみのしるべとすることなるが、いかにもこれよき手本也、此人の哥、かの二條家の正風といふを、よく守りて、みだりなる事なく、正しき風にして、わろき哥もさのみなければ也、其外も題よみのためには、題林愚抄やうの物を見るも、あしからず、但し哥よむ時にのぞみて、哥集を見る事は、癖(くせ)になるものなれば、なるべきたけは、書を見ずによみならふやうにすべし、たゞ集共をば、常々心がけてよく見るべき也、さてこれより近世のなべての、哥人のならひの、よろしからざる事共をいひて、さとさむとす、そはまづ道統といひて、其傳來の事をいみしきわざとして、尊信し、哥も敎へも、たゞ傳來正しき人のをのみ、ひたすらによき物とかたくこゝろえ、傳來なき人のは、哥も敎へも、用ひがたきものとし、又古への人の哥及び其家の宗匠の哥などをば、よきあしきを考へ見る事もなく、たゞ及ばぬ事ゝして、ひたぶるに仰ぎ尊み、他門の人の哥といへば、いかほどよくても、これをとらず、心をとゞめて見んともせず、すべて己が學ぶ家の法度掟を、ひたすらに神の掟の如く思ひて、動く事なく、これをかたく守る事をのみ詮とするから、その敎へ法度にくゝられて、いたくなづめる故に、よみ出る哥みなすべて、詞のつゞけざまも、一首のすがたも、近世風又一ゝやうに定まりたる如くにて、わろきくせ多く、其さまいやしく窮屈にして、たとへば手も足もしばりつけられたるものゝ、うごく事かなはざるがごとく、いとくるしくわびしげに見えて、いさゝかもゆたかにのびらかなるところはなきを、みづからかへり見る事なく、たゞそれをよき事と、かたくおぼえたるは、いと〳〵固陋にして、つたなく愚なる事、いはんかたなし、かくのごとくにては、哥といふものゝ本意にたがひて、さらに雅(みやび)の趣にはあらざ

る也、そも〳〵道統傳來のすぢを、重くいみしき事にするは、もと佛家のならひよりうつりて、宋儒の流なども然也、佛家には、諸宗おの〳〵、わが宗のよゝの祖師の說をば、よきあしきをえらぶことなく、あしきとあるをも、おしてよしと定めて尊信し、それにたがへる他の說をば、よくても用ひざるならひなるが、近世の神學者哥人などのならひも、全くこれより出たるもの也、さるは神學者哥人のみにもあらず、中昔よりこなた、もろ〳〵の藝道なども、同じ事にて、いと愚なる世のならはしなり、たとひいかほど傳來はよくても、その敎よろしからず、そのわざつたなくては、用ひがたし、其中に諸藝などは、そのわざによりては、傳來を重んずべきよしもあれども、學問や哥などは、さらにそれによることにあらず、古へ の集共を見ても知べし、その作者の家すぢ傳來には、さらにかゝはることなく、誰にもあれ、ひろくよき哥をこれり、されば定家卿の敎へにも、和哥に師匠なしとのたまへるにあらずや、さて又世々の先達の立テおかれたる、くさ〴〵の法度掟の中には、かならず守るべき事も多く、又中にはいとつたなくして、必スかゝはるまじきも多きとなるに、ひたぶるに固くこれを守るによりて、返て哥のさまわろくなれるとも、近世はおほし、すべて此道の掟は、よきとあしきとをえらひて、守るべき也、ひたすらになづむべきにはあらず、又古人の哥はみな勝（スグ）れたる物のごとくこゝろえ、たゞ及ばぬ事とのみ思ひて、そのよしあしを考へ見んともせざるは、いと愚なると也、いにしへの哥といへども、あしきとら多く、哥仙といへども、哥どに勝（スグ）れたる物にもあらざれば、たとひ人まろ貫之の哥なりとも、實によき歟あしき歟を、考へ見て、及ばぬまでも、いろ〳〵と評論をつけて見るべき也、すべて哥の善惡を見分る稽古、これに過たる事なし、大に益あると也、然るに近世の哥人のごとく、及ばぬ事とのみ心得居ては、すべて哥の善惡を見分べき眼の、明らかになるよしなくして、みづからの哥も、よしやあしやをわきまふることあたはず、さやうにていつまでもたゞ、宗匠にのみゆだねもたれてあらんは、いふかひなきわざならずや、すべて近世風の哥人のごとく、何事も愚につたなき學びかたにては、生涯よき哥は出來るものにあらずと知べし、さて又はじめにいへる如く、哥をよむのみにあらず、ふるき集共をはじめて、哥書に見えたる萬の事を、解キ明らむる學を有リ、世にこれを分て哥學者といへり、哥學といへば、哥よむ事をまなぶとなれども、しばらく件のすぢ

を分て然いふ也、いにしへに在ッては、顯昭法橋など此すぢなるが、其說は、ゆきたらはぬ事多けれども、時代ふるき故に、用ふべき事もすくなからざるを、近世三百年以來の人々の說は、かの近世やうの、おろかなる癖おほきうへに、すべてをさなきとのみなれば、いふにもたらず、然るに近く契沖ほうし出てより、此學大キにひらけそめて、哥書のとりさばきは、よろしくなれり、さて哥をよむ事をのみわざとするも、此哥學の方をむねとするも、二やうなるうちに、かの顯昭をはじめとして、今の世にいたりても、哥學のかたよろしき人は、大抵いづれも、哥よむかたつたなくて、哥は、哥學のなき人に上手がおほきもの也、こは專一にするも、然らざるとによりて、さるだうりも有ルにや、さりとて哥學のよき人のよめる哥は、皆必ズわろきものと、定めて心得るはひがと也、此二すぢの心ばへを、よく心得わきまへたらんには、哥學いかでか哥よむ妨ゲとはならん、妨ゲとなりて、よき哥をえよまぬは、そのわきまへのあしきが故也、然れども哥學の方は、大概にても有べし、哥よむかたをこそ、むねとはせまほしけれ、哥學のかたに深くかゝづらひては、佛書からぶみなどにも、廣くわたらでは、事たらはぬわざなれば、其中に無益の書に、功をつひやすともおほきぞかし、

(ク)物語ぶみどもをもつねに見るべし、　此事の子細は、源氏物語の玉の小櫛に、くはしくいへれば、こゝにはもらしつ、

(ヤ)いにしへ人の風雅のおもむきをしるは云々。　すべて人は、雅の趣をしらでは有ルべからず、これをしらざるは、物のあはれをしらず、心なき人なり、かくてそのみやびの趣をしるとは、哥をよみ、物語書などをよく見るにあり、然して古ヘ人のみやびたる情をしり、すべて古ヘの雅たる世の有リさまを、よくしるは、これ古の道をしるべき階梯也、然るに世間の物學びする人々のやうを見渡すに、主と道を學ぶ輩は、上にいへるごとくにて、おほくはたゞ漢流の議論理窟にのみかゝづらひて、哥などよむをば、たゞあだ事のやうに思ひすてゝ、哥集などは、ひらきて見ん物ともせず、古人の雅情を、夢にもしらざるが故に、その主とするところの古の道をも、しることあたはず、かくのごとくにては、名のみ神道にて、たゞ外國の意のみなれば、實には道を學ぶといふものにはあらず、さて又哥をよみ文を作りて、古をしたひ好む輩は、たゞ風流のすぢにのみまつはれて、道の事をばうちすてゝ、さらに心にかくるとなければ、よろづにいにしへをしたひて、ふるき衣服調度など

をよろこび、古き書をこのみよむたぐひなども、皆たゞ風流のための玩物にするのみ也、そも〳〵人としては、いかなる者も、人の道をしらでは有べからず、殊に何のすぢにもせよ、學問をもして、書をもよむほどの者の、道に心をよすることなく、神のめぐみのたふときわけなどをもしらず、なほざりに思ひて過すべきことにはあらず、古へをしたひたふとむとならば、かならずまづその本たる道をこそ、第一に深く心がけて、明らめしるべきわざなるに、これをさしおきて、末にのみかゝづらふは、實にいにしへを好むといふものにはあらず、さては哥をよむも、まことにあだ事にぞ有ける、のりながゞをしへにしたがひて、ものまなびせんともがらは、これらのこゝろをよく思ひわきまへて、道をなほざりに思ひ過すことなかれ、

こたみ此書かき出ゝつることは、はやくより、をしへ子どもの、ねんごろにこひもとめけるを、年ごろいとまなくなごして、聞過しきぬるを、今は古事記ノ傳もかきをへつればこそ、又せちにせむるに、さのみもすぐしがたくて、物しつる也、にはかに思ひおこしたるしわざなれば、なほいふべき事ごもの、もれたるなども多かりなんを、うひまなびのためには、いさゝかたすくるやうもありなんや、

いかならむうひ山ぶみのあさごろも
淺きすそ野のしるべばかりも

本居宣長

寛政十年十月の廿一日のゆふべに書をへぬ

菅笠日記上の巻

ことし明和の九年といふとし。いかなるよき年にかあるらむ。よき人のよく見て。よしといひおきける。吉野の花見にと思ひたつ。【万葉一に「よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」】そも〳〵この山分衣のあらましは。廿年ばかりにも成ぬるを。春ごとにさはりのみして。いたづらに心のうちにふりにしを。さのみやはと。あながちに思ひおこして。出たつになん有ける。さるは何ばかり久しかるべき旅にもあらねば。そのいそぎとて。とにするわざもなけれど。心はいそがはし。明日たゝんとての日は。まだつとめてより。麻きざみそゝくりなンど。いとまもなし。その袋にかきつけゝる哥。

うけよ猶花の錦にあく神も心くだきし春のたむけは。ころは三月のはじめ。五日の曉。まだよをこめて立出ける。市場の庄などいふわたりにて。夜は明はてにけり。さてゆく道は。三渡りの橋のもとより。左にわかれて。川のそひをやゝのぼりて。板橋をわたる。此わたり迄は。事にふれつゝ。をり〳〵物する所なれば。めづらしげもなきを。このわかれゆくかたは。阿保ごえとかやいひて。伊賀ノ國をへて。はつせにいづる道になん有ける。此道も。むかし一ト度二タ度は物せしかど。年へにければ。みなわすれて。今はじめたらんやうに。いとめづらしく覺ゆるを。よべより空うちくもりて。をりをり雨ふりつゝ。よものながめも。はれ〴〵しからず。旅衣の袖ぬれて。うちつけにかこちがほなるも。かつはをかし。津屋庄といふ里を過て。はる〴〵と遠き野原を分行て。小川村にいたる。

雨ふればけふはを川の名にしおひてしみづながるゝ里の中道。この村をはなれて。みやこ川といふ川。せばきいた橋を渡りて。都の里あり。むかしいつきの宮の女房の。言の葉をのこせる。忘井といふ清水は。【千載集旅に齋宮の甲斐「わかれゆく都の方のこひしきにいざむすび見んわすれ井の水」】今その跡とて。かたをつくりて。石ぶみなンど立テたる所の。外にあンなれど。そはあらぬ所にて。まとのは。此里になんあると。近きころわがさと人の。たづねいでたる事あり。げに

かの哥。千載集には。群行のときとしるされたれど。ふるき書を見るに。すべていつきのみこの京にかへりのぼらせ給ふとき。此わたりなる壹志の頓宮より。二道に別れてなん。御ン供の女房たちはのぼりければ。わかれ行みやこのかたとは。そのをり。此里の名によせてこそはよめりけめ。なほさもと思ひよる事共おほかれば。年ごろゆかしくて。ふりはへても尋ね見まほしかりつるに。けふよきついでなれば。立よりてたづね見るに。まことに古き井あり。昔よりいみしきひでりにもかれずなンどして。めでたきし水也とぞ。されどさせるふるき傳へどもなきよし。里人もいひ。又たしかにかのわすれ井なるべきさま共見えず。いとうたがはしくこそ。なほくはしくもとひきかまほしけれど。こたみはゆくさきのいそがるれば。さて過ぬ。此わたりの山に。天花寺の城のあと。又かの寺のがらんの跡なンどのこれりとかや。又かの小川村の神とて。此里に社のあンなるは。神名帳に見えたる。小川の神の社にやおはすらん。さて三渡りより二里といふに。八太といふ驛あり。八太川。これも板橋也。雨なほやまずふる。かくてはよし野の花いかゞあらんとゆく〳〵友どちいひかはして。

　春雨にほさぬ袖よりこのたびはしをれむ花の色をこそ思へ。田尻村といふ所より。やう〳〵山路にかゝりて。谷戸大仰なンどいふ里を過ゆく。こゝまで道すがら。ところ〴〵櫻の花ざかり也。立やすらひては見つゝゆく。

　しばしとてたちとまりてもとまりにし友こひしのぶ花のこの本。　大のき川大きなる川也。雲出川のかはかみとぞいふ。此川のあなたを。猶同じ里にて。家共立なみたり。さて川邊をのぼりゆくあたりのけしき。いとよし。大きなるいはほども。山にも道のほとりにも。川の中にもいとおほくて。所々に岩淵なンどのあるを。見くだしたる。いとおそろし。かの吹黄ノ刀自がよめりし。波多の横山のいはほといふは。【万葉一に「川上のゆつ岩村にこけむさずつねにもがもなとこをとめにて】此わたりならんと。あがた居のうしのいはれしは。げにさもあらんかし。鈴鹿にしも。かの跡とてあンなるは。はやくいつはりなりけり。此わたりゆく程は。雨もやみぬ。小倭の二本木といふ宿にて。物なンどくひて。しばしやすむ。八太よりこゝ迄二里半なりとぞ。そこを過て。垣内といふ宿へ一里半。そのかいとをはなれて。阿保の山路にかゝるほど。又雨ふりいでゝ。いとわびし。をりしも鶯のなきけるをきゝて。

旅衣たもとほりてうくひずとわれこそなかめ春雨のそら。【古今物名うぐひす「心から花のしづくにそほぢつゝうくひずとのみ鳥のなくらん】ゆき〳〵てたむけにいたる。こゝ迄は。壹志ノ郡。こゝよりゆくさきは。伊賀ノ國伊賀ノ郡也。おほかた此山路は。かの過こし垣内より。伊勢地といふ所迄。三里がほどつゞきて。ゆけど〳〵はてなきに。雨もいみしうふりまさり。日さへ暮はてゝ。いとくらきに。しらぬ山路を。わりなくたどりつゝゆくほど。かゝらでも有ッぬべき物を。なにゝきつらんとまで。いとわびし。からうじて伊勢地の宿にゆきつきたる。うれしさも又いはんかたなし。そこに松本のなにがしといふものゝ家にやどりぬ。

六日。けさは明はてゝやどりをいづ。十町ばかり行て。道の左に。中山といふ山のいはほ。いとあやし。

河づらの伊賀の中山なか〳〵に見れば過うき岸のいはむら。かくいふは。きのふこえしあほ山よりいづる。阿保川のほとり也。朝川わたりて。その河べをつたひゆく。岡田別府などいふ里を過て。左にちかく。阿保の大森明神と申ス神おはしますは。大村ノ神社（伊賀郡）などをあやまりて。かくまうすにはあらじや。なほ川にそひつゝゆき〳〵て。あほの宿の入口にて又わたる。昨日の雨に水まさりて。橋もなければ。衣かゝげてかちわたりす。水いと寒し。いせぢより此驛迄一里也。さてはねといふ所にて。又同じ川の板ばしを渡る。こゝにてははね川とぞいふなる。すこしゆきて。四五丁ばかり坂路をのぼる。この坂のたむけより。阿保の七村を見おろす故に。七見たうげといふよし。里人いへり。されどけふは雲霧ふかくて。よくも見わたされず。かくのみけふも空はれやらねど。雨はふらで。こゝちよし。なみ木の松原など過て。阿保より一里といふに。新田といふ所あり。此里の末に。かりそめなるいほりのまへなる庭に。池など有て。糸櫻いとおもしろく咲たる所あり。

糸櫻くるしき旅もわすれけり立よりて見る花の木陰に。大かた此國は。花もまださかず。たゞこのいとざくら。あるはひがん櫻などやうの。はやきかぎりぞ。所々に見えたる。是よりなだらかなる松山の道にて。けしきよし。此わたりより名張のこほり也。いにしへいせの國に。みかどのみゆきせさせ給ひし御供に。つかうまつりける人の北の方の。やまと

のみやこにとゞまりて。男君の旅路を。心ぐるしう思ひやりて。「なばりの山をけふかこゆらんとよめりしは。【万葉一に「わがせこはいづくゆくらんおきつものなばりの山をけふかこゆらん】此山路の事なるべし。やう〳〵空はれて。布引の山も。こし方はるかにかへり見らる。

此ごろの雨にあらひてめづらしくけふはほしたる布引の山。この山は。ふるさとのかたよりも。明くれ見わたさるゝ山なるを。こゝより見るも。たゞ同じさまにて。誠に布なンどを引はへたらんやうしたり。すこし坂をくだりて。山本なる里をとへば。倉持となんいふなる。こゝよりは。山をはなれて。たひらなる道を。半里ばかり行て。名張にいたる。阿保よりは三里とかや。町中に。此わたりしる藤堂の何がしぬしの家あり。その門の前を過て。町屋のはづれに。川のながれあふ所に。板橋を二ッわたせり。なばり川やなせ川とぞいふ。いにしへなばりの横川といひけんは。これなンめりかし。ゆきゆきて山川あり。かたへの山にも川にも。なべていとめづらかなるいはほどもおほかり。名張より又しも雨ふり出て。此わたりを物する程は。ことに雨衣もとほるばかり。いみしくふる。かたかといふ所にて。

きのふ今日ふりみふらずみ雲はるゝとはかたかの春の雨かな。すこし行て。山のそばより。川なかまでつらなりいでたる岩が根の。いと〳〵大きなるうへを。つたひゆく所。右の方なる山より。足もとに瀧おちなンどして。えもいはずおもしろきけしき也。又いと高く見あぐる。岩ぎしのひたひに。物よりはなれて。道のうへゝ一丈ばかりさし出たる岩あり。そのしたゆく程は。かしらのうへにもおちかゝりぬべくて。いと〳〵あやふし。すこし行過て。つら〳〵かへりみれば。いとあやしき見物になん有ける。獅子舞岩とぞ。此わたりの人は言ける。げに獅子といふ物の。かしらさし出せらんさまに。いとよう覺えたり。さていさゝか山をのぼりて。くだらんとする所に。石の地藏あり。伊賀と大和のさかひなり。なばりより。一里半ばかりぞあらん。そのさきに。三本松といふ宿までは。二里也とぞ。大野寺といふてらのほとりに。又あやしき岩あり。道より二三町左に見えたり。こは名高くて。旅ゆく人もおほく立よる所也といへば。ゆきて見るに。げにとさらに作りて。たてたらんやうなるいはほのおもてに。。みろくぼさちの御かたとて。ゑりつけたる。ほのかに見ゆ。其佛

の長。五丈あまり有といふを。岩の上つ方は。猶あまりて高くたてる。うしろは山にて。谷川のきしなるを。こなたより
ぞ見る。そも〳〵こゝは。むかしおりゐのみかどの御ゆきも有し事。物にしるしたるを見しこと。ほの〴〵覺ゆるを。いづれの帝にかおはしましけむ。今ふとえおもひ出ず。さて其川にそひて。すこしのぼりて。山あひの細き道を。たどり行てなん。本の大道には出ける。其間に。室生に詣る道なンども有て。いしぶみのしるべなくは。必ズまよひぬべき所也。けふはかならず長谷迄物すべかりけるを。雨ふり道あしくなンどして。足もいたくつかれにたれば。さもえゆかで。はいばらといふ所にとまりぬ。此里の名。萩原と書るを見れば。何とかやなつかしくて。秋ならましかば。かりねのたもとにも。

うつしてもゆかまし物を咲花のをりたがへたる萩はらの里。とぞ思ひつゞけられける。こよひ雨いたくふり。風はげしきに。故郷のそらはさしおかれて。まづ花の梢やいかになるらんと。吉野の山のみ。よひとよやすからず思ひやられて。いとゞめもあはぬに。此やどのあるじにやあらん。よなかにおき出て。さもいみしき雨風かな。かくて明日はかならずはれなんとぞいふなる。きゝふせりて。いかでさもあらなんと。ねんじをり。

七日。あけがたより雨やみて。おき出て見れば。雲もやう〳〵うすらぎつゝ。はれぬべき空のけしきなるに。家あるじの心のうらは。まさしかりけりと。いとうれし。日頃の雨に。ゆくさき道いとあしく。山路にはたあンなりときけば。今朝はたれも〳〵みな。かごといふ物にのりてなん出たつ。さるはいとあやしげに。むつかしき物の。程さへせばくて。うちみじろくべくもあらず。しりいたきに。朝寒き谷風さへ。はしたなう吹入て。いとわびしけれど。ゆきこうじたる旅ごゝちには。いとようしのばれて。かちゆくよりは。こよなくまさりて覺ゆるも。あやしくなん。もとよりあひともなふ人は。覺さうゐんの戒言ほうし。小泉の何がし。いながけの棟隆。その子の茂穗。中里の常雄と。あはせて六人。同じ物にのりつれたる。まへしりへよびかはしては。物語なンどもし。やゝおくれさいだちなンどもしつゝゆく。西たうげ角柄なンどいふ山里共を過て。吉隱にいたる。こゝはふるき書どもにも見えたる所にしあれば。心とゞめて見つゝゆく。猪養の岡。又御陵なンどの事。【万葉哥に吉隱のゐかひの岡式に吉隱ノ陵、光仁天皇の御母也】かごかけるをのこにとへど。しらず。里人にた

づぬるにも。すべてしらぬこそ。くちをしけれ。又この吉隱を。万葉集に。ふなばりといふよみをしもつけたるこそ。いさこゝろえぬ。もじもさはよみがたく。又今の里人も。たゞよなばりといふなる物をや。そも旅路のにきに。かゝるさかしらは。うるさきやうなれど。筆のついでに。いさゝかかきつけつる也。なほ山のそはぢをゆき〳〵て。初瀬ちかくなりぬれば。むかひの山あひより。かづらき山うねび山なッどはるかに見えそめたり。よその國ながら。かゝる名どころは。明くれ書にも見なれ。哥にもよみなれてしあれば。ふる里びとなッどのあへらんこゝちして。うちつけにむつましく覺ゆ。けはひ坂とて。さがしき坂をすこしくだる。此坂路より。はつせの寺も里も。目のまへにちかく。あざ〳〵と見わたされたるけしき。えもいはず。大かたこゝ迄の道は。山ぶところにて。となる見るめもなかりしに。さしもいかめしき僧坊御堂のたちつらなりたるを。にはかに見つけたるは。あらぬ世界に來たらんこゝちす。よきの天神と申す御社のまへに。くだりつきて。そこに板ばしわたせる流ゞぞ。はつせ川なりける。むかひはすなはち初瀬の里なれば。人やどす家に立入て。物くひなッどしてやすむ。うしろは川ぎしにかたかけたる屋なれば。波の音たゞ床のもとにとゞろきたり。

　はつせ川はやくの世よりながれきて名にたちわたる瀬々のいはなみ。さて御堂にまゐらんとていでたつ。まづ門を入て。くれはしをのぼらんとする所に。たがとかはしらねど。だうみやうの塔とて。右の方にあり。やゝのぼりて。ひだをるゝ所に。貫之の軒端の梅といふもあり。又藏王堂産靈の神のほこらなッど。ならびたてり。こゝより上を。雲ゐ坂といふとかや。かくて御堂にまゐりつきたるに。をりしも御帳かゝげたるほどにて。いと大きなる本尊の。きら〳〵しうて見え給へる。人もをがめば。われもふしをがむ。さてこゝかしこ見めぐるに。此山の花。大かたのさかりはやゝ過にたれど。なほさかりなるも。こころ〴〵におほかりけり。巳の時とて。貝ふき鐘つくなり。むかし清少納言がまうでし時も。俄にこの貝を吹いでつるに。おどろきたるよし。かきおける。思ひ出られて。そのかみの面影も。見るやう也。鐘はやがてみだうのかたはら。今のぼりこし。くれはしの上なる樓になんかゝれりける。

　名も高くはつせの寺のかねてよりきゝこしおとを今ぞ聞ける。ふるき哥共にも。あまたよみける。いにしへの同じ鐘

にやと。いとなつかし。か丶る所からは。となる事なき物にも。見きくにつけて。心のとまるは。すべて古へをしたふ心のくせ也かし。猶そのわたりた丶ずみありく程に。御堂のかたに。今やうならぬ。みやびたる物の音の聞ゆる。かれはなにそのわざするにかと。しるべするをのこにとへば。此寺はじめ給ひし上人の御忌月にて。このごろ千部のどきやうの侍る。日どのおこなひのはじめに侍る。がくの聲也といふに。いときかまほしくていそぎまゐるを。まだいきつかぬ程に。はやく聲やみぬることそ。あかずくちをしけれ。又みだうのうちをとほりて。かのつらゆきの梅のまへより。かたつかたへすこしくだりて。がくもんする大とこたちのいほりのほとりに。二本の杉の跡とて。ちひさき杉あり。又すこしくだりて。定家の中納言の塔也といふ。五輪なる石たてり。此ごろやうの物にて。いとしもうけられず。八塩の岡といふ所もあり。なほくだりて。川邊にいで。橋をわたりて。あなたのきしに。玉葛の君の跡とて。庵あり。墓もありといへど。けふはあるじの尼。物へまかりて。なきほどなれば。門さしたり。すべて此はつせに。そのあとかの跡とて。あまたある。みなまとしからぬ中にも。この玉かづらこそ。いとも／＼をかしけれ。かの源氏ノ物語は。なべてそらごとども。わきまへで。まとに有けん人と思ひて。か丶る所をもかまへ出たるにや。このや丶おくまりたるところに。家隆の二位の塔とて。石の十三重なるあり。こはや丶ふるく見ゆ。そこに大きなる杉の。二またなるもたてり。又牛頭天王の社。そのかたはらに。苔の下水といふもあり。こ丶まではみな。山のかたそはにて。川にちかき所也。それよりかのよきの天神にまうづ。社は山のはらに。や丶たひらなる所にた丶せ給へり。（神名式）長谷山口坐神ノ社と申せるはこれなンどにもやおはすらん。されど今は。なべてさる事しれる人しなければ。わづらはしさに。たづねもとはず。大かたいにしへ名ありける御社ども。いづくのも。今の世には。すべて八幡天神。さては牛頭天王なンどにのみ成玉へるぞかし。此わたりすべてこぶかきしげ山にて。杉なンどは多かれど。名にたてる檜原は見えず。此川かみには。檜の木もおほしと。しるべのをのこはいへりき。かくて此山のうちめぐりはて丶。里におりける程。又雨ふり出ぬ。けふは朝より空はれそめて。やう／＼青雲も見ゆるばかりに成しかば。今はふようなンめりとて。とくとりをさめつる雨衣。又じもにはかにとりいで丶。うちきるもいとわびし。

ぬぎつれど又もふりきて雨ごろもかへす〳〵も袖ぬらすかな。されどしはしにて。里はなるゝ程は。きよくやみぬ。あなたよりいる口に。いと大きなるあけの鳥居たてり。さて出はなれて。出雲村黒崎村なんどいふ所をすぐ。此あたりは朝倉ノ宮列木ノ宮【長谷ノ朝倉ノ宮は雄略天皇の都 長谷列木ノ宮は武烈天皇の都】なんどの跡と聞こしかば。いとゆかし。此くろざきに。家どにまんぢうといふ物をつくりてうるなれば。かのふりにし宮どもの事。たづねがてら。あるじの年おいたるがみゆる家見つけて。くひに立よる。さてくひつゝとふに。ふるき都のあとゝばかりは。うけ給はれど。これなんそれとたしかにつたへたるしるしの所も侍らずとぞいふ。高圓山はいづこぞととふに。そはこのうしろになん侍るとて。をしふるを見れば。此里よりは南にあたりて。よろしき程なる山の。いたゞきばかりすこし見えたる。今はとかま山となんいふとぞ。まとの高圓山は。春日にこそあんなるを。こゝにしも其名をおふせつるは。もとよりとかまといふが。似たるによりてか。又は高圓山とつけたるを。里人のもてひがめて。かくはいふか。いづれならん。脇本慈恩寺なんどいふ里をゆく。こゝよりはかのとかま山。ちかくてよく見ゆ。此里の末を。追分といひて。三輪の方へも。櫻井のかたへもゆく道のちまた也。今はそのすこしこなたより。左へわかれ。橋をわたりて。多武の峯へゆく細道にかゝる。此橋は。はつせ川のながれにわたせるはし也けり。そも〳〵たむの峯へは。櫻井よりゆくぞ。正しき道には有ける。とび村なんどいふも。その道也といふなれば。それも名ある所にて。たづね見まほしき事共はあれど。みな人ほどの遠きをものうがりて。今の道には物するなりけり。東の方にいと高き山をとへば。音羽山とぞいふ。音羽の里といふも。その麓にありとぞ。忍坂村は。道の左の山あひにて。やがて此むらのかたはらをとほりゆく。こゝもふるき哥に見え。神の御社なんどおはすなれど。ゆくさきいそがれて。さまではえたづねず。なほ山のそはづたひを。ゆき〳〵て。倉梯の里にいでぬ。こゝはかのさくら井よりくる道也けり。はつせよりこし程は二里。たむのみね迄は。なほ一里有とぞ。しばしやすめる家にて。例の都のあとを尋ぬれば。【崇峻天皇の都倉椅ノ柴垣の宮】あるじ。この里中に金福寺と申す寺ぞ。その御跡には侍る。このおはしける道なる物をとて。子にやあらん。十二三ばかりなるわらはをいだして。あないせさす。これにつきてゆきて見る。二三町ばかりも立かへりて。か

の寺といひしは。門などもなくて。いとかりそめなる庵になん有ける。猶くはしきともきかまほしくて。あるじのほうしをとぶらひしかど。なきほど也けり。まへにごまだうとて。かやぶきなるちひさき堂のあるを。さしのぞきて見れば。不動尊のわきに。聖徳太子崇峻天皇とならべ奉りて。かきつけたる物たてり。されどむげに今やうのさまにて。さらに古へしのぶつまと成ぬべきものにはあらず。くらはし川は。やがて此いほりのうしろをながれたり。すべてこゝは。山も川も名ある所ぞかし。さきの家にかへりて。また御陵【倉梯ノ岡ノ陵崇峻天皇】はいづこぞとこへば。そは忍坂と申す村より五丁ばかりたつみの方に。みさゝき山とて。こしげき森の侍るなかに。洞の三ッ侍る。ふかさは五六十間も侍るべし。こゝより程はとほけれど。そのあたり迄も。なほくらはしの地には侍る也といふ。いでその忍坂は。きしかたの道なりしに。さるともしらで。過こし事よと。いとくちをし。こゝよりは廿町あまりもありといへば。えゆかでやみぬ。かの音羽山といひつる山。こゝより東にあたりて。いと高くみゆ。倉梯山は。万葉ふるき哥共によめるを見るに。いとたかき山と聞えたれば。これやそならんとおぼゆ。さてこの里を出て。五丁ばかり行て。土橋をわたりて。右の方におりゐといふ村あり。その上の山に。こだかき森の見ゆるは。用明天皇ををさめ奉りし所也と。かの家あるじの教へしは。所たがひて覺ゆれど。猶あるやう有べしと思ひて。のぼりて見るに。その森の中に。春日の社とて。ほこらあり。そのすこしくだる所に。山寺の有けるに立よりて。たづぬれば。あるじのほうし。かれは御陵にあらず。用明の御は。長門村といふ所にこそあなれといふに。さりや。かのをしへしは。はやくひが事也けりと。思ひさだめぬ。されど此森も。やうある所とは見えたり。ふるき書に。【文徳實錄九又神名帳】椋橋下居神とあるも。此里にこそおはすらめ。かの土橋を渡りては。くら橋川を左になして。ながれにそひつゝのぼりゆく。此川は。たむの峯よりいでゝ。くらはしの里中を。北へながれ行川也。此道に。櫻井のかたよりはじまりて。たむのみね迄。瓔珞經の五十二位といふ事を。一町ごにわかちて。ゑりしるしたる石ぶみ立たり。すべてかゝるものは。こしかたゆくさきのほどはかられて。道ゆくたよりとなるわざ也。なほ同じ川ぎしを。やう〱にのぼりもてゆくまゝに。いと木ぶかき谷陰になりて。ひだり右より。谷川のおちあふ所にいたる。瀧津瀬のけしき。いとおもしろ

し。そこの橋をわたれば。すなはち茶屋あり。こゝははや多武の峯の口也とぞいふ。さて二三町がほど。家たちつゞきて。又うるはしき橋あるを渡り。すこしゆきて。惣門にいる。左リ右に僧坊共こゝらなみたてり。御廟の御前は。やゝうちはれて。山のはらに。南むきにたち給へる。いといかめしく。きら〳〵しくつくりみがゝれたる有リ様。めもかゞやくばかり也。十三重の塔。又惣社など申すも。西の方に立玉へり。すべて此所。みあらかのあたりはさらにもいはず。僧坊のかたはら。道のくま〴〵まで。さる山中に。おち葉のひとつだになく。いと〳〵きらゝかに。はききよめたる事。又たぐひあらじと見ゆ。櫻は今をさかりにて。こゝもかしこも白たへに咲みちたる花の梢。こころからはましておもしろき事。いはんかたなし。さるはみなうつしうゑたる木どもにやあらん。一やうならず。くさ〴〵見ゆ。そも此山に。かばかり花のおほかるとは。かねてはきかざりきかし。

谷ふかく分いるたむの山ざくらかひあるはなのいろを見るかな。鳥居のたてるまへを。西ざまにゆきこして。あなたにも又惣門あり。そのまへをたゞさまにくだりゆけば。飛鳥の岡へ五十町の道とかや。その道のなからばかりに。細川といふ里の有リときくは。南淵の細川山とよめる所にやあらん。又そこに。此たむの山よりながれゆく川もあるにや。【万葉九に「うちたをりたむの山霧しげきかも細川の瀬に浪のさわげる」】たづねみまほしけれど。えゆかず。吉野へは。この門のもとより。左にをれて。別れゆく。はるかに山路をのぼりゆきて。手向に茶屋あり。やまとの國中見えわたる所也。なほ同じやうなる山路を。ゆき〳〵て。又たむけにいたる。こゝよりぞよしのゝ山々。雲ゐはるかにみやられて。あけくれ心にかゝりし花の白雲。かつ〴〵みつけたる。いとうれし。さてくだりゆく谷かげ。いはゞしる山川のけしき。世ばなれていさぎよし。たむのみねより一里半といふに。瀧の畑といふ山里あり。まとに瀧川のほとり也。又山ひとつこえての谷陰にて。岡より上市へこゆる道とゆきあふ。けふは吉野までいきつくべく思ひまうけしかど。とかくせしほどに。春の日もいとゝく暮ぬれば。千俣といふ山ぶところなる里にとまりぬ。こよひは。

ふる里に通ふ夢路やたどらましちまたの里に旅寐しつれば。此宿にて。龍門のたきのあないたづねしに。あるじのか

たりけるは。こゝより上市へたゞにゆけば。一里なるを。かしこへめぐりては。二里あまりぞ侍らん。そはまづ此さとより。かしこへ一里あまり有て。又上市へは一里侍ればといふ。此瀧かねて見まほしく思ひしゆゑ。けふ多武の峯より物せんと思ひしを。道しるべせし者の。さてはいたく遠くて。道もけはしきよしいひしかば。えまからざりしを。今きくが如くは。かしこより物せんには。ましてさばかりとほくもあらじ物をと。いとくちをし。されどよしのゝ花。さかり過ぬなどいふをきくに。いとゞ心のいそがるれば。明日ゆきて見んといふ人もなし。そもこのりう門といふところは。いせより高見山こえて。吉野へも木の國へも物する道なる。瀧は道より八丁ばかり入るところに有となん。いとあやしきたきにて。日のいみじうてるをり。雨をこふわざするに。かならずしるし有て。むなぎののぼれば。やがて雨はふる也とぞ。

立よらでよそにきゝつゝ過る哉心にかけし瀧の白糸。

八日。きのふ初瀬の後雨ふらで。よもの山のはも。やうやうあかりゆきつゝ。多武のみねのあたりにては。なごりもなく晴たりしを。今日も又いとよき日にて。吉野もちかづきぬれば。けさはいとゞあしかろく。みな人の心ゆく道なればにや。ほどもなく上市に出ぬ。此あひだは。一里とこそいひしか。いとちかくて。半里にだにもたらじとぞ覺ゆる。よし野川。ひまもなくうかべるいかだをおし分て。こなたのきしに船さしよす。夕暮ならねば。渡し守はやともいはねど。【いせ物語に渡し守はや船にのれ日もくれぬといふに云々】みないそぎのりぬ。いもせ山はいづれぞとことへば。河上のかたに。ながれをへだてゝ。あひむかひてまぢかく見ゆる山を。東なるは妹山。にしなるは背山とをしふ。されどまことに此名をおへる山は。きの國にありて。うたがひもなきを。かの「中におつるよし野の川」に思ひおぼれて。必こゝとさだめしは。世のすきもののしわざなるべし。されど。

妹背山なき名もよしやよしのゝ川よにながれてはそれとこそ見め。あなたの岸は。飯貝といふ里也。さて川べにそひつゝ。すこし西に行て。丹治といふ所より。よし野の山口にかゝる。やゝ深く入りもてゆきて。杉むらの中に。四手掛の明神と申すがおはするは。吉野ノ山ノ口ノ神社などにはあらぬにや。されどさいふばかりの社とも見えず。此森より下にも上にも。

此わたりなべて櫻のいとおほかる中を。のぼり〳〵て。のぼりはてたる所。六田のかたよりのぼる道とのゆきあひにて。茶屋あり。しばしやすむ。此屋は。過こし坂路より。いと高く見やられし所也。こゝより見わたすところを。一目千本といひて。大かたよし野のうちにも。櫻のおほかるかぎりとぞいふなる。げにさも有ぬべく見ゆる所なるを。たれてふをこの者か。さるいやしげなる名はつけゝんと。いと心づきなし。花は大かた盛りすぎて。今は散り残りたる梢どもぞ。むらぎえたる雪のおもかげして。所々に見えたる。そも〳〵此山の花は。春立る日より。六十五日にあたるころほひなん。いづれのとしもさかりなると。世にはいふめれど。又わが國人の。きて見つるどもに。とひしには。かのあたりのさかりの程を見て。こゝに物すれば。よきほどぞと。これもかれもいひしまゝに。其程うかゞひつけて。いで立しもしるく。道すがらとひつゝこしにも。よきほどならんと。おほくはいひつる中に。まだしからんとこそ。いひし人も有しか。かくさかり過たらんとは。かけても思ひよらざりしぞかし。なほこゝにてくはしくとひきけば。この二月のつごもりがた。いとあたゝかなりしけにや。例の年のほどよりも。ことしはいとはやく咲出侍りつるを。いにし三日四日ばかりや。さかりとはまうすべかりけん。そも雨しげく。風ふきなッどせし程に。まことに盛りと申つべきころも侍らぬやうにてなん。うつろひ侍りにしとかたるをきけば。其とし〴〵の寒さぬるさにしたがひて。おそくもとくもあるとにて。かならずそのほどと。かねては此里人も。えさだめぬわざにぞ有ける。うしとらの方に。御舟山といふ山見えたり。【万葉に「瀧のうへの御船の山】されどその山は。瀧のうへのとよみたれば。此ちかき所なッどにあるべくも覺えず。これも例のなき名なるべし。こゝはよし野の里にいる口にて。これよりは。町屋たちつゞけり。二三町ばかりゆきて。石の階をすこしのぼりたる所に。いと大きなる銅の鳥居たてり。發心門としるせる額は。弘法大師の手也とぞ。又二町ばかりありて。石の階のうへに。二王のたてる門あり。此わたりにも櫻有て。さかりなるもおほく見ゆ。かのみふね山。こゝよりは。むかひにちかく見えたり。まづやどりをとらんとて。藏王堂にはまゐらですぎゆく。堂はあなたにむかひたれば。かの門は。うしろの方にぞたてりける。そのあたりに。きよげなる家たづねて。宿をさだめて。まづしばしうちやすみ。物くひなどして。けふ明日の事共かたらひ。

道しるべすべきものやこひて。まづちかき所々を見めぐらんこて。いでたつ。このかりつるやごは。箱やの何がしこかいふもの丶家にて。吉水院ちかき所なりければ。まづまうづ。この院は。道より左へいさゝか下りて。又すこしのぼる所。はなれたる一ッの岡にて。めぐりは谷也。後醍醐のみかごの。しばしがほごおはしまし丶所こて。有りしまゝにのこれるを。入りてみれば。げに物ふりたる殿のうちのたゝずまひ。よのつねの所こは見えず。かけまくはかしこけれご。

いにしへのこゝろをくみてよし水のふかきあはれに袖はぬれけり。かのみかごの御像。後村上ノ帝の。御てづからきざみ奉り給へるこて。おはしますを拜み奉るにも。

あはれ君この吉水にうつり來てのこる御影を見るもかしこし。又そのかみのふるき御たから物ごも。あまた有て。見けれご。こゝ〳〵はえしも覺えず。此寺の内に。さゝやかなる屋の。まへうちはれて。見わたしのけしきいこよきがあるに。たち入りて。煙ふきつゝ見いだせば。子守の御社の山。むかひに高く見やられて。其山にも。かたへの谷なゞにも。ひまなく見ゆる櫻共の。今は青葉がちなるぞ。かへす〴〵くちをしき。さはいへごおくある花は。さかりこみゆるも。猶あまたにて。

みよし野の花は日數もかぎりなし青葉のおくも猶盛りにて。瀧櫻こいふも。かしこにありこをしふ。

咲にほふ花のよそめはたちよりて見るにもまさる瀧のしら糸。くるゝ迄見るこも。あくよあるまじうこそ。又雲ゐ櫻こいふもあり。後醍醐のみかごの。此花を御覽じて。【(新葉集)こゝにても雲ゐのさくら咲にけり。たゞかりそめの宿こおもふに。こよませ給ひしも。

世々をへてむかひの山の花の名にのこるくもゐのあこはふりにき。さてざわうだうにまうづ。御こばりかゝげさせて見奉れは。いこ〳〵大きなる御像の。いかれるみかほして。かた御足さゝげて。いみしうおそろしきさまして立給へる。三はしらおはする。たゞ同じ御やうにて。けぢめ見え給はず。堂はみなみむきにて。たても横も十丈あまりありこぞ。作りざまいこふるく見ゆ。まへに櫻を四隅にうゑたる所あり。四本櫻こいふこかや。そのかたつかたに。くろがねのいこ大きなる物の。鍋なゞいふもの丶さまして。かけそこなはれたるが。うちおかれたるを。何ぞここへば。昔ッ塔の九輪のや

け落たるが。かくて残れる也といふ。口のわたり六七尺ばかりと見ゆ。その塔の大きなりけんほど。おしはかられぬ。堂のかたはらより西へ。石のはしをすこしくだれば。すなはち實城寺也。本尊のひだりのかたに後醍醐ノ天皇。右に後村上ノ院の。御ゐはいと申ス物たゝせ給へり。此寺も。前のかぎり藏王堂のかたにつゞきて。後も左リも右も。みなやゝくだれる谷也。されどかのよし水院よりは。やゝ程ひろし。この所は。かりそめながら。五十年あまりの春秋をへて。三代の帝【後醍醐天皇後村上天皇後龜山天皇】のすませ給ひし。御行宮の跡なりと申すは。いかゞあらん。とたがへるやうなれど。をりをりおはしましなンどせし所にてはありぬべし。今は堂も何も。つくりあらためて。そのかみのなごりならねど。なほめでたく。こゝろにくきさま。こと所には似ず。此てらを出て。もとの道にかへり。櫻本坊なンどいふを見て。勝手の社は。このちかきとし燒ぬるよし。いまはたゞいさゝかなるかり屋におはしますを。をがみて過ゆく。此やしろのとなりに。袖振山とて。こだかき所に。ちひさき森の有ッしも。同じをりにやけたりとぞ。御影山といふも。このつゞきにて。木しげきもりなり。竹林院。堂のまへに。めづらしき竹あり。一ッふしごとに。四方に枝さし出たり。うしろの方に。おもしろき作り庭あり。そこよりすこし高き所へあがりて。よもの山々見わたしたるけしきよ。まづ北の方にざわう堂。まち屋の末につづきて。物より高く目にかゝれり。なほ遠くは。多武の山高とり山。それにつゞきて。うしとらのかたに。龍門のだけなンど見ゆ。東と西とは。谷のあなたに。まぢかき山々あひつゞきて。かの子守の御社の山は。南に高く見あげられ。いぬゐのかたに。葛城やまは。いと〱はるかに。霞のまより見えたるなンど。すべてえもいはず。おもしろき所のさま也。

花とのみおもひ入ッぬるよしの山よものながめもたぐひやはある。時うつる迄ぞ見をる。ゆくさきなほ見どころはおほきに。日くれぬべしとおどろかせど。耳にもきゝいれず。「くれなばなげの【古今春「いざけふは春の山べにまじりなん暮なばなげの花の陰かは】なンどうちずして。

あかなくに一よはねなんみよしのゝ竹のはやしの花のこの本。かくはいへど。ゆくさきの所々も。さすがにゆかしければ。そこにたてる櫻の枝に。このうたはむすびおきて。たちぬ。さてゆく道のほとりに。何するにかあらん。櫻のやどり

木こいふ物を。多くほしたるを見て。

うらやまし我もこひしき花の枝をいかにちぎりてやごりそめけむ。ゆき〳〵て。夢ちがへの觀音なンごいふあり。道のゆくてに。布引の櫻こて。なみ立る所もあンなれご。今は染かへて。青葉のかげにしあれば。旅ごろもたちこまりても見ず。かの吉水院より見おこせし。瀧櫻くもゐざくらも。此ちかきあたり也けり。世尊寺。ふるめかしき寺にて。大きなるふるき鐘なンご有ッ。なほのぼりて。藏王堂より十八町こいふに。子守の神まします。此御やしろは。よろづの所よりも。心いれてしづかに拜み奉る。さるはむかし我父なりける人。子もたらぬ事を。深くなげき給ひて。はる〴〵ここの神にしも。ねぎこし給ひける。しるし有て。程もなく。母なりし人。たゞならずなり給ひしかば。かつ〴〵願ひかなひぬこ。いみじう悅びて。同じくはをのこゝえさせ給へこなん。いよ〳〵深くねんじ奉り給ひける。われはさてうまれつる身ぞかし。十三になりなは。かならずみづからゐてまうでゝ。かへりまうしはせさせんこ。のたまひわたりつる物を。今すこしえたへ給はで。わが十一こいふになん。父はうせ給ひぬるこ。母なんものゝついでどにはのたまひいでゝ。涙おこし給ひし。かくて其こしにも成しかば。父のぐわんはたさせんこて。かひ〴〵しう出たゝせて。まうでさせ給ひしを。今はその人さへなくなり給ひにしかば。さながら夢のやうに。

思ひ出るそのかみ垣にたむけして麻よりしげくちるなみだかな。袖もしぼりあへずなん。かの度は。むげにわかくて。まだ何事も覺えぬほごなりしを。やう〳〵ひこゝなりて。物の心もわきまへしるにつけては。むかしの物語をきゝて。神の御ンめぐみの。おろかならざりし事をし思へば。心にかけて。朝ごとには。こなたにむきてをがみつゝ。又ふりはへてもまうでまほしく。思ひわたりしこなれご。何くれこまぎれつゝ過キこしに。三十年をへて。今年又四十三にて。かくまうでつるも。契ッあさからず。年ごろのほいかなひつるこゝちして。いこうれしきにも。おちそふなみだは一ッ也。そも花のたよりは。すこし心あさきやうなれご。こと事のついでならんよりは。さりこも神も。おぼしゆるして。うけ引給ふらんこ。猶たのもしくこそ。かゝる深きよしあれば。此神の御ン事は。ことによそならず覺え奉りて。こしごろ書を見るにも。萬ッに心

をつけて。尋ね奉りしに。吉野ノ水分ノ神ノ社と申せしぞ。此ノ御ン事ならんと。はやく思ひよりたりしを。續日本紀に。水分ノ峯ノ神ともあるは。まとにさいふべき所にやと。地のさまも見さだめまほしく。としごろ心もとなく思ひしを。今來て見れば。げにこのわたりの山の峯にて。いづこよりも高く見ゆる所なれば。うたがひもなく。さなりけりと。思ひなりぬ。ふるき哥に。みくまり山と讀るも。此所なるを。その文字を。みづわけとひがよみして。と所の山にしも。さる名をおふせたるは。例のいかにぞや。又みくまりをよこなまりて。中比には。御子守の神と申し。今はたゞに子守と申て。うみのこの榮えをいのる神と成給へり。さて我父も。こゝにはいのり給ひし也けり。此御門のまへに。櫻おほかる。いまさかりなり。木のもとなる茶屋に立よりて。やすめるに。尾張ノ國の人とて。これも花見にきつるよし。から哥このむ人にて。名もからめきたる。なにとかやわすれにき。その妻は。やまと言の葉をなん物するよし。それもぐしたる。やゝさだすぎにたれど。けしうはあらず見ゆ。さるはをとつひ。いがの名張にやすめる所にて。見し人也けり。きのふたむのみねにも。まうであひつるを。けふ又竹林ゐんなる所にも。ゆきあひて。かの男なん。小泉にかたらひつきて。ふみつくりかはしなどしつゝ。おのれらがとをも。くはしうとひきゝなどせしとかや。さる事はしらざりしを。又しもこゝにきあひたる。しか〳〵のよしいひ出て。物語などする程に。春の日も入相のかねの音して。心あわたゞしければ。立わかるゝとこの本にて。

今は又きみがとばの花も見んよし野のやまはわけくらしけり。ゆくさきは。明日のついでと。のこし置て。けふはこれより。やどりにかへりぬ。そのよさり。かのをはり人の宿より。うたふたつかきて。みせにおこせたる。かのさだすぎ人のなるべし。けふの花のおもしろかりしよしありければ。かへし。

よしの山ひる見し花のおもかげもにほひをそへてかすむ月影。かくよめるは。かの哥ぬしの名。霞月とありければぞかし。くだものなどそへておくりければ。

みよし野の山よりふかきなさけをや花のかへさの家づとにせん。これよりは。ゑぶくろに有りあひたるまゝに。いせの川上茶といふをやるとて。つゝみたる紙に。

ちぎりあれや山路分來てすぎがての木の下陰にしばしあひしも。茶すこしとは。聞しりなんや。このほか人々の哥ど
も〻。これかれかきつけてやりつ。京にいそぐ事あれば。明日はとくたちて。のぼるべきよし。いひおこせたるに。

旅衣袖こそぬるれよしの川花よりはやき人のわかれに。

九日とくおき出て。はしちかく見いだせば。空はちりばかりもくもりなく。はれ渡りたるに。朝日のはなやかにさし出たるほど。木々のこのめも。はるふかき山々のけしき。霞だにけさはかゝらで。物あざやかに見わたされたり。吉水院は。たゞはひわたるほどにて。ゆきかふ人のけはひ迄。まぢかくめのまへに見ゆ。大かた此里は。かのみくまりのみねより。かたさがりにつゞきて。細き尾の上になん有めれば。左ッ右に立なみたる。民の家居ども〻。前よりこそさりげなく。たゞよのつねの屋のさまに見いれらるれ。うしろは。みな谷より作りあげて。三階の屋になん有ッければ。いづれの家も。見わたしのけしきよし。さるはまらうどやどし。又物うりなどするは。上の屋にて。道よりたゞに入る所也。次に家人のすまひは。中の屋にて。その下なれば。戸口より階をくだりてなん入める。今一ッはしを下りて。又下なる屋は。ゆかなどもなくて。たゞ土のうへに。物うちおきなどす。みだりがはしくむつかしきに。湯あむる所。かはやなどは。そこにしもあなれば。日ひとひあるきこうじたる。旅人の足は。八重山越ゆくこゝちして。此はしごものぼりくだるなん。いとくるしかりける。されど所のさまの。いひしらずおもしろきには。さる事は物のかずならず。「花ちりなばと。まつらん人をもうちわすれて。【新古今西行「吉野山やがていでじと思ふ身を花散なばと人やまつらん】やがてとゞまりても。すみなばやとさへぞ思はるる。今日は瀧ども見にものせんとて。例の道しるべさきにたて。かれいひ酒などもたせて。いでたつ。かの竹林院などいふわたりまでは。いかめしき僧坊どもなど。立まじりて。ひたつゞきの町屋なるを。末はやう〳〵。まばらになりもてゆきて。子守のみやしろよりおくは。人の家もなく。たゞ杉のおひしげりたる中をぞ分行く。さてやゝうちはれたる所にいでゝ。左にはるかの谷となづけたるところ。またいと櫻おほくて。さかり也。

高根より程もはるかの谷うけて立つゞきたる花のしら雲。なほ行て。大きなるあけの鳥居あり。二の鳥居又修行門と

もなづくとかや。金御峯神社。いまは金精大明神と申シて。此山しろしめす神也とぞ。このおまへをすこし左へ下りて。けぬけの塔とて。ふるめかしき塔のあるは。むかし源ノ義經が。かたきにおはれて。この中にかくれたりしを。さがしいだされたる時。やねをけはなちて。にげいにける跡なンどいひて。見せけれど。すべてさることは。ゆかしからねば。目とゞめても見ずなりぬ。なほ深く分入て。茶屋ある所にいたる。その前を。右へいさゝかくだれば。安禪寺也。藏王堂。大坂ノ右大臣のたて給へるとぞ。東の方に。木しげき山は。青根が峯也とて。此だうのまへより。むかひにちかく見えたり。二三町おくに。何とかやとをゞしき名つきたる堂あり。そのうしろへ。木の下道を。二丁ばかりくだりたる谷陰に。苔清水とて。岩間より水のしたゞり落る所あり。西行法師が哥とて。まねびいふをきくに。さらにかの法師が口つきにあらず。むげにいやしきえせ哥也。なほ一町ばかり分行て。かのすめりし跡といふは。すこしたひらなる所にて。一丈ばかりなる。かりそめのいほり。今もあり。櫻もこゝかしこに見ゆ。

花見つゝすみし昔のあとゝへばこけの清水にうかぶおもかげ。このちかきころある法師も。みとせばかり。こゝにこもりゐけるとぞ。京にて高野槇といふ木を。こゝの人は。たゞにまきとぞいふ。これを思へば。いにしへ檜のほかに。まきといひしは。この木なるべし。これは。こゝに必スいふべきことにもあらねど。此わたりの山に。此木のおほかるにつきて。人のたづねけるに。いらへつることばを聞て。ふと思ひよれるゆゑ。筆のついでに。かきつけつるぞ。本の道を。安ぜんじのまへの茶屋迄かへりて。御嶽へまうづる道にかゝり。三丁あまりもきつらんと思ふ所に。しるべのいしぶみたてる道を。左へ分れゆく。みたけの道へは。これより女はのぼらずとぞ。かの見えし青根が峯は。すなはち此山也けり。すこし行て。東のかたの谷の底はるかに。夏箕の里見ゆ。ゆき〳〵て又東北の谷に。見くださるゝ里をとへば。國栖とぞいふ。此わたり。うちはれたる山の背を。つたひゆくほど。いと遠し。さてくだる坂路のけはしさ。物にゝず。されどのぼるやうに。くるしくはあらず。此坂をくだりはつれば。西河の里也。安ぜんじより。一里といひしかど。いとゝほく覺えき。山の中につゝまれて。いづかたも見はるかす所もなき里なるを。家ごとに紙をすきて。門におほくほせる。こはいまだみぬわ

ざなれば。ゆかしくて。足もやすめがてら。立チ入ッて見るに。一ひらづゝすき上ては。重ね〳〵するさま。いとめづらかにて。たつともわすれつ。さて右の方へ三丁ばかり。里をはなれ行て。谷川にわたせる板橋のもとよりわかれて。左へいささかのぼり。山のかひを。あなたへうちこゆれば。すなはち大瀧村也。此間は五丁ばかりもあらんか。此大瀧の里のあなたのはづれは。すなはちよし野川の川のべにて。瀧といふも。やがて川づらなる家のまへより。見やらるゝ早瀬にて。上よりたゞさまにおつる瀧にはあらず。此瀧は。遠くては。となるともなし。ちかくよりて見よと。貝原ノ翁が。をしへおきつる事もあれば。岩のうへを。とかくつたひゆきて。せめてまぢかくのぞき見るに。そのわたりすべて。えもいはず大きなるいはほども。こゝら立かさなれるあひだを。さしも大きなる川水の。はしりおつるさま。岩にふれて。くだけあがる白波のけしきなど。おもしろしともおそろしとも。いはんは中々おろかに成ッぬべし。むかしは筏も。此瀬をたゞにくだしけるを。あまりに水のはげしくて。度ゞに。くだしわづらひし故に。いはほのやゝなだらかなる所を。きりとほして。今はかしこをなんくだすなる。をしふる方を見れば。あなたざまに一みち分れて。おちゆく水。けふこなたの瀬より。すこしはのどやかに見えたり。あはれ今くだし來むいかだもがな。いかで此早瀬くだすさま見むといひつゝ。かれいひくひ。酒などのみをる程に。みなかみはるかに。この筏くだしくる物か。やう〳〵ちかづきて。此瀧のきはになりぬれば。のりたる者共は。左ッ右の岩の上へに。とびうつりて。先キなる一人。綱をひかへて。みな流れにそひて。はしりゆくに。筏の早く下るさまは。矢などのゆくやう也。さて岩のとぢめの所にて。人共皆筏へかへる。そこは殊に水の勢ひはげしくて。ほごばしりあがる浪にゆられて。うきしづむ丸木の上へ。いたはりもなくとびうつるさま。いと〳〵あやふき物から。めづらかにおもしろきこと。たぐひなし。みな人此筏に見入ッて。盃のながれは。いづちならんとも。こはずなりぬ。さて此筏。瀧をはなれて。ひら瀬にくだりたるを。よく見れば。一丈二三尺ばかりの長さなるくれを。三ッ四ッづゝくみならべて。つぎ〳〵に十六。つなぎつゞけたるは。いと〳〵長く引はへたり。人は四人なんのれりける。川瀬は。此瀧のしもにて。あなたへをれて。むかひの山あひに流れいる。右も左も。物をつき立テたるやうなる岩岸の下に。さるいかだをしも。くだし

ゆくけしき。たゞ繪にかけらんやうに見ゆ。かゝる所にては。中々に口ふたがりて。哥もいでこぬを。わざとうちかたふきつゝ。思ひめぐらさんも。さまあしければ。さてやみぬ。いにしへ吉野の宮と申て。みかどのしば〳〵おはしまし、ころ。柿本ノ人まろ主の。御供にさふらひて。瀧のみやこゝよみけるも。この大瀧によれる所なりけんかし。そのをり〳〵の哥どもにあはせて思ふに。あきづの小野なンどいひしも。又瀧のうへの御舟の山も。かならず此わたりなりけんと。うたがひもなければ。今もさいふべきさましたる山やあると。心をつけて見まはすに。この川づらより左の。すこしかへり見る方に。さもいひつべき山あり。船にしていはんには。まへしりへたひらに長くて。なからばかりに。一きは高く。屋形といひつべき所ある山なり。これやさならん。とは思ひよれど。いかにあらん。おぼつかなし。そは瀧の所よりは。すこし下ざまにしあンなれば。たきのうへとはいへるには。いさゝかたがへるやうにもあれど。なべて此わたりならん山は。などかさいはざらん。古へ忍ばん人。また〳〵もこゝにきまさば必こゝろみ給へ。やがて此里の上なる山ぞかし。かくて又里の中を通りて。西河のかたへかへり。こたみは。さきの板橋をわたりて。石のはしを一町ばかりものぼり。こしげき谷かげを分入りて。いはゆるせいめいが瀧を見る。これはかの大瀧とはやうかはりて。しげ山の岩のつらより。十丈ばかりが程。ひたくだりに落る瀧也。この見る所は。かたはらよりさし出たる。岸のうへにて。ちかう瀧のなからにあたりたれば。上下を見あげ見おろす。上はせばきが。やう〳〵に一丈あまりにもひろごりて。おちゆく。末はこなたかなたより。三山木どもおひかゝりて。をぐらき谷の底なれば。穴なンどをのぞくやうなる所へ。山もとよみて。おちたぎるけしき。けおそろしく。そぞろさむし。かたはらにちひさき堂のたてる前より。岩根をよぢ。つたかづらにかゝりつゝ。すこしのぼりて。瀧のうへを見れば。水はなほ上より落來て。岩淵にいる。この淵二丈ばかりのわたりにて。程はせばけれど。深く見ゆ。瀧はやがてこの淵の水のあまりて。落るなりけり。こゝに里人の岩飛といふ事して。見するよし。かねて聞しかば。さきに西河にてさるわざするものやあると。尋ねしかど。此ころは。長雨のなごりにて。水いとおほければ。あやふしとて。するものなかりき。さるはこのかたへなるいはのうへより。淵の底へとび入ッて。うかひ出る事をして。錢をとるなるを。水

おほくて。はげしき時には。浮みいづるきはに。もしおしながされて。銚子の口にかゝりぬれば。命たへずとなんいふなる。銚子の口とは。淵より瀧へおちんとする際をいふ也けり。そも〳〵此瀧を。清明が瀧としもいふは。かげろふの小野によりたる名にて。虫の蜻蜓ならん。と云し人もあれど。さにはあらじかし。里人は。蟬の瀧ともいふなれば。はじめは。なべてさいひけむを。後に清明とは。さかしらにぞいひなしつらん。いま瀧のさまを見るに。かみはほそくて。やう〳〵に下ざまのひろきは。蟬のかたちに。いとようにたるに。なる音はた。かれが聲にかよひたれば。さもなづけつべきわざぞかし。又その蟬のたきは。これにはあらず。こと瀧也ともいへど。里人は。すなはち此瀧のこと也とぞいひける。そはとまれかくまれ。かの虫の蜻蜓は。ひが事なるべし。かげろふの小野とは。かのあきづ野をあやまりたる名にて。もとよりさる所はなきうへに。そのあきづ野はた。此わたりにはあらじ物をや。さて此瀧のながれを。音無川といひて。萬よりもあやしきは。月毎のはじめなからは。上津瀬に水といふものなく。後のなからは。又下津瀬に水なしとかや。さて上より來る水は。いづちへいかにして。ながれゆくぞといふに。石のはざま砂の下なンどへ。やう〳〵にしみ入リつゝ。なくなりては。はるかに下にいたりて。又やう〳〵にわき出テつゝ。流れゆく也といふは。さることも有リぬべけれど。ころをしもたがへで。上つせと下つ瀬と。たがひにしかかはらんとは。猶いとあやしきわざ也かし。されど今は。たゞよのつねの川にて。さりげも見えぬは。此ごろ水のおほき故也とぞいふ。すなはちかの板橋のかゝれるも。此川にて。しもはにじかうの里中をなん。ながれ行める。かの里にかへりて。又けさくだりこし山路にかゝる。けさはさしもあらざりしを。のぼるはこよなくくるしくて。同じ道とも思はれず。さてのぼりはてゝ。右につきたる道へわかれて。又しものぼる山は。佛が峯とかいひて。いみしうけはしき坂也。さてくだる道は。なだらかなれど。あしつかれたるけにや。猶いとくるしくて。茶屋の有ル所に。しばしとてやすむ。こゝにて鹿塩ノ神社の御事をたづねたれば。そは樫尾西河大瀧と。三村の神にて。西河と樫尾とのあはひなる山中に。今は大藏明神と申シて。おはするよしかたる。この道よりは。ほど遠しときけば。えまうでず。なほ坂路をくだりゆくほど。右のかたを見おろせば。山のこしをめぐりて。吉野川ながれたり。國栖夏箕なンども。川べにそ

ひて。こゝよりは。ちかく見ゆ。さてくだりはてたる所の里を。樋口といひ。そのむかひの山本なる里は。宮瀧にて。よしのゝ川は。此ふた里のあひだをなん流れたる。西河よりこゝ迄は。一里あまりも有ぬべし。かの國栖なつみなどは。此すこし川上也。しもは上市へも程ちかしとぞ。此わたりも。いにしへ御かり宮有て。おはしましつゝ。せうえうし給ひし所なるべし。宮瀧といふ里の名も。さるよしにやあらん。こゝの川べのいはほ。又いとあやしくめづらか也。かの大瀧のあたりなるは。なべてかどなく。なだらかなるを。こゝのは。かどありて。みなするどきが。ひたつゞきにつゞきて。大かた川原は。岩のかぎり也。此岩どもにつきても。例の義經がふることとて。何くれど。えもいはぬこと共を。語りなせども。うるさくて。きゝもとゞめず。此わたり川のさま。さるいはほの間にせまりて。水はいと深かれど。のどやかにながれて。早瀨にはあらず。さて岩より岩へわたせる橋。三丈ばかりもあらんか。宮瀧の柴橋といひて。柴してあみたる。渡ればゆるぎて。ならはぬこゝちには。あやふし。又こゝにも。かの岩飛するもの有。かたらひ來てとばす。とぶ所は。やがて此はしの下なる。こなたかなた岸はみな岩にて。屏風などを立たらんやうにて。水ぎはより。二丈四五尺ばかりの高さなるを。かなたの岩岸の上へよりとぶを。こなたの岸より見るなりけり。そのをのこ。まづき物を皆ぬぎて。はだかに成て。手をばたれて。ひしと腋につけて。目をふたぎ。うるはしく立たるまゝにて。水の中へつぶりととびいるさま。めづらしき物から。いとおそろしくて。まづ見る人の心ぞ。きえ入ぬべき。此比は水高ければ。深さも二丈五尺ばかり有となん。しばし有て。やゝ下へうかひいでゝ。きしの岩にとりかゝりて。あがりきて。くるしげなるけしきもなく。なほとびてんやといへど。おそろしさに。又はとばせでやみぬ。さるは始のどして。うしろざまにむきても。かしらを下に。さかさまにも。すべて三度迄とぶ也とぞ。大かた此わざは。こゝらの年をへて。ならひうることにて。おぼろけならねば。一さとのうちにも。わづかに一二人ならでは。しうるものなしとぞ。このをのこはいひける。是よりかへるさの道のほどは。一里にたらずとはいふなれど。日も山のはちかく成ぬれば。今はとて。やどりにおもむく。川邊をはなれて。左の谷陰にいり。四五丁もゆきて。道のほとりに。櫻木の宮と申すあり。御前なる谷川の橋をわたりてまうづ。さて川邊をのぼり。

喜佐谷村といふを過て。山路にかゝる。すこしのぼりて。高瀧といふ瀧あり。よろしき程の瀧なるを。一つときにはあらで。つぎ〳〵にきざまれ落るさま。又いとおもしろし。象の小川といふは。此瀧のながれにて。今過來し道より。かの櫻木の宮のまへをへて。大川におつる川也。象山といふも。此わたりのとなるべし。櫻いとおほかる。今はなべて青葉なるなかに。おのづから散のこれるも。所々に見ゆ。大かた此よし野のうちにも。ことに櫻のおほきは。かのにくき名つきたる所。さては此わたりと見えたり。瀧を右の方に見つゝ。なほ坂をのぼり行て。あなたへ下る道は。なだらか也。其ほどにも。櫻はあまた見ゆ。されどいにしへにくらべば。いづこも〳〵。今はこよなう。すくなくなりたらんとぞ思はるゝ。さるは此山のならひとて。此木をきることを。いみじくいましむるは。神のをしみ給ふ故なりとぞいふなるに。今は杉をのみ。いづこにもおほくうゑ生したるが。たちのびて。しげりゆくほどに。櫻はその陰におしけたれて。おほくはかれもし。又さらぬも。かじけゆきて。枝くちをれなどのみすめるを。神はいかゞおぼすらん。まろが心には。かく杉うゝるこそ。伐よりも。櫻のためは。こゝろうきわざとおぼゆれ。かくてくれはてゝぞ。やどりにかへりつきぬる。まとや大瀧の哥。かへるさの道にてからうじてひねり出たる。

ながれての世には絶けるみよしのゝ瀧のみやこにのこる瀧津瀬。

宮瀧のも。

いにしへの跡はふりにし宮たきに里の名しのぶ袖ぞぬれける。

菅笠日記下の巻

十日。けふは吉野をたつ。きのふのかへるさに。如意輪寺にまうづべかりけるを。日暮て殘しおきしかば。けさとさらにまうづ。此寺は。勝手の社のまへより。谷へくだりて。むかひの山也。谷川の橋をわたりて。入ッもて行道。さくら多し。寺は山のはらに。いと物ふりてたてる。堂のかたはらに寶藏あり。藏王權現の御像をすゑたり。この御づしのとびらのうらなる繪は。巨勢金岡がかけるといふを見るに。げにいと古く見どころある物也けり。それに。ごだいごのみかどの。御ンみづからこの繪の心をつくりて。かゝせ給へる御ン詩とておしたり。わきにこのみかどの御像もおはします。これはた御ンてづからきざませ給へりとぞ。其外かゝせ給へる物。又御ン手ならし給ひし御硯やなにやと。とうでゝ見せたり。又楠のまさつらが軍にいでたつとき。矢のさきして。塔のとびらに。「かへらじとかねて思へば梓弓なきかずにいる名をぞとゞむる。といふ哥をゑりおきたるも。此くらにのこれり。みかどの御ンためにまめやかなりける人なれば。かの義經などゝはやうかはりて。あはれと見る。又塔尾の御陵と申シて。此堂のうしろの山へすこしのぼりて。木深き陰に。かの帝のみさゝきのあるに。まうでゝ見奉れば。こだかくつきたるをかの。木ごもおひしげり。つくりめぐらしたる石の御垣も。かたへはうちゆがみ。かけそこなはれなど。さびしく物あはれなる所也。そのかみ新待賢門院のまうでさせ給ひて。「九重の玉のうてな（新葉集）も夢なれや苔の下にし君を思へば。とよませ給へる御哥なッど。思ひ出奉りて。

　苔の露かゝるみ山のしたにても玉のうてなはわすれしもせじ。と思ひやり奉るも。いとかしこし。本のやどりにかへり。しばしやすみて。此度は六田の方へくだらんとて出たつ。里をはなれて。山の背をゆき〳〵て。坂をくだりはてたる所なん。六田の里也ける。今は里人は。むだとぞいふめる。よしのゝ川づらにて。古ヘ柳をおほくよめりける所なれば。今もありやと見まはせど。

　有としもみえぬむつだの川柳春のかすみやへだてはつらん。舟さし渡りて。かなたの川べをやゝくだりゆきて。土田

といふ所は。上市の方より。きの國へかよふ道と。北よりよしのへいる道とのちまたなる驛(ウマヤ)也。六ッ田より一里といへどもかゝりき。こゝにてそばきりといふ物をくふ。家もうつは物も。いとあやしくきたなげなれど。椎(シヒ)の葉よりはと思ひなぐさめてくひつ。万葉に「家にあればけにもるいひを草枕旅にしあればしひの葉にもる」これよりつぼ坂の觀音にまうでんとす。たひらなる道をやゝゆきて。右の方に分れて。山そひの道にいり。畑屋(ハタヤ)なとゝいふ里を過て。のぼりゆく山路より。吉野の里も山々も。よくかへり見らるゝ所あり。

かへりみるよそめも今をかぎりにて又もわかるゝみよしのゝ里。よしのゝ郡も此たむけをかぎり也とぞ。くだる方に成ては。大和の國中(クニナカ)よく見わたさる。比(ヒ)えの山あたご山なども見ゆる所也といへど。今は霞ふかくて。さるとほきところ迄は見えず。さてくだりたる所。やがて壺坂寺(ツボサカデラ)なり。此寺は高取ッ山の南の谷陰にて。土田よりこし道は五十町とかや。二王門有て。普門觀とかける額(ガク)かゝれり。觀音のおはする堂には。南法華寺とぞある。三(ミ)こし(層)の塔も。堂のむかひにたてり。奥の院といふは。やゝ深く入る所にて。佛のみかたどもあまたつくりなべたる。あやしき岩ありとてゝみな人はまうづるを。われはいさゝか心ちなやましくて。え物せず。まへなる茶屋に入てためらひをるに。やゝまつ(待)程へて。人々はかへり來(キ)て。有ッつるやうかたるをきけば。誠にあやしき物なりけり。こゝより。右へ谷の道を十町ばかりくだり行て。清水谷(シミヅダニ)といふ里にいづ。此里は。國中(クニナカ)よりあしはらたうげといふを越(コエ)て。吉野へいる道也。一町ばかりはなれてあなたは。土佐といふ所。町屋つゞけり。高取山の麓(フモト)にて。この町なかより。山のうへなる城。ちかく見あげらる。大かた此城は。たかき山の峯なれば。いづかたよりもよく見ゆる所なりけり。檜隈(ヒノクマ)は此わたりと。かねてきゝしかばたづねてゆく。この土佐のまちをはなるゝ所より。右へ三町ばかり細道をゆきて。かの里也。例の翁たづねいでゝ。いにしの事共とへど。さだかにはしらず。都のあとゝは聞(キヽ)つたふるよし。又御陵(ミサヽギ)どもは。この近き平田野口などいふ里にあッなる。いにしへはそのわたりかけて。ひのくまとなんいひしとかたる。さて里の神の社也とて。森のあるつゞきなる所に。高さ二丈ばかりなる。十三重の石の塔の。いとふるきが立(タテ)る。めぐりを見れば。いと大きなる石ずゑありて。塔などの跡と見ゆ。ちかきところ。こ

の石をおのが庭にすゑんとて。あるものゝほらせつれど。あまりに大きにて。ほりかねてやみぬる。程もなくやみふして死にけるは。このたゝりにて有けりとなんいふなる。そのまへにかりそめなるいほりのある。あるじのほうしに。この塔の事たづねしかば。宣化天皇の都のあとに【檜隈廬入野宮宣化天皇の都】寺たてられて。いみしき伽藍の有リつるが。やけたりし跡也。このあたりにその瓦ども。今もかけのこりて多くあり。とをしふるにつきて見れば。げに此庵のまへにも。道のほとりにも。すべてふる瓦のかけたる。数もしらず。つちにまじりてあるを。一ッ二ッひろひとりて見れば。いづれも布目なンどつきて。古代のものと見えたり。此庵は。やがてかのがらんのなごりといへば。そも今は何寺と申すぞとゝへば。だうくわうじといふよしこたふ。もじはいかにかき侍ると又とへば。此ほうしかしらうちふりて。なにがし物かゝねば。そのもじまではしり侍らずといふにぞ。なほとはまほしき事も。ゆかしささめつるこゝちして。とはずなりぬ。わがすむ寺の名のもじだにしらぬほうしも。よには有ル物也けり。むげに物かゝずとも。こればかりは。しか〳〵と人にききおきてもしりをれかし。さばかりのあはつけさには。いかで古ヘの事をしも。ほのぼのきゝおきてかたりけむとをかし。後にこと里人にきけば。道の光とかくよし也。されどそれもいかゞあらん。しらずかし。大かた此ノにきよ。たゞ物の心もしらぬ里人なンどのいふを。きけるまゝにしるせる事し多ければ。かたりひがめたる事もありぬべし。又きゝたがへたるふしなンども有ルべければ。ひがことゞもゝまじりたらんを。後によくかむかへたゞさむとも。物うくうるさくて。さておきつるを。後みん人。みだり也となあやしみそ。これはかならずこゝにいふべき事にもあらねど。思ひ出つるまゝになん。

檜隈川といふべき川は見えざれば。

　聞わたるひのくま川はたえぬともしばしたづねよあとをだに見ん。【古今集に「さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見ん】人々もろ共に。こゝかしこたづねありけるに。たゞいさゝかなる流れは。一ッ二ッ見ゆれど。これなんそれとたしかには。里人もしらずなん有ける。さてをしへしまゝに。平田といふ里にいたりて。御陵をたづぬるに。野中のこだかき所に。松三もと四本おひて。かたつ方くづれたるやうなるつかあり。これなん文武天皇のみざゝきと申す。

そこを過きて。又野口こいふ里にて。こゝかしこ尋ねつゝ。田のあぜづたひの道をたごり行て。一ッの御陵ある所にいたる。こはやゝ高くのぼる岡のうへに。いこ大きなる石してかまへたる所あり。みなみむきに。横もたても二尺あまりなる口のあるより。のぞきて見れば。いはやのやうにて。内はせばく。下は土にうづもれて。わづかにはひいるばかり也。うへには。たてよこ一丈あまりのひらなる大石を。物のふたのやうにおほひたり。そのうしろにつゞきたる所。一丈四五尺がほご。やゝたひらにて。中のくぼみたるは。ちかき世に。高取の城きつくこて。大石ごもほりこりしあこ也こいへり。みだれたる世に。物の心もしらぬ。むくつけきものゝふのしわざこはいひながら。いこもかしこき帝の御陵をしも。さやうにほりちらし奉りけん事の心うさよ。そこにわらびなッごたきすてたる跡の見ゆるは。あやしきかたるなッごの。すみかにしつるなッめり。こ思ひしもしるく。やがて此御山の下に。さるものごもおほくあつまりゐたりき。これを武烈天皇の御陵也こ申すなるは。所たがひて覺えし故に。そのわたりにて。これかれにこふに。みなさいへるは。いかなるとにか。すべてこの檜隈に御陵こ申すは。延喜の式にのせられたるを見るに。檜隈坂合陵は。磯城島ノ宮に天ノ下しろしめしゝ天皇。同じき大内ノ陵は。飛鳥ノ淨御原ノ宮に　御　宇　天皇。又藤原ノ宮ニ御宇ミ天皇。同じき安古ノ岡ノ陵は。同シ宮にあめの下しろしめしゝ文武天皇にておはします。このうち。いづれかいづれにおはしますらん。今はさだかにわきまへがたし。ここなるを武烈こしも申すやうなる。ひがとしあれば里人のつたへも。もはらたのみがたくこそ。さいつころ並河のなにがしが。五畿内志こいふ書をつくるこて。おほやけにも申シて。その國々所々を。こまかにめぐりありきて。かゝる事もいこいこねんごろに尋ね奉りし事。此わたりの里人も。年おいたるはおぼえゐて。そのをりしか〱なッごかたるなり。げにかの書には。何のあこは。その里のそこにあり。その村に。今は何こいふ塚なん。その御陵なるなッごやうに。いこもさだかにしるしたるは。なにをしるしにさだめつるにか。むげにちかきとなれご。その世までは。なほ里人もよくわきまへしりゐて。かたりけるにや。又おしあてにもさだめつるにやこ。うたがはしきとはた多かるを。此度かくこゝかしここ。かつぐ〱も尋ぬるに。こかくさだかならぬにつけては。さまでもつまびらかには。いかにしてたづねえけんこ。いさをの程

は。おぼろけならず思ひしらる。此みさゝぎよりすこし行て。ほどなく廣き道にいでぬ。こは土佐より岡へ。たゞにゆく道なりけり。やゝゆきて。左のかたに見ゆる里を。川原村といふ。このさとの東のはしに。弘福寺とて。ちひさき寺あり。いにしへの川原寺にて。がらんの石ずゑ。今も堂のあたりには。さながらも。又まへの田の中なッどにちりぼひても。あまたのこれり。その中に。もろこしより渡りまうでこし。めなう石也とて。眞白にすくやうなるが一ッ。堂のわきなる屋に。かべの下に。なかばかくれて見ゆるは。げにめづらしきいしずゑ也。尋ねてみるべし。里人は觀音堂といふ所にて。道より程もちかきぞかし。つぎに橘寺にまうづ。川原寺よりむかひにみえて。一町ばかり也。此寺は今もやゝひろくて。よろしきほどなる堂もありて。古への石ずゑはたのこれり。橘といふ里も。やがて此寺のほとりなり。日くれぬれば。岡の里にとまる。かの寺よりちかし。此あひだに土橋をわたせる川あり。飛鳥川はこれ也とかや。いまの岡といふ所は。すなはち日本紀に飛鳥岡とある所にや。さらば岡本ノ宮も。【舒明天皇皇極天皇齊明天皇三代の京】その傍とあれば。遠からじとぞ思ふ。又清御原ノ宮は。その南とあッなれば。その跡もちかきあたりなるべし。

十一日。朝まだきにやどりをたちて。岡寺にまうづ。里より三町ばかり東のやまへのぼりて。二王門あり。額に龍蓋寺とあり。この門よりまへの道の左のかたに。八幡とて社もあり。さて御堂には。觀音の寺々をがみめぐるものども。おひずりといふあやしげなる物をうちきたる。男女おいたるわかき。數もしらずまうでこみて。すきまもなくゐなみて。御詠哥とかやいふ哥を。大聲どもしぼりあげつゝ。ひとだうのうちゆすりみちてうたふなるは。いとみゝかしかましく。大かた何事ともわかぬ中に。露をかでらの庭の苔なッどいふと。ほの〴〵きこゆ。又岡の里にかへり。三四町ばかりも北へはなれゆきて。右の方の高きところへ。一丁ばかりのぼりたる野中に。あやしき大石あり。長さ一丈二三尺。よこはひろき所七尺ばかりにて。硯をおきたらんやうして。いとたひらなる。中の程に。まろに長くえりたる所あり。五六寸ばかりのふかさにて。底もたひらなり。又そのかしらといふべきかたに。同じさまにちひさくまろにゑりたる所三ッある。中なるは中に大きにて。はしなる二ッは。又ちひさし。さてそのかしらの方の中にゑりたる所より。下ざまへほそきみぞを三すぢゑりた

る。中なるは。かの廣くゑりたる所へ。たゞさまにつゞきて又石の下といふべき方のはし迄とほり。はしなる二すぢは。ななめにさがりて。石の左ㇼ右のはしへ通り。又そのはしなるみぞに。おの〳〵枝ありて。左ㇼ右にちひさくゑれる所へもかよはしたり。かくて大かたの石のなりは。四すみいづこもかどなくまろにて。かしらのかたひろく。下はやゝほそれり。そも〳〵此石。いづれの世にいかなるよしにて。かくつくれるにか。いと心得がたき物のさま也。里人はむかしの長者の酒ぶねといひつたへて。このわたりの畠の名をも。やがてさかぶねといふとかや。此石むかしは猶大きなりしを。高取の城きつきしをりに。かたはらをば。おほくかきとりもていにしとぞ。すこし行て。飛鳥の里にいたる飛鳥でらは里のかたはしに。わづかにのこりて。門なンどもなくて。たゞかりそめなる堂に。大佛と申シて。大きなる佛のおはするは。丈六の釋迦にて。すなはちいにしへの本尊也といふ。げにいとふるめかしく。たふとく見ゆ。かたへに聖徳太子のみかたもおはすれど。これはいと近きよの物と見ゆ。又いにしへのだうの瓦とてあるを見れば。三四寸ばかりのあつさにて。げにいとふるし。此寺のあたりの田のあぜに。入鹿が塚とて五輪なる石。なからはうづもれてたてり。されどさはかりふるき物とはみえず。飛鳥の神社は。里の東の高き岡のうへにたゝせ給ふ。麓なる鳥居のもとに。飛鳥井の跡とて。水はあせて。たゞ其かたのみのこれる。これもまヿしからずこそ。石の階をのぼりて。御社は四座、今はひとつかり殿におはします。此御社もとは。甘南備山といふにたゝせ給ひしを。淳和のみかどの御世。天長六年に神のさとし給ひしまゝに鳥形山といふにうつし奉り給へりしよし。日本後紀にみえたり。されば古へ。飛鳥の神なみ山とも。神岳ともいひしは。こゝの事にはあらず。そこはこゝより五六町西のかたに。今いかづち村といふ所也。かくて今の御社は。かの鳥形山といふ所也、されば こそ。かの飛鳥寺をも。てうぎやう山とはなづけゝめ。今もわづかに一町ばかりへだゝれゝば。いにしへ寺の大きなりけんこきは。今すこしちかくて。此御山のほとり迄も有ㇼつる故に。さる名は有ㇽなるべし。さて此御山の南のそはを。二町ばかりゆきて。道のほとりの森の中に。大きなる石どもをたてめぐらしたる所あり。中はすこしくぼまりて。廣さ一丈あまり。横は六七尺も有ㇼぬべし。こはまヿの飛鳥井の跡なンどにはあらぬにや。世に鎌足の大臣の生れ給ひしところぞとい

ふなるは。いとうけられず。此ノやがてちかき所に。大原寺といふ有リ。藤原寺ともいふよし。ちひさき寺なれど。いときよらにつくりみがきて。めにたつ所なれば。入ッて見るに。堂なッどはなくて。たゞきらゝかに作りたる御社あり。大原明神と申シて。かのかまたりの大臣の御ン母をまつれる神也とかや。又此寺は。藤原といふも。持統天皇の藤原ノ宮の跡なるよし。こゝの法師はかたりけり。大原の里は。此南の山そひに。まぢかく見えたり。藤原といふも。すなはちこの大原の事也といふは。さも有リぬべし。されど持統天皇の藤原の宮と申すは。こゝにあらず。そは香山のあたりなりし事。万葉の哥どもにてしられたり。かねては。この大原といふ里。かぐ山のちかき所に有て。藤原ノ宮も。そこならんとこそ思ひしか。今來て見れば。かぐ山とははるかにへだゝりて。思ひしにたがへれば。いとゞおぼつかなけれど。なほ藤原の里は。この大原の事にて。宮の藤原は。べちにかの香山のあたりにぞありけんかし。これより安倍へ出る道に。上やとり村といふあり。文字には八釣とかけば。顯宗天皇の近飛鳥八釣宮の所なるべし。里のまへに。細谷川のながるゝは。やつり川にこそ。やゝゆきて。ひろき道にいづ。こは飛鳥のかたより。たゞに安倍へかよふ道也。山田村。このわたりに。柏の木に栗のなる山ありとぞ。荻田村といふを過て。安倍にいたる。岡より一里也。此里におはする文殊は。よに名高き佛也。その寺に岩屋のある。内は高さもひろさも。七尺ばかりにて。奥へは三丈四五尺ばかりもあらんか。又奥ノ院といふにも。同じさまなるいはやの。二丈ばかりの深さなるありて。内に清水もあり。さて此寺をはなれて。四五町ばかりおくの。高き所に又岩屋あり。こゝはをさ〳〵見にくる人もなき所なれば。道しるべするものだに。さだかにはしらで。そのあたりの田つくるをのこなッどにとひきゝつゝ。行て見るに。これも同じほどの大きさにかまへたるはいはやなる。三丈四五尺がほど入て。おくはうへも横もやや廣きに。石して屋のかたちにつくりたる物。中にたてり。そは高さも横も六尺ばかり。奥へは九尺ばかり有ッて。屋根なンどのかたもつくりたるが。あかりさし入ッて。ほのかに見ゆ。うしろのかたは。めぐりて見れども。くらくて見えわかず。さて口とおぼしき所は。前にもしりへにもなきを。うしろの方のすみに。一尺あまりかけたる跡のあるより。手をさし入レてさぐりみれば。物もさはらず。内はすべてうつぼになん有ける。こはむかし安倍晴明が。たから物どもを。藏めおきつる

を。後にぬす人の入ッて。すみをうちかきて。ぬすみとりし也と。里人はいふなれど。こは例のうきたるヿにて。まヿはかの文殊の寺なる二ッのいはやも。これも。みないとく〱あがれる代に。たかき人をはふりし墓とこそ思はるれ。そのゆゑは。すべていはやのさま。御陵のかまへにて。中なる石の屋は。すなはちおほとこと思はるれば也。そのかまへ。いと大きなる石を。けたにつくり。なかをゑりぬきて。棺ををさめて。上におほへる石を。屋根のさまにはつくれる物也。さて土輪なンどいひけんたぐひの物は。此めぐりにぞたてけんを。こゝらの世々をへては。さる物もみなはふれうせ。又ぬすびとなンどの。大とこをもうちかきて。中にをさめし物どもは。ぬすみもていにけるなるべし。かの寺なる二ッは。その大とこも。みなかけうせて。たゞとなる岩がまへのかぎり。残れるものならんかし。さてこゝのいはやのついでに。しるべするをのこが語りけるは。岡より五六丁たつみのかたに。嶋の庄といふ所には。推古天皇の御陵とて。つかのうへに岩屋あり。内は疊八ひらばかりしかるゝ廣さに侍る。又岡より十町ばかり。これも同じ方に。坂田村と申すには。用明天皇ををさめ奉りし所。みやこ塚といひて。これもそのつかのうへに。大きなる岩の角。すこしあらはれて見え侍る也となんかたりける。この御陵どもの事はいかゞあらん。坂田も嶋もふるき所にしあれば。里の名ゆかしく覺ゆ。さてもとこし道を。文殊の寺までかへりて。あべの里をとほりて。田の中に。あべの仲まろのつか。又家のあとゝいふもあれど。もはら信じがたし。大かた此わたりに。仲まろ晴明の事をいふは。ところの名によりて。つくりしヿゝぞ聞ゆる。又せりつみの后の七ッ井とて。いさゝかなるたまり水の。ところ〲にあるは。芹つみし昔の人といふ事のあるにつけていふにや。こゝろえぬ事ども也。それより戒重といふ所にいづ。こゝは。八木といふ所より。櫻井へかよふ大道なり。横内なンどいふ里を過て。大福村なンどいふも。右の方にみゆ。すこしゆきて。ちまたなる所に。地藏の堂あり。たゞさまにゆけば八木。北へわかるれば。三輪へゆく道。南は吉備村にて。香山のかたへゆく道也けり。今はその道につきて。吉備村にいる。村のなか道のかたはらに。塚ありて。五輪の石たてるは。吉備大臣のはかとぞいふ。石はふるくも見えず。又死人をやく所とてあるに。鳥居のたてるがあやしくてとへば。此國はなべてさなりといへり。村をはなれ。南へすこし行て。西にをれて。池尻村といふをすぎ

て。かしはて村の南のかたはらに。森のあるをとへば。荒神の社といふ。北にむかへり。むかしは南むきなりしを。いとうたてある神にて。御前を馬にのりてとほるものあれば。かならずおちなんどせしほどに。わづらはしくて。北むきにはなし奉りしとぞ。此社は。今物する道のすこし北にて。此わたり天の香ぐ山の北のふもと也。此山いとちひさくひきゝ山なれど。古へより名はいみしう高く聞えて。天の下にしらぬものなく。まして古へをしのぶともがらは。書見るたびにも。思ひおこせつゝ。年ごろゆかしう思ひわたりし所なりければ。此度はいかでとくのぼりてみんと。心もとなかりつるを。いとうれしくて。

いつしかと思ひかけしも久かたの天のかぐ山けふぞわけいる。みな人も同じ心にいそぎのぼる。坂路にかゝりて左のかたに。一町ばかりの池あり。いにしへの埴安の池思ひ出らる。されどそのなごりなんどいふべき所のさまにはあらず。いともたかゝらぬ山は。程もなくのぼりはてゝ。峯にやゝたひらなる所もあるに。此ちかきあたりのものどもとみゆる五六人。芝のうへにまとゐして。酒なんどのみをるは。わざとのぼりて見る人も。又有けり。さてはわらびとるとて。里のむすめおんなんどやうのもの二三人。そのあたりあさりありくも見ゆ。山はすべてわか木のしもとはらにて。年ふりたる木なんどは。をさ〳〵見えず。峯はうちはれて。つゆさはる所もなく。いづかたも〳〵いとよく見わたさるゝ中に。東のかたは。うねを長くつゞきて。木立もしげゝれば。すこしさはりて。こゝかたのやうにはあらず。この峯に。龍王の社とて。ちひさきほこらのあるまへに。いと大きなる松の木の。かれて朽のこれるがたてる下に。しばしやすみて。かれいひなんどくひつゝ。よもの山々里々をうち見やりたるけしき。いはんかたなくおもしろきに。「のぼりたち國見をすれば國原 はなんど。【万葉一長哥「とりよろふ天のかぐ山のぼりたち國見をすれば國原はけぶり立こめうなはらは云々」】聲おかしうて。わかき人々のうちずしたる。さしあたりては。ましていにしへしのばしく。見ぬ世のおもかげさへ立そふこゝちして。

もゝしきの大宮人のあそびけむかぐ山見ればいにしへおもほゆ。かの酒のみゐたりし里人共も。こゝにきて。國はいづくにかおはするなんどとひつゝ。此山のふるとどちなんどかたりいづる。いとゆかしくて。耳とゞめてきけば。大かたこゝ

によしなき。神代のことのみにて。さもと覺ゆるふしもまじらねば。なほざりにきゝすごしぬ。されど。見えわたるところどころを。そこかしこととひきくには。よきはかせ也けり。まづ西のかたにうねび山。物にもつゞかず。一ッはなれて。ちかう見ゆ。こゝより一里ありといへど。さばかりもへだゝらじとぞ思ふ。なほ西には金剛山。いとたかくはるかに見ゆ。その北にならびて。同じほどなる山の。いさゝかひきゝをなん。葛城山と今はいふなれど。いにしへは。このふたつながら葛城山にて有りけんを。金剛山とは。寺たてゝ後にぞつけつらん。すべて山もなにも。後の世には。からめきたる名をのみいひならひて。古へのはうせゆきつゝ。人もしらず成ぬるこそくちをしけれ。されど又いにしへの名ども。寺にしものこれるが多きは。いとよしかし。又その北にやゝへだゝりて。二がみ山。峯ふたつならびて見ゆ。これも今はにじやうがだけと。例の文字のこゑにいひなせることにくけれ。伊駒山も雲はかくさず【「きのふけふ雲の立まひかくろふは花のはやしをうしとなるべし」】いぬゐの方にかすかに見えたるに。吉野の山のみぞ。ちかきにさへられて。こゝよりは見えぬ。さては東も南も。此國の山々。のこるなく見やられたり。又くになかは。疊を敷ならべたらんやうにたひらにて。その里かの森なンど。むら〳〵わかれて見えたる。北のかたは。とにはる〳〵と。末は霞にまがひて。めも及ばず。山のはも見えぬに。耳成山のみぞ。西北といはんには。北によりて。物うちおきたらんやうに。たゞひとつ。これは。うねび山よりも今すこしちかく見えたるなンど。すべて〳〵よも山のながめまで。

とりよろふあめのかぐ山万代に見ともあかめやあめのかぐ山。といふを聞て。なぞけふの哥のふるめかしきはと。人のとがめけるに。

いにしへの深きこゝろをたづねずは見るかひあらじ天のかぐ山。といへばとがめずなりぬ。今はとて立なんとするにも。

わかるとも天のかぐ山ふみ見つゝこゝろはつねにおもひおこせん。なンどいひつゝ。せめてわかれをなぐさめて。この度は南の方へくだりゆく。坂のなからに。上の宮とて。ちひさきほこらあり。麓はやがて南浦といふ里にて。日向寺とい

ふ寺もあり。その堂のまへにも。大きなる松のかれたるあり。このわたりに下の宮といふもあり。すべて此山には。いにしへ名ある神の御社ども。かれこれとおはせる。今はいづれかいづれとも。しる人なければ。此ほこらどもなゞども。もしさるなごりにもやと。目とまる。此里の東のはしに。御鏡の池といふあり。埴安の池はこれ也といひし人もあれど。信じがたし。此池のほとりに。香來山の文殊とて寺あり。かく山村は。この東にありとぞ。又この南浦村の三町ばかり南に。金堂講堂のあとゝて。石ずゑ卅六のこれりとぞ。こはいづれの寺なりけん。すべてかうやうのところどころも。後にふるきふみどもかむかへあはせなば。その跡とさだかにしらるゝやうもありぬべけれど。さまで物せんも。旅路のにきには。くだ〳〵しければ。例のもだしぬ。又此里のたかむらの中に。神代のふるごとをいひつたへたる石あり。そのほとり七八尺ばかりは。垣なゞどゆひめぐらしたり。その中に生る竹に。あやしき事有ッとてかたりしは。後にかゝむと思ひてわすれき。又里を西へいでゝ。道のほとりの田の中に。湯篠やぶとて。一丈ばかりの所に。細き竹一むらおひたるもあり。さて西へ行て。別所村といふに。大宮と申す御社あり。高市社はこれ也ときゝおきしかば。たづねてまうづ。香山のすこし西也。今はこの北なる高殿村といふ所の神也とぞ。この御社の西の方にも池あり。持統天皇の藤原ノ宮と申せしは。このわたりにぞ有けん。今高殿なゞどいふ里の名も。さるよしにやあらん。さて埴安の池も。かならずこのわたりと聞えたるを。今たえ〳〵に所々つゞきて。ひきゝ岡のいくつもあるは。かの堤のくづれのこりたるなゞどにはあらじや。ふるき哥どもにも見えて。名高き堤なりしはや。又その西に。ひざつき山とて。かたつかたには松しげくおひて。ひきく長き岡あり。これにも神代のふるごとゝて。かたりしとあれど。例のうきたる事也き。のぼりて見やれば。南の方に。飛鳥川西北さまへながれて。長く見ゆ。此岡の南にかみひだといふ里あり。もじは神の膝とかくよし。そこよりすこしゆきて。かの見えしあすか川をわたる。このあたりにては。やゝひろき川也。此川のみなみのそひをゆく道は。八木より岡へ通ふ道也。その道を田中村なゞどいふを通ッて。十町ばかり川上の方へゆけば。豐浦の里。豐浦寺のあとは。わづかに藥師の堂あり。今も向原寺といふ。【日本紀に向原】ふるき石ずゑものこれり。えのは井はいづこぞと尋ぬれど。知れる人もなし。難波堀江の跡とて。ちひさ

き池のあるは。いともうけがたし。かの佛の御像をすてられしは。津國の堀江にこそありけれ。さて此里は。飛鳥川の西のそひにて。川のむかひは。すなはち雷村也。いにしへ飛鳥ノ神ノ社のたゝせ給ひて。神なみ山とも。神岳ともいひしは。この所ぞかし。今來て見るに。さいふべき山有て。「神なみ山の帶にせるあすかの川。とよめるにもよくかなひて。川はやがて此山のすそをなんながるゝ。このわたりまでも。飛鳥と古へいひしは。もとよりの事にて。今も飛鳥の里よりわづかに五六丁なるをや。又人まろが哥にも。雷之上とよめれば。今の里の名もふるき事也。いはせの森なンどいひしも。このわたりなりけんかし。又豊浦をとほり。西ざまに行て。和田村といふあり。そこよりすこしのぼりて。山のかひを西へうちこゆれば。劍の池。道の左にあり。東南も北もひきゝ山にて。池はたてもよこも二町ばかりの廣さなる。中にちひさき山有リて御陵也。南西北と池めぐりて。東のみうしろの山につゞけり。さて池の西の堤のしたは。やがて石川村也。此御陵はまがふべくもあらねど。猶さだかにきかんと思ひて。れいの里のおいびとたづねてとへば。第十八代のみかどのみさゝぎ。御名は何とかやのとて。しば〱うちかたふくを。いな十八代にはあらず。八代孝元天皇よといへば。おいさり〱とうなづく。物とはんとして。かへりてこなたよりをしへつるもをかし。此村をいでゝ。あなたは程なく大輕村。是はかの天皇の都の跡也。かるの市なンどいひしも。こゝなるべし。輕をはなれて。猶西へゆけば。やゝ高き所なる。道の南に。なほ高くまろに見ゆる岡あり。その南のつらに。塚穴といふいはや有リときゝつれば。細き道をたどりゆきて見るに。只はいとせばきを。のぞきて見れば。内はやゝひろくて。おくも深くは見ゆれど。闇ければさだかならず。下には水たまりて。奥のかたにその水の流れいづる音聞ゆ。これは何の塚ぞとゝへど。しるべのをのこもしらぬよしいへり。もし宣化天皇の身狹桃花鳥坂上御陵なンどにはあらぬにや。其故は。此岡の下はやがて三瀬村といふ所なるを。牟佐坐神ノ社も。今かの村に有リときけば。身狹は此わたりと思はれ。又坂ノ上とあるに。所のさまもかなへれば也。それにつきて猶思へば。今みせといふ名も。身狹と書る文字を。しかよみなせる物か。又さらずとも。聲かよへばおのづからよこなまりつるにや。かくて西へすこしくだりて。かの三瀬村にいづ。こゝは八木より土佐へゆく大道とぞいふなる。日もはや夕暮に成ぬるを。此里

はよろしき家どもたちつゞきて。ひろき所なれど。旅人やどす家は。をさ〳〵なきよしきけば。なほ八木までやゆかまし。岡へやかへらましといへど。さては日暮はてぬべし。足もうごかれずと。みな人わぶめれば。さはいかゞせん。なほ此里にとまりぬべきを。あやしく共。一夜あかすべき家あらば。猶たづねよといふに。ともなるをのこ。ひと里のうちとひありきて。からうじてやどりはとりぬ。

思ふどち袖ふりはへて旅ごろも春日くれぬるけふの山ぶみ。道の程はなにばかりもあらざンめれど。そこかしこゆきめぐりつゝ。ひゝとひたどりありきつれば。げにいといたくゝるしくて。何事も覺えぬにも。猶このちかきあたりのとゞも。とひきかまほしくて。まづ此宿のあるじよび出たる。年のほど五十あまりと見えて。ひげがちにかほにくさげなるが。おもゝちこわづかひむべ〳〵しうもてなしつゝ。いでこのわたりのめいしよこうせきは。いひ出るよりまづをかしきに。わかき人々はえたへずほゝゑみぬ。この東なる山に。塚穴とてあるは。いかなる跡にかととへば。かれは聖德太子の御時に。弘法大師のつくらせ玉ふとかたるには。たれもえたへねど。なほ何事かいふらんと。さすがにゆかしければ。いみしうねんじて。さはいみしき所にも侍るかな。深さはいくらばかりかととへば。おくはかぎりも侍らず。奈良の寒さの池まで通りては侍れといふ。そもその池は。いづこばかりにあるぞととへば。興福寺の門前に。さばかりの名高くて侍る物を。しらぬ人もおはしけりといふにぞ。心得てみな人ほころびわらふ。さて畝火山の事かたるついでに。神功皇后の御事を申すとて。じんにくんといへるこそ。よろづよりもをかしかりしか。それより此あるじをば。じんにくんとつけて。物わらひのくさはひになんしたりける。こゝには神の御社やなにやと。たづねまほしき所々おほかれど。かゝるには何事かとはれん。いとくちをしくこそ。

十二日。三瀬をいでゝ。北へすこし行て。左の方へ三丁ばかりいれば。久米の里にて。久米寺あり。今もよろしき寺也。されど古への所はこの西にて。こゝはそのかみ塔のありし跡なりと。法師はいひつ。うねび山。北の方にまぢかく見ゆ。ふる言思ひ出られて。

玉だすきうねびの山はみづ山と今もやまとに山さびいます【万葉一長哥に「うねびの此みづ山は日のよこの大御門にみづ山と山さびいます云々】此山のかたへつきたる道を。おしあてにゆきて。すこし西へまがれば。畝火村あり。すなはち山のたつみの麓なり。此むらにいらんとするところの。半町ばかり右の方に。ちひさき森有て。中に社もたてるは。懿徳天皇の御陵といふなれど。そは此山の南。まなごの谷の上とあるにあはず。また御陵のさまにもあらねば。かたぐいぶかしさに。村の翁にそのよしいひて。くはしくたづねければ。げにさる事なれど。まことのみさゝきは。さだかにしれざる故に。今はかの森をさ申すなりとぞ。こたへける。橿原宮は。【畝火山の東南橿原ノ宮は神武天皇の都】このわたりにぞ有〃つらんと思ひて。

うねびやま見ればかしこしかしばらのひじりの御世の大宮どころ。今かしばらてふ名はのこらぬかとゝへば。さいふ村は。これより一里あまりにしみなみの方にこそ侍れ。このちかき所にはきゝ侍らずといふ。さて此山を。今は慈明寺山といふとかや。されどうねび山ともいはぬにはあらず。それもなべてひもじを清てなんいふめる。又此ほとりの里人は。御峯山といひて。いかなるよしにか。峯に神功皇后の御社のおはするとか。かのじんにくんが語りしは。此御ン事也けり。さてそこへは。此うねび村よりのぼる道ありて。五丁ばかりときけば。いざのぼらんといへど。日ごろの山路にこうじたる人々は。いでやとなるともなかンめる物から。あしつからさんもやくなしとて。すゝまねば。えしひてもいざなはずなりぬ。かくて此村を西へとほり。山の南の尾をこえて。くだれば。あなたは吉田村也。此あひだの道の左に。まなご山まさごの池などいふ名。今もありて。池は水あせて。そのかたのみ残れりとぞ　かのいとく天皇の御陵は。そのわたりなるべきを。しられぬこそいとくちをしけれ。さて吉田村にて。例の翁かたらひ出て。御陰井上ノ御陵をたづぬるに。このおきなは。あるが中にもなべての御陵の御ン事を。よくしりをりて。こまかにかたる。近き世に江戸より。御陵どもたづねさせ玉ふ事はじまりて後。大かた廿年ばかりに一ト度は。かならずかの仰事にて。京よりその人々あまた下りきて。その里々にとゞまりゐて。くはしく尋ねしたゝめつゝ。しるしの札たてさせ。めぐりに垣ゆはせなどせらるゝ事ありとなん。ふりにし御跡の

うせゆきなんことを。かしこみ給ひて。さばかりたづね奉り玉ふは。いともありがたき御ンおきてなるを。下ざまなる人どもは。心もなく。それにつけても。たゞがうけをのみさきに立つゝ。うちふるまふ故に。御陵のある里は。ことなる民のわづらひおほくて。そのしるしとては。つゆなければ。いづこにも。是をからき事にして。たしかにあるをも。ことさらにかくして。此里にはすべてさる所侍らず。とやうに申シなすたぐひもあめりとぞ。さてはいよ〳〵うづもれゆくめれば。なか〳〵に御陵の御ンためにも。いと心うきわざにて。たづねさせ給ふ。本の御心ざしにも。いたくそむける事ならずや。いさゝかにても。その里にはけぢめを見せて。御ンめぐみのすぢあらんにこそ。民どもゝ悦びて。いよ〳〵やむごとなき物に。守り奉るやうは有リぬべきわざなンめれ。又かの並河がたづね奉りしをりの事をもかたりき。さて此里中の道のほとりに。御ほとゐといふいまもあり。かたのど水も有て。たゞよのつねのちひさき井也。御陵は。此井より一町あまりいぬゐの方にて。すなはち畝火山の西のふもとにつきたる高き岡にて。松なンどまばらに生たり。かしこけれど。のぼりて見るに。こゝにをさめ奉りつらんと思はるゝ所は。まろに大きなるをかにて。又その前とおぼしき方へ。いと長くつき出したる所あり。そこはやゝさがりて。細くなんある。かの翁こゝまであないしきたりて。かたりけるは。すべていづこのも。古へのみさゝきは。みなかうやうに作りし物なるを。岩屋なンどの侍るもあるは。うへの土のくづれ落て。なかなるかまへのあらはれたる也。ことかたるをきくに。かの安倍のおくなりし岩屋のさまなンど。げにと思ひあはせぬ。かの口より奥へやゝ入ルほどは。このまへに長くつきたる所也けり。又いづれにも。むかしはめぐりにから池の有リつる。七十年はかりあなた迄は。これにも侍りし也。といふを見るに。今めぐりは。畠又はたかむらなンどになりて。さるさまもさらに見えず。此たかむらなんそのなごりと。このおきなはいひけり。御山は今もまたくて。有リしまゝと見えたり。そも〳〵御陵の御ン事をしも。などかくものぐるほしき迄。たづねまどひありきて。くはしうは書記せるぞと。とゞめん人もありなめど。末の代まで。いと〳〵あがりての代の物の。まさしくこれよとてのこれるは。これより外に有リなんや。とにこのうねび山なるどもは。あるが中にもふるく。それとたしかにはたあンなれば。としごろこゝろにかけつゝ。いかでくはしく。まうでゝ見奉んと。ゆかしく思ひ

わたりつる物をや。されごいづこなるも。たゞ同じさまにて。めづらしげもなく。何の見るめしなき所々なれば。たゞおのがやうに。いにしへをしのぶ。世のひがものならでは。わざとたづねて見ん物とも思ふまじければ。あなあぢきなの物あつかひやと。よの人のおもふらんを。さりぬべき事也かし。さてよし田村をいで。北ざまに物して。大谷村といふをすぎ。慈明寺村に入ラんとする所の右のかた。山もとに寺ある。まへの岡のうへに。大きなる塚のかたちの見えたるは。綏靖天皇の御陵にて。里人はすゐぜい塚とぞいふなる。畝火山のいぬゐの麓につきて。これも高き岡なる。例ののぼりて見れば。御陵のさまも。吉田なるともはら同じ事也。東のかたのふもとに。山本村といふみゆ。慈明寺村は。この岡の北につづけり。やゝはなれて又北のかたに。四條村といふあり。この四條村の一町ばかり東。うねび山よりは五六町もはなれて。丑寅のかたにあたれる田の中に。松一もと櫻ひと本おひて。わづかに三四尺ばかりの高さなる。ちひさき塚のあるを。神武天皇の御陵と申つたへたり。されごこれは。さらにみさゞきのさまとはみえず。又かの御陵は。かしの尾上と古事記にあるを。こゝははるかに山をばはなれて。さいふべき所にもあらぬうへに。綏靖安寧なンどの御ンは。さばかり高く大きなるに。これのみかくかりそめなるべきにもあらず。かたがた心得がたし。それにつきてつらつら思ふに。かの綏靖天皇の御ンと申すぞ。まことには神武天皇の御ンなるべきを。成務天皇と神功皇后の御陵の。まがひつるためしなンど。いにしへだになきにしもあらざれば。これももてたがへて。昔より綏靖とは申シつたへつるにや。さ思ふゆゑは。まづ此山のほとりなる御陵どもは。いづれもうねび山のそこの陵とあンなれば。この綏靖の御ンも。今いふ所ならば。必ズさあるべきを。いづれの書にも。これはたゞ桃花鳥田ノ丘ノ上とのみあるは。此山のあたりにはあらで。神名帳に。調田坐神ノ社とあるところなるべきか。それは葛下郡なるを。この御陵は。高市郡と見えたれば。たがへるやうなれど。この郡どもはならびたれば。さかひちかき所々は。古への書どもにも。郡のかはれる例おほかれば。さはりなし。されごこれは。このつきだといふ所を。よく尋ねて後に。さだむべき事也。又神武のおほんは。山の東北と。日本紀にも延喜式にもあるを。かのするぜい塚は。西北にしもあンなれば。うたがひなきにあらねども。古事記には山の北のかたと見え。又かの御陰井上の御陵は。山

の西なるを。日本紀には。南といへるたがひもあれば。必ズ東北とあるになづむべきにもあらざらんか。後の人なほよくたづねてさだめてよ。さてこの四條村より二三町ゆけば。今井とて。大きなる里也。この今井の町中(マチナカ)をとほりて。すこしはなれゆきて。八木(ヤギ)にいたる。こゝにしばしやすみて物くふ。このごろは日いとよく晴(ハレ)て。ちりばかり心にかゝる雲もなかりしに。よべよりうちくもりて。今朝(ケサ)は雨もふりぬべきけしきなりければ。宿をいでゝも。空(ソラ)をのみ見つゝこしを。やうやうに雲も晴(ハレ)ゆきて。うねび山めぐりし程より。又よき日になりぬれば。たれも〳〵いとこゝちよし。當麻(タイマ)龍田(タツタ)奈良(ナラ)なゝどへゆかんには。こゝより物すべきを。いかゞせんといひあはすに。よきついでなればとて。ゆかまほしがる人おほかれど。かの所々は。また〳〵も來(き)つべし。このたびは。われらはやむ(ン)ごとなき事しあれば。一日(ヒト)もとくかへりぬべき也といふ人もあるにひかれて。みなえゆかずなりぬ。さるは旅のならひとて。たれも故里いそぐ心は有ッながら。なほいとくちをしくなん。八木を東へいでゝ。四五町ゆけば。耳成山(ミヽナシ)は。道より二町ばかり北也。畝火山(ウネビ)と香山(カグ)と此山とは。國中(クニナカ)にはなれ出テて。あひむかひたる。いづれもこと山へはつゞかぬを。かの二ッは。なほほとりの山にもやゝちかく見ゆるに。此山はことにとほくのきて。こと山にはいさゝかもつゞきたる所なんなき。さて三ッの山いづれも。いとしも高くはあらぬ中に。此山はやゝ高く。香山(カグ)はことにひきくて。うねびぞ中には高かりける。又そのあひだをくらべ見るに。此山よりうねびは近く。次(ツギ)にはかぐ山ちかくて。うねびとかぐ山の間(アヒダ)ぞ。中には遠かりける。いにしへ(万葉一)この三ッ山の妻(ツマ)あらそひとて。うねびと耳成(ミヽナシ)は男山(ヲヤマ)にて。香山(カグ)の女山(メ)なるを。あらそひよばひ(聘)ける。故事(フルコト)の有ッしは。今見るにも。まことに二ッの山はをゝ(雄々)しく。かぐ山は女(ヲンナ)しき山のすがたにぞ有ッける。此みゝなし山。今は天神山ともいひて。その社ありとぞ。

　さもこそはねぎときかぬ神ならめ耳なし山にやしろさだめて。

(万葉十六)かの鬘兒(カツラゴ)が身なげゝん。耳成(ミヽナシ)の池も。此わたりにや有ッけん。今も道のべに池はあれど。

　いにしへのそれかあらぬか耳なしの池はとふともしらじとぞ思ふ。

さて三輪の社にまうでんとすれば。やゝ行て。きのふ別(ワカ)れし地藏の堂あるちまたより。北の道にをれゆくほど。奈良(ナラ)のかたを思ひて。ながめやりたるそなたの里の梢に。櫻

の一木まじりてさけりけるを見て。

思ひやる空は霞の八重ざくらならのみやこも今や咲らん。さてゆき〳〵て。はつせ川は。みわの里のうしろをなんながれたる。橋を渡りて。かの御社の鳥居のまへにゆきつきぬ。こゝはゆきゝの旅人しげくて。この日ごろの道とは。こよなくにぎはしく見ゆ。此鳥居より。なみ木の松かげの道を。三町ばかり山本へ入りて。左のかたに。だいごりんじとて。文字はやがて大御輪でらとかく寺あり。二王門。三こしの塔などありて。堂は十一面観音にて。三輪の若宮と申す神も。同じ堂のうち。左のわきにおはします。さてもとの道をなほ一町ばかり入りて。石の階をいさゝかのぼりて。社の御門あり。このわたりに。いと神さび大きなる杉の木の。こゝかしこにたてる。とゝころよりはめとまる。はやくもまうでし事など思ひ出て。

杉の門又すぎがてにたづねきてかはらぬいろをみわの山本。【古今「わがやどは三輪の山もと戀しくはとふらひきませ杉たてる門】神のみあらかはなくて。おくなる木しげき山ををがみ奉る。拝殿といふは。いといかめしくめでたきに。ねぎかんなぎなどやうの人々なみゐて。うちふる鈴の聲などども。所からはましてかう〳〵しく聞ゆ。さて本の道にはかへらで。初瀬のかたへたゞにいづる細道あり。山のそはづたひを行て。金屋といふ所にいづ。こはならよりはつせへかよふ大道なり。これよりはつせ川の川べをゆく。しき嶋の宮の跡は。このわたりとぞ聞し。かのとかま山といひし山も。此道よりは。物にもまぎれず。ゆくさきに高く見えたり。さて櫻井のかたよりくる道と。ひとつにあふ所を。追分とぞいふなる。さきには此わたりよりわかれて。たむのみねの方におもむきしぞかし。又はつせの里をとほりて。川のはしを渡るとて。

二本のすぎつる道にかへりきてふる川のべを又もあひ見つ。【古今「はつせ川ふる川のべに二本ある杉年をへて又もあひ見む二本あるすぎ】こよひも又萩原の里の。ありし家にやどる。これよりかへるさは。道かへて。まだ見ぬ赤羽根とえとかいふかたに物せんといひあはせて。ともなるをのこに。かう〳〵なんといへば。かしらうちふりて。あなおそろし。かの道と申すは。すべてけはしき山をのみ。いくへ共なくこえ侍る中にも。かひ坂ひつ坂など申して。よにいみしき坂ども

の侍るに。明日は雨もふりぬべきけしきなるを。いとゞしく道さへあしう侍らんには。おまへたちの。いかでかかやすくは越玉はんとする。さらにさらに。ふようなゝめりといふをきけば。又いかゞせましと。みな人心よわく思ひたゆたはるゝを。戒言大とこひとり。いなとよ。さばかりおそろしき道ならんには。絶てゆく人もあらじを。人もみなゆくめれば。なにばかりのとかあらん。足だにもあらば。いとようこえてんと。つゆききおぢたるけしきもなく。はげましいはるゝにぞ。さは御心なゝりとてをりぬ。

十三日。雨そほふるに。まだ夜をこめて。かのおそろしく。いひつる道にいでたつ。そはこの里中より。右のかたへぞわかれゆく。けさはいさゝかこゝちもあしければ。ゆくさきの山路のほどいかならんと。今よりいとわびし。この道より。室生は程ちかしときけど。雨ふりまさりて。道もいとあしければ。えまうでず。田口といふ宿まで。はいばらより三里半とかや。まづ石わり坂などいふをこえて。道のほどいと遠し。田口より。又山どもあまたこえ行て。桃の俣といふへ二里。又山こえて二里ゆけば。菅野の里也。こゝより多氣へ四里ありとぞ。此あひだになん。やまとゝ伊せの國ざかひは有ける。さて今日は。多氣まで物すべかりけるを。雨いみしうふり。風はげしくて。山のうへゆくほどなどは。みの笠を吹はなちつゝ。ようせずは。谷の底にもまろびおちぬべう。ふきまどはすに。猶ゆくさき。聞ゆるかひ坂もあなるを。かくてはえこえやらじとて。石な原といふ所にとまりぬ。けふは。はいばらよりこなた。いづこも〳〵。たゞ同じやうなる山中にて。何の見どころもなかりしを。櫻はところ〴〵にあまた見えて。なほさかりなりき。されど日もいとあしく。うちはへ心ちさへなやましかりければ。何事もおぼえで。過來つれば。哥なども。えよまずなりにきかし。

十四日。雨はやみぬれど。なほこゝちあしければ。例のあやしきかごといふ物にのりて。飼坂をのぼる。げにいとけはしき山路也けり。されどおのれはかちよりならねば。さもしらぬを。みな人の。とばかりゆきては。いきつき立やすらひつゝのぼるを見るにぞ。くるしさ思ひやられぬる。ともの。をのこは。荷もたればにや。はるかにおくれて。やう〳〵にのぼりくるを。つゞらをりのほどは。いとまぢかく。たゞこゝもとに見くだされたり。さてたむけなる茶屋にしばしやすみて。此

坂をくだれば。やがて多氣の里也。こゝはおのがとほつおやたちの。世々につかうまつり給ひし。北畠の君の。御ッ代々へてすみ給ひにし所也ければ。故郷のこゝちして。すゞろになつかしく覺ゆ。此度も。おほくは此御跡をたづね奉んの心にて。此道にはきつるぞかし。所のさま。山たちめぐりて。いとしも廣からねど。きのふこし里々にくらぶれば。こよなううちはれて。ひろう長き谷なりけり。かの殿の跡は。里より四五町ばかりはなれて。北の山もとに。眞善院とて。わづかなる小寺のある。里人は。今も國司とぞいふなる。そこに北畠の八幡宮とておはするは。具教ノ大納言【國司一世號ニ寂光院不智ト】の御たまを。いはひまつれる御社とぞ。せんその事思ひて。ねんごろにふしをがみ奉る。をりしも雨いさゝかふりけるに。

　下草の末葉もぬれて春雨にかれにしきみのめぐみをぞ思ふ。堂のまへに。そのかみの御ッ庭の池山たて石なッども。さながらのこれるを見るにも。さばかりいかめしき御ッおぼえにて。榮え給ひし昔の御代の事。思ひやり奉りて。いとかなし

　君まさでふりぬる池の心にもいひこそいでねむかしこふらん。この上のかたの山を。霧が峯とかいひて。御ッ城の有し跡ものこれりとぞ。されど高き山なれば。えのぼりては見ず。さてむかしの事共かきとゞめたる物なッどやあると。此寺のほうしに尋ねけるに。此ごろもあるじのほうし物へまかりて。なきほどなれば。さる物も。この里の事おこなふ者の所に。あつかりをるよしいらへけるは。るすなッめり。さてその物見に。又里にかへりて。かの家たづねて。しかぐ〵のよしこひけるに。とり出て見せける物は。此所のむかしの繪圖一ひら。殿より始めて。つかへし人々の家。あるは谷々の寺ども。町屋なッどまで。つぶさに寫しあらはしたり。さては。つかへし人々の名どもしるしあつめたる書一卷あり。ひらきて見もてゆくに。かねてきゝわたる人々。又は今もこゝかしこに。そのぞうとてのこれるがせんぞなッど。これかれと多かる中に。己が先祖の名【本居宗助】も見えたり。かの繪圖に。その家も有りやと。心とゞめてたづね見けれど。そは見あたらざりき。かくて此家にかたらひて。くひ物のまうけなッどしてゆく。さるは伊勢にまうづる道は。こゝよりかのひつ坂といふをこえて。南へゆくを。今はその道ゆかんは遠ければ。堀坂をこえてかへらんとするを。そのかたは。旅人の物する道ならね

ば。くひ物なッどもだしときけばなりけり。又しもかの寺のまへをとほり。下多氣にかゝりて。山をこえ。小川柚の原なッどいふ山里を過て。伊福田寺にまうづ。こゝはすこし北の山陰へまはる所にて。道のゆくてにはあらねど。御嶽になずらへて。さうじなッどしつゝ。國人のまうづる所にて。かねてきゝわたりつるを。よきついでなれば。まはりてまうづる也けり。山は淺けれど。いと大きなる岩ほなッど有て。谷水もいさぎよく。世ばなれたる所のさまなり。さて與原といふ里にいでゝ。寺に立チ入リて。しばしやすみて。堀坂をのぼる。こはいと高き山なるを。今はそのなからまでのぼりて。峯は南になほいとはるかに見あげつゝ。あなたへうちこゆる道也。このたむけよりは。南の嶋々。尾張三河の山まで見えたり。日ごろはたゞ。山をのみ見なれつるに。海めづらしく見渡したるは。とにめさむるこゝちす。わがすむ里の梢も。手にとるばかりちかく見付ヶたるは。まづ物なッどもいはまほしき迄ぞおぼゆるや。さてくだる道。いとほくて。伊勢寺すぐるほどは。はや入相になりにけり。いぶたにまはりし所より。供のをのこをば。さきだてゝやりつれば。みな人の家より。むかへの人々なッどきあひたる。うちつれて。暮はてぬる程にぞ。かへりつきける。かくてたひらかに物しつるは。いとうれしき物から。今はとて。ときすつる旅のよそひも。ひごろのなごりはたゞならず。

ぬぐもをし吉野のはなの下風に
　ふかれきにけるすげの笠は

よしや匂ひのとまらずとも。後しのばん形見にも。その名をだにと。せめてかきとゞめて。菅笠の日記。

本居宣長

紀見のめくみ

紀見の惠み。むすび捨たる枕のくさ葉のふた卷は故鈴の舍翁の都にきの國にまうでられにし道のにきにておのれ早ううつし秘おきしを隔なきごも垣なる少貳もごひら朝臣丹波の守秀ぬしなんご見ておほよそおきなの言の葉のすりまきならぬはなきに此ふみのいかでかくのみやはあるごく櫻にゑりなんには未だ見ぬ人の幸ならんごせちなるすゝめにおもひおこし文の屋ごこごはかりてかく物せしになむ

左馬大允政韶しるす

みやこのゑり物師井上のなにがし年のはじめのこごぶきにごて難波にくだりけるついでおのがもごにもごひきて袖の中よりこのふみをごうでゝこれ校合ごいふごこしてなにゝまれはし書してよごいふを見れば故鈴屋先生の京ご紀國ごへ出立れけるをりの歌ごもしるしたるに大平ぬしの日記をさへそへて板にゑりたるなりおのれもむかし人にかりて見たるこごもありしかごうつしもごゞめざり

しかばはやうみなわすれはてつ今またさらによむこゝちしていとめづらしく見もてゆくにげにうつしひがめゑりひがめててにをはかんなゝどのたがへる所々おほかりしかばいふがまゝにあらためたれど本の書をはなちてはいとおぼつかなくてうつなく誤れりと見えたるもじにのみしるしをつけてかへしやりつ猶よくくらべて物しなばあやまれる所も多からめとたゞとく世にほどこさんとてうながさるゝわりなさにひとわたり見たるゆゑをのみこことわりかきてこのはしぶみにかふるになん見む人なほよくあらためてよ

安政二年正月廿四日

萩原廣道

寛政六年殿のめし給ふによりて紀の國にまゐるとて十月十日の曉また夜ふかく松坂をいてゝ立野の里のあたりにて

ほの〲とあくる光に夜をこめてたち野の山も近く見えけり

かつら瀬といふ處にて

秋の夜はいかにすむらん川水にかけ見る月のかつらせのさと

山川のほとりをゆくとて

ふるさとをわかれしくれは山河の波の音にもそてはぬれけり

はしの木のもみちしたるを見て

紅葉せしはしのたち枝よたちかへり來て見む時はちりや過なん

とりはみの山といふ坂路に柹の木のおほきがなれるを見て「枝高みとる人もなき柹なれはおのかものとや鳥はみの山と大平かよめるをきゝて

もる人もなき柹ならはわれもいさ枝高くともとりはみの山

けふは道いそけは大石の瀧もよそに見てすく

すかの根のなかき日ならは大石のたきのしら糸よりて見ましを

おなし里のわたりにて

玉鉾の道のゆく手の川つらに大石おほきおほいしの里

道にておもひつゝけゝる　古へふり

あさもよしわれは紀へゆくわか君のみとかしこみわれは紀へゆく

深野といふ所にて

神無月ふかのゝ里の名のみしてよもの草葉も冬かれにけり

柏野

かしは野のさとの梢も散すきぬまと葉守の神無月とや

さく瀧村を見やりて

冬なれはこすゑは枯て山川のなみの花のみさくたきのさと

閼伽桶といふ里の名をきゝて

いにしへにたかおこなひしなとりとて名にはおひけんあかをけの里

山田のひつちを見てことしは霜月にうるふのあれは

穂にいてよ月もくはゝる今年たに山田のひつちあきはてぬとも

かへてのいまた青葉なるも所々にあるを見て

冬なから末にかさなる霜月をなほ待とてや紅葉せさらむ

田引といふ所にて

はるかにもおもほゆる哉たゝ一日旅來てもはやふるさとのそら

七日市にやとりて

三日ゆきてとうかの國にいたらんとけふは七日の市までもきぬ

とうかと十日とは假字たかへれと中昔のうたに例もあれはよみついま三日行て和歌山にいたるへき道な

り

十一日高見山をのほるをちこちに紅葉いとおほし

しら雲に峯はかくれてたかみ山見えぬ紅葉の色そゆかしき

たかために雲はたつらむ高見山さなからに見むみねのにしきを

きくかことまこと高見の山ならはわか里見せよ雲るなりとも

同し山　古へふり

高見山言にしありけりのほりたちかへり見すれと國見えなくに

くたりて杉谷といふ所にて

木の國はなほ遠けれとけふはまつ高見の山をすき谷のさと

未のとき過るほとにわしのにやとる

大空をとふかことくに來もせぬにわしのにとくもつきにける哉

十二日龍門の瀧をたちよりて見る

龍の門さしも名高く聞しにも見るはまされるたきのさま哉

山姫のさらせる布をたちぬはてその人ならぬ我そきて見る

むかしより世々に流れて瀧の音もその名も高き仙人のあと

よりて見しいにしへ人の言の葉にかけて名たかき瀧のしら糸

この瀧をけふきて見れはきてみけんいにしへ人のおもほゆるかも

たき見れはみしいにしへのもゝ敷の大宮人のおもほゆるかも

苔ふかし瀧のいと見に來る人もまれにやあるらん谷のほそ道

上市といふ所にてよし野河の水に口すゝき手あらひて

みくまりの社をはるかにをかむ

みよし野のみくまり山は近けれと手向せて行く旅をしそ思ふ

こゝなからをかみてよそに過行をさもなめしとや見くまりの神

川の流れを見てむかしを思ひいつ

わかき世にはやく渡りしみよし野の川瀬は今もかはらさりけり

みるめなき山ふところを出過てけしきよし野の川つらの里

川中にいと／＼大きなる岩のあやしくおもしろきかよ

こほれるを見て

川中にかゝるいはほは世にたくひすくな彦名の神やつくりし

あだの里

鳥つとりうかひかとも跡ところとへともいまはしる人もなし

なかれては川瀬の浪の音にのみあたのうかひの跡は残れり

あき萩もあたの大野の名にたちて今は枯葉にあらし吹なり

宇野たうけといふ所にて　古へふり

しまつ鳥うのゝたむけゆ見渡せはかつらき山に雲立のほる

わか見れはこゝろな雲のたつさへてさやにも見せぬかつらきの山

五條といふところにて

里の名にやまとをとめの夕貌もそれかとそ見る都おほえて

眞つちやまちかしときゝて

はやゆきて見んとは何に思ふらんわれをまつちの山ならなくに

旅なれはたれかはわれをまつち山夕こえゆきて宿はとふとも

同し山をこえて　古へぶり

眞土やま夕こえ來れは橋本はなほほと遠し雨のふらくに

十三日はし本の屋とりを出てよしの川を船よりくたる

いもせ山を見つゝこきゆく

神代より川はへなれとかはらすてむかひもをるか妹と背の山

川のせもまちかきものをいもせ山朝よひさらすうち橋わたせ

なかれての世はたのむともよし野河いつを逢瀬のいもとせの山

ふねこめてよく見てましをいもせ山河のせはやみはや過にけり

岩手の里のあたりを過てなほ川をくたる

つぬさはふ岩手も過ぬこまつるき若山ちかくなりぬらんかも

けふはひねもすに空くもりてをり〳〵雨ふる

紀の川ややむかとすれとふる雨にとま引おほふ船のいふせさ

たひの瀬といふ所に船はつ

鯛の瀬にわか船はてぬ旅つとに釣てもゆかむ釣はりもかな

十月十七日和歌のうらに物すとて廣瀬といふわたりより川ふねにのりてくたるほと

かけうつる山のなかめも又たくひなみに心のゆく船路かな

今ゆく河のほとりの野中に四方のあらしと名つけたる松のたてるを見て

枝高く榮えけるかな名のみしてよもの嵐も納れる代に

この月を小春といふ事を思ひてけふののとけさをよめる

かすむとはなけれと和歌のうら〳〵とけふは名におふ春日なりけり

くもりなき日の影の波にうつろふか玉をこきちらしたるやうに見ゆるを

空はれて浦なみとほく久方のひかり玉ちる玉つしまやま

來て見れは礒の岩根よかけそへんことの葉もなきわかの浦なみ

玉津島社の神主高松房雄主の家にてひるのあるしせられたるにあるしに盃さすとて

道守るこの神かきともろともに千世もめくらむけふのさかつき

海にのそみてみたま屋のたゝせ給へるさまいかめしき御構にて石の橋わたされたるなといとけしきよきを見て此ところ今はわか君のをさめさせたまへる御國のうちなることを思ひて

わか君のひろき御袖につゝまれてひかりくはゝる玉つしま山

このわたりにめつらしき石の多かるをひとつふたつひろひて

來て見ても玉しらぬ身は石をのみひろひてかへるわかのうらなみ

名草ノ濱宮にまうてゝ

紀の國やいせにうつりし跡ふりてなくさの濱にのこる神かき

なくさ山を見わたしてかへるさに

思ふこち船さしよせて旅なからこゝろなくさの山を見るかな

日くるれはあかすわかれてきの川やおもかけにたつわかのうらなみ

月出て水にうつれるけしきいとおもしろきを見さして船よりおるとて

山の井にあらぬこよひの川ふねもあかてわかるゝ月の影かな

霜月四日の日日前宮にまうてゝ

かしこさは伊勢の神かきへたてなくこれもあまてる日のくまの宮

國造紀俊庸ぬしの家をとふらひて

紀の川や天の道根のみなかみをたつねて清きなかれをそ見る

あるしほかへ物せられたるほとにて逢さりけれは

をりならてとふらひ來つるかひもなくかけをたに見ぬ秋月のさと

こゝをは秋月の里となんいふなるをりならてとはけふ四日なれは月のころならぬ心なり

霜月十二日長原忠睦家會兼題

雪中眺望

雪もよの夢のうきはし跡絶て見わたし白しあけほのゝ山

しろ妙はふしの高根をかきりにて雪にはて見るむさし野の原

めつらしくつもる岡へのまつの雪いつともわかす見るよしもかな

禁中花

もゝしきの花のさかりを見渡せは雲のしたゆく雲のうへ人

たちはなにむかふみはしのさくら花これもむかしにほふ春かせ

いにしへふりのうれたみ歌

ほうしらは八十のまかこと神をしも佛になしていふかられたさ

ほとけらは玉のうてなにいつかれて神は雨もる小屋のしき屋に

佛らは八尋の殿にいつかれて神のやしろは寺のかたすみ

法師らは雲にとふ世をふせいほにかゝみてふるか神の宮人

霜月十五日例の紀の川を船より紀三井寺にまうてゝ僧房より前なる入江のけしきを見渡して

近江にもうらの見るめはまさりけりおなし名たかき三井の古寺

ふく風のなくさの濱に船よせて波もしつかに見るめをそかる

觀音の堂を見て

みつくりの中子をいつく瓦ふき世々ふりぬれはこれもたふとし

和歌のうらを見わたして
水清き入えにしつく影見えててる日にみかくたまつしま山
まへなる鹽濱といふものを見て
紀のうみやあまは見えねと鹽濱にからきしわさそくみてしらるゝ
わかのうらにわたりて玉津島の御社にまうつ御あらかのまへ左右に正徳のころ靈元のみかとの奉らせたまへる石の御燈籠のたてるを見たてまつりていともかしこけれと
しきしまの道と光とあきらけき御代にかゝけし神の燈
かへるさはかちより物せんといへは一日日前宮にまうてしをりもあしのけおこりぬる事をいひてなほ船よりこそはと大平かいへりけれはたはふれに
玉津しま道守るてふ神なれはかへる浦わのあしはやまめや
かくてまた船にのりてかへるつり船おほく入江にうかへるを見て
夕なきに釣するあまの袖ならて我そ宿りにかへそ浦ふね

初秋月

のきちかき桐の一葉のゆふへより月も秋なるかけそ落くる
本間了全翁の許にてうまこのいとけなきかうつくしう琴ひきうたふをきくほとにけふは必日くれぬほとにとくやとりにかへるへけれはいとあかすおほえてよめる
今しはしくれすはきかむ琴の音にあかている日を引もとめはや
同しをり水島氏の女もともにことひけるをきゝて
いまよりそおひさきしるき姫小松ひく手えならぬ琴の初音は

早春霞

神代より神やさためし春たては立もおくれぬ朝かすみかな
きのふけふ花うくひすもたち初し霞よりこそ春はしるらめ
雪はあれと霞を見れはうちとけて人のこゝろも春はきにけり
今朝見れはかすまぬかたもなかりけり野山のすゑも春やきぬらん
はなとりの色香もいはし立そむる霞そひけるはつはるの空

十月廿九日小浦朝通家會に

初戀

いかにせんはつ山あゐのすり衣うらはつかしき下のみたれを
いかにせんまたふみ通ふ方たにもしらて入ぬる戀の山路よ
一しほは思ひそめても忍ふ山谷の紅葉の色はしられし
もりやせんつゝむとすれと戀衣ならはぬそてにおつるなみたは
入そめてしけきなけきの下露のおくいかならん戀の山道
わかこひはけふ初秋のしのすゝきまたしら露の袖にあやしき

閑中春曙

しられしのすみかも春の山もとを見せはや人にあけほのゝ空

花鳥のみゝにもめにもほの〴〵と曙にすむ岡の邊のいほ

山かけや心もしらぬ身ひとつにをしきは春のあけほのゝ空

閏霜月五日井口敬秩家會當座

池上蓮

おく露もちらてかたよる蓮葉に吹かせすゝし庭のいけ水

はちす葉のにごりにしまぬいろ見れは心もすゝし庭の池水

あさむかぬこゝろを見せて蓮葉の露吹はらふ池の夕風

同 月前情

しらぬ身もたゝにはあらぬ秋の月心ある人いかに見るらん

とはゝやな物のあはれをしる人に月見る秋のよはの心を

秋の夜のふかき心はしらぬ身も涙はしりてくもる月影

あきことに月のあはれはますかゝみわか世ふけゆく影をみるにも

十月廿一日小谷時影家會當座

山家時雨

軒ちかく過ししくれの雲はゝやむかひの峰にかゝる山里

谷のいほ雨やどりする柴人もしは〳〵かはるむらしくれかな

かきくらすしくれはゝやくすきの戸に音こそやまね跡の山風

過ぬれと杉の雫をふくかせに又もしくれのふるの山里

雪まよふあらしもはやき山里は晴間の空もうちしくれつゝ

晴間にと水くむほともしくれきてかへさはぬるゝ山住のそて

はれやらぬこゝろはいとゝ袂さへしくれかちなる冬の山さと

いともかしこく心ことなる御めくみの物をいたゝきもちて故郷にかへるよろこひをよめる

よるひかる玉にもまさるたま物をひるの錦とかつきてそゆく

その御硯は櫻川の石とあるにつけて

冬なから老木も花のさくら川ふかきめくみのはるにあふ身は

右

芝山殿より扇に御歌そへて給へる御かへし

吹おろすめくみのかせに色深くとめしこと葉をあふきてそみる

同旅のやとりをとふらひ給へる御かへし

うれしきをとふ言の葉の玉さへそ何につゝまん袖のせはきに

とはるゝにけふはなくさの濱千鳥波のかへるをおもふこゝろも

旅ころもうちよるわかのうら波にはる〳〵きぬるかひも見えけり

同時この國の物とて大崎のしら石の硯藤代の墨をかへりことまうすたよりに奉るとて

旅すみのあかぬしわさはくみてしれ硯の水の世にあさくとも

同玉あられの御かへし

手にとらはきえんあられの言の葉にかゝるめくみは思ひよりきや

霜月廿六日須佐神社に詣てんこて朝こく出たつ黑江こいふ所はいにしへの黑牛潟なりこかねて聞しかはこゝろをつけて見つゝゆくに海見えさりけれはいふかしくて 古調

ぬは玉の黑江干潟は黑牛の潟こはきけこ海も見えなくに

干潟の里は黑江よりつゝきたる所なりこの里をはなれて入江まちかく見えたる 同

ぬは玉のくろえ干かたの里過て見れは黑江は黑うしの海

黑牛潟牛は名さへにうつもれて今は黑江の里こいふなり

此うらに牛の形したる大なる石の有けるを今は土にうつもれて見えすこいへりさてなんかくはよめりける

干潟浦につゝきて名高の浦北南に山有て西にむかへる入江のけしきいこおもしろし

音にきく名高のうらを來て見れはうへも名高の浦にそ有ける

むらさきの名高のうらを行過て山路にかゝる藤しろのさこ

藤白社こゝは熊野の一の鳥居こそいふなる

神さひし神垣見れはみくまのゝ山口しるきふちしろのみや

これより坂路をのほる

坂こえて紀のうみ見れはくまの路のおくしのはしき藤代の山

ふちしろの御坂をこえて思ひやる百重の山のくまの路の空

末遠しもゝへの山のくまの路のいはのかけ道おもひやられて

有田川をわたるこて

山遠くこえこしかひも有田川見わたし淸きせゝの白波

糸鹿山をこへはけふゆく道にあらすこいへは 古調

われもけふこえまし物をあて過て糸鹿の山は見すやかへらむ

萬葉集に足代すきて糸鹿の山のこ有を思ひてなんかくはよめりけるあては在田のいにしへの名なり

有田のほこは名に立て道のほこりにもをちこちの山にもみかむこいふ木の今をさかりこ實なりて數しらす多くたてるをみて 古調

はしけやし有田の山は冬枯に青葉しけりてこかね花さく

みかんこいふ名をかくして

そのかみの袖の香にほふたちばなにかよふ木の實のむかし問はや

千田の里ちかくなりぬ此里にそ須佐の御社は建たまへる此度は此神主岩橋氏のこのわたり神主たちにいにし

への道とき〻かせてよとこはれしによりて其家にこよひはやとらむとて來ぬるを道のほといとめつらしくおもしろき浦山を見つゝきぬることゝいひて

いにしへの道をしへにとこし我そわかまたしらぬ海山を見し

岩橋氏あるしせられたるさかな物をきくの花のかたに作れるを見て大平かそのうたよめるに又名吉といふ魚をことさらにてうじ出されたるに

うこきなく千代もわたらむ岩橋のやとの名よしのけふの御肴

廿七日朝御社にまうつ　古調

あさもよし木路のしけ山分てきて木たね蒔けむ神代し思ほゆ

いたけるの神のしきます紀の國といはふかふろの神の宮これ

午のときはかりかふら坂といふ山路をゆくとて

梓弓いそくとすれと冬の日はのほれは午になりかふらさか

此坂路より海にさし出たる磯のひき〻山とも見おろして

みちのくに名にたつ末のそれならてとするゐ浪こすいそのまつ山

これにつゝきたるふちしろの坂を又こえ過て名高の浦にて又よめる　古調

きのふ見てけふも見つれと紫の名高のうらはあすも見かほし

黑江にはしの木の紅葉の色こきかちり殘りてたてるを見て萬葉に黑牛の潟くれなゐにほふとよめる歌を思ひいてゝ

うら磯に見けんむかしの面影に紅にほふ黑牛のやま

殿の御まへに御扇と鏡石のすゝりとを奉るとて

きこえあけて身は下なから明らけき御代にあふきのかひは有けり

猶まもれ神路の山のかゝみ石ちりもくもらぬ御代をときはに

吹上の御まへに鏡石を奉るとて

かゝみ石千代に八千代にいすゝ川かはらぬかけをうつしてそ見る

備姫君の御まへに神路山の杉の木もてつくれるかめの形したる香合を奉るとて

玉たれの小龜よ君に萬代のよはひをゆつれ・おきに出なは

もの〻名　小島　日高　心葉

田を見すやはやかりはとひかけほして急け里の子ころは過にき

閏霜月三日朝椋社にまうつ御前に大なる松の長く枝たれひろこれるあり

廣前にみとりも深く枝たれてよにめつらしき神垣の松

同神主杉原氏の家をとふらひて

松か枝にかけをならへて榮ゆかむ神のみむろの杉原のやと

猿の月見たる繪に人の歌こひければ

猿者人人者猿迦毛寐不爲而猿者月見流人者夢美流

おなしついでによめる

月見れは桂のかけはあかけれととりてはむへき實ひとつもなし

そらすみて我よりあかき影みれは面はつかしき秋の夜の月

楠正成主の贊 長歌

うまこりのあやにくすしきくすの木のうしの命の天地にいたれるいさを一たひはたちける物をうつそみの世のまかことゝ二たひはたゝすて終に湊かはうかふ水沫のいたつらになりにけるかもいたつらになりてはあれと天皇につかへまつろふものゝふのかゝみとなりて天地のよりあひのきはみ天地にいたれるいさをもちつきのてりたらはしてたちにけるかも

長原忠睦かいにし九月七日に遠津祖の百五十年忌のわさしけるその歌こひければよみておくる

こふあとも百五十年の秋のそらかはらぬ宿の長月のかけ

逢不遇戀

またも見て關はうつゝの年も經ぬありしや夢のあふさかの山

關羽の像讃 せうか

かきなてし髯の八束の長き世までにいかし鉾いかしたけをの名はくちせめや

物の名 まつはしのうへのきぬ

しくれする川への紅葉いてゝまつ橋のうへの木ぬれつゝそ見る

小浦朝通家會に

名所千鳥

影見てもくもりなき世を八千世とや紀の川千鳥月に鳴らむ

田上初雁

くる雁やいなはにたとる別れにし春のあら田のおもかはりして

閏霜月二日沼野記之家會當座

梅薫枕

はるのよの深きあはれはしるやいかに梅香にほふねやの手枕

かよふとも枕もしらしうめの花春の夜深くにほふあはれは

夢さめてむかしをとへは手枕にこたへかほなるよはの梅かゝ

同 路落葉

あともなき庭のおち葉に冬來ぬとなか〳〵しるきやとのかよひ路

冬來れは夕くれかへる柴人にこの葉さきたつ山おろしかな

散しきてあとこそ見えね道のへの紅葉の錦冬は來にけり

もみちはを誘ふあらしに逢坂や行もかへるも錦をそきる

和歌山の歌人たちの許にのこしおく 長歌

しき島の道まもるてふ神かきにまちかき里のしるしあらはよ

りくる波も名にたてるうらの友つる聲たえすあしたゆふへによひかはしなるゝ磯への松の葉のかはらぬ色をためしにて春は野山の花のもと秋は入江の月かけにこゝろをうつしをりをりのうさもなくさのやますして木の川水の底ふかくちしほ八ちしほそめ〳〵てとしもつもらはおきつかせ其名を四方に吹上の濱のしらきく千世遠くことはのはなもにほはさらめや

反歌

春ことにまさらむ色を旅衣またもきて見む和歌のうら松

ふようといふ花にるりといふ鳥のゐたるかたかける繪に人の歌こひけれは

いひしらぬ名はもろこしの花鳥もかけてこそ見めやまとことの葉

小谷時影家會當座

霧中鶉

晴やらて霧さへ秋は深くさの里を鶉のゆふくれの聲

あはれなるうつらの聲も立そひていとゝさひしき野邊の夕霧

・わか山の人々にわかるとて

なれ〳〵て別れとなれは嬉しきをつゝみてかへる袖もぬれけり

和歌のうらの汀のあしのふしの間も我はわすれし忘るなよ君

とも鶴のかくるなさけの深き江をたちや別れむ和かの浦松

上にしるせる歌ともの中に初秋月 早春霞 閑中春曙 逢不遇戀 田上初鴈この歌ともは小谷時影 落合春葉翁 小浦朝通 本間丁全翁等の四所のうちの會の歌なりしをいつれかいつれなりけむまきれつ

閏霜月廿三日若山をたちて國にかへるさまにかま山神社同御陵つまつ姫神社いたけその神社大屋津姫の神社なとにまうてけるいたけその神社の御前なる池のそりはしのいたくそこなはれ朽たるを見て

木の國の神の御橋は朽にけり作りかふへき木はなき世かも

此神の八十木種まきほとこしたまひしことなとおもひて

あれにける神の社を來て見れは我はなけきのたねをこそまけ

つまつ姫の社にて

あれにけりいつらむかしのつまの森こたちうすくも成にけるかな

かま山の御陵にて

をたけひの神代の御聲おもほえて嵐はけしきかま山の松

山口たうけといふをこゆとて

行さきの峯いかならむ山口ときくたうけたにくるしきものを

廿四日和泉國信太森はえ立よらて過るとて

しけしとは聞ししのたの森なれと行ても見ねは言の葉もなき

高師濱にて

名に高きたかしの濱はそれたともいはねとしるき浦の松はら

この濱のまつみな枝ひきくたりたり

生しける松はたかしの名のみして濱の眞砂を拂ふ下えた

廿五日大坂にて

名に高きあしは跡なき難波潟家居そしけく立つゝきける

こよひ船より京へのほる船の中なから夜の物まてゆたかにて川かせの寒さもしらぬまゝに思ひつゝけゝる

いにしへの草のまくらをおもふには旅もたひとはなき世なりけり

廿九日芝山殿にまゐりて見え奉けるときたてまつれる歌

よの人も君かことはをしをりにてふみはまよはし敷しまの道

光見て君か言葉の花の露散れは玉とそ世には驚く

同しをりよみて見せたてまつりける

道とはゝたゝいにしへによる浪の跡をたつねよ和歌のうら人

あしの葉のちかきしをりに迷ふなよふるき跡あるわかの浦路を

清水廣居か家の年毎の例とて霜月のころ先祖をはしめうからやから奴のいさをありしものにいたるまてねんころにそのみたまをまつるわさするその歌よみて見せけるに

こゝとはにたまちはふへし眞清水の清き心にまつるみ魂は

橘經亮主のむすこのよろこびしたるによみておくる

つかへこしよゝのいさをはたち花の身さへ子さへにさかえます君

京にて冬の山の畫に人の歌こひけれは

もみちはも跡なくちりて雪まつに日數のつもる冬枯の山

同水鳥のあまたむれて川をゆく繪に

山河やかはかみよりやこほるらむ友ひきつれてくたる水鳥

十二月四日家にかへりつく

我はもよ御けしたばりぬさき草の三葉のあふひの綾のみけしを

十日の夜人々つとへてよろこひの會したる當座

君恩如海

きのうみやひろきめくみの浪かけて磯のもくすも今そかひある

寄道祝

あしたつもわかの浦なみいにしへに立かへる世をうれしとそなく

山人も君をしたひて紀の國や南のうみの道ひろき世に

むすひすてたる枕の草葉

寛政五年三月十日に伊勢のふるさとをたちて京にのほり一月はかりとゝまりて四月の十日ころ京をたち出て近江美濃路をへて尾張の名古屋にものして同し月の晦日にふるさとにかへりけるそのほとのうたともひとのものかのもつきつきにかきつけゝる

京にのほれるほと花のころは早く過にけり　本居宣長

こころからよに似ぬはるの長閑さはちりても花の都なりけり

京の人々にあひて

櫻こそはやくちりぬれうれしくもあひ見る花のみやこ人かな

のほり來るをまちつるなといふ人に

おそしとて人にまたるゝ身なりせは花のときにはおくれましやは

肥後守橘經亮ぬしのもとよりあはす御室のおそさくら見に物せんときこえしかつとめて雨の降けれは音もせすなりにけるをかのぬしの許へよみてつかはしける

たかへける契は君かとこわりの雨をうらみて過すけふかな

散ぬともあすはゆきても見るへきにあとたに殘せ花の春さめ

かへし　橘經亮

きそのよのちきりたかへし我とかは雨におふせて君ゆるしてよ

また　宣長

みのかさを君かなさけのふかゝらは雨はふるともさそひこそせめ

おなしとき　春庭

おそさくら猶のこりける花もはやけふふる雨にちりやはてなむ

花見にとちきりおかすはかくはかり降も恨みしけふの春雨

小倉野といふもちひを人のおくりけれは

はるなから萩のはなかとまかふかな霞をきりのをくらのゝいろ

こはよにはきの花といふもちひに色の似たれは也

澤眞風か家にやとりて

はる雨にまさる野澤のわすれ水わすれし君のふかきなさけは

かへし

はるさめに名もなき澤のうもれ水うつしまつれるみかけかしこし

宣長大人にはしめて逢奉りて　小林義兄

鳴神のおとのみきゝて逢さりしとしの恨は今そなきぬる

ある日經亮ぬしのもとへ　宣長

菅の根のなかきはる日を君來すてかたる人なく暮しかねつも

かへし　經亮

さす竹の大宮つかへいとまなみ問ぬを人の忘ると思ふな

又　宣長

大きみにつかふる君とおもふからいとゝ日毎に忍はれそする

澤眞風か家をかりの宿とさため居るを

大内もほとちかきわたりなるに月おもしろき夜

春なからかはかり月のさやけきは雲井にちかき所からかも

このうたを又の日經亮に見せければ

經亮

かすむよの月もさやかに見えつるは君かことはの光なるらむ

とよみけるを　春庭

ことのはのひかりをそへて又更にすみこそまされ春夜月

雨の降ける日訪ひ來て　經亮

はるさめのいふせき空も忘られて君とかたれはあかすそ有ける

かへし　春庭

ちりぬれと櫻はよしや色深き君かこと葉の花しにほへる

廿日はかり大坂にくたるとて伏見へものしける道にて

九條といふ所にやすらひけるに其家の前にいと大なる

柳のたてりけるを見て　宣長

こきませし櫻のにしき思はれてむかしこひしき青柳の影

ふし見より舟にのりて夜淀川を下るとて

高瀬舟なにはもちかくなりぬらんとまもる月の影傾きぬ

はしめて住よしの社にまうてゝ

ゆきて見んとおもひわたりし年月も久しく成ぬ住吉の松

あなたふと此住の江の宮はしらたちかへりきて又もまゐてん

又の日大坂よりかへるさ水無瀬の宮の跡を尋て

みなせ山ふりにし跡を來て見れは今も川せは有て行なり

あと見れは心もしぬにいにしへのおもほゆるかなこの宮ところ

みけむかふみなせの宮のあとふりて竹の林も神さひにけり

天かけりかへり來まして又こゝにしつまりゐます御魂をそ思ふ

山崎の八幡にまうてゝ

筑紫よりわかれ來まして大君の遠き守といますおほ神

よと川を中にへたてゝ遠近にしつまりいます廣幡の神

桂川のはしをわたるとて

久かたの中なる河ときけはこのわたせる橋や天のうきはし
難波のゆきかひに小舟の中にて二夜うき寐していとい
ふせく明しわひたるに京にかへりての夜はいをやすく
寐て
旅なからしはし都をふるさとゝこよひはとけてぬるか嬉しさ
廿五日賀茂にまうてたる道に甲斐權守季鷹主の行逢た
るはしめて物かたりなとしけるかへりて後によみてお
くりける
音にきく賀茂の川なみ立なからあひみし君はあかすも有哉
上の御社にて
並たてる杉の木すゑも物ふりて宮居尊き賀茂の神山
川邊なる茶やにやすみけるにけふはいとあつくて吹來
る風のいと心よくおほえけれは
みなつきもおもひやられて春なから涼しさあかぬかもの川かぜ
下鴨にて
來て見れはみたらし川の清きせにうかふ昔のよゝのおもかけ
この日經亮ぬしをともなひけれは
經　亮
めつらしき君にひかれておきつ鳥かもの川邊に遊ふ樂しさ

すかの根のなかき春日をくるゝまて思ふ友とち遊ふたのしさ
わか旅のやとりを訪ひ來る人の多かりけりときゝて
鈴の屋の音にきこえし君そとてふりはへ人のとふにそ有ける
旅ゐのほと物かく料にとてたひ／＼に墨筆をおくりけ
る人によみてつかはしける
宣　長
すみ筆は君かめくみに得つれとも書て殘さむことのはもなし
京にあるほと源氏物語をある人のもとよりかりたるを
かへすときによみてそへける
むらさきの色も忘れしはしとて只かりそめのゆかりなれとも
かりの家の主澤眞風かこひけるまゝによみてあたへけ
る長歌
高ひかる日の御子のきこしをす國のはたては馬のつめつくし
の國鳥かなく吾妻の國へこと／＼にいゆきたらひて玉ほこの
尊き道はつき／＼にひらけゆく世に神なからふとしきいます
うち日さすみやこにしもよ心ある人はなきかも人あれと宮人
さひてしなか鳥さはにあれとも石上ふるきこゝろを玉たすき
心にかけてねもころにたつぬる人はをさ／＼に見えす聞えす
いかなれか然にあるらんいかなれかかくしあるらむこゝをし
もあやにうれたみいはしとは我は思へとあらふるや馬にかく

こふふもたしのもたしあらすていさゝかに言擧すらく京人こころしあらは　皇神のたふときみかけあふさわに思ひすくさすますらをのその雄こゝろをふりおこしおもひおこしておく山のふかくもこめてあさち原つはらにあかせふるきその道

こは大かた京人の物まなひのまめやかならさるをなけきて

中西某七十賀の哥こひけるによみてつかはすこはむかしあひしれりし人なり

七十を八千代のさかの山口にいはひはしめてのほりゆかさね

吉田にまうてゝ八柱の神のみあらかを拝みたてまつりて

これそ此神のつかさの名残としきけは心にふかくおもほゆ

道のついてに小澤盧菴を岡崎にとふらひたるに軒近くたてる松の一木はわかのうらよりうつしたるときゝてあるしの風流思ひよせて

おもはすもみやこなからに若浦のけたかき松をけふみつるかも

此庵の南のかたにむかひて東山の見わたされたるいとけしきよし

見るか君ひんかし山の花の春月の秋をもわか物にして

とよみけるに

本居翁のとのはゝ松のおもておこしなめれはこの菴にのこしてんとおもふついてに　小澤盧庵

春ここに松はみとりもそへてけり年のみ高き我や何なりとそうめかゝる庵の見わたしはけに四つのときうつり行をゝ〳〵あかぬここになむ

我ものゝ君におくらてくやしきは野山をいるゝ庵の明暮とありけるかへし　宣長

年のみを何かはいはん君か名は松より高く聞えける世に

春秋の野山をいるゝとの葉にその月花も見る心ちして

ある人のもろこしに有し三笑といふ物の繪にうたこひけれは

さかしらに佛ねかふと橋柱たてし誓そ猿には有ける

二月はしめより三月の末つかたまて同しさまに兩のいとしは〳〵ふりけれは

けふてれは明日はくもりて雨ふりて晴間すくなく春もくれにきやよひの晦日に

あはれにもくれ行はるかわれも又みやこの別遠からぬころ

草まくら旅とおもへとみやこには千代もあらはやあかぬ心は

三月晦日の夜京にのほるとて關のうまやにやとりたる
によひ過るほとより雨いたく降出たり

稻掛大平

草津にやとりて

すゝか山たひねかなしき雨もよに泪ふりそふかたしきのそて

ひきむすふくさつの里の假枕ふるさとしのふ夢もみしかし

四月二日の末のときはかり大人のやとりおはします中
長者町なる澤ぬしの家に京にのほりつきてあるしにも
うしにも逢まつり物なときこえて

みやこちは遠からなくに旅ころも月かさねてそ我はきにける

夏ころもひとへに君をおもふとてけふ都まてしたひきにける

大人にともなひて經亮の君のもとに物してものかたり
なとして主のいにしへふりの琴ひきたまふをきゝて

いにしへをしぬふる君かかきなすや琴の音きけいとゝ忍はゆ

かへし　經亮

かきならすことの音よりもしのはるゝむかし語を聞そたのしき

又　宣長

しぬはるゝむかし語もとの音も君ならすして誰かきかまし

かへし　經亮

いせ人のひかとならて玉ちはふ神のまこゝろさとす君かな

又　宣長

伊勢ひとのひがとならはひかとゝさして敎よ君か眞心

澤眞風ぬしの其年の春夏のころいにしへまなひの書と
もかうせちせられしをりのともをきゝて其ぬしによ
みておくる長歌　大平

かきつはた花さき匂ふ澤のきみ眞風のきみは玉ちはふ神の道
をしうまこりのあやにたふとみ年久にまなひいませは神直日
神のちかひか大直日神のたすけか近きよのつたへたかへるく
さくさの其ひか言をふる衣いひきやふりて遠つ代の正しき道
のまこと傳ふる鈴のやにしたひよそりてすゝの屋のつたへの
まにま打日さす京のかたにいやひろにさとさむものとあつさ
ゆみこゝろふりおこし鳥かなく吾妻を出てまゐのほり家をし
さためあら玉のこその春より若草のはしめのほとはよしやま
ちよしや來すとも後つひにきかまくほりて堀河のほりも來な
んとますらをのたけきこゝろにあらかしめ思ひはかりてあさ
りする芦邊のたつの大聲に家とよむまてゆく水のこともよと
ますあさちはらつはら〳〵にいふかしきことゝき聞せまとは
しき意のりわけいそしくもさとし玉へは京人たふとみよそり

名にかゝすさはにつどひて吹かせの草ふくここくひたむきに
なひきよりくさきかくしよしも
七日嵯峨のわたりに物せんとて人々友なひてたち出て
まつ北野より平野の社に詣てゝ　宣　長
神さひし宮居をこへはやまこよりうつりましける古思ほゆ
仁和寺にて　大舘高門
しけりあふ大内山のこすゑにも花のさかりそおもひやらるゝ
宣　長
御位の後のみむろを來て見れは花の梢も時過にけり
並岡の麓をすくとて
いたつらにならひの岡の昔よりよゝに妹背の名をはおはすて
木嶋のやしろにまうてゝ
むかしより聞わたりたる木のしまは海にはあらてふかき杜かな
眞　風
ゆめにつけ人にかゝりて日の神の宮居定めしこの嶋の杜
大　平
いつこしも時わくましき木のしまも若葉えならすしける夏かな
木のしまにわたる旅人こゝろせよ波のうつまさちかしこそきく
高　門

わからしとわか兄とわれとこの島のかしこき神にぬさたてまつる
太秦寺にて　宣　長
遠き代にしたひまゐこし秦人の名にのこりたるうつまさの寺
うつまさを過て　高　門
うれしくもうつまさ過て見わたせはあらしの山は近つきにけり
大井のこなたより嵐山を見て　宣　長
あらし山花に吹けん恨みたにいはまし木々に今は音せて
さこそはと花にふきけむ山の名をあやなく忍ふ夏木立かな
みやこ人つらしとみけむ花の色の山の名しのふなつ木たち哉
名にたてる川せの波もまたゝくひあらしの山の影をうつして
大　平
松にふく山のあらしの音をさへこふかくうつすせゝの川なみ
このころは花も紅葉もなつ山を猶あらしにそ尋きにける
眞　風
あらし山よゝのこと葉もおほゐ川おもかけにたつ瀬々のしら波
高　門
ちりはてゝ花はあとたに夏木たちしけるあらしの山の色かな
ゆく水も峯の青葉も色そひてあらしの山に夏そきにける
宣　長

あらし山つら〳〵見ればよし爲やし小倉の山は見えず來ぬれど
筏士よわかゆきかてにこゝにしてこふるとなせの瀧みつらんか
　はしをわたりて法輪寺のわたりにて
過ぬるか杉のいほりのことのはに見し有明のかけを殘して
　ひえの山の見えければ
大井川かは邊のまつの木間よりそかひにみゆる大ひえの山
　河邊なる茶屋にて物くひけるに鮎をいたしければふる
　きものかたりなどに西川のあゆと有とをおもひ出て
　　大　平
花もなきころしも尋ね來にしかは山にそはつるあせあゆるまて
　　宣　長
年毎にしかはあれとも夏山をあゆひかためて猶そわけ見る
　　眞　風
西川のあゆと聞は何となくむかしおほえてなつかしきかな
　　高　門
我がうしと手たつさはりて大井河川邊に遊ふ此日樂しも
さくら花ちりにし川にたち出てこのもかのもの鮎釣るや誰
　松の尾の社にて　宣　長
まつの尾の宮をゝかみてたふときやなり鏑矢の神代しおもほゆ

　月讀の杜のほとりにて
手をゝりて今は卯月とつきよみの杜の名あはれ旅のけ長み
　あたこの社にまうてたるものゝしきみのえたを持てか
　へる道にあへるを見て
はしきやし妹をしきみの枝とてや高き山路を折てきつらむ
　梅のみやにまうてたるに御拜殿なとのあれたるを見て
梅の宮かゝらましやはたち花のいまもところはにさかえましかは
　梅津川のわたりにて　大　平
ちる棹のしつくもそれと梅津川をりたかへてもたどりつる哉
　　高　門
春ならは波の花さへにほはましうめつの川をなつわたるかも
　ひと日　芝山前宰相殿にまゐりて見えけることきによみ
　て奉れる　宣　長
高くともふしの芝山しは〳〵にあふきもみはやみねの白雪
　御かへし　持　豊　卿
あふかれんものにもあらぬわか爲はふしのしは山名さへはつかし
　八日　妙法院宮にめされけることをかしこみてよみて
　奉りける　宣　長
伊勢の蜑のおもひかけきや空の海てる日にちかきひかり見んとは

御酒御くたものなとたまはりて

手にうけてよはひものへんみ空より降る恵のつゆの玉もの

御園を見て

はるあきとかはる御園の花もみちひとつにめつる夏木たちかな

此御園に十二景といふかあるをはやくよりきゝける中にひとつふたつおほえけるを

虹橋丹楓

虹かとよ花ともみちの中そらや夏のみとりにかゝるそりはし

阿彌陀か峯に見ゆるを陀峯彩霞といふに

はるかすみにほふ朝日のかけみれはみねの名もけに遠からぬかな

大人にしたかひて　妙法院の宮にまゐりて御庭を見奉れるに其哥よみてたてまつれと仰らるゝを承りてよみて奉る

大平

こむらさきさける御池のかきつはた雲井へたてぬ色とこそみれ

立なひく萩の若葉におく露もことなる玉のみきりとこそ見る

高門

あふき見るみきりに高き松かけに萬代すめる庭のいけみつ

宮にさふらひける石野縁信かよめる

おもはすもひろひ見るかな伊勢のうみの清き汀の玉のかす〳〵

小澤盧菴ぬしのもとに高門とゝもにさふらひ物しけるをり花橘といふ茶をおくるとてよみて添ける

宣長

名にしおはゝこれをよすかにほとゝきす君か宿はなたちはなれそよ

かへし　盧菴

ほとゝきすとひもとはすもことのはの花たちはなをまつそめてつる

蓮華王院の前なる池のかきつはた盛なりと人のいへは見にものして友なる人に

宣長

かきつはたかきてみるへきこゝろのはもこゝろおよはぬ紫のいろ

むらさきの深きこゝろのありせはと花見て歎く杜若かな

おなしとき　大平

かきつはた見による池の汀にもにほひ争ふたをやめの袖

ちなみに伴蒿蹊を大佛のほとりにとふらひて

宣長

ふりはへてとひこし我をかきつはた花のたよりと心へたつな

たちよりて里の名におふ老松のもとの心はけふそしりぬる

老松とはあるしのをはなる尼の七十あまりにてありけるをよめるなり尼は已かちかきゆかりなる人なりけるをはしめてたいめして聞あきらめたるを里の名におふ

こは松坂をおもひてなりされと後におもへは此詞あし
くよみけり事たかひてそきこゆめる

たちよりてもこの心はけふそしる老木の松のむかしかたりに
なとやよみなほさまし

後にかへしとて　伴　蒿　蹊

かきつはた花のたよりにとはるゝも本のゆかりの色はむつまし

もろともになからふれはそ老松のもとの根さしもとひとはれける

高橋内匠某か和泉の國堺にかへりけるに　大　平

けふわかれとかひはるかにへたつとも同しみやこの旅なわすれそ

こは大人のこうせち聞にふりはへのほりきてさいつ
ころより同し澤氏の家にやとれる人になん有ける

宣長大人にたいめをこひて參たるに大人はとく出玉へ
れはともなひ人と物かたりして　森　川　樂　麿

ここの葉のかけをとひ來て花守を主かてらに慰めにけり

かへし　大　平

つむかひもなくさめ草はいたつらに花の宿もるあるしなりけり

かくするほとに大人かへり來玉へれははしめてあへる
にけふあす國にかへるよしいひ玉へは　樂　麿

都にもこゝろとまらて松坂のまてはや旅をたちいそくらむ

樂麿にたくひ來て　土　肥　如　塤

たちかへり又も逢見むわかの浦のけふの見るめを契にはして

この二人のうたのかへし　宣　長

たちかへりまたも來て見ん別れても心はふかくとまるみやこを

別るゝもわかの浦わの友千鳥こゝろはかりはかよはさらめや

都をわかるへきほとちかくなりて蘆菴のもとに訪ひて
かへるにたち出てはるかに成まて見送ておひてよみて
おこせける　蘆　菴

こむとしを契りおけとも老ぬれはけふの別れを暫しとそ思ふ

かへし　宣　長

しはしとてたちもとまらは松かけに千世もへなましあかぬ心は

千代八千代なからへて待てなからへて我もとひこん來む年毎に

都に登り玉ひてしはしなからとゝまり玉へるほと爲壽
かしこうも御かり住の門に入て見え奉りてをり〳〵古
の尊きことをときゝかせ玉ふそのはし〳〵をうけたま
はりいやたふとくかしこみぬまとにおほんめくみのほ
とかきりなくおもふあまりにつたなきことのはをつゝ

りてさゝけ侍る　　熊澤爲壽

ふりはへてきくもたふとし鈴のやの音さやかなる玉鉾の道

まとはすよ深山かくれの路芝も君かめくみの露をうけえて

此頃永觀堂の佛をかますとて人おほくまうてけれは十日のひわれもまうてゝ　　宣長

かへり見る佛もあはれ明日はまた我も都をかくやと思へは

一月はかり澤眞風の家にとゝまれるほとあるし家刀自諸ともにいとねむころにいたつきけるをよろこひて

あさからぬ君かなさけに旅なからたひともなくて日數へにけり

あかれる大御代の御手ふりを玉つはきつはらに見明らめたまへるさくすゝのすゝのやのうしはこの年ころ風の音の遠音にきゝわたりつゝひたふるにしぬひまつりしにこたひみやこにのほりたまひておもひかけすまみえたてまつりて玉ちはふ神の眞心のをしへをうけまつれるにいとゝしぬひ奉るとのみ勝れるに天雲のゆくらかにも物し玉はてふる郷にかへりたまふよしのたまへは別ををしみたてまつりて　　中山秀金

今よりはまちつゝをらんつゝかなくかへりますてふ君か便を

十二日都をいつとて東山鴨川なとをみて心のとまるまによめる　　宣長

わかるともあひも思はぬ山川を又も見まくのほしかるやなそ

のちにおもへは伊せのこかうたにひとしこはいかにそや

逢坂の走井にて

わかれ來てたれやはしり井われはけふ行やらてのみ都思ふに

瀬田のわたりにて

あふみちやせたの長はし板朽てはしはわたらす舟ゆそわたる

野洲川のあたりにて雨ふり風いと寒かりけれは

このくもりふり來る雨に袖ぬれて寒けくも有かやすの川かせ

かゝみといふ所に鏡山ありけさ過し山科の御陵のうしろなるをもかゝみ山といふを今日しも同し名の山をふたつ見ることゝ思ひて　　大平

都いつるわかしりふりもかゝみ山となたかなたにたちてこそみれ

此わたりはかこといふ物にのりたるを雨のふりけれはおろしこめて過ぬ　　宣長

雨ふれはよそにおもひて鏡山くもれるをたに見すて過けり

かゝみ山老ぬるかけをはつかしみたれこめてわかゆくとか見らん

ゆく／＼老曾の杜をたつねて

こゝへは老曾のもりはゆくさきといふ里人そうらやまれける

大人のたまふやうわれはかこにのりたれは老曾の杜見おこすとあらんか口をしきよく見さためてをしへよとあれは　　大　平

わすれても過たまはまし老曾をは敎へよとしも君かいふらん

その杜にて　　宣　長

夜はならはおいその杜の郭公いまも鳴まし忍ひ音の頃

十三日の夜松井正平の家に彦根にやとれるに其里の風流男あまたつとひて題をさくりて

待郭公

いさや川いさまたきかすあふみ路や旅寐の床の山ほとゝきす

風流士とまとゐせるよはつねゆけに聞まくほしき山郭公

ほとゝきす己かすむなる松山のまつとしりてや聲もらすらん　　正　祐

五月まつ花橘はさきにけり今やこそまつ山ほとゝきす

郭　公　　高　門

ほとゝきすもらす初音を近江路の老曾の杜に尋てそきく　　松居正平

まれに來て聞人あるをほとゝきすつねゆけになけ此夜すからに

卯　花　　大　平

雪とのみさきそまかへる卯花はたをりとりてもけたしけぬかも

新　樹　　山本永樹

花を見て春はめてしを今よりは月もるはかりくしけらすもかな

夏　月　　小林義兄

まれ人の來ますこよひはみしかよの月さしこめむ天に關もか

湖夏月　　宮村國兄

こゝろしてふけゆく夏の月かけをしはしはとめよしかのうら波

河　螢　　久米通香

谷川やよはにほたるの飛かけは岩こす波の玉かとそ見る

常　夏　　小原公雄

うつりかに明日より春をしのふへしやとれるつゆの床夏の花

夏　山　　岡村眞守

しら雲と見えし櫻のなこりなく青葉にしけるみよしのゝ山

寄時鳥戀　　村田泰足

さつき山雲ゐるおくのほとゝきすなけとしられぬ戀もする哉

水邊草　　中島果忠

すゝしさを外にはとめし露ふかき池の汀のあしの夕かせ

湖上舟　　高野眞盈

鳰のうみや沖こく舟も見るかうちに楫の音遠き浦の追風

鈴屋大人にはしめて逢侍りてよみて奉る　果　忠

近江海沖のすて舟よるへなく思ひし物をけふは嬉しも

おとにのみきゝふりたりしいせの海の玉なすわかせ見るかともしさ

こよひつとへる人々に　宣　長

めつらしくこよひあふ身のいぬかみや別れいぬへきことをしそ思ふ

おきつなみたちわかるとも忘れしなあふみのうみの深き心は

あるしに

たひ寐ともおもほえなくにわれを君まつゐの宿と聞てこしかは

つとめて　果　忠

ほとゝきす鳴行かたのしるけれはいとゝなこりのをしくやはあらぬ

道より伊吹山をみやりて　宣　長

彦根路のたむけこゆれは神風やいふきたか根に雲ゐ立みゆ

摺榛たうけといふ所にて海を見わたして

あふみのうみあかぬけしきを家つとにいかて衣に摺針の山

彦根の人々此山までおくりきて別をゝしむ　永　樹

近江のうみ沖つしらなみたちて行君をとゝめんことのはもかな

しひてゆく人をしはしと足引の山ほとゝきすき鳴とよもせ　國　兒

あかなくに又も來まされあふみなるつくまの入え君はみかてら　貞　躬

つくま江此よりちかく見ゆれはよめる

わかるともまれにあふみの海人の子を見るめなしとてよそに過すな　泰　足

時鳥けふたに來なけあかなくに別るゝ人のたちとまるへく

さゝら波なみたちよらせしほやかぬあふみの海は見るめなくとも　正　平

海山のかはらてまたんけふのことおもかはりせす年に來まさね　宣　長

あふみちやわかれ行とも海山とわかせとふたついつかわすれむ

御かへし　義　兒

うみ山とわかせとふたつになひもてからくもこゝに別れするかも

すりはり山を　大　平

かり衣けふきて見れは薄くこく緑またらのすりはりの山

醒か井の水は倭建命のふることゝいひつたへたれといとおほつかなしされといみしく淸き泉にて世のつねな

らす
いにしへのふかき心はしられともむすへはすゝしさめかゐの水

かの命の御腰かけ石としるしたる石あるはをこにおほゆ

やまとたけこしかけ石としるせるにあはれもすこし醍井の水

關の藤川

むらさきの花もや咲とたちとまり見てをわたらん關の藤川

不破の關

もる人も關屋もいまは跡なくて名のみとまれる不破の山里

野上といふ所をいくにわさみかはらといひしもこのあたりにやとおもはれて

そのかみの名にしのはれて御軍のたけき御しわさ見る心地する

淨御原の天皇の御事なり

十五日墨俣といふ所にて加藤磯足主に逢へりさるは大人のけふ物しますへきよし聞て御迎に大垣までものせむとてなり　大平

四年へてわかせの君にすのまたの又あひみつるけふの嬉しさ

その夜はこの磯足か家におこしの驛にやとれり此里は木曾川のほとりなり　宣長

き川の深き主の情にはわれも思はぬ旅寐をそする

かへし　磯足

たひ衣きその川なみゝをたえす千世も宿らせ家路忘れて

此里の人々つとひて歌よみけるに河邊夏月といふ題をさくりて　宣長

たひころもきその川邊にやとりして涼しきせゝの月をみる哉

夏の夜のひとよも千夜になそへみん君か影そふ川の邊の月

夜更るまで月を見てあるじとふることをかたらひて

わかせこと昔かたりてうき旅の心も月もはるゝよのそら

かへし　磯足

月はよし曇らはくもれ終夜さやけき君かゝけをあふかむ

大平の四年へてとよみけるかへし

よとせ經て逢みし君をすのまたの又あすよりは戀つゝかあらん

十七日名古屋にて

大御神の御祭を見たてまつりて　大平

刈菰のみたれてし世にかきかそふ三河の國ゆ貸くもあれ出まして　天皇の御ことのまにま天の下四方の國内をはききよめをさめたまひて下野二荒の宮に萬代にしつまり居ますあつまてる神のみことはかしこきや同し御祖もしら玉のをはりに君

にむしふすまなこやの里の城のちにもいつきまつらしかしこみてつかへたまふとゝしことの四月のけふのたり日には神の御ゆきとゆきとほる大路も遠くめかゝやく御輿つかへて諸人のいませまつろふけふの尊さ

又

東照る神の命の神御幸いませまつると里人のこゝらいてたち御ゆつりのいたしの物と引出る車を見れはとりよろふ高き屋形にわさをきの人かたゝてゝ人かたのたちまふことに錦綾のきぬ屋のうちゆつゝみ打笛ふきならし行とほる大路とよみてすきすきに引ゆくまにまうるはしく里のわらはゝならひたちよそひつらねて御かりなす弓箭とりもち御鉾ともさゝけならはひはふりへも法師かともゝたち出て馬引わたりつき〳〵に御供つかふる見るか尊さ

また

むしふすま名古屋のさとのゆきとほる大路はろ〳〵かしこきや神の御ゆきとうるはしくねりゆく見ると里人もこと里人もをちこちゆ袖ひきつらね玉鉾のみちのちまたにさしきゆひさはにつとひて大路はし左り右りに家ことにうつくまりをり物見るとなみゐる見れはやすみよの事なき御世とゆたけくもにきはへるかもかしこきや此大神のいそしきやたけき御いつに天のした國内こと〳〵神代よりたくひなきまてをさまれる御代のさかえを見らくしもよし

廿一日伊藤公葬かなりところに舞津の里に人々つとひてよめる待郭公といふことを　宣長

聲きかば涙かさんとまつ陰のしつくかひなき山ほとゝきす

更衣

かへていかにうれしからまし忘られぬ花の香とりの衣なりせは

人見璣邑翁の許より鶴のまき繪したる盃をおくられたるよろこひによみて遣しける

のむ酒にわか世も千代をかさぬへし鶴の毛衣みつゝしのまは

廿四日己かやとれる家に人々つとひて歌よみける橘

さす月もむかしに似たる夕風に袖のかきほふ軒のたちはな

新樹

深みとり櫻にふくも今は又かせなつかしきなつ木たちかな

いにし廿一日のも此日のも人々の哥はうつし泄せり

明日は名古屋を別れんとすれはけふの橘の題にて此里の人々にさとすうた

橘のかけふむけふのかをとめて後忘るなよことの葉のみち

鈴木眞實

けふの日もまたいたつらに入相のかねてそをしき明日の別は

かへりちに袖はふるともいかにせんなけきの霧の立かくしなは

かへし　　宣長

わかなけくおきそのきりも晴ぬへし君か袖ふる心しるくは

廿五日名古屋を出る別れに　　松岡牡鹿輔

伊勢のうみきよき汀のたまくに逢みし君を別るゝかうさ

きみかゆくなとり今はとなる空にやよ時鳥鳴てとゝめよ

加藤文仲

ほとゝきすなけとゝまらぬ別路に身をしわけまく思ほゆる哉

をしむから心はかけとなりにけり別れ行ともはなれやはせむ

磯邑翁のもとより別をゝしむから文かきて奥に

人見淼

神風や伊勢の海路ゆよる波に玉もかるらんと待にし我は

よる波のたちつゝかへるなきさには玉ももとめす貝も拾はす

青海原とひつゝかへるとり船は風も波路を心してふけ

老もなほまなひの道をしたへはそかしこき大人に逢まくほりし

伊勢の海の人のみるめもはつかしやちくらか沖の島つとの葉

甚目寺といふ所までおくりきて別れに

河村在雄

たちわかれ雲ゐのよそにへたつともしるへせよ君ことの葉の道

石原將聴

心たにそへてやるへき物ならはけふのわかれをかくはなけかし

ひきとむるかひたになつの旅衣ひとの心のうすきたもとは

かへし　　宣長

うらむなよ重ねても來ん旅衣うすき心とけふはいふとも

その夜木田村大たち高門の家にやとりけるに花瓶に撫子忘草の花芦の葉なとをさしてむすひ付たりける

高門

なてしこの花をあはれとちゝのみの父とたのめる大人思ひてよ

此花の名にしおひせはわかうしの明日のわかれを忘れ玉はね

つとめてかの花ともによせて　　宣長

とけてねてあしの一夜の床夏に旅を忘るゝ草まくらかな

此家いつるとき

こそも來てことしもきたの里なれは來ん年も又きなんとそ思ふ

わかれをしみてこゝまてしたひ來たるかとけて寐ての

歌のかへし高門にかはりて　　磯足

草まくらあしの一夜はほともなし家路忘れて床夏にもか

又
わかるとも心を君にたくへやらむ猶しるへせよことの葉の道
かへし　宣長
ゆくわれに心たくはゝことの葉の道な忘れそけふわかる共
高門
わかやとのにはゝしけれる頃なれと君を留めん言のはそなき
たみ
よしさらはまたこむほとを契りおけゝふはつれなく立別るとも
しら波のよるとはすれと伊勢の海はやたちかへる君をしそ思ふ
此みつの歌のかへし　宣長
ことの葉の花の色香を身にしめて歸る名殘を君も忘るな
君または又たちよらむよる波のかひはなきさのもくすなりとも
廿六日道より加賀の國白山のいとしろくて
はるかに見えければ
けふこそは音に聞名もことわりよ見てしら山の夏のしら雪
岡へから波のしまつ田見わたせは早苗青みて麥あからめり
多度のやしろにまうてゝ谷川の水のいといさきよきを
美のなるやたきち流るゝ多度川はいせにも有けり清きたえ川
同し社にて　槇松有信
手にとりてぬさと手向んたえ川のたきの流のみつのしら玉
たとより桑名に出るに野代といふ里を過て後に大人の
物かたりし玉ふを聞て
石上ふるき宮ゐのあとの名もしらて過にしことの悔しさ
廿七日四日市にて琴の繪に寄琴戀のうた西村某のこふ
まゝに書てやる　宣長
立田山みねの松風夜半にやといとゝ身にしむつま琴の聲
此日白子の阿彌陀寺といふ寺にやとる
鈴屋翁いにしやよひ霞とゝもに旅衣たち出させ玉ひし
を柳櫻こきませたる都の錦にかへてかへり來たまふこ
こかしこに日數へてめくりたまへる國々の名の一もし
をとりて句のうへにつらねこゝに待つけまゐらせたる
よろこひをのへてたてまつる　村田橋彦
い(伊)つしかとあ(近)ふき待けるや(山)となれは路(美)芝わけてを(尾)ちそ來ませる
鈴屋の大人久しき旅の御つかれもあらさるさまを見奉
りてよろこひに　市見直樹
見るからに梢のわかは夏のきていとうるはしき君か御おもわ
かへし　宣長
くちのこるたにの老木のみ山木や若葉は何時の昔成らむ

つとめて海を見わたして

たくひれの白子のうみの朝なきにこゝたもいつる海人小舟かも

わかれに　坂倉茂樹

郭公まちえし物を一聲はきくともなしにかへる君かな

植松有信に　橋彥

たくふすま白子のはまの濱ひさし久しくもかな君かやとりは

かへし　有信

たくふすま白子のはまによる波の立かへり來んけふ別るとも

同し人に　直樹

旅ころも又も來まさはわか宿に草の枕をむすはせわかせ

かへし　有信

たひ衣またも來てみむたち別れ雲ゐのよそにけふへたつ共

かりねせし草の枕におく露の深きなさけは忘れしもせし

安濃津にやとれる廿八日の夜光德寺といふ寺に人々つどひてよめる

山新樹　宣長

をりしもあれ霞ははれてしけりゆくみとりめにたつ夏の山端

夜卯花　七里松叟

うちつけにまかきの山を夕月のいつるかとみるさとの卯の花

待郭公　倉田有成

一聲をいかてとおもふ小夜ふけて心もそらにまつほとゝきす

關郭公　小西春村

あふさかや山ほとゝきす過にけり鳴なる聲は關やとゝめぬ

曙郭公　河北夏蔭

さりともと待つるかひもあり明の空になくなる山ほとゝきす

早苗　向田實澄

時きぬとみとしろ小田にしめはへてさなへとるらし神のをとめ子

浦五月雨　柴田常昭

はれまなみあこきかうらにあひきせぬ日數かさなる五月雨の頃

川五月雨　倉田英林

かはるてふ名のみ流て飛鳥河ふちせともなき五月雨の頃

軒端橘　芝原春房

思ひ出て遠きむかしをしのふれは軒端に近く匂ふ橘

樹陰夏月　玉井正修

わかみとりしけれる庭の木間よりもるかけ涼し夏のよの月

照射　馬島安榮

秋まつとまたねにたてぬ小男鹿の思ひをよるのともしにそみる

鵜川　植松有信

山川や岩こす波の早き瀬にうふねの簖かけそみたるゝ

籬瞿麥　　専稱寺敬道

朝露のひかりちそひてませのうちに咲るかひ有倭なてしこ

此度の歌ごもよめるまゝにきけるまゝに人のも己かのもえらはすてかきこゝめたるほこに中にはみたりかはしきも多かりまたうつしもらせるも多かりきかくあつめ見るに彦根名古屋なこのうたの多かるにあはせては京人のはいこすくなかりけりさるはよみつへき人々もいかなるにかよまさりしそ多かりける

宣長

鈴屋集のはし書

此かきつめたる歌ともは吾家の翁のわかゝりけるほとよりこゝらの年ころによみ出給へりしやちうたの中にここに書とゝめおかれたるなりさるはふるきも近きもさまく／＼なるかついてもなくたくひも定まらすみなうちましれるをこたみこひ申てふるきちかきこえり分てついてをもたくひをもこゝのへたゝし又長哥ともふみ詞ともをあつめくはへてすてて七巻となんなしつるを櫻の木にうつしゑりてをしへ子たちのおのく／＼寫しとらむいたつきをもやすめ後の世にも傳へむと思ふそのよしを一くたり物しつ時は寛政のとゝせといふ年のきさらきかくいふは翁の家つける子

本居春庭

鈴屋歌集一之卷

本居宣長詠

春哥

年のはじめによめる
さし出る此日の本のひかりよりこまもろこしも春をしるらむ

立春
相坂も關の戶さゝぬ御代さてや夜の間にこえて春はきぬらむ

立春曉
くたかけのなきてつくなるふる年の別れそやかてはつ春の聲

曉立春
ふるとしの夢のうき橋春かけてさむる枕の鳥のはつ聲

立春風
のとけさは袖にしられてから衣きのふにも似ぬ春のはつ風

立春眺望
ふるとしは一夜へたゝるなかめさて昨日の雪もかすむ山のは

浦立春
吹風もなこのうら松ほの〴〵とかすむ梢に春は來にけり

元日
九重のゆきゝも今朝はあらたまの春のくるまの音そのとけき

年內立春
春きぬと月こそかすめ年もまた殘る日數の有明のそら
としなみの末のまつ山かすむなりまづ立こえて春やきぬらむ
たつ春の早瀨の氷とけにけり日數はのこるふゆの山がは

除日立春
これやこの春たつけふの年の暮ゆくもかへるもあふさかの山

三日立春
いつみ川としなみ早きみかの原おくれてけふそ春はたちける

春のはじめによめる哥とも
立かへりほの〴〵明るひかりよりかすむも今朝をはつ春の空
おき出て見そむる春のはつしほさ朝日にかすむ遠山の松
浪のうへに出る朝日もいせの海やうら〳〵かすむはつ春の空
すゝか河八十瀨の水うちとけて春になりぬる浪の音かな
春きぬさ浦ふく風は音絕て霞たちそふおほよさの松
立かへり春こそ來ぬれみよし野は高根のかすみ水のしら浪
浪の音霞の色にみよしのは山も河瀨も春たちにけり
朝かすみさきたつ花の面影もけふ初春のみよし野の山
初春やかしらの雪もきえぬへし朝日にむかふけさの心は
春の來てふりゆく身さへもゝ千鳥きけは心はあらたまりぬる
あらたまる今朝の光もふりまさる身にはつかしき初春の空

初春
はつ草もまた見ぬ雪に朝霞春のけしきをかすか野の原

初春霞
出る日もたつや霞のはつしほにゝほひそめたる春の色かな

初春河
あらはるゝ浪さへ花の名取川こほり吹さくはるのはつ風

早春
をさまれる世はのとかなる初春の空をこゝろのやまともろ人

早春霞
夜をこめてけさは春たつ杉むらや霞おくれぬ逢坂のやま
君か代にあふうれしさは來る春もよもの霞の色に出けり
かけてまつ花のにしきの下衣はる立そむる朝かすみかな

あかはたの山に霞のうす衣かくれもやらぬはつ春の空

早春風

のとけさは花の香またて鶯もさそはれぬへき春のはつ風

早春河

谷風に氷なかれて鳴瀧やにしの川瀨も春は來にけり

早春水

春風のたよりにおのれ聲たてゝ鶯さそふたに河の水

さけはかつちりかゝれとも谷水の鏡くもらぬ浪のはつ花

白馬節會

たなひける霞のみかは青馬もけふは雲ゐに春を見せけり

子日

春かすみたな引袖も小松原ゆたかに見ゆるはつ子日かな

若菜

雪間なきかたや尋ねむみな人のつみて殘さぬ野への若なは

雪のみそ分る袖にもふりつみて若菜まれなる春日のゝはら

岡上若菜

春來れはわかなつむとて里の子かならしの岡は雪も殘らす

若草

木のめかはわかぬめくみの春雨のもりの下にも青む若草

野若草

ところからうへもはるひと春めきて若草あをむ春日野の原

岡若草

雪消ぬほとこそあらめ春の色をえやは忍ふの岡の若草

故郷若草

しけりなはいとゝやつれむふる里もしはし春めく庭の若草

水郷春望

ひさかたのかつらの里も春深くたてる霞の中におひたり

朝夕のさとのけふりも春はたゝひとつ霞のうちの川つら

みなせ河なひく柳もほの／＼と春風かすむ山本のさと

おもかけも春やむかしの水無瀨川山本遠き夕かすみかな

おきつなみいろにこかれて夕霞なにはの春はいり日なりけり

春曙

月影も見し春の夜の夢はかり霞に殘るあけほのゝそら

山端のしらむひかりも霞にて横雲しらぬ春の明ほの

梅香も色見えそめてほの／＼と花よりにほふ明かたの空

のとけさは同し色音の花鳥もまつ閨の戸をあけほのゝ空

野も山も春なるころと花鳥の色音にあくるしのゝめのそら

月影にまかひし雲も山端にあやめわかるゝ花のあけほの

櫻さく外山はしらむ春の夜を尾上に殘す有明の月

名所春曙

またや見む一夜旅寐の曙に霞しきつのうらの松原

山殘雪

よし野山空こそかすめ雪はまた春の來にける跡たにもなし

野外殘雪

ふみ分し御狩の跡もさなからに殘るかた野のこその白雪

木殘雪

春寒みこほりもとけぬ谷風に殘れる雪や木々の初花

餘寒氷

浪の花さそひかほなる柳にもこほりつれなきはるの川水

餘寒月

うすくもり雪けにさえて霞にはあらぬおほろの春のよの月

舊巣鶯

春來てもなれしふるすをふるさしと立かへりなくたにの鶯

雪中鶯

思ひあへぬはつ音は雪の中々にのとけさまさる春のうくひす

ふりつみてまた春さむみなく聲も雪間もまれの野への鶯

雪はなほふるすなからにうちとけてなくね春なるたにの鶯

うくひすもいつれを梅と分かれて木毎の雪の花に鳴也

うくひすは梅の花かさぬひおきて雪のふる日もきつゝなくなり

朝鶯

さしいつる朝日もにほふうめかえに春をあらそふ鶯のこゑ

谷鶯

花の香のしるへもまたて谷風にまつうち出るうくひすのこゑ

のとかなるひかりはうとき谷の戸もさすか春しるうくひすの聲

うくひすのうちとくる音はよそならて谷の氷も春やしるらむ

ふるす出る今朝のはつねの春たにもよそにうつるな谷の鶯

野鶯

春くれは青む雪間のはつ草に初音おくれぬ野へのうくひす

こゑしけみ芝生の若菜しは／＼につむ手おこたる野への鶯

一よねて明日もきかはや旅人にやとかすか野のうくひすの聲

山家鶯

山里もうくひすなかぬほとこそあれけさのはつねに春はきにけり

やまさとの軒のつらゝは春もこす涙やいかに谷のうくひす

空はなほ雪けなからの山さともきけは心のはるのうくひす

關路鶯

うくひすの聲も霞をもる春はゆく人とまるあふさかの關

竹鶯

鶯の春こそ來ぬれ雪をれの音はきのふのまとの呉竹

ひまもなきみとりの竹の葉かくれに鳴音もしけき春の鶯

春くれはねくらにしめてくれ竹のよそにうつ[illegible]ぬ庭の鶯

雨中鶯

うくひすの聲なぬらしそ春雨にきつゝなくなるうめの花笠

早春梅

からやまと春の言葉のはつ花もとり／＼にほふ梅の下風

うめかえの花の下ひもとけそめて雪の雫もにほふ春風

曉梅

夢かとよ寐さめのそての春風もほのかに過しまとの梅香

あかさりしやみのにほひも色見えてほの／＼あくる窓の梅枝

見し夢もあかぬ寐覺のはる風にわするはかりの袖のうめかゝ

しのゝめにあたら枕の梅香をおきや別れむ閨の春風

曙梅

にほひくる梅のありかも見えそめて春風しらむ明ほのゝ空

夕梅

梅咲る山は入日の色よりも香こそとにほふ夕かすみかな

夜梅

春の夜のかすめる月に風たえて香さへおほろの庭の梅か枝

花のいろも鳥も霞もくれしよの闇に春ある軒のうめかゝ

月前梅

梢ふく風のたえまかゝすむよの月よりうすき庭のうめか香

簾外梅

玉たれに色もすきまのうめの花香はさなからの軒の春風

簷　梅

朝戸出の袖こてにほへ軒端より春やたちえのうめの初花

庭　梅

梅花さける垣ゝのゆかりとてにほはぬ草もにほふ春風

色も香もしらぬあるしをかひなしと花や見るらむ庭の梅かえ

園　梅

咲みちてしめの外まて梅園の春風あまるよもの花の香

山家梅

やますみもみやこわすれぬつま木哉をりそへて見る袖のうめかゝ

いろ香しる人とや人の思ふらむ梅さく山に庭しめし身は

山里のうめの名たてのさひしさを都につてよ軒の春風

故郷梅

ふるさとは夢のむかしの春風に殘るやうつゝよはの梅か香

水邊梅

とけにけり氷なかるゝ河の邊におくれぬうめの花の下ひも

名所梅

玉しまや梅さくころは中空をにほひなかるゝ春の河風

旅宿梅

袖にふけみやこの夢も花のかにかへて一夜は梅の下風

枕にも袖にも一よ花の香をかりねの野へのうめの下風

ふるさとの花の面影さそひ來て旅寐なやますうめの下かせ

折梅花

朝またきたをるたもとに露おちてにほひにぬるゝ梅の木本

梅移水

飛鳥井はうつろふ花のかけもよし色も香もよき梅の盛に

梅薰袖

おもかけはよるも立枝のうめの花夕風ふれし袖のにほひに

梅薰枕

涌ひ來てわかれさめをやまちつらむ枕に殘るよはのうめかゝ

梅香留袖

立よりてたゝ一枝を折しよりなこりいくかのそての梅か香

梅香入閨

風たえて月もおほろの寐やの戶にそれかとはかりにほふ梅香

梅遠薰

たましまや河上とほきうめか香も流れてにほふ里の春風

梅　風

花の香に霞もにほふゆふへ哉わたるか風の梅の立枝を

うめかゝもしらぬ我身のかこたれてうつるにぬるゝ袖の春風

梅薰風

春風をひたすら花にうき物と梅香しらてかこちけるかな

梅花又たか袖にゝほふらむ垣根こえゆく庭のはる風

こすゑにはふくとしもなき春風のいつさそひこし袖の梅かゝ

梅薰夜風

月に見てまつやといつこ春風のこてふにゝたるよはの梅香

柳

ふくとなき風になひきてくる春のゝとけさ見する青柳の糸

河　柳

うち出る涙の花よりよし野川はやく春くる青柳のいと

ふくたひにみきはの柳枝たれて風の數かくはるの川水

河上柳
霧しけし淺の川舟さすさをのしつくもかゝる岸の青柳
水邊柳
枝なから露もみたれてうきしつむ玉嶋河のあをやきのかけ
水邊古柳
影見るもいまいく春とくちのこるあはれも深き河柳かな
水郷柳
みなせ川ふくとは見えぬ春風も有てゆくせになひく青柳
行路柳
染かけてみやこの大路花はまたさかぬ錦をいそくあを柳
柳露
ちりもせてさなからなひく青柳は露のよそめもこのめ春雨
契あらは柳におのか玉の緒も長くとむすへはるの朝露
分ゆけはこほれぬ露も枝なから袂にかゝる青柳の陰
柳糸隨風
河のふくかた糸に淺みとりよられてなひく岸の青柳
花ならて吹よるもよき春風は何かやなきのいとひしもせむ
春風のよるにまかせてあらそはぬ柳の糸はくるしけもなし
霞
立こめて花うくひすのゝとけさもおのかいろねの春霞かな
霞知春
あくるより今朝は霞にしらま弓春來にけりな高圓の山
霞隔遠樹
立かへりいなはの山の峯の松ちきりたかへすかすむ春かな
晩霞
夕けふりしるへも春はとひわひぬまかふかすみの深草の里
かせ絶てかすまぬ音もかすみけり初瀨の山の入あひの鐘
水無瀨川山本かすむおもかけの昔もとほき春の夕くれ
山霞
つもりても雪には見えし山端をさなからうつむ春霞哉
青柳のかつらき山のあさみとり霞もなひく峯の春風
いろふかき峯のひはらもはつせ山はつかに見えてかすむ春かな
すゝか山ふりさけみれは日にそへて深くなりゆく春霞哉
遠山霞
霞より外には雪も松もなしきえぬやいつこ春の遠山
雪消てきえぬよそめの山端もあるかなきかにかすむ春哉
たちこめし雪ものこらぬ日數へてとほ山きゆる春霞哉
さきぬらむ花のたよりの春風も絶てつれなくかすむ遠山
心あての霞はかりに昨日見しふしのねたとる東路の空
名に高き雪も霞のそこはかとしら根やいつこ越の遠山
野霞
雪きえて青むと見えし野への色を又しもうつむ春霞かな
なか／＼に春日の野へは日にそへてみとりもうすくかすむ若草
春の日はゐな野をゆけと有馬山ありとも見えすたつ霞哉
野外霞
都人わかなつみにと出る野はまつさきにたつ朝霞かな
野徑霞
たひゝとのいく野の末のいくへとも限しられすかすむ春哉
關路霞
東路やのとかなる世は關もたゝ名をのみとめてたつ霞哉

清見かた關は霞のへたてゝも猶もる方は浪の音かた
關の戸をあけても春は須磨の浦やみるめゆるさぬ朝霞かな
遠村霞
風にほふ梅津の里のしるへたにたえてつれなくかすむ春かな
にほひたにふきもおよはすはる〳〵とかすむ梅津の里の春風
河邊霞
きふね川せゝにくたけてちる浪も春はかすみの袖の白玉
水郷霞
立こめて春は難波のなにとなくかすむそ浦のみるめなりける
江上霞
津の國のなには堀江は玉よりもはる日うらゝに霞しくころ
海邊霞
こき出て明石のとより見渡せはやまとゝ根もかすむ春かな
音にきく浪もかくれて田子の浦や春は霞そたゝぬ日もなき
歸　雁
春來れは霞を見てやかりかねの我もと空に思ひたつらむ
はる霞いそきなたちそかへる雁こしちはいまた雪も消しを
かへる雁なれしとこよも忘れなむ一春とまれ花の都に
まつ空もとほき霞に秋風をたのむの雁も鳴つゝそ行
きかせはや契わするゝ世の人に花にもかへぬ春の雁かね
曉歸雁
秋まてと思へはつらし曉の空たのめせぬ雁のわかれも
おほろにも月は殘れる有明にかすみはてたる雁の別路
歸るかりなきて過ぬる手枕に殘るも遠き曉のかね
遠歸雁
朝霞月もいまはの山のはをこえてきえゆく春の雁金
歸雁契秋
又來むとたのむの秋の夕霧も面影遠くかすむかりかね
關路歸雁
逢坂や關をはこえてゆく空も霞へたつる春のかりかね
海邊歸雁
すみのえや菊の花さく秋とたに契りもおかてかへる雁かね
住よしと名にたつ春の海へにも歸る雲ゐの雁はとまらす
住の江や故鄉いそく春のかり岸によるてふ貝もひろはて
浦歸雁
なきてゆくつはさやいかに聞人も袖しほたるゝ浦のかりかね
帆にあけてゆく聲とほし春の雁船は潮まつうらの曙
こゑはして影もみぬめの浦遠くかすむ雲ゐをかへる雁かね
春　月
見るほともなきたにあるを霞さへ何へたつらむ春のよの月
空の海やかすみのみをゝゆく船のほのかに見ゆる春の夜の月
春曉月
有明の影はかすみてくら橋の山端しらむ春の夜の月
春月曉靜
鶯も梅もゝよほす槇の戸に月はいそかぬ有明のかけ
名所春月
いこまやま霞はれせて秋しのや里の名しのふ春のよの月
關春月
こゝろせよ霞もふかき春の夜は月たにもらぬすまの關守
河春月

春ふかきこゝろも見えて音羽川落たきつせにかすむ月かけ
こと〻はむ春とて月のみやこ鳥河の名しらぬ影やいかにと
夜はの月春は霞もたえすしてひかりへたつる關の藤川
名取川月のかつらも顯れすはるは霞の底のうもれ木

河上春月

春の夜も名にたつおとは清瀧や霞あやなき浪の月影

水郷春月

はるかすみはれせぬ月に河風を今宵はまつや宇治の橋姫

湖春月

諏訪の海や氷はとけて春の夜は霞の上をわたる月影

霞中月

あかす見て入ぬるたまかさほ姫の霞の袖に有明の月

春雨

いたつらにぬれてしをるゝ花鳥の色音もをしき春雨のそら

夕春雨

さひしさに思ひしをれてなかむれは木草はめくむやとの春雨
ふりくらす春雨しらてさひしとはなにおもひけむ秋の夕を

春雨夜靜

軒くらき春の雨夜のあまそゝきあまたも落ぬ音のさひしき

故郷春雨

ふる里は袖にもかけていにしへをしのふの軒の春雨の露

春朝

のきちかき聲もにほひもあくるより朝戸いそかす花鳥の春

春山

春ふかき霞にきえて咲花のおもかけはかりにほふ遠山

故郷春

しかのうらや今もたはるゝ花園のこてふよ夢か有し昔は

谷蕨

かきわらひもゆるはかりはをりしれと春の光もさゝぬ谷の戸

野菫

春の野にすみれは花の名のみしてつみつゝかへる都人かな
紫の花なつかしみむさし野の草はみなからすみれともかな

桃

咲つきて梅とさくらの中絶ぬ春のにしきのもゝの花園
かくなから色もかはらて桃の花百代もちよも見るよしもかな

野外雉

わか草の野へにむつれてなく雉のねよけに見ゆる妻や戀らむ

雲雀

淺みとり霞の色に一しほのゝとけさそへてなくひはり哉

夕雲雀

山のはに日影も落る夕ひはりきほひかほにも見えぬのとけさ
家路をもわすれけるかな今はとてひはりはおつる野への夕くれ

澤雲雀

ゆく空もかすむ野澤のうもれ水聲は埋れすなくひはり哉

遊絲

うちなひく柳の糸のそれならて空にもあそふ春のゝとけさ

野遊

道すから草の若葉になつさひてさも心ゆく春の野へ哉
思ふとちあそふ春野の夕かすみ立ことしらてけふもくらしつ
今のこす末野の霞立かへり明日も來て見む春の夕暮

遅日

峯こえておもへは長き春日かなふもとの花のけさのおもかけ

しつのめかいそく手わさも麻のをの長き春日は心うむらむ

曲水宴

流れ来る色にきほひて言の葉も心にうかふ花のさかつき

とり／＼にうかふ言葉も水くきの流れよとまぬけふのさかつき

待花

鶯のこゑ聞そむるあしたより待たるゝ物はさくらなりけり

山里の人のたよりもはつ花をまつにまたるゝ二月のころ

まちわひてさかぬ日ころを恨む哉いつとは花の契らさりしを

春風よ心にまかす花ならはさかぬ櫻もはやさそはなむ

櫻花こゝろのまつの木間より面影にほふ春のやまのは

山花遅

花の雲はや立かはれ白雪はきえていくかのみよし野の山

尋花

たつねゆくむかひの山はさきぬやとゝはゝや花を野路の春風

心あての花は山路の春風にとへとにほはぬ峯の白雲

さくら花尋ねて深くいる山のかひありけなる雲の色かな

吹にけり山分衣はるかせも袖にほのめくをちの花のか

遠尋花

さきぬへき花のこすゑも風さえて面影とほきはるの山ふみ

たつねいる高根の花の木本はまた春風のにほひのこして

尋ねいる花のそらめにはかられて分しやいくへ峯の白雲

こえてなほ風もいくへの花の香にうかれ行らむ春の山ふみ

初花

さかぬまの思ひねに見しならひにはこれも夢かとたとる初花

櫻花かつ咲そめてこゝかしこ霞色つくみよしのゝ山

ちるともまづやとかつは歎く哉ときがうれしき初櫻花

曙花

見えそめて花かあらぬかしら雲に春風にほふあけほのゝやま

朝花

朝日かけまちとるかたのこすゑより外山のさくら色そゝひゆく

いつる日のひかりにゝほふとほ山の霞や花のさかりなるらむ

もろともにさそひやせむとちる露もこゝろにかゝる花の朝風

夕花

かへらはや高根の櫻あかれともふもとの花も暮はてぬ間に

心せよくるゝもしらて見る花にちるよりつらき入相のかね

見すてゝはかへらぬ庭のこの本もくれゆく色を花の別れ路

草まくらいつれの陰とさためましやとはあまたの花の夕くれ

夜花

よるもなほ夢路にたにと見しけふの花染衣かへしてそぬる

中々に月もなき夜はさくら花さたかにそ見る思ひねの夢

月前花

ふくもうしふかれは月のかすむよを思ひわつらふ花の春風

影うつるいろもおほろの山さくら花に風まつ春の夜の月

山端に花かあらぬか霞とも雲とも見えすはるのよの月

花の色はたかねの霞ふかきよの月にもしるき山櫻哉

あひにあひてさきも残らすちりもせて花もこよひや望月の影

ならへてはおほろ月夜にしく物も又あり明の山さくら哉

花はまたちらぬ梢に影落てまつをしまるゝ春のよの月

あかす見る月のいるさの山さくらちらぬもをしき花の色哉

花色映月

てりもせぬ春の月夜の山櫻花のおほろそしく物もなき

盛　花

咲つゝくさくらの中に花ならぬ松めつらしきみよし野の山

花似雲

咲そめし花かあらぬかふもとまて立田の山の今朝の白雲

いくへともしら雲ふかき吉野山おくある花も咲やしぬらむ

名に高き花のさかりかよしの山雲にはあらぬ峯のしら雲

花やいつさきぬと見しもけふはたゝ雲の盛の三吉野の山

花似雪

枝かはす松の梢はむらきえてさくや高根の花のしら雪

花交松

花かとよ松のこすゑはそのまゝにたちもかくさぬ峯のしら雲

見　花

山櫻花見るときはわか屋戸にあたし木草はうゑしとそ思ふ

世にあれは今年の春の花も見つうれしきものは命なりけり

うきものとなと思ひけむ櫻花見れは心のとまる此世を

行路見花

明日よりはかゝる櫻の木本はよきてそゆかむ春日くれけり

馬上見花

駒とめて春の河邊に咲花のかけも見かてら水やかはまし

野花留人

立出て山分ころも長き日をけふはすそ野の花に暮しつ

折　花

人ならはうしと見ましをさくら花あかぬ心にたをりつるかな

翫　花

立なるゝ庭の木陰にやとなからうきよわするゝ花盛かな

いかにせむ花にうかるゝ此ころのこゝろのはてよ嵐ふきなは

散とをなれもわすれよ山さくら我は家路も思はぬ物を

花挿頭

一枝をおほふはかりの袖しあらはかさせる花は風にまかせし

花　鏡

盛なる花の影見る水かゝみ日數はかりはうつらすもかな

ちりかゝるはてこそうけれ川水に日數もうつる花のかゝみは

霞中花

春風にさそはぬ色もさそはれて霞にゝほふ花のおも影

雨中花

山櫻花はさかりの春雨に露ふきちらす夕嵐かな

雨後花

しをれぬる花の春雨ふき晴てもとの盛になす嵐かな

山花盛

雪ふらぬ春もさくらの盛には木毎に花のみよし野の山

羇中花

道いそく旅とてちらぬ花見てもしつ心なき春の木本

旅衣ひもまたくれぬ木本にやとらまほしき花の色かな

山さくらやつれし旅の衣手にゝほふか花の都おほえて

みやこかは今朝見し花の面影も立そふ跡の峯の白雲

たひころも都わするゝこの本も立よれは又花のわかれち

旅宿花

月影におほろなからも花見れは旅寐のうさははるの木本
何となくやとりし陰もやみのよの明ておとろく花の下ふし
たひねせし陰も一夜の夢とのみ立わかれゆく花の曙
宿かりて一よの月のおほろけに見しははかなの花のちりや

山花

御吉野やこれもうき世の色なからえもいとはれぬ山櫻哉

暮山花

あやにくにいとゝ霞も立そひて夕山さくら色そ暮ゆく

杣花

咲にほふ花に心やひかるらむ宮木いそかぬみをの杣人

瀧花

白糸もつねより長き春日哉瀧のうへなる花につゝきて
咲かゝる花のちるかと見る人も心くたくるたきのしら玉

關花

相坂やさかり過ゆくさくら花とゝめやはせぬ春の關守
雪のうちに出し日數もつもり來て春さくはなの白川の關

杜花

咲ましる花のあたりの梢まてうつり香深き衣手の森

杜間花

おくれぬもおそ櫻かと見ゆる哉もりの青葉にましる一本

社頭花

花ゆゑも神のいかきはこえぬへし咲一枝のをらまほしさに
立田山風まもるてふ神垣に咲るさくらの花はたのもし

禁中花

九重の花の盛を見わたせは雲の下ゆく雲のうへ人

古寺花

をはつせや花よりひゝく山風のかねのにほひもしらむよの空

山家花

咲しより花にうつろふ山里の春のこゝろはちるかたもなし

閑居花

かすむ日は咲るよそめもかくれかに花を尋ねてくる人もなし
世のうきはのかれしやとも花さけは又山風のいとはるゝかな

故郷花

たとへける櫻の花の色はかりならのみやこもいま盛なり
ふるさとゝ春はたれかはみよし野の山を軒端の花のあけほの

名所花

見わたせは雲も霞も櫻色にゝほふや櫻みよし野の山
たつねても吉野のおくははてもなし日數や花の限ならまし

花のうたとも

よし野山かはかり花のさくや姫神世にいかにたねをまきけむ
たくひなき花とはかねて聞しかとさらに驚くみよしのゝ山
見わたせは花より外の色もなし櫻にうつむみよし野の山
みわたせはたゝ白雲そにほふなるさくらはいつら三吉野の山
いつれをか花とは分てなかめましなへて櫻のみよし野の山
吉野山あくる日ことに咲そひて昨日の花もよものしら雲
ふしのねも及はし花の春風に白雪にほふみよしのゝやま
あかす見る心のおくははてもなしよしのゝ花を分つくしても
おく深く尋ねいらすはよしの山花や心を淺しとおもはむ
暮ぬとも猶分見はや山櫻月夜よし野の花の盛は
ほともなし花ちるまては吉野山すてぬうきよも捨てこそ見め

咲花に絶てあらしのふかぬまそ春の心はのとけかりける
散へくは風ふかぬ世も山さくらあくまて花を見る春そなき
さきしより花になりぬる心とて四方の野山にちらぬ日そなき
かきりある花の日數を思ふにはちられぬとをしき入相のかね
春の日のなかきを花の心にてちるとしらぬ櫻ともかな
花にくれ花にそあかすよるも猶ひる見し色の夢に見えつゝ
なれてなほいかにわかれのうからまし咲てとくちる櫻ならすは
世中はやよひなからに年をへていつも櫻のさかりともかな
人はおほく秋に心をよすめれと我はさくらの花のさく春
かくなからちらてしあらは庵しめてわかよはへなむ花の木本
花にそむ心のいろはうつろはて風にもいとゝこさまさるかな
山さくらちらすは千代もなからへむ老をわするゝ花のこの本
春の來て花のさかりのうれしきに我身のおいは忘れてそみる
うゑて見る若木のさくらならふなよ老の春まて花さかぬ分に
風またぬわか身思はてさくら花あたなる色と何かこつらむ
ひたすらにたれうき物と歎くらむ春は櫻の花も見る世を
いかはかりうき世なりとも櫻花咲てちらすは物は思はし
かくはかり心にしむもさきのよの契ゆかしき花の色かな
めつらしきこまもろこしの花よりもあかぬ色香は櫻なりけり
櫻なきこまもろこしの國人は春とて何に心やるらむ
さくらなき佛の國はなにかせむ七重のなみ木花はさくとも
うせぬともあかぬ心をとゝめおきてなき世の春も花をこそ見め

落花

山さくらさかりと見れはゆく水に數かきそむる花の一ひら
川の瀬にならひそめてやよしの山春咲花の早くちるらむ
春と見し花の梢も風たちてみよし野は又雪のふるさと
いかにせむ吉野のおくもちる花のうきよのかれぬ春の山風
よしの山風のうき世をいつこにかのかれてちらぬ花は見るへき
をしみえぬ心に花のたねまきて又の春まつ春の山風

惜落花

をしみても散行花はいふかひもなかき日暮しなに思ふらむ

落花多

ちるこそは盛なりけれ山さくら空ふく風も花になりつゝ

落花埋苔

庭の面は櫻ちりしく春風にさそはぬ苔の色そ消ゆく

落花滿庭

ふりにけり昨日の花は雪とたに見にこむ庭の道もなき迄

曉庭落花

花さそふ明方寒き眞木の戸に雪ふきいるゝ庭の春風

夕落花

ちるを見てかへる山路は中々にのこるそをしき花の夕風
おのつから残るかたえも明日まてはあらし吹そふ花の夕くれ
ちる花に明日のたのみもなく／＼そくるれはかへる春の山風

夜思落花

いかにせむちるまをたにと思ふ夜の月も入ぬる庭のさくらを

落花如雪

花かとよふりくる風も寒からて春の山路につもる白雪
散つもる庭にもいとふ嵐哉ふく跡見ゆる花のしら雪

山家落花

春はなほうきよのさかと咲花をさそふ嵐の山陰のいほ

閑庭落花
あすよりはまれの人めの跡たにも嵐の庭の花の白雪
花は根にやとは行つるさひしさにかへるゆふへの庭の春風
故郷落花
散ぬれは春のきのふの花園も同し昔のしかのふる里
しかのらや跡をたに見む雪もなし散ていくかの花の故郷
古寺落花
夕あらしはつせの花やさそふらむ袖にちりくる入相のかね
谷落花
ひかりなき谷にも風はよそならて咲てとくちる山櫻かな
關落花
吹こゆる嵐の花の手向をは神もいさめよ逢坂の關
行路落花
ゆくさきの花もいかにといそかれてちる木本に我もとまらす
河上落花
散てたにしはしとまらぬ山川の流れも花のうきせなりけり
なかれゆく花はとまらて川水も跡は青葉の影そ殘れる
水上落花
ちりしきて水のうへにも行舟のあと惜まるゝ花の白雪
水邊落花
よし野川見しや花ともわかぬまに高根の雲もせゝのうたかた
花形見
さそはれしゆかりと思へはうきなから花のかたみの春の山かせ
落花のうたとも
根にかへる物としきけは山櫻ほりても見はや花のゆくへを

たつねても殘らぬ枝にとふ蝶の夢かきのふの花の盛は
つらかりし嵐を今はかたみにて青葉にさわく花のおも影
くもと見し花はあとなき有明の月に殘れる峯の春風
苗代
たのみあれや今より水もゆたかにて年榮ゆへき小田の苗代
躑躅
くれなゐのうす花櫻散過てつゝしそ春の千入なりける
つれなしと見えつる松の下つゝし下の思ひも色に出けり
欵冬
芳野河さくらの影も山吹にうつりにけりなはるの日數は
里欵冬
みよし野の里は櫻の雪きえてかきねに來ぬる山吹の春
籬欵冬
行春もとまりにけりなこえかねて八重山ふきの花のまかきに
橋邊欵冬
枝たれてきしより岸に山ふきの花もかゝれる谷川のはし
瀧下欵冬
落瀧つ中にもよとむ影見えて淵瀬ともなき岸の山ふき
名所欵冬
うち河やうつる影さへ名に立て咲山吹のせゝの岩なみ
ちり過し櫻わすれぬよの人に見せはや井手の山吹の花
おく露をふく朝風に河の名の玉ぬきみたる岸の山ふき
杜若
これも又花とや見らむかきつはたにほへる色に春のとまれる
かきつはたよに咲花の春の色の深さもこれや限なるらむ

蛙

霞しく春の末野のさは水にゆふへさひしく蛙なくこゑ
なはしろにあまるなれもよろこひてよむか蛙の水のうたかた

橋藤

見渡せは橋よりちへの松かえにふちもかゝれる春の山川

瀧邊藤

岩かねの松より末にさし出て瀧の糸にもかゝるふちなみ

暮春藤

夏にしもかゝらむよりは藤の花はひまつはれて春をとゝめよ

暮春

ちりはてし花のゆかりの春をさへさそひもゆくか跡の山風
散花にしはしおくれし日數さへつひにとまらぬ春の別路
行袖をひきもとめはや佐保姫の霞の衣はるの　おち

山家暮春

花ちりて人め絶にし山里に行春さへやとまらさるらむ

夏哥

首夏

春霞明し一夜をへたてにて晴ゆく空に夏は來にけり

首夏朝

めつらしくけさは霞もはる〳〵と見るめさはらぬ夏山のいろ
夏ころもはるは昨日の花の香もなこり尋ねる袖の朝かせ

夏衣

雪とのみふりしゆかりの白重夏きても猶花はわすれす
花にそむ心の色もおのつからかはるとなしに蟬のは衣

朝更衣

花染のをしき別れの露たにも形見とゝめぬそての朝かせ
ぬきかへて花のにほひもなつ衣ありとや袖にかよふ朝風

惜更衣

ぬきかふるならひうらめし心から春をへたつるけふの衣よ
ぬきかへてうつろ月日を思ふにも衣は花のなこりのみかは

餘花

のこるやと我こそけふも尋ねつれ心長さはさくらのみかは

殘花

夏山にほのかにのこる春風のにほひあやしき雲の一むら
ちり殘る陰に立よるなつ衣うつりにけりと花や見るらむ

遲櫻

八重霞はれにし山のおそ櫻春をへたてゝ見るもめつらし

新樹

さくらこそなほ見やらるれその色とわかぬ若葉も花のなこりに
散過てわするとまてはなつ山の色にもうつる花心かな
花ならぬ山の青葉も一枝はをりしる夏の家つとにせむ
ふかみとりさくらにふくも今は又風なつかしき夏木立かな
うつりけり木々の若葉の色見れは花に染てし春の心も
しけりても青葉見にとてくる人はなつ山さひし木々の下陰
夏も猶木々のわか葉をみよしのゝやます分見む花はなくとも
みよし野の青根か峯もいつれとかわか葉にたとるなつ木立哉
しくれせぬ夏のみとりも日にそへて色はまさきのかつらきの山
夏たちしけれるかけのをくら山いつか紅葉のてらむとすらむ

新樹妨月

春の夜はかすみながらも見し月にひたすらさはる夏木立かな

庭新樹

なかめても心つくしもなつこたちちらぬ青葉の庭の夕風

山新樹

あかさりし花のなごりとみよしのゝ山は青葉もなつかしき哉

林新樹

それと見し櫻も今は青葉にて雲の林は名のみ立けり

里卯花

此さとの卯花月夜よゝしとはつけぬ垣根も人そとひくる

たをりゆく里のかきねは卯花の雪にも人の跡つけてけり

きえて後ちれる櫻に見し雪を又みよしのゝ里のうの花

行路卯花

過かてに人やをりけむうの花の雪に跡あるさとの通路

卯花隱路

ひまもなく里の卯花咲にけりとはむ垣根も道見えぬまて

葵

神山やあふひのかつらとる袖にまつかけそむるけさの朝露

待郭公

時鳥人もさこそとおもひやれなかき月まつこゝろつくしに

一こゑもきくとはなしに郭公まつにねぬよの數そつもれる

あしひきの山より出る聲まつも人にもいひてまつ時鳥

有明の月まち出てつれなさのいとゝしらるゝ山ほとゝきす

まちわひてふすかとすれと時鳥なかぬにあくるしのゝめの空

なきぬへき雲間の月もむら雨の空たのめなる郭公かな

樹下待郭公

聲きかは涙かさむとまつかけの雫かひなき山ほとゝきす

未聞郭公

有明の月にもなかて日かすのみ空に過ゆくやま郭公

尋郭公

ほとゝきす山彦ならはたつれわひよふにこたふる聲はせましを

待郭公

つれなきも初音のゝちは時鳥まつにたのみの有明の空

郭公未遍

里わかぬ月見てかこつ時鳥聞つる人もありあけのころ

曉郭公

もらしけり五月まつまもほとゝきす忍ふかきりや有明の空

曙郭公

忍ひ音をよはにはなかて時鳥なと明ほのゝそらはまちけむ

夜郭公

一こゑはまた宵なからしのゝめの雲のいつこの山ほとゝきす

たつねてもまたきかさりし郭公寐覺をりよきよはの一聲

まつほとはかこちけるかな時鳥きくにつけてもいとゝねぬよを

郭公あけぬ夜のまといそくらむなく一こゑも忍ひねのそら

さためつや世人はいかに郭公夢かうつゝかよはのひと聲

ほとゝきす又さたかなる夢にたに見ぬよの闇をかこつ一聲

月前郭公

同しくはいま一こゑもいらぬまになけや月夜の山郭公

寐覺郭公

ねさめすはきかまし物か時鳥おいもうれしきよはの一こゑ

雨後郭公

五月雨のふりぬる聲もめつらしくはるゝ雲間の山郭公
月にきく初音はこよひ五月雨のはるゝくもまのやま郭公
雨はるゝ軒のしつくを涙にて鳴音おちくる山ほとゝきす
むらさめの雲間を過し時鳥今一こゑは月すめるそら

五月郭公

此ころはおのか五月と鳴聲もしけき青葉の山ほとゝきす

杜郭公

をり〳〵はさつきまつてふ忍ひねもゝりの木間のほとゝきす哉
月影はよそなるもりのこかくれに鳴音さはらぬほとゝきす哉
なきすてゝ涙のこして時鳥いつちいくたのもりの下露

野郭公

郭公しのふにあまる初音かもまたきにきなくをのゝ篠原
五月山すそ野の草を分ゆけは空にもしけく鳴郭公
鳴すてゝ紫野ゆきしめ野ゆきところさためぬ時鳥かな

行路郭公

聞すてゝ過來しあとの時鳥かひもなつ野に又やなくらむ

渡郭公

なきすてゝいま一聲は泉川とほきわたりの山ほとゝきす
くるしさも忘れてそきく時鳥さのゝ渡のむらさめの空

船中郭公

ほとゝきす磯山本に聞すてゝおのれ過ゆくあけのそほ船

霧中郭公

さらすともみやこの夢もみしか夜をなけやかりねの山時鳥

名所郭公

名にしおはゝ五月すくとも時わかすなけや常磐の山郭公

早苗

かりはてぬかたへは麥の秋風にいつしかそよく小田の若苗

朝早苗

朝またき山田のさなへ日は長し露のひるまを待てとらなむ
くれかけてうゑしきのふのはつ苗にけさは露見る小田の涼しさ

雨後早苗

いつくにもまちけるほとか雨晴てけふは田ことに早苗とる也
雨はれて民の心もゆく水のあまる田とにさなへとるなり
いそくかな日ころの雨のおこたりも山田の早苗とりかへす迄

菖蒲露

軒にふくあやめも見えぬ五月闇袖にあやしくにほふ露哉
しつかやにおはぬ雫のにほひかなふける菖蒲の露落る比

橘

さたかなる昔の夢はさめしよのやみのうつゝにゝほふたちはな

夜橘

たちはなの影さへ見えて軒端もる月のにほひも深き夜の空

曉廬橘

猶いかにむかししのへとたちはなの老のねさめにゝほひきぬらむ

廬橘驚夢

しはしみる夢路なやます袖の香も同し昔の軒のたちはな

廬橘薫風

夕風にわれなからわか袖の香もなつかしきまてにほふたちはな

軒橘

むかしたれとはかりたにも後しのへわか袖ふるゝ軒のたちはな

故郷橘

さらてたにむかし戀しき故郷をいかにせよとてにほふたちはな
にほひかは見るにつけてもふるさとは昔戀しき軒のたちはな

山家樗

やまさとはたゝ青葉のみしけりあふをりにあふちの花もめつらし

五月雨

みよし野のみくまか菅をかりそめの晴間たになき五月雨のころ
夏草の露のはれまもなくてのみ日數ふる野の五月雨の空
鹿背山は雲晴やらて泉川いつ見しまゝのさみたれのそら
のこりなく朽はつるまて板ひさし久しく晴ぬさみたれのそら

初五月雨

昨日けふ又河水はまさらねと雲深くなる五月雨のそら

杜五月雨

ものおもふたか衣手の森の露はらひもあへぬ五月雨のころ

杣五月雨

おしなへて淺瀨もみを、杣川や宮木よとまぬ五月雨のころ

池五月雨

はれやらぬ池の心のいふせさもにこるに見ゆるさみたれのころ

江五月雨

難波かたみきはのあしの末葉まて浪に入江の五月雨のころ

浦五月雨

立こゆる浪にたゝよふ夏かりの玉江の蘆のさみたれの頃

五月雨晴

五月雨はをふの浦梨みつしほになりもならすも浪そよりくる
玉さゝのよのまに晴てめつらしく朝日まちとる五月雨の露

夏月

ひさかたの月の桂も夏は又しけりそへはやかけのすゝしき
ほともなくあくるを夏のしるしにて涼しさはたゝ秋の夜の月

樹陰夏月

松かけや風の絕間もすゝしきは梢をわたる夏のよの月
さすえたの行合のまより木本に夏も霜おく月の涼しさ

河夏月

水もなき空に見るたに涼しきをまして川せの夏の月影

池夏月

月なみはまた夏なから秋そともいはれの池にすめる涼しさ
すむ影もふけゆくまゝに涼しさは益田の池の夏の夜の月

雨後夏月

くるゝ夜のおのかなこりの涼しさを月にゆつりてはるゝゆふ立

夏月涼

出るより涼しき影はてりし日の同し空ともなつの夜の月
すゝしさは風も思はてあかす夜に月見ぬ人や秋をまつらむ
涼しさをつゝみてかへるよしもかな袖師の浦の夏のよの月

夏月如秋

水のおもにてる涼しさはみな月の光も秋のもなかなりけり

夏月易明

まちとりて草葉すゝしき露のまもなつの夜惜くしらむ月影

瞿麥露

いかならむねよけに見ゆる床夏の花におきゐる露のこゝろよ

杜夏草

こかくれて涼しき陰とかる人もほかよりしけきもりの夏草

徑夏草

さすかなほ道は見えけりしけりてもゆきゝもしけき野への夏草

夏草露

繁りては朝夕露のすゝしさにかりもはらはぬ庭の夏くさ

螢

夕闇にしのふの露も顯れて軒端すゝしくとふ螢かな

水上螢

ひさかたの中におふてふ河の瀬もやみの光は螢なりけり

水邊螢

もえつゝもおのか影みる涼しさに螢も水のうへや行らむ

水ひろみ空にほたるのとふ影のうつろふ數もおほさはの池

夏の夜はうつる螢のかけもよしやとりてやみむ飛鳥井の水

木の川にもゆる螢やいもせ山へたつる中の思ひなるらむ

澤螢

とふほたるなれも野澤のみつからはもえてもうつる影や涼しき

池螢

うき草にすかる螢もさそはれて風にたゝよふ庭の池水

瀧下螢

涙なき思ひもいつれたかけむと瀧にくらへてとふ螢かな

橋螢

とひわたる螢の影もあかぬよのあくるわひしき久米の岩橋

江螢

影みかく玉江のこもをおのかとてしめてやすたくよはの螢も

すみのえの岸におふてふ草葉にももゆる螢の戀や忘れぬ

とふほたるあはすは何をちる玉のをのゝふるえにもゆるおもひそ

なに事を思ひ入江のほたるとて底にも影のもえてみゆらむ

窓螢

吹風にほたるのかけも涼しさをあらそふまとの竹のよる／＼

とふほたる窓のうたゝね夢さめて見えこし人のたまかあらぬか

やよ螢書も見ぬ身のおこたりに窓ちかくとふ影もはつかし

深夜螢

さ夜更て見らくのおほき螢かな月は入ぬるいその草葉に

蚊遣火

やとことのけふり立あふかやり火に一むらくもる里の夕くれ

ふきいるゝ軒のけふりのいふせさに風もやつるゝしつか蚊遣火

さし出る月にけふりもうきものを蚊をのみいとふしつかしわさよ

曉蚊遣火

きえなはとはるゝを待しかやりひのけふりなからに月そあけゆく

蓮

風こえてちるそ涼しき蓮葉になにかは露を玉とのみ見む

ちるもをしふくもすゝしき夕風に思ひみたるゝ蓮葉の露

夕立

吹風も俄に涼し夕立の雲にまよひて秋やきぬらむ

ほとちかき軒の玉水すゝしさは袖に落來る夕立のそら

かきくらす雲もあつさも時のまによそに吹やるゆふ立の風

夕立の雨は過ぬる庭の面に涼しさのこる夏くさの露

露しけみ入日の影も夕立のなこりすゝしき庭の淺茅生

遠夕立

峯過る雲にかけろふ夕立のよそめ涼しき山もとの里

かせ山に夕立すれといつみ河遠きわたりは水もにこらす

鈴鹿路や山田か原はゆふたちのふるかと見れはすきの村立

かゝみ山風こそきほへ夕たちのうつるはとほきから崎の松

遠村夕立

をち方や里のけふりはかきくれて雲立のほる夕たちの空

野夕立

ゆふたちにぬれし袂のかわくまて猶もいそく野の道そはるけき

行路夕立

旅人のみのふく風も涼しけにふりゆく野路の夕立の雨

河夕立

夕立の雲にきほひて涼しさのますけかたよるそかの河風

橋夕立

高師山くもるとみれはほともなく濱名の橋にかゝる夕立

夕立雲

ゆふたちのなこりを見せて暮深く月にたゝよふ雲の涼しさ

鵜河

夏の夜の早き川瀬もうかひ舟さすかにくたすほとは有けり

樹陰蟬

すゝしさは蟬の羽袖に鳴せみの聲も落くる杜の下風

納涼

瀧つ瀬のあたり涼しき夕暮に風もおちくる山まつの陰

泉

涼しさは風の絶間も音たてゝいつともわかぬ松の下水

むすはても涼しきものを雫にはよしやにこさし山の井の水

泉邊納涼

日くるれは泉のもとを立さりて忘れし夏にかへる物うさ

對泉忘夏

柴人もしはし暑さを忘れつゝむすふ山路の松の下水

竹風夜涼

吳竹を荻よりさきのやとりにてよる／＼涼し軒の下風

松下納涼

夕風になるをの松の下すゝみ涼しき袖に浪もかけつゝ

松風晚涼

秋さへや忍ひてよるは通ふらむ吹風すゝし松の下道

樹陰納涼

夏衣うすき袖には夕風のあまり涼しき松の陰かな

柳かけ糸よりかけし春よりもくる人しけき夕すゝみ哉

野納涼

かたえさすいり日はあれと夕陰になる方涼しをふの浦梨

船納涼

夏の日もゆふへ涼しくかけろふの小野の秋津に秋や通へる

風そよく堀江のをふね行かへり同し蘆へにすゝむ夏の夜

夏の夜はあけのそほ船山本のすゝしさあかて漕めくるまに

水風晚涼

すゝしさはみきはの松に聲かはす蟬の小川の浪の夕かせ

名所納涼

夕しほのみつの濱松まち戀し風も立そふ浪のすゝしさ

納涼忘夏

秋かとよ風まつかけのうたゝ寐も覺て驚く袖の涼しさ

夏筵

夜をかされ軒端すゝしきうたゝねに此ころうとき床のさ莚

夏河

すゝしさに里のわらはのたはふれも川邊はなれぬ六月の比

海邊夏

夕すゝみ袖にまつらのうら風もまた秋遠きもろこしの空

晩　夏

河風にちかきみそきの面影もかねて涼しき浪の白ゆふ

晩夏涼

明かたの露のひかりも秋近き月に涼しき庭の淺茅生

六月祓

みそきしてゆふへすゝしき川風ははや秋津女の袖もうけゝむ

鈴屋歌集二之巻

本居宣長詠

秋哥

初秋風

まちし夜のうたゝねなからしのゝめの袖に吹來る秋のはつ風

今朝はまつまちとる袖の涼しさに荻の葉いはぬ秋の初風

秋といへはしけくも落る涙かな桐は一葉の今日のはつ風

初秋夜

かきりあれは同し暑さにくるゝ夜も月はさすかに初秋のそら

初秋月

秋の來て涼しき風も三日月のまたはつかなるよひ〳〵の空

軒ちかき桐の一葉のゆふへより月も秋なる影そおちくる

浦初秋

きのふけふ風の音にはきく秋をめにみか月の夕くれの空

秋きぬと目にはみぬめの浦風もけさよりかはる波の音哉

湖初秋

あきゝぬと海ふく比良の山風もうらめつらしきあまの衣手

新秋曉露

夏たにもひるまはまれの淺茅生に秋きぬる夜のしのゝめの露

早涼

秋きぬとかへぬたもとも初風にけさよりうすきせみの羽衣

早秋

みにしみて秋はきにけりうたゝねにまたれしまゝの袖の朝風

七夕

今日のみや天の河へのはつを花まねくかひある夕なるらむ

たなはたのあはぬ月日を重ねきてまれにひもとく天の羽衣

神代より紅葉の橋を彦星のわたれと錦中は絶せす

七夕船

立出て天のかはらの夕浪に君か御舟のよるをこそまて

まちわふる船出そおそき天河わたらぬさきに梶やかくせし

あまのかは岸うつなみの音高しわかまつ舟も今やよるらむ

七夕糸

星合の空に手向のいとせめてひきもとゝめよ明日の別を

七夕衣

重ねても二夜かさねぬ契をやうらみてぬらむ天の羽衣

羇中七夕

旅まくら星の契はめくりあふこよひもよその故郷の空

殘暑

木本に聲は落來て秋も猶まつ風うとき蟬のはころも

荻

音きけはおのか上葉の露よりも袖にみたるゝ風のをき原

ふかぬまもやとるか風の面影に上葉かたよる露の荻原

荻風

秋來れは涙もかゝる夕風を荻の葉しらて袖に待けり

聞荻

をき原や一本ならはよきよともいはまし物を秋の夕風

夕暮に庭の荻ふく音きけはなへて草木の風は秋かは

おほかたの木草の風は秋としもなみたことなる荻の音かな

夕荻

やどりとてゆふへになれは秋かせのいとゝ吹よる庭のをきはら
夕くれも荻の葉ふかぬ秋ならはいとかく風の身にはしまめや
明日はとくかりもすてはや夕風のかなしさ堪ぬ庭のをき原

夜 荻

さよふけてきけはゆふへのさひしさは猶数ならぬ荻の上風

深夜荻

ふくる夜の庭の秋風音たかし月はかたふく軒の下をき

庭 荻

聞なれてうき秋風のおとなからふかぬもさひし庭の荻原

閑庭荻

やとからか荻ふく庭の夕風はいつくの秋もかくやさひしき

山家荻

松のおとはなれしいほりの軒端にも荻の葉かなし秋の夕風
おひしける山下荻を軒端にてねられむ物かよはの秋風

萩

夕風のふかぬ木葉もなひくなりおもるか露の秋はきの花

萩 露

むすひおきて花の色香をかりそめの契も深き秋萩の露
咲しよりいろにうつりておく露もあたの大野の秋萩の花
ふき渡す萩より萩にみたれつゝ風も色なる宮城野の露

庭 萩

さきしよりなかむ尾上の庭のねもきくこゝちする庭の秋萩

野 萩

きてかへる物にもかなや故郷に此宮城野の萩のにしきを

野亭夕萩

咲つゝく萩をまかきにゆふ露のなかめえならぬ野へのかり庵

羇中萩

なこりあれやかりねの野への萩の露おきゆく袖もにほふ曙

栽 萩

うつし植てうつさぬ露も朝夕は野へのまゝなるやとの秋萩

遠思秋萩

思ひやることよひの月に袖ぬれてたれみやきのゝ秋はきの露

薄

旅人のうちはらひゆく袂さへまねくにまかふ露のをすゝき

夕 薄

たひ人はまねく尾花の袂をや草の枕にゆふ暮の野へ

薄 露

ふきよれはこほれてなひく秋風にぬきあへぬ露の玉のを薄

草花露

さま／＼の色香うつりておく露も花の盛そさかりなりける
咲ましる花にみたれてちる露も色の千種の野への夕風

月前草花

よるは又ひかりをそれとちらす野に月も千種の花の一種
よるはまた光を花にこきませて月みやき野の秋萩の露

草花映月

影やとる野もせの露の色々に月もちくさの花さかりかな

夕 露

ゆふくれは風よりさきと本あらの小萩の露に月をこそまて

月前露

萩はらや月影清みとふ鴈の涙の露のかすも見えけり

野外露

思ふにははらふ野風もまけぬらし尾花か袖のなほそ露けき

袖かこつ人にとはゝやことわりの秋のさか野の露は見きやと

秋田露

刈のこす山田のいな葉明日しらぬやと〻や露も心おくらむ

故郷露

ひまもなく軒のしのふの露落てくもらぬ雨のふる里の空

野虫

色見えぬよるの千種と秋の野になくさま〳〵の虫の聲哉

萩の露かはる涙のいろかとも思ふまてなく野邊の虫哉

月影もこほるゝ野への秋風に虫の音きえぬ淺茅生の露

名のみして秋の末野の初霜にうらかれゆくか松虫の聲

庭虫

はしゐして月まつ庭の夕暮にまつ鳴出る虫のこゑ〳〵

はつ霜のおきゐてきけはむしのねもよな〳〵かはる庭の淺茅生

露底虫

ひまもなき露の下葉にすむ虫も鳴音はぬれぬ庭の淺茅生

夕虫

秋の野はくれゆく花の下葉よりなくも千種のむしの聲々

月前虫

なかめつゝむしのねきけは秋のよはみゝにもすめる月の影かな

秋の夜は虫の音をさへかけそへていく度月に袖しほるらむ

むしの音かいつれに落るあはれとも涙わかれぬ秋のよの月

雪と見る野への月影分ゆかは虫の音にさへ跡やつきなむ

曉虫

むしのねのたえ〳〵になるあさちふに月そ數そふしのゝめの露

秋夕

心あれと何思ひけむなくてたにかなしきものを秋の夕くれ

いかにせむいつくも同しさひしさと聞てもたへぬ秋の夕暮

かりそめに草葉の露を吹風もなみたすゝむる秋のゆふくれ

秋夕思

わか袖にかゝれとてしも夕風はふかしを庭のをきの上露

こゝろさへふけはしをるゝ夕風を木草の秋と思ひけるかな

山家秋夕

山風の軒の松ふくさひしさは我身ひとつの秋の夕暮

夕まくれ秋はみやこのなかめたにさひしきものを山陰の庵

月

草も木も露は見ゆれとひるまかと疑はれける月のさやけさ

なかむれは空に心のうつるかなくもらぬ月やかゝみなるらむ

秋の夜もやみは長くて月のうちに月見る程はいくはくもなし

こゝろある人いかならむ秋の月しらぬあはれも深き夜のそら

しる人も有しにかはる老の世のむかしの友はたゝ秋の月

とひなれし袖の中にはいりもせて山端いそく月の影かな

ひとり居ていりかたちかき月見れは宵のあはれは數ならぬ哉

をしと思ふ我袖すてゝやまのはに心つよくもいる月の影

待月

出やらぬ月まつとては月よりもまづ山端そなかめられける

海上待月

夕まくれしほさし來る大淀のまつにつれなき月のかけ哉

月催涙

心からぬらしけるかな月見すは秋とて袖のかゝらましやは

老後見月

おいそうきうかりけるよの秋とても涙のひまは有し月夜を

草露映月

紫の月はなにそのゆかりとて草葉もあはれむさし野の露

花さかぬ草葉に秋をかすか野や月影きよきよはの白露

野分後月

夜もすからあれし野分の雲間にも月はしをれぬ有明の庭

立待月

あかす見し花は暮ぬる秋の野に猶たちまちの月も出けり

雨後月

ふる雨は跡なく晴て庭はたゝ月のひかりにぬるゝあさちふ

残月

朝日影さしもさやかに見し月もあるかなきかにのこる山端

明月如昼

おきわたす数もあらはにしら露のひるかと見ゆる秋のよの月

八月十五夜

かねてよりくもりなかれと思ひこし願ひもみつるもち月の影

をり／＼に雲はかゝれど月影のさすかこよひは今夜也けり

九月十三夜

長月の水の月なみさやけさは秋のもなかにたちやかへれる

なか月のこよひの月も有ものをたくひなかはと思ひける哉

とことはにわかよもいかて長月のあかぬ光を見るよしもかな

庭月

見るまゝに庭の浅茅のよはの露袖にもかゝる月のかけ哉

草庵月

露しけき草のいほりにさし入てわかすむ影も月に見えけり

月影のもるよは雨のふる夜より袖ぬれまさる草の庵哉

都月

山里は雲霧深し秋の夜の月もみやこそすみまさりける

千里まてよるは光の外ならてみやこも月の都なりけり

故郷月

ふるさとは月の影さへやつれけり見る人からの秋のなみたに

社頭月

玉みかく月のひかりも神さひて神代おほゆるもりの榊葉

秋の月こと浦よりもすみのえは神の御かけや空にそふらむ

ともに出しあはきか原のそのかみのゆかり尋ねてすみのえの月

ところからとなる影を旅人もてる月よみのみやはとかめぬ

わきて又てる月よみのみや柱秋のもなかにめくりあふよは

古寺月

かねのおとも雲ゐにすみてをはつせの山風ふくる秋の夜の月

山居月

面影にすてしうきよも戀しくて月にこゝろはすまぬ山さと

山家月

山のおくにたゝ我こそと思ひしに猶すみまさる秋のよの月

山月

すみまさる心も空も時は秋ところは山のおくの月影

山月明

山端は雲もかゝらて松はかりさはる木間の月のさやけさ

深山秋月

やまのおくは松のあらしも瀧の音も光となりて月そさやけき

野　月

いろ／＼にやとる野もせの露みれは花こそ月の光なりけれ

影やとる花野のよはの露見れは月も千種の色は有けり

女郎花おほかる野へにやとる夜も月のあた名は露そたてける

ふきみたる露のゆかりに月影もあたの大野のよはの秋風

すむ影もあたの大野の花の露色なる月に秋風そふく

かくれなむあしたの原よ面影にかねてさひしき秋のよの月

夕霧も晴てゐな野のをさゝはらさはらぬよはの月のさやけさ

宿からて猪名野はゆかむ有馬山夕霧はるゝ月のひかりに

むさし野や月のかつらの一本にみなからひかる秋草のつゆ

露はらふ草葉の風を山端と月影をしむ武藏野の原

野月明

さやけさはひるのにしきとみやきのゝ萩かえてらす秋の夜の月

野徑月

月夜よしひるまはゆかし露分て袖に影見る野への通ひち

見る人や我よりさきも分つらむ露淺ちふの小野の月影

野への露分すはしらしこゝろなき袖にもかゝる月のあはれを

よるゆけは袖にもあかて萩の露西にうつろふ野路の月影

あかなくに須磨の上野のよはの月あけすはすきし關はなくとも

うかれてもはてはある夜の月影にわけもつくさぬ武藏野の原

しつかにもやとりけるかなあくかれて人はいく野の露の月かけ

野亭月

寐覺するすゝのしのやのしのゝめに露おく袖を月そとひくる

田　月

おきわたす田面の露も深き夜の稻葉におもる秋の月影

田家月

影清みたのもの末に庵見えて燈くらきあきのよの月

關　月

浪のうへにかたふく影をすまの關とめても見はや秋のよの月

相坂や杉むらつゝく關の戶は月のひかりもゝりあかす哉

よそにゝぬあはれもそひて不破の關あれしそ月の光なりける

橋　月

すみ渡る月のひかりも中絕てうき雲かゝる久米の岩はし

おもかけにたつやなからの橋柱くちても月のすみ渡る夜は

たとへけるその面影の戀しきに月やむかしのまゝのつきはし

東路やひく駒ならぬもち月も長きよわたるせたの長はし

しら玉かをたえの橋の秋風にみたれてしつく浪の月影

河　月

玉嶋やくもりなきよは水の面に川の名うかふ秋の月影

瀧　月

たつねてもよるこそは見め木間より月も落くる瀧の白糸

池　月

いとゝしくつるきの池の草葉には秋の霜かと見ゆる月かけ

澤　月

ゆく月にさはらぬはとはうき雲の影さへ清き野へのさは水

よもすから影見る月にうき草のくまたにもなき廣澤の池

浦　月

あまの子かみぬめは浦の名のみして月におきゐるなみのよる／＼

明石かた浦風たえて浪たにもよるとは見えぬ秋の月影

磯　月

うちよせてぬるゝいそへの眞砂にも殘してかへる浪の月かけ

湊　月

みなといりのあし分小船たとらしな雲もさはらぬ月の光に

海上曉月

こき出て浪のまくらに有明の影も一夜の月のわかれち

江　月

あたひなき玉江の秋のなかめ哉くもらぬよはの月をやとして

湖　月

見る人もうち出のはまの夕浪にひかりほのめく秋の夜の月

旅泊月

見し月もそれかあらぬか浦山のおもかけかはる浪のよる〳〵

梶まくらみやこゝひすは猶いかに明石の月のさやけからまし

旅宿月

たひれする野山の月のみやこにてよるはかはらぬ影をこそ見れ

月前露

山端はまたとほき夜もいく度かあらしにをしむ露の月影

月前眺望

あかなくにふけゆく月の清見かた影たにとめよ浪の關もり

わたつみのかさしの玉かあはち嶋浪に影さす秋の夜の月

竹間月

吳竹のよはの白露風こえて葉分の月のかけそこほるゝ

月前松

さし出し月ははなれて高砂の峯にさひしき松の一もと

陰たかみさはる物から見る月のけしきをそふる庭の松枝

月前筏

いかたくむまさ木の綱も早瀨河はやく流るゝ月やとゝめぬ

月前情

とはゝやなものゝあはれをしる人に月見る秋の夜はのこゝろを

秋のよのふかきこゝろはしらぬみも涙はしるかくもる月影

秋をへて月のあはれをます鏡わかよふけゆく影を見るにも

月前旅

分ぬれてうかりし野路の夕露も暮てうれしきそての月影

あけてこそやとりとらめと終夜月見つゝゆく秋のたひ人

稻　妻

かせにちる草葉の露を尋ねきてあたくらへするいなつまのかけ

田上稻妻

おきわたす露のいなはにいな妻のひかりもなひく小田の秋風

駒　迎

ひくこまのかけも木間に見えそめて月におくれぬ逢坂の山

霧中鶉

あはれなるうつらの聲もたちそひていとゝさひしき野への夕霧

野亭鶉

はれやらて霧さへ秋は深草の里をうつらの夕くれの聲

たへてやは我もふしみのゝへの庵嵐も露もうつら鳴夜を

鴫

よもすから秋の野風にちる露の數かきあへぬ鴫のはねかき

霧

このまよりもり來る月もたちこめて心つくしの秋の夕きり

あれはてし野へのあはれはたちこめてたゝ夕霧の深草の里

遠山霧

とほ山のゝころなかめもあやにくにまたきくれゆく秋の夕霧

山路霧

もろともに立出る山の朝霧にのほりおくるゝあきのたひ人

野霧

へたてゝもあくるひかりは花すゝきほの／＼見ゆる野への朝霧

關霧

逢坂やへたては山のよそめにてゆきゝとゝめぬ關のあき霧

河霧

峯晴てふもとの川は山の名の嵐およはぬ瀬々の朝きり

秋雨

袖ぬらすこの夕くれの心をは空にもしるや秋のむらさめ

初雁

故郷を秋しも雁のわかれけむくるをきくたに悲しき物を

秋の露なれしとこよの別れよりほさてやきぬる衣かりかね

嶺初雁

とひこえて今やきぬらむはつ雁の聲しのゝめの峯の秋霧

霧中雁

こゑはして山立かくす夕きりに面影おつるかりの一つら

來る雁のそれかあらぬか峯こえてまた朝霧の中空のこゑ

聲すなり八重山こえてこし雁を一重は霧の猶へたてゝも

月前雁

あくかれし雁のとこよの秋やいかに都の月もあはれなる夜を

海邊雁

しほくまぬあまつみそらの雁かねもつはさしをるゝ浦の夕霧

雁

みよし野の田面に落る雁かねもよる方たとる秋の夕きり

鹿

たくひこし嵐は松にやすらひて軒端過ゆくさを鹿の聲

月前鹿

つまとへは月もすむ野の萩の露あたなる色に鹿そ鳴なる

霧中鹿

かくれても鳴音あやなしさを鹿の妻とふ山のみねの夕霧

山鹿

ぬれてやときく鹿の音にたくひきて山の雫も袖に落けり

山鳥の尾上の鹿のつま戀もあらし吹夜の聲はへたてす

深山鹿

ほとゝほしすそ野の萩の妻とひも尾上のよそのさを鹿の聲

野鹿

山ふかみあらしのつても峯こえてすそ野によわるさを鹿の聲

妻やうき野風を寒み鳴鹿のなみたいろなる露のはき原

岡鹿

思ふには忍ふの岡にたつ鹿もまくるかよはの妻戀のこゑ

吹おくるをしかの聲そたゆむなる妻や今來の岡の松風

秋ふかみ岡へのわさ田ほに出てつまとふよはのさをしかの聲

關路鹿

音羽山鹿のね聞ゆあふ坂の關のこなたに妻やこふらむ

さをしかの戀て鳴音もそらねとて妻やゆるさぬ相坂の關

海邊鹿

草枕鹿の音もそふ秋風に秋もふけぬとしら河の關

山ちかき浪のうきねはしかのねも枕にかゝる秋のうら風
吹こゆる關の嵐もすこき夜に須磨の上野のさを鹿の聲

名所鹿

明ぬとておのかいるさの山のはに月をもさそふさを鹿のこゑ

擣衣

淺茅生やたか秋風を身にしめてひとり夜寒の衣うつらむ

聞擣衣

月清みなきゆく鴈にうちつれてきぬたの聲も高きよのそら

遠擣衣

をちかたの音もしはしは聞ゆ也近きゝぬたのうちたゆむまに

夜擣衣

音たかみきく我さへにねぬよとはしらてやひとり衣うつらむ

曉擣衣

あかつきの鐘にましりて音すなり猶うちやまぬ里のきぬたも

里擣衣

深草やうつらの聲もうきよはをいかにきけとか衣うつらむ

故郷擣衣

ふるさとゝやとはあれぬる蓬生にまつ人あれや衣うつこゑ
故郷はちかきよし野の山風に一夜も衣うたぬよはなし

名所擣衣

戸もさゝてうちこそあかせてる月の光を頼む里のきぬたは
いこま山あらし吹そふ秋しのゝ里は夜寒のころもうつ也

重陽宴

千世ふへしかさしの花の露落てのむ盃も菊のした水

菊

庭のきく千種の後の一種に又いろ〳〵の花そさきける

籬菊

日數經てにほふもあかぬ心には露のまかきのしら菊の花

澤畔菊

あかす見むみきはのきくの露落て淺澤水も淵となる迄

谷菊

ひかりなき谷ともいはしきくの花天つ星かとまかふ盛は
秋も又ふく谷風にうち出るなみかとまかふ岸のしら菊
うもれ水影こそ見えね露おちてにほひはうつる谷のしら菊
濁るともきくのしつくは千代かけてあくまてくまむ谷の下水

月前菊

花にあかて千世の秋をや菊の露やとかる月も契りおくらむ

菊交薄

はなすゝきまねく袂にしら菊も立よる人の袖かとそ見る

紅葉

山々のもみち染なす立田姫いかにいとまもなかつきのころ
影見えて梢なからの紅葉にもくれなゐふかき立田川かな

紅葉盛

たかためそあたら錦をたつたてふ山の名惜き峯のもみち葉
そめ〳〵し色も千入のかきりとや今朝は昨日のまゝのもみち葉
明日はまたちりやそめなむ染々て色の千入の秋のもみち葉

月前紅葉

さし出る影にちしほの色見えてよるの紅葉は月そ染ける

社頭紅葉

立田山風まもるてふ神垣のもみちはちらし秋すきぬとも

峯紅葉

白雲の絕間色こきたつた山峯の梢やもみちしぬらむ

河紅葉

船とめてしはしは見はや河波に影もこかるゝきしのもみち葉

瀧邊紅葉

音まかふたきのあたりのもみちはゝそめぬ時雨も染やしつらむ

瀧の糸のおのれ時雨の音はして紅葉の影そ色を染ける

水邊紅葉

そめつくす紅葉の影も川霧のはれ間や水の秋のはつしほ

松間紅葉

わかさりし木々のこするはもみちして時雨そ松の色は見せける

槭紅葉

もみち葉はおほかる中によそめにも分て立枝のはしの一本

山風に峯の梢を吹分てにしきたち枝のはしのもみち葉

蔦紅葉

やま里の軒端に秋の色見えて人めにかゝる蔦のもみち葉

暮秋紅葉

いかにせむさきたつ秋をゝしむまに紅葉もそゝや木枯の風

山家秋深

はけしさもまさ木の末葉かつ散て嵐色つく秋の山里

暮秋雲

風きほふ雲のゆくへもゆく秋のあはれを見する夕くれの空

暮秋霜

おく霜にしられぬ秋の日數さへ殘りすくなき庭の淺茅生

九月盡曉

ゆく秋を聲のうちともさを鹿のしらて鳴らむしのゝめの空

冬哥

初冬曉

寐覺する涙の枕霜とちてあかつき寒し冬やきぬらむ

時雨

見るからに山かきくれてしくれゆく雲には殘る松の葉もなし

風早みよそのそらよりさそひ來て雲の晴間もふる時雨かな

さそひきて風の末野をゆく人の袖にしくるゝよそのむら雲

雲晴てよそにいなはのやますたほ音はしくるゝみねのまつ風

いにしへをふるき軒端のしのふ夜はもらぬ袂もうちしくれつゝ

曉時雨

雲もなし枕のしくれそれも又さめぬる夢か有あけの月

山端に松と月とはつれなくて時雨過ゆくありあけの空

はれそむる峯よりしらむ明かたもしくるゝ方は深き夜の空

朝時雨

さし出る朝日の山は空はれてうちの河邊をゆく時雨哉

夕時雨

こからしに紅葉も雲もしくれきて峯の入日の影ものこさす

閨時雨

ねやの戸のすきまの風に雲よりも燈さわくさよしくれかな

里時雨

さそひ來る雲よりさきに音たてゝ風にしくるゝ里のむら竹

冬の夜はふしみの夢もさためなし絕すしくるゝ菅原の里

遠鄕時雨

をちかたの里のなかめやしくるらむさはらぬ月のよそのむら雲

行路時雨

過ぬれと音はしくれのあまやとりやむをいつとてまつの下陰

暮やすき冬の日とてや旅人に道いそかする時雨なるらむ

山路時雨

袖ぬらす小坂の道の夕しくれかへてほすまの衣かせやま

山中時雨

雲まよふ嵐もはやき山里ははれまの空もうちしくれつゝ

高山時雨

紅葉かはふしの高根のむら時雨はれゆく跡は雪の白たへ

山家時雨

谷のいほ雨やとりする柴人もしは〱かはるむら時雨かな

はれやらぬ心はいとゝたもとさへしくれ　なる冬の山里

過ぬれと杉の雫を吹風に又もしくれのふるの山さと

旅時雨

むら時雨岩根この本さためなき山路の旅の雨やとり哉

たひ衣やかて袖ほす夕日影さすかに早くはるゝ時雨は

旅ころもたひ重なれはひち笠の袖もしとゝのむら時雨哉

船中時雨

山本のあけのそほふねこれも又今一しほとしくれ來にけり

時雨驚夢

水こゆる物とはなしに時雨して渡りもやらぬ夢の浮橋

木枯

ふくからにおのれ木葉にさそはれて散行方にさわく木枯

紅葉殘枝

きて見れは秋の形見の木本とわれもえたゝぬ唐錦かな

落葉

吹まよふよもの嵐の山本は松よりもちる峯のもみち葉

ふくほとは中空にのみさそはれて風の絶間そ木葉散くる

もみち葉はちるを限と見しかとも庭の眞砂の秋も有けり

時雨には散てのちもふる度にぬれて色そふ庭のもみち葉

曉落葉

をりしもあれ月もいまはの明かたにもみち葉さそふ峯の木枯

曉聞落葉

こからしに枝をわかるゝもみち葉もほの〱見ゆるよこ雲の空

さそひゆく音は枕にしのゝめの夢も殘さぬ風のもみち葉

夕落葉

夢かとよかへる山路にふみ分てしのふ梢のけさのもみち葉

ちるをたに見てまし物をあやにくにくるゝ小倉の山のもみち葉

落葉霜

くち殘る形見の秋の落葉たに又いつまての庭のあさ霜

遠近落葉

冬來れはさそふむかひの山の名に小倉の山もちる紅葉かな

落葉風

もみち葉もいまは眞砂のはつしほとちらしそめぬる庭の木枯

落葉隨風

くれてこそ秋は見えけれもみち葉も風のたよりの常磐木の陰

かせはやみ影のみ見えて立田川そらに流るゝ木々のもみち葉

風前落葉

ふくいろはさそひそめたるもみち葉にやかて千入の峯の木枯

吹ほとはたゝ一むらにさそはれてたゆむ嵐にちる紅葉かな
よそに見し峯の梢もこからしにけふそふもとの秋のもみち葉
さそひきてちらぬ外山の木本も紅葉吹しく峯のこからし
いたつらにあたら錦をたつた彦いかにあらふる峯のあらしそ

行路落葉

家つとに手折てかへる一えたもかひなき山の風のもみち葉

路落葉

跡もなき庭の落葉に冬きぬと中々しるきやとの通路

瀧落葉

たきつせに峯の嵐のはけしさもしら糸染て落るもみち葉

河落葉

いつしかと流れて色にいつみ川はゝその杜の下のもみちも
枝にこそちるとていとへもみち葉の河瀬の秋は嵐なりけり
紅葉ちる嵐を瀬々の時雨にてふくに染ますやま川の水
これも又あらしの後のうきせかな紅葉とゝめぬ山川の水
落てたにとまらぬ秋か風よりも流れ早瀬の河のもみち葉

朝霜

日影さす葛の枯葉にかつとけて露にそかへる野への朝霜

橋霜

柴人にしはしおくれて朝霜もやゝとけ渡るみねのかけはし

殘菊

いつくとも秋のゆくへはしら菊のゝこる形見も色かはりつゝ
草もかれ木葉もちりし庭の面に心なかさのしら菊の花
秋をおきていろこそまされ菊の花うつろひゆくを限ともなく

冬月

軒の松あらしはたゆむ梢よりひかりも寒きふゆのよの月

冬寒月

さよ深み影も軒端にかたふきてつらゝにすかる月の寒けさ

寒夜月

風さわく雲間の影を吹ませてあられちり來る月の寒けさ

湖冬月

月影のうつるみるめも浪とほくよる〳〵氷るにほの海つら

千鳥

妻こふるこゑも高師のはま松のまつよふけぬと千鳥鳴らし
よるなみに聲たてそへて夕しほのみつの濱邊に千鳥鳴也

曉千鳥

なく聲もあくる浦わの月影も浪間にきえて行千鳥哉

遠千鳥

なくこゑも浪にまきれてはる〳〵とゆく方しらぬ浦千鳥かな

關路千鳥

すまの浦やぬるせき守の夢路をはおのれゆるさぬさよ千鳥哉

浦千鳥

妹か嶋あかぬ別れになく千鳥月やかたみのうらのあけほの

泊千鳥

涙まくらことゝひすてゝしのゝめの別れはかなき友ちとり哉

名所千鳥

袖の浦やもろこし船もよらなくに湊にさわくむら千鳥哉

夜霰

音はして軒端のあられちる玉のひかりも見えすくらきよの空

故郷冬

軒くちて袖にたはしる夕嵐えやはあられのふるさとの空

冬野薄

もゝくさの色はかれのゝ花薄ほのかにのこるあきのおもかけ

寒草霜

野への霜うらみわすれぬ冬草に何なか〳〵の花の面影

寒草帯霜

なまめきし秋は昔の女郎花霜をいたゝく野へのさひしさ

霜おもき冬の枯野の朝風に出る日影をまねくをすゝき

岡寒草

白露の玉まくす葉もうら枯て夕霜さむき水くきの岡

杜寒草

頼みける千枝も枯ぬる冬の霜いかにしのたのもりの下草

池水鳥

池水にをしやわふらむ置霜をはらふ羽風も同し寒さに

河水鳥

あつ氷ひまもなつみのかは淀に来しめわひて鴨そ鳴なる

水鳥驚筏

杣川やくたす筏のみなれ棹みなれても猶さわくみつ鳥

網代

ひをならて道行人も宇治川やよりつゝそ見る瀬々のあしろ木

袖さゆる氷をうちのあしろ守あくれは出るひをやまつらむ

鷹狩

八千種の秋の花より御かり野はすり狩衣のそての色々

夕鷹狩

末くれて明日のとたちも殘る野に狩場なからのかりねをやせむ

埋火

長き夜はひまよりさきに埋火のまつしらみゆく閨の寒けさ

爐邊閑談

かきくつし心のくまも埋火も殘りなきまてかたる冬のよ

遠炭竈

みねこしのよそめは雪にうつもれてけふり短きをちの炭竈

里炭竈

大原や朝け夕けの外に又たえぬけふりやさとの炭かま

神樂

さ夜ふかみとるや榊の本末に霜おきまよふ袖の寒けさ

雪

ふるまゝに木毎の花もうつもれてけふは雲かとみねの白雪

朝雪

夜のほとはふる音もせてつもりたる庭におとろく雪の朝戸出

明ぬれと朝日もしはし埋れて影まつ峯の雪の寒けさ

朝またき見わたす山の白雪に跡つけそめてとふ烏かな

夕雪

庭の雪とひこし人のつれもなく跡さへつけてかへる夕くれ

積雪

とはまくもあとをしむまのやすらひに分かたきまてつもる白雪

ふりそめていまた日數もつもらぬにつもれはつもる雪の深さよ

曉山雪

さえ〳〵てあくるよし野の山かつら雪にそかゝるみねのしら雲

遠山雪

東路やくもゐに見ゆる一むらをなにそとゝへは富士の白雪

峯雪

ふりもせぬ外山の松につもれるや葉こしに見ゆる峯の白雪

山路雪

立よりて袖うちはらふ松かけも梢あやふき雪の山みち

かへり見る里のけふりもうらやましのほりもやらぬ雪の山路に

つもりてはなか〳〵人の跡見えて雪にまよはぬ冬のやま道

山家雪

道もなくつもる雪にはとはれむと思ふ心もたゆるやま里

野徑雪

ふりつもる枯野の道の萩かえを分行袖は雪の花すり

遠村雪

けふりさへあまきる空にうつもれて雪にくれゆくをち方の里

關路雪

ふりつもる雪の光にはかられて關路の鳥やよはになくらむ

あしからやそらは晴ゆく山風につもる雪ちる竹の下道

逢坂や關の岩かとうつもれて雪ふみならす冬の旅人

いはかともうつめる雪にあふ坂や中々やすき關の通ひ路

禁中雪

來む春もちかきまもりの櫻花おもかけ見せてつもる白雪

都雪

めつらしく都の野へもつもりてはみ山の松の雪そふりぬる

來ても見よ春の錦の色よりも木毎の雪の花の都を

白雪のあはれも深しふることの跡さへよゝにつもる都は

閑居雪

みよし野や花ともいはしとはれしのすみかは雪のふり埋む頃

社頭雪

雪そとはきえてのゝちやしらゆふにさなからまかふ杜の榊葉

白雪のふるきにかへれ神垣も道ある御世は跡をたつねて

古寺雪

山のおくにおこなふ道や絶さらむ鐘の音する雪のふる寺

飛鳥寺いくそのよゝかつもりてもあとは殘れる雪のふる里

海邊雪

ふりつみておもるしつえの白雪にしら浪つゝく住のえの松

春の日をまちやこふらむ降つもる雪にたわめるみつの濱松

浦雪

はまゆふもうつもれはてゝ白雪の百重につもるみくまのゝ浦

かつちりてつもりもやらぬ松の雪たかうち拂ふ袖のうら風

船中雪

嶋山はつもるも見えすかきくれて友船しろき雪のうなはら

名所雪

とひこかし木毎に雪のふる里は春にもまさる志賀の花園

羇中雪

思ひやれ京の山も雪ふらは戀しさつもる旅のこゝろを

行なやむ山路もしらてけふの雪ふるさと人やいかに見るらむ

いかならむみやこの夢ようつの山雪にうつゝの道もたえにき

故郷にかへるの山の道絶ていそく日數もつもる雪かな

松雪

ふれはかつはらふとすれと吹風もつもるによわる松のしら雪

ねくら出るからすもけさはしら鳥のとは山松の雪の明ほの

松上雪

いつはとはわかぬみとりも埋れて下に春をやまつの白雪

杉　雪

三輪の山うつむ梢も神さひてしるしまかはぬ杉のしら雪

雪中眺望

雪も夜の夢のうきはし跡たえて見わたししろし曙の山

めつらしくつもる岡への松の雪いつともわかす見るよしもかな

白たへはふしの高根を限にて雪にはて見るむさしのゝはら

ふりつもる朝けを見れはなみの上に雪をわたせる天の橋立

雪朝遠望

降つもる松の木間にうつもれて朝日も寒き雪の山のは

雪朝遠樹

ふりつもる同しよそめも松杉と猶しら雪のあさあけの山

山舘見雪

空晴てふく山風に今も又ふるや軒端の松のしら雪

雪中會友

圓居して庭のこすゑも言の葉も花をあらそふけふの白雪

雪中遠情

京たに木とにさけは花ならぬ雪もよし野の山そゆかしき

雪中待春

來む人のふもとの道は絶はてゝ春をこそまて雪の山里

まつ人のあとこそたえめ春のこむ道をはのこせ庭の白雪

春既卜隣

うつもれて春はとなりのうめかえもにほひちりくる雪の中垣

早　梅

まつ春を雪ちる風に吹ませてにほひほのめく梅のはつ花

年内梅

としのうちにゝほふ梅をは咲花のはてとやいはむ始とやいはむ

歳　暮

行年はとてもかくてもはてしあれは宮もわらやも同しけふかな

流れても水にしられぬ年なみは氷るころとてよとむせもなし

年のくれ流れよる瀬はよそならて老の淡つむみをの杣川

いそかるゝ花のためには惜むにもくるゝや年のなさけなるらむ

老のよもわすれてうれし年の暮花見る春のこむと思へは

ふりまさる老のかしらの雪のみそ年つもるみのしるし也ける

ふりゆくもをしからぬ身を人まねにとし暮ぬと何歎くらむ

いつとてもいたつらにてふ言の葉をよの人まねの年の暮哉

いたつらにくらせるとしはつもれとも猶数ならぬ身をいかにせむ

なさはやと思ひし事のかす／＼もたゝあらましに年そ暮ぬる

なけに思ふ一日二日のおこたりもつもれは年のくれにけるかな

驚きてをしむ心のはかなさよけふ俄なるとしのくれかは

くれゆくにけふおとろきて一夜あけは又や忘れむとしといふ名を

いそきしてまつもはかなや年の暮昔にかへる明日の春かは

とりあつめをしきは年の別かなきえなむ雪もつもるよはひも

惜歳暮

時のまもをしき日影のうつりきてけふは年さへ暮むとすらむ

くれゆくをとしといふ名もけふこそは惜きにつけて思ひしりぬれ

閑居歳暮

うせぬともちゝのこかねは又もえむ惜きは年の暮にそ有ける

市歳暮

花紅葉つひに年さへとゝまらて又我ひとりのこる山すみ

たれもみなけふは暮行年の數身にかひそへてかへる市人

鏡山歳暮

ちり〳〵に夕くれかへる市人のわかれそ今日は年のわかれち

歳暮鐘

これやこの明日のいはひのかゝみ山年のこなたにむかふしら雪

歳暮夢

けふのみかとしもくれぬときく音はましてかなしき入あひのかね

學者惜年

さめていま思へはくれし一とせもともに一夜の手枕のゆめ

歳暮述懐

あつめても光はそはてまとの雪かひなくつもゝとしのくれ哉

おい木にも雪の花さくとしの莽我はよはひのつもりのみして

身はよわる老の坂路をとし〳〵にこえゆく年は早くなるかな

鈴屋歌集三之卷

本居宣長詠

戀哥

初戀

思ひいる戀のさか野の露そともわかまたしらぬ袖のあやしさ
ともすれは落る涙もこひ衣なれぬたもとはつゝみかねつゝ
しるやいかにまたはつしほの戀衣いまより深くそむる心を
きのふ今日ぬるゝ二葉の思ひ草ならはぬ露のところせきまて
いかにせむ思ひそめても初紅葉よにはつかしのもりの梢を
一しほはおもひそめても忍ふ山谷のもみちの色はしられし
入そめてしけき歎きの下露のおくいかならむこひの山道
いかにせむはつ山あゐのすり衣うらはつかしき下のみたれを

忍戀

手折ても見せはやいかて忍ふ山心のおくに染し紅葉を
忍ふれと袖のうへにも人めにもかゝりやすきは涙なりけり
われなからうしや思ふにまけもせてけふまて忍ふ心つよさは
きえねたゝしのふの山のこかくれに袖のみぬらす下草のつゆ
たかためにいつまてとてか忍ふらむはかなやかくて戀死なむ身を
こひしなむ名こそ惜けれ身にかへて此世のほとは忍ひはつとも

忍涙戀

人とはゝこたへむかたやなみた川せくにつけてもぬるゝ袂は

忍久戀

くるしさもたれに恨みむ忍ふ山下はふ葛の長き月日は
涙川さも年涙のこゆるまてせくもくるしや袖のしからみ
いたつらにいつまてとてか忍ふらむ思ひそめては年もへにしを
我戀はみやまかくれの岩根松いはねはこそあれ年もへにけり

不言出戀

瀧川や氷にむせふいは涙のえもうち出ぬわがおもひかな

欲言出戀

山川の岩間の涙のうち出ていはゝや下にむせふこゝろを

洩初戀

すり衣しのふ思ひもあらはれてみたれそめぬる袖の上の露

祈戀

あはれとも思はゝ神もしるへせよいさめぬ道にまよふ此身を
神かきやいのるしるしもなき人にこゝろよるへのみつからそうき
いのりてもまつにはきかて初瀬山おなし檜原の夕暮のかね
戀しなむ後の世をたにはつせ河しつむなせめて祈るしるしに
思ひねかいのるしるしかはつせ山はつかに見えし夢の契は

祈難逢戀

はつせ川いのるめくみはかけもせてうき涙にのみぬるゝ袖かな

久祈戀

かけそめてくちはつるまて年もへぬあはぬなけきの杜のしめなは

片思

關守のうちぬるひまはあるよひも心かよはぬ中はかひなし
いかにせむ身さへなかるゝなみた川人は袖たにひちぬうきせを
はかなしや思はぬ人をおもひかは水にかすかく袖はかわかて

厭戀

何にかくいとはれぬへき身のほとも思ひはからて思ひそめけむ

增戀

淵とのみまさる思ひの飛鳥川うれしき瀬にはいつかゝはらむ

不逢戀

年へてもかくあふとのかた糸を何にくるしく思ひよりけむ

ひるまのみ絶すみるめもかりにたに逢事なみのよるそわひしき

來不留戀

夕しほのさすかに絶す立よれととまる夜はなき浦のあた浪

待戀

ふくるまて人にも人をまたせはやこぬよのうさを思ひしるへく

さりともとかたふく迄の月見ても夢まつかたははやすらはれつゝ

夕待戀

くれまちて人まつ程になる空はくもるそつらき雨もこそふれ

待夜深戀

末の松まつよの月も影ふけぬかたしく袖をこゆるなみたに

逢戀

又ぬれむ曉ちかし月影のそてのやとりはまれにかれても

俄逢戀

頼ましよ此くれまてのつれなさもかはる逢夜の明日の契は

毎晝逢戀

いつとてもみるめはしほのひるまにてかりにも浪のよるはたのめす

初夜逢戀

あふとははつかの月の出ぬ間をたのむはかりの中もはかなし

別戀

出かてのわかれのねやのやすらひにしらみしひまも日影さす迄

きえかへり夢かうつゝかしら露の袖にみたるゝきぬ／＼の空

鳥の音に袖のわかれをゆるしても心はゆかぬ逢坂のせき

ひく袖に殘る契も此くれとまつ風いそくしのゝめの庭

おきゆくもこれや限のそての露ひるまもたへぬ命なりせは

いかにせむかたみと見れは朝風に露さへ袖の別れ路の空

雨中歸戀

ふる雨にぬれぬを笠をとるかひもなみたわりなき別れ路の袖

後朝戀

くれなはといひし言葉にかゝらすは思ひきえなむ別れ路の露

別れてもさなからとまるうつり香にけさは又寐の床もおきうし

逢増戀

逢見ての後の思ひをおもふにはつらきそ人のなさけなりけむ

聞虫聲增戀

せめてなほまつてふ虫もよわる夜にわかなきまさるねをやかさまし

顯戀

うちとけて涙のよる／＼礒松のねし我中はあらはれにけり

戀衣つゝむとすれと顯れてうきなには江の玉かしははかな

名立戀

涙たにあまるたもとはこひ衣たつ名をいかてつゝまむ

あはてのみ思ひわひしにくらふれは立名のうさはものゝかすかは

無名立戀

いかにしてよにはなきなの立田川渡りもそめぬ中のうき瀬を

いとはしなよしやのかれぬ契とてたつ名に人のおもひよわらは

惜人名戀

逢見てはまづ人の名を思ふかなたつにとかなき我身ならねは

誓戀

千年まて此言の葉もかはらしとかけてそちかふかみ垣の松

疑戀

うれしきもうき身におはぬかれ言ときけはいらへもやすらはれけり

重ねてもよはのさ衣うらなくは猶たのまれぬ人のかね言

相互疑戀

契りてもかたみにしらぬ下ひもの下のこゝろはいつかとくへき

契戀

いつはりにならひても又契る哉まとも絶てなきよならねは

變戀

秋かけしなこりの袖の色も見よ木葉ふりしく庭の朝霜

俄變戀

思ひきや難波のうらもなき中の蘆の一よにかはるへしとは

契變跡

跡もなし見しやうつゝのかねとも秋風ふけは朝露の夢

恨戀

いつしかとすそ吹かへす秋風に染てくやしきこひ衣かな

秋風のふくにつけても思ふにはこれもまくすのうらみかねつゝ

うき人よ衣のすそに風ふかは我心をもさぞとたにしれ

夢にたに見えこぬ人はさよころもかへす〳〵そうらみられける

言の葉にかれのゝ眞葛ふく風のつてにや人を猶うらみまし

風すさむ冬野のまくす恨みてもかれぬる中はいふかひもなし

恨不言戀

いはすとも見ゆらむものを山吹の花色衣うらみありとは

逢不遇戀

見し夢よたれにとはましうつゝともさためもやらぬ中の契は

秋風も猶や賴まむ眞葛原有しにかへるちきりなりせは

たちかへりつらき月日をへたてゝも見し面影そ身をも離れぬ

又も見て闘はうつゝの年もへぬ有しや夢のあふ坂の山

しなぬよに今一たひは見てしかな昔の春の夢はかりたに

忘戀

今は又たか住の江の峯なれは我をわするゝくさはおひけむ

わすれ草おひける物を住の江のきしもやせむとまつもはかなし

わすられてうきも心のから衣なれすはかゝる歎きせましや

今はよしおもひ出るを契にて我たに人を忘れはてしよ

稀戀

月日へてくへきしるしもさゝかにのいとめつらしき夕くれの空

いつまてそ嵐に殘るもみち葉のまれになりゆく中の契よ

絶戀

見せましを絶ぬる中はいふかひもなみたかわかぬ袖のうへかな

うきなから忘れもやらぬ面影やたえにし中の形見なるらむ

いける世に早く絶なむ契ともしらていのちを思ひけるかな

なにしかもうき玉のをのなからへて絶にし中に物おもふらむ

玉の緒よたのみし中は絶けるを何にかゝりてもの思ふらむ

悔戀

今もなほ袖こそぬるれくやみてもかへらぬ水の淺きちきりに

後悔戀

わひつゝも渡らてやまは思ひ河後のうきせに袖はぬれじを

久戀

人こゝろあたなるものゝ年を經てなとつれなさのかはらさるらむ

いくたひかとしなみこゆる濱ひさし久しくなりぬ袖はかわかて

今はまたたれすみのえの峯の松ねぬよ久しくなりにける哉

末の松まつにあまたの月日へてあひ見ぬさきにこゆる年なみ
子の日して世をいはふにも我中の逢事まつをためしにはひけ

舊戀

よもしらし年をふる野の忘水わすれもやらて袖ぬらすとは

夜戀

あかしかね一よを千夜のひとりねにまたるゝ鳥の音さへつれなき
又もねぬやみのうつゝのおもかけに見し夢したふさよのたまくら

曉戀

今もきく鳥の音のみやもろ共になきて別れしなこりなるらむ

朝戀

まちし夜のなこりの同し朝露にたれきぬ〳〵の袖しほるらむ

春戀

かきくらす戀はくるしや青柳のいとのとかなる春日ともなく
身にそしむ春やむかしの夕風におもかけかすむ袖のうめかゝ
咲花の色にならはて春の日の長きを人の契ともかな
きえねたゝ花のたよりを頼みこし春もいまはの庭の白雪

夏戀

はしゐしてすゝむならひの夏のよは月ともいはて君をこそまて

戀月

なかむれは月に涙もうき人の心の秋はいふかひもなし
こひしなむ月も此世の思ひ出に一夜は見せよ涙くもらて

戀涙

年ふれはなみたの色もかはりけり人の契をうらみけるまに

戀心

見せはやなちしほの紅葉手折來て心のいろはしるやいかにと

戀夢

はかなしやこのよに頼む通路はおやのいさめの夢のうき橋
又や見む見しやうつゝのうつり香もなこりはなかき手枕の夢
きえねたゝ見しおもかけも移香も跡なき夢の手枕の露

戀命

同し世の月見る事も戀死なはこれや限のちきりならまし
かはらしと頼む契もいかならむたれも命は明日しらぬよに

懸命戀

をしますよいとはるゝ身をかへてたにめくりあはむと思ふ命は

疎戀

あはぬまのふみも通はすことつてもなつ野の道の絶々にして
逢事のまとほなれはやあま衣たひ重ねてもなるゝよのなき

隔我問他戀

逢坂やその名はよその契にてなとわかゝたの關となるらむ

云切戀

池水のあさき心をうらむとていひはなつにも袖はぬれけり

尋失戀

尋ねても人の心のまつならてをしへし杉はそこともなし

白地戀

逢見てもいかて恨みはるの夜のあくるもまたぬ手枕の夢

臨期違約戀

契りおきし我やと過て小車のうしやいつこに引たかふらむ

辭後會戀

わりなしや又あふとをいなは山まつともいはぬけさの別れ路

被妨戀

いくとせか雲ゐの鴈の聲をたにきかてなかむる秋の夕きり

公有障戀

よひ〳〵にわかまつ人よ月ならは雲のうへにはさはらしものを

被制主君戀

神よりも君のいさむる通路よいかきなりせはこえもせましを

思高人戀

いかにせむ磯邊の松の枝たかみおよはぬ涙の思ひかけても

等思兩人

二かたに思ひかるゝたまくしけ分かたきみを歎くよる〳〵

思出舊女戀

立かへりもゆるふる野の思ひ草かれし尾花の本のこゝろに

見家思出戀

今はまたたれをまつらむ松はかり見し世のまゝのやとの夕暮

老　戀

老の身にいつまてとてか頼むへき人はかはらぬ契なりとも

馬上戀

のる駒のつまつく橋もなく〳〵そまたれぬやとは尋ねわひぬる

旅宿戀

草枕露のちきりをむすひてもかりねの夢はいふかひもなし

名所百首に石瀨杜

おきあかすよはの思ひをかくそともいかていはせのもりの下露

緒絶橋

そのかみにかゝるをたえの橋まては思ひかけすそ渡りそめてし

安積沼

かつ見しもうしやあさかの沼水にねをたえてこぬ人の心は

寄月戀

こぬものと今はかとの月をのみくるゝ夜ことにまつもはかなし

物思へは涙のひまもなかき夜に秋の月見ぬ秋そかなしき

契りおきし月は其夜の影見えてめくりもあはぬ中川の水

月影よその有明のなみたよりかわかぬ袖にいくめくりしつ

ちきりおきし月やあらぬとかこちても面影とほき有明のそら

とひなれて涙わすれぬ面影も袖の別はありあけのそら

寄風戀

契りおきてこぬ人さそふしるへにもやらはや庭の梅の下風

夢かとよかけてしのふの軒の露荻の葉風もしらてねしよは

たえぬるをその夕風も思はしとおもへとよそのまつにふく聲

寄雲戀

物思へは空にうきたるはかなさも身にしら雲のなかめられつゝ

わすれすは雲のはたてをそれと見よわか物思ふ夕くれのそら

中々にたえもはてなきうき雲の空にうきたる物思ふかな

およひなき峯のしら雲いつまてか心たかまのやますこふらむ

まつ人のさはるもしらて月にのみたれ恨むらむ宵の雨雲

なかめつゝ今も身をしるゆふへかなよそのさはりの雨雲のそら

さはるへき時雨もよほすうき雲に心もさわくまつよひの空

寄霞戀

あらたまの春たちそむる朝霞ほのかに見てし人そ戀しき

梓弓春の霞の日にそへて深くなりゆくわかおもひ哉

寄霧戀

心さへあやめもしらすまとふかな立わかれゆく朝きりの空

寄煙戀

いかにせむ思ひけたるゝ身のうさにいとゝ立そふこひのけふりを
うき戀をすまのうらわの鹽けふりなひかぬ人に思ひこかれて

寄雨戀

つもりける恨みははるゝよひの雨ぬれてとひこし人のなさけに

寄露戀

むすひおく契やいかに又人もをらは落なむ萩のうへの露
うき中の契か袖の露はかりきえなて殘るあたの玉のを
しけしとはたかひかむとそ物思ふ我袖しらて宮城野の露

寄霜戀

露分し昔は夢かその人もかれし淺茅の庭のゆふしも

寄時雨戀

むら雲はあとなき空をなかめても物思ふ袖はなほそしくるゝ
閨寒みしくれふるよは紅葉にもあらぬ思ひのふかくなりつゝ
しくれかは涙としふるこの秋は木葉もあさき袖の色かな

寄暮春戀

こぬ人の花見かてらのたのみたに絕てかなしき春の暮かな

寄夏戀

そのころとかけても契れあふひ草春は霞のへたてはつとも

寄山戀

あくかるゝ一夜の闇のうつの山夢のたゝちもまよひはてにき
明ぬれはとまらぬ山の名そつらきこしはうれしきよはの契も

寄杣戀

うしつらし丹生の杣川このくれもさはると告る言かよふ瀨は

寄原戀

かわくまもなみたの露のをさゝ原一よ分見し袖のなこりに

寄關戀

はてもなくゆくへもしらぬ戀の道思ひとゝまる關もあらなむ
わか戀の道よ東のかたならはまつ逢坂の關はこえてむ
そのまゝにへたてはてける關の名を又逢坂となと賴みけむ

寄里戀

けふ過てとはぬ契を里の名のあすかとたにも何かたのまむ

寄市戀

我戀をあふにしかへはゆきみはやうき名はたつの市路なりとも

寄田戀

思ひやれ人の心の秋風に山田のほなみよるのねさめを

寄河戀

おもひきや深き契もつらき瀨に早く飛鳥のかはるへしとは

寄橋戀

うつゝには絕て久しき逢事もかけてまたるゝ夢のうき橋
戀渡る心はかりのちきりにて見しはひと夜のまゝのつきはし
さりともと勢多の長橋なからへて賴みそ渡るあふみてふ名を

寄江戀

いたつらに年をふる江のうき中はみをつくしてもかひやなからむ
みをつくしいつまて思ひしつむらむほのみしまえの淺き契に

寄磯戀

見ることもなみのよる／＼戀しきは思ひ入ぬるいそのしたくさ

寄渡戀

ゆきかへり淀の川舟よとゝもに同しうきせを戀わたるかな
心には人も思ひやいつみ川あはぬ月日のとほき渡りを
いかにせむ思ひたえむもしかすかのわたりそめたる中のうきせを

寄木戀

いかにせむ心のおくの花をたにうきみ山木は人もたつねす

くちねたゝ頼むよるへもなかれ木のなからへてなと物おもふらむ

逢事はいはほに松のおもせて戀はなけきの種とこそなれ

寄柳戀

青柳のいとかりそめに見し人をくるしきまてや思ひみたれむ

寄松戀

すみのえの岸ならなくにわか中よこぬ人まつもいくよへぬらむ

寄檜戀

いのりてもつらさかはらぬはつせ山ひはらの色はいふかひもなし

寄杉戀

とひもせて門のしるしのすきゆくを立て見ゐて見みわの山本

寄錦木戀

ちつかまてつもれと人はあひも見すこれやかひなきよるの錦木

寄埋木戀

いとはしな逢瀬によらは名取川よし埋木のあらはれぬとも

寄竹戀

河竹の一よ逢見しなこりよりおきふしさらぬ人の面影

なよ竹のうき一ふしのうらみより長きよかけし中も絶にき

寄篠戀

わすれすよ一よのふしはさゝ枕かりねの夢と思ひなしても

寄花戀

此春は花をもしらて過すかなうつろふ中のなかめのみして

うき中をよそへて見れはちる花に涙もゝろき庭のはる風

はかなしやけふまては猶雪とたに残るたのみの花のたよりも

頼みつる花さへあたに散ぬるかまれなる人をまつとせしまに

寄草戀

さよ深くたゝすむ軒に袖ぬれて人め忍ふの露そわりなき

そての露つゝむ思ひはいやましにますほの薄ほにやいてなむ

かれぬるか草葉にあらぬ我中もうき秋風のふくとせしまに

寄若菜戀

戀すれは野へのわかなもよそに見てあはぬ歎きをつむ春日哉

寄款冬戀

いはぬ色をたくひと見れと山吹はこほるゝ露を忍ひやはする

山吹の花の色には出ぬともいはしや人にものおもふとは

をりてたに見せはや人にやまふきの露もかくとはいはぬ思ひを

寄葵戀

その名のみ猶も心にかゝるかなこそのあふひのかれし契も

寄瞿麥戀

きぬ〳〵におきて別れし床夏の名もむつましき花の朝露

寄菊戀

うつろへは袖こそぬるれきくの露千年をかけし中の契も

寄寒草戀

くすかつら風のたよりもたえねたゝくる夜はなくてかなし冬野に

寄忘草戀

かれはてゝ人は忘るゝ草の名を思ひたかへてなとしのふらむ

寄萱戀

あはれともいはぬ心のあさは野にみたるゝかやのつかねをもなし

寄薦戀

いつまてか澤へのまこもかりにたにあはぬこひちに袖ぬらすらむ

寄藻戀

おきつものおきてもねてもくるしきになとみかくれて物おもふらむ

いとゝしくみたれてまさる思ひ川なひく河藻のかはるちきりに

寄紅葉戀

紅葉とて龍田の梢見る人に我袖見せむ秋ふかきころ

寄鳥戀

うしつらしまたきに鳴てあふよはの人のこゝろをくたかけの聲

寄山鳥戀

別れては又やへたてむ山鳥のをろのはつをの長き月日を

寄郭公戀

しのゝめの鳴一聲にかこたれてうききゝぬ／＼のほとゝきす哉

寄水鶏戀

こぬ中はねやのとたゝく水鶏にも驚かぬまて月日經にけり

寄鴛戀

庭の池のつかひを見ても朝戸出に別れをゝしのうらやまれつゝ

寄虫戀

きぬ／＼に又この暮をまつ虫も鳴音ともなふしのゝめの庭

寄螢戀

音にたてぬ思ひもかくとつゝみても見せはや人にもゆる螢を

秋風の吹來る方にとふほたるうき身にしむと人につけこせ

しのふれは星の影たにいとふ夜をさもあやにくにとふ螢かな

寄蟬戀

鳴蟬も明日は我身の外ならし秋風ちかき中のちきりは

寄魚戀

浮草のしけれる池の底深くみかくれてすむこひもする哉

を車のわたちの水の魚ならてかるゝをなけく我契かな

寄夢戀

逢坂をいそく夢路に我なからねられぬ戀やよはの關守

かへしてもうつゝなからのうき夢を何思ひねのよはのこゝろも

寄枕戀

やよいかにかたしく床のすかまくら君かこぬよはなれもさひしや

すかまくらなれもしらすや夢にたに見えしはいかにねしよなりけむ

あはれとも枕はかりはしりぬらむうくはかりなるよはのねさめを

寄衣戀

かり衣萩の花野のゆきすりはみたれそめてもいふかひそなき

うき中はくるゝ夜ことにかへしても夢もまとほの麻のさころも

戀衣うらみはてゝもうちかへしぬる夜の夢はなほそまたるゝ

うつり香もあはぬ日數をかさねきてうす花染のさよ衣かな

寄筵戀

まつほとの月日かされてあやむしろをになりぬれと人はとひこす

寄櫛戀

とるもうしつらき別れの朝寐髪思ひみたるゝ玉のをくしは

寄玉戀

いつまてか衣のうらのたま／＼も見るとはなしにかけてこふらむ

寄琴戀

よそなから心ひかるゝことのねにあはぬ歎きをすまの浦ふれ

かきたえてわすれなはてそあふことはなかの細緒の契なりとも

寄笛戀

あはれともきかは一よはふえ竹のねになくやとをきてもとはなむ

寄書戀

たのますよあたなる露の玉つさにかくる言葉のなさけはかりは

寄源氏物語戀

思ひやれかへりし涙に袖ぬれてひとりあかしのよはの寐覺を

およひなき梢の色を思ふかなおなし落葉を見るにつけても

寄繪戀

見し人はよそに心をうつしゑのおもかけはかり何とまるらむ

寄筆戀

見そめては筆のひるまもなか／＼にくらしかれつゝ通ふたまつさ

寄弓戀

梓弓いかにいひてもうらみても心つよさはせむかたそなき

しのふれといまはうき名やたつか弓心よわくもおつる涙に

逢見れはうらみはよわるあつさ弓うれしきかたに心ひかれて

まとゝもたゝにはいかてしらま弓引ても見はや人のこゝろを

あつさ弓末の契はわするなよ又こゝろひくかたはありとも

寄船戀

あはれてふ人もなきさにたゝよひてなとすて船のくち殘るらむ

寄綱戀

思ひあまり過るたもとをひくあみのしけき人めもえこそ忍はね

寄商人戀

うしつらし我をは早くあき人のたれに契をかへむとすらむ

寄遊女戀

ひとりねのうきにもたれをうら船のさしてはまたぬ涙のよる／＼

なほさりに引手はかりはおほぬさのつひのよるせよ誰をたのまむ

雜哥

出雲大社に人々のよみて奉る卅一首のうち初春といふ題にて
よみて奉りける

立かへり春はきつきの宮はしらあふく軒端もかすみそめつゝ

梅の花の盛にはせかはの常雄かもとより蓬生のあれたるやと
も心あらはとへかし梅の花のさかりにとよみておこせけるか
へし

咲梅のをり過さすは中々に花のたよりといひやなされむ

いろもかもしらぬわか身そかこたるゝ心あらはとゝふにつけても

庭に櫻の木をうゑていかてとく花さかなむと思ふ年うるふ正
月の有ていとゝまちとほにおほえけれはよめる

くはゝるもなか／＼つらし櫻花またさかぬまの春の日數は

物名　たむさくはこ

山たかみ雲かと見えてをちかたにさくは心にかゝるさくらか

春のころ鹿嶋元長に鉗狂人の書をかしたるをかへすとてから
哥つくりてそへたるとちめの句に應鶯元有日東春といへるに
つけてかへし

もろこしのよし野の山はとひも見し櫻を花の日の本の春

鹽崎某か家の高き屋にのほりて軒ちかくたてる櫻の花のさか
りなるを見出してよめる

たかき屋は高き梢も手折來て見るよりちかく見そ櫻かな

しをりをつくりてよみてかける哥とも

櫻花あすも分見むよしの山けふのしをりの末を尋ねて

分見はやしをりも花のよし野山なほおく深くにほふ梢を

よし野山けふ又わけむ昨日見し花のしをりのおくの白雲

三月十日ころ京にのほりけるに花も散過ぬれはいたくまちけ

るよし人のいふに

おそしとて人にまたるゝ身なりせは花の時にはおくれましやは

山寺に花見にものしけるにはやく皆散ぬる程なりけれは

はやくこてちりぬる花の心にはこゝろおそしと我を見つらむ

なこりあれや青葉をわたる山風にけふも猶ちる花のおも影

三月廿日からすの花見に物しけるに大かたちりすきたりける今もちるを見て

名にしおはゝ神のいかきのさくら花ちるへからすとなとかいさめぬ

來ても見てはやく散ぬる花ゆゑの雨のうらみはいつかはるへき

かくいふは日ころ雨ふりてえ見にこさりけれはなむ西山政樹か許に山田に四月のころよみてやりける

つてにても山田の原の郭公きかはやきゝし君かことのは

鈴木某か家の庭のやり水を見てよめる六月のころ

流れ來て岩そゝく瀬をすゝしけに魚もひれふるいさらゐの水

扇に書ける哥とも

わするなよ時にあふきもなれぬれは秋風ちかきねやの契を

すてられむゆかりとしらて秋風を閨の扇よなとやとすらむ

夏ころもうすきは人の心そと秋にあふきやおもひしるらむ

七里政要ふみ月のはしめにかしらおろしぬときゝてよみておくりける

白雪のふるまてと見し黒かみを桐の一葉になとたくへけむ

八月十五夜にはかならす哥の會して皆よむを一年さる事せてさう〳〵しきに月はとにおもしろかりけれは

望月のかけぬ圓居のかけぬるそこよひの影に思ふくまなる

八月十五夜くもりて月見えさりけれは

晴かたきこよひは雲のひまをのみ月のいるまてまちやあかさむ

八月十五夜雨ふりけるをやみぬれと猶月見えさりけれは

をやみてもなこり晴せぬ雨雲に風をさへもつ望月のそら

八月十五夜月はえけるとし

人ともに月見る物をうき影のいかてこよひにめくりあひけむ

八月十五夜はくもりやすきものなるに月いとさやかなりけるとし

年ことに名のみはあれとたくひなきこよひの月は今夜こそ見れ

八月の廿日ころ月を見て五十になりにしとし

あはれとは見すや五十の秋の月やとかす袖の露のふかさを

九月十三夜の月の春のとおほろなりけれは

あくまても見てあかさはやしく物もなき春の夜の長月のかけ

八月十五夜はくもりたりけるに九月十三夜の月のいとさやかなりけるとし

さやかなる影はこよひのためとてやなかはの月のをしみおきけむ

九月十三夜よひのほとはくもりて雨ふりぬへかりけるにふけてなこりなく晴て月いとおもしろかりけれは

思ひきやうかりし宵の雲晴ててる月影のかゝるへしとは

八月十五夜も九月十三夜もともに月さやかなりし年

玉くしけ二夜なからにあくるまてちりもくもらぬは月なか月

九月十三夜横瀧といふ山寺へ見にものして

のほり來て見る山寺も月の名も高きこよひの影のさやけさ

その夜はその寺にとまりて鹿の聲をきかむとまつにふくるまてさらになかさりけれは

谷の水松のあらしにいまひとつきかてさひしきさを鹿の聲

鳴鹿をまつは軒端に聲たてゝさそひかほなるよはの秋風
夜いたくふけてしはしかりねするにめもあはさりけれは
ねられすよ言の葉にのみ聞なれてなれぬ枕の峯のまつ風
物名　小忌　日蔭　心葉
田を見すやはやかりはこひかけほしていそけ里の子ころは過にき
戒言法師の庵の庭にたゝ一木紅葉の色こく染たるを見てあるしの法師におくれる天台宗なれは
一木てる紅葉を見ても二つなき法に心やふかくそむらむ
十月のころ物へゆく道に田面に生たるひつちを見て霜月にうるふ月のある年なりけれは
穂に出よ月もくはゝる今年たに山田のひつち秋はてぬとも
物名　まつはしのうへのきぬ
時雨する川邊の紅葉出てまづ橋のうへの木ぬれつゝそ見る
紀の國に物したりし時十月のころかの國造の許にとふらひけるに外へものせられし程にてあはさりける其里を秋月となむいへは
をりならてとふらひきつるかひもなく影をたに見ぬ秋月の里
のもし十ある哥
秋の野のしのゝをさゝの青葉のみ霜のゝちにものこる冬かれ
きの國の若山にて小浦朝通家にて會しけるに名所千鳥といふ題をとりてよめる
影見てもくもりなき世を八千代とや木の川千鳥月になくらむ
冬のころ人々の野冬月雪中眺望逢戀といふ事を題にて哥よみて合せたるおとりまさりをことわりけるついてに此三の題をひとつによめる
わすれめや野への月雪妹とわかこよひふしみの里のなかめを
冬夜郭公といふことをよめと人のいひけれは
卯花と見つゝねしよの夢なれや雪のまかきのやま郭公
寛政四年十二月廿日のほとに古事記の中卷の傳かきをへぬることをよろこひてよめる
しら雪のふる事ふみのしるへして年つもりぬる跡は見えけり
わかき人々へむせう寺につとひて半夜百首とてよむと聞てその夜よみてかの所にやりける
わかゝらはわかの浦路の百重浪立おくれゐて音にきかめや
三千年になるてふもゝの數々の三時のほとになるはめつらし
服部中庸か家の庭にいと大きなるかへての木のあるをみて
うらやましかゝるかへての陰しめて若葉のやよひもみち葉の秋
いなかけの大平か世のいとなみしけくて哥の會なとにましらふ事もさはりかちなることゝ歎きてひろはすて袖にそ玉はみたれけるあまのまてかたいとまなき身はとよみて見せけるかへし
身をなけく袖の涙のやかて又それも言葉の玉はなしけり
京より山田孟明か久しく音せてふみおこせける中にきむのことひきならふよしいへるかへりことに
思ひやれつてにのみきく琴のをの絕て逢見ぬ心ほそさを
きの國の三浦なにかし道に心さし深きよしの哥よみておこせたるかへし
とほくともいせの濱荻をり〳〵は猶音つれよわかのうら風
一年京にのほりける時伴菜のいほりをとふらひけるにあるしのをはなる尼の七十あまりにてあるはもと此松坂の人にてお

のれもゆかりある事をはしめてたいめしてきゝ明らめければ
立よりて木のこゝろはけふそしる老木の松のむかしかたりに
あきの國人末田芳麻呂かもとよりかの國のいつく嶋の圖のいとくはしく書たるをおくりけるを見てかへりことに
めのまへに見るこゝちしていつき嶋いつきぬらむとたとる寫しゑ
ある人の家に契沖ほうしの落葉浮水といふ題にていつくより海人の流せる釣舟そはつせの川にうかふ木葉はといふ哥をみつから書たるたむさくをつたへもたるを見て
くちせすて此言の葉もいつくより流れきぬらむ水くきの跡
みちのくのいにしへのしのふすりの石を見出たりといふ人のもとによみておくりける
君か代のひかりはよもにみちのくのしのふの石もあらはれにけり
てをのはしめといふ事の哥を人のこひけるに
眞木柱つくるたくみか今日そまつ手斧の音をたてはしめつる

寄衣雜

のかれても同しうきよをいつこにか山分衣思ひたゝまし

寄枕雜

したひてもたれにとはまし曉の枕もしらぬ夢のゆくへを

燈

ふみよむとさよふくるまてかゝけてもさとる心のともし火の影

琴

ねさめしてあはれなる音にきく人も涙かきやるよはの玉こと

鏡

よゝをへて國のひかりはます鏡かけてもさつけし神の御末と

海船

いる船のあしのさはりもなにはかた浪のうへまて道ひろき世は

古寺鐘

をはつせや山は暮ぬる夕霧にかくれてひゝく入あひのかね

夢

過來つるむかしの夢はかひもなし行末見せよ夜はの手枕

夢談古人

とひかはす詞の末もなき人を見しやはしの手まくらの夢
いにしへ人の名ともを題にてよめる中に小野小町
今もなほなかめせしまのおもかけは露けき花に見るこゝちして

紫式部

言の葉に染すはいかてむらさきの深き心のいろは見るへき
ことのはゝたくひなき名の立田姫いかに染ける錦なるらむ

樵夫

よをわたる道とて谷のまろ木橋夕やみかけてかへる柴人

曉鷄

告そめて猶天の戸のあくるまを長鳴鳥の聲やいくこゑ

薄暮雲

大かたは暮てそなたの一むらに入日の色をのこすうき雲

峯松

契りてもいつまてとてかみねの松たれも千年の友ならぬ世は

磯松

とかへりの花かと見えて白浪の松のしつえをこゆるきの磯

松爲友

いつとなき友はねさめの枕にもひる見る庭の松風の音

澗戸鳥歸

むら鳥のあくれは出し谷の戸をさしてそかへる夕くれのそら

遠村煙

里とほみたとる末野の夕くれにしるへうれしく立けふりかな

關路夕

なのらすはいとゝとかめむ朝倉や關ゆく人はたそかれの空

いそくともゆくさきくれむ清見かた入口とゝめよ涙の關守

海邊曉雲

涙の上に色も分れてうき嶋の松見えそむるよこ雲の空

瀧

いたつらに瀧の白糸よりかけてみたるゝ玉をぬきもとゝめす

名所浦

紫の藤江の浦も春ならてたゝしら涙の花そかゝれる

名所關

もる人も絕てなきよにふはの關とゝまる物は名のみなりけり

名所百首に嵯峨野

問わひぬしはしとむすふいほりたにうきよのさかのゝへの嵐は

閑居水

しつかにと世をのかれすむ谷陰にさも心なき水の音哉

山居月

月も出ぬ心よわさのさそはれてすみはつましき峯の庵哉

山家

いとひてもものゝさひしき夕暮はうき世戀しき山のおくかな

ある時はありのすさひの世のうさも又しのはるゝ山のおくかな

山家月

山ふかみ月もうきよの月よりはすみまさりける峯の庵かな

山家風

花にのみうらみけるかな山里にすめはいつともわかぬ嵐を

山家嵐

たへかたき峯の嵐もなれぬれはなれて月日のすきの庵哉

山家烟

かくれてもみねのいほりは中々に夕のけふりめにやたつらむ

山家水

世中のうき事きかぬすまひかなたゝ山水の音はかりして

山陰はすまぬ心もすむはかりさもいさきよき水の音哉

谷の庵は落來る瀧を軒端にてはこふ水さへやすくてそすむ

あけくれにくむとはすれと谷水になほすみはてぬわか心かな

とはゝやなすみつきかたき山のおくにいかにしてかと水の心を

山家松

軒の松むかしの友といふはかりわか山すみの年も經にけり

ふりゆくをときはの陰にはちもせてつれなくすめる松の下庵

山家橋

明暮にひとり見渡す一つはし我も友なき谷かけの庵

いほ見えてわたす朽木の一つ橋かゝる谷にも人は住けり

山家人稀

とはるゝもまれの人めはなか〳〵になこりさひしきやま陰の庵

別

旅衣きたつものは涙にてこゝろもゆかぬわかれちの空

遠國別

岡山正與二月のころ江戸へいくに

とまる身も心つくしのいきの松まつほとへなむ人のわかれは

すくすなよ霞のよその花のかもにほへはにほふ風のたよりを
尾張の名兒屋にうゐまつの有信か家に日ころやとれりけるをかへるをりにあるしによみておくりける時はやよひの廿日あまりになむ有ける
花ならて人のなさけの色深み春より惜き春の別路
ある人の三月の晦の日京にかへりける馬のはなむけに
とゝめえぬ春と君とをふた道にしたふ心も別れてそ行
四月の朔ころ中里常秋か江戸にいくに
花染の袖のなこりにたひ衣たら重ねたる別れをそ思ふ
うつきの十日京をたちてかへらむとするころ永觀堂の見かへり本尊といふをゝかまするにみな人まうてけれはわれもまうてゝかの佛を見て
かへり見る佛もあはれ明日は又我もみやこをかくやと思へは
ひこの國人長瀬眞幸か此里にしはし物しけるみな月のついちに江戸に物するによみておくりける
郭公またこむ年のはつ聲をわかまつ坂の里なわすれそ
むすひあけてつゝみておくれすみた川涼しき水の月を見む夜は
くりたのひちまろか遠江國にかへりなむとするほともろ共によふくるまて月を見て
いる月は明日も暮なは出なめと君と見むよをいつとかまたむ
三浦菜か又春はかならすこむといひてしはすの朔ころきの國にかへるに
又こえてきの關守はとゝむとも名にたつ弓の春なすくしそ
陸奥の會津の人小野田直生かとふらひきたるかへるに
遠くとも心あひつの山ならはふみたにかよへ東路のそら

小國秀穂石塚龍まろ山下正彦なと物ならひにきゐたりける遠江國にかへるに
別れては又あふみてふ國の名も遠しときけはいつとたのまむ
上野介藤原重名か豐前國にかへるに
みるめこそたゆとも風のたよりには言の葉よせよわかの浦浪
帆足惟香杉原つねが肥後國にかへるに
なけくなよ神路の山は深くともふみし通はゝわれしるへせむ
立かへり又來むほともしらぬひの國の名つらしけふの別路
山地介壽か伏見より土佐國にうつるよしいひおこせたるによみておくりける
よそにきくおほつかなさはめのまへのわかれにまさる君か別路
孝壽法師いつみの國にかへるに
かへるとも又來む道のしるへにも心はかりはとゝめおかなむ
をはりの名兒屋にしはしとゝまりてかへる時やとりのあるしによみておくりける
たつとてはかりのやとりも旅衣なれし日ころの別れをそ思ふ
同しをりなこやを出て木田村の大舘高門か家に一よやとりて立出る時に雨もふらなむけふはしひてもとゝめましをとあるしのいひけれは
ふりなはとゝむる君かなさけにそ雨よりまして袖はぬれける
旅
いる方のみやこの山のおもかけも月に戀しきあつま路のそら
おきふしは露よりしけく故郷のこゝろにかゝるくさまくら哉
旅行
旅寐して涙はれせぬこよひもや京の月はさやのなか三

春旅
八重霞いつこの空をふるさとゝなかめもやらむ春の夕暮
夏旅
五月雨に思ふはかりも行やらていとゝ日数もふる旅路かな
秋旅
たひ衣みやこの秋のさひしさは数にもあらぬ袖のゆふ露
冬旅
いとゝしく寒き霜夜はふる里の夢もかれ野の草枕かな
くさまくらむすはむかたもしら雪の降積りたる野路の夕暮
旅宿
あはれなるうつの山への旅寐哉枕にかゝるつたの下露
暁をまつかれすこきたひ枕いそへの浪のうちもねぬ夜は
野外旅宿
草枕あらしのひまも野への露たのみはかなきふるさとの夢
旅宿夢
見もはてぬみやこの夢よ中々になに面影のさやの中やま
うつゝにはいつかといとゝ草枕なこりかなしきふる里の夢
いつしかとふる里人やまつかれの枕の夢もことかたは見す
旅宿雞
旅まくら夢のなこりの鳥のねもみやこにゝたるあかつきの空
旅暁
やとりして我も一夜の松か根をわかるゝ峯のよこ雲の空
旅橋
かへり来ていつか渡らむ東路や行末長きせたの長はし
月前旅
あけてこそやとりはとらめよもすから月見つゝゆく秋の旅人
影清み月見かてらにたひ人のよるもいく野の道はたとらす
たひ衣露のひるまは別れてもともなふよはのそての月影
夜ころへて月はやつれぬ影見れは袖はつかしきたひ衣かな
はる〳〵と思へはいとゝたひ衣月に涙のふるさとのそら
故郷を思へはいく重こえ過て見る夜の月もをはすての山
羇旅
引むすふ草葉も露のおきふしに馴ていくよの袖ぬらすらむ
羇中雨
いつかたとなかめもやらむ雲とちて雨さへけふはふるさとの空
日もくれし山路の雨にたひ衣ほすへき宿もなく〳〵そ行
羇中風
ふしわひぬ旅寐の枕吹風にかりしく篠のさやの中山
ふるさとのたよりもしらていたつらに風の音のみきくのはま松
羇中夜
なかむれはうらやましくも入月のみやこはるけき東路の空
羇中山
又こえていつか都にかへる山ゆく末とほきこしの旅路は
羇中嶺
故郷のはるけさいかに今朝こえし峯たに雲のをち方の空
羇中野
草枕おき別れてはゆきくれてむすふもおなし武蔵野の露
羇中關
旅衣日も重なれは白川のはるかに聞し關もこえけり
羇中浦

たひわして心もはれす京のみ思ひあかしのうらの朝霧

羇中眺望

富士のねは雲の絶間に見えそめていくかになりぬ東路の空

羇中衣

みやこにはいつかゝへらむいたつらに衣のすそは浦風そふく

旅　泊

關守のしらぬうきねの夢路たにしはしはゆるせすまの浦風

湊頭旅泊

ふるさとにいかてつたへむみつくきの岡の湊のなみのうきねを

旅泊夢

まれに見し京の夢もなか〳〵になこりうきねの明方のそら

うしつらしたのむ夢路も浪風に都へたつる浦のうきねは

旅泊雪

おもしろき雪のみるめをかりそめの磯のうきねも日數つもりぬ

名所泊

しきしまのやまとにもあらぬこゝちしていとゝうきねの韓泊かな

二月廿日ころ京より難波にくたるとて伏見をさして出ける時九條なる茶屋にやすみけるにその家のまへにいと大きなる柳の木のたてりけるを見て

こきませし櫻のにしきおもほえてむかし戀しき青柳の陰

四月のころ京をたちて尾張國にくたるとて近江路を物しける時老曽杜にてよめる

よはならはおいそのもりの時鳥今もなかまし忍ひ音のころ

同したひ加藤礒足か家にをはりの國のおこしの驛にやとりける夜ところの人々つとひて哥よみけるに河邊夏月といふ題をとりてきそ川のほとりなれは

旅衣きその川へにやとりしてすゝしき瀬々の月を見る哉

同し月の廿日あまり名古屋より國にかへる道に加賀國の白山のいとしろくてはるかに見えけれは

けふこそは音にきく名もことわりと見てしら山の夏のしら雪

十月のころきの國に物すとて川俣邊といふ山中を經て三日といふに吉野の川邊に出てやすみたる所にて

見るめなき山ふところを出過てけしきよし野の川つらの里

大和の阿陀をすくとて

秋萩もあたの大野の名に立ていまはかれはに嵐ふく也

眞土山をこゆとて

旅なれはたれかは我をまつち山夕こえ行て宿をとふとも

きの川を船よりくたりて紀三井寺にまうてゝまへなる入江のけしきを見わたしてよめる

吹風のなくさのはまに船よせて浪もしつかにみるめをそかる

同しところより若のうらを見やりて

水清き入江にしつく影見えててる日にみかく玉つしま山

同し時しはし若山にとゝまれるほと須佐社にまうつとて名高浦を過て藤白の山本にて

紫の名高のうらをゆきすきて山路にかゝる藤しろの里

かふら坂といふ高き山路より海にさし出たる礒のひゝき山ともを見おろせは松よりうへに浪のたつやうに見えけれは

みちのくに名にたつ末のそれならて梢浪こすいその松山

一年内裏あらたに造り出られてうつろはせ給ふ御よそひ見奉りに霜月のころのほりける時國を出立ける日ひねもすに空の

くもりてはれぬ空を友なひける人々のいふせかりてしは〳〵
　いひあへりけれは
くもるとてかこつもあやなふりはへてみゆき見にゆく冬の旅路を

　神　　祇

わたの原嶋の八十嶋よもの國ひかりあまねく天てらす神
あふき見てから國人も天照す神の御かけはしるらむものを
　梅宮に梅の木をうゝる事を神主橋經亮すゝめけるにうゝとて
　よみてそへて奉れる
よそめにもその神垣と見ゆはかりうゑはや梅を千本八千本
春との手向とうゝる梅の花咲む色香を神のまに〳〵
　はりまの國なる林田宮の哥神主のすゝめけるに
はふりこかいはふ白木綿ちよかけて榮ゆく木々の林田の宮
　大神宮の林崎文庫にて遷宮祝賀會に社頭杉といふ題をとりて
いすゝ川あらたにうつる神垣や年ふる杉の影はかはらす
ものいはゝ神路の山の神杉に過し神世の事そとはまし

　述　　懐

いたつらに年そ六十になりにけるなすへきわさはいまたならすて
思ひ出る三十の春も三十年のかすみへたゝる花のおも影
さすか父うれしきふしもましる世にうき事はかりかそへられつゝ

　春述懐

春の日も早くくれぬと歎く哉ふみ見る道のいそかるゝ身は

　寄花述懐

なからへて我身にはよしさかすともなほいく春も花をこそみめ

　述懐涙

なけくにもあまる涙のふることに書見るほとも袖はぬれけり

　寄海述懐

有ふれはみちくるしほのいやましにからきこのよをうみ渡る哉

　懐　　舊

年を經てわかみつくきも若き世の形見とみれは袖ぬらしけり

　寄夢無常

はかなしと見るもはかなやよはの夢うつゝの夢も長からぬ世に
　村田光庸としのくれにみまかりてのむ月の廿日ころかの家
　をとふらひて
やとゝへと行けむかたもしら雪のきえにし跡はいふかひもなし
　殿村道應冬みまかりける又のとしの正月に寄雪無常
さきたちし跡しのふまに春の來てはかなき雪も袖ぬらしけり
　む月のころ稻掛大平かめの思ひにこもりゐけるによみておく
　りけるいときなき子も有ければ
二葉草のこるこのよのかなしさはきえにし露も思ひおきけむ
　須賀直見かいときなき子をなくなしたるに
風わたる柳を見てもみとりこの露と消にし春やかなしき
　羽根栞か許にその父の二月のころ旅にてうせぬるよし聞てよ
　みてつかはしける。
鴈のゆく雲路を見ても故郷に人はかへらぬ春やかなしき
　ある人の八十あまりにてやよひのころみまかりけるに
やそとせは花にぬるまの蝶の夢なかしと見しも春のやま風
　中里常國か父の思ひにこもりゐけるに三月の末つかたよみて
　つかはしけるかの父のはやく櫻を庭にうゑてふかくめてたり
　し事を思ひて
うゑおきしこの本いかにおほかたも花のなこりはたゝならぬころ

柴田常昭か夏のころみまかりけるに寄夢無常

さめぬるかかけし賴みのいふかひもなきたまのをのみしか夜の夢

此人はかくもむに心をいれてさとりも深かりけれはゆくさきたのもしくおほえけるに四十はかりにてうせぬれはなむかくはよめりける

そのとしのふみ月に物へゆきけるかへるさにあのゝつにやとりける夜芝原春房かとふらひきて物語なとしけるに常昭も世にあらましかはかならすこよひは來ましものをとかなしく思ひ出てねけるつとめて

なきたまも通ふ夢路はある物をなとてこよひも見えこさりけむ

子をなくなして盆する人のもとへ七月十五日のよ

中々になきたままつるともし火や心のやみのかきくらすらむ

竹内元之か妻のみまかりけるによみてやりける

はつ鴈のたよりまちても言傳はなき人こふるねにやなくらむ

ある人の九月廿日ころうせぬるに

今年とはしらてことしもめてぬらむなかき別れの長月のかけ

須賀直見身まかりけるとし霜月八日とふらひの會しけるに題をわかちて寄獣懐舊

かきおきし跡はふすゐのとことはに心みたるゝかたみなりけり

戒言ほうし秋みまかりける十月の廿九日の夜かの庵に友たちつとひてとふらひの哥よみけるに雪を

とひ來てもまちつる人はなきあとゝ見れはかなしき庭の白雪

小津正啓みまかりけるとふらひの會に雪中懐舊

つもりける跡を形見の言の葉になき人しのふにはのしらゆき

あとゝひてあらましかはと思ふにはあはれもふかきやとの白雪

初雪もまつふみ分て見し人のなき跡さひししき嶋の道

とし高くつもれは千世と見し枝もたへぬ老木の松の雪をれ

うまこのなくなりけるころ荒木田末偶か子をなくなしたる心を思ひやりてよみておくりける

いかならむ我もひこ枝のかなしきにましてこするの枯しなけきは

人の一周忌に月を題にて

めくりこし月にとはゝやこそのけふ雲かくれにし人のゆくへを

よはの月過にし人は影も見すなみたあやなき袖のうへかな

人の十三年忌に寄夢懐舊といふことを題にてうたすゝめけるに

年經れはおもかけとほし夢にたに見るを見しよのわすれ形見も

人の父の遠忌に夏懐舊といふことを題にて

よはにとふ螢を見ても影見えぬたまのゆくへや戀しかるらむ

人の祖父の遠忌に懐舊の題にて哥すゝめけるに

草の名よかけしとすれと軒ふりて袖のよそには落ぬした露

先祖道觀居士の二百年の遠忌にみちのくの南部といふところにてうせ給ひぬることを思ひてよめる

みちのくのはてときくたに有物を年もはるかになりにけるかな

まよひさとりといふことをことしく人のいふに

さとるへき事もなき世をさとらむと思ふこゝろそまよひなりける

なき人のとふらひの會に題をさくりて雪朝聞法といふことをとりてよめる

此暮にきゆともよしや法の道きゝてまよはぬけさのしら雪

釋教の題にて人々のよめるに我もよめる化城喩といふと

おく深しふもとの里の花にのみ心なとめそみよし野の山

一年京にのほりける時十一月廿三日雙林寺に京の人々國々の

人々あまたつとひて哥よみけるに寄日祝といふ題をとりてよめる

とことはに世をあまてらす日の本の國のさかえそ限しられぬ

秋　祝

吹風もをさまれる世のかきりなき數にとらはや武藏野の露

ある人夫婦の賀に春祝

立そひていく千代も見よいもせ川春わかゝへる浪のはつ花

人の賀に松を題にてよめる哥とも

松をおきて人も千年をふる物と君そいはれむ長きためしに

庭の松なからへて見よ十かへりの花のとかへりさかむ春まて

神路山もゝえの松の百年を君はとかへりはなのさくまて

君におふる松をためしに契りおかは千世の春にもあはさらめやは

人の賀に春松

なからへよ子日の千代のためしにも小松とゝもに君をひくまて

人の賀によめる寄松祝の哥とも

すみよしの松に契りて言の葉の花も榮えむ千世をとかへり

なみたてる松をしをりにこえゆかは千年の坂も道はたとらし

ちきりおく陰もときはの岩根松いはれとしるしちよのよはひは

松の屋翁五十賀に寄松祝

千世とほくことしとかへり手をゝりて松に咲花まつの屋の君

人の賀に松遐年友

高砂の松もむかしの友とては千年の後もきみをこそ見め

きの國のある人の賀にかの國の名ある所々を題にて哥こひけるに若浦

老の浪よるとも見えす萬代をまつにのとけきわかの浦風

村田橋彦母の八十賀に寄竹祝その人やしは子までもたりときけは

竹の子の子の子の子までおひそひて千尋の陰は千世にさかえむ

人の賀に竹不改色

窓の竹いろも心も末なかくかはられ友と契りてや見る

人の賀に寄竹祝

まとには君そ逢見むくれ竹のよのことふきの千世の春にも

人の賀に

君そ見む千とせの坂もこえて猶おくある春の花のさかりを

大和國のある人の賀に花契多春

春ことにかさしてあそへいくちよも吉野の櫻をりつくすまて

寄雪祝

吹風も枝をならさぬ君か代は八千世もつもれ松のしら雪

山のおく野の末までもしら雪のふかきめくみにもれぬ御世哉

岡山正興家を新に造りたるよろこひの會に寄雪祝

千世をへて千度つもらむ跡つくる圓居もけふを初雪の庭

うゑてみるあるしの千代をまつ高くけふよりつもる庭の白雪

妻の母の七十賀に寄岩祝

千代の坂八千度こえて岩か根のかともたひらにふみならす迄

人の賀に寄海祝

世中にはてなきものは大海の浪路と君かよはひなるへし

寄龜祝

いはふとてさわかぬ淵にすむかめもをとり出てそちよゝはふなる

龜の繪をおほくあつめてことふきする人のもとに

見る人におのかよはひをうつしゑのかめの數々つきぬ萬代

荒木田經雅神主の一年のうちに八禰宜より六禰宜まてすゝまれけるよろこひによみておくりける

一とせに二坂のほる神路山なほ峯までの道もなつまし

橘經亮むすこのよろこひしたるによみておくりける

つかへこしよゝのいさをはたちはなのみさへ子さへに榮えます君

いなかけの大ひらか阿濃津の松の屋の翁かかくれかをとふらひてかへりきて松の黑木の柱なとすへていとかりそめにてみやひたるその庵のさまをかたりけるをきゝてかの翁のもとによみておくりける

よをすてゝ名さへいほりの柱さへ千年をまつの身はやすき君

大舘高門か母のとしころ大はむにや經といふふみをかきうつせる六百卷といふ卷今はのこりすくなく出來つるよしかたるをきゝて

卷々の數をよはひになからへて猶かきつくせちゝのみのりも

中里常岳かふえふくとをこのみて共師の家より涙龍丸といふふるき横笛をつたはりえたるにその家の庭なる槇の木を思ひよせてとふきたる哥そのやとの名をかしの屋となむいへは

たえせしなふく笛の名にやとの名のかしもなみたつねは長き世に

孫の生れたる七夜に垣あるところに唐兒とものたはふれたるかたを染たるうふ衣をおくるとて

かきのうちに千年をしめて唐衣うらやすけにもあそふ童部

萬民祝

たみやすく世をわたらひのいすゝ川そのみなかみのふかきめくみに

繪に人のこへるによみて書たるうたとも

柿本神の御かたに

世にそてる神とも神とかきの本あふけはいとゝ高きことのは

菅原神の御かたに

みやこにて君かゝへるをまつ梅も心つくしの年そ經にけむ

大和國宇智郡なる榮山寺につたはりたる藤原武智麻呂大臣のふるきかたをうつせるかたに

面影を今もみなみの藤の花さかゆる山の寺にのこりて

業平朝臣のかたに

神世にもきかぬ言葉の色なれやからくれなゐに水くゝるとは

紫式部のふつくゑによりて書見たるかたに

から人にわか紫のあやころも見せはや染しふかきこゝろを

井手玉川に山吹の花咲たるに俊成三位の馬に乘てわたらるゝかたかきたるに

山ふきの露の言葉の花の香も流れてにほふゐての玉川

檜垣嫗かみつからつくれるかたとてちかきころ肥後國なる岩戸山といふところよりほり出たるをうつしかけるかたとて人の見せて哥こひけるにまといつはりはしられと

流れてのよにしのへとやしら川のみつからかゝる影はうつせし

源義朝妻ときはか平治のみたれに三人のいときなき子ともをゐて雪のふるにさすらひゆくかたかきたるに

白雪のかゝるうき身のなけきにもこすゑ花さく春をこそまて

いはゆる高砂の翁嫗のかたかきたるに

妹も我もなれてよはひは高砂の松に千年を猶そ契らむ

同翁嫗の箒をもちて朝日のさし出たるを望みて松の木のもとにたてる繪に

かきはきて朝日をまつの木本にちりもくもらぬ影そさしくる

矢背の里のしつのめか馬に薪をおふせて川へをひきゆくゑに

鴨河をわたれははやくせにかはる妻木は浅きちきりなりけり

王昭君といふから國の女のかたに

よつのをにかゝる涙の玉くしけあけては見ねと今そ悔しき

西王母といふものゝかたに此もの金母ともいふときけは

今そ見る名のみこかれのはゝきゝのありとはよそに聞し姿を

鶴の巣にひなのあまたゐたる繪に

よひかはし数もあまたのつるの子のちよ〱となく千世やいくちよ

鶴のゑのかけ物といふものに

とことはにつるの毛衣かけおきて見む人さへや千世を重ねむ

龜の繪に

かくれすむ淵のかめさへ萬世にまれなる御代と出にける哉

鷹のゑに

手にすゑてたかつの宮の御世よりそなつけて鳥をとりそめし鳥

庭鳥のゑに

はねも尾もさなからいける庭鳥の鳴音かけろとかこちかほなる

猿の子をいたきてゐたるゑに

額はしもよにあかけれと子を思ふ心のやみはてらさゝるらし

猩々といふ物のゑに

衣さへ身さへ髪さへあかけれはさこそこゝろも清淨ならめ

蝶をたゝひとつかきたるに

有と見し花も草葉もてふの夢なれもさめぬる跡やさひしき

柳のあたりにつはくらめのとひたるかたに

うちなひく柳か枝の春風におのれみたれてとふつはめかな

梅花の木に鶴のたてるかたに

友つるやにほふ毛衣とかむらむ立よる梅の花のうつり香

山川より鮎のくたるかたに

これやこのすくる月日の早瀬川としの魚とはうへもいひけり

山田原の杉の梢を郭公の鳴てゆくかた

ところから山田かはらのすきかてに鳴音もしけき時鳥かな

萩に鳥のゐたるかた

露はらふ羽風はあれとゐる鳥のなほおもけにもなひく萩かえ

秋の野のいろ〱の花の中にうつらのゐたるゑに

きても見よ床はにしきの花の露涙もいろにうつらなく野を

猿の月を見たるかたに

月見れはかつらのかけはあかけれととりてはむへき實一つもなし

さるの木實をもちたるかたに

うまけれとくはぬそくふにまさるへきこのみてくへははらふくる也

菊の花に蝶のとまりたるかた

菊に寐ていつか千年を我はとやおとろくてふの露のまの夢

竹のもとにつるのたてるかた

あひにあひて立まふ鶴の羽風にも千世をしらふるさゝ竹の聲

あしへにつるのたてるに

あし原につはさもやすき求食して雲ゐ思はぬ鶴のかしこさ

杉の木の下に雞のつかひ又ひなをもかきたる繪に

おのか子も末直かれと庭鳥の庭のをしへかすきのこのもと

冬かれの木に月のおちかゝりたる枝にからすのあまたむれゐてふたつみつはとひゆくもある繪に

月はいま落葉のあとの梢より鳥ちりゆく冬の明ほの

をりたる梅の花の圖に

梅花たちよるはかりと思ひしに人のとかむる枝もをりてき

大宮人の櫻花の枝を〻りて持て山路をかへるかたに

家つとに折そへつらむ言の葉の色もゆかしき花の一えた

朝日の繪に

赤根さす朝日のいろを朝な〳〵誰も心のか〻みとは見よ

小松の梢に朝日の出たるかた

出る日も小松かえたにさしそひてかけをならふる千世の初春

櫻の花の梢に朝日のかた

岩戸出し朝日に〻ほふ山さくらさもおもしろき花さかりかな

西行法師のしはしとてこそとよみたりし跡とてみちのくに今も柳のあるそのかたとて書たるに

立よりし跡さへ名さへと〻まりて千世にくちせぬ青柳のかけ

みの〻國のなから川の鵜舟の繪に

うかひ舟今はほかにはなから河むかしを見するか〻りひの影

すまの浦と明石浦との春秋のけしきをかきたる須磨のかたには海人の礒屋の軒にさくらの花咲たり鹽くむ男あり明石のかたには礒へに紅葉したる木ともたてりあみひく船もあるに

櫻さくいそのしほやの軒ちかみ花の影くむすまのうら人

霧はれて朝ひくあみのめもあやにこする あかしの浦のもみち葉

世に三夕といふ哥のさまをひとつに合せて書たる圖に

あつめてはいと〻あはれもまさりけり浦山澤の秋の夕くれ

蘆に三日月のいるかた

みるほとはみしかきあしのふしのまもなみに入江のみか月のかけ

秋海棠といふ花の繪に

色も名もからくれなゐの花の露かけそめて見む倭言の葉

きくの花のえたに短冊を結ひつけたる繪に

これも又花のひかりと朝露にむすひそへたる菊の言の葉

菊の圖に

露なから山路のきくをうつしゑは千世の秋をやかけてみるらむ

また

うつしゑは秋なき時も絕さらむ根こそはなけれ花はちらめや

をりたる紅葉の枝を書たるに

一えたにあまたの木々の面影もたつたの紅葉見るこ〻ちして

水仙といふ花の圖に

梅よりもなほさきたちて山人と名におふ花や花のこのかみ

四季の月の繪の中に冬の雲間の月のあたりを千鳥のわたるところ

月の船さえわたる夜の空とほく雲の浪路をゆく千鳥かな

冬の山をかきたる繪に

もみち葉はあとなくちりて雪まつに日数のつもる冬枯の山

から國の山水の圖に

しきしまの山跡にはあらぬ山水にかき流すへきとのはそなき

いつみの國の池田鄉なる伏屋氏のぬさかきの園といふ園の松に鶴のとひたるかたかきたるにかの家あるしのうたこひければ

白木綿のなひくと見えてとふつるも千世の手向のぬさ垣の松

いせの宇治橋をかきて下にあみを高く張てゆき〻の旅人のせになくるをまちとるかた書たるに

魚ならてせに落來るをめにかけて空にあみはる川はしの下

蓬萊山といふものゝかたに

これそこの千代萬代の坂路をもやすくこえゆく藥あるやま

竹のもとに竹の子も生そひたる繪に

めつらしく一ふしあれやかたはらに生てたちそふ竹の此繪は

貝と海松とをかきたるに

浪ならぬ筆のあとにもよるかひのみるめえならぬ礒のうつしゑ

ふしの山に朝日出て下なる山に櫻の花咲たるに

朝日影さすかに雪のふしのねも外山の花に春は見えけり

二見の浦に日の出たるに富士の山遠く見えたるかた

赤根さす日影とふしの白雪と二見のうらの朝明のそら

なみ木の松のこのまにふしの山の見えたるかた

松の葉のいつともわかぬこのまより雪もときはの富士をみる哉

百人一首の哥にてふしの山をかきたるに

めつらしな五つはたちの言の葉を重ねあけたるふしの高根は

藥玉の爲に

老もせす死なぬくすりの玉のをと長きためしにかけてこそ見れ

源氏物語の夕㒵卷のさまをかきたるに

夕かほの露かけそめしことのはそつひにあふきのつまとなりぬる

紅葉賀卷のかたに

散かゝる色にきほひて青海の浪立いつるもみち葉の陰

明石卷のかたに

心のみおもふ雲ゐにかける夜も秋の月毛のこまはつれなし

神路山に洞櫻とて杉の木のうつほより生たちたる櫻のあるに

かしこの人の哥こひければ

來ても見よ杉にさくらの花咲て神世もきかぬ神垣の春

熊野の錦の浦の哥かしこの人のこへるに

あかねさす朝日にゝほふおきつなみ浦は錦の名にそたちける

ふるき形につくれるやたてといふものに

花のもとふところ紙の一筆はすゝりも墨もとりあへすして

ある人のまかりたる木の枝のおのつからなるをけつりてつら

つゑに作りたるにゑりつくへき哥こひければ

たすけあれや老のつら杖つき花をみるをり〳〵もかひなやすめて

ふるきかゝみに人のうたこひければ

手にとればうつるとなしにいにしへの面影見ゆるますかゝみかな

鈴屋歌集四之卷

本居宣長詠

古風

春のはしめのうた

ひさかたの天に有といふ香具山も春たつけふやかすみそむらむ
初春と來入とひくるもろ人のとよのほき言きゝのよろしも
もの毎に神世おもほゆあらたまの年の始のてふりほきこと
山見れは雪もけなくになかさりし鳥こそきなけ春來たるらし
うちなひく春さりくれは春日野に霞たなひきうくひす鳴も

はつ春のさかほかひの哥

初春のけふのとよみきゑら〳〵にかくしのみてな萬世までに
いさ子とも我もいましもまさきくて萬代のまなこのとよみきを

正月朔のひ日はえけれは

世中のまかはことわりしまらくは天つ日すらもはえける見れは

はつ春の霞といふことをよめる

さゝなみの逢坂山の朝かすみ關うちこえて春きぬらしも

霞

うちなひく春しきぬれはあしひきの山のはきらふ朝かすみかも
みしまえの玉江のまこも角くみて天つみ空はかすみたなひく

早春氷といふことを

立かへる春の日影にいはとことこりし川のひとけてなかるも

わかな

沫雪のつきてもふるか春日野にけふは若菜もつまゝしものを
ものゝふのをとこをみなのうちむれてわかなつむ野は雪も殘らす
霞たつ春野のさはに袖ひちてわかなつむ子か家とはましを
眞玉手にみかたまかけて春の野を若菜つみつゝゆくはたか子そ

水邊若菜

むかつをに霞きらへり川上のみきはのわかなもえぬらむかも
春の野の澤のうすらひうちとけて若菜つむへくなりにけらすや

春の雪

うめ咲て春と思ふにけさ見れは庭もましろにあわ雪ふれり

春寒し

山とほき御さとは雪ものこらねと猶風寒し春あさみかも

うくひす

朝さらすきなけかきつの梅枝にきゝのよろしき鶯のこゑ
妹なねも出てきかさねそともなる竹のはやしに鳴うくひすを
ぬは玉のよるもきくかに鶯はかきつの竹にやとりてをなけ

かほ鳥

春日野にまなくしはなくかほ鳥の聲なつかしき春は來にけり

柳

千鳥なくさほの河邊の青柳は今は春へともえにけるかも

梅

うめの花しつえは露に袖ぬれて妹に見せむとわかたをりきぬ
春雨にわきへの梅はちりにけり君に見せむと思ひしものを

庭梅

もろともに折てかさゝむ我やとの梅見にきませいまさかりなり
さきぬともしられや庭のうめの花契りし人のけふも見にこぬ

水邊梅といふことを

梅花かきつの庭の池水に影さへ見えて咲にけるかも

川の瀬はこほりもいまたとけなくにみきはの梅の花さきにけり

紅　梅

くれなゐにゝほふわきへの梅花春雨まちてさきにけるかも

櫻の花をまつ

山見ればなほ雪白し櫻花さかむ春へをいつとかまたむ

かきろひの春にしなればいつしかと櫻の花をまたぬ日そなき

けふ〳〵とまつわかやとのさくら花此春の雨にさかすも有かも

すみれ

きゝしなくこせの春野のつほすみれ摘てをゆかむ日はくれぬとも

すかのねの長き春日を春の野にすみれつみつゝくらしつるかも

春興といふことを

にしきなす花の盛の春山になかき日くらしあそひつるかも

春山のこたちのしゝに咲花をたをりかさして此日くらしつ

よふこ鳥

春山に咲たる櫻ちらぬまに見にこと人をよふことりかも

さくらの花の哥とも

ぬれつゝも見むとは思へと櫻花雨のふるまはふゝみてもかも

あらたまの春たちしよりいつしかとまちし櫻の花咲にけり

みやひをの春のかさしとさくら花野にも山にも咲にけるかも

立出てふりさけ見ればあしひきの山はさくらの花さかりなり

おもふとちいさ見にゆかな春山に咲るさくらの花のさかりを

日影にほへる山のさくらはな千代とことはに見ともあかめや

いかならむよし野の山も此ころや櫻の花のさかりなるらむ

ちかゝらは吉野のやまのさくら花きのふもけふも行て見ましを

みよし野の山のさくらはこち〳〵のこぬれしみゝに咲にけるかも

霞たつ春日の野への櫻花かくし來て見むいやとしのはに

春の雨の晴てといはゝちりぬへしけふ見にゆかな山のさくらは

春山の花の木陰をゝとめともかゆきかくゆきをとめさひすも

いくはくもあらぬ櫻の花さかり雨なふりそね風なふきそね

あくまてに見まくのほしき櫻花五百日八百日も散こすなゆめ

なちりそね風はふくともさくら花有て明日こむ人も見るへく

此夜らのあらしのかせにあしひきの山の櫻はちりか過なむ

花をゝるといふことを

ぬすまひて一枝をりつ山守のあからめもせぬやまのさくらを

山守の有けるしらにさくら花ふさ手折來てころはえにけり

山つとに見せむともひてさくら花道の長手をたをりもちきぬ

花似雲

つねゆけに白雲かゝるみよし野の御舟の山は花さかりかも

たきのほとりの花

おちたきつたきの岩根の櫻花ちりてみたるゝ玉かと見つも

故郷花

うつらなくふりにし里のさくら花見る人なしにちりかすきなむ

山家花

おのつから人そとひくるやまさとも春はさくらの花見かてらに

名所花

花くはし春のさくらの花見てそ吉野の山となつけゝらしも

人のすゝめけるに對花忍昔といふことを

みよし野の山の櫻をきて見ればたきのみやこの古おもほゆ

東哥のさまによめる櫻花のうた

家のいもに見せむともひて雲のゐるねろの櫻を手折てきぬよ

まよ引のよこ山へろのさくらはなさきのさかりはにぬくもなすよ

道行人のうたふ哥を聞てその同しこゝろを

草はむと綱ひきすれはちる物を花の若木になと馬つなく

一年これかれともなひて三月のつ、たちに度會郡なるまへ山といふところの花見に物しけるに山田の人々もこれかれまじれる皆哥よみけるによめる

あらたまのとしの八とせをこひ〱て前山さくらけふ見つるかも

けふこすは櫻の花も人みなのこと葉の色も見すやゝみなむ

思ふとちきよりつとへるけふのこのさくらのめてをいつか忘れむ

その日荒木田ひさかたも此山の花見にくへきよしかねていひけるよしきゝてまちけれとこさりけれは父の日よみておくりける

まへ山のみねのさくらのたか〱に君をそまちし春の日くらし

父のとしの同しころこそを思ひいてゝよめる

此春も行て見てしかまへ山の花はかはらすさくらむものを

落　花

けふもかも櫻ちるらむみよし野の秋津の野へを行て見てしか

さくら花朝けの風に散にけりけふも日くらし見てまし物を

山家落花

めかれせす見る山さとの櫻花ちりて明日ゆはさふしけむかも

やまふき

さくら花ちらふよし野の川のへにつきのよろしき山ふきの花

朝風に朝露ちりてかたよりになひく河邊のやまふきの花

里欵冬

山ふきの花さくころはともしかもゆきくと見らむ井手の里人

藤　花

見む人はけふ見にきませわかやとの藤なみの花明日はちりなむ

早　苗

小山田に長き日くらし袖ぬれてさなへとる子はたちつかるらむ

たちはな

風ましりけさふる雨にかくはしき花たちはなのちらまくをしも

あやめくさ

あやめ草池のうきひちこしなつみふさに刈來ぬかつらけわきも

ほとゝきす

郭公卯花さけはめつらしくきなく初聲きゝのよろしも

ほとゝきす戀つゝをれはむかつをのつみのさ枝にいまそなくなる

吹にほふ卯花山のほとゝきすちらまくをしみゆきかへりなく

朝よひにきなきとよめて此をかのうの花ちらすほとゝきすかも

いつくへにたかまつとかも郭公わきへの里をすきていぬらむ

わか屋戸の花たちはなにほとゝきす昨日もけふもきつゝなくなり

たちはなの花はちるとも郭公わかやとかれすすみ渡らなむ

いれかてにきけは戀ますほとゝきす君かこぬ夜はなくへきものか

瞿　麥

されし子におもひよそへてけさ見れはいやなつかしきなてしこか花

なてしこか花のさかりに日ならへてふる雨恨めし花ちらまくに

朝なさな見れともあかぬなてしこの花のさかりを見にこねわかせ

水邊夏月といふことを

瀬の音のきよき川せの月見れは涼しくもあるか夏のよのそら

すゝみ

飛鳥風たもと涼しも川のへをゆきたむ岡の松の下道

夏の日は道ゆく人も松陰にいゆきよりつゝすゝみてそゆく

松の下のすゝみ

すゝしくもふくなる風かとほつ人松の木かけは秋きぬらしも

池蓮

みはかしをつるきの池の花蓮さきのさかりはけふにし有らし

ひくらし

かきろひの夕かたまけてひくらしの鳴聲きけは戀のしけゝく

六月大祓

はらひすと百の官そつとふなるすさかの御門ところせきまて

七夕

天川はつ秋風はふきぬなり君か御舟のよそひはやせよ
あまのかは渡る川路はちかけれと御船まつよはたゝ一夜のみ
何しかも年にまつらむ天の河わたる川路はとほからなくに
わかためと手玉もゆらにわきもこかおりけむ衣行てはやきむ
ひこほしの船はやわたせ秋風に天の川とはなみたかくとも
夜船こくかちのと聞ゆ天の川々とに立てわかまちをれは
あまのかはかちのとすなり今もかもわかまつ君か船出すらしも
あらたまの年にわかまつ初秋は七夜つぎこそいもにあふよを
ひさかたの天の川路をくれ〳〵とひとりかゆかむ妹に別れて
此夕玉はし渡すあまのかはふりさけ見むに雲なかくしそ
あまとふやひれかたしきて彦星のたなはたつめとこよひねぬらむ

萩

よひさらす妻とふ鹿の聲きけは萩のあそひの時は來にけり
いつしかとわかまち戀しわかやとの秋萩の花咲にけるかも
露分て萩の花野を朝ゆけはわか袖にほふするとはなしに
萩か花うれわゝら葉の朝露に手折し袖のぬれにけるかも
たひ人の衣にほはせおきつもの名張の野への秋はきのはな
はきか花尾花にましりかきつはた佐紀野の秋は今さかりなり
玉たれのをちの大野の萩の露秋風ふかはちりかみたれむ
けふの雨にちらまくをしき秋はきをわか待人のきても見ぬかも
秋風はいたくなふきそわかやとの萩か花ちる露もみたれて
あき風に萩か花ちるさをしかの妻とふ野へのはきか花ちる
こひわひてよるはを鹿のなく物を花に散ぬる野への秋はき

をみなへし

朝露にぬれてたをりし女郎花見つゝしぬはせ我とおもひて
くれなゐの淺さは小野のをみなへし此朝露にしをれなむかも

朝かほ

秋されは朝露おひて朝な〳〵朝かけにさくあさかほのはな

秋の花をよめる

わか屋戸は秋萩をはな女郎花秋のさかりといまさかり也

露

妹かめをとみの岡への夕露に衣手ぬれてゆくはたかつま
いかにして手にはまかまし松陰の淺茅かうへの露のしら玉

かはつ

落瀧つよし野の河の淸き瀬に朝よひさらす蛙なくなり

鹿

つまこふと秋野の萩の露分て長きよすからを鹿なくなり
秋の野の朝霧こもりさを鹿の妻とふ聲のいやとほさかる

駒むかへ

さす竹の大宮人し駒なへて駒むかへにと逢坂のほる

月をまつ
あしひきの山はなくもか山なくはわかまつ月はとくも出ましを

月

たか／＼にわかまちをれはとほつ人松のこのまよ月は出にけり
我門のあさちかうへの白露にひかりさやけくてる月夜かも
秋風に天雲晴てまそかゝみ清き月夜は見れとあかぬかも
をしかなく山の岡への萩か花見よとや月のさやけかるらむ
月清み秋の長夜のさよ中とふけゆくしらに見つゝをるかも
まそかゝみ見つゝあかさむ秋のよをあかすかくろふ夕月夜かも
みそらゆく光を清み玉くしけあけまく惜き朝つくよかも
月きよみ見つゝあかせはぬは玉の秋の長夜は言にし有けり
月前鹿といふ事を
さをしかの妻とふ山の月見れは鳴音かなしきよはの秋風

湖月

わきもこに逢坂山の関こえてあふみのうみの月を見るかも
秋の夜の月夜を清みさゝなみの志賀津の浦よ夜船こく見ゆ
一年八月十五夜月はえけれは
今もかもおして照へき月影のなにとあれそ闇に見ゆらむ
秋の風をよめる
わか屋戸の萩の下葉も色つきて日にけに寒し秋のゆふ風

鴈

萩か花ちらふ秋野の朝風のさむきみ空にかりかね聞ゆ
鴈かねの聞ゆる空を見渡せは月かたふきてふけぬ此夜は
在明の月夜を清みさよ中に友よひたてゝかりなきわたる
くものうへにけさ鳴鴈の聲きけは秋風寒しうへも鳴けり

きぬた

秋ふかみ夜寒になれはしきたへの衣うつ音をちこち聞ゆ

霧

わかゝとのわさたのほたち見えぬまて霧立渡るこのゆふへかも

もみち

高圓は野のへの萩の花ちれは尾上のもみちつぎのよろしも
たつた山そむる時雨のあめ晴てはつもみち葉をけふ見つるかも
からにしき立田の山のもみち葉ををらすやよそに見つゝこえなむ
妹かりとあゆひぬらして露原をいくたの杜はいろつきにけり
ぬれつゝも山のもみち葉行て見むしくれの雨はまなくふるとも
袖かけてしつえの紅葉よしゑやしちらはちるとも手折てゆかむ
さにつらふ色なつかしも朝つく日かゝよふ山のみねのもみち葉
朝露にゝほふもみち葉手折きぬいもに見せすてちらまくをしみ
かみな月しくれふりくる山おろしにあたら紅葉のちりか過なむ
あさにけに秋風ふかはこらか手を巻向山は紅葉ちりけり
秋山のこぬれたかけと引よちてにつらふ紅葉いさをらなわは

しくれ

はゝそちるさほの山へに家をれはしくれの雨もふらぬ日そなき

千鳥

行かへり佐保の河門の清き瀧に千鳥つまよふ朝よひことに
難波の海しほみちくれはさわ／＼に夕浜千鳥いやなきわたる

冬野草

かれし野の尾花かうれの霜みれは秋のゆふへの白露おもほゆ

野行幸

大きみの御狩たゝすと冬の野を雪ふみならすますらをのとも

御かり

さしすみのくるすの小野にいめたてゝ吾大君はみかりたゝすも

雪

玉くしけあけむあしたはとく見てむことひの雪はいほへふりしけ

杜　雪

うちわたすこぬれこ〳〵雪降てましろに見ゆる神なひの杜

松をよめる

しくれの雨いやしきふれとわかやとの君松の木は色もかはらす

戀のうたとも

面影にかゝりてもとなかきろひの一め見し子かわすらえなくに

いきのをに我はそこふるます鏡きよき月夜に一め見し子を

御かりたつあきの大野のはた薄しぬふにたへぬ戀もするかも

よしゑやしこひはしぬともさにつらふ色には出し人のしるへく

わきもこにわかこふらくはあらたまの月に日にけにいやしきますも

思はむと君はいへともまそかゝみ見す久ならはわすらしなむか

あらたまの月かはるまて妹か袖かれてやねなむにくからなくに

あひ思はす君はあるらしぬはたまのよるの夢にも見えぬおもへは

いめにたに妹かめ見すて風のとの遠音にのみやきゝつゝをらむ

としをへていかに思へか玉ほこの道わすれすて君か來ませる

まつらむに行てとく見む秋山の色なつかしき妹かゐまひを

かとに出て妹まつらむに菅の根の長き此日ははやもくれぬかも

明日こむといひて別れてあらたまの七夜こぬ君いつとかまたむ

吾妹子か家人ともしわきもこを朝よひ見らむ家人ともし

月見れはわか戀まさるはしけやし君かこぬよはくもりてもかも

ぬは玉の月夜をきよみたか〳〵に待しもしるく君かきませる

さよ中に屋の戸ひらきてたらちねの母かとはさは何とまをさむ

よしゑやしひらきていらせおく山の眞木の板戸はおとはやくとも

人めおほみ君かゆつらの絕むとは我は思はすとしにこすとも

朝にけに見れともあかす吾妹子か裳引のすかたいやめつらしも

夜の戀

妹にこひ秋の長夜をいもねすて歎きいきつきあかしつるかも

いもにあはすきそもこよひも紐とかすまろねわかする旅ならなくに

なにしかも人の手まきてぬらむ子をよるはすからにわか戀をらむ

こひやす

君にこひ月に日にけにこひやせて身は朝影になりにけるかも

いけるよにあはしとすれや妹こふと我はしぬへく日にけにやせぬ

かた思ひ

朝よひにねのみなきつゝあひ思はぬ人をやもとな戀わたりなむ

久　戀

逢見むといひてし物をうつそみの人めをもると月そへにける

よそにして年てくれぬるあらたまのとしゝ妹にあふとはなしに

一夜たに逢見ぬいもにあらたまのとしの八年をわかこひわたる

ま　つ

眞木の戸をこよひはさゝし吾兄子かふくともこむといひてし物を

さよ中と夜はふけゆくをわかせこか何事あれそまつにきまさぬ

岩根ふみ來ます山路のとほけれやわかまつ君かさよふけにける

ぬは玉のよはふけぬるをわかせこかこまのあおとの聞えこぬかも

こむといひしよのふけゆけはときゝぬの思ひみたれて君まつ我は

霞たつ春野の岡のわか松のわかまつ君はこよひこしとや

いはゝしのまちかき里にある君かまてときまさぬ月たつまてに

あへり

たへのほに霜のふるよも寒からす妹か手枕まきてしぬれは
さねそめて妹にあはすは今よりは一日ひとよもありかてましも
逢夜すら心はいたし白たへの袖のわかれをかねておもへは
道のへのゆさゝからへに螢とひかゝやかしもよたゝにあふよは

ちかふ

さかさまに飛鳥の川は流るともけしき心はわはもたしとよ
吾妹子にわれは絶めや大舟におろすいかりの綱はたゆとも

わかる

時のまも戀しき妹を山のはに朝たつ雲のゆきやわかれむ
ゆゝしくも歎きつるかもけふ行て又はこしとも君かいはなくに
いもか家のかきつの柳かへり見てわはゆきかてぬ別れかなしみ

後のあした

見おくるとかなとにたちしわきもこか朝けのすかたいつかわすれむ
露霜のおきて別れし朝戸出の君かすかたしおもかけに見ゆ
なゆ竹のとをよるこらかあさと出の裳引の姿わすらえなくに

名たつ

わきもこしいかに思へかつるきたち名のみをたてゝさねあはさらむ
よしゑやしそこは思はすつるきたち名はたちぬとも妹によりては

つかひ

玉つさのつかひもこぬか朝髪のおもひみたれてこひつゝをれは
いきのをに我は思へとわきもこかあひ思はねはまつかひもこす
わかせこはたゝにこすとも使たにしく〳〵かよへこひのなくさに
人めおほみいもか使をかへしてき心あることおもふへきかも
わするとや妹か思はむたまつさのつかひもやらす月のへぬれは

雨によす

わきもこかまつらむものを雨ふりぬふれはひつともゆかすあらめや
とのくもり雨はふれともわきもこに戀てすへなみ出てそわかこし
ひさかたの雨はふれとも笠もきすぬれつゝそこしなをおもひかね
こよひはも雨はなふりそけたしくも君きまさしか雨つゝみして

しくれによす

妹にこひあかしかねつも長月のしくれふる夜をひとりしぬれは

霜によす

たへのほにやとの庭萓霜ふりて寒きゆふへは妹をしそ思ふ
玉ほこの道のしはくさ霜ふりてさむき此夜をなつみてそこし

雪によす

君こすはひとりや寐なむ風ましり沫雪ふりて寒きこの夜を

霧によす

千鳥なくさほのかはせに立霧のたちてもゐてもわすらえぬ君

けふりによす

春山にもゆるけふりのよそめにも君かすかたを又いつか見む

山によす

夜こえにもこえてきまさねあしひきの山はへなれととほからなくに
はねふむ山は百重にへなるともまつとしきかはやますかよはむ
我を君おもふ心しちかゝらはもゝへの山をへたてをりとも

道によす

たまほこの道はちかけとありかよふ人めしけみや君かこさらむ

河によす

のとせ川後も逢むと妹かいはゝよし此ころはひとりねぬとも
今の間も有そかねつるのとせ川のちも逢むと妹はいへとも

涙によす

大伴のみつのはまひによる涙の我による子を母しもらすも

嶋によす

涙間より雲ゐに見ゆるあは嶋のあはすてのみや戀わたりなむ

草によす

かすみたつかすかの野への春草のしけくも君に戀るころかも

眞葛はふ夏野の草のいや日けにしけきわかこひ妹につけこそ

夏草の露分來つる袖よりもわか袖ぬれぬひとりぬる夜は

秋萩のはつ花見れはわきもこかしなふすかたのおもほゆらくも

秋萩の花野のすゝきおしなみに思はゝいもにかくこひめやも

いもか門あけて入野のはたすゝきほのかにたにも見むよしもかも

かの岡にくすひくをとめ家とへと相思はねやいへものらさぬ

かた戀にとしはへぬとも朝かほの花の色には出しとそおもふ

朝なさな霜おく庭の冬草のかるゝよなしにあふよしもかも

道のへのいつしは原のいつとかも君かこむ夜をわかまちをらむ

山菅のねもころ〳〵に我妹子に戀つゝをれは心ともなし

みしま江のたまえの菅のねもころに妹を思ふ夜はいもねかねつも

何しかも逢見そめけむしらすけのしらすて妹はあらまし物を

梓弓とりて引野の青つゝらつら〳〵見れとあかぬ妹かも

あひ思はす君はもあるか濱木綿のもゝへにちへに我はおもへと

うらもなく頼みけるかも月草の花に有ける人のこゝろを

藻によす

いさなとり海の玉藻のなひきねしこらかにこはだ忘れかねつも

花によす

春されはまつ咲梅の花のみに咲て見えける君かこゝろか

さく花はちる時あれとわきもこにわかこふらくはやむ時もなし

秋の野に咲花見れはおもかけに見えつゝもとな妹をしそ思ふ

木によす

はしきやししたり柳をかつらきて春野ゆく子はつまかあるらむ

春山に櫻さき野のしらつゝししらすときこせ人はとふとも

秋されはしつえもたわになる柿のならすはやまし年はへぬとも

わきもこか家のかきつの草木にもならまし物を戀つゝあらすは

松によす

日くるれは尾上の松のたか〳〵に我をまつらむ妹しかなしも

あつさ弓いそへにたてるひとつ松人つまゆゑに戀しきやなそ

鳥によす

春されはうめのほつえに鳴鳥の聲たにきかす戀わたるかも

あしへより朝たつ鳥のおとにのみ聞てやよそに戀渡りなむ

かしのみのひとりやねなむ鴈鳴てはたれ霜ふり寒き此夜を

しほみてはいそへのたつの立田山たちゐに君をおもふころかも

むしによす

ほたるにや玉つさかきてつけてまし妹かりゆかはとりも見るかに

とこのへにこほろき鳴て秋風の寒くふくよを獨ねよとや

獸によす

月よみの光も清しいさことも馬に鞍おきいもかりゆかむ

ぬはたまの駒は夜みちにつかるともゆかすあらめや妹待らむに

秋の夜の妹戀しきにさを鹿の鳴こゑきけはいねかてぬかも

かゝみによす

あさな〳〵手にとり持てわきもこか見らむ鏡にならまし物を

衣によす

くれなゐの八しほの衣下にきてふかきこゝろをしらめやわきも

さよふけぬかゝけていりこ玉たれのをすのたれすはそよとなるとも

篠によす

旅のわかれのこゝろをよめる

人國に君をいませてあひみすは一日一夜もありかてましも

いつとかもわかまちをらむ朝霞八重山こえていますわかせを

國さかりたひゆく君は草つゝみやまひなくてはやかへりませ

行かねてかへり見すれは五百重浪いやしく／＼に袖ふるわきも

思ひかねかへりみすれと妹かふる袖たに見えす雲かくりつゝ

東哥のさまによめる別れのうた

かみつけぬいかほのぬまのみかものすたしや別れむかなしきをおきて

あしかりのみ坂こえかねせのこや杉のこのまよ袖ふらす見ゆ

旅のこゝろをよめる哥とも

大きみのみことかしこみ玉藻なすなひきねし子をおきてきにけり

たひにしてもとなゝ咲そさくら花京の春のおもほゆらくに

春の野の岡への道のつゝし花たをりてゆかな旅のなくさに

旅にして秋の野ゆけはわかやとの秋萩すゝきおもほゆるかも

なか月のしくれの雨に袖ぬれてしらぬ山路をこえゆく我は

あしひきの山はなくもか岩ふみてさくゝみゆけは馬つかるゝに

あしひきの山こえ野ゆき來つれともわきへの里はわすれかねつも

白雲のたなひく山をこえてきて心もしぬにわきへおもほゆ

旅にしてかけのよろしきかへる山まさきくゆきてはやかへり來む

里しあらは宿からましをあしひきの山路まとひて行くれにけり

おくかなくたつきもしらぬ山路をやよこえにこえむ宿はなくして

雲もゐす秋の月夜はてらせれとやまとは見えす山たかみかも

あまさかるひなのあら野のあら草を枕にまきて旅寐す我は

あら野らのすゝきおしなへこよひもや倭戀しみわかひとりねむ

あしひきの山松か根にたひねしてあらし吹夜は家をしそ思ふ

草枕たひとおもへと浪のとのとよむ濱ひはいねかてぬかも

ぬはたまの夜は明ぬらし磯の海人あことゝのふるよひ聲きこゆ

わか旅はけなかくなりぬあらたまの月日よみつゝ妹またまくに

くさまくら旅のけ長み家のいもかぬひてきせたるきぬあかつきぬ

雲はなれ遠き國へにいつしかと都こひつゝとしのへぬらく

おちたきつよし野の河を來てみれは木綿花つくる瀬々のいは浪

ゆきかへり見れともあかすみよし野のなつみの河の清き川瀬は

わか命しまさきくあらはみよし野の大川よとを又も來て見む

山代のくせのさき坂こえてきて宇治川見れはいにしへおもほゆ

うちなひく草香の山をけふこえて難波の海を見さけつるかも

朝ひらきなにはの崎よこき出てみつゝわかゆく三津の松はら

あで過て川ゆき渡り夏引の糸鹿の山を今日かこえなむ

浪の間ゆかへり見すれはわきもこに淡路のしまも雲ゐかくりぬ

なみのうへにうきねわかする明石かた浦ふく風のさむき此夜を

豊國のゆふ山雪のけ長くは家なるいもかまちやかれまし

とよ國のきくのはま松まつらむと妹をし思へは行かてぬかも

我旅はけなかくなりぬ松浦の海まつほと過て妹なけくらむ

おくれゐて旅ゆく人を思ふこゝろを

君かゆく道の關守まひはせむ君をとゝめよかへり來るかに

旅ゆきもしゝらぬ君かいはねふみしらぬ山路をゆきかなやまむ

わかせこはいつへの山の松かねをまきてかこよひ旅寐せすらむ

紅葉ちる兄の山こえてわかせこかわきへのもみちおもほすらむか

はしきやしわかせの君はいは國のあらき山路をけふかこゆらむ

まさきくて君か御船はちはやふるかねの御崎も過ぬらむかも

けふ〳〵とわかまつ君は難波津にいつの月日か御舟はてなむ

　粟田土麻呂か遠江國にかへるによみておくりける

とほつあふみ遠き月日はへたつなよあふてふ名をし頼みてまたむ

　五月のころ倉石爲光か越後國にかへるに

こしへゆく君しともしも遠つ人鴈としおもはゝ秋またましを

　すゝきの書緒か遠江國にかへるに

千年にと我をことほく鈴の屋のこのまつの木を忘らすな君

　帆足惟香杉原雍かものまなひに來をりておのかつくれるふみともあまた寫しとりて肥後國にかへる時に

わかるともわかると思ふなうつしゆく書に心はうつしやる我を

青山にいる日を見ても明日よりはつくしの空しおもほえむかも

　小篠御野か石見國にかへるに

したはるゝ君にたくひて石見の海ゆきて見てしか浦はなくとも

　福田眞直か遠江國にかへるに

とほくともわれしるへせむいにしへの道わすれすは又もとひこね

　長瀬眞幸二年つゝきてとふらひきけるか肥後國にかへるに

こそ今年つきて來ませりいまよりもつきてきまさねいや年のはに

　三月はかり尾張國に物する時に阿濃松原を見渡して

うら〳〵とかすむ春日にふりさけて見のよろしもよ阿濃の松原

　くはなより船にのりてさや川をのほるほと多度山のいたくかすみて見えけれは

朝風の寒きたと山しかすかに霞きらへり春ふかみかも

　同し時よめる

みはかしのさやの川しりこきためはくはなも見えす國とほそきぬ

　尾張の名兒屋より四月の末にかへる時に鈴木眞實か別路に袖はふるともいかにせむ歎きの霧に立かくしなはとよめるかへし

わかなけくおきその霧もはれぬへし君かそてふる心しるくは

　道にてよめる

岡へから沼の嶋つ田見わたせは早苗あをみて麥あからめり

　白子にやとりてつとめて海を見出して

たくひれの白子の海の朝なきにこゝたも出る海士をふねかも

　京にのほりける時すゝか山をかことゝいふ物にのりてこゆとてよめる

あしひきの岩根こゝしき鈴鹿路をかちよりゆかはゆきかてましを

　近江の石部の驛にやとりてつとめて道にて十一月のもちの日也けり

朝たちて比良の高根の雪見れはきその夜床はうへさえにけり

　大津にて

ふりにける跡とも見えすさゝなみの大津の里はにきはひにけり

　大井河にてとなせの瀧といふはその川上に有ときけはをりしもいかたをくたしくるを見て

いかたしよわはゆきかてゝこゝにしてこふるとなせの瀧見つらむか

　同しところにて

大井川かはへの松のこのまよりそかひに見ゆるおほひえの山

　松尾社にまうてゝ

まつの尾の宮をろかみてたふときやなりかふら矢の神世しおもほゆ

　月讀社にて

手をゝりて今は月と月よみの杜の名あはれ旅のけなかみ
あたこのやしろにまうてたるものゝしきみの枝を持てかへるか道にあへるを見て
はしけやし妹をしきみの枝とかも遠き山路を折てきつらむ
梅宮に詣ていたくあれませるをなけきて
うめの宮かゝらましやも橘の今もときはに榮えましかは
よる淀川を船より難波にくたる時に
高瀬船なにはもちかくなりぬらむ苫もる月の影かたふきぬ
大阪よりかへるさまにみなせの宮の御跡を尋ねて
あと見れは心もしぬにいにしへのおもほゆるかも此みやところ
みけむかふみなせの宮の跡ふりて竹のはやしも神さひにけり
京よりかへる時坂下の驛まて物せむとする日いまたすゝか山もこえさるにかにか坂といふあたりゆくほとはや日も入にけれは
よこさらふ盤か坂路を夕こえて鈴鹿の山はくれかはてなむ
坂下にいたりて
こえて來てすゝかの坂の下うれしわきへの里の近つく思へは
又一年京より四月のころ近江美濃を經て尾張の名兒屋にくたりける時せたのわたりにてよめるこの時橋はくちてあやふけれは垣ゆひて人かよはさゝりけれは
あふみちや勢多の長橋板くちて橋はわたらす舟よそわたる
野洲川のあたりをゆくほと雨降出て風いと寒かりけれは
とのくもりふりくる雨に袖ぬれて寒けくもあるかやすの川風
松井正平か家に彦根にやとりける夜その里の人々あまたつとひて題をくはりて哥よみけるに鳥を
いさや川いさいまたきかすあふみ路や旅寐の床の山ほとゝきす
みやひをと圓居せるよは常ゆけに聞まくほしきほとゝきすかも
道よりいふき山を見やりて
彦根路のたむけこゆれは神風のいふき高根に雲ゐたつみゆ
ひこねの人々これかれすりはりといふ手向まておくりきたるにわかるとて
近江路やわかれゆくとも海山とわかせとふたついつかわすれむ
尾張のあつたなる白鳥御陵にまうてゝ
しきしまの山跡戀しみ白鳥のかけりいましゝあと所これ
きの國にゆきける時によめる
あさもよし我はきへゆく吾君のみとかしこみわれはきへゆく
いせとやまとのさかひなる高見山をこえける時に
高見山ことにし有けりのほりたちかへり見すれと國見えなくに
やまとの宇野たうけといふところにて
嶋つ鳥う野のたむけよ見渡せはかつらき山に雲立のほる
紀の川を船よりくたるに岩手の里のあたりを過るに
つぬさはふ岩手も過ぬこまつるきわか山ちかくなりぬらむかも
若山にしはし在けるほと須佐社にまうつとて有田川のあたりにて糸鹿山をとひけるにちかけれとけふゆく道にはあらすといひけれは
吾もけふこえまし物をあで過ていとかの山は見すやかへらむ
かくよめるは萬葉集なる哥にあて過て糸鹿の山のとあるを思ひてになむあでは有田のもとの名也
有田のあたりはすへて道のほとりにもをちこちの山にもみかむといふ木のおほかるを霜月ころなりけれはさかりに實のな

りてしけくたてるかめに立て見えければ
はしきやし有田の山は冬枯に靑葉しけりてこかれ花さく

須佐大神社にまうてゝ
あさもよし木路のしけ山分てきて木種まきけむ神世しおもほゆ
いたけるの神のしきます木の國といはふかふろの神の宮これ

かへるさまに名高浦にて
昨日見てけふも見つれゝ紫のなたかのうらは明日も見かほし

つまつ姫のやしろにまうてゝ
あれにけりいつら昔のつまの杜こたちうすくもなりにけるかも

かま山の御陵を見奉りて
をたけひの神代の御聲おもほえてあらしはけしきかま山の松

大御神宮にまうてける時みや川にて
わたらひの大河水をむすひあげて心も淸くおもほゆるかも

みやこをよめる
大きみの敷ます國としきしまの山跡國を神そさためし

天香山
あもりつくかく山見ればひさかたの天に有けむ神世しおもほゆ

あすか川
みをたえすなかる飛鳥の川の瀨にかはつ鳴なりいにしへ思ひて

二上山
妹か手にならすくしけのふたかみに月かくろひぬよはふけぬらし

吉野
行かへり見れともあかすみよし野の吉野の河のたきつしら浪

なにはの堀江
まつら船なにはほり江の朝しほに朝こきしつゝみをさかのほる

住江
しく／＼に五百重浪よる住のえのきしの松原見れとあかぬかも

玉出嶋
又いつかゝへり來て見むまそかゞみ見れともあかぬ玉津しまやま

くさ／＼の哥
國々に道はあれとも天照す日の大神のみちそまさみち
いさ子とも廣きゆきよき道をおきてゆき惡き道になまとはひそね
もゝ八十の國のおや國もとつ國すめら御國はたふときろかも
四面八面に國はおほけと敷嶋のやまと嶋根そ八十のおや國
國ことに君はあれとも高ひかるわか日の御子そやもの大きみ
天てるや神のさつけし眞白玉ひかり見ればや人のしらなく
からくにのしこのしこ道よの中の人そまとへるそのことよきに
から國の人ならはめや神國の人はまなほに神ならふへし
さひつるやから國人のいつはりは似つきてすれそ人まとひける
から人のさかしら心すてゝこそ神の御國の道はしらゆれ
をりたむな直き神代の心もてなほき神代の道は尋ねよ
なほりてむ外つ國ふりのまかわさもつひに直毘の神ししらさは
いにしへをたふとふ人の神をしもなけらに思ふはいかにふとそ
さかといふ大をそ人のをそ言にをそことそへて人まとはすも
ほとけらは玉のうてなにいつかえて神は雨もるをやのしき屋に
ほうしらは雲にとふ世をふせいほにかゝみてふるか神のみや人

をはりの國人石原將聽としころのからふみまなひの心をかへてわかいにしへ學におもむきておのかをしへ子になれりけるおのれ名兒屋より國にかへる馬のはなむけにから文作りておくりけるこたへに

手にまける白たましらに人國のおそやよの人石をほりすも
つゝめりしいしみなうてゝはしけやし白玉ひりふ君かゝしこさ

かひの國の酒折宮によみて奉れる

かたりつく御哥とゝもに萬世につきて榮えむさかをりの宮

月を見てよめる

たくはひてもたるをち水まひはせむ我にえしめよ月人をとこ

みちのくのけふの細布也といふさきてをおくりける人のもとに

けふそ見るけふのほそ布昨日まて名にのみ聞しけふの細布

尾張國人大舘高門かはしめたなかの道まろにつきて物まなひしけるほと哥こひけれはあたへたる

有かよひ行てくまさね田中のやをちかみちひく年魚市の水を

江戸の安田躬弦か始めてとひきたるに四月のころ

めつらしくきなく初音の郭公つきて日にけに聞よしもかも
もゝへ山こえて來てなくほとゝきす思ひかけきやけふのはつ聲

いにし年しなぬの國の淺間のたけのいみしくやけゝる音の此國あたりまておとろ〳〵しく聞えて物にひゝきなとしけれは

八しま國ひゝきとよもすかくつちの神のあらひはかしこきろかも

田中道まろかしらおろしぬと聞てよみてつかはしける

たくひれの君かましらかわゝけてもあることそよけれあたら眞白髪

大穴牟遲命の御かたとて書たるに人の哥こひけれは

おほなむちわは見しられと其神の御かたといへはあやにかしこし

守屋大連のかたに

あしくとも此大連のいましせは大まかことはほひこらましや

大御神宮の御山の杉の木もて造らせたりとてあらきたの經雅神主のもとよりおくられたる文臺のうらによみてかきつけゝるうた

こひのめはよるとふ杉の此板に言たまちはふ神もよらさね

江戸の加藤千蔭許よりふるき驛路の鈴の形に作れる硯瓶をおくりたりけることたへに万葉集なる哥を思ひてよみてつかはしける

はゆまちのすゝりかめをはえてしあれは水もたはらむ君かたゝ手よ

福壽草といふもの書たるに

人みなのいはふ名おひてあらたまの年のはしめに咲やこの花

松のこのまに櫻の花の見えたるかたに

立ましるさくらの花のさかりには松の葉の色もつねゆけに見ゆ

山里の家にふちの花の咲たるかたに

藤なみの花し散なは山里にあすこむ人はしるしあらめや
かくはかり色こき物を藤なみのなみに思へや人の見にこぬ

屏風のゑに神あそひしたるところに

圓居してとるやみむろのさかきはの常磐かきはにかくしあそはむ

もみちのもとに鹿のたてるかたに

さにつらふ紅葉ともしみ秋山の木本さらすさをしかなくも

鷹のかたかけるに

木かくりにゐる鳥あれかもをち方を見くるへかしてねらはりをらく

ふしの山かきたるに

此神よいかにふ神そ青雲のたなひく空に雪のつもれる

大和國の三山のかたに今一つ山あるに

四つ山と人見らむかもみつ山の山のあらそひ見にこし山を

わかき女のかめにさしたる水葱の花を見てたてるかたに

なへなりしこなきか花も咲にけりわかせの君はいつか來まさむ

たなかの道まろみまかりて尾張のなこやの靈岳院といふ寺のうちに年ころ住ける跡に石ふみたてむとするにゑりつくへき哥かのをしへ子とものこひけるによみてつかはしける

聞て來て見む人しぬへはりの木の田中のをちか家ところこれ

はしけやしみぬの國人はりのきのをちかゝたみの榛の木あせを

此老翁は美濃國多藝郡の榛木村の人にてやかてはりの木のをちとなむなのりけるさこなむ此あとのしるしにもはりの木をうゑたりける

しはすはかりみぬの國の大垣の人のもとよりふみおこせたるに大矢重門か事を思ひ出てよめる重門はかの大かきの人にてそのとしの秋みまかりにき

ふみまてと書も通はぬ國人となりにけるかもしけかの子は

寄日祝といふ𛂰を

春こそあれ年くれぬとも夏草のしけ門のこはかへりこめやも

小野菜の子の始めてよろひをきけるほきこと

あえませと君をそいのるとことはに御かけかはらす出る日見れは

七里政要か松の屋のほきこと

とりよろひ君の御たてとものゝふのかためおく身は萬世までに

草陰のあぬの城のへの松の屋は榮えそゆかむ松のときはに

大たちの高門まか玉といふ物をこゝたつとへもたるか哥こひければ

いやさはにぬく玉ぬしの年のをも玉の五百つの五百世たる迄

ある人の父の賀に

人の子の千世にといのる人のおやは千代にいまさね心たらひに

人の賀に

うつそみの世の長人となからへて千年にいほとせありこそわかせ

荒木田末偶六十賀に伴松榮久といふ𛂰を

いかて〱我もあえなむ松にあえて千年榮えむ君か契に

人の賀に寄鶴祝

まさきくて君はありこそたつかなき雲ゐゆく音のいや遠長に

長瀬眞幸か祖母の八十賀に

うみのこの八十のつき〱かそへ見よいのち長瀬の大母としは

渡會宮にまうてゝ

せとう哥

豐受の神のめくみはたふときかもよいのちつくうきのめくみのたふときかもよ

白子のむらたの並樹か萩の屋にやとりたりける夜かの里の人人來つとひてあそひけるにその屋の柱に万葉集なる萩のあそひせむといへる哥を書るをかけたりける三月はかりの事なりければ

萩か屋の春のこよひの圓居たぬしも花咲る萩のあそひのときにはあらねと

鷗羽といふから國人のかたに人のうたこひければ

かきなてし鷗の八束の長き世までにいかし矛いかしたけをの名はくちめやも

吉野百首

寛政十一年春紀國に物しけるかへるさまに吉野にものして水

分ノ神ノ社にまうてゝちかきあたり見あるきけるほとによめりける哥とも二月廿四日の夜わか山をたちて同シ國の橋本ノ驛にやとる雨ふれり

よし野山ゆきて見む日そ春の雨明日はなふりそこよひ降とも

明日はいきて見むとは思へと吉野山はやもこよひの夢に見えこそ

廿五日よへより空はれたり

ひさかたの空もはれたりいさ子ともよし野の山を行てはや見な

吉野山ゆきて見む日とおもへかも旅のうけくもけふはおもはす

よし野山見えそめたり

雲のまゆ芳野山見ゆはや見むと道の長手を戀つゝくれは

見わたせは百重かさなるむら山のおくかしらえぬみよし野のやま

ときしくにみ雪ふるとふみよし野のみゝかの峯も春日きらへり

霞のはれたるに見れは

眞白にそ雪ふりおけるみよし野のみゝかのたけはいまた冬かも

あまそゝりかねのみたけは雲ゐにそ高く見えけるかねの御嶽は

吉野の川へをゆく

よし野野神さひたてる岩むらをみれは神世のおもほゆらくも

河をわたる

吉野川むかしゝぬひて袖ぬれぬ船は渡れはすそはぬれねと

よし野河六田の淀はよとめれと我世よとます老にけるかも

山路にかゝる

霞たち木々のこのめもはるの日のよき日に吉野きて見るかよさ

吉野山つはらに見よと雨間あけし神のみたまのたふとくも有か

よしぬ山三十年經にて見れはかもうひに見るどいやめつらしき

まそかゝみ來て見ることに春草のいやめつらしきよし野やまかも

春の日にとりよろひたる御吉野のみつ山見れはものもひもなし

旅にして物戀しけどみよしぬの山川みれはこゝろはなきぬ

たひなれは家は思へと三吉野のよし野の山を見らくしよしも

草枕たひにはあれと吉野山のほりて見れは家わすらえぬ

のほる道のほとりに里人櫻の若木をうゝ

里ひとい櫻うゑつぐよし野山神のためとさくらうゑつぐ

いやうゑにうゑよさくらをよし野山尾上も谷もあひたなき迄

おほにうゑて櫻からすな吉野山根がたくうゑよさくらうゝる子

よき人のよしといひつる吉野山よく見て行てよしとかたらむ

そらめかもまことよきかもよしぬ山ふることとしぬふわか心かも

朝にけに見まくほりする吉野山見る時たにもよく見てゆかな

しは〳〵もつぎて見にこぬ御吉野の名くはし山をおほにやわか見む

日ならへて明日も見てしか芳野山旅のけ長み家はおもへと

みよし野のよし野の山はありがよひつぎて見まくのほしき山かも

中々に戀こそまされよし野山見てしよけくも我はおもはす

よし野山むかしのよゝのかり宮は春日きらへる峯のをちかも

春されは櫻かさして大君に山もつかへしいにしへおもほゆ

三吉野のよし野よく見つ今しはし櫻花見は何をかおもはむ

さくらはなへていまた冬木なから也

よしぬ山花さきぬやとわか見れはふくめる色もいまた見えなく

此ころははやさく年もあるものをなと花おそきみよし野の内

日をよめはさくらの花もよし野山いま廿日はかりあらはさかむか

わくらはにわれは來つるをみよしぬの櫻の花はけふこそさかめ

一枚たに咲て見えこそさくらはな吉野見にこしけふのしるしに

中々に見すてや過むよし野山さかぬさくらをみれは恨めし

よしぬやま時はちかきを花見すて我はやいなむさくもまたすて
さきぬへきほとはちかけと國とほみ吉野のさくらわはえ見にこし
櫻花さかむ日なみはちかけとも猶風寒しみよし野の山
よし野山うへも櫻のさかさらむみゝかの峯は雪もけすけり
三芳野の里人ともしさくら花さきてちるまて見らむ里人
櫻さく春はよし野に家をりて朝戸やりにも花見てましを
家にいきて吉野見てきとほこるとも花はと人のまちとはゝいかに
こゝたくに櫻なみたつよし野山さきのをゝりをみぬかいふせさ
花はしもいまたさかねと吉野山櫻のこぬれ日につくわれは
よしぬ山さかぬさくらか枝をたに折てかさゝな心なくさに
吉野山さかむ櫻の花またす我やかへらむ鴈ならなくに
よしの山よしやけなかくなりぬとも旅寐わかせむ花の咲まて
花くはし櫻おもほゆよしの山里のかきつに咲る梅見れは
なにしかも櫻さきでぬよしぬやま梅は盛もすきゆく物を
よしゑやしこれも花なり吉野山櫻ともひて梅をしぬはむ
よし野山くれなゐにほふ桃はあれと櫻の戀にめにもつかなく
道のへの青菜か花も花數に見つゝそわかゆく吉野と思へは
あし引の山もこたちも名くはしき吉野はよし野花はさかねと
御吉野は花の名高き山なれはいまたさかねとむかしくおもほゆ
さくら花いまたさかねと芳野山春にしあれは常ゆけに見ゆ
さきてあらはいかにわかれのうからまし見ぬもよし野のやま櫻花

水分神社にまうつ

吉野山花は見ねともみくまりの神の御まへをゝろかむかよさ
ぬさしろの物とりむけて水分の神の御まへにをろかみまつる
みよし野のみくまり山のすめ神に我はそいのるいのちさきくと
めこうからをしへ子ともゝまさきくとわれはこひのむみくまりの神
みくまりのかみのちはひのなかりせはこれのあか身はうまれこめやも
ちゝはゝのむかし思へは袖ぬれぬみくまり山に雨はふらねと
水分の山をし見れはかす〳〵にわか世のむかしおもほゆるかも
命ありて三たひまゐきてをろかむも此水分の神のみたまそ
かしこけどおやともおやと頼めかもあやになつかし水分のやま
のほり來てけふのよき日にみくまりのこのみづ山を見るかたふとさ
御たま思ふ心からかも見かほしき山はよしぬの水分の山
春されはこぬれか下になく鳥も聲なつかしきみくまりの山
みよし野はいつくはあれと神からやかくしたふとき水分の山
御吉野のみくまり山にゐる雲の朝よひさらす見むよしもかも
みくまりの神のさきはふいのちあらは又かへりみむみよし野の山

此峯より見わたす

みくまりの峯ゆはへたる尾のうへに家むらつゝく三吉野の里
をのうへに家たちつぎてみよしぬのよしぬの里は里なみもよし

里にかへりくたる

みよし野はうべもみやことみやこびぬ里のをとめか門出しりぶり
日ならへてゆたにも見すて霞たつよし野の國を別れかゆかむ
吉野山見れとあかにとわかゆけは眞木のはしなふあひ思ふらしも
まさきくて又かへり見むみよし野の見ても見まくのほしき春山
又も來て見まくほしけく吉野山千世の命をこひのむわれは
家もおもひよし野もあかぬ旅のけを思ひわつらひたもとほるわは
三吉野の青根かみねに立雲の立かへり來て後もまた見む
むかし見しきさの中山このたひは見すてかゆかむ象の中山
芳吉野今日來て見れは鴨かなく夏箕の河も行て見かほし

くたりて川邊にいつ

みよし野はむかしも今も見つれとも猶し見かほし山川をよみ

もゝしきの大宮人の船なへしよし野の河門見れはともしも

御よし野は山川清し神世よりうべいてましの宮しかしけり

此たひは見すてそわかゆく昔見したきの都のその跡ところ

こゝに來てなほ道とほみよし野のたきの河內を見すてか行む

淸き瀨の見れともあかぬよしぬ川鮎子さはしる時にはあらねと

よし野河つみのさ枝の流れきてよりにけむ瀨はいづへなるらむ

山もよし河もさやけしよき人の吉野よしとはうへもいひけり

わたる

吉野川さきくてありまてありがよひ又も渡らむ我もさきくて

まさきくて三たひわたりし吉野河もゝ度千たひ又もわたらな

よし野河かはかみ遠く立霧の思ひすきめやわかれゆくとも

けふ見つるよしぬの川の淸き瀨をいつの月日か忘れて思はむ

別れ來てかへりみすれはよしの山々そかくさふなひけこの山

その夜上市といふところにやとりてつとめて

昨日こそ吉野は見しかぬは玉の一夜へなれはとほくしおもほゆ

あまりうた

御吉野の山は山跡の影さもに國のしつめとたてるたか山

すめろきの神の御代よりよし野山神ともいますやまかも

高山は伊駒かつらきさはにあれとよし野の山に猶しかすけり

かなふのかりの宮の御事を思ひ奉りて

かなふとふ里やもいつくよし野山三世のすめらがおほ宮所

天の下大御心にかなひきやかなふはさとの名にこそ有けれ

たぶれらかこれの吉野の大宮をせめまつりけむまか事ゆゝし

藏王堂といふを見て

藏王ちふ神は神かも佛かもほとけにゝたる神の名あやし

ざわうちふ神はあらしな髮長のいつきそめたるほとけがみかも

川を渡るところにて

紀路に有て見てこしものをいもせ山吉野にも又あるかあやしさ

家にかへりてのち櫻の花の咲そめたるを見て

わかやとにさけるを見ればます〳〵にけふは吉野の櫻おもほゆ

鈴屋歌集五之卷

本居宣長詠

長歌

大御世ほかひの哥

高ひかる日の御子安見しゝわか大きみ萬代にいやとこしくに
おく山のはひろくまかししか葉のひろりいまししかえたのさ
かえいませとをろかみてあやにかしこみことほきまつる

大御神宮にまうてゝかけまくもいともかしこきすちは
中々に心も及はされはたゝかくよめる

神からやかくしよろしきさくゝしろ五十鈴の宮は山川のさや
けきみや木立のうるはしき宮こかねのかゝやく宮の玉垣の八
重にもとほるみつ宮の此大みやしあやによろしも

麻績機殿によみて奉れる

かけまくもあやにかしこき天てらす神の御ことゝひさかたの
天に始めし忌機のその神わさをまきむくの玉城の宮に天の下
しろしめしけるすめろきの御世の始めに神風のいせの國のう
みをなす長田の里にうつしもて神の御けしをあめなるやたな
はた姫のうみの子か手玉もゆらにおりなしてつかへまつりし
いにしへよ今のをつゝにつたへきて服部かともとろともに
うつき長月二をりのみそたてまつる神をみかいはふやしろに
たてるはた殿

遠江國人内山眞龍か出雲の大社に詣たる道のにき書た
る卷物を見せてそれか哥こひけるにそのはしによみて
書つけてかへしける哥ところ〳〵に繪もみつからかき
ませたり

神代より世のふることにかたりつきいひつきくらく八雲たつ
出雲の國のやほによし杵築の宮は天の下造りかためてもろ
もろの御たま給ひし百國の大國主八百萬ちよろつ神をまつろ
へてうしはきましゝ大八嶋くぬちこと〳〵天つ神御子の命に
あらはにのことはしらせとうつし國さりまつらしてもゝたら
す八十くまてにとこしへにかくりいましてめに見えぬかみと
しらす大御神大國ぬしのみたまをしいつきまつりねきまつる
その大宮ことかたりつきいひつきゝたりこゝ思へはあやにたふ
としうつそみのよの人みなのいつくへき神は此神まつるへき
神は此神その神の宮にしあれは我も又いかてまゐてゝたふと
きやみたまかゝふるよろこひの千重の一重もかつ〳〵ものみ
まをさむと朝よひにおもひわたれと國さかりとほくしあれは
心のみ思ひかけつゝあらたまの年も經ゆくをいや遠きとほつ
淡海のたまきはる内山ぬしはいそしくも思ひたゝして若草の
あゆひたつくりはろ〳〵に野ゆき山こえ河わたりゆきたらは

して其神の御門をろかみその國の神世の御跡まつふさに見し明らめて旅ゆきのふみかきしるし海山のかたかきうつし一卷にあつめよそひてこゝにしもしめし給へれっれしみとひらきて見れはこゝはくのふみのむかしさそこらくのかたのよろしさふみゝれはいよゝおもほゆかた見れはましてしぬはゆ出雲の國は

本末哥

河上の丹生のそま山斧とりて眞木の大木を中のまを宮木にきりて山つみにのこしてまつる本末のことわりしるく赤根さし豐さかのほる日の本のこれの山跡は掛まくもあやにかしこき天照すその日の神のあれましゝ本の御國とその御子のしらす御國と其神の御かけかゝふる天地のそこひのうらに天傳ふくたちの末にむらきものむらかりつゝき玉たれのをくに大國もも八十と國はおほにと日の末のその國々は末國と末のしわさにもち鳥のかゝらひなつみ言きよくいひはいへともさす竹の君をなみしてやつこらい君にかはりみ君らはも奴になりみよし野川早き時より國の本道の本まし水鳥のたゝすとほらすかりこものみたれてあるを本國は本の神世の御よさしの本のまにまにいそのかみふる野の道の本かしは本かたくして望月のかけすうこかすひさかたの天つ日嗣は神なからいやつき〳〵にむくさかに傳はりまして大君は神にしませは高御座たかき御かけをものゝふの八十伴緒も天の下四方の御民もところつらいやとこしへにかしこみてあふきまつろひたまきはるよゝをしふれは人國の敎よろしとさかしらをならはひ學ふ人はしも多くあれともたまちはふ神のめくみとしかすかに本をわすれす末々のいさゝけわさもいにしへのあとをたつぬる本國のてふりうるはしこゝをしもあやにたふとみ言擧せぬ國とはいへことあけしてたゝへまつらくあし原の水穗の國は百八十の國のおや國もゝやその國の本國うまし國は國眞秀國うらやすの國

反哥

世の人の本の本末思はすて末のもとすゑいふかおろかさ

さとしうた

秋つしまやまとの國は神なからさかしらせぬ國しひとせぬ國こゝあけせぬ國さひつるやもろこしのから國はしこのしこ國しこわさをしなめかくすと物かさり事いつはりていふとのこちたき國するわさのしひたる國をいかさまに思ひまとへかおむかしみすもうつせみのよ人もろこしのしこのしこゝとゆめよゆめよなまとはひそねうつせみの世人

おもふとをよめる哥

思ふといはすやまめやもろこしのからのこゝろのよの人はきかすともよし今こそはきかすあらなめ大直日神しいませは眞心に又もかへりて眞直にしきくよはあらむを思ふこと心にこめていはすやまめや

會テ二縣居ニ一慕二賀茂ノ大人ヲ一歌と楫取魚彦か春はも花くはし
櫻のめて秋はもさにつらふもみちをみると人さはに來
入をりうたによひさかゐらきしあそはひしあかたゐの
君まさてかなしそのあかたゐあはれとよめるをつてに
聞しこれかゝへし

あかた居に人さはにきいりをりいりをりてさかみつく日も君
かめのこほしけまくはうへなく〱さふしけむよそのあかたゐ

　此ついてにかの大人をしぬふうた

神風のいせのうみによる浪のとこよの浪のとこしへにかくし
もかとはろ〱にをろかみてわかたのみつかへまつりし賀茂
のうしそのうしはや

　天明二年の冬家のうちに高き屋を造りて又の年の三月
九日の日友たちをつとへてはしめて哥の圓居しける時
　によめる

をとめらかま手にまきもつさく鈴の五十鈴のすゝの鈴の屋は
しこのしきやの丸木屋のを屋にはあれとしなたてる梯ふみな
らしのほりたちふりさけ見れは御城のへのそのみつ山はみつ
えさししゝに生たるはしきやし君まつの木もうるはしく見か
ほし山そいさなとり海のはまひによる浪のいやしく〱にと
こしへに來入つとひてまそかゝみ見し明らめねみやひをのと
も

　鈴の屋とは三十六の小鈴を赤き緒にぬきたれてはし
らなとにかけおきて物むつかしきをり〱引なして
それか音をきけはこゝちもすか〱しくおもほゆそ
のすゝの哥はとこのへにわかゝけていにしへしぬふ
鈴かねのさや〱かくて此屋の名にもおほせつかし

あらきたの久老あさ名は宇治五十槻世の中の人のこつ
國のをしへをのみたふとみて大御國の道をしらすふる
ことまなひする人のなきをなけきてよめる長哥を見
せてそれかこたへの心はへの長哥とひけるによみてお
くりける

言さへくからの國よりなかれ來て八十禍津日のまかとゝ世に
ひろこれるくさ〱のしけきこちたきをしへらに思ひまとは
ひ人みなの心こと〱かにかゆきよこさになれゝそこをしも
あやにかなしみ神風のいせの國のもゝつたふ度會かたのあし
ひきの山田の原にものゝふの宇治らふ君もゝたらす五十槻ち
ふ君すめろきの神のはしめし安國の直きてふりを神國のあか
きこゝろを菅のねのねもころ〱にしたひつゝたふとみまし
ていせの海のおきへにおふる深みるの思ひふかめてうたはせ
ることをしきけはたちはなのあは木か原の清き瀬にうかひ出
ませる大直毘神のみたまのたふとくもあるか

　渡邊直麻呂か尾張の名兒屋よりとふらひ來て鈴の屋に
さやくすゝのねさや〱にをしふるうしの御言しぬひ
つとよめるにこたへける此直まろは始め田中道まろか

をしへ子なりけるを道麻呂なくなりて後おのれになもしたかひまなひける

皇神の御代のふること言靈の道しぬはしてむかさくるをはりの國よさくすゝのわか鈴の屋をはろ〳〵にとひこしわかせわかことをわすれすあらはおしねかる田中のをちかしるへせし其跡たえす春風のなこやの里のもろ人をすゝめいさなひ皇神の御世のふることことたまの千代のふるみちいやひろに廣めつたへよさく鈴のわか鈴の屋をとはすわかせは

甲斐國人萩原元克とふらひきておのかおしへこになれるか國にかへる時によみておくりける此人甲斐國名勝志といふ五卷のふみを作れるをこたひもてきて見せたり

なまよみのかひの國に秋の野にしなひ榮えてにほふなる花の名におふはきはらの君か此書うまこりのあやにおむかしその甲斐のくぬちこと〳〵梶の音のつはら〳〵に山のそき野のそき分てくまもおちすしるしあけたるはしきやし君かいさをは神のことよに聞えくるその國の武田たけをのたけき名と共になかれて萬世にしぬはえゆかむ君かいさをは

笠因直麻呂か大御神宮に千日詣といふことをしけることなくまうてをへたるをよろこひてよみておくりける

かけまくもあやにかしこきさくゝしろ五十鈴の宮は遠つ神わか大君のかふろきの皇大御神天地にてりとほらしてよろつ國御かけかゝふさるひかたの日の大御神の大宮といつきまつらしわたらひのその外つ宮は其神の御食つ大神四方の國たかきいやしきもろ人の命つくなるとようけの神の大宮とかきかそふ此二みやは天の下國のこと〳〵いにしへのしつはた帶をむすひたれたれしの人もうまこりのあやにたふとみみなといりに船こくことくきそひつゝまゐつる中に眞玉つくをちの小菅の玉菅の笠よりの子はちゝのみの父のみことのむかしへにまゐて給ひしその跡をつきのよろしく我も又まゐてむ物とますらをの心ふりおこし言たてゝかたくうけひてあらたまの年月まねく赤根さす日と日毎に夜のほとろ早くおきいてあかはたに水くみあみてさや〳〵にさやめ清めてあらたへの色あやもなきしらきぬを身にはとりきてはき高くかゝけ引をりあらわらのわらくつはきてうまやちに馬はかせともかちよりと馬にものらすとも人と人もつらねすかしのみのたゝひとりのみ雨ましり風のふく日も風ましり雨のふる日もおこたらす一日もおちす冬寒く雪のふるひもみな月のあつくてる日も一日たにやすむことなくみなのわた黒髪けつる櫛田川 竹川すきてうちひさす宮川わたりうみをなす長峯こえて玉ほこの道の長手をすく〳〵といゆきいたりて眞木さく檜の御門の大まへにいはひをろかみ嶋つ鳥うなねつきぬき國しらす君の命のあきらけき御世とほ長にいやたかにさきはへたまひつかへ人里の民らもやすらけく守り給へとあしひきの山すかのねのねもころに

いのりこひのみ其父のいそしみましゝ跡のこと百日を十の日ならへてもなく事なくたひらけく千度といふかすもち月のみちたらはしていそしくもまゐてをへけるはしけやしかさよりの子は子のことく我も思へはあやに〳〵たふとみうれしみたくつぬのしらひけのうへよ涙たるかも

尾張國の名兒屋に物してかへりなむとするときにかの國の殿人人見璣邑翁のもろこしの長哥つくりておくりけるにこたへとはなくてよみておくりける

少那毘古神のみことはすくなとふ名こそおはせれ御身こそはちひさかりけめ千萬の國をつくらし千萬のわさをはしめて天地にてれるいさをは萬世にのこるみたまはすくなとふ御名に似ぬこと眞菅よし尾張の國の小國とふ里しる君かその名にもおはせることたまもろこしの千萬書をくまもおちよ見し明らめて其國の事とりもちてまつりと申給へるいさをはし小玉ならめやから人もたからにすとふ大玉のてれる光はその國にみちたらはして天の下よもにも聞え事も名もとけにける身と今しはしつかへをやめてかきはきし大刀か緒とかし梓弓いよせたておきうつゆふのこもりいましてつら〳〵に思ひはからしにきみたまいやたらはせる青淵のふかき心はたちはなのかけふむ道のやちまたに分れてはあれとも〻たらすやそまかつひのまかとのたみたる道と大直日直日の神の眞直なるたゝしの道はおのつからふみもまよはす山松にふりおける雪のいちしろく見ゆらむものとにきみたまいよゝ日にけにたらしゆく君かこころのむかしくもあるか

小玉村といふは此人見氏のしる里なるをとりて璣邑とは名つけたるなりとそ璣は小珠也としるせりとそ

吉野山の哥

大汝すくなひこなの神代よりかくしあれやも御吉野のよし野の山はうちなひく春さりくれは高根には霞たなひきをちこちに櫻花さくあやに〳〵うらくはし山そよし野の山は

櫻の花のうた

つゝし花にほへるこらか若草のつま待かねて小金門に立田の山のこち〳〵のこぬれしみゝにさくら花咲る春へは草まくら旅ゆく我も咲花の色なつかしみ天雲のいゆきかへらひ過かてに木のもとことに駒とめてつら〳〵見つゝ玉ほこの道のゆくさきとほけともそこはわすれてたまのをの長き春日をくしらつるかも

わたらひの郡なるまへ山といふところの櫻花見にものしたる時によめるうた

天照す神路の山のまへ山の櫻の花のさかりをし見むと思ひて度會の豐宮川の川のへのつゝみのうへをたもとほりわかのほれは河そひのをてもこのもの山のまに咲るさくらも盛なるころとし見つゝ人みなも我もうれしみはや見むと岡への道をす

くすくこいゆきいたりてその山のこぬれを見れはその山の櫻の花はさく來ても見てまし物をくやしかもはや散過てのこれるもかつましれゝこ青葉のみしけくなりぬれいはむすへせむすへなみに立こまりふりさけみれは天つ空くもりふたかりくるしくも春の雨さへ風ましりふりきにけれは旅衣袖もしほゝにぬれて來て尾上の山へにたひねすわれは

よし野河に花ちりて流る

みよし野の山のさくらはたきの川瀬にちりてなかるも高根にしあらし吹らし川かみにあらしふくらしみよし野の山のさくらは瀧の川せにちりてなかるも

同しもしなき四十七もしの哥

あめふれはゐせきをこゆるみつわけてやすくもろひこおりたちうゑしむらなへそのいねよまほにさかえぬ

九月十三日こよひ椿瀧こいふ山寺の月見にこ物しける道にてよめる

みなそゝく魚町出てこなみはる坂な井川の板はしをいゆき渡りて藪の里そかひに見つゝいなむしろかはへのみちをゆくゆくこかへり見すれはよろしなへよいほのもりもやゝこほくさかり來にけり春霞井むらのさこのしつのをかおしねかりほす秋の田を見つゝしゆけはあかねさす日もかたふける山のはを我もめにかけ神風の伊勢寺すきてひこつ松たてる木陰よいわかれて岡への道をたもこほりしゝに生たるはたすゝきしぬをおしなへ露霜に衣手ぬれて蟹かゆきよこたき山の月見むこ寒きゆふへに分いるわれは

美濃國人柏淵有香かこへるによみておくりけるかの國の田跡山の哥

病人のいゆちふ水おい人のわかゆちふ水天皇の神のみとのかむなからうつの大御手よ大御面そゝきあらはしめてたまひきこしをしける青によしならの大御世よくすはしきうまし水こ常しへにわきなかれてみぬの國にありちふ水はいつへのいかにふ山にわきなかるこ國人にわかこゝへは國人のかたりけらくははしけやしみ山もこよに其水のわきて流るゝ名にしおふ多藝の多度山これそその山

尾張國にて名兒屋の御城の天守こいふ高殿をあふき見てよめる

こもまくらふこたかしらすたかこのをふりさけ見れは雲ゐにこ高く見えける大海のいかれる魚のかしこきやさちこふうをもわたつみのみやにまあらねこ此このにつかへまつるこ海原よあまかけりきていろこなすいらかのうへのいなたきの左みきりにうなねつき風のふく日も雨の夜もいゆきさらすてこゝしへにさもらふ見ればま菅よしこれのをはりの國しらす君の御いつは玉ほこの道行人もあはこ見ておころくまてにいちしろくめもかゝやきてあやにかしこし

ある人の京にのほる時におくりける

かけまくもあやにかしこし彌照の神の命のしきませる天の下に國はしもさはにあれとも山代の葛野の原は大八しま國のみなかとたゝなつく青垣こもり川なみのよろしき國と神なからおもほしめして萬世にかはるへからぬ大宮とさため給ひて眞木はしらふとしきまして天の下しらしめしける玉しきのたひらの宮はうしはけるわきいかつちの神山にしゝに生たるつかの木のいやつき／＼に天皇の御代かさねきていや日けに榮ゆる時と霞たつ春にしなれは音羽山木立のしゝに咲花を折かさしもち露霜の秋さりくれは月きよみ桂の川の川の瀬にをふねつらなめ人みなのあそふみやこをはしきやしあかせの君は天さかるひなにしませは玉ほこの道をたとほみ鳴神の音のみ聞ていつしかも行ては見むと年長くしぬひきにしをきのふかも我につくらく京見に明日そわはゆく春たゝはかへり來なむといひおきて時しはあらむを長月のしくれのときにあけくれの朝霧こもりむら鳥の出立ゆけはたらちねの母の命はつゝみなくさきくいゆけと天地の神にこひのみいつしかとまちか戀むなわか草のその妻の子は明たては門に出たち夕されは夜床かたさりぬは玉の黑かみしきてさふしみか思ひてねなむを草枕たひにはあれとうちひさすみやこにしあれはありよしと思ひますともにきひにし家わすらさすはやかへりませ

内山眞龍か遠江國にかへるに

あられふりとほつ淡海のあかせこか名におはしたるひさかたのあめの龍川たつかはのみをの絶せすあり通ひこね

渡邊重名か豐前國にかへるに

神風のいせの國のわたらひの山田の原は豐宇氣の神のみさとと大船のゆたにゝきはひ物さはにたらひてしあれは人皆のそこにほこらひかしこきや神の御かけもたなしらすたはれてあるをわたのへのみきのわくこはまきむくのひしろの宮に天の下しろしめしける天皇の神の命のいてましのみやこしかしゝ豐國にあれてしあれと豐國にほこりたはれす豐宇氣の神の御里に神國の道はあらむとなくこなすしたひ來まして其さとに住てはあれと里人にならひほこらす里人にならひたはれすぬは玉のよるひるといはすふるとのふみのまなひを大川のみくまか菅のねもころにいそしみますとあらたまのとしもきふれはいつしかもかへりきなむとたか／＼に父のみとのまたすらむ心いふせみ此春はかへりにたにもうちゆきてことゝひなこめいせのうみのありそにきよるまたみるの又もきなむと言にこそたやすくきこせ五百重浪千重浪へなるつくしちの遠きわかれは思ひかねつも

小篠御野か石見國にかへるに

たふときやすめら御國は言靈のたすくる國とたまのさちはふ國神風のいせの國とつぬさはふ石見の國と國こそは千里さかれゝ山こそはちへにへなれゝよしゑやし國さかるともよしゑやし山へなるとも立霧の思ひすくさすむらきもの心かよひ

て風雲に言し通はゝここたまのたすけちはひてここたまの道はまこはしわか兄子いなゝけかしそね今日わかるこも

尾張の名兒屋に物してものこきをしへけるかへる時に

木綿苑横井千秋のうまのはなむけに長哥よみておくりけるこたへによみておくりける

大君のしきます國に國はしもおほくあれこも里はしもさはにあれこもをはりのなこやの里は鳥かなく東の國にをすくにの事こり持て天の下まをし給ふおほおみの君の命の御うからの殿のみとの大君のこほのまもりこ御世かさねしります國其國の國のまほらこ眞廣らにしきますさこたまほこの道のやちまた赤根さす日のたてよここ廣くさく町ゆきこほりいろこなす家たちなみてけふりたつかまこにきはひ八萬の人そみちたる四方八面に家なみ敷て殿人もこのゝまもりここゝたくにつこひさもらふ其中に横井の君は飛驒たくみうつ墨繩の一道に直き心をさす竹の君にかゝして皇神のまとの道を年魚市の海おきへに生るふかみるのふかくたふこみうつそみのよの人みなも此道をあふきよそりてますます〳〵にくぬちやすけくたひらけくもなくとなく遠長に榮えいませこ朝よひにわすらすまなくあしひきの山菅のねのねもころにこひのみまつる眞心のしるしなれかもあらたまのこのとしころはもろ〳〵も直く正しき此道のたふときここをやゝ〳〵にさこりしりえていやひけにあふきまつるをうれしみこ語らす言をきく我もこもにうれしなゆふそのゝいそしきあかせ我はけふ別れいぬこもつるきたちいよゝこきつゝ庭すゝめすゝめいさなひこのみちをくぬちあまねくいやひろにひろめ給へな此道のさかゆくなへに月に日に國も榮えてさかゆかむ里のてふりを佐屋川のせゝの河浪立かへり又もきて見むいやこしのはに

千家清主出雲國にかへるに

八雲たつ出雲の國は神國の中にここなる神國こ神の御跡も神わさもここにのこりてあやに〳〵たふこき國其くにゝあやにたふこき事はしもさはなる中にかむろきのみここかしこみ雲路わけあもり坐けるはたすゝき菩比の命ひなこりの神の命の御末つくおみの君こそ神ろきのみとのまにま傳へきて氏さへ名さへつかさゝへたえすかはらすまさきつらいやこほなかに天の下造りましける大名持神の命の大宮を今のをつゝにかしこくもいつきまつらせうつそみのこの世のさかこ物皆はうつりかはらひ時々にいきほひたけきものゝふはさはにあれこも神ろきの神のよさしの此君そここにたふこき其君のうからやからもつき〳〵にさはにあれこもはしけやし清主の子はその君の弟の命さくすゝのこの鈴の屋をはろ〳〵にしたひ來ましてたまちはふ神の心かたふこきや神世の道をつはらかにたつねもこめてこまつるき我もあきらめ其國の人をもさこしその國にいよゝます〳〵神國のしるしあらはし神國の道ひろめむこあらたまの此月ころを草まくら旅のやこりにぬはたま

のよるひるといはすねもころにいそしみませるおこなひも氏も心も名におひて清ぬしの君これそこの遠つ神祖のなりまし八さかの玉のみすまるをぬなともゆらにひさかたの天の眞名井にいやさやにふりすゝきたるきよぬしのきみ

小篠御野か江戸にゆくわかれに

あらたまのこその此ころつぬさはふ石見の國よいにしへの道をたつぬと此里に來にてし日よりさく鈴のあかすゝの屋に時となくなすやをすゝのねもころにあひかたらひし眞玉つくをさゝのをちは其君の命かしこみもゝたらす十を七つのとし高き老の身すらをいたつきも思ひわすれて東路のはるけき道をくさまくら旅より旅に出立て別れもゆくか別れなはさふしけめともよしゑやしわかせもわれもたひらけくまさきく在ていはみのうみおきへにおふるふかみるの深き心しときはなすかはらすあらは伊勢の海のなきさによるまたみるの又もとひこね又も逢見む

荒木田ひさかたか江戸にまうてゝ年のはしめのほきことと申ける事をよめる哥をかへりて見せにおこせけるに
よみておくりける

大君の遠の朝廷とむさし野をひろらにしめて萬代に堅き大城と大殿をたかしりまして天の下申給ふとものゝふの八十伴緒をめし玉ひつとへ給ひて八十國をしつめたまひなて給ふ君の大前にあらたまのとしのはしめの初春のよとまをしにはしきやしわかせの君は鳥か鳴その東路の浦風のあらきいそまをふる雪の寒き山路をはろ〳〵にくたりいましてつゝまはすかへりましぬといせのうみのうら吹風のとほとにもきこす御言をきかくしよしも

寛政二年十一月廿二日の日かり宮より新大宮に御うつろひの大みゆきを見奉りてよめる

掛まくもあやにかしこき天皇の神の尊うつそみの世の事なれはわかこもをかりなる宮にしましくは大まし〳〵ぬしかれともまそみの鏡あきらけき大御心は天地に照たらはして咲花のにほふかことくさかりなる大御世なれはものとにさかゆく時にもゝしきの大宮すらをあふさわに思ひてあらめやいにしへのかたち尋ねてまくはしく造りなさむと神ながらおもほしめして大命おほせ給へは天地の神あひうつなひもろ〳〵のよさしのつかさ手人とも大たくみらも大きみのみとかしこみ家わすれ身もたなしらすぬは玉のよるひるといはすいそしみてつかへまつれはあらたまのとしたに經すて玉しきの平安(タヒラ)の宮は又さらにひかりてりそひ玉のこと造りみかけれ玉のこと照たる宮の瑞宮のこの新宮にむくさかにうつりいますと御尾前(ミサキ)の御ともあともひ馬車きものとり物まつふさにいとりよろひて冬こもり春かたまけし霜月のけふのたり日に天のはら豐さかのほる朝日影にほひかゝやき大御鳳輦(ミコシ)よそひたゝしていやさきにいたし車のそめ屋形道もてるかに百たらす八十との

をはゆく鴈のひきつらなみてかきかそふ八くらのつかさ物申すつかさつぎたちもとしけく春咲花の桃の花名におふまちの其殿の大まへつきみ雲のうへちかきまもりのまへつ君左みぎりと馬なへて弓とりもたし二つらに分れつらなり大御さきつかへまつらしひさかたのみそらたかゆく鷹つかさ殿の命は食國の事とり持て天の下まをし給ふとゆくらかにのらし給へるを車の牛のあゆみのゝとかなる御世のかためと御しりへにたたし給ひて玉ほこの道の長手をたもとほり大路に出て鳥かなくあつまに通ふ白雲のあはたのやまをさき竹のそかひに見つつたくふすま白川わたりおきにすむ青羽の鳥のかも河の清き川瀬にさす竹の大宮人の花衣きそなふ袖の色々の影もうつりてそらかそふ大はし小橋馬のつめふみとゝろこしつぎ〳〵にいゆき渡らし大御城の内に入たち日の竪の大路をゝれて日のよこのみちゆきすゝみ九重の外の重を過て中の重に入ますはしに打あくるつゝみのひゝきふきなすや笛のしらへはみ雪ふる冬ともいはす春日なす空もうらゝにはろ〳〵にきゝのよろしく水垣の久しく絶し遠御代の跡をたつねて古に又立かへり望月のたらはしたてる大殿を萬世までにいや高にたかしきますとあらたなるその内の重の大御かと指て入ます今日の此大行幸をしあまさかるひなの國へのいやしきや御民われらも風のとのとほとに聞てともしみとのほりまゐ來てしゝしものいはひをろかみ天つ空あふき見まつるここのたふとさ

反哥

いやたかにみつのにひ宮しきそめて御世は榮えむ萬代までに

小野某のむすこの半元服といふをしけるによみておくりけるほきうた

大皇のとほの守りと神風のいせぬちかけてあさもよし木の國しらす吾君のまけのまに〳〵小松おふ小野の君はわかえさし千年よこもる松坂にふたのつかさともゝくさのことゝりもたしあらたまのとしの七とせいそしみていますあひたにはしけやしわく子の君も草まくら旅居の里の名におへる松の若枝のたちのひてひたらしませはいつしかも人とならむとかきなでておふし給ひしみなのわたかくろき髪のたれかみのまろき額を眞櫛もてけつりかきあけひしのみのかとにかきなしますらをのあやにをゝしき御面わとたれるみおもわ月に日にいやたらはしてとほ長く榮えゆかさね小野のわか松

村田橋彦か老たる母をゐてかくれかにうつり住けるよろこひの哥をきゝてよみておくりける

あしたつのむら田の君はたくふすま白子のうらのまこもかる江しまのさとにくれ竹のよゝをかさねて松か根のとほく久しき家の子とえられ給ひてその里をうしはきいますその君につかへまつらし其里の事とり持てあらたまの年もへぬれは今しはしいきもやすめてたらちねの母の命におこたらすさやるとなく朝よひにつかへまつらむとまつるきわか老の世も事なく

てやすくしつけくわたらむことはかりして事しけきつかへのわざも家わざもわくこの君にこと〳〵にゆつりのかれて春の日ののどけき屋戸に母子草母子たつさひもろともにうつりましぬれそこをしもあやにうれしみ此屋戸のかまどのけふり萬世に絶ることなくそのすゝの八束たるまてまさきくとよほきませるほきとのよさ

岡田元善の祖母の九十賀によみておくりける

眞玉つくをてもこのもにみつえさししゝに榮ゆる松かけの岡田の君のちゝのみの父の命のはゝそはの母のみとはうつそみのよの長人と八十年にとゝせあまりてもゝとせもちかき十年に此春はたらひ玉へれそこをしもあやにうれしみはしけやしひこなる君の海山に思ひたらはしたし〳〵にほきまつらすと風の音の遠音に聞てあれも又いほきまつらむほきことは何ものよけむそのやどの蔭としみたつ松こそはさかえゆく物それこそは世の長の物これよけむこれそよけむと其松によそへまつらくその松にあえて榮えて千代にいまさね

反　歌

朝日てる岡ひの松のとこしへに榮えませやもいやとこしへに

田中道麻呂かみまかれるをかなしみてよめる時は十月の四日になむ有ける

夢かもおよつれかも道まろはいのちしにきと玉つさの人そつけつるえかなしゑひさにし見ねは戀しけく有けるものをえかなしゑ我はかなしゑ世の中にいひつきゝたるかみな月神なき月とたまちはふ神もなけれや言たまの道いそしみし道まろをいのちしにきときくかゝなしさ

あらきたの尙賢かみかりにけるに

天地の神しうらめし皇神の道のまなひにたゆまはすいさをしかりしあらきたのはしきあかせを思はぬにあらしの風のにはかにもさそひいゆきて玉つさの言もかよはぬとこよへの人としなりていつはあれとことしの秋のゆふくれの心もしぬにかなしきおもへは

渡邊直麻呂か正月十三日にみまかりにけれは

沫雪は消て流れていはゝしるたるみのうへのさわらひのもえ出る春は物とになり出るものを事ここにたぬしき物を大ふねのわたのへの子はいかなれか時しはあらむをあらたまのその初春を早蕨のもえ出るしらにあわ雪と身はきえぬらむとし久にむつひしとをうつら〳〵思へはもとなあしひきの山へにゆきてもえてたるそれのさわらひをり見ても我はそしぬふ沫雪ときえてかなしきわたのへのこを

越智廣海か八月のころみまかりにけれは

大海の廣海の子はいかさまに思ひけめかもはしけやし花や月やとをり〳〵につどひかたらふみやひをの友をわかれてもゝくまの道をたとほみ風雲に言も通はす友もなき夜見の國へにわをまつと使きぬれは我はもよまかりいゆくと旅ゆきのよそ

ひもせすて萩か花ちらふ秋野の朝風にかきもけつらぬゝは玉の髪はみたれて朝霧にあらひもかへぬしきたへの衣はぬれてたゝひとり思ひうらふれはふつたのわかれいにきと玉たれのをちの其子をきくかかなしさ

柿本神の御かたに人の哥こひけれはよみて書ける

はしきやし哥おもはしゝ此神のこのかた見れは此神をいまのまさめに見まつりてたゝに其哥きくことおもほゆ

山部赤人宿禰の富士の山を見てたてるかたかけるに人のうたこひけれは

うちよするするかの國のふしのねは天の下にふたつなくたかくたふとくとこしへにきゆる時なく眞白なる雪しくすはしその山のそのしら雪をあしひきの山部のうしのたこの浦ようち出て見けるその哥もいにしへ今にすくれてそ高くたふとくゝすはしき其の山のことその雪のこと

楠正成主のかたに

うまこりのあやにくすしきくすの木のうしの命のあめつちにいたれるいさを一たひはたちけるものをうつそみのよのまかとゝ二たひはたゝすてつひにみなと川うかふみなわのいたつらになりにけるかもいたつらになりてはあれとおほきみにつかへまつろふものゝふのかゝみとなりて天地のよゝのあひきはみ天地にいたれるいさをはもち月のてりたらはしてたちにけるかも

ふしの山のかたに

あやに〳〵たかくたふとくくすはしき山は富士のねうつし世の神とも神とたゝなつくよものむら山高山を小田のつむれとあしもとのふもとになしてかしのみのひとりぬけてゝ青雲のたなひく空にあまそゝりそゝりたゝせり其山をたゝにまさめにふりさけて見し人こそはまとしかたかくたふとくくすはしきことはしるらめ鳴神の音のみきゝていまた見ぬ人はかつかつ月草のうつし書たる此かたを見てもしぬはね此山の高くたふとくくすはしきと

ちかき世ふり

櫻花のうた

かけろふのもゆる春日に立出てふりさけ見れはあしひきの山の尾上はきのふけふ雲も霞も色そひてにほふさくらの花さかりしるもしらぬもうちむれて山分衣はる〳〵とひはりなく野のはつわらひをり〳〵通ふ春風も袖にえならぬ花の香や見過しかたき道のへの木の本とにたちよりてなつさひゆけは唐錦こきませておる青柳のいと長き日もすみそめのゆふへになりていとゝしくまさる色香をあたらしみ故郷人はうらむともよし一夜はとくさまくらあかぬ木陰に族寐して猶うは玉のよもすからかすむ木の間の月影に見るほともなく山寺のかねのひゝきもほの〳〵と花よりしらむ山かつらかゝるなかめの世

には又あらしも絶し高根よりさしものとけき朝日影うつろふ枝にこつたひてなく鶯の羽風にもたゝ一ひらはおのつからちりくる色もしつかにて見るにはあかぬ花染の衣の袖に引よちてをりかさしつゝけふもなほ家路わすれて梓弓春の山への櫻かり世のうき事も此ころはしはし忘れてある物をそも一年に二たひはあひみぬ春とおもふにもあかぬは花のさかりにてちらぬ日數をなかゝれとしめ引はへてちはやふる神にもいのり人ことに心のかきりをしめともとまらぬいろをいかにせむ此花ゆゑのとしことの心つくしをかそふれはまた白雪のふるとしに見まかふ木々の梢よりその面影を思ひそめ日數つもれはあらたまの春立かへる山端に心もかゝる朝霞かすみそむれは谷川のこほりのひまのはつ花ははつかにさけと初草の野への雪間もかた糸のよる／＼は猶さえかへりたゝいたつらに春の日もあまた重なるから衣ひもやゝ長ききさらきや吹來る風も寒からて眞木の板戸の朝戸出に庭の一木をなかむれは花の下ひもときゝぬとこのもかのもに咲そめて今はさかりもほとちかみ吉野たつたのおくまてもこゝろうかるゝ八重かすみ深くなりぬるゆふへより雲ゐの鴈の玉つさもかきくらしふる春雨にうつろふ色を思ひねの曉かたの山おろしふくかとすれは時のまになへての櫻さくと見し昨日の花も春の夜の夢

二月のころ戒言ほうしか長哥よみておこせけるかへし

わかの浦やみちくるしほのいやましに深くなりゆく此ころの君か心につく／＼と思ひつらねし春の日の長き言葉の玉のをはくりかへしつゝ津の國のいくたのもりのいく度か見るにもあかす花鳥にたとへていはゝ朝日さす軒端のつらゝうちとけてなく鶯のはつこゑか遠山かすむ夕はえにまさる櫻のにほひかといふにもあまり有明のつきぬ心をたねとして今行末もたゆみなくはまへにあさるあしたつの友よひかはし春秋の時につけたる花紅葉をりをわすれぬなさけあらはいせをのあまのあまを船さしもかしこきいにしへのよゝの跡にもおきつなみ立かへるへきしき嶋の道のさかえを見るかたのしさ

京の山田孟明か許よりふみおこせたるかへりことすとてよみておくりける

かそふれはみやこ別れし年もはや十とてみつの春かすみ又立かへりめくり來てうしの車のわかとしもよそに聞こし老らくのたつねくるまてなるみかた鹽くむあまのなれ衣なれしむかしの友鶴も雲ゐはるかにへたゝりて磯邊の浪のよるひるといはす戀しき其中に山田の早苗とり分ておもひいつみの杣人のたつきもしらすおく深きふみの道芝うちはらひさきにたちつつしるへせし露のめくみはいまさらにかけてもいはすあらたまの春は野山の花のかけ袖をつらねて菅の根の長き日くらし秋の夜はさやけき月にいとゝしき光をそへて敷しまやゝまともろこし數々の君かことはの玉くしけあくるもしらす圓居せしそのをり／＼も夢とのみなりにける世のはかなさをかたり

あはせむ人もなみ谷の小川のひとつ橋ひとつ心にかけてのみ思ひわたるもかひなきに又しもゆきて逢坂の關の杉むら過し世の事もかたらひ此ころのみやこのさまもます鏡見むとはつねに思へともしつかつま木のしはしたに事しけ糸のいとまなき身をうら舟にさすさをのさすかわすれす時々にふりはへてとふ鈴鹿川ふかきなさけの水くきをみるに心はきの國の名草のはまのもしほ草かきやるかたもなみたのみうれしきせにもまつなかれつゝ

うしの車のとよめるはおのれ京よりかへりし丑のとしなりけるを又同し丑の年になれるをよめる也我としもよそにとはおのれ四十になりぬるよしをそへたりさて此哥よみいてゝやらむとせしほとに孟明やまひしてにはかにうせぬるよし聞てやらすなりぬ夢とのみなりにけるよのとしもよめるもゆゝしくあはれにあへなくなむ

きの國のわか山よりかへりける時にかしこの哥よむ人人によみてのこしおきけるうた

敷島の道まもるてふ神垣にまちかき里のしるしあらはよりくる浪も名にたてる浦の友鶴聲絶すあしたゆふへによひかはしなるゝ礒への松の葉のかはらぬ色をためしにて春は野山の花の本秋は入江の月影に心をうつしをり/\のうさもなくさのやますして木の河水の底深くちしほやちしほそめ/\てこしもつもらはおきつ風その名をよもに吹上の濱の白菊千代とほく言葉の花々にほはさらめや

業平朝臣の像かきたるに

むかしをとこみはなりてのこる言葉の花はなほ春やむかしの春ならむとはかり今もにほふなり

山家のこゝろをよめる

世のうきことはのかれすむ柴のあみ戸もさすか又あらしの音の身にしみて都こひしき山のおく

このふたつは中昔によみあへりし今やうといふうたなり

泉舘舎暉か家の庭にみちのくの松しまのを嶋の松をうつしうゑたりとてそれか哥こひけるによみておくりける

うつし植し屋戸のあるしも眞木の戸を明暮見つゝふかみとり千代のさかえをまつしまのをしまの松となからへて影をならへむ清き泉に

鈴屋文集上

本居宣長作

二御靈祭告刀詞

掛麻久母畏佐、崇道盡敬皇帝命乃大御靈、寧樂大朝乃民部卿、太朝臣命乃御靈、二柱乃御靈乃大前爾、姓名等、恐美恐美母申給波久登申須、皇帝命波、日本書紀乎撰比給比、朝臣命波、古事記乎記志給比弖、天地乃判志時與理、神乃御代乃御々代々乃、七御代乃御代御代、五御代乃御々代々、天皇命乃遠都御代乃御々代々乃、天津日嗣乃御次乎始弖、世間爾有登志有都年、雜々之故事乎、漏流事無久、落流事無久、委曲爾撰比給比、記志給弖、天地之共彌遠長爾、大皇朝廷乃大御寶登、遺志給比、傳閇給布、廣佐厚佐大御惠爾依弖志、千年五百年乃後乃世爾、遠遲奈久拙佐、某等我友賀良爾至麻弖爾、遙都佐神代乃有都流形乎、宇迦々比尋禰弖、明都佐貴佐御世乃意乎、百箇我一母、悟知事得弖志有流恩賴乎、二乃御書讀奉流度每爾、頂爾捧持弖、畏美宇禮斯美奈母思給布、故是以今年乃某月乃某日乎、生日乃足日登擇定弖、某之宅乃奧乃小床乎、伊豆乃磐境登掃比清米弖、奧山乃小柴之枝乎、打折持來弖、伊豆乃眞坂樹登、二所爾刺分波夜志、齋比奉弖、和幣取置佐、忌瓮居並倍、海山乃多米都物乎、貟奈貟奈、机代乎貢奉弖、恐美恐美母申佐久、二柱命乃御靈等、今如是刺立齋奉流神籬爾、唯暫時之間、天翔依來坐弖、漏落事乎波、神直毘大直毘爾、見直志聞直志坐弖、貢奉禮流物乎、神隨平邪久安良邪久所聞看弖、今母去前母、某等之學乃業乎、彌助爾助給比、彌獎米爾獎給比弖、八十禍津日乃禍事有世受、夜乃守日乃守爾、守幸閇給閇登、某等諸共爾、牡鹿成膝折伏世、鵜自物頸根衝抜弖、恐美恐美母申給波久登申、

此祝詞は、石見國の濱田のはかせなる、小篠御野がこひけるに、つくりてあたへたるなり、

拜二藥神一詞

大穴牟遲命、少名毘古那命、二柱大神乃大前爾、姓名恐美恐美母白久、遠津神代爾、二柱相並志弖、御心乎合世賜比、御力乎合世賜弖、諸共爾大八洲國修理堅米賜弖、國作坐大神登、稱辭竟奉大神等、諸乃病乎治平流、藥乃方乎母、始賜比定賜弖、天下爾所有流顯見青人草乃、苦瀨爾落弖、阿都迦比惱牟乎、助賜比救賜閇婆、此某等我醫藥乃業母、大神等乃、米具美賜比知波比將賜、御靈爾依弖志、過都事無久、驗波將有登、廣佐厚佐恩賴乎、恐美恐美母、歡奉理宇禮志美奉流登、姓名恐美恐美母白、

此詞は、くすし村田光庸がこへるに、作りてあたへたる也、

甲斐國酒折ノ宮ノ壽詞

那麻余美乃甲斐國之、此酒折宮者母與、纏向之日代宮爾御宇斯、天皇命之大御代爾、倭男具那倭建男、天下之益荒建男神建男登、皇子之隨所選賜弖、千引石乃重伎難伎大命乎、重浪之頻蒙斯弖、西國能、无禮熊曾乎言向賜比、東國之、荒振蝦夷乎和賜弖、神登母神登、宇都曾美乃世爾比無伎、建伎由々斯伎大御稜威之天下爾、萬代爾、天津日登照耀加須、宇豆能大御子、倭男具那倭建神之命之事訖弖大事竟弖、蜻蛉嶋倭國爾還坐時、衣手能常陸乎過、足柄御坂乎越而、御篶刈科野國之、御坂神乎多比良氣牟登、過理坐流其道之、其行宮登、神隨逗坐弖、後世邇、片歌之續歌之、事之始登仰那流、新治筑波乃大御歌乎、讀斯賜幣流、其宮所蹟處登、百繼十嗣御世者移禮杼、千年五百歳年者經奴禮杼、余呂志那倍宮者宇勢世受、跡者絕不爲、今行前母、比佐迦多能天津日登、天津日嗣登、倭男具那倭建神命之、無比伎建御稜威乃大御名登、共々邈諸共爾、長良閇弖傳波理弖、萬代爾常登波爾、彌高邇彌廣爾、照將去榮往牟、宮處蹟處、寬政之三年云歲之正月、伊勢國飯高郡之御民平阿曾美宣長、畏々母壽白、

駿河ノ國ノ安倍ノ郡ノ木枯ノ森ノ八幡ノ社ノ前ナル碑ノ詞

木枯森者、駿河國爾在事者、古今六帖之歌以斯良延、阿倍郡爾在事母、風土記爾所見而、宇都母那志、抑此森者、彼六帖在乎始登爲而、後撰集在歎伎之歌、又定家乃卿之、下露乃言之葉何登、自古、於世名高久所聞弖、今母佐陀迦爾、服部乃邑云邑地爾在而、伊登神佐備在處爾奈母有祁琉、伊都伎祭神者斯母、掛麻久母可畏、廣幡之八旗大神、然婆加理奈流名所爾斯、鎭伊坐者、此母甚比佐々那流社爾許曾波伊麻曾加流良米、此社、近伎年來、由々斯久荒坐斯乎、邑長那流、石上長隣伊、勤志美有人爾弖、可畏久歎愁而、心乎起志、力乎致志弖、又美麗玖修造奉禮流、神伊都伎能淤牟加志佐波、更爾母不言、古偲雅情乎母、世乃人能心將有、聞喜備見喜而、森之木葉乃、年乃葉爾繁榮而、無絕世如事、萬代爾傳爾、不偲米夜不仰米夜、如此言者、天明乃七年云年之、五月乃月立、伊勢人本居宣長、

縣居大人の御前にのみ申せる詞

さき〴〵萬葉集にいふかしきくさ〴〵、かきつらねて、つぎつぎにこひあきらめ、又のりながよつたなき心に、おふけなく思ひえたる事ごとをも、かつ〴〵かきまじへて、よきあし

きことわり給へと、こひ申せる、をぢ〳〵の中に、いとよこさまにしひたることども、これかれまじれり、今より後、かくさまのことは、つゝしみてよと、深くいさめ給ふ、みことをかゞふりて、いとも〳〵かしこみ、はぢ思ふが中に、かの集の巻のつぎ〳〵、かりこものみだれてあるを、淺茅原つばらつばらにわきため正し給へる、うしの御心にしたがひて、これはたおのがおもほしきまに〳〵、ことさまにしも論ひさだめて、こゝろみに、見せ奉りし事はしも、いま思へば、いとゐやなく、かしこきわざになも有ける、かれ今のみの詞をさゝげて、かしこまりまをすことを、たひらけくきこしめさへ、又うたがはしき事は、猶はらぬちにつみたくはひおきて、ひらく時をしまつべきものぞと、をしへ玉へる、まことに然はあれども、しかうたがひつゝのみあらむに、おろかなる心は、いつかもはるく時あらまし、然るに今大人の、みさかりに上つ代の道をとなへます世に、生れあひて、雲ばなれそきをる身は、御むしろのはしつ方にも、えさもらはぬものから、其人かずにはかずまへられ奉りて、心ばかりは、朝よひさらず、御許にゆきかひつゝ、百重山かさなる道の長手はあれど、玉づさのたよりにつけては、とひ申す事どもを、いさゝかもかくさふことなく、菅の根のねもころにをしへ玉ひ、さとし給へば、しぬはしきいにしへの事は、ますみの鏡にむかへらむごとくに、たまぢはふ神の御世まで、のこるくまなくなも有ける、かゝるさきはひをしもえてしあれば、おろかなる心に、つもるうたがひは、おのづからひらけむよを、まつべきにしあらずと思へば、かつ〳〵もおもひよれるすぢは、さらにこころにのこすことなく、おもほしきまに〳〵、まをしこゝろみ、あげつらふになも、そが中には、しひたるもひがめるも、おほかるべけれど、本よりすみぞめのくらき心には、それはたえしもわきまへしらねば、よきもあしきも、たゞ明らけきうしのことわりをまちてこそと、ひたぶるにうちたのみてなも、かれいまゆくさきも、なほさるふしのあらむには、しかおもほしなだらめて、罪おかしあやまてらむをも、神直日大なほびに、見直し聞直したまへと、かしこみ〳〵もまをす、

林崎の文庫の詞

はやし崎のふみぐらは、むかし鴨ノ長明が、まはではいかでと、過かてにたはぶれけるところ、わたらひのあがた宇治ノ鄕、大御神の宮のへちかくて、やゝ里はなれ、山かたかけて、木立もしゞにさへてしあれば、ほむすびの神のあらびも、たよりなくて、いとよき藏どころになも有ける、そも〳〵くらぶてゝ、財をゝさめおくことは、伊邪那岐ノ大神の、天照大御神にさづけまつり給へりし、御くび玉の大御名を、御倉棚ノ神ともまをすなるは、御くらたて、御棚かまへて、いつきをさめおきまつり給へりしゆゑにぞ有けむ、これをやそのはじめとはいはまし、然有て石ノ上の神ノ宮に、天のほくらを建玉

ひて、もろ〳〵のうづの御たからをゝさめ給ひ、大藏のつかさを設て、國々の御調のたからをゝさめられしも、上つ世よりのわざなりけり、かくて又雨露の蔭のみならず、垣ゐるぬす人のまがをふせき、物やく火のわざはひをのがろへしめて、またくたひらけくあらせむと、眞埴あつらにぬりめぐらし、くぎかたらかにさしかためて、吹風のいるべきすきまもなきかまへは、中つ代よりのことはかりにこそ有けらし、こゝにふみといふ寶は、輕嶋のあきらの宮の大御世に、百濟より、もろこしの國のを、つたへて貢りしより、有そめて、あまねくよみならひ、もちひなれ、こゝにはた、すぎ〳〵出來ては、これぞこの天の下の底寶、御たからぬし、あるがうへにも、いやさはにあらまくほしきは、此たからになも有けるを、神の御靈のさきはひなるかも、此ふみぐらの、まけのたふとくおむかしき事はよ、此大宮のつかさ人も、御里人も、まなびよみてば、大皇國のはさらにもいはず、外つ國のくさ〴〵のも、事のこゝろをひろく見わたし、あるはそのあしかるあとにくらべ見て、よきをさとり、神のみかげのすぐれませるを、思ひしりねと、いにしへ今のよろづの書ら、得なむまに〳〵をさむべくなも、里のむかしのおきな人の、かしこくおきてて有ければ、いまよりはた、あつめそへつゝ、八百萬千萬卷と、ありたらはして、棚板もたわゝ〳〵に、横山のごといやつみなべて、藏の內こころせきまで、たくはひおかまくほしかるを、世中にふみたふとばむ人どもは、思ひよれらむまにまに、佛ぶみをはなちては、山跡のからの、又みづから作りたらむ、すべて何ざまのにまれ、いさゝけき一卷も、たてまつりをさめなば、此里をうしはきませりし、猨田毘古ノ大神も、御たま給ひて、まなびのみちびきし給ひてむ、其書はた常磐にかきはに、はふれずうせずて、神の御郷のそこだから御たからぬしと、長き世までに傳はりなむものをや、神の御たまのさきはひなるかも、此倉のまけのたふとさおむかしさ、天明の二とせといふ年の、十月のとをかあまりやかの日、いひたかの郡の御民、本居宣長、

荒木田久老神主の五十槻園の詞

あらきたの久おゆの神主い、世の人の、五十槻の君と聞ゆなるは、その家ぬちに、物まなびせす所の名をし、いつきの園といへばなりと、風の音のとほとに聞て、思へらくは、遠つ神世に、建速すさのをの大神の、御子神たちをひきゐまして、もゝたらず八十の木種を、大八洲くぬちしみゝに、まきほどこらし給ひしより、青山なせる木はしも、さはにみちてあれども、槻の木はもよ、あるが中に、ことなる故かも有けらし、はつせの朝倉宮に、天の下しろしめしゝ大御世に、三重のうねべがさゝげたりし、大御玉うきに、ふりにし言葉を始めとして、いにしへの御世々々には、此木のこの本にして、こよのあかり見しせし事も、大御饗たびけるあとも、いそのか

みふるきふみらに、かた糸をより〳〵にぞ見えける、然りけるのみならず、なにはのとよさきの宮の大御世のはじめには、臣連八十伴緒をめしつどへて、おもきゆゝしき御うけひ言を、きこしめしゝも、此槻の木の木の本、又淡海の大津宮に大ましまして、天の下しろしめしける天皇命の、大御祖命の御代より、春べさくふぢはらの大臣と、大御心をあはせまして、いなしこめきたなきやつこをほろぼし給ひ、まさきづらいやとこしくに、かはらずたえぬ、天つ日嗣のゐや事をし、たて給ひ定め玉ひし、君臣のふかきかしこき御むつびも、此槻の木の本よりこそは始まりしか、かゝるよしある木なればぞよと、つら〳〵に思ひたどれば、うべな〳〵、あなふさはしの屋戸の名や、あなおむかしのやどの名や、あろじのまなびもたゆみなく、いやすゝみにすゝみゆきつゝ、此屋戸の此名にしおひなば、ふることまなびの道はしも、そのこち〴〵のえの、しげきがごとく、いやとしのはにしみ榮えつゝ、本よりたのます神風に、天つ空までいふきのぼして、ほつえのえのうら葉は、ひさかたのみやこにちりしき、中つ枝のえのうらばゝ、鳥がなく東にちりしき、しづえのえのうら葉は、あまざかるひなの國べに散しきて、國の八十國、嶋の八十しまおつるくまなく、ちりしきみちて、いにしへしぬはむともがらは、其落葉をしいひろひ持て、木立のもとをしぬへらば、四面の國より、みなと入に船こぎゝそふ事のごとく、あらそひきつゝ立よりて、これの五十槻の木陰をし、あふがざらめや賴まざらめやと、おのれはた此あろじとは、同じ心に、あがたゐの大人の敎をうけて、まなびの道には、はらからなすゆゑよしゝあれば、これもまた、おやじこゝろにうれしみなも、

平野行健が吉備國にかへるを送れる詞

黑田ノ廬戸ノ宮に天の下しろしめしゝ、天皇命の大御世に、吉備津彥ノ神の命の、大御言をかゞふりまして、御子ながら言向たまひやはし玉ひて、萬代に宮柱ふとしきいます吉備國の、國のはたてに、人さはにみちてはあらめど、道のしりなる深津ノ郡になり出たる、平野ノ行健の此主はも、深津の名におふ深き心に、から國の學びの道にふかく入たち、さとりえて、あしがきのまぢかき國内の人どもをら、朝よひにおこたらず、こゝろふかく敎へさとして、かしこきからことのはかせになも有ヾを、よのつねのはかせにはまさりて、おもひかねふかく、其道にひたぶるにはなづまずて、かけまくもあやにかしこき、大御神の道の、まことにたふときことわりをしも、わきためしりて、むかし今と、もゝの物しり人どもの、はふつたのおのがむき〳〵、ときをしふめるをしへどをら、まつぶさにとひこゝろみて、これもかれも、たゞしからぬことをさへに、深くさとりて、よにまことの道しれらむ人もがと、あらたまのこの年ごろを、尋ねわたらしけるまゝに、をぢなきや宣長が名をしも、梓弓つまびくよそのとほとにきかして、此む月の十

日のほど、あらしの風の寒けくに、百重山へなれる道の、みちの長手をはろ〳〵に、ふりつむ雪をふみ分つゝ、かしのみのたゞひとり、旅衣袖ふりはへて、したひ來ませる、千尋の海の底よりも、まだにふかき心ざしと、いまだはかたらぬはじめより、いちじろくまづおしはかられて、むかしくたふとく、有がたくて、すゞろに涙もこぼるゝまでなもありければ、おのれはた思ふ心のくまものこさず、あさぢ原つばらかにみちびく心を、ほどは雲ゐにさかりをりとも、わすれ玉ふなすて給ふな、我も又、わがせこがいとかくまでにふかき心のおこりそめしも、そのかの吉備の國つ御神の、たまぢはひます御心の、深ければこそはと思ふには、いまゆくさきもとほながに、この行健がやまとごゝろを、

道のしり深つ嶋山いやふかに深くとぞねぐ深つしまやまあなかしこ國つ御神、

山路孝正が父の七十賀の圓居の詞

安永二年のきさらぎの七日の夜、山路氏の家に人々つどへて、哥よみの圓居をなむ物せられける、さるはなにとなく、鳥をあはれみ霞をめづる、をりからのすさみわざにしもあらず、父ぬしの、今年なゝそぢのよはひたらひ玉へる、たゞなほやは有べきとて、ゆくさきいのる心ばへを、みづからもよみ、人にもよませて、ことぶきせむとにぞ有ける、そも〳〵松がえのときはの言の葉も、世にふるめかしく、千ひろの竹のためしはた、めづらしきふしもなかめればとて、時につけたる木草の中に、のこるよはひの遠山櫻、風しづかなる花のさかりによそへたる、淺からぬあるじの心の色香をそへて、よものこのめもはるの夜のさかづき、めぐる月日のかぎりなく、千世にやちよに榮えいませと、おいたるわかきもろ聲にうちあげつゝ、あくるもしらであそぶまとゐのたのしさを、かたはしかきつゞくるも、ゑひのまぎれは、いかにひがとおほからむ、

塩崎某が家の白猪櫻のことば

何がしの町の東づらに、松さくらなどこだかく見えて、けしきあるやどは、しほざきのなにがしといふくすしの家、その家に、物よりことにめにたてる高き屋は、白猪櫻となむ聞ゆる、のぼりて見れば、南と西とのあはひの方に、しろゐのたけといふなる山なむ、木の間より雲ゐにとほく見やられたる、これぞ此たかき屋の名のゆゑよしなりける、さるは此山のみにもあらず、冬は雪見るほり坂の高根なども、やゝこなたにならびて見えたり、てる月のよいほのもりも、手にとるばかり殊にまぢかし、春は又花の梢も、我やどの物なりながら、此をり〳〵のながめはながめとさる物にて、かのはるかなる山の名をしも、とりわき思ひよせられたるは、なほ深き心ぞあらむと、つら〳〵思ひめぐらすに、この白猪といふ物よ、御年の神の御いかりとけゝむふる事は、さらにもいはず、又

人の病といふ物は、ほとほりのけよりおこるぞよに多きを、このいせの國は、ここに南によりてしあれば、ほかよりも又、そのわづらひのおほかりぬべきことわりなるに、かの猪の肉は、人の身のほとほりのあしかるけを、よくのぞく物ぞと、くすしふみにも見えためるを、しろきはここに、涼しき秋の色とさへなむいふめれば、その朝夕の初風に、夏のあつさをわするゝどくに、此やどのあるじのぬしに、かゝりとかゝらむ、國の内のやみ人は、皆すみやかに、なごりなくさわやぎはてなむものをやと、くすしの道の、いたり深きいさをのほども思はれて、いとたのもしくめでたくなむ、

渡邊直麻呂が瀧の屋の詞

これのたぎの屋は、わたのべの直まろがかくれが、門のとはものむつかしき市なかなるを、おくつかたやゝくだれる所にて、川きしにかたかけたる、高瀬さす柴つみ船も、たゞ軒のもとをのぼりくだり、むかひのつゝみはやゝ高くて、見あげられたる、其堤なも、やがて御城のへちかき大路にしあれば、なみたてる松のこなたを、しげく人の行通ふなど、まぢかき見わたしのさま、いひしらずおもしろき屋になも有ける、又かたはらをゆく水のあるが、いさゝかなれど、此川に落る音なひ、瀧めきていさぎよく聞えたる、これぞこの屋の名におふ流れ、

加藤何がしが家の庭の柳の詞

もろこしのなにがしが手づからうゑて、名にさへおひける五もとの陰は、いかに有けむ、加藤氏の屋戸なる柳よ、たゞ一木おひたてる、本だちもよろしきほどにて、こなたかなたにさしおほひ、ひろごりたる枝々なむ、物にもにず、いみしく長くて、庭のまさごをはらふばかりに、うちしだりたる、朝夕の露だにちらで、ふくこしもなき風にしも、おのれひとりしりがほに、かたよりなびきて、ひらめきたる木葉の色など、いひしらぬ明暮のながめは、さらにもいはず、きぬがさによそへし、から國のむかしのためしさへ、おもひわたされて、よりかけたるみどりの綱の、長く久しく榮えゆかむ此かげには、うま人はたいできなむかしと、ことぶきがてらなむ、

大舘高門が梅の屋の詞

そらかぞふ大だちの子が梅の屋を、うめのやとは、花の中にも此花を、おむかしみてともしみて、軒ちかくうゑなべてなもなづけたるこぞ、うべなるかもよ、あらたまの春たちかへる日影にきほひて、あくる朝戸にさし入くるにほひがの、そのかぐはしさは、たぐへる物なく、まづ鳴鳥の鶯の、せにしてきなくも此枝なり、かくあれこそは、ここさへぐから國人の、こちたきめでは、さらにもいはず、しきしまの山跡にしては、ならのみかどのいにしへより、みやびたる花とうたひて、のむさかづきにもはらゝにうかべ、かざしにさしてもあそばひけれ、かれこゝをもてあれも又、

はしけやし春べ花さくうめの屋の梅のさかりをゆきて見てしが、と思ふまゝにかくなも、

木村某が蒹葭堂の詞

大坂に、蒹葭堂とから名つけて、家をらす人あり、蒹葭とは、いかにふこゝろぞと、からぶみまなびせし人に、とひきけば、あがりたる世のから哥にもよみて、これどこの難波になたゝる、あしのからことゝふもいへば、物げなげには聞ゆめれど、みやび言には、あしの屋とやいはまし、それのあるじは、あさもよし木村のなにがし、師木嶋のやまとの八十國、さひづるやからの國々、海川野山になりとなり出る、もろ〳〵のものを、八百種千種ともとめつどへて、うつそみの世のたぬしきをへと、もてあそぶ人とか、そのあしの屋のために、のりながゞ一言えてむと、此ごろあらきだぬしにつてをして、もとめらるなる、ひがをすとふいせ人の、難波の事をなにとかもいはむと、すべなく口ふたがれど、秋山に妻まぎてなくさをしかの、しかくさ〴〵につどひたる中には、もろ〳〵のふみはた、千萬卷とありたらひたる、春の野の雪間のわか草、めづらなるもさはなりときけば、よろづよりも、そこそはおのがともしむすぢと、みゝとゞまりて、夏のよのみそらにひかるいなつるひ、いなといはむも、なか〳〵にはた、ほこらはしくもや思はるらむと、しばしふみてのしりくはへて、おもひよれるまゝに、たゞいさゝかにかくなも、

稲掛昭隆が家の業のみかべの詞又其長歌

いなかけのあき隆の子が、遠つおやのよゝり、いへのなりと造りてうるものはも、まめをひたしてほとばして、うすにすりて、しぼりてにて、おしてかためてなせる物、あたひやすくていやしからず、あぢはひあはくてみやびたれば、月に日にけにいやめづらに、くさ〴〵にとゝのへて、高きみじかき人みなの、朝な夕なとめでくふ物なり、こゝに昭隆が父なる棟隆い、としごろ思ひわたらくは、此物よ、みやび名の聞えこずて、よにあやしきから名をのみよびあへることそ、いともふさはね、いかでよき名をあらせてしがと、とき〳〵にいひも出つゝ、うれふなりときゝて、おのれはたうべなりと思ふに、いでやちかきよのならひ、物の名つくるに、花や雪やとなまめきたるすぢを、わざとえり出たるも、ことさらびて、中々におむかしからず、たゞ何とはなしに、ふるめきたることそ、みやびてはあれと、かにかくに思ひめぐらして、かのしらにもてぬりたるものを、思ひよせたる、をみな言葉を、いにしへざまにいひなして、みかべとよばゞ、いかにあらむと棟隆にしかたらへば、それいとよけむと、手うちてめでほどばしる時に、我もとも〴〵うちあげうたへる、そのうたは、たふときや、大げつひめの、神の大御身よ、あやしくも、なり出しまめの、そのまめの、とけてこゞりて、山川の、いはもとどろに、おちたぎつ、たぎのみなわの、たへの穂に、なれる

御かべは、ときじくに、七重花さく、八重花さく、

むらたの光庸がこへるに書てあたへたる櫻花詞

宣長、春山のさくらの花のさきのをゝりを、つら〳〵に見つつ思ひけらく、たぐひなき花は此花、もゝにちに花はさけども花はこの花、うらぐはしきかもたふときかも、あだし木草の花のど、けやけくこちたくはあらずて、淺らかにおゆなるものから、そこひもなきにほひをもたりて、またなくみやびたること、いひもかねなづけもしらぬは、此花になも有ける、かれあがまなびのおやなりし岡部ノ大人の、外つ國人のここにめづなる、梅と桃との、さかしくこちたきが、その國の教にしもあえたるにくらべて、このさくらの花の、ものよりすぐれてことなるさまをし、まつぶさにあげつらひて、これぞこの大御神國の道の、のどけきすがたと、ほめ給へりしは、うべなるかもよ、

八月十五夜稻掛棟隆家の月見の會にこゝちわづらひてえ物せでいひやれりける詞

明らかにやはらぐといふ年の、八とせといふとし、はづき十日あまりいつかの夜、こよひは、世の中ゆすりて、月見る夜とて、同じ心の友だちこれかれあつまりて、哥よむ事なむ有ける、こころは稻かけのむねたかといふ人の屋戶、此やどは、となみはる坂な井川の橋のつめより、二町ばかりひむかし、旅人のゆきかふ大路のほとりになむ有ければ、よるひるといはず、いとらうがはしきに、其屋のうしろ、やゝおくまりたる所に、さゝやかになまめきたるいほりをなむ、ことにむすびおけりける、此庵のさま、春は花見むとて、櫻の林をまぢかくうゑなべ、秋は月をすまさむたよりに、南をまへにて、軒ちかくやり水をながし、このもかのものへだてには、草のまがきこころ〴〵なつかしくゆひわたして、萩をみなへしやうのせんざいをも、よきほどにうゑまぜたるなど、すべていとよしあるすまひのさまにぞ有ける、こゝに此家あるじなむ、まめ人にて、曉の露よりさきにおき出て、家人をいざなひつゝ、日くらし家のいとなみにちからをつくして、しばしがほどもたゆみなく、つとめられける、此人さばかりまめ〳〵しきにあはせては、心なむいとみやびたりければ、いさゝかもいとまのひまあるほどは、かのいほりにさしこもりて、哥よみふみ見るわざをなむ、ふかくこのまれける、しかありければ、としごろも、月なみの哥のつどひ、なにくれのみやびわざにも、おぼろけのさはりならでは、をさ〳〵かくるとなく、すべて其道にはたいとまめ〳〵しく、人よりはまさりて、心ざし深かりければ、事にふれてよみいでらるゝ口つきも、けしうはあらずなむありける、かの庵のまとゐも、さき〴〵もをりをり物せられけるを、秋のもなかの月見むとてのは、こよひなむはじめなりければ、いとめづらしくけうある事に、かねてより人も我も、日をかぞへつゝまちけるに、いにしついた

ちごろより、みだりごゝちいとたへがたくてこもりゐけるを、こよひもえためらひやらず、月もれいのことより、殊にさやかにさへあなるに、ねやながら、いさゝかかしらもたげて、はつ〴〵にひとり見出しつゝ、思ひやるこゝちよ、くちをしなどは、よのつねの事をこそいへ、これはたゞおしはかり給へこそ、

時も時こころもこころ月も月思ひやる身をおもひやらなむ

八月十五夜稲掛棟隆家の會にそこにてかける文

むねたかのぬし、今は俗ながら、悦可とほうし名をさへつきて、ひたぶるに佛の道に心をよせて、風の音むしのねにつけても、たゞそなたざまの心をのみなむ、ふかくたどりつゝ、此世のかたざまのことゝては、きよく思ひすてられたるあまりに、花紅葉のあだなる色も、すさましとやおもはるらむ、おのづから哥よまるゝとも、絶々になむなりにける、されどむすこの大ひらなむ、かのむかしの心ざしをつぎて、此しきしまの道に、いりたち物せらるゝほどなれば、もち月の圓居は、かくるとなく、有しまゝになむ有ける、こよひはいつの月よりも、ここにおもしろくけう有て、みな人はしちかく出ゐて、めであへるほど、軒ちかく吹くる風につきて、荻の葉音のひま〴〵にこのぞくひじりの、宵のおこなひのごきやうの聲の、たえ〴〵聞えくるも、いとあはれにたふとき物から、又さまでやはと、よみてやる

ほかゆくと聞つるものを月をさへうきよの物とおもひすつらむ

渡邊重名がこへるまゝに奥平大膳大夫源昌男主の哥巻のおくに書そへたる詞

此歌ごもは、いにし天明四年夏のころ、豐前國中津の人、上野介藤原重名主の、かの題なる物ごもを、哥そへて奉れと有けるに、よみて奉られけるをり、いろ〳〵のたま物など有て、返しにみづから書てたまへりし、奥平ノ君のとか、さるはかしこの殿にしおはしましければ、かの人の身には、いとも〳〵やむとなく、かしこき物にて有けるを、いにしとし、なき人にさへなり給ひにしかば、いとゞしき御形見としのはれてなむ、かくあつめよそひて、家のたからと、後の世にも傳へむとせらるゝにつきて、そのゆゑよし一くだり書そへてよとあるまゝに、かくなむ、天明七年十月、

流れての世にもきえせじ水ぐきの跡さやかなる君がみかげは

告二田中道麻呂之靈一詞

道麻呂夜、宣長今告流事有理、宇麻羅爾所聞看世、田中能道麻呂、美麻斯齡以謂波婆、吾兄登可云久、學乃道爾波、吾子登那母在祁禮婆、此年來乎、吾兄乃如久吾兒乃如久、牟加斯久波斯久、悲久貴具久、思賜弖有祁流物乎、吾乎置弖伊豆知向伎加母罷坐流、伊加佐麻爾所思世

加母、惜伎此世乎放坐流、道麻呂夜、生能極美、萬葉集爾心碎伎弖、力乎盡志弖、人乃得不解奴難伎事乎良、此彼登詳良爾釋得弖、吾業乎母輔須、人止母伊邪那比道引弖、此書爾、許々陀久麻米爾伊佐乎斯久有都流事乎那母、難忘久難捨久思賜布、故此功乎、萬世麻弖爾語繼伝、斯怒比爲與後乃名乎稱擧弖、自今波、言靈有功老翁登曾云倍伎、故此美名乎、此世之裏爾負持弖、罷路母宇斯呂夜須久、罷理通良世登、天明之四年登云年能、加美那月乃廿日餘三日乃日乃、夕日之降知爾、宣長我悲美悲美告流此許登乎、耳振立弖、宇麻良爾所聞看世、許登多麻伊佐袁能乎遅、

荒木田經雅神主大神宮儀式解序

五十鈴ノ宮は、天照大御神の宮、天照大御神とは、たかひかる日の大御名、かけまくもゆゝしきかも、いはまくもあやにかしこし、此大御神は、とこしへに高天ノ原に大ましく〳〵て、天地のきはみ御てらしまさぬ隈しなければ、國とある國は、ここごとに野山のそきの、木草のかた葉にいたるまで、たふときかしこき此大みかげに、もれたる物はしなくなも有ける、しかあるが中にも、この大御國は、此大御神の本つ御國として、明つ神わが大きみは、この大御神の大御子とましく〳〵て、天地のむたときはにかきはに、食國とたひらけくしろしめしくるまに〳〵、此いすゞの宮はしも、皇祖の大御神の大御靈の大宮と、稱辭をへまつらして、あがめ玉ひいつき給ふ大宮になも有ければ、天地のうらなる萬の國には、たれやし人も、朝よひにかしこみをろがみまつるべきことわりになもあるを、かなしかもつたなきかも、五百重浪立へなりたる、外つ國々の人どもは、あくる日毎に、とよさかのぼらす大御ひかりを、ひさかたの天つ空には、ふりさけ見まつりつゝも、本つ御國は、此皇大御國なることわりをだに、わきまへしらねば、まして大御靈の、此大宮におほましますとはなも、鳴神の音にもきかずてあるなる物を、うれしかもおむかしかも、宣長わくらばに、此大御神の大御國にしも生れ出て、此大宮の大御計にはた、いさゝ、ほからぬくぬちなるは、さきはひこもさきはひなるに、産靈神のみたまのふゆし、ことにそはりて、いはゆるしきしまのやまとたましひをさへにそなへもたれば、禍津日のまが〳〵しき、外つ國々のをしへらに、あひまじこれる、世の人みなの心はしも、これもかれもふさはずて、ひたぶるに大御國の、あやにたふときことわりをなもあふぎて、天の下にましこます、天つちの神の御社はなも、いづれとなく、御國の榮えともろともに、さかえませひろりませと、よとゝもにねがひわたる心には、たまあへらむ人もがも、いかでいかでおもはしきとをだに、とひさけかたりさけむと、おくとはなげき、ぬとはしぬふしるし有て、雲ばなれそきはをれども、度會がたにその人えたり、其人は、あらきだの神主經雅となもいひて、天の下にいづれはあれど、此大御神の

宮の宮人、この宮人もさはなるが中に、禰宜ちふつかさ、禰宜ちふつかさも、さはなるが中に、員さだまれる十のつかさの、たゞしきが内にさへなも有ける、安らに永き此御代の名の、二とせといひし年の、かみな月に、その長(ヲサ)なりしつかさの、石隠れによりて、つぎ〳〵なるは、つぎ〳〵にのぼりて、しり一人かけたりける時に、此かはりにをと、かたへのつかさあひはかりて、此神主をなもえり出ける、此神主、そのかみ位は、ひろい四のくらゐの上つしなになも有けるを、此正しき員にしいる時は、時となく一きざみあげ給ふ、近き代のさだめにしあるを、いまふたりもとよりかずのうちなるはた、同じ階(シナ)なりければ、此人たちを立こえて、しかゆくりなくのぼりなむもいかにぞやあるがうへに、をぢなきおのれ、其職(ツカサ)にはたへじ物と、二たび三たびいなび玉ふを、なほ〳〵としひられて、さはかの人たちも、おほぢ父の、たばらずてやみにし位一きざみを、こひ申されて、たまひなむ次にこそのぼらめ、さらずはいかでと、猶もうべなひ給はぬを、人こえてのぼるとは、ちかきよにこそめづらなれ、いにしへにはあとおほかれば、なにかそれはとがらるべきわざにもあらずと、あながちにさだめあへるにぞ、そのとしの霜月に、鈴鹿山うちこえて、みやこにのぼり、大朝廷にまゐでゝ、こひまをし給ひけるに、その月の十日まり三日の日、つひにかのかはりに治め玉ひて、又四日といふに、さだまりのど、かの一きざみをも給ひてければ、そのしなのついでのまに〳〵、つひにかの二人の上にさへたちて、位はおほき四の位、職は八つにあたるつかさと、荷ひもえがたき慶(ヨロコ)びを、馬にふつまに負せもて、かへり參り給ひては、あとのまに〳〵日百日夜百夜、大宮のべの齋館(イミタチ)にいみごもりいませるほど、うつら〳〵思はれけらくは、おのれ今しおやのついでをあやまたずて、正しき員に入ぬるだにあるを、さきにたてりし二人をしもこえて、かくまですゝみのぼれるとゝ、大御神のあつきたふとき大みかげをかたじけなみ、皇朝の深きかしこき大御めぐみをかたじけなみて、たゞなほや有べき、ますみの鏡あきらけき此大御世にあたりて、玉のをの絶にし神わざをも、つぎてしが、ふるころもすたれたる神所(カムドコロ)をも、おこしてしがと、燒大刀のとごゝろを、梓の弓腹ふりおこして、さかりなりけむいにしへのあとを、さゝの葉にうつやあられの、たし〴〵に尋ぬとしては、延暦の儀式(ノリ)のふみなも、此大宮には、あるが中にふるく正しき書なりければ、此ふみのくだり〳〵を、つばらかにわきため、あきらめさだめずては、えあらじ物と、おもほしそめてし心ざしい、なゆ竹のたわみなく、神路の山のおくかを深めて、いやすゝみにすゝみゆき、わたらひの大川水の、いやたらひにたらひ行て、同じきつゞきの八年といふとしの六月に、其事をへて、此こゝばく卷のふみをなも、いさをしくえらひなし給ひける、此書見れば、此大宮のいにしへの儀式(ノリ)

のあさはし、くもり夜の月のおほゝしきこころもなく、ふりつむ雪のいちじろくなも有ければ、絶にし神わざも、今みなつがれなむ、すたれたる神ごころも、今こと〲におこりなむ、うれしかも、おむかしかも、たまあへりける此人えたるのみならず、かくまでにうるはしくふさへるふみの、なり出來ぬるよろこびはも、これも又たとなほやあるべきと、おのれさへに、夏野ゆくを鹿の角の、みじかき心をふりおこして、いにしへのしつのをだまき、いやしき詞をかきくはへつ、

荒木田末偶寛政遷宮物語序

天の下のもろ人の、あふぎたふとみまゐでくる、神風のいせの宮の、五十鈴ノ宮の宮うつしば、天なるや棚機姫の、手玉もゆらにおるはたの、廿年に一たびと水垣の久しき御世よりさだまりて、天地と天つ日嗣と、とこしへにかはるべからぬのりのまに〱、四方の海風浪ものどけくて、大舟の寛なる政の、袋にいれしはじ弓の、はじめのとしの、大きみのいかしの御世を長月の、いく日のたり日の、ひさかたの月立の夜の、門守るいぬの時を吉時と、あらたまのとしふる宮より、にひ宮のみづ宮の、とりふける御かやのとゝのひ、そゝきなく、目かがやくこがねの御かざり、打かためてふとしきたてたる、まきさく檜の御あらかに、朝廷の御つかひつかさ〲、この大宮のつかさ〲、もちゆまはりもち清まはりて、つかへまつりしづめまつりし、此宮うつしのはじめをはりを、そつ彦眞うあらきだの末偶主の、いそしくも書しるしたる此ふみよ、あし引の山の口の祭より、月かさね年重ね、そのまつり此祭、ありとある神わざは、川のべにさらす手づくり、さらにもいはず、をり〱のくさ〲のあだ事にいたるまで、そのとしごろの事らはし、大まあらこに物いれて、もるゝなくのこるなく、たびごとに參りきて、見まつるがごと見るがと、まつぶさにまつばらに、書あらはしたりしるしたり、あはれ〱天の下のもろ人に、見せまほしきは此書なるかも、

伴眞章神代古訓考序

心さとく心直き人は、よき事きけば、すむやけくおもぶくを、心おそくこゝろ直からぬ人は、よきこときけども、えさとらず、さとれども、人にまけむとをしいみて、えうつらずえおもぶかずて、生(イキ)のかぎり、枯野の草のこぞのふるがら、ふるきになづみて、淺みどり春の若菜の、うらぐはしきをば、つむとしらずて、くちはつめり、なまよみの甲斐國には、玉ほこの道まなべる人、さはなりときくを、大直毘の神のちはひか、猶ともしき、まがつひの神のあらびか、なほなごまぬ、いなしこめ山崎の子がをしへをし、つぎ〱にうけつがひて、さひづるやこちたききたなき、そのからごゝろにのみ、朝ぎりのまどはひをりて、ひさかたの天の眞名井の眞清水の、清き正しきすめら御國の、古のまとのこゝろは、えさとらぬかも、えおもぶかずてあるなる中に、あらたまの此としごろ

は、それのふるがらかりうてゝ、春野にもえ出る若草をし、つみはやす人も、一人二人は出來にたるを、あからひく淺間の大神につかへまつらす、古屋ノ眞章といふ人はた、伊余なるや出湯のゆげたの、けだしくも此けぢめをら、ぬば玉の黑し白しと、わきためて、みぬまのまこも、まことのこゝろをしられたるかも、さとられたるかも、風の音のとほとに聞て、はろばろにわがりとひきて、わが一言を、そのつくられたる神代の卷の古訓考といふふみのはしに、はし書にかきそへよとなも、五月ひくあやめの草の、ねもころ／＼にこひもとめらるなる、心ざしのまめなるを、あはびしら玉おむかしみてなも、

松平康定主萬葉集八重疊序

夏の日の日の御蔭と、こち／＼に水枝さしおほふ、ならの葉の名におへる宮の、ふる哥ぶみの、なゆ竹の十まり六卷にあたる卷なる、うみをなす長歌に、から國のとらちふ神を、いけどりに八つとりもちき、其皮をたゝみにさしてとよみたりける、この其書のその八重疊といふふみは、つぬさはふ石見國の、いさなとり海の濱田を、やすみしゝ大きみの、とほのまもりと、こさへぐ韓國の、おさへの城と、鳥がなく東の國に、天の下まをし給ふ、大きいくさの君の命の、よさしのまにま、御世かさねてしろしめす、千代にさかゆく松平の今の君の、まつりごとの御いとまには、春雨のふることを、野べの若草なつかしみおもほして、しきたへのまくらどゝ、このみ給ひよみ給ひて、あつめ給ひなし給へる書、此ふみのあるかたちは、かの哥ぶみなる哥のこと／＼、五つのつがひを五つにきりて、たぐひ／＼を一つにあつめて、一うたを五たび重ねて、とりもちきて、あつめ玉ひなし給へるもの、とらちふ神のそのかはを、やつとりもち來て、さしけむたゝみの言のはを思へば、うべな／＼、おほせ玉へる此ふみの名の八重疊、八ちとのとのは、一重だにたはやすかるべきわざならぬを、八重にしもあつめ玉ひなし玉へる、わたつみの千里のおきの、千ひろの底の、深きとほき御心ならずは、いかでかもかくまではと、うまとりのあやにたふとき、その御いさをゝ、秋ふかき山のしたびの色もなき、山の井の淺らなる、のりながと言の葉に、玉だすきかけまくは、はびろくまかしかしこけれど、かしこき仰せの、いなむしろいなみがたくて、いさらを川のいさゝかにかくなも、

武庫春海萬葉集續考序

萬の言の葉かき集めたる、ならのはの名におへる宮の大御世より、をちつかたのふる言、哥まなびの遠つ祖、いにしへまなびするともは、言靈のさきはふ皇國の、底寶御たからぬしと、たれやし人も、もてあがめたふとむ中に、大船の津の國人、みすまるのあか玉はやす、武庫の春海といふ人は、わがあがたゐの大人のかむかへぶみの、その山なみに、

兒らが手をまきむく山の、つぎよろしくと、つぎかむかへて、此ふみの哥どものこゝろを、今を春べとさく梅の花の下紐、ときあかされたる、ふかきあつき心ざしはよ、いたづきはよ、そのことどはしも、から衣すそのうちがひ、おのがこゝろと、あはざるふしもおほかれど、なにはほり江のみをつくし、心つくしてときあかされし、こゝろざしといたづきとを、おむかしみめでおもひて、そのさま一くだり、はしにかきつく、かくいふは、ときぬしのしる人、いせ人もとをりのゝり長、

田中道麻呂萬葉名所哥抄序

たなかの道まろといふ人有けり、尾張國のあゆちのこほりの名兒屋の里に、めこなどももたらずて、たゞひとり住けり、はりのきの翁ともいひけり、美濃國のたぎの郡の、榛ノ木村の人になむ有ける、さてなむはりの木の翁とはいひける、わかかりける時より、いにしへまなびに、こゝろざしいと深かりけるを、年まねくいそしみけるまゝに、ふることのとのこころを、いとよくあきらめ知てなむ有ける、かのなごやの里に名高くて、したがひ學ぶともがらはた、いとおほかりけり、かのさとに、いにしへまなびのおこりけるとは、もはら此おきながいさをになむ有ける、此おきな、としごろこゝに書かよはし、をり〳〵はみづからもきとぶらひて、なほいふせきくま〴〵とひきゝつゝ、よはひおくれたるおのれをしも、おやのど思ひ頼みてなむ有ける、としはむそぢに一つあまれる、もゝとせは猶はるけしと、ゆたに思ひてありける物を、こぞの春よりみやまひして、夏秋もうちはへおこたらずて、かみな月のついたちごろなむ、しぐれの空の雲のまよひに、はかなく過いにける、うつせみのよのさがは、すべなくかなしきものなりけり、そも〳〵このおきな、いにしへぶみのあるが中にも、奈良の葉の名におふ御代の哥ぶみをなむ、殊にめでおむかしみて、おくとは考へぬとは思ひて、としひさにおこたらずなむ有ければ、むかしより人みなの、ときかてにしたるふし〴〵をしも、ときえたるどもおほかりけり、しかときえたる事あるをりは、いかに思ふと、かたらひおこせしを、うべなひやり、又こゝにもあらたに思ひえたる事、いひやりもしけるをり〳〵は、よになき寶をしもえたらむごとくに、いたどきにさゝげもちてなむ、よろこびをりける、かくて年ごろにかきおきつることどもはた、それかれとおほかる中に、撰集萬葉抄、萬葉名所歌抄といふあるを、名所哥抄はしも、ここにやみふせりしほどまで、心をいれて、床のべさけず、かしらもたげつゝ物したりしを、えたへずて、なからばかりにも及はず、かきさしつるはしも、殊にあはれなる後の世の形見なるべき物にしあればと、此たびかのともがらの、梓にゑりて、よにのこさむとはかるなる、同じくはおのがひと言をもそへてよと、こひおこすと、其書をしも見せたる、みづぐきの跡、見るに涙し流れそひて、手もわなゝかれつゝ、

えもかきやらずこそ、かくいふは、かの翁がうせにしまたのとし、天明の五とせといふしはすのついたち、

長瀨眞幸萬葉佳調序

いにしへぶりのうたよみせむとならば、いにしへぶりをよく見てよくえらひて、よくよりよくならふべきものぞ、いにしへぶりをよく見ずよくえらはず、よくよりよくならはずては、いにしへぶりのうたよみは、いかでかもよくしえてむ、これの哥卷は、肥ノ國人長瀨ノ眞幸が、それよく見て、よしとえらひてたるうたまきぞ、これのうたまきをよく見て、なほよくえらひて、よくよりよくならはとぞ、いにしへぶりのうたよみは、よくしえてむ、かれいにしへぶりの哥よみせむとするともがらは、これのうたまきをしよく見て、なほよくえらひて、よくよりよくならふべきものぞ、いにしへぶりのうたよみせむとすることもがら、

契沖ほうしの漫吟集序

御國の道による人は、御國のこゝろをえしらずて、外つ國の道による人しも、御國のこゝろを、かつ〴〵もしりそめつるは、あやしかもおむかしかも、すくな御神のみたまのちはひと、おのれつねは、けいちゆうほうしを、あやしみおむかしみ思ひをるに、あの人、そがよめる歌どもあつめたる物をし、板にゑりて、よにほどこらさむとするにつきて、口にまれしりにまれ、かきそふるがね、おのが一言をと、つてことしてほしみするまに〳〵、くちにまれしりにまれそへてよこして、書ておくる、かのその哥も、中むかしの一ふりにぞある、

谷川士清和訓栞序

天つ神の御子の命を、ひさかたの天の八ちまたに、むかへまつりて、あまぎらふ八重棚雲をおしわけつゝ、朝日のたゞさす日むかの國にあもります、玉ほこの道のしるべと、御さきにたゝして、つかへまつりし猨田毘古ノ大神の、つひにとゞまりまし〳〵て、かしこきや皇大御神の幸行をしも、まちとりまつらしゝ、此神風のいせの國に、落たぎつ音高く、天の下よもに聞ゆる谷川のをぢ、かの狹長田の五十鈴の河水、清き流れをむすびあげつゝ、ひたぶるにあかずのみあぢはひて、言靈のさきはへたすくる大御國のくすしきことわりを、うまらにさとれる心もて、いそのかみふるの神杉、ふるきをはじめ、今の世のいやしきしづが、利鎌にさわたる眞柴の枝のかた葉まで、こち〴〵の山の、大かひをかひのしげ木が本を、かき分尋ねて、いたらぬくまなく、よにありとしある、言の葉のしをりをなも物せられける、此しをりのまに〳〵、とめつゝわけもていりてば、はやましげ山、やみのよのゆくさきしらぬ人どもゝ、いまより後は、おほゝしき朝霧のまどひなく、もゝたらず八十のくまぢも、やすらけくふみ見むものぞと、名におはしたる谷川の、せゞのそこなめとこしへに、たゆるとなく、世にながさひつたへますとの、おのづからの大神の道し

るべのこゝろにしも、あひかなへることをし、皇大御神の大御心にも、いそしこそおもほすらめ、かしこしとこそおもほすらめ、

石塚龍麻呂古言清濁考序

人のもろ〳〵のことばのこゑのすみにごりはよ、しつたまきいやしくきたなき、外つ國のさひづりこそは、息もらす鼻かけて出るがおほくて、にごるもいと〳〵おほかりけれ、こも枕たかくたふとき、すめら御國の、ことたまさきはふみやびごゑはし、秋のみそらの月影のさや〳〵に、すみこもすめるを、よし野川きよき河瀬も、雨ふれば、うきてたゞよふうきひぢに、しましはにごるをりしあれば、これの詞もそれがごと、物とまじりて、はまつゞらつゞくたよりにひかえては、野べの夏草、かりには濁るこゑもぞ有ける、かくて此すむにごるも、しらま弓けづるまがなの、かなの正しきいにしへぶみもてかむかふれば、古へ今と、いなむしろ川のふちせの、かはれるとなもおほかりける、そが中に、いにしへはにごれるが、今はすむもなきにはあらねど、大かたをもていはむには、いにしへことばゝ、こよなくぞにごりこゑはすくなかりける、然あるものを、いまの世のものしり人は、然あることをばたどらずて、いにしへぶみのみやびとに、いま言葉とことなることあるをば、たゞしくわきためたるかなをしも、かへらまに、まぐはしからずて、通はしたりと、おほろかに思ひすぐし、あるはにごるをしもみやびたりと、ひがこゝろえして、かならずしかるまじきをも、おほくあらたににごりなにとするたぐひよ、すべていにしへにたがひて、みだりなるよみ聲なも、つねおほかりける、のりながはやくより、いにしへぶみのかなづかひに、つら〳〵つばきつら〳〵に、むらきもの心をとゞめて、この清濁りの正しきと、又今のことなるが多かることをし、さとりえて、いかで此事、あまねくつばらに明らめて、世のひがよみを直してしかと、玉たすきころにかけて、思ひ草おもひわたれど、妹がうみをのいとまなくて、いまゝでに、いほはたちはた、えしもはたさず有けるを、いしつかの龍まろい、此鈴の屋のすゞがねを、遠音に聞て、とほつあふみの、いなさにつぎたるふちの郡、細江にちかきほそだの里より、玉づさもみづからも、はまつ千鳥のかよひきつゝ、あらたまのこの年ころを、いそのかみふるとしぬふ心ざしい、ふるえの菅のねもころにて、此のり長がこゝろざしをし、われつがの木のつぎてむものと、梓弓思ひおこして、立むかひいそしみなせる、これぞそのいにしへの言葉のこゑの、すむとにごるを、山がたにつめるあま菜の、あまねくつばらに、あきらめたるふみ、かくいふは、そのすずのやのをぢのりなが、

萩原元克が道のしをりの序

楢の葉の名におふ宮よりあなたのよゝの古言は、雲の八重た

つおく山の花のごとくて、をさ〳〵ゆき見る人もなくて、ふもとのさとのよそめのみに、おほゝしくて過來ぬるを、ちかきよになりて、難波に契沖といひしほうしの、かつ〳〵此山路わけそめつるに、おひすがひてわがあがたゐのうしの、木の根あら草きりはらひ、雲霞をおし分て、いとねもころにみちびきをしへ玉ひしよりぞ、人も我も、はるけき峯の木本まで、わけのぼりて、まぢかく見ることにはなれりける、しかはあれども、山路の旅も、いまだしらぬともがらは、まづ入そむるは山のしげぢに、なほしもなづみくるしむめるを、はぎはらの元克い、そこをなげきて、いそしくも此しをりをなむものしたりける、さるは此道、しかひらけそめてよりこなた、ゆきかよふ人しあまたになりぬるまゝに、こゝの谷かしこの尾上と、なほその後しも、つぎ〳〵にうるはしくひらけたる所々はた、おほかるを、そのくま〴〵まで、こと〴〵につばらにせむには、道のやちまた、中々にまどはしくも有べきを、たゞかのうしのしるべの跡一みちによりて、おほらかにしめしたるはしも、うひ山ぶみのたづきには、まとにいとよき道のしをりになむ有ける、元克はかひの國人、われによりて、物まなぶとも、

釋日本紀歌之卷序

御さとのふみあき人、野田ノ何がしが家に、さくにほぎのゑり板をもたる、こたびそが中の、哥ときたる巻々のかぎりをぬきでゝ、ここにすり出て、世にひろめむとすと、此すゞの屋のおきなが一言をえて、それが口にそへまくほりすと、つたへをもとめて、ねもころにこひねぐ、おのれ聞て思へらくは、それいとよきことなり、大かたいにしへの哥しらずては、いにしへの眞心はしらえず、古のまごゝろしらずては、人のまとの道も、しらえぬ物にし有ければ、古のまごゝろをしりて、まとの道をもしらまくほりせむともがらは、いにしへの哥をぞ、うまらにしるべく有ける、そのいにしへの哥はも、今なにゝかものこれる、古事記と日本紀とにのこれり、それあつめたる物は、何かもある、此野田の子がこゝろざしたる、巻々ぞ有ける、そがあるかたちはも、ここのこゝろときたるどもは、すべていと〳〵をさなければ、そはすゑなれば、めふたぎても過しつべし、又古事記なるがもれたるもあかねど、それはたおほくはおやじかれば、いかにまれ、これまづほどこらさむは、いとよきことなり、いとよきとなり、

海量ほうしが一よ花序

哥人は足ゆかずて、天の下の名どころをしるとはいへど、まとにはあしゆかずては、よくしもしらえぬ物にしあれば、かりねする小野のしぬはら、しぬはしきこころ〴〵、よにおほくて、さよ時雨ふる言の葉のおむかしきを、きゝよむどには、浦すの鳥の、とびたつばかりおもほゆるを、おのれ今、六十にちかきよはひになるまで、あしがちる難波よりをちつ

かた、西の國べは、いづくも〳〵すべてしらず、うつせみの世のうきことは多かれど、住の江のきしによるとふ、忘貝ひりひにだにいまだえゆかず、わかのうらのあしへにあさるたづがねも、風のたよりの遠音にのみ、聞わたるばかりなれば、はるけき筑紫の國々などは、さらなることにて、いきの松原いけるよには、つひに見ずてやゝみぬべからむ、東の方はしも、かつ〳〵も紫おふる武藏野の、とほのみかどの御許までは、いとわかゝりし時、ものしつれど、ゆくさもくさも道いそぐとは、ゆきぶりの海山をだに、ゆたにもえ見ずて過ぬるのみこそあれ、そをはなちては、みすゞかる信濃路の木曾のかけはし、かけてもしらず、しなざかる越の國々、白山の時じく雪も、夢にだにいまだ見ざれば、いはむやも玉ほこのみちのくなるところ〳〵は、思ひも及ばず、名にたてる塩がまの浦のけぶりも、心のうちの面影にのみ、いふかしみ思ひわたるを、天地の神のちはひのいかなる人ぞも、いはゞしのあふみの國の、海量ぜにじは、大やしま國のこるすくなく、おもしろき海川野山を、船よりかちよりいゆきたらはし、見あきらめて、そこかしこと、こゝだくにつみあつめたる、言の葉草を、一よ花となもなづけて、見せられたる、見るにはいよゝ、露うちはらふま袖に玉をちらしたる、旅衣のうらやみにえたへずて、

見がほしき國の八十國行めぐりまさめに見けむ人しともしも、人しともしもと、しはぶれたる聲あげて、うたふものは、

もとをりのりなが、

彦根哥集序

いはゞしの淡海國の、あまづたふひこねのつかへ人、みすまるのいほつの玉ぬく、をばらの君雄い、其君のしらすくぬちの、こもまくら高きみじかき、いにしへ今の、人々のながめとながめ、よみとよめりし哥どもを、浦のしほがひひろひあつめとひあつめ、空行鴈のかきつらねて奉れと、其君のおほせ玉ふ命をかゞふりて、かゞふれるみとのまに〳〵、あらたまのこしのやとせをいそしみて、初春のわかなのあつもの、あつめえたるかぎりをし、いにしへぶり近き世ぶりと、かきかぞふ二ともにえりわけ、彦根哥集と二巻にまきなして、たてまつらるゝ、此よき事のみやびごとの、事のおこりを尋ぬれば、おむかしきかもたふときかも、その君の、上にも下にも、ふる雪のゆきたらはして、あまねくまめなる御心に、まづ呉竹のよゝの御祖の御ながめ言の、うもれ木なすしる人なきを、あらはしかゝげて、朝よひに、まそひの鏡みづからも見まつり給はむ、よの人にもしめし給はむ、松がねのとほく久しく、後の世にものこし給はむつたへ玉はむ、次に又、いそしみつかふる家人たち、めぐみになびく民草どもの、言の葉ぐさにいたるまでに、すて給はずはふらしたまはず、とり給はむ見給はむ、又たまぢはふ神代のてぶりを、わがしる國に、すた

れしめじ絶しめじ、しき嶋のやまとごゝろを、わがしる民にわすれしめじ、うしなはしめじ、あやにくすしき此言たまのさきはへたすけて、國つ御神の守り堅く、遠つ御祖のかためおかしゝ此國は、彦根の山の岩が根の、ときはにかきはにうごく世なく、かげなる海の八十の浦々、しらゆふ花に咲浪の、民いやひろに榮えよと、おもほしねがはす、よろしなへ御名におはせる井の水の、きよきふかき御心より、流れ出たることなりとか、おむかしきかもたふときかも、かくいふは、此よき事のみやびどを、すゞか山中にへなりて、吹かよふ風のことほとにきける、伊勢の國人、もとをりの宣長、

倉石爲光古風集序

いにしへのこゝろは、古の哥にし見ゆれば、古をたふとむともは、いにしへぶりの哥をなもたふとみて、みづからはた、そのさまをよみてなも、心をやるめる、越の國の道のしり、こも枕高田の里に、秋のいね刈てをさむる、くらいしの子は、石のかみ此ふるき世を、しぬふ心しふかくして、さきつとし、しら雲の千重にへなれる、とほ〱し驛路を、この鈴の屋にしたひきて、菅の根のねもころになも、物まなびしける、さて後しも、くる鴈のたより過さず、野べの萩がえをり〱に、こと〻ひつ〻、みやび心のいやすゝみゆくまに〱、同じ心のいにしへぶりの、今のよの人のうたをも、あつめて見むと、よも山の木々の言の葉、風のたよりにちりくるまに〱、月草のうつしとゞめたるが、しつたまき數おほくつもりぬるを、一巻につゞりおきて、よみゝながめみ、朝よひの心やりになもすなる、さるはいまよりゆくさきも、なほ千萬といやつぎに、あつめつがむのこゝろざしとか、おむかしの心や、おもしろのしわざや、その哥どもよ、とよとしの秋の八千しね、いかりもちき、いやつみにつみかさねて、よこ山なすをさめたらはす事のごく、その倉石の子や、つとめたぶべし、

土岐建雄父正與七十賀集序

ときのたけをといふ人は、もゝしぬの美濃國のまもりとして、梓弓音に聞えて、くれ竹のよゝへし、源ノ朝臣の末、もゝたらずいかにありけむ、中ごろよゝ世おとろへて、今はしも、眞金ふくとふ吉備ノ國なる新見の郷に、あしひきの山ぶところにかくろひて、しつのをだまきいやしきが中には、まじらひながら、こも枕たかきたふとき、上つ代のてぶりをしぬひ、こゝたまちはふ言のはのみやびをこのみて、むらきもの心はしも、天地にいゆきたらはしてなも有ける、としちゝのみの父なる人の、七十のよはひを、眞玉つくをちこちの友かきにも、つげあとらへて、ことほかひにほかひあつめたる、とり〴〵の壽詞(ヨゴト)を、あまとぶ鴈のかきつらねて、此一まきとなもなせりける、これはしも、うつせみのよの人まねの、あだことにはあらず、もとよりも紅のやしほの衣、ふかくそみにし、此ぬしの眞心のたねよりなも、おひ出來ぬれば、天地の

神あひうつなひ、遠ッ祖たちはた、うれしみいそしみおもほすらむ、御たまのさちもあひそはりて、此七十の翁の君はや、いはつなのわかゞへりつゝ、春花のにほひ榮えて、秋の實の、萬千秋の長五百秋に、いやてりに照あからへましなむ、あなかしこあなたふと、かゝるをりをし、たゞなほやもと、過さぬ心のときのぬし、山すがのねのねもころ〳〵なる、おや思ひのまとはしも、八百萬千萬車を、沫雪なすくゑちらさましいさをにも、猶まさりけるますら建雄とおはしたる、主の其名は、かげともの道の中なる中山の、細谷川の河のとの、たかくさやけく、萬世までに流れむかも、

殿村道應七十同妻六十賀集序

みやびたるたはれたる、又さひづるやからのさへにくはゝりて、秋野の花にほひなす、くさ〴〵なる哥をらことをら、百八十と大飛鴈のかきつらなべたる、此ふた卷のふむまきはし、眞木柱ほめて造れる、殿むらのをぢの、身のなゝそぢに、家とじの六十さへに、いゆきあひたる、此春のほかひとゝ、かきかぞふ二見の濱に、神さひたてるいはほなす、いやふたならびならびいまして、まそひの鏡朝よひに、見しあきらめつつ、こころづらいやとこしきにと、人もろ〳〵の、ことよほかひにほかひあつめし、ほかひ言になもあるを、これがはしに、なほ一くだり、そのあるかたちかきそへてよと、此をぢのこはしのまにま、又かくなも、

尾關正義家ふみの序

皇大御國は、かけまくもあやにかしこき、天照大御神の御子のつぎ〳〵、神ながらしらしくる天つ日嗣の、天地のむた、いなむしろかはりまさず、まさきのかづら遠長につたはりますなむ御國になも有ければ、仕奉るとものをの人十伴緒にいたるまで、おのも〳〵、八重雲わけてあもりまし、皇祖の大御世よりつかへこし、祖々のついでをあやまたず、家々の名をまもりきて、氏かばねの高きみじかき、しな正しく定まりて、いささかのみだれをも。ふかくかむかへたゞされけるものを、まがつひの神の心は、すべなくかなしきものなるかも、足利のいくさの君の、食國の事とりもたりし世の末にいたりて、天の下のみだれにしたがひ、世の人のうちかばねも、つかねをなきかりこもの、みだれにみだれて、泉川いづれをいづれと、わくべくもあらず、古のたゞしきおきては、ふる衣こと〴〵にすたれにたれば、おのが心のほりするまに〳〵、あるはいすゞ川ながれ清き源をしたひ、あるは春日山松たかき藤をのぞみて、ゆゑなきよしなき世つぎぶみを、おものもるつぎ〳〵しく僞りつくりて、家の光とかゞやかし、まとの祖をば、あしたづの尋ねむ物とも思ひたらぬ、いまのよのならひはよ、遠つ飛鳥の大御世にあひたらましかば、手たどればち見む人のみこそは多からまし、そも〳〵かゝるよの中に、馬のつめつくしの國の、さしすみの久留米のとの人に、眞玉つく尾關正

義こいふ人は、ものゝふの家わざをまもり祖のついでをあやまたず、其君のよさしのまにま、つかへのわざも、夏野の草のいさしげき身の、えがてなるいこまをうかゝひ、いにしへ書をこのみよみて、あづさ弓引てゆるべぬ、敷しまのやまこたましひつよくかたく、ますらたけをのを心に、かぶろぎの道をたふこみ、古をしぬひて、今をうれたむ心より、その家の遠つ祖のはじめをたづね、つぎ〳〵の世のゆゑよしをも、つぶさにあきらめしらまくほりて、あらたまのこし久に、むらきもの心をくだき、をちこちの國々にもこめ、こゝかしこの家々にあなくりつゝ、いこも〳〵ねもころなる、祖おもひの眞心をし、たまちはひます神や、あはれこおもほしめしけむ、いちじろきしるべ出來て、つひに其氏のはじめの祖神國鄕、秋の月夜のまさやかにたづねあかして、礒の松原、まつばらにしるしあつめられたりける、これの家ぶみ、おむかしきかもたふこきかも、これのをせきの此ぬしの、祖おもひの眞心の、此いそしみはや、

鈴屋文集下

本居宣長作

月前納涼といふことを題にて書る文

みな月の廿日のほど、おほかたも此ごろは、あつさところせきほどなるを、まいて朝よりちりばかりもくもりなく、てりはたゝく日影の、西日になるほど、よにたへがたくて、思ふどちうちとけたる物語をだにして、まぎらはさばやとおもひて、むつましくあひかたらふ友だちのもとに物しつ、なきほどにやあらむと、おほつかなく思ひしもしるく、けふはものへなむまかりぬるといふに、いとくちをしくて、かへりなむとするほど、此あるじかへり來て、まづ見るより、けふのあつさを、かへす〳〵いひつゞけ、あせおしのごひ、扇うちならしつゝ、ともなひいる、南おもてなるところ、いよすかけわたし、あたり〳〵いとさはらかにしつらひたる、いとすゞしげなるに、夕風まちとるべきはしつかたに、ついゐたるに、かつがつあつさもわするゝこゝちして、すのこのはしに出て、見いだせば、庭の梢ども、いづれとなくしげりあひたる物から、木だちうとましからぬほどに、つくろひなして、このもかのもに、はかなきしば垣なつかしくゆひわたしなど、しめやかに見どころあるさま也、夕つけゆくほど、軒ちかきくれ竹の下風、心もとなきほどにうちそよめきたるも、あかぬこゝちのみぞせらるゝ、やゝ有て、同じ心なる人、またふたりみたりなむきあひたる、さう〴〵しかりつるに、いとうれしくて、はかなき物がたりも、いま一きは心ゆくこゝちす、心へだてぬどちのまとゐは、なべてうちとけたるなむよきを、ましてかくあつきには、いかでかかしこまりもおきあへ侍らむ、むらいのつみはゆるされなむとて、ほと〳〵帶などもときちらしぬべし、あるじなさけある人にて、庭のたていしなどに、水そゝかせたる、夕立のなごりおぼえて、木々の下枝うちなびきて、落るしづくも、いひしらずすゞしく見ゆ、やうやうちとくらくなりゆくに、さとやかなるわらはの出來て、ともしびちかくともせば、いでやけぢかくていとあつかはし、こよひはとうろにてをありなむ、此火けちてよといふ、げにさも侍らむとて、たちていぬるほどもなく、せむざいのしげみにたてるに、火いれたる、ほのかなる影に、青葉の露、きら〳〵と見えて、同じくふく風も、ことにすゞしくぞおぼゆる、夏の月なきほどは、庭のひかりなき、いとむつかしくおぼつかなきものなるに、此ひかりなからましかば、いと物のはえなからましをとて、みな人めであへるに、あるじのしたりがほなるも、ことわりなりかし、かくてよひ過るほど、こだかき松にほのめく影は、月出たるならむとて、東のつま戸おしひらきてまつほど、とばかり有て、いとはなやかにさし

出たるは、又にる物なく、すゞしくおもしろきには、とうろのひかりも、いまぞむとくにけたれにたる、風さへいとひややかにうちふきたるは、ふる川のべの杉の下陰ならねども、秋やかへりてなど、うちずしのゝしる、大かた月は、秋をこそめでたき時に、古よりいひおきたなれど、此ごろの空に、かくてまち出たるほどよ、たとしへなく心もすみて、物むつかしさも、こよなくまぎるゝわざになむ、

八月ついたちごろ稲掛大平が十五夜の圓居に出すべき月の文ども人々すゝめて源氏物語の詞つきをまねびてかゝせけるにたはぶれにかける文

八月十日あまりのほど、月のいとおもしろき夜、はしちかくゐて、大ひらがすゝむる十五夜の文も、けふあすのほどになりぬるを、何事をかかくべきと、とかく思ひめぐらしつゝ、ながめゐたるに、みゝなれぬものゝおとの、遠く聞えくるを、あやし何の音ならむと思ふほどに、やうやうちかくなるは、はやく京にありしほどに見たりし、賀茂のまつりにわたりし、車の音こそかくは有しかと、きゝなさるゝに、いよいよあやしくなりて、かつがつ思ひよりつる事どもゝ、いづちいにけむ、たゞ此物のおとにみゝとゞめゐたれば、此門のまへにとゞめて、人の入くるけはひぞする、いよいよあやしくて、人出して見せたれば、やがてかへりきて、見なれぬさましたる人なむおはしつるといふを、いさり出て、いよすに立かくれてのぞけば、すきかげきたなげなきをのこの、かり衣すがたなるいできてとわづくる、又くるを見れば、しうとおぼしくて、かしらつきよにめなれぬ女のはかまきたる、すそいぶせげにいさゝかかゝげて、かた手には、扇をさしかくしたる手つきなど、いとなまめかしく見ゆ、わかき女どもわらはなど三四人しりにたちたるも、みなめやすきほどしたり、よひよりなきつる庭の松虫の、なきさしたるら、此人をやとあはれになむ、月はうす雲にかくれたるほどの影の、中々けちえむに、物のあやめも見えわかれたる、所からは此世の人とも思はれず、さるは昔物語などには、つねの事にて、さいふばかりおどろくべきゝはの人とも見えぬ物から、さしあたりては、ゐなかびたるこゝちに、ふとさし出て、いひいづべきことのはもおほえず、いかさまにせましと心さわげど、さてあるべきならねば、せめて思ひしづめて、なれたれどかもの有あひたる、みづからもていでゝ、いとあやしくは侍れど、たゞしばしはとて、心しらひにうちしけば、此をのこすのこのもとにより來て、夜中にかくにはかなるを、いかにあやしとおぼすべからむ、されどひるなど物し給ふべきならねば、よにかくれて、ことさらに夜ふかしてなむ、此おもとは、むかし上東門院の、まだ中宮と聞えしほどに、さぶらひ玉ひて、むらさきとめされし、式部の君といふに、むねつぶれて、あさましともあさましきに、ふけゆ 風のけはひ、いとひやゝかに

身にしみて、そゞろ寒きに、月も花やかにさし出たり、なほあふぎはなたねは、かほは見ゆべくもあらず、ちかきころ此わたりのぬしたちの、光源氏のものがたりに、いみしく心いれて、此ほどかのこゝろばへをまねびたる文かき給ふとか、風のつてに聞玉ひて、日ごろいかで此よろこびきこえに物せむと、おぼしのたまひわたるを、こよひの月にもよほされ給ひてなむ、おはしまいつるといへば、さうじみも、うれしくなむとばかり、たゞ一ことほのかなる聲も、いひしらずあてにらうたくて、

山路の菊の物語

ある人、長月の九日に、けふは高きにのぼる日とて、おくまりたる山里にとしごろすむ人の、久しく音もせぬ、とぶらひがてらまかりけり、やゝ深くいるところなりければ、道のほどいたくこうじにたり、このもかのも千種の花ども、みなうつろひて、あるかなきかになりぬる中に、花すゝきのたかやかにて、ひとり殘れるたもとも、いと露けゞに見わたさるゝなど、あはれふかき山路にもかゝりけるとゝ思ひつゝ、入もてゆくまゝに、道のほとりちかく流れたる谷川の、水の音すみて、いといさぎよきが、物にもにず、いみしくかうばしきに、あやしくなりて、あしもやすめがてら、しばし立やすらひて、思ひめぐらせば、これやさは菊の雫のおちつもりて、流れくるならむと、桃の花ならねど、みなかみの尋ね見まほしくなりて、心ざしのところをばわすれて、此ながれにつきてのぼるに、はか〴〵しく道もなきそはづたひを、たどりゆけば、いとゞしくくるしくて、あしのうらうごかれず、わびしきを、わりなくねむじつゝ、しひてものするまゝに、思ひしもしるく、菊いとしげくある所にいたりぬ、いまを盛と咲みだれたる花の色香は、猶おくふかくと、あながちに分いるほどに、ひまなくしげくちりかゝる袖の露、うちはらふまにも、千とせをやへぬらむと、かつ〴〵仙宮にもいたれるこゝちさへぞしたりける、めもあやにところせくにほひわたれる、かたつかたを見れば、いはほのかたそばにしりかけて、まへなる流れにめをすまして、酒のみをる人なむ有ける、いみしく年おいて、かしらに黑きすぢなく、ひげいと長くなど、すべていと神さびたる、いと〳〵あやしく、音にきくやま人といふ物にこそと、かつはゆかしく、有さまもきかまほしければ、ちかくよりて、かく世ばなれて物ふかき山中に、ひとりかくて物し給ふは、いかなるゆゑにかとゝへば、のどやかに見あげて、こはいづこよりいかなる人のおはしつるぞ、おきなは此いはほの中に、かくて八千年の月日をなむ過しつるを、さらにさらによの人のとひくるともなきを、此きくの花さく秋どには、なほわくらばにとひくる人もやと、たえず心にはまちわたり侍ると、いとかう〴〵しき聲して、かたりつゝ、今日しもかくたづねきつることを、いとうれしと思へるけし

きにて、
世の中のうきをもしらでしらぎくの花さく秋を八千度ぞ經しとて、もたるさかづきをさすに、たゞ夢かとばかりたどられて、いらへむことのはもおぼえぬを、うち思ふまゝに、
たぐひなき君がよはひをきくの露われもちとせのちぎりむすばむ、とてのむ酒も、よのつねならむやは、

九月十三夜題をわかちて人々文かきけるに依月客來といけるを

むかし月日のゆくをいみしくなげくおきな有けり、長月十三夜、月いとおもしろきを、よひよりたゞひとりゐて見けり、やうやうふけゆくに、わがよのほども、いとゞ思ひはかられて、風もみにしみて、いと物こゝろぼそくなりにければ、
大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるものとよみて、今は入なむと思へど、こよひしもいたづらにねてあかさむもさすがにて、とかくやすらふほどに、としごろ心やすくかたらふ友だちの有ける、それも同じごと、つくづくとひとりゐて、やどの月をなむ見ける、とうとうしくや思ひけむ、夜はいたくふけぬれど、ほどゝほくもあらざりければ、此翁がり、ゆくりなくとぶらひきけり、夜ふけておもほえずきければ、あるじ心なぐさみてけり、さかづきいだして、もろともにのみつゝ、物語しつゝ見る、あるじのおきな、有つる哥を書いでゝ、まらうどに見せけり、まらうどこの哥を見てよみける、
かざしてなしとこたへておいらくの來むにはあはで月をこそ見め、よしやさばれ、かくばかりをしき夜をと思ひてや、かくはよめりけむ、されどさるあるじの心には、なほあぢきなしとやおもひけむ、いかゞ思ひけむ、しらずなむ、此哥どもを、かく人も見る人も、たゞひるのやうにて、燈のもとにもよらぬを、さかづきもて出たるわらはの、かたはらより、ねむるねむる見をりて、ひとりごに、
風ふけばなびくすゝきに鳴虫のこゑばかりこそよると見えけれ、となむよめりけるを聞て、まらうどはいみしくめでののしるを、あるじの翁かしらうちふりて、いであなあやし、すゝきのなびきよらむからに、聲の見ゆとはよむべき物かは、わらはどにいたくすぐしたりと、いましむる大聲に、わらはの目も大きになりて、ねぶたさもさめにけりとか、

初冬時雨といふことを題にて

神無月のはじめ、物へゆきけるに、日いとみじかきころ、ややとほきところにし有ければ、いそぎつれど、かへさはとく暮にけり、夕月の影に、玉ざゝの霜の、ところせくおきわたしたるが、きらきらと見えたるなど、中々おかしき冬枯の野べのけしき、やみならましかば、くちをしからましと思ふにも、入かたちかくかすかなるひかりの、いとあかぬこゝちするに、空さへにはかにくもりて、山のはならで、月もかくれ、

いみしくくらくなりて、風あら〳〵しく吹きぬるは、げにさだめなき、此ごろの空のけしきかなと見るに、はしたなくうちしぐれきぬれば、あしをそらにはしりかへるほど、しとゞにぬれぬ、何とはわかねど、いと大きなる木のたてるを見つけて、しばしのかさやどりと、頼む陰さへ、いたくちりすきにたれば、雨たまるべくもあらぬぞ、いとわりなきわざなりける、しばしのほどに、なごりもなく晴ぬれど、月ははやく入にけり、

　東路の旅といふことを十一月のころ

これかれともなひて、いせの國なにがしの里を、暁の空に立出て鳥がなくあづまの旅におもむきける、ころは霜月の十日あまりの事になむ有ければ、旅衣の袖ふく嵐も、いたくみにしみて、もの心ぼそきに、山の梢道のべの草葉も、冬がれわたれるけしき、いとあはれにながめやられ、海づらによせかへる浪さへ、我もいつかはと、げにうらやましくおぼえつゝ、玉ざゝの野べのかりねも、一よ二よと重なれば、故郷もやうやうはるかに、なるみの浦を過て、みかはの國にもなりぬ、在原ノ中將の、から衣の言のはの、はるけき昔の跡たえぬ八橋も、ほどちかしときけど、杜若の花のをりにもあらざれば、すさましく思ひへだてゝ過ぬ、はや遠江ノ國なりといふを聞てひとりがよめる、

　ふるさとはとほつあふみときくからにふじの高根やちかくなるらむ、

たれも〳〵此東路は、まだはじめたる旅になむ、有ければ富士の山見むことをなむ、いつしかと心にかけて、旅のものがなしさも、うちまぎるゝやうなるに、このごろのそら、雪げにのみうちくもりつゝ、いとこゝろもとなくて、過行ほどに、さよの中山も、ひるのほどにこえ過て、音にききこし大井河も、水いと淺く、袖つくばかりにて、心やすく渡りぬ、此川は、とほつあふみと駿河ノ國のさかひにながれて、いと大きなる川なりけり、けふはさりとも、ふじ見えなむと思ふに、猶あやにくにはれやらぬ空、いといふせくて、日もくれぬれば、宇津の山ちかき里にやどりぬ、つとめて一人がいふやう、よべの夢に、故郷はさしおかれて、まづ見まくほしき、かの山をなむ見つるといへば、いま一人がいひけらく、夢にふじを見るは、うへなきことゝなむいふなるを、なにがしらがためには、

　するがなるうつの山べのうつゝにも夢にもふじは見えぬなりけり、

となむよめりける、ゆき〳〵て、清見が崎に、駒をとゞめて、三穗の松原うちながめやりつゝ、しばしやすらふほどに、名にたつ富士のねおろしにや、雪うちゝりて、風いとはげしく吹くるほど、今ぞやう〳〵晴間見えそめて、はるけき雲の中空に、あやしき物なむあらはれたる、たゞ綿などをつみあげたらむやうして、ましろにいと高く見ゆ、人々あきれて、かれはなにぞと、あふぎ見やりて、しばしはそれと

もおもひわかれず、やう〳〵かたちの見えゆくにぞ、かの夢にも見ざりし山なりけりとは、しりにけるとぞ、

述懐といふ題にて

昨日はけふのむかしにて、はかなくのみすぎにすぎゆく世ノ中を、つく〴〵と思へば、あはれわが世も、いくほどぞや、手をゝりてかぞふれば、はやみそぢにもあまりにけり、命長くて、七十八十いけらむにてだに、はやくなかばは過ぬるよと思へば、まだよごもれるやうなる身も、ゆくさきほどなきここちして、心ぼそくぞおぼゆる、かくのみはかなく、こゝろなき木草鳥けだものゝおなじつらに、なにすとしもなく、あかしくらしつゝ、いけるかぎりのよをつくして、いたづらに苔の下にくちはてなむは、いとくちをしく、いふかひなかるべきことゝ思ふにも、よろづにいたりすくなく、つたなき身にしあれば、何事をしいでしかは、よの人にもかずまへられ、なからむ後の世に、くちせぬ名をだにとゞめましと、いとゞ人にゝぬおろかさゝへとりそへてぞ、かなしくこゝろうかりける、さりとてはた、身をえうなき物に、はふらかしはつべきにしもあらず、かくのみつたなくおろかなる心ながら、何わざにまれ、おこたりなく、わざと心にいれて、つとめたらむに、つひにはひとつゆゑづけて、なのめにしいづるふしも、などかはなからむと、あいなだのみにかゝりてなむ、

橘經亮に答へたる書

さきつころ大牛がのぼりて、見え奉りて、たひらかにおはします事、かへり來てかたり侍りしを、うけ給はれるうへに、思ひ玉へかけず、こまやかなる御ふみをさへ給はせたる事、いとも〳〵うれしくなむ、さるは故岡部ノ翁がかける物、えうじ玉ふと、うけ給はりしかば、よき使ッとこたみ大ひらして、有あひたる一ッ奉りしを、又のりながゞつたなき哥、みづから書侍したざくをも、かれが心とゝりそへて奉りつとか、此ふたつの御よろこびとて、ふりはへ玉へる御ふみはよ、さもねもころなる御心しらひにも侍るかな、ここにおのが哥のことは、聞侍りて、いとなむはづかしく思ひ玉へらるゝ、鈴鹿山の御言の葉はしも、ふるき世のあはれなるすぢにて、今の世には、有がたくめでたくなむうけ給はりぬる、年ごろ大御神ノ宮にまうで給はまほしくおもほすとは、うけたまはりわたるを、もしさもおはしまさむには、さりともむぐらの門をも、よき玉はじと、たのもしくまち聞えさするを、いかでこむ春ばかり、おもほしたちねかし、されど此春のゆゝしきまがことにより、おほやけの御つとめも、げにつねより殊にしげくこそおはしますらめ、又大宮造りなどはじまりなば、さらなること、おしはかり聞えさするを、おのれはた京に侍りしは、はやくみそとせのあなたにもなり侍りぬれば、つねは昔の事どもなど、思ひ玉へ出られて、いと〳〵戀しく、いかで〳〵と思ひわたり侍れど、なにやくれやと、えさらぬいとなみにか

かづらひ侍りて、其後はあからさまにも、えなむのぼり侍らぬを、とほからぬほどに、新宮（ニヒミヤ）めでたくつくり出られて、御うつろひの大御ゆきのおはしますべければ、そのをりは、かならずのぼり侍りて、いともかしこく、めづらかなる大御よそひをも、みつばよつばの大殿づくりをも、をがみ見奉らまほしく、かつは君にも見え奉らむと、今よりなむおもひたゝれ侍るを、それはた來む年のうちなどには、いまだしくや侍らんと、いとまちどほなるこゝちのし侍れば、なほ君が伊勢路の旅衣をこそ、かへすがへすもまち奉れ、あなかしこ、ここわけて申す、をりをりはこなたよりも、おどろかし奉るべく、心にはつねにおもひ玉へかけながら、そのとゝ侍らぬかぎりは、おのづからうちたゆまれてなむ、まとや大ひらにかし給へりし、十德といふ物のふるきかた、又それかむかへ玉へるやうなど、まとにさりぬべく、見給へうけ玉はりぬ、ちかきころ、江戸の伊勢ノ貞丈といひし人の書るものにいへる趣も、もはら同じことになむ、又葬喪記といふ物はしも、見侍るに、いにしへのことしらぬ、後の世のをこ人の、いつはり作れるものになむ侍ける、はやく君も、さぞおもほすらむかし、さてこよ女のさうぞくに、腰裳といふもの、台記のべきに、ふたところ見え侍るは、なほこことふみにも有しやうに、ほのぼの思ひ出らるれど、さだかにはおぼえ侍らず、こはよのつねの裳とは、ことなる物にや侍らむ、いかなるものにか、しり給はずや、もはらかゝるとゞもを、わざと考へらるゝ人にも、とひきゝ給ひて、いかでくはしく書つけて給はらば、いとなむうれしかるべき、なほ聞えさせまほしき事どもは、つくは山はやましげ山とかいふらむやうに侍れど、さのみくだくだしくやはと、みなとゞめ侍りつ、

加藤千蔭が始めて書おこせたるにこたへたる

まづこよたひらかに物し給ひて、めでたき御よはひ、重ねあげ給へらむ、年のはじめのよろこび、なほ八千世にと、ことぶき申す、こゝにも事なくてなむ、こぞの冬は、ふりはへさせ給へる御ふみよ、まだきに春や立かへりきぬると、思ひ玉へかけぬ、鶯のはつ聲よりけに、めづらしくうれしくなむうけ給はりぬる、いでやあがたゐの友とては、一とせかとりの魚彦ぬしの、とぶらはれしと、むらたの春海主とこそは、一たびのたいめもし侍りつれ、これらの人々をはなちては、たゞ音にのみ聞わたり侍る中に、君の御名はしも、ここにふじの高根の鳴澤となむ、よにひどくなるを、今までは其事となくて、聞えさするわざも侍らざりき、さるははやく御父君のみもとにまゐり通ひし、藤田ノ某といふものゝつてに、をりをりは御有さまもうけ給はり、又ちかきとし、安田ぬしのもの語に聞侍りしにつけても、いとどゆかしく、もとよりまなびの道には、なめげなれどはらからと、心にのみはむつましく、頼もしく思ひ聞えさするを、千里へだゝる雲ゐのほどに

て、いせの海べの友なし千鳥、故大人のなごりうちそへて、浪のたちゐに、東の空のみ、なつかしくなむ思ひ玉へわたり侍る、ちかきとしごろは、しづかにこもりおはしますとか、宣長は、かひなきよはひ六十にあまり侍れど、いまだ家のなりをも、えゆづりあへ侍らで、よなか曉といはず、はしりありき侍るに、ものまなぶいとまもすくなく、こしいたくくるしく侍るに、いとなむうらやましく思ひ玉へらるゝ、まことや大人の萬葉考、かきつぎ給はむとや、そはよろづよりもめでたく、たふとき御事、同じ心に、いと〳〵うれしくなむ思ひ給ふる、巻のついでのこと、のりながゞ思ひ侍るも、のたまはすると、もはら同じことになむ侍る、そも〳〵大人の御しわざを、とかくもどき侍るは、いともかしこくは侍れど、さりとていかにぞやおぼゆるふしを、さて過さむは、中々にかの教のこゝろにも、たがひてぞ侍らまし、よろづはつぎ〳〵にあきらかになりゆかむこそ、學びの道のほいには侍らめ、おのがこゝろみにかたはしかきそめ侍りつる、玉の小琴といふ物、見給へるよし、もとよりいたりすくなきしわざは、御らんじごころも侍るまじきは、さるものにて、人の心は、いにしへのもろこし人もいひけるやうに、おもてのごとく、さまざまになむ侍るめれば、御心と同じきことは、有がたかるべく、思ひ玉へらるゝを、もゝが一ッも、さもとおぼさるゝふしの、まじり侍らむは、思ひ玉へかけぬ、身のよろこびになむ、さるを名におふなぎさの眞玉としも、の玉ひかけたる、御言の葉の露の光は、いとまばゆくはづかしくなむ、御かへりこと、すなはち聞えさすべく侍りつるを、年のくれとて、何くれのいそぎにかきまぎれて、今になり侍りぬるおこたりは、をりからにおもほしなだらめてよ、かへす〳〵、

うれしさはほりかねの井を思ふにもくむ手にあまる水ぐきのあと、ならしそめては、ならしばのしば〳〵に、今よりはと、たのもしくなむ、あなかしこ、む月の六日の日、

中里常岳がとひけることに答へたる詞

とはれたるおもむき、みなまことにさること也、おのがえぬすぢにかゝづらはむは、もろこし人の、勞して功なしとかいひけるやうに、いたづらわざにもなりぬめり、然るにまうとは、心さとく、何わざにもいたりふかき中に、哥はことに心いれて、ものせらるめれば、いにしへぶりちかき世ぶり、いづれにまれ、とりたてゝ物せられむには、ならぬやうはあらざらむ中に、つねによみ出らるゝ口つきをかむかふるに、なほ新古今に心ひかるゝさまに見えて、をり〳〵はおかしきふし見ゆれば、今よりゆくさきも、むねと此集に心をいれて、つとめられむこそよからめ、そも〳〵哥は、よろづにまさりてかたきわざなるを、かの集のさまは、かたきが中のかたきさまにしあれば、たやすくはなしうべきにあらざれども、かの集のころの哥人も人、われも同じ人なれば、たえて及ぶ

まじきやうやは有べき、萬のわざは、天つ空にもかけりてむこ、はじめより、こゝろを高くつよくつかひて、おこたらずつとめぬれば、つひにほど／＼に、なしえぬわざはなきものぞよ、

雪のあした友だちのもとにいひやる書になずらへてかけるふみ

けさのけしき、めづらしくは御らんぜずや、冬になるより、いつしかとのみ、日ごとにまちわたり侍りしに、きのふのゆふべ、風いたく吹あれ、雲のたゝずまひも、いみしくさえわたりて、とぶ鳥のけしきまで、かならずふりぬべき空とは見給へしかど、いとかくまで深くとは、思ひ玉へかけざりきかし、明くれ心へだてぬ友どちは、かゝらぬをりだに、何事につけても、まづ思ひ玉へ出らるゝわざなるを、ましてかくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身の、ひとりのみ見侍らむとの、いとあたらしく思ひ玉ふれば、よし跡つけても人のとひ玉はましかば、こよなくおかしさもまさりぬべきものと、思ひ玉ふるに、いかにとだにおとづれもし給はぬは、いと思はずにうらめしくなむ、此けしき、さりとも見過しがたくはおぼさるらむものをとは、思ひやり聞えさすれど、しろしめすやうに、いとうひ／＼しき口には、何事もいはれ侍らず、筆のしりとるはかせだに侍らで、とりつくろひ侍らむやうも侍らねば、おもひ給ふるほどの心も、たゞおしこめてなむ、そこには、いかに見どころある、心ふかき言の葉おほく物し給ふらむ、一ッ二ッたまはせよかし、さてなむせばき庭の、雪のひかりもくはゝりて、友なきけさのさう／＼しさも、なぐさめ侍らむ、いでやかく聞えさするも、本よりあやしき鳥の跡の、けさはいとゞ筆のさきしみこほりて侍れば、御らんじわくかたも侍らずや、あなかしこ、

手　枕

前坊と聞えしは、うへの御はらからにおはしましゝを、御世のはじめより、坊にゐ玉ひて、大かたの御おぼえはさる物にて、うち／＼の御ありさまはた、いとあはれに、やむとなくおもほしかはし給ひ、よの人も、いとかしこきまうけの君と、たのみどころにあふぎ聞えさせつゝ、行末めでたく、あかぬとなき御身を、いかなる御心にか物し給ひけむ、世をあぢきなきものにおもほしとりて、つねは、いかでかうくるしくところせき身ならで、いけるよのかぎり、心やすくのどやかに、思ふとのこさず、心のゆくわざして、あかしくらすわざもがなとのみ、おもほしわたりけるほどに、つひに御ほいのごと、東宮をもじゝ聞えさせ玉ひて、六條京極わたりになむすみ給ひける、おほかた宮のつくりざまは、さらにもいはず、せんざいなど、心ばへあるさまに、こぶかくうゑわたし、池のこゝろひろく、水いさぎよくやりなしなど、よろづ心にくゝ、さるかたにおかしく、今めかしき宮のありさまになむ有ける、

坊におはしまいし時、そのころの大臣のむかひばらに、いとになくかしづきたて給ひしみむすめ、ほい有てまゐり玉ひける、御心ざし淺からず、あはれなる御なからひにて、一すぢにまめやかなる御ちぎりふかゝりしほどに、いときよらにうつくしげなる女宮をなむ、うみ奉り給ひける、ふたところ、かぎりなくあはれなるものに思ひ聞えさせ給ひつゝ、明暮の御かしづきぐさにて、月日を過し給ひけるほどに、此宮の四ッになり給ひしとしの秋、はかなき御こゝちのやうにて、父宮にはかにかくれさせ玉ひぬ、まださかりの御よはひにて、かうにはかにあへなき御事を、おほやけにも、いみしうあたらしうおぼしめしなげき、世ノ中の人も、をしみ聞えさせぬなし、まいて御息所の御心まどひ、たゞ何事もおもほしめされず、きしかたゆくさきかきくれて、あさましうおぼしまどふもことわりなり、としごろふたつなき御ちぎりを、かたみにまたなくたのみかはし玉ひつゝ、かた時にても、おくれ奉りては、よにあらむものともおぼさゞりしかど、かぎりある道は、御心にもかなはぬわざにて、えしたひきこえさせ給はぬぞ、くちをしういふかひなきや、いはけなき人は、何心もなく、されありき玉ふを見給ふも、いとゞしき御心のもよほしにて、中中のしのぶ草なめり、をよすけもておはする月日にそへても、ひるよなくおぼしなげくほどに、うちつゞき、父おとゞさへうせ給ひぬれば、いとゞたづきなく、物心ぼそくのみおぼすにも、わが御身ひとつは、いまはとてもかくてもありなむ、をしげなきかたちをやつして、世ばなれたる山里にゆきかくれても、おのづからありへむと、おぼしとるにも、たゞこのわか宮の御ゆくすゑうしろめたう、かくたのもしき人々におくれ聞えさせ玉ひて、はか〴〵しき御うしろみなどもなかなるに、われさへ見奉りすてなば、いかにしてかは、人なみなみにもおひ出給はむと、いみしう心ぐるしき御ほだしにて、すが〳〵しくもえおぼしたゝれず、見ゆづる人なくて、のこしとゞめたてまつらむことをのみ、いみしうおもほしたゆたひつゝ、とし月もかさなりゆくに、あるかぎりの女房たちなども、此御心ばへの有がたくあはれなるにかけとゞめられ奉りて、をさ〳〵まかでちるもなく、大かたの有さまは、むかしにかはることもなけれど、おのづから事にふれてはこころぼそく、よるべなきこゝちしたまひて、あはれなることもおほかりけり、をりふしの花紅葉を見玉ふにつけても、色をも香をも、同じ心に見はやし給ひし、むかしのことのみ、つきせずおぼし出らるゝにも、姫宮の御さまかたちの、なのめにあかぬことなく、うつくしうあらまほしうなりまさり給ふを、うき世の御なぐさめにて、あかしくらさせたまふ、御心にいれて、御手ならひせさせ奉り、御琴をしへ聞え玉ひなどしつゝ、いかで何事も、いふかひなからずをしへたてゝむと、心ことにおもほしおきて給へれば、さぶらふ人々も、こ

ころづかひいたくして、よろづ心にくき宮のうちなりけり、内にも、故宮の御事をわすれさせ給はず、あはれにおぼしめし出つゝ、をり／＼の御とぶらひ、たえずぞ有ける、源氏の君にも、前坊の御息所の、あはれにながめ給ふらむを、をりをりはとぶらひものせよかしなど、のたまひつけしかば、げに心にくゝよしある人と、さき／＼もきゝおき給ひしあたりの事なれば、かつはゆかしくおぼされて、一日内よりまかで給ふとて、ゆふつけておはしけり、ほどゝほければ、くれはてゝぞおはしつきぬる、御門のもとに御車たてさせて、御随身いれて、あないせさせ給ふほど、すこしさしいでゝ、見いれ玉へば、木立いと物ふりて、こぐらく見えわたり、けはひしめやかに、こゝろにくゝ思ひやられ給ふに、そのことゝも聞わかれぬほどのものゝね、松風にひゞきあひて、たえ／＼きこえくるも、あはれになまめかしく、なみ／＼ならぬつまおとゝきゝなし給ふにも、御心ときめきして、なにども世に名たかく物し給へば、たがふべくもあらぬ、御息所の御ことのねと、御みゝとゞめて、聞おはします、うちには、にはかなるほどの御とぶらひに、人々そゝやとあわてつゝ、さゝめきさわぐほどに、御ことはひきさし給ひつ、中々なるほどをこそ、君はくちをしうおぼす、随身出ぬれば、おり給ひて、いたう心げさうしつゝ、ひきつくろひうちふるまひて、あゆみいり玉ふ御さま、にるものなくめでたく、あてになまめかしう、にほひみちたるに、いとかゞやかしうはづかしくて、とみにいでくる人もなければ、はしのもとにたゝずみて、うちながめおはさうず、いと久しくして、中將の君といふいできて、思ひ玉へかけぬほどの御とぶらひにて、何事もいとかたはらいたく、かたじけなきわざになむとて、御しとねさしいづるさまなど、いたうなれたり、いでやさき／＼もまゐり侍りて、御有さまもうけ給はらまほしうは、思ひ玉へたちながら、よろづ思ひたゆたへつゝみてなむ、心ざしのほどをも、今までえ御らんぜさせ侍らざりし、うへもつねに、こみやの御事をのみ、あけくれわすれさせ給はず、この御有さまの、こゝろぐるしうあはれなるよし、のたまひいでつゝ、姫宮のいかにうつくしうおひ出給ひぬらむなど、御こゝろざし淺からぬさまなど、おほかたの御とぶらひ、いとこまやかにて、かく參りそめ侍りぬれば、又のどかにをとて、其夜はすくよかにて出玉ひぬ、かくふりはへわたらせ給ふ御心ざしを、いかゞはあさくおぼしめされむ、かくて後は、をり／＼の御せうそこたえず、又御みづからも、まうで給ひなどするほどに、よろづ見まさりのみせられて、あくまでゆゑ／＼しう、おもりかによしある御けはひに、いとゞ御心のみとまりて、年ごろよそにおもひやりつゝ、聞えで過ぬるとさへ、くやしくぞおぼされける、をり／＼はおかしきなほざりごとなどうちいでされば、み、御文にも、けしきばましき事も、うちまじり

ゆくに、あはれなる御こゝろざしのほどは、うれしくおぼさるゝ物から、かううるさき御心のうちそひぬるを、いとこゝろづきなく、うとましくおぼされて、御かへりもをさをさなきに、いよ〳〵御心いられて、御せうそこうちしきり、これみつなど、おりたちまゐりかよひつゝ、まめやかなるさまにも、御心よせつかうまつりたまふこと、二とせばかりにもなりぬれば、女君の御心にも、さこそいへやう〳〵よろづ思ひしられ給ひつゝ、いとけうとげにはあらず、をりふしのあはればかりはすぐさず、なつかしきさまに、きこえ通ひ玉ふ、なげの御筆づかひ言の葉も、いひしらずなまめかしう、御手などあてにけたかく見どころ有てかきながし給へるを、まれまれ見玉ふにも、有がたくうちおきがたくおぼされつゝ、はかなき木草につけても、あはれと御心とまりぬべきをりを過さず、心ふかきさまを見え聞え玉へど、女君は、なつかしからむなさけも、いとゞあいなくおぼされて、人づての御いらへ、はしたなからぬほどにてやみなむと、おぼしとりつる御心は、さらにゆるぐべうもあらざりけり、年かへりて春たつ風にも、人の御心は、うちとけがたく、つれなさのみまさりゆく、人の御ほどをおぼすにも、いとかたじけなくいとほしくて、えしひても聞えおもむけ給はず、とさまかうさまにおもほしみだれつゝ、いとゞ此ころは、おほいどのにはよがれのみおきつゝ、さわがれ給ふ、内わたりのどやかなる春のつれづれに、雨さへふりくらして、日もいと長きに、いとゞ思ひわび玉ひては、春の物とてなどうちうめかれて、

うき人に見せばや袖のなみだ川けふのながめにまさるふかさを、

こよひも大殿にはまゐら聞え玉ふを、ひきよきて、かしこにぞわたり給ふ、いたく忍び玉へば、御前などもことになく、うちやつしてぞおはしける、例の中將いでゝ、御せうそこ聞えつたふ、いとかうたび〳〵かたじけなくわたらせ給ふこと、としごろありがたき御心ざしのほどは、あさましきまでおもひたまへしりぬれど、こよひはみだりごゝちのたへがたうて、はしちかうもえみじろき侍らねば、みづからはえきこえさせぬを、すこしよろしきをりも侍らば、としごろのかしこまりも、のどかに聞えさせ侍らむと、聞えいだし給ひて、たいめし給はむとは、いとあるまじうおぼしたり、こゝろうくもと聞給ひて、此みすのまへにのみ、かくてさぶらふこそ、いとからきわざなりけれ、かずならねど、あさからぬ心ざしも、としごろといふばかりになりにて侍れば、さりとも御らんじしるらむを、そのほどのらうかぞへさせ給はゞ、かう物どほうのみもてなさせ給ふべき事にやは、人づてならで、たゞあはれとばかりのたまはせばなむ、ふかきうれへも、なぐさみ侍りぬべきを、はしたなくかゝるとは、まだならはずこそ侍れ、心ぐるしくうけ給はる御こゝちの御とぶらひも、人づてならず聞えさせむをとて、みすひきゝて、なからいり給ふ、人

人げにすのこはかたはらいたうもと、思ひあつかひて、いれ奉りぬ、女君は、はしちかう、まだ御かうしもまゐらで、雨雲のはれまの月の、あはれにうちかすみて、えんなる空を、ながめいだしておはするほどなりけり、とかうかゝづらひ入つゝ、さうじのもとにしのびより給ひて、いとかうしめやかなる夜のさまに、思ふこともうちいでば、人もよもあはれとおぼしぬべきをりかなとおぼすに、たちかへらむこゝちもしたまはず、

　こよひだにあはれはかけよ明日はよもながらふべくもあらぬ玉のを、こひしなば長くや人をと、ひとりごとのやうにのたまふけはひの、いとけぢかきに、女君はむくつけうなりぬれど、さすがによそながらも、としごろ聞えなれ玉ひぬれば、むげにしらぬ人の、いりきたらむやうに、けうとくすゞろはしくなどはあらねばにや、

　我にしもあやなくかけそ絶ぬべきみだれやよそのあだのたまのを、かごとがましやと、しのびやかに、のたまふともなきも、いかにいひつるぞと、かたはらいたくて、やをらづゝひきいり給ふけはひなれば、さうじをやをらおしあけて、ゐさりよりつゝ、御ぞのすそを引とゞめて、かたじけなけれど御みゝなれぬるとし月も、かさなりぬらむを、などかううとましく、よそにはもてはなれ給はむ、おのづからきこしめしあはするやうも侍りなむ、よのつねのうちつけに心あさくすき〴〵しきすぢは、さらにおもひかけ侍らず、御ゆるされなからむほどは、これよりおふけなき心は、さらに〳〵つかひ侍らじ、たゞかくながら、いたづらにくちはてなむなげきのほどを、かたはし聞えさせむとばかりになむとて、いとのどやかにさまよくもてしづめて、こゝら思ふ心の、しのびがたくなりぬるさまを、いとようきこえしらせ給ふ、御けはひのいひしらずなつかしう、あてになまめかしきに、女も、あはれとおぼししるふし〴〵なきにしもはたあらぬを、かうあやにくなる御けしきに、え心づようもゝてなし給はず、風ひややかにうち吹て、夜いたうふけゆくほど、御かうしもさながらにて、はれゆく月影も、はしたなきやうなれば、御かたはらなるみじかきちやうをさしへだてゝ、かりそめなるやうにて、そひふし給へり、人々は、かうなりけりとけしきとりて、みなさししぞきて、とほうふしぬ、いとかくのがれがたきすくせのほどを、女君は、いみしうこゝろうく、くちをしうおぼししみて、あり〳〵て今さらに、わか〴〵しくにげなきとを、さぶらふ人々の思ふらむほども、しぬばかりわりなくはづかしう、かつは人の物いひもかくれなきよに、あはつけくかろ〴〵しき名やもり出むと、とかくおぼしみだれつゝ、たゞたけきことゝは、御なみだにくれまどひて、うちとけぬ御けしきを、心ぐるしう見給ひて、おろかならず契りなぐさめ聞え玉ふとおほかるべし、いとゞしき春のよのならひ、い

こはかなくて、明がたちかくなりぬるに、いりかたの月、い
こ心ぼそくかすみたり、
かはすまもはかなき夢の手まくらになごりかすめる春の夜の月、いかゞ御覧ずるこきこえ玉へば、
おぼろけの身のうさならば春の夜のかすめる月もこもに見ましをこて、御ぞひきかづきて、見もやゐ給はぬを、こまやかになつかしうかたらひおきて、出玉ふこて、猶御かたちもゆかしければ、あはれなるほごの空のけしきも、同じ心に御らんぜばなむ、いみしき心まごひも、すこしは思ひのごむるやうも侍らましを、あまりうもれいたきわざになむこて、せちにはしちかくいざなひ聞え玉ふも、いこわりなくはづかしけれご、すこしゐさりいでたまふに、あけゆくそら、あやしくはしたなくて、こかくまぎらはし給へる御もてなしなご、あくまでようい あり、あてにらうたげなり、心にくきほごの、あけがたの月影に、御ぐしのこぼれかゝりたる、かたはらめなご、いはむかたなく、あなめでたこ見ゆるにも、いこゞ御心こまりて、なほいでかてにやすらひ玉ふほご、御供の人々こわづくり立さわぎて、明はて侍りぬこ、そゝのかしたつるも、心あわたゝしく、にくゝさへおぼさるれご、あながちにつゝましく、おぼししみぬる、御心のほごも、いこほしく、かつはわが御ためにも、かたはならむこ、おぼしかへして、あらはならぬほごの、あけぐれの空の、霞のまぎれに、立かくれ

て出給ふこぞ、

此ふみは、源氏の物語に、六條の御息所の御事の、はじめの見えざなるを、かのものがたりの詞つきをまねびて、ものせるなり、

春庭

言の葉の花ちりはめて遠き世に
にほふもうれしさくら木の板

鈴屋歌集八之巻　本居宣長詠

春歌

年のはしめによめる哥とも

名のみして見ゝわかゝけけくむとに老まさりゆくけさの若水

わか年はわすれてうれし老ぬれはわらはこゝろに立かへる春

めに見えてかすむとなしにのとけきは春たつけふの心也けり

寛政十二年の冬わか山にものしけるほとそのとしくれて又の年の春のはしめに

けさよりは霞へたてゝいとゝしく故郷とほき春はきにけり

立かへる雲ゐの霞まち見てもなほこひしきはふる郷の春

元日の朝世のいけひさゝて大平かわれに茶をすゝむとて君のため名におふ里のわか水をくむもうれしき千世のはつ春とよめるにつきて我も又よめる

くむもよし今年をちよのはつ春と名もわか山の里のわか水

曉立春

春きぬとかけの八聲にうくひすのはつ聲つゝくしのゝめの空

立春河

めつらしく波も春たつ音羽川いはまのこほりなかれそめつゝ

海邊立春

はる〱と松浦のおきもかすむ也もろこしまても春やたつらん

遠山霞

立いてゝ見れは日ことに遠山はとほくなりゆく春かすみかな

きえぬるか霞の衣きのふまてうすくは見えし春のとほ山

雪きえぬをちの高根も朝日影さすかに霞む色は見えけり

野外霞

春の日はうつらの秋もわすられて霞のとけき深草の野へ

雪きえてわかなつみにとくる人に霞たちそふかすか野の原

江上霞

難波江やめもはる風のたえ〱に芦のわか葉もかすむ夕くれ

或人のこひける堺の八景の哥の中に淡路嶋霞

ふかくなる波路の霞日にそへて見るめも春のあはち島山

野鶯

春の野は霞たちける朝よりをりはへてなくうくひすの聲

山家鶯

花もなきしけきの中に鶯のなかすはなにを春のやま里

やま里は峯の霞の色よりもなく音春なる谷のうくひす

天滿神社に梅の木をあまたうゑける春はしめて花咲けるころ人々つとひて哥よみけるに初春梅

うつし植て花もとしをはつ春の色香となる神垣の梅

河邊柳

行川の水はしつけき春風にこすゑ波よるきしの青柳

水ならぬみとりなかれて川のへや吹風なひく春の青柳

水郷春月

見せはやのなにはの春は梅香も霞にましるよはの月影

吹上濱春月といふことを

吹あけの名にたつ濱も風たえて霞はれせぬ春の夜の月

正月のころ紀國にものする時大和國さくら井といふ里にやとりて

花はまたさくとなけれと宿かりて名もなつかしき櫻井のさと

二月の末紀國よりかへるさに吉野にものしてよめる

來て見れは花のさかりの雨かけにたつやよしのゝみねの白雲

大坂若山滋古か家の庭に萩をいとおほくうゑたるを見て二月の事なりけれは

見ぬ花も思ひやられて秋の露おもかけなひく宿の萩原

庭の萩秋も又きてなにはつにさくやこの花見むよしもかな

待　花

春くれはをるやおよひもたゆきまて日數よみつゝ花そまたるゝ

まちわふるさくらの花は思ひねの夢路よりまつ咲そめにけり

のとかなるあたら春日を花も見て咲を待つゝいくかへぬらん

ちるとのときを思へはさかぬ間の心はなとて長きさくらそ

妙法院宮の御會御探題に下紐關櫻といふ事を

いそかるゝ花にゆるさぬ名もつらしとけむやいくか下ひもの關

尋　花

にほひこむしるへ思へは尋ねいろ花にはみねの風そまたるゝ

折そへし賤かつま木の一枝に道いそかるゝ花のやまふみ

たつぬとてゆきあふ人にとふ花のこたへうれしくにほふ山ふみ

京にありけるほと東山双林寺にて人々とともに哥よみける日山花盛といふ事を

山見れはこゝもかしこもさかりにて心はよもにちるさくらかな

翫　花

山櫻きて見るほとはわすれけりうきよのほかゝはなの木本

花下蝶飛

ちるかとはまかひなからにとふてふものとけさそふる花さかり哉

閑居花

さきぬとて人も見にこぬかくれかにあたら櫻の花のいろかな

かくれかに人も見にこすおなしくは嵐もしらぬ櫻ともかな

これかれともなひて山の櫻の花を見に行とて

春の日にさく花見つゝ思ふとちゆけは心もゆくやま路かな

こゝかしこ花見ありきて垣花村中津元よしか家の庭の花を見て夕くれにかへるとて

あかすみてちるとはなしに春の日のくるゝをゝしむ花の木本

紀の國よりかへるさまに大和の國こゝかしこ見めくりけるに法隆寺にて花を見て

そのかみのかたみとなしにふる寺のむかしこひしき花の色哉

落　花

ならひとてさそふ嵐の心にもなしとは花を思はさらめや

こむ春も見むと思へはちる花に命もをしき山さくら哉

庭落花

ふりつむも空にしられぬ花なれは春日のとけき庭の白雪

けふたにもとはゝ見せはや人まちしきのふの花の庭のしら雪

あかさりし一木のさくら庭もせにちるこそ花のこかり成けれ

花ちれはおなし色なる白妙もさくらにゝほふ庭のまさこ地

庭　菫

なつかしみ見れは中々我やとの庭のすみれはつまゝくもをし

朝戸出のにはの芝生にきのふまてしらぬすみれの花咲にけり

手もふれは宿のあるしのをしむへき垣根の菫つみやえなまし

京にものしけるほと蓮花王院のまへなる池のかきつはた人々とともに見に物して

かきつはた書て見すへき言の葉も心およはぬむらさきの色

紫のふかき心のありせはと花見てなけくかきつはたかな

款冬

袖はよしぬるともをらんこれも又春はいく日の山吹の露

暮春

あかさりし花のゆかりの霞たに立もとまらぬ春のわかれち

夏歌

四月のころ江戸の井上蟻雄とふらひ來てこれよりよし野にものすといふによみておくる

ちりぬともちらて君まつ花もあらん心にちきるみよしのゝ山

京にものしけるほと四月八日平野の社にまうてけるに櫻の木おほくしけりたるを見てよめる此わたりにかく櫻多くはあらさりしをちかきころうゑて花盛にはいとよき見所になんと人のかたるに

神垣や春おもほゆる櫻かななみ木の青葉かけくらきまて

同しころ双林寺にて人々と共に歌よみける日

花紅葉夏の梢もほかにゝすならふはやしのふる寺の庭

中山前大納言殿にまゐりける日出されたる題山新樹

こゝろさへ花のなこりはなつ山の青葉の色にかはる此ころ

清洲の早川文明か家ふち陰と名つけたるをなつのころ

咲花の春へのみかは夏ふかき青葉もすゝしふちの下かけ

四月のころ空くもりかちにて雨しけくふりけれは

五月雨と春の雨との中空もはれやらてのみ日かすふるかな

四月十日ころ山田のあたりなる世義寺といふ山寺にものしてよめる櫻おほき所なり

ちらしけむおもかけ見えて山櫻青葉にふくもうき嵐かな

うつせみのよをうの花はさかねともすみても見はや夏山の陰

おなし所より錦河内といふを見わたして

川水も花も紅葉もなつ木立にしきの河内名のみたちけり

おなし寺にて夕郭公といふことを

花のかけくれなはなけの夏山もきゝすてかたきほとゝきすかな

くれぬとてかへる山路の一こゑは家つとあかぬほとゝきすかな

月をさへまちいてゝきく夕くれのはつ音うれしきやま時鳥

郭公

一こゑはさめし枕に聞つるも過れは夢のほとゝきすかな

鳴そめて二こゑ三聲きゝしよりかそへもあへぬほとゝきすかな

五月雨におつる軒端のしつくよりなく聲しけき郭公哉

閑居郭公

きゝにとて人もこそくれかくれかになく聲高きほとゝきす哉

京に在けるほと東山にて郭公をきゝて

まれに來てみやこの山の時鳥まちつけかほの聲もなつかし

夏草

道もなくしけるにつけて山さとの人めはいとゝかるゝなつ草

こゝかしこきのふかりつる跡はかり葉末みしかき野への夏草

富小路新三位貞直卿より五月十日はかりいとおもしろく咲たる萩の花を折てたまはせけれは

これも又君かあはれを秋まちてあまたにはとやまたき咲けむ

五月のころ咲たる萩の花を見て

時鳥なくや五月の萩の露なみたのいろも花に見えけり

芝山持豐卿の扇にそへて　暑き日はよそにへたてゝ秋風のひくてとならむあふきともかなとよみてたまはせける御かへし

色ふかき言葉の露もちりかゝる蔭をあふきの風の涼しさ

日野家御會の題夏月涼

ふく風はいとはるゝまて涼しさの秋にあまる夏の月かけ

小川布淑四條のやとりにとふらひ來たる夜螢のとふを見て旅居する窓にも君かあつむれやこゝにほたるの光見ゆらむといへるに

言の葉にかくるもうれし露はかりひかる旅居のまとの螢を

月おもしろき夜鴨川のほとりにて

老のよに又もみやこのすゝしさはむかしにゝたる加茂川の月

命あらはまたも來て見むかも川や涼しさあかぬ夏のよの月

秋哥

初秋露

小萩原末いかならむ宮城野はいまよりしけき初秋の露

はつ風に花よりさきの秋見えて露ふきむすふ庭の萩原

二星期秋

ひこ星は夜の長月もあるものをなとはつ秋と契そめけむ

七夕催興

たなはたの心をけふは心にてゆふくれいそく言のはのとも

山家七夕

これも又ほしとやよそにみねの庵こよひ手向るにはの燈

七夕植物

けたれしと庭の梶の葉とり〳〵に光をみかく露の玉つさ

星河落簷

天の川軒にかたふく空見れはほしの別もちかくなるらん

年にまつうきせはあれと天川たえぬ契そうらやまれける

七夕戀

代女言志

かけて又はたのふみ木のふみ月をまちやわたらん天の川はし

松平康定主に去年の秋江戸にくたらるゝ時にはしめて逢けるかしこにてよろこひせられてことし七月國にかへらるゝ道に桑名のやとりにものして待むかへて又あひける時によみてまゐらす

あふきつゝまちし光もてりそひてめくり來にける秋のよの月

秋たちてはつ風わたる松はあれと君か御かけによるのすゝしさ

康定ぬしのよみて給へる歌のかへし

すゝしさは君かこよひの給物とつゝむ秋にあまるうら風

此桑名のやとりは海のなきさにていと涼しき所になん有けるわかれによみてまゐらす

たちかへり又こむ秋のふみ月をあふきてまたむ天の川波

草花露

もゝ草のぬれて色そふ花も見て袖にかこちし秋の夕露

月前草花

よるは又月に花見る秋の野の花に月見るつゆのさやけさ

草花隨風

こきませて萩もすゝきも一かたに色々なひく野への秋かせ

花すゝきしけきか中にましりてはなひかぬ花もなひく秋風

露をおもみまちける風もふけは又いとゝ小萩の枝たわむまて

庭荻

音こそあれなひく見るめは何かうさ秋風やとる庭の荻はら

夕虫

なきいつるもまたほのかにてむしのねもおくある野への秋の夕露

秋夕

かの山とたゝあらましになかめてもうき雲まよふ秋のゆふくれ

秋思

ものおもふ秋のならひの袂にもあまりあやしき夕くれの露

山月

枝しけみさはる月見て秋の夜はさくらをいとふみよしのゝ山

秋の夜はよしのゝ山もさくらとはいはてこすゑに月を見る哉

あきも又よしのを花の山とのみ思ひけるかな月も見すして

岡月

岡の名のゆきゝそしけき里人もさやかなる夜は月見かてらに

見に來つゝ露にやとれる影をさへならしのをかの秋のよの月

海月

わたのはらかたふく方にさしてゆく船うらやましふくるよの月

わたの原山端ならていつるよりこすゑのくまもなみのうへの月

浦月

あかしかた雲もなみちの末かけて浦の名ひろし秋のよの月

船月

いる山やとまりなるらむてる月にあこかれてゆく秋の夜ふねは

てる月のかつらの影を行舟にちるは花かもさをの雫か

ぬきみたる人は舟人さすさをにまなく玉ちる秋の夜の月

河月

舟うけてはや見む月のすみた川のる人いそく日もくれぬさて

久方の中なる川にさをさしてゆくや空行月のともふね

故郷月

跡たえし淺茅か露の消もせす見しよの月をひとり見る哉

月影はむかしなからにすむかひもなみたおちそふ故郷の空

うつろひて世々ふる郷の三笠山さしいつる月そ今もふりせぬ

松間月

秋の月見るにはつらき木かくれをうらみさらめや大淀の松

たけくまの二木の松に影さはる月はみきともいかてかたらむ

月前木

三日月も桐の一葉のゆふ風にきほひておつるはつ秋のそら

いりかたになる月影はさしなから片枝なくらきをふの浦なし

桂かは光みちたる月見れは軒端のまつもなかにおひたり

八月十五日朝より空くもりけれは

明るよりくもれはけふの月故に朝日の影そまつまたれける

十五夜人のもとに月見むとてものしけるによひのほと雨ふりけるを夜ふけて空はれわたりけれは

おもひきやふる雨つらくぬれてこし袂にかゝる月を見んとは

九月十三夜例よりもことにさやかなりけれは

見るまゝに猶なかゝれと長月の夜なさへをしむ影のさやけさ

月前述懐

秋なから秋の月見るよはもなし袖の露のみ時しれる身は

あふみの彥根の加藤安足の五十賀にかの國の名あるところところを題にて哥すゝめけるに石山の月を

いし山やむかしおほえてすみ渡る月もいくよをふる寺の秋

九月のはしめつかた餉路山といふ所に茸狩に行けるに

分いれは花も紅葉もなき道も秋おもしろきけふの山ふみ

笠たてゝわれまつたけをきて見れはあはれ涙の雨とこそふれ

同し時この里の堀口光重か家の庭の山なる庵を見て

里なからみ山おほゆるいほりかな苔むすいは根ふみのほりきて

雨中鴈

ふる雨にぬれぬ心もしをるゝなつはさやいかにわたる雁かね

野鹿

風さむみつまこふ野へのちくさにや思ひみたれて鹿のなくらん

かせふけはつまとしめ野の萩か花うつろふ色にをしか鳴なり

萩の花ちりて野風の寒きよにうつりもゆかて鹿のなくらん

田上鹿

なく鹿のわけゆく稲のほのかには姿も見ゆる小田の夕きり

霧中鹿

山遠みへたつとなしにさをしかのなく音の色もうす霧の空

見ゑめなくくれゆく山の夕霧にのこるもさひしさな鹿の聲

里擣衣

中々にあはれはそひてうちもねす音はとほちの里のきぬたも

山路秋行

紅葉まつ秋の山路のはつしくれえもふりすてゝすきぬ木本

八月廿日あまり萩の下葉のもみちしたるを見て

鴈かねの涙またしき下染にした葉いろつく露の萩はら

菊露

長き夜の一夜をちよになすらへて明れは菊の露も消にき

尋紅葉

朝霧のはるゝもまたて心あてに尋ねつゝいる山のもみち葉

ふもとより紅葉の色も深くなる山路の末を猶たつね見ん

くるしとも思はてそいるもみち葉に染し心のふかき山路は

染てゆく時雨の雲の跡とめてわれも紅葉に山めくりしつ

故郷紅葉

見る人もなきもみち葉の色そめて何に時雨のふる郷の庭

冬哥

曉時雨

心あての月のゆくへもむら時雨山端見えぬしのゝめのそら

野亭時雨

しはしさて立もやよると野への庵しくれふる日は人そまたるゝ

里時雨

夕しくれはるれはやかてはるゝ夜の星見えそむる芦のやの里

故郷時雨

明日香風花のみやこはむかしにて今はしくれのふる郷のそら

たなやめの袖はむかしの飛鳥風雲吹かへすむら時雨哉

風前落葉

うつりゆく色の千入はあらしにて梢よそなる峯のもみち葉

杜落葉

とくきてもとはまし風にさそはれて秋はいくたの杜のもみち葉

心おそくきのふきて見てけふはゝやちれるいはたの杜のもみち葉

くちのこる木陰のおち葉ふみ分て人のなけきのもりの朝霜

冬曉月

おきまさる霜にましりてさゆるよの月影しろし曉の庭

見れは又長きをかこつ冬の夜も明かたをしき月の影かな

窓の月さしいる影もさえしよのなこり身にしむ有明の空

瀧　氷

むすふとは何をいふらんこほりてもよそめかはらぬ瀧のしら糸

たえ〳〵に水上よりそこほろらむほそくなりゆく瀧の白いと

松上雪

おしなへてふりうつみても松はかり松とは見ゆる庭の白雪

閑庭雪

まれにたにとはれぬ宿は日をふれとつもれるまゝの庭の白雪

里早梅

山端の春の霞にさきたちてにほふふもとのさとの梅か香

としのをはりによめる

くれゆくを引とゝむへき綱もなし杣川ならぬ年のはやせは

過ぬれは長き春日も秋の夜もみしかゝりけるとしのくれ哉

なほさりにくれぬ〳〵といひし日もつもれは年と成にける哉

ゆくとしのわかれはうれし老の身もさきたちもせてとまる思へは

若山にありける十二月つこもりころ菊池内記のもとにて物語しける日かめに梅花さしたりけるを題にて哥よめおのれは詩つくらんといひけれはさりあへすよめる

年のうちの梅のはつ花萬代の春まつやとゝかめにさしけり

おなしころ土屋あたるか家にて紅と白との梅の花をかめにさせりけるを哥よめとあるしのいふに

梅花にほへは年のくれなゐに又おもしろき春も見えけり

おなしころよめる

ふる郷にかへるを思ふ年のくれことしはいとゝ春そまたるゝ

故郷にいつかとおもへは老の身に春のかへるもまつそうれしき

戀哥

忍　戀

はかなしやせくとはすれと涙川くちなんまての袖のしからみ

隔　戀

うしつらし海山こえぬかよひちにあはぬ月日はなとへたつらん

祈久戀

ゆふかけていのりそめしもみつ垣の久しくなりぬあはぬ思ひは

別　戀

ひきとむる袖のわかれのやすらひに涙さきたつしのゝめの空

かたみさへ露をよすかの月かけはとゝめもおかぬそての朝風

誓　戀

波こえむ心はもたし末の松まつはしくれにいろかはるとも

逢不遇戀

又や見む見し夜の夢の面影もさためぬ中に遠さかりつゝ

人に似ぬこゝろなかさの夢もまたいつのうつゝにかたりあはせん

忘　戀

うき人もわすれし物をわすれしといひしそのよの契はかりは

再絶戀

かゝりけるむかしの跡にこりもせす又もわたせしくめの岩橋

憑明後日戀

いかならむ二夜過てのくれ竹をたのむる人のこゝろなかさは

思

年ふれは身にあまりてや涙まて今はおもひの色にいつらん

戀天象

あはぬ夜はなにゝなくさむ思ひとて月をもやつす涙なるらん

風聲催戀
こひすれは袖にはふかぬ秋風の音にもゝろくちるなみたかな

寄月戀
かたみとてありしまゝなる影も見すそのよの月も泪くもりて
なかめつゝかこつもあやな面かけに思へとてしも月はてらしを

寄霞戀
明はてゝしのふ心のあさかすみたつ名かくれぬかへるさのそら

寄雪戀
さりともとうき人まつもほとふれはつもろ思ひにたへぬ雪折

寄杣戀
すてられしみをの杣木のいたつらに引人なくてくちやはてなん

寄橋戀
わかなかは跡もなかからの橋はしら立にし名のみ今ものこりて
さてつひにかゝるへしとは思ひきやまれの夜かれのまゝのつき橋
絶ぬるかせたの長橋なかき世をかけてたのみし中の契も
名にしおひてつらき契よしさらは玉のを絶の橋さならなん

寄網代戀
朝ほらけやすらふほとに顕はれて身をうち川のせゝの網代木

寄木戀
心たに花になさはやいとせめてうきみ山木も人のとふやと

寄柳戀
なひくとはみれと心の浅みとりうちとけかたき春の青柳

寄若菜戀
打とけてつむまてこそはかたからめ雪間のわかなふみたにも見す

寄鳥戀
やすらひにかけの八聲は時過てからすそにくき衣々のそら

寄蛬戀
身をつめはわれもなく夜の床のへにさもあはれなるきり〳〵す哉

寄枕戀
しるといへはまくらたにせてぬる中はあひ見るよはもちりやつもらん

寄閨戀
さすなとはちきりもおかぬ閨の戸をわれからあけていくよまつらん
やすらひていてにしまゝのねやのとを明くれ人のかたみとそ見る

寄扇戀
これも又たよりとならは思ふとあふきの風につてやゝらまし

寄弓戀
こと人にひくか本末わかゝたに梓の弓のよらぬこゝろは

寄矢戀
あつさ弓いかにたのまむはなつやの遠さかりゆく人の契は

寄樵夫戀
よとゝもに戀路になやむ山かつのおもには人のつらき成けり

雑歌

あらはせる書ともを正月の末つかた殿のおまへに奉るとてそへて奉れる
峯の松たかきめくみのかけとめてけふふみのほる道そかしこき

攝政殿に馭戎慨言を御覧せさす時そへて奉れる
いせの海や君かみるめをかりそへてあまのしわさも今そかひある
くちめやは峯の日影のへたてすはとりつむ谷の賤かなけきも

妙法院の宮に鈴屋集を御らんせさすとてよみてそへ奉る

いせ人のひかとおほき言の葉を玉のみつ枝にかけんかしこさ
富小路新三位殿に源氏物語の玉の小櫛をかしまゐらせしをかへし給ふとて　かりこものみたれりしすちをときわけてうへもたふとき玉のをくしかとよみて給ひける御かへし
あかつけるあまのを櫛のはつかしや大宮人のいかに見つらむ
松平周防守殿の仰にて小篠御野か源氏物語きゝにとて此里に久しく旅居しけるほとよみきかせたるおもむきをつたへまうしに御野か江戸にくたるたよりにつけて守のとのにまゐらせたるうた
松ならぬ小さゝにかけしふちの色の深さあさゝは君そわけ見む
彦根の小原君雄かその殿の仰ごとにて彦根集といふをあつめけるを見てかへすとて
つみ分し君か心の色見えてえならすにほふ花のやちくさ
石野某のあつめられたる霞關集といふ集を見て
分見れは深き霞の關守のこゝろの花もにほふはる風
むさし野や霞の關にとゝまれることの葉くさは千世もくちせし
彦根の三浦元苗か　きかはやなよに音たかき鈴の屋のふることの葉の道のくま〳〵とよみておこせけるかへし
いとまあらは鈴かれきゝにすゝか山こえてを來ませ道とほく共
同しはらから正木次蕃か長哥よみておこせけるかへし
玉ちはふ神代の道は遠くともふみかよひなはいたらさらめや
筧忠傳かよみ歌の趣をとふにつけてよめる
言の葉よ百の木草を見てもしれ花さきてこそ實には成けれ
おのれわかゝりしほと京にてつくらせてそのころより七十といひしこその冬まて四十餘年かあひたもちひたりし机をことし寛政十二年正月三日大平にゆつるとてよみてそへたる
年をへて此ふつくゑによるひると我せしかことなれもつとめよ
文机の四くさのものをよめる
墨
するまゝにこくなるおのか色見せて墨もまなひの道をしへりけ
紙
みなかみのあれはそ深き水くきもなかれての世に跡はのこれる
筆
言の葉に深き色香をかきやりて筆は心のつかひなりけり
硯
墨ふてもかみもむかしのそれならてかはらぬ友は硯なりけり
富士に四季の哥をと人のこひけれはよめる
春
時しらぬふしの高根の雪はあれと外山のさくら春は見えけり
夏
かきくれてふるとはすれと富士の根は雲もふもとの夕立のそら
秋
雁かねはふしの高ねを飛こえていかにつはさのつかれきぬらん
冬
冬見れはふしはさなから白雪のつもりてなれる山にそ有ける
殿の仰にてよめる若の浦十景の歌
玉津嶋春曙
春のくる光を見せて玉つしまほの〳〵かすむうらの明ほの
芦洲鳴鶴
あしへまて波たちくれは鳴たつも空にそさわくわかの浦風

輿の岩屋の涙花
おりて見る人もなきさの涙の花名のみとゝまるこしのいはやは
琴浦戯鷗
松の音もしらへあはせてよる波にかもめそあそふことの浦風
松間釣舟
木間より見れは沖ゆくつり舟もみとりをくゝるわかのうら松
藤白落葉
山の名も木々の落葉にうつもれて紅ふかしふちしろの坂
雑賀浦漁火
ゆふやみにさひかのうらを見わたせはほしかとまかふ沖のいさり火
名草濱晩潮
ゆふまくれ塩みちくれはよる方も波になくさの濱千鳥かな
松汀積雪
わかのうらやわかきの色も神さひてみ雪つもれる礒の松かえ
初嶋晴雪
波のうへに雪をのこして晴ゆきし雲は跡なきうらのはつ嶋
妙法院宮御庭積翠園十景の一つ
宮の御手つから書てたまへる碧虹橋といふ題の御短册によみ
て奉れる
園の名の木々のみとりを雲ゐにてたつや御池の虹のたかはし
野
草葉まてなひける御代の行末もかきりあらしなむさしのゝ原
川
舟またて橋よりかよふすみた川世わたりやすき御代そにきはふ
曉
ふけゆくもしらて書見るよる／＼は寐ぬにおとろく曉のかね
山家
かくれかはとはぬを人のなさけにて心にかなふやまのおく哉
山家雲
よのうきを思ひつれは峯の庵はれぬ雲ゐも何かわひしき
山家風
すみよくは又や心のとまりなんなほはけしかれ軒の松風
山家嵐
うきはなほ山のいはほの中とてもはなるゝ事のかたき世の中
馬
老の坂くるしき道もしらさりし竹馬のよそさらにこひしき
蝙蝠
むら鳥はねくらにひそむ夕くれにねくらをいてゝさわくかはほり
香盆といふものに
面影のけふりの末にたちそひて花なきころもにほふ花の香
みちのくのあねはの松の葉をおしたる扇に人の哥こひけれは
秋をさへ都のつとにさそひきてふくかあねはの松の下かせ
小浦朝道か家の名をつけよとこひけるに遠山窓とつけてよみ
ける哥
見なれては雲ゐのよその遠山も我ものかほのまとの明くれ
菊池内記か若山の旅居の屋を雲松書屋と名つけたるその哥こ
ひけるに
雲の色松の梢もたゝならすすむ人からのやとのなかめは
芝山前宰相殿にはしめてまゐりて
高くとも富士のしは山しは／＼にあふきて見はや峯のしら雪

妙法院の宮にまゐりてよみて奉れる御前にめされて見え奉る
ことなかしこみて
いせのあまの思ひかけきやそらの海てる日にちかき光見むとは
御酒御くた物なと給はりて
手にらけてよはひものへむみ空よりくたるめくみの露のたま物
松平康定ぬしおのれこゝちわつらひけるころ　老人のやまひ
しますときゝしより心のゆきてとはぬ日そなきとよみて給ひ
けるかへし
とはるゝに老もやまひもわすれけり君か言葉やいく薬なる
殿の御前に御扇奉るとて
きこえあけて身は下なから明らけき御代にあふきのかひは有けり
又伊勢の國の鏡石もてつくらせたる硯奉るとて
猶まもれ神路の山のかゝみ石ちりもくもらぬ御代をときはに
志摩の國の鳥羽の浦にたゝよひつきたる宇留麻の嶋人の歸る
時此里をとほりけるに人々見さわくを見て
物見ると市の如くに行かふはうるまの人の來たるなりけり
そのうるま人のりてこし舟はやかてその浦にてやきてすて
つといふとの聞えけれは
いせ人のひかことなれやうるま人のりこしふねを夜久といふなる
長瀬眞幸かむしろ田のうたうたひてきかせけるをり
あすも又しきてきかはやむしろ田に鳴なるたつのおもしろき聲
栗田土麻呂か遠江の國にかへるとて　大よとの松のときはを
たのみつゝ千代もよりこむ沖つ白波とよめりけるかへし
大よとのまつにくりたの君ならは波のかへるもけふはうらみし
紀國に在けるほとしたしくかたらひける土橋淵かとしのはし
めの節會とも見奉らむとて十二月廿日はかり京にのほるに
雲の上の花は見るとも旅衣きの海かすむ春なわすれそ
わかれきてかわかぬ旅のころもてを人のゆくにもぬらしそへつゝ
又の年の春おなし所にて菊池内記の江戸にかへるによみてお
くるおのれはたけふあすのほとに國にかへらむとすれは
いかにせむわれもわかるゝわか山に君なしはしとゝめてもまた
京にて千家淸主の國にかへるにわかれをしみて
君なわか都へたつる國の名の八重かきつらきけふのわかれち
若山に在けるほとわかの浦にゆく道の松原に根のあかりたる
さまめつらしき松ともある大かた一丈あまりも根のあかりて
さま〳〵におもしろく見ゆ
鳥の名の玉とはなしに松かねもあらはれいつるわかのうら道
玉出島より紀三井寺へ舟にてわたるにしほのひて干潟を船な
おしてやれは
わかのうらの水もなきさのうきひちに浮はぬ舟もおしつゝそゆく
若山にさふらふほと芝山宰相殿より旅のやとりなとふらひ給
ふとて扇何くれと給ひて歌ともおくり玉へるに
うれしきなとふ言のはの玉さへはなにゝつゝまむ袖のせはきに
同し時國のものとて大崎の白石の硯藤代の墨なとかへりと聞
ゆるたよりにまゐらすとて
とはるゝにけふはなくさの濱千鳥波のかへるをおもふ心も
旅すみのあかぬしわさはくみてしれ硯の水のよにあさくとも
殿のめしによりて紀の國にまゐりけるにいともかしこく御心
となる御めくみのものないたゝき持て故郷にかへるよろこひ
をよめる

よるひかる玉にもまさるたま物をひるの錦とかつきてそゆく
此給物の板文庫の硯は櫻川の石とあるにつけて
冬なから老木も花のさくら川ふかきめくみの春にあふみは
一年の春若山をたちて國にかへるをり山口の里にて
これやこの背ありけむきの國のを山の關のやまくちのさと
けさわか山をいてゝ日もいとよきに
ふる郷にかへる旅ちにいてたちてこゝろもはるのけふのゝとけさ
山中の宿をすきて
やま中をいつみの海のおき遠くあはと見わたすあはち嶋山
伊賀の國阿保山をこえかゝりたるに山中にて日のくれて風い
みしうはけしうて人々のともせる火もみなきえてゆくさきく
らく越かたかりけれはたうけなる一つ屋にやとりて夜の明る
をなむ待ける
こえかねて山の中なる一つ屋にひと夜を千夜の旅ねをそする
京へゆきける時關の驛にて
鈴鹿路もゆきゝさはらすふるき世の關は驛の名のみのこりて
すゝか山坂の下道わけくれてせきはなけれととまりぬる哉
京にものしたるころ鴨にまうてたる道に甲斐權守加茂季鷹の
ゆきあひたるにはしめてものかたりなとしけるかへりて後よ
みてつかはしける
音にきくかもの川波たちなからあひ見し君はあかすも有かな
おなしをり吉田の御社にまうてける道のついてに小澤蘆庵と
いふ歌人の岡崎なる庵にとふらひ物したるに軒ちかくたてる
松の木はわかの浦よりうつしたるなりと聞てあるしのみやひ
をおもひよせて
思はすも都なからにわかの浦の木高き松をけふ見つるかな
此庵の南のかたにむかひて東山の見わたされたるいさけしき
・よし
見るか君ひむかし山の花の春月の秋をもやさのものにて
あるしかへしに　春毎に松はみとりもそへてけり年のみ高き
われや何なる　わかものゝ君におくらて悔しきは野山をいる
る庵の明くれさあれは又
年のみと何かはいはん君か名は松よりたかくきこえける世に
春秋の野山をいるゝ言の葉にその月花も見るこゝちして
享和元年の夏京に在けるほと四月まつりの日萩原貞衡君の許
にはしめてとふらひまゐりけるに哥よみて給ひけるに
いせの海やいりぬる礒の下草も君を見らくのしけゝくもかな
色ふかき言葉の花をかけそへてけふのあふひそいとゝうれしき
奈良清淨院の晃演君　わかのうらにたゆたふ舟のうき波をい
かゝわけなは眞帆にゆくへきとよみたまへるかへし
家の風ふくにまかせよいにしへの跡はありけるわかのうら路を
同し君又　いせの海の苧生のうら梨うらなくもかたらふ中と
なるそうれしきとあるに又
いせの海のをふのうら梨かたらへよ君かためにはよしならす共
園大納言殿にまゐりけるに御くたものなと給ひてねんころに
かたらひ給ふとありけるに
園の松めくみのかけの深みとりなほ立よりて千代もあふかむ
富小路三位殿の宣長か四條のやとりにとふらひおはしまして
山代のとはにかつきていせの海の玉の光にわれもあえはやな
と何くれといとなつかしく仰らるゝに

いせのあまの身におはねさも山しろのとはにあふかむきみか光を

中山前大納言殿に四月晦日はしめてまゐりて延喜式の祝詞巻口せちしけるによみて奉れる

郭公かた山かけのしのひねをたかき梢にけふそもらせる

日野中宮權大進殿四條のやとりにさふらひおはして　わかのうらにゆくへをたとるあまを舟今より君をかちとたのまむとよみ給へる御かへし

君にかくとはれましやはしつか屋をわかの浦路のたよりならすは

四條のやとりの會の兼題鴨川納涼

たをやめの蟬のは袖もすゝしけに夕風わたるかもの川はし

嵯峨山松

さかの山絶し御幸を君か代にけふかあすかと松の色かな

加茂季鷹のもとより　みやひたる君にもあるかな禮なくはひなにとへてふ古言やこれとよみておくりけるかへし

いせなれは五十鈴の川の川かみの心はかりはさはゝこたへむ

き遠世のふる言ひきてひな人をすてぬ都のみやひをは君

中山前大納言愛親卿によみて奉れる

ふしの根もかけておよはぬ中山の高き心はなにゝたとへむ

芝山宮内大輔殿　やとゝひて君にかたらふうれしさは雲はれて空を見るこゝちせり　つゝかなきすかたは今もいせ島のわかの松原見るにうれしもさよみて給ひけれは

とはれける君か光にこよひより旅ねのとこの露も消ぬへし

年をへてきみをあひ見しうれしさに老木もけふはわかのまつ原

日野一位殿にはしめて見え奉りける時

立よれとわかのうら松高き枝にかけんことはも波の下草

おなし殿に二たひよみて奉る下草のうれへ哥

言の葉の風のつてにもちりくやさ雲のかへしをまつの下草

同し殿より御かへし　和哥のうらや千代まつかけのみるふさをたれかは波の下草と見むとよみて給ひけるよろこひに又御かへし

つとにせむいせの海にもみるはあれとかゝるみるめの深海松はなし

京をいてゝかへるに鴨川納涼の哥のおほく集れるとをおもひて

加茂川やたくひもなみのすゝしさはをちこちしけき言の葉の陰

ひな人も大宮人もましり來てよにめつらしき夕すゝみかな

枝しけく高きみしかき言のはに吹風すゝしかもの川つら

加茂の祭を見奉りてよめるおのれ此まつりは四十年あまりあなたに見奉りて後久しう見奉らさりしをけふ見奉りて

四十年はよそに過ぬる神わさに又もあふひのけふのたふとさ

紀國よりかへるさに吉野にものして水分神の御社にまうてゝ

とりあへぬ旅にしあれは二つなき心のぬさを神はうけてよ

大神宮にまうてける時宮川の堤より旅人のゆきゝしけきわたし舟を見て

旅人のゆくもかへるもわたらひや大川水のたゆるまもなし

みなれさをしはしさしおくひまもなし往來絶せぬ宮川の舟

寄神祝

天照す神の守のかたけれはとはにうこかぬ高御座かな

たえせしな神のめくみの深き江は昔にかへるわかのうら波

天神の社に奉らんとて人のよませたる早春梅

咲そむる春のたちえに影さして朝日もにほふ神かきの梅

寄社祝

神垣や君をよそへて常磐にと守るしるしの松そさかゆく

名古屋の大橋直亮叟のころみまかりぬと聞てよめるとしころ病はしなから哥はたえすよみてたよりことに見せにおこせける事を思ひて

言の葉は夏野の露と消にける風のたよりを聞かかなしさ

夏のころ萩原貞衡君の母君の思ひにおはしけるをとふらひて

さめぬれは八十の夢もみしか夜のなこりやいかにしのゝめの空

しけりゆく青葉を見ても秋またてちりしはゝその陰や戀しき

金子義篤か家つくへき子をなくなしてかなしめるによみておくる

郭公しての山路のことつてもなく音にいとゝねをや鳴らん

契沖ほうしの百年の遠忌によみてなにはの圓珠庵のつかに手向ける歌

しるへせしふる野の道のさくら花今さかりなり百とせの春

羽倉在滿か五十回忌に月催舊情

おもかけもたゝ大空の秋の月とはゝやしらぬ人のむかしを

そらにたつその面影もいかならんとはゝや月に見し人の世を

同御風か十七回忌露によせて昔をしのふ

しのへとて殘しもおかぬわか袖に消しかたみの露そこほるゝ

きえにける露のむかしの世かたりも身にしむ風の秋の夕くれ

神無月四日田中道麻呂十七回忌に懷舊

さそはれし時雨の雲の跡とほく年のふるにも袖はぬれけり

山田孟明廿三年の遠忌にあたりけるよしつてにきゝて思ひいつる事ともありてその子樫田法印のもとによみておくる

なき人のへたゝる年をきくからに又かなしさも數そはりつゝ

有馬凉及百年の遠忌にかの家より哥こひけるに

たえす猶ちよもつもらん百とせの跡とふやとの庭のしら雪

住吉の社務津守氏すゝめける國基宿禰七百廻忌の追慕の題古松

すみの江や久しといひし昔さへ今はひさしき松よいく千代

來て見れは見けむ昔の人の世もすゝろに戀し住のえの松

須賀直見か十三年のとふらひの圓居に寄書懷舊

此世には今はなきさの友千鳥ふみおく跡をなく／＼そ見る

長井直延先祖長井源三郎藤原定規といひし人は永正八年八月に船岡山の戰に大將軍の御方にて討死しけるをその墓の北野のわたりに有けるをたつね出たるよろこひの歌こひけるに

草のはら思ひこかれて尋ぬれは跡はきえせぬ舟をかの露

山室の山の上に墓ところをさためてかねてしるしをたておくとて

山むろにちとせの春の宿しめて風にしられぬ花をこそ見め

今よりははかなき身とはなけかしよ千代のすみかをもとめえつれは

人の賀に松契齡

なからへて君そかそへむ末の松こえむ年波千度やちたひ

松延齡友

契りおけちきりおきなは松も又千代の友とは君をこそ見め

石塚龍麻呂母七十賀寄松祝

榮ゆへし千とせ八千とせ春ことに老木の松もわかえさしつゝ

萩原元克母七十賀寄巖祝

かきりなき岩をためしの齡にて松も八千度生かはるまて

川合丈平父美濃國高洲の佐竹一鷗か九十賀に養老の瀧によせて

萬代と養ふ老の百とせにおよふ十とせは千世のかすかも

芝山前宰相持豐卿の中納言になりたまへるをことふきてよみて奉れる

なほのほれ跡はなくともくらゐ山おところの道も君はなつまし

吹上の御前に鏡石を奉るとて

鏡石千代に八千代にいすゝ川かはらぬ影をうつしてを見よ

備姫君のおまへに神路山の杉の木もてつくれる龜の形したる香合を奉るとて

玉たれの小かめよ君に萬代のよはひはゆつれおきにいてなは

紀國よりかへり來て十二月十日家に人々つとへてよろこひの會しけるをり君恩如海といふ題にて

紀の海やひろきめくみの波かけていそのもくすも今そかひある

村岡春峯のもとより哥よみておくりけるかへし

契りおきておひさき遠き若松の君か榮えは我もまち見ん

芝山持豐卿の宣長か七十賀によみて給ひける哥の御かへしによみてまゐらせける

千代はへむ君か恵の言の葉をかさしにさゝは老もかくれて

小澤蘆庵かおのか七十賀に　七十は人かすならぬわれも經ぬ君はちとせの春をかさねよとよみておこせけるかへし

七十は數にもあらす過しこし君にひかれてわれもちよへむ

加藤千蔭かおくりける哥のかへし

千代を經てきみしいはゝはいはゝれて我もちよへて君をいはゝん

若山にて正月九日落合春葉か家の會にものしけるにあるしの翁は八十六おのれ七十二になりけることをよみてあるしにおくる

もろともに猶なからへてわれも又あひ見む君か百とせのはる

大坂の若山滋古か許より　御津の濱松にやされるあしたつの色にしなれて千代は經なゝむといふ歌をそへて白き帛たへを贈りけるかへりことに

白妙のつるの毛衣たちぬひて千代をかさねてきなんとそ思ふ

寄梅祝

年毎に立枝さかゆくやとの梅あかぬいろかは千代の春まて

寄楸祝

わかゝへり春の若葉のわかひさき久にさかえむ千代に八千代に

寄都祝

萬代もかはらぬ色にさくやこの花の宮このはるののとけさ

祝

天の下四方の野山を御園にて花もはてなき君か代の春

寄月祝國といふことを九月十三夜に

雲霧もをさまれる世を長月のこよひ月見る國のゆたけさ

秋祝

秋毎のみつき絶せす神代より御代は長田の八つか穂のいね

繪に人のこへるによみて書たる哥とも

安倍仲麻呂の繪に

わたの原波よりいつる月見ても三笠の山やこひしかりけむ

立田川のほとりに業平朝臣のたてる繪に

たつた川水くゝるてふ言の葉の色も八千代になかれてそてる

文屋康秀のかたに
吹からに紅葉のにしきかつくれはらへ山風によきゝぬきたり
佐野のわたりの雪の夕くれといふ古ごとのさま書たる繪に
雪つもるさのゝわたりは立よりて木ことの花を見る人もなし
源氏物語なるすさくゐんの女三宮の猫の綱をひきて立玉へる
かたに衛門督の思へりけん心をよめる
うらやまし君になつさふから猫にしはし此身をなすよしもかな
ちぬ男うなひ男かをとめをあらそひて生田川の水鳥を射るか
たに
水鳥をいつれのかたにあつさ弓こゝろひくへき勝負もなし
彈正大弼仲國か小督のかくれゐたる嵯峨のところにたつねき
たる繪に
すむ月にすみのほる夜の琴の音はかくれし宿も隱れなき迄
新羅三郎義光か足柄山にて豐原時秋に笙の秘曲をつたへたる
かた書るに
したひこし東の道の家つとにいへの風をそふきつたへたる
陵王の舞の繪に
名も高く假の面影うつしきて世々にゝほへるふちはかまかな
あさむきしかりの面のおもかけも此まひ見れは見るこゝちして
箏の琴を置たるあたりに紅葉のちれる繪に
ことひけは吹あはす庭の松風に笛のねならて紅葉ちりたり
女のはたおる家の門に錦木をあまたたてゝ男のたてるに
おる布に思ひおとして色ふかきわか錦木は見たにせしとや
布にのみ心をとめておる人の我にしきゝは見たにせしさや
つくまの祭のかたかけるに
かされてはおもき罪ともなりぬへしなへて此世のならひなれとも
鍋の數すくなき人に見る人の心つくまのまつりなるらむ
紙雛といふもの書たるに
色ころもよゝかさねきてかはらすよいもせのかみのあつき契りは
梅花に朝日をかける繪に
ほの〳〵と霞たちえにさしそひて朝日の影もにほふうめか香
梅花に月あるかた
花の色は月の光にゝほふなり月のひかりは香にゝほふなり
梅の花に月の出たるに木のもとに鶯を書たる月と梅との哥は
日野一位殿のよみて書玉へる繪に鶯の歌書そへよと人のこへ
るに
月花にねくらわすれて鶯もよるまてなくか梅の木のもと
すみれのゑに
いかにせんさくさは見れとつほすみれつまれぬ色にうつる心を
菫と蕨をかけるに
紫のおなしゆかりとさわらひもすみれ花さく折にあひつゝ
櫻の枝に鶯を書たるに
梅ちれはうつりきてけふ鶯もさらにはつ音のはつ櫻花
八重さくらのゑに
たゝ一重さけるはあかぬ花の色を思ふとなき八重櫻かな
嵐山の花さかりの繪に
名のみしてふかぬ嵐の山さくらおもふとなき花さかりかな
或人の賀のへうふに道ゆく人の駒をとゝめてさくらの花を見
る
のる駒もわか見る花の下草に心さゝめてはみつゝそゆく

宮内卿の　花さそふひらのやま風吹にけりこき行舟の跡見ゆ
るまでといふ哥のさま書たるゑに

吹あけて雲ゐに高き言の葉の花に跡見るひらの山風

山吹の花のもとに庭鳥のゐたるに

山ふきの花にならひて庭つ鳥人にあふよはなかすもあらなん

家の軒に菖蒲ふきたるあたりのそらをほとゝきすの鳴てわた
る

あやめふく軒端にちかく鳴聲もかれぬ五月のほとゝきす哉

朝かほの花の繪に

我はまた鏡も見ぬをいつのまにつくろひぬらむ花の朝かほ

萩の花の中に猪のふしたるに

さをしかの妻ときゝしを床しめてなれもふすゐか野への萩原

紅葉の下に猪のふしたるに

ふす床にちらは紅葉の錦をもかろものうへにしきやかさねん

山々の梢もみちしたる

むら時雨およはぬかたもなかりけりそめてあまねきをちこちの山

ちりもせす筆をしくれのもみち葉は染て常磐の山とこそ見れ

龍田の山にも川にも紅葉おほく書たる繪に

川の瀬も山もたつたは錦にて神や手むけに秋のもみち葉

嵐山の繪紅葉おほかり

大井川くたすいかたに中絶ぬ錦はきしのもみち葉の影

雪中に梅をたつぬといふ心を書たる繪に

香にゝほふ梢の雪はまたさかす木毎の梅の花はつもれと

楠正成主を中にて三幅對の左右に吉野の宮さらしなの里と
を書たる繪に

春とに花はさけとも花さかてつひに吉野の宮はあれにき

月見てもしなれし竹のそのかみを思へはかなしさらしなの里

夏と冬との山を二ふく對に書たる繪に夏のかたに

夕風に入江の小舟すゝしさをつみてやかへる夏やまのかけ

妙法院宮のみつからかゝせ給へる富士の御繪に哥つかうまつ
れと仰られけれは

ふしの雪ふかき心をうつしたる跡はきえせし萬世までに

又櫻の御繪に

わすれてはをられぬ花に袖かけていて一枝と思ひけるかな

布留の高橋の繪に

うつしゑのふるの高橋ふるくとも板はくちせし千世かけて見ん

佐野の舟はしのゑに

これやこの心もしらてとりはなちおやのもりけんさのゝ舟橋

淺間の嶽のゑに

旅人のめにたつものはしなのちやあさまのたけの煙なりけり

鷹の鳥をとりておさへたる繪に

思へたゝかたきにあはゝますらをは鳥とるたかのたけきいさみを

雪のつもれるに鶺鴒を書たる繪に

跡もなきとつきの道を敎へてし鳥は雪にも何かまとはむ

猿の一つ松の枝にゐたる

やよいかに友にましらてたゝひとりしのひ妻をやまつの木かくれ

若浦の繪おかしう書たるに

見わたせはしはしとてよる松かけも立さりかたきわかのうら波

又わかのうらのかたに

來て見れはたれもめてつゝよむゆゑに和哥の浦とはいふにそ有らん

塩かまのうらのかたに
夕なきになひかてのほるけふりより浦の名たかくたてる塩かま
磯邊に松のたてる枝のなひきたるかた
吹しをるうら風けやみゝつしほに枝も波よるあらいその松
二見浦の繪に
かはらしな波はこゆとも二見かた妹せの岩のかたきちきりは
二見のうらにいせまうての旅人のこゝら松のもとにたゝすみ
行かふかた書たるに
ふた見かた來つゝ立よる旅人の波よりしけきうらの松かけ
宵の森のかたとて書たるゑに月あり
たみの戸もさゝて月見るよひの杜めくみのかけのくもりなき世に
よひの杜木高きかけに里人の家居もしけく今そさかゆく
ひえの山の麓の道をつま木をいたゝきて里の女の行に
柴のうへになほ大ひえをいたゝきて重なる山をいつる里の子
草刈童の牛にのりたるか笛ふきたる
風ならてふく笛のねを馬ならぬうしの耳にはきゝやしるらん
六になりける兒のかける竹の繪に
世こもりておひさき長し千とせ經ん此わか竹をかけるその子も
竹のもとに岩のあるうへに龜のゐたる
あひにあふ千代のためしにともにこそならへてひかめ竹も巖も
若浦の松の材してつくりたる箱のふたにわかのうらに塩みち
くれはかたをなみといへる哥のさまを繪に書たるに同し心を
よみて書そへたる
みつしほに芦へをさしてなくたつも聲うちそふる若のうら波
千利休といふ人の像にたはふれ哥
ちやをたてゝ法式たてゝその家をたてし茶せんの利休居士これ
誹諧師はせをといふ人の像に
二人なき翁なりけり此道におきなといへはこのおきなにて
靜といふ女のまひたるかたに今やうにて
よし野の山にいりにける人は行へもしら雪にこひしき跡をしたひても
いつこをはかとたつねまし

鈴屋集九之卷

本居宣長詠

古風

早春松

あら玉の春たつけさはむかつをの松の葉の色もつねゆけに見ゆ

聞鶯

あさなく〳〵きゝのよろしも梓弓春なく鳥のうくひすのこゑ

梅薫風

はしけやし梅のさかりと風ふけは袖にもうつる花の香のよさ

川のほとりなる柳を

風ふけはかよりかくよりしなひよくしなふ川への青柳かも

春雨

花見にもゆかましものをなとつひもきのふもけふも雨つゝみして

上巳興

川のへにいむれつとひて酒のみてから歌つくる大みやひとは

野遊

霞たつ春の野見れはをちこちにをとめ袖ふるかゆきかくゆき

山花盛

うつそみのうき世わすれつ櫻花さきのさかりの春やま見れは

春の日をさきのさかりの花にほひ見つゝくらせはもの思ひもなし

折花

はふらさすかきれてゆかむをる袖にかつちる花もをしき櫻を

新樹

夏山は木の間たちくゝ村鳥のすかたも見えすしけりあひけり

端午興

宮人のけふのかつらのあやめ草かをりあひたる袖の香のよさ

早苗

見わたせはをとめますらを打むれてさなへとる田けにきはひにけり

五月雨

いふせくもきらふ雲かもけならへて日のめも見えぬ五月雨の空

ほとゝきす

まちてこそまれにきゝしか時鳥五月來ぬれは乏しくもあらす

蚊遣火

此ゆふへとなりのをちか蚊やらふとたつるけふりに月影きらふ

暑

けふのこのてる日をいたみふしのねの雪もけぬらんもちの日またて

早涼

きのふこそ夏ははてしか此朝けふきくる風はたもとすゝしも

初秋

橘のしつえの花をたをやめのそてに吹くる秋のはつかせ

七夕興

たなはたの手向いそくと世の人もみやひてくらす此ゆふへかも

草花

をみなへし萩との花ををりましへかさしにしてな今盛也

月前草花

秋の野は月夜も清し花もよしわくる露原すそはぬるとも

秋夕

夕くれの秋風さむみわかをれは心もしぬにかりなきわたる

露

秋されはたれをまつとか人もこぬ庭の淺茅に露の玉しく

秋情

ものごとに物おもはせてむらきもの心いさなき秋にも有かも

重陽興

菊の花をりてかざしてゐら〳〵にさかみつきあそふけふのたぬしさ

菊

きくの花さきのさかりの長月を花のさかりの秋とはいはむ

時雨

今はれむしくれの雨はよしゐやしぬれてをゆかむ笠はなくとも

寒月

風はやみあられふりくる雲の間ゆ吹おろす月の影のさむけさ

雪

こゝたくもつもる雪かも玉鉾の妹かりゆかむ道もなきまで

神樂

ほところはいやあかくたけをとめ子かまひすゑ姿まさやかに見ん

戀

いその浦の根やはら小菅やはらかに妹とぬる夜は早く明にけり

夢逢戀

戸ひらかし夢にあひ見にこし人をつきても見むにかへりもそする

寄螢戀

こふ螢こゝにとひこねゆふ闇のおほつかなきにいもかかけ見む

竹窓夜雨

風ましりまとの竹の葉さや〳〵に雨のふる夜はいねかてぬかも

池

國中にうな原なしゝ埴安の池しおもほゆかくやま見れは

繪

よくかける繪見れはゐともおもほえすもとよりゐさはしれる物から

言の葉

いにしへの人のこの葉きくときは今もをつゝにあひ見ることとし

祝

君そ見むうとむ鉢華の三千年にまれに咲花千たひ八千たひ

これらおほくは妙法院宮御會十二月の御題の也

同し宮の御庭十二景の歌同しく仰ごとにて

陀峯彩霞

紫の雲かもたつと見るまてにあみたか峯はかすみきらへり

平林春花

たちつゝく木々のとこ葉にこきませて林しみゝにさける春花

青田亂蛙

夕されはかはつ妻よふ小山田のなはしろ水にかはつつまよふ

喬松啼鵑

しみたてる御園の松の高き枝にいゆきかへらひなくほとゝきす

西山夏雲

山の際の入日かゝよふはた雲も夏のゆふへはつれゆけにたつ

茅簷明月

軒端もる秋の月夜の影きよみかやのそゝきに露ひかる見ゆ

曲塢秋草

たもとほる里のかきほの秋草ははつ霜おひてうら枯にけり

虹橋丹楓

秋の池の虹のをはしに色はえてにほふ汀のもみち葉のよさ

曉園積雪

おしなへてこぬれ眞白につもる夜はあかときわかぬ御園生の雪

翠池浮鴨

所得て廣き御池をあしかものかゆきかくゆき沖になつさふ

蕭寺清鐘

うらさふるよはの寐覺に音すみてきゝのよろしき山寺のかね

蒲萄の繪に

みすまるのいほつゝとひのやさかにの玉おもほゆるえひかつらかも

兎をおほく書たるに

こゝたくにつとふうさきか友見れはわにあさむきし神代しおもほゆ

枯木の枝にあまた鳥のゐたるとひゆくもあり

あたら木をゆきかへりつゝゐからしぬからすさふ名はうへおひにけり

唐畫の山水に

これやこの見ぬもろこしのよし野山こたち岩ねもさまとにして

飲中八仙といふかたかけるに

八ひしりとのむ人ともゝいはえける酒はそ大きひしり成ける

四睡といふものゝみなさめたるかたに歌こひけるに

なれら我も長寐しにけりさめにけり我も又ねんなれも又ねよ

壽老人の繪に

此をちそ名にもおひける鶴のはし小鹿の角の長きよはひは

女の武者人形をまはしたる繪に

はしきやし男さひするますらをゝおのかふる手にまかすたわやめ

勝鹿の眞間の娘子か井によりて水くみたるかたに

はしきやしまゝのてこなか朝よひによりて汲けむまゝの井ともし

早苗に

きのふ見し春のあら小田いつのまにみとりしみゝに植わたしけん

秋の田に

神代より國の名におふ秋の田のみつほのしなひ見らくしよしも

少名毘古那神の御像にせとら哥

くすはしきすくなみ神のみたま給ひて草の葉も木の根も人の病なほすも

塩土老翁 萩原貞衡君のすゝめにて

塩土のをちはかりて釣針もしほのみちひるたまもえしめき

古事記頒題によめる品陀別命

神なからから國かけて天の下御はらぬちよりしらせる大君

柿本人麻呂大人の像に

よそるへき跡をのこして萬代にことたまちはふ神はこの神

三山の歌江戸人和泉眞國かこへるによみてあたふ

山跡には山はおほけと國なかの山は香く山うねひみゝなし

出雲國意宇郡の湯の山の青石に哥こひけるによみてあたふ此石はいにしへかの國より玉につくりて奉りし石なり湯の山は式に意宇郡玉作湯神社とある山なり

神代より代々に出雲の御ほき玉今のをつゝに見ろかむかしさ

松平康定主にあひ奉りてわかれのをり

心はしやますかよはむいさなとり海の濱田は道とほくとも

殿村安守やよひ十日あまり江戸にゆく時來むとしの春かへらむといふに

春までといふはたか言鴈かねの遠きわかれも秋まつものを

興田吉從か若狹國にかへるとて ふる里の人に見せはやおり出す君か詞の錦えてしかさよみておのか哥たんさくに書てとこひけるに書ておくるをり

まくはしき錦ほりする君かめにいかにかも見むふちの麁布

橋本稻彥か安藝國にかへるに

かへりなは國ひろしまのいやひろにすゝめひろめよ皇神の道

京を立てわかるゝをり伊豫人二宮正禎長歌よみてちゝの實の父としたのむなといへるにかへし

我をしも父とたのめる子をおきて別れかゆかむ旅にしあれは

正月末紀の國にゆく時初瀨山をこえて大和の國中を見わたして

をはつせの山うちこえて見わたせはうねひかつらきかく山も見ゆ

巨勢のわたりをゆくほと

音にきく椿はなけと山見つゝこせの春野をけふそわかゆく

背の山をこゆとて

來て見れはきの川のへのいもせ山いもらは見えす山の名ならし

紀三井寺よりわかのうらを見わたして

はろ〳〵とわかの浦まのいそ山につきのよろしきわか山の御城

紀の海を名草の山よ見わたせは夕日かゝよふたまつしまやま

紀の國よりかへるさ大坂にめくりて河内より大和にこゆる時立田にまうてゝ

ありかよひ又も見かほしたつた山けふのみにしてあきたらめやも

おとにきく立田の神の大前をしぬひ〳〵てけふそをろかむ

京にのほらむさいてたちて坂下にやとりて又の朝

うまさけ鈴鹿の山をけさこえてわきへの方はいやさかり來ぬ

打出の濱よりひえの山を見わたして大祓の詞を思ひいてゝ

朝夕の風はふけとも千年經て御霧はれせぬ大ひえの山

井上某のしめたる家に四條の大路の南つら烏丸の東なるところに月ころやとれりけるを國にかへる時によみて殘しおける歌

をちこちのみやひをつとへよるひるとあか書ときしやとは此やさ

よりなれてけふはわかるゝ眞木柱又も來て見むさきくてありまて

紀の國よりかへるさ和泉國大島郡大山陵を見奉りて

大御代の御いつおもほゆ大きゝき神の命の御さゝき見れは

大和國添下郡菅原伏見の御陵を見奉りて今の世の人蓬萊山といふ池いと廣し

海なせる中にたてれはうへしこそよもきか嶋の名にはおひけれ

京にありけるころ泉涌寺にまうてゝちかき御代〳〵の御陵を見奉りてよめるみな御しるしには十三重の塔といふものをたてられたり

神にます君か御はかな來て見れは今は佛にますそかなしき

さぬきの國なる西行法師の住ける跡の寺の法師すゝめける久の松玉の井

かたりつきいひつき來つゝ人の名も松のさこはの久に朽せす

玉の井はさきくてあれと西に行し人は又來て汲といはなくに

須賀直見かみまかれる時によめる哥とも

すかの子はいつちかもいにしちゝのみの父をもおきていつちかもいにし

われをおきていつちいにけんすかの子は弟とも子とも賴しものを

うなかふし哥思ひける菅の子かそのおもかけのわすらえぬかも

久かたの天のしくれはなふりそねすかのわくこかおもほゆらくに

上總國市原郡菊麻鄕八幡大神社神主根本常陸介平佳胤か後の名を豐八尺瓊璽と名つけてその墓の碑にしるすへき歌よみてとこひけれは

なき世にもゆらくぬなとの遠音にきゝてかくりにし豐八尺瓊のひかりしおもほゆ

甲斐國末木村辻守瓶先祖のふるき跡をおこして國府にうつり住けるをことふきて

おやの跡をたつねてつくる此家は御靈たすけて千代も榮えむ

尾張の市岡孟彦か國の君のめくみの仰ことを蒙りけるよろこひによみておくる

うみの子の八十繼々に祖の名をつきのよろしくいやつきゆかむ

讃岐國山田高村か家の庭の松の哥

あし引の山田の家の庭の松千代にさかえむそのいへぬしも

殿村氏の別業の庭にあやしうつくりなしたる松を見て

おのか經む千代のよはひもつくりてむ松な心にまかせる見れは

こゝろにうかめるをり〱よみおけるうれたみの哥

よの中は何につけても神を思へ神のめくみをゆめわするなよ

人國のほとけ聖人かしつきて家の父母しらぬ世のひと

よみの國おもはゝなとかうしとてもあたら此世をいとひすつへき

死ねはみなよみにゆくとはしらすして佛の國とねかふおろかさ

から國のなしへ何せむ中々に人あしくするなしへなにせん

から人の神の御たまをえしらすて天のしわさといふかおろかさ

から人の言はそら言陰陽といふことわりは世になきものを

外國のよこさの道にまとはひてなほき大道をしらぬもろ人

神こそあれ天に心はなき物をこゝろありけにいふかなかしさ

聖人はしこのしこ人いつはりてよき人さひすしこのしこ人

せい人と人はいへとも聖人のたくひならめや孔子はよき人

又

大君の御命おそれぬくなたふれしこの泰時しこのたか氏

まかことゝ人はわすれし神國の道わすらさぬくすの木の君

さき竹の辨のしりにそへむとてよみける歌

外つ宮を國のとこたちとこたちとよそりなきといふはたか言

外つ宮の神は天照日の神のいつきまつらす御食の大神

寛政十一年古事記傳こと〱に書をへけるとをよろこひて九月十三夜鈴屋に會しけるまうけ題に披書視古といふとを人々とともによめる

ふることの書をらよめはいにしへのてふりことゝひきゝ見ることし

をしへ子ともによみてあたへたる

家のなりなおこたりそねみやひをの書はよむとも歌はよむとも

書よむうへの事ともをくさ〱思ひつゝけゝる哥とも古風にはあらねとこゝについつ

すかの根の長き春日もみしかきそ書よむ人のられひなりける

ぬるかうちも道ゆくほとも書よまて過るそをしきあたらいさまを

おもしろきふみよむ時はぬるともものくふともけにわすれけり

朝夕に物くふほともかたはらにひろけおきてそ書はよむへき

くふものはみちてもきゆるはらのうちに長く殘るはよめる書なり

書よめは倭もろこしむかし今よろつの事をしるそうれしき

ふみよめはくはしくそしる天の下ゆかぬ國々よものうみ山

書よめは見ぬもろこしの國までも心のうちのものになりつゝ

書よめはむかしの人はなかりけりみな今もあるわか友にして

花鳥のよにおもしろき色も音もこもりて見きくよむ書のうち

ふみよめは心のうちに時わかす花もさきけり月もすみけり

書よめは千里のよそのとまてもたゝとゝにして目に見ることし

ふみよめは花も紅葉も月雪もいつともわかす見ることゝちして

酒のみてうたひまひつゝあそふより書よむこそはよにたのしけれ

書よめはたえてさひしき事そなき人もとひこす酒ものまねと
ふみよまてなにゝつれ〳〵なくさまむ春雨のころ秋の長き夜
六月の風にあつとて取いつれはやかてよまゝくほしき書とも
あつけれと書よむほとはわすられて夏も扇はとらむともせす
うつみ火のもさによる〳〵おきゐつゝさむさわすれて見る書そよき
跡たえて深くふりつむ冬の日もふみ見る道はゆきもさはらす
なつむなよふみ見る道に朝霜のとけぬ所はさてもすきゆけ
ふみ見るにけはしき道はよきてゆけまたき心の馬つからすな
おもしろき山川見つゝゆけはかも書見る道はくるしくもあらす
もろ〳〵の書見る道はよるひると千里ゆけとも足もつかれす
ゆきゆけはつひにはいたりつくものを書見る道はあしおそくても
くらくともほともなく夜は明ぬへし書見る道にやみなゝけきそ
けたてよめ心のあふらさしそへてさよはふくとも書のともし火
よむ書をしはし枕にかり寐してうしやおほえす曉のそら
よるひるのたゝしはらくのいとまをもいたつらにせて書をよむへし
いたつらに過る月日もをしとたにおもはてやふるふみよまぬ人
をり〳〵にあそふいとまはある人のいとまなしとて書よまぬかな
よるひるとよめとも書はあかたくによまて世をふる人も有けり
書よむをたゝむつかしき事とのみ思ふはよまぬ故にこそあれ
書よむをふさはしからぬわことのみおもふはよまぬゆゑにこそあれ
いろはたにえしらぬ人をはかなしと見つゝ書見ぬ人のはかなさ
ふみよまぬ人はいろはのもしをたにえしらぬ人になにかことなる
大かたはいとまなき身もしはらくのいとましあらは書をよむへし
いとまなき人こそあらめいとまある人はなとてか書よまさらん
いさよまむと思へはたれもよまるゝを書よむいとまなしといふめり

書よむは又たくひなきたのしみをよみ見ぬ人はしらぬ成けり
書よめはおほやけはらもたゝれけりひとりわらひも又せられけり
佛ふみよめはをかしきことおほみひとりわらひもせられける哉
あともなき空言ふみにはかられて身をもあやまつ人のはかなさ
むかしよりいつはり書をそらことゝさとれる人のなきそあやしき
そら言のをしへの書を神のこといつきたふとむ人のおろかさ
漢ふみも見れはおかしきふしおほしものゝことわりこちたけれとも
から書もこれは言よきからふみと思ひてよめはそこなひもなし
いかなれは代々のかしこき人々のそらことと書にまよひ來ぬらん
あたこともよめはよむかひある物をいつれの書かよまてすつへき
よまねとも倭もろこしもろ〳〵の書をあつめておくもたのしみ
世に見えぬめつらしき書えてしあらはよくわきまへよまといつはり
いつはりの人まとはしのえせふみも世におほかるをはかるなゆめ
僞の書をつくりて人はかる人はいかなるこゝろなるらむ
あちきなくいつはり書を造りいつるあたらいとまに眞書よみなて
のこりたる名をきくたひにゆかしきはたえて世になき古のふみ
ひろはたの神の御代にそくたらより書籍てふものはたてまつりける
今よりの千年の後やいかならむ出くるふみのかすまさりつゝ
たのしみはくさ〳〵あれと世の中に書よむはかりたのしきはなし
よむふみに心うつれは世の間のうきもつらきもしはしわすれつ
書よめは心にものゝかなはぬもうきよのさかと思ひはるけつ
世のわさのにこりにそめる人心ふみよむほとはきよくすみけり
ふみ見すはよにはしらしな神路山たかくも見えてたかきこゝろは
千萬の籍もとしへておこたらすよめはよみうるものにそ有ける
めつらしくあかさる書は長かれと思ふにはやくをはるわりなさ

書はしもつねに明暮よるひるとよめともあかぬものにそ有ける

さはりありて一日一夜もふみ見ねは千年もよまぬこゝちこそすれ

わかよはひのこりすくなしいくかへりよめともあかぬ書はおほきに

玉の緒のなかくもかなやよの中にありとある書よみつくすまて

長歌

日前宮にまうてゝよめる

天照す日の大御神磐屋戸をさしこもらして天地いとこよゆけれはもろ〳〵の神たちつとひ神はかりはかり給ひて金わかしいしこりとめの日の御像うつしまつるとはし弓のはしめのたひにつくらせるまそひ鏡におなし度つくらせりける日矛をしたくへまつりて朝もよし此木の國の風浪の名草あかたにあらかねの土のそこひのいやそこに底つ岩根に宮柱ふとくしきたて久方の高天のはらにあまそゝりちき高しりて御あらかをつかへまつりて日のくまの皇大御神國かゝす皇大御神と大御名はたゝへまつりて二柱しつめ奉りてとこしくに八百萬代にたゝへとをへまつらせる日のくまの此神宮を世の中はすへなきものかまかつひの神のあらひと大きみの御いつふるはすもののふのたけひあらひてもろ〳〵の神わさすたれかりこものみたれりし世はもとほれる八重のみつ垣玉垣もかたふきたふれみあらかも雨露もりていやひけに朽そこなはれ年月にやふれゆけともいにしへの心もしらぬものゝふはかへり見もせすせんすへのたときをなみといさゝめのかりの御あらかかりそめにつかへまつりてしまらくとうつしまつれゝ神直日神のなほひと天の下くぬちこと〳〵もとのとやすく治まり古に又たちかへりものことにさかゆく御代をまちつけてあやにたふとくこもまくら高きみしかき人みなはゆたにたぬしきうゐ竹のよ

よを重ねてこゝたくの年も經ぬるをかしこくも此神宮は白雲のたちもなほらすありしよの有しなからにいさゝめのかりの御あらかいかなれは神の直日のなほたらすこともしかるらむしつた卷いやしき我もまゐて來ていはひをろかみ見まつれはあやにゆゝしくかなしきろかも

反　哥

ふみそめし天の道根の道ひろくいやはりにはれ神の宮人

殿の御前にさもらひて古語拾遺をよみまうしけるに日前大神の御はしめの所をよみ申ける時にいとも〳〵かしこけれと思ひつゝけ奉りける

朝もよし紀の大神の國しらす殿の命は大神の神代の道をねもころにたつね給ふとその御書あきらめたまふ御心のあやにたふとき大神いめての御まもり夜のまもり日の守りに常とはにまもり給はむ大神しめてのみまもりよのまもり日のまもりにこことはに守りたまはゝ國しらす御稜威の光四方八面にいよよます〳〵照給ひかゝやきたまひ萬代にいや遠長に廣りまし榮えますへき殿の御代はや

ある夜篳篥のあやしき夢を見けるに哥もよむと見たりけるを哥はおほえさりけれはつとめてことさらによめる

皇祖の神の命の大御代にわたりまゐきて烏なすやさひつる國のから國のこゑにはあれとたふときや皇御國の雅音のしらへにあひて神あそひ大御あそひの歌舞のはやしとなりてたまちはふ神もめてたひうつそみの人もむかしむひちりきのこれのからふえうへな〳〵きゝのよろしきこれのからふえ

或とき思ひつゝけゝる

うつそみの世のまかと八十のまかことまかつひの神のまかこと神直日大直日のたふときや神のなほひのなかりせはなほらましやもうつそみのよのまかと八十のまかこと

上田百樹かこへるによめる丹波國桑田郡なる小幡神社に奉れる燈籠の長歌

丹波のくはたの國の穴太ちふ里の御たからに小山田の上田のをちはその里をうしはきいます眞玉つく小幡の神をねもころに尊みゐやひぬは玉の夢のさとしをかゝふりていよゝますますたふとみてゐやひまつりしそのをちの孫の百樹は今しはし京にうつり本つ國さかりをれともその祖のむかしわすれすそのをちのゐやひまつりしうふすなの神の社に御明しとよるよることもす油火のそれの家をら萬代にやふれぬくちぬ石もちてゑりつくらせて大前に仕奉るときくかむかしさ

文詞

新刻古事記序

書の中に、おきつ藻の、もとも尊きいにしへぶみなる秋山のしたぶるをとめが、若となふ袖を、古事ぶみの、うつそみの今の世にほごれるは、百年あまり五十年あまりをちつかた、大舟の、寛に永しといひける年の、末のとしに、はじ弓の、はじめてゐれると、そのゝちに、度會延佳神主のものしてあると、此ふたつぞ、ゐり巻はあるを、はじめなるは、文字あやまれる、おちたるなにと、すべていと、刈薦のみたりにあるを、後なるはしも、此彼と古き巻ども、御食の加牟加比、かむかへあはせて、空かぞふ、大かたは、よろしくあれども鳥網張さかしらはた、をり/\にましり、玉の小琴の、ことに又、いにしへ言葉を、花勝見、かつてしらざる、後の世の漢國意の、しわざにしありければ、そのよみさまなも、さひづるやから書よみの訓さまにて、掛まくもあやにかしこき、風の音の、遠皇祖の神の御代の、雅言にはあらざりける、かれこゝをもて、石上古事學びする徒の、夏野ゆく道の松陰、よりてよろしきうまし巻は、奥津白珠、得がてゝしあるを、肥國人長瀬の眞幸い、そこをしも、小松がうれの憂ひ思ひて、宣長がしるべぶみによそりて、文字をも訓をも、伊勢の海の清き渚の、きよらけく、日下の山の直越路の、正しく直して、世にほごこらさむことをし、むら鳥の思ひたちてなも、かつ/″\その事量しそめて、こゝにもかたらひおこせたるにあはせて、皇京の書あき人、河南共利はた、靈ちはふ神のしるべか、此事を、長瀬ともはらおなじさまに、同じこゝろしもおもひよりて、宣長が序をら加へて、物せむことをなも、こひもとめたる、あはれ/\時のゆければ、此典の世間にたふとまえて、こゝにもかしこにも、黏鳥のかゝることをし、くれのおも思ひたちぬる、荒礒浪、いにしへにたちかへりて、まなばしら、まなびの道の、神直日大直日に、なほりゆくべき、直日の神の御靈たふとく、うむかしく喜きにつきて、思へば、彼肥の國はし、雲ばなれ、遐けくさかりて、たまづさのふみのかよひもたはやすからず、何くれと語ひ合せて、事はかるに、手づきあしかるを、御京はよろづにたづきよければ、山代の狛のあたりにつくる瓜の、なりなむことも、飛驒人の打墨縄の、すみやけくこそと、思ひさだめてかくなも思ふと、長瀬がもとにいひやりければ、そこそはことに、因香の池の、よろしからぬと、とも/\によろこぼひぬ、かれこゝをもと河南がり、諸よけむと、うべなひやることを、これぞその端文と、かきてくはふる、時は寛政の十年あまり、一年といふとしの春、かくいふは伊勢國人本居宣長、

荒木田久老万葉つきの落葉の序

かけまくもかしこき、大御神宮の數の外の禰宜、ひろき四の位の上つしなゝる、あらき田の久おゆの神主はや、わが同じ

學のはらからにあるを、此おやこましゝ、縣居の大人の、萬葉の考ぶみの、末をつぎて、次々の巻々に、つきのおち葉こいふふみをなもつくられける名のよしは、此神主の學び屋を、五十槻の園こいふなれば、それのおち葉こいふなりけり、ひりひもちてよみ見るに、かのうしのをしへ子のしわざにしあれば、いまだしきこきどはもこよりすべてまじれることなく、みないにしへによりてしあるを、み雪ふる冬みかき、あしひきのみ山がくりの、谷川のみくまが淀に、つぬさはふ、磐床こ、七重に八重にこゞる氷の、よにこきがたきふしぐ＼はた、風ぬるむ、梓弓引てたわめて、春の日に、のこるなくうちこけて、たぎちながるゝ波のこの、さや＼にきこえたるさへあるなるは、古事まなびの底だから御寳ぬしたれやし人も、めでざらめや、ましてはらから、よろこばざらめや、かれ一くだり言そへつ、

大西某が家に傳はりたる藥の書の序

中つ代より、大八洲くぬちあまねく、ひろまりて、人の病をなほすなる、くすりのわざは、もろこしのから國に、上つ代に神農こいひける、こにきしのはじめたる、其國のくすりのわざになも有ける、然はあれごも、ここよのからの八十國は、ここ＼に、少名毘古那神の命のつくりかためて、くすしきみたまをたまひてなも、この國々のもろ＼のわざははじまりぬれば、かのもろこしの國に、神農がはじめたる藥のわざも、本の根ざしをたづぬれば、此皇神のくすしきみたまになもよれりける、こゝに、此里の大西某の、つたへしるされたるこのくすりはしも、あるが中にここにすぐれて、くすしきしるしある藥こか、しかくすしきしるしある事は、かの皇神の、又ここにくすしき御たまぞ、そはりつらむこ、いこたふこくたのもしくなも、

消息文例の序

今の世の哥よみは、おしなへて哥よむとも、文かくこごも、いこつたなくして、言葉づかひひが＼しく、心しらひあやしくさこびなご、すべていにしへにたがへるふしのみおほかるうちに、文かくとは、ここにつたなくして、さらにいにしへのみやびぶみのさまをばえしらぬ中にも、せうそこぶみなごはしも、むげにたご＼しきさまにて、みないこをさなきくちつきなるを、おのがじゝは心をやりて、さすがにえんだちけしきばめるとうちまぜたるなご、中々に、いこしななくこらなくかたはらいたきわざになん有ける、さるを、このふぢるの高尚こいふ人は、きびの國人にて吉備津宮の宮人なるを、明くれ神につかうまつるいこまのひまには、いにしへのみやびを、わざこ好みて、はやくよりおのがをしへ子にて、いこまめやかにつこめまなびて、其すぢの文ごもひろくよみあきらめて、哥もよくよみ、ふみもとによく書て、かのかいなでの世の人には、こよなくなむ有けるを、ちかきこし

ごろ、此消息文例といふ書をなんかきあらはして、この文かくべきしるべとなむせられたるは、いとも／＼めでたく、おのれもはやくより心ざし思ふすぢにて、いと／＼うれしく心ゆきてなんおぼゆるまゝに、まづよろこびがてらかくなん、

紀の國人長原忠睦がこへる今案名蹟考のしり書

岩はしの詰右衛門秀榮といひし人は、此里の人なりき、おのれ、一年、此里にきて有しほど、此人の、この國の哥枕ともかむがへしるしたるものを見てありしに、いとよき考へどもの見えて、うつしもとりつるを、こたび又來てあるほどに、又この人のあらはせる、名蹟考といふ物を見るに、あまねく國國の哥枕をかむがへたる、此中にも、よきこと＼ものあるを、此人の甥なる、長原佐次右衛門忠睦といふが、これがしりに、おのが一言をくはへむことをこふま＼にそのよし一くだり書くはふ、かくいふは、寛政の十とせあまり三とせといふとしの正月、きの國のわか山の旅のやどりにあるほど、本居宣長、

大路延貞がこへる磯の浪はし書

似雲ほうしが、むさのこうぢの、きとうの君に、哥よむ心ばへを、何やくれやととひまうしゝに、こたへ給へりし事どもを、うけ給はれるまゝに、そのをり／＼の月日までくはしく、かの法師がてづから書あつめて、磯の波と名づけたる物を、大路延貞主がおやの代よりつたへもたるを、宣長享和のはじめの夏のころ、京に在けるほど、かうぜちきゝに、四條のやどりにかよはるゝついでに、もて來て見せて、これがしり書、一くだりものせよとあるを、一わたりひらきて、見もてゆく中に、げにとおぼゆるふし／＼おほくなむ見えける、そも／＼此三百年ばかりこなたの人々の哥の中には、此きとうの君のぞすぐれ給ひて、ちかき世のわろきくせ少く、詞つづき一うたのすがたなども、いにしへにちかくきよらになんきこゆれば、ちかき世には、此君こそと、としごろも思ひわたるを、今このさうしを見れば、つねにをしへ子どもにかたりて、みちびき給へりしすぢもいと正しくよろしきに、かゝればこそとおもひあはせられて、めでたくなん、この書はしも、かの主が祖父の、かのほうしとおなじく、この君のをしへ子にて、まなびのはらからなりけるゆかりに、かりてうつしおきつるとぞ、かくいふをやがて此しり書にをこて、かきそへてかへしつ、

天神の森にたてたる碑の詞

この菅原の大神の社は、昔こゝに、天神の森となもいひ傳へて、松梅の樹どもしみたてる、古き冢のありけるを、吾紀の國の君の殿人に、長野祐信といひし、此松坂の司うけたまはりてありけるころ、寛永の二年といひし年、その冢をならして、民の家地にせまくおもひて里人にことおほせけるに、里人ら恐みてまをしけらくは、此冢はしも、いちはやき御靈のいまして、こひねぐ事は、すむやけくきゝ給ひ、いさゝかもお

かす事しあれば、たちまち祟たまひて、いとくすしくあやしき神にしませりと、いたくはゞかりおぢたりければ、祐信い、手づから鋤とりて、まづすきはねそめてぞ、里人をばつかひける、かれこぼちゆくに、土の下よりいとあやしきつるぎのたちなも出たりける、そのたちひかりとゞろきて、手ふれしものにかむがゝりせして、ことをしへさとし給はく、あは天滿大神なり、もとのごとをさめまつれとなも、をしへ諭したまひける、かれこゝをもてすけのぶ、すなはち驛づかひをたてゝ、殿に紀の國に、ありつるかたちをつげまをしければ、此大神、國の君にしも、さとしたまへる事ありければ、すけのぶにおほせて、このたちを神ざねとして、御室たてゝなも、いつきまつらしめたまひける御社なる、かく永き代のしぬびにせよと、いにしへの形をのこして、つくりおけるしるしのつかぞ、今のをつゝの此冢は、寛政八年といふ年の二月、本居宣長かしこみ／＼もしるす、

市見直樹が琴の屋の詞

たゝみこもあむぎの郡、たくひれの白子のさとに、いちみの直樹といふ人あり、みやびをこのみて、としごろわが鈴屋のこもがきにて、つねいとまのひまには哥よみことひきてなも心やりたぬしまれける、その入居てうたよみ琴ひかるゝ屋の名を、やがて琴の屋となもつけられたるなる、其よし一くだりかきしるしてよとこひもとめらるゝまに／＼、かくはものするなり、つゞみのうらといふ浦も、此里の海びにて、はひわたるほどにしあれば、そのうらのあしたゆふべの波の音も軒ちかくうちあはせて、ことにはえあらんしらべには、哥ながめも心ゆくらむと、ゆかしくもし、ことの屋あせを、

としごろもたりける和琴を三井高蔭にゆづるにそへたる詞

琴はしもくさ／＼あれども、おほく後にわたりまうで來つる、人の國のものなる中に、あづまのみなむ皇國の本よりのものにて、あだしことのたぐひにあらず、諸の神もこれが音をたづねてこそは天かけり來ますなれ、然あるのみにあらず、神代より男女のなからひにつきても、ことなる深きゆゑよしのありて、吾妻とは名にもおひ來て、すべていとやむごなく、ものゝ音からはたいとめでたくことになむ有けるを、中むかしよりこなた、人の國の琴どものみ、世にひろくもてはやされては、これをば分てやまとごとゝ名づけあづまといふ名をも、さうのことを筑紫琴といふなるたぐひに、東の國のよしにしも心得たがへ、又哥などに、つまどよむなるも、もとかの吾妻のゆゑよしなるを、およびの爪してひく故としもこゝろえひがめなどして、いにしへのふかき心をばしる人もなくて、やう／＼にものごほくなりもてゆきつゝ、今は雲のうへの御神わざの御あそびなどにのみこそ、わづかに残りてはあなれ、なべての世にはもてあそぶ人も絶てなく、をさ

をさ名をだにもしらずなりぬるは、いとも〳〵くちをしう心うきわざになんありける、こゝにこの琴は、おのれ萬にいにしへをしのぶあまりに、はやく神田の何がしに誂へて、京に或家に傳へもたる、ふるきかたによりてつくらせて、年ごろもたりけるを、三井高蔭ぬしのかうやうのものせちにえうじて、古のみやびをしたはるゝ心ざしのふかきにめでゝゆづりあたふとて、そのよし一くだり書そへて、哥もひとつ、

　年經ともひきなたがへそ手ならしゝわがつま琴の古きしらべを

木村某が柳水の詞

たひらの京、三條の大路の南づら、西洞院のひかしなるところに、大路のほとりに柳の水といふ名高き清水のあるは、わが殿の御たちのほとりにしあれば、すなはち御たちの名にさへおへる清水にぞありける、そも〳〵此水のゆゑよしをたつぬるに、さだかなるつたへはしも聞えこず、あるはむかし柳屋といひしあき人の家ありしほとりなればともいひ、あるは大きなる柳有し木の本なりし故にて青柳寺といふ寺ありきなどもいふなり、そはいかにまれ、ふるくめでたき清水にぞありける、こたびおのれのぼり來ぬるに、この御たちあづかりてつかへまつりたまふ木村主の、この水の詞ものせよとあるまゝに、かくはものしたるなり、かくいふは享和のはじめの年の六月、本居宣長、

柳よりたかき御かげをいまは又水のこゝろもたのみてやすむ

大坂西山善次道遠がもたる茶入小堀遠州の銘自筆にて佐山とあるに

ちかき世に茶のゆといふわざありて、茶入といふ器あり、その道にとにおもみするうつは物なり、遠江守小堀某といひし人あり、その道に重みする人なり、こゝに難波人にし山道遠といふが家に、此小堀主の千載集なる哥によりて佐山といふ名つけて、やがて手づから書つけられたりけるうましちやいれをなも、遠つ祖の代より家のたからとつたへもたるは、そのみちにありてはうべな〳〵いみしきものにぞ有らんかし、此茶入の肩に、星の一つあるが五月のやみよに、させるともしの、みねの木間に見えたるなせる、これぞこの名のゆゑよし、あなおもしろ、

もろこしの漢の代のあかゞねつゞみといふ物の詞

いはゞしの淡海國の、となみはる坂田郡の、うちひさす宮川の里しらす、水ふかき堀田君の御もとに、から國のもろこしの國にいにしへありきといふなる、その銅のつゞみをなも、御祖の御代〳〵ひさゝに今につたへもたまへりこそ、抑かねのつゞみとはいかにぞやと、いまの世のこゝろにはあやしと人のおもふらめど、つゞみといふは、かはゝれるのみならず、かねにまれなにゝまれうちなすものゝ、すべての名にしあり

ければ、かのもろこしの西なる國の、さかとふ人のありきといふなる國なにとにも、とほきいにしへよりありぞしけむ、しめ紙にどむくといへるも、すなはちこのつゞみにして、今の世までも、髪長のともが、たのむ仲子の名をよぶと朝よひに耳かしかましくたゝきあふなるかねとふもの、それかのどむくの殘れるかたにて、よの中にあまねくさはなるものにして、さらに〳〵むかしみめづべきものにはあらざるを、さるすぢのものにはあらずて、もろこしの國にも、上つ代より此かねもてつくれる鼓ありて、いくさのとゝのへなにとにもつねもちひてありしわざなるを、大かたの世の人はさるものをさをさ聞もおよばず、いとまれらなるものなる中に、この君のもたまへるはしも殊にいとふるき代のものにしあれば、めづらしともめづらしく、たふとしともたふとくなも有けるを、いまのりながにこれが文つくりて奉れと、松たひらの周防のかむの君の、御つてどともて仰せたまへる命をなもかゝふりて、つたなくをぢなき言の葉をしもつゞろひて奉るになも、さるはおのれ、此ものいまだは見ねど、それがかたをし書うつさして、ゑりてすらしめたまへるをたばりて見れば、かたちもあやめもいと〳〵つはらにそなはりて、たゞにまさみに見むもおやじくおもほえてあなめづらあなたふと、かくいふは享和といふはじめの年のう月のとをか、いせの國人もとをりの宣長、

松平周防守殿の許に江戸にまゐらせけるせうそこ文

かしこけれどまつ御よろこび申侍る、はるかなるほどの、御旅路、たひらかにおはしつきぬるよしつてにうけ給はりて、いとなむうれしく思ひたまふる、大井川水たかくて、すがすがともえわたりおはしまさで、見附のうまやとかやに日數へてとゞまりおはしましつるとか、そのほどはさこそいぶせくおぼしめしけめ、されどこと御かたならましかば、さる道のそらにあまたの日をかさね給はんほど、つれ〳〵にえたへたまはざらましを、御まへには書といふよき御友のおはしますなれば、明暮あかずかたらひたまはむには、殿におはしまさましにもこよなきけぢめもおはしまさゞりけんとおもひやり奉りて、御野大平などゝも、さこそ語りあひ侍りつれ、そこにおはしましつきては、御かた〳〵年へだてたるめづらしき御たいめん、むさし野のかはらぬ秋の花や月やと、こころからいまめかしき御心やりに、日ごろの旅路の御いぶせさもなごりなくおもほしなぐさみつらむかし、まことや此里に濱荻をりしかせたまひし夜は、はじめて見え奉り、いともかたじけなくうれしなどもきこえさせむはよのつねにこそ侍りけれ、はやくより小ざゝの翁が物語に、御うへはくはしくうけ給りながら、又見え奉りて、何くれと御ものがたりどもただにうけ給はりしには、さらにおどろき侍るまで、御ものまなびに御心いれてものせさせたまふほど、いとなん有がたく

たふとくおもひたまへらるゝ、そのをりはしも、のりながみみおほく〳〵しくなど侍るまゝに、ここに御前ちかくまゐりよりさふらひて、なれ〳〵しくよろづかしこまりもおき聞えさせざりしほど、いかになめしとおもほしめしけんと、つみさりどころも侍らずなん、されどまなびの道のまじらひは、たかきみじかききはもきはとは侍らぬわざとかきゝ侍れば、さりとも何事も御らんじゆるすらむと、あいなくたのみきこえさせてなむ侍る、かく聞えさするもいよ〳〵なめしとやきこしめさむ、されば御まへにさふらひたまはむ人々、よきさまにひきなほして、をりよく御けしきにしたがひて申給へ、あなかしこ、

十月の廿日　本居宣長

かむのとのゝ御まへにとり申給へと申

紀の國にありけるころ小浦朝通が大坂にいでたつにおくれる詞

小浦朝通主は、はやく父君にしたがひて、としごろ松坂にものせられしほどより、哥の道に心ざしふかくて、おのがをしへ子になりて、まめやかにまなばれけるを、こたみおのれわか山にきてさふらひけるに、いよ〳〵おこたらずものせらるるを、このごろ父君の、殿の大坂の御たちあづかりて、かしこにおはするともに、此ぬしもいでたゝるゝ馬のはなむけによみておくる、かの御たちは何くれとおほやけごと多くて、いともありがたきよしきけば、

遠しとて和哥の浦路をわするなよ難波のあしのことしげくとも

尾張國加藤磯足ひとりのむすめをなくなしていみしくなげきするよしきゝてとふらへること葉

かとうのいそたりぬし、むすめのおもとにおくれて、いみしくなげかるなるよしつてにきゝて、とふらひのうたよみておくる、さるはその人ひとりにてをのこ子はなかりければ、此おもとにむことりて、ちかきころ家のわざをもゆづりのがれて、今はかたやすめむとせられけるほどもなく、このおもと病して草葉のうへの露とはなしに、はかなくもこのはつ秋の夕の風にさそはれてとか、いといとほしくかなしきわざになむありける、その人のありけるやうをきけば、いとさとくかしこくかどありけるものから、心うつくしくなだらかにこめきて、大かたの世のまじらひにもみづからはよろづにへりくだりて人にしたがひ、つかふ人にもふかくあはれをかけ、おやをうとにはましていと〳〵ねむごろにつかへて、さがなきものえんじなどせず、すべてことなくあらまほしく、又女の手わざはさらにもいはず、手かき琴ひくわざゝへにちかき里にはならびなくなど、大かた何事もあるべきかぎりたらひてめやすくなんものせられければ、したしきもうときもをしみあたらしがらぬ人なきよしきくに、ましてさばかりの人を子に

て、たゞひとりにさへありけるを、なくなしたりけむおやの心よ

かなしさはあるを見てだにと思ふにもなき跡いかに秋のゆふぐれ

九月十三夜さま〴〵の月の題をまうけて人々文かきけるに井月といふをえて

九月十三夜、あひしれる人の、ちかきころ世をすてゝちかき山ざとにこもりすめる許に、これかれいざなひて、月も見がてらとふらひたるに、いとかりそめなる庵をむすびておこなひをり、きゝしよりもまさりて、あはれなるすまひなるに、軒ちかき岩のはざまよりわきいづる清水に、月のうつりたるを、たゞひとりつく〴〵とながめ居たるほどなりけり、いたくよろこびて、すゝもひきおこたりつゝ、かきくづし月ごろのもの語などして、いにし月の廿日ごろ、月のいとおもしろかりし夜、かうやうにてよめりし哥なりとて、たんざくとうでゝ見せたるを、見れば、

かくれても心すみえぬ山の井に影はづかしき秋の月かなとぞある、げにこの山の井のかげは、たれもこゝろはづかしき清さになん、此うたはさらにあさき心にさしいらへすべくもあらずなんとて、あまたゝびうちずしてやみぬ、

鈴屋集後書

わが翁いとわかゝりしほどよりふみ見ることゝ歌よむことゝをなんこのみて何となく物せられけるほどに年月にそへていとゞしく心にしみて何わざよりもおもしろきことになんせられけるとぞさるはもとより心のいたり淺からぬ人にやありけむよるひるとなくひろく學び深くたどりつゝ世にしるく功見えける道のをしへはさるものにて奈良のはの名におふ御代の萬の言の葉をはじめそれよりあがりての世々の御門の高きしらべ又こちよりての御代々々の撰集にいたるまでいとよく考へて其ことけがたきをときあらはせるのみならず詞のつかひざまてにをはのさだまりのおろかに思ひすぐすまじきゆゑよしをわきまへ又ちかき世の一ふりにはいやしくよからぬくせあることをしりなどすべて代々の姿人々のよみさまをもよくあぢはひてなんありければ此よみおかれたるもさま〳〵代々にわたりてその代かの世といきほひ見えつゝおかしきもめづらしきもしめやかなるもにきはゝしきも花も紅葉も松も檜原も杉村も立まじりてとり〳〵に見所なからずなんさるはあり磯浪のおどろ〳〵しく一きは人の目をおどろかしげなるともなく春の池水なだらかなる物からほど〳〵にあやありていひしらぬ下の心しらひ見えすべて根さしとゞめぬうき草のたゞよはしきさまにはあらず山川の瀬のゆくへさやかによみ得られたるやうにおぼゆるもなほ此浦に引てふあみのひくかたつよき心のなしにはあらむいせ人のひがめにかあらむ物よく見しらむ人ぞ見しるべきかくてさきに板にゑりあらはせる鈴屋集七巻をしへ子どもの家々にもてあそびて或は翁が一世の言草ともてはやし或はともありけりかくもありけりとその歌につけその文につけてそのかみをしのひ或は歌にまれ文にまれ今もつくりいづることのよりどころとしなどさま〳〵すてがたき物にすめるはさるとなめりかし又そのゝちの歌どもゝ花の白雪ちりうせず木々の落葉のかずつもれりけるを此ごろあつめついでゝかくなん二巻とはなしつるさきのたびにはことのさまによりて載られざりけるもこれかれ見いでゝひろひくはへつそも〳〵此しりがきにおのが父のうへをしもよきさまにのみいひなしたるわれながらをこがましうおぼゆれど鶯のふるすうけつぐその子とはいへど猶霍公鳥のこゑはこゑとこれも又物よくきゝしらむ人はきゝわきゆるさゞらめや

享和三年癸亥八月　　本居大平

乎波那賀毛登洒波之布美

靈久毛座神可母奇久毛座神可母眞草生野椎神乃御魂幸波比爾幸波比給比天山乃曾岐野乃衣寸末傳千種八千種乃種々産生給閉流麻爾麻爾重譯遠異國在奇草左閉朝風爾千重浪立夕風爾五百重浪立與浪邊浪志努岐氐皇國爾叙參來留其中爾煙草云草乃瑞葉彌榮爾榮而此草乃不生出土不入立地乃在邪流金絲烟那母烏玉乃間開米流從母久賢乃夜乃深更加岐理立不立家可毛無加流倍伎薫風波母山彥乃將應極谷潛乃狹渡極悉爾充滿理於是伊勢人本居宣長思草思比忘禮受傳乎波那賀毛登乃一種乎植添弖祁理其言葉乃匂比彌益爾薫禮々婆是遠之毛相思草誰之母相思邪留倍岐雖然此草植添之從母歲波二十餘年乎經爾多禮波舊之詞草乃種奈良邪流醜乃異草生添而頓爾見別賀氐那理己舊草乃荒玉乃月爾日爾枯往努倍幾乎憂波之美弖朱引日爾耘夕星乃夕爾培氐繁久繁氣支異草乃化草搔拂比多禮婆淸々之久曾那禮理祁流山下風乃甚寒氣久鍾禮雨乃彌敷爾零止母許登乃葉末之亂相倍伎可母故擊壤而歌比氣艮久人皆之執而偲婆世思草露珠貫言葉叙許禮

石出大春

おもひくさ 一名乎波那賀毛登

おもひ草は、秋の野の尾花がもとに、おふとかや、またはこのけぶりも、其名たぐふこゝちして、室のやしまも遠からず、ここはにこがれつゝ、人の口のはにのみぞかゝる、さるは、いひけたれても、猶深く思ひいれて、燃るけしきは、いふきの山のさしも草にもことならず、かくのみたえず、なげきせるはては、いぶせくきたなげになりて、捨らるゝよ、いとかくあだなる物とはおもへど、とあるごとには、猶世にしらず、おかしきものにこそあなれ、かゝるもむげに近き世のこそかし、むかしはをさ〳〵名をだにしらざりし物の、やむごとなきあたりまで、もてはやさるゝも、いかなるにか、人の國にも、いにしへは、かゝる物ありとも聞えず、此ころ渡りまうで來る書どもにこそ、こゝにも露たがはで、もてあそぶよし見えたれ、はるかなる世界より、この國にめづらしき物どもあまた渡しもてくる人を、まれ〳〵見るには、猶増りてあながちに、このめるさまなり、

「鶯の谷より出し初聲に、世もおしなべてはるめきつゝ、やう〳〵風なつかしう吹わたして、大かたの花の木どもゝ、けしきばみ、梅は今をさかりにて、にほひかすむ、大空ののどけさに、そこはかとあくがれ出る、春の光りかしらの雪もきえ果ぬべく、老たるも若きも、おのがじゝ、きよらを盡し、とがむばかりの香にしみたる、くれなゐの袖ふりはへて、ゆきかふ人を、待まうけたる、かりのゆかなどに、しばしやすらひつゝ、まづとう出て、火もてこといひたるに、きよげなる女の、あは〳〵しげに、もて出て、なめげにさしおきたる、さるがふ事など、いひあざれたる、いとおかし、有明のころ、ものへまかるとて、夜をこめて立出る、空は日影くまなきに、やう〳〵東の山際あかりてしらみゆくほど、猶ゆくするには霧渡りて、はるかなる野邊に、をり〳〵にうちてたく火の烟りあらば、と貫之のぬしのいひけむことの葉など、思ひ出られてゆく〳〵きり出つゝ、とぶ火の光りを、野守が庵には、あやしと出テてや見るらむ、かくてまだ思ふさまなら

ぬに、火の消ぬるは、をしきものなり、

ふみわけてこし跡だになき、庭の荻原事とふものは風のみにて、いとゞ身にしみつゝ、色見えぬ心は、木の葉と共に、うつろひゆく秋の夕ぐれ、今さらまつとはなき物から、うちしをれたる淺茅が末の露のそこより心ぼそうなきいでたる松虫も、たれをかと思へば、人わろく涙のこぼるゝも、つゝましくて、まぎるゝかたもやと手すさみのやうに、かいつく、手つきいとなよゝかにて、打みじろくさまも、らうたしや、風にふかれて、横さまに立のぼる、けぶりのゆくへも、つく／＼と打ながめられて、あはれつらきかたにも、吹傳へてしがな、さらば人しれぬ我思ひも、空にしるくや、見ゆらむとおもふこそ、中／＼の心のもよほしならめ、

ふつゝかに、ふとり過たるげすをのこの、顔にくさげなるが、くつろかに打あふぎ、髭かい撫て、くはへゐたるは、引はなちても、捨まほし、

かりそめにものしたるまらうどにも、すべて取あへず、まづ出す物なるを、すかぬは、ようなしとてかへしたる、はえなき物なり

こゝち例ならず、なやみ居て、はかなきくだものなどをさへ、いとものうくしたるをりにも、いさゝかおこたりざまなるには、まづ思ひ出るぞかし、常にすける人の、けぎよう遠ざけて、日數ふるは、とぶらひきたる人などにも、しか／＼なむさふらふなどもいふかし、

水無月廿餘日のひるつかた、扇の風も、世にぬるくおぼえ、夕風まちつぐるほども堪がたくて、軒近ううたゝ寐したるに、ふと目さめぬれば、かたしけるかたの、汗にしめらひて、いとゞ物むつかしく、あつき所せきを、目する／＼引よせて、火たづぬるも、あながちなりや、今ぞすこし庭の梢も、うちそよぐほどなる、

あまりしたしくもあらぬ人のもとにて、物語りし、例の出しおきたる、はやく消ぬる、たゞにさしおくがくちをしければ、あるじや心つくとしばしかきさぐりゐるを、とく見て、人呼びたるはよし、こゝろやすきわたりにては、いかにもせむを、

あら〳〵しう、吹しをりし嵐も、なごりなくのどまりて、前栽の梢も、いとゞさびしく、木のもとに朽殘る落葉も、朝霜ながらの氷にうづもれ、空さへ雪氣にうちくもりぬる夕ぐれ、やゝちりくる花にぞ、春のとなりの近ければ、とすこしさうざうしさもなぐさみて、ながめいだせるに、ねぐらに歸る夕がらすの、三つ四つ二つなきわたるも、いと寒げに見ゆ、かくしつゝはや、くれ竹の葉末などより、やう〳〵白くなりゆくほど、さすがにまた、物のけぢめも見えわきて、やり水のほそうて殘りたるなどもおかし、內外、人のけはひも、いたうしづまり、つれ〴〵なるよひのほど、庭に跡をも、いかゞはいとひあへむ、そも何ばかりの心ざしにてかは、かゝる雪もよに、ものする人のあらむと、うむじゐたる折しも、門の方にいりくる人のけはひどする、袖うち拂ふほども、心もとなくて、はし近く立出つゝ見れば、あけくれ、になうむつびかはす人の聲にて、いかゞものし給ふ、こよひの雪を、獨もてあそばむことの、かたはなるこゝちし侍りてなむ、などいひたる、うれしくて、いでや、こゝにも、心ばかりは、かきわけて、思ひやり侍りしかど、習はぬ夜のありきは、ものうくてなん、などいらへつゝ、おくのかたに入て、いとおほきなる火桶に、炭こち〴〵しうおこし、つとより居て、何くれと、昔今の物語りしつゝ、よひ過るほど、いとすごく、しめ〴〵と、心ぼそくて、雪をれの音のみ、しば〳〵きこゆるに、ふりつもる程もしられて、こよなうさむしや、あかずむかひゐたらむほど、例のけふりは、今さらに、いひたてずとも、空にしるべし、夜やう〳〵ふけゆけば、歸るよしゝて、こゝろなき長居の浦を、下部などや、海士のすむ里のしるべと思ひ侍らむ、ねふたうぞ、おはすらむ、などいひつゝ、たつ、なにかは、千夜を一夜にとも、おもひ侍れど、御心とまるべきくさはひも侍らねば、しひて、今しばしとも、いかゞは聞えさせむ、ふりはへて、とはせ給ふみこゝろざしはさるものにて、雪こそ深く侍るめれ、道のほども、おぼつかなし、あかりの御まうけやさふらふ、まるらせてむや、など聞えつゝ、ずさよばすれば、ねふり居たるが顔ふくらし、あくび打して、走りくるもをかし、立出るほど、おくより、御たばこいれなむ、殘りて侍りきとて、わらはべのもて出たる、こは忘れにけりとて、ふところにさしいれて、いぬめり、

盃出してのみかはすをりなどは、論なうけおされにたるやうなれど、めぐりくるもま遠き隙には、猶しも、はた、えあら

ぬごかし、下戸はさらなりや、

かの忘れおきて、いなむこしたりし物よ、をり〳〵の心ばへ、時につけつゝ、しいづるたくみ、年々月々に、めづらしうしらがへば、いたりすくなきわか人なごは、いここのましうしつゝ、ふりぬさきにこ、いそぎもこめて、ほこらしげにありくを、人もはやうもこめたるここそ、くちをしけれ、大かたかやうの事、人に爭ひ、うけばりたるここそ、いこをさなき業なめ、人のめでたしこ乞て見るだに、したり顔したるはにくし、又あまりきすくにて、いつもふるめかし言かたをのみ、まもりゐたるも、折にふれ所によりては、さはいへご、はえなき業なり、たゞ何こなく、おいらかに、なつかしう、きよげなるを、あるにまかせて、もたまほし、さりこてひたぶるに、えむだちなまめきたるも、女なごは、さもあらめご、をこがましくも見ゆるぞかし、かうやうのすき〴〵しさも、若きほごは罪ゆるしつべし、さだ過たる人の、ようせずは、うまごもいだきつべきころほひなるが、今めきはなやぐここそ、あいなきものなれ、

いふかひなく、年まかりより侍りては、何事につけても、おのづから、人に心をれざるから、ひか〴〵しき心も出くるわざに侍れ、おのづから、所せきものになりゆき、うたての翁よ、こうちあはめられ、まじらひ、ふればふ人も、ありがたき世にこそ、なご語りつゝ、きせるかきのごひ、みがきなごしつゝのみゐるは、若かりしより、たがひに心かはらぬ友ならめこ見つゝ、心くるしく、聞ゐるわかう人さへえあらず、まして、ひこり〴〵にあかし暮すらむ老人の、身をさらぬ友こしたるはこことわりにこそ、相思ふこ、もろこし人の名づけゝむも、げにさるここぞかし、世ばなれ、物すごきみ山のおくにもすめご、年月をかさねてすむものは、花紅葉うつればかはるをりふしのさびしさを、いかゞはせむ、秋のゆふべ、霧にしをるゝ槇の下露をながめ、夜ふかく松の實の、ほろ〳〵こ落るを、寐られぬ耳に、聞居たらむほごなごのつれ〴〵は、金爐烟靄のすこしきなるにのみぞ、なぐさめてまし、

何こなくはかなげに、およびにすゑて、めぐらし居たるも、さびしげに見ゆ、あはれ、源氏の君の、須磨の御うつろひのほご、御つれ〴〵なりし世に、かゝる物、ありてましかばこおぼゆ、

はなやかに、今やううたひ、いとなつかしう、ひきすましたる物の音に、聞ゐる人も、おのづから、時〳〵聲うちそへ、かたはし、つゞしりうたひつゝ、きようじたる、聞しらぬあたりも、きせるして、しどけなくひやうしとりゐたる、さうざうしからぬ業なりや、

二夜三夜よがれしとこの、うらみもちりも、まだつもるとはなけれど、大ぬさのひくてやよそになど、かこちつゞくることの葉を、あはれと聞つゝ、つひのよるせを、かたらひなぐさめなどしつゝ、かたみにぬらす袖の浦にも、たくものけぶりはたつとなむ、枕より外にもらさぬむつものがたりも、聞あかすらむ、鐘の音も曉近く告わたせど、つきぬちぎりは、猶有明のつれなき空に、とゞめおきて、立わかれむとするほど、つま戸おしあけつゝ、ながめ出して、とみにも出やらず、あしたの霜のと打ずんじ、衣うちき、はをり紐さしなどするほど、女も猶あかぬさまにて、海士のもしほ火またゝきそめ、およびして、けしきばかり、かいのごひ、心ありげにさしよせたる、にくからで、とりつゝ、吹出るけぶりに、入かたの月かげ、さとくもりたるは、いひしらず、あはれにえむなる、明がたのけしきなりとかや、又人目をつゝみ、色に出て、わりなき戀をするがなる、ふじの烟のくゆりわび、空にきえなむ思ひのほどをも、かかる便りに、人づてならで、さながらほのめかしいづるわざもありとかや、

女は、大かたすかざらむが、まさりてぞ見ゆる、なよびよしめくかたには、たよりともなりぬべけれど、さるから、いとど、おもにくきかたもそふかし、されど今は、おしなべての事になりぬれば、もちひざるは、中〳〵さう〴〵し、

二ッ三ッばかりなるちごの、見ならひて、ちひさき手さしのべ、まさぐりつゝ、口にさしいれたる、あやうしとて、とらむとするを、むつがりすまひたる、いとうつくし、

鼻より、ふとけぶりの立出たるを、炭竈のやうに、おぼえつといひし、さは、その人の顔や、雪のやうにありけむといふ、いとゆかし、

輪にせむとて、人の吹出たる烟の、おかしくまどかにて、いくつもつらなりあがるを見て、我もなじかはあやまたむ、い

とようしてむ、見給へなどあらがひつゝ、吹出したるに、あやしう亂れぬる、心うがりて、此度はいかでと、いたう口つきつくろひ、心したるが、又吹そこなひたる、いとむとくなり、これをや、けぶりくらべといふべからむ、我がけぶりに、人のむせびて、顔あかめしはぶき頻にしたる、いと苦し、

捨たるに、猶立のぼる烟は、皆人のいとふ業なり、

やにといふものゝ、口にいりきて、ひたひに皺よせたるもをかし、ゑひて、かしらいたくしたるも又をかし、

おもふどち二三人まとゐして、北野へまうでけるに、いつも人多くまゐりたるに、まして廿五日などは、おまへわたり所せくたちこみて、近づくべくあらぬに、からうじて御はしをのぼり、かうらむのほとり、かたはらよりをがみ奉る、こゝらの人、おのがさまぐ、何事をいのるらむ、いと久しくふしをがみ、ぬかづきゐたるもあり、かればみたる聲して、なにがし、そくさいのためなどけいするもほの聞ゆ、ことぐしき、かしは手のひゞきには、あら人神の、かしこき御耳をも驚かし奉るらむといとたのもし、手さしのべ、十二とうの心ざしとて、奉りたる、敬白のかた、うちならすも、いとなく聞ゆ、おくのかたを見いれたれば、御札巻數など、宮僧ばらのとり出てさづくる、いただきてまかづるもあり、すこしこなたざまには、打さうぞきて、はらひも、何も、しのびやかによみ居たる、法師は、だらになど、ゆるゝかにねむずるもたふとし、みあらかのうしろの方より、いそがはしげにめぐり來て、みはしのもとにて、かたばかりをがみつゝ、またた走りゆくは、もゝたびまうでとかや、さるは、手に數さしゆくも、中に見ゆ、南の御門を出て、あそこゝ物見ありき、下ざまへゆくに、寺なども多く並びたてる前を過るに、かたはらより、やせさらぼひて、いみじきさましたるかたゐの、つとより、あが君く、たばこすこしといひたるぞ、いとこちたき、いひをだに、思ふさまにはくはざめるものゝ、これをしかあながちにこふ事ぞ、よにあやしき、かへりも見でゆくに、猶けしきとりつゝ、かゝづらひくるを、うしろよりずさのせいする、聞もいれず、すこしえさせたるに、にならよろこぼひていぬるぞ、あはれなるや、

月の前、花のもとはさらにもいはず、すべてをりくの、きようあるふぜい、めづらしき海山のけしき、えならぬなどを

見るにも、思ひ出て、ごりあへず、折からのおかしさをもそふるものにこそ、

あやしの山がつごもの、妻木おひたるが、あまたかいつらねて、家路をいそぐそばづたひ、かたなりなるわらはべなども、ほごにつけつゝ、になひつゞけたるぞおかしき、すこしたひらなる所にて、木ごもしばし杖にあづけおき、まろがれあひてうちやすみたる、てけの事なごいひつゝ、例のけぶりは、おのがじゝたつめれご、かうやうのものゝは、にほひなごも、中〳〵うるさければかゝず、

高き賤しき、ほご〳〵につけつゝ、もちふるきざみ〳〵有て、國々所々に、名だたるたぐひ多く、おのづから、その品かはり、はたにほひよりはじめて、色ごこに、あぢはひ同じものならず、よきはよく、あしきはあしくて、いこよくけぢめわかるゝものなり、

旅人のゆきかふ道なごには、所々に、きざみたばこなごこいこ大きに、あしでのかきそこなはれたるやうに、しやうじなごにかき、あるは物のゐやうなご、おかしげに書なしたるを見つゝゆくは、目さむるこゝちす、

春のすゐつかた、野べにうちいでゝ、田のもを見しかば、しづのをがたがへしやすみて、道のべにしりさしすゐ、こしよりきせるこうで、あつごえたるたばこいれより、ひねりいだし、こち〳〵しうおしつぎて、くゝみつゝ、かしらかたぶけて、火うちひらめかし、口つきをかしげにのみゐたる、はては火けたじこて、手のうちにたゝきあけて、あつければ、まろばしながら、又かいつぎたるこそ、いそがはしく見えしか、

木の道のたくみ、さらぬよろづのなりはひにも、身をつこめこうじにたる、しばしやすむこては、かの一ふくを下まちつつ、こゝもこしはてゝなご、たのしみはげむめり、大かた朝夕のさへ、たえ〴〵なる屋にも、猶このけぶりはたつるぞかし、

いづくにもあれ、出たるに、忘れてもてこざりし、口をしさよ、又粉のやうになりたるにも、すべて人にもこむれば、ひげしつゝあたへたる、きせるかりなご、すべてなめげなるここ、人に物こふ事なごは、大かたつゝましくてせぬ業なる

を、これのみ何ともおもはず、ならひになりぬるもいかなるにか、
消ぬる、すてむとてさしよせたるに、人もおなじさまにして、ほうとつきあひたる、かたみにゆづりあひてまちたる、かしこまりある所などにては、まづともいふかし、火つくるをりなども、さてまつほども久しくおぼゆ、
人につかはるゝわらはの、まだゆるされぬ程は、わりなくこのみて、使の道など、しる人のがり、かくろへつゝ、立よりては、こよなうおそかりき、といちはやくいはるゝものから、とみの事いひにやりたる折なども、猶こりずまの、あまのもしほ火けぶりのたえまを、うらさびしとおぼいたゞめる、
露ばかりのすひがらより、火いで來て、おほくの屋ども、やけうするためしもあなれば、ふかくこの火の事、せいするもことわりぞかし、それは、さることにて、常に衣などやきたゞらし、あるは、たゝみにとおとしてしらざるを、人に見つけをしへられて、あわてふためき、ひろひ捨たる、かたはらいたく、すゞろにをかし、
朝まだき、霜夜のなごり、いと寒けくて、大かたかしらさしいづべくもあらぬに、さゝやかなるわらはべの、らうたげにうちしぼみて、けぶりの調度もち出つゝ、かきはらひ、きたなき物きよむとて、氷うちたゝき、水そゝぎ、かた手ふき〳〵、石にすりて、がは〳〵といひたる音さへ、あはれに聞ゆ、
大かた、此調度のもてなしにも、あるじのこゝろのおしはからるゝなり、いつもちりばみけがれて、火いれの灰きたなげに、きせるあかづき、とゞこほりがちなるも、にくゝさへぞある、きらゝかにみがきなしで、きよげなるは、のむ心ちもよし、かゝりとて、餘り心をいれて、ちりもゐさせじともてあがめたるも、これのみにやくらすらむと、心づきなし、火のいくたびもきえたる、いとむつかし、
はひふきこぼしたる、あさましさは、えもいはず、
かくのみいみじくいひなすを、いみきらはむ人は、それしかあらじ、ようなき物なりと思ひ捨なんもことわりかな、つくづくとたどりつゝ思へば、げにはかなく、あだなるものにこそとも思ひかへさる、もろこしにても、とり〳〵にことわり

て、さだめかねたるとかや、いむ事たゞしきほうしなどの、近くさしよせだにせぬも、いとたふとし、かくまではおもひこけども、猶おきがたきものにや、あしたにおきたるにも、まして物くひたるにも、ぬるにも、大かたはなるゝをりこそなけれ、かう常にけぢかく、したしきものはなにかはある、さるを、いみじき願たて、ものいみなどして、七日、もしは十日など、たちゐたらむほどにぞ、常はさしもおもはぬ此君の、一日もなくて、えあらぬことをばしるらむかし、

まくらの山

櫻花三百首

いとはやも高根の霞さきたちて櫻さくへき春は來にけり
あらたまの春にしなれはふる雪の白きを見ても花そまたるゝ
春霞たつより花もいつかはと山端のみそなかめられける
いつしかともえ出る野への若草も櫻またるゝつまとなりつゝ
とくさけや櫻花見ておふな〳〵心やるへき春はきにけり
春なからまだ風寒みさくら花枝にこもりて時やまつらむ
まつとてはさかぬさくらの梢をも見つゝそくらすあからめもせて
おそしとてよしや恨みじ櫻花さかてやみぬる春しなけれは
日にそへて霞たちそふ山見れは花も咲へき時にはなりぬ
春くれはおよひもたゆし百千度櫻さくへき日數よむとて
まちわふる花はさきぬやいかならむおほつかなくもかすむ山のは
けふもまた見えぬ高根のさくら花それかとまかふ雲はゐれとも
花はまた咲りともなしさほ姫の衣はるさめけふもふれゝと
山櫻このめはるさめふりさけて見れとも見えすさくやさかすや
さきなはとかたらひおきし山里の花のたよりをまちそわひぬる
まちわひて尋ねいるかなやま櫻またさかじとは思ふものから
花はなとつれなかるらむさきぬやと人も見にくるやとの櫻の
櫻花またしきほとに見てしかなかたりて人にうらやまるへく
まちわひぬ櫻の花よとくさかはとくちりぬともよしや恨みじ
待わふるこゝろは時も過ぬるをいつとて花のつれなかるらむ
櫻花さかむさかしはしらねとも山へゆかしき春かすみかな
さくら花さくときくより出立て心は山に入にけるかな
まちつけてはつ花見たるうれしさは物いはまほし物いはすとも
さくも皆神のめくみのはつ櫻一枝はまつ折てたむけむ
佐保姫も花まちつけしうれしさやけふは霞の袖にあまらむ
さくら花今は咲ぬるうれしさに見る〳〵もなく鶯のこゑ
岩か根をふむもおほえす花見むといそく心は空よりそゆく
遠しとも思はさらましさくらさく春の山路は八百日ゆくとも
岩根ふむ山もみやこの大路よりけふはゆきよし花見にゆけは
さくときくところあまたの櫻花いつれの山をまつ行て見む
山深くしけ木かおくも尋ねみむ人にしられぬ花やにほふと

たゝそれとまかひしかとも櫻花さけは色なき峯のしら雲
梓弓とらねとはるのさくら狩山のかすみを分つゝそいる
おくれゐて心空なりさくら花見にとて人のゆくを見る日は
山とほく見にこし我をさくら花まちつけかほにゝほふ嬉しさ
やまかつは櫻さくころめつらしく見るさへ花のみやこ人かな
來て見れは花の中なる山里のすまひそ春はうらやまれける
うきこともきかて見れはや山里は花のにほひも世にまさりける
花見には又そきにけるをとつひも昨日もけふも同し山へに
あしひきの山へのさくら明日はこじいくか見るともあくよあらめや
思ひきやみ山のおくのこかくれにかゝる櫻の花を見むとは
あたらしきみやまかくれのさくら花人も來て見よ道とほくとも
高しとてたかねのさくらよそなから見てやはやまむ行てこそ見め
いとゝしく外山に咲る花みれは峯の霞のおくそゆかしき
櫻花里にも野にも山へにも今をさかりと咲にけるかな
はる〳〵と來つるもしるく山さくら花はけふこそ盛なりけれ
いつれをか分て見るへきさくらはな梢あまたにゝほふ山へは
咲にほふこすゑをおほみをちこちに心うつろふ山さくらかな
見る花の木本ことにとまる哉めつるこゝろはひとつと思ふに
あかすとてをらはちるへし櫻花なほかくなから見てをやみなむ
あかすともをらてこそ見め一枝もやつさは花のつらしと思はむ
我も又えこそ過さねさくら花人のをるをはうしと見なから
吹風も枝なからやはさそひけるあたら櫻をゝる人そうき
ひさかたの天路に通ふはしもかな及はぬ花の枝もをるへく
櫻花折てかさしておもふとち思ふことなくあそひつるかな
くれぬとも今しはし見む山さくら入相のかねはきかすかほにて
とほくともいま一たひはきても見むみ山の櫻ちらてまちてよ
花見つゝゆけは春日も暮にけりこゆる山路は遠からねとも
見てのみやたゝにかへらむ一枝は家つとゆるせ花のやまもり
こゝかしこ野山の花にあくかれてやとの櫻は見すやなりなむ
わか物とはつかに咲る一本もやとのさくらは殊にこそおもへ
こぬ人も見にもくるかにわかやとの櫻さきぬといさ告やらむ
門さして我ひとり見む見にくとも人に見せむは惜き櫻を
さひしさも見れはなくさむさくら花物いひかはす友ならねとも
散まては世のいとなみもすてゝ見む花の日數はいくはくもあらす
あくまてとみれはいよ〳〵見まほしき花は櫻の花にそ有ける
櫻花見る人ことにあはれてふ言や木陰に山とつもらむ
めつらしき花とはなしにさくらさく梢は先そめにかゝりける
玉ほこの道のゆくてのさくらはなしるもしらぬもよりつゝそ見る

過てゆく人さへそうき立よりて見てたにあかぬ花のこのもと
山人もおひこし柴にしはらくはしりうちかけて花をこそ見れ
道のへの田面の水に影見えて片山岸に花さきにけり
いたつらに櫻は見めや歌よめといはぬはかりの花のにほひを
行道にさくらかさしてあふ人はしるもしらぬもなつかしきかな
山さとの人としいへは思ひやる櫻の花のゆかりとそ見る
此ころはさくらの花のゆかしさに山さと人のなつかしき哉
かくすとてあやなくたちそ春霞人にしられぬ花のかほかは
かくさるゝさくらのために春も又霞をはらふみそきをやせむ
吹とても櫻ちらさぬ風ならは霞のためはまちもしてまし
うちわたす磯へに咲る櫻花浪かと見れはよせてかへらぬ
こく船も磯山櫻さくころは心よせてや見つゝゆくらむ
春の野に霞へたてゝなくきゝす妻や戀しき花やゆかしき
さかりにもなく鶯はさくら花散なむことやかねてかなしき
しろたへに松の緑をこきませて尾上の櫻さきにける哉
春の日のつねよりことにのとけきは櫻の花のためにや有らむ
うくひすも霞もいとゝのとけさをくはふる春の花盛かな
さきにほふ四方の梢に風もなく花の京はのとかなりけり
雲のうへの花のさかりかひさかたの空ふく風の香にゝほふなる

へたておほみ身はしもなれは九重の雲ゐの櫻よそにこそ見れ
名にしおはゝ高根の花もまかふ色なくてや見らむ雲の上人
さくら花月のなき夜は梢にも衛士のたく火をたかせてしかな
みそらゆく月影のみかよる見れは庭の櫻もおほろなりけり
思ふとち夜をさへ花にあかすかな晝の野山の物かたりして
ぬるまなき春のよなから庭さくらさけは朝いもせられさりけり
おき出て庭のさくらの花見ると朝食わすれて日もたけにけり
池水にしつく櫻の影見れは玉かとそ思ふ海ならねとも
さくら花水のかゝみも我なからはつかしからぬ影と見るらむ
雨ふれは池のかゝみもくもりけりしをれし花の影は見せしと
春雨のふる日は人も見にこねは思ひしをるゝ花の色かな
はるさめに落る雫もなつかしきさくらの花はぬれてこそ見め
露かゝる櫻か下の草葉さへ花さくころはなつかしきかな
契りおきて人まつ人も花を見てあかぬ夕はいそかれもせし
しのゝめのあかぬわかれも中〳〵にいそかれぬへき花のいろかな
櫻花ほの〳〵見ゆる曉はわかれをゝしむ人やなからむ
しぬはかり思はむ戀もさくらはな見てはしはしは忘れもやせむ
あちきなく春は櫻の花ゆゑに心いとなし戀はせねとも
こゝろから花に心をつくすかなおもひそめすは思はましやは

さくら花はかなき色をかくはかり思ふ心そましてはかなき
我心やすむまもなくつかはれて春はさくらの奴なりけり
此花になそや心のまとふらむわれは櫻のおやならなくに
鳥虫に身をはなしてもさくら花さかむあたりになつさはましを
さくら花なすらひに見む色たにもあらはいとかく思はましやは
櫻花ふかきいろとも見えなくにちしほにそめるわかこゝろかな
日くらしに見ても折てもかさしてもあかぬ櫻を猶いかにせむ
つゆたにもうき色見せよさくら花さらはしひても思ひさまさむ
ありぬやと咲て散るまてさくら花一春見すていさこゝろみむ
年を經てあひも思はぬ友なれと猶うとまれぬ花のいろ哉
かきたえて櫻のさかぬ世なりせは春の心もさひしからまし
つねよりも花さくころはあやにくに早く日數のすきもゆく哉
花見れは秋の日よりもみしかきを長き春日とたのみける哉
おなしくはとく咲出てとくちらぬ物にもかなやあかぬさくらは
をちこちに多き櫻のいかなれは花を見る日のすくなかるらむ
さくら花入ては出る月のごとちりて又明日さくものにもか
松にいふ十かへりの花さくらをは年にとかへりさかせてしかな
櫻花いろはそれかとまかふとも消ゆく雲にならはさらなむ
朝ことのさくらの露をうけためて世のうさはるく藥にそせむ

尋ね見むしなぬくすりのありときく島にはちらぬ花も有やと
花咲てちらぬさくらのたねしあらはとこよの國も行てもとめむ
春ことにゝほふ櫻の花見ても神のあやしきめくみをそおもふ
たくひなき櫻の花をみてもしれわか大君の國のこゝろを
世の人は見てもしらすやさくら花あたし國にはさかぬこゝろを
から國も花は千種にさくといへと櫻はかりはなしとこそきけ
なが國に此花ありやとから人にさくらをみせてとへきかはや
から人に櫻見せなはその國にかへりてめつる花やなからむ
うへなれやかほもすかたもたゝ人のたねとは見えぬ花のおほ君
八千種とにほふが中のおやなれはうへも櫻を花といひけり
いにしへも花は櫻と思ひてそさくらを花と名つけおきけむ
世の中にたとへむ物もなかりけり春のさくらの花のにほひは
にふ色を何にたとへむさくら花綾かにしきか玉かこかねか
寶とてこかねも玉も世にはあれと櫻の花をなにゝかへまし
咲にほふ色は此世のものとしも見えぬさくらの花さかりかな
のとかなる春のやよひにさけはかもいとゝ櫻のめてたかるらむ
見てもなほ見てもめつらし櫻花野にも山にもこゝらさけれと
いかにともこゝろはしらぬ心にも見れは櫻はさくらなりけり
蓬生のせはきやとにもうゑなへて見まくほしきは櫻なりけり

人の家のひろき櫻の花園を見れはうき身のなけかれそする
世は清くすてたる人もすてかねて見るは櫻の花にそ有ける
咲にほふ春のさくらの花見てはあらふる神もあらしとそ思ふ
おに神もあはれと思はむ櫻花めつとは人のめには見えねと
ちからなき枝にはあれと天地も動かしつへき花の色かな
櫻花咲るやしろに中々のぬさはたむけし神はめてめや
あたなりとたれかいふらむ神代よりかはらす春はにほふ櫻を
花のいろはさらにふりせぬ櫻哉くちのこりたる老木なれとも
さくらはなこゝらの春をへぬれとも老たりとしも見えぬ色かな
おいぬれとなほこそ春はまたれけれ櫻の花の見まくほしさに
老ぬれと咲るさくらの色見れは春のこゝろはわかゝへりつゝ
友はみなかはりはてぬる老の世にあはれ昔の花のいろかな
わかおいのすかたやさしきさくら花むかしの春の友と見るにも
さく花においのすかたははつれとも見てはえあらぬ物にそ有ける
ともすれは涙おとして老の身のしれ〳〵しさを花に見えなむ
老ぬれはもろく涙のちる我をはかなしとこそ花は見るらめ
はちもせてあはれうたての翁やと花は見るらむ老のやつれを
おいのくせ人やわらはむ櫻花あはれ〳〵と同し言して
年ことにまさる若木の花見ても歎きもえそふ老の春哉

おいの世にわか木のさくら猶うゑていつまてとてか花をまたまし
あはれともかけても見めや櫻花なれよりさきに我はちるとも
しなはわれ又いつのよにめくり來てあかぬ櫻の花は見るへき
さくら花あかぬ此世はへたつともさかは見にこむあまかけりても
さくら花千年まてこそかたからめ猶百とせの春は經て見む
かくなからちよも八千世も見てしかな櫻もちらす我もしなすて
なからへて咲むかきりの春をへて櫻の花を見るよしもかな
かくはかりあかぬ櫻のにほふ世に命をしまぬ人もありけり
櫻には心もとめて後の世の花のうてなを思ふおろかさ
事もなくもなく櫻の花見むと春は我身のいのらるゝかな
人はいさわれは死なすて櫻花千世もやちよも見むとこそ思へ
とことはに絕せすさけよ櫻花我も萬代しなて見るへし
風ふけとちらてとまるにゆく物は花見る人の心なりけり
花さそふ風にしられぬ陰もかな櫻をうゑてのとかにを見む
山さくら霞のおくにかくれゐて吹來む風にありとしらるな
さくら花夜の間の風もしられぬを明日とて人の見にこさるらむ
櫻花けふまても見にこぬ人を明日とはまたすちらはちらなむ
枝も木もよにくちやすき櫻哉春咲花のもろきのみかは
かたをたにうつしおかはや櫻花にほひなくとも後も見むため

いかてかは風に櫻のさわくらむ柳にふくはのとけきものを

さほ姫のかさしの花の山さくら霞の袖にちりかゝりつゝ

昨日まてつもれる雪と見し花のふるにまかひてけふはちるかな

めてられむ藤山吹のためにとや櫻の花ははやくちるらむ

さくら花かくはかりとくちる物といつの神世にさためそめけむ

あかぬ色とみなせの神のみことのりいともかしこしちるなさくらよ

とくちると何思ふらむさくら花さかりをまたぬ人もある世に

ことしのみ散花のことおもふかないつもとまらぬならひ忘れて

あかなくに櫻の花のちるを見て春のなけきそもえ初にける

さくをまちゝるをしむもくるしきになそや櫻を思ひそめけむ

いのちあらは又來む春も見るへきに身にかへてなと花を惜まむ

はしめあれはをはりある世のことわりも惜き花には思はれぬかな

あかなくにいとゝくちるは世の人を歎かせむとて咲るさくらか

まつほとは久しかりしを咲ぬれはことそともなくちる櫻かな

櫻花ちるかつらきにくらふれはまちし思ひは數ならぬかな

さても又つひの別れをいかにせむをしき櫻はちらてありとも

頼まれぬうきよのさかを見せかほにはかなくもちるさくら花哉

さくら花さけはほとなくちる物をとはに見むとまたれつるかな

ちれはまたいとゝうきよの櫻花しはしは見つゝわすれしものを

はかなくてちるはさくらの心にも人こそしらねかなしかるらむ

櫻花ちる木本に立よりてさらはとたにもいひてわかれむ

さくらはなよしや今年はちりぬとも又さく春を忘るなよゆめ

さくらしも花の命のみしかきはほかの木草にねたまれてかも

櫻花さてもあかぬかこゝろみに一春のこれ時はすくとも

ちりぬとも一重つゝちれ八重櫻七日八日のほとは見るへく

わかれする人も櫻のちるを見は思ひうつりて花やをしまむ

鳥ならはもち引かけてとゝめまし散行花はせむすへもなし

散てゆく花の別れの鳥ならは又秋とたにまたましものを

吹風にそひゆく花をよふこ鳥やよゝひかへせをしくやはあらぬ

花の枝にちるをゆるさぬ關すゑてなく鶯にもらせてしかな

うくひすも聲のかきりはなけやなけ我もなくそよ櫻ちるなり

鶯のはねにも尾にもかゝれとも涙とほらぬはなのしらゆき

ほかの木にふりかゝりても花の雪花とし見すちりぬと思へは

散花の雪しまことの雪ならは咲む春へのちかつかましを

雪とたにつもりて殘れいとせめて惜き櫻の花のかたみは

雪とたに見てまし庭のさくら花うつりも行か風のまに〳〵

はかなくも我物かほに見つる哉よそに散ゆく庭のさくらを

櫻花ちるを惜めはよる〳〵の夢路にたにも殘るとはみす

今朝見れはみな散にけり山さくらふさに手折てこしかひもなく
咲ことは見に來る人におくれしにちるはさきたつ花のあやなさ
のこりなくうつりもゆくか山櫻ちるを見にとは我はこなくに
ちりぬともわかうへにちれ櫻花こよひはねなむあかぬ木陰に
ちるさくら色はしほみてかはるとも袖につゝみてもてやいなまし
さくら花ちりかひくもる木本はをしむ涙そ雨とふりける
櫻花ちる間をたにとおもへとも涙にくれて見えすも有かな
散花を見れは涙にかきくれてよるかひるまか夢かうつゝか
花ちれはしつ心なき春の日をのとけきものとおもひける哉
ちるころは見るめのみかは櫻花耳にもつらき風の音かな
ちるらむとよるはすからにさくら花こゝろもさわく風のおとかな
朝またきさそはれそむる櫻花かせや夜のまにちきりおきけむ
草も木もなひける御世に君をおきて風にしたかふさくらなになり
花はしも散むものとはおもはしをこゝろつよくもさそふ風かな
いかにしてしはしとゝめむ心なき風にまかすはをしきさくらを
ひさかたの空にかけりて花ちらす山風ふせくまほろしもかな
山風に櫻の花のちるころは秋よりかなし春の夕くれ
さけはちる花のならひと思へとも猶うらめしき春の山風
咲花を何のあたとて山風は世にのこさしとふきはらふらむ

一木たに形見にのこせさくら花さそふは風のならひなりとも
ふかぬ日もちらてやはある櫻花なとひたすらに風をうらみむ
吹風よ心にまかす花ならはちるをもとめよまひはしてむを
程もなし春の暮なむ日まてたに櫻の花よ待てちらなむ
さくら花散なむ後のさひしさは何にわすれて春日くらさむ
何を見て來む春まては過さまし形見もとめて花のちりなは
夏も秋もさきなましかは櫻花ちるともかくは惜まさらまし
春しこは又も櫻はさきなめとちりし今年の花はかへらし
木の本になほ殘りても櫻花散ぬる色はいふかひもなし
このもとにくちなは朽よちる櫻よそのつちにはなさしとそ思ふ
ちりはてし花の梢をけさ見れは心長くそ月はのこれる
散過しさくら戀しき木本にわすれ草をや植て見てまし
いとゝしくわすられかたき櫻かな思ひくまなくちれるものから
いそきしは散てくやしきさくら哉おそくはけふも見るへき物を
櫻花をしむかひなく散はてゝのころは人のうらみなりけり
きのふ來て見てましものを悔しくも山の櫻は散にけるかな
もみち葉は散てもそれとみる物をなとて櫻の雪となりけむ
あかさりし櫻の花のかたみとて見るもはかなき峯の白雲
山里のいつともわかぬさひしさも櫻ちりぬるころの夕くれ

のこりても春を春ともおもほえす櫻散ての後の日數は
さきたちし櫻の花をしたひてや春も程なくくれてゆくらむ
櫻花ちりしなこりのこすゑさへあらぬ青葉にかはり行かな
散過し春のさくらにおくれゐて歎きの枝もしけるころ哉
ちりぬれはあやにめてたく見し色も夢まほろしの櫻なりけり
中〱に夢ならませははかなくてちるともさくら又も見ましを
咲こみし花も月日も夢なれや散て流るゝ春の山川
廣き瀨に袖のせはきをいかにせむ流るゝ花をせきとゝめても
したはれて花の流るゝ山河に身もなけつへきこゝちこそすれ
世の中にさくらの花をゝしまぬは風と河瀨の水にそ有ける
たえすさく浪の花こそ水の沫と消し櫻のかたみなりけれ
をしかりし心は猶そうつろはぬ散てほとふるさくらなれとも
櫻花またさくを見む春まては面影のこれあかぬ心に
散過し花の盛を又見せて夢はうれしき物にそ有ける
ちりにしを又は見ましや櫻花夢てふものゝなきよなりせは
さくら花散し木陰に庵しめて殘るわか世はへなむとそ思ふ
跡もなく散てう月と思ひしにうれしく殘る花もありけり
同し色の卯花山のおそ櫻友まちつけし雪とこそ見れ
夏の來てうの花さけは今さらに消し櫻の雪をしそ思ふ

めつらしともしやとまらむ散花に山郭公なかせてしかな
春をおきて五月まためや時鳥櫻てふ花さくとしりせは
春ならは花見せましをほとゝきすさくらか枝に來つゝ鳴なり
をちかへりいかになかまし郭公さくら咲ころ來たらましかは
散そめし花おもほえて絕〱に今もさくらに螢とひかふ
かけり來てさくらか枝にとふ螢散にし花の魂かあらぬか
山端をとゝろかしゆく鳴神も櫻はふまし夏さけりとも
あつくともさくらの花のみな月にさく世なりせは風はまためや
櫻花きて見る春の山ならはいかにうからむ日くらしのこゑ
さくら花ちらしゝ風を秋たてはうらめつらしと人はいふなり
さくら花ちらしゝ風のやとりかとおもへはいとゝうき荻の音
見るほとのなきにはあらす櫻花一夜にかきる棚機おもへは
同しくは春のさくらの木本にさかせてしかな萩も尾花も
はる日さく櫻はみかともゝくさは百のつかさとにほふ秋の野
松はあれとさくらは蟲の名にたにも聞えぬ秋の野へのさひしさ
櫻花かなしき秋のゆふくれにちらは命も露とけぬへし
さくらちるこのもとならは猶いかにあはれならましさを鹿の聲
くもりなき秋のもなかの月影に櫻の花を見るよしもかな
櫻には猶やけたれむひさかたの月のかつらの花はさくとも

なかやとのかつらの花とさくらとはいつれまされり月人をとこ
さくを見て別れし春の面影に櫻戀しきはつ雁のこゑ
立田姫さくらいろにも染分よ紅葉にましる花と見るへく
さくらあれはもみち見にゆく山路にも春おもほえて立とまりつゝ
來て見れは秋の紅葉も散にけり櫻をうしとなと恨みけむ
ならふかにさくらの本に菊を植て盛久しき花を見せはや
なとくはちりし櫻とちらされは二度にほふ菊も有けり
長月にさかは櫻もきくのことちらて久しくにほひもやせむ
はつしくれふれはおもほゆくれなゐのうす花櫻時ならねとも
ちりしける春の花かと見るまてに櫻の下におけるあさしも
冬をあさみまてと雪たにまた見えすまして櫻は遠き山端
櫻花散て流れし川風も又身にしみて千鳥なくなり
ほのかにもすかたを見せよ春の花峯の炭かまけふり立なり
夏も秋も冬も櫻のちらてあれなめつる心のかきりなけれは
吹風のさそはぬ年も暮ゆくか花のわかれも昨日と思ふに
春立て時ちかつけはさくら花いよ〳〵とほきこその面影
春のきて霞をみれは櫻はな又たちかへるこそのおもかけ
子の日には櫻も引て植て見む松にならひて千世をふるかに

これか名をまくらの山としもつけたることは今年秋のなかはも過ぬるころやう〳〵夜長うなりゆくまゝに老のならひのあかしわひたるねさめ〳〵にはそこはかとなく思ひつゝけらるゝ事の多かる中に春の櫻の花のことをしも思ひ出て時にはあらねと此花の歌よまむとふとおもひつきて一ッ二ッよみ出たりしにこよなく物まきるゝやうなりしかはよき事思ひえたりとおほえてそれより同しすちを二ッ三ッあるは五ッ四ッなと夜ことにものせしに同しくは百首になして見はやと思ふ心なむつきそめてよむほとにはとなく數はみちぬれと此何かしをおもふとてのとかならぬ春毎のこゝろのくま〳〵はしもつきすへくもあらて猶ことさまかくさまに思ひよらるゝはかなしことゝもをうちもおかてよみいて〳〵するほとに又しもあまたになりぬるをかくては二百首になしてむとさへ思ひなりてなほよみもてゆくまゝに又其數もたらひぬれは今はかくてとちめてむとするに思ひかけさりし此すさみわさに秋ふかき夜長さもわすられつゝあかしきぬる夜ころのならひは此言草のにはかに霜枯ていとゝしく長きよはさうさうしさの今さらにたへかたきにもよほされつゝ夜を重ねて思ひなれたるすちとてともすれは有し同しすちのみ心にうか

○まくらの山

ひきつゝ歌のやうなることゝもの多くおもひつゝけらるゝかおのつからみそ一もしになりては又しも數おほくつもりてすゝろにかくまてには成ぬるなりさるははしめより皆そのあしたく\に思ひ出つゝ物にはかきつけつれは物わすれかちにてもれぬるもこれかれとおほかるをはしひてもおもひ尋ねすたゝその時く\心に殘れるかきりにそ有けるほけく\しき老の寐さめの心やりのしわさはいとゝしくくたく\しくなほく\しきことのみにてさらに人に見すへき色ふしもましらねは枕はかりにしられてもやみぬへきをさりとてかいやりすてむことはたさすかにてかくは書あつめたるなりもとより深く心いれて物したるにはあらすみなたゝ思ひつゝけられしまゝなる中にはいたくそゝろきたはふれたるやうなることはたをりく\ましれるををしへ子ともめつらしおかしけうありと思ひてゆめかゝるさまをまねはむとな思ひかけそあなものくるほしこれはたゝ

いねかての心のちりのつもりつゝなれるまくらのやま
と言の葉の霜の下に朽殘りたるのみそよ

寛政十二年十月十八日　　本居宣長

詩文稿

春日早朝

鷄鳴九陌報淸晨、初日纔昇映紫宸、金殿出霞花氣暖、玉樓經雨柳條新、群臣集奏千秋壽、蠻客貢陳四海珍、且識天杯元承露、聖明恩澤更含春、

送人歸鄕

西望白雲欝萬重、孤帆颺々冒玄冬、錦衣光寵向鄕路、但恨一辭不易逢、

讀書

獨坐閒窓下、讀書欲曉星、孜々何須睡、一任醉群經、

烏夜啼

閨中獨臥遙思鄕、耿々不寢夜更長、終夕空守牀頭燭、經年猶留衣上香、底事亦不待明日、庭前古樹棲烏鳴、亂飛啞々何處去、萬里毋乃向邊城、捲簾目送去已遠、唯看空庭風月淸、

禪庵

禪室山林邃、寂寥無客來、澄心泉石潔、獨坐拂蒼苔、

上巳

元巳春風暖、桃花照錦筵、麗人更勸醉、流水羽觴前、

山居

牕外溪聲遠、亂峯自當門、路幽人跡絕、猿叫易黃昏、

少年行

白頭猶且醉花曲、莫道少年數擧杯、一擲千金春酒裏、揚々意氣亦雄哉、

奉次韻蘭澤屈君看花有感作

百花開落一時望、更覺白頭鏡裏新、倏忽心悟盤逸士、年々徒暮幾回春、

送草敬所歸勢州

東南相望別路迴、送君亦且思故鄉、離筵一樽莫辭醉、携手河梁悲傷、千山揮鞭白雲起、錦衣萬里猶飛揚、天寒嚴霜衝劍氣、郊野朔風吹衣裳、鳴雁影亂空外度、驛馬翩々嘶夕陽、歸省莫厭行路苦、堅氷爲結作橋梁、君亦須思孤客意、別後獨坐愁更長、忽々歲月將去暮、到來家園弄春光、

客亭

此行萬里何時回、夕日驛亭鄉思催、酒薄難消孤客恨、關山明月更堪哀、

題

照高大王臺池

帝子山池冠洛陽、盈々秋水繞金塘、紅楓瀑布隔人境、此日賞遊詎可忘、

送嚴榮良歸肥前州

北風凛々錦衣寒、君去青山月影殘、相逢交游歡未盡、河梁分手獨長歎、

漁父

萬里秋江一葉舟、一竿一縷不知愁、晚風雨霽烟波遠、蓑笠生涯對白鷗、

奉送

景山先生赴藝州

搖落淸秋萬里行、啣盃共惜別離情、群山暮色雁鴻亂、驛路西風驪駒輕、功業日新師大國、德音年發壯皇京、曾知優待君恩

渥、須見載陽錦衣榮、

送松田氏歸鄉

白馬朱鞭出帝州、千山落木別江樓。深園残菊添鄉涙、驛路枯楊綰旅愁、非啻酒壚思往事、漫令彩筆憶交遊、莫嗟萬里隴雲遠、方遇音書鴻雁秋、

長安月

一片秋夜月、光滿帝王州、金魄臨丹掖、玉鈎沈御溝、九街堪命駕、萬戶共囘頭、西望天涯逈、淸輝不可留、

游仙曲

吟過洞庭醉岳陽、風吹髣髴逐風揚、逍遙無復世人識、鶴背作家雲作鄉、

春宮怨

鶯歌蝶舞有誰憐、鳳輦無過歲月遷、粧閣日長垂柳下、洞房風暖落花前、含情深鎖春光裏、拚涙空愁暮雨天、借問君恩今孰擅、錦袍新賜列宸筵、

送藤文輿歸鄉

天涯千里一帆懸、海色蒼茫黯暮煙、城外滿山花發日、分袂難留孝廉船、

八月十五夜侍　屈先生樵亭得平字

東山月出萬樹平、光彩射波秋水淸、四望如霜復如雪、方知此夜故人情、

哭田中允齋

山陽笛裏杳相思、空問遺編涙若絲、暮雨詩魂招不返、白楊蕭瑟使人悲、

賦松奉賀　景山先生七十華誕

偃蓋層々帶瑞雲、雲中仙鶴自爲群、應知春色占千歲、行看青牛來伴君、

文稿

與艸敬所書

余不佞、負笈千里從先生、偶與足下摳衣趨隅、囊螢分光者、有年于玆、然足下學成、而歸鄕里、此行也、晝錦之榮、仳離亦何足歎乎、游方不誤期限、謹守斷機之戒、深懷倚門之哀、今辭帝京、而馬首東南、嘗聞、上毉々國、金匱三世、加以稽古、則十全之功、不容疑也、固期凌雲譽望、孰惜齒牙餘論、然而一朝辭去、無如舊來情好何矣、庶幾江南一枝、勿缺驛使之信、是祈是祈、

紀佐佐木梶原競渡宇治河事

鎌倉前右兵衞佐源頼朝遣其弟範頼義經、西伐木曾義仲、討其暴逆、遂征平氏、二將約至京師、而會焉、乃各自別路進、以倚角之勢、範頼由濃州、義經由勢州、義仲在京師、聞而大恐、因斷兎道勢田兩橋、以截路阻河、豫防敵兵、使今井兼平守勢田、仁科山田等守兎道、以爲之備、義經既經勢州、至幾內、兎道河會孟春、雪消氷解、而河水滔々、義仲乃闇立積柱、絙巨索、以絕水道、東兵無由直渡、義經欲察士卒勇怯、臨觀河水、陽怯曰、自淀市口而渡乎、將自河內抂途而渡乎、抑又俟水勢減乎、畠山重忠前謂曰、淀河絕阨、聞于四方、公今始知有此乎、出軍者固作濟水計、且水勢減殺、期何時俟之、治承中、田原忠綱、弱齡猶能前渡焉、重忠豈劣彼孺子乎、乃率五百兵將赴河水、時梶原景季、佐佐木高綱、兩騎忽自平等院東北、策馬絕流、直突波浪、競渡甚急、人不知其故、初義經發鎌倉也、景季高綱並從焉、頼朝嘗有二馬、名生食磨墨者、並甚愛之、景季嘗欲獲生食、累求賜之而不聽、曰、設有兵事、吾將騎以周旋焉、乃以磨墨與之、生食賜諸高綱、卽謂曰、人皆雖欲得之、而吾不敢與也、今以與子、子其憶此意矣、高綱大喜、對曰、臣嘗聞兎道河爲水也、琶湖下流、關西巨漲、非得駿足、寧能渡之、今幸辱此生食、臣先登渡大河必矣、公其擧足而俟、是言之驗焉、軍既發鎌倉、而至駿州浮島原、景季上丘壟而觀兵馬過、比於磨墨、謂無能尙之者、時有一馬、牽而來前、猛烈惟肖生食、稍近省察、則實生食也、就問、是誰馬也、答曰、佐佐木氏馬、復問、所謂佐佐木者、三郞歟、四郞歟、曰、四郞也、牽而過之、景季變色、大怒謂以吾則不與、

以高綱則與之、君德厚於彼、而薄於我、則我忠功何益也、不如與彼偕鬪同斃、而使鎌倉氏徒喪二良士也、乃以待高綱、高綱不虞至焉、景季欲急刺之、先謂曰、足下得賜生食乎、高綱以景季固欲此馬、因紿曰、渡兎道河、非生食也、則不可能也、嘗聞足下乞得之、而猶不得也、況於高綱乎、雖欲得之、而不可如之何也、是以不顧後責、軍將發之日、私入廐竊之、景季曰、善、悔吾不先入竊之也、笑而相別、蓋此馬、駿逸、惡齕、好食生類、不擇人畜、故以爲名、若夫磨墨、則以毛色甚黑如墨也、是亦妙質、亞生食、至是相與爭先、時景季先高綱、五六步、高綱欺梶原曰、君馬韁帶弛緩、恐鞍覆而墮、宜早緊之、景季以爲然、乃駐而放轡、馬頸踏張双鐙、泛軀聳立、手絞馬韁、高綱遂乘間突進、景季遙呼告曰、柱索縱橫水中、足下其莫爲之鈎躓、高綱乃拔刀、探拂亂斫柱索、絕流直渡傳岸、大呼曰、宇多帝九世後裔、近江佐佐木秀義子、四郎高綱者是兎道河先登也、景季所乘磨墨、中流不任水勢、沿流邪行、纔得及岸側、重忠亦率五百兵、逐勢繼渡、山田次郎自東堤射重忠、矢中馬額、馬爲之使旋、重忠乃杖弓下立、波瀾浡胄、猶能涵泳、竟得向岸、欲上而背後有人踵至、重忠問、誰人、答、是爲重近、水急亡馬、身亦殆淪沒、幸得至此、畠山戲謂曰、若卿者進退必爲吾所助、投之岸上、重近起立以刀加額、亦大呼曰、武州大串次郎重近者、是兎道河步兵先登也、兩軍哄然嗤笑、

寶曆癸酉季夏下澣　　本居榮貞紀

紀平敦盛事

廷尉源義經、奉兄賴朝命、西討平氏、以奇兵冒鵯嶺絕險、一擧而陷一谷壘、平族大敗績、南渡海以逃、初淸盛以汗馬勞、殊遇於朝、官階超次、拜爲相國、持外戚重、遂顓天下柄權、子宗盛嗣立、官至右府、宗族爲公卿者、十數人、其餘親屬、殆遍朝廷、第舍宏麗、蛾眉百數、錦帳玉屛、紆朱履絲絲竹於朝野、珍羞盡於水陸、出入二十年、窮從容逸豫之樂矣、語云盛者必衰、信哉、斯言乎、壽永之亂、宗盛奉幼帝、收寶器、將百僚、西奔攝州、保守一谷、一谷既陷、則燒營遁逃、衆大擾相騰踐、擧宗赴海、接舳艫而南、時東軍裨將、熊谷直實、欲擊平氏敗兵、而要諸海瀕、會平敦盛單騎後至、彷徨瀉鹵、遙望諸平之艦、遠赴海上、馳馬踏潮以追、直實見其容裝儼然、以爲將帥也、乃羽扇麾之曰、囘、良將遭敵、惡敢背走哉、馳

而從之、而與俱墮、以軀壓伏之、揭其胄顏視之、則風姿儁爽、如芳蘭竟體、年可十六七、與其子直家、齡偶相類、忽恩愛惹于心、因謂嚮者鵯嶺之役、直家少傷、而吾爲之食不甘味、然今殺此少年、其父之悲萬々於我、且不能以一冠者之死生爲我軍之成敗也、不若、釋去之何害、乃言曰、君其爲誰也、臣將釋君、又無他膓爾、敦盛自若應曰、抑汝是誰、曰、臣武州人、熊谷直實、敦盛曰、此敗也、吾固以死自處、而今在仇敵手、申何顏以陳姓名其前、願速殺吾、後必有知吾、不復言、直實歎曰、惜哉良將也、愈滋不忍殺也、遂釋之、起而顧焉、則東軍大起、塵埃漲天、直實嚮敦盛泣曰、君不見乎、我軍四圍、嗟已矣夫、君生路已絕、不如終於臣手也、後事莫慮、臣能爲君奉之、流涕不禁、茫然自失、不知所刺、然勢不可已、乃勉强而刎焉、投刀於地、喟然大息曰、寧爲奴隸、屈韝下、無爲介胄之士矣、頃之搜其懷中、得一好笛、裹以錦囊、於是乎、識其爲敦盛、方悟絕命一言、而更悽然傷心云、實元曆元年、甲辰二月也、敦盛嘗以善笛聞、前夜直實於一谷營外、聞其吹奏、寥亮有秀致、猶尚屬耳、而有不可忘者也、率平氏子弟、生長於風流文華之中、絃歌燕游是習、而未嘗涉戎馬之事也、夫敦盛者、修理大夫經盛季子、宗盛從弟也、爲人淵雅、有儻責之風、未有官守、而賜爵大夫、故世稱之無官大夫、當時山東勇悍之士、猶且難乎及焉、宜乎世人傳之悲哀至今、

乙亥仲冬　彝庵本居宣長稿

紀平重盛諫父淨海事

太政大臣平清盛爲僧、受持佛戒、更名淨海、世稱入道相國、長子重盛、爲內大臣兼左近衛大將、次子宗盛、中納言兼右近衛大將、其餘親屬、擅寵祿、威振海內、國家之權、在其掌握、傲然自恣、旁若無人、後白河帝、禪位之後、歸依釋門、祝髮、法皇漸惡淨海跋扈、密詔大納言藤成親及僧俊寬西光等、圖之、成親等會東山獅子谷、竊謀滅平氏、事發覺、淨海縶成親等、而心猶不釋然乎法皇也、則將有事於王家、乃召筑後守貞能語之曰、往者、保元平治之際、兵革累作、帝室不安、天下匈々、當是時吾棄親背恩、唯爲君竭忠、而不懈血戰、殆至死者數矣、遂以攘逆賊滅反虜、使君高枕、京師垂拱、君臨四方、是無窮之勳功、雖世々子孫可得忘乎、然君之不明、信佞臣讒搆、將用滅吾宗、而上帝震怒、不與不仁、事輒發、姦人

隨手獲焉、非天佑我而何邪、自今之後、復有賊臣、奉法皇旨、而不利吾者、乃吾得叛臣之名、而爲天下所擯、則噬臍何及、及其未至、而謀之、則今是時也、吾是以欲遷置法皇于鳥羽北宮若吾第內、使不得生它心、若然北面【北面者侍衞上皇宮者也鳥羽帝始置之】侍御者、必將執兵以拒之、汝宜令諸士爲之㒒、吾心已決、於汝云何、吾聞、先之制人、後之制於人、汝其早計之、乃以具申兵、於是、主馬判官盛國、廼詣重盛小松第、告以變、重盛愕然曰、嗚呼大納言【謂成親】既誅矣與、盛國曰不、殿下既已戎服、兵士雲集、將以襲法住宮也、重盛曰、此何爲也、曰、殿下招集兵士、令焉曰、欲遷置法皇于鳥羽北宮若八條西第、姑以安士庶、蓋陽以此爲名、實欲放流法皇于海西也、重盛以爲是未必然、顧今朝省謁、伺其辭色異常、無乃如其所言與、乃命車、趨駕往八條西第、至門于車入、則淨海果著甲冑、持小眉刀、嚴島神所授者、坐中門、廡下麾左右、命軍事、諸平公卿大夫百司、咸侍列左右、其餘兵卒、執戟負弩、滿階下及庭上、馬數百以鞍、馬旌數百以揭焉、將發也、重盛乃被烏帽、著直衣大絝、攝裳徐步、然而至焉、萬衆睢々屬目、敬服、淨海遙望見、嗟異哉、內府【內府內大臣別名也淨海呼重盛常云爾】之容止也、因欲誡諭焉、而自顧戎服之不稱、心耻之、卒起入內免冑、襲素絹法衣、裏甲以出、當胸甲角猶露、乃手數衆、束衿以揜之、重盛使入坐定、既而無復出言、淨海亦默然、良久曰、若夫成親輕薄兒輩、不足屑焉、至法皇與之、則國家大事、宗族危變、吾安得嘿然而已乎、則欲禁錮遷法皇于鳥羽北宮若吾第內、姑以安士庶、卿意奈何、重盛涕泣不對、淨海曰、然則奈何、重盛拭涕、徐對曰、臣一望大人之裝服也、不可不喟然而嘆焉、大人心亂乎、不爾何其不祚乎、釋煩惱解脫之法衣、而辱諸佛同相之名、躬兇暴殺殘害之兵革、而示驕慢忿怒之凶相、且居相國之尊、而親被服甲冑、例未之聞也、外犯國家典禮、內破釋門戒儀、而獨快於心與、傳不云乎、服之不衷、身之災也、大人服不稱其身、恐不終也、臣又聞今命、則平氏族滅不久矣、夫人將亡、而必動於惡、哀哉大人不識夫四恩乎、天地也、國王也、父母也、衆生也、而國王之恩尤爲厚焉、普天之下莫非王土、率土之濱莫非王臣、而今大人、以王土之臣、欲反謀之、辜莫大焉、伯夷之餓首陽也、篡奪相代之國、猶不義周武之伐、不敢食其粟也、況吾神州、在昔大日孁貴之肇基也、昭命天兒屋氏於天窟下、而附託皇孫、委任萬機之政、永世夾輔皇室、於是乎、不基大定、而君臣不易位、百王綿々、神祖聖業、赫々于無窮、則歷世誰復畔王家、

而不殄滅者、故士民無賢不肖、皆知天位之可畏、而靡有不敬畏者也、夫以大人勤勞於法皇也、誠雖大哉、法皇之遇大人、將焉爲薄邪、官祿超于累祖、而極相國尊、臣等不肖亦辱蓮槐之迹、且兄弟並左右近衞大將、自非藤氏【此藤氏卽天兒屋命之後而世輔佐】之世、非敢所望也、而今臣兄弟兼之、宗族食邑有六十州之半、貴盛富豪曰時之弗如諸、公卿鉅室莫得比焉、又何所不慊、而怨之、甚乎不德其德、而自以大功不能克己、而惟人是貴、無乃不可乎、聖德太子憲法云、人皆有心、心各有執、是彼非我、是我非彼、是非之辨、孰能決之、由此觀之、惡知其必法皇之非、而必大人之是哉、雖君不君、不可臣以不臣也、大人之擧、不義也、非禮也、夫天不福不義、神不享非禮、人其不賴天神之眷祐、而得一日生乎、臣日夜競々、猶恐悖皇天之意、失黎元之望、大人一戎衣、而失萬世之策、乘至盛、而不返禮義、勢危於累卵矣、臣竊爲大人危之、語云、再實之木其根必傷、願大人禮義以事上、恩惠以涖下、則蒙神佛冥助、脫觸逆鱗、以綏子孫黎民、永蕃屛國家也、且成親等既伏其罪、則法皇何羽翼、以圖我乎、臣敢于大人嚴顏、不顧不敏、唯願見聽許、大人猶罔有悛心、而妄動干戈於輦下、有驚天聽、則臣雖非比數、而率二三腹心士、以護衞法住宮、戮力固守、大義滅親、朝廷大事、寧忍居然而見焉、夫藜藿之羹、非國恩不得啜、況臣珍膳寧餬、曳長裾于君前、從三公後、蕩々君恩、敢不欽奉、然又度父恩高於蘇命廬頂、深於四大海水、欲報之德、昊天罔極、臣之進退、窮于此矣、又無奈何已、嗚呼天胡俾臣重盛至于此極也、亦宿業矣哉、不若死而無知矣、臣請伏誅於庭、歔欷久之、顧左右謂曰、臣所言是邪不邪、闔座感服、淨海憮然、喪左右手、頃之對曰、惡是何言也、吾安無君乎、爲恤國家而已、吾安無君乎、縱法皇夷滅我、吾敢不唯命是從、重盛曰、善哉、過則勿憚改、以能改、爲無過、乃起而出中門、命衆士曰、爾諸士、審聞焉、設殿下趣法住宮之事、重盛首足異所、而後可矣、愼哉、乃召從者、就車而還、君子曰純孝哉、小松公邪、一爭而其父不陷於不義、忠亦可移諸君、使天假年重盛、長以保右家邦、則平氏天祿、其豈復忽諸永終乎、惜哉、

乙亥仲冬下澣

舜庵本居宣長草

自一日就左右、呈拙牘、竢貴答、如大旱之望雲霓也、企々踰月、戀々經日、昨忽辱高諭、始解、尒來積蘊、文辭秀邁、字

字有金玉聲、非稱譽之所悉、已而有二三可疑者、蓋愚眼之不及乎、請嘗問之足下、書中二節文、僕皆不能解也、可疑一也、使家道之使字、僕亦不得讀矣、可疑二也、若使足下所云、聞諸物先生、此二句恐倒置、愚按曰、使物先生、聞足下所云、則於文順乎、可疑三也、一日而心三變、何以謂三變也、初執道學者、是僕之素心、而非變也、至中依莊子、始可謂變已、終流鄭聲、是再變也、而謂之三變而可乎、足下失數已甚哉、度一日而失一數、度一年則失三百六十數、可疑四也、如夫數人者、於文如指、失其志而口出涎者、然足下意謂、指夫花車媒合俳優幇間、則其所應、亦遠哉、可疑五也、且足下責僕以無特操、固其所也、僕不敢辭也、然僕也嚮者以無操、自告焉、則其又奚憂焉乎、足下妄責人之無操、而自不知其無操者、獨何也、請嘗論之、足下初則惡視道學、而泥物子輕卒之學、至稱我物先生、何其諂之甚也、中則出所物於物等語、而落恬澹虛無之歸、終則以島原婬靡爲至藥、加之散千金、以罷還、高頭巾之氣、其是物子之敎訓乎、抑莊子之眞然乎、其是然矣、豈其爾乎哉、謂足下無特操著、不亦宜乎、且足下所謂至樂、以僕觀之、未嘗爲樂、其故何乎、足下觀夫西廓之狹隘、不足方二百步、以爲縱橫數百里、觀荒蕪寂寞、以爲車轂擊人肩摩、汙泥溝瀆、誤乎醴泉、塵埃烟臭、疑乎蘭麝、嗚不意、足下迷眩、至如是之甚也、蓋過郊野、而不濡眉之禍耶、且足下悅麗妓之點刺頭痒之美也、亦愚哉、足下知其搔頭之美、而未知其所以搔頭也、悲夫、夫人有所求、而不得、不欲者忽至、則搔頭曰、南無三、搔頭之不祥如此、今也望見足下至、而搔頭亦何不怒乎、吁辛氣、亦志意不暢之語也、則皆是厭足下之態、而足下不寤、返與之千金、當是時也、足下之鼻毛、長幾千丈乎、大抵西廓之娛、僕往年悉歷試之、若夫徵會家、則遊松栢井筒二文之數樓妓、則大夫二歌君天職二三輩手携、而眺望西郊、或命駕與倶詣北野矣、歲時約束莫闕焉、舞歌之娛樂、莫不極也、昔者椀久氏之於夏華冬菊二麗、豈能比類焉、然僕意不慊焉、於是乎、意嚮東方之遊、既嘗東方之遊樂、而始西廓之不足以爲樂、而況老莊乎、況道學乎、以道學比諸東方之樂、其異也、甚於履與燒味醬矣、請嘗論東方之樂、夫妓街之爲地也、南乃沃野千里、淸水、建仁、梵刹聯甍、北望則叡嶽、比良、峻々高聳、春雪冲雲、東有華頂靑山、西有鴨川淸流、而祇園之林、翠々於其中英、春觀乎高臺櫻花、夏聞乎祇林杜鵑、安井之明月、秋吟朗、靈山之積雪、冬粲夫、南門出下河原、西門開扉、當第四街、左右靑樓、爭擔家名、暖簾翻々、飛揚春風、二

八娘子倚障子、竊候知客之過、漸近橋則二區戯場、競張矢倉、朝鼓逐風傳々遠聞、至黃昏而優戯、方終則淤觀士女騰足還、當是時也、橋上誠人肩摩、既而暮則自祇街、川端、宮川、至石垣繩手、新地榮店、諸樓門軒、揭燈、絲竹之雅奏、亮々乎盈耳、妓君來往接路、白妓中榮妓、弱結中結、若本結、從容所好、刻時而送迎焉、嗟呼面白矣哉、少年應分而取其宜、從容佚樂於其中、則謂之眞樂、又何有然、足下所諭論僕容貌者、僕甚感悟之、欲速改之、而先細其帶、短其裳、面不濯、齒不摩、遂欲以剃除頭髮、不能自剃、則仰人手、會無人不得已、而待明旦矣、因自謂帶若是既細、裳若是既短、容貌大改、是不可不見夫悅吾之妓君、而示變容也、乃以行焉、登西崖八淸樓、花車中居應接、不異常、交賀新年、至快醉運時、遂使召妓君、々々雖有它春約、而以殊好知己、故少間假隙來、使至則望見僕細帶短裳異常、而倚膝攀胸、大泣曰、君其如何也、僕曰子幸勿怪、吾變容也、有以矣、妓君曰、何以也、曰有人誡吾者云々、妓君大怒曰、何物狂生乎、誤吾良君也、僕慰宥之曰、子其勿憂、吾審語焉、彼人誡吾也、固理之當然、吾堪感心、而如此、就中最可感者、髮臭亂生、鬒美之言、豈不爾乎、妓君曰、彼狂生、染習己坊主臭、而未知芬香之美也、君玉髮之馥郁、妾每觸聞而知其美矣、比諸第四橋頭、鬒美之臭者、彼常過之、而烈臭射其鼻、欲買食而耻之也、不果、以故、夫一箇鬒臭、粘着心頭、適借而譬焉、鄙哉譬也、君之玉髮寧類之哉、桂男出沒之比也已、夫君之髮愈黑、愈美、帶愈廣愈善、獨裳則不爾、妓中嫌乎掃、故恐其長耳、僕聞之也、鼻毛三千五百丈、復愈欲頭髮之麗、而惡細帶短裳、愈益廣之長之、惟色是取夫以人生少年之至樂、莫如爲婦女所悅、而盡交情、結偕老之契也、足下深察諸、傲言漫辭、無所乎謝罪、庶希經一笑、而附丙丁則幸甚、

蕣庵宣長拜

再復

文與藤君足下

終の一くさはここに少年のすさひと見えていささかなるはんきり紙にかき給へる物にてこゝに入べくもあらねど

これはたやりすてんもさすがにてうつさせおくなり

これらの詩文の稿は京にありて物學ひいそしみ給ひしほどの物にてはたちのわかうどなどいふほどのしわざなればみづからの心にはかゝるいさゝけことの世につたはらん事はなまこゝろよからずたえて人に見すべき物とはおほさゝりけんをなき御うしろにかへりてさかなきしわざをやと物しと思さん事の空おそろしかれど何につけてもをしへのおやのかゝれたる物とたにいへはふるき反古の中にこめおくへうもあらじかし一つにとりしたゝめおくになんかゝれと後の敎子たちうつしつたへて世にひろく人に見すべき事は猶その心あるべき事にこそかくしるしおくは文政七年甲申十二月朔日

本居大平

家のむかし物語

吾家の先祖は、系圖にしるすところ、桓武天皇三十二代の孫、尾張ノ守平ノ賴盛ノ六代ノ後胤、本居縣判官平ノ建郷、其子本居兵部大輔武遠、其子同兵部大輔武秀、其子同左馬助直武、始めて伊勢ノ國司北畠ノ顯能卿に仕へ、直武の子同民部少輔武基、其子同和泉守武久、其子同左馬亮武貞、其子同左衛門尉武延、其子同左馬亮武重、其子同兵部大輔武利、其子同惣助武連なり、左馬助直武主より、此惣助武連主まで、八世相繼て、北畠殿に奉仕せらる、かくて武連主の世にあたりて、天正四年に、北畠殿滅び給へりき、さて武連主の事は、北畠殿の御內の士の姓名を集め錄せる物に、阿坂ノ城目付としるしたり、此城は、壹志ノ郡大阿坂村の山ノ上にあり、應永廿二年、國司北畠ノ滿雅卿、京都ノ將軍足利ノ義持公と不和の事出來て、京の軍勢、伊勢に攻來るによりて、要害の地也とて、築きて敵を防かれし城也、武連主のころは、此城主は大宮入道含忍齋といふ人なりしかば、目付は、それに副たる役にぞ有けん、大阿坂村の本居家の伊勢ノ內宮の御師、向井舘大夫が家に傳へていはく、むかし永正十年十一月に、多氣ノ御所、內宮にして御元服、かの家にて其事あり、其時阿坂村より本居、魚見村より中川、御供に參れるよし傳ふ、その本居といふは、すなはち大阿坂村の本居新左衛門の先祖のよしいひ傳へたり、阿坂の本居魚見の中川、ともにかの家の檀那也とぞ、永正十年は、北畠殿滅び玉ひし天正四年より、六十餘年前なれば、これは武連主の父武利主の時にぞありけん、そのころはやく阿坂住居にぞ有けらし、かくて武連主は、何れの年月日うせ給ひけむ、其ノ事はしるさず、法號は永昌院、義山道譽居士と申す、さて武連主の長男本居正右衛門延連主、次男同左兵衛武秀主にて、ともに母は大宮兵部某の息女たりき、正右衛門延連主、浪人にて、大阿坂村に住居し給ふ、そのあひだ或は礒田彥右衛門某に從ひて、伊賀ノ國の軍にむかひ、あるひは織田ノ信孝ノ朝臣四國に趣かれし時、三百石を賜はりて供し、或は津川玄蕃頭に松が嶋に仕へて、二百石を賜はりなどし玉ひしが、その後蒲生殿松坂に在城の時にいたりて、大阿坂美濃田中道

三村の内にて、百五十石をたまはり、相模ノ國小田原陣に供し給ひ、又古田兵部少輔重勝松坂の城主にて、慶長五年安濃津ノ城の加勢にむかはれたる時も、かたらひによりて供し給へり、かくて此延連主も、いづれの年月日かくれ玉ひけんしるさず、法號は源𨺉院瑞譽延長居士とあり、延連主の子本居庄右衛門延基、母は大多和氏也、法號瑞岩道長居士といふ、寛永十三年丙子十月十九日にみまかる、此ぬしも、かの慶長五年津亂の時、父主ともに、古田殿よりかたらはれて供せらる、其後も古田殿松坂におはせし間は、年々合力米を賜ひけりとぞ、延基の子本居庄右衛門某、其子本居新兵衛某、其子本居新右衛門某、其子本居林之右衛門某まで相繼て、大阿坂村に住居にて、代々かの村にて、家がらの地士たりしに、林之右衛門の代にいたり、家產いたくおとろへて、次第に貧く、つひに田畑家屋敷をも賣却して、末に至りては、いとかすかなる躰にて、天明のころ身まかりぬ、女子一人男子一人有しが、男子は或ル商家の手代奉公に、江戸へ下りゐたりしに、それも寛政のころになりて死シニ、又女子も死て、つひに家絕にき、ちかきころつてにきけば、其後他氏の人を名跡として、本居の家名をばたてたりとかや、いかゞあるらん、をりあらばたづねて、たしかなるさまきかまほしくぞおぼゆる、件の延連主延基主、二世の間の事どもは、系圖及ヒ後にかの家より、吾ガ紀の殿に奉れりし、二通の文書の案にみえたり、其一通には、澁彌文右衛門殿、庄屋勝右衛門と有て、年號月日はなし、今一通には、貞享貳年丑ノ卯月、松村小十郎樣、本居新兵衛判とある也、上件は、大阿坂村の本居の世々のやう也、さて武連主の次男、本居左兵衛武秀主、これ吾家の祖也、系圖にいはく、武秀、性得大器ニシテ、猛勇ノ力士也、氏鄉公木造兵亂ノ時、兄延連ト同ク、加勢ノ隨兵トナリ、彼地ニ働キ、有リ㆓手柄㆒、此ノ外氏族ニ加リ、所々ニ於テ戰功アリ、今度氏鄉公奥州へ御國替ニ因テ、供奉ノ事、兄延連ニ相議テ、其事奉ル㆑達シ㆓上聞㆒時、公ノ仰セニ可シ㆑然リト有リ㆓許容㆒、於テ㆓會津ニ㆒三百石ヲ宛テ行ハルベキ約ヲナシテ、即チ武秀家從者三人召連レ、奥州會津へ供奉ヲナス、翌年南部攻ノ時、ハタラキ有リ㆓手柄㆒、然レドモ多勢ニ卷レ、終ニ討死也ト聞ク、又子孫有ト、以上系圖にしるすところ也、氏鄉公は蒲生飛驒守とて、鎭守府將軍藤原秀鄉ノ朝臣の末にて、蒲生左兵衛大夫賢秀の嫡男にして、近江國の日野の城主にて、信長公の聟なりき、後に秀吉公に屬せられ、天正十二年に、伊勢國壹志郡松が嶋の城を賜はり

て移らる、もと六万石なりしを、此時に十二万石になされき、松が嶋は細頭(ホソクビ)といひし所にて、天正八年に、信雄卿はじめて城を築きて、同十年まで居住せられしところ也、さて蒲生殿、此松が嶋にうつられて、伊勢國におきて名ある武士を多くめしかゝへらる、延連主武秀主兄弟、はじめて蒲生の家につかへ玉ひしは、此ほどのことなりき、同十六年に、蒲生殿、松が嶋ノ城を、飯高ノ郡四五百(ヨイホ)ノ森に移し、松坂と號し給ふ、此所は、松が嶋より半里ばかり南の方なり、木造(コツクリ)兵亂とは、蒲生殿松が嶋ノ城におはしけるころ、木造左衛門佐具康、壹志ノ郡戸木(ヘキ)ノ城に在て、なほ織田ノ信雄卿に屬して、秀吉公に從はざりしによりて、安濃津(アノツ)の城主織田上野介信包と、蒲生殿とに仰せつけられ、南北よりこれを攻ノしめ、あまたゝび戰ヒ有し時の事なり、所々に於て戰功ありとは、同じころ、當國小倭(ヲヤマト)、又伊賀ノ國などに、信雄卿一味の者どもの起れる事有て、蒲生殿行向ひ、討チ平ゲられし事有し時などの事なるべし、氏郷公奥州へ御國替へとは、天正十八年の春、秀吉公、相模ノ國小田原の北條左京大夫平ノ氏政父子を討チに下り給ひし時、蒲生殿も御供にて、二月に松坂をたちて、かの地に下られしが、つひに小田原ノ城落て、北條ほろびぬる、その時の戰の功によりて、五十万石を賜はり、陸奥の會津へ所替へ有て、相模より直(スグ)に彼地に移られける、其後又度々の軍功により、加增有て、終に百万石にいたるといへり、或は會津にてはじめは四十二万石なりしを、うち出して八十万石となり、後に又加增ありて、百廿八万五千石となるともいへり、官位は、從三位の宰相までのぼられて、文祿四年二月七日に、京にてかくれ給ひぬ、とし四十歲なりき、法號は昌林院殿高巖忠公大禪定門と申す、さて吾家の祖武秀主は、舍兄延連主と共に、松坂より蒲生殿に從ひ行て、小田原陣をつとめ畢て、舍兄延連主は、それより假をこひて、伊勢にかへり給ひ、舍弟武秀主は、舍兄主と相議りて、會津へ御供して下り給へる也、奉レ達(ルシ)二上聞一とは、蒲生殿に請申(コヒ)されし事をいへるなるべし、此時、家從者三人召シ連レ云々とは、同じ系圖の延基主の下に、多藝(タゲ)ヨリ相殘レル十人ノ郎黨モ、三人ハ、先年左兵衛武秀ガ家從トシテ、赴二到奥州一、殘ル七人ハ、延基ニ家從シテ、阿坂ニ窂居、交(リ)二民間一農業ヲ職トスルナリ、とある、これ惣助武連主の世より殘れる、譜代の家人十人有しうち、七人は、舍兄延連主に屬し、三人をば、武秀主に屬られし也、其三人は、吾家の文書に、五兵衛長五郎仁右衛門とある者どもなるべし、これらが事、猶

下にいふべし、南部攻メとは、天正十九年辛卯の夏のころ、陸奥ノ南部大膳大夫源ノ信直の家族、九戸左近將監【或書には修理亮とあり】政實といふ者、南部家に背きて、其下知に從はず、徒黨の者どもいと多くして、南部家の手にあまりぬるによりて、秀吉公へ御加勢を請ヒ申されければ、秀吉公件ンの九ノ戸追討の軍を命ぜられ、會津ノ少將氏鄕ノ朝臣にも、此命有ければ、七月廿四日に會津をたちて、行キ向はれ、八月廿二日に、九ノ戸の脇城穴田井【或は穴太井とも姉帶とも書たり、突井とあるは誤なり】根剃【或は根曾利とも書り、根勇利とあるは誤也、】などの城を攻らる、此時味方に討死の士おほかりき、然れども件の兩城すみやかに攻落され、同廿三日に、九ノ戸の本城福岡【或は糠部ともあり】に押シ寄セ攻メられ、九月中旬に、政實つひに降參したりき、かくて武秀主の討死し給ひしは、此穴田井、根剃の戰の時にや有けん、又福岡ノ城を攻られし時にや有けむ、詳なる事知がたし、宣長此事のさだかにしらまほしくて、年ごろ南部又會津などの人の、まれ〳〵とぶらひ來れば、此事をかたりて、かの九戸攻のをりの事記せる物に、もし此討死の事は見えずや、本居といふ名だにも見えたることあらば、かならずしめし給へと、かたらひやれど、今までいさゝかも聞キ得たることなし、又會津にての蒲生家の分限帳といふ物を見しにも、それは氏鄕卿の息、第二世秀行ノ朝臣の世のほどのとおぼしかりしかば、もとより名も見えたるとなかりき、

○吾家に傳はれる文書一ひら有、左にしるすがごとし、

一、亡父樣御事ハ、多氣ノ御所ニ而、本居宗助殿と申ス御子息也、御先祖ハ刑部大夫殿ト申候由、宗助殿御死去ナサレ候已後、乱世ニテ、御兄弟浪人ナサレ候、其後御舍兄勝右衛門殿ニハ、所々御陣ニモ御立ナサレ候ヨシ、承及申候、蒲生飛驒守樣御入部之節、御召出シニて、御兄弟共、御目見コレアリ、御奉公ナサレ候て、小田原御陣ノ節ハ、御兩人共ニ、御供ナサレ候、扨小田原落城イタシ候て、飛驒樣ニハ、直ニ奥州ヘ御下リニ付、勝右衛門殿御イトマ御願ナサレ候て御歸國也、亡父樣御一人、御供ニて御座候、殿樣段々御手柄共有之テ、奥ノ會津ノ御城主ニ御成被成候て、オビタヾ敷御加增ニて、御大臣ニナラセラレ候、亡父樣ニハ、五百石御取ナサレ候所ニ、明年卯ノ七月、南部表ヘ御出陣之節、御供ナサ

レ候、カノ地戰場ニて、殊外御働アリテ、討死被成候、御年ハ卅九才ニテ候、今度ノ儀ハ、カネテ御覺にモアリシ哉ラン、御出馬之節五兵衞長五郎兩人へ被仰置候、此度我等モシ討死セバ、汝等兩人、奧ヲ介抱致シ、安産ノウヘ、モシ男子出生イタナバ、我等家名ヲ相續可令候ト、御懇ニ御賴被成候、兩人是非共御供可仕ト申候へ共、御承引ナシ、仁右衞門壹人御供ニ被召連候、ソノ節母樣御懷胎ノ折節也、御上方憐民ノ御意共御座候へ共、母樣御事、關東御馴染ウスク、心細思召候故、御供仕リ上リ申候以上、

右ハ長五郎へ段々相尋候故、物語也、亡父樣御事、幷御先組之御事、母樣深ク御カクシナサレ、御一生口外不被成候、ヨリ〳〵長五郎に尋候所ニ、長五郎申候ハ、イカナル儀ニヤ、御先祖並道觀樣御事、必々口外致間敷由、口留ナサレ候故、不申候へ共、段々御尋故、申候との事也、

寛永十七庚辰正月廿一日

件の文書は、すなはち武秀主の息男、小津七右衞門某、法號は道印君の、自筆に記しおき給へるところ也、道印君の御事は、下に委くいふべし、亡父樣とは、武秀主の御事也、多氣(タゲ)ノ御所とは、國司北畠殿、世々一志ノ郡多氣(タゲ)に住居し給へりし故に申す、今にいたるまでも、北畠殿の御事を、國人は、多氣ノ國司とも、多氣ノ御所とも申す也、多氣は、松坂より六里ばかり西南の方の山中にて、大和の長谷より赤羽根(アカバネ)越とて、伊勢へこゆる大道の經るところ也、御先祖刑部ノ大夫殿とは、系圖には此名見えず、思ふにこれは、惣助武連主の父君、兵部大輔武利主也、又その八世九世の祖も、兵部大輔とあれば、口語に、兵部を誤りて、刑部と語り傳へたるなるべし、御兄弟とは、武連主の子息、嫡男延連主と、次男武秀主とをいふ、飛驒守樣御入部とは、天正十二年松が嶋に入部也、殿樣とは、蒲生殿をいへる也、御大臣とは、大身のよしなるべし、大祿になり給へること也、亡父樣には五百石御取なされ候とは、系圖には、三百石を宛行はるべく、約せられしよししるせれども、五百石賜へるなるべし、これは現に其時につかへゐたりし者の、語り申せる言なれば、違ひは有まじき也、南部出陣の事は、上にいへるがごとし、天正十九年討死の時、卅九歳ならば、天文廿二年癸丑に生れ給へる也、

家人五兵衛長五郎兩人、會津の宅にとゞまり、仁右衛門一人御供に參るよし、系圖に、家從者三人めしつれ、會津へ供するよし記せるは、此三人なるべし、御上より御憐愍の御意共有とは、蒲生殿、武秀主の戰死の功をめでて、其跡を憐み給へる仰せごと共有しよしなるべし、母樣とは、慶歩大姉の御事也、御懐胎とは、これすなはち道印君を姙み玉へる事也、御供仕り上り候とは、蒲生殿に暇を乞申ッたまひて、會津を辭し、五兵衛長五郎二人、慶歩大姉をたすけまゐらせて、陸奥より伊勢に歸り來しよし也、此文書の趣を考ふるに、慶歩大姉の世におはせしほどは、件の事ども、深く隱して、語り給はざりしを、寛永十五年に、大姉かくれ給ひて後、道印君、せちにこの事を問玉へるによりて、長五郎が語り申せるところを、記し給へるもの也、三人の從者のうち、仁右衛門といひしは、主とゝもに討死やしけん、末をしらず、五兵衛長五郎は、ともに松坂に子孫あり、下にいふべし、

○これに系圖といひて引たるは、大阿坂村の本居の家に、つたへもたる系圖也、此系圖、いぶかしき事どもあり、まづはじめに、桓武天皇三十二代之孫、尾張守平賴盛とあるは、相國淸盛公の舍弟、池ノ大納言賴盛卿の事なるべし、其外にも、平氏の系圖の中に、賴盛といふ名は、これかれ見えたれども、尾張守なるは見えず、又それらはいづれも、時代あはざれば、必ス池殿の事なるべくおぼゆ、それにとりては、大納言とあるべきに、尾張守としもしるせるは、いさゝか疑はしきを、もしは尾張守たりし時の子孫なる故に、さはしるせるにや、池殿は平治元年十二月に、信賴義朝の反逆の時の戰の功により て、三河守より尾張守に任ぜられたりき、さて三十二代の孫とあるは、きはめてひがと也、かの賴盛卿は、桓武天皇の十一世の孫、一說には十二世の孫なれば、十二代を、三十二代と誤れるにこそあらめ、此賴盛、たとひ池殿にはあらで、いづれの人にしても、三十二代にては、前後の世つぎの數と、年の數とにかなはざる也、さて又此系圖、本居縣判官建郷主よりして、世々一世も闕ケず、みな母を記して、某氏ノ女といひ、法號をも皆つぶさにしるせる、その母の氏々、又法號のさまなど、いづれもいさゝか疑はしきとなきにあらず、又世々たゞ嫡統をのみ記して、兄弟姉妹などをしるせることなくして、委ッからず、別にくはしき本の有しを、畧きえりて、寫せるものゝごとくなり、たゞたしかなるとは、惣助武連主

の父、兵部大輔武利主よりこなた也、これよりこなたの事ごもは、吾家の文書こも、全く符合したり、こゝに又わが家にかたり傳へていはく、慶歩大姉家の系圖を傳へ持玉へるを、道印君のいまだ幼かりけるころ、或ル大名の家中の士某、參宮のいつでにこぶらび來て、大姉に對面しいひけるは、おのが家、もこ君が家こ同じ先祖也、しかるにおのが家には、中ごろ系圖をうしなひて、たゞその由緒を語りつたふるのみにして、先祖の世々、詳なるとをしるとあたはず、君が家に委き系圖あるよし、聞およべり、願はくはその系圖を、しばらくゆるして見せ給はゞ、すみやかに寫し取べしこ乞へるに、大姉、今當家、くだりて商人こなりぬれば、系圖は何にかせん、用なしこおぼして、件ノの士にゆづりあたへ玉ひぬこ、語リ傳へたり、いかゞ有けむ、其系圖は、くはしきにて有しにや、又その士人は、いづれの家中にて、何こいひし人にか有けん、此事も、いこたしかならざるとも、もしまとならば、その系圖も、かの大阿坂のを、武秀主の、別に寫して持玉へりし物歟、又は別にくはしきにて有し歟、もしくはしきがあらば、大阿坂にも、かならずその原本のあるべきものなるに、なきはいかゞ、原本を本家に傳へずして、次男の方に傳へ玉ふべきにはあらず、又もしくはこれは、慶歩大姉の父の家の系圖にてはあらざりし歟、こにかくにさだかならざるここ也かし、

○本居左兵衛平ノ武秀主、法號は眞理院常譽道觀居士こ申す、本居惣助武連主の次男、母君は大宮兵部某の息女也、天文廿二年癸丑に誕生、會津ノ宰相蒲生氏鄕卿につかへ玉ひて、祿は五百石也、天正十九年辛卯某月某日、陸奥ノ南部の九戸（クノヘ）の戰場にして討死ス、享年三十九歳なりき、そも〳〵此主戰死し給ひし月日の事、慶歩大姉、すべて夫君の御事先祖の御事を、すべて子孫、その忌日をしらで有しに、曾孫唱阿君の世にいたりて、唱阿君のある夜の夢に、人來て、我は汝が先祖の道觀也、このたまふこ見給へる、これ十月十四日の夜の事なりし故に、この夢のをりを由こして、それより十月十五日を忌日こ定められて、今に祭り來れり、

武秀こ申す名の事、そのかみ秀吉公の御世なり、又故人ながらも、氏鄕卿の父の名も、賢秀なりしに、秀の字はいか

が有けん、そのころは、此事なべて憚らざりしにこそ、氏郷卿の嫡嗣秀行ノ朝臣の名は、後の事なれば、論はなし、道觀君の室は、法號壽運院行譽慶步大姉と申す、いかなる人の息女なりけん、姓もしられず、會津へは、道觀君の下り給ひて後に、迎へ玉ひしなるべし、かくて天正十九年、夫君戰死のころ、懷妊にて、家人五兵衞長五郎二人をめしつれて、伊勢へかへり給ひし事、上にしるせるがごとし、さて當國にかへり給ひて、壹志ノ郡小津村の、油屋源右衞門といふ民の家に、いたり着給ふ、此村某人、いかなる因緣ありて、尋ね來給へるにかしらず、思ふに延連主、中道村の內を知行せられしよし、文書に見えたる、中道村と小津村と、近くつゞきたれば、件の知行所のゆかりなどにてもや有けん、さてつひにその小津村にして、道印君を生まゐらせ給へりき、一說には、陸奧よりかへりて、當國にいたり、小津村を過玉ふ時、ゆきつかれて、誰ともしらぬ民の家に立入りて、しばし休み給ひけるに、家あるじ、その賤き人とも見えず、殊に懷妊なるさまを見て、いとほしく思ひて、とゞめまゐらせ、つひに其家にて、產をもせさせまゐらせたり、其家あるじは、油屋源右衞門也ともいへり、小津村は、參宮の大道にて、三渡りのすこし北ノ方なり、大姉、寬永十五年戊寅八月八日に、松坂魚町なりし道印君の宅にしてかくれ給ふ、【天正十九年より、四十八年にあたれり】同里の樹敬寺に葬ぬ、

抑慶步大姉の、夫君の御事、幷に先祖の御事を、ふかく秘して、道印君にだにも、つひに語り給はでやみぬるは、いかなる故にか有けむ、しりがたきを、宣長つら〲思ふに、大阿坂村の本居家は、道觀君の出玉へる本の家なるに、いかなる故にか、世々を經て、近きほどまで、吾家と絕て通ひなく、たがひに相しらずして過きぬるは、いと不審也、これとかれとを合せて思へば、はじめ慶步大姉、會津よりかへり給へるヿを、大阿坂へは深く隱して、しらせまゐらせず、小津村に忍びておはせしにや有けん、然るゆゑは、道觀君の舍兄延連主、その時なほ存生にて、もとより雄々しく勇氣なる人なりければ、かの會津にて、蒲生殿御憐愍の仰せども有しヿなれば、男子出生もあらば、行さきいと賴もしきに、心よわく故鄉をしたひて、いふかひなく暇を申し、かの國を辭して、かへり給へる事、武士の本意にあらずと、此主のいきどほり給はんヿを、恥恐れてにこそ有けめ、その時延連主も、かのかへり來玉へる事は、聞ながらも、い

ふかひなきことをいかりて、あなたよりも、絕てとぶらひ玉ふこともなかりしにこそ、かの系圖に、武秀主の事記せる終りの文に、討死也と聞ク、又子孫ありとゝ、よそげにしるして、たしかならざるさまなるも、かゝる故にこそ有けめ、もしさもあらずば、慶步大姉、當國にかへり給ひては、まづ大阿坂村へこそ、いたりつき玉ふべけれ、かしこをおきながら、他所にいたりとゞまり給ふべきにあらず、又世々絕てかの家と、通ひなかるべきにもあらず、これらを思へば、夫君の御事先祖の御事を、かたく人にかたり給はざりしは、かの延連主のおぼさんところを、はゞおそれて、深く忍び玉へりし故にぞ有けん、但しこれらは、宣長が今按に思ひはかれるところ也、なほこまかなることは、いかなりけん、しるべきにあらずかし、さて宣長が世になりしまで、大阿坂とは、すべて通ひなく、たがひにしらで有しに、のりながはやくより、かの村に本居氏あることを聞及びて有しかば、いにし明和八年辛卯の三月、はじめて彼家を訪ひて、林之右衞門に對面し、かの家の先祖の來由など、こまかに問ヒ聞クに、此人の語れるところ、わが家のかの文書と、全く合ヒたり、此人又いひけるは、松坂の小津黨の中に、おのが家の祖延連の弟、武秀の子孫あるよし、家にかたりつたへたれども、今小津氏あまたある中のいづれならむ、しらで有しに、ちかきころになりて、そこのくすしになりて、小津なりしを改めて本居となのり玉ふに、はじめてそれにこそとしりぬとぞかたりける、上に引る系圖も、かの家の文書といへるも、此時に乞ヒ借りて、寫しとれるにぞ有ける、安永三年の春、又とぶらひしをりは、かの家の世々の墓にも詣テたりき、その墓所の事なども、前にくはしく記しおきたり、

○小津七右衞門某君、法號は本譽道印居士と申す、道觀君の息男、母君は慶步大姉にて、壹志郡小津村の油屋源右衞門某の家にて生れ玉へり、これ天正十九年廿年の間なるべし、かくて油屋源右衞門、其後小津村より、松坂に移りて住居し、小津を以て家の名とす、これ本町小津淸兵衞家の祖にして、これより小津氏となのる者、松坂にあまた有て、小津一黨といふ、此源右衞門の家ぞ、その本なりける、源右衞門、法號來譽道元といふ、男子二人女子三人有リ、長男は、法號心譽淨安、早世す、長女は、道印君の室、榮感大姉也、次の女は、法號根譽妙善、小津次郎左衞門某、法號天桂淨心の妻也、次

男は、小津清兵衛末友、法號西譽道運、父の後を嗣て、家を起せり、末の女は、法號冠譽壽寶、小津喜兵衛某、法號光譽道樹の妻也、上件二男三女共に、母は某氏、法號芳譽妙春といふ、さて道印君も、源右衛門某に從ひて、共に小津村より松坂にうつり給ひ、成長有て、源右衛門の長女を娶たまひて、共に小津を家の名とし、七右衛門と稱して、魚町の四町目に住居し給ひて、慶安元年戊子の二月四日にかくれ給ふ、とし五十七八なるべし、樹敬寺に葬、

件の道印君の魚町四町目の宅は、今の村田五郎兵衛（淸造云村田五郎兵衛宅といふは、今の麴屋太郎兵衛の家のあたりなるべし、次なる小西は今もとの屋敷跡に住し魚屋なり、新規町に入る角より二軒目の家なり）といふ者の家の地なりき、又かのみちのくより、慶步大姉にしたがひまゐらせて來りし、五兵衛長五郎といへる二人の家人も、同じ町のうち、近きあたりに居住して、ともに子孫あり、その一人が末は、小西小兵衛といひて、今は忠兵衛といふ、それが家は、道印君の宅のむかひ、少し上の方にて、今にいたるまでかはらず、今一人が末は、高瀨五郎兵衛といひて、それが家は同じ町の三町目の下の角、今の伊勢屋善九郎といふ者の宅の地の半（ナカラ）これなりしを、賣却して、同二町目にうつり住りしが、又其家をもうりて、そのころの五郎兵衛も死て、男子はなかりしが、跡たえたりやいかゞしらず、件の小西高瀨、いづれが五兵衛いづれが長五郎が末ならん、その間はしられず、

道印君の室は、法號昌譽榮感大姉と申す、小津源右衛門某、法號來譽道元君の長女、母とじは某氏、法號芳譽妙春大姉、上に記せるがごとし道印君に嫁して、四男二女を生給へり、寛永十二年乙亥六月二日に、夫君並に姑（シウトメ）君【慶步大姉】にさきだちてかくれ給ひぬ、樹敬寺に葬、

道印君、室榮感大姉かくれ給ひて後に妾あり、姓は某氏、法號長譽妙延法尼といふ、老後、魚町一町目今の吾宅の地に住居せらる、道休君、母のごとくに孝養し給へりとぞ、延寶四年丙辰十二月三日にみまかられぬ、

道印君子息は、男子四人女子二人おはしき、皆榮感大姉の腹也、長女は、法號寶室妙林大姉、紀伊ノ國長嶋ノ住人、小津八郎兵衛某の妻也、【此長嶋の小津氏は、慶步大姉の親族のよし也、詳なることはしられず、】慶安元年正月十七日にうせ給

へり、長男は、小津次郎左衞門某、法號心譽宗運君、江戸に店を創置て、初メは富榮えて、本町に居住し、道印君の後を嗣玉へるが、ほどなく産おとろへて、貧くなり給ひき、延寶八年十一月廿六日にうせ玉へり、男子四人女子二人有しが、跡は絶たり、次男は、吾家の祖道休君なり、三男は、小津喜兵衞某、法號德譽道仁君、小津喜兵衞某法號光譽道樹の養子となりて、【道樹君の室は、榮感大姉の妹なりければ、姨とじの子になり玉へるなり、】かの家をつぎ、江戸に店を創置て、家をおこし給ひ、職人町に居住し給ひて、天和四年二月十三日にうせ給へり、今も子孫有リ、小津彦兵衞といふ、四男は、小津六兵衞某、法號善譽宗祐君、これも江戸に店を創メ置キて一家を起し、魚町に居住し給ひて、元祿六年二月七日にうせ玉ふ、子孫にいたりて、新町に移り住て、今も後有リ、小津仲藏といふ、末の女は、法號松風秀岩大姉、日野町ノ住人内藤庄兵衞某の妻也、延寶三年正月十四日にうせ給ふ、此内藤氏、子ありしかども、後絶えたり、

○小津三郎右衞門某君、法號は中譽道休大德と申す、道印君の次男、母とじは榮感大姉也、慶長十七年壬子に生れ玉ふ、成長ありて、外舅小津満兵衞法號道運君の江戸の店に下り給ひ、【此店は、大傳馬町二丁目に在、】後大に富て、かの地大傳馬町一町目に、木綿店三所を創置玉ふ、

件の三ツの店のうち、二ツは木綿問屋、一ツは賣場といふものなりき、そはまづかの一町、多くは木綿店にて、みな木綿問屋と稱するを、別に又賣場と稱するもの二三家有、それは諸國よりおくれる木綿を、口錢藏敷などいふを取て、町内の店店へ賣て、外へはうらざるもの也、かくて此道休君の聞き給へる賣場、唱阿君に至りて、停て今一所の木綿店に併せられ、本店とてありしが、元文五年に亡びたり、又今一所の店は、隱居の跡小津孫右衞門家に屬玉ひてありしが、明和元年にいたりてほろびにき、

さて松坂にかへり、はじめは西町二町目に住居し給ひ、程なく承應三年に、本町に移リ住玉へり、【これより道樹君まで三代此宅に住居也、】吾家の中興の祖たり、すべて松坂は富める商多くして、いづれも江戸店といふ物をもてるが、その中にも、すぐれたる中にかぞへられ玉へり、延寶のころ、職人町に隱居し給ふ、小津孫右衞門家其跡也、元祿元年戊辰十二

月廿七日に、七十七歳にしてかくれ玉ふ、矢川野に火葬し、遺骨を樹敬寺にをさめぬ、これ宣長が曾祖父也、そも〳〵此御父道印君は、貧くて世をへ玉ひしこそ、又舍兄の宗運君も、父の跡をつぎて、一たびは富たまひしかども、程なく大におとろへて、かすかになり給へりき、然るに次男の道休君、かくいみしく富榮え給へりければ、嫡家のごとくになりて、祖先の祀をも、此家にて、物する也、道休君、在世のほどに、樹敬寺に、十日十夜の祠堂といふ事を寄入しおき給ひて、今にいたるまで年ごとに、九月十七日の夜より、廿六日の夜まで、十夜法事といふ事有也、

道休君の室は、名はおふく、法號は休譽樹寳法尼と申す、日野町住人松谷藤左衛門某、法號月久宗昌君の息女、母とじは岡山氏某の女也、寛永十一年甲戌に生れ玉ひ、寳永元年甲申正月七日に、七十一歳にしてかくれ給ふ、矢川野に火葬し、遺骨を樹敬寺にをさめぬ、

道休君子息おはせず、小津喜兵衛某、法號道仁君の次男、童名某を養子とし給ふ、甥にておはせり、然るに寛文十年庚戌六月廿日に、十歳ばかりにて早世し給ふ、法號覺岸了源信士と申す、かくて又此了源信士の兄をとりて子とし、家をつがしめ玉ふ、これ唱阿君也、又小津清兵衛末友法號道運君の長男、小津源右衛門繁長 法號正譽道方君の四男を養子として、職人町の隱居の跡をつがしめ、江戸の大傳馬町の木綿店一ッを屬玉ふ、これ小津孫右衛門某君にて、法號惠譽道智大德と申す、本生の母とじは、法號精譽周安大姉、安濃津の住人、某氏の女なり、寛文六年丙午に生れ玉ひて、童名は長五郎と申しき、寳永四年丁亥十一月十一日に、四十二歳にしてかくれ給ふ、或は四十五歳ともいふ也、室は、樹寳大姉の姪にて、名はお國、法號は雲譽壽光大姉と申す、西町住人山村宗次右衛門重秋、法號至德院榮譽久昌君の息女、母は鈴木氏某の女也、【久昌君は、本生松谷氏にて、樹寳大姉の同母兄なり、】正德二年壬辰四月廿四日に、四十三歳にてかくれ給ふ、道智君の子息、此はらに男子四人女子二人おはしき、長男は、小津孫右衛門某君、法號は洞譽元閑居士と申す、父の後を嗣玉ひ、享保三年戊戌七月十日に、廿九歳にしてうせ給ふ、室は、唱阿君の息女、榮珠大姉也、男子一人を生給ふ、これ道喜君也、長女は、名はお千代、法號は明譽利秀善尼、新町小津次郎左衛門重信、法名久譽長念の妻にて、寳曆十二年壬午七月廿九

日に、七十一歳にてうせ給ふ、次男は、わが先考道樹君也、三男は、小津源四郎躬充法號は松譽貞巖道有大德と申す、兄元閑君の後を嗣玉ひ、享保十一年、幟人町の宅より【これかの道休君の隱居なり】本町に移り住玉ひ、明和五戊子四月十七日に、七十二歳にてうせ玉ふ、室は唱阿君の息女、榮林大姉にて、男子五人女子一人を生給ふ、四男は、小津宗七郎某、法號順永院念譽隨法信士と申す、後は江戸に居住し給ひ、本居永喜と申す、安永三年甲午九月十八日に、七十六歳にてうせ給ふ、末の女は、名はおるい、後にはおしげ、法號は念譽壽專法尼、幟人町小津喜兵衞某、法名場譽道閑の妻なりしを、道閑みまかられて後、其弟同喜兵衞某、法號安譽道淸の妻となり給へり、道閑道淸は、道仁君【上に出】の三男、【唱阿君の弟なり】小津喜六郎某、法號繁譽道榮の子息也、壽專大姉、安永四年乙未十月廿日に、七十四歳にてうせ給ひぬ、以上道智君の子息たちにて、宣長が本生のをぢをばたち也、道有君の息、榮林大姉の腹に、男子五人女子一人有、長男は、龜太郎といふ、享保十一年六月四日に、三歳にて早世す、夏月淸光童子と號す、次男は、童名源次郎、後に小津孫右衞門、又後に孫左衞門英昌といひて、父の後をつぐ、三男は彌助、小津治右衞門某、法名門譽轉入の養子と定められしに、【轉入は、唱阿君の聟、榮昌大姉の夫にて、此彌助は、榮昌大姉の甥なり】元文三年戊午九月十九日に早世す、七歳なりき、秋月了圓童子と號す、四男は半藏、元文三年九月十一日、五歳にて、兄彌助と同月に早世す、幻心輝光童子と號す、五男は、童名溪之亟、後に九郎兵衞、又義右衞門といふ、後安濃ノ津の住人岡氏某の養子となり、岡藤右衞門といふ、後岡氏を離緣して、小津義兵衞といふ、安永七年戊戌九月廿一日、壹志郡須川村にて死ぬ、四十一歳なりき、信譽淨仰居士と號す、末の女は、名はおあさ、壹志郡須川村の地士池田七郎兵衞某か妻なり、以上道有君の子息也、其中に孫左衞門英昌父の跡を嗣しが、家の產おとろへて、明和元年に、江戸の店もほろび、同八年に、本町の宅をも賣却して、【此宅は、隣家の小津與次大夫にうりて、今與次大夫が宅地の內、南の方其跡也、】浪々の身となり、後に桑名に住居し、安永三年甲午十一月廿七日に死ぬ、四十八歳也、法名巖譽壽仙居士といふ、はじめ須賀九郎兵衞某の女を娶しが、離別せり、後に妾有て、桑名にて男子一人を生りしが、孫左衞門死て後、其妾、阿濃ノ津の某が妻となり、其男子もその者の子となれりとぞ、かくて

孫左衛門死て、道休君の隱居家つひに跡絕たり、
○道智君の四男本居永喜君、江戸にて、某氏の女を娶り、男子二人を生給へり、長男は本居繁八郎、後に大助といふ、江戸にて、手習の指南などを業として有し、をりくはこゝにも書通はせしを、近きころは絕ぬ、いかゞなりぬらむ、次男は本居彌八郎、後に兵左衛門といひて、御旗本本多備後守殿につかへて有しが、これもいかゞなりぬらん、絕てきかず、
○小津三四右衛門定治君、はじめは三郎右衛門、法號は、通西法誠善喜光譽唱阿道清大德と申す、道休君の嗣子にして、樹寶大姉を母とす、實は道休君の甥にて、本生は道仁君の長子なりし事、上にしるせるが如し、本生の母は、小津清兵衛法號道運君の女、法號頓譽慶敎大姉と申す、萬治元年戊戌七月廿八日に生れ玉ふ、延寶五年に、道休君の後をつぎ給ひ、いよいよ富榮えて、又江戸の堀留町に、烟草店と兩替店とを創ノ置キ給ふ、【此店二ツともに、寬保二年に至てこれを停ム】寶永三年四十九歲にして、剃髮し給ひ、唱阿と申せり、道休君も此唱阿君も、佛の道を深く信じ給ひ、唱阿君は殊にふかく信じ玉ひて、夢に生身の佛菩薩を見玉へる事なども有て、その像を圖畫せしめおかれたる、今も家にあり、先祖諸靈のために、一樹敬寺に祠堂といふ物を寄入し給ひ、今におのくその忌日くの逮夜に、法事を行ふ也、【小津清兵衛家も當家も、はじめより淨土宗にて、樹敬寺菩提所也、宿坊は法樹院といふ】享保のはじめ職人町に隱居し給ふ、【此宅は、樹寶大姉の晚年に、道休君の同町の隱居家より、又さらに隱居し給へる宅にて、清光寺の門前の少し南ノ方に有し也、道休君の隱居家は、同町本覺寺の前あたりなりき、】同十一年に、其家を魚町一丁目の地に移し建て住玉へり、同十四年己酉六月十一日に、七十二歲にしてかくれ給へり、矢川野に火葬し、遺骨を樹敬寺の墓地にをさめぬ、これ宣長が祖父也、
唱阿君のはじめの室は、名はおまん、法號は照譽妙光大姉と申す、新町濱田八郎兵衛某、法號覺譽淨貞君の息女、母とじは、長嶋氏某の女なり、天和元年辛酉九月四日にかくれ給ふ、樹敬寺に葬、
同君の後の室は、名はおかん、法號は宜譽松岳榮保大姉と申す、西町荒木太左衛門某、法號單譽信入君の息女、母とじは、小津清兵衛法號道運君の息女、法號證譽榮智大姉也、【然れば唱阿君とは、母かたのいとこなりき】延寶二年に生れたまひ、

享保十八年癸丑五月十五日に、六十歳にしてかくれ給ふ、樹敬寺に葬、
唱阿君の子息は、はじめ妙光大姉の腹に、女子一人おはしき、天和元年に生れ玉ひて、名はおつる、法號は光譽樹清大姉と申す、新町小津次郎左衛門武昭、法號良德元功の室となり、男子【名は大次郎、法名月光桂松童子といふ、七歳にして早世す】を生て、産後、元祿十五年壬午正月廿日に、廿二歳にてうせ玉ふ、來迎寺に葬、次に榮保大姉の腹に、男子四人女子四人おはしける、長女は、榮珠大姉也、元祿六年に生れ玉ひて、はじめ隱居家元閑君の室となり、道喜君を生給ひ、元閑君うせ給ひて後、當家にかへり、道樹君の室となり給へり、長男は、道意君也、次男は、法號幻夢童子、元祿十一年戊寅十月十八日に、死胎にて誕生、三男は、名は辰五郎、法號は然廓童子、元祿十三年庚辰三月朔日に生れ、同月十四日にうせ玉ふ、次女名はおよし、法號は光玉智照童女、元祿十四年に生れ、寶永元年甲申九月四日に、四歳にて早生し給ふ、三女は、名はおりん、法號は繁譽杳室榮昌法尼、元祿十六年生れ玉ふ、小津次右衛門某、法名門譽轉入の室となり給へり、【轉入は、唱阿君の甥にて、手代也、父は小津次右衛門某、法名淨譽道淸といひ、母は道仁君の息女にて、法號嘉譽祐天法尼といふ、唱阿君の姉也、轉入、魚町一丁目に住居、跡はたえたり、】明和六年己丑正月三日に、六十七歳にてうせ給へり、四女は、名はおきん、法號は寶譽貞室榮林法尼、寶永三年に生れ玉ひて、隱居家道有君の室也、天明六年丙午十一月十日に、聟須川村の池田七郎兵衛某が宅にして、八十一歳にてうせ給ひぬ、四男は、名は倉之助、法號は歡室道喜童子、寶永四年に生れ玉ひ、同七年庚寅十月廿六日に、四歳にて早世し給ふ、以上四男五女、唱阿君の子息たち也、宣長がをぢをばたち也、又唱阿君の異腹(コトハラ)の弟に、小津八郎次某君と申すおはしき、法號心譽道林大德と申す、若(ワカ)かりしほどは、當家の江戸大傳馬町の賣場といひし店につかへ玉ひしが、後に唱阿君、當家の別家として、紺屋町に宅をかまへしめ、荒木三右衛門某の女を娶らしめて、一家を建玉ふ、かくて唱阿君は、一度も江戸に下り給ふ事なく、たゞ此八郎次君を代りとして、しばしば下らしめ、かの地の店の事をば、こと〴〵く此ぬしにゆだねて、とりはからはしめ給ひき、延享元年甲子八月十五日に、七十五歳にてうせ玉ふ、室荒木氏は、名はおさよ、法號は光譽清壽大姉といふ、此腹に子息八人有き、長男は八郎兵衛某、

法名法譽道智、次男源右衛門、三男次郎三郎、四男新八郎、五男八五郎、女子おみん、六男文藏、七男金藏也、此中次郎三郎新八郎八五郎并におみんは、早くみまかる、長男八郎兵衛、元文のころ、本家の大傳馬町の店の番頭とて、手代どもの長にて、店を預りて有しが、件の店、享保の初めのころよりして、やゝおとろへたりしに、此八郎兵衛いたくおごりて、しば／＼吉原に通ひ、多くの金銀をなくなし、店を守るといとみだりなりしかば、つひに店たもちがたくして、ほろびぬ、然れども八郎兵衛にはなほ、金三百兩をあたへらる、これ父八郎次君の勤功によりて、かの店の資產、六分半は本家の分、三分半は八郎次の分と、唱阿君の定めおき給へりしによりて也、此時道樹君は既にかくれ給ひしほどなりければ、道喜君のはからひにてぞ有ける、さて八郎兵衛父の後をつぎ、紺屋町の宅に住けるが、いく程なく死けるに、次男源右衛門は無賴にて、母とじに勘當せられて、江戸へゆく、其弟三人は、はやくうせぬれば、六男文藏跡をつぎしかども、程なく家をもうり、借宅してゐたりしが、後に江戸へ行て、其後はたえておとづれもせずなりぬ、いかゞなりぬらむ、末男金藏は、宣長と同じ年の生れにて有しが、これもいとわかゝりし程より、江戸にて商ひして居たりしを、おとづれもせず、後はいかゞなりぬらんしらず、源右衛門は、年を經てのぼり來て、吾家へもとぶらはまほしきよし請ひけるによりて、ゆるして逢たりき、そのほどは、產もやゝゆたかなるよし語りし、江戸にかへりてほどへて、死けるよしつてに聞り、

○小津三郎右衛門定該(サダカネ)君、法號は心譽顯巖道意居士と申す、唱阿君の長男、母とじは榮保大姉也、元祿九年丙子に生れ玉ふ、童名は三郎吉、唱阿君の嫡嗣として、正德四年に、江戸に下り給ひ、同五年乙未正月七日に、彼地大傳馬町の店にして、廿歲にてかくれ給ふ、かしこの深川の本誓寺に葬、【此寺江戸の店の菩提所也、宿坊は稱名院】

○小津三四右衛門定利君、法號は場譽直觀道樹大德と申す、唱阿君の嗣子にて、榮保大姉を母とす、本生は、隱居家道智君の次男にして、母とじは壽光大姉也、元祿八年乙亥十一月朔己未の日に生れ給ふ、童名は大助、後に改めて彌四郎と申す、唱阿君はじめ道意君をもて、嗣とし給ひけるに、道意君正德五年にうせ給ひて、嗣なかりしかば、道樹君を子として、後をつがしむ、さて榮珠大姉は、はじめ隱居家元閑君の室なりしに、享保三年元閑君うせ給ひしによりて、本家へ歸へし

て、道樹君にめはせ玉ひ、其生ミ給へる元閑君の息、道喜君をも、本家へとりて、道樹君の宗領と定め給ふ、これ唱阿君の外孫なるが故也、かくて道樹君、享保のはじめのころより、本家を嗣玉ひけり、同十三年、榮珠大姉かくれ給へるにより て、同年先妣惠勝大姉を娶給へり、元文五年庚申の三月に、江戸に下り玉ひ、其年の閏七月病して、廿三日の夜の戌の時ばかりに、かしこの大傳馬町一町目の店にして、四十六歳にてかくれ給ひぬ、忌日をば廿四日とす、火葬して、遺骨をかの地の本誓寺と、こゝの樹敬寺とに分ちをさめぬ、

道樹君のはじめの室は、唱阿君の榮保大姉の腹の長女にて、名はおきよ、法號は繁譽昌玉榮珠大姉と申す、享保十三年戊申五月廿八日に、三十六歳にてかくれ給ふ、矢川野に火葬し、遺骨を樹敬寺にをさめぬ、

同君の後の室は、名はおかつ、法號は清譽光雲惠勝法尼と申す、新町村田孫兵衛豐商君、法號剛蓮社堅譽誠阿元固大德の息女、母とじは荒木氏、榮保大姉の同母妹にて、名はおはつ、法號は光譽忍室元壽法尼と申す、然れば惠勝大姉は、榮保大姉の姪にぞおはしける、此村田氏、先祖は某、法號本譽淨方君、近江國の人にて、佐々木家の一族のよし也、【魚町村田彦右衛門、中町藤田德右衛門、櫻屋町村田伊兵衛などの家、皆此末なり】其子村田孫兵衛綱次、法號法譽清心君、其子村田與次兵衛某、法號春譽道清君、其子村田孫兵衛重次、法號芳松院覺譽理天君、其子元固君也、元固君、享保十六年辛亥二月廿一日に、七十三歳にてかくれ給ふ、室元壽大姉は、寶暦十一年辛巳八月廿二日に、八十五歳にてかくれ玉ふ、これ宣長が外祖父母也、元固君の子息、元壽大姉の腹に、男子二人女子五人おはせり、長女は、名はおはつ、【母とじの名なり】法號は松譽貞薫信女、山田中嶋町、林三郎右衛門某の室也、寶暦十二年壬午正月廿九日に、六十七歳にてうせ玉ふ、次女は、名はおちか、法號香譽法薫智曉信女、山田浦口町、古森金右衛門某の室也、明和六年己丑九月廿七日に、七十一歳にてうせ給ふ、長男は、幼なかりし時より僧になし玉へり、詳蓮社審譽上人酉阿直入察然和尚と申す、江戸の增上寺の走譽大僧正といふが弟子にて、文昭院殿の御靈廟の別當、眞乘院の一世の主たりき、明和元年甲申二月廿八日に、六十四歳にてうせ玉ふ、三女は、名はおふさ、法號寶譽三室貞雲法尼、職人町中條源兵衛某の室也、明和七年庚寅六月六日に、六十八歳

にてうせ給ふ、四女は、惠勝大姉也、次男は、村田淸兵衛某、法號覺譽光阿宗善大德と申す、同族村田伊兵衛が別家、村田權右衛門某、法名淨林の養子となり、彼家をつぎ給ふ、寛政二年庚戌十一月廿八日に、八十三歳にてうせ玉ふ、末の女は、名はおとは、法號は稱譽貞松壽讃法尼、これ家に在てつぎ玉ふ、天明元年辛丑四月廿日に、七十一歳にてうせ給ふ、以上村田氏元固君の子息七人、宣長が母かたのをぢをばたちなるが故に、くはしく記せり、さて惠勝大姉は、寶永二年己酉四月十四日に生れ玉ひ、享保十三年に道樹君の室となり給ひ、元文五年に、夫君におくれ給ふ、時に卅六歳也、寶曆十二年閏四月に、信濃國の善光寺にまうで給ひ、かの寺にて剃髮して、尼となり玉ふ、明和五年戊子正月朔日午の時に、六十四歳にてかくれ給ひぬ、同三日の酉の時に樹敬寺に葬、

道樹君の子息は、道喜君を嫡子とせらる、次に惠勝大姉の腹に、男子二人女子二人有り、其長男は、宣長、次に女子、名はおはん、享保十七年壬子十二月七日生る、寶曆十一年尼となりて、知遊と名く、宣長が家にあり、次男は村田與三兵衛親次、法名は敎譽順我孝賢大德といふ、享保廿年乙卯二月廿六日に生る、童名大三郎、後に新五郎と改む、元服して勝宥（ヨシナダ）と名く、寛延三年、外祖父村田孫兵衛、法號元固君の嗣孫となり、元固君の末女、壽讃大姉を母として、かの家をつぎ、名を與三兵衛親次と改む、寛政九年丁巳十月廿六日酉時に身まかりぬ、とし六十三なりき、樹敬寺に葬、親次かの家の手代村田七左衛門法名元淸が女を娶て、男子一人女子四人を生り、長女は名はおとひ、下餌路村地主喜兵衛某が妻となる、次に男子は、生れて程なく死ぬ、池觀寶樹童子（寶樹童子は末の子にておいきが次なりき、こゝに第二に擧たるはたがへり）と號す、次の女子、尼となり智順といふ、次おさご、次おいきといふ、【以上親次が子ども也、】末の女、名はおやつ、後におしゆん、元文五年庚申二月七日に生る、寶曆六年に、大口村地士宮崎淸九郎某、法名貫德院應譽道運が妻となる、淸九郎後に伊兵衛伊平太伊三右衛門など改め、寛政八年辰六月八日に死ぬ、おしゆん尼となり、壽方といふ、子ども多く有し中に、男子三人有し、みな早く死き、女子も多く死て、今たゞ二人存在す、一人は名はおやす、豐原村池田良右衛門某が妻となる、一人は、名はおやこ、これ末女也、これに聟をとりて、盛（セイ）九郎といひ、家をつぐ、以上四人、道樹君の子息也、

○小津三四右衛門定治君、法號欣譽良説道喜居士と申す、【定治と申すは唱阿君の名をゆづり給へる也、普通の事にはあらず】道樹君の嗣子也、本生は、隱居家元閑君の息にして、母とじは榮珠大姉也、正德二年壬辰十月十三日に生れ玉ふ、童名宗五郎、同五年道意君うせ給ひて、唱阿君嗣なし、然るところに、享保三年元閑君うせ給へるによりて、その室榮珠大姉【唱阿君の息女也】を本家へとりかへし、道樹君を本家の嗣とし、榮珠大姉とめあはせ、道喜君をとりて、道樹君の嫡子と定め給ふ、外孫なる故也、さて榮珠大姉かくれ玉ひて、後には惠勝大姉を母とせらる、かくて道樹君、實子宣長を生ミ給へるによりて、道喜君、本家の嗣たることを辭して、江戸に下りて、自力を以て、別に一家を創めんことを、しば〳〵請玉へども、唱阿君の孫にて、定めおかれし事を、かたく守りて、道樹君さらにゆるし給はざるを、猶しひて請ひて、つひに元文二三年のころ、江戸に下り、商をはじめて、本家の力をからず、みづからはげみつとめて、いく程もなく富をいたし給へりき、然れども、道樹君、なほ本家をば必此ぬしにゆづらんとおぼす心にておはしければ、同五年にかくれ玉ふ時の遺言にも、かならず、宗五郎立かへりて本家をつぐべきよし、のたまひおきしかば、やむ事をえず、寛保元年の秋、江戸より來りて、本家をうけとり、三四右衛門と稱し給ひき、然れども松坂にはとゞまらず、江戸へかへり玉ひ、其後もかしこにては、なほ小津宗五郎と稱して、神田の紺屋町の宅に住玉へり、【此宅地みづから買得玉へるところなり】それよりさきかしこにて某氏の女【名はおはや】を娶玉へるが、離別して、又某氏の女を娶て、女子一人を生給へり、しかれども、その室をも又離別し兒をばとゞめて、養育し給へり、かくて寶暦元年辛未二月廿八日午ノ時すぐるほどに、かの紺屋町の宅にして、四十歳にてかくれ給ひぬ、同廿九日に、本誓寺に葬、同年三月、宣長、手代佐七といふ者をめしぐして、江戸にくだり、件の紺屋町の宅にいたり、七月までとゞまりて、跡の事どもをとりはからひ、其宅並に資財等を、件の女子に屬ヶて、離別せし母のもとへわたしぬ、然るに此女子も、同年九月十五日に、母の許にて、五歳にてうせぬ、名はおゆらといひき、法名は淨室紅園童女、

○宣長父は道樹君、母は惠勝大姉にて、上にしるせるがごとし、道樹君、嫡嗣は道喜君おはしけれども、なほみづからの子をも得まほしくおぼして、大和國吉野の水分ノ神は、世俗に、子守明神と申シて、子をあたへて守り給ふ神也と申すによ

りて、此神に祈り給ひて、もし男子を得しめ給はゞ、其兒十三になりなば、みづから率て詣で、かへり申ッし奉らんといふ願をたて玉へりしが、ほどなく惠勝大姉はらみ給ひて、享保十五年庚戌の五月七日の夜子の時に、宣長を生給ひぬ、童名を富之助といふ、【此名は紺屋町の八郎次君のつけ玉へる也、八郎次君は、唱阿君の舍弟にて、其ころ一族の重くせし、古老の人なればなり、】元文五年十一歲の時、道樹君におくれまゐらせぬ、そも〳〵その折の事よ、かくれ給ひぬるよし江戸より、早便リして告おこせたる、それよりさきに、おもく病み玉ふよし告たる狀と、同じ夜に、ふけて來つきて、門たゝきてもて來たるに、惠勝大姉のいみしく驚きて、かなしみ泣玉ひしことゝ、われもわらは心に、いとかなしかりし事など、今もほのかにおぼえたるを、思ひ出るも、夢のやうにかなし、かの面影は、たしかにおぼえてある也、そのとし彌四郎と改名す、【富の字はゞかるよし有て也、彌四郎は、道樹君の童名也、】寛保元年實名榮貞とつく、同年五月十四日、本町の宅より魚町一町目の今の宅に、惠勝大姉、子ども四人をぐして、移り給ふ、此魚町の宅は、道休君の世、承應三年に、本町の宅地と合せて、買得給へる地にして、【妙延法尼晚年此地に居住】其後享保十一年、唱阿君、職人町の隱居を此地に移し建て、榮保大姉とゝもに住玉ひし家也、職人町は、はなれて便りあしかりし故に、此地にはうつされし也、さて榮保大姉かくれ給ひて後は、人にかしおきたりしを、此度當家の住宅とはなせる也、此地は、本町の宅地と、うら合せにつゞきて、即チ今用ふるぬりごめも、（清造いふ、このぬりごめ、父の世に三井氏へ賣り拂はれたり、地所も共になり）本町宅の藏にて、かの町の地に屬る也、

同二年宣長十三歲、惠勝大姉、道樹君の、かの願たておき給ひしことをおぼして、七月に吉野の水分の神社にまうでしめ給ふ、此里は御嶽まうでする人々のあるに、たぐひてなりけり、われまだいときなければ、うひ旅をうしろめたくおぼして、ふる手代なる茂八といふ者と、宗兵衛とて年久しくつかふ從者と、二人をそへて、出たゝせ給ふ、かの社にまうでゝかへり申ㇱして、たぐへる人々とゝもに、御たけにもまうでゝ、事なくかへりぬれば、惠勝大姉涙おとしてぞよろこび玉ひける、道樹君の御事、いかにおぼし出けん、延享元年十二月廿一日、十五歲にて、元服といふことす、寛延元年には、あ

る人の子になりて、山田にゆきて、二年あまり有しが、ねがふ心にかなはぬ事有しによりて、同三年、離縁してかへりぬ、かく人の子となし玉へる故は、そのかみ道喜君、江戸にはおはしながら、こゝにては三四右衛門と申て、此家の主にてはおはすればなりけり、さるに寶曆元年、道喜君うせ給へる故に、われ家をつぎぬ、此時江戸の店は、大傳馬町なるも、堀留町なる二店も皆すでになくなりて、道喜君、その殘れる貲のうち、わづかに金四百兩を隱居家孫右衛門の店に預けいれて、その年々の利息をもて、わが家の產とさだめおき給へりき、すべて道喜君の世におはせしほどは、何事もそのはからひ玉ふに、まかせ玉へりしを、此ぬしなくなり給ひては、惠勝大姉みづから家の事をはからひ玉ふに、跡つぐ彌四郎、あきなひのすぢにはうとくて、たゞ書をよむことをのみこのめば、今より後、商人となるとも、事ゆかじ、又家の貲も隱居家の店おとろへぬれば、ゆくさきうしろめたし、もしかの店、事あらんには、われら何を以てか世をわたらん、かねてその心づかひせではあるべからず、然れば彌四郎は、京にのぼりて學問をし、くすしにならむこそよからめ、とぞおぼしおきて給へりける、【すべて此惠勝大姉は、女ながら男にはまさりて、こゝろはか〴〵しくさとくて、かゝるすぢの事も、いとかしこくぞおはしける、かくおぼしおきてたるもしるく、いくほどもなく、明和元年に、隱居家の店なくなりて、のこれる貲もみな、あづかれる手代がわたくしに引こめてしかば、かのわが家の貲も、朝の露とぞ消うせぬる、われもしくすしのわざをはじめざらましかば、家の產絕はてなましを、惠勝大姉のはからひは、かへす〴〵も有がたくぞおぼゆる、】かくて寶曆二年三月に、京にのぼりて、まづ景山先生と申せしが弟子になりて、儒のまなびをす、【此先生は、堀禎助と申て、先祖惺窩先生の弟子、堀正意先生より世々安藝殿の儒士にて、祿二百石なり、宣長すなはちその綾小路室町の西なる家に寄宿す、】此時より、小津といひし稱をやめて、むかしの本居にかへれり、同三年九月、彌四郎を健藏と改む、同四年五月より、武川幸順法眼の弟子となりて、くすしのわざをまなぶ、【此先生、南山先生と號す、世々小兒くすしにて、其業いよ〳〵盛に行はれ、後桃園天皇の、いまだ親王と申せし御ほどより、典藥としてつかうまつり給へりき、宣長、同年の十月より、かの室町四條の南なる家に寄宿せり】同五年三月、健藏を改めて、春庵と號す、名を宣長とあらたむ、かくて此ほどの皇朝の

學びのすぢの事は、玉かつまにいへるが如し、同七年十月に、京より松坂にかへり、これよりくすしのわざをもて、家の産とはして、【醫のわざをもて産とするとは、いとつたなく、こゝろぎたなくして、ますらをのほいにもあらねども、おのれいさぎよからんとて、親先祖のあとを、心ともてそこなはんは、いよ〳〵道の意にあらず、力の及ばむかぎりは、産業をまめやかにつとめて、家をすさめず、おとさどらんやうをはかるべきものぞ、これのりながゝこゝろ也、】もはら皇朝のまなびに心をいれて、よるひるといはずいそしみつとめぬ、同十年、魚町村田彦太郎某の女を娶れりしが、離別して、同十二年に、阿濃ノ津の草深氏の女を娶て、男子二人女子三人を生り、寛政七年二月に、春庵といふを改めて、中衛と稱す、そも〳〵わが家の遠つ祖は、上にしるせるがごとく、數ならざりしかども、むげにいやしき民にもあらず、世々を重ねて、北畠殿につかうまつり、道觀君も、蒲生殿につかへ玉ひて、ものゝふのつらにて在しを、道印君より道樹君まで、四世の間は、町人といふにくだり給ひ、道休君の世より、富榮え給ひて、ゆたかには經へ玉ひながら、なほいへば商人のつらにて有しを、殊にのり長がいときなかりしころなどは、家の産やう〳〵におとろへもてゆきて、まづしくて經しを、のりながくすしとなりぬれば、民間にまじらひながら、くすしは世に長袖といふすぢにて、あき人のつらをばはなれ、殊に近き年ごろとなりては、吾君のかたじけなき御めぐみの蔭にさへかくれぬれば、いさゝか先祖のしなにも、立かへりぬるうへに、物まなびの力にて、あまたの書どもをかきあらはして、大御國の道のこゝろをときひろめ、天の下の人にもしられぬるは、つたなく賤き身のほどにとりては、いさをたちぬとおぼえて、皇神たちのめぐみ、君のめぐみ、先祖たち親たちのみたまのめぐみ、淺からずたふとくなん、

宣長が妻草深氏、はじめの名はたみ、寛保元年辛酉の十二月十二日に生る、はじめ阿濃津の藤枝九十郎某に嫁す、九十郎死て家にかへる、寶暦十二年正月に、宣長か妻となる、名をかつと改む、これ惠勝大姉の名なりしを、ゆづり給へる也、勝が父は、草深玄弘君、法號は明珠院戒月安齋居士と申す、朝明郡富田村の人にて、本生は山田氏某の男なりしが、阿濃津の草深氏の養子となり給ひ、藤堂殿の七といふ醫にてつかへ玉ひ、安永元年壬辰六月六日に、□歳にてうせ給ふ、勝が

母こじは、即草深氏先の玄弘君の女也、法號は養壽院觀室貞音大姉こ申す、天明八年戊申五月十五日□歳にてうせ玉ふ、先の玄弘君は、奄藝郡山室村草深氏の次男にて、醫こなり、阿濃津に住居せらる、養子玄弘君に家をゆづりて後は、隱居して、もはら佛の道を行ひ、法衣を着給ひて、理念法師こぞ申ける、

宣長が子ごも皆草深氏が腹にて、長男春庭(ハルニハ)、寶暦十三年癸未二月三日の巳ノ時に、草深氏の、あのの津の分部町の宅にて生れ、童名は健藏、【これ宣長が京に在しほご、しばらく稱せし名なり、】安永九年正月、健亭こ改む、次男は春村、明和四年丁亥正月十四日の夜亥ノ時に生る、童名は泰次郎、天明元年辛丑十二月廿二日に元服す、同四年九月、阿野津の小西太郎兵衛、法名鐵原道樹の養子こなり、其女【名はりう】をめこる、榮次郎こ改め稱す、【これ養父の童名なり】長女名は飛驒、明和七年庚寅正月十二日の申ノ時に生る、天明六年十一月に、草深玄鐙が妻こす、玄鑑は、勝が兄なりし玄弘の長男にて、今又玄弘こいふ、かくて飛驒深草氏を離縁し、寛政九年正月に、四日市の高尾九兵衛吉が妻こす、九兵衛は、かしこの領主松平美濃守殿の地士也、次の女名は美濃、安永二年癸巳正月二日の辰ノ時に生る、寛政三年二月湊町長井嘉左衛門尙明が妻こす、此長井氏は、もこより緣ありき、尙明が父嘉左衛門法名道倫は、養子にて、本生は小津次郎左衛門法名長念の子にて、母は則秀善尼、宣長か伯母也、又道倫が妻尙明が母は、惠勝大姉のいここなる、村田孫兵衛全次が女なりき、又先代嘉左衛門法名傳良こいひしが妻も、村田孫兵衛元次の女全次の姉なりき、末の女名は能登、安永五年丙申正月十五日の夜酉ノ時に生る、寛政七年十二月、山田浦口町師職安田傳大夫正輿【後に豐秋こ改】が妻こす、

本居こいふ氏の事

本居こいふと、件の系圖に、本居縣判官建郷主より、はじめて見えたり、此主、賴盛卿の六世の孫にて、其曾孫なる直武主、北畠顯能卿につかへ玉ひしよしなれば、建郷主は、鎌倉の北條が世の間の人なりけむ、さて本居こいふは、もこ地ノ名なるべけれご、かの建郷主、いづれの國の人こも見えざれば、その地名も、何れの國こも知がたきを、宣長わかゝりしほごより、心にかけて、いさゝかもよしありげに聞ゆる事ごもは、しるしおきたるを、こゝにしるす、まづ日本紀の仲哀天皇

の御巻に、筑紫に沒利嶋（モトリシマ）といふ見え、續日本紀廿九の巻に、備前國藤野ノ郡ノ人、母止理部奈波（モトリベノナハ）といふ人見え、和名抄に、備前國磐梨ノ郡物理（モトロキノ）鄕ハ、毛土呂井（モトロヰ）とあり、これらはたゞ似たる名なる故にいふのみ也、又内宮の舊記の中に、嘉吉元年十二月廿六日、北方上分日記、三百文おとべのたうかうのゑもん、三十文もとうりのさくのぜうはたけねんぐ云々、右のごとく所々に見えたり、卽チ其時にしるせる筆跡のまゝ也、もとうりは、もとをりなりけんを、字音の格に、とをゝとうとは書るなるべし、さて件のつゞきを考るに、安濃ノ郡の地名多く見え、おとべも彼ノ郡なれば、もとうりも、同郡のうちの村ノ名にぞ有けん、又今かの郡に、產品村（ウブシナ）といふあり、日本紀に、本居をうぶすなと訓ると、所々にあるは、いづくにまれ人の生れたる地の事なるが、此ノ產品村、かのもとうりとよしありげにおぼゆ、又宗祇法師の囘國雜記といふ物にいはく、加賀ノ國にいたる、たちばなといへる所に、やどをかり侍りて云々、すはま川といひて云々、しきぢいみなみうちすぎて云々、同じ國もとをりをとほり侍けるに、人のきぬをおりけるを見侍りて、「たれかもとをりそめつらんよろこびをくはふる國のきぬのたてぬき、云々ほとけの原といへる所を過云々、吉野川といへるところにいたりて云々、白山禪定し侍りて云々といへり、こはかのほうし、文明十八年、北國東國の紀行にて、一巻あり、加賀國にまさしくもとをりといふ所有し也、此名いまもありや、たづねむたよりに、前後の地名をも引おく也、又陰德太平記といふ物に、永正四年十一月、大内左京大夫義興の、前ノ將軍義植卿を奉じて、上洛せし事をしるせるところにいはく、其外隨逐の諸將、まづ九州に嶋津薩摩守貴久云々、土持本告（モトワリ）姉川云々とあり、本告と書て、假字付（ツケ）にモトヲリとあるは、告ノ字は、居を寫し誤れるなるべし、これ筑紫のうちの地名に、本居といふ有て、そこなる武士の、然名乘しが有しなるべし、又ふるき名字盡シといふ物の中にも、本折といふ有、又今安房國平群郡に、本織村といふ有といへり、其外にも有べし、又北畠殿の御内の人々の姓名を記せる物に、本折新九郎といふも見えたり、さて又今飯高郡の田村、又北方の鄕中にも、本居氏ありと聞及べども、いまだえたづねざる也、

寛政十年戊午七月廿日にしるしをしへぬ　　本居宣長（華押）

吾家の先祖世々の事ども宣長なほ別にくはしくしるしおけるを、此一巻はそれが中の大かた也、

畧系圖

本居兵部大輔平武利男同總助武連次男

平武秀　本居左兵衛　母大宮兵部某女
天正十九年月日於陸奥南部戰死
號眞理院常譽道觀居士

室　某氏號壽運院行譽慶歩大姉
寛永十五年八月八日沒

某　小津七右衛門　母慶歩大姉　住松坂
慶安元年二月四日沒
號本譽道印居士

室　小津源右衛門某女號昌譽榮感大姉
寛永十二年六月二日沒

某　小津次郎右衛門　號心譽宗運居士
子孫絶

某　小津三郎右衛門　當家中興祖
元祿元年十二月廿七日沒
號中譽道休大徳

室　松谷藤左衛門某女　號林譽樹寶法尼
寶永元年正月七日沒

某　小津喜兵衛　號徳譽道仁大徳
有子孫

某　小津六兵衛　號善譽宗祐大徳
有子孫

以上並母榮感大姉也

定治　小津三四右衛門
本生小津喜兵衛某道仁大德長男母小津淸兵衛末友女　號頓譽慶教大姉
享保十四年六月十一日沒
號光譽唱阿道淸大德

初室　濱田八郎兵衛某女　號照譽妙光大姉
天和元年九月四日沒

繼室　荒木太左衛門某女　號宜譽松岳榮保大姉
享保十八年五月十五日沒

某　小津孫右衛門　寶永四年十一月十一日沒
本ト小津源右衛門繁長男母某氏　號精譽周安大姉
號惠譽道智大德

室　山村宗次右衛門重秋女　號雲譽壽光大姉
正德二年四月廿四日沒

某　小津孫右衛門　享保三年七月十日沒
號洞譽元閑居士

室　榮珠大姉

定治　小津三四右衛門　爲道樹大德嗣

定利　小津三四右衛門　爲唱阿大德嗣

躬充　小津源四郎　明和五年四月十七日沒
號松譽貞麿道有大德

室　唱阿大德女　號寶譽貞室榮林法尼

以上並母壽光大姉

英昌　小津孫左衛門　號巖譽壽仙居士
子孫絶

女子　初元閑居士妻後道樹大德妻
號繁譽昌玉榮珠大姉

定該　小津三郎右衛門　正德五年正月七日沒
號心譽騾巖道意居士

定利　小津三四右衛門
本生道智大德次男母壽光大姉
元文五年閏七月廿四日沒
號場譽直觀道樹大德

初室　榮珠大姉　享保十三年五月廿八日沒

繼室　村田孫兵衛豊商女　號淸譽光雲惠諺法尼
明和五年正月朔日沒

以上並母榮保大姉也

定治　小津三四右衛門
本生元閑居士男母榮珠大姉
寶曆元年二月廿八日沒
號欣譽頁說道喜居士

宣長　本居中衛
母惠諺大姉

春庭　本居健亭
母草深玄弘女

遺言

遺書

遺言之事

我等相果候はゞ必其日を以て忌日ニ定むべし 勝手に任せ日取を違候事有之間敷候扨時刻は前夜之九ッ時過より其日之夜之九ッ迄を其日ニ定むべし譬へば晦日之夜之九ッ過よりは來月朔日にて朔日之夜九ッ迄朔日也右之刻を以て定メ候べし

一相果候て送葬迄之間念佛申候事無用に候但し法樹院參候て佛前にて勤致候儀は格別也

一沐浴は世間並にてよろし沐浴相濟候はゞ如平日鬚を剃候て髮を結可申候 衣服はさらし木綿之綿入壹ッ帶同斷尤袷にても單物にても帷子にても其時節之服可爲候 麻之十德木(キ)造リ之腰ノ物尤脇指計にて宜候 隨分麁末にて只形計の造り付にて宜候棺中へさらし木綿之小キ布團を敷可申候隨分綿うすくて宜候 惣体衣服隨分麁末成布木綿を可用候 扨稿(ワラ)を紙にていくつも包ミ棺中所々死骸之不動樣につめ可申候 但し丁寧にひしこつめ候には不及動き不申樣に所々つめ候てよろしく候棺は箱にて板は一通リ之杉之六分板可爲ざつこ一返削り内外共美濃紙にて 一返張可申候蓋(フタ)同斷釘〆尤ちやんなご流し候には不及必々板等念入候儀は可爲無用候隨分麁相成板にて宜候

一右棺は山室妙樂寺へ葬可申候夜中密々右之寺へ送り可申候太郎兵衛幷門弟之内壹兩人送り可被參候

一送葬之式は樹敬寺にて執行候事勿論也右之寺迄行列如左

○挑灯持　○挑灯持

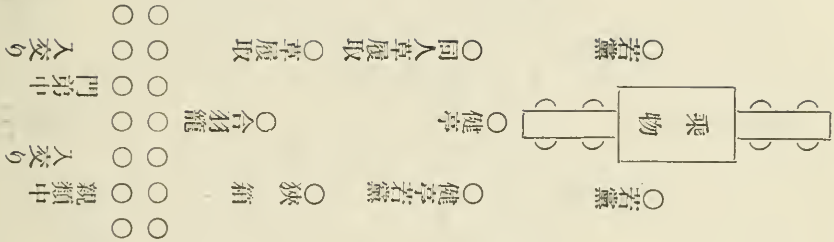
○長刀持

○法樹院

一挑灯はかけ流し白張り之箱挑灯也

持人かんばん脇指

一長刀　白布之袋掛ケ持人衣服等平日之通り



一乗物　白布にて包ム棒同断
四枚肩　陸尺衣服常躰
一若黨　左右両人麻上下もゝだち
一健亭　衣服白衣麻ノ十德
大小紙にて包
一狹箱　白布ゆたん
一したしき門弟中
麻上下可爲

已上

右之通にて樹敬寺本堂迄空送（カラタビ）也

位牌三ッ具足等初ゟ本堂に飾り置べし

幡天蓋挑灯等無用可爲

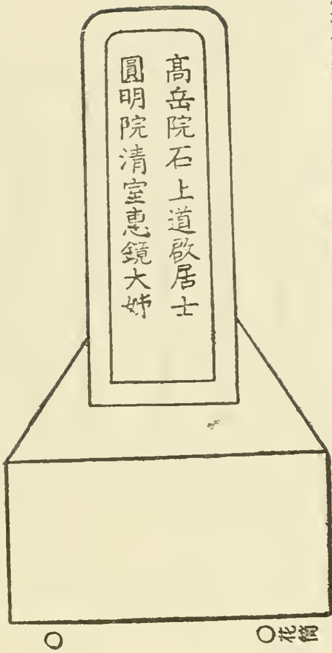
樹敬寺へ乘物並道具代相應に致施入乘物長刀等此方へ持歸るべし

一樹敬寺にて墓は道休大德御墓之右隣へつゞけ道へ張出し地取可致候尤右之地面貳尺五寸許道へ出し候所樹敬寺へ致相對買取可申候後日お勝相果候はゞ此墓地へ葬可申候

一我等死骸之儀は妙樂寺へ葬り申度葬式は樹敬寺勿論之事右之段本人遺言致候旨樹敬寺へ送葬以前早速に相斷り可被申候

右は隨分子細は無之儀に候

樹敬寺墓へ建候石塔之圖　臺は一重



脇

居士年号月日沒

脇

大姉年号月日沒

裏

本居春庭建

家内佛壇に安置候位牌も此通可爲候

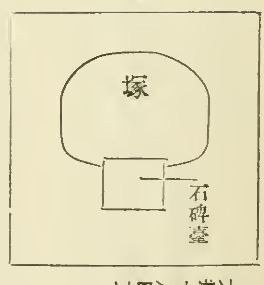
高岳院石上道啓居士（カウガクヰンセキジヤウドウケイコジ）
圓明院淸室恵鏡大姉（エンミヤウヰンセイシツヱキヤウダイシ）

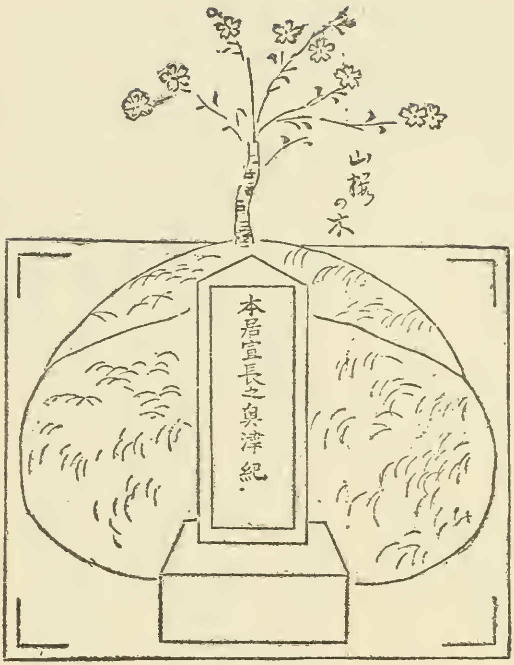
右戒名之儀は書付候而樹敬寺方丈へ遣し此通りに付ヶ被呉候様に申入方丈より書付取可申候

一妙樂寺墓地之儀は右之寺境内にて能キ所見つくろひ七尺四方計之地面買取候而相定可申候葬候節穴深サ七尺餘にて宜候埋メ様世間並にて子細無之候

一墓地七尺四方計眞ン中少シ後ロへ寄せて塚を築候而其上へ櫻の木を植可申候塚之前に石碑を建可申候 塚高サ三四尺計惣体芝を伏せ隨分堅く致し崩れ不申樣後々若崩レ候所あらは折々見廻り直し可申候植候櫻は山櫻之隨分花之宜き木を致吟味植可申候勿論後々もし枯候はゞ植替可申候

地取リ之圖





石碑の裏幷脇へは何事も書申間敷候

右石碑之頭は如圖〈ケ樣に可致候碑高サ四尺計臺は此外也横幷厚サ臺石等見合せたるべし尤臺壹重也〉石碑之前に花筒な

ご立候事無用に候物地取ッ七尺四方之堺にも延石を伏せ申度候へ共餘程代物掛り可申候間夫は追而之事に致し先當分丸石にてもひろひ集め並べ置可申候

一後々妙樂寺墓参は一年に壹度祥月計にて宜候夫も雨天或は差支等有之候はゞ必當日には不限前後之内見計ひ參可被申候祥月には毎年妙樂寺へ齋米壹升銀札壹包づつ施入可致候毎月忌日墓參りは樹敬寺にて宜候

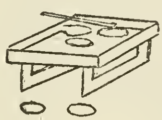
一他所他國之人我等墓を尋候はゞ妙樂寺を敎へ遣し可申候

一忌中之儀法事其外諸事世間並に致可被勤候初盆幷年忌〱等右同斷世間並可爲候

一忌中之内一度當所門弟中へ非時を致さるべし尤宅内は間狹に候得者法樹院にて可被致候

一染筆哥五十枚認置候間したしき門弟中へ見合壹枚づゝ遣し可申候

一毎年祥月には前夜より座敷床へ像掛物を掛け平生用候我等机を置き掛物の前正面へ靈牌を立て時節之花を立ッ燈をこもし【香を燒候事は無用】膳を備へ可被申候尤膳料理は魚類にて四作り鱠汁飯平【しやうじん物計にてよろし】燒物【切燒】右之通可爲候酒はみき德利一對膳具は白木之足付のぜん椀は茶碗

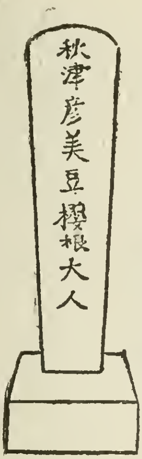


かくのごとし

尤ぜんは白木の常躰之足付也

三方は無用也

像掛物の前へ立置候靈牌之圖如左



是は平日机之傍に置き日々手馴候櫻之木之笏有之候右之笏を即此靈牌に用可申候尤臺へ立候所は笏之本をば切りくはさず其儘にて臺を掘り候てさしこむやうにすべし此靈牌常には大切に致し仕廻置べし

後諡（ノチノナ）

秋津彦美豆櫻根大人（アキツヒコミヅサクラネノウシ）

一毎年祥月には一度づゝ可成長ヶ手前にて哥會を催し門弟中相集り可申候尤祥月當日には不限日取りは前後之内都合宜き日可爲也當日にあらず共哥會之節も像掛物右之通り飾可申候但し其節別に像へ膳備へ候には不及膳は當日にて宜候哥會の節は酒計備へ可申候且又哥會客支度一汁一菜精進可爲候

一家內佛壇へ致安置候位牌は世間並之通り戒名前段之通り也尤毎月の忌日靈膳等も是迄致來候御先祖達之通りに可致候致精進候儀も同斷に候

一家相續跡々惣体之事は一々不及申置候親族中隨分むつましく致し家業出精家門絕斷無之樣永く相續之所肝要にて候御先祖父母へ之孝行不過之候以上

寛政十二年申七月　　　宣長　判

健亭　殿

太郎兵衛　殿

明治三十五年十一月十日印刷
明治三十五年十一月十五日發行
昭和二年三月二十日增訂再版印刷
昭和二年三月二十五日增訂再版發行

（本居宣長全集第九卷奥付）

著作權所有

再校訂者　本居清造

發行兼印刷者　東京市京橋區鈴木町十二番地　吉川弘文館　代表者　吉川半七

印刷所　三重縣四日市市濱田　四日市印刷株式會社

發賣所

東京市日本橋區數寄屋町　六合館
大阪市東區北久太郎町四丁目　合資會社　柳原書店
名古屋市西區下長者町四丁目　合資會社　川瀨書店
東京市京橋區鈴木町十二番地　日用書房
東京市牛込區早稻田鶴卷町二三一　國際美術社

